

C.F. マイヤー著『中短編集』（全十一編翻訳）

コンラート フェルディナント マイヤー

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/6794872>

出版情報 : pp. 1-657, 2023-07-31
バージョン :
権利関係 :

C.F.マイヤー著『中短編集』（全十一編翻訳）
恒吉法海訳

九州大学リポジトリ翻訳研究・第二期

Nr.1. 2023年7月31日 Conrad Ferdinand Meyer(1825-1898): Novellen

目次

護符[アミュレット] (1873 Das Amulett)3
説教壇からの射撃 (1878 Der Schuß von der Kanzel)42
尼僧院のプラウトゥス (1881 Plautus im Nonnenkloster)73
グスタフ・アドルフの小姓 (1882 Gustav Adolfs Page)91
僧侶の結婚 (1884 Die Hochzeit des Mönchs)119
ある少年の悩み (1883 Das Leiden eines Knaben)175
女士裁判官 (1885 Die Richterin)209
ユルク・イエナツチュ グラウビュンデン[スイス東部の州]の歴史 (1874 Jürg Jenatsch. Eine alte Bündnergeschichte)256
聖者 (1880 Der Heilige)401
ペスカーラの誘惑 (1887 Die Versuchung des Pescara)484
アンジェラ・ボルジア (1891 Angela Borgia)562
解説640
あとがき656
付録 「グラウビュンデンとヴァルテッリーナの地図」657

護符[アミュレット]

十七世紀初頭からの黄色く変色した文書が記録されて私の眼前にある。私はこれを現代の言葉に翻訳してみる。

第一章

今日、一六一一年三月十四日、私はビール[スイス、ビエンヌ]湖畔の私の家からクルティオン[フリブール州]の老ボカールの許へ行き、私所有の樅やブナからなるミュンヒヴァイラーの近郊[Münchenwiler、ベルン州]の山腹の商取引を締結した。この取引はすでにしばらく前から交渉されていた。この老公は退屈な手紙のやり取りの中で、価格の値切りを試みていた。大したものではない森の一带の価値に対する真剣な反論は考えられなかった。しかしこの老人は私から若干値切ることを自分への責務に考えているように見えた。しかし私は彼に対して出来るだけの誠意を見せる十分な理由があった。その上連合州[オランダ]の軍務に就いていて、ブロンド髪丸々としたオランダ娘と婚約した息子に対し、家政の最初の調度支度を手伝うために金が入用であったので、老公に譲歩して取引を速やかに終了する決心をした。

私は彼が昔からの住まいに一人っきりで、ぞんざいな状態であるのを見いだした。彼の灰色の髪の毛は、雑然と額にかかっている、うなじに垂れていた。彼は私の率直な用意を知ると、その嬉しい知らせで、その空ろな目が明るく輝いた。彼の家系は彼と共に干涸らびて、所有物は遺産継承人を喜ばせるだけであるという次第であったにもかかわらず、晩年の日々、収集に努めていた。

彼は塔の小さな部屋に私を案内した。そこには虫食いの戸棚に彼の文書が保管されていた。彼は私に腰掛けるよう言って、その契約を文書で起草するよう私に頼んだ。私はその簡単な仕事を終えて、老公の方を向いた。しかし老公は引き出しをかき回して、印章を探していた。彼はそれが見つからないで見えた。私は彼がすべてを素早くかき混ぜているのを見ると、彼の加勢をする必要があるかのように、思わず立ち上がった。

彼は熱に浮かされたかのように丁度秘密の引き出しを開けた。私は彼の背後から進み、ちらとそれを見て、一 深く呼吸をした。

引き出しには並んで二つの珍しい、両方とも私にはただ余りに馴染みの品があった。穴のあるフェルト帽と、これは以前一発の弾が打ち抜いたものであった。それに大きな丸い銀製のメダルであった。これは槌金加工の、かなり粗い細工の、アインジューデルン[Einsiedeln,スイス, Schwarze Madonna黒い聖母として著名]の聖母の像であった。

老人は向き直った。私の溜め息に返事したいかのようで、泣くような調子であった。

「その通りだ、シャーダウさん。アインジューデルンの聖母は家でも戦場でもまだ私を守ってくれたのだ。しかし世に異端が侵入して来て、我らのスイスも荒らされてから、この善良な聖母の威力も消えて、信仰篤い者達にとってすら消えた。これはヴィルヘルム、一 私の愛する息子の場合に明らかになった」。そしてその灰色の睫毛の下から一滴の涙が溢れた。

この情景で私の心が痛んだ。私は老公に彼の息子の喪失について若干の慰めの言葉を発

した。息子は私の同年輩で、私の側で致命傷を受けたのであった。しかし私の話しで、彼は気分を害したようで、あるいはその話しを聞き逃していた。というのは彼はまた急いで我々の取引の話しにかかったからで、新たに印章を探し、ようやく見つけて、文書の証拠として、それから格別丁寧さを見せずに、すぐに私を帰した。

私は馬で家に帰った。黄昏の中、私の道を騎乗して行くと、春の大地の香りの中から過去の象が切迫した威力で眼前に立ち現れた。とても真新しく、鋭く克明で、私は苦しめられた。

ヴィルヘルム・ボカールの運命は私の運命と密接に絡んでいた。まずは友好的に、それからほとんど恐怖の具合に絡んでいた。私は彼を死へと追いやった。しかしたとえこのことで私の心が重苦しくなるとしても、私は後悔していない。多分私は今日でも同じような場合、私が二十歳のときそうしたように、またそのように行動するに違いない。いずれにせよ、古い事柄の思い出が募って来て、私は自ら、この奇妙な話しの経過全体を文書に書き留めて、私の心を軽くする決心をした。

第二章

私は一五五三年に生まれた。しかし私の父を知らない。父はその数年後、サン・カンタンの防塁で戦死した[1557年、フランスのコリニー奮戦するも、スペインに敗戦]。元来私の先祖はチューリングンの氏族で、昔から戦役に就いていて、幾多の大元帥に従っていた。私の父は特にウルリヒ・フォン・ヴェルテンベルク公爵に奉公していた。公爵はその誠実に果たされた軍功故にその伯爵領ミュンベルガルトでの一官職を与え、フォン・ベルン令嬢との婚儀を仲介した。この令嬢の先祖は、ウルリヒが国を逃れてスイスに滞在していたとき、かつて客人として迎えてくれた友であった。しかし私の父はこの静かな職に長く落ち着いてはいなかった。父はフランスでの軍務に就いた。フランスは英国とスペインに対し、ピカルディーを防御しなければならなかった。これが父の最後の戦役となった。

私の母は父の死後、しばらくして墓に入った。私は母方の叔父に育てられた。叔父はビール[ビエンヌ]湖畔に家を構えていて、上品な独自の性格であった。叔父は少しばかり公務に関与していた。いや、彼がそうできたのは、本来ベルンの年報に栄光と共に記載されている名前のお蔭にすぎず、それでそもそもベルンの地に甘受されていた。叔父は有り体に言って、聖書解釈に関心を示していた。宗教的動揺のかの時代、これは何も尋常でないことではなかった。しかし彼は、これは尋常でないことであったが、聖書の幾多の箇所から、特にヨハネ黙示録から、この世は終末に向かっており、それ故、この一般的危機の前夜に、新たな教会を設立するのは好ましくなく、空しい業であるという確信を紡ぎ出していた。そのせいで、彼はベルンの大聖堂での彼のために用意されていた席を一貫して原理的に断っていた。申したように、ただ彼は地味であったので、聖職者的政府の厳しい腕から守られていたのである。

この無害の愛すべき男の目の下で私は育った。一 躰がないわけではなかったが、鞭は使用されずに、一 田舎風に自由であった。私の交際相手は近くの村の百姓の若者達と村の牧師であった。牧師は厳格なカルヴァン主義者で、この牧師を通じて、私の叔父は自分を否定して、私にこの地方の宗教を教えた。

私の青春時代のこの二人の養育者は幾多の点で合致していなかった。この神学者は自分の師父カルヴァンと共に永遠の劫罰を神への畏怖への不可欠の要素と見なしているのに対し、素人の叔父は、万物の将来の和解や喜ばしい再生を期待していた。私の思考力はカルヴァンの教義の辛辣な首尾一貫性を享受しつつ、鍛えられ、その教義を自家菜籠中の物として、その固い網の目の一つも見落とさなかった。そして私の心は格別叔父に対し留保するようになった。彼の将来像は私の関心を引かなかった。ただ一度だけ私は呆気にとられたことがあった。私はビール地方で見かけた一頭の若い野生馬を、立派な河原毛馬を、所有したいと長いこと願っていた。そしてある朝、一冊の本に没頭していた叔父にこのことを今にも口に出しそうになって近寄った。私は拒絶を恐れていたが、それは値段が高いからではなく、多分にこの馬の悪評高い野蛮さのせいであって、私はこの馬を御したいと願っていた。私が口を開けたかと思うと、叔父はその明るい青い目で、私を鋭く見つめて、厳かに語りかけた。「ハンスよ、死神が座しているかの鈍色の馬は何を意味していると思うか」。 —

私は叔父の眼力に驚いて沈黙した。しかし彼の眼前に広げられている本を一瞥して、彼が私の河原毛馬について話しているのではなく、四人の黙示録の騎士の一人について離れていると分かった。

学のある牧師は、同時に私に数学を教え、それどころか戦術の初歩も教えた。周知の教材から教えられる限りの範囲内のものであった。牧師は若い頃、ジュネーブの学生として防塁や戦場に赴いていた。

私は十七歳になったら、戦役に就くことが、規定の事として定まっていた。私にとって、どの将軍の許で、私の最初の兵役の年月を過ごすか、これも問題ではなかった。偉大なコリニー[Gaspard II. de Coligny, 1519-1572, 8月24日, ユグノー派]の名前は、当時全世界に知られていた。彼の勝利ではなく、彼は戦争で勝利したことがなく、彼の敗北が、存命のすべての将軍達の中から彼を突出した者にしていた。彼はこの敗北に、戦術と性格の偉大さを通じて勝利の価値を付与する術を心得ていたのである。もっともスペインのアルバ公[Herzog von (Duque de) Alba, 1507-1582]との比較をしようとは思わない。それに私はアルバ公を地獄のように憎んでいた。私の勇敢な父が、プロテスタントの信仰に忠実に、反抗的に味方していただけではない。聖書に詳しい私の叔父が教皇主義に悪しき概念を持っていて、教皇主義は黙示録のバビロンの奸婦に象徴されていると思っていただけではなく、私自身が温かい心で党派心を築き始めていた。つまり私はすでに少年時、一五六七年武器を取って、アルバ公のちょっかいに対してジュネーブを守るべしとなったとき、プロテスタントの軍勢に加わっていたのである。アルバ公はイタリアからスイス国境に沿って、オランダへ侵攻していた。この少年はショモンにほとんど一人っきりでいたくなかったのである。私の叔父の居住地はショモンと言った。

一五七〇年サン・ジェルマン・アン・レーの和平条約でフランスのユグノー達[フランスのカルヴァン派新教徒]にすべての官職への道が許され、コリニーは、パリへ呼ばれて、国王[シャルル九世, 1550-1574]と協議した。彼は、噂では国王の心を完全に掴んでいて、オランダ解放のためにアルバ公への出兵計画を国王と練った。数年私は苛立って遅滞している宣戦布告を待っていた。この布告で私はコリニーの軍に参ずる予定であった。というのは彼の騎馬部隊は以前からドイツ人で構成されていて、私の父の名前を彼は先の時代から承知

しているに違いなかったからである。

しかしながらなかなかこの宣戦布告とならなかった。そして二つの苛立たしい体験を私は故郷での最後の日々、かみしめることになった。

私が五月のある晩、叔父と一緒に花咲く中庭のシナノキの下、夕食のパンを食している、眼前にかなり卑屈な挙措とみすぼらしい衣服の異邦人が現れた。その落ち着きのない目と卑俗な外貌は私に不快な印象を与えた。彼は恵み深い支配の一家に対し、厩舎長と自己紹介したが、我々の下では馬丁に他ならなかった。そして私は簡単に彼を拒絶しようとしたとき、これは私の叔父がこの時まで彼に何の注目もしていなかったからであるが、この異邦人が私に自分のすべての知識、熟練の技を教え始めた。

「私は絶妙なフェンシングを行います」と彼は言った、「基本からの高度な剣術を習得しています」。 —

私はすべての都会的剣術場と無縁で、私の素養でのこの穴をまさに痛々しく感じていた。そしてこの新参者に対する私の本能的嫌悪感にも関わらず、躊躇せずにこの機会に飛びつき、この異邦人を私のフェンシングの部屋に引き入れ、彼の手に剣を渡した。彼はその剣で私の剣を立派にさばいて、私は早速彼と取り決めて、彼を我々の奉公人に加えた。

私は叔父に語った、旅立つ直前になお自分の騎士的技倆を豊かにする機会を得ることはとても有益であろう、と。

このときから私はこの異邦人と一緒に — 彼はボヘミアの出身と称していた、 — 毎晩しばしば遅くまでフェンシングの部屋で過ごした。ここを私は二本の壁ランプで出来るだけ明るく照らした。容易に私は、突き、パラード[防御]、フェイントを習得し、やがて、理論的には完璧に、全教程を正しく、私の教師の満足するほどに実行した。それでも私はこの教師を明白な絶望に追い込んだが、それは私がある種生来の悠長さを手放さなかったからであり、教師はこれを緩慢さと叱り、その電光石火の剣で戯れに私を打ち負かしていた。

私に欠如している熱気を付与するために、彼は珍しい手段を見つけた。彼は自分のフェンシングの胴着に赤い革のハートを縫い付けて、動悸する心臓の目印とした。そして彼はフェンシングのとき、左手で嘲笑的に挑戦的にそこを指し示した。その上彼は多様な雄叫びを発した。最も頻繁に、「アルバ公万歳。 — オランダの反乱者どもよ、死ね」。 — それとかまた、「異端のコリニー、死ね。コリニー、縛り首」。 — この叫び声で私の内心は激して、この人間に対していつも以上にうんざりしたのであるが、しかし私は自分のテンポを速やかにすることが出来なかった。私はすでに自分が義務的に学ぶ者として、とにかくもはや凌駕できないある慣習的スピードに慣れてしまっていたからである。ある晩このボヘミア人がまさにすさまじい叫び声を上げたとき、私の叔父が案じて、脇のドアから入室して来て、何ごとかと覗いたが、すぐにまたびっくりして後ずさった。私の敵が「ユグノー達に死を」と発しながら、私の胸に丁度したたかな一撃を与えたからである。これは本気ならば、私を貫き通していたことであろう。

翌朝、私どもがシナノキの下で朝食を摂っているとき、叔父が何かを心に掛けていて、私が、不気味な家の仲間を除外する願いであろうと思っていたとき、ビールの町の使者が、大きな官職封印の一通の書状を持参してきた。叔父はそれを開けて、読みながら、額に皺を寄せて、こう言って、それを私に渡した、「とんだことだ。 — ハンス、読んでみろ。

その後どうすべきか、相談することにしよう」。

すると、こう書かれていた。しばらく前、シュトゥットガルトでフェンシング教師として定住していた一人のボヘミア人が、その妻、シュヴァーベン生まれの女性を嫉妬から闇討ちして刺殺した。犯人はスイスへ逐電したと知らされており、いや、この男は、あるいはこの男とそっくりのある者が、ショモンの殿方の奉公人として目撃されていると言われている。この殿方に対しては、その義兄の故シャーダウ氏を記念して、クリストフ大公が格別にお心にかけておられるが、この殿方に至急請願申し上げたい。この疑惑者を逮捕して、自らまず尋問を行い、この疑惑が証明された場合、この罪人を国境まで届けるように、と。この書状はシュトゥットガルトの公爵の官吏署名があり、その封印がなされていた。

私はこの文書を読みながら、思案して、上のこのボヘミア人の寝室へ目を向けた。この寝室は切妻にあって、容易に見通せた。彼は窓辺で一本の剣を磨く仕事にかかっていた。この悪人を逮捕して、正当な裁きに委ねる覚悟をしながらも、私は思わずその書状を彼が丁度下を覗いたら、その大きな赤い印璽が目につくような具合に持ち上げて、一彼の運命に自らを救出するささやかな猶予時間が得られるようにした。

それから私は叔父とこの罪人を逮捕して、搬送する件について相談した。彼が罪人であることは、我々両人とも疑念を一瞬も抱いていなかったからである。

この後、我々は各自手にピストルを持って、このボヘミア人の寝室へ向かった。そこは空であった。しかし開いた窓を通じて、中庭の木々の向こう、一遠く離れて、丘の周りに道が折り返し進んで行く所に、一人の騎乗者が駆けて行く姿を目撃した。この時、我々が下りて行く途中、書状を持参したビールからの使者が、嘆いて向かって来た。奥の中庭の門に結び付けていた自分の馬が見当たらない、丁度自分がキッチンで一口飲み物を頂戴している間のことだ、と。

国中で大きな耳目を引いて、人々の口に物騒な事として喋々されるこの不愉快な事件に加えて、更に別な事件が生じて、それで私は故郷にこれ以上長く滞在できなくなった。

私はある結婚式でビールへ招待された。ビールとは、この小都市は一時間足らずの地にあって、取るに足りないとはいえ、幾多の縁を私は有していた。私はかなり引きこもった生活態度で、気位が高いと見なされていた。そして私は間近の将来のことを考えていて、将来私は、極めてささやかな身分とはいえ、プロテスタント世界での大きな運命と関与する筈であって、この小共和国ビールでの内部抗争や町の噂話には何の関心も抱けなかった。かくてこの招待には私は格別惹かれなかった。ただ、私同様に引きこもった、それでいて愛想の良い叔父の説得で、私は招待に応ずる気になった。

女性達に対して私は内気であった。頑丈な体格と、体幹の尋常ならざる高さ、しかしながらさえない面貌故に、私は納得はしていなかったけれども、自分は自分の心の全額を一人の数字に賭けなければならないと多分感じていた。そしてその為の機会は、おぼろげな予感として感じていたが、私の英雄の周辺で見いだされるに違いなかった。全き幸運は、全き賭け、人生の賭けによって得られるであろうとも私は確信していた。

私の青年時の賛仰の中で、偉大な提督と並んで、彼の弟、ダンドゥロ[François de Coligny-d'Andelot,1521-1569]が第一の座を占めていた。その世界を股にかけた自負心の強い花嫁探しは私の想像力を焚きつけた。彼の情熱、つまりロレーヌの或る令嬢を、彼は不倶戴天

のカトリックの敵ども、ギーズ公[Henri de Guise,1550-1588他]どもの眼前で、そのナンシーの町から連れ去ったのである。トランベットの響く中、祭典の行列組んで、ギーズ公宮殿の側を騎行して行った。

このようなことを私は予め想像して願っていた。

それで私は素面のうんざりした心そのままビールへ出掛けた。人々は私に対して極めて好意的で、愛敬のある一人の娘の側の食卓に私を座らせた。内気な人間達の場合ありがちなことであるが、私はすべてのだんまりを避けるために、対照的航路に陥った。そして不作法に見えないよう、私は隣の女性にしきりに上手を言った。我々の向かい側に村長、つまり上品な食品雑貨商の息子が座っていた。これは貴族派の先頭に立っている人物である。というのは小さなビールには、比較的大きな共和国同様に、貴族派と民主派がいるからである。フランツ・ゴディヤールは、そうこの若造は言ったが、ひょっとしたら私の隣席の女性に気があったのかもしれないが、我々の会話に聞き耳を立てていた。最初私はそれに気付かなかったが、彼は関心を募らせ、敵意の視線を放っていた。

するとその可愛い少女が私に尋ねた。私はいつフランスに発つ気なのか、と。

「戦争が布告されるとすぐです。血に飢えたあの獵犬アルバに対して」と私は熱く答えた。

「一廉の男について野卑な表現をすべきではあるまい」とテーブル越しにゴディヤールが発した。

「虐待されたオランダ人を」と私は応じた、「失念されておられよう。暴虐者を尊敬できようか。たとえ世界で最も偉大な将軍であろうとも」。

－「彼は反乱者を鎮圧したのだ」と返事があった、「これは我らのスイスにとっても業効ある例となろう」。

「反乱者だ」と私は叫んで、熱いコルタイヨ[ワイン]のグラスを下に投げ付けた、「最初のスイスの同盟者[リュトリの三州盟約、1291]同様、反乱者だ、あるいは反乱者ではない者だ」。

ゴディヤールは高慢な顔つきになって、まず眉を勿体ぶってつり上げて、それからにやりと笑って答えた、「一度徹底した学者が本件を調べたら、ひょっとしたらこう説明されることかもしれない。スイス最初の四州[三州にルツェルン州]の暴動の百姓どもは、オーストリアに対してはなほだ不当であって、明白な反乱の咎を負うものであった、とな。ちなみにこのことは今関係ない。私が主張しているのは、単に、功績のない一人の若い人間が、政治的見解はすべて全く度外視しても、一人の著名な軍人を言葉で罵ることは良くないということだ」。

私の兵役が科もないのに遅れていることをこのように指摘されて、私は心底激昂して、怒りの胆汁が湧いてきた、「ならず者め」と私は叫んだ、「ならず者のアルバを弁護するとは」。

今や無闇に暴動が勃発して、それでゴディヤールは頭をぶん殴られて運び去られ、私はグラスを投げ付けられ傷だらけで出血する頬と共に退出することになった。

翌朝私は大層恥じ入って目覚めた。私は新教の真理を弁護する男であったが、飲んだくれの評判を得ることになると予見した。

長く思案せずに、私は旅行カバンを詰めて、私の不調法を仄めかしながら、叔父に暇乞

いをした。叔父はあれこれ話した後、私が戦争の勃発をパリで待機したいという存念を了解した旨述べた。私は私の父のささやかな遺産から一卷きの金貨を懐に収め、武器を携帯し、河原毛馬に鞍を付け、フランスへ向かって出発した。

第三章

私は取り立てて述べるほどの冒険もなく、自由伯爵領地やブルゴーニュ地方を通過して行き、セヌ川に達し、ある晩、ムランの諸塔の間近に来た。そこまではまだ小一時間ほど要したかもしれないが、そこまでの間、重たい雨雲が垂れ込めていた。通りに沿って或る村を騎乗して抜けながら、私は三本の百合亭という見栄えのする宿の石造りの備え付けベンチに一人の若者の姿を見かけた。この若者は私同様、旅人でかつ軍人であるように見えたが、しかしこの若者の服装と武器は、私の簡素なカルヴァン主義的的衣服とははなはだ対照的に、優美なものであった。私の旅行計画は、夜にならないうちにムランへ達することであったので、彼の挨拶に私は単に手短かに答えて、馬上のまま通り過ぎ、更にこう私の背後で呼びかけられるのを耳にしたように思った。「良い旅を、同郷の方」。

十五分ほど私は引き続き騎乗して行った。その間雷雲は黒々と私に向かって来て、大気は耐え難いほど鬱陶しくなって、短く熱い突風が通りの埃を渦巻き状に巻き上げた。私の馬は荒い鼻息となった。突然私の数歩先で、目のくらむ、派手な稲光が大地に走った。河原毛馬は棒立ちになって、向きを変え、荒々しく跳ねて村へ飛び戻った。雨の洪水の中、私はようやく宿の門前に達して、不安に駆られた馬を制御できた。

若い客人は、微笑しながら、庇で守られた石造りベンチから身を起こし、馬丁を呼び、私が旅囊の締め金を外して取る際、手伝って言った。「ここに宿を取って、後悔はしませんよ。立派な一行が滞在しています」。

「疑念は抱いていません」と挨拶して私は述べた。

「勿論、私のことを言っているのではありません」と彼は続けた、「一人の風采の良い老紳士のことで、女将は議会参事官殿と呼んでいます。　　—　　つまり高貴な顕職の方です。　　—　　それにその娘かあるいは姪御のことで、全く例えようもない御令嬢、...この殿方に一部屋用意されたい」。これは彼が、やって来た亭主に向かって言った言葉で、「貴殿は、同郷のお方、すぐに着替えをなさって、すぐにお出でください。夕食の準備で出来ていますから」。　　—

「私のことを同郷の者と呼ぶのですか」と私はフランス語で答えた、彼も同様にフランス語で語りかけていた。「私がそうだとどこでわかりますか」。

「頭と手足だな」と彼は陽気に答えた、「まずもって貴殿はドイツ人だ。それに貴殿の全体がちりした固い性情からベルン生まれと分かります。私はフライブルク[フリブール]出身の、忠実な同盟者で、ヴィルヘルム・ボカールと申します」。

私は先を行く亭主に従って進み、亭主が私に示した小部屋に入り、それから待たれている下の客室へ降りた。ボカールが私に向かって来て、私の手を握り、私を上品な身なりの白髪の紳士と乗馬服の華奢な少女にこう紹介した。「私の仲間、同郷人の、...」、そう言いながら私を問うように見つめた。

「シャーダウ・フォン・ベルンと申します」と私はその語りを結んだ。

「初めまして、とても光栄です」と老紳士は親切に答えた。「有名な町の若い市民の方と面識を得まして、この町にはジュネーブの信仰を同じくする同朋が大変お世話になっています。私は議会参事官、シャティヨンと申します。宗教和平がなって、父祖の町パリに戻れるのです」。

「シャティヨンとは」と私は畏敬の念で賛嘆して繰り返した、「偉大な提督の家名ではありませんか」。

「私は彼と縁戚であるという栄誉を有しません」とこの議会参事官は答えた、「あるいは少なくともほんの遠い縁戚にすぎないことでしょう。しかし私は彼とは面識があって、身分と人間的軽重の違いはありますが、彼との交誼があります。しかし皆さん、掛けましょう。スープは湯気を発して、夕方はまだ十分会話の時間がありますよ」。

螺旋形の脚で、檜のテーブルの四面に我々は着席した。テーブルの上席に令嬢のために、その左右にボカールと参事官のために、そして末席に私のために食事が用意されていた。食事が普通の問い合わせや旅の会話の間に終わって、つましいデザート用に近くのシャンパーニュの泡立つ飲み物が運ばれて来ると、会話は一層連綿と流れ始めた。

「スイス人のお二方、貴殿らを称えなければなりません」と参事官は始めた、「貴殿らは短い戦争の後、信仰上の領域では互いに平和裡に我慢するという術を習得されています。これは公平なセンスと健康な情緒の一つの印です。私の不幸な祖国は貴殿らを参考にするに よろしいのでしょうか。一体我々はこう悟れないものなのでしょうか、良心の頭を押さえつけてはならないし、プロテスタントであっても、カトリック教徒同様に、立派に祖国を熱く愛し、勇敢に守ることができ、自分の法律を遵守できるものである、と」。

「貴方は我々に余りに仰山の賛辞を寄せておられます」とボカールは反論した、「勿論我々は、カトリック教徒であれ、プロテスタントであれ、それぞれ互いに国内ではほどほどに我慢しています。しかし一緒に集まると、信仰分裂のため完全に駄目です。以前の時代、我々フライブルク[フリブール]の者はベルンの者達と幾重にも親しかったものです。これが今では終わってしまい、長年の絆は断ち切られています。旅行中には」と彼は冗談言って、私の方を向いて続けた、「それでもまだ時に手伝います。しかし家ではほとんど互いに挨拶しません」。

話しを続けさせてください。私が休暇でフライブルク[フリブール]に戻っていたとき、
一 私はフランス国王の護衛兵として軍務に就いています、
一 丁度アルプスのプラファイヤーで牛乳市が開かれました。そこには私の父の領地があって、ベルンのキルヒベルク[元来は山地教会の意]家の人達も放牧権を有しています。やるせない祭典でした。そのキルヒベルクは四人の娘、立派なベルン娘達を連れて来ていて、この娘達とは、子供時分、アルプスで毎年ダンスをしたものです。信じて頂けますか、この娘達は、祝いのダンスが終わると、雌牛どもが鐘を鳴らしている最中に、神学的会話を始めて、左様なことには一向に無関心な私を相手に、私のことを偶像崇拝者だの、キリスト教徒迫害者だのと叱ったのです。私がジャルナック[1569年、ユグノーのコンデ公戦死、アンジュー公アンリ勝利]やモンコントゥール[1569年、ユグノーのコリニー軍再び敗北]の戦場で、ユグノー達相手に私の責務を果たしたからと言いまして」。

「宗教上の会話が」と参事官は宥めた、「今まさに時代の風潮です。しかしその会話を互いに尊敬しながら行うこと、精神的に和解しながら了解すること、このことが何故でき

ないのでしょう。それで、ボカールさん、私は確信していますが、貴方は私を、私の新教的信仰故に火刑へと処分なさらないでしょうし、カルヴァン主義者達が私の哀れな祖国で長いこと蒙っていた残酷な仕打ちに対して、よもや非難をされないことはないでしょう」。

「それは勿論です」とボカールは答えた、「ただお忘れにならないでください。国家や教会における古いもの、旧来のものを、それが自らの存在をあらゆる手段で擁護するとき、残酷なものと呼んではならないということを。ちなみに残酷さに関しましては、カルヴァン主義ほど残酷な宗教を存じません」。

「セルヴェ[1511-1553、カルヴァンにより処刑される]のことをお考えですか」、一と小声で参事官は、自分の顔を曇らせて、言った。

「私は人間の処刑のことを考えていません」とボカールは答えた、「陰鬱な新しいこの宗教の蛮行たる神の正義のことを考えています。申しましたように、私は何も神学は分かりません。しかし私の叔父は、フライブルク[フリブール]の司教座参事会員[カトリック]で、篤信の学識ある男であり、私にこう請け合いました。子供が良いことか、悪いことかをなす以前に、その子供はすでに揺り籠のときから、永遠の至福へと定められているか、それとも地獄へ墮ちるかである、というのがカルヴァン主義の教えである、と。これは余りにむごいことで、真実とは思えません」。

「それでもそれが真実なのです」と私は、私の牧師の授業を思い出しながら、言った。「むごかろうと、そうでなかろうと、論理的なものです」。

「論理的なものですと」とボカールは尋ねた、「何が論理的なものです」。

「自ら矛盾撞着しないものでしょう」と参事官が発した。彼は私の熱意を面白がっているように見えた。

「神は全知で、全能です」と私は勝利を確信して続けた、「神が予見して、神が妨げないこと、これは神の意志です。従って勿論我々の運命はすでに揺り籠のときに決定されています」。

「貴殿の主張を転覆させたいものだ」とボカールは言った、「今、私の叔父の議論を思い出すことが出来さえすればいいのだが。叔父はそれに対する立派な反論を述べた、...」。

「その立派な反論を思い出して頂けるなら」と参事官は述べた、「私には座興となりましょう」。

このフライブルク人は杯に一杯注いで、ゆっくり飲み干して、目を閉じた。しばらく瞑想してから、彼は快活に言った、「皆さんが、私に口を挿まずに、私の考えを支障なく展開させてくださいますなら、何とか上手く切り抜けられましょう。それでは、こう仮定します、シャーダウさん、貴方が、貴方のカルヴァン主義的摂理によって揺り籠のときから地獄の劫罰にあるとしましょう。一 いや、これはご無礼なことを申しました、一 それでは、私が前もって劫罰を受けているとしましょう。いや、やれやれ、私はカルヴァン主義者ではありませんので、...」。ここで彼は見事な小麦パンの若干の塊を取り上げ、それを指で一人の小人の形にして、この小人をこう言いながら、自分の皿に置いた。「ここに生まれたときから地獄の劫罰を受けたカルヴァン主義者がいます。それでは、シャーダウ、注目されたい、一 貴殿は十戒を信じますか」。

「何ですと」と私はかっとなった。

「まあ、まあ、尋ねることは許されるでしょう。貴殿らプロテスタントは、幾多の旧来

のことを廃されました。そこで神はこのカルヴァン主義者に命じます。これをなせ。あれを止めろ、と。このような戒律は、それでは、空しい、邪悪なまやかしとなりませんか、この小人が前もって、良きことをすることができない、悪しきことを必定しなければならぬと前もって定められているとしたら。このような不合理を貴殿は至高の叡智に要求なさるのですか。そんなこと無駄なことです、私の指によるこの造物同様に」。そして彼はこのパンの小人を高く飛ばした。

「悪い考えではない」と参事官は言った。

ボカールが自分の内心での満悦を隠そうとしている間に、私は急いで自分の反論を吟味した。しかし私はこの瞬間何も適切な返事を思い付かなかった。そして不快な羞じらいの色を浮かべて言った。「これは晦渋な難しい命題で、簡単には討議できません。ちなみにこの命題の主張は、教皇主義を難ずるために、必要不可欠なものではありません。教皇主義の目に余る乱用は、貴殿自身、ボカール、否定なさらぬことでありましょう。僧侶どもの墮落を考えてみれば済みます」。

「僧侶の中にはひどい奴もいます」とボカールは頷いた。

「無闇の権威主義的信仰は、...」。

「それは人間的弱さにとって一つの癒やしですよ」と彼は遮った、「結局、国家でも宗教でも、ごく些細な権利関係の場合と同じく、究極の権威が必要でしょう。人々が安心納得できる権威が」。

「奇蹟を行う聖遺物ですか」。

「聖ペトロの影、それに聖パウロの汗のハンカチは病人どもを治しました」とボカールは大いに悠然として答えた、「聖人達の御骨が奇蹟を呼ばないことがありますか」。

「阿呆の聖母マリア[無垢受胎]信仰、...」。

この言葉は発せられると、このフライブルク人の明るい顔が変じた。血が彼の頭に勢いよく上がって、激して赤くなり、彼は椅子から飛び上がり、剣に手を置き、私に向かって叫んだ、「私を個人的に侮辱なさるおつもりか。それが貴殿の意図なら、剣を抜かれよ」。

令嬢も狼狽して座席から起き上がっていて、参事官は宥めて、両手をフライブルク人の方へ差し出した。私はびっくりしたが、私の言葉のもたらした全く思いがけない効果に冷静さを失うことはなかった。

「個人的侮辱といったことは、毛頭ありません」と私は落ち着いて言った、「ボカール、どのような語りするときでも、世慣れた素養ある男と思われる貴殿、貴殿自身が述べておられるように、宗教的事柄に関してとらわれない考えの貴殿が、この一点に関しますと、このような情熱を露呈されるであろうとは、思いもよらぬことです」。

「それでは貴殿は、シャーダウ、フライブルクのすべての一帯で周知のこと、その地を遠く越えた所まで知られていること、つまり我らのアインジーデルンの聖母が不肖、私に一つの奇蹟を果たされたことをご存じないのか」。

「いや、本当に知らない」と私は答えた、「親愛なるボカール、掛け給え。そしてそのことを話し給え」。

「まあ、その件は世に知られていて、修道院そのものの奉納額に記されている」。

私は三歳のとき、重い病に罹って、その結果、手足全体が萎えてしまった。思い付く限りの薬が使用されたが、効能がなかった。医師も匙を投げた。最後に私の善良誠実な母が

裸足で私のためにアインジーデルンまで巡礼を行った。すると、見よ、一つの恩寵の奇蹟が起きた。その時から私は快方に向かって、私は元気創建になり、今日では、御覧のように、健康で真っ直ぐな肢体の男となっている。一重にただアインジーデルンの良き聖母のお蔭であり、私は今日自分の青春を喜びとし、無益で不機嫌な不具者として悲嘆苦悶せずに済んでいる。それで皆さん、貴方らもお分かり頂けましょう、そして自然なことと思われることでしょうか、私が私の救いの聖母に生涯、恩顧を感じ、衷心から敬慕していることを」。

こう言って彼は絹の紐を胴着から引き出した。それは首の周りに掛かっていたもので、一個のメダルが下がっていた。そして熱くそれに接吻した。

彼を、嘲笑と感動の奇妙な混合の中で見つめていたシャティヨン氏は、今やその親切な流儀で始めた。「しかし、ボカールさん、どこの聖母でも貴殿へのこの幸せな治療をなしたであろうと思われませんか」。

「そうは思いません」とボカールは元気に答えた、「私の家族は幾多の恩寵スポットで試みたのです。そしてようやく正解の門を叩くことになりました。アインジーデルンの聖母がまさに唯一独自ののです」。

「それでは」とこの老フランス人は微笑して続けた、「貴殿の同郷の方と仲直りすることは簡単なことになりましょう。仲直りは、貴殿の良好な情緒と快活な性情にとって、この点に関して我々皆すでに得心していることでありますが、やはり必要なものでありましょうから。シャーダウさんは、聖母マリアに関するその辛辣な判決の際に、アインジーデルンの聖母についての畏敬の例外条項を付与することをお忘れにならないことでしょうか」。

「喜んでそういたします」と私は老紳士の調子に合わせて言った。勿論彼の軽口に内心抵抗がないわけではなかった。

すると気の良いボカールは私の手を取って、誠実に握手した。会話は別の展開を辿って、直に若いフライブルク人はお休みの挨拶をし、別れの言葉を述べながら立ち上がった。彼は明日早朝出発するつもりだったのである。

そこでようやく興奮した会話のやり取りが終了したので、私は視線をより注意深く若い娘に向けた。この娘は黙って、大変緊張して我々の会話を追っていたが、私は娘がその父親あるいは叔父と似ていないことに驚いた。老参事官は繊細に仕上げられた、ほとんど臆病な顔つきで、その利発で、黒っぽい目は、憂鬱げであったり、嘲笑的であったりして、常に機知的に輝いていた。それに対し若いレディーは、ブロンドで、その無邪気で、しかし決然たる顔には不思議に輝かしい青い目が息づいていた。

「お若い方、貴殿に尋ねてよろしいですか」と議会参事官は始めた。「何故パリに向かわれるのです。我々は信仰を同じくしています。貴殿のお役に立つのであれば、私を利用なさるといい」。

「御主人」と私は答えた、「貴殿がシャティヨンの名前を発せられましたので、私の心は感動しています。私は或る兵士の子供で、戦術を、私の父方の家業ですが、習得したいと思っています。私は熱心なプロテスタントで、自分の力の及ぶ限り、善行のために尽力する所存です。この二つの目標は、提督の目の下で働き、戦うことが許されるならば、達成されます。そのためにお力添えを頂けますならば、私にとって最大の御尽力となりましょう」。

すると娘が口を開いて尋ねた。「提督殿を大いに尊敬されているのですか」。

「彼はこの世で第一級の男です」と私は熱く答えた。

「それではガスパルデ」と老公が口を挿んだ、「これほど立派な志操ならば、そなたがこの若様のために、そなたの名親[コリーネの名前はガスパール]に推薦状を添えたらよからう」。

「勿論のことでしょう」とガスパルデは冷静に言った、「お見かけ通りに、とても正直な方なのであれば。でも私の推薦状が実を結ぶか、疑わしい。提督殿は目下、フランドル地方の戦役前夜で、朝から晩まで用事に追われ、囲まれて、休みがありません。それにもうすべての職、彼の手配できる職が塞がっているのかもしれない。貴殿は、私のよりももっとましな推薦状をお持ちではないのですか」。

「私の父の名前を」と私は若干気後れして答えた、「ひょっとしたら提督もご存じかもしれません」。 — 今や、推薦状のない余所者にとって、偉大な將軍の許にお目通り願うことは、いかに困難なことか明らかになった。私は悄然として続けた、「仰る通りです、御令嬢。私は彼に対し持参するものが少ないと感じています。一つの心に一つの剣しかありません。彼はその千人を有しているのに。彼の弟、ダンドゥロがまだ存命であればいいのですが。弟君ならば私にはもっと身近に思われ、大胆に私は申し出ることでしょう。弟君は青春の頃からすべての面で私のお手本でした。將軍ではありませんが、しかし勇敢な兵士です。政治家ではありませんが、しかし堅牢な同志です。聖人ではありませんが、しかし誠実な温かい心です」。 —

私がこう話していると、令嬢ガスパルデが、驚いたことにまず仄かに赤くなり始め、そして私には謎めいたこの当惑が募って、遂に真っ赤に覆われてしまった。老紳士も奇妙なことに不機嫌になって、辛辣に言った。

「ダンドゥロ殿が聖人であったか、なかったか、どうして貴殿に分かろう。私は眠くなつた。会議はお仕舞いにしよう。シャーダウ殿、パリに向かわれたら、貴殿の訪問という栄誉を私は賜りたい。私はサン・ルイ島に住んでいる。明日は多分もはや互いに会えないことだろう。私どもは休養日で、ムランに留まる。まあ、この札入れに、貴方の名前を書いて頂きたい。結構、ご機嫌よう。お休み」。 —

第四章

この会合の後、二日目の晩、私はサントノーレの門を通過して、パリに騎行し、疲れていたけれども、間近の、ほとんどその門から百歩も離れていない宿の小門を叩いた。

最初の週、私はこの力強い町を観察して過ごし、私の父の戦友を探して空しい思いをしていた。この戦友が亡くなっていることを私は幾つか問い合わせた後、ようやく知った。一週間過ぎて、私は動悸しながら、提督の住まいへ向かった。ルーブルから遠からぬ狭い通りがあると私は教えられていた。

それは陰気な、古くからの建物で、門番は私に対し、無愛想に、いや不審げに対応した。私は自分の名前を一片の紙片に書かなければならず、それを門番は主人の許へ届けた。それから私は中へ入れられ、大きな控えの間を通過して、提督の小さな仕事部屋に入った。控えの間には、兵士や廷臣という多くの人間が詰め込まれていて、この列の中を進んで行く

者達を検分していた。提督は書状に取りかかっている、私に待機するよう合図して、一通の手紙を仕上げた。彼の顔を、私にとっては、巧みな表現豊かな、スイスにまで評判のその彫刻作品で、忘れがたい印象を残しているその顔を、感動して見守る時間的余裕が私にはあった。

提督は当時五十歳であったかもしれない。しかし彼の髪は雪のように白く、ある熱を帯びた赤みがほっそりした両頬に差していた。彼の力強い額と、痩せた両腕には青い血管が浮き出ている、その表情にははなはだ真剣さが窺われた。彼はイスラエルの裁判官に見えた。

彼は自分の仕事を終えると、窓辺のニッチの私の許に歩み寄って、その大きな青い目を射抜くように私の目に据えた。

「貴殿がこちらに参上した理由は承知している」と彼は言った、「貴殿は善行に尽力したいのであろう。戦争が勃発したら、貴殿に私のドイツ人騎兵隊での一つの職を与えよう。その間、一 貴殿は筆が立つかな。ドイツ語とフランス語が分かるかな」。一

私は肯定してお辞儀した。

「その間、私は貴殿を私の官房で雇うことにしよう。貴殿は役に立とう。だから歓迎だ。明日こちらへ八時に来てくれ。時間厳守だ」。一

そこで彼は一度私と握手して、私を帰した。私が彼の前で礼をすると、大変親切に言葉を添えてくれた。

「シャティオン参事官への訪問を忘れないことだ。彼とは途中昵懇になったのだろう」。

私は再び路上に出て、今体験したことを反芻しながら、宿への道を歩いていたとき、自分がもはや提督にとって未知の男ではなくなっていると実感して、このことは誰のお蔭なのか疑念の余地がなかった。私には実現が困難と思われていた目標にかくも容易に到達したという喜びは、私の始まったばかりの人生履歴にとって結構な前兆であった。そして提督の目の下で働くという展望を得て、これまで味わったことのない若干の価値の思いを抱くことになった。しかしこうしたすべての幸福な思いは、ほとんどすべて、ある思いの前で色褪せてしまった。つまり私を刺激すると同時に悩ませ、誘うと同時に不安にさせるもので、全く説明する術のない果てしない何か疑わしいものであった。そしてそれが今、長いこと探していて得体が知れなかった後、突然明瞭なものとなった。つまりそれは私につきまとう提督の目であった。何故この目は私につきまとうのか。それはこの娘の目と同じであるからである。どんな父親であれ、母親であれ、自分の子供にこれほど忠実にその魂の鏡像を遺伝させることはできない。私は言いがたい混乱に陥った。この娘の目は彼の目に由来するものであろうか。可能性があろうか。考えられるか。いや、私が錯覚したのだ。私の想像力が私に奸計を仕掛けたのであろう。このペテンを現実によって論破すべく、私は素早く決心して、宿に戻り、それからサン・ルイ島へ、三本の百合亭での私の知り合いを訪問することにした。

私が一時間後、議会参事官の高く細い家に入ったとき、その家は、サン・ミシェル橋に隣接していて、その一方の側ではセーヌ川の波が、他方の側では、路地の向こうに、小さな教会のゴシック様式の窓が覗いていたが、下の階のドアはすべて閉まっていて、それで二階に進んでみると、いつの間にか、眼前にガスパルデを見いだした。彼女は長持を開けて仕事をしているように見えた。

「貴殿をお待ちしていました」と彼女は私に挨拶した、「私の叔父の許に案内しましょう。貴殿にお会いして、喜ぶことでしょう」。

老公は快適に肘掛け椅子に腰掛けて、大きなフォリオ判をめくっていた。その判を彼はその為に用意された肘掛けに置いていた。広い書齋は、立派な彫刻の檜の戸棚に収まっている本で一杯であった。小立像や貨幣、銅版画が、それぞれ然るべき箇所にあつて、この静かな思索の場に蝟集していた。この学識ある主人は起き上がらずに、私に椅子を彼の側に置くように命じ、旧知の者として私に挨拶し、喜びを露わにして、提督の許に雇用される運びになったという私の報告を聞いていた。

「今度こそは彼の成功を祈りたい」と彼は言った、「我々は残念ながら、結局、我々の故国の住民の間では、単に少数派にすぎないが、それでも我々新教徒が、評判の悪い内戦をせずに、自由に活動するためには、二つの道しかなかったのだ、単に二つの道だ。一つは大洋を越えて、コロンブスによって発見された大陸に移住することだ。一 この考えを提督は長年、自分の心情に温めてきていた。しかし思いがけぬ障害がそれに敵対して生じないとも限らない。一あるいは愛国心を燃え上がらせて、偉大な、人類を救出する海外での戦争を遂行することだ。この時には、カトリック達も、ユグノー達も寄り添って戦い、祖国愛の中で、同胞となって、その宗教上の憎悪を忘れて良いことになる。このことを今、提督は望んでおり、そして私は、平和を望む男の私は、戦争の布告がなされないものか、足下の大地が燃える思いで気を揉んでいる。オランダをスペイン人の桎梏から解放しながら、我々のカトリック教徒も、心ならずも自由の奔流へ引きずり込まれよう。しかし急ぐのだ。いいか、シャーダウ。パリの大気は鬱陶しい。ギーズ家は戦争を挫こうとしている。戦争となると若い国王[シャルル九世]が自立してしまい、ギーズ家は不可欠な存在ではなくなりかねない。皇太后は曖昧だ、一我々の党派の短気な者達が言うようには、夫人は悪魔ではない。しかし夫人は今日から明日へと器用に切り抜けていて、ただ利己的に自分の家の利害のみを考えている。フランスの栄光には無関心で、善悪について判断せず、両手に敵対するものを持っていて、その選択をただ偶然に任せている。夫人は臆病で、どう動くか計算できないけれども、勿論最悪のことを仕出しかねない。一コリニーに対する若い国王の好意が重要であつて、この国王は、...」。ここでシャティヨンが溜め息を吐いた、「いや、貴殿の判断に私が先走るつもりはない。国王は提督を訪問することが稀ではないから、貴殿は自身の目で判断されよう」。

この老人は宙を見つめた。それから突然、話題を変えて、フォリオ判の表題をめくって、私に尋ねた、「ここに書かれているものをご存じかな。まあ、見給え」。

私はラテン語で読んだ。「プトレマイオスの地理学、ミカエル・セルウェトゥス編集」。

「ジュネーブで焚刑に遭った異端ではありませんか」と私は狼狽して尋ねた。

「その通り。彼は立派な学者だ、いや、私が判断し得る限り、天才的頭脳で、その考えは自然科学の面で、ひょっとしたら後世、その神学的詮索よりももっと評価されるかもしれない。一貴殿も、貴殿がジュネーブの参事官であつたら、彼は焚刑に処していたかな」。

「御主人、それは確かなことです」と私は確信して答えた、「ただ一つのことをお考えになりさえしたらいいのです。教皇至上主義者達が我々のカルヴァンを排除するために、

最も危険な武器は何であったろうか、と。彼らはカルヴァンを、彼の教義は神の否認に他ならないと非難しました。さて、一人のスペイン人がジュネーブにやって来て、自らをカルヴァンの友と称し、そしてあたかも何の意味もないものとして、三位一体説を否認する諸本を刊行し、かくて新教徒の自由を乱用します。そこでカルヴァンは千人を越える者達に対して、この純粋な言葉のために苦しみ、血を流している者達に対して、この過ちの同志を世間の目前で、新教徒の教会から追い出し、世俗の裁判官に引き渡す責務を負うことになったのです。私どもとこの者との間に混同が生じないようにし、私どもが無実なのに、余所者の瀆神論に引き込まれないようにしたのです」。

シャティオンは憂鬱そうに微笑して、言った、「セルヴェについての貴殿の判断は、的確で根拠のあるものだから、貴殿は早速私に好意を示し、今晚私の許に滞在されたい。貴殿を一つの窓辺へ案内しよう。そこからはラウレンティウス[ロレンツォ]礼拝堂が眺められ、それが間近にあることを我々は喜んでいるのであるが、今晚有名なフランシスコ会士パニガローラ[Panigarola,1548-94]が説教する予定なのだ。すると貴殿は、人々が貴殿にどのような判断を下しているか耳にすることになる。神父は有能な論理家で、熱い雄弁家だ。貴殿はその言葉を一言も聞き逃さないことだろう。――そして喜んで聞かれることだろう。――貴殿はまだ宿にお泊まりか。私は貴殿に永続的住まいを手配する必要がある。――ガスパルデ、そなたはどこを勧めるか」と彼は丁度入室して来た、この女性の方を向いた。

ガスパルデは快活に答えた。「仕立屋のジルベールは、私どもの信仰の同志ですが、数多い家族を養う必要があって、シャーダウ殿にその最良の部屋を譲って良いとなれば、きっと喜び、光栄に思われることでしょう。そうなるに更に結構なことに、この実直な、でも臆病なキリスト教徒が私どもの新教の礼拝へ、この勇敢な武人の同伴の許、また参加する勇気を頂けることでしょう。――私はすぐに向こうへ参ります。そしてこの幸運なお話しをお知らせしましょう」。――そう言ってこの細身の女性は急いで去った。

彼女の出現は短い間のことであったが、私は注意深く彼女の目を観察して眺め、新たな驚きに襲われた。すぐにこの謎を解こうという抗しがたい威力に突き動かされ、私はすべての礼儀作法に違反しかねない一つの質問をкаろうじて抑えていたが、そのとき老公自身が助け船を出した。彼が嘲笑的にこう尋ねたのである。「貴殿がかくもまじまじと観察するほど、この娘に格別な点がありますか」。

「何かとても格別な点とは」と彼は決然と答えた、「提督の目との彼女の目の不思議な類似です」。

あたかも参事官は一匹の蛇に触れたかのように、後ずさって、強いて微笑して言った、「シャーダウさん、自然の戯れが考えられませんか。人生には似たような目があるということをお否定なさるつもりですか」。

「貴殿は、令嬢に関し、格別と思う点をお尋ねになりました」と私は冷静に答えた。この質問に私は答えたのです。反対尋問をお許しください。貴殿の許へこれから先も訪問を許されていると思いますし、貴殿のご好意と卓越した精神を魅力的に感じています。それで、この先、この美しい令嬢に対し、どのように私は挨拶したらいいと貴殿はお望みですか。令嬢は名親のコリニーからガスパルデの名前を頂いていると私は承知しています。しかしまだ教えて頂いていないのです。私が光栄にもお会いするのは、貴殿のご息女なのか、

それとも貴殿の親戚の女性なのか。

「彼女のことは、貴殿の好きなように呼びなさい」と老公はうんざりしてつぶやいた。そしてまたプトレマイオスの地理学をめぐり始めた。

この奇妙な振る舞いで、私の推測、ここには判然としないものがあるという思いが強くなった。私は大胆極まる推論を始めた。提督がサン・カンタンの防御について公刊している小さな文書の中で、これを私は暗記していたが、彼はかなり唐突に神秘的言葉で結論を出していて、ここで彼の新教への改宗を暗示していた。ガスバルデの誕生はこの新教以前の生活と関連があるのではなかろうか。私は普通このような事柄では厳しく考えるのであったが、ここでの私の印象は別であった。今回私は或る過ちを断罪する気になれなかった。この過ちのせいで、自分が高貴な英雄の血族の女性に近寄れるという信じがたい可能性が開けているのである。 — ひょっとしたら彼女に結婚を申し込むかもしれない。私は自分の想像力を放恣に展開させながら、多分幸せな微笑を顔に浮かべていたのであろう。というのは、私をこっそりとそのフォリオ判越しに見守っていた老公が、思いがけず熱くなって私の方に向かって言ったからである。

「お若い方、偉大な男に、人間的弱さを発見して喜んでおられるかもしれないが、彼は間違いを犯してはいません。 — 貴殿は錯覚している。勘違いしている」。

ここで不承不承彼は立ち上がって、書斎の中をあちこち歩き、それから突然調子を変えて、私のすぐ目の前に立ち止まり、私の手を握った。「若い友の方」と彼は言った、「このひどい時代、我々新教徒は互いに手を取り合って、互いを同胞と見なすべきであって、信頼の成長は迅速です。我々の間に一点の曇りがあってはなりません。貴殿は正直な男で、ガスバルデは愛しい子供だ。何か秘め事があって、貴殿らの出会いが不純なものになってはいけない。貴殿の口は堅いだろう。私は貴殿を信頼している。それにこの件は煙が立ちやすく、邪悪な口から耳にされる恐れもある。それで私の言うことを聞かれない」。

ガスバルデは私の娘でもないし、私の姪でもない。しかし彼女は私の許で成長し、私の親戚と見なされている。彼女の母親は、この子供を生んですぐに亡くなった。この母親はドイツ人の騎兵将校の娘で、父親に付いてフランスへ来ていたのだ。しかしガスバルデの父親は」と彼はここで声を潜めた、 — 「ダンドウロで、提督の弟であり、その珍しい勇気と若死については貴殿も承知しておられよう。これでこの件は十分だ。ガスバルデには私の姪として挨拶し給え。私は彼女を実の子のように愛している。ちなみに口外せずに、屈託なく彼女に接して欲しい」。

彼は黙った。そして私もこの沈黙を破らなかった。というのは私はこの老主人の報告で心が一杯に満たされたからである。このとき、我々両人は、二人にとって歓迎すべきことであったが、中断させられ、夕食へと呼ばれた。私は親切なガスバルデによって、彼女の側の席を指示された。彼女が一杯に注がれた杯を私に渡し、彼女の手が私の手に触れたとき、私はある戦慄に襲われ、この若い血管には私の英雄の血が流れているのだと思った。ガスバルデも私とその直前とは別な目で彼女を見ていると感じ、彼女は思案し、いぶかしさの或る影が彼女の額に差したが、しかし彼女が、仕立屋のジルベールは私に宿を提供することを如何に光榮に思っているか楽しく語っているうちに、その影はすぐにまた明るくなった。

「貴方のために、ユグノーらしい裁ち方で厳格に服を仕上げしてくれるキリスト教徒の仕

立屋を手許に有することは大事なことです」と彼女は冗談を言った、「今国王の許で、大いに寵愛を受けている名親のコリニーが、貴方を宮廷に案内したら、皇太后の魅力的女官達が貴方の許に群がって来て、貴方の真面目な衣服が、然るべく、女官達に対し節度を守らせなかったら、貴方は駄目になってしまいましょう」。

この快活な会話の間に、我々は路地越しに、中断の間を伴いながら、長く引き延ばされたり、激しく吐かれる音色を耳にした。これは吹き飛ばされた、弁士の演説の断片に似ているもので、たまたま静かになると一つの文がほとんどそのまま我々の耳に響いた。そしてシャティヨン氏は不承不承起き上がった。

「失礼します」と彼は言った、「向こうの残忍な道化師のせいで座っておれない」、
— こう言って彼は我々だけにした。

「これは何のことです」と私はガスバルデに尋ねた。

「いや」と彼女は言った、「向こうのラウレンティウス[ロレンツォ]教会でパニガローラ神父が説教しています。私どもの窓から丁度敬虔な人々の集まりを覗くことができ、風変わりな神父も見えるのです。叔父はその演説を聞いて立腹し、私はその無茶な話しにあきれます。私は少しも聞き入れません。私どもの新教の集会のときに集中します。だって、そのときにはただ真実のみが説教されますので、神聖な話題にふさわしく、敬虔に、啓発されながら、最後まで耳を傾けます」。

その間、我々は窓辺に歩み寄った。ガスバルデが静かに窓を開けた。

生温かい夏の夜であって、礼拝堂の照明された窓も開け放たれていた。我々の頭上高く、狭いその中間に、星々が煌めいていた。説教壇の神父は、南方系の熱い目と戯れるような痙攣性の表情をした若い青白いフランシスコ会士であったが、奇妙に激しい動作をして、私はまず彼に対し微笑を禁じ得なかった。しかしやがて彼の演説は、私の注意をすべて惹き付けて、私は一音節も聞き逃さなかった。

「キリスト教徒の皆さん」と彼は叫んだ、「我々に要求されている寛容とは何でしょうか。それはキリスト教徒的愛でしょうか。違います。私は違うと三度言います。それは我々の同胞の運命に対する呪わしいほどの無関心です。皆さんは、ある他人が深淵の縁で微睡んでいる姿を見て、その人を起こさず、引き戻さないような人間に関して、何と云うでしょうか。それでもこの場合は単に肉体の生死が問題となっているに過ぎません。永遠の救済か、墮落かが賭けられているときに、我々の隣人をその運命に放置することは、残酷なことで、一層許されないことです。いや、何ですか。異教徒に対しては、彼らの魂が致命的危険にあることを思いもせず、彼らとの付き合いが可能であると思われませんか。まさに彼らに対する我らの愛故に、彼らが救済されるよう、彼らを説得する義務があるのです。彼らが頑固であれば、救済されるべく、強制し、改善の見込みがなければ、彼らを根絶する義務があります。彼らの劣等な例で、彼らの子供、彼らの隣人、彼らの仲間が、永遠の劫火に導かれてはならないのです。というのはキリスト教徒の民は、その肉体についてこう記されている体だからであります。つまり汝の目に汝が立腹するときは、その目をえぐり出せ、と。汝の右手に汝が立腹するときは、それを切り落とせ、それを投げ棄てよ、と。というのは、いいかな、汝の肢体の一つが駄目になる方が、汝の全肉体が、消えることのない劫火に投げ込まれるよりも汝にとってはましだから、なのであります」。

— おおよそこういったことが、この神父の思考回路であった。この神父はこの回路を情熱

的レトリックと放恣な身振りで、一つの荒々しい舞台へと具体化させていた。この熱狂的な伝染性の毒のせいにせよ、上からどぎつく照らすランプの明かりのせいにせよ、聞き手の表情は、とても歪んだ、私には血に飢えたものに見えるものとなって、突然私は明瞭に、我々ユグノー達は、パリで何という火山の上に立っていることか、悟った。

ガスパルデはこの不気味な情景をほとんど無関心に眺めていて、その目を、礼拝堂の屋根の上で穏やかに輝いて昇っている一つの美しい星に向けた。

このイタリア人がその演説を、一つの手の仕草、つまり私には一つの祝福よりもむしろ一つの呪詛に類似して見える或る仕草をして終えた後、その民ははなはだ密集して小門から退出し始めた。小門の両側では、二本の大きな燃え上がるピッチ松明が鉄の輪の中に収まっていた。その血のような照明が退出して行く者達を照らし、時々ガスパルデの顔にも明るく掛かった。彼女は人々の群れを興味深そうに眺めていて、一方私は影の中に引き下がっていた。突然彼女が青ざめた。それから彼女の視線は激昂して燃え上がり、私の視線がその視線を追うと、一人の背の高い、豊かな身なりの男が、彼女に対し半ば蔑んだ、半ば貪欲な身振りで一回投げキスをした。ガスパルデは怒りで震えた。彼女は私の手を握って、私を自分の側に引き寄せ、興奮の余り声を震わせながら、下の路地へ向かって発した。

「臆病者、私には味方がいないと思って、私を馬鹿にしているのでしょうか。それは間違いないよ。ここにお一人いて、あなたが一目でも見ようものなら、折檻されますよ」。

この伊達男は嘲笑の高笑いをして、彼女の話しの中身は分からなくても、その表情豊かな身振りを理解して、外套を肩に掛け、群衆の流れの中に消えた。

ガスパルデの怒りは一つの涙の奔流となって、彼女は嗚咽しながら、このならず者は、国王の弟君であるアンジュー公爵[アンリ三世,1551-1589]の廷臣であって、すでに彼女が到着した日から、彼女が避けようとしても通りで彼女を追いかけてきて、叔父が同伴していても、遠慮なく彼女に生意気な挨拶を寄越すと語った。

「私は親愛なる叔父には何もそのことを語っていません。叔父は動揺しやすく、心配症の質ですから。叔父は私を守れずに、不安に思うだけでしょう。でも貴方は若くて、剣の心得があります。貴方を頼りにしています。この不作法はどうしても終わらせなければなりません。一 それではご機嫌よう、私の騎士の方」、と彼女は微笑して言い添えたが、更に涙が流れ落ちた、「私の叔父にお休みと言うことを忘れないでください」。

一人の老いた従者が主人の小部屋へ明かりで照らして案内した。私は別れの言葉を述べた。

「説教は終わったかな」と参事官は尋ねた、「若い日々であればこの茶番に興じたことだろう。しかし今は、特にニームで、そこに先の十年間ガスパルデと共に引きこもって暮らしていたのだが、神の名の下で、殺人と不法集合が仕掛けられるのを見て以来、群衆が興奮した牧師の周りに集まるのを見ると、彼らが今やすぐに狂気の沙汰、残忍なことを仕出かすのではないかと不安の思いを抱かずにはおれない。神経に障るのだ」。一

私は宿の小部屋に入ると、古い肘掛け椅子に身を投げた。この椅子が折り畳みベッドの他に宿で落ち着けるすべてであった。一日の出来事を頭の中で反芻し、心の中でそれが優しい、しかし鋭い炎のように燃え続けた。近くの修道院の塔の時計が真夜中を告げ、油を燃やし続けていた私のランプは消えた。しかし私の心の中は、日中のように明るかった。

自分がガスパルデの愛を得られるかもしれないということは、私には不可能に思えなかった。それを得なければならぬというのは、運命であり、その為に命を賭けるのは、幸せであった。

第五章

翌朝所定の時刻に、私は提督の許に参上し、彼が古ぼけたポケットブックをめくっているのに出会った。

「これは」と彼は始めた、「一五五七年時の私の記録だ。この年、私はサン・タンカンを防御して、それからスペイン人に屈服しなければならなかった。私の部下で、最も勇敢な者達の中に、十字で印付けられている[戦死した]のだが、サドーの名前がある。思うにドイツ人であろう。この名前は貴殿の名前と同じかな」。 —

「私の父の名前に間違いありません。父は光栄にも、貴殿にお仕えし、貴殿の目の前で戦死したのです」。 —

「そういう次第ならば」と提督は続けた、「貴殿への私の信頼は強まる。私は長年一緒に暮らしてきた郎党から裏切られた。貴殿を一目見て、私は信用した。この目は錯覚ではあるまい」。

こう言いながら彼は一枚の紙を取り上げた。その紙は彼の大きな筆跡で上から下まで記されていた。「これを清書してくれ。この紙片から、我らの状況の危機について、幾多のことを察知しても、気にかけてくれないことだ。すべて偉大なこと、決定的なことは、一つの冒険だ。取り掛かって、書いてくれ」。 —

提督が私に渡したものは、フォン・オラニエン[オランダの王家]皇子[ウィレム一世、1533-1584]に向けた一つの覚え書きであった。関心を募らせて、私はこの叙述の展開を追った。これは、提督に特有のこの上ない明瞭さで、フランスの状況について述べているものであった。スペインとの戦争を、どのような犠牲を払っても、一切遅滞させずに引き寄せること、これが我々の救いとなりますと提督は記していた。アルバは、我々と貴方から同時に攻撃されると、負けます。私の主人である国王は戦争を望んでいます。しかしギーズ家はあらゆる手を尽くしてそれに反対しています。彼らに扇動されたカトリックの世論は、フランスの戦争意欲に水を差しており、皇太后は、この夫人は国王よりもアンジュー公爵の方を不自然ながらも最上にしており、国王が戦功で輝いて、自分の寵児の公爵を影の薄い者にするのを望んでおられません。この戦争を、私の主人である国王は望んでおられ、この戦争を私は国王に対し、忠実な臣下として準備し、自分に出来る限り用意する所存であります。

私の計画は以下の通り。ユグノー達の義勇兵団が最近フランドルへ出撃しました。この兵団がアルバ公に抗し得るならば、 — これの大部分は、貴殿が同時にオランダのスペイン人將軍達に攻撃を仕掛けることに依存するものでありますが、 — この成功を見て、国王は万難を排して、決然と前進する気になられましょう。最初の成功という魔力を貴殿はご承知でありましょう。

私が筆記を終えたとき、一人の従者が現れて、提督に何か囁いた。提督が自分の席から起き上がらないうちに、一人のとても若い、痩せて、病気がちの姿の者が激しく興奮しな

がら部屋に入って来て、急いで提督に言葉を浴びせた。

「お早う、親父さん。何かニュースがあるかい。数日の予定で、フォンテーヌブローへ馬で出掛けるつもりだ。フランドルから知らせが来たかな」。このとき彼は私に気付いて、私を指さして、支配者然と尋ねた、「この者は誰だ」。――

「私の書記です、陛下、陛下のご意向であれば、すぐに去りましょう」。

「去ってくれ」とこの若い国王は叫んだ、「国事を話しているときに、話しを聞かれない。我々はスパイに見張られていることを、忘れているのか。―― 貴殿は余りに無頓着だ、提督」。

今や彼は肘掛け椅子に身を投げ、宙を見つめた。それから突然飛び起きて、コリニーの肩を叩いた。あたかもたった今退去を要求した私のことは忘れたかのように、次の言葉を吐き出した。

「悪魔のはらわたにかけて、我々は近々カトリックの陛下[スペイン王]に戦争を布告するぞ」。しかしこのとき彼はまた先ほどの思考回路に戻ったように見えた。というのは不安げな表情でこう囁いたからである。「最近のことだ、貴殿も覚えておろう。我々兩人が執務室で打ち合わせていたとき、壁の掛け布の背後で物音がした。私は剣を取った、そうしただろう。そして、二度、三度と突いた。するとそれが持ち上がった。その下から誰が現れたか。私の弟のアンジュー公爵が猫のように背を丸めて出て来た」。ここで国王は物真似の身振りをして、無邪気な高笑いに弾けた。「しかし私は」と国王は続けた、「彼が我慢できないような視線で睨んで、彼はすぐにドアから去った」。

このときその青白い顔は荒々しい憎悪の表情を浮かべて、私はびっくりしてその表情を見つめた。

コリニーはこのような情景には多分慣れていたが、しかし目撃者が居合わせることに痛々しい思いがしたのかもしれない。彼は合図をして私を去らせた。

「貴殿の仕事は終わったと思う」と彼は言った、「明日また会おう」。――

私は家路に就きながら、果てしのない嘆きに襲われた。それではこのさえない人間に、諸般の決定がかかっているわけだ。―― このように少年のように未熟で、落ち着きのない情熱に駆られては、どこに思考の持続性、決意の堅牢さが生じて来よう。提督は国王のために行動できようか。しかし他の、敵対する決意に、次の時間、早速この混乱した情緒の国王ならば取り憑かれるかもしれない、誰もこれは保証し得ない。コリニーが自分の国王は頼りがいのある支柱だと思える場合にのみ確実さが生ずると私は感じた。国王が彼にとって単に道具に過ぎないのであれば、この道具は明日にでも奪われかねない。

このような邪悪な懐疑に陥って、私は自分の道を進んでいたが、そのとき一本の手が私の肩に置かれた。私は振り返って、その明るい顔に同郷人ボカールを認めた。彼は私を抱擁して、威勢良く喜びを発して、挨拶した。

「ようこそ、パリへ、シャーダウよ」と彼は叫んだ、「貴方は多分暇だろう、私もそう。国王がたった今馬から去ったから。貴殿は私と一緒に行けばいい。ルーブル宮を案内しよう。私はそこに住んでいる。私の連隊は内部の室内の警備を担当しているのだ。――

貴殿にとって迷惑ではなかろう」と彼は、私の表情に、彼の提案に対するはっきりとした喜びを読み取れなかったので、続けた、「スイス人の護衛兵と腕を組んで歩んで行くことは。貴殿の崇拜するコリニーは諸党派が仲良くすることを望んでいるから、自分の書記

と護衛兵との友情に、彼の心臓は心底笑うことだろう」。

「誰に聞いたのだ、…」と私はびっくりして彼を遮った。

「貴殿が提督の書記になったということか」とボカールは笑った、「親愛なる友よ、宮廷では、適切以上にお喋りがなされる。今朝ボール遊びのとき、ユグノーの廷臣の間で、提督の許で重用されることになったあるドイツ人のことが話された。人柄について若干の疑念の表明から、私は自分の友シャーダウのことに違いないと分かった。前回、稲光、雷鳴で、三本の百合亭へ貴殿が引き返したのは、ただ結構なことだったのだ。さもないと我々は他人同様だったろうからな。貴殿がルーブルの同郷人を自発的に訪問することはあり得ないだろうしな。大尉のプフィーファーを貴殿にすぐ紹介することにしよう」。

これは断った。プフィーファーは傑出した兵士としてばかりでなく、熱狂的なカトリック教徒としても有名であったからである。しかしボカールと一緒にルーブル宮の内部を見物することに同意した。今まで、大いに称賛されている建物の外観のみを見ていたからである。

我々は互いに並んで通りを歩いて行った。活力あるこのフライブルク人の好意的お喋りは私には歓迎であった。重苦しい内省から解放されたからである。

やがて我々はフランス国王の宮殿に足を踏み入れた。この宮殿は当時、その半分は陰気な中世からの要塞であり、他の半分が新しい豪華な宮殿であって、この宮殿はメディチ家の夫人[アンリ二世王妃、カトリーヌ・ド・メディシス,1519-1589]の指示で建てられたものであった。二つの時代のこの混淆は、私がパリに入って以来、私の念頭から消えたことのない印象、つまり揺れていて、不似合いなもの、つまり矛盾して互いに戦い合う諸要素という印象を更に強めた。

我々が多くの通路や、一連の各部屋を歩き回った後、大胆な石造建築や、しばしば放胆な絵画におけるそれらの飾りは、私のプロテスタント的趣味にとって馴染めないもので、時に苛立たしいものであったが、ボカールは心から興じていて、ある小部屋をこう言いながら開けた、「ここは国王の書斎だ」。 —

そこはものすごく雑然としていた。床にはノートやめくられた諸本が散らばっていた。壁には武器が掛かっていた。高価な大理石のテーブルにはヴァルトホルン[獵笛]があった。

私はドアからこの混沌を一瞥して楽しみ、更に歩きながらボカールに国王は音楽好きなのか尋ねた。

「彼は胸から思い切り吹奏する」とボカールは答えた、「しばしば午前中ずっとで、更にひどいことに、一晩中のことがある。ここの隣室にいない場合で」と彼は別のドアを示した、「この金敷の前に立って、火花が出るほど鍛冶をしていない場合のことだ。国王は若いシャトーギュイヨンと或る賭けをしたことがある。二人のうちどちらが最初に、足を口にくわえて、部屋をあちこち跳ねて行けるかという賭けだ。それで今や国王は法外にやる気になっている」。 —

ボカールは私が悲しげになっているのを見、それにフランスの戴冠の頭目についての会話を打ち切るのが、彼にもやはり適切に思えたので、自分と一緒に昼食をさほど離れていない料亭で摂ることを私に提案した。彼はその料亭を全く立派なものと呼べた。

近道をするために我々は狭く長い路地に入った。二人の男達が路地の別の端から我々に向かって歩いて来た。

「見ろよ」と私にボカールが言った、「向こうから来るのは、ギーシュ伯爵で、悪評高い女たらし、宮廷の最大の乱暴者だ。そしてその隣りに　―　まことか　―　リニュロルがいる。白昼何故堂々と現れているのか。彼は首に紛れもなく死刑判決を受けているのだ」。

私は見やって、より高貴な者と評された男は、昨晚松明の明かりの中、厚かましい身振りで、ガスパルデを侮辱した破廉恥漢と確認した。彼も次第に歩み寄りながら、私のことを思い出した風に見えた。というのは彼の目は私にひたと据えられたままであったからである。我々は狭い路地の半分の幅を占有していて、残りの半分の幅を我々に向かって来る者どものために空けていた。ボカールはリニュロルは壁の側を歩いていたので、伯爵と私が難しくすれ違わざるを得なかった。

突然私は一つの突きを受けて、伯爵の言葉を耳にした。「退けよ、ユグノーの屑」。

私は激して彼の方は向き直った。すると彼は高笑いして返した。「路地でも窓辺同様に広く場所を取りたいのか」。

私は彼を追いかけようとした。するとボカールが私を抑えて、私に懇願した。「今は我慢するのだ。今の時代、瞬時にパリの賤民どもは我々の背後にやって来る。奴等は君の堅い襟カラーからユグノーと分かることだろう。君に勝ち目はない。君が仕返しをしなければならぬのは、自明のことだ。この件は私に任せてくれ。高貴な紳士が名誉ある決闘を了解してくれたら、嬉しいことだ。しかしスイス人の名前に汚点で付いてはならない。たとえ、君の命と共に自分の命をも賭けなくてはならなくなってもな。

ギーシュと知り合いなのか、天地神明にかけて話してくれ。彼を立腹させたことがあるのか。ないのか。考えられない話だ。あの屑野郎は不機嫌で、君のユグノーの服を見て気分の発散をしようとしたのか」。

その間に我々は料亭に入って、そこで速やかに、気分を害したまま食事を摂った。

「私は頭を整理しなければならない」とボカールは言った、「伯爵に対してゴタゴタした交渉をすることになるからな」。

我々は別れて、私は私の宿へ戻った。宿でボカールを待っていることを、彼に約束していた。二時間経過して彼が私の部屋に入って来て、叫んだ、「上手く行った。伯爵は君と手合わせを希望している。明日、明け方、サン・ミシエルの門の前だ。彼は私を丁重に迎えた。私が、君は良家の出身だと告げると言った。今は君の系統樹[家系図]を調べる時間はない。自分が知りたいのは、君の剣さばきだ、と。

それで君の剣の心得はどんなだ」とボカールは続けた。

「君はきちんとした剣術家であることは確信している。しかし、案ずるに、君は悠長だ、殊に迅速な悪魔野郎に対して悠長ではないのか」。

ボカールの顔は心配そうな表情になった。そして数回の手合わせを望んだ後、　―　私の宿の隣の平らな大地にフェンシング広間があった、　―　彼はフェンシングの一本を手にとって、言った。「君の技を見せてくれ」。

私が通常のテンポで数回戦った練習の後、その間ボカールは「もっと速く、もっと速く」と私に急ぎ立てて空しかったのであるが、彼は剣を放り投げて、窓辺に寄り、私から涙を隠そうとした。私はすでにその涙が湧き出て来る様を見ていた。

私は彼に近寄って、彼の肩に私の手を置いた。

「ボカール」と私は言った、「悲しむことはない。万事前もって定まっている。私の死

の 때가、明日と定まっているのであれば、伯爵の剣が私の生命の糸を断ち切る必要はない。そうでないのであれば、彼の危険な武器が私に害を及ぼすことはないであろう」。 —

「私を苛立たせないでくれ」と彼は答えて、素早く私の方へ振り向いて言った、「我々に残されている猶予期間の刻々が貴重だ。それを利用しなければならない。 — フェンシングのためではなく、というのは理論上、君は処罰されないのであり、それに君の遅鈍さは」とここで彼は嘆息した、「治せない。君を救う手段はただ一つしかない。我らのアインジーデルンの聖母を信ずることだ。自分はプロテスタントだと私に反論するな。 —

一度[プロテスタントであっても]は、数のうちに入らない。背教者の一人が自分の生命を聖母の両手に委ねたら、聖母には倍の喜びとなるに違いない。今から、自分の救出のために、何回もアヴェ・マリアと称えることだ。恵み深い聖母は君を見棄てはしないという私の言葉を信じ給え。親愛なる友よ、負けるな。私の助言に従え」。 —

「私のことは構うな、ボカール」と私は彼の奇妙な要求にむっとしながらも、それでも彼の愛情に感動して答えた。

しかし彼はなおしばらく、私に迫って、空しかった。それから我々は明日のために必要なことを整理して、そして彼は別れた。

ドアの所で、彼は今一度振り返って言った、「シャーダウよ、就寝する前に、ただ一回真心の溜め息だ」。

第六章

翌朝私は速やかに接触されて眠りから起こされた。ボカールが私の臥所の前に立っていた。

「起きろ」と彼は叫んだ、「急ぐのだ。遅刻しては恥だ。昨日君に言うのを忘れていたが、伯爵の介添役は — リニュロルだ。君には一人の悪魔以上のことだろう。しかし利点もある、彼に君が、 —」、と彼は嘆息した、 — 「君の敵に重大な傷を負わせたとき、この名誉ある介添人はきっと口をつぐむことだろう。世間の耳目を絶対自分に引き寄せたくない千もの立派な理由があるのだから」。 —

私は着衣しながら、この友は一つの依頼を心に抱いていて、かろうじて抑制しているのであることに気付いた。

私は、まだベルンにいたときに準備した、スイス風に両側に粗野なポケットの付いている旅行用胴着を着用して、つば広のフェルト帽を額に押し込んだが、そのとき、ボカールが突然私を、大層動揺した様で抱擁し、私に接吻した後、彼の巻き毛髪のを私の胸に押し付けた。この大げさな共感には男らしくなく思え、私はその香りのする頭を両手で宥めながら押し退けた。ボカールはこの瞬間私の胴着に何かを入れようとしているように思われた。しかしそれ以上気に留めなかった。時間が迫っていたからである。

我々は黙って、静寂な朝の路地を進んだ。微かに雨が降り始める中、丁度開いたばかりの門の中に入って行き、門から少し離れた所に、崩れた壁で囲まれた庭園を見つけた。この人気のない場所が立ち会いの場選ばれていた。

我々は入って、ギーシュがリニュロルと一緒にいるのを見つけた。二人は我々を待って、中央通路のブナの生垣の間を歩き来していた。伯爵は嘲笑的丁重さで私を迎えた。ボカール

ルとリニュロルが歩み寄って、決闘の場と武器を定めた。

「涼しい朝だ」と伯爵は言った、「貴殿が良ければ、胴着姿で戦おう」。 —

「殿方は鎧を身に着けてはいないのだろう」とリニュエロは発して、私の胸を触ろうとする仕草をした。

ギーシュはそれを止める視線を一つ彼に送って示した。

二本の長いフェンシングの剣が我々に差し出された。決闘が始まった。そして私はすぐに気付いた。自分が相手にしているのは、素早さにおいて私に勝っていて、それでいて全くの冷血漢である、と。彼は私の力をフェンシング道場でのように、若干の戯れの突きで試した後、そのぞんざいな仕草を止めた。致命的に真剣になった。彼はカルト[第四の構え]を示し、セコンド[第二の構え]で、テンポを速めて突いてきた。私のパラード[防御]はかろうじて間に合った。彼は同じこの突きを少しだけ速めて繰り返した。それで私は負けた。私は彼が満足して微笑するのを見て、自分の最後を覚悟した。

稲妻の速さで突きがなされた。しかししなやかな鋼の剣は高く弓状になった。あたかも堅いものに当たったかのようで、私は突きを払い、追い打ちをかけ、伯爵の胸を剣で突き刺した。伯爵は、勝ちを確信して、広くファント[踏みだし突き]の姿勢を取っていた。彼は色を失い、灰色になって、武器を落とし、崩れ落ちた。

リニュロルはこの瀕死の者を覗き込んだ。その間、ボカールが私をそこから連れ去った。

我々は市壁の周りを急ぎ足で次の市門まで向かった。そこでボカールは私と一緒に、彼に馴染みの小さな居酒屋に入った。我々は廊下を抜け、この家の裏の密に生い茂った園亭に腰を下ろした。まだ湿った早朝、万事死滅したかのようであった。友はワインを注文した。しばらくして寝ぼけ顔の居酒屋のメイドがワインを持って来た。彼は快適な飲みっぷりですすっていた。私は杯に触れずに、眼前に置いていた。私は胸の前で両腕を組んで、頭を垂らした。死者が私の心に浮かんだ。

ボカールは私に飲むように誘って、私が彼の機嫌を損ねないように杯を飲み干すと、彼は始めた。

「我らのアインジーデルンの聖母についての見解を変える人が現れないかな」。

「放っておいてくれ」と私は無愛想に言った、「私が一人の人間を殺害したとと聖母と何の関係があるう」。

「君の思案以上にある」とボカールは非難一杯の視線で答えた。「君がここで私の側に座っているのは、ただ聖母のお蔭だ。聖母に一本の太い蠟燭の借りがあるぞ」。 —

私は両肩をすくめた。

「信仰が足りない」と彼は叫んで、私の左の胸ポケットに手を伸ばして、勝ち誇って、メダルを取りだした。それは彼がいつも首に掛けているもので、今朝、激しく抱擁しながら、こっそり私の胴着に押し込んだに違いないものであった。

今や私の目から包帯が取れた。

この銀の硬貨が、私の心臓を突き刺すはずの突きを撥ね返したのであった。私の最初の感情は怒りの羞恥であった。あたかも不正な芝居をして、決闘の掟に反して、自分の胸を守ったかのようであった。それに、自分の生命は、一つの偶像のお蔭であるという憤懣が混じっていた。

「邪悪な迷信のお蔭に、自分の救出を頼まなければならないのであれば」と私はつぶや

いた、「むしろ死んでいる方がまだ」。

しかし次第に私の考えは明るくなった。ガスパルデが私の心の中に浮かんだ。そして彼女と一緒に人生のすべての豊かさが浮かんだ。私は新たに贈られた陽光に感謝した。そして私はまたボカールの喜ばしげな目を見たとき、彼と喧嘩する気はなくなった。とても喧嘩したかったのであるが。彼の迷信は非難すべきものであるが、しかし彼の友への忠誠心が私の命を救ったのであった。

私は衷心から彼に別れの挨拶をして、彼より先に市門を急いで抜けて、町を横切って、提督の家へ向かった。彼はこの時間に私を待っていた。

私は午前、この書き物机で過ごした。今回は勘定の検分を依頼された。フランドルへ送られたユグノー達の義勇兵団の武装に関係するものであった。提督が自由な時間の折、私の許へ近寄って来たとき、私は敢えて依頼した。私をフランドルへ送って、そこでの侵攻に参加させ、その侵攻の経過について、提督に迅速で信頼できる報告をなすことができるようにしてほしい、と。

「駄目だ、シャーダウ」と彼は頭を振って答えた。「私は貴殿を海賊として処理され、絞首台で死ぬような危険な目に遭わせることはできない。貴殿が戦争布告の後、私の側で戦死する場合とそれは若干異なる。私は貴殿の父親に借りがあって、貴殿を名誉ある戦死以外の危険にさらすことはできない」。――

正午頃であったろうか、控えの間が顕著に一杯になって、次第に興奮した会話が聞こえるようになった。

提督は義理の息子テリニーを呼び寄せた。テリニーが彼に報告した。ギーシュ伯爵が今朝決闘で倒れました。彼の介添人、悪評高いリニュルがサン・ミシエル門前のその死体を伯爵の従者達に引き取らせて、そして従者達に、彼が逃げる前、ただこう述べるしかなかったのです、従者達の主人は、自分には未知の、或るユグノーの手にかかって倒れたのだ、と。

コリニーは眉を顰めて、激した、「私が厳しく禁じていたろう。――私は脅し、懇願し、頼まなかったか、我らの郎党の誰一人この厄災の多い時代、諍いを始めたり、引き受けてはならない、流血での決着に至る恐れがあるから、と。決闘自体がすでにキリスト教徒ならば、やむを得ない理由がない限り、自分の良心に負ってはならない一つの行為なのだから、決闘は、火薬に火花が飛んだら、我々皆がお陀仏になりかねない今日、我らの信仰の同胞と祖国に対する犯罪に他ならないものだ」。――

私は自分の勘定から顔を上げなかった。そして仕事が終わったとき、喜んだ。それから私は自分の宿へ行って、私の荷物を仕立屋ジルベールの家へ運ばせた。

臆病そうな小顔の病気がちな男が、私を大層丁寧に私用に決められていた部屋へ案内した。その部屋は大きく、風通しが良く、この家の最上階となっていて、町を一望できた。屋根屋根の一つの海となっていて、その海から塔の先端が雲の天の中に聳えていた。

「ここなら貴殿は安心です」とジルベールは上品な声で言った。それで私は微笑を浮かべることになった。

「嬉しいことだ」と私は答えた。「信仰を同じくする方の許に宿泊できて」。

「信仰を同じくすると」と仕立屋は囁いた、「そんなに大きな声で話さないでください、大尉殿。私が新教徒であることは、本当のことです。――仕方ないときには、――私

も救世主のために死ぬつもりです。しかしグレーヴ広場でデュブール[1559年Anne Dubourgはユグノー迫害反対を述べて、処刑された]がそうされたように、火刑に遭うこと、―― 私は当時少年として見ましたが、―― いや、それには怖気がします」。――

「心配いらぬよ」と私は落ち着かせた、「それらの時代は過ぎ去った。和平の勅令が我々皆に自由な宗教の営みを保証している」。

「それが変わらずにいて欲しいものです」と仕立屋は溜め息を吐いた。「しかし貴殿は我々のパリの賤民のことをご存じない。これは野蛮で、嫉妬深い民で、我々ユグノーは別して彼らの怒りを買っています。我々は謙虚に、有能に、合法的に暮らしているものだから、我々は上層民として彼らとは違ふと主張していると、彼らは非難しています。しかし、いやはや、十戒を守りながら、彼らより優秀でないように、どうしたらできましょう」。

私の新たな家主は私から離れた。黄昏になり始めると、私は向こうの参事官の住まいへ向かった。彼は極めて悄然としていた。

「我々の件に関して、邪悪な運命が支配している」と彼は始めた。「シャーダウよ、すでに聞いているか。高貴な廷臣、ギーシュ伯爵が今朝、決闘で一人のユグノーによって刺し殺された。パリ中がそれで持ちきりだ。思うにパニガローラ神父はこの機会を逃さずに、我々皆を、殺人者どもの同志と指摘して、自分の有徳なパトロンを、―― というのはギーシュは熱心な教会参詣人であったから、―― その雄弁な夕べの説教の折、カトリック信仰の殉教者として披露することだろう。...頭が痛い。シャーダウ、私は休むことにしたい。ガスパルデに夕べの飲み物を供して貰うがいい」。

ガスパルデはこの会話の間、この老紳士の椅子の側に立っていて、その椅子の背を思いに耽って支えとしていた。彼女は今日とても青白く、その大きな青い目は深刻に真面目に見えた。

我々は二人っきりになると、数瞬間黙して向かい合って立っていた。このとき、私の中で、悪しき嫌疑が生じて、彼女は自ら自分を守って欲しいと私に要請したのであったが、今やこの殺害者に慄然として後ずさるのではないかと案じた。ガスパルデに知らせたら、彼女のカルヴァン主義的感情をひどく傷付けかねない、私を救助することになった奇妙な[聖母のメダル]状況は、男性的概念では重荷とならない軽い殺人罪よりももっと私の良心を混乱させた。ガスパルデは私の心が重苦しくなっていることを私から感じ取って、その理由をただ伯爵を殺害したことと、そのことから我々の党派に生ずる不利益のせいにしていった。

しばらくして彼女は声を押し殺して言った、「それではあなたが伯爵を殺めたのですか」。

「私です」と私は答えた。

再び彼女は黙した。それから彼女は突然決心して、私に歩み寄って、私を両腕で抱き締めて、私の口に熱く接吻した。

「あなたがどんな犯罪を犯したとしても」と彼女は固く言った、「私はあなたとの共犯者です。私のためにあなたはそのことを実行しました。あなたを罪に落としたのは私です。あなたは私のために命を賭けました。あなたにそのことを報いたく思います。でもどうしたらいいのか」。――

私は彼女の両手を握って、叫んだ、「ガスパルデ、私を、今日と同じく、明日も、これからもずっと、そなたの守護者とならせて欲しい。私と共に、危険と救助、罪と救いを分

かち合おう。死ぬまで一体となって、離れることのないようにしよう」。

「一体となって離れません」と彼女は言った。

第七章

私がギーシュを殺害して、ガスパルデの愛を獲得したあの厄災に満ちた日から、一月が過ぎた。毎日私は提督の小部屋で筆記した。提督は私の仕事に満足しているように見え、私をますます信頼して処遇した。私はガスパルデに対する私の親密な関係を提督も承知していると感じていたが、しかし彼はそのことに一言も触れようとしなかった。

この期間にパリの新教徒の状況は顕著に悪化した。フランドルへの侵攻は失敗に終わって、その反動が宮廷や世論の中で感じ取られた。ナバラ国王[後のアンリ四世]の、シャルル[フランス国王]の魅力的であるが、しかし軽率な妹[Marguerite de Valois,1553-1615]との結婚は、両党派の溝の架け橋となる代わりに、その溝を拡大した。その直前に、ジャンヌ・ダルブレ[1528-1572年6月9日]が、その人柄故にユグノー達が大いに慕っていたナバラ国王の母堂であるが、突然亡くなった。毒を盛られたとの噂であった。

結婚式の当日[1572年8月18日]、提督はそのミサには参列せず、ノートルダム広場を規則的歩幅で行き来しながら一言こう発した。これは普段は慎重な彼が発したもので、彼に対して激しい敵意が抱かれて利用された言葉であった。「ノートルダムには」と彼は言った、「内戦のとき[1569年のユグノー戦争]我々から奪われた旗が飾られている。これは退けられる必要がある。その代わりにもっと栄誉ある戦争記念品だ」。彼はスペインの旗のことを考えていた。しかしその言葉は間違っって解された。

コリニーはある件のことで私をオルレアンへ送った。ドイツ人騎兵隊がそこにはいた。私がそこから戻って来て、私の住まいに入ると、ジルベールがうろたえた表情で私を迎えた。

「大尉殿、すでにご存じですか」と彼は嘆いた。「提督は昨日だまし討ちで負傷したのです。ルーブル宮から自分の屋敷へ戻って来たときのことです。致命傷ではないと言われています。しかしその高齢と、提督にのしかかっている悩み多い心配事を考えますと、どのような結末になるか誰にも分かりません。彼が亡くなれば、我々はどうなりましょう」。

—

私は急いで提督の住まいへ向かった。私はそこで断られた。門番が私に言った。家に高貴な客人があります。国王と皇太后です。これを聞いて私は安心した。私は無邪気にこう結論づけたのであった。カトリーヌ[ド・メディシス、皇太后]は、この蛮行に関与していない、自ら犠牲者を訪問しているのだから、と。しかし国王は、と門番は請け合った、自分の父親代わりの友人の命に対するこの悪辣な攻撃に憤然とされています、と。

それから私は議会参事官の住まいへ歩いて行った。参事官は珍しい人物と活発な会話をしていた。中年の一人の男で、その活発な身振りで南フランス人と分かったが、サン・ミシェル首飾勲章を付けていた。これほど賢そうな目を見たことがなかった。この目は精神で輝いていて、目と口の周りの無数の皺や線は、悪戯っぽい鋭利な思索の落ち着いたかない戯れで動いていた。

「シャーダウ、貴殿が来てくれて、嬉しい」と参事官は私を迎えた。一方私は思わず、

ガスバルデの無邪気な顔と、その顔には単に、単純で力強い魂の純粋さが映し出されていたが、客人の世故に長けた表情とを比べていた。「貴殿が来てくれて、嬉しい。モンテーニュ殿[1533-1592]は私を強引に自分のペリゴール宮殿に拉致するつもりだ」。...

「そこで一緒にホラティウスを読みましょう」とこの余所者は口を挿んだ。「以前エクス湯治場で行った具合に。そこで参事官殿と面識の栄を得たわけです」。

「それでは、モンテーニュ」と参事官は続けた、「子供達を放っておけばいいのか。ガスバルデは自分の名親から、この若者のベルン人はガスバルデから別れようとしないのでから」。

「いや、何」とモンテーニュ氏は私に対してお辞儀しながら嘲った、「子供達は、徳操を強化するために、トビアの書[トビト記]を読めばよろしい」。そして彼は私の真面目な顔を見て、調子を変えて言った、「要するに」と彼は結んだ、「貴殿が私と一緒に来れば、嬉しい、親愛なる参事官」。 —

「我々ユグノーに対して何か陰謀が起きつつあるのですか」と私は注意深くなって尋ねた。

「陰謀か」とガスコーニュ人は繰り返した、「私に予感がなければな。雷雨が勃発する前のように、雲を寄せ集めるような陰謀がなければな。国民の五分の四が、残りの五分の一によって、望んでいないようなこと、 — つまりフランドルの戦役だが、 — そんなことを強制されたら、 — これでは早速大気が帯電しよう。お若い方、悪く受け取らないでください。貴方らユグノーは、処世訓の第一原理に反しています。つまり、共に住んでいる民衆に対して、その民衆の習俗を軽視して、その民衆を侮辱してはならないということですよ」。

「貴方は宗教を或る民族の習俗とお考えですか」と私は憤慨して尋ねた。

「或る意味ではそうです」と彼は述べた、「しかし今回私は単に日々の生活の慣習のみを考えています。貴方らユグノーの服装は陰気です。真面目な表情を浮かべていて、冗談を解さず、貴方らの襟カラー同様に強張っています。要するに貴方らは唯我独尊です。そしてこのことはごく小さな村でも、大都会でも処罰されることです。ギーズ家が人生をもっと良く理解しています。たった今私はアンリ[Heinrich von Guise,1550-1588]公爵が宮殿の前で降りて、周りにいる市民と握手する姿を見ました。フランス人のように陽気で、ドイツ人のように情愛深い。それが正しいことです。私どもは皆、女から生まれており、石鹼にしても高くないものです」。

このガスコーニュ人は、この冗談めいた調子の下、重大な心配事を隠しているように見えた。私が彼に更に話しかけようとしていたとき、老従者が、提督からの使者が来ていて、私とガスバルデを至急彼の許に呼び寄せていると知らせた。

ガスバルデは厚いショールを掛けて、我々は急いだ。

途中彼女は私に、私が不在の折、辛抱した事柄を語った。「あなたの代わりに、弾霰の中を騎行する方が、それと比べたら遊びのようなものと言えましょう」と彼女は請け合った、「この通りの平民達はとても意地悪になっていて、私が家を出ると、嘲罵の言葉に追いかけられました。私が自分の身分に従って服を着用していると、『あの高慢な娘を見ろ』と私は背中に浴びせられました。私が簡素な服を着ていると、『あの偽善者の娘を見ろ』と言われました。 — 一日とか一週間なら、このようなことは我慢できましょう。

しかしいつ終わるとも知れません。　一　ここパリでの私どもの状況は、かのイタリア人の状況を思い出させます。敵によって、四枚の小さな窓のある牢獄に投げ入れられたイタリア人です。この人が翌朝目覚めると、窓はただ三枚になっていて、その次の日は二枚、三日目にはなお一枚になっていて、要するに、その地獄の敵によって、或る機械、次第に圧殺する棺となる機械に閉じ込められていると、この人は悟ったのです」。

こう話しながら我々は提督の住まいに達した。提督は早速我々を呼び寄せた。

彼は自分の臥所に垂直に座っていて、傷付いた左腕は吊包帯の中で、青ざめて、疲労していた。彼の横に灰色髭の一人の聖職者が立っていた。彼は我々に話しをさせなかった。

「私の時は定まっている」と彼は語った、「私の言うことをよく聞きなさい。ガスパルデ、そなたは私の誠実な弟の血を受け継いでいる。今は、そなたが承知していて、この方に隠しておいてはならないことを明らかにする時ではない。そなたの母親は一人のフランス人によって不正を蒙った。私はそなたまで我々の民の罪を償う目に遭わせたくない。我々は我々の父祖の負った借りを返すつもりだ。しかしそなたは、私の一存としては、ドイツ人の土地で、敬虔で静かな生活を送って欲しいと願っている」。

それから私の方を向いて、彼は続けた。「シャーダウ、貴殿は私の許で士官の道の上が行けないだろう。この前途は暗い。私の生涯は暮れようとし、私が死ねば内戦となろう。これに巻き込まれてはならない。貴殿にこれを禁ずる。ガスパルデに手を渡しなさい。私は貴殿に彼女を妻として預けよう。彼女を遅滞なく故郷へ連れて行きなさい。私の訃報を聞いたら、この不幸なフランスを後にすることだ。彼女にスイスの地で休める所を用意して、それからオラニエンの皇子の許で軍務に就き、善行のために戦うことだ」。

それから彼は老人に合図して、我々を結婚させるよう彼に要請した。

「手短かに頼む」と彼は囁いた、「私は疲れていて、休息を要する」。

我々二人は彼の臥所で跪いた。聖職者がその職務を執行した。我々の手が合わされ、記憶からの典礼の言葉が語られた。

それから提督が彼の同様に傷を受けた右手で祝福した。

「達者でな」と彼は結んだ、横になって、その顔を壁の方に向けた。

躊躇いながらその部屋を去るとき、我々はなお静かに微睡みに就いた提督の様な呼吸の音を耳にしていた。

我々は黙して、不思議な気分で戻り、シャティヨンがまだモンテーニュ氏と活発な会話をしているのに出会った。

「ゲームに勝った」とモンテーニュ氏が歓声を上げた、「パパは同意された。私自身が彼のトランクの用意をして詰めよう。それは手慣れたものなのだ」。　一

「叔父さん、出発して」とガスパルデは諭した、「私のことは心配いりません。これは今からは私の夫がすることです」。そして彼女は私の手を自分の胸に押し付けた。私も参事官に、モンテーニュと一緒に旅するよう迫った。

すると突然、我々皆が彼を説得して、彼に納得して貰ったと思っていたとき、彼が尋ねた。「提督はパリを去ったのか」。そしてコリニーは留まる、郎党が強く頼んでも、たとえ彼の状態が旅立ちを許すようになっても、留まるであろうと聞くと、シャティヨンは目を輝かせて、彼の許では聞いたことのないようなはっきりした声で叫んだ。

「では私も残るぞ。私は人生でしばしば臆病、利己的であった。私は然るべく、私の信

仰の同志に味方をしなかった。この最期の時に、私は同志の許を去りたくない」。

モンテーニュは唇を嚙んだ。我々皆の説得はもはや何の甲斐もなく、老公は決意を変えなかった。

今やガスコーニュ人[モンテーニュ]は彼の肩を叩いて、嘲りの色合いを帯びて言った。

「古参の少年よ、君は錯覚しているぞ。英雄的度胸でそのように行動していると思っていたらな。君は快適さ故にそうしているのだ。余りに怠け者になっていて、自分の快適なねぐらを変えられないのだ。嵐が明日にもそのねぐらを吹き飛ばしかねない危険を眼前に置いてさえもな。これも一つの見解ではあって、君の流儀では正しかろう」。 —

今や彼の顔の嘲笑的表情は、深く痛々しい表情に変わった。彼はシャティヨンを抱擁して、彼を接吻して急いで別れた。

奇妙に動揺していた参事官は、一人になることを望んだ。

「シャードウ、私を一人にしてくれ」と彼は言って、私と握手した。「そして今晚もう一度就寝前来てくれ」。

ガスパルデは私に同伴して来て、ドアの所で突然、まだ私のベルトに射込まれていた旅行用ピストルを取り上げた。

「放しなさい」と私は警告した、「しっかり装填したままだ」。

「嫌です」と頭をのけぞらせながら、彼女は笑った、「あなたが今晚遅れずにやって来るよう担保として持っています」。

第八章

私の部屋に、叔父からの手紙が通常の書式で届いていた。馴染みの古風な筆跡で上書きされていた。封の赤い印字は「巡礼者兼旅行者」の標語で、今回は法外に大きくなっていた。

その書状をまだ開封しないまま手に持っていたとき、ボカールがノックもしないで駆け込んで来た。

「シャードウ、約束を忘れたのか」と彼は私に叫びかけた。

「何の約束だい」と私は気分を害して尋ねた。

「結構だね」とわざとらしい短い高笑いと共に彼は答えた、「そんな調子だと、次に君は自分の名前を忘れてしまうぞ。君がオルレアンに旅立つ以前の晩に、ムーア人亭の居酒屋で、君は厳かに誓ったぞ。君がとうの昔に約束していたことを果たし、我らの同郷人、プフィーファー大尉に一度ご挨拶をすとな。それで私は、彼に頼まれて、ルーブル宮での彼の命名日に君を招待したのだ。

今日はバルテルミの日[1572年8月24日、しかし23日の深夜以降]だろう。大尉は確かに名前を沢山有するが、多分八つか十、しかしこれらすべての中で虐待されたバルテルは彼の目には最大の聖者にして殉教者に映っているから、立派なキリスト教徒としてこの日を格別な流儀で祝っているのだ。君が来なかったら、それはユグノー的頑固さのせいと彼は見なすことだろう」。 —

勿論私は、ボカールからしばしばこのような招待の嵐を受けていて、毎週毎週彼を宥めていたことを思い出した。私が今日のことを約束したか、記憶になかったが、しかしあり

得ることであった。

「ボカール」と私は言った、「今日、私は都合が悪い。プフィーファーには詫びてくれ。そして私を家に残してくれ。」

しかし彼は世にも奇妙な具合に私に迫って来て、冗談言って、子供っぽい阿呆なことを述べたかと思うと、切に懇願し、嘆願した。最後に彼は激した。

「何だと、君はそんな具合に約束を守るのか。」　　私はひょっとしたらやはり約束をしていないのではないか、曖昧なのであったが、この非難を受けたままにしておくことはできず、とうとうはなはだ不本意であったが、彼と同行することを承知した。私は彼が一時間したら私を解放すると約束するまで粘って、そして一緒にルーブル宮に向かった。

パリは平静であった。ただ市民達の幾つかのグループに会うのみであった。彼らは提督の状態について囁きながら論じ合っていた。

プフィーファーはルーブルの大きな宮殿の一階に一部屋有していた。彼の窓の照明がわずかしかなく、陽気な祝典騒ぎの代わりに死んだように静まり返っていて、私は驚いた。我々が部屋に入ると、大尉は一人っきりで部屋の中央に立っていた。頭から足先まで武装していて、注意深く呼んでいるように、いや筆記しているように見える或る急報に没頭していた。というのは左手の人差し指でその行を追っていたからである。彼は私を見ると、私に歩み寄り、不躰に私にがみがみ言った。

「貴殿の剣を、お若い方。貴殿は私の囚人だ。」　　同時に影の中に立っていた二人のスイス人護衛兵が近寄って来た。私は一步退いた。

「大尉殿、誰から私に対するそのような権限を得ているのですか」と私は叫び声を出した、「私は提督の書記です」。

私に一つの返事も恵まらずに、彼は自らの手で私の剣を取って、それを没収した。驚きで私は我を忘れていて、何の抵抗も思い付かなかった。

「義務を遂行するのだ」とプフィーファーは命じた。両スイス人護衛兵は私を真ん中に挟んで、私は抗わずに、ボカールに憤慨した非難の一瞥を浴びせて、二人に従った。プフィーファーは、ギーシュとの決闘の科で、私を逮捕するよう国王の命令を受けたものであろうとしか私には思い浮かばなかった。

驚いたことに、私はほんの数歩先の、私には馴染みのボカールの小部屋へ連行された。一人のスイス人が一本の鍵を取り出して、開けようとした。しかし駄目であった。慌てて、間違った鍵が渡されたように見え、彼は同僚を送り返し、プフィーファーの許に残っていたボカールから正しい鍵を取り寄せさせた。

この短い待機の間、私は大尉の荒い、叱責の声に聞き耳を立てた。「貴殿の生意気な野郎のお蔭で、私の地位がやばいぞ。今日の悪魔の夜に、我々を尋問する者はあるまい。しかし明日この異端をルーブル宮からどのようにして追い出すのだ。私が一人のユグノーの命を救うとしても、聖人達よ、許し給え。」　　しかし一人の同郷人、かつベルンの市民、これをこれらの呪われたフランス人どもの餌食にはできん。」　　この点ではまた貴殿も正しい、ボカール、...」。

この時ドアが開いた。私は暗い部屋に立っていた。私の背後で鍵が回され、重たい門が差し込まれた。

私は、何度かの訪問で馴染みのこの小部屋を、あちこち悩みながら歩いた。一方鉄格子

の付いた高い位置の窓が次第に明るくなった。月が昇ったからである。私の逮捕の理由で唯一蓋然性の高いものは、この件を思いのままに検討してみても、相変わらず決闘しか残らなかった。勿論プフィーファーの怒りっぽい最後の言葉は不可解であった。しかしこの言葉は聞き間違いかもしれない。あるいは勇敢な大尉は少し酔っていたのかもしれない。更に理解しがたく、いや、怒髪天を衝くのは、ボカールの振る舞いに思えた。彼がこれほど恥辱的裏切りをするとは、思いも寄らぬことではないか。

長くこの件を考えていると、一層心乱れる懷疑と解きたい矛盾の中に私は陥った。

本当にユグノー達に対する血なまぐさい計画があるのだろうか。考えられようか。国王が、正気を失って、ある党派の殲滅に同意できるものだろうか。この党派は没落すれば、国王はその野心的なロレーヌ[ロートリングゲン]の従兄弟の無気力な奴隷になってしまうに違いないのである。

それとも提督という人物への新たな攻撃が計画されているのか。そして提督に忠実な従者の一人を彼から遠ざけたいのか。しかし私は自分にとって余りに取るに足りなく思え、まず人々が私のことを考えるとは思えなかった。国王は提督の負傷に激しく怒っていた。一人の人間が、温かい情愛から、鈍い無関心とか野蛮な憎悪に、数時間の間に、狂気にも陥らずに、移行できるものだろうか。

私はこのように自分の頭を酷使している一方、私の心はこう叫んでいた。私の妻が私をこの時間待っていて、分秒を数えている。それなのに自分はここに囚われていて、妻に知らせを送ることもできない、と。

相変わらず私が行き来していると、ルーブル宮の塔の時計が打った。私は十二時の音を数えた。真夜中であった。そのとき、一つの椅子を高い窓辺まで寄せて、壁龕に上がり、窓を開けて、鉄格子に掴まり、外の夜を覗くという考えを思い付いた。窓はセーヌ川に面していた。万事静かであった。すでにまた私は部屋へ飛び降りようとしていたとき、私は視線を今一度上に向けた、そして驚愕で固まった。

私の右手、二階のバルコニー、すぐ間近で、ほとんど私の手が届きそうな所に、月光で昼の明かりのように照らされて、三人の、手すり越しに前傾姿勢の、無言で聞き耳を立てている人影を見つけた。私のすぐ側に、ある表情をした国王がいた。その高貴でないとは言えない面影は、不安と憤怒と狂気で、地獄めいた表情に歪んでいた。この現実ほど、どんな熱病時の夢も怖いものではない。今現在私はどうに過ぎ去ったことを記しているが、この人でなしが私の心の目に浮かんで来る。 — そして私は怖気がする。彼の横には彼の弟が寄りかかっていた。アンジュー公爵で、弛緩した、女のように残忍な顔で、恐怖でがたがた震えていた。二人の後ろに、青白く、身じろぎもせず、皆の中で最も沈着な女性、メディチ家出身のカトリーヌが半ば目を閉ざして、ほぼ無関心な表情で立っていた。

今やこの国王は、良心の不安に苛まれて、発した命令を撤回したいかのような痙攣した身振りを行った。そしてこの瞬間、一発の小銃射撃の音がした。ルーブル宮の中庭でのように思われた。

「ようやくだ」と皇太后がほっとして囁き、三人の夜の人影は女牆から消えた。

近くの鐘が警鐘を打ち鳴らし始め、二番目、三番目の鐘が共に呻った。どぎつい松明の明かりが烈火のように燃え上がり、銃声がだだっ音を立てて、私の緊張した想像力は、瀕死の者の溜め息を聞く思いがした。

提督は殺害されて横たわっている。そのことはもはや疑い得ないことだろう。しかしこれらの早鐘とか、最初は個別に、それからますます頻繁に生ずる射撃、今や遠くから私の澄ました耳に響いて来る絶叫は何を意味しているのか。前代未聞のことが起きているのか。パリのすべてのユグノー達が謀殺されるのか。

それにガスパルデ、提督が私に託したガスパルデは、頼りない老人と一緒にこの恐怖に晒されている。私の髪の毛が逆立った。私の血管の血が凝固した。私はドアを力任せに揺すった。鉄製の錠と重たい樫の木は揺るがない。私は手探りで、それらを壊す武器とか道具を求めた。しかし何も見つからなかった。私はドアを拳で叩き、両足で蹴った。一外の通路は静まり返っていた。

再び私は窓の壁龕に飛び乗って、絶望した者のように、鉄格子を揺すった。しかしそれはびくともしなかった。

私は悪寒に襲われ、私の歯はガチガチ音を立てた。ほとんど狂人のようになって、私はボカールの臥所に身を投げ、致命的不安の中、輾転反側した。ようやく朝白み始めたとき、私は何とも言いようのない覚醒と微睡みの中間状態に陥った。私はまだ鉄格子に掴まって、休みなく流れるセヌ川を覗いていると思っていた。そのとき突然その波の中から、半裸の、月光を浴びた女性が、湧き出る骨壺に収まった一人の川の女神が、フォンテーヌブローの噴水の下に女神達のように出現して、語り始めた。しかしその言葉は私に向けられていず、すぐ私の側で女壻を担っている石像の女神に向けられていた。その女壻には、三人の王族の陰謀家達が立っていたのである。

「姉さん」と川からの女神は尋ねた、「ひょっとして何故人々が殺し合っているのかご存じですか。人々は死体を次々と私の奔流の河床に投げ込んで、私は血でベトベトです。何てことでしょう。ひょっとしたら私が夕方その襤褸を私の川で洗っているのを目にしているその乞食どもが、金持ちの息の根を止めているのかしら」。

「違うわ」と石像の女神は囁いた、「浄福への正解の道について意見が一致しないから、殺し合っているのよ」。一そして彼女の冷たい顔は、途方もない愚かさを笑うかのようになり、嘲笑へと歪んだ。...

この瞬間ドアが軋んで、私は半端な微睡みから飛び起きて、ボカールを眺めた。彼はまだ見たことがないほど青ざめて真剣であった。彼の後には、彼の部下の二人がいて、その一人は一個のパンと一ポットのワインを持っていた。

「後生だ、ボカール」と私は叫んで、彼に突進して行った、「今夜何が起きたのだ、...話してくれ」。

彼は私の手を握って、私と一緒にベッドに腰を下ろそうとした。私は逆らって、彼に話そう頼んだ。

「落ち着くのだ」と彼は言った、「ひどい夜だ。我々スイス人の責任ではない。国王が命じたのだ」。一

「提督は亡くなったのか」と私は、彼を凝視して、尋ねた。

彼は頭を動かして、それを肯定した。

「他のユグノーの指導者達もか」。一

「亡くなった、一、二名の者、ナバラ関係者は別だ、国王の特別の恩赦で免れている」。

一

「虐殺は終わったのか」。 —

「いや、まだパリの通りでは荒れ狂っている。ユグノー達は誰一人生き残れない」。

この時、私の頭の中にガスバルデへの思いが明るい閃光のように煌めき、他のすべては暗闇の中に消えた。

「私を放してくれ」と私は叫んだ、「私の妻、私の哀れな妻がいる」。 —

ボカールは私を、驚いて問うように見つめた、「君の妻か。君は結婚しているのか」。

「どいてくれ、人でなし」と私は叫んで、彼に身を投げた。彼は私の進路を妨げていた。我々は取っ組み合いになって、彼のスイス人護衛兵の一人が彼の加勢をしなかったら、私は彼を負かせたのであるが、それにもう一人がドアを見張っていた。

私は跪くことになった。

「ボカール」と私は叫んだ、「慈悲深い神の御名において、 — 君にとって大事なもののすべてにかけて、 — 君の父の御頭にかけて、 — 君の母の浄福にかけて、 — 私のことを憐れんでくれ。そして私を解放してくれ。いいか、言うておくが、私の妻はこの外にいる、 — 妻はひよっとしたらこの瞬間にも殺害されたかもしれない、 — ひよっとしたらこの瞬間にも虐待されたかもしれないのだ。いや、はや」。 — そして私は拳を固めて、額を打った。

ボカールは病気の者に語るかのように、宥めて答えた。「君は正気を失っている、哀れな友よ。戸外では五歩歩かないうちに、一発の弾にやられてしまうぞ。誰もが君を提督の書記と知っている。分別を持つのだ。君の要求は無理だ」。 —

今や私は跪いて、子供のように嗚咽し始めた。

今一度、私は溺死しつつある者のように半ば気を失って、救いを求めて目を上に上げた。一方ボカールは黙って、取っ組み合いで千切れた絹の紐をまた繋いでいた。それには聖母の肖像の銀貨が深く吊り下がっていた。

「アインジーデルンの聖母の御名において」 — と私は両手を組み合わせて嘆願した。

このときボカールは呪縛されたように立っていて、目を上の方へ向け、何ごとか祈りのようにつぶやいた。それから彼はそのメダルを唇で触れ、丁寧にまた胴着へ押し込んだ。

更に我々二人が黙っていると、そのとき一人の若い騎手が、急報を掲げて、入って来た。

「国王の御名において、大尉の命令です」と彼は言った、「ボカール殿、二人の貴方の部下を連れて、この命令書をバスティーユの司令官に手ずから渡されたし」。 — 騎手は退室した。

するとボカールは、一瞬思案した後、その書状を手にして、私に向かって急いで来た。

「素早くカターニとここで衣服を取り替えるのだ」と彼は囁いた、「私は賭けてみよう。彼女はどこに住んでいる」。 —

「サン・ルイ島」。 —

「分かった。更に一杯飲んで英気を養い給え。君は力が必要だ」。

私は急いで自分の衣服を脱いで、国王の護衛兵のスイス人の服を着て、剣を帯び、斧槍を握った。そして我々は、ボカール、私、二番目のスイス人護衛兵は野外に突進して行った。

第九章

すでにルーブル宮の中庭で私の目に恐ろしい光景が飛び込んで来た。ナバラ国王のお供のユグノー達が、殺されたばかりで、中にはまだ喉をごろごろ鳴らしている者達もいて、うずたかく重なり合っていた。セーヌ川に沿って更に急ぐと、歩むたびに惨劇を目にした。こちらに頭蓋を割られて血まみれの哀れな老人が横たわっているかと思うと、あちらには粗野な槍騎兵の両腕の中でもがいている死人のように青ざめた女性がいた。ある露地は墓場のようにしんとしていたが、別の露地からはなお助けを求める叫び声や瀕死の者の嘆息の不協和音が響いて来た。

しかし私は、この測りがたい規模の悲惨さに無感覚になって、絶望した者のように先へ突進して行き、それでボカールとスイス人は私にほとんど追いつけないほどであった。ようやく橋に達し、それを渡った。私は全速力で参事官の家に駆け込み、目を逸らさず、その高い位置の窓に据えた。その窓の一つに諍う腕が見えた。白い髪の人影が押し出されて来た。不幸な男、それはシャティヨンで、一瞬まだ弱々しい両腕で蛇腹にしがみついていたが、それから手放して、舗石に落下した。この砕かれた男の側を通り過ぎて、私は数回跳躍して階段を上りきり、部屋に突入した。そこは武装した者どもで一杯で、書斎の開けられたドアから野蛮な騒音が響いて来た。私は斧槍で進路を開いて行き、ガスバルデを見つけた、彼女は片隅に押しやられ、貪欲な吠える群れに囲まれ、私のピストルを手を持って、あれこれの男に狙いを定めながら、群れが迫って来ないようにしていた。彼女は蠟人形のように色を失っていて、その大きく見開かれた青い目から恐ろしい炎が放たれていた。

私は前のすべてを床に投げ飛ばしながら、一足飛びに彼女の側へ行った。「有り難い、あなたね」となお彼女は叫んで、それから気を失って、私の両腕の中に沈んだ。

その間にボカールがスイス人と押し分けてやって来た。

「諸君」と彼は脅した、「国王の御名において、諸君の指一本、このレディーに触れてはならぬ。命が惜しい者は引き下がれ。レディーをルーブルに連れて来るよう、命じられているのだ」。 —

彼は私の傍らに歩み出た。私は失神したガスバルデを参事官の肘掛け椅子に休ませた。

すると群れの中から一人のおぞましい人間が、血みどろの両手、血まみれの顔で現れた。それは追放されたりニュロルと分かった。

「嘘、ペテンだ」と彼は叫んだ、「これが、スイス人護衛兵か。 — 変装したユグノー一達だぞ、最悪の奴等だ。ここの此奴、見覚えがあるぞ。ごついごろつき、 — これが敬虔なギーシュ伯爵を殺害した者で、彼奴も側にいた。叩き殺せ。これらの異端のならず者を始末するのは、甲斐ある仕事だ。しかしあの娘には手を出すな、 — あれは私のものだ」。 —

そしてこの獰猛な者が憤然と私にかかって来た。

「悪漢め」とボカールは叫んだ、「おぬしはお陀仏の時だ。突け、シャーダウ」。速やかに彼は巧みなパラード[防御]で不埒な剣を高く押し上げ、私は私の剣を悪漢の腰から胸まで突き刺した。彼は倒れた。

暴徒の群れから騒がしいわめき声が上がった。

「ここから離れろ」と友が私に合図した、「腕に妻を抱いて、私に付いて来い」。

今やボカールとスイス人は出口のドアを塞いでいる群衆に向かって切り込み、突き進んで行き、一つの道を空けて、そこを私は、ガスパルデを担いながら、素早く進んだ。

幸い我々は階段を下まで降りて、通りに出た。ここをひよっとしたら十歩ほど進んだかと思うと、窓から一発の銃声が出た。ボカールがよろめき、覚束ない手でメダルを探り、それを取り出し、青ざめた唇に押し当てて、そして崩れ落ちた。

こめかみを射られていた。一目見て、彼は助からないと私は確信した。次に窓の方を向いて見て、ガスパルデの手から落ちた私の騎兵用ピストルから彼は致命傷を受けたと分かった。そのピストルを今や殺害者は喜んで高々と上げていた。追って来るおぞましい暴徒の群れのため、私は心を痛めながら、この友から別れた。友の許では彼の忠実な兵士が跪いていた。私は近くの角を曲がって、私の住まいのある横町に入った。そしてこっそりとその住まいに入り、ガスパルデと一緒に殺戮された家の中を、上の私の寝室へと急いだ。

二階の通路は、広い血溜まりとなっていて、そこを私は進んだ。仕立屋は殺害されており、彼の妻、彼の四人の子供が、竈の所で死体となって重なっていた。小さなプードルさえも、この家の愛玩犬であるが、彼らの側で息絶えていた。血の臭いが家の中に充満していた。最後の階段を上がって、私は自分の部屋が開いているのを見た。半ば砕けたドアを風が開閉していた。

ここに殺害者どもは、私の臥所が空だと知って、長くは滞在していない。私の寝室の貧弱な外観を見て、獲物はないと知ったのだ。私のわずかな本が床に千切れて散らばっていた。これらの本の一冊に私は、ボカールが不意に訪ねて来たとき、私の叔父の手紙を隠していた。その手紙はこぼれ落ちており、私はそれをまた自分のポケットに収めた。私のささやかな現金は、旅のときから、自分のベルトの所に保持していた。

私はガスパルデを私のベッドに寝かせた。ここでこの青ざめた女性は微睡んでいるように見えた。私は彼女の横に立って、どうすべきか考えた。彼女は小間使いの娘のように目立たぬ服を着ていた。多分養父と一緒に逃げるつもりであったのだろう。私はスイス人護衛兵の服を着ていた。

私はすべてのこうした無残に流された忠実で無垢の血に関し、荒々しい苦痛に見舞われた。「この地獄から去ることだ」。

「そうしましょう。この地獄から去りましょう」とガスパルデが繰り返した。目を開けながら、ベッドで身を起こしつつ、語った。「ここに留まっていたはいけません。どこでも近くの市門から出ましょう」。

「まだ静かにしていなさい」と私は答えた、「そのうち日が暮れて、薄暗くなったら、ひよっとしたら脱出が容易になるかもしれない」。

「嫌です、嫌」と彼女はきっぱりと答えた、「この血溜まりには一瞬も長く留まれません。このまま間近の市門に向かいましょう。襲われて、私が虐待されそうになったら、私を刺し殺しなさい。たとえ彼らの二人や三人打ち殺すことになっても、一矢報いた死になりましょう。一 そう私に約束してください」。

若干熟慮した後、私は同意した。私にも、どんな犠牲を払っても、困窮を終わりにすることが、ましに思えた。殺害が明日新たに始まることになったら、市門は夜間、日中の時よりも厳しく見張られることになろう。

我々は出掛けた。血塗られた露地を通過して、ゆっくりと寄り添って、雲のない藍色の八

月の空の下を歩いて行った。

戦わずして我々は市門に達した。

監視部屋の小門前の門道に両腕を組んで一人のロレーヌの兵士がギーズ家の飾り帯をして立っていて、我々を刺すような眼差しで検分していた。

「二羽の奇怪な鳥だ」と彼は笑った、「どこへ行くのだ、スイス人護衛兵、妹御を連れて」。

剣を緩めながら私は近寄った。胸を突き刺す決意であった。私は人生と嘘を吐くことに飽いていたからである。

「サタンの角にかけて、貴殿ではないか、シャーダウ殿」とロレーヌの大尉は言った。最後の言葉のときは、声が弱められていた。「お入りください、ここでは誰も邪魔しません」。

私は彼の顔を見つめ、思い出そうとした。私は先のボヘミア人のフェンシング教師が思い浮かんだ。

「勿論、私です」と彼は続けた。彼は私の目を見て、私の考えを読み取ったのである。「私で都合良かったと思われませんか」。

こう言いながら彼は私を部屋に引き入れ、そしてガスパルデも従った。

かび臭い部屋では一つのベンチに二人の酔っ払った兵士がいて、彼らの側の床には賽子と杯があった。

「犬ども、起きろ」と大尉は二人を叱った。一人がゆっくりと起きた。彼はその兵士の腕を掴んで、こう言ってドアの前に彼を突き飛ばした。「番に就け、屑。命にかけて、誰も通過しないように見張れ」。 — ただごろごろ喉を鳴らしているもう一人の男を彼はベンチから投げて、ベンチの下へ足で突いて入れた。彼は静かにいびきをかき続けていた。

「どうぞお掛けなさい」、そして彼は伊達男風な手の仕草で汚れた座席を示した。

我々は腰を下ろした。彼は壊れた椅子を引き寄せて、馬乗りになってそれに掛け、肘を肘掛けに置いて、親しげな調子で始めた。

「それではお喋りしましょう。貴殿の件は明瞭です。私にご説明の要はありません。貴殿はスイスまでのパスポートをお望みでしょう。貴殿には返礼できれば光栄と考えています。貴殿はかつて私のためにわざわざ美しいヴィッテンベルクの封印を披露された。私は目利きとご承知だったからです。一つの手は他方の手を洗います、持ちつ持たれつです。封印に対しては封印のお礼です。今回は私が貴殿に一つの封印でお助けしましょう」。

彼は自分の札入れをかき回して、何枚かの書類を引き出した。

「御覧なさい、私は用心深い男として、あるゆる事態を想定して、恵み深いアンリ公爵 [1550-1588] から、自分と郎党用に、我々は昨夜提督に対し表敬訪問をしたわけだが」、この言葉を述べながら、彼は殺害の身振りをして、私は慄然としたのだが、「必要な旅行書類を揃えて貰ったのだ。この悪戯は失敗することがあるからな。そこで諸聖人はこの立派な町バリをお守りされたわけだ。 — これらのパスポートの一つ、これがそれだ、 —

一人の休暇中の国王お抱えのスイス人、給養下士官コッホのものだ。これをポケットに仕舞うといい。これがあるとロレーヌ [ロートリンゲン] を通って、スイスの国境まで自由に往来を行ける。それで問題なしだな。貴殿の大事な女性の脱出に関しては、追従ではなく、貴殿におめでとうであるが」と彼はここでガスパルデにお辞儀した、「この美しいレディ

一は徒歩では難儀であろう。そこで貴殿らに二頭の馬を譲ろう。一頭には何とレディー用の鞍を付けてな。　一　つまり私ももてないわけではなく、私は二人連れだって乗馬する週間なのだ。お代は四十グルデン金貨頂戴することになる。現金でな、手持ちがあればだ、なければ貴殿の約束の誓いの言葉で十分だ。馬は若干草臥れている。パリへ大至急呼ばれたからな。しかし国境まではまだ十分に持つだろう」。そして彼は小窓越しに、市門の所をぶらついていた馬番の少年を呼んで、素早く鞍を用意するよう命じた。

私が彼のために金を、私の所持金のほぼ全部を、ベンチで数え上げていると、このボヘミア人は言った。

「貴殿は貴殿のフェンシング教師の名誉を高めたと聞いて喜んだぞ。友のリニュロルが私にすべて語ってくれた。彼は貴殿の名前を知らなかったが、直ぐに彼の描写から貴殿のことと分かった。ギーシュを突き刺したのか。たまげた、ちょっとあっぱれだ。貴殿にはとても考えられそうにないことであるが。勿論リニュロルは言っていた。貴殿は胸に何か甲冑を仕込んでいたとな。これは貴殿らしくない。しかし誰もがとにかく自分なりに、自分を助けるものだ」。

この残酷なお喋りの間、ガスパルデは黙して青白く座っていた。このとき馬が引かれて来て、このボヘミア人が手際よく鞍に座る彼女の手伝いをした。彼女は彼に触れられ、縮み上がっていた。私は別の馬へ飛び乗り、大尉が挨拶した。そして我々はギャロップで、こだまする門道を抜け、轟く橋を越え、その場から救出されて、進んだ。

第十章

二週間後、新鮮な秋の朝、私は私の若い妻と一緒に山脈の最後の高みに騎乗して行った。この山脈が[フランスの]自由伯爵領地とノイエンプルク地方を分かつものであった。山の背を登っていた。我々は馬に草を食ませて、岩の上に腰を下ろした。

広大で平穏な風景が朝日を受けて我々の前展開していた。我々の足許にノイエンプルク、ムルテン、ビールの諸湖が光っていた。更に先には新鮮な緑色のフライブルクの高地が美しい丘の線と薄暗い森の縁取りと共に広がっていた。丁度姿を現してくるアルプスの高山が明るい背景となっていた。

「ではこの美しい国があなたの故郷で、とうとう新教徒の大地に来たのですか」とガスパルデは尋ねた。

私は彼女に左手のショモン宮殿の陽射しの中で煌めく小塔を示した。

あそこに私の善良な叔父が住んでいる。あと数時間だ。叔父がそなたを愛しい子として歓迎するぞ。　一　こちらの下の湖畔は新教徒の土地だ。しかし向こうの、フライブルクの塔の先端が見えるところ、そこからはカトリックの土地が始まる。

私がフライブルクと呼ぶと、ガスパルデは物思いに耽った。「ボカールの故郷ね」とそれから彼女は言った、「私どもが最初、ムラン近郊で出会ったとき、かの晩どんなに彼が喜んだか、覚えていますか。今では彼の父親が彼を待っていても空しい。　一　それに私のために彼は命を落としました」。

重たい滴が彼女の睫毛から落ちた。

私は返事しなかった。しかし閃光のように私の心の中を、私の運命と私の快活な同級人

の運命との災い多い連鎖の話しが過って行き、私の思いは次々に嘆いたり詫びたりした。

思わず知らず、私はボカールのメダルが私の致命傷を防いでくれた箇所に触れた。

私の胴着の中で紙のようなかさこそ言う物音がした。私は、失念してまだ未読の叔父の手紙を取りだして、不格好なその封印を破った。私は読んで、痛々しく驚くことになった。行は次のようなものであった。

親愛なるハンス

そなたがこれを読むとき、私はこの生命から去っている。あるいはむしろ生命の中へ歩んで行っておろう。

数日前から私はとても弱った思いがしている、必ずしも病気ではないのだが。静かに私は巡礼の靴と遍歴の杖を置いた。私がまだペンを執れる間、私はそなたに自ら私の古里への旅を告げ、そなたへのこの手紙の上書きを自らの手で記すつもりだ。他人の筆跡でそなたを悲しませたくない。 — 私が身罷ったら、老ヨッヘムに頼んである、私の名前に十字架を添えて、手紙に封をするように、と。赤くだ、黒ではない。私のために喪服を着用することはない。なぜなら、私は喜んでいるのだから。私はそなたに私の現世の財産を残す。天上の財産を忘れてはいけない。

そなたの忠実な叔父、レナート

その横には不器用な手で大きな十字架が描かれていた。私は別な方を向いて、涙が流れるがままにした。それから私は頭を上げ、ガスパルデの方を向いた。彼女は両手を組み合わせて、私の横に立っていた。私は彼女を私の青春時の荒れた家の中に案内した。

説教壇からの射撃

第一章

二人の聖職者がある十月の日の第二夕刻時に、高地のユーティコーンから船着き場のオーバーマイルレンへ降りて来た。快適に教会の横の、野原や果樹で覆われた連丘第一段にある牧師館から最短の道を、空っぽのブドウ畑を抜けて通って来た。湖の入り江は長い壁、所謂蹠で庇護されていた。ブドウ摘みは終わっていた。左右にブドウの木が単に黄色になった葉や千切れた葉を見せていて、ぶどう園を縫う濃い緑色の芝地の条にはイヌサフランが咲いていた。ただ遠方の方から、ひよっとしたら経験豊かな男が自分のブドウを異常に長く成熟させて、一層力強い滴を造りだそうとしていたかもしれない所から、時折ぶどう園労働者の歓声が聞こえて来た。

両人は、秋の情緒に押し込まれたかのように、黙して前後になって歩いていた。それに不揃いの舗石や塊で敷き詰められた急な下り道は不快な階段になっていて、彼らは西の方から荒々しい突風となって湖を渡って来る風に時折激しく揺さぶられた。

ブドウ摘みの最初の日々は一年で最も素晴らしい日々であった。温かいフェーンの風が、雪の山々やスイスの湖[チューリヒ湖]を独自に理想的なものにして、雪山の列を無比な静かな偉大な光輝へと結び付け、湖を南方の海の入り江風に深く力強い色彩の輝きで覆って、あたかも風はバッカスの風景、一片のイタリアをアルプスを越えてもたらそうと望んでいるかに見えた。

しかし今日は激しい横風が吹いていた。どぎつい明かりと厳しい影とで歪曲された高山は、険しい、ほとんどバロック的姿となって、余りに目に間近に迫って来た。

「プファネンシュティール、君の計画は分別がない」と突然前に行く男が、短軀のずんぐりして、その若さにもかかわらず、若干太った男であったが、立ち止まって、その若々しい顔を素早く、ほっそりして痩せた同行者の方へ向けた。

後の男は返事をしながら、一個の石にこけた。というのはこれまでまじまじとユーティコーンの塔の先端へ向けていたからである。その先端は向こうの岸辺の暗い半島の上にほっそりした針のように天へ突き刺さっていた。彼は長い脚を再び正常な歩行に戻した後、快適なよく響く調子で答えた。

「思うにな、ローゼンシュトック、將軍は私をライストリューゴーン族[人食い種族]の一人のように扱わないだろう。彼は私の親戚だし、遠縁ではあるが、それに昨日は彼にオデュッセイアの象徴について私の博士論文を上手な献呈の辞を添えて送ったのだ」。

「全く単純だな」とローゼンシュトックはぶつくさ言った。彼はその力強い性癖を彼の父祖の生業から受け継いでいた。父祖は原初以来チューリヒで著名な猟師やソーセージ製造業の家系であった。「君は向こうの奴のことが分かっていない」。そして彼は丸い顎を手短かに動かして、湖の向こうのイタリア建築様式の一軒の田舎別荘を示した。それは檜の木製の半島の北側の入り江にあった。「彼は親戚に対して冷たい。君の夢中の博士論文を、ちなみにこれには分別ある者皆がたじろぐと思うが、嘲笑して辱めることだろう」。このユーティコーンの牧師は、色とりどりのシャボン玉を作るかのように大気中に吹き付けて、それから間をおいて続けた。

「プファネンシュティール君、いいかい、君は向こうの二人の阿呆、ヴェールトミュラー一達と関わらない方がいいぞ。將軍は[Hans Rudolf Werdmüller,1614-1677]イラクサで、触れると誰もが刺される。その従兄弟のミーティコーンの牧師は、古参の子供で、我々の職業に、その猟犬、銃の箱、絶え間ない銃撃、射撃で悪評をもたらしている。君自身この春、副牧師として、その下で十分苦労している。勿論あのラーエルは、小さな可愛い鼻筋で、赤いサクラノボの口だ。しかし彼女は君を愛していない。貴公女は結局貴公子に収まる。彼女はレオ・キルヒシュベルガーと婚約したと言われている。いや、構うな。いいか、戦うことはない。肘鉄は今や退学勧告なんかではない。慰めごとを言うと、私も肘鉄の若干は食らった。それが見ろ、私は無事生き延びて、最近ではめでたく結婚生活にも入っている」。

背の高い聖職候補生は、そのブロンドの、風に吹かれてなびく髪の下から、絶望の視線を同僚に投げかけて、そして哀れに溜め息を吐いた。彼には相方の心筋に付着している脂身の層が欠けていた。

「去るのだ、ここから消えるのだ」とそれから彼は痛々しく激昂して叫んだ。「私はここにいたら破滅だ。將軍はヴェネツィア中隊で空席になった従軍牧師職を私に対し断らないだろう」。

「プファネンシュティール、繰り返すが、君の計画は分別がない。国に残って、実直に生きる」。

「君は私のすべての生命の息を奪ってしまう」とブロンド髪の男は嘆いた。「私は去るなどと言われるが、残れない。私はどこへ行ったらいいのか、墓場か」。

「恥を知れ。君の少年靴を履きつぶし、大人になるのだ。ヴェネツィアの従軍牧師職の考えは、それ自体悪くはない。つまり君が決然とした人間であって、青い無邪気な子供の目をしていないならな。將軍は最近私にその職を打診しに来た。これほど胸板が厚かったら、部下が畏敬の念を抱くだろうと彼は言った。勿論茶番だ。彼は、私の志操は堅く、私がブドウ畑を去るつもりはないと承知しているからな」。

「君は向こうへ行ったのか」。

「一昨日な」。 — ユーティコーンの男の頭に怒りが湧いて来た、 — 「彼がまたここに戻ってから、 — 一週間と経っていないのに、 — この昔からの採め事屋は町と湖をまさしく騒擾に巻き込んでいる。自分は、次の戦役前に、自分の家を整理するために戻ると彼はウィーンから書いて来た。それで彼は戻って来た。すると湖の左岸から彼のアウ[地名、沃野の意]の宮殿の方へ馬車の列がやって来る。ランデンベルク家、シュミット家、ラインハルト家、すべて彼の親戚が、かつてはペスト患者のようにこの灰色髪の無神論者、嘲笑家を避けていたのに、皆がやって来て、彼の遺産を継ごうと思っている。しかし彼は決して家にはいず、悪魔のように湖を乗り回している。閃光のように素早い、十二本の櫂のガレー船で、郎党と一緒に。私の教区民は目を剥いている。この魔女の技に落ち着かず、噂に興じている。それでは十分でないのだろうか。薄暗い時から朝方までアウの宮殿の煙突から炎のドラゴンや明かりが昇る。將軍は、キリスト教徒のように眠る代わりに、時折一晩中、鍛冶をし、錠前仕事をする。彼の細工による、技巧豊かな錠、まことに豪華な作品を私は見たことがある。これは、合鍵では開けられないもので、私の使徒的貧しさを意地悪げに横目に見ながら彼は言ったものだ、泥棒から盗まれ、衣蛾に囓られそ

うな財宝を有する人々のためのものだ、と。さて、分かることだろう、この火の束には役目があって、それは煙突経由の地獄の魔王の道として大いに観察され、喋々されることになった。かくて発酵に至る。人々に真相を教えても、空しい邪悪な結果になる。私はより簡素な手段を選んで、向こうに赴き、将軍に友人として警告することにした。こん畜生、この晩のことは生涯忘れない。私の警告を彼は嘲笑の薄笑いで退けて、それから私の上着のボタンの所を掴んだ。嵐やつむじ風のような、やり取りが勃発した。そうなんだ、プファネンシュティール。ボタンは千切れ、車裂きの刑に遭って、私は家に帰った。モーゼルワインを彼は私の前に置いていた。しかしこの上ない邪悪な接待だった。勿論彼は自分の遺言について語った。それが目下彼の道楽だからな。『畏敬する貴殿の分もある』。私は驚いた。『その条項をお見せしよう』。彼はファイルの書類を開いた、『読みたい』。私は読んだ。何を read だと思ふ、プファネンシュティール。

...条項。私の得がたい友、ローゼンシュトック牧師に対して、真鍮製ガラス付きの二個の空洞カフス・ボタン、その緑の地にそれぞれ三個の小賽子の置かれているもの。この殿方が説教壇で、右手、左手を動かせば、自然に上述の小賽子は揺れて、かくてこの殿方は祈祷の間にやぶにらみを反復して、ささやかな須臾の賭博を楽しめよう。上述のボタンはアルジェー、チュニス、トリポリで、敬虔な者達によって愛好されており、コーランを読み上げる間、モスクでその使用が見られるものである。...

それでだ、プファネンシュティール、遺書が開封された時の腹立たしさときたら。一 それからこの悪漢に私はすぐにその贈り物を手渡して、その条項を消してくれるように申し出たのだ。ここにある」、そしてローゼンシュトックはその可愛い玩具をポケットから持ち上げた。

「全く悪辣な発明だな」とプファネンシュティールは微かに微笑して言った。というのはこのユーティコン人の賽子賭博癖を承知していたからである。「それで将軍はすべての聖職者に敵意を抱いていると言うのか」。

「例外なく皆に対してだ。彼が罰当たりな言辞故に訴訟され、重い罰金刑に処せられて以来のことだ」。

「彼に対して不当過ぎないか」とプファネンシュティールは尋ねた。彼はスイスの宗教改革の信仰概念を若干の謙虚な神秘学で薄めていて、教会の迫害者といった血は流れていなかった。

「全くそれは当たらない。ただ大きな勘定全体を一度に支払わされたただけだ。全生涯にわたって、若い時から彼は冒涇していた。それが次第に積もって、段々高くなったのだ。彼がとうとう我々の最後の内戦、ラパースヴィールの戦い[新教チューリヒ対カトリック、1656]で包圍して甲斐なく、人々の命を失ったとき、命を守ることは共和国将軍の第一義務だから、世論の怒りを買ってしまって、我々は彼を捕らえてよろしいということになった。それで我々は、彼が我々の国の教会に対して犯した悪事のすべてにお返しをした。今は勿論我々は、使徒的陛下[ハプスブルク家]の将軍に対して何も手出しができない。さもないと彼は我々を笑いものにしてカトリックに改宗し、そして最初の立腹よりもっとひどい二番目の立腹をもたらそう。人々は噂している、彼はウィーンで、イエズス会士やカプチン派と会食している、と。一 まさに我々聖職者は、それぞれの肩書きや世を忍ぶ形があって、この世で欠かすわけに行かぬ存在だ」。

このユーティコーンの男は自分の冗談を笑って、立ち止まっていた。「ここで私のブドウ畑は終わりだ」と彼は言った。この表現で彼は自分の教区を意味していた。「この話を聞いた後でも、君は將軍の許へ行く気か。プファネンシュティール、愚行を犯すのか」。

「ちょっとばかり愚行を試みてみたい。英知はこれまで私には渋い果実のみをもたらして来たからな」とプファネンシュティールは穏やかに答えて、自分の厳しい同僚から別れた。

第二章

その少し後、この恋する絶望中の聖職候補生は、長くて細い小舟の横板に腰掛けていた。この小舟は若い船乗り、ブロイリングがほとんど水面から上がらない櫂で、湖を横断してアウに向けて、進んでいた。

すでに寡黙な櫂の暗がり、その黒々とした夕方の影を、波立つ湖面に広く投げかけていた。ブロイリングは均整の取れた顔立ちの、真面目な、閉鎖的人間で、口を開けなかった。彼の小舟は規則的に力強く、自立した生き物のように落ち着かない流れの中を向かって行った。上手も下手も、湖全体、膨らんだ帆で一杯であった。というのは土曜日で、船は昨日の町の週和市から家路に就いていたからである。三隻の帆が飛ぶように近寄って来た。それは目的地は異なりながらも、一つの図形となっていて、聖職候補生の小舟もそのラインへ引き入れられた。「私も自由な遠くへ連れて行っておくれ」と彼は無意識に懇願した。しかしそれらの船はまたさまよう網から彼を解き放った。

その間にいつの間にか將軍の田舎の別荘が間近に迫って、その正面が見えて来た。堅牢で、しかし軽く聳える建築は、この国で普通に見られる高切妻とは何の関係もなく、あかかもわざとその独自さを求めて、孤立しているように思われた。

「あそこがトルコ娘の小部屋です」と今や寡黙なブロイリングが口を開き、右手で櫂を放しながら、家の南の角を示した。

「トルコ娘とは」。聖職候補生はすっかり訝しむ疑問符と化した。

「それは、ヴェールトミュラー[1614-1677]のトルコ娘です。彼が、ヴェネツィア人のために戦争をした所、東洋から連れて来たのです。すでに何度か目にしました。可愛い女性で、黄金の頭飾りをしていて、長く、結んでない髪です。私が通りかかるとよく、彼女は口に指を当てて、男衆に口笛を吹くかのようです。しかし今は窓辺にいない」。

長く引き延ばされた叫び声が大気中に、丁度小舟の上、響いた。「豚メ」と岸辺から発せられて、聞き取れた。

激したブロイリングはその櫂を水面に叩き付けて、船の側で幅広い飛沫が音立てて撥ね上がった。

「このように」と彼は怒った、「ヴェールトミュラーがまたこちらに戻って来た数日前から、どこでも湖では名前を添えて叫ばれます。ヤクザな黒人で、將軍のメガホンで馬鹿騒ぎをするのです。先の日曜日、マイレンの獅子亭で、人々が彼に酒を振る舞い、酔わせてテーブルの下に沈めたのです。それから夜、私の船で、ヴェールトミュラーの許へ送り戻しました。するとこの煙突掃除人は、メガホンでマイレンの方へ悪態を吠えています。しかし、誓って、明日彼はまた我々と一緒に獅子亭にいますよ。 — それで、このムー

ア人はどこでこの外国語を仕入れたものか、疑問です。こちらでも互いにひどい呼び方をします。しかしこれほどひどくはない」。

「将軍が彼をそう叱るのだらう」とプファネンシュティールは小声で述べた。

「そうでしょう、旦那」とこの若造は同意した、「あのヴェールトミュラーは高地ドイツ語、外国語風な単語を持ち込みます。祖国の裏切り者です。しかし私はこの湖でそう呼ばれたくありません、誓って」。

ブロイリングは無造作にその小舟の向きを変えて、素早く力強く櫂を漕いで再び湖の中央に戻った。

「お兄さん、何を怒っているのだい。頼むよ」と熱くプファネンシュティールは言った、「向こうへ私は行かねばならないのだ。支払いを倍にするから」。

しかし銀貨もこの愛国的憤怒に対して効き目がなく、聖職候補生は一心にお願い、依頼するしかなかった。彼はかろうじてこの侮辱を感じたブロイリングを宥めて、この若者が「貴方のことですから」と言って、メガホンの圏外の、半島を一周した南側の入り江に接岸するようにした。そこで若者は聖職候補生を岸边に下ろし、数分後、この小舟はもう小さくなって素早くまた青い湖面の中ほどに漕ぎ進んでいた。

第三章

かくてプファネンシュティールは追放者のように半島の檜の木立の中に放置された。狭い小道は薄暗がりの中で通じていたが、彼は躊躇うことなく進んで行った。盗人のような足取りで、彼は自分の靴底の下、かさこそ言う葉叢を抜けて、間近の空き地へ急いだ。慣れない道の他人の所有地を歩むという邪悪な夢に近いこの感情で、彼の心は急ぎ舞った。しかしどの人間の心にも微睡んでいる冒険心の要素もまたその隠された魅力を彼に及ぼし始めた。このように泳ぐ者も流れに身を投ずる。泳ぐとき、まずこっそり慄きながら足先で流れを試してみるのである。

やがて達した空き地は単に狭い、上の方がドームの開口部のように明るく照らし出された苔の土地であった。苔の上で戯れている一匹のリスが聖職候補生の頭を越えて、垂れ下がっている小枝に飛び移った。この枝は素早いこの小動物がすでに別の枝に移ってからようやく揺れ始めた。

再び小道は、しばらく緑色暗がりの中を縫っていたが、突然方向が変わり、聖職候補生は自分から数歩離れた所に田舎の別荘を見つけた。

しかしこの数歩を彼はゆっくりと進んだ。彼はかの内気な者達の一人で、この者達とって登場と退却は難儀なものとなっているのであり、そして将軍は客人達に対して、ただ退却を容易なものとしているが、登場は容易ではないという評判であった。それで彼は一番外の檜の木、強大な幹の背後に、決断できないまま立ち止まる仕儀となった。しかし彼がこの隠れ場から聞き取ったことは、牧歌的な絵で、これは少しも彼の心を内気に縮こまらせない類いのものであった。

将軍は、ホールのように建てられて、目下の秋の時節、ただ風通し良く思われるベランダで心地良くお喋りしていた。その相手は、隣人のクラッハハルダー、ミュートイコーンの教会長老の一人で、聖職候補生は副牧師のとき、いつも日曜日内陣席に座っている彼ら

の姿を目にしており、十二人の使徒のように彼らとは馴染みであった。ヴェールトミュラーは両肘を突いて、軽い安楽椅子に掛けていて、横顔の鋭い灰鷹の鼻、刺すような顎を見せていた。一方クラッハホルダーの美しい、老いた、抜け目のない頭は、はなはだ穏やかな表情をしていた。

「我々は野の花のようなものです」と老公は教化的に会話を始めた、「ヴェールトミュラー殿、我々兩人ともこの頃、家の整理にかかっています。私は隠そうと思いませんが、三ポンド、我らの教会尖塔の新しい柿板張りのために遺贈します」。

「私も屑とは思われたくない」と将軍は答えた、「それで遺書に同じほど我らの雄鶏尖塔の金鍍金のために出すと記している。新しく柿板張りされた尖塔の姿が恥ずかしいものではない」。

クラッハホルダーはゆっくりと目の前のグラスからすすって、それから言った。「貴殿は教会向きの男ではない。しかし公共のために有益な男だ。教区は若干貴殿から期待しているとご承知頂きたい」。

「それで教区は私から何を期待している」と将軍は好奇心を起こして尋ねた。

「知りたいですか。怒らないでしょうな」。

「全然」。

クラッハホルダーは二度目の間を置いた。「ひょっとしたら別な時がもっとふさわしいかもしれない」と彼は言った。

「今の時を措いて、他の時はない。今話されたい」。

「素敵な記念を築くことになりましょう、将軍殿、孫子の代に、...」。

「私は後世の評価をないがしろにしない」。

変わり者の旦那がかくも上機嫌なのを見て、クラッハホルダーは適した時が来たと思い、ミーティコーンの者達が長く温めて来た願いを慎重な言葉で述べた。

「ヴォルフガングの貴殿の森は、ヴェールトミュラー殿」と彼は躊躇いがちに始めた。将軍は突然顔を曇らせ、その顔に雷雲が昇るのを、老百姓は見ていた、「その先端が突き出ています、...」。

「森の先端がどこに突き出ているのだ」とヴェールトミュラーは憤然と尋ねた。

クラッハホルダーは前進したものか後退したものか思案した。いわば湖の真ん中で嵐に襲われたようなものである。彼は前進することにした、...「我々の共同の森丁度中央です、...」。

今や将軍は一気に安楽椅子から飛び上がり、椅子の一本の脚を掴み、それを振り回して、戦う姿勢を取った。

「ミーティコーンの者どもは私から略奪するつもりか」と彼は猛然と叫んだ、「私は盗賊どもの中にいるのか」。それから彼の木製の武器を下ろして、より悠然と続けた、「それはできない、クラッハホルダー、人々を説得しろ。墓場の向こうに逝ってからまで、貴殿らをからかうつもりはない」。

「悪しからず」と老公は落ち着いて答えた、「お考えください、ヴェールトミュラー殿」。

彼も立ち上がって、将軍と誠実な握手をして、この土地に通常の別れをした。

ヴェールトミュラーは数歩、彼の伴をして、それから向き直った。彼の前にお付きのムーア人ハッサンが立っていた。この黒人は懇願する身振りをして、奇妙にブロークンなド

イツ語で、明日午後、休暇を頂きたい、マイレンの新しい友人達に切に会いたいのだと頼んだ。

「狂っとるぞ、ハッサン」と將軍は彼を叱った、「奴等は先の日曜日十分にそなたを可愛がってくれたではないか」。

「可愛がってくれました」とムーア人はその言葉を誤解して繰り返した。「可愛く、とても素敵な賭けです」。

「名誉心はないのか。文明の民との接触はそなたを破滅させる。 — そなたはキリスト教徒のように飲みよる」。

「飲むのではありません。素敵な賭け、ただの賭けです、ヤース[原注、チューリヒ湖畔で愛好されているトランプの賭け]です」。彼は大変な渋面となって、目を大層情熱的にむき出して、それでプファネンシュティールはどのようにしても抑えられない顕著な忍び笑いに弾けてしまった。彼はよく無邪気な人間に見られるように、喜劇的なものへのセンスを大いに有し、その上今は神経が若干緊張していたのであった。

自分の現存がばれたと察して、聖職候補生は、見つかったドリュアス[木の精]のように檜の木の中へすべり込むことができなかつたので、赤面して檜の木の背後から出現して、狼狽したお辞儀を繰り返しながら、將軍に近付いた。

「そこもとはここで何をしている」と將軍はゆっくりと尋ね、彼は頭の天辺から足先までしげしげと見た、「そこもとは誰だ」。

「私は従兄弟で、...従兄弟の、...従兄弟に当たる、...」と話しかけられた男はどもった。將軍は額に皺を寄せた。

「私の父はプファネンシュティールと言いまして、私の母は、亡き、旧ロレンブツツ、...」。

「そこもとは呪わしい家系樹の全体を説明なさるつもりか。従兄弟だと。そこもとは我が兄弟だ、 — すべて人間は同胞、兄弟だ。失せやがれ」。そしてヴェールトミュラーは彼に背を向けた。

プファネンシュティールは動かなかつた。將軍の接待で彼は石化していた。

「ファネン・シュティール、...」と黒人が自分にはまだ馴染みのない単語の綴りを言い、あたかも自分のドイツ語の語彙を増やしたいかのようであった。

「プファネンシュティールか」とやはり將軍も注意深くなって繰り返した。「その名前は覚えがある。 — 待て、そこもとは著者ではないか」。そして彼はまたこの若者に向き直った。「昨日私に『オデュッセイア』の象徴についての博士論文を送ってくれた著者では」。

プファネンシュティールは肯って頭を傾げた。

「それではそこもとは大いに歓迎だ」とヴェールトミュラーは言って、好意的に彼と握手した。「知り合いになる必要がある」。

第四章

彼は客人とベランダに入り、彼を一つの席に押し込み、カウンターに置かれていたグラスの一つになみなみと注いで、ゆっくりして寛ぐようにさせた。

「接待は軍隊式だったな」と彼はそれから彼を慰めた、「しかしこの兵士は家ではもて

なしが悪くないぞ。貴殿は今日アウに泊まりなさい、 — 抗弁なしだ、 — 話し合うことが色々ある。 — いいかな、貴殿の論文は私にはなかなか面白かった」。そしてヴェールトミュラーは、本の方に手を伸ばした。この本はペランダの背面壁を形成している地階の窓の壁龕に置かれていて、その頁の間に、聖職候補生の読み込み済みの博士論文が挿まれていた。

「まずは予備質問だ。何故貴殿は私に貴殿の作品をただ一行添えて書き送ったのだ。公に、見開きの頁に、率直に、大きな活字で、私に献呈することをしないで。私が貴殿の同僚、坊主どもと緊張関係にあるからか。プファネンシュティール、それじゃ、肝が据わっていない。意気地なしだ」。

聖職候補生は、自分の取るに足りない論文は、著名な將軍にして文学通の方のお名前を冒頭に飾れない、と詫びた。

「取るに足りないことは全くない」とヴェールトミュラーは褒めた、「貴殿は空想力があり、私の寵愛する詩作品の深紅の深みに浸っている、誰もが簡単にできることではない。勿論それは若干奇妙奇天烈なことを証明している。しかしこれはともかく仕方のないことだ。我々人間は我々の至高の諸力を傾注して、馬鹿げた結論に至る。貴殿が丁度どきに、私に助言を求めることを思い付いていたら、私は貴殿の論文に或る転換を与えていたことだろう。それは貴殿自身を、貴殿の坊主どもの試験官を、全読者を驚嘆させていたであろう転換だ。プファネンシュティール、『オデュッセイア』の後半部分は独自の美しさと偉大さを有すると貴殿も実感しておろう。だろう。帰郷者が遍歴の乞食として我が家で虐待される。だろう。求婚者どもが、主人は二度と戻らないと語り合っているが、それでも主人が現存することを予感している。彼らは笑っているが、しかしその顔はすでに死神との戦いで歪んでいる。 — これが詩だ。 — しかし貴方の言う通り、プファネンシュティールよ、詩の背後に一つの倫理が潜んでいなかったら、詩が私にとって何の益があろう。一つの標語が砂糖菓子には焼き入れられている。 — その菓子を割ってみることにしよう。オデュッセウスは単にオデュッセウスだけを意味する必要はないとしたら、それは誰を、何を意味しているのか。我々の主にして、救世主だ、 — そう貴殿は証明し、それを印刷させた。 — 彼は生者と死者を裁くためにやって来る。いや、違う、聖職候補生よ、オデュッセウスはすべての、従者の姿となって虐待されている真理、高慢の求婚者どもの中の真理、つまり坊主どもの中の真理を意味している。この真理はいつか勝者の姿となってこの坊主どもの心を穿つであろう者だ。

これ、聖職候補生、この考えは気に入ったかな。 — このように貴殿は転換すべきであったろうし、これなら確実に貴殿の論文が然るべきセンセーションを引き起こしていたことだろう」。

プファネンシュティールは、自分の象徴がこのような瀆神的、大胆な転換を試みていたであろう場合を考えて震えた。彼は単純な人間であったので、この老嘲笑家の馬の蹄を見ないかったか、単におぼろに想像していたに過ぎなかった。

この老無神論者に返事の義務を感じて、窮地に陥らないようにするために、聖職候補生は羊皮紙の巻を両手に取った。この巻を手にはヴェールトミュラーは話しの間、身振りを加えていた。それは『オデュッセイア』のアルドゥス版[Aldus Manutius,1449-1515]であった。プファネンシュティールは敬虔にこの珍しい本の表題紙を眺めていた。突然彼は舌を出し

ている毒蛇を見つけたかのように後ずさりした。彼はこのヴェネツィアの書籍商の紋章の横、空いた箇所に、若干色褪せた、大胆な筆致のペン字を発見したのであった。次のような行が記されていた。

ゲオルギウス・イエナティウスが正式に所有。

費用、四リアル銀貨、十二クロイツァー。

彼はその本を放り出した。あたかもその本は血の臭いを吐き出しているかのようであった。

当時このいかがわしいグラウビュンデン[スイス東部の州]人[ユルク・イエナツチュ、1596-1639、拙訳256頁以降、なおヴェールトミュラーも登場]はすでに数十年、クールの大聖堂で腐臭を放っていた。彼のイメージはこのおとなしい、非愛国的な時代、厭わしいイメージに歪んでしまって、単に背教者と殺人鬼しか残っていなかった。プファネンシュティールは彼を単純にある怪物と見なして、この怪物がかつて存在したとはほとんど信じられず、現実視できないでいた。

将軍は彼の恐怖を楽しんでいて、それから軽快に言った、「この好漢、貴殿の過去の同僚が、これを私に贈ってくれたのだ。我々はまだ歩調が合っていて、私はダヴォスの彼のマレパルトウス[ライネケ・フクス、狐の巣穴]に彼を訪問したものだ」。

「それでは彼は生を享けていたのですか」と聖職候補生は小声で思わず言った、「彼は我々と変わらず、本を所有していて、その費用を表題紙に記している」。

「その通り、彼は生を享けていた。まことに個人的に、タフにな」と将軍は短く笑って言った、「昨夜も私はこのグラウビュンデン人の夢を見た。...昨日は一日中、厭わしい仕事を片付けなければならなかったからな。私は遺書を書いていた。呼吸をしながら、我々自身の一部でもあるその所有物について指示することほど情けないものがあるか」。

若い聖職者の好奇心が湧いて来た。ひょっとしたら警告するような夢の顔が出現したのかもしれない、それを繊細に教化的に解釈したら、自分の向かい側に座っている将軍の心に善良で敬虔な思いを生じさせられるかもしれない。「貴方の夢を教えてくださいませんか」と彼は情感一杯の視線で尋ねた。

「語ることに致そう。場所はクールだった。群衆、盛装の鬘、軍人達、一 宮廷教会から鐘が鳴り、礼砲がなされた。我々は門のアーチの下を通過して、司教の中庭へ入った。このとき我々は二人連れで歩いていて、私の横には一人の巨人がいた。私はただ羽根飾り付き帽子と、その下の強力な鼻、襟の中に沈んでいるピッチのように黒い尖った髭を見ていた。『ヴェールトミュラー』とその巨人は尋ねた、『誰を埋葬しているのだ』一 『分かりません』と私は言った。我々は大聖堂の中廊の座席の間を進んだ。『ヴェールトミュラー』と相手が尋ねた、『レクイエムは誰のために歌っているのだ』。一 『分かりません』と私は苛立って言った。『小さなヴェールトミュラーよ』と彼は言った、『まあ、爪先だって、誰が棺の中に眠っているか見てくれ』。一 このとき、私ははっきりと棺掛けの隅にイエナツチュの名前[モノグラム]と紋章を認め、その同じ瞬間に彼が、私の横で立ち止まって、私に顔を向けた。一 褪せて、生気のない目をしていた。『これはしたり、大佐どの』と私は言った、『貴殿は向こうの先に、棺掛けの下、七つの致命傷を受けて、眠っていますぞ。それなのにここで私と会話している。貴殿はダブルですか。これは正常なことですか。まともなことですか。地獄へ消えなされ、冗談が過ぎる』。すると

彼は悄然として答えた、『私を咎めないでくれ、 — 大きな顔をするな。おぬしも、ヴェールトミュラー、死んでいるのだ』。

プファネンシュティールは悪寒がした。疑いもなく血まみれの戦役、將軍を帝国の外部で待ち受けている戦役のこの前夜の夢は、まことに不吉なものに思われて、彼は聖職者らしい語らいの言葉を思案した。

ヴェールトミュラーも自分の夢を、一度その夢を伝えたからには、すぐに忘れることができなかつた。「大佐は自分の恋人に斧で雄牛のように屠られてしまった[拙訳399頁参照]」。彼は声高な物思いに移った、「私はそんなに簡単には行かんだろう。戦死だ — 多分。しかしベッドの隅でくたばることはなかろう」。

ひょっとしたら毒殺のことを考えていたのかもしれない。彼はウィーンの宮廷で、執拗な陰謀劇に巻き込まれていて、彼の野心のせいで、不倶戴天の敵を作っていたからである。

「私は自分のトランクを詰める前に」とちょっと間を置いてから続けた、「なお一人の人間を幸せにしたいものだ、 —」。

聖職候補生の目に涙が浮かんだ。利己的な思いからではなく、この美しい情動への無私喜びからであった。しかしすぐに乾いた。將軍がその文をこう結んだからである、「一殊にこれにとつてもない悪戯を絡ませてな」。

將軍に取り憑いていた迷信的感情は速やかに消え去っていた。「貴殿の用件は何だ」と彼は客人に、通常のかのつけんどんな言い回しの一つで尋ねた。「私の夢の話しを聞きに来たわけではなかろう」。

そこでプファネンシュティールは將軍に無邪気な策で伝えた。というのは、自分の絶望的恋愛について、この相手は理解してくれそうに見えず、打ち明ける気にならなかつたからである。それで自分は『オデュッセイア』の研究で、ホメロスの故郷、黄金のギリシア王国を知りたいという止みがたい欲求にとらわれました。自分は、この遍歴欲求を満足させる他の方策が見つからず、こう考えるに至りました。將軍のヴェネツィア共和国中隊の従軍牧師職を求めて、將軍の許に名乗り出よう、と。この中隊は実際共和国のギリシア領地に駐屯していますので。「この職は空いています」と彼は結んだ、「私に少しばかりご好意を恵んでくださいますなら、この職を頂きとう存じます」。

ヴェールトミュラーは彼を鋭く見つめた。「私は少しも」と彼は言った、「若い人間にそのキャリアは危険だから止めろと反対する男ではない。しかしその人間はそれに適した者でなければならない。ライブツィヒやイエナからの退学処分を受けた乱暴者なら誰でも、貴殿のヨハネのような顔よりも、私の部下に畏怖の念を与えることだろう。そのことは忘れなさい。南方を見たいのであれば、若い騎士の許で家庭教師の職を見つけて、その騎士の服の埃を払えばいい。しかしそれも貴殿には向いていないな。一番良いのは、故郷に残ることだ。外を見てみろ。湖畔の塔の尖塔をすべて数えてみろ。 — 牧師どものカーナーンではないか。ここが貴殿のロードスだ、ここで踊り給え[hic Rhodus,hic saltaここで実力を見せろ]、 — つまり説教し給え。 — 何のために市民階級の様々な職種というルールがあるのだ、貴殿の類いが利用するためだ。貴殿は知らんだろう、人生を巧みに切り抜けるには、何という太股の締め付け加減が必要か。気まぐれは止めなさい」。そして彼は、無茶な少年の乗り回していた馬の手綱を握る仕草をした。

間が生じた。再び將軍は聖職候補生に観察する視線を送った。

「貴殿は純粋な人間だ」と彼はそれから言った、「真面目にギリシアの冒険職を得たいと思っていた。しかしこのことと目の前に見ているプファネンシュティールとは平仄が合わん。石の下に一匹のウナギが見える。廃墟の下、うろつき回る気違いじみた骨董商、貴殿はこれではない。つまり貴殿は破れかぶれだ。しかし何故破れかぶれだ。どうして遠ざかりたいのか。白状しろ。人形か。おい、真っ赤になったな」。

六十歳のヴェールトミュラーは女性を点景として扱っていて、女性を単に画家の表現、「人形」で呼ぶ習慣であった。

「最後に副牧師をしたのはどこだ」。

「貴殿の従兄弟殿のムーティコーンで、この方が痛風発作の間です」。

「私の従兄弟の許か。つまり、ラーエル嬢の許か。それで万事明々白々だ、私が新たに制定した演習規則同様にな。この娘が貴殿の頭を狂わせ、それから正しく公正に、肘鉄を食らわせたわけだな」。

繊細な聖職候補生は、ラーエルが — これは疑念の余地のないことであったが、 — 彼の心を奪ったと認めるよりも、むしろ自分の心を体から投げ棄てたいところであったろう。彼は控え目に答えた。

「ヴェールトミュラー殿は、いつもは私のパトロンでしたが、私を解雇なさいました。私が銃の扱いを心得ず、それを怖がるものですから。二十年前、銃のことで我が家は不幸に見舞われました。彼は私に、一緒に的に射撃するよう強いて、私は一発も当たらなかったのです」。

「貴殿は断るべきだったなあ。ラーエルの目に貴殿は情けなく映ったことだろう。彼女はいつもの的に当てる。いやはや、私はあの老公にまだ若干の借りがあると思出した。あの聖職者殿は、私がライン河畔で戦闘中に、私の猟犬の群れをこの地で全く上手に監視してくれた。彼は玄人だ。ハッサン、すぐに董色のモロッコ革ケースを持って来てくれ、武器室のガラス戸棚の中の、左手、一番下にある。 — 私には構わんでくれ、聖職候補生」。

ムーア人[黒人]は急いで行き、数瞬後には、ヴェールトミュラーは見事な二丁の小さなピストルを手にしていて。彼は革布でそのダマスク鋼の銃身と床尾の銀金具を磨いた。この床尾には可愛く珍しいアラベスク模様が彫り込まれていた。

「友よ、貴殿の悲歌を続けて聞かせてくれ」と彼は言った、「それではその娘は貴殿に肘鉄を食わせた。 — あるいは娘が貴殿を愛することもあり得るか。…摩訶不思議な自然の戯れの場合だ。 — それでただ老親父のみが貴殿を撥ね付けたわけか、そうか。どんな理由でだ」。

プファネンシュティールはまず返事に戸惑っていた。不安な気持ちになっていたからで、将軍が、自ら話しながら、一方のピストルの撃鉄を起こしたのであった。それからヴェールトミュラーはただこっそりと指で引き金に触れ、撃鉄はボタンと作動した。彼は二丁目のピストルの撃鉄にかかり、腕を伸ばして、洗面となった。大いに力を込めた末に、ピストルの引き金が引かれた。バネの仕掛けが何らかの理由で強張っていたに違いない。彼は不満げに頭を振った。

はなはだ目を瞬かせていた聖職候補生は、今やまた会話の糸口に掴みかかり、自分の絶望の真の理由を仄めかした。「ヴェールトミュラーの御令嬢とプファネンシュティールの若造です」と彼は諦めた口調で言った。あたかも太陽と月の関係で、両者が合わないこと

は全く自然のここのように述べた。

「そんな阿呆な言い草で私を納得させるつもりか」と將軍は彼を厳しく叱った、「我々はかの洒落た時代、紋章が発明された十字軍時代をまだ抜け出ていないようではないか。しかし当時でも、そもそもどんな時代でも、由緒ある名前よりも男ぶりが大事なのだ。さもないと虫に食われた林檎のように世界はとうに腐っていよう。いいか、プファネンシュティール、私はこちらでは貴人と見なされている。しかし私が皇帝の軍務に就いたとき、かくかくしかじかの由緒ある紋章の同僚諸兄は、高慢に私の紋章の平民的水車[ミュラー]を見下していたものだ。それでもこのミュラーが奴等によって大半壊されていた中隊を立て直し、勝利するのを奴等は甘受しなければならなかったのだ。よく聞け、プファネンシュティール。そこもとには自負心がない。それではラーエルに見損なわれる」。

聖職候補生は奇妙な状況に陥っていた。彼はヴェールトミュラーの観点に同調できなかった。というのは完全に偏見を排除すると、物事の古くからの秩序全体が壊れるとおぼろげに感じていたからである。この古くからの秩序は彼にとって、不都合に作用するときでも、大事であった。

しかしヴェールトミュラーは返事を求めなかった。彼は立ち上がっていて、それぞれの手にピストルを持って、陸地の方から湖畔へ通ずる道をやって来る一人の成長した娘を迎えに出た。將軍は砂利が娘の軽快な速やかな足取りで軋む音を聞いていた。

「今晚は、名付け子よ」と彼は彼女に挨拶した。彼の灰色の目は輝いていた。

しかしその美しい令嬢は眉を顰めた。それで老公は、明らかに娘には不快と思われる両ピストルを、彼の大きな上着ポケットに、一方は右側に、もう一方は左側に収めた。「ラーエル、客人があるのだ」と彼は言った、「私の若い友をそなたに紹介していいか。聖職候補生のプファネンシュティール殿だ」。

ヴェールトミュラー令嬢は一層間近に歩み寄った。一方プファネンシュティールは不器用に椅子から起き上がった。彼女は赤面するのと戦っていたが、しかし上品な額まで、豊満な褐色の髪の毛の付け根の下まで派手に燃え上がった。聖職候補生は、乙女を直視しないと目と約束しているかのように、最初両目を閉ざしていたが、しかし両目をとても情愛のこもった輝かしい、幸福と愛の表情で開けた。そして彼の善良な視線は両の褐色の目にとっても温かい歓迎を見いだした。それで老いた嘲笑家の將軍でさえ、二人の無邪気な若者達の飾らない恋心を喜んだ。

彼は珍しいことに、両人の甘美な最初の戸惑いに、半畳を入れて更に戸惑いを募らせることをしなかった。あたかも、深く真実な感情は、自然で謙虚な表情になると、我々をこの強制と仮面の世界からより偉大で、同時により簡素な世界へと移し、この世界では嘲笑の居場所はないかのようなようであった。

勿論長くは兩人をからかわずに放ってはおかなかったであろう。しかし賢明で勇敢な娘は彼をその気にさせなかった。「貴方とお話しすることがあります、名親様」と彼女は言った、「それで先に湖畔の第二ベンチに向かいます。余りに長く待たせないでください」。

彼女は軽く聖職候補生に向かって礼をし、消えた。

將軍は聖職候補生の手を取って、階段を上がり、彼を自分の図書室へ案内した。そこは湖に面して、三つの高いアーチ形の窓を通じて光が差し込んでいた。

「安心しな」と彼は言った、「私はラーエルに対し貴殿の味方をしよう。その間、貴殿

はここで寛いでくれ。貴殿は本が好きだろう。ここには世紀の詩人の一切合財が見られるぞ」。彼はガラスの戸棚を指さして、広間を去った。本は輝かしく並んで立っていて、フランス人、イタリア人、スペイン人、数人のイギリス人すらも見られた。精神、空想、諧音の山積みの宝庫であった。疑いもなく時代の素養の高みにあったヴェールトミュラーは、信じられないと頭を振っていたことであろう、ここにはこれらの作家皆を束ねたものに匹敵する人物が一人欠けていると囁かれた場合に。

すべてを読みこなしていた將軍でも、ウィリアム・シェークスピアを聞いたことすらなかったのである。

聖職候補生は詩人達に触れなかった。というのは若い血にとって、恋人の間近さは、九人のミューズすべてに勝っていたからである。

第五章

將軍は小道を進んだ。小道は岸辺のすぐ側、半島の湾曲に沿ってうねり、やがてラーエル・ヴェールトミュラーの姿が見えた。彼女は風化した岩のベンチに座って、今や黄昏れる湖の方を向いて、上品な横顔を見せていた。深い愁いの率直な表情が、可愛く決然とした小顔に浮かんでいた。

「何を考え、何を願っている」と彼は彼女に語りかけた。

彼女は立ち上がりずに答えた、「貴方のことが不満なのです、名親様」。

將軍は一本の樫の幹に寄りかかって、両腕を組んでいた。「貴女の逆鱗に触れることをしたかな」と彼は言った。

令嬢は彼に非難の視線を向けた。「分からないと仰有るのですか、名親様。本当に、父上に対する振る舞いは良くありません。父上は貴方に悪さはせず、ただ尽くしているだけなのに。 — また先の日曜日には、何という騒動だったことでしょうか。貴方の指図で、父上は午後ずっと貴方と一緒にアウ池でドンパチ騒ぎでした。何という見世物興行。ばたつく負傷した家鴨に、沼地では獲物を探し回る水浸しの若者達、父上は大きな長靴を履いて、村中の人が見物していました。...」

「村中が射撃の腕を見守っていたのだ」とヴェールトミュラーは反論した。

「名親様」 — 娘はその席から飛び跳ねて、そのすらっとした姿は不機嫌に震えていた。 — 「私はこれまで、貴方の心は、 — 幾つかの風変わりな点はさておき、 — 正しい[右の]箇所にあると思っていました。でも間違いです。こう信じ始めています。この点、貴方の心は少しもまともじゃない、と」。そして彼女は人差し指をちょっと動かして、將軍の左の胸を示した。「これまで」と彼女はより好意的に付け加えた、「一種の鞍馬天狗[リュベツァール]とっていました。...そう巨人山脈[リーゼンゲビルゲ、北チェコ]の精霊は呼ばれています。この精霊の陽気ないたずらについて沢山ご承知なのだろう、と。...」

「良いことをすることが、時に楽しく思われる精霊、良いことをするとき、冗談をする精霊だな」。

「大体そんなものだろうと。でも申しましたように、貴方は山の精同様に、意地悪です。

— 善行は何も見えません。貴方は父上を更に墮落へと追い込むことでしょうか。私ども

のミューティコーン人の心根が、その牧師を出来る限り支援する善良なものでなかったら、とうにチューリヒでは父上に対する苦情が持ち上がっていたことでしょう。それももったもなことです。だって、寝ても覚めても、追獵の行け行けドンパチしか考えていないような聖職者は、どんなキリスト教徒にとっても毎日のしゃくの種に違いないでしょうから。これは年々ひどくなっています。最近、教区長殿が訪問を告げられまして、同じ時に、使いの者が、町で購入の獵銃を父上に持参しました。それで私はこの獵銃を親不孝ながら取り上げて、私の衣裳棚に隠しました。さもないと父上は、
— 恐ろしい考えですが、
— 立派なシュタインフェルス殿に狙いを定めていたことでしょう。名親殿は笑っておいでですが、
— 笑い事ではありません、
— だから貴方が憎いのです。貴方は父上の弱点を知っていて、まるで父上の邪悪な天使のように、父上を更に刺激し、駆り立てています。次には何と、装填した銃を持って、説教壇に上がることでしょう。...貴方が戻られたとき、私は喜びました。それが今、こう尋ねています、間もなく旅なさるのでしよう、名親様と」。

「装填された銃を持って説教壇に上がるのか」とヴェールトミュラーは繰り返した。この考えに彼は驚いているように見えた。「まあ、まあ、名付け子よ、父親は私にとって、すべての黒服の聖職者の中で最も付き合いやすく、そなたは私にとって、すべての人形の中で最も愛しい。私は老父に一つの返礼をしよう。いいかな、私は明日そなたらの許、教会へ出向こう。
— すると町や田舎での父親の名誉回復となろう」。

ラーエルはこの見解で、ほとんど教化されたようには見えなかった。「名親様」と彼女は言った、「貴方は私を洗礼盤から取り上げて、私の現世と永世の幸福に留意すると誓ってくださいました。永世の幸福に関しては、貴方は何もできないでしょう。この点については貴方自身がとてもいい加減ですから。しかしだからといって、私の現世の幸福も壊していいとはならないでしょう。貴方は、逆に、少なくとも私を現世で幸福にすることに留意すべきでしょう。
— それなのに私を不幸にしています」。彼女は涙を絞った。

— 「立派に思案されている」と將軍は言った、「名付け子よ、私は山の精だ。私に三つの願いを述べたら、それを叶えよう」。

「それでは」と令嬢は冗談に乗って、答えた、「第一に、父上の聖職者らしからぬ獵好きを治してください」。

「できない。獵好きは血筋だ。ヴェールトミュラーの出だ。しかし私は彼の情熱を無害な方向に導くことにしよう。第二に」。

「第二に、...」、ラーエルは躊躇った。

「私がそなたの代わりに話そう、ラーエル。第二に、レオ・キルヒシュペルガー大尉に求婚、婚約、結婚のための休暇を与えてください」。

— 「嫌です」と威勢良く、ラーエルは答えた。

— 「彼は申し分のない騎士だ」。

— 「申し分のない騎士には色々厄介なことがあります、これは面倒です、名親様」。

— 「狭い料簡だ」。

— 「私はその料簡を堅持します、名親様」。

— 「構わんだらう。
— それでは別な第二だ。第二に、山の精、聖職候補生プファネンシュティールに彼の望みのヴェネツィア軍務での従軍牧師職を与えてください」。

「金輪際、嫌です」とヴェールトミュラー嬢は叫んだ、「何ですか。この不幸な方は、貴方のヴェネツィアのならず者達の許での従軍牧師職を所望しているのですか。華奢で善良な人間が。そのために貴方の許に来ているのですか」。

将軍は肯定した、「私はやめとけとは言っていない」。

「やめとけと言ってください、名親様。モレア[ヴェネツィア語、ペロポネソス半島]ではペストや熱病が流行っていませんか」。

「時にな」。

「アドリア海では頻繁に遭難の記事を読みませんか」。

「折々に」。

「ヴェネツィアの社交は驚くほど劣等なのではありませんか」。

「立派な社交はあちらでも似たようなものだ。劣等な社交はピカイチだな」[Montbareyの騎士の言]。

「名親様、彼は行ってはなりません、絶対に」。

「分かった。それでは別な第二を、第三の願いと結び付けよう。山の精、聖職候補生プファネンシュティールをミューティコーンの正規の牧師にして、私を彼の妻にしてください」。

ラーエルは燃えるように赤くなった、「はい、いいです。山の精」と彼女は勇敢に言った。

この決然とした答えは、法外に将軍の気に入った。

「彼は純な質だ」と彼は褒めた、「しかし彼には男らしさが欠けている。人形どもを有無を言わずに引きさらう男らしさが」。

「バーカ、一」と彼女は軽くないなして、決然と続けた、「名親様、貴方は一ダースの会戦で勝利して、ホーフブルク[ウィーン宮廷]では策謀的敵の計略を挫き、有名な経験豊富な男性となっています。一 貴方の精神のほんの百分の一を使って、私を、一 つまりは私ども二人を幸せにしてください。すると私どもは生涯貴方への感謝を忘れないでしょう」。

将軍は空いた岩のベンチに腰を下ろして、両手を深く物思いに耽って、両膝の上に置いた。エジプトの神のようであった。かくて彼は自分のポケットの両ピストルに触れることになった。突然彼の鋭い灰色目に閃光が走り、彼は放恣な哄笑に弾けた。数十年来笑ったことがないような笑いで、真の悪ガキの笑いであった。同時に彼は、素早く半島の内部の方を向いて、跳ね起きたので、一つの木霊が、放恣な陽気さのこの勃発を霊のようにグロテスクな具合に反復して、それでアウのすべてのファウヌスや牧羊神が馬鹿げて瀆神的思い付きに小腹を抱えて笑っているかのようにであった。

将軍は落ち着いた。彼は自分の攻撃とその成功の可能性について鋭い思考で吟味しているように見えた。大胆な賭けが彼の気に入った。「私に任せろ、我が子よ」と彼は父親然と言った。

「ねえ、名親様、父上は辛い目に遭わないのでしょうか」。

「ただ良い事だけだ」。

「プファネンシュティールも虐められてはいけません」。

ヴェールトミュラーは両肩をすくめた。「奴の役回りは全くの下位だ」。

ー 「それに冗談もするのでしょうか」と娘は緊張して尋ねた。というのは哄笑で彼女は若干疑り深くなったからである。

ー 「私は冗談をするつもりだ」。

ー 「失敗しないかしら」。

ー 「この計画は人間の無分別に立脚している、だから非難されるものではない。しかしいずれにせよ成功するには、若干のチャンスが必要だ」。

ー 「失敗も考えられますか」。

ー 「その場合ルドルフ・ヴェールトミュラーが責任を持つ」。

今一度その娘はまことに真剣に思案した。しかし彼女の決然とした性格がその勝利を収めた。その上、彼女は大胆な組み合わせの妙味に、そして幾分限定的ではあっても、自分の親戚の男の忠誠心に全幅の信頼を寄せていたのである。他人の不幸を喜ぶ悪戯がこれには随伴するであろうと、彼女は承知していた。ー これはまさに幸福の代償金であろう、

ー しかしまた、ヴェールトミュラーは自分を鼻屑しており、だから彼の悪ふざけをさほど派手なものにしないでであろうとも承知していた。その上、彼女の血の中には、大胆なものであっても、迅速な解決を、悩ましい不確実なものよりも優先する傾向があった。

「仕事にかかってください、鞍馬天狗」と彼女は言った、「いつその仕掛けを始めるのです、山の精」。

ー 「明日正午にはそなたは花嫁だ、娘っ子よ。私は月曜日早朝に旅立つ」。

ー 「ではまた、山の精」と彼女は立ち去りながら挨拶し、彼に手の投げキスをした。彼は彼女を見送り、彼女の細身の、安心した足取りを見て喜んでいた。

第六章

遅い夕方の時間、将軍と聖職候補生は、豊かに食器の並べられた、輝かしい照明の丸いテーブルに向かい合って座っていた。大きな広間で、その明るい化粧漆喰の壁は立派な油絵の戦争絵で覆われていた。

ヴェールトミュラーは、貧しい境遇で育った若者にとって、「食卓よ、豊かに飾れ」は何という詩学を有するか知っていた。しかしまた精神的饗応も彼は忘れなかった。彼はギリシアの旅について語り、『オデュッセイア』の風景や、海の色 of 自然の真実を称え、うっとりとした聖職候補生の眼前にギリシアの神殿の高貴で規範的な形式を彷彿させた。

ー 要するに、彼は若者を幸せにした。

これとは不可分の軍事的冒険については、ほんのついでに述べたが、しかしとても強烈なタッチで、それでプファネンシュティールはこの老傭兵の間近にいて、自分を実直で大胆な男と感じ、一方ヴェールトミュラーは聞き手の素朴な賛嘆を目の当たりにして、数十年分若返り、軽快になった。

それでプファネンシュティールは、将軍が会話に熱中して、彼の体を揺すり、彼の服の胸元前方、狭い両肩の間に留められていた四個の幅広の平たいボタンのうち、最上位のものを奪い、それをちらと観察した後、薄暗い部屋の隅に投げ棄て、それから中央部の一つをねじって、これがただ一本の糸で留まるだけにしたとき、このことを大したことに思わなかった。

しかし、梨を食い、チーズを食っている間に、情景が変わった。将軍はいつもの習慣に反して、一 彼はとうに中庸の男になっていたのだが、一 熱いブルゴーニュ酒の数杯を飲み干して、よく言われるように激烈なワインを飲んだせいで、それで少しばかり彼の心の中で、美しく勇敢なラーエルが彼女の心を穏やかな、非兵士的人間、しかも一人の「坊主」に寄せたことが腹立たしく思われ始めた。それで彼はデーモンに駆られ、自分の好みの聖職候補生を結局は今一度無慈悲にからかう羽目になった。

彼は待機しているハッサンに、火薬の角の容器と弾薬袋を持って来るように命じ、自分の上着から両小型ピストルを取り出し、それを眼前の食卓に置いた。

「ラーエルは貴殿を好いている」と今や彼は聖職候補生に向き直った、「しかしあの娘を妻に欲しいなら、貴殿はあの娘の前に一度まっとうな男として出現する必要がある。するとあの娘にいつまでも残る印象を与え、かくて貴殿はめでたく平然と夫としてナイトキャップを両耳まで被ってよろしいとなろう。私の計画は全く単純だ。私は明日ミューティコーンの教会へ行く。一 驚くことはない、プファネンシュティール、私は異教徒ではない、一 そして従兄弟の牧師の許、昼食に呼ばれることにしよう。勿論ラーエルは家に残っていて、食卓の世話だ。しかし貴殿は礼拝が続いている間に、人目を避けて、牧師館へ行き、娘を拉致する。娘をこちらに連れて来るのだ。貴殿が娘に接吻しているとき、私は二台の鉄の大砲を準備する、貴殿が玄関で目にしたものだ。そして私の半島と陸地の間を結んでいる狭い築堤を死守する。会戦となろう、交渉となろう、和平締結となろう」。

聖職候補生が普段の状態であったら、この兵士の冗談に微笑していたことだろう。しかし強力なワインが彼の頭に昇っていた。

「恐ろしいことです」と彼は叫んだ。しかしそれから間を置いて、ほっとして付け加えた、「それに不可能です。ラーエル嬢は決して同意しないでしょう」。

一 「娘はそうする。貴殿が行ったら、娘の足許に身を投げるのだ。私と一緒に逃げてくれ、さもないと、...」。彼はピストルを手にとり、それを右のこめかみに当てた。

「彼女はその気だ、その気にならんといかん。どの人形も男の根源の力で強制される。貴殿は最新のドイツの文芸を知らんのか。...ローエンシュタイン[Lohenstein,1635-83]を見ろ、ホーフマンズヴァルダウ[Hofmannswaldau,1617-79]を見ろ」。

一 「彼女はその気にならないでしょう、一 決して」とプファネンシュティールは機械的に繰り返した。

一 「それじゃ貴殿の終わりだな、一閃光の栄光」、そしてヴェールトミュラーは引き金を引いた。撃鉄はボタンと作動し、火花が散った。

今やプファネンシュティールは男気が生じた。自分の間近で生じた途方もない蛮行とそれに対する身震いとで彼はまた正気に戻って、彼の脳は冷静になった。それにローゼンシュトックの警告も思い出した。彼はおまえを意地悪く虚仮にし、苦しめていると彼は自分に言った、おまえは聖職者ではないか、教会の劣等な敵とは闘わなければならないぞ、と。

彼を観察している、鋭く照明された顔の口の隅に嘲りの薄笑いが浮かんだ。それはこの瞬間グロテスクな仮面に似ていた。聖職候補生は自分の席から立ち上がって、威厳をもって語った。

「貴殿が本気でこうなさっているのであれば、私は一分も一つ屋根の下に留まりません。異教徒の蛮行よりひどいものが教示されています。しかしヴェールトミュラー殿、これは

貴殿の冗談ならば、そう思われますが、それでも同様に私は去ります。貴殿に何ら悪さをしていない素朴な人間をからかい、嘲笑すること、これはキリスト教徒的ではありませんし、人間的ですらありません。一 悪魔的所業です」。

美しい、正直な怒りが彼の青い目に燃え上がり、彼はドアに向かって進んだ。

「まあ、まあ」と将軍は言った、「明日は朝食に何を召し上がるか。卵か、山鶉か、鱒か」。

プファネンシュティールは開けて、急ぎ立ち去った。

「ムーア人が貴殿の部屋まで明かりを点して案内しよう。明日朝食のときまた会おう」とヴェールトミュラーは彼に呼びかけた。

一人残った将軍は、丁寧に、軽快に作動するピストルに火薬を詰め、しっかりと銃栓を押し込んだ。作動の重いピストルは装填しないままにしていた。両ピストルを彼はムーア人に渡して命じた、両方とも彼の黒いビロードの上着に収めておくように、と。それから将軍は一本の燭台を取って、自分の臥所を求めた。

第七章

聖職候補生は素早く駆けて、築堤に急いだ。この築堤を通じて、半島の南側が陸地と結ばれていた。彼は先の春、ミュートイコーンに滞在したとき、しばしば当時ドイツでの戦役に赴いていた将軍の拠点地を好奇の目で眺めていたが、足を踏み入れることはなかった。この築堤はその中央付近が古来からの小さな門と一本の橋によって途切れていると彼は知っていた。しかし支障はないだろうと確信していた。この門は、思い出す限り、決して閉ざされたことはなく、実際この門には門扉がなく、閉ざされないからであった。

今や彼はこの岸辺に来て、自分の左手に築堤のラインを認めた。しかし何たる不運、黄昏れる風景の中に鋭く突き出た橋の桁が空中に浮遊していて、小門の側面に対して、直角ではなく、鋭角になっており、小門の石のアーチに橋桁は二本の鎖で固定されていた。門、引き上げられた橋、鎖の小さな結束のライン、一 このすべてが目にと著しく識別できた。というのは月が十分な明かりを送っていて、空虚な、飛び越えられないその隙間に、月の反映が銀色の水面に微光を発していたからである。プファネンシュティールは囚人になっていた。この沼地を徒渉して行くことは不可能であった。彼は悪質な葦の浅瀬のことを知らなかったので、最初の数歩で沈み、惨めな最期を遂げてしまうことだろう。途方に暮れて、彼は半島の岸に立っていた。一方沼からはすぐ彼の足許で、音量たっぷりのゲロゲログワッ、グワッ、グワッの音が響いていた。

丁度この晩、アウの蛙どもの中に、傑出した才能の若い抒情蛙が出現して、蛙抒情の固定的既定のモチーフを大胆に取り上げ、情感一杯に扱っていた。熱狂した合唱隊は倦むことなく、朗詠された節を熱狂的に繰り返していた。勿論聖職候補生は、あたかもアケロン[冥府の河]の沼地から湧き上がって来るかのような、この情熱的鳴き声から、深くメラニコリックな印象を受けた。

さて、半ば絶望して、彼は築堤を渡り、門の方へ急ごうとした。跳ね橋は全力を傾注すれば沈むのではないかと思った。このとき、今一度彼が非難一杯に不気味な別荘の方を向くと、自分の方に向かって来る明かりに気づき、数瞬後、ハッサンが手に火屋付き蠟燭を

持って、彼の側に立っていた。家臣めいて、人懐っこく、人の良いムーア人が彼に語りかけた。見棄てた一室に戻ってはどうか、と。

「蛙、面白くない、聖職者の旦那」とブロークンにハッサンは言った、「跳ね橋、閉まっている、一 部屋準備あるよ」。

どうしたらいいのか。ハッサンに従うしかない。大きな、舗石の敷かれた玄関に通じているキッチンからムーア人は二本の蠟燭を点して、照らしながら聖職候補生を、階段を上り案内した。最上階のその下の段で、彼は素早く彼の腕を取った。「驚かない、聖職者の旦那」と彼は囁いた、「將軍の部屋の前の歩哨」。

実際、そこには歩哨が立っていた。ハッサンは歩哨を蠟燭で照らした。プファネンシュティールは一人の骸骨を認めた。それは骨の手をマスカット銃を支えに描いていて、その肋骨の上には[十文字に]交差した、ピカピカに保たれた革製のものに、チューリヒ民兵の弾薬入れと銃剣が結ばれていた。小さな三角形の帽子が空ろな頭蓋骨に被せられていた。

聖職候補生は死神の像を恐れなかった。彼は職業柄この死神に親しんでいた。いや、彼は骸骨男の警告的教化的姿に一種の偏愛を抱いていた。しかしこの幽霊的番人の庇護の下、中で眠る人間とは誰か。これら至極真面目な事柄で、自分の破廉恥な嘲笑を行うことに、[將軍は]何と奇妙な悦楽を見いだしていることか。

今やムーア人は湖側の最も外部の部屋の次の部屋を開けて、二本の燭台を暖炉に置いた。プファネンシュティールは、その両頬が燃え、熱を帯びていて、窓に近寄ってそれを開けた。しかしハッサンは彼を押し留めた。「湖の風、良くない」と彼は警告して、隣室の両開きドアを開けて、暑くなった若者が安全に風を得られるようにした。それから彼は恭しく挨拶して去った。

聖職候補生はしばらく小部屋の中をあちこち歩いて、自分の興奮した空疎を落ち着かせ、自分の人生で最も風変わりな一日を寝入らせようとした。しかし一日の最も危険なアバンチュールはまだ未修了[不合格]であった。

ハッサンの開けた隣室から微かな音色が響いて来た。深い呼吸のようであった。撫でるような夜風がカーテンを動かしたのか、それともフクロウがただ半端に閉められたブラインドの側を飛び過ぎたのか。

聖職候補生は自分の歩みを止め、聞き入った。突然彼は思い出した。この隣室は正面の一番奥で、他ならぬ、舟人のプロイリングが將軍のトルコ人女性が住んでいると言った部屋に違いない、と。

このような間近にいると考えると、身持ちの良い若い聖職候補生は勿論この上なく不安になり、心配になる。しかしすぐに熟考して、彼は悪評高い小部屋を勇敢に照らし出して覗く決心をした。

彼は立派なトルコ製絨毯に足を踏み入れ、右手を向いて、等身大の絵の前に立った。それは金箔の贅沢な葉飾りの枠縁が付けられて、小さな寝室の窓に向かい合った壁一面を占めていた。その絵は、当時有終の美を飾った輝かしい世紀のオランダ人かスペイン人かによる、かの自然な色合いのほれぼれする流儀で描かれていた。この流儀は近代の者達には失われたものである。ムーア人工芸の欄干の上に一人の若い東洋の女性が蠱惑的な黒い瞳で、燃えるような唇とで寄りかかっている、あたかも自分の前に立っている男にこう合図しているかのようであった。「いらっしゃい、でも黙っていて」。

プファネンシュティールは、ほんのこれに近い類似のものすら見たことがなくて、この身振りによる誘惑に深く、不気味に震撼された。今日まで彼にとって完全に未知のまま残っているものが彼の魂に生じた。彼が名付けてはならない何ものかで、一 燃えるような憧憬、その成就の至福の可能性である。この絵を前に彼はそのような圧倒的情感を感じ、その威力に震え始めた。

突然聖職候補生は向きを変えて、自分の寝室へ戻り、ドアを閉めるだけでは満足できず、更に門を押し込み、最後に鍵を回した。かくて彼は自分の臥所を安全に確保したと思い、その枕に沈み込んだ。

しかし彼は微睡んだかと思うと、ドアから、ドアは開くことなく、美しい幻影が入って来て、悪賢く、ラーエル・ヴェールトミュラーの姿と顔に化けて、その乙女らしい形姿と上品で精神的な面影をまとった。しかしその目は東洋の女性の瞳のように切なげで、口に指を当てた。

そこで哀れな聖職候補生にとって、邪悪で劣等な時となった。彼は逃げようと思ひ、デーモンの魔力に駆られて、この娘の足許に身を投げた。彼は正気の沙汰でない願いをどもって述べ、絶望して自らを非難した。彼は彼女の両膝を抱き、自らをすべての罪人中、最大のならず者と罰した。ラーエルは最初驚いていて、それから厳しい眼差しで不機嫌になり、とうとう怒って、自分から彼を突き飛ばした。すると将軍が彼の側に立っていて、彼にピストルを渡した。「人形は」と彼は教師面をした、「男らしい根源の力で強制されるのだ」。鉄の、悪魔の鉤爪の力によるものであるかのように、聖職候補生の腕は曲げられ、彼は自らの右のこめかみに致命的ピストルを向けた。「私と一緒に逃げてくれ」と彼は呻いた。彼女はそっぽを向いた。彼は引き金を引いた、彼は血の中ではなかったが、冷や汗をびっしょりかいて目覚めた。三回彼はこの苦しい半端な夢の中、欲望と破廉恥と後悔のこの循環を経験した。そしてとうとう彼は窓を開け、神聖な早朝の純な息吹を浴びて、深く落ち着いた眠りの中へ沈んだ。

彼はハッサンがお湯を持って部屋に入って来るまで、目覚めず、そして彼の命令でブラインドが開けられた。天上的な、懐かしく青い朝で、今やすべての湖の鐘が、半ば弱まり、半ば強く響きながら、音色をこの夢の寝室へ届けた。

「将軍、教会、出掛けた」とムーア人が言った、「聖職者の旦那、朝食か」。 一

第八章

ムーア人は嘘を吐いていなかった。

ルドルフ・ヴェールトミュラーは、客人が微睡みから抜け出たこの瞬間、すでにミューティコーンの教会のほど近く、日曜日の参詣人達と共に歩いていた。この人達は教会へ向かうすべての道、歩道に群れていた。

将軍の普段迅速な歩みは、今日ほどほどなもので、彼の姿勢は全く威厳があり、非難の余地がなかった。彼は黒いビロードの服を着て、手袋をした右手に、重たい金箔の締め金で閉じられた賛美歌の本を持っていた。

珍しいことだ。長いこと、どんな教会も避けていたヴェールトミュラーは、ミューティコーン人達の許では評判が悪く、頑固な無神論者という硫黄色の照明[判決]を受けていた。

彼が遅かれ早かれ、悪魔にさらわれるであろうことは、この人達にとって既成の、議論の余地のない事実であった。 — それでも彼が教会への道を歩んで行くのを目にすることは、心から喜ばしいことで、いや感動的であった。彼らは、彼の登場を贖罪行為とは全く見ていなかった。というのは、 — この点ではギリシアのドラマ作家と似ていて、 — 大人になった人物がその性格を変えるのを好まなかったし、そのようなことを恥ずかしいことと見なしていたからである。人々は将軍が首尾一貫して、決然と墮落に向かうことをよしとしていた。むしろミュートィコーン人達は、老兵士のこの教会参詣を或る丁重さ、教区民に対して示す或る荣誉礼、戦場に赴く前の公の退去挨拶と捉えていた。

挨拶は終わりを知らず、どの挨拶も、今日だけは例外的に人当たりの良い将軍によって、頷きや、短い好意的言葉の返礼がなされた。ただ一人の老婆だけは、教区で最も意地悪な女性であるが、将軍をぼかんと見ている愚かな自分の娘を後ろに退けて、娘に通る声で囁きかけた。「私の後ろに隠れなさい。さもないと連れて行かれ、トルコ女性にされてしまうよ」。

この普段見ない教会参詣人の姿を見て、牧師ヴィルペルト・ヴェールトミュラーは人々のようには喜ばなかった。彼は丁度襟カラーを付けて、ガウンを着用し、その中庭の門から出たのであった。中庭の中央には古びて灰色の井戸の背後に二本の力強いポプラの木が、微かに風の中、揺れていた。彼の驚きは正真正銘であった。ラーエルがこのことを黙っていたからである。

牧師は、まだ精悍な外貌の六十代の男で、必ずしも洒脱ではないが、しかし男性的な顔つきで、将軍を森や戦地での手練れの狩猟家として鼻屑していた。しかし将軍が自分の教化をまさにミュートィコーンの教会で求めること、 — これは喜んで彼に放免したかったことであろう。

歓迎されないとすればなるほど、一層将軍は丁重になった。彼は帽子を取って、それから牧師の手を握り、彼を家の玄関に連れ戻した。丁度この瞬間、美しい、さわやかな朝を迎えたラーエルが、階段の一番下の段に足を置いた。日曜日らしく晴れ着を着て、同様に手に小さな、黒いビロードで結ばれた賛美歌の本を持っていた。

「おや、可愛い、妖精[ニンフ]だ」とヴェールトミュラーは彼女に挨拶した。「父親のようにそなたの額に接吻させてくれ」。

彼女は嫌わず、小さな、しかし頑丈、丈夫な将軍は、爪先だって、背伸びし、背の高い娘の上品な白い額に届こうとした。懇ろな二人というよりは、むしろ滑稽な二人であった。

「説教の後、私を食卓に招じてくれるかな、老公」とヴェールトミュラーは尋ねた。

「勿論だ」ともてなしの良い牧師は答えた、「ラーエルは家に残り、台所の手配をなささい」。

娘は健気に同意して、軽く膝かがめのお辞儀をして、付け加えた、「有り難いです、名親様」、そして急いで上の階へ戻った。

「ちょっと持参したものがあぞ、老公」と将軍は微笑した。

「銃か」と牧師は発して、彼の目は輝いた。

ヴェールトミュラーは肯って頷き、自分のビロードの上着の幅広の裾から一丁のピストルを取り出した。当時の銃鍛冶技術のちょっとした傑作の、上品な型とダマスク鋼の銃身が牧師の目に強力に焼き付けられた。彼の情熱のすべてが目覚めた。ヴェールトミュラー

は彼と一緒に薄明かりの玄関から、牧師館の裏の戸口を通して、庭は入り、牧師が貴重で小さなピストルを日中の明かりの中で賞翫できるようにした。

牧師館の縦の側面全体はかなり低いブドウの木で飾られていた。この緑のアーケードの一方の端に、牧師は数年前、小さな付いた石の壁を設置させており、反対側の入口でしっかり構えて、自分の暇な折、射撃の練習をしていた。

「レヴァント[中近東]からのものか」と彼は、ピストルを奪いながら尋ねた。「ヴェネツィアでの模倣だな。ここの絡み合った記号、GGを見ろ。 — グレゴリオ・ゴッツォリだ」とヴェールトミュラーは自慢した。

「アウの君の武器室で、この宝の小型ピストルを見た記憶があるぞ。 — ペアではなかったか」。

「それは夢だろう、...」。

「勘違いかもしれない。これは軽快に作動するか」。

「残念ながら引き金が少し堅い。しかしこの余所の傑作品を当地の銃鍛冶に任せちゃいけない。壊してしまうぞ」。

「少し堅いのか。構わないよ」と牧師は言った。彼はガウンと襟カラーを着用していたが、結局園亭で身構えた。左足を軸足として、右足を出し、撃鉄を起し、腕を曲げた。

近くの教会の鐘の音が丁度黙して、最後の打撃の震えが雀蜂の羽音の中に消えた。雀蜂はぶんぶんと園亭のまだ切り取られていない金色のブドウ房に飛び回っていた。

牧師は何も聞いていなかった。 — 牧師は全力を傾注して引きに引いた。

「いや、老公、何という洪面だ」とヴェールトミュラーは嘲った、「寄越してみろ」。彼は牧師の武器を奪って、彼の鉄のような指を引き金に置いた。撃鉄は甲高く作動した。「従兄弟殿、貴兄の能力が落ちているのだ。年取って肢体の力が衰弱している。貴兄のため私が自らこの銃の作動をもっとスムーズなものにしてやろう。 — 私が評判の銃前師であり、なかなかの銃鍛冶であることは聞き及んでおろう」。

「いや、結構、いや」と牧師は情熱的に叫んだ、「とにかく君はそれを私にプレゼントしたのだ。もはや手放さないぞ、...」。

躊躇いがちに將軍はピストルをまた取り出した。 — もはや同じピストルではなかった。老獪な手品師の彼は、もっと鋭い、冷静な目でも簡単には区別できない双子のものを取り替えていた。

牧師はその武器を再び手に取ると、新たに撃つ身構えをした。彼は全く熱く燃え上がっていたのである。そしてもう一度撃鉄を起す表情となった。

しかし將軍は彼の腕を取った。「後でだ」と彼は説得した。「何をしておる。とうに鐘の音は終わっているぞ」。

ヴィルペルト・ヴェールトミュラー氏は夢から覚めたように、正気付いて、耳を澄ました。深い静寂が支配していて、ただ雀蜂だけがぶんぶん言っていた。

彼は急いでピストルを広い上着のポケットに突っ込み、従兄弟二人は短い、今や完全に人影のない道を、近くの教会へと歩いて行った。

第九章

二人のヴェールトミュラーが神聖な空間に入ると、そこは最後の席まで一杯であった。中廊では右手に男性陣が、左手に女性陣が座っていて、内陣では、顔を教区民に向けて、教会の長老達が座っていた。この中にクラッハハルダーもいた。

二本の広い、上部が大きな半円で結ばれた壁支柱が中廊と内陣を仕切っていた。その右手にある壁支柱に接して高く説教壇があり、急な説教壇への階段の足許に唯一空いたままの席があった。これは桎材に彫刻を施した椅子で、この席を牧師は賛美歌の間、使用する習慣であった。今や牧師はこの席を将軍に指示して、遅滞なく説教壇に上がった。遅刻の牧師は急いで、教区民に今日の賛美歌の番号を知らせた。

それは新しい賛美歌の本の中で最も愛好されていたもので、豊作のブドウ収穫への感謝の歌で、近世に作られたばかりの、ドイツ由来であった。以前のロココ調の大胆で、没趣味、文飾過多のものであったが、響きや色調に欠けていなかった。

どの詩節も、すべての慶事の恵贈者[神]をその都度別の楽器で称えるという要請で始まっていた。作詞者には教会のイメージが浮かんでいたのかもしれない。しかし次の詩人の言葉を思い出させるかのジョヴァンニ・ベッリーニ[1430-1516]描く華奢な音楽の天使風ではない。

するとヴァイオリン弾き達はかくも天上的に明るく弾き、
吹奏者達はかくも素晴らしく吹いた、...

そうではない。剛健な雲の上に陣取って、すべての考えられる限りの楽器を揃えた、ルーベンス派の何らかの派手な絵に見られる、ほっぺの膨らんだ天上的な宮廷楽団である。

「諸人よ、欣喜雀躍せよ、欣喜雀躍せよ、...」と快活に声量豊かに、美しい清潔な空間で響き渡った。その八つの尖ったアーチの窓から天上的一日の輝く青色が侵入して溢れた。

将軍は、その入場で好意的つぶやき声を引き起こしていたが、顔を引き締めて教区民の方を向いた。しかし頭を無理なく転じさえすれば、容易に従兄弟の巣くっている高い席を眺めることができた。このとき丁度彼は上の方を一瞥した。すでに何度か歓喜の歌を聞いていたミュートィコーンの牧師は、同様にすでに何度か話した説教に自信があって、こっそりと自分のポケットを触って調べた。

「諸人よ、トロンボーンを吹け、トロンボーンを吹け、...」と内陣を通じて轟いた。ヴェールトミュラーは説教壇階段の上の方を盗み見た。従兄弟は小さな銃をポケットから取り出して、高い説教壇の腰壁の背後で、目を細めてそれを眺めていた。

「諸人よ、トランペットを吹け、トランペットを吹け、...」とミュートィコーン人達は歌った。トランペットの騒音の歌の中、将軍ははっきりと、あたかも上で撃鉄が起こされたかのような鋭いカチツの音を聞いた。彼は微笑した。

今や、最後の、ミュートィコーンの女性陣にとって大好きな詩節となった。「諸人よ、フルートを吹け、フルートを吹け、...」と彼女達はできるだけ上手に歌った。将軍は再び上の説教壇へ窺視の視線を送った。戯れて牧師は丁度自分の太い指を引き金に当てた。しかし自分はどうなにか力を入れてもバネを動かさないと承知していた。彼はまた指を戻した。穏やかなフルートの歌は消えた。

将軍は説教壇の下で、がっかりした気分で、顔に皺を寄せた。

今や、この小さな銃を自分の広いポケットに戻した聖職者は、一心に敬虔になって、典礼を祈り、それから大きな、いつも説教壇の書見台に置かれている聖書からテキストを読

み上げた。それは素晴らしい詩編からの第四十七番であった。こう始まるものである、「諸人よ、拍手して欣喜雀躍せよ、万雷の鬨の聲で神を称えよ」[すべての民よ、手を打ち鳴らせ、神に向かって喜び歌い、叫びをあげよ]。

新鮮に流暢に説教へと移って、すでに説教はその三分之一が過ぎていた。今一度將軍は上を窺った。明らかに失望して、ほとんど非難一杯の視線であったが、しかし視線は突然快活になった。牧師は、アクションに熱中して、左手で皆の衆の前で身振りを交えていたが、説教壇で隠されていた右手で本能的に愛好する銃を再び取り出していた。「万雷の鬨の聲で神を称えよ」と彼は叫んで、バンと力強い射撃音が響いた。彼は煙の中で立っていた。彼の姿が再び見えて来たとき、青い火薬の雲がゆっくりと彼の周りに湧き出て、香煙のように教区民の上に漂った。

驚愕、恐怖、驚異、苛立ち、立腹、抑えた哄笑、こうしたすべての感情の音階が集まった聴衆の顔に表現されていた。しかし内陣の教会長老達は憤慨して、咎め立てる表情をしていた。状況は由々しくなった。

このとき將軍は人当たりの良い、同時に畏敬の念を覚えさせる物腰で、激したミュージコーン人達に向かって言った。

「親愛なる同胞諸兄、射撃のことは気にしないことだ。人間的予感に従えば、私がこの死すべき定めを銃弾に晒す前に、諸兄と一緒に教えを受けるのはこれが最後となろうとお考え頂きたい。一 それで牧師殿、決然たる男ぶりを発揮して、貴殿の説教を最後まで続けて頂きたい」。

そして実際、牧師はうろたえず、また取りかかり、説教を続けて、迷わず、話しの糸を見失わず、一言も失念したり、どもったり、言い間違えたりしなかった。

万事また正常に戻った。ただ青い火薬の小雲だけは、狭い空間の中で少しも失せようとはせず、教区民の上に頑固に漂い、影の中に入ったり、陽光を受けたりし、やがてその輪郭が次第にぼけて、最後に消えた。

第十章

牧師がその説教を果敢に最後までやり遂げている間、家に残ったラーエルは老バーベリーと加勢のためにこの女性が連れてきた近所の子供に自分の指示を出して、今や、手に小さな籠とブドウ摘み用小型ナイフを持って、家の裏戸口へと出て、熟して日焼けした金色のブドウ若干を園亭から切り取ろうとした。

そのとき、丁度自分の向かい側、歩道が、街道から分岐して、庭園の面に沿ってあるところに、奇妙な光景を見つけた。

不気味な一人の男が両手を垣根に置いて、上着の裾を翻して、荒々しく垣根の上を飛び越えて、彼女にまっすぐに向かって来た。ほとんど彼女は自分の目が信じられなかった。本当かしら、あり得ない。でも、あの人だ。

プファネンシュティールは、奉公熱心なムーア人がアウの食堂で、彼のために用意した朝食にほとんど手を着けなかった。

彼は今や下がった跳ね橋を越えて、山を上がり、ミュージコーンの牧師館へと突き動かされていた。彼は通りや小道が、ほんのしばらくであれ、まだ人気がないと知っていた。

東洋人女性の幻影は朝風の中で吹き飛ばされていた。しかし秋の一日がその霧の覆いの中から天上的に輝かしく新鮮に生ずるように、昨日受けた印象の一つが、聖職候補生の興奮した魂の中で一つの棘のように残っていた。

彼には男らしさがないと将軍は彼のことを非難していた。これがあれば女性に対する間違いのない勝利を得られるのだぞ、と。聖職候補生はこれをどうにかしなければならぬと思った。そのとき、彼の見解によれば、大胆不敵なこと、それもまさに将軍が彼に要請していたことを、決行する機会が眼前に生じて、それでこの男は、蛮勇を奮って、ラーエルの許に、不意に、ピストルは携帯せずとも、朝の訪問をする決心をした。

垣根を跳び越えることは、勿論英雄的行動ではなくて、むしろ帰路に就いた最初の教会参詣人達を避ける行動であった。この人達の姿が街道の木々の間に見えると思つたのである。

彼が冒険者然とした顔をして、決然とした挙措で、ヴェールトミュラー嬢に近付くと、この娘は真面目に彼の外見、彼の熱を帯びた目、青白さ、弛緩に驚いた。それらは眠れぬ一夜の残滓として彼の顔に残っていた。垂れ下がって、半ば余所を向いたボタン、別な千切れたボタンの箇所空所も勿論彼女の目は一瞬も見逃さず、不安な気持ちで一杯になった。

「まあ、何ということでしょう。どうなさったの、副牧師様」と娘は言った、「病気になるんですか。何かうろたえて、異様で、怖い思いがします。あの疫病神の名親様が、一あの人が貴方に何かしたのでしょう。貴方には何も手出ししないと私には約束したのに。貴方を滅茶苦茶にしてみました。アウでどんな目に遭ったのか、仔細漏らさず話してください。一ひよっとしたら助言できましょう」。

聖職候補生は彼女の分別のある、それでいて温かい視線を覗き見て、全く突然に本来何に駆られていたのか、それが分かった。

このアバンチュールの悪太郎[コーポルト]、彼がアウで踏み出した第一歩のとき、彼のうなじに飛びついて来たものが、彼の背中から飛び去り、彼を進ませた。

彼は微細な点まで、澄んだ、褐色の目に半島での彼の体験を報じた。ただ彼の熱病の脳の産物であったトルコ女性の幻影はカットした。彼は彼女に告白した。将軍に、自分には男らしさが欠けると叱責されて、当惑し、取り乱してしまった。今でもまだそのことが整理できていない、と。そして彼女に請うた、これは一つの欠点なのか、どうしたら自分は救えるであろうか、自分に率直に語って欲しい、と。

ラーエルはしばらくほとんど感動して彼を見つめていたが、それから明るい笑いに弾けた。

「名親様は貴方をからかっているのです」と彼女は言った、「でもあの人が貴方のギリシアへの冒険を断ったのは、正しいことです。貴方は自らの性情から脱却なさろうとして、それであの人は貴方の素性をからかったのです。...でもどうしましょう。貴方のありのまま、丁度ありのままの貴方が一番私の気に入っています。父上の聖職者らしからぬ狩猟三昧には十分辛い思いをして来ました。私が好きな男性は、私どもの村の民に教訓的、洞察力のある日々の生活を先導し、私どもの十分の一税のワインを一口ずつ味わって飲み、妻を愛し、時に、謙虚で学識のある友人の訪問を受ける男性です。...あの伊達な騎士達ときたら。私はあの人達の食卓での会話にうんざりしています。馬車や馬に乗って突然父上の

許に押しかけてくるのです。一 名親様は昨日色々漏らされたことでしょうか。名親様が十八歳のとき自分の若妻に対してなされた悪戯をも聞かれましたか。若妻がバーデンで焼かれているというスペイン風パンを欲しがったのです。『そなたに焼きたてを買って来よう』と彼は優美に言って、鞍にまたがり、騎乗して行きました。バーデンで彼はこれらのパンを一つの箱に入れ、自分はスウェーデンの陣地へ旅立つと一行添えたのです。この別れ[の文]を彼は使者に託して、自らはその後何年も妻と再会しなかったのです。貴方ならそんなことなさないでしょう。そして彼女は静かな副牧師に手を差し出した。

「でも今はすぐ貴方のボタンを固定しなくちゃいけませんね」と彼女は素早く付け加えた。「こんな状態の貴方を目にするなんて、目にも心にも応えます。腰掛けてください」。

一 そして彼女は園亭の下の小さなベンチを示した。一 「糸と針を持って来ます」。プファネンシュティールは聞き入れた。彼女はブドウの入った籠を手に飛び去った。

そこで彼は楽園の至福に襲われた。明かりと緑、低い園亭、慎ましい牧師館、疑念と不穏のデーモンからの解放であった。

勿論彼女は、彼の不穏な気持ちを取り除いてやったのだが、自身は不穏な気持ちに陥った。将軍はどんな悪戯を計画したのか、あるいはすでに実行したのか。将軍にフリーハンドを与えたことを、彼女は自ら責めていた。

台所で彼女は、牧師殿が将軍と一緒に閉じこもっていて、その後すぐに教会長老達がゆっくりと厳かに、階段を上がって行ったと聞いた。教会で何か前代未聞のことが起きたに違いありません、と。

彼女にその槽から鱒を持って来た猟師クーリーに彼女は尋ねた。しかし彼は話そうとせず、愚鈍な顔をした。

慌てて娘は自分の寝室へ急いで、長いことかかって、やっと糸と針を見つけた。

第十一章

ミューティコーンの礼拝が更に支障なく終わった後で、従兄弟二人は並んで近くの牧師館へ歩いて戻った。牧師は将軍の右手で、二人が出会う者達の表情から明らかに読み取れる世論のメッセージに頓着していなかった。

牧師館で聖職者ヴェールトミュラーは書斎を開けて、世俗のヴェールトミュラー[将軍]を一人の処罰対象の哀れな罪人のように付いて来させ、丁寧にドアを閉めた。それからこの犯罪者の間近に迫って行った。「従兄弟の将軍殿」と彼は言った、「君は私を一人の悪漢、餓鬼のように扱ってくれたな」。そして彼の首を絞める仕草をした。

「手を離してくれ」と将軍は言った、「君と髪をつかみ合いをしてもな。以前従兄弟のシュターデルホーフフェンの軍需品将校とチューリヒの市役所園亭でやった具合に。そのときは二人して鬘をつかみ合い、ただただ埃を舞い上がらせたものだ。君の職務を考えろ、君の体面を考えろ」。

「私の職務だ、私の体面だ」と牧師はゆっくりと痛々しく繰り返した。一粒の涙が彼の灰色の睫毛にかかった。この短い[四つの]簡素な言葉で、オセロが自分の過去と自分の職務から別れるときのかの堂々たる長広舌、我々の肺腑を衝く言葉と同じことが表現されていた。

将軍はぐっところえた。老牧師の涙は余りに決定的に過ぎたことであった。

「まあ、まあ」と彼は慰めた、「君は立派な冷静さを示した。誓って、真のヴェールトミュラーだ。一人の将軍でも君には顔色なしだ」。

しかしこの追従も甲斐がなかった。憂愁の時も過ぎ去っていた。

「私がいつ君を侮辱した」とこの憤激した牧師は怒った、「私がかつて私の教会で君のことを諷刺したり、当てこすったりしたかね。私は君の異教徒ぶりを完全に放置して、できるだけかばってきたろう。ー そのお礼に君はこっそりピストルを取り替えたのだ。ペテン師で、手品師の君が。ー 何故私の灰色の髪に恥をかかせるのだ。意地悪な子供だ。君の虫の居所が悪いからと言って、...」。

「まあ、まあ」と将軍は言った。

ノックの音がした。ミュートイコーンの長老達が、クラッハホルダーを先頭にして入って来た。そして半円の形で、ヴェールトミュラーに対し、厳かに、ほとんど敵対して向かい合った。将軍はそのがっかりした皺を寄せたそれぞれの顔を見て、自分のあくどい冗談で村人の感情をひどく傷付けたと感じた。

実際、村人皆が心服しているクラッハホルダーは心底怒っていた。彼はこの冒険的出来事の全容を解明できなくても、これは考えるまでもなく、将軍のせいであって、将軍が自分の聖職者の従兄弟の弱みを利用して、国中に知れ渡るスキャンダルを仕掛けようとしたと見ていた。彼は自分の教区の名誉を大事にしていて、ミュートイコーンのほっそりした尖塔と明るい八つの窓のこの小教会を率直に愛していた。ー 一週間の汗の生活の後、清潔な晴れ着を着て、締め金付き靴を履いて、教会に参詣することは甘美であった。礼拝と人間生活を区切り、梓付ける洗礼や葬儀は、甘美で思索的であった。死すべき定めのアダムとして、不滅の魂として説教されることは甘美であった。睡魔と戦い、負けて、また目覚めることは甘美であった。力強いアーメンの声、他の長老達と共に教会墓地に集合し、牧師の挨拶を聞くことは甘美であった。その後心地良く家路に就くことは甘美であった。

鋭い輪郭の頭のこの正直な老人が、貧者の喜捨の際に、牧師殿の要請の後、立派な善行のために、目に涙を浮かべて、自分の財布から一ヘラー銅貨を取り出すときの姿はなかなかの見ものであった。

要するに、クラッハホルダーは教会の男であり、自分の日曜日の情緒の場所が、穢され、滑稽なものにされ、心が流血していた、あるいはもっと正確に言って、怒りの胆汁が煮えくり返っていた。

「何故こちらにお出でになった」と将軍は彼に話しかけ、目を瞬かせて、鋭く彼を見つめたので、クラッハホルダーは、良心にやましいところはなかったけれども、それに耐えられず、その瞳は左右に揺れて、最後によく落ち着いた。

「針小棒大に騒ぎ立てないでくれ」とヴェールトミュラーは返事を待たずに続けた、「あの射撃はブドウ収穫祭の遅ればせの射撃と見なすか、あるいはその他、何でも好きなように考えればいい」。ー

「収穫は平年作だ」と教会長老は抑制された渋面で答えた、「しかしあの射撃はまことに邪悪な行動だ、ヴェールトミュラーのご両人。私は町と田舎の年代記を所有している。その中には、数年前若い聖職者が、自分の花嫁に聖杯越しに惚れた目でウインクしたと記されている、...」。クラッハホルダーは自分の首に切断の合図をした。

「たわけたことだ」と將軍は苛立って叫んだ。

「私は家に異教徒の歴史を所有している」とクラッハハルダーは頑固に言い続けた、「そこには世の原初からのすべての分離と流派が記述され、模写されている。しかしアダム派[裸体で樂園の無垢を主張した]であれ、再洗礼派であれ、説教している間に一発射撃したことはない。これは、牧師殿、新しい宗教だ」。

牧師は溜め息を吐いた。自分の行為の前例のなさが明瞭に眼前に浮かんだ。

「チューリヒでこの射撃は調査されましょう」と今やこの無慈悲な百姓は脅した、「シナゴグ[ユダヤ教会]が」、彼は教会会議[Synode]と言うつもりだった、「この件で開かれましょう。牧師殿、お気の毒です。しかし厳しい判決が下されることを私は希望します。それで我々は笑いものになるわけで、これは最悪のことです。嘲笑は我らの湖畔ではしぶとく残りますから。そのことを考えますと、誓って、私の目の前は真っ暗になります。向こうの右岸全体が我々のことを笑いましょう。我々は、あらゆる音調、歌詞での嘲りを受けずには、マイレンやキューストナハトで、もはや一杯も飲めなくなりましょう。ミューティコーンの射撃は、ウィリアム・テルのアルトドルフでの射的同様不滅となって、子々孫々語り継がれましょう。私は貴殿を引き合いに出します、將軍殿」と彼は続けた。老いた目は意地悪く輝いていた、「これがどういうことかご存じでしょう。貴殿がラパースヴィールから撤退して何年になりますか。当時貴殿はカトリック教徒達によって歌われました。信じられますか、それはまだ生きています。貴殿は肖像画に描かれる名高い男です。しかしそれでも救われません。一昨日でもなおリヒターズヴィールから、満員の巡礼船がアウ周辺に大きな歌声で騒がしくやって来ました。私は自分のブドウ畑にいて、阿呆どもと見ていました。一 貴殿の家の辺りで奴等は静かになった。『敬意の表れか』と私は自分に言いました。いや、その通りだったのです。奴等は丁度貴殿の窓辺の下に来たとき、嘲りの小唄を放ったのです。奴等が貴殿、ヴェールトミュラーを女房殿の許へ追い返したのはいつ[どこ]のことか、貴殿はご承知でしょう。貴殿が馬で遠出なさったことは結構なことでございます。私は私のブドウ畑ではなはだ立腹しました、...」。

「うるさい」と將軍は怒って噛みついた。というのはかの撤退した包囲攻撃に対する昔の悪罵は今でも彼の心の中に残っていたからで、いやそれは以前よりも更に鋭くなっていて、あたかもその悪罵は数年後によく黒々と消えがたく浮き出てくる例のインクで記されているかのようであった。

しかし彼は自制して、調子を変えた。「どんな喜劇にも若干の混乱が見られる」と彼は言った、「しかし混乱が頂点に達したら、それが立派な結末に迅速に転換するよう導く必要がある。さもないと狂った騒ぎすら退屈なものであろう。

牧師殿、それに親愛なる隣人諸君。

昨日私は深更まで私の遺書にかかっている、十二時の鐘の時、署名した。私が行い、任せ、遺贈するものすべてに貴殿らが温かい関心を寄せていると私は承知している。その若干をここで読み上げることが許されたい」。

彼はポケットから証書を取り出し、それを広げた。「私が物事の価値について少しばかり哲学した導入部は省くことにして、...『私ことルドルフ・ヴェールトミュラーがいつか身罷りしとき、...』いやこれも今必要ないな、...と彼は更にめくった。「ここだ、『エルクの宮殿と領地、これは私が最後の戦役から実直に貯えたもので購入したものであるが、

私の家系の、家族世襲財産として残るもので』云々、『同様に　一　この領地は、立派であるが、しかし等閑にされた猟区を所有し、それにまさに例の戦役での戦利品を収めた、しかしまだ未完の武器庫を所有するものであるが故に、私は私の死後、私の従兄弟、牧師のヴィルペルト・ヴェールトミュラー殿が、上述の宮殿と領地に住み、経営し、猟区を整え、武器庫を完全なものにし、そして万般にわたり、あらゆる方策で、氏の最後まで自由に管理支配するものとする。条件はこの聖職者が、ミューティコーンで握っている職権を停止し、司教の同意を得て、聖職候補生のプファネンシュティールに譲ることである。私はこの候補生に、私の名付け子、ラーエル・ヴェールトミュラー嬢を妻として与える。これはしかしながら、父親の同意が不可欠である。その上で私は三千チューリヒグルデンを追加する。これは私が私の祝福にくるんで、令嬢に残すものである』

「やれやれ」と將軍は一息入れた。「これらの文ときたら。ドイツ語は厄介な言葉だ」。

一

牧師は自分が、同じ波で沈められ、そして陸地へと運ばれる難破船乗船者と同じ気分がした。自分の厄災多い情熱は別にして、分別のある男である彼は、すぐに將軍が、自分を悪罵と恥辱から救出してくれる唯一の道、その上に極めて快適でもある道を自分に対して示していると察した。

彼はこの自分の虐待者にして恩恵者である男の手を一種感動して握った。將軍もこう言って握手した、「私が生還しても、従兄弟よ、君の損にはしない。私は自分が死んだ者であるかのように振る舞い、君を私のエルクでの遺言執行人と任命しよう」。

さてミューティコーン人達はさながら固唾を呑んで聞き入っていた。今度は自分達が贈られる番だと予感がしたからである。

「『私はミューティコーン人達に遺贈する』」と將軍は続けて、彼の鉛筆は彼の左手の紙片の上へ飛んだ。というのはこの時、靈感で思い浮かんだ条項を書き留めていたからである。「『ミューティコーン人達に遺贈するのは、かのヴォルフガングの共有林に食い込んでいる三分の二が針葉林、三分の一がブナの木から成る私の所有地の先端部分である。これを、共有地の両境界石が私の不利益となっても、直線に結ばれる具合にして遺贈する』

一

今日のうちにも、　一　誓って、証人の前で、　一　この補足は私の署名をもって最終決定となる」と將軍は説明した、「しかしながらこれは次の意見、及び条件を伴う、つまり、今日、根も葉もない噂に見られるような、ミューティコーンで発砲されたという射撃は、不生起の事象として除外されるべきものであり、それが現実のものであったかは、永遠の沈黙で処理されるべきものであり、この沈黙をミューティコーン人は、現世でも破らないし、墓場の向こうの最後の審判のときでも破らないと誓って守るべきものである」。

クラッハホルダーはこの告知の間、外見上は冷静であった。ただ鼻翼は、その他の顔は悠然としていたが、少しばかり震えて、彼の指先は少しばかり内側に曲がって、あたかもその贈り物を握り締めているかのようなのであった。「將軍殿、神のご加護を祈念してお誓い致します」と今や彼は叫んで、手を誓って上げた。しかしヴェールトミュラーは結んだ。

「違反の場合、沈黙が破られた場合、私はこの遺言を、間近に迫っている戦役から帰還したとき、変更し、抹消することとする。私が死亡して、これができなくなった場合、私はミューティコーン人達に対して、幽霊となって出現し、その違約を処罰するために、十

二時と一時の間に村道を巡察すると誓うものである。一 貴殿はこの条件を果たすご意向かな、クラッハハルダー」。

「我々が口を閉ざさないとすれば」とクラッハハルダーは請け合った、「我々は阿呆に違いない」。

「諸君の女房達はどうだ」。

「それは我々ミューティコーンの男達に任せて頂きたい」とこの老百姓は落ち着いて言って、意味深な手の仕草をした。

「しかしクラッハハルダー、私が帝国から戻って来たと仮定してだな」と將軍は好意的に言った、「我ら二人して私のベランダに座っていて、私が今のように貴殿の肩に手を置いて、貴殿と乾杯し、あれこれお喋りすると致そう。そのとき私がたまたま、あの射撃はいい音がしたなと言ったら、...」。

「どの射撃です、...將軍殿、嘘を言っちゃいけない」と教会最長老は実直に憤慨して叫んだ。この憤慨は滑稽なことに全く演じられたものではなく、正真正銘の刻印を帯びていた。

ヴェールトミュラーは満足して微笑した。

「もう帰ることにしよう、諸君、男衆」と老公は警告した。「不幸なことが起きないように、十五分のうちにも村中に知らせなければならぬ、あの射撃は、...つまりだ、我々は今日、立派な説教を拝聴したとな」。

彼は牧師と握手した。「そして貴殿とも、將軍殿」と彼は言った、「同志として握手です」。

「ちょっとだけ待ってくれ」とヴェールトミュラーは命じた。「そして幸せな父親が二人の手を合わせるときの証人となってくれ。副牧師は遠くにはいないはずだ。私の目の錯覚でなければ、私は彼が垣根を一つ飛びで越えるのを離れて目撃した。彼とは思えない飛び越え方で」。

「ラーエル、我が子よ、早く来い」と牧師は開いたドアから家の中へ呼びかけた。

「すぐに行きます、父上」と返事がした。しかし住まいの中からではなく、外のアーケードのブドウ園亭からであった。

すぐに將軍は窓から覗いて、葉の繁み[格子]越しに、自分の秘蔵っ子二人が一緒にいるのを見つけた。何故一緒なのか分からなかった。

「出て来い、牧人と牧人の連れ合い。アルカディアの園亭から」と老兵士は叫んだ。

するとラーエルは渋々、顔を赤らめて、庇護されていた葉の覆いの下から出て来て、一緒に連れ出したプファネンシュティールと共に、上等の果実の木が周囲にある小さな円形花壇に現れた。花壇は書斎の窓のすぐ側にあつて、この書斎の窓から將軍は興味津々の教会長老達と見下ろしていた。

令嬢は軽快な手に一本の針を持っていて、皆の目の前で、聖職候補生の上着の垂れているボタンを固定した。彼女はその仕事の手を止めなかった。糸を切ってからようやく、彼女は褐色の目を、真面目さと勝ち気とが諍っているその目を、変わり者の自分の守護神に据えて、彼に呼びかけた。

「名親様は、短期間に私の副牧師殿をほとんど壊して砕いてしまわれた。この人を、神様と人様の前に出せるようにするために、また普通に戻す必要がありました。一番上のボ

タンをどうしてくれたのです。それがここにはなくて、父上のボタンを一つ借りて補充しなくちゃいけなかったのです。 ― ここにそのボタンを出しなさい、さもないと、...」。彼女は針をととても反抗的擻猛な身振りで将軍に対して振り上げた。それで男達は皆甲高い哄笑に弾けた。

数瞬後にプファネンシュティールとラーエルは牧師の前に進み、牧師は二人を婚約させ、祝福した。

しかし満足した教会長老達が去って行くと、威厳ある牧師は、その将来の義理の息子に更に手短な警告を述べた。

「一体どうしたことです、副牧師殿。教会近くで、飛び越えて忍び込むとは ― 千切れたボタンとは。どこに威厳があります、職務があります」。

それから彼は将軍の方を向いた、「ワン・ペアできた」と彼は言った、「もう一方のペアを。従兄弟殿、出しなされ」。

そして彼は構わず将軍の上着のポケットに手を入れ、そこから作動の重いピストルを取り出し、それから教会で発砲した軽快に作動するピストルを自分のポケットから出して、見比べながら一緒にした。

かくて、ミューティコーンの射撃は黙殺され、ウィリアム・テルの射的とは反対に、一つの現実の出来事が色褪せた正体不明の伝説へと揮発することになり、この伝説は今日でも根無し草の幽霊として我らの美しい湖畔に漂っている。

しかしたとえミューティコーン人達がお喋りしたとしても、将軍は自分の遺言を取り消せなかったであろう。というのは彼はアウの櫓を見るのは、そのときが最後となったからである。

彼の最後は迅速、曖昧、不気味であった。ある晩、火ともし頃、彼はお供と一緒にドイツの小都市に騎行し、唯一の劣等な旅館で下馬し、参審員を呼び寄せ、徴収を指示した。数時間後、彼は突然病気の発作で倒れ、真夜中の鐘の時、その風変わりな魂は息を引き取った。[1677年12月16日]。

尼僧院のプラウトゥス

或る暑い夏の一日の後、メディチ家の庭園小亭の前に夕べの涼を求めて、教養あるフィレンツェ人の一行が祖国の父たるコジモ・デ・メディチ[1389-1464]の周りに集まっていた。澄み切った夕方の空が煌びやかな、しかし微妙に違う色彩となって、程よく飲んでいる者達の上に黄昏れていた。この者達の中では鋭い目鼻立ちの灰色髪が際立っていて、その雄弁な唇に傾聴している周囲の者達の注目が注がれていた。この洒脱な頭の表情は奇妙に混淆したものであった。快活な額、微笑している口許にある悲しげな体験の影が差していた。

「我がポッジョよ[Poggio Bracciolini 1380-1459,古代ローマ作家の写本を発見。拙訳186頁参照]と一つの間が生じた後、コジモ・メディチが醜い顔に賢い目を浮かべて言った、「最近私は貴公の滑稽噺の小冊子をまためくってみました。勿論それを誦んじている。だから遺憾に思わざるを得なかった、ただ上手く整った洒落た言い回しのみ享受できて、珍しいこと、新規のことをもはや楽しめなかったのだ。貴公は、選択眼を有するから、機知に富んだ愛すべき茶番のあれこれから、十分に洒落が利いていないものとか、利きすぎているものを、決定版の小冊子のときに除外していないとは考えられない。よく思い出してくれ。ほんの微かな当てこすりも察知して、どんな大胆な冗談をも許容してくれるであろうこの仲間内には、未公開滑稽噺を座興として供してくれ。語りながら、すすりながら」、 — 彼は杯を示した、 — 「貴公は貴公の愁いを忘れるといい」。

コジモが町中に周知のこととして当てこすった最近の苦悶は、老ポッジョが、このフィレンツェ共和国の書記、先の五人の教皇達の書記、以前の僧侶にして後の夫が、 — その息子達の一人から受けたものであった。彼の息子達は皆素晴らしい才能がありながら、皆役立たずであった。この残念な息子が父親の老髪をほとんど窃盗、泥棒に近い行為で辱めて、その上この息子の保証人である儉約家のポッジョはかなりの経済的弁済を支払ったのである。

ちょっと思案してこの老公は答えた。「コジモよ、貴殿の趣味に合う例の茶番等は、華麗な花輪同様、ただ褐色の[若い]巻き毛に似合うもので、歯のない口には似合わない」。彼は微笑して、更に可愛い白い歯の列を見せた。「それで」 — と彼は嘆息した、 —

「あの青春沙汰には戻りたくない。たとえその地は無邪気なものであってもな。今は特に私の視点の自在さ、私の人生観の緩さが墮落して、私の息子にとって、 — 何という不気味な増幅作用の結果なのか知らないが、 — とんでもない破廉恥、いや、ならず者行為に至っていると承知しているからな」。

「ポッジョ、それは説教だ」と或る者が反論した、「この世にプラウトゥス[紀元前254頃-184頃]の喜劇を再現した貴公ともあろう者が」。

「ローモロ、貴公の警告には感謝する」と不幸な父親は叫んだ。彼自身立派な社交人として、家庭内の苦悶で客人達を煩わすのは不作法と承知していたので、奮起した。「思い出させてくれて有り難う。『プラウトゥスの発掘』というのが今日諸君に、思いやりのある諸君に、提供しようと思う滑稽噺だ」。

「むしろ『プラウトゥスの盗み』と名付けたらいい」と一人の嘲笑家が反論した。

しかしポッジョは、彼を一瞥だにせず、言った、「面白くて」と彼は続けた、「同時に

こう論ずものであればいい、私に嫉妬する連中が、あたかも私はかの古典作家達を、ともかく私はその発見者であるが、卑怯な、いや恥ずべきやり方で利用したかのように、一乱暴に言って、一あたかも私が盗んだかのように私を迫害する非難はいかに不当なものであるかとな。これほど根拠ないものはない。

周りにある微笑が浮かんだ。これに最初ポッジョは本気で、笑いを拒絶して振る舞ったが、しかし最後は自ら微笑を浮かべて加わった。というのは一人の人間通として、どんなにかさまの偏見であっても、それを根絶やしにするのは難しいと自覚していたからである。

「私の滑稽噺は」とポッジョはイタリアの小説に通例の先駆けの詳しい内容紹介を真似て茶化した。「二本の十字架、重いのと軽い十字架、それに二人の異邦の尼僧、一人は修練女、一人は尼僧院長、これらを扱う」。

「すごい、ポッジョ」と一人の隣人が遮った、「かの誠実なゲルマンのウエスタ[竈]女祭司の類いだな、貴公の素晴らしい旅便りで、リマト河畔[チューリヒ]の湯治場[バーデン]をナイアース[水の精]のように満たしている女祭司だ。九人のミューズにかけて、貴公が書いた最良のものだ。かの便りは千回模写されてイタリア中に広まったものだ、...」。

「諸君らの趣味を知っているから、私は誇張した」とポッジョは冗談を言った、「いずれにせよ、イッポーリトよ、貴公は誠実さの愛好者として、私の異邦の尼僧に喜びを見いだせることだろう。では始めよう。

かの日々、尊いコジモよ、我らが我らのレルネーの蛇[醜いヒュドラ]へと退化した聖なる教会の過剰な頭部を断ち切っていたとき、私はコンスタンツ[ドイツ南部]に赴いて、全教会の公会議という大仕事に従事していた。しかし暇つぶしに、楽しい観劇と、これらの劇はドイツ帝国都市の狭い舞台では、教皇達や異端、香具師、娼婦らに関するこの世紀の敬虔なもの、学問、それに政治の合併したものであったが、それに近辺の修道院での折々の写本探しを当てていた。

様々な痕跡や足跡を追いながら、私は確信に近い推測に至った、つまり近隣のとある尼僧院に一冊のプラウトゥスが異邦の尼僧達の手許にある、それはどこかの廃止されたベネディクト派の大修道院から遺産あるいは担保として紛れ込んだものであろう、と。プラウトゥスですぞ。尊敬するパトロン殿。この偉大な、ローマの喜劇作家の、ほんのわずかな、耐え難いほど好奇心をかき立てる断編しか残されていなかった当時、これがどういうことか考えて頂きたいものです。そのことで、私は眠りを忘れたと、コジモ、信じて頂けましょう。没落した、より偉大な世界の残骸に対する私の敬慕を貴殿はご承知で、後押しなさっていますから。私はただ万事を放擲して、即刻駆けつけていたら良かったのです。不滅のものが、世間を喜ばせることなく、甲斐なく暗闇で腐っている所に。しかしその時は、新しい教皇の選出がすべての者達の心を捉え、聖霊が集まった教父達に、オットー・コロナ[マルティヌス五世、教皇、1368-1431]の功績と徳操とに注意を向けさせ始めていた日々で、それ故刻々の経過、展開は、オットーの支援者や従者にとって、私もその一人で、少しも猶予のないものだったのです。

かくて、私は一人の下級の実直でない探求者に出し抜かれることになった。残念ながら一人の同郷人で、その人の前で、私は嬉しさ余って、かくも偉大な拾得物収集の可能性について無分別に口を滑らしてしまい、そしてこの不器用者は、この古典作家を正当にも不

当にも取得しないまま、結局この古典作家が埃にまみれていた修道院のその尼僧院長に不審に思われて、知らないままこの宝を保有していた尼僧院長の注意を喚起してしまったのです。

ようやく私は自由になって、―― 教皇選挙が間近に迫っていたけれども、―― 頑丈に進んで行く驟馬に乗って、その世界的出来事が生じたら、使者を後から送るよう依頼して行った。私の驟馬の引き手はクールの司教に選ばれて、その従者と一緒にコンスタンツへ来ていたラエティア人で、アンセリノ[ハンス]・デ・スピウーガ[シュプリュエーゲン出身]と称していた。彼は躊躇うことなく私の最初の安い提示額で了承してくれて、我々は信じられないほど安い値段で合意した。

私の頭の中を千もの茶番が去来した。エーテルの空の青さ、北からの新鮮な、ほとんど冷たい息吹と均質に混じり合った夏の気、廉価な騎乗、教皇選挙という厄介事の克服、古典作家の発見という目前に迫っている至高の享楽、こうした天上的安寧のために私ははなはだ爽快な気分になって、ミュージックや小天使の歌声が聞こえた。これに対し、私の同行者、アンセリノ・デ・スピウーガは―― 私の目には―― 憂鬱な物思いに耽っているように見えた。

自らは幸福なので、私は隣人愛から彼をも幸せにしよう、あるいは少なくとも快活にしようとした。そして彼に色々謎かけをした。大抵は人々に馴染みの聖書の話しからである。『知ってるかい』と私は尋ねた、『使徒の頭[ペテロ、使徒言行録12]は鎖からどのようにして解放されたか』。彼はトサナ[トゥージス]のその使徒の教会で、その使徒が描かれているのを見たこと返事した。『ハンス君よ、注意するのだ』と私は続けた、『天使がペテロに語った、<靴を履いて、私の後を来なさい>。そして彼らは行った。ペテロは天使だと分からないままであった。最初と次の衛所を抜けて、門を通り、露地に沿って行った。それからこの案内者は別れた。すぐにペテロは悟った、<自分を導いたのは一人の天使だったと今納得した>と。ハンス君よ、どうしてこの突然の悟りは生じたのか。この有無を言わさぬ確信はいかにして生じたのか、そなたに分かるなら教えてくれ』。アンセリノはしばらく考えていて、それから強情な巻き毛の頭を振った。『いいか、ハンス君』と私は言った、『その問いを解こう。ペテロはその天使が自分の仕事に対し、何のチップも要求しなかったから、天使と分かったのだ。このようなことは現世ではない。そのように行動するのは単に殿上[天上]人だな』。

大衆相手に冗談を言うべきではないだろう。ハンス君は、私が気まぐれに思い付いて発した冗談に一つの意図とか当てこすりを探った。

『その通りです、旦那』と彼は言った、『私は貴殿をほとんどただで案内しています。でも、私は天使でもないけれども、私もチップを要求しません。聞いてください、私の方でもモナスターリンゲンに引かれるものがあるのです』。―― そう彼は尼僧院、我らの旅の目的地のことを呼んだ。『そこで明日ゲルトルーデが、その腰に縄を巻いて、そしてブロンドの髪を鋏で切り落とすのです』。

この力強い若者の日焼けした顔から、ちなみにこの若者は物腰や話し方に―― その血に一滴のローマ人の血が流れていたかもしれません、―― 生来の気品を有していたのであるが、その顔から涙がこぼれた。『キューピッドの弓にかけて』と私は叫んだ、『失恋者だな』。そしてその単純ではあるが、かなり呑み込みにくい話を語って貰った。

自分は司教と一緒にコンスタンツへやって来て、そこで仕事がなく、周辺で大工としての仕事を探しました。この仕事を尼僧院の建物で見つけて、それから近くに住んでいるゲルトルーデと知り合いました。二人は仲良くなって、互いに好意を寄せました。それで一緒にたびたび食事しました。『品行方正な付き合いです』と彼は言った、『健気な娘なのです』。ところが突然彼女は別れると言いました。恋の破局ではなく、何らかの厳格な定めの日が来た按配です。そして彼女がヴェールを被る[尼僧になる]ことを確かなこととして聞きました。明日彼女は尼僧の服を着て、彼は[自分は]この行事に参加して、一人の実直な、少しも気まぐれを起こしていない娘が、恋心を打ち明けているのに、何の思い当たる理由も告げずに、一人の男を袖にして、尼僧になるその次第を自分の目で目撃することになりましょう。ゲルトルーデは自然児で、生活力があって、尼僧にはとても不向きであって、一 不思議なことに、一 彼女自身の言葉で結論付けると、その上尼僧になる気はなくて、いやそれを不安に思い、恐れているのです。

「訳が分からない」と憂鬱なラエティア人は結んで、言い終えた。天の采配で、最近自分の意地悪な継母が亡くなりました。継母のために自分は父の家を出たのです。この家がまた自分には開かれていて、老いた父の両腕も招いています。それ故、自分の鳩[恋人]は温かい巣が得られるわけですが、しかし彼女はただただ不可解なことに僧房に入ることを欲しています。

話し終わるとハンス君はまた悲しげな物思いと頑なな沈黙に陥った。私が尼僧院長の人柄を尋ねると、ようやくその沈黙を破って答えた。彼女は嫌な、小さな女です。しかし腕のいい管理人で、落ちぶれていた尼僧院の家政を立て直して、隆盛へと導いたのです。彼女はアバティス・ツェラ[アッペンツェル]出身で、人々の間では単に『トローゲン出身のブリギットヘン』と呼ばれています。

ようやく修道院が単調なブドウ畑の中から浮かび上がって来た。このときアンセリノが自分を道端の居酒屋に残してくれと頼んだ。今一度ただ一 尼僧服着衣のときに、ゲルトルーデを見たいのだ、と。私は同意して頷き、驟馬から下ろしてもらい、ゆっくりと近くの修道院へ歩いて向かった。

そこでは陽気に営まれていた。修道院の牧草地では大きな、得体の知れないものが、競売に付されていた、あるいは他の目的のために提示されていた。一人の兵士が、頭に兜を被って、時折調子外れのトランペットを吹いていた。ひょっとしたら戦争での戦利品か、あるいはひょっとしたら教会の道具なのかもしれません。尼僧達の中の尼僧院長と繕いのある胴着と古びたズボンの正体の知れない伝令官、その剥き出しの足先が千切れた長靴から見えていたのだが、これらを色とりどりに、平民達や通りがかりの僧侶達が親しげな身振りを取り巻いていた。百姓達の中にはちらほらと貴人がいた。一 このドイツの風景が自称しているトゥルゴヴィアでは、卑小な取るに足りない紋章鳥[貴族]が過剰で、一

しかしまたあらゆる種類の大道歌手、ジプシー、遍歴の群れ、娼婦、ならず者が公会議に引き寄せられて、奇妙な一団となって混在していた。この一団の中から一人、二人と段々に出て来て、ある物を量っていた。それは近寄って見ると、怖気のする昔からの巨大な十字架と分かった。それは途方もなく重いものであるように見えた。というのは最も力の強い運び手であっても、しばらくするとその両手が覚束なくなって、左右に揺れ始めて、他の手や肩が差し出されて、ツェントナーの重さの材木に押し合いへし合い差し出されな

かったら、危険に傾いて、落ちてしまったであろうからである。立腹に歓声や哄笑が混じっていた。この情景のはしたなさを締め括って、野卑な尼僧院長が憑かれた者のように刈り取ったばかりの野原で踊っていた。院長は自分の遺物の価値に有頂天になっていて、

— 私はこの市をぼんやりと理解し始めていた、— それに多分また修道院のワインにも酔っていたのであろう。このワインは巨大の木製の水差しの中、杯も儀式もなく、口から口に渡っていた。

『聖母のふくらはぎにかけて』とこの破廉恥な女は叫んだ、『我らの亡き公爵夫人アマラスヴィンタのこの十字架を私の前で持ち運べる人はいないよ。頑丈な若者でも駄目だね。でも明日ゲルトルートヘンが羽根玉のように浮かせて見せる。死すべき定めはこの被造物が自惚れなきやいいけど。神様にのみ栄光あれとブリギットヘンは申し上げます。皆の衆、この奇蹟は千年も前からのものだが、新品の釘のように新しい。いつも正しく演じられ、明日も天地神明にかけて、上手く行われよう』。

— きっとこの健気な尼僧院長は素晴らしい青天の下、一杯聞こし召していたのであろう。

この茶番の仕組みを、類似の、我が幸多い祖国で体験したものと勘案して、私は理解し、評価し始めたが、

— 他でもない、一時間後には、もっと事情が分かり、最終的に解明したのであるが、しかし私は突然不快な具合に、この真っ赤な顔に白い僧衣の道化女の甲高い囁し声で中断された。見るとその顔は愚かなざるような瞳に、ほとんど見分けのつかない獅子鼻、その鼻からかけ離れてある野獣のような口であった。

『そこの、イタリア人書記』と彼女は私に叫びかけた。私はこの日簡素な旅服で、自分の古典古代の素性を顔に浮かべていた。『ちょっと近寄って、この亡きアマラスヴィンタの十字架を持ち上げてみなさい』。

皆の視線が笑いたそうに私に向けられ、隙間ができて、アレマン[ドイツ]人のしきたり通りに、したたかに前へ突き出された。私は、友の諸君、貴公らに周知のように、私の腕は短くてか弱いと述べて辞退した」。話し手はこの両腕をぶらぶらさせて見せた。

「するとこの恥知らずの女は、私を見つめながら叫んだ。『それだけ一層指は長いのだよね。お上品な旦那』。実際私の指は日々の筆記の演習で、出来上がったもので、しなやかなものだ。しかし周りに立っている人々の群れはどっとした笑い声に弾けた。その意味は私には分からなかったが、しかし私を侮辱するもので、私は尼僧院長を根に持った。不機嫌になり、向き直って、私は近くの教会の角を曲がって、教会中央入口が開いていたので、教会に入った。窓とドームの高雅な丸みのアーチは、近代の尖ったアーチでも、馬鹿げたフランスの渦巻き飾りでもなくて、私の気分をまた澄んで落ち着いたものにしてくれた。ゆっくりと私は内陣の奥への通路を進んで行き、ある彫像に引き寄せられた。それは上方からの明かりで照らされていて、神聖な薄暗がりの中、力強く完成されていて、何か美しい様式のものであるように見えた。私は間近に寄って、期待を裏切られなかった。その石像は二人の、一本の十字架で結ばれた人物を描いていて、この十字架は、大きさ、比例関係から完全に修道院の野原で陳列されているものに似ていた。この双方とも相手を模したものでありましょう。一人の巨大な、茨の冠の女がほぼ水平に、頑丈な肩の力強い両腕にそれを運んでいたが、しかしその十字架の下で転んでいて、衣服から両膝がむき出しで見えていた。この転倒の巨人女の前隣りにより小さな人影があって、愛らしい頭部に小さな冠を被っており、そのより細い両肩は持てない重荷の下、慈悲深くあった。昔の名手

は、一 意図的にか、あるいは多分むしろ技法的手段の欠如から、一 肉体や衣裳を粗野に扱っていて、自分の能力と、自分の魂の情熱とを頭部に傾注していた。頭部は絶望と慈悲とを表現していた。

これに圧倒されて、私は良い明かりを求めて、一步下がった。すると、私の向かい側、この作品の反対側で、一人の少女が跪いていた。多分、この地の生まれの女性、周辺の百姓女であって、石像の公爵夫人同様に、ほとんど力強く造型されていて、白い僧衣のフードがブロンドの重たげなお下げの上、頑丈で稠密なうなじの上に引き下げられていた。

彼女は立ち上がった。というのは彼女は、自らに没頭していて、私が気づくまでは、私に気づかずにいたからで、手であふれ出る涙を拭って、立ち去ろうとした。一人の修練女でありましょう。

私は彼女を押し留めた。そして私にその石像を説明してくれるよう頼んだ。私は公会議での余所の地の教父の一人として、と彼女に私のブロークンなドイツ語で話した。この告知はさほど彼女に印象を与えたようには見えなかった。彼女は簡素に教えてくれた。この像は、一人の昔の女王、あるいは公爵夫人を表現しています。この修道院の設立者です。この女王は、修道請願を行いながら、着衣式に臨もうとされたのです。頭部に茨の冠を被り、肩に十字架を負うのです。『つまり』とこの娘は熟慮して続けた、『この女性は大きな罪を犯していて、夫を毒殺した科ですが、しかしとても高貴な身分の罪で、世俗の正義が裁くことは許されなかったのです。すると神が彼女の良心を咎めて、彼女は大きな苦境に陥りました。自分の魂の安寧に絶望したのです』。長く苦しい贖罪の後、彼女は自分が許されたことの御印を望まれて、この大きな重い十字架を作らせました。これはその時代のどんな強力な男でさえも一人ではほとんど持ち上げられないものでした。そして彼女もその下で転んだことでしょう、仮に聖母様が目に見える姿になって、慈悲深く一緒に力を添えて、神々しい肩をその現世の肩の隣りに差し入れてくださらなかったならば。

ブロンドのゲルマン女性が語った通りの言葉ではなく、それはもっと簡素な言い回しで、いや、粗野で不器用な言葉であったが、しかし野蛮な言語から我らの教養あるトスカナ語には翻訳しがたいもので、翻訳すれば百姓風でグロテスクなものになるが、これはまた、皆さん、当時私が眼前に見たこの反抗的で、青い目の、粗雑ではあるが、均整の取れた面影の偉大な表現とは合わないものでありましょう。

『その話しは信じられる』と私は思わず語った。というのはある異邦の女性のこのような行動は、最初の千年紀のこの薄暗い転換期の時代や習俗に似合っているように見えたからである。『それは本当かもしれない』。

『それは本当です』とゲルトルーデは、石像を陰気に確信した風に見つめて、手短かに激しく主張し、また去ろうとした。しかし私はもう一度彼女を押し留め、貴女は、私の今日の案内者、シュプリーゲンのハンスが語っていたゲルトルーデではないかと尋ねた。彼女は驚くことなく、いや、屈託なくそれを肯って、その粗野な口許にゆっくりとさまよう明かりのように一つの微笑が、褐色の、しかしすでに修道院の空気で青白くなっている顔に広がった。

それから彼女は思案して言った。『私はあの人が私の着衣式に参列すると知っていました。それは都合の良いことです。あの人が私のお下げが切断されるのをご覧になったら、私のことを忘れる一助になりましょう。貴方がせっかくこちらにいらしているのですから、

尊い旦那様、貴方に一つのお願ひがあります。あの人が貴方と一緒にコンスタンツへ戻れたら、何故私があの人を袖にしたのか、そのヒントをあの人に与えてください。私は』

一 そして彼女はほとんど気づかれぬほど赤くなった、一 『あの人とは国のしきりに従って、品行方正に親しくお付き合いしていたのですが。一度ならず私はあの人に私の取り決めのことを話したくなりました。でも私は唇を噛みました。というのはそれは私と聖母様との秘密の取り決めだったからです。話したら駄目になります。でも貴方は、聖職者として秘密の事には通じていらっしゃって、私が話しても裏切りとはならないでしょう。後で、貴方が話してよろしいと判断なさる範囲で、このことをハンスにお伝えください。このことをお話しするのは、ただあの人を私のことを軽薄な女とか、恩知らずの女と見なさず、そのように私のことを記憶に留めていて欲しいと願うからです。

私の事情は次のような次第です。私がまだ年端も行かない子供の頃、一 私は十歳で父親はすでに亡くなっていましたが一 私の母さんが重い病気になって救いようがなくなりました。そこでこの世に一人残されるといふ不安に襲われました。この不安と、それに母さんに対する愛故に、私は至純なマリア様に、二十年間、それまで、あるいはそれに近い期間、母さんの命を救って欲しい、その後身を捧げると願ひをかけました。するとマリア様はそれを聞き入れ、先の聖体祝日まで母さんの命は救われ、その日に亡くなりました。丁度あのハンスが修道院で大工の仕事をしていて、それで母さんのために棺を作ってくれました。彼は健気で、儉約家で、大抵のイタリア人がそうであるように、<謙虚で、分別があります>、アルプスの南側で言われていますように。私どもは二カ国語で話し合えました。と申しますのは、父親が、強靱な誠実な男でしたが、以前、自分の若干の儲けともなって、華奢で臆病な商人の伴をして、何度かアルプスを越えて行き、向こう側から幾つかのイタリア語の片言を仕入れていたからです。そこでハンスは私のことを<カラ・バンビーナ[可愛い子]>と呼び、これに対し私は彼のことを<パヴェレロ[貧乏人]>と呼びました。両方とも良い響きです。もっともこの土地の普通の愛情表現も、それが品良く意味されているとき、誹るつもりはありません。

しかし同時に私の請願が期日となって、私はお告げの鐘の鳴るたびに、警告を覚えることになりました。

そこでしばしば囁き声の物思いが生じました。例えば、<男も女も知らない無邪気な子供の請願だ、それでおまえが身を投げ出すことはない>、あるいは<聖母様は高貴な方だから、お母さんをおまえには多分無料で無償に贈ってくださったのだ>。でも私はそれに反論しました。<取り決めは取り決めだ>、そして<正直が一番長持ちするのだ>。聖母様は約束を守られた。私も約束を守ることにしよう。誠実さと信仰がなければ、この世は成立しない。亡き父親は何と言っていたか。わしは悪魔にも約束を守る、と父親は言っていました、ましてや神様相手だ、と。

そこで聞いてください、尊い旦那様、私の思いを。聖母様が女王の十字架を運んでから、聖母様はその修道院を繁栄させ、大昔から、分け隔てなく、すべての修練女達の運ぶ加勢をしています。それは一つの慣例となっています。何も思わず聖母はなさっています。私はこの目で、一 一人の九歳の女が一 ヴァインフェルデンのリースヘン、病弱な子が、ここで修道請願をして、ツェントナーの重さの十字架を嘲って戯れるように傾いだ肩で運ぶのを見ました。

そこで私は聖母様に申しました、<御身が私を召すのであれば、召し給え。私は 一人に御身がゲルトルーデで、私が聖母であれば、 一人の子供の言うことは言葉通りに受け取らないかもしれないけれども。しかし取り決めは取り決めです。ただ一つの違いがあります。公爵夫人にとっては、重い罪を犯して、修道院に入ることは、容易なことで快適でありました。私にとっては、修道院は辛く悲しい。御身が私の十字架を運んでくださるのであれば、私の心も軽くしてください。さもないと不幸が起きます。聖母様、御身が私の心を軽くできないのであれば、千倍むしろ、私を皆の知っている前で、無様にこけさせて、大地に平たく潰してください>』。

私は、この不器用な物思いが、ゆっくりと進捗しながら、ゲルトルーデの若い額に深い皺を刻むのを目にしていたが、策謀的に微笑して言った。『敏捷で抜け目ない娘なら、つまりこの件から抜け出すことだろうに』。すると彼女の青い目が燃え上がった、『私をごまかせばいいと仰有るのですか、旦那様』と彼女は怒った、『私の今際のときに、父なる神、御子、精霊がお守りくださるべく、私はこの両腕のすべての筋力を使って、実直に十字架を運ぶつもりです』。そして彼女はこの両腕を情熱的に、もうすでに運んでいるかのように持ち上げて、それで僧衣とシャツの袖が広くずり落ちた。そこで私は、フィレンツェ人であるからして、ほっそりとして丈夫な娘の両腕を眺めて、芸術家的に堪能した。彼女はそれに気づいて、額に皺を寄せて、不機嫌に私に背を向けた。

彼女が去った後、私は一脚の告解椅子に腰掛けて、額に手を置いて、考えた。 一 まことに異邦の娘のことではなく、ローマの古典作家のことであった。すると私の心は歓喜した。そして私は声高に叫んだ、『有り難や、不滅の者達よ。この世に喜劇のミューズの寵児が贈られている。プラウトゥスはこちらのものだ』。

友の諸君、機会の巡り合わせで、この成功が私に保証されていた。

我がコジモよ、貴殿が奇蹟についてどのように考えているか私は知らない。私自身はそれについて寛大に考えている。迷信的でもなければ、傲慢不遜でもない。というのは私は絶対的な精神を嫌っているからだ。これらの精神は、説明できない事実が、迷信の一つの靄を引き寄せているときに、全事象を 一月とその暈を 一 検証せずに、区別せずに、総体的に信じてしまうか、あるいは同様に総体的に切り捨ててしまうのである。

説明できないことと、欺瞞、この両者がここで見られると私は思った。

重たい十字架は本物であって、重大な罪の女性、一人の異邦の女が、絶望した巨人的な力と情熱とでその十字架を持ち上げたかもしれない。しかしこの行為は繰り返されず、何世紀もペテン的に猿まねされて来た。このペテンの責任者は誰か。邪宗教なのか、所有欲なのか。これは諸時代の蒙昧のために分からない。しかしはっきりしているのは次のことだ。怖気のする、古来からの黒い十字架、民の前に陳列されている十字架と、順々に、単純で、あるいは了解済みの修練女達や、最近では虚弱で、悪戯っぽいリースヘンによって、その着衣式の際に担がれた十字架とは異なる材質の木材であって、重い十字架が修道院の野原に提示され量られているとき、軽いペテンの十字架は修道院のどこかの隅に保管され、門をかけられていて、明日になって本物の十字架と役目を交換し、人々の目を欺く仕掛けになっているということである。

ペテンの十字架の存在、これが存在することは、私自身の存在同様疑い得ないものであって、私にはこれが一つの武器となった。もう一つの武器は時代の出来事であった。

三人の教皇の退位[Gregor 12. Bendedikt 13. Johann23.]と二人の異端の火刑は、教会を刷新するに十分ではなかった。公会議の委員会は、それぞれ、あれこれの解消されるべき悪弊と取り組んでいた。ジェルソン・篤信キリスト教徒博士[Gerson,1363-1429]と厳格なピエール・ダイイ[Pierre d'Ailly,1350-1420]が出席して、私があるとき書記のペンを執っていたそれらの会議の一つは、尼僧修道院の風紀の改善を行っていた。不確かな女性の手で危険な状態にある偽りの奇蹟や、修道女達の劣等な読書が議題に上がっていた。ちなみに

これらの事柄をこの二人のフランス人は、我々イタリア人にはまさに不可解な術学で扱っていて、これらはとても滑稽な面を含む問題であるのに、ほんの軽い冗談も見せていなかった。要するに、これらの会議の審議という事実が縦糸となり、見せかけの奇蹟という科が私の織物の横糸となって、こっそりと尼僧院長の頭に投げかける私の網が出来上がった。

ゆっくりと私は内陣の階段を上って行き、内陣から右手の同様に高く、大胆にアーチを描いている祭具室の方を向いた。そこには華麗な銘が記された空いた箇所があって、その高い壁に重い十字架は通常立てかけられていて、まもなくまた修道院の野原から戻って来る予定であった。二つの小門が二つの側廊へ通じていた。一方の小門は閉ざされていた。もう一つの小門は開いていて、私は蜘蛛の巣で暗い丸窓の、明かりが乏しい小部屋に立つことになった。見よ、この部屋には、二、三枚の虫食いの板の上であったが、圧縮された修道院の書庫があった。

私の全身が興奮した。私は恋にのぼせた若者と変わらず、リディアかグリユケラ[遊女、ホラツィウスが両者にOdeを書いている]の寝室へ忍び込んだ按配であった。両手は震え、両膝はがくがくで、私は羊皮紙に近付いた。仮にウンベリア[イタリア中部]人[プラウトゥス]の諸喜劇を見つけたら、それに接吻を浴びせて飽きなかったことだろう。

しかし、いや、私は単に儀礼、典礼の書をめくるだけで、その神聖な内容に私はがっかりするだけであった。プラウトゥスの一冊の写本もない。報告は本当だったのだ。もたもたしたあの収集家が、下手に財宝に手を出して、それを持ち上げる代わりに、手の届かぬ深みに落としてしまったのだ。私は

唯一の収穫として、

この埃の中に、『聖アウグスティヌスの告白録』を見つけ、鋭くて細かい冊子をいつも愛好している私は、それを機械的に、習慣通りに、夜間の読書用に懐中にした。すると

そのとき稲妻のように、我が小さな尼僧院長が、祭具室にまたその十字架を運び込ませながら、私は自分の欲求と失望とで呆然としていてその物音に気づかずにいて、開いたままのドアから書庫の私に忍び寄って来た。

稲妻のように、その尼女は、そう申し上げるが、私に罵りながら叱りつけながら突進して来て、いや、彼女は私のトガ[外衣]を乱暴な手で触って、私の胸に収まっていた教父をまた白日の下にさらした。

『これこれ、坊さん』と彼女は金切り声を上げた、『私はすぐに貴方の長い鼻を見て、気づいたよ。イタリア人の本泥棒の一人だ、よくこの頃こちらの修道院に忍び込んで来る輩だと。でも覚えておきな、聖ガルス[没食子インキ]の飲んだくれ僧侶とアッペンツェル生まれの敏捷な女との違いをね。私は知っているよ』と彼女はにんまりして続けた、『猫どもはどんなベーコンを狙っているか。こちらで保存している道化者の本がお目当てだ。私らは誰もその中身を知らなかったが、最近イタリア人のちょい悪が私らのいとも尊い聖遺物を拝みに来て、それからその長い、聖職者の着物の下に』

彼女は私の着物を指し

た、一 『その道化者を失敬しようとしたのだ。そこで私は自分に言った。トローゲンのブリギットヘンよ、騙されちゃいけないよ。この豚皮は黄金の値打ちがあるに違いない。イタリア人が縛り首覚悟で来ているから。だってね、坊さん、こちらではこう言うのだ、<一本の綱相当のものを盗めば、縛り首>。このブリギットヘンは、愚かじゃない、学識あるお友達に打ち明けたのだ。この人、骨皮筋右衛門の、ディーセンホーフエンの坊主でね。私らのワインを褒めては、時に尼僧達に珍妙な冗談をする人だ。この人がそのおかしな、黄色くなった飾り文字を調べた。するとくたまげたね、尼僧院長>と彼が言った、<これは商売になる。これを基にこの修道院では一軒の納屋と絞り器を得られるぞ。この本を取って、院長、これを寝床に隠しなさい、そしてこれを尻に敷いてな、一 この本はそう言うのだ一 そして、一 聖母様の王冠にかけて、一 その上に寝て、正直な買い手が来るまで待ちなさい>と。そのようにブリギットヘンはしているのだ、それ以来ちょっと寝心地が悪いのだが』。

私はウムブリア人のこの夜の臥所について微笑を浮かべた。この臥所は冥界の三人の裁判官が彼の罪に対して指定したかもしれない所だ。そしてこの状況下で私にふさわしく威儀を正して、真面目な、咎め立てする顔つきになった。

『尼僧院長』と私は厳かな調子で言った、『そなたは私を誤解している。そなたの前にいるのは、公会議からの使節で、コンスタンツに集合している教父達の一人だ。尼僧院改革のために構成された聖職者達の一人なのだ』。そして私は堂々と記された旅館の勘定書を広げた。というのは、秘蔵された喜劇詩人が間近にいると分かって有頂天になっていたからだ。『第十七回の全教会公会議の』と私は読み上げた、『名において、その全権の下、キリスト教徒の女司祭達の両手が、ラテン語のものであれ、俗語の一つで記されたものであれ、かの風紀上いかがわしい文書の一つで穢されてはならない。それらの発明は魂を損なってきたものである。...敬虔なる院長、私は貴女の貞潔な耳をこの難ずべき者どもの名を告げて、汚すことは許されないのであるが、...』

ペテンの奇蹟、伝統的なものであれ、一回限りのものであれ、我々はこれを容赦なく厳格に取り締まるものである。故意のペテンと認定されることになったら、その科の女性は、一 たとえ尼僧院長といえども、この瀆神行為を火刑によって容赦なく償うことになる』。

尼僧院長は仮面のように青ざめた。しかしまた嘘つきの尼女は驚嘆に値する平静さを取り戻していた。

『神は、称えられ、称賛されよ』とこの尼女は叫んだ、『ようやく神がその神聖な教会に秩序をもたらされた』。そして馴れ馴れしくにやりと笑って、その戸棚の隅から優雅に装丁された小冊子を取り出した。『これは』と尼女は言った、『イタリア人の枢機卿、私どもの客人が残したものです。その方はこれを昼のうたた寝のときに読んでいました。これを検分したディーセンホーフエンの坊さんはこう宣告されました。これは文字の発明以来、その上僧侶によって書かれたものの中で、最も悪質なもの、冒瀆的なものだ、と。敬虔なる教父様、信頼してこの汚物を貴方の手にお渡しします。このペストから私をお守りください』。そして彼女は私に一 私の滑稽本を渡した。

この不意打ちは聖職者のこの尼女の意地悪というよりは、むしろ偶然のせいであったが、それでも私は侮辱を感じ、不機嫌になった。私はこの小さな尼僧院長を憎み始めた。とい

うのは我らの文書は我らの血肉であって、私は私の文書では軽やかに、品行方正なミュージムも、無謬の教会をも侮辱せずに歩いていると自負しているからである。

『よろしい』と私は言った、『尼僧院長、そなたは第二の肝心な点でも科はないと判明して欲しいものだ。蝟集している大衆にそなたは公会議の間近で、その目の下で』と私は非難一杯に語った、『一つの奇蹟を約束した。とても大声で市で呼ばわって、それで今や引っ込みがつかなくなっている。それが賢明であったかは分からない。驚くなよ、尼僧院長、そなたの奇蹟は検分されるのだ。そなたは墓穴を掘っている』。

この尼女の両膝ががくがくとなった。その目は空ろになった。『付いて来なさい』と私は厳格に言った、『この奇蹟の仕組みを視察しよう』。

彼女は打ちのめされて付いて来た。我々は祭具室に入った。そこへは本物の十字架が戻されていて、貴重な部屋の広い薄暗がりの中、その切れ目や亀裂と共に、その巨大な影を投げかけて壁に頑丈に立てかけられており、あたかも今や始めて、絶望した偉大な罪の女がそれを握り、その下で跪いて沈み、すでに額が石の平面に触れた瞬間、天の女王[聖母]が出現し、彼女の加勢をしたかのようにであった。私はその重みを量った。しかし一瞬であれ持ち上げられなかった。それだけにこの手に負えない重荷を玩具とすり替える厚かましきは、一層滑稽に思われた。私は決然と、高く狭い小門の方を向いた。この奥に玩具があると私は推測した。

『鍵を出しなさい、尼僧院長』と私は命じた。この尼女は私びっくりした目で見つめていたが、破廉恥に答えた。『なくなりました、司教様、十年以上昔からのことです』。

『尼女』と私は恐ろしく真面目に言った、『そなたの命がかかっているのだ。向こうの方に私と昵懇のドカブルゴ伯爵の奉公人の家がある。向こうへ私は加勢を求めると、自ら出向くことになるぞ。こちらで本物とそっくりの軽い偽の十字架が見つかったら、そなたは罪の女として、異端のフスのように、火あぶりの刑だ。フスよりも罪は軽い』。

さて一つの静寂が生じた。それからこの尼女は — 歯ががたがた震えたのか、歯ぎしりしたのか分からないが、 — 曲がった歯の古くさい鍵を取り出して開けた。にんまりした — 私の分別は間違っていなかった。高い煙突に似たこの小部屋の壁に亀裂、ひび割れのある黒い十字架が立てかけられていた。私はこれをすぐに握って、難なくか弱い両腕で空中に持ち上げた。そのでこぼこの具合すべて、あらゆる細部において、偽造十字架は本物の十字架を手本に作られていて、鋭い目が見ても、本物そっくりで、ただ十分の一の軽さであった。空洞なのか、それともコルクとか他の最軽量の素材で仕上げられているのか、速やかな経過と慌ただしい出来事のために、これを確認するに至らなかった。

私はこの完璧な模倣に感嘆した。私はこう考えた。ただ偉大な技芸家のみが、ただイタリア人のみがこれを仕上げることができよう。そして私は祖国の名声に賛仰していたので、こう言葉に発した。『完璧だ、名手の業だ』。 — まことにこの偽造ではなく、そのために費やされた技芸を称えていた。

『悪太郎、悪太郎』と指を上げて、この恥知らずの尼女はにやりと笑った。この女は私を注意深く観察していたのであった。『私にかまかっていたんだね。何を支払えばいいか分かっていますよ。あの戯作者をすぐに取って来るから、持って行きな。そして口をぴたりと閉じて、神様と出て行きな』。[ローマの]七つの丘で、二人の鳥占い師が出会って、古代の慣用表現に従って、互いに完爾として微笑したら、その方が我が尼僧院長が顔を歪

めて、次のシニクな言葉に翻訳されるような、不純な哄笑よりももっと上品な芝居であったろう。つまり『秘中の玉はどこにあるのか、皆お見通しだよ。我らは皆悪党だから、誰も上辺を取り繕うことないよ』。

しかし私は、その間、この役立たずの尼女の処罰を考えていた。

そのとき突然生じた静寂の際に、近くの内陣からちょこまか歩き、囁き声、くすくす笑いを耳にして、我々は暇で好奇心の強い尼僧達に盗み聞きされていると察した。『私の大事な操にかけて』とこの尼女は誓った、『司教殿、ここを離れましょう。どんなこの世の宝を出されても、私は貴方と一緒に所を尼僧達に見られたくありません。貴方は風采の立派な殿方ですし、私のシスター達の舌鋒は、鋏やナイフのように鋭いからです』。この思慮はもっともなものと思われた。私は彼女を去らせ、尼僧達と一緒に行かせた。

しばらくして私も祭具室を後にした。ただ私は偽の十字架の部屋のドアを錠に入れるとき、慎重に行って、鍵を錠の中で回すことをしなかった。この鍵を引き抜いて、私は懐中に入れ、そしてこの鍵を内陣の二つの椅子の間の隙間にすべり込ませた。それは今でもそこにあるかもしれない。私がこうしたのは、何か明確な計画があったわけではなく、何らかの神、あるいは女神の囁き声に従っただけのものである。

私が天井の低い院長の部屋で、尼僧院長と会い、修道院の臭いに包まれていたとき、私はミュージズの無垢な戯れへの欲求を大いに感じ、嘘を掴まえての虚辞虚言騒ぎが嫌になっていて、手短に済ます決心をした。聖職者のこの尼女が、この百年続くいかさま劇の内情をどのようにして知るに至ったのか、私に白状する必要がある。私は二、三の大法官の勅令でもって終わりにしよう。尼女は告白した。職務上の前任の女性が、臨終のとき、私と告解の神父だけにしました。この両人が私の心に、尼僧院長よって代々受け継がれている偽の奇蹟を、修道院経営的安寧として任せました。告解の神父は、一 そう彼女はお喋りして語った、一 この尊いペテンの代々の古さ、その深い意味、その教化的力を称えて、終わりを知らないのです。どんな説教よりも、立派に、得心が行くように、このいかさま奇蹟は、民衆に対し、信仰生活の最初の難しさと後年の容易さとを絵解きしてくれるのだ、と。この象徴は哀れなこの尼女の頭脳をととも狂わせており、この尼女は一度にこう主張する始末だった。自分は何も不正なことを犯さなかったし、とにかく子供のときには正直なものでした、と。

『私がそなたを放免するのは聖母教会のためだ、そなたの火刑で、その炎が教会に偽りの明かりを投げかけては困るからな』と私はこの百姓的論理を断罪して、彼女に手短に命じた。この宣伝された奇蹟は、今一度演じられた後、一 この最後の芝居を止めさせるのは賢明とは思えないから、一 この偽の十字架を焼き払うこと、一 そしてプラウトゥスを即刻引き渡すこと、と。

尼僧院長は悪態をつきながら、吠えながら、従った。彼女はコンスタンツの公会議の諸規律に従った。これは私の口が定めたもので、集まった教父達に前もって諮ったものではなかったが、きっと彼らの精神、意味にかなうものであったろう。

ブリギットヘンが私にぶつぶつ言いながら、写本を持って来ると、私は環状の壁に設置されている修道院の客室の快適な小部屋に逃げ込み、一 不作法な尼女をドアから追い出し、このウムブリア人の滑稽な仮面と閉じこもった。そこでは私を邪魔する物音はなかった。窓の前の野原で百姓娘達が歌う童歌のリフレインは別である。これは一人っきりの

私を更に楽しませてくれた。

勿論しばらくすると外で、聖職者のこの尼女が大いに興奮してノックし、叩かれた重い樫の木の前に対し、絶望的に拳で叩き、偽の十字架の置かれた開いたままの小部屋の鍵を求めた。私は遺憾ながらと彼女に手短かに本当のことを知らせた。鍵は自分の手許にはない、と。そして更に彼女に注目を払わず、至高の享受の天国にいて、この不幸な女が、煉獄にいる魂のように、嘆こうが、呻こうがそのままにしていた。

光の許に歩み出る古典作家、晦渋な思索家ではなく、崇高な詩人で、いや、すぐ間近にあるもので、永遠に惹き付けるもの、世間の広大さがあり、人生の鼓動があり、ローマとアテネの市場の哄笑があり、機知と言葉のやり取り、言葉遊び、情熱、喜劇的拡大鏡による穏やかな誇張による人間性質の厚かましさがある。 — 私は一作品を読みながら、すでに熱く飢えた視線で次の作品を見張っていた。

私は機知的『アンフィトリオ』を読み終えていて、すでにけちん坊の比類ない仮面を着けて、『アウルラリア』[黄金の壺、モリエール『守銭奴』の種本]が私の前に広げられていた。

— そのとき、私は読み止めて、椅子の背もたれに寄りかかった。というのは目が痛くなったからである。黄昏れて、暗くなっていた。野原の娘達は十五分ほど飽きもせず、他愛ない輪舞を繰り返していた。

『アーダムには七人の息子がいてさ、...』。

今や彼女達は巫山戯て、新しいリフレインを始めて、滑稽に決然と歌った。

『修道院には入りません、

嫌よ、尼さんにはなりません、...』。

私は背を伸ばして、この独身尼僧への幼い反対者達を眺めて、無邪気な様を楽しもうと思った。しかし少女達の遊びは少しも無邪気なものでなかった。少女達は歌い、上の格子の付いた窓に向かって、肘で付き合い、視線を投げ合っていて、意地悪さと他人の不幸を喜ぶ気持ちが混じっていた。この窓の向こう側に多分ゲルトルーデはいると少女達は察していた。それともすでにゲルトルーデは祭具室で跪いていたろうか。向こうの、永遠の明かりの青白い微光の下、着衣式を控えた娘達の慣習に従っていたろうか。この娘達は夜、この尼僧としての天上的結婚式の前、祈って過ごすものである。しかしこれは私が案ずるに及ばない。私は吊り下げランプを点して、壺喜劇[『黄金の壺』]を読み始めた。

私の明かりの油が切れて、私の疲れた目の前で文字が漂いだして初めて、私は臥所に身を投げて、落ち着かない微睡みの中に沈んだ。やがて私の周りにまた滑稽な仮面が登場してきた。こちらでは一人の『ほら吹き兵士』が大言壮語しているかと思うと、あちらでは酩酊した青年が恋人の娘に接吻していた。娘は首をしなやかにのけぞらせて、その接吻に答えていた。すると — いつの間にか、 — 陽気な古代のならず者どもの間に、一人の素足の、肩幅の広い異邦の女が、一本の縄を巻き付けて、女奴隷として市場に連れ出されて来て、そしてその陰気な眉毛の下から、私を非難一杯に脅すような目で見つめている、と思われた。

私は仰天して、微睡みから飛び起きた。朝が白み始めた。小さな窓の半分が夏の蒸し暑さのために開いていて、私は近くの修道院教会の内陣から、単調な叫び声を耳にした。それは或る詰まった呻き声から、或る強力な泣き声に不気味に移るものであった。

我が学識ある高名な友よ」と語り手自身が一人の威厳ある男性に向かって、話しを中断

した。この男性は暑い夏にもかかわらず、その外套で、古代人のように襦のドレープを作っていた。「我が偉大な哲学者殿、誓って、良心とは何か、教えて頂きたい。良心とは一般的なものか。少しもそうではない。我々皆が、良心のかけらもない者どもを知っており、ここで一人だけ名を挙げると、我らの教皇ヨハネス二十三世で、彼はコンスタンツで退位させられたが、良心を有しなかった。その代わり、とても幸福な気質で、とても快活、ほとんど子供のような情動の持ち主と言ってよく、それで彼は、不埒な行状の最中、睡眠のとき霊が出現しても不安に思うことはなく、毎朝昨夜寝たときよりも上機嫌で目覚める人物であった。彼が囚われているゴットリーベン宮殿で、彼を告発する書状を開いて、私が彼にその罪悪の総額を — それは教皇名数字よりも十倍沢山あるもので、その上、極悪非道の犯罪を — 臆した声で、羞恥で赤面しながら読み上げたとき、彼は退屈してペンを握り、その聖務日課の聖女バルバラに髭を書き入れていたものです。

いや、良心というものは、一般的なものではない。そのようなものを所有している我々の間でも、良心はプロテウスのように変幻自在で、色々な形で現れます。例えば、取るに足りぬ私の場合、それが一つの絵や音色となって具体化し得るときには、いつでも目覚めます。最近私は、我らの幸せなイタリアがお蔭で呻吟の憂き身に遭っているかの小暴君どもの一人[後のAlfonso d'Este、二人の兄弟を幽閉、『アンジェラ・ボルジア』参照]を訪問して、快適な夕べの時間を美しい女達とワインを飲みながら、リュートの音を聞きながら、ある風通しの良い女墻に座していたとき、それは宮殿の塔から突き出て、涼しい川を深く見下ろすところで、私の下である溜め息を耳にした。それは一人の囚人の男であった。私の悦楽は消え、私はほどなくして辞去した。私の良心は咎められ、人生を享受すること、接吻し、飲みながら、笑いながら、この惨めな男の側にいることは難しくなった。

同じようにその時私は、一人の絶望した女性の間近な叫び声に耐えられなかった。私は着物をまとって、薄明かりの回廊を通して、内陣へ忍んで行った。私がプラウトゥスを読んでいる間に、ゲルトルーデに何かあったに違いない、と私は自分に言った。決心の瀬戸際で、彼女はどうしようもなくこう確信するに至ったのであろうか。つまり、自分はこの仲間、この空虚さの中で、あるいは — もっとひどいことに — 修道院の腐敗の中で、その卑劣な仲間に関じ込められて、卑劣な仲間を馬鹿にしながら、この仲間憎悪されて、破滅するつもりである、と。

祭具室のドアのところで、私は聞き耳を立てて、立ち止まり、ゲルトルーデが本物の重い十字架の前で、両手を揉み合わせているのを見た。まことに両手は出血していた。彼女の両膝も血を出していたかもしれない。というのは彼女は一晩中祈っていたであろうからである。彼女の声はかすれ、神様との彼女のお喋りは、自分の心と言葉を汲み尽くした後、最後の力を振り絞ったかのように、強引で野蛮であった。

『聖母マリア様、私を憐れみ給え。私を御身の十字架の下、こけさせ給え。それは余りに重い。私は僧房が怖い』。そして体から巻き付いた蛇を放すかのような身振りをして、それから極度の心労の中、自ら羞恥を踏み潰して、『私に役立つものは』と彼女は叫んだ、『太陽に雲、小鎌に大鎌、夫に子供です、...』。悲惨さの最中でも、私はこの汚れなくなされた人間的吐露に微笑せざるを得なかった。しかし私の微笑は私の唇から消えた。...突然、ゲルトルーデは飛び起きて、不気味に大きな目を青白い顔から壁のある箇所じつと向けた。その箇所には誰のものか分からない赤い斑点が染みこんでいた。

『聖母マリア様、私を憐れみ給え』と彼女はまた叫んだ。『私の肢体は僧房に収まるものではありません。私は天井に頭をぶつけます。私を御身の十字架の下、沈め給え。私には重すぎます。でも御身が、私の心を軽くしないまま、私の肩の十字架を軽くし給うなら、ご覧あれ』、 — そして彼女はその邪悪な斑点を凝視した、 — 『ある朝、私の頭蓋が砕かれて、見つかりましょう』。私は際限のない同情に駆られた。しかし同情だけではない、心苦しい不安もあった。

ゲルトルーデは、何らかの神聖なものを保管している或る長持ちの上に腰掛けた。そして神様との闘争のとき、解けてしまったお下げのブロンドの髪を結った。その際我知らず、半ば悲しく、半ば戯けて歌った。その力強いアルトの声ではなく、見知らぬ高い子供の声であった。

『修道院に私は入ります、
哀れな尼僧にござります、...』。

百姓の子供達が彼女を嘲笑したときのあのリフレインを茶化していた。

それは彼女を待ち受けていた狂気で、それと一緒に彼女は僧房へ入るものであった。しかし最良にして最大の者[ジュピター]が私をその手足として利用し、私に、どのような犠牲を払おうとも、ゲルトルーデを救出するように命じた。

私も勝手に信心を発揮して、かの古代人がパラス・アテネとして祈願し、我々がマリア様と呼ぶかの乙女[処女]の女神に願かけた。『御身が誰であれ』と私は両手を挙げて、祈った。『ある者達が言うように英知であろうと、別な者達が主張するように慈悲であろうと、 — いずれにせよ、英知ならば、世慣れぬ子供の尼僧請願を聞き流し、慈悲ならば、未熟娘の愚かな約束故と大人の娘を拘束し給うな。微笑して無効な請願を解き給え。女神よ、御身の件を私に任せ給え。私に恵みを給え』。

私は裏切りを恐れていた尼僧院長と、ゲルトルーデとは更に付き合わない約束していたので、私は古代人のやり方で、修練女の三つの象徴的行動によって真実を明らかにする決心をした。とても明らかなもので、百姓娘の固い頭でも真実を理解するに違いないものであった。

私はゲルトルーデを見やりながら、十字架の前に進みでて。『後である物をまた見分けられるように、これに印を付けよう』と私は術学的に言って、私の鋭い旅用の剣を取り出した。これは我らの著名な市民仲間、刀鍛冶のパンタレオーネ・ウブブリアーコが製造したもので、私は中央の桁と横桁の間に小さくない木っ端をさながら十字架の腋の下のよう

に削り取った。
二回目として私は五歩測って歩いた。それから喉全体から笑いを発し、大げさな身振りを演じた。『おかしな顔、コンスタンツのホールでの、私の荷物が着いたときの、ポーターの顔だ。彼は下の強大な荷物、とてつもない長持ちに目を留めて、袖を肘の上で縛って、両手に唾を吐き、 — 粗暴な奴 — どの筋肉も最大の力仕事のために引き締めて、 — 空の箱という何でもない荷をいとも軽々と肩に持ち上げて、肩をびっくりさせた。ワッハッハ』。

三回目、最後のとき、私は戯けて、厳かに本物の十字架と上手く閉ざされていない小部屋の偽の十字架の間に立って、両方を何度か指さして、謎かけをした。『真実が公開され、嘘が秘匿される』。 — さあ — 私は両手で拍手した、『嘘が公開され、真実が秘匿

される』。

私は薄暗がりの中に座っている修練女を盗み見て、この三つの神託の効果を、この異邦の女性の表情から読み取ろうとした。この表情に、落ち着かない緊張と、燃え上がる怒りの最初の稲妻を私は感じ取った。

それから私はまた自分の部屋に戻り、そこを出たときと同様に慎重に忍び足で行き、服を着たまま、臥所に身を投げ、安堵した良心の甘美な微睡みを享受した。そして修道院に集う人々の騒がしい声と、私の枕元にまで轟く祝典の鐘で目が覚めた。

私がまた祭具室に入ると、丁度ゲルトルーデが、瀕死の者のように青ざめて、断頭台へ導かれる者のようで、多分不実な十字架交換のために昔から設定されている隣の礼拝堂への祈願詣でから戻って来たところであった。神の花嫁の化粧が始まった。詩篇を頌ずる尼僧達の輪の中で、修練女ゲルトルーデは粗野な、三重の綱を巻き付け、それからゆっくりと、その力強い、しかし優美な形の両足から靴を脱いだ。今や彼女には茨の冠が渡された。これは、象徴的な偽の十字架とは違って、固い、本物の茨で編まれていて、鋭くその尖端で刺すものであった。ゲルトルーデはそれを切望して握り、残酷な欲求で自分の頭につんと押し付け、頭から若い血の温かい雨が吹き出すことになって、重たい滴となり、その簡素な額に滴り落ちた。ある崇高な怒り、神々しい裁きが、この百姓女の青い目から破壊的に燃え出で、それで尼僧達は彼女を恐れ始めた。尼僧達の中の六人が、この六人には尼僧院長が敬虔ないかさま芝居を教えていたかもしれないが、今や彼女の正直な肩にペテンの十字架を、無様な洗面と共に、あたかもこの玩具は持ち運べないと言いたげで、その上吠えるような顔つきまでして、それで私は実際この茨冠に神々しい真実を見ている思いがした。公然と人間の不正によって崇められ、祝われていて、しかし裏面ではこの不正の嘲笑を受けていたのである。

今やすべてが迅速に雷雨のように展開した。ゲルトルーデは私の剣が本物の十字架に深い印を刻みつけた箇所に素早く視線を送った。偽者にはそれがないと気づいた。軽蔑して彼女は軽い十字架を、両腕で抱えずに、肩から外した。それからその十字架をまた甲高く嘲笑しながら、欣喜雀躍、石の地面にがらくたとして壊してしまった。そしてすでに彼女は一つ飛びで、今や本物の、重い十字架が隠されている小部屋のドアの前に立っていて、それを見つけ、量り、あたかも一つの宝を見つけたかのように野蛮な歓声を上げて、それを助けを借りずに右肩に持ち上げ、勝ち誇って自分の頑丈な両腕で抱き締め、その重荷と共に、ゆっくりと歩きながら、内陣の方を向いた。彼女はそこの広い舞台に、人々の群れを目にすることになったが、それは、息を呑んで、聞き耳を立て、頭と頭を寄せ合っている、貴族、僧侶ども、百姓ども、つまり民衆全体で、教会の内陣に詰めかけているのであった。悲嘆の声を上げて、叱りながら、脅しながら、誓いながら、尼僧院長が尼僧達と一緒に彼女の行く手を妨害した。

しかし彼女は燃えるような目を上に向けていた。『聖母様、今です。正直に裁き給え』と彼女は叫んで、それから力強い声で言った、『空けなさい』。梁を群衆の中、運ぶ職人のようであった。

皆が引き下がり、彼女は内陣へ踏み込んだ。そこには、司教の代理人を筆頭に、田舎の聖職者達が彼女を待っていた。皆の視線が重荷を負った肩と、血の滴る顔に集中した。しかし本物の十字架はゲルトルーデにとって重すぎて、それを軽くする女神はいなかった。

彼女は胸でぜいぜい言いながら歩み、ますます低く、ますますゆっくりとなって、その素足は大地に張り付き、根付いてしまったようであった。彼女は少しばかりよろけ、気を取り直し、またよろけ、左膝が沈み、それから右膝で立ち、懸命にまた立ち上がろうとした。今や左手は十字架から離れ、逸れて、前のめりになって、大地を支えに、一瞬重荷全体を受けていた。それから腕の関節が音を立てて崩れた。茨冠の頭が重々しく前方に傾いで、激しく石の平面にぶつかった。この沈んだ女性の上をがらがらと十字架が転がって、彼女の右手はこの十字架を、気を失うほど転倒してから、ようやく放した。

これは流血の真実で、いかさまのペテンではなかった。一つの溜め息が数千人の胸から生じた。

びっくりした尼僧達によって、ゲルトルーデは十字架の中から引き出され、起こされた。彼女は転んだとき、意識を失っていた。しかしすぐにまたこの力強い少女は正気を取り戻した。彼女は手で額を拭った。彼女の視線は、自分を押し潰した十字架に落ちた。彼女の顔には、女神の欠如した加勢に対する感謝の微笑が広がった。それから彼女は天上的陽気さで、いたずらっぽい言葉を述べた。『聖母様、御身は私を望まれている。だから別の男の方が私を望まれますよ』。

まだ茨冠を被りながら、その血の出る先端を彼女は感じていないように見えたが、彼女は今や足を、内陣から下の身廊へと導く階段の一番上に置いた。同時に彼女の両目は人々の中を探して、さまよい、そして探している者を見つけた。大きな静寂が生じた。『シュプリーゲンのハンス』とゲルトルーデは大声で、聞き取れる声で始めた、『私をあなたの妻にしますか』。『勿論いいとも。幾千もの喜びだ。ただ下りて来なさい』と楽しげに下の身廊から頼もしい男性の声が答えた。

かくて彼女はそのようにして、悠然と、しかし喜びで輝いて、階段を一步ずつ進んだ。再び単純な百姓女となっていて、絶望して皆の前で演じた感動的な芝居を、多分直に喜んで忘れることであろうが、今や彼女の謙虚な人間的希望が叶えられて、日常生活に戻って良いのであった。私を笑い給え、コジモ殿。私は幻滅していた。ほんのしばらくの間であれ、この百姓女は私の興奮した感覚の前では、より高次の本質の体現として、魔神的な被造物として、歓声を上げて見せかけを破壊する真理として立っていたのである。しかし真理とは何かとピラトゥスは尋ねた[『ヨハネの書』18-38]。

こうしたことを夢想しながら、同じく内陣から身廊へと下りて行く途中、私は私の使者から袖を引かれた。使者は、オットー・コロナが突然、熱狂的歓呼の中、選出された教皇選挙のことを、二、三の珍しい副次的事象と共に報告した。[1417年11月11日]。

私がまた見上げたとき、ゲルトルーデは消えていた。しかし興奮した人々は意見が割れて、騒ぎ荒れていた。向こうでは男達の塊の中で声がした。『鬼婆め、女香具師だ』。尼僧院長に対して言われていた。『罪深い、恥知らずの女』。これはゲルトルーデのことであった。しかし先の者達が、敬虔な詐欺の事を見抜いていたか、後の者達が、ゲルトルーデの世俗的な志操で奇蹟が壊されたと思っていたか、確かではないが、いずれにせよ、

一 両方とも聖遺物のご威光は殺がれてしまって、奇蹟の行事は終わっていた。

民衆から粗放に叱られて、勇敢なブリギットヘンはしたたかにまた叱り始め、居合わせた者どもの当惑した様々な顔は、訳知り顔の抜け目ないものから、低級な全く素直な愚鈍な顔まですべての諸段階が見られた。

私は僧侶として自覚し、怒りに終止符を打った。説教壇に上がって、私は、集っているキリスト教徒に厳かに告知した。『教皇オットー・フォン・コロナが選出されました』。そして高らかにテ・デウムを歌い始めた。これにまず尼僧のコーラスが続き、それからすべての民衆がどよめいて続いた。賛歌を歌い終わると、貴族や百姓は、我先に、その馬に乗ったり、あるいは徒歩でと、コンスタンツへ向かい始めた。そこでは三教皇鼎立[教皇の冠は三重冠でもある]の終わった後、町と地球[urbi et orbi]へと発せられた祝福が三倍強く効果を発揮するに違いなかった。

軽輩の私は、回廊へと忍び出て、プラウトゥスをこっそりと取りに部屋まで戻った。再びこっそりと去りながら、腋に写本を抱いて、途中尼僧院長に出会った。院長は、極めて管理人的性格で、偽の十字架の破片を大きな籠に入れて、丁寧に台所に運んでいた。私は難問解決の上首尾を彼女に祈った。しかしブリギットヘンは騙されたと思って、憤然と私に嘔みついた。『消え失せろ、イタリア人悪漢のお二方』。これはウムブリア人、マルクス・アキウス・プラウトゥスとトスカナ人、貴殿らの市民仲間、ポッジョ・ブラッチョリーニのことでしたろう。それからやはり巻き毛頭の、可愛いブロンド髪の少年が、ラバを私の前に連れて来た。これはゲルトルーデと一緒に去るシュプリューゲンのハンスが、私のためになおも気にかけて手配した少年で、この少年が私をコンスタンツへ連れ戻してくれた。

友の方々、拍手喝采。これで終わりです。この小話よりももっと長く続いたコンスタンツの公会議が同様に終わったとき、私は私の恵み深い主人、神聖なマルティヌス五世と一緒に山々を越えて戻り、危険な隘路の更に北方にあるスピウーガ[シュプリューゲン]の旅館で、我らのホスト達、健全に繁栄しているアンセリノとゲルトルーデに出会った。ゲルトルーデは陰気な僧房の中ではなく、風の吹き抜ける岸壁の谷にいて、胸に一人の子供を抱き、結婚生活の十字架を肩に担いでいるのであった。

貴殿にとって、コジモ殿、この未刊行滑稽噺はプラウトゥスの写本への満更でもない添え物であって欲しい。この写本を私は貴殿のこの時の恵みに対し、いやもっと正確に言って、貴殿がその『父』である祖国に対し、そして貴殿の広間がそこに見られる財宝と共に開かれている学問に対して贈ることにする。

私はこの唯一の写本を遺言として貴殿に遺贈するつもりであった。これは存命の私が、その十倍のお返しを期待してはまずいからだ。貴殿は自らに献呈された贈り物には気前よくそうする習慣で、これを一度たりともゆるがせにはしないのだが。しかし」　一　とポッジョは憂鬱そうに溜め息を吐いた、　一　「私の息子どもが、私の遺言を尊重するか分からないものだから」。

コジモは愛想良く答えた、「私はその両方に対し、貴公のプラウトゥスと貴公の滑稽噺に対し感謝する。疑いもなく、貴公は当時若くて、そのような具合に生きて行動したのであろう。しかし年を経た者として、貴公は貴公のその年の英知をもって我々に語ってくれた。これを」　一　と彼は一つの貴金属の、笑うサチュロスの描かれた杯を持ち上げた、「私の実直なポッジョとそのブロンドの異邦の女性に捧げよう」。

人々は飲んで、笑った。それから会話はプラウトゥスから古代の千もの引き上げられた財宝や広げられた羊皮紙に、そしてこの世紀の偉大さへと移って行った。

グスタフ・アドルフの小姓

1

聖ゼーバルトにほど近い地のニュルンベルクの名家の帳場で、父親と息子が大きな書き物机に対面して座っていた。重要な仕事の清算に、緊張して集中していた。兩人とも、それぞれの紙片に、同じ長い一連の欄の合算をして、それから両者の結果を見比べて、確実なものとしたいと願っていた。父親の造作とそっくりな華奢な若者が、まず、尖った鼻を自分の飾り文字で記された数字から上げた。彼は合算を終えていて、その心配症の細面に、一種自己満足の色を浮かべて、もっと慎重な父親を待っていた。 — そのとき、従者が入って来て、重い封蝋の、大きな一通の書状を渡した。スウェーデンのカービン銃兵の一人の騎兵旗手が持って来ました。この旗手は今隣室の参事官ホールの世にも名高い絵画を眺めていて、きっかり一時間したら戻ると申しています。商会主は一瞥してスウェーデン国王グスタフ・アドルフ陛下[Gustav II Adolf,1594-1632]の大胆な筆跡を認め、手ずからの書状という大きな栄誉に少しばかり驚いた。彼はこの国王を、自分の新築の家、ニュルンベルクで最も美しい家で接待し、祝福したことがあるのであるが、この国王は、愛国的接待主から借用したいのかもしれないという懸念が生じた。しかし彼は途方もなく裕福であって、スウェーデンの財務官房は信用が置けると承知していたので、彼は国王の封蝋を格別心配せずに開け、それどころか誇りの微笑を浮かべ始めていた。しかし王侯の簡略さで記された書状の数行をざっと読んで、彼は自分の上の天井のスタッコ装飾画のように青白くなった。この絵は浮き彫りの塊とうねるような群れで父アブラハムによる自らの息子イサクの犠牲を描いていた。そして彼を見つめていた彼の善良な息子も青ざめた。干涸らびた顔が突然色を失ったのを見て、大きな不幸を察していた。老父が彼を書状越しに父親らしい情愛の鬱然とした表情で見ているので、息子の狼狽は募った。「後生です」とこの若者はどもった、「一体どうしたのです、父上」。老ロイベルフィングは、この父子はこの高貴な商会一族の出であったが、息子に震える手で紙片を渡した。若者は読んだ。

「親愛なる貴殿、

貴殿のご子息は、小姓として我らの許に仕えたいという願いを抱いていると承知しており、そのことを思い出して、ここにお伝え申す。この件は今日、執行し、裁可可能である、と。由縁は、我らの先の小姓、故マックス・ベーハイムが（ちなみに名誉と共にお伝えすると、先の先の小姓は、故ウッツェン・フォルカーマーであり、その先の小姓は故ゲッツェン・トゥーハーである）、今日突撃が続いている間に、両脚に砲弾を受け、負傷し、我らの腕の中で安らかに息を引き取ったからである。我らにとって、再び新教の帝国都市ニュルンベルク、我らが特に好意を寄せているこの町出身の者を一人、我らの近侍の用に採用できれば、我らにとって格別の補充となろう。貴殿にはご子息に対する立派な生活費と日々のキリスト教徒らしい訓戒とを保証申し上げる。

貴殿の懇意の

国王グスタフ・アドルフ」

「まあ、何ということでしょう」と息子は自分の臆病な心を父親に隠さずに嘆いた、「自分の死亡証明書を手にしていることになります。父上、―― 然るべき敬意を持って話しますが、―― 父上が私の早逝の張本人でありましょう。父上の他に誰が国王に対し間違った私の願望を述べられましょう。神よ、憐れみ給え」。そして彼は視線を丁度上の、石膏の族長の抜き身の短刀に向けた。

「私の心を砕いてくれるな」と老父は惨めに涙を流して答えた、「私が飲み過ぎたトカイ・ワインのせいだ。忌々しい、――」。

「父上」と息子は父親を遮った。息子は悲惨さの最中、頭を上げなかったが、しかし明晰さを保っていた。「父上、どうしてこの災難が生じたか、話してください」。「アウグストよ」と老父は歯ぎしりして告解した、「国王が最初、町へ入場してきたとき、私が催した盛大な接待を覚えておろう。高くつくものであった。――」。

「父上、三百九十九グルデンと十一クロイツァーです。私はその何一つ味わえなかった」と若者はべそかいて、述べた。「私は目の上に濡れたパップを置いて、寝室にいました」。彼は右目を示した。「お転婆のグステルが、国王に会えるというので喜んで、半ば戯けて狂って、私の目に羽根突きを当ててしまい、それは丁度トランペットが響いて、スウェーデン国王が入場したと彼女が思ったからなのです。でも、続きを、父上、――」。

「食事が下げられて、果物やワインのとき、歓声の嵐が上の方、広間を通じ、下の方、広場を越えて、寄せ合った頭の民衆の中から生じた。彼らは皆、国王を見ようと欲していた。大ジョッキが打ち合わされ、開いた窓から健勝の祈念がなされ、上でも下でも歓呼された。その間に一つの澄んだ、通る声があった。『グスタフ、ドイツの国王、万歳』と。今度はしんと静まった。それが強力だったからだ。国王は両耳をそばだてて、鼻下髭を撫でた。「そのようなことを私は聞いてはならん」と彼は言った。「私は新教の帝国都市、ニュルンベルクに万歳をしよう」。するとようやく本格的歓声が上がった。大砲が広場で発射され、皆がてんやわんやになった。しばらくしてから陛下がたまたま私を隅に引き寄せて言った。『ロイベルフィング、誰がドイツの国王万歳と発声したのか』と彼は声を潜めて訊かれた。すると酔っ払いの老いぼれ驢馬の私は自慢したくなった」。―― ロイベルフィングは自分の額を叩いた、あたかもより懸命な知恵が浮かばなかったことを嘆いているかのようなであった。―― 「それで、私はこう応えた、『陛下、それは私の息子アウグストです。アウグストは陛下にお仕えすることを日夜期待しています』と。私は酔っていたけれども、国王の近侍はゲッツ・トゥーハーに任されており、市長のファルカーマーが参審員のベーハイムと一緒に息子どもを小姓として推薦していたことを承知していた。私がそう言ったのは、ただ、私の隣人達に、老トゥーハーと大口叩きのベーハイムに遅れを取りたくなかったからだ。国王がまだバイエルンですべてのニュルンベルクの商品[小姓]を消費してしまうであろうとは思いませんでした。――」

「でも国王はあざの目の私を呼び寄せたかったでしょうか」。

「それも考えていた、アウグスト。抜け目ない悪漢のシャルナセが控えの間で騒いでいた。彼は三回名乗りを上げていて、もはや追い出せなかった。国王はそれで彼を入室させ、大使シャルナセを我らの名門市民の前で虐めて、ドイツ人の男としては笑わざるを得なかった。素早く私はこうしたこと一切を何一つ見逃さなかったのだ。――」。

「父上、とても賢しらで、分別に欠けています」と息子は嘆息した。

それから二人は頭をつき合わせて、二人が言う所の、弥縫策を探した。今やひそひそ声になったが、その前は、二人とも興奮して、隣室を視察している見習士官[旗手]のことも考えず声を荒げていたのであった。しかし二人とも何の知恵もなく、二人の身振りは次第に不安げな辛辣なものになった。その時、外の廊下で、気骨のあるアルトの声がし、グスタフ。アドルフ愛好の歌を歌い始めた。

臆するな、汝、少数の者どもよ、
たとえ敵が、汝を、
殲滅にかかろうとも。

そして縦のようにすらりとした娘が、陽気な眼差し、短くカットした髪、少年のような形姿、かなり騎馬武者風な作法で入って来た。

「我らの鼓膜を破るつもりか、従姉妹嬢」と両ロイベルフィングが叱った。彼女は悲しげな二人をしげしげと見て、答えた、「食事に呼びに参ったのです。何があったのです。伯父上、従兄弟殿。お二人とも鼻の先が全く白いですよ」。このお手上げの両人の間にある手紙を娘は遠慮せず取って、力強くさっと書き添えられた国王の署名を読み、情熱的な目で読み終わり、その恐怖を理解した。「殿方、食卓へ」と彼女は言って、両者より先に食堂へ入った。しかしここで心優しい少女は、自ら、二人のロイベルフィングの口にはどこの一切れも余るものだと察した。彼女は食事を下げさせて、椅子を後に引き、両腕を組み、その青いスカートの下で、スカートのベルトにはバッグと鍵束が掛かっていたが、すらりとした両脚を組み、傾聴しながら、思案しながら、この厄介な取引全体を自分に話させた。というのは彼女は完全にこの家の一員であり、この家ではその大胆な性格から決定的地位を得ているように見えたからである。

二人のロイベルフィングは語った。「いいですか」とそれからこの少女は大胆に言った、「国王に万歳と発声したのは誰だと思いますか」。

「誰だったのだ」と両ロイベルフィングは尋ねた。そして彼女は答えた、「他ならぬ私でした」。

「地獄に堕ちろ、娘っ子」と老公は恨んだ、「きっとそなたは青色のスウェーデン人の軍服を着ていたのであろう。そなたの衣裳箆筒に、前掛けの奥、保管している服だ。そして食堂のそなたのアイドルにそっと近寄った、行儀良く女どもの間に残っていません」。

「あの人は私に一番奥の席を指定していたことでしょうか」と娘は怒って答えた、「小さなハラール夫人、大きなホルツシューエ夫人、高慢なエーブナー夫人、びっこのゴイダー夫人、阿呆なクレサー夫人、皆すべて、国王に私どもの町の贈り物、あの両銀酒杯、天球と地球の両杯を渡すことを許された人々だわ」。

「内気な娘、そんなそなたが、グステルよ、どうして男子の服を着るという大それたことができるのだ」と神経過敏な若者が口を尖らせた。

「それはつまり」と少女は真面目に答えた、「私の父の服なのです。まだ胸ポケットの横にかがった穴が見えます。フランス人の刀が切り裂いた穴です。ちょっと斜視で見ればいいのです」。 — 彼女は父の服を着ているような振りをした。 — 「その切り痕が見えます。説教を聞く思いがします。それに」と、真面目さから、彼女の流儀で笑いへと跳ねて、こう結んだ、「私には女性のスカートが似合いそうにありません。スカートが合わないのは、不思議じゃなくて、私はほぼ十六歳まで父親と母親と一緒に短い服で馬に乗

っていましたから」。

「親愛なる従姉妹嬢」と若いロイベルフィングは懇ろな思いも添えて、嘆いた。「そなたの父親が亡くなってから、そなたはこちらで家の子同然に育った。それなのに私をこんな目に遭わせている。そなたは実の従兄弟を子羊のように屠殺台へ送ろうとしている。あのウッツは額を撃ち抜かれ、ゲッツは首を撃たれた」。彼は鳥肌が立った。「少なくとも良い助言を言ってくれないか、従姉妹嬢」。

「良い助言」、と彼女は熟慮して言った、「それを私が言うとしたら、ニュルンベルク人らしく、ロイベルフィングの者らしく振る舞いなさい、だわ」。

「ロイベルフィングの者らしくか」と老主人が毒づいた。「どのニュルンベルク人も、どのロイベルフィングの者も、ループレヒト、冥福を祈る、そなたの父親のように乱暴者でなくちゃならないのか。そなたの父親は、あれが十歳のとき、年長の私を干し草荷馬車に乗せ、転倒させ、自らは無事で、私は二本の肋骨を折ったものだ。何という人生だ。十五歳でスウェーデン人達の許に奔り、十七歳のとき十五歳の娘と軍太鼓の前で結婚し、十九歳で喧嘩沙汰、そして現世を去った」。

「それはつまり」と少女は言った、「父は私の母の名誉のために倒れたのです」。

「何も助言はないのか」と若いロイベルフィングは迫った、「そなたはスウェーデンの軍務に通じていて、それを免れる自然な理由も存知しておろう。国王に上手く弁解できるものはないか」。

彼女は頓狂な哄笑に弾けた、「あなたをね」と彼女は言った、「暖炉の絵にあるように、若いアキレスを向こうの娘達の許に紛れ込ませ、そして策謀家のユリシーズが娘らの前で武器を見せたとき、あなたが思わず刀に向かって飛びつきさえしなければいいのよ」。

「私は[女達の許に]行かない」とこの神話学的博識に立腹した若者は釈明した、「私は父上が国王に紹介したような人物ではない」。すると彼は自分の細い両腕を掴まえられていた。彼の左腕を取って、老ロイベルフィングが悲鳴を上げた、「そなたは正直者の私を国王に対して軽薄な嘘つきにするつもりか」。娘の方は、従兄弟の右腕を押さえて、憤然と叫んだ、「あなたは自分の臆病で、私の父の立派な名前を穢すつもりですか」。

「いいか」と苛立った男は叫んだ、「そなたが小姓として国王の許へ行け。国王は、そなたが少年らしく見え、そう振る舞うので、そなたが娘とはつゆ思うまい、丁度そなたが語った暖炉のユリシーズが私を少年とは見抜けないのと同じようにな。そなたのアイドルの許へ出発しろ。そして彼を崇めろ。結局」と彼は続けた、「それはそなたがすでに長いこと願っていることだろう。そなたは子供のとき、一緒に世界を旅して回った、スウェーデン国王のことを、寝ても覚めても夢見ているのだろう。一昨日、私が寝室へ向かうとき、そなたの寝室の側を通りかかって、すでに遠くからそなたの夢の声を聞いたぞ。ほんに耳を鍵穴に当てるまでもない。『国王だ、歩哨、前へ。捧げ銃』。彼は鋭い声でその司令を真似た。

乙女はそっぽを向いた。頬と額が真っ赤になった。それから彼女はまた温かい、明るい褐色の目となって、語った。「ご用心遊ばせ。そうなるかもしれません。ロイベルフィングの名前が、ただの意気地なしの男によって名乗られないようにしたいのであればね」。

その言葉は発せられた。そして子供っぽい夢が、大胆ではあるが、しかし不可能ではない冒険として姿を現していた。父親譲りの血が騒いだ。度胸と大胆さは過剰に有していた。

ただ女性らしい羞恥心と驕のせいで、一 従兄弟はそれを的確に指摘していたが、一 それに国王に対する畏怖の念のせいで、反対を称えていた。しかしその出来事の渦巻きが彼女を拉致し、引き掠って行った。

スウェーデン人の騎兵旗手は、国王の書状を持参して来た者で、新しい小姓を陣営に連れ帰る役目であって、彼が名乗り出て来た。名手アルブレヒト・デューラーの灰色の絵を眺める代わりに、彼は陽気なワイン酒場に出掛けて、黄金色に満たされた緑色のワイン・グラス[レーマー杯]に親炙していたが、しかし鐘の音を聞き逃さなかった。老父ロイベルフィングは、自分の息子と商会のことを心配して死ぬ思いで、自分の姪の両膝を抱き締める仕草をした。これは灰色髪のアキレスがアキレスの両膝を抱いて、自分の息子の遺骸を請うのと変わらなかった。一方若いロイベルフィングは体全体が震え始めた。少女は痙攣性の哄笑を発し、脇のドアから、丁度拍車の音をさせて騎兵旗手が入って来る直前に飛び出た。旗手は、自分の国王の厳しい驕を受けていたけれども、勇気と生命の火花を目から放っている若者であった。

アウグステ・ロイベルフィングは素早く、酩酊したかのように自分の小部屋で支度をし、旅行バッグにまとめ、自分の父親の服を至急まとった。それはそのすらしとした小柄な成長にピタリと合うものであって、それから跪いて短い衷心からの祈りを述べ、この冒険への赦しと加護とを請うた。

彼女が再び下の広間に入ると、騎兵旗手が彼女に向かって叫んだ、「急がれよ、戦友殿。至急だ。馬どもは足を蹴っている。国王がお待ちだ。父親と従兄弟殿に別れを述べ給え」。そして彼は一気に自分に出されていたレーマー杯の中身を、自分の上品なレースの襟の奥へと空けた。

スウェーデン人の軍服をまとった偽青年は、老公の干涸らびた手の上に屈んで、二度感動した接吻をし、それから老公の謝意の祝福を受けた。しかしそれから突然自在な陽気さに移って、この小姓は若いロイベルフィングの右手を握って、それを左右に揺すり、叫んだ、「達者で、乙女の従姉妹嬢」。騎兵旗手は笑って腹を揺すった。「これはしたり、これはやばい 一 戦友殿は何という冗談を仰有る。畏れながら、すっかり気に入った。従兄弟殿は、オールドミスそのものだ。どの面貌も、どの仕草も、我らのフィンランドの歌にある通り。

火かき棒に乗ったオールドミスさん 一

これはしたり、これはやばい」。彼は素早く手で掴んで、待機している小間使いの小さな帽を奪って、若いロイベルフィングの乏しい亜麻色の髪の毛の垂れかかる頭蓋に被せた。尖った鼻と後退する顎が、オールドミスの顔そのものとなっていた。

今や軽く酔った騎兵旗手はその腕を親しげに小姓の腕に入れた。しかし小姓は一步退いて、手を刀の柄に置いて、言った。「戦友殿、私は馴れ馴れしく触れ合いたくない、控えた振る舞いを重んじます」。

「ゲッ」と旗手は言ったが、しかし脇に退いて、丁重な手の仕草で、小姓を先に行かせた。二人の元気印が階段をガタガタ駆け下りた。

更に長いこと両ロイベルフィングは相談した。自分の素姓を喪失した若いロイベルフィングが、ニュルンベルクに長く滞在すべきでないことは、明瞭であった。結局父子は一致した。息子は仕事の一端を、選帝侯ザクセンの、それも繁栄する町ライプツィヒへ移して、

茶化された名家の名前を用いず、平民的に「ラウプフィンガー」という名前を、単に短期間、使用する、国王に仕える現今のアウグスト・フォン・ロイベルフィングが馬から落ちて戦場で死亡するまでで、その死亡は遠い先ではなかろうから、と決まった。

長い相談の後、取り替えられた若者が立ち上がって、自分の姿を鏡で見たとき、彼は自分の狼狽した面影の上になお小さな帽を被っていた。スウェーデン人のろくでなし旗手が被せたものであった。

II

「小姓ロイベルフィング、お聞きなさい。小言を申しつけます。そなたが敏捷な指で大至急、国王殿の解けた箇所を縫うときとか、欠けたボタンを留めるとき、いささかなりとも小姓の面目を損なってはなりません。そなたはニュルンベルクで母様や姉様の針刺しを肩越しに覗いたことはないのか。これはどんなスウェーデン人の兵士でも心得のある簡単な仕事です。額に皺を寄せていかが致した、この不忠者。つべこべ言わず、従いなさい。ここに私の裁縫道具一式があります。これを贈りましょう」。

そしてブランデンブルク出身の、スウェーデンの王妃[Maria Eleonora von Brandenburg, 1599-1655]は、小姓のロイベルフィングに撚り糸、指貫、針、鋏のイギリス製の一式を渡した。嫉妬混じりの情愛からいつでも国王を追って旅する王妃は、ニュルンベルク近郊の不吉な陣営の最中にある国王を不意に短期間、訪ねて来たのであった。国王は陣営を臥所へと閉ざされた、戦争で半ば荒廃した玉座に暮らしていた。小姓の不承不承の両手の中で、彼女はその箱を開けて、銀製の指貫を取り出し、それを小姓に嵌めて、優しく言った。「そなたの良心に訴えて、嵌めます、ロイベルフィング、私の御主人の国王がいつもきちんとした身なりで動けますように、と」。

「裁縫とかボタンとかはご勘弁を、王妃陛下」とロイベルフィングは不機嫌に赤くなって答えたが、とても戯けた表情と心地良い、気骨のある声であったので、王妃は少しも侮辱を感じずに、蔑んで哄笑しながら、小姓の頬をつねった。小姓はこの笑い声を空ろで阿呆なものと思った。そして敏感なこの小姓は王妃陛下に嫌悪感を抱いたが、この気の良い妃は、これに何も気づかなかった。

寝室の入口でこの情景を聞き入っていた国王も、今や心からの哄笑を発した。自分の小姓が左の腰に短剣を有し、右手に指貫を嵌めているのを見たからである。「しかしグストよ」とそれから彼は言った、「そちは教皇主義者や異教徒のような誓い方をしている。そちを教育しなければなるまい」。

実際グスタフ・アドルフは、王冠を被ることを盗人行為とは見なさず、真面目であった。[フィリピの信徒、2,5以下]国王は、一 軍事的厳格さを緩めることなく、一 自分の部下の一人一人を、どんな取るに足りない者も、人間的善意を持って対処する人であって、風貌の優れた好青年に対してこの善意を拒むことはあり得なかったであろう。この青年は彼の目の許で暮らし、彼の側を離れることを許されなかったのである。それも邪気のない青年であって、ほんのちょっとしたことでも、少女と変わらず、額の生え際まで赤くなるのであった。それにこの若いニュルンベルク人がかの重大な結末に至る祝宴の際、彼を「ドイツの国王」として万歳の発声をしたことを忘れていなかった。彼の英雄的冒険が名声に

満ちた結果になるであろうことを大胆に予言的言葉にまとめていたのである。

情愛深くて野蛮な、至福で不安な夢物語をこの小姓はすでに自分の英雄の側で体験していたが、邪推しない国王はこの奪取された至福に関しては何も予感していなかった。酩酊するような時間であって、まさに九十八年間の未熟な歳月の後、開始され、この歳月を太陽が影に対してするように消し去っていた。甘美で誇り高い感情を伴う一つの狩猟、一つの逃亡であり、悩ましい恐れや、隠された歓喜、動悸する鼓動、急いた呼吸に満ちたもので、致命的弾を受ける前の時や、恥ずかしく正体がばれる前夜に、ただ若い胸のみが把握し、軽快な心のみが享受し得るものであった。

ニュルンベルクの貴公子、アウグスト・ロイベルフィングが騎兵旗手によって国王に紹介されたとき、この忙しい国王は自分の新しい小姓をちらと目に留める一瞬もほとんどなかった。かくて小姓は厚かましい嘘を述べずに済んだ。グスタフ・アドルフは、丁度愛馬にまたがって、難攻不落のフリートラント人[ヴァレンシュタイン,1583-1634]の陣地に、二回目の無駄な突撃に取るかかるところであった。彼は小姓に付いて来るように命じ、小姓は躊躇うことなく、自分の前に引かれて来た栗毛の馬に飛び乗った。というのは小姓は子供の時から馬の鞍には慣れていて、自分の父、以前スウェーデン軍の最も荒々しい騎士であった父から、ほっそりした騎士らしい体型を受け継いでいたからである。国王がしばらくしてから向き直り、小姓が青ざめて死ぬ思いをしているのを見たのは、これは栗毛の熱い跳躍や、鞍に不慣れなせいではなくて、このロイベルフィングが、少し離れた所に捕縛された売春婦を見たせいであった。この売春婦はスウェーデン人の陣地から、上半身を剥き出しにされ、鞭打たれていて、小姓はこの裸の見世物に反吐が出たのであった。

毎日、毎日、一 というのは国王は倦むことなく、撃退される突撃を、国王には普段見慣れぬ頑固さで繰り返したからで、一 小姓は怖いという感情を抱かずに、国王の側で騎乗していた。今にも小姓は致命傷を負った国王を馬から自分の両腕に抱えかねなかったし、あるいは自ら致命傷を受けて、グスタフ・アドルフの腕の中で息絶えかねなかった。それから彼らが成果なく、騎乗して戻ると、国王は陰気な顔になっていても、国王は自分の憂いをごまかしたり、隠したりして、新人の小姓をからかい、そちは鎧を失って、馬のたてがみを掴んでいたなどと言った。あるいはまた逆にその向こう見ずさを非難して、無鉄砲者との陣営の表現で叱った。

そもそも彼は飽きることなく、小姓に父親らしい教えを垂れ、時々少しばかりキリスト教精神をたたき込んだ。

国王は、一日の仕事が終わると、就寝前の最後の三十分、巫山戯たり、全くの馬鹿騒ぎをする立派な、健全な習慣を有していた。すべての憂いを熟練の意志力で背後に投げ、それから早朝、その場でようやくまたその憂いを取り上げた。そしてこの習慣を今もまた保持していて、それも、砕かれた突撃や、犠牲となった人間の命のために自分の計画が挫かれ、誇りが傷付けられ、キリスト教徒の良心が憂き目を見たので、一層のことであった。この遅い自由時間のとき、彼は快適に安楽椅子に寄りかかり、小姓ロイベルフィングはその横の床几に腰掛けた。するとチェッカーやチェスの遊びとなって、小姓は時に国王相手にこの遊びをした。あるいは、国王はとても上機嫌のとき、丁度自分の記憶に浮かんだ何気ないことを語った。例えば彼がかつて結婚のためにベルリンへ旅して、その宮廷教会で聞いた大げさな説教のことであった。その説教は人生を舞台に例えていてな、人間は俳優

で、天使達が観客、カーテンを下げる死神が舞台監督というわけであったぞ、と。あるいはまた信じられない話もあった[Christinaの自伝より]。人々が私、国王にな、自分の子供が生まれた後、息子だと告げておってな、自分自身しばらく騙されていたことがあるぞ、と。あるいは祝典とか衣裳についてで、珍しいことにそれは大抵、少女なら格別に、ともかく少年よりも楽しく思うような話しであって、あたかも騙されている国王が、そのことに気づかないまま、小姓が彼に対して及ぼしている欺瞞の作用を感じているかのようで、そして聞き耳を立てているこの女性が、上等の若者の仮面を被って演じている魅力を、国王は無自覚に味わっているかのようであった。この点に関し、小姓も突然不安を感じたことであろう。小姓は自分のアルトの声を低くして、何らかの男っぽい仕草をするのであった。しかし国王の誤解の余地のない言葉とか、近視眼的身振りで、このびっくりした小姓はまた確信を得るのであった。つまり、グスタフは自分の娘クリステルの生誕の時と変わらず、同じように騙されている、と。するとまた安心を得た小姓は、大胆不敵な気分となるのであろう、何か向こう見ずな内輪のことを座興に供して、叱られるのであった。小姓は、グスタフの口が王妃との温かい結婚生活を称えるのを聞いた後で、ではエーファ・ブラーエ伯爵令嬢 [国王の母親に反対された、Ebba Brahe,1596-1674]は一体どのような外見でしたかと、大胆に尋ねたことがあったが、その時が一例である。これはグスタフの若い時の恋人で、後のデ・ラ・ガルディー夫人である。夫人はこの夫と、夫人が世紀の最も勇敢な男を取り逃がした後、二番目に最も勇敢な男として結婚したのであったが、黒っぽい髪に、黒い髪、鋭い風貌であった。しかし好奇心の強い小姓は、この返事を得られず、かなりしたたかな殴打を平手で、その声高な自分の口に受けた。グスタフはこの小姓の口許に放恣な哄笑への気分が察せられると思ったのであった。

ある日、国王は自分の娘クリステルに最初の指輪印章の贈り物をするようになった。指輪の宝石には、流行に従って、思索的銘が彫られることになった。所謂一つの格言で、一代々の紋章の銘とは違って、何かその印章の所有者にとって独自の個人的なもので、頭腦的原則、心情的願望を、印象的な簡潔さで表現するもので、例えば若いカール五世は野心的「未だし」[Nondum,実際は「更にもっと」Plus ultra]であった。グスタフは自分の子供に自ら、好みの銘を考えてやりたかったが、しかしまた流行に従って、これはラテン語とかイタリア語、フランス語でなければならなかった。

かくて彼は、四つ折本に深く没頭して、その中の、有名人や機知的人物の、千もの記載された銘から、自分の慧眼、近眼もって、自分のようやく七歳になったばかりの、しかし早熟なクリステルに贈ろうと思う銘を探した。彼はそれらの簡潔な銘文を楽しく読んでいた。それらはその発案者、多くは歴史上の人物の本性を しばしば正確に、いや鮮明に表現するもので、しかしまた、しばしば、人間的自己錯覚や自慢話にふさわしく、まさにその反対を表現するものでもあった。

このとき一つの繊細な指が、鋭く黒い影を伴って、明るく照らされた頁の、未知の起源の一つの格言を示した。それは国王の肩越しに覗いている小姓であった。その格言はこうであった。「短く、かつ愉しく」[Courte et bonne]、つまり私がある人生を選ぶとすれば、短いもので、愉しみ多いものであって欲しい、と。国王は読んで、一瞬沈思し、憂わしげに頭を振って、自分から小姓の立派な耳たぶをつまんだ。それからロイベルフィングをその床几に座らせた。彼にちょっと説教をするつもりであった。「グスト・ロイベルフィン

グよ」と彼は快く、教訓的に始めた。頭を後のクッションに押し付けていて、それで金髪
の鼻下髭の顎全体が前面に突き出され、半ば閉ざされた目から冗談めかした明かりが小姓
の傾聴して持ち上げられた顔に注がれた。「グスト・ロイベルフィンク、我が息子よ。思
うにこの疑わしい銘文は世俗的人間によって考え出されている。ルター博士ならば「エビ
キューリアン」と呼ぶ人々であろう。我々の命は神の定めだ。それで我々は長寿も短命も
望めない。我々は神様の思召しを受け入れるだけだ。それに良い[愉しい]の方はどうか。
勿論、良いことだ。簡潔で正しい。しかしそれはここでフランス語が明確に意味している
陶酔的なもの、酩酊的なものを一杯含むものではない。それともそちらはこの銘をどのよう
に理解したのだ、我が親愛なる息子よ」。

ロイベルフィンクはまずおずおずと固くなって答えたが、しかしそれから一語ごとにより
喜ばしげな、より決然としたものになった。「こんな具合です、恵む深い御主君。私は
私の人生のすべての光線が一本の炎、一時間の空間に凝縮することを願っています。詰ま
らぬ薄明かりではなく、幸福の短い、しかし目も眩む輝く明かりが生じて、それから『煌
めく稲妻』のように消えたいのです」。彼女は言い止めた。これはこの世紀の愛用の隠喩
であったが、この文体、この「煌めく稲妻」は国王の気に入ったようには見えなかった。
国王は嘲笑して、その上品な唇を歪めた。しかしまだ発せられていない咎めの言葉を遮っ
て、情熱に身を任せ、小姓は叫んだ。「いえ、私はそれが望みです。短く、かつ愉しく」。
それから小姓は突然我に返って、謙譲に言い添えた、「親愛なる御主君、私はこの銘を誤
解しているのかもしれませんが。これは、ここの本の中に大抵の銘のように多義的です。で
も私は一つのことを承知しています。これは純然たる真実です。つまり、御主君、弾が汝
を、今日汝に触れる弾が」 — 小姓はその言葉を呑み込んだ、 — 「それは、短く、
かつ愉しくということであつたらう。汝は若者で同時に男であるのだから、 — それで
汝の人生は良い[愉しい]人生なのだ」。

国王は両目を閉ざして、それから、日中の疲れがたまっていたので、微睡みに陥った。
この微睡みは最初、この小姓のへつらいを聞き入れないように、あるいは少なくともこれ
に返事しないようにするために偽りのものであった。

このように獅子は子犬と戯れた。子犬も獅子と戯れた。あたかもからかう運命、傷みや
すい運命が、惚れた少女とその崇める英雄とを密接に絡ませたかのようで、絶えず新しい
国王の姿や、その深甚の情愛を小姓に見せながら、運命は小姓に、その主君と、この世で
最も苛酷な痛み、父親としての痛みを共有させて行った。

国王は法外な信頼を示して、ロイベルフィンクを使い、ストックホルムから定期的に届
く、自分の皇女の女家庭教師からの手紙を朗読させ、それから返事も書かせた。このレデ
イーは悪筆の細い文字で書き、冗漫なくどい文体であつて、グスタフはその詳しい手紙を
大抵すぐに小姓に渡した。小姓は素早く目と口とを動かして、文面の行を、自分の若い足
が無数の螺旋階段の段を下るときに劣らず素早く読み下して行った。ある日、ロイベルフ
ィンクは封筒の隅に大きなSの字を見つけた。それは当時、重要な書状、秘密の書状に印
付ける習慣のもので、受取人本人が自ら開封し、読むようにするためであった。小姓の特
性、つまり好奇心と大胆さが上回った。ロイベルフィンクは封蝋を破って、風変わりな話
しを目にした。皇女のこの女家庭教師は — 国王自身によってまとめられ、諸言語の早
期習得を定めた教育方針に従って、 — クリステル皇女にイタリア語の教師を一人採用

する時期であると考えていた。選抜は周到になされて、上首尾に見えた。まだ若い男、家柄の良い一人のスウェーデン人、長い旅に出て広く世間を知っているこの者は、風采と精神のすべての長所を調和させていて、高貴な細身の体型、人好きのする表情、上品に曲がった額、感じの良い挙措、堅牢な倫理観、それに陰気な厳格さや滑稽な術学は二つとも全く免れていて、貴族的な名誉心、キリスト教徒の謙譲さを有するのであった。肝要な点は、真のルター教徒であることで、これは、彼自身が告白しているように、近代のバビロンであるローマでの蛮行を目の当たりにして、単なる習った知識から一つの自立した不動の確信に至ったものでございますとのことであった。冷静で分別のあるこの女家庭教師は、そのいずれの手紙においても、繰り返して、この若者は自分の喜びであると書いていた。若い皇女も若々しく自ら進んで、目覚めた頭脳で、このような教師の下、学んでいるとのことであった。しかしこの家庭教師は、勉強熱心な、空想豊かなクリステル皇女がある日、片隅に屈んで、香りの良いヒマラヤ杉のロザリオの玉を探りながら、悦んで祈りを上げている姿を見たのであった。皇女は時々それを鼻で嗅いでいたという。「羊の服を着た獰猛な狼がいたのです」と正直な女家庭教師は五つの感嘆符を添えて書いていた。「私は頭の上で両手を打ち合わせて、全身白い柱像に変わりました」。

グスタフ・アドルフも真っ青になって、深甚に動揺した。そして彼の大きな青い目は未来を見据えた。彼はイエズス会を熟知していた。

このイエズス会士は牢に入れられていた。そして彼は苛酷なスウェーデンの法律によれば、国王の、法に優先する恩赦がなければ、死刑に処せられるのであった。しかし国王は、小姓に折り返し、女家庭教師宛にこう書くように命じた。皇女に対しては多言を弄さずに、この件をたわいない些事として片付けるようにすること、このイエズス会士に対しては、何も騒ぎ立てず、人目に付かないようにして、国境から追い出すようにすること、と。「というのは」、 — と彼はロイベルフィンクに口述筆記させた、 — 「私は殉教者を作りたくないからである。この幻惑された若者はその偽りの良心と共に、ひたすら斬首されたいのであろうし、殉教者という深紅の雲の中へ受け入れられ、私の皇女の育って行く脳を虐待したという内心の邪悪な悦楽を味わいながら昇天したいのであろう」。

しかし幾日も国王は、「この不幸とこの犯罪」を — こう彼は自分の皇女の魂への暗殺計画を呼んでいたが、 — もはや忘れることができず、彼は自分の寵児のいるところで、真夜中過ぎまで、自分の吊り下げランプが消えるときまで、休まずあちこち歩き回り、勿論対話というよりも、自己対話であったが、嘘について、詭弁について、敬虔な神父達の偽装についてつぶやいていた。一方薄暗がりの中に座っている小姓はびっくりし、煩悶して、動悸する若い胸を叩き、小声で恥じ入った言葉を自らに語っていた、「汝も嘘つきだ、詭弁の女、変装の女だ」。

この遅い時間以来、小姓は身悶えするほどに、自分の偽装のこと、自分の性別のことを案じて、不安に思った。ほんの取るに足りないことで、ばれてしまいかねなかった。この恥を免れるために、この哀れ極まる者は、十回となく夜陰とか早朝に、自分の馬に飛び乗って、世界の果てまで駆けて行く決心をし、そして十回となく、国王の罪のない愛撫で押し留められた。国王は自分の周りに一人の女がいるとは、気づいていなかった。火薬の煙の中にいるときのみ、小姓は気楽であった。すると小姓の目は閃光を発して、喜ばしげに致命的弾に向かい騎行した。小姓はこの弾に、自分な不安な夢を終わらせるために挑んで

向かった。そして国王がこの後、夕べの親密な明かりの下、小姓が愚かな考えに耽っていたり、ぼんやりしているとき、その頭を掴んで、率直に笑いながら、その縮れ毛の髪に手を滑らせると、小姓は衷心からの悦楽と不安とに震えながら、自らに言った。「これが最後だ」。

このように小姓は期限を設け、至高の人生を死神の助けを借りて、享受した。

奇妙なことであった。ロイベルフィングはそう感じていた。国王も死神と親密な歩調で暮らしていた。フリートラント人[ヴァレンシュタイン]は攻撃を撃破して、征服者[国王]を退避者という、ほとんど逃亡者という惨めな状況へ追いやった。かくてキリスト教徒のこの英雄[国王]は、その運命を日々刻々、ほとんど挑戦的に神の御手に委ねていた。小姓が国王に差し出す習慣の胸甲を、国王は肩の傷を口実に、頑固に断っていた。鋼が強く圧迫すると言うのである。賢明な者達や、慎重な者達が肌身に着用するしなやかで上品な鎖帷子、ネーデルランドの鍛冶技術の傑作が届いて、王妃がこう書き添えていた。フリートラント人[ヴァレンシュタイン]がこのようなものを着用していると聞きました。自分の主人、夫も、戦闘に出るのに、これに遅れを取った防御ではなりません。この上品な鍛冶品をグスタフは一種の臆病として軽蔑して隅に投げた。

あるとき、夜の静寂の中、ロイベルフィングはグスタフの切なる祈禱を耳にした。小姓の頭は、国王の頭とは単に壁で仕切られていて、壁に耳を当てて、小姓は聞いた。国王は神に、自分を肢体揃ったまま、最後の時が来たら、召して欲しい、不具、不能者として生き残りたくない、と。最初、聞き耳を立てていた小姓は涙がこぼれた。それから頭の天辺から足先まで、利己的な喜び、ほくそ笑む歓喜、ある勝利、つまり自分の小さな運命とこの偉大な運命との類似性による一つの凱旋に至った。これはそれから自分の名前が終わるときと国王の名前が始まるときの音節は同じ[グスト]であるという阿呆な子供っぽい考えと共に微睡みの中へ消えて行った。

しかし小姓の夢見は悪かった。というのは良心が咎めていたからである。その夢の目の中で浮かび上がる裁きの映像では、国王はこの発見された者を、燃える眼差しと判決を下す身振りで、自らから遠ざけ、やがて王妃がこの者を箒の柄で追い出し、極めて粗野な叱責の言葉を放った。これは教養ある妃が決して日中唇にしないもので、いや多分全く知らない言葉であったろう。

あるとき小姓はこんな夢を見た。小姓の栗毛が小姓と共に進み、剥き出しの、怒りの熾火で赤くなった一帯を抜けて、峡谷に向かい、国王が自分の後を追って来て、自分はこの救助者か迫害者の目の前で、千尋もの深淵へ墜落するのである、地獄の哄笑を浴びながら。

III

ロイベルフィングは突然叫び声を上げて目覚めた。朝が白んで、小姓は国王は涼やかに明るく、一回の中断もなく眠りながら目覚めて、世にも寛いだ、上機嫌な様にあるのを見た。王妃の手紙が届いていて、それは格別火急のものを含まないが、ただ追伸があった。つまり王妃は夫に、この内助の王妃が悲しく思っているある事件、悩みの件につき、然るべき手を打って欲しいと頼んでいた。フォン・ラウエンブルク公爵、ほとんど数ヵ月も経たない前に王妃の数多い従姉妹達の一人と政略婚をしたばかりの、女癖の悪いこ

の人間は世評の怒りを買っていた。彼は自分の妻のブロンドのお下げと水色の青い目に退屈して、自分の蜜月を短縮し、スウェーデン人の陣地に舞い戻り、うら若いスラヴォニア人女性を側に囲っていた。このスラヴォニア人女性を彼は、追い剥ぎとして名を馳せている通り、自分が打ち負かしたヴァレンシュタインの護衛隊の中から引き連れて来ていた。そこで王妃は夫に、この尊大な不義密通に速やかな決着をつけるよう頼んでいた。というのはこのラウエンブルク公は、ただ国王の視線だけをはばかり、自分の同僚貴族の前では、美しいこの戦利品を自慢し、帝国侯爵として、罪とかそれにスキャンダルはどこ吹く風であったからである。グスタフ・アドルフは、この件を単に自分の義務遂行への依頼と考え、このスラヴォニア人女性を一人々はコリンナと呼んでいたが、捕らえて、八時に自分の前連れて来るよう命じた。八時には短い偵察騎乗から帰還しているであろうと思ったからである。国王は、ラウエンブルク公を熟知していたので、この娘の科は公爵より少ないと思っていて、厳しく、同時に人間的に、この娘に訓戒し、それからヴァレンシュタインの陣営の彼女の父親に送り返そうと考えていた。彼は小姓にこう指示して、小姓を残して騎乗して行った。王妃に安心させる手紙を書くように、そして自らも一筆添えるつもりである、と。八時が過ぎて、国王がまだ戻っていないとき、コリンナはすでに二、三人の猛々しい顔のスウェーデン人傭兵に連れられてやって来た。彼らは、控えの間で手紙に取り掛かっている小姓に彼女を引き渡した。小姓は剣とピストルを側のテーブルの上に置いていた。この小さな城の門前には一人の歩哨が一応いた。

好奇心を起こして、小姓は文字に取り掛かりながらも、この囚人の女性を一瞥した。この女性に小姓は腰掛けるよう命じ、その美しさに驚いていた。ただ中等の背丈で、豊満な上腕の上、上品な首筋に、形の良い小さな頭部があった。難点は少なく、比較的静かな目、比較的広い額、比較的物静かな鼻穴と口許、かくて一人のミューズの甘美な頭部となっていた。コリンナは余りミューズ的ではなかったかもしれないが。真っ黒なお下げと黒っぽい脅すような目は、魅力的な顔を白っぽく輝かせていた。無秩序に陥っている多彩な服は、南方の輝く天を背に褪せたことがなく、北方の天を背にどぎつく目立って見えた。

沈黙はこの娘にとって耐え難くなった。「国王はどこです、貴公子殿」と彼女は甲高く、興奮して叫ぶような声で尋ねた。「馬で出掛けられた。すぐに戻られよう」とロイベルフィングは最も低い声で答えた。

「私が公爵から離れると国王がお考えなら間違いよ」と情熱的娘は放恣な性急さで続けた、「私は死ぬほどあの人が好き。どこへ私は行かされるの。父親の許かしら。父親は私を残酷に扱うことでしょう。私は残ります。国王は公爵に命令する権利を有しません。私の公爵は帝国侯爵なんだから」。明らかにこの不安一杯の女性はラウエンブルク公爵の口まねをしていた。公爵は、たとえそれ自体は破廉恥な人間であっても、すべて自分の蛮行に、半ば嘲笑的に、半ば真面目に、自分の侯爵としてのマントを被せていた。

「それは通じません、御令嬢」とグスタフ・アドルフの小姓は答えた、「帝国侯爵であろうが、なかろうが、国王が彼の司令官です。ラウエンブルク公爵は従う義務があります」。

「公爵は」とこのスラヴォニア人女性は噛みついた、「最も立派な血統です。国王は卑俗なスウェーデン人百姓出身でしょう」。彼女の恋人、ラウエンブルク公が彼女にグスタフ・ヴァーザの百姓服[祖父は逃亡時苦勞し、変装した]から生まれたメルヘンを語って聞かせたことがあるのであろう。ロイベルフィングは侮辱を感じて起き上がり、まっすぐにコリ

ンナへ向かって行き、すぐその眼前で立ち止まって、厳しく尋ねた。「何と申した」。娘も不安げに立ち上がって、今や突然表情を変えて、小姓の首にすがった。「立派な、美しい殿方。私を助けてください。助けてよ。私はラウエンブルクを愛しています。彼から離れません。決して」。そう彼女は叫んで、小姓に嘆願し、接吻し、胸に抱き締めた。しかしそれから言い様もなく、当惑して一步引き下がり、世にも奇妙な微笑をし、その嘲笑するような口許を歪めた。

小姓は青ざめて、色を失った。「お姉さん」とコリンナはずる賢い眼差しで囁いた。「あなたが口添えできるんなら」。 — この瞬間、ロイベルフィングは力強く左腕で彼女の腕を掴んで、跪かせ、素早く握ったピストルの銃身をその小さな頭のこめかみに近付けた。「引き金を引いてよ」とコリンナは半ば狂って叫んだ、「喜びも悲しみもお仕舞いになるんだから」。しかし彼女の小さな首を極めて敏捷かつ柔軟に回転させて、その銃身を避けた。

今やロイベルフィングは鉄の冷たい銃口を額の中央に当てて、死人のように青ざめながら、しかし冷静に語った。「国王は何もご存じないことだ、天に誓って」。信じないという微笑がその答えであった。「国王は何もご存じないことだ」と小姓は繰り返した、「そなたにはこの十字架にかけて、誓って貰うぞ」。 — 彼は彼女の胸から黄金のネックレスを引き出していた、 — 「これは誰から貰ったのだ。母親からと言うのか。 — そなたはこの十字架にかけて、そなたも何も知らないと言っただけで貰うぞ。早くそうしてくれ、さもないと撃つぞ」。

しかし小姓は武器を垂らした。というのは馬の駆け付ける足踏みが聞こえ、軍事的礼砲の物音、それに国王が階段を上がって来る重々しい足音を聞いたからである。小姓は更に跪いた姿勢から身を起こすコリンナを一瞥した。それは嘆願する視線で、これには小姓が発し得なかった言葉がこう読み取れた。「私はそなたの思いのままに。私を憐れんでくれ。私のことをばらさないでくれ。私は国王を愛している」。

国王が入って来た。二時間前に馬で出発したときは、別人となっていて、イスラエルの裁判官のように厳格で、聖書の主人公のように神聖な憤激、燃えるような怒りに駆られていて、民族全体が墮落しないように、天にも届く不正をその中心部から摘発しなければならなかったのである。彼は腹立たしい情景、反吐を催す場面に遭遇していた。ヴァレンシユタインを避けて、スウェーデン人の陣営に逃げて来るドイツ人百姓の群れが、あるドイツ人侯爵の指揮の下、ドイツ人貴族によって略奪されていたのである。

領主達は、自分達のテントのある一つの中で朝方まで酒を飲み、賽子賭博をし、トランプ賭博をした。胴元を務めるのは、いかがわしい素姓の山師で、領主達皆から巻き上げていた。領主達は多分いかさまのこの賭博師を、少し言葉を交わした後、 — この者は貴族の出で、 — それで自分達の仲間の男の一人として、咎めず放免し、一方自分達は、苛立って徹夜明けでテントに戻りながら、重たい荷を積んだ馬車が、陣営の路地の一つで渋滞し、混乱している所に会ったのであった。馬で行きながら、自分のテントを覗いて、巣が空であるのを見たラウエンブルク公爵は、疑惑をすぐさま国王に向けて、領主達の後を追いついて、彼らの略奪欲をかき立てながら、ある行為を使喚した。つまり、国王に尋問されたら、グスタフ・アドルフの心臓を突くしかなくなるであろう行為である。

しかし国王はこの破廉恥を目撃していた。様々な箱が破られ、馬が刺され、あるいは奪

われ、武器のない者達は虐待され、防御する者達は負傷した。一 国王が馬で駆けて行くと、王の許に嘆願する腕や呪いや怨嗟が神の王座に対するのと変わらず寄せられた。国王は自分の怒りを抑えて、後回しにした。まず彼は虐待された逃亡者達を保護するように命じ、それから貴族一同全員九時に自分の許へ参るよう命じた。自分の陣地に戻りながら、彼は憲兵隊長のテントの前で止まって、彼にその赤いマントを羽織って、一 若干の距離を保って、一 付いて来るように命じた。

こうした気分するとき、グスタフ国王は、ラウエンブルク公爵の囲い者の女を目にすることになった。彼はこの娘を検分した。その野生の美しさは彼の気に入らなかった。そのケバケバしい服は彼の澄んだ目には不快であった。

「そなたの両親は誰だ」と彼は、彼女自身の名前や運命を尋ねることを嫌って、始めた。

「クロアチア人の大尉です。母親は早くに亡くなりました」と娘は答えた。自分の黒っぽい目は、彼の明るい目を避けていた。

「そなたをそなたの父親の許に戻そう」と彼は言った。

「嫌です」と彼女は答えた、「父は私を刺しましょう」。

同情心で国王の厳格さが和らいだ。国王は娘のために軽い処罰を探した。「そなたは陣地で男性の服を着用したな。これは禁止されている」と彼はその罪を告げた。

「していません」とコリンナは素直に憤慨して抗弁した、「そんな違反はしたことはありません」。

「しかし」と国王は続けた、「そなたは不義密通を犯していて、高貴な若い侯爵夫人を不幸にしている」。

荒々しい嫉妬心がこのスラヴォニア人女性の目に燃え上がった。「あの人が私の方をもっと、私だけを愛したとしても、私にその責任がありますか。他の女性は私には関係ありません」と彼女は拒絶して反抗した。国王はびっくりした視線で彼女を眺めた。あたかもこの女はかつてキリスト教の幼児教育を受けたことがないのかと自問しているかのようであった。

「そなたのために配慮することにしよう」と彼はそれから言った、「こうそなたに命ずる。ラウエンブルク公爵から永遠に別れるのだ。そなたの愛は大罪だ。聞き入れるかな」。彼女は最初、国王の視線に対し、二本の燃え上がる松明の視線で見つめ、それから固く凝固した視線で耐えて、頭を振った。国王は憲兵隊長の方を向いた。隊長はドアの下に立っていた。

「この人は私をどうするのですか」と娘は慄然として尋ねた、「死刑執行人ですか。私を裁くのですか」。

「そなたの髪を切ることになろう。それからそなたを次の便でスウェーデンへ送る。そこで改善施設へ入って、新教教育を受けて貰う」。

得体の知れない恐れと未知の驚愕に激しく見舞われ、この小さな頭脳は麻痺してしまっただけで、髪を切られてしまったら、何という惨めな、恥ずかしい姿になってしまうことだろう。その冬の夜が長い氷の国のスウェーデン、ここは、仮装や幽霊の国への入口としてお伽噺で聞かされている所である。改善とは何か。何という入念な、残酷な拷問をこの未知の言葉は意味していることだろう。新教の教えとは何か。これは何だろう。異端の女にされるのか。その上更に慎ましい自分の天的に大事な教えを失うことになるのだろうか。今ま

で断食を破ったこともなく、敬虔な訓練も怠ったことのない自分なのに。彼女は千切れたネックレスに掛かっている十字架を握って、それに熱く接吻した。

それから彼女はその迷える眼差しを周囲に向けた。この眼差しは小姓に落ち着いて、復讐心が燃え上がった。彼女は口を開けて、彼女に不義密通を咎めた国王に同じように不義密通を咎めようとした。国王は静かに脇に立っていた。国王は小姓の手紙を手にとって、目を近寄せ、手紙をさっと通読していた。彼の注意深い面影は、正義と温厚さの混じった表情で、何か権威筋の神々しいものを有していて、コリンナは畏怖感を覚えた。彼女は何か見知らぬもの、不気味なものに対するように、それを恐れた。野性的に育ったこの娘は、了解可能な情欲に歪んだ男どもの顔はいずれも正しく判断できて、それを恐れなかったが、この高貴な人間的表情には馴染みがなかった。彼女はもはや国王を長く見つめたくなかった。結局、この雪国の王様は冷凍人間であろうと彼女は考えた。近くにいる女の気持ち、秘かに忍び込んでいる恋愛を感知していない人間なのだ、と。私はこの若い女性の血を犠牲に供することができよう。しかし何になろう。 — この小姓は彼を愛しているのに。

今や憲兵隊長が一步前を出て、スラヴォニア人女性に手を伸ばした。この女性は観念した。瞬時に彼女は小姓に向かって、その耳許に囁いた。「お姉さん、私に十のミサを読んでもください。高価なミサをね。太い蠟燭代の借りを覚えておきなさい。それで一人の女は幸せで、もう一人の方は」、 — 彼女はポケットを探って、短剣を取り出し、鞘を棄て、練達の素早さで、小鳩に対するように首の血管を切った。彼女はこれを野戦炊事で習得し、練習していたのであろう。

憲兵隊長は赤いマントを広げて、彼女をその上に寝かせて、彼女を包み、眠っている子供のように両腕に抱いて、脇のドアから外に運び出した。

今や隣室は、勿論不当に甲高くなされる議論で活気づいており、九時の時が告げられて、国王が、ロイベルフィンクによって開けられた両開きドアから、集合しているドイツ人侯爵達、領主達の間を歩み出た。

領主達は、窮屈な部屋で、密集したサークルを形成していて、五十人から六十人ほどであったかもしれない。この領主達はさほど恭順の振る舞いを見せず、それどころか居丈高であって、あたかも羞恥の色も、恐怖の色も存知しないかのようであった。大胆な者達の横にずる賢い者達、従順な者達の横に名誉心の強い者達、破廉恥な者達の横に敬虔な者達が見られた。大多数は立派に務めを果たしていて、一緒に協議する必要のある者達であった。国王の左手には、謙虚な姿勢で、エアラッハ大尉が控えていて、彼は本来ここにいる必要はなかった。この兵士はグスタフ・アドルフの旗下に入っていて、それはこの国王をその時代の最も敬虔な英雄と見なしているからであった。彼は国王によくこう表明していた、ここ外部の帝国で見聞せざるを得ない罪を目撃するたびに、悲しくなる、と。忘恩、仮面、罫、陰謀、策謀、裏工作、役割分担、隠蔽、賄賂、国土売却、裏切り、これらは自分のスイスの山中では全く未知の、あり得ない事柄であった。彼がここに参加したのは、ひょっとしたら自分の親しい友の、フランス人公使に、彼の朴訥な倫理観に惹かれているこの友に、何かニュースを語るためであったかもしれない。フランス人ときたらとにかく新しいものが好きである。しかしまたひょっとしたら単に、自分の魂の教化のために、悪徳に対する徳操の勝利を見届けたかったのかもしれない。彼はいとも落ち着いて、目を細めていて、組んだ両手の親指をぐるぐる回していた。この徳操の人物の向かい側、国王の

右手には、破廉恥な罪人が立っていた。ラウエンブルク公で、極上のレースの襟の、極めて豪華な衣裳をまとい、落ち着かない足で、魔神的に微笑しながら、目をぎょろぎょろさせていた。彼は憲兵隊長の下僕に出会ったが、下僕は隊長から隊長の外套を渡されていた。この外套の折り目の下に彼は一人の人間の姿を認め、踏み出て、その外套を開けた。

グスタフは集会を弾劾する眼差しで見守っていた。それから嵐となった。珍しく、一国王は、これらの気位の高い顔や、これらの高慢な挙措や、これらの煌びやかな武具の者達が、その下で動悸している不正な心と共に異議を称えていることに対して苛立っていて、この高慢さをやり込め、犯罪に烙印を押し、わざと粗野な、いや百姓的な言い回しを使用することにした。これは普段の彼には見られないことであった。

「貴殿らは最初から最後まで、盗人であり、泥棒である。恥を知るがいい。貴殿らは貴殿らの領民から、信仰の仲間から略奪している。何という様だ。貴殿らには反吐が出る。心臓が煮えくり返る。貴殿らを自由に解放するために、私は自分の宝を使った。一 四十トンもの黄金を使った。一 これほどのものを貴殿らから奪って、一枚の乗馬服も作ろうとは思わない。いや、むしろドイツの生地から服を作るくらいなら、私はむしろ裸で馬に乗りたい。貴殿らには、私の両手に入ったものを贈る、豚小屋一つ私は私物化しない」。

粗野で苛烈な言葉で国王はこれらの貴族を罵った。

それから軟化して、彼は諸領主の勇気を称え、戦場での非の打ち所のない態度を称え、何度か繰り返した、「貴殿らは勇敢だ。そうなのだ。諸君らの乗馬、戦い方に非難する点はない」。しかしそれから二番目のもっと激しい怒りを燃え上がらせた。「貴殿らが私に反乱するなら」と彼は彼らに挑戦した、「私は私のフィンランド人やスウェーデン人の先頭に立って、貴殿らと微塵となるまで激烈に斬り合うつもりだ」。

彼はそれからキリスト教徒的警告を述べ、感受した教えを肝に銘ずるよう頼んだ。エアラッハ氏は手で涙を拭いた。領主達は格別気にすることは無いという表情を浮かべていたが、しかし彼らの態度は明らかにより謙虚なものになっていた。何人かは感銘し、いや感動しているように見えた。ドイツ人の心情は、気の抜けた説教や、繊細で鋭い嘲笑よりも、粗野で実直な叱責の方をより上手に我慢して聞き入れる。

その限りでは、これは上手な、尋常な話しであったろう。この時、ラウエンブルク公が半ば国王の方を向き、半ば自分同僚貴族の方を向き、破廉恥さを剥き出しにして、ならず者の言葉を述べた。

「陛下は何の屑のことで怒っておられるのか。我々領主が何の犯罪を犯したというのだ。我々の家臣の重荷を軽くしてやったのに」。

グスタフは青ざめた。彼はドアの背後で寄りかかっていた憲兵隊長に合図した。

「そなたの手をこの殿の肩へ置け」と彼は隊長に命じた。隊長は近寄ったが、しかし従う勇気がなかった。この侯爵は剣を鞘から引き抜いていて、一同の中に危険なざわめきが生じた。

グスタフはラウエンブルク公の武器を取り上げ、剣を足許に突き刺して、それを破片に砕いた。それから隊長の毛の生えた幅広の手を握って、それを自ら、萎えたようになっていたラウエンブルク公の肩に押し付け、そこにしばらく留めておいて、語った。「御身は、餓鬼殿、帝国侯爵だ、御身の襟を私は掴んではならない。しかし獄吏の手を御身の上に置くぞ」。

それから彼は向き直り、去った。隊長は測ったような歩調で彼に従った。

小姓のロイベルフィングは、密集して立っている領主達のせいで、窓の壁龕へと圧迫されて、その前には重たいダマスク織りの緞帳が巨大な総と共に垂れ下がっていたが、このカーテンが痙攣性の哄笑を発するほどに喜んだ。コリンナ嬢が失血して亡くなった後、この件で彼は気持ちが揺れると共に軽くなっていて、自分の崇める英雄によって軽侮された侯爵達が喜劇の作中人物のように見え、大体、少年が自分の父親のことを満足して、哄笑を抑えつつ、義務を怠った下僕に対して叱る様を聞いている按配であった。この少年は父親の庇護にあると承知していて、父親の声望と威力とを称賛しているのである。しかしラウエンブルク公の発した第一音節を聞いて、小姓はこの人間の声が自分の声との間で有する不気味な類似性に驚愕した。同じ響きで、同じ特徴、同じ張りであった。そして今や、グスタフ国王が去った後、ラウエンブルク公がわざと笑いを発して、次のような甲高い言葉を述べたとき、この驚愕は慄然とするものになった。「奴は馬丁のように罵った。スウェーデン人の百姓だ。いやはや、我々は奴を怒らせてしまった。グスタフを倒せ。ドイツ人の自由万歳。相棒殿、私のテントでちょっと一賭けしよう。ヴェルツブルクの小さなビール樽を開けようぞ」。そして彼は自分のすぐ近くに立っていて君主の左腕に自分の右腕を入れた。しかしこの君主は自分の左腕を丁重に引き下げて、きっぱりとお辞儀をして答えた、「遺憾ながら、先約があります」。

別の、ラウ伯爵[ライン中部の伯爵の呼称]の方を向いて、ラウエンブルク公は、更に陽気な、更に執拗な言葉で誘った、「戦友、貴公は断らんだろう。貴公は私に借りがある」。しかしこのラウ伯爵は、すぐにつっけんどんな領主で、さっさと彼に背を向けた。彼はその試みを繰り返すたびに、ますます手短に、粗野に、拒絶された。彼の歩むところ、振る舞うところに隙間ができて、部屋は空になった。

今や彼は一人つきりになって、皆が去った部屋の中央に残っていた。今や彼は、これから先、同輩から厳しく避けられるであろうと自覚した。彼の顔は歪んだ。憤然とこの烙印を押された男は拳を固めて、それを上げ、運命、あるいは国王に対して威嚇した。彼が何とつぶやいたか、小姓は理解しなかった。しかしこの高貴な頭の表情はとても悪魔的なもので、聞き耳を立てていた小姓は失神しそうになった。

IV

この出来事過多の一日の黄昏に、国王の許に一人の正しい通行券を有するフリートラント人[ヴァレンシュタイン]の大尉が現れた。先の会戦の最中、倒れた者達の埋葬の件とか、その他の、相対峙している両軍の間で交わされる条約の件であるのかもしれない。

小姓のロイベルフィングは大尉を丁度空いている応接室へ案内した。こちらへどうぞと頼み、国王に取り次ぐと述べた。しかしこのヴァレンシュタインの側の男は、黄色の無口な顔の痩せた男であったが、小姓を押し留めた。急いで騎行して来た後、ちょっと休憩したいと言った。ぞんざいに彼は椅子に身を投げ、彼の前に立ち止まっていた小姓と他愛ない会話を始めた。

「貴殿の声は」と彼は気軽に言った、「馴染みがあるように聞こえる。お名前を伺いたい」。この冷静な、独裁者的物腰の者とはかつて面会したことはないと確信があったロイ

ベルフィングは屈託なく答えた、「私は国王の小姓で、ニュルンベルク出身のロイベルフィングと申します。よろしく申し上げます」。

「工芸の盛んな町だな」と相手は無造作に意見した。「済まないが、お若い方、この手袋を――左手のものだが――嵌めて見てくれ。私は若いとき、イエズス会士の教育を受けていて、今の大尉にはもはやふさわしくない健常なまめな習慣を叩き込まれて、道端に遺失物があると、拾ってしまう始末だ。それで私はこれを拾ったのだ」。彼はポケットから革製の乗馬用手袋を引き出した。当時一般的に着用されている類いのものであった。ただこの手袋は例外的に優美なもので且つ顕著に細身のもので、多分ヴァレンシュタインの側であれ、スウェーデン人の側であれ、その兵士の十分の九の場合、嵌めたら一気にすべての縫い目が弾け飛んだであろう。「私はこれを野外階段の一番下の段で拾った」。

ロイベルフィングは、大尉のそっけない調子と命令口調に若干むっとなったが、しかし何の不信感も抱かず、愛想良く丁寧に手袋を握って、細身の指にこの手袋を嵌めてみた。それはぴったり合った。大尉は曖昧に微笑した、「それは貴殿のだな」と彼は言った。

「いいえ、大尉」と小姓は当惑して答えた、「私はこんな上等の革を使用しません」。「それでは返してくれ」、そして大尉はまた手袋を自らポケットに入れた。

それから彼はゆっくりと椅子から起き上がって、お辞儀をした。国王が入室したのであった。

国王は驚きを募らせ、二、三步前進し、彼の強く丸みを帯びた輝く目は一層大きくなった。それから彼は客人に躊躇いながら言葉をかけた。「こちらにいらしたのですか、公爵殿」。国王はこのフリートラント人[ヴァレンシュタイン]と顔を合わせたことがなかった。しかしこの人の至る所に流布している肖像画をよく眺めたことがあって、その頭部はかなり独自のもの、彼を他人と取り違えることは考えられなかった。ヴァレンシュタインは二度目の礼をして、肯った。

国王はこれに対し、真面目に丁寧に答えた。「殿下にご挨拶申し上げます。ご用命に応じましょう。私に何のご要望です、公爵」。彼は小姓にある仕草をして、去るよう合図した。

ロイベルフィングは自分の隣室へ辞去した。そこは貧相な用具しかない、狭い帯状のもので、応接室と国王の寝室の間にあり、寝室はこの家で最も静かな部屋であった。小姓はびっくりしていた。恐ろしい將軍の姿を見たからではなくて、この遅い訪問が不気味であったからである。この訪問を自分の運命と関連付けようとする暗い感情が生じていた。

好奇心よりもむしろ不安に駆られて、小姓はこっそりと奥行きのある戸棚のドアを開けて、その壁の隙間から、――一言必要があるのであれば、――彼はすでに一度――ほんの一度だけ、国王に対し盗み聞きをしたことがあり、支障なく、国王を心ゆくまで眺めたことがあった。彼の目と、交互に彼の耳とが今やこの隙間から離れなくなったのは、盗み聞きされた会話のとても珍しい内容のせいであった。

向かい合って座っている二人は、しばらく、凝視することなく、眺め合いながら、黙っていた。ドイツの運命を決定づけるチェスの勝負が、すでに多義的な指し手と秘匿の計画とで始まっていて、すべての戦場で展開中の後、この決定的で、物事の新たな状況を形成する戦闘以前に、交渉の言葉を交わすことは適切ではなく、妥協は不可能であると、兩人とも承知していた。ヴァレンシュタインはこの気持ちを述べた。「陛下」と彼は言った、

「私は個人的な案件で参っています」。グスタフは冷静に、丁重に微笑した。そしてヴァレンシュタインは始めた。

「私は寝付けないとき、ベッドで本を読む習慣です。昨日、あるいは今日未明、私はフランス人の回想録で面白い話しを見つけました。提督の法的罷免を逐語的に記してある話です、――つまりコリニー提督のことで、私はこの人を将軍として評価しています。陛下のお許しを得て話しましょう。提督の許にある日、一人のバルチザンが現れました。ポルトロとかそのような名前の人間です。半ば狂人のように彼は椅子に身を投げ、自己会話を始めて、その中で彼は提督の政治的軍事的敵、つまりフランソワ・ギーズに関して熱狂的に話し、このロレーヌ公をこの世から抹殺する件について述べたのです。それは、申したように、一人の精神障害者の自己会話で、この件にどのような価値を置くかは提督にかかっていました。――私はドラマ作家にこの場面は重要と推薦したいところです。提督は黙っていました。提督はこの人間のお喋りを空虚な自慢話しと見なしたからです。それでフランソワ・ギーズは倒れました、一発の弾に当たって、――」。

「コリニーがそのように見なしたのであれば」と国王は遮った、「私はコリニーを非難します。それは非人間的で、非キリスト教徒的です」。

「それに非騎士道的です」とヴァレンシュタインは冷たく嘲った。

「本題を、殿下」と国王は頼んだ。

「陛下、私はこれに類することに今日遭遇したのです。ただ殺害の意志のある者は、更に手の込んだ芝居をしていました。貴方の領主達の一人が面会を求めて来ました。私は仕事中で、その者を隣室へ案内させました。私が入ったとき、彼は蒸し暑い昼休み時で、うたた寝をしており、夢見て激しく語りました。ただわずかなどもった言葉でしたが、しかし関連は察せられました。私が読み解いたところでは、陛下はこの者を、詳しくは存じませんが、致命的に侮辱なさっていて、この者は、どんなことがあっても、スウェーデン国王の命を奪うと決心しているのです。いや、そう強いられているのです。あるいは、少なくとも正当な犠牲を払ってそうする、自分は陛下の間近にいて、陛下とは日々付き合っただけで暮らしているのだから、ということでした。私はその後、この夢見ている男を起こして、余計なことを言わず、この者の要望を尋ねました。それは、すでに何年も前、皇帝側の軍務に就いていて、行方不明のラインラント人の消息についてで、まだ存命かどうかの問い合わせでした。遺産の件なのです。私は事情を告げ、この策謀者を帰しました。私は彼の名前を尋ねなかった。私には偽名を告げたことでしょう。またこの者を、どもった夢物語の千切れた言葉を証拠に逮捕することも、適切ではなく、全く不当なこととなったことでしょう」。

「勿論です」と国王は同意した。

「陛下」とヴァレンシュタインは一語一語強調しながら語った、「これは警告です」。

グスタフは思案した、「私は私の時間をこの件では使いません。この件で気持ちを乱しもしません」と彼は言った、「かくも疑わしい、ぼやけた手がかりを追いかけても。私は神の御手の中にあります。殿下には更なる証言とか間接証拠がありますか」。

ヴァレンシュタインは手袋を取り出した、「私の耳とこの襷袢切れが証拠です。この夢想家は細身で、全く特性のない、無表情の顔をしていと陛下に申し上げるのを忘れていました。この顔は明らかに、かの顔に密着する仮面、ヴェネツィアで大変巧妙に作られる

仮面を着けていたと思われます。しかし彼の声は、快適な力のこもったもので、バリトン、あるいは低いアルトの声で、貴方の小姓の声に似ていなくもありません。それに彼の手から落ちて、私の許に残されていた手袋は、この小姓にぴったり合うのです」。

国王は朗らかに笑った、「私は私の微睡んだ頭を私のロイベルフィングの膝に置くことにしよう」と彼は請け合った。

「私も」とフリートラント人[ヴァレンシュタイン]は答えた、「この若者に邪推は抱けません。小姓は善良な正直な顔をしています。私の裸足のボヘミア人娘達が走り回るときの、大胆な少年のような顔と同じものです。しかし、陛下、私はどの人間も保証しません。顔には騙されます。 — 騙す顔ではなくても、 — 私はその声が私の憎悪者の声と同じであるような、その手が私の暗殺者の手と同じサイズであるような小姓を周りに置いていたくありません。たとえ私の寵愛の者であろうとも。これは不吉です。厄災が感じられます。破滅の予感がします」。

グスタフは微笑した。この堂々たる成り上がり者は、今や、自分がハプスブルク家との途方もない協定によって、不可侵のもの、キマイラ的な[怪獣的な]ものである帝国に足を踏み入れていて、以前よりもすべての種類の迷信を信ずるようになっていたかと思いたくなった。運命に対する信仰と、この運命を無力化する誘惑との間の、内心の矛盾を見つめながら、自分の内の生きた神を確信している国王は、一言でも、一つの暗示でも、思うに地獄のまやかしが一芝居する領域に触れたくないのであった。国王は会話を打ち切って、起き上がり、公爵に対し、彼の誠意ある振る舞いに感謝した。しかし彼はヴァレンシュタインがぞんざいに二人の間にある小卓に投げ付けていた手袋に手を伸ばし、それはとても近視眼的振る舞いであって、それで同様に起き上がった鋭い眼差しのヴァレンシュタインは思わず微笑することになった。

「私はとても嬉しい」と国王はヴァレンシュタインをドアの方へ案内しながら、冗談を言った、「殿下が私の命のことを気遣われているので」。

「それは当たり前です」とヴァレンシュタインは答えた、「陛下と私が我らの軍と共に戦い合っている、陛下と私は」、 — と公爵は丁重に、「我々は」と言うのを避けて、言った、「それでも一緒です。一方は他方がなければ考えられませんし、それに」、 — と今度は彼が冗談を言った、「陛下か私が、世界のシーソーの一方の端から落ちたら、他方も無情に地面に叩き付けられましょう」。

再び国王は思案して、思わずこう推測した。何らかの天上的な情勢、星座の位置が、ヴァレンシュタインに対し、両者の命日の時を関連付けて見せたのかもしれない、秘かな足取りで、頭を隠したまま、一方が他方に従っているであろう、と。珍しくこの思いが、突然、国王の神への信頼にもかかわらず、国王の中で強固になった。今や、このキリスト教徒らしい国王も、ヴァレンシュタインがとらわれている迷信的雰囲気自分まで呑み込まれ始めていると感じた。彼はまた出口に向かって一歩進んだ。

「陛下は」とヴァレンシュタインはほとんど情緒的に自分の訪問を結んだ、「少なくとも娘さんのために御自身を大事になさってください。皇女は健気に勉強なさっていると聞いています。とても陛下の慈しみの中で成長されていると。息子がいないのですから。私も子供は娘が一人です」。こう言って公爵は辞去した。

盗み聞きした会話のせいで、幽霊を見たように髪が逆立った小姓はなおも、グスタフが

安楽椅子に身を投げて、手袋と戯れるのを見ていた。小姓は隙間から目を離し、部屋の中によろめき戻りながら、臥所の横に跪いて、自分の崇める英雄の無事を天に祈った。この英雄にとっては、自分がただいるだけで、――ヴァレンシュタインの主張によればその主旨であって、小姓自身今やそれを信じ始めたが、――神秘的不幸の原因となりかねないのであった。「どのような代償を払おうとも」とこの絶望した小姓は誓約した、「私は国王から離れることにしよう。国王を私から解き放って、私が間近にいることの不吉さが災いとならないようにしよう」。

小姓は呼ばれないままであったので、小姓がようやくまた国王の許に戻ったのは、かの自由時間の折であって、その時は大半が取るに足りない会話で過ぎて行った。一つの例外は国王が一度こう尋ねたのであった、「そちは今日昼頃どこにおったのだ、ロイベルフィング。私が呼んだとき、そちはいなかった」。小姓は真実に沿って答えた。自分は朝の出会いで動揺して、戸外に出たいと思い、馬に乗って、ヴァレンシュタインの陣営の方へ、ほとんどその大砲の届く所まで駆け回りました。小姓は国王の好意的叱責を期待していた。しかしこの叱責はなかった。再び会話は屈託のない方向に向かい、今や十時の時が告げられた。するとグスタフはぼんやりした身振りで、ポケットから手袋を取り出し、それを眺めながら言った、「この手袋は私ではない。そちの忘れ物か、うっかり者め。私が誤って入れたのかな。これを嵌めてみる」。彼は戯れに小姓の左手を握って、柔らかな革を小姓の指に嵌めた。「合うな」と彼は言った。

しかし小姓は国王の前で平伏し、彼の両手を握り、その上に涙が注がれた。「ご機嫌よう」と小姓は嗚咽した、「私の御主君、私のすべて。神と神の軍勢が御身を守り給わんことを」。それから突然跳ね起きて、狂った者のように外に駆け出した。グスタフは起き上がって、小姓を呼び戻した。しかし早速ギャロップの馬の蹄の音がし、――それから奇妙にも、――国王はその夜も、翌日も、自分の小姓の逃走と不在に関して、沙汰に及ばなかった。勿論国王は両手に一杯仕事を抱えていたのである。ニュルンベルク近郊の陣地を引き上げる決心をしていたからである。

ロイベルフィングは自分の馬の大股のギャロップを止めなかった。馬は自ずと陣地の遠い外れまで来て疲れていた。騎乗者の興奮した感覚も落ち着いて来た。今や明瞭に思考して、この逃亡者は、自分を国王の側から追い払うことになったかの出来事の暗がりの中に、愛と憎しみの鋭い眼差しで、自分の分身を見つけだしていた。それはラウエンブルク公だ。自分は目撃しなかっただろうか、この烙印を押された者が国王の正義に反抗して拳を固める様を。この咎人は自分の声とそっくりの響きを有していないだろうか。自分の目は十分に女の目であって、かのおぞましい瞬間に、固められた君主の拳の小ささに気づかなかただろうか。確かに、あのラウエンブルク公は復讐を考えていて、愛しい頭目への殺害を考えていた。そして自分の国王に対する不気味な迫害と忍び込みのこの時間に、ロイベルフィングは危機の王の間近から身を遠ざけてしまった。自分がかつて抱いた最愛のものに対する果てのない心配で、小姓の心は圧迫され、この最愛のものをもはや有していないと考えて、重苦しい嗚咽に陥り、それから滂沱の流涕に至った。一人のスウェーデン人歩哨、すでに灰色のヴァンダイク髭のマスケット銃兵が、細身の騎乗者が泣いているのを見て、口を歪めて、陽気な渋面となって、しかし親切に尋ねた。「若君は家が恋しいのか」。ロ

イベルフィングは気を取り直した。そしてゆっくりと先へと騎乗して行きながら、小姓は陣地から去らないと大胆に決心した。これは自分に生来のもので、戦争体験で倍加したかの大胆さであった。「国王は陣地をいずれ引き払うだろう」と小姓は自らに言った、「私はある連隊に入ろう。そして行軍し、疲労しても、匿名のまま残ろう。それから戦闘になる」。

このとき小姓は一人の大佐に気づいた。彼は陣営の通りを見張っていて、騎乗していた。月の明かりはとて強烈で、一通の手紙を読めるほどであった。かくて小姓は一瞥して、自分の父親の一人の友であって、父ロイベルフィング大尉が致命傷を負った決闘の際のその介添え役の人物を認めた。小姓は栗毛をこのスウェーデン人の左手に寄せた。大佐は、最近大抵前哨勤務であって、この若い騎乗者を注意深く観察した。「私の見間違いかもしれないが」と彼は始めた、「若干離れているが、貴殿は国王の側の小姓ではござらぬかな。まことに、今また貴殿と分かる。若干月のせいで青ざめて、憂鬱そうに見えるが」。それから突然、不意に思い出して言った、「貴殿はニュルンベルク人ではないか」と彼は続けた、「それも亡きロイベルフィング大尉との親戚の。貴殿は大尉と驚くほどそっくりだ。いや、そもそもその子供、お転婆のグステル嬢だ、十六歳まで我々と一緒に馬に乗っていたな。いや、月明かりには騙されて、迷う。降りることにしよう。ここが私のテントだ」。そして彼は自分の馬と小姓の馬をひしゃげた鼻と広い顔の、彼を待ち受けている従者に渡した。従者は自分の主人を気の良い間抜けな微笑を浮かべて迎えた。

「ゆっくりなされ」と老公は小姓を招いた。小姓に折り畳み椅子を差し出し、自分は固い寝台に腰を下ろした。二本の火屋付き蠟燭が揺らめく明かりで照らした。

すると大佐はいきなりその幅広の正直な手を小姓の髪に滑らせた。剥き出しにされた額の上の所に古くて深い傷跡が見えた。「グステル嬢、阿呆な奴」と彼は発した。「私が忘れることがあろうか。そなたをハンガリー産の若駒が後の蹄で蹴り上げて、その固い頭上に飛ばし、そなたが空中に舞って、我々は三人ともそなたは死んだと思って拾い上げたものだ。母親は泣きわめき、父親は幽霊のように青ざめ、私自身とてもびっくりした。申し分のない兵士だった、故ロイベルフィングはな。私の最良の大尉で、私の心からの友だ。ただ少しばかり頓狂だ。そなたもその血筋だ、グステル。いやはや、どれほど長く国王の側でお仕えしているのだ。しかしまこと少年のように見えるな。そなたのブロンドの縮れ毛、うなじの所ものは剃ったのか、腕白娘」。そして彼は彼女の髪をつまんで引き抜いた、「そなたは自分が陣地で一人女だと思ふことないぞ。まあ、このヤーコプ・エリクソンを見てみる。此奴をな」。若造が丁度、瓶とグラス持って入って来た、「そなたのような男だ。心配いらん、グステル。此奴は一言もドイツ語を覚えぬ。余りに愚かすぎてな。しかし信心深い、正直な女だ。嫌味もあってな。ちなみに世にも単純な話しだ、グステル。七人の腹を空かした餓鬼がいて、養育者の夫に徴募が来て、代わりに女房が入ったのだ。考え得る最良の奴だ。もはや奴を手放せない」。

小姓はこの健気な生き物をきっぱりと嫌悪感をもって見つめた、一方大佐は更にガミガミ言った、「しかしグステルよ、国王の側に寝泊まりするとは、大した度胸だな。国王は男装の女どもを毛嫌いしているだろう。夢物語を演じたわけだな。ウプサラ大学でモノドラマと呼ばれている芝居だ。一人の人物がたった一人っきりの自分のために歓声を上げ、恐れ、臆し、感受し、悲壮になり、空想するというやつだ。この世の人物の誰にも知られ

ず、誰もこれっぽっちの関心を示さない芝居をして、そなたはどんな気分なのだ。気に障ったか。命がけではなかったのだろう。そなたの正体がばれても、『失せろ、愚か者』と国王はそなたを叱って、次の瞬間には何か別のことを考えていたかもしれない。いや、そなたを王妃が勘付いていたら、どうだ。おおこわ。それで私は言っている、子供に接吻しちゃよくないとな。接吻は眠っていても、唇が育って大きくなったら、また目覚めるのだ。これは正真正銘そうなので、国王は私の腕からそなたを一度取り上げてな、名付け子よ、そなたをあやして、接吻し、ぷちゅと高い音をさせたものだ。そなたは大胆な、可愛い子供だったからな」。小姓はもはやこの接吻のことは何も覚えていなかったが、深く赤くなってこの接吻を感じた。

「それで、お転婆、どうしたもんかな」。彼は一瞬考えた。「要するにだ、私は二番目のテントをそなたに譲ろう。私の使い走りになってくれ。逃げ出さないと言ったのだ。私と一緒に和平の時まで馬で駆けよう。その後で、私はそなたを故郷スウェーデンのゲフレ近郊の私の屋敷へ連れて行こう。私はひとり身だ。私の二人の息子、アクセルとエーリヒは、一」、彼は涙を拭いた、「国王と祖国のために亡くなった」と彼は言った、「残った長男がファールンに暮らしている。立派な聖職禄を貰って、御言葉に仕えている。そなたは我々二人のどちらかを選べばいい」。小姓ロイベルフィングは、すでに自らに誓約したことを、名親に誓約した。その後、自分の冒険のすべてを彼に語った。それは長く仮面を被った後で、長い断食の後の空腹や喉の渇きの如く、猛然と語って飽きないかの真実への欲求に従っていた。

老公はその件を考え、それから殊に従兄弟ロイベルフィングのことを面白がった。小姓は彼にその肖像を描いてみせた。「亜麻色髪の男は」と彼は哲学した、「臆病者であっても仕方ない。それは血筋だ。私の息子も、ファールンの牧師も兎[臆病]だ。母親から受け継いでいる」。

夏の終わりから、葡萄摘みが終わるまで、そしてある霜の朝、最初の薄い雪片が軍用道路上に舞うまで、小姓ロイベルフィングは品行方正に自分の名親オーケ・トット大佐の横で、縦横に、遠征の移動に合わせて騎乗した。小姓は主要宿営と国王に出会わなかった。大佐は大抵、前衛か後衛の任務であったからである。しかしグスタフ・アドルフは小姓の精神の目を満たしていた。今や国王が小姓の巻き毛に手を滑らすことはなく、小姓もこの支配者の側で、ただ薄い壁で仕切られて、この国王の寝返りや咳払いの音を耳にすることはなくなって、ただ神々しい近寄りがたい姿の国王となっていたのであるが。たまたまロイベルフィングは自分の国王をまた目撃することがあった。それはナウムブルクのマルクト広場でのことで、ここに小姓はある買い物のことで遅れてしまい、丁度大佐の後を追って馬に乗ろうとしていたときであった。大佐はこのとき、前衛の指揮をしていて、その町をすでに離れていた。ますます密になる群衆のせいで、馬と共に家々の方へ押し戻されながら、彼は狭い広場で一つの見世物を見た。これに類するものは、何百年も前、平和の樹立者[イエス]が雌ロバに乗って、エルサレムに入城したとき、ただ初めて人間の目に紹介されたと思われるものである。勿論グスタフがその立派な軍馬に乗っていて、周りには勇敢な馬に乗った甲冑の大尉達がいた。しかし何百人もの情熱的人物達がいて、女達は、両腕を上げ、歓呼する頭上に子供達を持ち上げており、男達は両腕を突き出して、グスタフ

の右手を掴み、握手しようとしており、女中どもは、ただ彼の鎧に接吻していて、卑俗な者どもは、彼の前で跪いており、馬の蹄で蹴られることも恐れず、馬の方も穏やかに落ち着いて歩いており、大胆な、愛と熱狂の嵐に拉致された一団の民衆が北方の国王を取り囲んでいた。この国王が民衆の精神的財宝を救出したのであった。国王は明らかに感動して、自分の馬から下の灰色髪の土地の聖職者に礼をしていた。聖職者はロイベルフィングのすぐ眼前で、国王の手に接吻していて、国王はそれを断ることができず、声高に語った。「人々は私のことを神のように崇めている。これは過ぎたことだ。私は自分の終わりを自覚する。説教者殿、私は異教の女神、ヴィクトリアと、キリスト教の死の天使と一緒に騎行している」。

小姓は涙が溢れた。しかし小姓が向かい側のある窓辺に王妃の姿を見て、王妃に国王が懇ろな別れの挨拶の合図をすると、小姓の胸に燃えるような嫉妬が生じた。

一週間も経たないうちに、スウェーデン軍がリュッツェンの平坦な戦場に集結したとき、オーケ・トットは国王の乗った場所から遠からぬ脇の方を行軍して行った。そのときロイベルフィングは一羽の猛鳥を目撃した。これは、千切れた雲の下、執拗に漂いながら、国王の一行の上で窺っていて、供の者達の射撃によっても騒がず、離れて行かなかった。小姓はラウエンブルク公の復讐がグスタフ・アドルフの上に漂っているのではないかと、公のことを思い出していた。小姓の哀れな心は法外な不安を抱いた。早くに黄昏れると、小姓の不安は募った。そしてすっかり暗くなると、小姓は誓約を破って、馬に拍車を当て、小姓に「少年、誓約を破るな」と後から呼びかけている大佐の目から消えて行った。

絶えず騎乗を続け、小姓は国王の馬車に追いついた。そして供の者達の間紛れ込んだ。供の者達は予期される大きな会戦の前夜で、小姓に気づいていないか、小姓のことを気にしていないかのように見えた。国王はその夜馬車の中で過ごすつもりであった。しかし寒さのせいで、やむなく馬車から降り、つましい一軒の百姓家に宿泊を求めた。朝になるとこの低い部屋に伝令達が押し寄せた。国王はすでに地図を眺めていた。スウェーデン人の配置は終わっていた。ドイツ人の連隊の配置が始まった。小姓のロイベルフィングは、彼に好意的な国王の近侍によって認められ、弁明せずとも、スウェーデンの紋章を刺繍してある床几をまた与えられて、隅の方に座っていた。この床几に普段座って国王の側にいたのであるが、今はこの隅にいて、入れ替わる兵士達の陰に隠れていた。

国王は今やその最後の命令を発して、とても風変わりな気分であった。国王はゆっくりと立ち上がって、列席者達、全くのドイツ人達の方を向いた。この者達の中には、ニュルンベルク近郊の陣営で、苛烈な言葉で叱責したときに居合わせていた者も何人かいた。国王が間近だと思っているかの帝国の真実と慈悲とが国王の心を捉えたのであろうか。彼は手で合図して、小声で、ほとんど夢見ているように、ほとんど動かない口よりも、むしろ霊的な目で語っていた。

「友人諸君、今日は恐らく私の最期の時であろう。それで私は諸君に私の遺言を残したい。戦争を案じてのことではない。――これは生き残る者達が考えることであろう。むしろ、私が亡き後の、――諸君の許での私の思い出のためだ。私は色々な思いを抱いて海を渡って来た。しかし、率直に言って、すべての思いに勝って、純粋な言葉を大事にしてきた。ブライテンフェルトでの勝利の後、私は皇帝に和平を提案して受け入れられた。そしてそれが保証されて、私は戦利品と共に私のスウェーデンの絶壁に猛獣のように帰還

できた。しかし私はドイツ人の案件を考えていた。諸君、私は諸君らの王冠への意欲がないわけではなかった。しかし、率直に言って、私の名誉心よりもこの帝国への心配が勝った。この帝国はこれ以上長くハプスブルク家に属してはならない。というのはこれは新教の帝国だからだ。しかし諸君らはこう考え、こう言う。異国の国王が我らを支配してはならない、と。これは諸君らの言う通りだ。こう書かれているからである。異邦人がこの帝国を引き継いではならない、と。私は最後に私の子供の手のこと、十三歳の少年のことを考えた、...」。彼の小声の演説はチューリングゲンの騎兵連隊の激しい歌声に圧倒された。この連隊は国王の宿営地を通過しながら、熱狂して次の言葉を強調していた。

「神は、神がよくご存じの
ギデオンを通じて、汝をきつと守ろう、...」。

国王は自分の演説を終わらせずに、聞き入っていて、こう言った。「十分であろう。万事異常なし」。そして領主達を去らせた。それから彼は跪き、祈った。

そのとき小姓ロイベルフィングは、ラウエンブルク公が入って来るのを見て、動悸が早くなった。彼は卑俗な騎乗者の服を着ていて、平伏し、身悶えする身振りで近付き、国王に対し懇願しながら両手を差し出した。国王はゆっくりと起き上がった。今や彼は国王の前に身を投げ、彼の膝を抱き、嗚咽し、放蕩息子の感動的言葉で彼に呼びかけた。「父上、私は天と御身に対し罪を犯しました」。そして繰り返した、「天と御身に対し罪を犯しました。私は御身の息子と名乗るにもはや値しません」。そして彼は悔悛の頭を垂れた。しかし国王は彼を地面から引き上げ、両腕で彼を抱いた。

小姓のびっくりした眼前から、二人の抱擁した者達は霧の中へ行くように消えた。「これは、これは本当のことだろうか。国王の神聖さがならず者に対し奇蹟を起こしたのだろうか。それとも悪魔的仮面なのだろうか。この偽善者の中で最大の不埒者は、最も純粋な口の言葉を乱用しているのだろうか」。このように小姓は感覚が混乱して、こめかみがズキズキしながら、疑念を抱いていた。そして瞬間が経過した。馬どもが連れて来られ、国王は自分の胴着を求めて叫んだ。近侍が現れた。その左手には要求の品を、右手には、首の部分を持って、甲冑を持っていた。そこで小姓は、弾にも丈夫な甲冑を奪って、これを国王に着用させる用意があるとの表情をした。しかし国王は、小姓がいることに驚きもせず、言い難いほどに好意的な眼差しで拒み、いつもの習慣通りにロイベルフィングの縮れ毛の前髪に手を滑らせて、「グストよ」と彼は言った、「それはいい。それは圧迫する。胴着をくれ」。

すぐその後、国王は飛び乗って、その背後、左右にラウエンブルク公と小姓ロイベルフィングを従えていた。

V

スウェーデン軍の戦線の背後にある村モイヘンの牧師館では真夜中頃寡夫の学士トーデヌスがフォリオ判の聖書の背後にいて、その家政婦のイーダ夫人、華奢な、同様に寡婦の女性に、悔い改めのダビデの詩篇を読んでいた。学士は　　—　　ちなみに灰色の粗野なバン

ダイク髭を有する戦闘力のある男で、若い頃数年軍隊にいたことがあったが、一その後熱心にプロテスタントの英雄の無事を祈ってイーダ夫人と祈祷した。この英雄は丁度今、少し離れた所で戦っていて、優勢なのか敗北なのか学士には分からないのであった。そのとき、激しく中庭の門が叩かれ、霊を信ずるイーダ夫人は、臨終の者が来ていると察した。

その通りであった。門を開ける牧師に対して、若者がよろめいて向かって来た。死神のように青ざめて、熱病の目を大きく開けて、無帽で、額に割れた傷があった。その背後で、別の男が一人の死者を馬から持ち上げた。重い男であった。牧師は、傷で損なわれていたが、これはスウェーデン国王であると分かった。彼は国王の入場をライブツィヒで見たことがあって、国王の的確な描写の木版画をここの彼の部屋に掛けていた。深く感動して、彼はその顔を両手で覆い、嗚咽した。

熱に浮かされたように素早く、また迅速に命令して、この負傷した若者は、国王を隣接する教会の内陣で棺に収めて欲しいと要求した。しかしまず若者はぬるい水と海綿とを所望し、血と傷だらけの頭を綺麗にした。それから同行者の助けを借りて、死者を貧弱な棺に収めた。死者は彼の両腕にとって重すぎたが、その棺の側で跪き、蠟色のその顔を愛しそうに眺めた。しかし若者がその顔を海綿で拭こうとしたとき、若者は気を失って、前方の死体の上に落ちた。その同行者は若者を起こし、より間近に見つめ、額の傷の他に、二つ目の胸の傷に気づいた。心臓の箇所を繕われた裂け目の側に新しい裂け目があって、そこから血が染み出していた。自分の同僚の服を用心して開けながら、このスウェーデン人の騎兵旗手は自分の目が信じられなかった。「いやはや、これは失礼」と彼はどもった。そしてイーダ夫人は、水を容れた鉢を持っていたが、段々と赤くなった。

この瞬間ドアがさっと引き開けられ、オーケ・トット大佐が入って来た。糧食の件で背後に送られ、大佐はその仕事を片付け、戦場にまた駆け付け、村の路地で、居酒屋の前、一杯のブランデーを飲み干しながら、一人の死者を自分の前に乗せた、よろめく騎馬者の噂を耳にしたのであった。

「これはまことか、あり得ることか」と彼は叫んで、自分の国王に駆け寄り、その手を握って、涙で濡らした。しばらくして振り向き、若者を見つけた。若者は正体を失って、安楽椅子に手足を伸ばして寝ていた。「何たることだ」と彼は怒って叫んだ、「グステル嬢はまた、国王の許に戻ったのか」。

「戦友殿、私はこの若君が」と騎兵旗手は用心して述べた、「死んだ国王を馬上、自分の前に乗せて戦場を渡るのを見たのです。この若君は陛下のために犠牲となったのです」。

「いや、私の身代わりだ」とオールドミス風な顔の背の高い人間が遮った。それは店主ラウプフィンガーであった。戦争のために危うくなった借金を徴収するために、安全な地のライブツィヒから乗り出して来て、知らずに戦場に近寄っていたのであった。荷車の渋滞した村の路地にはまり、その後大佐に近寄って、彼に身の警護を依頼したのであった。感謝と安堵とで思いが溢れ、今や彼は居合わせた者達に詳しく自分の家庭の話しを語った。「グステルよ、グステル」と彼は泣いた、「そなたはまだそなたの従兄弟のことが分かるか。そなたが私のために果たしてくれたことに対し、どれほどのお礼を支払ったものか」。

「簡単なことだ、旦那。ただ黙っていることです」と大佐は彼を叱った。

しかし牧師は中央に歩み出て、平静に真面目に語った。「皆さん、この世の事情をご存じでしょう。この世は煩瑣なことに満ちています」。イーダ夫人が嘆息した。「一人の偉

大で純粋な人間が、偉大で純粋な件を代弁しているときに、最もこれが多く見られます。ほんの些細な邪推でも露見して、この思い出を汚そうものなら」、一 彼は静かな国王を指し示した、一 「教皇主義者の中傷が、この哀れな蚊のような話しから、どんなお伽噺を作り上げるか分かりません」、そして彼は失神した小姓を示した、「この蚊はその羽根を名声の太陽で焦がしてしまったのです。私は全身全霊をかけて、亡き国王はこの娘のことは知らなかったと確信しています」。

「了解した、聖職者殿」と大佐は誓った、「私もそう確信している、私の冥福も、仕事によってではなく、信仰によって得られるからな」。

「確かでしょう」とラウプフィンガーは証した、「さもないと国王は従姉妹を家に戻して、私を探したことでしょう」。

「いやはや、これは失礼」と騎兵旗手は誓い、イーダ夫人は嘆息した。

「私は御言葉に仕える者です、大佐殿。貴殿の髪は白い、貴殿、騎兵旗手殿は貴族ですし、ラウプフィンガー殿、貴殿の役に立ち、利になることです。イーダ夫人に対し私はこう保証します、我々は漏らさない、と」。

今や小姓は、臨終の目を開けた。それは不安げに辺りをさまよって、オーケ・トットに釘付けになった。「名親様、私は約束を守らず、できずに、一 大きな罪人の女となりました」。

「大きな罪人の男です」と牧師は厳しく遮った、「間違ったことを述べておられる。貴殿は小姓アウグスト・ロイベルフィンクで、ニュルンベルクの名門市民、商会主のアルボガスト・ロイベルフィンクの嫡出の息子、出生日は云々で、逝去日は一六三二年十一月七日、リュッツェン近郊での会戦の際、前日に受けた傷が基で死亡、国王グスタフ・アドルフと共に戦えり」。

「勇敢に戦えり」と騎兵旗手は熱狂して補った。

「そのように貴殿の墓石に記そう。しかし今は神との安寧を請う時です。貴殿の最期の時です」。学士はこのことを厳しさを交えて語った。というのは自分の英雄の評判を危うくしたこの向こう見ずな少女に対する不機嫌を抑えることができなかったからである。この少女はすでに虫の息であったのであるが。

「私はまだ死ねません、まだ話すことが沢山あります」と小姓はぜいぜい言った、「国王は、...霧の中で、...ラウエンブルク公の弾が、一 」。死神が彼女の口を閉ざした。しかしそれでも薄れて行く目の力を最後に振り絞って、国王の顔を求める気力が残っていた。

居合わせた者達はそれぞれ自分の推論をして、自分なりにその言葉を補充していた。しかし精神の敏捷な牧師は、ドイツと新教の件の救済者が、一 牧師にとってこれは同じことで、一 一人のドイツ人侯爵によって暗殺されたと考えることは、自分の愛国主義に馴染まないことなので、一同皆に、死神によって途切れた演説のこの断片を、小姓と一緒に埋葬してしまうよう切に訓戒した。

今や、アウグスト・ロイベルフィンクはその運命を全うして、生氣なく国王の側に横たわっていて、従兄弟が嗚咽して言った、「では、従姉妹は永遠に身罷って、相続手続きとなりましたので、私は私の名前をまた取り戻せますかな」。そして彼は周りの者達に問いかける視線を送った。トーデヌス学士は丁度、幸福な表情をしているこの勇敢なニュルン

ベルク人女性の無邪気な顔を眺めていた。この厳格な男はある感動を抑えることができなかった。そこで彼は決心して言った、「駄目ですよ、旦那様。貴殿はラウプフィンガーのままです。貴殿の名前は光栄にも、高貴な志操の少女の墓塚に記されることになりましょう。素晴らしい英雄を死ぬまで愛し続けた少女です。しかし貴殿は貴殿の至高の財産、愛する生命を救出された。それで貴方は満足なさることです」。

教会は押し寄せる人々の群れに対し、封鎖がなされ、門がかけられた。ここに国王が眠っているという噂が急速に広まったからである。死者達はそれから洗滌され、内陣で棺に収められた。至る所、明るくなっていた。教会の門が、苛立たしげな身振りの、しかし敬虔な表情の参詣者達のために開けられたとき、両死者は祭壇の前、二つの棺に安置されていた。国王はより高く、小姓はより低く、そして逆向きで、小姓の頭は国王の足許に安らっていた。朝日の光線が、―― 昨日の霧の日に続く翌日は雲一つない青天で、―― 低い教会の窓から射し込んでいて、英雄の顔を神々しくし、更に微光を小姓ロイベルフィングの縮れ毛の頭に残していた。

僧侶の結婚

所はヴェローナである。広大な暖炉で燃えている幅広の火の前で、ぎりぎり作法にかなった極めて寛いだ姿勢が見られた。男女の若い廷臣達が、同じように若い領主と二人の花盛りの女性を取り巻いていた。暖炉の左手にこの君公の一团が座っていて、これに対し残りの者達は後の半円を形成していた。暖炉の反対側は宮廷の風習で空けられていた。領主はカングランデ[1291-1329]と呼ばれていて、かのスカリージェリ[デッラ・スカーラ]一族である。彼が中心に取まっているかの女性達のうち、暖炉に一番近くて、若干下がり、薄暗がりの中に寛いでいるのは、彼の奥方で、もう一人の女性、照明を全身に浴びている女性は、彼の親戚の女か恋人であったろう。意味深な目配せや小声の哄笑と共に話しがなされていた。

このときこの官能的で気ままな一座にあるしかつめらしい男が寄って来た。その目立った面影や長い衣服は別世界からのもののように見えた。「御領主、私はここの暖炉で温まりたく参りました」とこの異邦人は半ば荘重に、半ば軽侮して語ったが、こう付け加えるのは憚った、従者どもが怠けていて、霜の十一月の夜というのに、高い階の客人の寝室に火を熾すのを忘れていないか、怠っています、と。

「我がダンテ[1265-1321]よ、私の側に掛け給え」とカングランデは答えた、「しかし皆と一緒に温まろうと思うなら、君の流儀で黙って私の火を見ていちゃならんぞ。ここは話すところだ。今日三行詩を鍛えていたその手で、一 私の星占いの部屋に上がりながら、私は君が部屋で低い歌声で詩の律読をするのを耳にしたが、一 その重々しい手は、退屈しのぎに小話の玩具を、壊すことなく、その指先に拾い上げることを断ってはならんぞ。女神達には休暇を出してだな」、一 彼は多分ミューズのことを言っていたのであろう、一 「この美しい死ぬ定め的女性どもで満足してくれ」。スカリージェリは彼の客人に軽快に指を動かして、二人の女性を示した。そのうちの大柄の女性は、一見何の感情も見せずに影の中に座っていて、動く心配がなかったが、小柄な方の、利発な女性はこのフィレンツェ人にいそいそと自分の横を空けた。しかしこのフィレンツェ人ダンテは彼のホストの招待に従わず、気位高く最後の席、半円の末席を選んだ。彼は、この侯爵[君主]の二重の妻が気に入らなかったか、一 ひょっとしたらこれは一晩の戯れに過ぎなかったにせよ、一 あるいは宮廷道化師に反吐が出たのかもしれない。道化師は、両脚を前に出して、カングランデの安楽椅子の横、この君公の床に滑り落ちた外套の上に座っていた。

道化師は、ぎょろ目の、締まりのない、お喋りで、つまみ食いの口をした、歯のない老人で、一 ダンテと並んで一行の中で唯一の年寄りで、一 ゴッチオラという名前、これは一雫という意味で、彼が空いた瓶の最後のこびりついた滴もまとめて嘗める習慣であったことに由来しており、異邦人を子供っぽく邪険に憎んでいた。というのは彼はダンテを君主の寵愛のライヴァルと見なしていたからである。この寵愛には格別の鼻窟はなかったのであるが。彼は顔をしかめて、そして自分の左手の可愛い隣の女性に、高い部屋の明るい天井に映るこの詩人の横顔に対し、嘲笑的ににやりと笑いながら注意を向けさせて、喜んでいて。ダンテのこの影絵は、長い曲がった鼻と垂れた唇で巨人の女に似ていて、運命の女神とかその類いに見えた。活発な娘が子供らしい笑い声を発した。その隣人の、利口な眼差しの青年が、アスカーニオという名前であるが、その笑い声が収まるように仕向

けた。彼はかの法外に恭順な仕草でダンテの方を向いて、こう言ったのである。ダンテはこの仕草で話しかけられるのを好んでいた。

「イタリアのホメロス、ヴェルギリウスと称えられる御身は」と彼は頼んだ、「無下に断らず、我らの邪気のない遊びに加わって頂きたい。名手殿、下々の我らと対等になって、歌う代わりに、語って頂きたい」。

「貴殿らのテーマは何かね」とダンテは発した、最初のときよりは無愛想でなくなっていたが、相変わらず十分に不機嫌であった。

「突然の職業替えです」と青年は簡明に答えた、「その結果は良かったり、悪かったり、滑稽であったりです」。

ダンテは思案した。彼の憂鬱そうな目が一行を観察した。それらの構成員は彼にとって全く面白くないものには見えなかった。というのはこの中には幾人かの平板な者の他に、何人かの重要な頭脳も見えたからである。「すでに、僧服を脱いだ僧侶の話が出たかな」、とすでに温和な気分になったダンテは述べた。

「ダンテ、確かにありました」と軽いドイツ語なまりのイタリア語で、誠実そうな外貌の兵士が、ジェルマーノという名前の者が、答えた。彼は輪状の胸甲を着ていて、長く垂れた口髭であった。「私自身が、兵士となるために、修道院の壁を飛び出した若いマヌッチオについて話しました」。

「それは正しい選択だ」とダンテは説明した、「彼は自分の素質を自ら勘違いしていたのだ」。

「私は、名手殿」と今や、大胆な、若干豊満な、パドヴァ生まれの女性、イゾッタという名前の者が、お喋りした、「ヘレナ・マレンテについて語りました。彼女は丁度最初の巻き毛を神聖な修道院の鋏で切り落としたのですが、しかし素早く残りの巻き毛を両手で隠して、尼僧の誓約を呑み込んで消してしまったのです。野蛮な地で奴隷に陥っていて、奇蹟的にそこから抜け出した恋人を教会の身廊の民衆の中に見つけたからです。彼が解けた鎖を」、 — 彼女は、壁に掛けたとき、と言おうとした。しかし彼女のお喋りはダンテの口で遮られた。

「その振る舞いは正しい」と彼は言った、「というのは彼女は自分の惚れた本性の真実に従って行動したのだから。こうしたこと一切が私の話しにはない。全く別の場合だ。つまり一人の僧侶が、自らの衝動に従ってではなく、目覚めた世俗の欲求とか世俗の力に従ってではなく、自分の本性を見誤っていたからでもなく、別人の衝動のために、他人の意志という圧力に従って、ひょっとしたら敬虔さという神聖な理由からかもしれないが、それ自体不忠なものとなって、教会に対してなした誓約よりも更に自らに対し破約して、僧服を投げ棄てるのだ。僧服は自分の体に合っていて、圧迫もしていないのに。このことはすでに話されたかな。話されていないか。よろしい。それでは私が話そう。しかしこのような事柄はどのように終わると思われませんか、私の保護者のパトロン殿」。彼は全身カングランデの方を向いた。

「必然的に悪い」とカングランデは思慮せずには答えた。「自由な流れに従って飛ぶ者は、上手く飛ぶ、押されての者は、悪く飛ぶ」。

「御領主、真実を語っておられます」とダンテは証した、「使徒も、私の理解によれば、それと変わらずに、こう記しています。信仰に基づかないもの、つまり我々の本性の確信

と真実に基づかないものは、罪である、と[ローマの信徒へ、14,23]」。

「そもそも僧侶なんて必要なのかな」と薄暗がりの中から低い声の忍び笑いがあった。あたかもこう言いたげであった。それ自体不自然な身分からの解放は善行である、と。

極めて大胆で、異教徒的な見解はここでは怒りを生じさせなかった。この宮廷では教会の事柄に対するどのような大胆な意見も甘受され、いや微笑されたからである。一方領主に対する、彼の人柄や政治に対する自由な発言とかは、単に不用心な発言も、災いとなりかねなかった。

ダンテの目は発言者を探して、ある高貴な若い聖職者がその人と分かった。その指は自分の聖職者の服の上にある高価な十字架をもてあそんでいた。

「そうは行きません」とフィレンツェ人は慎重に答えた、「お互いに反目しているように見える人間の魂の二つの至高の力、つまり正義と慈愛とを和合させる術を心得ている種族が出現すれば、僧侶は死滅しても構わないでしょう。この最終の世界の時までは、国家が正義を、教会が慈悲を管理すればいい。しかし慈悲の修練は全く無私の魂を要求しますので、三つの僧侶の誓いの言葉は正当なことです。というのは、経験から分かりますように、悦楽は半端に断念することすら、すべて断念することよりも難しいのですから」。

「立派な僧侶よりも、劣等な僧侶が多くないですか」と懐疑的な聖職者は更に尋ねた。

「違います」とダンテは主張した、「人間の弱さを考慮すれば、そうは言えません。正しい裁判官よりも、もっと不正な裁判官が多く、勇敢な兵士よりも、臆病な兵士が多く、立派な人間よりも、劣等な人間が多いというのであれば、話しは別です」。

「この場合そうではないですか」と薄暗がりの中の男は囁いた。

「違います」とダンテは決めつけた、そして天上的な神々しさが彼の厳しい面影を照らし出した、「我々の哲学はこう問うて、尋ねていませんか。悪はどのようにしてこの世に来るのか、と。悪人が多ければ、我々はこう尋ねることでしょう、善はどのようにしてこの世に来たのか、と」。

この気位が高く、晦渋な命題は、一座の者に畏敬の念を与えた。しかしまた、このフィレンツェ人は話しよりも、スコラ哲学に没頭しかねないという懸念を生じさせた。

カングラデは自分の若い恋人が、可愛くあくびをかみ殺すのを見た。このような状況になって、彼は言葉を発し、尋ねた、「我がダンテよ、君は記録に基づいて本当の話しをするのか、それとも民衆の伝説なのか、それとも君の戴冠の額からの創作なのか」。

ダンテはゆっくりと強調して答えた、「私はある墓碑銘に基づいて展開致します」。

「墓碑銘なのか」。

「数年前にパドヴァのフランシスコ会士達の許で読んだ墓碑銘からです。その記載されてある墓石は、修道院庭園のある片隅にありました。勿論野生の薔薇の繁みに覆われていましたが、見習僧でも行けるのです、四つん這いになって、茨で頬が傷付くことを気にしなければ。私は修道院長に命じて、つまり、頼み込んで、この判然としない墓石を図書館へ移し、一人の老人の監視下に置くようにしました」。

「墓石には何とあったのです」と今や君主の妻がぞんざいに声を出した。

「銘は」とダンテは答えた、「ラテン語で書かれていて、こう記されていきました。『ヒック・イアケト・モナクス・アストッレ・クム・ウクソーレ・アンティーオペ。セペリエーバト・アツォリヌス』」。

「一体何ということですか」と別の女性が好奇心を起こして尋ねた。

カングランデが流暢に翻訳した、「ここに僧侶アストツレは妻アンティーオベと共に眠る。エツェリーノが兩人を埋葬」[Ezzelino III. da Romano、1194-1259]。

「恐ろしい暴君ね」と多感なこの女性は叫んだ、「きっと彼は兩人を生きたまま埋葬させたのでしょう。二人が愛し合っていたから、と。そして犠牲者を僧侶の妻と呼んで、墓場でもこの犠牲者を嘲った、残酷な人」。

「そうではありません」とダンテは言った、「これは私の考えでは別な次第でして、歴史的に見ても、そうとは考えられません。エツェリーノは聖職者の誓約の破棄よりも、むしろ教会の従属を脅かしていますから。私は『セペリエーバト』を好意的意味で考えます。彼は兩人と一緒に埋葬を贈ったのです」。

「その通りだ」とカングランデは喜んで叫んだ、「君は私と同じように考えている、フィレンツェ人よ。エツェリーノは君主の質だ。そして昔の君主の習いで、若干粗野で、強引だ。彼の破廉恥の十分の九は、坊主どもやお伽噺の好きな民衆によるでっち上げだ」。

「多分そうでしょう」とダンテは嘆息した、「ちなみに彼が私の話して登場するとき、彼は本当にしろ、嘘にしろ、年代記に記されている怪物ではなくて、彼の残酷さが現れたしたのは、いわば口の周りにある特徴が、一」

「支配者然としたときだ」とカングランデは熱くその肖像画を結論付けた、「君が彼を君の第十二の歌で、地獄の住民として描いているように、逆立つ黒い前髪を持ってだ。君はこの黒い髪をどこから持って来たのだ[『神曲』地獄編12,109,あの額に黒髪に見える男は、アッツォリーノ、平川祐弘訳]」。

「それは御身の頭からです」とダンテは大胆に答えて、カングランデは追従された気になった。

「話しの他の人物も」と彼は微笑して脅かして、続けた、「私は、許されますならば」、
一　そして彼は周りの者達の方を向いた、一　「貴殿らの中から採用し、貴殿らの名前を借ります。貴殿らの内実には触れません。それは読めませんので」。

「私の表情も供出しましょう」と君主の夫人も鷹揚に言った。夫人の無関心は消え始めていた。

興奮至極の漏れつぶやきが聞き手の間に走った。「ダンテ、話してください」とすべての側面から漏れた、「話して」。

「こういう次第です」とダンテは言って、話した。

ブレンタ川の流れが細い弧を描いて、しかし接することなくパドヴァの町に近付いているとき、ある素晴らしい夏の日で、低いフルートの音を鳴らしながら、素早い流れの、しかし平静な水面を一艘の花輪で飾られた、祝典の衣服の者達が一杯乗った小舟が滑って行った。それはウムベルト・ヴィチェドミニとディーアーナ・ピッツァグエラの婚礼船であった。このパドヴァ人は自分の許嫁を川の上流に位置する修道院から連れて来ていた。この修道院へ、昔からの町の習慣で、上流の娘達は婚礼前に、敬虔な修業のために引きこもる習わしであった。彼女は深紅のクッションの上、新郎と新郎の初婚時の三人の若々しい少年達に囲まれて、小舟の中央に座っていた。ウムベルト・ヴィチェドミニは五年前、パドヴァでベストが猖獗を極めたとき、その青春の妻を埋葬していて、男盛りの時であったが、

ただ不承不承、病気がちの老父に日々急かされて、この二度目の結婚に踏み切ったのであった。

櫂は引き上げられ、小舟は流れの意志に任せて進んだ。小舟の従者達は、小声の歌声で穏やかな音楽に和していた。そのとき双方とも黙した。皆の目が右岸に向けられた。そこには一人の大きな騎士が馬を御して、大きな身振りで小舟の方へ挨拶した。臆したつぶやき声が座っている者達の列に走った。櫂を漕ぐ者達は赤い帽子を脱いで、祝典の一同に恐れと、畏敬の念が湧き起こった。新郎もディアーナも少年達も同じであった。臣従の身振り、挨拶する両腕、半ば曲げられた両膝、これらのために浜辺に対し動作が余りに性急に法外になされて、小舟は平衡を失い、右の方に傾き、突然転覆した。驚きの叫び声上がり、渦が旋回し、奔流の中心部が空になり、そこにはこの不幸な小舟から、浮かび上がる者達、また沈む者達、漂う花輪が見られた。救援は遠くなかった。すぐ先の下の方に小さな港があって、そこには猟師や舟人が暮らしていて、今日は馬や駕籠も待っていた。今奔流に沈んでいる一行をしっかりとパドヴァに運ぶ予定だったのである。

救出の小舟が二艘まず両方の岸辺から向かって来た。一方の舟にはもじゃもじゃ髭の老渡し守の側にパドヴァの暴君エツェリオン、この難破の原因の無邪気な張本人が立っていて、もう一方の舟には、左岸からの若い僧侶とその渡し守とがいた。この渡し守は次の瞬間丁度その不幸が生じたときに、この埃っぽい巡礼者を乗せて奔流に棹さしたのであった。両小舟が現場に達した。小舟の間の川の中に、何かブロンド髪のパイのようなものが浮いていて、僧侶は決然と、腕を遠くまで延ばしてそれを掴み、一方船頭は全力で小舟の反対側へと踏ん張っていた。僧侶は一つの頭部の太い垂れ毛の部分を持って、それからすぐ側に寄って来たエツェリオンの助けを借りて、滴る衣服で重くなった一人の女性の体重を奔流から引き上げた。暴君は自分の小舟から別の小舟へ飛び移り、今や気を失った頭部を、反抗と不幸の表情を浮かべたその頭部を一種の快適さを交えて、眺めていた。気に入ったのはその顔の偉大な特徴のせい、死神の安らぎのせいであった。

「アストッレ、そなたはこの娘を知っているか」と彼は僧侶に尋ねた。僧侶は否認して頭を振った。相手が続けた、「いいか、これはそなたの兄の妻だ」。

僧侶は同情した内気な視線をその青白い顔に注いだ。この顔はその視線の中、ゆっくりと微睡んでいた目を開けた。

「娘を岸辺へ連れて行け」とエツェリオンは命じた。しかし僧侶は娘を渡し守に任せた。「私は兄を探します」と彼は叫んだ、「見つけだすまで」。「僧侶よ、そなたに加勢をしよう」と暴君は言った、「しかし救出できるか自信はない。私は彼が少年達を抱き締めて、この三人に巻き付かれて、重たく深みに沈んで行くのを見ていた」。

その間にブレンタ川は舟で一杯になった。棒や鉤や釣り具や網で探された。素早く変わる場面の中、この支配者の姿は、探している者達や、上げられた重荷の間に何度も現れた。

「僧侶よ、上がれ」と彼はようやく言った、「もはやそなたがすることは何もない。ウムベルトと少年達はもう深みに長すぎるほどいて、命の保証はできない。奔流が掠っていたのだ。奔流が流せなくなったら、彼らは岸辺に打ち上がることだろう。向こうのテントが見えるか」。ブレンタ川の浜辺には婚礼舟で来る予定の者達を出迎えるために、ある数のテントが張られていた。今やその死者達、あるいは仮死の者達が運ばれており、すでに近くのパドヴァから駆け付けた彼らの親戚の者達や従者達の嘆き声が聞こえていた。「僧

侶よ、そなたの職務を果たしてくれ。慈悲の仕事をして、生きている者達を慰め、死者達を弔ってくれ」。

僧侶は岸辺に上がって、この帝国代官の視野から消えた。彼に向かって人混みからディアーナがやって来た。彼の兄の花嫁であり、未亡人であるが、悄然としながらも、また五感を取り戻していた。まだ重たい髪からは滴っていたが、それは取り替えた服にかかっていた。民衆の中から同情した女性がテントの中で彼女に自らの服を与えて、自分は高価な婚礼衣装を得ていた。「敬虔な弟君」と彼女はアストツレに向かって言った、「私は見棄てられたしまった。私用にと決められていた駕籠は、混乱の中、他の女性を乗せて、死者か存命の者か分かりませんが、町へ戻ってしまいました。私の義父の家まで同伴してください。あなたのお父上です」。

若い未亡人は錯覚していた。狼狽や混乱のせいではなく、臆病さと迷信のせいで老ヴィチェドミニの従者は彼女を放置したのであった。従者は、短気な老公の許に、一人の未亡人と、自分の家の没落の知らせを同時に届けたくなかったのである。

僧侶は自分の他に僧侶が多くテントの中や戸外にいて、慈悲の仕事をしているのを見て、この頼みを受け入れた。「一緒に行こう」と彼は言って、若い未亡人と一緒に町を目指した。町の塔やドームが青い天に聳えていた。道は、浜辺に駆け付ける者や浜辺から戻ってくる者が何百人もいて一杯であった。両者はしばしば互いに前後離れて歩いたが、しかし再三道の中央に互いを見いだし、互いに話さないまま、今やすでに職人達が住む郊外を通っていた。ここでは至る所に一 ブレンダ川の不幸で全住民が集まっていて、声高にお喋りする一団や、囁く一団が見られ、兄を失い、また新郎を失ったこの偶然のカップルを好奇心を募らせて眺めていた。

僧侶とディアーナはパドヴァではどの子供も知っている二人であった。アストツレは一人前の聖人とは見なされなくても、しかし模範的僧侶との評判を得ていた。彼は民衆が敬い、誇りに思うパドヴァ市の僧侶と称し得た。それも理由があった。というのは、彼は自分の高貴な貴族の特権や、自分の家の法外な財産を勇敢に、いや喜んで断念していて、自分の生涯を疫病の時代、あるいはその他の公の危難にもかかわらず、駆け引きもせず、最貧、最弱な者のために犠牲にしたからである。同時に彼はその栗色の縮れ毛と温かい口と高貴な身振りを有する優美な男で、民衆がその聖人として愛するような者であった。

ディアーナは彼女なりにそれに劣らず知られていた。すでにその成長が豊かになさっていて、これは民衆が華奢な魅力よりも愛でるものである。彼女の母親はドイツ女性で、いや、何人かが主張するように、ホーエンシュタウフェン[王家]の出で、これは勿論単に血筋の上で、法律上のものではなかった。ドイツとイタリアとが良き姉妹として、この偉大な形姿を合作していた。

ディアーナは自分の階級の者達とは渋く厳しく交際していたが、身分の低い者達には愛想が良くて、彼らの争いを聞いてやり、手短で明確な判断を知らせ、襤褸を着た子供達に接吻をした。彼女は、深く考えずに、贈り物をし、喜捨した。多分彼女の父親、老ピッツァグエラがヴィチェドミニに次いで、パドヴァで最も裕福な者であるのに、同時に最も汚らしいけちん坊であって、ディアーナはこの父親の不徳を恥じていたからであろう。

かくて彼女に好意を抱く民衆は、その居酒屋やお喋りの居間で、ディアーナを毎月どこかの高貴なパドヴァ男と結婚させたのであるが、しかし現実はこの敬虔な願望通りにはな

らなかった。花嫁となるには三つの重い障害があった。ディアーナの高貴で、しばしば陰気な眉毛と、彼女の父親の吝い手、それに彼女の兄ジェルマーノの暴君に対する盲目の愛着であった。暴君が失脚すると、この忠実な従者は共に、一族を道連れに、破滅するに違いなかった。

ようやくウムベルト・ヴィチェドミニが、町中が知っていたように愛情がないままに、彼女と婚約し、今や彼はブレンタ川に沈んでいた。

ちなみに両人は自分達の正当な痛みを沈み込んでいて、自分達の蹠に接して生じている熱心な噂話には耳を傾けていないか、ほとんど気に留めていなかった。僧侶と女とが並んで歩いている、不謹慎と見られたわけではない。僧侶は彼女を慰める必要があって、また両人は多分、出来事の最も近親の、自然な使者として老ヴィチェドミニの許に向かって同じ道を歩いているのであるから、これは尋常なことに見えた。

女達は、ディアーナが自分を単に誠実な亡き妻の代用品と見なしている一人の男と結婚しなければならなかったことに対し彼女に遺憾の意を表し、同じ口で、この男を結婚前に喪失してしまったことに対し同情の意を表した。

これに対し男達は勿体ぶった物腰で、かつ狡猾この上ない表情をして、喫緊の問いを俎上に乗せた、つまり第一等のパドヴァの一族の、ブレンタ川に沈んだ四人の後継者達に関し生ずる問いであった。ヴィチェドミニ家の財産はことわざ級のものである。一族の頭目は、精力的かつ策謀的人間であって、両者つまりパドヴァの五倍追放された暴君[1252年教皇により破門、五倍は誇張]とも、この暴君を弾劾する教会とも歩調を合わす術を心得ていて、生涯、皆目何か表立ったことに関与せず、タフな生活力と華麗な意志力とを唯一の目標、即ち自分の一族の富と繁栄とに集中させていた。今やこの一族が滅した。彼の長男と孫達がブレンタ川に横たわっていた。彼の次男と三男は、まさに同じこの不幸の年、一人は二ヵ月前に、もう一人は三ヵ月前に地上から消えていた。次男は暴君が使い古して、大変野蛮な戦場に取り残されていた。三男は、偏見のない父親がヴェネツィアスタイルの大商人に仕立てていたのであるが、ある東洋の海岸で十字架に掛けられていた。海賊が仕掛けたことで、身代金が遅れたせいであった。四男の僧侶アストツレしか残っていなかった。父親が四男を自分の最後の呼吸を振り絞って、修道院の誓約を無効に持って行くであろうことを勘定の素早いパドヴァ人はつゆ疑わなかった。父親が成功するか、僧侶がこれに応ずるか、今やこれについて路上では議論が沸騰していた。

路上での議論は仕舞いにはとても甲高く激しいものとなっていて、喪中の僧侶でさえもはや、集まっている一団の中から聞こえる彼[egli]とは誰のことで、彼女[ella]とは誰のことか疑いの余地のないものとなった。それで彼は、自分よりも同行の女性のために、草の育った影の多い露地を進むことを提案した。これは自分の修道院の荒れた環状の壁に沿って通っており、自分のサンダルには馴染みの道であったからである。ここは身震いするほど涼しかったが、しかし全パドヴァを巻き込んだ恐怖の知らせはこれらの影の地にすら及んでいた。厚い壁の中へ建てられた修道院食堂の開いた窓から、遅い昼食時に、一 ブレンタ川の破局は、この町の一切の時間経過を妨げてしまって、一 修道士達の食卓会話は沢山の「イニブス」とか「アティブス」[複数名詞与格変化]の見られる喧嘩調の騒がしいものとなっていて、一 ラテン語であったり、教皇法令集からの引用を用いた議論であったりした。一 それでこの僧侶[アストツレ]は難なく察した、ここでも路上と同

様、同じこと、あるいは類似のジレンマが話題になっている、と。ひょっとしたら何についての話しか分かっていなかったかもしれないが、それでも誰について話されているか分かっていました。しかし彼が気づいていなかったものは、 ー

話しの最中、ダンテは聞き手の中の高貴な聖職者を探したが、彼は自分の隣人の背後に隠れていた。

一対の燃えるような空ろな目であって、それが壁の天窓を通じて、彼と彼の側の女とを凝視していた。この目は不幸な被造物、ゼラーピオンという名前の自堕落な僧侶で、修道院でその心身をすり減らしていた。その先走る想像力でこの者は、即刻、同志アストッレは聖フランシスコの掟に従って、最後まで窮乏と断食を続けたことを理解し、死神の気まぐれによって彼に投げ与えられた世俗的財宝と歓喜の所有に関し、憤然と彼を妬視した。彼は家に帰るアストッレを待ち受け、その表情を探り、彼がどのような決意をしたか、読み取ろうとした。彼の視線は女にまとわりつき、二人の足跡をしつこく追った。

アストッレは自分と義姉の歩みを、四つの館で形成された小さな広場へ導き、彼女と一緒にその最も高貴な館の低い門の中へ入った。中庭の石のベンチに二人休んでいる者がいた。天辺から足先まで甲冑をまとったまことに若いドイツ人と老いたサラセン人[イスラム教徒]であった。長く伸びて寝ているドイツ人はその微睡んだ赤いブロンドの縮れ毛の髪を座った異教徒の膝に置いていて、この異教徒の方も同じように微睡んで、その雪のように白い髭を父親然と彼の上に垂らしてこっくりこっくりしていた。二人はエツェリーンの護衛兵で、これは彼の義父[二番目の妻、Selvaggiaはフリードリヒ二世の私生児]、皇帝フリードリヒ[二世1194-1250]の護衛兵を真似て、同等の数のドイツ人とサラセン人から編制されていた。この暴君はこの館にいた。この暴君は老ヴィチェドミニを訪問することを、自分の義務と見なしたのである。実際、アストッレとディアーナはすでに螺旋階段の所で、エツェリーンが短い平静な言葉で、これに対し老公は、全く我を忘れてるように見えて、叱責する叫び声で行っている会話を耳にした。僧侶と女は広間の入口の所、青白い従者達の間立っていた。従者達は全身が震えていた。老公は猛烈に激しい呪詛を彼らに浴びせ、拳を丸めて追い払ったのであった。従者達は彼に浜辺での知らせを遅れてもたらし、この知らせをほとんど口に出す勇気がなかったからである。その上暴君の恐ろしい足音まで聞いて従者達は石化していた。暴君の訪問を取り次ぐことは禁止されており、取り次げば死罪だったのである。暴君は幽霊のように誰にも咎められず、家々、室内に侵入した。

「残酷な殿、悠然と報告なさいますな」と老公は絶望して荒れ狂った、「一頭の馬か一つの収穫の損失を語るかの如くです。御前様は私どもの四人を殺害なされたのです。それは他ならぬ御前様です。何の必要があって、まさにその時間浜辺に馬で行かれたのです。何の必要があって、ブレンタ川に挨拶されたのです。ひどいことです。聞いておられるのですか」。

「運命だ」とエツェリーンは答えた。

「運命だと」とヴィチェドミニは叫んだ、「運命や、占星術、悪魔祓い、陰謀、斬首、女墻から舗石に身を投ずる女達や、御前様の向こう見ずな戦場で矢で射抜かれて馬上から落ちる何百人もの青年、これが御前様の時代であり、政治です。エツェリーン、呪わしい

忌まわしい殿だ。私どもを皆、御前様は御前様の血の軌道に拉致される。どんな運命も死も御前様の側では強烈なもの、不自然なものとなってしまう。誰もはや自分のベッドで悔悛のキリスト教徒として死ぬことがない。

「それは言いがかりだ」と相手は答えた、「私は確かに教会とは何の関係もない。教会は私に冷淡だ。しかしそなたやそなたの仲間が教会と付き合うのを妨げはしない。それは承知しておろう。さもないと教皇殿と手紙のやり取りをする度胸はなかろうからな。そなたの両手の中で回しているのは何だ。教皇の印璽を隠しているのか。免罪符か。小勅書か。見せてみろ。やはりまことに、小勅書か。読んでいいか。許してくれるか。そなたのパトロン、教皇殿がそなたにお書き遊ばしていることは、汝の一族が、汝の最後の四男、かの僧侶を除いて、消滅したら、この僧侶はそれが故に、自らの誓約を解除できよう、仮にこの僧侶が自発的に、自らの決意で、世間に戻る場合には、ということか。抜け目ない狐だ。この羊皮紙を貰うのに、どれほどの量の黄金を払ったのだ」。

「御前様は私を嘲るのですか」と老公は吠えた、「私の次男と三男の死後、他に私に何が残っていましたかな。誰のために私は収集し、貯蓄したというのです。虫どものためですか。御前様のためですか。私から奪うおつもりですか。...違いましょう。それでは名親殿、私を助けてください」。一 破門される以前のエツェリーンはヴィチェドミニの三男を洗礼盤から引き上げて、この暴君のために戦場で散った三男の名親となっていた。一 「この僧侶がまた還俗して、妻を娶るよう、僧侶説得の加勢を頼みます。すべての権力を握る御前様が、彼に命令し、屠った私の息子の代わりに、彼を与え、私の成功を祈ってください。御前様が私を愛しているというのであれば」。

「それは私には何の関係もない」と暴君はいささかも興奮せずに、答えた、「それは僧侶が自らと決着をつけることだろう。『自発的に』と小勅書は言っている。何故彼はその身分を替えなければならないのだ、思うに立派な僧侶であるというのに。ヴィチェドミニの血筋が絶えないようにするためか。これは世の暮らしの定めか。ヴィチェドミニ家は必須のものか」。

すると相手は猛然と荒れ狂った。「悪人の御前様だ。私の子供達の殺人者の言い草だ。御前様の心はお見通しだ。私の遺産を横取りし、私の金で気違いじみた遠征を行うつもりだ」。その時彼は義理の娘に気づいた。彼女は躊躇う僧侶の前、従者達の間から敷居を越えて出ていた。彼は、衰弱していたけれども、よろめく足取りで、彼女に向かって行き、彼女の両手を握り締めた。あたかも両者の上に降りかかった災難の責任を彼女に取らせたようなのであった。「ディアーナ、私の息子はどこだ」と彼は喘いだ。

「ブレンタ川に横たわっています」と彼女は悲しげに答えた。そして彼女の青い目に影が差した。

「私の三人の孫はどこだ」。

「ブレンタ川です」と彼女は繰り返した。

「そしてそなたは私に自分を贈るのか。私はそなたを受け取るのか」。老公は調子外れに笑った。

「全能の神様が」と彼女はゆっくりと言った、「私の溺死を望んでおられたら、私の代わりに他の人達がここに立っていたことでしょう」。

彼女は黙った。それから突然一種の怒りに駆られた、「私の姿が面白くなく、ご不快で

したら、この方を頼りになさったらいいのです。この方がすでに死んでいた私を髪ので所て掴んで、命の世界に戻したのです」。

このときようやく老公は、自分の息子の僧侶を目にした。そして彼の精神は力強く、素早く、集中した。重篤な嘆きのせいで、かえって萎えるよりも鍛えられたように見えた。

「本当か。この男がそなたをブレンタ川から引き上げたのか。ほう。珍しい。神の計らいは不思議だ」。

彼は僧侶の腕と肩を掴んだ。この男の心身を我が物にしたいかのようで、そして彼を自分の病人用椅子まで引っ張って行った。この椅子に彼は倒れ込んだが、抵抗しないこの男の握り締められた腕を手放さなかった。ディアーナは従って行き、椅子の反対側に跪き、垂れた両腕の先で両手を組み合わせ、頭を肘掛けに乗せていて、ただブロンドの髪のは結び目のみか、生命のない物体のごとく見えていた。一同に向かい合って、エツェリーンが座っていた。右手を丸めた小勅書の上に、將軍杖の上のごとく置いていた。

「倅よ、倅よ」と老公は本心と策謀の混じった優しさでめそめそ言った、「我が最後の唯一の慰めよ。そなたは我が老齡の杖であり、棒だ、この震える両手の間で、折れてくれるなよ。...分かるだろう」と彼はすでにより素っ気ない事務的調子で続けた、「このように事が定まった以上、そなたが修道院にこれ以上残れないことはな。だろう、倅よ。僧侶でも、その父親が貧窮し、衰弱したら、修道院長に暇乞いをして、世襲莊園を耕作し、子供の日々の養育者を養育するのは、教会法にかなうことだろう。その上私はそなたをもっと必要としているのだ。そなたの兄弟や甥達が亡くなった。今や我らが家の生命の松明を引き継ぐのは、そなただ。そなたは私が点火した小さな生命の火だ。この火が僧房で消光し煙と消えたら、私には甲斐がない。いいか」、一 彼は温かい褐色の目に率直な同情心を読み取っていた。そして僧侶の恭順な姿勢は盲目的従順さを約束しているように見えた。一 「私はそなたの思っているより重い病気だ。そうだろう、イザシャル」。彼は背の方の、細身の人物の方を向いた。この人物は小瓶とスプーンを持って、脇のドアからこっそりと老人の椅子の背後に歩み寄っていた、今や青白い頭でそれを証して頷いた。「私は身罷る。しかしアストツレ、言うておく。そなたが私の願いを許さないならば、そなたの親父さんは、冥途の渡し守の小舟に乗ることを拒むぞ。そして薄明かりの浜辺に座っていて、梃子でも動かない」。

僧侶は老人の高熱の手を優しくさすっていたが、しかしはっきりと二言述べた、「私の誓約[があります]」。

エツェリーンは小勅書を開けた。

「そなたの誓約か」と老ヴィチェドミニは追従した、「緩い綱だ。ヤスリをかけられた鎖だ。一 体を動かしてみろ、落下する。そなたが畏敬と従順を誓っている神聖な教会法はその誓約を無効、失効と宣言している。そこに記載されている」。彼の干涸らびた指は教皇印璽の羊皮紙を示した。

僧侶は恭しく支配者に近付き、文書を受け取り、四つの目[二人]に見守られて、読んだ。目眩を起こして彼は一步引き下がった。あたかも塔の高みに立っていて、突然その手すりが消えた按配であった。

エツェリーンはよろめく僧侶の腋を持って短く尋ねた。「僧侶よ、そなたは誰に誓約したのか、自分にか、それとも教会にか」。

「勿論その双方だ」と老公は立腹して叫んだ、「忌々しい企みだ。倅よ、向こうのあの者には用心しろ。あれは我々ヴィチェドミニに乞食棒を持たせたいのだ」。

怒らずに、エツェリーンは右手を髭に置いて、誓った。「ヴィチェドミニが亡くなったら、ここのこの僧侶、彼の息子が遺産を引き継ぐ、そして息子は ー 一族が彼と共に消滅し、彼が私とその父祖の町を愛しているなら、 ー ある種堂々たる規模の養育院を設立する。百もの他の町が」、 ー 彼はイタリアの町々のことを指していた、 ー 「この養育院のことで我々をやっかむことだろう。それで名親依頼人よ、私は強奪者の誹りは免れたろうから、この僧侶に二、三更に質問をしていいかな。許してくれるか」。

すると老公は大変憤激に駆られて、痙攣してしまった。彼は、自分がまた握り締めた僧侶の腕をまだ放していなかった。

イザシャールが、強い香りのエキスで一杯に満たされたスプーンを注意深く生気のない唇に近付けた。この拷問を受けた老人は努めて顔を背けた。「私を休ませてくれ」と彼は呻いた、「そなたはこの代官の医師でもあるしな」。そして目を閉じた。

このユダヤ人は彼の目を、輝かしい黒色でとても利口な目であったが、暴君に対して向けた。あたかもこの邪推に対する許しを請うているかのようであった。

「正気にまた戻るのかな」とエツェリーンは尋ねた。

「思いますに」とユダヤ人は答えた、「まだ存命です。そしてまた目覚めましょう。しかし長くはもたないと私は案じています。今日の日没を見ることはありますまい」。

暴君はこの折を捉えて、アストツレと会話した。アストツレは気を失った父親を介抱していた。

「僧侶よ、私と話してくれ」とエツェリーンは言って、 ー 彼の癖で ー 広げた右手の指で波打つ自分の髭をいじった[ミケランジェロのモーゼ像を思わせる]、「そなたが十数年前に、そなたは今三十歳と思うが」 ー 僧侶は頷いた、 ー 「誓約したとき、三つの誓約[清貧、従順、貞潔]でいかにどの犠牲を払うことになったかな」。

アストツレは澄んだ目を開けて、躊躇せずに答えた。「清貧と従順は犠牲はありません。所有欲はありませんし、従順は簡単です」、彼は休止して、赤面した。

暴君はこの男性の純潔さを好ましく思った。「この父親が僧侶の身分をそなたに強制したのか、それともそなたを説得したのか」と彼は話しを逸らした。

「いいえ」と僧侶は説明した、「昔から系統樹にありますように、私どもの家では三男か四男は最後の男が聖職者となっています。このようにしてヴィチェドミニ家は神への調停者を得たり、あるいは家の遺産や力を守ってきました。 ー いずれにしても、この慣習は古く、大切なものです。私は私の運命を承知していて、これは若い時から嫌ではなかったのです。私には何の強制もなかったのです」。

「それで第三のは」とエツェリーンは先の話に戻った、 ー 彼は第三の誓約のことを言っていた。アストツレは彼の言葉を理解した。

新たに、しかし今回は弱く赤面して、彼は答えた。「簡単なことではなかったのですが、しかし他の僧侶達と同様に、良き助言が得られて、できました。良き助言と申しますのは、聖アントニウス[Antonius von Padua, 1195-1231]の助言です」と彼は恭しく付け加えた。

「皆さん、ご存じのように、この立派な聖者は数年パドヴァのフランシスコ会士達の許

で暮らしていました」とダンテは説明した。

「我々もそうですな」と聞き手の中の一人が冗談を言った、「その修道院の池で泳ぎ回っている聖遺物を我々は敬っていましたから。つまり、かわかますのことで、これはかつてこの聖者の説教を拝聴して、改心し、肉欲を断ち、善行を維持し、今の高齢になっても厳格な草食主義者として」、―― 彼は冗談の最後を呑み込んだ。ダンテが彼に対して皺を寄せたからである。

「彼は何と助言したのだ」とエツェリーンは尋ねた。

「自分の身分を単純に捉えることです、普通に正しく」と僧侶は報じた、「例えば兵役のように厳密な奉仕として捉えることです。兵役は実際従順な筋肉を要求しますし、節制もそうです。勇敢な兵士なら節制を節制としてすら感じてはならないものです。つまり自分の額に汗して大地を掘り返し、適度に食べ、適度に断食し、娘や若い女性の告解に臨席せず、神の視線の中で歩き、聖母を聖務日課書の規定以上に熱烈に崇めないことです」。

暴君は微笑した。それから彼は右手を僧侶に対して差し出し、警告しつつ、あるいは祝福しつつ、語った。「幸いな男よ、そなたは良い星の許にいる。そなたの今日は容易にそなたの昨日のお蔭であり、いつの間にかそなたの明日へと導こう。そなたは何ものかであり、取るに足らぬ者ではない。慈悲の職務を司っているのだから。それは私が任せている職務だ、私の職務はまた別のものだが。そなたが世間に戻ったら、この世間は独自の掟に従っていて、この掟を学ぶにはそなたは遅すぎるのだが、それでそなたの澄んだ星は滑稽な鬼火となってしまい、天使たちに嘲笑されて、二、三の馬鹿げた跳ね方をしゅっとした後、弾けてしまうことだろう。

更に一言、これは私が事実、パドヴァの領主であるからして、話しておこう。そなたの行状は我が民にとって一つの教化であったし、諦念の一例であった。最貧の者でさえ、そなたが自分と同じつましい食事をし、同じ厳しい労働をしているのを見て、そなたのことを信じておったのだ。そなたが僧服を脱いで、高貴な一人の男として、高貴な一人の娘に求婚をし、そなたの家の富を両手一杯に汲み上げたら、そなたを自分の同輩として所有していた民衆から略奪を行うことになる。それで不平の民、不満の民が生ずることになる。すると憤怒、不服従、反乱が生じよう。不思議なことではない。物事は連鎖している。

私とパドヴァはそなたを欠かすことができない。そなたの美しく騎士的な風貌は大方の目に焼き付いていて、そなたはそなたの百姓風な同志よりもはるかに、いや少なくとももっと高貴な勇気を有している。民衆がその荒々しいやり方でこのこの男を」、―― 彼はイザシャルを示した、―― 「これが救いをもたらすからというので[助けに来ているのに]、これはこのユダヤ人にとって、先のペストの時代、―― ほとんど間違いなく、―― 起こりえることであったが、この狂った民衆に対し、私がやって来て、制止するまで、そなたがしたように、この男を誰が守ってくれようか。

イザシャルよ、この僧侶を得心させる加勢をしてくれ」とエツェリーンは残酷な微笑を浮かべて、医師の方を向いた。「そなたのためにだけでも彼は僧服を脱いでならん」。

「御領主」と医師は囁いた、「御身の王笏の許では、御身が正当に手厳しく処罰されたあの無分別な情景はほとんど繰り返されないことでありましょう。信仰が篤くて、その一族の栄華が神の至高の祝福として称えられているその殿下は」―― すでにそのように彼

はこの僧侶をもはや尊い坊と呼ばなかった、 — 「結婚されてもよろしかろうと存じま
す」。

エツェリーンはこのユダヤ人のお上手に微笑した。「僧侶よ、それでそなたはどのよう
に考えている」と彼は尋ねた。

「考えは変わりません。しかし目覚めて欲しいのです、 — 罰当たりな言い方ですが、
— このまま父親がもはや目覚めなければ、父親に厳しく当たらなくても済みます。た
だ臨終の聖餐を受けて欲しいのです」。彼は激しく、この失神している老父の頬に接吻し
た。老父はそれで正気付いた。

再び生気の戻った老父は重い溜め息を吐いて、疲れた臉を上げて、その垂れた眉毛の灰
色の茂みから懇願の視線を僧侶に向けた。「どうなったか」と彼は尋ねた、「そなたは私
にどんな決定をした、愛しい者よ、天国か地獄か」。

「父上」とアストツレは動揺した声で頼んだ、「父上の最期が迫っています。その時が
来ています。世俗の事柄や心配事をご放念ください。魂のことをお考えください。司祭達
が」、 — 聖堂区教会の司祭達のことであった、 — 「隣りに集まっていて、神聖な
臨終の秘蹟を待っています」。

実際そうであった。隣室のドアが穏やかに開けられて、そこから弱い、日中の明かりの
中ではほとんど見えない蠟燭の微光が見られ、一つのコーラスが低い前奏を行い、一つの
小さな鐘の微かな揺れ音が聞こえた。

今や、自分の両膝がすでにレテ[忘却]の冷たい川に沈んで行くのを感じた老父が僧侶に
しがみついた。かつて聖ペトロがゲネサレト[ガリラヤ]湖で救世主に対してしたような具
合であった[マタイ、14-30]。「私のために言ってくれ」と彼はもつれた舌で言った。

「そうしたいのですが、できますようか」と僧侶は溜め息を吐いた、「誓って、父上、
永遠のことを考えてください。現世のことは放念してください。最期の時です」。

この隠された拒絶で、ヴィチェドミニの最後の生命が燃え上がる炎となった、「不忠者
め、忘恩の徒め」と彼は怒った。

アストツレは司祭達に合図した。

「どんな悪魔にもかけて申すぞ」と老公は荒れた、「おまえらのさすりながらの香油塗
りはやめてくれ。私は賭けで失うもの何もない。私はすでに亡者だ、天国の輪舞の最中
でも呪われた亡者のままでいるぞ、我が息子が私を勝手に突き飛ばして、私の生命の芽を潰
してくれたらな」。

驚愕した僧侶は、この慄然とする悪態に深く震撼されて、自分の父親がどうしようもな
く永遠の劫罰に沈潜して行くのを見た。そのように彼は感じ、そのことを固く確信したし、
私も彼の立場であれば、そう思ったことであろう。彼は暗く絶望し、臨終者の前で跪き、
滂沱の涙の中、懇願した。「父上、お願いです。自らと私とを憐れみ給え」。

「ずるい男だ、そのまま逝かせろ」と暴君は秘かに話した。僧侶は聞いていなかった。
再び彼はびっくりしている司祭達に合図を送って、臨終の儀式が始まろうとした。

そのとき老父は反抗的の子供のようにうずくまって、灰色の頭を振った。

「策謀家だ、そのまま通らせろ」とエツェリーンはより大きな声で警告した。

「父上、父上」と僧侶は嗚咽して、彼の魂は同情して溶けた。

「尊い御当主、キリスト教徒の同志の方」と今や一人の司祭が覚束ない声で尋ねた、「貴

殿は、貴殿の創造主と救世主を受け入れる用意がおりますか」。老公は黙っていた。

「貴殿は聖なる三位一体を固く信仰なさいますか。私にお答えください、御当主」と聖職者はもう一度尋ねて、一枚の布のように青白くなった。というのは、「そんなものはあり得ない、災いだ」と臨終の者が強い声で叫んだからである、「災いであり、かつー」。

「それ以上は結構」と僧侶は叫んで、飛び上がった、「父上、私は御身の御意志に従います。お望みのように私を扱ってください。ただ御身は劫火の中に堕ちてはなりません」。

老父は重たい緊張を後にしたように、溜め息を吐いた。それからほっとして見つめた。ほとんど自己満足していたと言っているほどであった。老父は手で探りながら、ディアーナのブロンドの脳天の髪を握り、跪いているこの女性を立ち上がらせながら、彼女の手を取って、更に僧侶の痙攣する手を開け、彼女の拒むことのない手と僧侶の手とを合わせた。

「異議なし。至高の秘蹟を前にしてのことだ」と彼は小躍りして喜び、兩人を祝福した。僧侶は抗弁しなかった。ディアーナは両目を閉じた。

「さあ、迅速に、尊敬する教父の方々と」と老父は促した、「思うに、急げ。私はキリスト教徒の覚悟ができています」。

僧侶とその花嫁は司祭達の一群の背後に退こうとした。「そのまま」と臨終者は口ごもった、「そのまま、私の慰めを得られた両目が、見えなくなるまで、一緒のおまえら二人を見ておれるようにな」。アストツレとディアーナは、ほとんど数歩も後ずさっていないところで、手を合わせたまま、この頑固な老人の視線が消えるまで立ち止まっていなければならなかった。

老人は短い告解をつぶやき、最後の聖餐を受け、身罷った。一方人々は彼の足裏に香油を塗って、司祭達はすでに聳っていた耳にかの偉大な賛美歌、「キリスト者の魂よ、旅立て[Proficiscere, anima christiana!]

を呼びかけた。逝去した顔は勝ち誇る策謀家の明確な表情を浮かべていた。暴君は、周囲では皆が跪いている間、この神聖な儀式を座ったまま、静かに注意深く観察していた。あたかも見慣れぬ風習を見守っているか、あるいは一人の学者が、古代の民の石棺に模写された犠牲を視察しているかのようであった。彼はこの死者に近寄って、その目を閉ざした。

それから彼はディアーナの方を向いた。「高貴な御夫人」と彼は言った、「我らは家に帰るとするか。貴女の両親は、貴女の救出の知らせは得ていても、貴女のことを心配してしよう。それに貴女の服は下賤の者の服であり、貴女には合っていない」。

「侯爵様、有り難く、ご一緒致します」とディアーナは答えたが、しかし自分の手は僧侶に預けたままであった。僧侶の視線を彼女はそれまで避けていたのであった。今や夫の顔を正面から見つめ、低いが、しかし良く通る声で語った。両頬に薄暗い熾火が差した。

「私の御主人様、旦那様。私どもは父上の魂を見棄ててはなりません。それで私は妻となります。私には修道院よりも良き忠誠を誓ってください。あなたの兄上は私のことを愛していなかった。このような言い方をお許してください。ただ真実を語っているのです。あなたの良き従順な妻となるよう心がけます。でも大目に見て頂かなくてはならない私の気性が二点あります。私の権利や名誉が損なわれると、私は短気になります。その点は厳密で、約束したことは、守って貫きます。すでに子供の時から、この点はほとんど我慢しなかったものです。私は願い事は少なく、日常のこと以上は何も望みません。ただ私に一度何か

が示され、承認された場合、私はその実現を求めます。さもないと私は信用しなくなって、他の女性が不当なことに対して侮辱を感じずるよりも更に侮辱を感じます。でも、私の御主人様、旦那様、私はまだほとんど存じ上げないのに、どうしてかくもお喋りして良いものでしょう。黙することにします。ご機嫌よう。私のご亭主、あなたの兄上の喪に服するために、私に九日間、猶予をください」。今や彼女はゆっくりと手を彼の手から離して、暴君と一緒に消えた。

その間、聖職者の一群は亡骸を持ち上げて、家の礼拝堂の棺に収め、冥福を祈った。

アストッレは一人、無効になってしまった僧服を着て、立っていた。僧服の下には、後悔一杯の胸があった。奇妙な経過に聞き耳を立て、十分に把握していた召使い一同が、平伏した姿勢、臆した身振りで新しい主人に近寄って来た。頭目の交代よりも、誓約の破棄という瀆神に近い行為に、つまり尊き僧侶の還俗に、一層当惑し、怖じ気づいていた。

一 小声で読まれた小勅令は彼らの耳には届いていなかった。一 僧侶は自分の父親の死を悲しむことができなかった。今やまた自分の意志が戻って来て、邪推と言ってもいいようなものが、忍び込んで来て、憤然とした確信に襲われた。つまり一人の死者が、自分の善良な信仰を騙し、自分の慈悲心を悪用したのである、と。僧侶は老公の絶望に、策謀の隠れ蓑を、野蛮な悪態に、死の瀬戸際での計算ずくの芝居を発見した。彼の思考は、不機嫌に、ほとんど敵対して自分に割り当てられた妻に向かった。込み入った僧侶らしい思い付きで、彼は妻を本心からではなく、単に昇天した兄の代理として愛することにしようと考えた。しかし自分の健康な感覚、自分の実直な情緒が、この恥ずかしい逃げ道を非難した。そこで彼は今や彼女を自分の妻として考えて見ると、一種怪訝な思いを禁じ得なかった。つまりこの妻は自分に対しかくも簡明な物言いで、厳しく真実を見つめて向かって来ており、かくも具体的に自分と交渉し、ヴェールも煙幕も用いていない、伝説の華奢な女性達よりもはるかに粗放、現実的な人物であるな、と。彼は女性達をもっと優しいものと考えていた。

今や僧侶は突然、自分の教団服に気付き、自分の感情や考察との、この服との間の矛盾に気づいた。彼は僧服が恥ずかしくなり、僧服が煩わしくなった。「私に世俗の服をくれ」と彼は命じた。お抱えの従者達が彼を取り巻き、やがてその中から彼が溺死した兄の服を着て、出て来た。彼は兄と大体同じ体型であった。

この折、彼の足許に父親の道化師、ゴッチオラという名前の者が身を投げ、彼に敬意を表した。それは他の者達のように、自分の奉公の延長を請願するためではなく、道化師の身分を離れる暇乞いと許可のためであった。というのは、自分はこの世に飽いて、自分の髪は白髪になっており、鈴の音の道化帽を被ったまま彼岸に逝く気にはならないからというものであった。このような泣き言を言って、彼は投げ棄てられていた僧服を我が物とした。それは従者達が臆して触ろうとしなかったものであった。しかし彼の多彩な斑点の脳はとんぼ返りをして、愉しげに言い添えた、「私はこの世間とこの世間の虚妄に別れを告げる前に、今一度アベレレを食べたいと思います。ここでは、察しますに、結婚式が間近であります」。彼はその色褪せた舌で、口を嘗めた。それから僧侶の前で膝を折り、その鈴を揺すって、僧服を背後に垂らして、跳ねて行った。

「アマレレ、あるいはアマーレは」とダンテは説明した、「その苦いアーモンド味のせ

いで、パドヴァの婚礼菓子のことです。これは同時に第一変化の動詞を優美に暗示しています」。ここで話者は休止して、手を額と目にかざして、自分の話しの先の進行を考えた。

そのとき侯爵の家令が、一人のアルザス人で、ブルカルド[モデルJohann Burchard,1450-1506]という名前の者であるが、規則的な足取りで、丁寧にお辞儀して、歓談中申し訳ないと冗長に詫びながら、カングランデの前にやって来て、何らかの家政の件で指示を請うた。ドイツ人は、当時イタリアでのギベリン党員[反教皇、ドイツ皇帝支持]の宮廷では珍しいことではない。いや、彼らは求められており、その実直さと、儀式や習慣への生来の飲み込みの良さのために、母国民よりも優遇されていた。

ダンテはまた頭を上げたとき、このアルザス人に気付いてそのイタリア語を耳にした。これは軟音と硬音を執拗に間違えて[例えば、geジェをゲカ]、宮廷の者どもを喜ばせ、詩人ダンテの繊細な耳をしつこく侮辱していた。それから詩人の視線は明らかに快適に二人の若者、アスカーニオと甲冑の兵士とに留まった。最後に視線を思案しながら両夫人、正夫人のディアーナ、活気づいて、大理石色の頬を軽く赤らめているこの夫人と、アンティーオペ、可愛くて、自然な本性の、カングランデの恋人とに落ち着かせた。それから彼は続けた。

ヴィチェドミニ家の館の背後には当時、一 今ではこの殿下の一族はとうに消滅しており、かの広場は全く変貌しているが、一 広大な領域が堅牢で幅広い市壁の足許まで広がっていて、それは広大なもので、家畜の牧草地、鹿や獐のための柵囲い、魚の一杯いる池、深い森林の影や日の当たる葡萄園亭が見られた。ある晴れた朝、葬儀の後七日して、一つのヒマラヤスギの黒い影の中、その幹に背中を立てかけて、靴先を暑い陽光の中に出して、僧侶アストツレが座っていた。彼はまだこの名前でパドヴァ人達の間で呼ばれていた。地上での短い変転の中、彼は還俗していたのであるが。彼は座るか、寝そべるかして、ある泉と向かい合っていた。その泉は無関心な仮面の一つの口から冷たい流水を吐き出していた。近くには石のベンチがあったが、彼はこのベンチよりも栄える芝の柔らかなクッションよりを好んでいた。

彼が、何かは分からぬが、何かを思案するか、夢見ていたとき、ほとんど真昼の陽が射している宮殿前の広場の中を、埃まみれの駄馬に二人の若者が騎乗して行った。一人は甲冑を着けて、もう一人は旅の服であったが、選んだ服を着ていた。騎乗者は、アスカーニオとジェルマーノと言い、代官の寵児であり、同時にこの僧侶の若い時の遊び仲間であった。僧侶はこの二人と兄弟のように学び、十五歳のときまで、つまり彼の修練期の始まるときまで互いに遊んでいたのがあった。エツェリーンは二人を彼の義父、フリードリヒ皇帝[Friedrich II. 1194-1250] へ送ったのであった。

ダンテは休止して、偉大な皇帝の影を感じてお辞儀した。

二人は依頼の書に返事を貰って、暴君の許に戻って来た。暴君に二人はその上この日のニュースを持参して来ていた。皇帝の官房で仕上げられたキリスト教徒僧侶に向けられた司教教書の写しで、この中で教皇は才気に富んだ皇帝を世の面前で、極端な不敬論者とし

て非難していた。

重要で、ひょっとしたら火急の件かもしれない依頼と不吉な記録とを預かっていたけれども、二人は若い時の遊び仲間の家を素通りして暴君の市の塔まで駆けて行くことはできなかった。彼らはパドヴァの直前の宿で、鎧から降りないまま、馬に食ませ、飲ませていたとき、お喋りの居酒屋亭主から大きな町の災難と、更に大きな町の憤慨とを聞いたのであった。つまり婚礼船の沈没と僧侶の投げ棄てられた僧服のことで、委曲を尽くしていたが、しかしディアーナとアストッレの合わされた両手のことは言及されなかった。この件はまだ公になっていなかったのである。我々を子供時代の遊び仲間と結び付ける絆は不壊である。アストッレの数奇な運命に関して、二人は彼に再会して、目で確かめるまで心落ち着かなかった。長年二人はこの僧侶に、偶然路上で出会うだけであった。確かに好意的なものであったが、しかし率直な畏怖の念と共に深々とした、若干余所余所しい低頭で挨拶がなされていた。

二人が宮殿の中庭で見つけたゴッチオラは、一つの小さな壁の上に座って、ゼンメル[小型パン]を食べていて、両脚をぶらぶら揺すっていたが、二人を庭に案内した。二人の先を行きながら、この道化師はこの家の悲劇的運命について若者達に語らず、専ら自分の事についてのみ語っていた。自分のことがはるかに大事に思えたのであった。自分は浄福な最期を望んでいると説明し、それでゼンメルの残りをぐらぐらする歯で噛まずに呑み込んでしまい、ほとんど窒息死しそうになった。道化師は目を白黒させ、僧房への憧れを語ったので、アスカーニオは陽気な哄笑に駆られ、それでこの日、天がすでに自らの喜びで輝かしい色に染まっていなかったとしても、天の雲は吹き払われていたことだろう。

アスカーニオはこの滴嘗めの道化師をからかうことを止めず、この煩わしい同伴者が去るように仕向けた。「極貧の者よ」と彼は始めた、「そなたは僧房へは入れまい。というのはな、ここだけの、ごく内密の話したが、暴君の我が叔父上は、そなたを物欲しげに見ているのだ。知っておろう、叔父上は四人の道化師を抱えている。禁欲主義者、享楽主義者、プラトン[純愛]主義者、懐疑主義者だ。そんな風に彼は呼んでいる。この四人は、この大真面目公が冗談をしたいとき、彼の合図で、広間の四隅に立つのだ、広間のドームでは天の星座や惑星群が輝いている。叔父上は、普段着で、この部屋の中央に歩み出て、手で拍手する、するとこれらの哲学者達が跳びながらその隅を替える。一昨日は禁欲主義者は吠えながら、めそめそ泣きながら跳んで亡くなった。この大食漢は何ポンドもの麵を一度に食べていたのだ。叔父上は私にチラと暗示したな、此奴の替えが要るな。僧侶から、つまりそなたの新しい領主から相続税としてそなたを、ゴッチオラよ、貰い受けよう、とな。そうなんだ。エツェリーンはそなたを求めているぞ。そなたの背後に彼が忍び寄らないか、知れたものじゃない」。これはこの暴君の神出鬼没を暗示していた。それでパドヴァの人々は恐れ、絶えず震えていたのである。ゴッチオラは叫び声を発した。あたかもこの権力者の手が彼の肩に置かれたかのようで、辺りを見回した。誰も彼の背後には見えず、彼の短い影しか歩いていなかったが、彼は歯をガタガタ言わせ、どこかの隅に逃げた。

「私はエツェリーンの道化師達を削除しよう」とダンテは自分の話しを、現にそうしているように、話しているのではなく、書いているかのように、鉄筆を持った仕草で遮った、「この細部は嘘くさい、あるいはアスカーニオの嘘ということになるろう。エツェリーンの

ように真面目で、根本的に高貴な精神が、道化師を養い、その愚劣さに興じたということは全く考えられない」。この直接の諷刺をフィレンツェ人ダンテは自分のホストに対して行った。にやにや詩人に笑いかけながら、ゴッチオラはこのホストの外套に座っていた。

カングランデはそのようなことをしなかった。彼は内心で、機会があり次第、利子を付けてお返しすると誓っていた。

満足して、ほとんど陽気にダンテは自分の語りを続けた。

ようやく二人は還俗した僧侶を発見した。僧侶は、申したように、一本の松の幹に背中をもたせかけていた。 —

「一本のヒマラヤスギの幹です、ダンテ」と注意深くなってきた侯爵夫人が訂正した。

— 彼は一本のヒマラヤスギにもたせかけ、足先を陽に当てていた。彼は、彼の両側から近寄って来る二人に気付かず、かくも深く彼は自分の空虚な、あるいは充実した夢に耽っていた。そのとき、気まぐれなアスカーニオは、一本の草の茎を背を曲げて求め、それを折り、それで僧侶の鼻をくすぐり、僧侶は三回、強くしゃみをした。アストツレは好意的に二人の幼友達と握手して、二人を自分の横、左右の芝生上に引き寄せた。「それで、君達は何と言うかね」と挑戦的というよりも内気に響く調子で尋ねた。

「まずは君の修道院長と修道院に対する私からの率直な称賛だ」とアスカーニオは冗談を言った、「お蔭で、君は若々しくいられる。君は我々二人よりも若く見える。勿論ぴったり合う世俗の服と滑らかな顎のせいでも君は若く見えるのかもしれない。君はハンサムだと分かっているのか。君はこの巨大な、ヒマラヤスギの下で、最初の人間のように見える。神が、学者達に主張によれば、三十歳の男として創造した人間だ、それで私は」、彼は、僧侶が自分の勝手な言い草に赤面するのを見て、無邪気な表情で続けた、「君を少しも非難しようとは思わない。君が僧服を脱いだことをな。だって家系を保つことは、すべての存命の者達の願いだからな」。

「これは私の願いでも、自発的決意でもなかったのだ」と僧侶は正直に告白した、「私は臨終の父親の意志に抵抗した」。

「本当か」とアスカーニオは微笑した、「アストツレ、誰にもそのことを話しちゃいけない、君を愛している我々の他にはな。他の者達には君のそんな優柔不断は滑稽に見えるだろうし、それどころか軽蔑ものだ。それで、滑稽な事を話すついでに言うと、注意しろよ、アストツレ、頼むから、君は僧侶から脱皮して人間になるのだ、良き趣味にかなった人間にな。その神聖な過程は、丁寧に準備された徐々のものが望ましいだろう。助言を受け入れろ。例えば、一年ほど、皇帝の宮廷へ旅行する、この宮廷とはパドヴァ間往復の使者が途切れたことのない仲だ。エツェリーンに頼んで、パレルモへ送って貰え。そこで完璧この上ない騎士であり、全く偏見のない人間である者の側で、 — つまりフリードリヒ二世の側で、 — 女性達とも昵懇になり、女達を崇拜したり軽蔑したりする君の僧侶風流儀を卒業する。支配者の心情が、宮廷と町の色彩を決める。ここパドヴァの生活がどのようなものになったか、これは我が叔父上の暴君の下で、野蛮に、極端に、強引になったように、ここの生活が君に間違った世間像を与えている。パレルモでは、すべての君主達の中で最も人間的な君主の下、戯れと真面目さ、徳操と快樂、誠実と移り気、良き信仰

と賢明な不信とが正しく調和的に混じり合っており、より真実の世間像を提供している。そこで君は一年間、我らの友の女性達や敵の女性達と一緒に許された作法で、あるいは程よい作法で、輪舞して浪費するのだ」、―― 僧侶は額に皺を寄せた、―― 「例えば、ある遠征に参加する、―― しかし無茶なことをして危険に身を晒さない、―― 君の使命を思い出すのだ、―― ただまた思い出せばいいのだ、馬や剣の使い方をな、―― 少年のとき君はこれが分かっていた、―― 君の元気な褐色の目をいつでも開けてな、―― アウローラ女神の松明にかけて、―― この目は君が修道院を去ってから輝き溢れているものだ、そして我らの許に、自他共に頼りがいのある男になって戻って来い」。

「彼はそこの皇帝の許で一人のシュヴァーベン女性と結婚するに違いない」と甲冑の男は上機嫌で言った、「彼女らは我らの許の女達より敬虔で信頼できる」。

「黙っていてくれるかな」とアスカーニオが指で脅した、「パン色ブロード髪のお下げ女の詰まらぬ話しは止せ」。しかし僧侶はジェルマーノの右手を強く握った、この手をまだ彼は放していなかった。

「率直に、ジェルマーノ」と彼は促した、「君はこの件にどう言うかい」。

「何の件だ」とこの者は無愛想に尋ねた。

「それは、私の新しい身分のことだ」。

「我が友、アストツレよ」と口髭男は若干当惑して答えた、「済んだことには、もはや助言や判断を求めないことだ。しかし私の意見を本当に知りたいのであれば、まあ、こうだな、アストツレ。忠誠不実、破約、敵前逃亡、云々だ。これはドイツでは糞味噌言われる。勿論君の場合、全く別だ。これは全く比較のしようがない。―― それに臨終の父親だろう、―― アストツレ、我が親愛なる友よ、君は全く立派に行動した。ただその反対の方がもっと立派であったろう。これが私の意見だ」と彼は誠実に結論付けた。

「それでは君が私の立場であれば、君の妹の手を拒んでいたかな、ジェルマーノ」。

ジェルマーノは雲から落下した気分であった。「私の妹の手か。ディアーナの、つまり君の兄の喪に服している女性か」。

「その女性だ、彼女が私の許嫁だ」。

「それは素晴らしい」と今や世故に長けたアスカーニオが叫んだ、「嬉しい」とジェルマーノは賛同した。「抱擁しよう、義弟殿」。甲冑男は直言居士であったが、上手な処世も心得ていた。しかし彼は一つの溜め息を抑えていた。彼は辛辣な妹に敬意を持っていたが、自分の側に座っているこの僧侶には、自分の生来の感情に従えば、別な女性が望ましく思っていたであろう。

かくて彼は口髭をひねり、そしてアスカーニオが会話を主導した。「そもそも、アストツレ」とこの陽気な男は喋った、「また互いに付き合うことから始めよう。我々の子供時代と今日の間には、君の十五年間の瞑想的修道院生活以上のものが考えられる。我々がその間に我々の本性を変えたという意味ではない。しかし我々は成長したのだ。例えばこの男は」、―― 彼はジェルマーノを指さした、―― 「今では立派な武勇の名声を誇っている。しかし遺憾に思う点は、彼が半ばドイツ人になってしまったということだ。彼は」

―― アスカーニオは腕を曲げて、杯を乾す仕草をした、―― 「この後、塞ぎ込んだり、喧嘩好きになったりする。それに我らの可愛いイタリア語を馬鹿にするのだ。『諸君とはドイツ語で話したい』と彼は自慢して、人間とは思えない言語の熊語で吠えるのだ。する

と彼の従者達は青ざめ、債権者達は逃げ、我らのパドヴァの女性達はその見事な背中を彼に向けるのだ。それで、彼はひょっとしたら君同様、童貞かもしれん、アストツレ」。そして彼は親しげに僧侶の肩に手を置いた。

ジェルマーノは心から笑い、アスカーニオを指さして、答えた。「ここの此奴は、完全な廷臣となることを、自分の使命と思っている」。

「それは間違いだ、ジェルマーノ」とエツェリーンの寵児は抗弁した。「私の使命は、人生を気軽に陽気に愉しむことだ」。その証拠に彼は庭師の小娘を親しげに命じて近寄らせた。この小娘は彼から少し離れたところを通りかかり、自分の新しい領主、僧侶の方を盗み見していた。この可愛い小娘は葡萄と無花果の盛られた籠をその朗らかな頭の上に乗せていて、内気というよりも悪戯っぽく見つめていた。アスカーニオは跳び起きた。彼は左手を細身の娘の側面に回し、右手で葡萄を一房摘まんだ。同時に彼の口はふくよかな唇を求めた。「喉が渴いた」と彼は言った。娘は羞じらっていたが、静かにしていた。自分の果実を振り落とすはたくなかったのである。不機嫌に僧侶は二人の軽はずみな者達から顔を背けた。小娘は厳しい僧侶風な振る舞いを見て、びっくりして去った。彼女が逃げる小道に果実が転がって落ちた。アスカーニオは、自分の葡萄を手にはしていたが、更に二房葡萄を逃げる小娘の背後から取り上げ、その一房はジェルマーノに差し出した。しかし彼は絞っていない葡萄を軽蔑して草むらに投げた。この気まぐれ男は別のもう一房を僧侶に渡した。僧侶はしばらく同じようにその房を触らずにいたが、しかしその後、格別考えずに、その果汁を一粒味わい、やがて二つ目、三つ目の葡萄を味わった。

「廷臣だと」とアスカーニオは続けた。彼は三十歳僧侶の取り澄ましを面白がって、再び彼の横、芝生の上に座った。「アストツレ、それは違う。その反対だ。私は我が叔父上にこっそりと、しかし良く分かるように説得している唯一の男だ。無慈悲なことをしないように、人間の道を踏み外さないように」。

「いや殿は正しく、自らに忠実だ」とジェルマーノは言った。

「自らの正義に関して」とアスカーニオは嘆いた、「そして自らの論理に関して、踏み外さないように。パドヴァは帝国封土だ、エツェリーンは代官だ。彼の不興を買う者は、帝国に反抗することになる。反逆者は」、彼は唇に乗せられなかった、「おぞましい」と彼はつぶやいた、 — 「それにそもそも我々イタリア人は何故自らの生活をこの温かい太陽の下で送れないのか。何故帝国のこの霧の幽霊が我々の呼吸を苦しめているのか。私は自分のために話していない。私は叔父上と一蓮托生だ。神のお眼鏡にかなう皇帝が亡くなったら、イタリア中が暴君エツェリーンに呪詛、悪罵を浴びせることだろう。彼らはずいずいでにその甥を絞め殺す」。アスカーニオは豊穡な大地を越えて、輝く天を見つめ、一つの溜め息を吐き出した。

「我々兩人とも殺される」とジェルマーノは冷淡に補足した、「しかしそれまでには間がある。支配者殿は固い予言を手にはされている。学者のガイド・ボナッティとバグダッドのパウルが、後者はその長い髭で路地の埃を掃き清めているが、二人とも普段は妬み合って矛盾したことを言うのだが、一致して予言した。しばらくしたら、あるいは時間を要しても、イタリア半島の息子が、この半島の統一王冠をドイツ人皇帝の助けを借りて、獲得するであろう、この皇帝は自分の分としては山脈の向こうのすべてのドイツを一つの堅固な帝国林檎[帝権の地球儀]としてまとめる者である、と。フリードリヒがこの皇帝である

うか、この国王とはエツェリーンであろうか、これは時代と時間を司る神のみ知ることであろう。...しかし支配者殿はこれに自分の名声と我らの首とを賭けたのだ」。

「分別と妄想の絡み合いだな」とアスカーニオは立腹した。一方僧侶は、星々の及ぼす威力、支配者達の広大な名誉心、世間の一切を呑み込む奔流に驚いた。それにエツェリーンの残忍さの芽生えという幽霊にも彼は驚かされた。この無邪気な僧侶はこれまでその幽霊を正義の具体化と見なしていたのである。

アスカーニオはこう続けて、彼の黙した懐疑心に答えた、「兩人とも、額に皺を寄せて考えるガイドも、髭の異教徒も、邪悪な死を迎えるかもしれない。彼らは叔父上が、その気まぐれな悦楽に従えばいいと誘惑している。叔父上の方は自分では必要なことをしていると思っているわけだ。君は、ジェルマーノよ、彼がそのつましい食事の際に、水晶杯の水を、自分用のシチリア・ワインの赤い血の色の三滴、四滴で染めるのを見たことがあるか。ゆっくりと広がり、澄んだ水の中に拡大して行くその血の色を彼がいかに注意深く追うか、あるいは彼がいかに好んで死者達の臉を閉ざすか、知っているか。それでこの代官を、祝典のときと同様に、臨終の床に依頼し、彼にこの悲しい行動を任せるのが、丁寧な作法になってきている。エツェリーン、我が侯爵は、私に対しこの残酷なことをしないで欲しい」と青年は叫んだ。自分の感情に圧倒されていた。

「甥よ、私はそんなことは考えていない」と彼の背後で声がした。それはいつの間にか近寄って来ていたエツェリーンであった。彼は盗聴していたのではなかったが、アスカーニオが最後に痛々しい叫び声を発したとき、それを耳にした。

三人の若者は速やかに起き上がり、この支配者に挨拶した。彼はベンチに腰を下ろした。彼の顔は泉の仮面同様に平静であった。

「おぬしらは、私の使者だ」と彼はアスカーニオとジェルマーノに話しかけた、「どうしておぬしらは、この者を先に」、 — 彼は軽く僧侶に会釈した、 — 「私より訪問することにしたのだ」。

「彼は我らの幼友達でありまして、珍しいことを聞いたのです」。甥は詫びて、エツェリーンはこれを受け入れた。彼は、アスカーニオが膝を折って渡す書簡を受け取った。小勅令以外すべてを彼は胸に収めた。「いいか」と彼は言った、「ニュースだ、読んでみろ、アスカーニオ。そなたは私より目が若い」。

アスカーニオは教皇の手紙を朗読した。一方エツェリーンは右手を髭に入れて、魔神的に満足しながら聞いていた。

まず三重冠の著者[教皇]は機知豊かな皇帝に黙示録の怪物の名前を与えていた。「それは承知している。馬鹿げたことだ」と暴君は言った、「このローマ教皇は私をもその手紙の中で大袈裟な名前と呼んだことあって、私はローマ人のエツェリーンであるからして、これからは古典語で私を叱責するよう注意したものだ。教皇は今回私をどう呼んでいるか、興味があるな。アスカーニオ、その箇所を探してくれ。 — 一つは見つかるだろう。 — 私の義父殿に、その邪悪な交際を非難する箇所だな。渡してみろ」。彼はその紙片を掴んだ。その箇所はすぐに見つかった。そこで教皇は皇帝に難癖を付けて、その娘の夫を愛していると記していた。「エツェリーノ・ダ・ロマーノ、人の住む大地での最大の犯罪者たる者」。

「その通り」とエツェリーンは称えた、そしてアスカーニオにその紙片を返した。「皇

帝の外道ぶりを読んでくれ、甥よ」と彼は微笑した。

アスカーニオは読んだ。フリードリヒ[二世]は言ったそうである、多くの妄想の他にはただ二つ、真の神々があるのみである、つまりこれは自然と理性に他ならない、と。暴君は両肩をすくめた。

アスカーニオは更に読んだ。フリードリヒ[二世]は申したそうである、三人のペテン師、モーゼとモハメッド、それに「彼はつかえた[発せられなかった語は、キリスト]」が、世を騙したのだ、と。

「表面的だな」とエツェリーンは難じた、「彼らには星々が付いていた。しかし皇帝が言ったにせよ、言わなかったにせよ、そのような銘は彫られて、三重冠戴冠者[教皇]にとっては一軍、あるいは一艦隊の重みがある。更に何だ」。

すると奇妙な作り話の番となった。フリードリヒは波打つ穀物畑へ騎乗して行きながら、お供と冗談を言って、聖餐を不埒に当てこすって、三つの韻をからかって合わせた、と。

多くの穂先があり、多くの神々が宿っている、

陽の中で速やかに育ち、

風の中で黄金の頭を揺する。 —

エツェリーンは思案した。「奇妙なことだ」と彼は囁いた、「この詩行は私の記憶に残っている。これは全く本物だ。皇帝が朗らかに笑いながら私に呼びかけられた詩行だ。一緒にエナの神殿瓦礫を見ながら、ケレス女神がシチリアの郷土を祝福しているかの張り切った穀物畑を騎乗して行った折にな。そのことはかの夏の日、かの島で輝いていたのと同じ明澄さで思い出される。この陽気な冗談を教皇に知らせたのは、私ではない。私は真面目だから、そんなことはしない。誰がしたのだ。おぬしらが裁判官だ、若者どもよ。我々は三人で騎行した。三番目の者は「これも私には確かだ、この輝く太陽同様に確かなことだ」。 — 太陽はまさに一条の光線を葉叢越しに投げかけていた、 — 「ペトルス・デ・ヴィーネア[Petrus de Vinea,1200-1249]、皇帝と一心同体の者だ。この敬虔な宰相が自分の魂のことで不安になってローマ教皇に手紙を書いて、良心の咎を軽くしたのか。サラセン人は今日馬で行くか。そうか、急げ、アスカーニオ。私がそなたに一行口述筆記しよう」。

アスカーニオは筆記道具を取り出して、右膝を折り畳み、曲げた左膝を台にして書いた。

「崇高な御主君にして、親愛なる義父殿。至急一言。小勅令の詩行、 — これは余りに洒落ていて、反復を憚りますが、 — これは二人の耳のみが拝聴したもので、私の耳とペトルスの耳でございます、一年前、エナの穀物畑でのことです。私を貴殿が貴殿の宮廷に呼んで、一緒に島を騎乗しました折です。その後雄鶏は鳴きません。ペトルスの裏切りを裏付ける新約聖書の雄鶏は別にして[マタイ、26]。貴殿が私と御自身を愛していますならば、御主君、どうぞ鋭く貴殿の宰相を尋問なさってください」。

「洒落た殺害です。私は記述しません。手が震えます」と青ざめるアスカーニオが叫んだ、「私は宰相を拷問にはかけません」、そして彼は筆を投げ棄てた。

「仕事だろうに」とジェルマーノは素っ気なく述べ、筆を取り上げ、手紙を書き終えた。その手紙を彼は自分の鉄兜の下に押し込んだ、「今日のうちにもこれは行きましょう」と彼は言った、「単純な人間の私にはこのカプア人は気に入らなかった。盗む眼差しをしている」。

僧侶アストッレは真昼であったが、慄然とした。修道院の平和な生活から離れたこの男は、初めて、さながら両手でぬめるマムシのとぐろに触れたかのように、世間の邪推や裏切りに触れた。彼はエツェリーンの厳しい言葉で、自分の物思いから目覚めた。エツェリーンは石のベンチから身を起こしながら、彼にこう尋ねた。

「僧侶よ、何故そなたは家に引きこもっているのだ。世俗の服をまとってから、そなたはまだ家を出ていない。世間の意見が怖いのか。それには刃向かえ。すると退くものだ。しかしそなたが逃亡の仕草を見せようものなら、世間の意見はそなたの足裏に呻る暴徒のように付いてくるぞ。花嫁のディアーナを訪ねたのか。喪の週は過ぎたぞ。いいか、今日のうちにも一族を呼ぶのだ。今日のうちにもディアーナと結婚しろ」。

「それからすぐに二人で一番離れた宮殿へ行くことだな」とアスカーニオが結んだ。

「それは勧めない」と暴君が禁じた、「臆病はいかん。逃亡はいかん。今日結婚するんだ。明日は仮装の結婚披露だ。さらば」。彼は去った、ジャルマーノに付いて来るよう合図していた。

「話しに割り込んで良いかな」とカングランデは尋ねた。話しの自然な休止を待つほどに十分丁重であった。

「御主君でありますから」とフィレンツェ人ダンテは不機嫌に答えた。

「かの三人の偉大なペテン師という言葉、不滅の皇帝が発したと信じているのかな」。

「いえ、分かりません」。

「そなたの最も内心でのことだ」。

ダンテは頭を明確に振って否定した。

「しかしそなたは皇帝をそなたの地獄の第六圏では一人の外道として弾劾している。どうしてなのだ。弁明して見ろ」。

「御主君」とフィレンツェ人は答えた、「神曲は私の時代に対して語っています。しかしこの時代は、悪徳の最もすさまじいものを、正当にか、あるいは不当にか、かの崇高な顔に読んでおります。この敬虔な意見に私は何も反対できません。ひょっとしたら、将来の者達は別様に判断するかもしれません」。

「我がダンテよ」ともう一度カングランデは尋ねた、「ペトルス・デ・ヴィーネアの、皇帝と帝国に対する裏切りは無実と思うのか」。

「いえ、分かりません」。

「そなたの最も内心でのことだ」。

ダンテは同じ身振りで否定した。

「それでそなたはそなたの神曲ではこの裏切り者にその無実を誓わせているではないか」。

「御主君」とフィレンツェ人は弁明した、「明確な証拠が欠けていますのに、イタリア半島の息子に裏切りをむしろ断罪しますでしょうか。我らの許にはかくも多くの策謀家や疑惑の者達がいるのに」。

「ダンテよ、我がダンテよ」と侯爵は言った、「そなたは罪を信じていない者に、それでも弾劾する。そなたはまた罪を疑っている者に、それでも免罪する」。それから彼は話しを戯れの冗談で続けた。

「僧侶もアスカーニオも今や庭園を離れて、ホールに入った」。しかしダンテが彼の言葉を引き継いだ。

そうではありません。二人は或る塔の部屋へ上がった。アストツレが長い巻き毛の少年時住んでいた部屋である。というのはアストツレは大きな豪華な部屋を避けたからである。大きな部屋を自分のものと思にはまず慣れが必要であって、自分のものとして残された黄金の財宝にも彼は指で触れていなかった。兩人に続いて、アスカーニオの指令の合図で、家令のブルガルドが適度な距離を保って、強張った足取り、うんざりした表情で従っていた。

同じ名前のカングランデの執事は、仕事の指示を貰って広間を引き下がりながら、興味深く聞き耳を立てていた。良く馴染みの人物達の話しであると気付いたからである。さて自分の名前が呼ばれるのを聞いて、こっそりと等身大のこの短編小説の鏡を覗いてみると、彼には正直者の自分のこの誤用は、宿泊させている学者、大目に見られているこの逃亡者の口にかかると、僭越で全く失礼なものに思われた。自分はこの男の状況や身分の違いを正しく斟酌して、侯爵の家の上階、考え得る簡素な小部屋を用意したのである。他の者達が微笑して甘受したこと、これを彼は無礼に感じた。彼は眉を顰め、目を回した。フィレンツェ人ダンテは真面目な顔でこの銜学者の憤激を愉しみ、物語を続けて行った。

「貴殿は」とアスカーニオは家令に尋ねた、 — 私はこの者、生まれはアルザスと紹介しましたかな、 — 「パドヴァではどのように結婚するのだ。アストツレと私はこの分野では何も知らない子供同然だ」。

執事[家令]は、自分の主人を凝視しながら身構えた。自分の見解に従えば、命令権限のないアスカーニオには一顧だにしていなかった。

「区別する必要がございます」と彼は厳かに言った、「区別して考えるべきです。求婚、結婚式、結婚披露」。

「どこに書かれているのだ」とアスカーニオは冗談を言った。

「ご覧なさい」と家令は答え、自分が決して手放さない大きな本を広げた、「これです」、そして左手の指を突き出して、タイトルを示した、『パドヴァの儀礼。すべての尊き名家のために正確に調査して編集された本。測量士ゴドスカルコ・ブルガルド編』。彼は頁をめくって、読んだ、「第一章、求婚。第一条、正式な求婚者は、同じ身分の友人を一人正規の証人として連れて行く、 —」。

「我が守護聖人の過剰なる加護にかけてだ」とアスカーニオは苛立って遮った、「前後のこと、求婚と結婚披露は省いてくれ。中心のものを給仕してくれ。パドヴァではどのように結婚するのだ」。

「パドヴァ[パドヴァ]では」と気分を害したアルザス人は金切り声を上げた。その異邦人らしい発音は感情が動揺して、通常以上に顕著になった、「貴族の月[結]婚式には十二の大きな名家が招待されます」。 — 彼はその名前を記憶で読み上げた、 — 「十日前に招待です。早くても遅くてもいけません。新郎の家令が、六人の従者を連れて行きます。この尊い集会で指輪が交換されます。キプロス・ワインが飲まれ、結婚式菓子として

アマレレが食されます。 ー」

「歯を折っちゃいかんな」とアスカーニオは笑って、家令からその本を奪い、その名前を通読した。その名前のうち六人の家系の頭目は、 ー 十二家の中の六家であるが、 ー それに若干の若者が大きな斜線で消されていた。彼らは暴君に対する何らかの陰謀に巻き込まれて、それで没落したのであろう。

「老公、聞いてくれ」とアスカーニオは、僧侶のために行動して、命じた。僧侶は安楽椅子に沈み込んで、物思いに耽っていて、友人の後見に任せていた。

「そなたは、その六人の役立たずどもと一緒に、即刻、今すぐ、遅滞なく、巡回するのだ、分かるな。そして今日、晩祷時に招待する」。

「十日前です」とブルガルド氏は尊大に、帝国法令を布告するかのよう繰り返した。

「今日だ、今日のためにだ、たわけ」。

「できません」と家令は平静に語った、「星々や季節の運行を変えるのですか」。

「反逆するのか、老公、首がむずがゆいか」とアスカーニオは独特な微笑で警告した。

それで十分であった。ブルガルド氏は察した。エツェリーンが命じたことなのだ。それで術学者達の中で最も石頭の者でさえ、文句も言わず従った。かくもこの暴君の鞭は鉄の如くであった。

「それで、カノッサの両女領主は招待するな、オリンピアとアンティーオペだ」。

「何故二人は駄目だ」と僧侶は突然尋ねた。魔法の棒に触れたかのようにであった。彼の視線の前、大気に色が生じて、一つの絵が浮かんで、その最初の輪郭がすでに彼の魂全体を捉えていた。

「伯爵夫人オリンピアは一人の痴女だからな、アストッレ。この哀れな女性の話しを知らないのか。当時君はまだ襦袢をしていたな、つまり僧服だった。三年前だ、葉が黄色くなる頃」。

「夏だ、アスカーニオ、丁度この時期だ」と僧侶は論駁した。

「その通りだ。 ー 君はその話しを知っているのか。しかしどうしてだ。あのときカノッサ伯爵はローマ教皇使節と密談し、盗み聞きされ、逮捕され、判決を下された。伯爵夫人は叔父上の前に跪いた。叔父上は沈黙されていた。それから夫人はあくどい方法で強欲な一人の侍従によって騙された。この侍従は、儲けようとして、伯爵は断頭台の直前に赦されるであろうと、彼女に騙ったのだ。そうはならなかった。それで伯爵夫人に斬首された夫が運ばれて来たとき、夫人は希望から真逆に絶望へと突き落とされて、窓から身を投げて、夫を迎えた。しかし奇蹟的に傷を負わず、足を挫いただけであった。しかしこの日から彼女の精神は砕けた。自然の気分ならば、気付かないうちに混じり合って、消光して行く明かりは、段々と薄暗くなるのであるが、彼女の気分は一気に明るさと暗さが十二時間のうち十二回入れ替わるのだ。絶えざる不穏に急き立てられ、この不幸な女性は、荒涼たる自分の町の宮殿から田舎の荘園へ移り、また田舎から町へ戻って来る。永遠の迷い道だ。今日、夫人は自分の娘を請負人の息子と結婚させようと思うが、単に身分が低いと庇護と平安が保証されると思うわけで、明日になると、どんな高貴な求婚者でも十分に高貴ではないと思う次第。ちなみにこんな求婚者はこんな母親を恐れて、名乗り出ないのであるが、...」。

アスカーニオは、自分がお喋りしている間に、一瞬でも僧侶に目を向けていたら、びっ

くりして中断したことであろう。というのは僧侶の顔は同情と憐憫とで神々しく変容していたからである。

「暴君が、一」とこの迂闊な男は続けた、「オリンピアの住まいの側を狩りの馬で通りかかるたびに、夫人は窓辺に突進して来て、彼が家の前で馬から下りて、不興を買ったこの夫人、しかし十分に辛酸を嘗めたこの女性を、好意的に恵み深く自分の宮廷へ連れ戻すであろうと期待するのだが、彼にはその気がない。別な日になると、いやその日のうちでも、夫人は、自分のことを構わないこのエツェリーンから迫害され、追放されると妄想してしまう。夫人は零落したと思い、彼は放置しているのに、自分の財産を没収されたと思う。夫人はこの極端な反対物の間欠熱で燃え上がったり、凍えたりして、単に自分が狂うばかりでなく、夫人が自分の頭の渦巻きの中に引き入れるものをも、狂わせてしまう。つまり一夫人は単に半ば痴女であるばかりでなく、時にはまことに的確に洒落て話すものだから、一いつでも災いを引き起こす、夫人の言葉が信じられてな。夫人と一緒に祝典に呼ぶことはだから問題外だ。夫人の娘、アンティーオベが、夫人はこの娘を崇拜し、この娘の結婚こそが夫人の空想の中心を占めるのだが、このような揺れる大地に育てて分別を保っているのは、一つの奇蹟だ。しかしこの娘は、今開花を迎えていて、そこそこ可愛い、気立てがよろしい、...」。そのようになおしばらく続いた。

しかしアストツレは自分の夢に沈んでいた。そう私は申すが、これはその過去の話しが夢に等しかったからである。というのは僧侶は、自分が三年前に体験したことを見ていたからである。一つの断頭台、処刑人が側にいて、自分は病気の同僚僧侶の代わりに聖職者の教戒[慰謝]僧として、死罪人を待ち受けていた。この死罪人、一カノッサ伯爵は、

一捕縛されて現れたが、全く従容とはしていなかった。それは自分が今や断頭台の前に立っているから、恩赦がすぐに下されるであろうと想像していたからかもしれないし、単に、陽射しが好きで、墓穴を恐れていたからかもしれない。彼は僧侶を厳しく叱って、僧侶の祈りを蔑んでいた。彼が逆らい、抵抗を続けていたら、恐ろしい格闘に至っていたことだろう。というのは彼は一人の子供[娘]を手にしていただけからである。この娘は、一

番人に気付かれずに、一彼に飛びつき、彼を抱き締めていて、僧侶に哀切極まる目、懇願の視線を向けていたのである。父親はこの娘を固く胸に抱いて、この若い生命によって処刑に抗いたいかのように見えたが、しかし獄吏によって押さえつけられ、頭を断頭台に据え付けられた。するとその子供は、父親の頭の横に自分の頭とうなじを置いた。その子供は獄吏の同情心を買おうとしたのであろうか。避けがたいことを甘受するよう父親に督励したかったのであろうか。この妥協しない父親の耳許に聖人の名前を囁きたかったのであろうか。溢れる子供心の愛情から、思慮分別なくこの前代未聞のことを行ったのであろうか。単に父親と一緒に死にたかったのであろうか。

今やその光景が如実に輝いてきて、僧侶は二人の並んだ首が、伯爵の煉瓦色のうなじと、その子供の雪のように白いうなじが、縮れた金褐色の綿毛と共に、自分の数歩先に全くの現実として浮かび上がってきた。その小さな首は極めて美しく、際だって細かった。アストツレは震えた。振り下ろされる斧は間違うかもしれない。そして魂の奥底が震撼するのを感じた。最初経験したときと変わらなかった。ただ、その恐ろしい場面が現実まことに起きたとき、かつて自分の正気が失われたときとは違って、気を失うことはなかった。かつてはすべてが終わってから、ようやく気を取り戻したのであった。

「私の御主人様が私に依頼なさいますか」と家令のぶつぶつ声がこの没頭者を目覚めさせた。家令はアスカーニオに指令されることは、我慢ならなかったのである。

「ブルカルド」とアストツレは優しい声で答えた、「二人のカノッサの女性、母親と娘を招待することを忘れないでくれ。僧侶が世間から忌避されている者達、見棄てられている者達を遠ざけたら、聞こえが良くない。不幸な女性達の権利を尊重して」、一　ここで家令は熱心に頷いて、賛同した、一　「私は招待し、迎えることにする。外されたら、夫人は侮辱を感じずる境遇にあらう」。

「とんでもないことだ」とアスカーニオは警告した、「そんな外聞の悪いことをするな。君の婚約自体、十分に途方もないことだ。途方もないことを、この痴女は愛好している。夫人は自己流に何か信じられないことを始めて、何か奇天烈な言葉をお祝いの席で披露することだろう。この席はそうでなくてもすでにすべてのパドヴァ女性達を興奮させているものだ」。

しかしブルカルド氏は、正気であろうが、なかろうが、十二名の一人として、カノッサ女性が参集する権利を、歯で固く確保し、自分の忠誠の義務はヴィチェドミニ家にあつて、他にはないと信じていて、僧侶の前で深くお辞儀した。「御主人様にのみ従います」と彼は言って、去った。

「僧侶よ、僧侶」とアスカーニオは叫んだ、「善意も憂き目を見るのが世の習いだ、その世に慈悲心を持ち込むとは」。

「確かに我々人間の場合」とダンテは口を挿んだ、「しばしば予言的明かりで、一つの深淵の縁が照らし出されます。しかしその後、洒落を発し、あれこれ詮索し、微笑し、その危険を言い負かします」。

同じようにこの軽薄なアスカーニオも自問し、心を落ち着けた。この痴女は僧侶に対し、何の世間的関係も有しない、この僧侶の人生でこの痴女は何の役割も果たしていない、と。結局、一　この痴女が災いを提供しても、アマレレ菓子薬味の薬味となるだけであろう。アストツレの魂の中で生じていることを、彼はいささかも予感していなかった。しかしたとえ彼が察知し、探求しても、僧侶は自分の純潔な秘密を世間に晒すことはなかったであろう。

かくて、アスカーニオはそれを放置し、暴君のもう一つの命令を思い出して、僧侶を人中に連れ出すことにし、陽気に尋ねた。「結婚指輪を手配しているのか、アストツレ。儀式書に書かれていることだぞ。第二章、第何々項、指輪が交換される」。僧侶は言った、そのようなものは家の財宝の中に見つかるだろう、と。

「そうは行かん、アストツレ」とアスカーニオは述べた、「私の意見を聞いてくれるなら、ディアーナに新しい指輪を買うことだ。中古の指輪はどんな因縁が染みているか知れない。古いのは棄てろ。次のことも大事だぞ、つまり新しい指輪を橋上のフィレンツェ人の許で買う。この男を知っているかい。しかし君が知っているわけないな。いいか、私が今日、早朝、ジェルマーノと一緒に町へ戻りながら、運河の上の我らの唯一の端を騎行したとき、一　我らは下馬して馬を引いて行く必要があった、それほどそこは人が密集していた、一　嘘偽りなく、橋支柱の風化した頭部に金細工師が店を開けていた。そして

パドヴァ中の者がこの店で買い、値切っているのだ。何故この狭い橋の上なのか、アストツレよ。我々の広場は沢山あるのに。フィレンツェでは宝石店はアルノ[川]橋にあるからなのだ。というのは、一 ファッションの論理のめでたい理屈で、一 上等の装身具はフィレンツェ人の許でしか買わないし、フィレンツェ人は橋の上でしか商売しないからなのだ。フィレンツェ人はとにかくそうなのだ。さもないとその品はひどいもので、その者自身、本物のフィレンツェ人ではない。それで、つまり、これは本物なのだ。だって大きな文字で自分の店にこう書いているからな。『ニコロ・リッポ・デイ・リッピ、金細工師。アルノ河畔で慣例のように、買取された不当判決によって故郷を追われし者』と。出発、アストツレ、橋へ行こう」。

僧侶は断らなかつた。彼自身、僧服を脱いでから、去っていなかつた家屋敷への所払いの禁を破りたくなっていたからである。

「友の僧侶、君は金を懐にしたか」とアスカーニオは冗談を言った、「清貧の君の誓いは、失効した。あのフィレンツェ人は君からぼったくることだろう」。彼は、二人が丁度通過中の下の廊下にある商会帳場の上げ下げ窓を叩いた。悪戯っぽい顔が覗いた。どの皺も一つの企みを隠し、ヴィチェドミニ家の管財人であり、一 詳しく報ずれば、ジェノバ出身、一 その主人にへいこらお辞儀をして、ビザンチン金貨の詰まった財布を渡した。それからこの僧侶は一人の従者から、フード付きの快適なパドヴァ風夏コートを着せて貰った。

路上でアストツレはフードを深く顔に被せた。太陽の刺すような光線を避けるためよりは、長年の習慣からで、そして好意的に同行者の方を向いた。「それで、アスカーニオ」と彼は言った、「私一人で出掛けるのだろう。単なる金の指輪を買うのだ。僧侶の分別でも間に合うだろう。私に任せてくれるよな。ではまた、結婚式のときに会おう、晩祷の鐘のときに」。アスカーニオは去って、なお肩越しに叫び返した。「一つだぞ、二つじゃない。君の指輪はディーナが用意する。覚えていろよ、アストツレ」。これはこの陽気な男が毎日一度以上唇から空中に発するあの多彩なシャボン玉の一つであった。

皆さん、何故この僧侶は友と別れたのかとお尋ねになるのであれば、こう答えましょう。彼は子供心の愛情のかの若い殉教娘が彼の情緒に目覚めさせたかの天上的調べを純粹に最後まで聞いていたかったのだ、と。

アストツレは橋まで来た。その橋は暑い陽射しにもかかわらず、端まで一杯で、近くの兩岸から二重の雑踏となって、フィレンツェ人の店の前に並んでいた。僧侶は外套の下、正体を隠していた。時折一つの目が、彼の顔の剥き出しの部分に訝しげに据えられた。貴族や市民は先を争っていた。高貴な女達は駕籠から降りて、押し合いへし合い、対の腕輪や最新作の額飾りを求めていた。このフィレンツェ人は鈴を振って、どの広場でも、今日アヴェ・マリアの後、閉めると告げていた。彼はそのつもりではなかつた。しかしフィレンツェ人が嘘を吐いても罰せられようか。

ようやく僧侶は、人々から押し出され、店の前に立った。この十人を一度に四方八方で相手にする人気の商人は、百戦錬磨の横目で、ちらりと見て、すぐに新米と察した。「御当主の高尚な趣味にかなうものがありますでしょうか」と彼は尋ねた。「単純な金の指輪を所

望する」と僧侶は答えた。商人は一つの杯を握った。その浮き彫り細工の大杯には、フィレンツェ人の技法、様式による何か官能的場面が描かれていた。商人は、腹部に百個もの指輪が収まっているその杯を揺すって、それをアストツレに差し出した。

アストツレは痛々しい当惑に陥った。彼は指輪を嵌めることになるその指のサイズを知らなかった。そしてその中から若干を取りだして、明らかに大きめのものと小さめのものとの間で逡巡していた。フィレンツェ人はアルノ河畔すべての話しに潜む忍び笑いのような嘲笑を抑えられなかった。「旦那は時折握られる指の形をご存じないのですか」と無邪気な顔で尋ねたが、しかしやがて利口な男として前言を修正して、無知を疑うのは失礼だろうし、罪なことをなさると疑うのは愛想だろうと秘かに思って、アストツレに二個の指輪を見せた。大きめのものと小さめのもので、自分の両手の親指と人差し指から、僧侶の親指と人差し指の間に巧みに移した。「御当主の二人の良い女性に」と彼はお辞儀しながら囁いた。

僧侶がこの軽口にまだ立腹もしないうちに、彼は激しい突きを受けた。それは一頭の武装した馬の肩甲骨で、彼はそれに乱暴に触れられ、彼は小さめの指輪を落としてしまった。同じ瞬間、耳を聳する八個のチューバが響いて来た。代官のドイツ人護衛兵の軍樂が二列の馬、どちら側も四頭の馬を揃え、橋を越えて行った。橋のすべての人間どもが蹴散らされ、石造りの手すりへ押し付けられていた。

吹奏楽者達を通り過ぎると、僧侶はしっかり押さえていた大きめの指輪をすぐに衣裳の中に収めて、小さめのを探した。これは馬どもの蹄の下に転がって行った。

橋の建築は古くなっていて、中央部は馬車ですり減り、くぼんでいて、それで指輪はその窪みを下って行き、それ自身の回転が加わって、別の側へと転がって行った。そのとき、若い侍女、イゾッタという名前、あるいはパドヴァでは名前を短縮して、ゾッテと呼ばれる娘が、その回転し、きらきら光るものを掴んだ。馬に蹴散らされる危険をもものともしなかった。「幸運の指輪だ」とこの聡くない娘は歓声を上げ、お供をしていた若い姫君の細い指にこの拾得物を子供っぽくはしゃぎながら、嵌めた。それは左手の薬指で、窮屈なこの装身具が優美に嵌められると、この指に殊の外ふさわしく、かなっているように見えた。しかしパドヴァでは、ここヴェローナでも、私の勘違いでなければ、結婚指輪は左手に嵌める習慣である。

高貴な令嬢は小間使いの茶番に不快そうな振りをしたが、しかしやはり少しばかり愉しくなっていた。彼女は、あつらえたようにぴったりと合う他人の指輪を指からまた引き抜こうとした。そのとき、いつの間にか僧侶が彼女の前に立っていて、両腕を嬉しく賛嘆して上げた。しかしその身振りは、広げた右手を思わず前に差し出して、左手を心臓の高さに置いたものであった。というのは、彼は、娘盛りとなっているが、首筋の顕著な細さと、多分それよりももっと自分の魂の反応で、あの子供と再会していると分かったからである。その小娘の華奢な頭を彼は断頭台で見たのであった。

この娘が狼狽して問うような眼差しを僧侶に向けて、絶えず、思うように外れない指輪を回していたとき、アストツレはこの指輪の返却願いを躊躇っていた。しかしそうせざるを得ない。彼は口を開けた。「若い姫君」と彼は始めて、一 二本の強力な、武装された両腕で抱き締められたのを感じた。この両腕が彼を拉致し、彼を引き上げた。瞬時に彼は、自分が、もう一人の武装者の加勢で、一方の脚を右に、もう一方の脚を左に置いて、

あがく馬の上に座っているのが分かった。「それでは確かめることにしよう」と上機嫌の哄笑が響いた、「君が乗馬を忘れていないか」。それはジェルマーノであった。彼は自分の指揮下にあるドイツ人部隊の先頭馬に騎乗していて、この部隊は代官によってパドヴァから遠からぬ平野の視察を命じられていたのであった。彼は思いがけず友人にして義弟のこの男を野外で見つけたので、罪のない冗談をして、彼を自分の側の一頭の馬に乗せたのである。一人の若いシュヴァーベン人が彼の合図でこの馬から飛び降りた。騎乗者が代わったのを感じた熱血漢の馬は、二、三回野蛮な跳躍を行い、馬の雑踏が狭い橋上に生じ、フードを下に垂らして、必死に鐙で支えているアストツレは、驚いて避ける民衆にその正体を晒してしまった。「僧侶だ、僧侶だ」と民衆は叫び、四方八方から指さされたが、すでに兵士達の騒ぎは橋を後にして、通りの角を曲がり、消えた。支払って貰えなかったフィレンツェ人も駆けた。しかし二十歩も駆けないうちに、一人の少年というか弱い見張りに任されている商品のことが気がかりになり、それに群衆の叫び声で、これは著名な、容易に探し出せる人物が相手と察していた。彼はアストツレの宮殿を図で教えて貰い、そこに今日、明日、明後日名乗り出ることにした。最初の二回は甲斐がなかった。僧侶の住まいは一切が右往左往していたからである。三回目、暴君の封印が閉ざされたドアに貼られているのを見つけた。この臆病者は暴君とは関与したくなくて、それで彼は支払いを受けないままであった。

しかし女達は、一 アンティーオベと軽率な侍女に加えて、更に第三の女性、橋上の騒ぎで、二人から離されていた女性が再び見つかって、一 反対の方向へ歩んで行った。三人目は、奇妙な目つきの、一見早すぎるほどに老けてしまった女性で、深い皺に、灰色の髪の毛、興奮した表情であり、そのぞんざいな、しかし高貴な衣裳を路上の埃の中、引きずっていた。

ゾッテは丁度この老婆に、明らかに令嬢の母親であるこの女性に、橋上での出来事を愚かに歓喜して語っていた。アストツレが、一 彼女も人々の叫び声で彼の名が分かり、

一 僧侶のアストツレ、求婚する必要がある人と町中が知っているこの人が、アンティーオベ様にこっそりと金の指輪を転がしたのです、そして自分は一 ゾッテは、一 予兆の合図とこの僧侶の企みを合点して、この指輪を愛しいお嬢様に嵌めましたら、僧侶本人がお嬢様の前に歩み出て来て、アンティーオベ様はその指輪をきちんと返そうとなさったのですが、僧侶は、一 彼女は僧侶の真似をして、一 左手を優しく心臓の所に当てて、こうですよ、でも右手は撥ね付けるように差し出す身振りをなさいました。これはイタリア中で、愛しい人、持っていてください、という意味しかない身振りなのです。

ようやく驚いたアンティーオベは言葉を発して、母親に、イゾッタの馬鹿げたお喋りに耳を貸さないように懸命に頼んだが、甲斐がなかった。オリンピア令夫人は両腕を天に上げて、公道で聖アントニウスに対し、熱烈に感謝した、彼が自分の毎日の祈禱を、どんな期待希望も及ばぬほどに、聞き入れて、宝物の娘に、同等の徳操的夫を、聖人自身の息子と言って良い一人を贈ってくれた、と。その際とても大仰な身振りをして、通りすがりの者達が笑って、その額を示した。困惑してアンティーオベは思い付く限りの手を尽くして、母親の目の眩んだお伽噺を取り除こうとした。しかし母親は聞かず、更に情熱的に自分の空中楼阁を築いて行った。

そのようにして女達はカノッサの宮殿に帰り着き、門のアーチの所で、堅苦しく着飾っ

た家令に出会った。六人の贅沢な身なりの従者が従っていた。ブルガルド氏は恭しく後退しながら、オリンピア令夫人を先に階段を上がらせ、それから、荒れた広間に着くと、三回几帳面なお辞儀をした。段々と間近に、深くなって行くお辞儀であって、そしてゆっくりと厳かに述べた。「御当主様方、アストツレ・ヴィチエドミニの名代でございまして、ご尊顔を恭しく結婚式で拝したく、今日」、――彼は痛々しく「十日して」の言葉を呑み込んだ、――「晩禱の時に招待申し上げます」。

ダンテは休止した。彼の物語はたっぷり充実して彼の前にあった。しかし彼の厳しい精神が取捨選択した。そのとき、彼をカングランデが呼んだ。

「我がダンテよ」と彼は始めた、「そなたは何と厳しく鋭く刺す筆致でそなたのフィレンツェ人達を描いたことかと賛嘆している。そなたのニコロ・レッポ・デイ・リッピは買収された不当判決で追放されている。しかし彼自身は、ぼったくり屋で、追従家、嘘つき、嘲笑家、猥談家、意気地なし、『フィレンツェ人流儀』の一人だ。それでもこれは単に、そなたがフィレンツェに浴びせた呪詛の火の雨の中からの微細火花に過ぎない。そなたが故郷の町の『神曲』の中で味わわせているかの酢や胆汁で苦く滴る三行詩からのほんの滴の残滓だ。言わせてくれ、自分の揺り籠を貶めること、自分の母親の面目を潰すことは、高貴とは言えないぞ。結構なことじゃない。いいか、それは劣等な印象がする。

我がダンテよ、そなたに或る人形劇の話しをしよう。私は最近、頭巾を被って、民衆の中に紛れ込んで、我らのアリーナ[闘技場]で見物した。私が暇な時、人形や道化師に興ずる低俗な趣味を有するとそなたは小馬鹿にすることだろう。しかし私と一緒にこの小さな舞台を覗いてみてくれ。何が見えるか。夫と妻が喧嘩している。妻は殴られ泣いている。隣の男がドアの隙間から頭を入れて、説教し、処罰し、割り込んで来る。しかし見ろ。勇敢な妻が侵入者に抵抗し、起き上がり、夫の肩を持つのだ、『私は殴られるのが、好きなんだよ』と妻は吠える。

同じように、我がダンテよ、高邁な男なら語る、故郷の町に虐待されても、私は殴られたいのだ、と」。

多くの若者や鋭い者の目がフィレンツェ人に注がれた。ダンテは黙って頭を沈めた。誰も彼の内心の考えが分からなかった。しかし彼がまた起き上がると、彼の顔は一層悲哀を帯びていて、彼の口は一層辛辣で、彼の鼻は一層長かった[悄然としていた]。

ダンテは聞き耳を立てた。風が館の角に吹き付け、閉め方の悪い鎧戸を押し開けた。バルド山がその最初の氷雨を送っていた。雪片が舞って、渦巻き、暖炉の炎で照らし出された。詩人は雪の嵐を眺め、そして自分が逃れて来たと思う日々が、一つの落ち着かない赤みの中、この青白い狩り立てと逃走の姿となって現れて来た。彼は寒くなって震えた。

そして彼の思いやりのある聞き手達も、彼と共に、彼を宿泊させ、冬の寒さから守ってくれているのは、自らの故郷ではなく、単に変転するパトロン達の気まぐれな好意のみであると感じた。冬には街道や野の道は雪で覆われるのである。皆がそれに気づき、大きな志操の持ち主のカングランデがまず最初に察した。ここにいるのは、故郷喪失者だ、と。

侯爵は起き上がり、道化師を羽毛のように自分の外套から追い出して、この追放者ダンテの方に歩み寄り、彼の手を取って、彼を自分の席へ案内し、火に近付けた。「この席がそなたにふさわしい」と彼は言い、ダンテは抗弁しなかった。しかしカングランデの方は

空いた床几を利用した。彼はそこから快適に両女性を眺めることができた。今やこの両女性の間で地獄巡りのこの遍歴者は座っていた。炎は熱くこの遍歴者を照らし、彼はその物語を次のように続けた。

パドヴァの数少ない鐘が晩禱の時を告げている間、ヴィチェドミニ家の豪華の広間のヒマラヤスギの梁の下、十二の名家の中で残っている者達が参集して、家の主人の入場を待っていた。ディアーナは父と兄の側にいた。小声のお喋りがなされていた。男達は真面目に根本的に町の大きな二つの名家の結婚の政治的側面について議論していた。若者達は小声で結婚する僧侶のことを冗談にしていた。女性達は、教皇の小勅令にもかかわらず、瀆神行為[還俗]に慄然としていた。この行為は、ただ蓄みの娘達に囲まれた母親達のみがもっと穏やかな風に解釈していて、事情が事情だと釈明したり、僧侶の優しい心遣いと説明していた。娘達はただ期待していた。

オリンピア・カノッサが居合わせることで、不審の念、反撥が生じていた。というのは彼女は目を引く、ほとんど王侯のような盛装をしていたからで、あたかも間近の祝典で主役が割り振られているかのようで、不気味な舌さばきで、アンティーオペに話しかけていた。娘は不安な心持ちで、興奮している母親に小声で懇願して宥めようとしていた。オリンピア令夫人はすでに階段の所ではなはだ立腹していた。そこで彼女は、一ブルガルド氏は丁度二人の別な貴顕の応接に当たっていて、一ゴッチオラ、銀の鈴の付いた深紅の帽子を手をしているこの男によって恭しく歓迎の言葉をかけられたのであった。今や他の者達に混じって輪の中におり、彼女はその法外な身振り演技で、同じ身分の者達の心を煩わし、不安にさせていた。目配せや微かな顎の動きでこの最も哀れな女性が示された。僧侶の立場であれば、誰も彼女を招待しなかったであろう。誰もが、彼女は僧侶に自分の悪戯を一つ仕出かすであろうと、覚悟していた。

ブルガルドが家の主人の入室を告げた。アストッレはやがてゲルマン人達[ジェルマーノ]から別れた後、橋へ急いで戻ったが、そこには指輪も女性達ももはや見つからなかった。そしてこの点を咎めながらも、もっともこれは根本的には単に偶然の悪戯であったが、晩禱までの自分に残された時間の間、将来は常に賢明さを規範として行動すると決心した。この決意を持って彼は広間に入り、集まっている者達の中央に進んだ。彼に注視された視線の圧力、いわばこの社交の空気を感じられる諸形式や要請といったもので、彼は感知した、自分は実情をありのまま言うてはならない、それは精力的なものであり、従って醜いものである、そうではなく、程よく、快い形態にそれを修正しなければならない、と。かくて彼は思わず知らず真実と美しい仮象の中間を保持して、難点なく語った。

「御同輩の皆様」と彼は始めた、「死神は私どものヴィチェドミニ家で、豊かな収穫を得ました。黒い服を着て私が御身らの前に立っていますように、私は父親と、三人の兄、三人の甥の喪に服しています。私が、教会に赦されて、息子や孫となって生き続けたいという臨終の父親の願いを、神の前で」、一とここで彼の声の響きは弱くなって、一

「真剣に吟味し、良心に照らして験した後、これを叶えないままに放置できないと思ったことに関しましては、御身らには、承認するにせよ、非難するにせよ、様々なご意見がありましょう。お一人ずつの内心の正義感や優しさの違いによりましょう。しかし皆様は一致して認められましょう、最近の私の件では、躊躇いとか選択というのは適切なもの

ではなく、ここでは単に切迫していること、思いがけないことが神の御心に叶うことであつたろうということです。そして私の間近に立っていましたのは、すでに私と一緒に、私の最後の兄の死を慰めようもなく悲しんでいて、その喪で私と結ばれている乙女の未亡人の他になかったのです。それで私は愛しい臨終の床越しにこの手を握り、今握っているわけです」。 — 彼はディアーナの許に進み、彼女を中央に導いた。 — 「そして彼女の指に結婚指輪を嵌めます」。彼はそうした。指輪はあつた。ディアーナも同じことをして、僧侶に金の指輪を嵌めた。「これは私の母のものです」と彼女は言った、「正直で、貞淑な女性でした。誠実を見守って来た指輪をあなたに贈ります」。すべての列席者によって厳かに呟かれた賀詞がこの真面目な式を結び、老ピッツァグエラ、威厳のある老人は、 — というのは吝嗇は、健全な悪徳であり、長生きを可能とするからで、 — 普通の涙を流した。

オリンピア令夫人は自分の夢の宮殿が燃え上がり、柱が沈み、梁が音立てて焼け落ちるのを見た。彼女は一步前を出た、あたかも目は欺いていると、目に認めさせたいかのようで、そして野蛮さを募らせて、二歩目を踏み出した。今や彼女はアストツレとディアーナのすぐ前に立っていた。灰色の髪は逆立って、激した言葉が、暴動の民のように駆けて、突き進んだ。

「卑劣漢」と彼女は叫んだ、「この女の指のとは別の指輪、最初に贈られた指輪がその証拠だ」。彼女はアンティーオベを自分の背後から引っ張り出した。娘は不安を募らせてしきりに懇願する身振りで令夫人に従っていた。そして令夫人は娘の手を上げた、「この指輪をそなたは、私の娘の指に、一時間も経たない前に、橋上のフィレンツェ人の許で嵌めよう」。そのように令夫人にはその出来事が偽りの鏡で歪んで映っていた。「ならず者、不義密通の僧侶、そなたを呑み込む大地の口が開いていないか。同志の門番を吊すのだ、酔っ払っていびきをかいて、そなたを僧房から逃がした奴だ。そなたは欲望の奴隷になる気だな。不当な仕打ちに遭い、身寄りのない未亡人や、寄る辺ない孤児をそなたの餌食にはさせないぞ」。

大理石の床が開くことはなく、周りの者達の視線にこの不幸な女性は、自分では正当な母親の怒りを、哀れな弱々しい言葉で発していると思っただけであつた。彼女は背後でのよく分かる囁き声、「痴女」を聞き取り、彼女の怒りは狂気の哄笑へと転じた。「何だい、この阿呆を見てみろ」と彼女は嘲り笑った、「こちらの二人の女の間でドジな選択をしたものだ。御当主方、貴方らが鑑定人だ、目の有る方なら誰でもいい。こちらは心優しい聡い娘、膨らむつぼみの若さ」。 — 残りの言葉を私は忘れた。しかし一つだけは承知している。ヴィチェドミニ家の広間のすべての青年が、その中には一人ならず自堕落な者もいたかもしれないが、すべての若者が、節度のあるものであれ、そうでないものであれ、怒った母親の言葉や身振りから耳目を逸らした。母親は自分の生んだ子供の前で、恥も外聞も棄てて、この子供を取り持ち女のように晒したのである。

広間の皆がアンティーオベに同情した。ただディアーナだけは、彼女は僧侶の誠実さに疑念を抱かなかつたが、自分の新郎の前に破廉恥に呈示された美人に何とも形容しがたい鈍い恨みを感じた。

アンティーオベは不吉な指輪を指に嵌めていたことで、その恨みを買ったのかもしれない

い。ひょっとしたら彼女がそうしたのは、自ら狂って行く母親を刺激したくなかったからかもしれない。母親は、現実で目覚めて、高慢さから、自分なりに、卑下へと沈み込み、一度目を剥いて、二、三の言葉を口ごもってから、すべてをやり過ぎだろと考えたのかもしれない。あるいは若いアンティーオペ自ら、指の先端を噴出するメルヘンの泉に浸したのであろう。橋の上での出会いは摩訶不思議ではなかったか、彼女が僧侶によって選定されたことは、僧侶を修道院から出した運命よりも摩訶不思議ではなかろうか。

今や彼女は残酷な処罰を受けていた。放恣なお喋りが能う限り、自分の母親が彼女から庇護する覆いを剥ぎ取っていた。

薄暗い赤みと更にそれよりも薄暗い赤いものが、彼女の額やうなじに走った。その後、彼女は静まり返っている中、甲高く、激しく泣き出した。

灰色髪のマイナス[ディオニュソスの巫女]さえも当惑して聞き耳を立てた。それから恐ろしい苦痛が彼女の顔面で痙攣し、彼女の憤激は倍増した。「別の女はどうだ」と彼女はディアーナを指し示して、金切り声を上げた、「こちらはほとんど彫られていない、荒削りの厚い大理石、やっつけ仕事の巨大女、父親の神様が、まだ捏ね方を修行中の職人で、仕上がらずい。生気のない無様な体、見ておれない。誰か生気をやはり与えてはいるんか。私生児女が母親か。愚鈍なオルゾラか。それともあそこの干涸らびたけちんば爺か。奴はただ嫌々ながら、乏しい生気の喜捨を施したんだ」。

老ピッツァグエラは悠然としていた。吝嗇家達の明確な分別を持って、彼は誰を相手にしているか忘れていなかった。しかし彼の娘ディアーナは忘れていた。自分の体と魂を粗野に嘲笑されて、激昂し、深く怒って、彼女は眉を潜め、両拳を固めた。今や彼女は、この痴女が両親を引き合いに出し、墓にいる亡き母を罵り、父親をさらし台に晒し、それで我を忘れた。青白い短気に襲われ、爆発した。

「雌犬め」と彼女は叫んで、アンティーオペの顔を殴った。というのはこの絶望している心優しい少女が母親の前に身を投じたからである。アンティーオペは一つの高い音を発し、広間に響き、皆の心を揺すった。

すると痴女の頭の中の車輪が完全に回転し出した。至大の憤怒が言い難い嘆きへと移った。「皆して私の子供を殴るんだね」と彼女は呻いて、両膝をつき、嗚咽した。「もはや神はいないのか」。

今や事件の升は満たされた。もっと早くにこぼれていたかもしれないが、しかし厄災は私の話す口よりも速やかに進行した。とても速やかなもので、僧侶も間近に立っているジェルマーノもディアーナの振り上げた腕を掴み、止めることができなかったのである。アスカーニオが痴女を抱き止め、もう一人の若者が彼女の両足を握って、このほとんど抵抗しない女は運び出され、その駕籠に入れられ、家に運び戻された。

まだディアーナとアンティーオペは向かい合って立っていた。どちらも青白かった。ディアーナは短気がすぐに収まって、反省し、深く悔いていた。アンティーオペは言葉を探していた。彼女はどもることさえできずに、音もなく唇を動かしていた。

このとき僧侶がアンティーオペの手を取って、自分の婚約者から虐待された娘に同伴を申し出たが、これは単に騎士的なホストとしての義務的振る舞いに過ぎなかった。皆それを自明なことと思った。特にディアーナは、自分の腕力行為の犠牲者が視界から消えることを願っているに違いなかった。それから彼女も父親や兄と一緒に去った。集まっていた

客人達も、同じように最後の一人まで去ることが、最良の配慮と見なした。

アマレレ菓子とキプロス・ワインの揃った祝いの食卓の許で呼び鈴が鳴った。道化師帽が現れ、ゴッチオラが四つん這いで食いしん坊の隠れ場から這い出て来た。彼の見解ではすべてが美味しく経過していた。というのは今や彼は全く勝手に、アマレレに手を出し、杯を次々に干すことができたからである。かくてしばらく満喫していると、近寄って来る足音を耳にした。彼は逃げようと思い、妨害者は誰かとうんざりした視線を送ると、一切逃げるに及ばないと判断することになった。僧侶が戻って来たのであった。僧侶も同じように小躍りして喜んでいて、道化師同様に酩酊していた。というのは、僧侶は、一。

「アンティーオペを愛したからである」と侯爵の恋人が語り手を引きつった哄笑と共に遮った。

「その通りです、姫君、彼はアンティーオペを愛したからです」とダンテは悲劇的な調子で繰り返した。

「勿論」、「他に考えられるかしら」、「そうなるに違いないよ」、「普通はそうだな」と語り手に対し、聴衆一同からの返事があった。

「静かに、青年諸君」とダンテが小言を言った、「いや、通常はそうなりません。諸君は、全生涯をかけた、全霊をかけた愛が日常茶飯のことであると思っているのですか。そして、それどころか、そのように愛して来たとか、愛するだろうと思っているのですか。誰もが霊について話します。しかしそれを見たものはほとんどいない。私はまっとうな証人を披露しましょう。この家では流行のメルヘン集が回覧されています。私はその本を用心深く指でめくって、多くの空漠たる箇所の中、本当の言葉を見つけました。『愛は』とある箇所にあります。『稀なもので、大抵ひどい結末になる』と」。この言葉をダンテは真面目に語っていた。それから彼は嘲った、「諸君は皆、愛をそのような風に学習していて、詳しいわけで、それに情熱に圧倒された一人の若者の科白を、私の齒の欠けた口で発することは見苦しいものでありましようから、私は戻って来るアストツレが心の裡を語る独白を飛ばして、手短にこうまとめましよう。すると分別のあるアスカーニオが彼の漏らす言葉を聞いていて、びっくりしてまともになれと彼に説教した、と」。

「あなたはあなたの感動的なお話しをそんな風に惨めに簡略化なさるつもりですか」と侯爵の恋人が熱くなって両手で依頼しながらフィレンツェ人に反論した、「僧侶に独白させて、私どもが親身になって、僧侶がどのようにして粗放な女性から優しい女性に、冷たい女性から細やかな心遣いの女性に、石の心から鼓動する心に向かったか納得できるように話してください」。

「そうです、フィレンツェのお方」と侯爵夫人が深く感動して遮り、薄暗く頬を輝かせていた、「あなたの僧侶に独白させて、私どもがびっくりして、どのようにしてそういう次第になったのか、聞き取れるように話してください。つまり、アストツレは、とても未熟で、騙されやすかったので、高貴な女性を抜け目ない女性のために裏切ってしまうことになったということです、一　ダンテ、あなたはお気づきでないのですか、アンティーオペは抜け目ない女性である、と。あなたは女性に詳しくないですね。本当に、申し上げましよう」、一　彼女は力強く腕を上げて、拳を固めた、一　「私でも殴っていたこ

とでしょう、哀れな痴女の母親の方ではなく、わざわざ、この策謀の女性、どんなことをしても僧侶の面前に現れたかったこの女性を」。そして彼女は空を殴った。別の女性は微かに震えた。

カングランデは、今や二人の女性の向こう側[以前のダンテの席]に座っていて、この二人を眺めて飽きなかったが、自分の侯爵夫人を賛嘆して、彼女の偉大な情熱を喜んだ。この瞬間、彼は夫人の方が、より小さな華奢な恋敵の女性よりも、比較にならないほど美しいと思った。夫人に対してこの恋敵を設けたのは彼であるが、情緒の最高のもの、最深のものは、単に強力な体と強力な魂の中にのみ表現され得るからである。

ダンテ自身はこの晩初めてただ一回微笑した。両女性が激しく彼のメルヘンのシーソーで上下しているのを見たからである。彼はそれどころかからかいさえした。「高貴な女性の方々」と彼は言った、「私に何を要求されるのです。独白は無分別です。賢い男が自分と問答しましょうや」。

すると薄暗がりの中から大胆な巻き毛の頭が起き上がった。どこかの安楽椅子の背後か、裳裾の影にこっそり隠れてうずくまっていたであろう身分の高い少年が、陽気に叫んだ、「お偉い巨匠。どれほどご自分が分かっていないのです。分かっていると自称なさるので。いいですか、ダンテ、あなたほど頻繁に自分とお喋りする人はいません。とてものことで、あなたは我々餓鬼を見過ごすばかりでなく、すぐ側を美女が通りかかっても、挨拶しませんよ」。

「本当かね」とダンテは言った、「どこでだ、いつ、どこで」。

「そうですね、昨日エチュ川橋で」と少年は微笑した、「あなたは手すりに寄りかかっていました。すると魅力的ルクレツィア・ナニーが通りかかり、あなたのトガ[外衣]に触れた。我々少年は、彼女を称えて、追っかけた。彼女の方に二人の熱い兵士が歩いて来た。彼女の穏やかな目から視線を狙っていた。しかし彼女の方はあなたの目を求めていた。地獄巡りを愉しんで無事戻って来た人はそういませんから。巨匠、あなたはエチュ川の中ほどで生じている波の回転を見つめていました。そして何かを呟いていました」。

「海に向かって挨拶したのだな。波の方が娘より美しい。しかし二人の阿呆どもに戻ろう。いいかな、この二人が互いに語るのだ。すべてのミューズにかけて、これから誰も私を遮らないでくれ。さもないと真夜中になってもまだ炉辺のメルヘンが続くぞ」。

僧侶がアンティーオペを家に送って、自分の広間にまた入ったとき、一 いや、彼はアスカーニオに出会っていないと言うことを私は忘れていた。アスカーニオは駕籠にオリンピック令夫人を乗せて、同じ道を行った筈であった。しかしこの甥は、このすっかり崩れ落ちた女性を従者達に預けた後、すぐに暴君の叔父の許に急いだ。叔父にこの面白い出来事を焼きたてのパン菓子として供するためであった。彼はエツェリーンに陰謀よりも町の事件を話すことを好んだ。

私は嘲笑家のアスカーニオが僧侶のことをそう呼んでいたように、恰幅が良かったかは知らない。しかし青春真っ盛りの青年のように歩いている彼の姿が目前にある。羽根の付いた足で、彼は広間を漂って行き、温かい西風[ゼフェロス]、あるいはイーリス[虹の女神]に運ばれている按配である。彼の両目は輝き溢れ、浄福の者達の言葉でリュートの音を口ごもる。沢山のキプロス・ワインを堪能したゴッチオラも同様に上機嫌で若返っていた。

彼の足裏でも大理石の床は白い雲へと溶けていた。彼は、アストツレの若々しい唇から漏れるつぶやき声に、泉の上に屈み込む如く、聞き入りたいという、抑えがたい欲求を感じた。そしてアストツレの側において、広間の端から端を測定することになった。あるときは大股で、あるときは跳ぶような足取りで、腋には道化師の笏を持っていた。

「父親のために差し出した優しい頭を、母親のためにも差し出し、捧げたのだ」とアストツレは呟いた、「内気な娘は、何と赤くなったことか。むごい仕打ちを受けた娘、何と苦しんだことか。殴られた娘、何と叫んだことか。あの頭が断頭台に据えられてから、私の念頭から消えたことがない。あの頭はいつ何時でも私には現れた。祈りのとき浮かび、私の僧房で輝き、私の枕元で休んだ。この心優しい頭は白く細い首筋と共に聖パウロの頭の側に横になっていなかったか。ー」

「聖パウロの」と滴嘗め男は忍び笑いをした。

「我らの祭壇画の聖パウロの」。

「黒い縮れ毛に、幅広の断頭台上の赤い首筋、その上の処刑人の手斧の描かれた？」。ゴッチオラはフランシスコ会士の許で、時折、祈祷を捧げていた。

僧侶は頷いた。「私が長く眺めていると、手斧が動いて、私は縮み上がった。修道院長に告解したものだ」。

「修道院長は何と言った」とゴッチオラは試験した。

「我が息子よ」と彼は言った、「そなたが見たものは、天上的凱旋行列の先駆けの子供だ。何も恐れるな。アムピロシアー[神々の食物]の首筋には何も災いは生じない」。

「しかし」と邪悪な道化師は唆した、「その子供は成長した。これほど高く」。彼は手を上げた。それから手を下げた、そして床の上に保った。「御貴殿の僧服は」と彼はにやりと笑った、「これほど低くなった」。

卑俗なものが僧侶に触れることはできなかった。創造的な炎は、アンティーオペの手から彼の手へ渡り、最初は優しく穏やかに、それから一段と熱く、鋭く、彼の目の中で燃え始めた。「父なる神は称えられよ」と彼は突然小躍りして喜んだ、「夫と妻を創造せし者」。

「エーファ[イヴ]を」と道化師は尋ねた。

「アンティーオペだ」と僧侶は答えた。

「で、もう一方の女性は、大きい方は？この女性はどうなるのです。乞食になるのですか」。ゴッチオラは目を拭いた。

「他のどの女性だ」と僧侶は尋ねた、「アンティーオペ以外に女性がいようか」。

これは道化師自身にさえ強烈すぎた。彼はアストツレを驚愕して見つめたが、一つの手によって襟を掴まれ、入口の方へ引きずられ、廊下に出された。それから同じ手がアストツレの肩に置かれた。

「目を覚ませ、夢遊病者よ」と戻って来たアスカーニオが叫んだ。彼は僧侶の最後の陶酔的話しを立ち聞きしていた。彼はこの夢見心地の者を窓辺のベンチに座らせ、しっかり目を合わせて、語りかけた。「アストツレ、我を忘れているぞ」。

アストツレは最初眩んだように、吟味する視線を避けた。それから自分の目を相手の目に合わせた。目はまだ歓喜に浸っていたが、その目をおずおずと伏せた。「奇妙かい」と彼はそれから言った。

「炎が燃えるのは奇妙ではない」とアスカーニオは答えた、「しかし君は盲目の自然で

はなく、理性と意志を持った者だ。そんな風に炎が出たら、君とパドヴァ全体が燃え尽きる。君に世俗の者が、神の法と人間の法を説教しなければならんのか。君は結婚しているのだ。君の指のこの指輪はそう語っている。君が、最初誓約を破ったように、今度君の婚約を破ったら、君は道義、義務、名誉、それに町の平和を破ることになる。君が盲目の神の[恋]の矢を速やかに英雄的度胸で胸から引き抜かなければ、この矢は君とアンティーオペ、それに数人の他の者達、まさに巻き込まれた者達を殺害してしまう、アストツレよ、アストツレ」。

アスカーニオの勇敢な唇は、自分が不安な気持ちの余り口にした偉大な真面目な言葉に驚愕した。「君の名前、アストツレが」と彼はそれから半ば冗談で言った、「チューバのように高らかに響いて、君を君自身との戦いに呼んでいるぞ」。

アストツレは自戒した。「愛の秘薬を盛られたな」と彼は叫んだ、「私は狂乱し、狂人のようだ。アスカーニオ、君に私への支配権を譲る。私を縛ってくれ」。

「私なら君をディアーナに縛り付けるよ」とアスカーニオは言った、「付いて来い、彼女を探そう」。

「アンティーオペを殴ったのは、ディアーナではなかったか」と僧侶は尋ねた。

「それは君の夢だ。君はすべて夢見ている。君は君の感覚すらままならない。来い、お願いだ。君に命令するぞ。私は君を掴まえて、案内しよう」。

アスカーニオが現実を追放しようと思ったとき、その現実をジェルマーノの玄関で響く足音が連れ戻して来た。決然とした顔でディアーナの兄が僧侶の前に立って、彼の手を握った。「祝典は妨害されたな、義弟殿」と彼は言った、「妹が私を送った。 — いや、嘘だ、妹は私を送っていない。妹は自分の寝室に閉じこもって、その中でめめそ泣き、自分の短気を呪っている。 — 今日は女どもの涙の中で溺死しそうだ。妹は君を愛している。ただそのことを唇に乗せられない。 — これは家系だ、私もそんなことはできない。君のことは一瞬たりとも疑念を妹は抱いていない。単純なことだ。君はどこかで指輪を一つ浪費した。 — 小さなカノッサ嬢、 — 何という名前か、そうだ、アンティーオペだ、 — 彼女が指に嵌めていた指輪が君のものならばな。痴女の母親がそれを見つけた、そこからお伽噺を紡ぎ出した。アンティーオペは勿論、すべての点で無実だ、新生児の子供のように、 — 他の意見の者は、私が相手だ」。

「異議なし」とアストツレは叫んだ、「アンティーオペは天のように純粹だ。指輪は偶然転がったのだ」、そして大急ぎの言葉で説明した。

「しかし突っかかった妹も悪いのではない、アストツレ」とジェルマーノは主張した、「頭に血が上ったのだ。自分の前に誰がいるか見ていなかった。妹は痴女が相手と思っていたのだ。自分の両親を虚仮にされ、あの罪のない娘を殴ってしまった。しかしこの罪のない娘は神と人々の前でまた名誉と品位を回復しなければならぬ。これは私に任せてくれ、義弟殿。私は兄だ。単純なことだ」。

「君は話し続けているが、ジェルマーノ、内容が良く分からぬ。何を計画しているのだ。哀れな娘にどう償うのだ」とアスカーニオが尋ねた。

「簡単なことだ」とジェルマーノは繰り返した、「私はアンティーオペ・カノッサに求婚して、彼女を私の妻にする」。

アスカーニオは自分の額に手を当てた。この飛躍した考えには呆然とした。しかしそれ

から、素早く思案して、もっと詳しく考えてみると、この英雄的手段は少しも悪くないように見えた。しかし彼は僧侶に不安げな視線を送った。僧侶は、自分をまた取り戻して、鼠のように静かにしていて、注意深く聞いていた。この兵士の名誉心が、彼の魂の荒野の中を、明るい鳥笛のように響いた。

「こうすれば一石二鳥になろう、義弟殿」とジェルマーノは説明した、「その娘は品性も名誉も回復される。私の妻の悪口を言う者は、私が相手だ。それに私は君ら夫婦に和平をもたらす。ディアーナはもはや君に対しても、自分に対しても、恥じる必要はない。その短気の後始末は根本的になされる。こう君に言えよう、妹はそれが癒やされた、生涯、と」。

アストツレは彼と握手した。「君は健気だ」と彼は言った。自分の天上的欲求、あるいは地上的欲求を克服しようとする意志が僧侶の中で強くなった。しかしこの意志は自由なものでなかった。この徳操は無私なものでなかった。というのはこの徳操は危険な詭弁にしがみついていたからである。私自身が愛していない女性を抱擁するのと変わらず、とアストツレは自らを慰めていた、アンティーオペも一人の男に抱かれることになろう。この男は要するに、他人の不正を弁償するために、アンティーオペに求婚するのだ。我々は皆が断念することになる。修道院と同様に、現世での諦念と去勢だ。

「善は急げだ」とジェルマーノは迫った。「さもないと彼女は眠れずに転々とすることだろう」。彼がディアーナのことを言っていたのか、アンティーオペのことを言っていたのか、分からない。「義弟殿、証人として私の同伴を頼む。私は作法通りに求婚する」。

「駄目だ、駄目だ」とアスカーニオが驚いて叫んだ、「アストツレはいけない。私を連れて行け」。

ジェルマーノは頭を振った、「アスカーニオ、我が友よ」と彼は言った、「君はそれにふさわしくない。君は結婚の件で、真面目な証人とは言えない。それに私の義弟のアストツレが、私の代理で求婚することを認めないだろう。これは実際、大部分が彼の案件なのだ。だろう、アストツレ」。アストツレは頷いた、「だから、義弟殿、準備してくれ。綺麗な身なりで、ネックレスを掛けてな」。

「それで」とアスカーニオが強いて冗談を言った、「中庭を越えて行くときは、泉に頭を映すことだな。君自身は、ジェルマーノ、甲冑を着けているぞ。そんな戦闘服でか。求婚にふさわしいか」。

「私は長いこと、軍服を脱いでいない。これが私にお似合いだ。何で頭から足先まで見つけているのだ、アスカーニオ」。

「この甲冑男は、自分が攻城用梯子もろとも、濠に投げ込まれないという確証をどこから得ているのか、不思議でならない」。

「それは問題にならない」とジェルマーノはいとも平静に言った、「辱められ、殴られた娘が一人の騎士を拒むと思うか。そう思うのであれば、それは自分の母親よりももっと痴女だ。当たり前だろう、アスカーニオ。行こう、アストツレ」。

残ったアスカーニオが両腕を組んでこの新しい展開を思案して、これは花と咲く子供達の遊び場に導くことか、それとも墓場かと疑っている間、二人の青春の友は、カノッサ宮殿までのさほど遠くない道を歩いて行った。

雲のない一日は、綺麗に輝く黄金の夕方へと徐々に消え、アヴェ[・マリアの祈り]の鐘

が聞こえてきた。僧侶は内心で習慣となった祈りを捧げ、彼の若干高い所にある修道院が偶々馴染みの鐘の音を数回穏やかに憂わしげに引き延ばし、空では他の町も鐘もそれ以上は長く争って響かせなくなった。僧侶も皆の平和に預かった。

そのとき彼の視線は友人の顔に留まり、その外気で鍛えた面貌を見据えた。その顔は明るく喜ばしげで、疑いもなく義務感に満ちたものであったが、しかし無意識のあるいは無防備の幸せの見られるもので、騎士的行動という名誉で膨らんだ帆の下、浄福の島の港に到着する幸せが窺われた。「可愛い無実の娘」とこの兵士は溜め息を吐いた。

僧侶は狂騒心で素早く悟った、つまりディアーナの兄は自分を利己心がないと見なしているが、それは自己錯覚であり、ジェルマーノはアンティーオペを愛し始めていて、彼の恋敵となっているのだ、と。彼の胸は鋭い痛みを感じ、それから更にもっと鋭い痛みを感じて、叫び声を上げたくなった。そして今や彼の胸の中で、憤怒の蛇どもの巣全体がうごめき、かきむしった。皆さん、我々は皆、男も女も、嫉妬には用心したいものです。これは苦しみの中で最も辛いもので、これに悩まされる者は、私の劫罰を受けた者達よりも不幸なのです。

顔を歪め、重い心で、僧侶は自負心のある求婚者に従って、到着した宮殿の階段を上がって行った。宮殿は空っぽで、荒れていた。オリンピア令夫人は閉じこもっていたのかもしれない。従者は見えず、ドアがすべて開いていた。二人は案内されず、すでに薄暗くなって行く部屋を次々に通って行った。最後の小部屋の入口前で二人は立ち止まった。若いアンティーオペが窓辺に座っていたのである。

クローバの葉の形で終わっているその窓のアーチは、夕方の輝きを一杯に浴びていて、半円形の中、その可愛らしい姿を胸からうなじまで包んでいた。彼女の乱れた髪飾りは茨冠の先端に似ていて、憧れる唇は天を求めて吸っていた。打ちのめされたこの娘は、甘受した恥辱の圧力を受けて、臉を閉じ、両腕を垂らして、疲れて横になっていた。しかし彼女は心静かに喜悅していて、自らの恥辱を称えていた。というのはこの恥辱が彼女をアストツレとの永遠の和合に導いたからである。

そして今日になっても、また現世の最後まで、最深の憐れみから、至高の愛は点火するのではないか。美しいものが不当に苦しむとき、この美しいものを目にするのを誰が拒もう。私は神聖なものを冒瀆するものではなく、違いをよく弁えている。しかし神々しいものも殴られるのであり、我々はそのみみず腫れや傷口に接吻するのである。

アンティーオペは、アストツレが自分を愛しているか、詮索しなかった。彼女は承知していた。疑いなかった。彼女は自分の胸の呼吸や、自分の心臓の動悸以上にそのことを確信していた。一緒に帰る最初の一步のときから、彼女はアストツレと一言も言葉を交わさなかった。両手は最後のときより固く握ることはなかった。両手は握り締めなくても、癒着していた。二つの軽快な精神的炎のように二人は融合した。それで、別れる際、根のように絡み合っていて大地からほとんど分離できなかった。

アンティーオペは他人の所有物を横領した。そしてほとんど無邪気にディアーナから奪った。というのは彼女には良心もなければ、単なる自負心もなかったからである。その塔と共に彼女の前にあったパドヴァも、母親も、僧侶の婚約も、ディアーナも、地球全体が、すべてが消えていた。天の深淵以外何もなかった。そしてこの天は光と愛で満たされていた。

アストツレは階段の最初の段から最後の段まで自分と戦いながら上がって、勝利を勝ち取ったと思った。私は犠牲になろうと、彼は自らに自慢した。ジェルマーノの求婚の助けをするのだ、と。最上段で更にすべての聖人に願掛けした、特に克己の名人、聖フランシスコに祈った。彼は胸を掴み、この天上的加勢でヘラクレスのように強力になって、大蛇を絞め殺したと思った。しかし四つの傷跡のある[聖痕伝説の]聖人は、すでに自分の綱、僧服を辱めた不実な弟子から顔を背けていた。

その間、その横に立っていたジェルマーノは自分の話しの案を練っていたが、二つの論点、すぐ最初からもっともなことに思われていたこの論点から進めないでいた。ちなみに彼は度胸はあった。――すでに何度か騎兵の戦闘で自分のドイツ人達に対して演説していたし、――一人の少女を恐れていなかった。ただ戦闘前と同様に待機することだけが苦手であった。彼はこっそりと剣で甲冑を叩いた。

アンティーオベは縮み上がった、目をやり、速やかに起き上がって、窓側に背中を向けて、暗い顔になって、黄昏の明かりの中、自分の前でお辞儀している男達に向かい合っ立っていた。

「安心されたい、アンティーオベ・カノツサ」とジェルマーノは喋った、「私はこの男、アストツレ・ヴィチェドミニを、つまり僧侶と呼ばれていて、私の妹ディアーナの夫たる者を、立派な証人として同道願った。即ち、私が来たのは、そなたを――父親も亡くなっていて、あのような母親と一緒になのであるが、――そなた本人を妻として望んでいるのだ。私の妹はそなたに対して我を忘れていた」、――彼はもっと強い言葉を遣うことを控えた、そして自分が尊重しているディアーナをその言葉で傷付けないようにした、――「それで兄の私が来て、妹の遺憾な行為の償いをしようと思っているのだ。ディアーナはアストツレと一緒にあって、そなたは私と一緒にあって、そのようにして互いに向かい合えば、そなたら二人の女達が互いに手を差し出すことになるだろう」。

聞き耳を立てている僧侶の敏感な情緒は、加虐と受難との、殴る女性と殴られた女性とのこの粗野な対等化に傷付いた。――それとも一匹のママシが這い出たのか、――「ジェルマーノ、そのような求婚はないだろう」と彼は甲冑の男に囁きかけた。

この男はこれを耳にした。暗いアンティーオベは鼠のように静かにしていたので、彼は不愉快になった。彼はもっと優しく話すべきだろうと感じて、もっと無愛想に語った、「父親もいなくて、このような母親と一緒にでは」と彼は繰り返した、「貴女は男性の庇護が必要でありましょう。若い姫君、今日そのことを学ばれたはずです。二度とパドヴァ中の前で、辱められ、殴られたくはないでしょう。ありのままの貴女を私に預けてください。私は貴女の頭の天辺から足先までお守りします」。ジェルマーノは自分の甲冑のことを考えていた。

アストツレはこの求婚を噴飯物と思った。ジェルマーノはアンティーオベを戦争捕虜のように扱っていると彼には思われた。――それとも蛇が舌を出したのか、――「ジェルマーノ、そのような求婚はない」と彼は喘いだ。ジェルマーノは半身振り向いた。「君の方が心得があるのであれば」と彼は不機嫌に言った、「私の代わりに求婚してくれ、義弟殿」。彼はその場を空けて、脇へ行った。

それでアストツレが近付いた。膝を折って、指先を互いに組み合わせて両手を上げ、青白い黄金の地の上にある華奢な頭に不安げな視線で尋ねた。「お言葉を頂けましょうか」

と彼はどもった。黄昏れて静寂であった。

ようやくアンティーオベが囁いた。「アストツレ、誰のために求婚しているのです」。「こちらの男、私の兄ジェルマーノのためです」と彼は声を押し出した。すると彼女は顔を両手で隠した。

このときジェルマーノはしびれを切らした。「私はドイツ語で彼女と話そう」と彼は吐き出して、言った。「要するにだ、アンティーオベ・カノッサ」と彼は娘に粗くがなった、「そなたは私の妻になるのか、ならないのか」。

アンティーオベはその小さな頭を穏やかに静かに揺すった。しかし夜が次第に増していたが、明確な拒否であった。

「私は肘鉄を食らった」とジェルマーノは素っ気なく言った、「義弟殿、行こう」。そして彼は、踏み込んだときと同様しっかりとした足取りで広間を去った。しかし僧侶は彼に従わなかった。

アストツレは懇願の姿勢のままであった。それから彼は、自ら震えながら、アンティーオベの震える両手を握り、顔からその両手を引き離した。どちらの口が相手の口を求めたか、私には分からない。というのは小部屋は完全に暗くなっていたからである。

それにまた小部屋はとても静かで、二人の耳が嵐のような歓声と浄福なコーラスとで一杯でなかったら、愛する両人は容易に隣接する部屋での眩く祈禱を聞き取っていたことであろう。事情はこうであった。アンティーオベの小部屋の隣りに、数段低く、屋内礼拝堂があって、明日はカノッサ伯爵の三年目[四回忌]の祥月命日であった。真夜中過ぎに未亡人と孤児の娘が出席して供養のミサが行われる予定であった。すでに司祭は入室していて、伴僧を待っていた。

下界のこの眩き声を両人は耳にしなかったように、同様にオリンピア令夫人のスリッパを引きずる音も聞いていなかった。令夫人は娘を探していて、今や手にしていた屋内明かりの乏しい光の許、この恋人達を静かに注意深く観察していた。放恣な想像力による厚かましすぎる嘘噺が眼前にこのように優しく睦み合った姿となって現実の真実となっていることに対して、オリンピア令夫人は驚かなかった。しかしこの痴女に対して、称賛して言われるべきことだが、彼女は自分の復讐の成就を享受したのではない。彼女は、殴打したディアーナに迫っている辛い受難のことを愉しく思ったのではない。自分の子供がその値段通りに評価され、求められ、愛されていることに、ただ単純に母親らしい喜びを感じていたのであった。

その時丁度、彼女の明かりの鋭い光線に照らされて、両人が驚いて目を向け、彼女は優しい自然な声で尋ねた。「アストツレ・ヴィチェドミニ、あなたはアンティーオベ・カノッサ嬢を愛していますか」。

「誰にもまして、令夫人」と僧侶は答えた。

「娘を守りますか」。

「世間に対して」とアストツレは大胆に叫んだ。

「結構なことですよ」と彼女は宥めた、「でも本当に、実直にそう思っていますか。娘をディアーナのように突き飛ばさないでしょうね。私を虚仮にしないでしょね。世間の人々が私を呼んでいるようにこの哀れな痴女を不幸にしないでしょね。逃げもしないし、先延ばしもしないでしょう。この目に確信を与えて、即刻アンティーオベを敬虔なキリスト

教徒として、正直な貴族として、祭壇に連れて行きますか。遠くまで牧師を求めて行く必要はないのです。呟き声が聞こえますか。下の方で一人の牧師が跪いています」。

彼女は一枚の低いドアを開けた。その奥には二、三の急な階段が下に通じていて、屋内の至聖所に導いていた。アストツレは一瞥した。小さな祭壇前の不格好なドームの下、一本の覚束ない蠟燭の明かりの下、一人の素足の男が祈っていた。この男は年齢や姿が彼と似通っていて、その上聖フランシスコの僧服や綱も着用していた。

思うにこの素足の男が丁度この時刻にここで跪き、祈っていなければならなかったのは、神慮なのであって、アストツレを最終的に驚愕させ、警告するためであったろう。しかし彼の燃える血管の中ではこの薬は毒となった。彼は自分の修道院生活の体現を目にし、破廉恥と安心という反抗的精神に襲われた。私は自分の最初の誓約を同じ足で踏み越えた、と彼は笑った。いや、私が跳ぶと、柵は倒れた、一 二度目の誓約破棄ができないことがあるか。私の聖人達は私を負けさせた。ひょっとしたら聖人達はこの罪人を救い、守るのかもしれない。この野人はアンティーオペを我が物とすると、彼女を階段の下に案内するというよりも、下に運んだ。しかしオリンピア令夫人は、しばらく明澄な頭の時間があつた後、また混乱して、僧侶と自分の子供の背後でドアを閉めて、獲物を捕らえた如く、戦利品を獲得した如く、鍵穴から覗いた。

彼女が見たものは定かではない。民衆の意見では、アストツレは素足の男に剣を持って脅し、暴力を振るつたとされる。これは考えられない。アストツレという男は剣を携帯したことがないからである。真実に近いのはこうであろう。素足の男は 一 悲しいことに 一 劣等な僧侶であつて、ひょっとしたらアストツレが懐中にしていた財布を自分の僧服の下に収めたのかもしれない。アストツレがディアーナのために結婚指輪を買うために出掛けたときの同じ財布である。

しかしまず司祭が逆らい、二人の僧侶が互いに喧嘩して、重々しいドームの下、醜い場面が生じたこと、 一 このようなことが覗いている母親の歪んで驚いた顔から読み取れた。オリンピア夫人は理解した。下の方である破廉恥なことがなされ、自分はその行為の首謀者、共犯者として、厳しい法の裁きを受け、裏切られた者達の復讐の餌食になるであろう、と。そして処刑された伯爵の命日の日、自分のたわけた頭も斧の下、救い難く散るのであると思った。彼女はエツェリーンの近付く足音を聞く妄想に駆られた。そこで彼女は逃げ、叫んだ、「助けて、人殺しだ」。

懊悩のこの女性は、廊下を駆け、窮屈な中庭に面する窓辺に近寄つた。「私のラバを出して、私の駕籠を出して」と彼女は下に叫んだ。そしてこの二重の命令に笑いながら、 一 ラバは田舎用で、駕籠は町用であつて、 一 痴女の従者達はゆっくりと快適にある隅から起き上がった。彼らは瓢箪型ランタンの許、飲んだり、賽子賭博をしていた。老いた厩舎長は、彼のみがこの不幸な領主夫人に忠誠を尽くしていて、憂わしげに二頭のラバに鞍を付け、門道から、宮殿の、路地に接している前庭にラバを連れて来た。彼はすでにオリンピア夫人の幾多の迷路巡回に同伴していた。他の者達も冗談を言いながら駕籠で付いて来た。

大きな階段の所で、この逃げかかる痴女は心配したアスカーニオと出会つた。夫人は自己保存という不幸の最中でも優勢に働く衝動のために愛しい子供のことを忘れていた。アスカーニオは、知らせもなく放置され、不安な気持ちになつて、調査に出掛けたのであつ

た。

「何があったのです、令夫人」と彼は素早く尋ねた。

「不幸です」と彼女は飛び立つカラスのように鳴いて、階段を駆け下り、自分のラバに乗って、荒々しく踝を当て、暗闇へ消えた。

アスカーニオは暗い諸部屋を通して、オリンピア令夫人の置き去りにされた吊りランプで照らされたアンティーオベの小部屋の中まで探した。彼がそこで周囲を見ると、屋内礼拝堂のドアが開いて、二人の美しい幽霊が深みから出て来た。大胆なアスカーニオは震え始めた。「アストツレ、君は彼女と結婚したのか」。甲高く呼ばれた名前が、ドームで木霊して、かの日のチューバのように轟いた。「ディアーナの指輪を付けているのだろう」。

アストツレは指輪を外して、それを投げ飛ばした。

アスカーニオは開いた窓辺へ突進した。指輪が飛び出て来た窓である。「指輪は二個の切石の隙間に滑り込んだ」と路地から声がした。アスカーニオはターバンと鉄兜を目にした。それは夜警の巡回を始めた代官の郎党であった。

「アブ・モーハメット、一言話したい」と彼は、素早く思案して、白い髭の老人に叫んだ。老人は丁重に返事した、「畏まりました、[貴殿の依頼は私には命令です]」。そして二人の他のサラセン人と一人のドイツ人と一緒に宮殿の門の中に消えた。

アブ・モーハメット・アル・ダビーブは、通りを警護しているばかりでなく、家々の最深部へも入って来た。帝国謀反者達を — あるいは代官がそのように名付ける者達を — 逮捕するためであった。フリードリヒ[二世]皇帝が彼を、皇帝の義理の息子である暴君に、サラセン人の護衛兵の徴募用に与えたのであって、彼はパドヴァで護衛兵のトップになっていた。アブ・モーハメットは見栄えの良い男で、作法の心得を弁えていた。彼は自分が牢獄や断頭台に連行した者達の家族の痛みを思いやり、悲しみに沈む者達に、アラビア語の詩文からの格言をブロクンなイタリア語で述べて慰めた。彼の添え名、「アル・ダビーブ」、これは医師の意味だが、たとえ若干の外科的知識や経験を有していたにせよ、最初にはまず医師らしいその作法のせいでこの名前が付けられたと私は推測している。勇気付ける手の仕草や、落ち着かせる言葉、例えば「痛くはないよ」とか「大丈夫だよ」で、このように言って、ガレノス [医師、129-200頃]の弟子達は痛みを伴う手術に取り掛かる習慣である。要するに、アブ・モーハメットは、悲劇的なことを穏やかに扱ったのであり、私の物語の当時、パドヴァでは厳格で辛辣な職務にもかかわらず、少しも厭わしい人物ではなかった。後に、この暴君が人間の体を虐待する嗜好を有するようになると、カングランデ、御身には信じられないことであろうが、アブ・モーハメットは暴君の許を去り、穏和な皇帝の許に戻った。

部屋の敷居の所で、アブ・モーハメットは自分の三人の同行者達に残るよう合図した。松明を持っているドイツ人は、反抗的眼差しの若者で、長いこと待っていなかった。彼は今日、晩禱の時刻に、ヴィチェドミニ家の宮殿までジェルマーノの同伴をしていて、ジェルマーノが彼に笑いかけて言ったのであった。「ここで別れよう。ここで私の妹ディアーナを僧侶と婚約させるのだ」。このドイツ人は大尉の妹を知っていて、一種静かな愛着を彼女に抱いていた。彼女の高い背丈と実直な目のせいであった。すると今日の正午、その側を共に騎乗して行った折の僧侶が、小さな可愛らしい娘と一緒に手を取り合っているのを見、この娘はディアーナの大きな体つきとすると小さな人形に見え、彼は不貞を嗅ぎつ

け、立腹して、燃える松明を舗石に投げ付け、それをサラセン人の一人が注意深く拾い上げ、彼はジェルマーノに僧侶の裏切りを告げに急いで去った。

このドイツ人のことを推察したアスカーニオは、アブ・モーハメットに彼を呼び戻すよう頼んだ。モーハメットは拒絶した。「彼は聞き入れないでしょう」と彼は穏やかに言った、「私の郎党の二、三人を斬り倒してしましましょう。旦那、他にどのようなご用命でしょうか。この若々しい二人を捕らえますか」。

「アストツレ、私どもを引き離そうとしています」とアンティーオベは叫んで、僧侶の両腕に庇護を求めた。祭壇で不義の誓いを敢行したこの女性は、無垢の魂を喪失すると共に、生来の勇気も喪失していた。自分の咎でむしろ勇気付けられ、夢中になった僧侶はサラセン人の前に一歩進み出て、いつの間にかサラセン人の剣を鞘から引き抜いていた。「用心なさい、少年。けがするよ」とサラセン人は上機嫌で警告した。

「いいかい、アブ・モーハメット」とアスカーニオは説明した、「この逆上者は私の幼友達で、長いこと僧侶アストツレと称していた。そなたもきっとパドヴァの路上で目にしたことがある者だ。自分の父親から僧侶の誓約を無効にされ、愛していない女と結婚した。数時間前にその女と指輪を交換したのだ。それが今、ここで目にしているように、別の女性の夫となっている」。

「災難だな」とサラセン人は穏やかに判断した。

「で、裏切られた女は」とアスカーニオは続けた、「ディアーナ・ピッツァグエラ、ジェルマーノの妹だ。彼を知っていよう。彼は信頼し、長いこと信じていた、しかし自分が欺かれ、騙されていると分かったら、血走った目になって、人を殺すぞ」。

「左様」とアブ・モーハメットは証した、「彼の母はドイツ人だ。ドイツ人は忠誠の申し子だ」。

「私の案だ、サラセン人よ。私はただ一つの逃げ道しか知らない。ひょっとしたら助かるかもしれない。この件を代官に知らせよう。エツェリーンが裁くかもしれない。その間、そなたの郎党が僧侶を本人自身の堅牢な家で見張るのだ。私は叔父の許へ急ぐ。しかしこの女性は、そなたが、アブ・モーハメットよ、クニツァ辺境伯夫人、代官の妹君の許へ連れて行け。こちらに数週間前から宮廷を開いている敬虔な親切な尼僧院長だ。この可愛い罪人の女を引き取ってくれ。娘はそなたの白い髭に預けよう」。「承知しました」とモーハメットは請け合った。

アンティーオベは僧侶にしがみついて、更に最初の時よりも情けない声で叫んだ、「私をあなたから引き離すつもりよ。アストツレ、一時も一瞬も離れないでね。さもないと私は死のう」。僧侶は剣を上げた。

暴力沙汰が嫌いなアスカーニオはサラセン人を問うように見つめた。「カゲロウの身には、抱擁させておきましょう」と彼はそれから優しい声で言った。それは、彼が哲学者であって、人生を仮象と見なしていたからにせよ、あるいは、ひょっとしたら二人を明日エツェリーンが死罪に処するかもしれない、だから愛し合う二匹の蝶には時間を恵んでやれと言いたかったからにせよ、その言葉があった。

アスカーニオはこれらの事柄が現実であることに疑念を抱かなかった。それだけにこの格言の二番目の解釈に理解があった。単に彼は軽率者であるからばかりでなく、善意な者、人間的な者としても愛し合う二人を引き離すことに躊躇した。

「アストツレ」と彼は尋ねた、「君は私を知っていよう」。

「君は私の友だった」とアストツレは答えた。

「今でもそうだ。私以上に誠実な友はいない」。

「私を彼女から離さないでくれ」と今や僧侶はとても心打つ調子で懇願したので、アスカーニオは逆らわなかった。「それじゃ一緒にいな」と彼は言った、「君達が裁かれるまで」。彼はアブ・モーハメットに囁いた。

モーハメットは僧侶に近付いて、彼から穏やかに剣を、握りから一本ずつ指を外して、奪い、自分の腰の鞘に収めた。それから彼は窓辺に寄って、自分の一团に合図した。サラセン人達は前庭に置かれていたオリンピア令夫人の駕籠を奪った。

狭く暗い路地を通して迅速な逃走が始まった。四人のサラセン人に担がれて、アンティーオペが先頭で、彼女の側に僧侶とアスカーニオがいて、その後ターバンの者達であった。アブ・モーハメットが行列の殿[しんがり]であった。

この行列は小さな広場に急行し、明るい教会の側を通り過ぎた。更に路地の暗く続く所にさしかかると、行列は別の側から対抗して来る、多くの民衆が一緒の行列と厳しく衝突してしまった。激しい喧嘩が始まった。「スポジーナのために空けろ」と群衆が叫んだ。合唱の少年達が教会から長い蠟燭を運んでいて、その揺らめく小さな炎を、少年達は手の前に置いて、守っていた。黄色の微光で、傾いた駕籠と転倒した棺が照らし出された。スポジーナ嬢は民衆の出の亡き花嫁で、墓場に運ばれるところであった。故人は騒がず、また悠然と棺に安置された。しかし集まっていた民衆は僧侶を見つけた。彼は駕籠から飛び出したアンティーオペを守って抱いていたが、民衆は僧侶が今日ディアーナ・ピッツァグエラと結婚したことを知っていた。アブ・モーハメットが事態を収束させた。更に突発事はなく、人々は宮殿に着いた。

アストツレとアンティーオペは従者達の驚愕し、狼狽した視線で迎えられた。二人はアブ・モーハメットとアスカーニオに別れの挨拶をしないまま門内に消えた。アスカーニオは自分の服にくるまって、なお数歩サラセン人の伴をした。サラセン人は自分が警護することになる館の周りを歩き、その門の数を数え、それらの壁の高さを目で測っていた。

「色々あった一日だ」とアスカーニオは言った。

「浄福な夜です」とサラセン人は満天の星空を眺めて答えた。今や我々の運命を支配するのか、支配しないのか分からない永遠の明かりがその静かな掟に従って運行し、やがて若々しい一日が、アストツレとアンティーオペの最終最期の日が、神々しい松明を振り上げることになった。

その日の朝、暴君は甥と一緒に町の塔の小さな半円アーチ越しに、下の隣接する広場を覗いていた。広場には興奮した民衆が詰めかけ、呟きながら、呻りながら、寄せては返す海の波のようであった。

昨日の駕籠と棺の衝突、そしてそのことから生じた騒擾は、閃光の如く、町中に知れ渡った。すべての者の頭が目覚めつつ夢想しながら、ただ僧侶とその結婚式を話題にした。ならず者の僧侶は天に対してその誓約を破棄しただけではない、今や地に対しても破棄して、自分の花嫁を裏切り、指輪を投げて、人生の花盛りの十五歳の少女を新しい妻にと求婚し、千切れた僧服から貪欲な猛鳥を飛び上がらせている、と。しかし人物の声望に頓着しない正義の暴君が、この犯罪者の夫妻を匿っている家を部下のサラセン人達に警備させ

ている。暴君は今日、やがて、今まさにこの高貴な二人の者達の犯罪を、一 というのは若い罪人の娘アンティーオペはカノッサ嬢であって、一 自分の机の上に引き寄せ、貞淑なディアーナの権利を回復させ、自らの貴族の劣等な範例で侮辱された有徳な人民に対して、この二人の咎人の斬首された頭部を窓から投げ寄越すことだろう、と。

暴君は、観察する視線を沸き上がる群衆に向けながら、アスカーニオから昨日の事件の報告を聞いていた。惚れた二人のことは彼の関心を引かなかった。ただ指輪が転がって行ったことが、一瞬、運命の新しい形として興味深かった。「遺憾に思うぞ」と彼は言った、「そなたが二人を昨日引き離さなかったことをな。二人を見張ることにしたのは褒めておく。ディアーナとの結婚は合法なものだ。剣で強制された、あるいは財布で買収された結婚の秘蹟は全く無効だ。剣に怯えるような、あるいは買収されるような牧師は絞首刑に値する。捕らえられたら、縛り首だ。もう一度言うが、何故未熟者僧侶と子供とを引き離さなかったのだ。なぜのぼせた男を陶酔した娘の腕から引き出さなかったのだ。そなたが奴に娘を与えたのだ。今では二人は夫婦だ」。

アスカーニオは、再びすっきりと軽快に睡眠を取った後で、微笑を隠していた。「エビキュリアンめ」と彼をエツェリオンは罰した。しかし彼は追従した。「起きてしまったことです、厳正な叔父上。叔父上がこの事件を自分の権限内のものにすれば、万事救われます。両方の当事者達に今日の九時、叔父上の裁判席へ出頭するよう通知しました」。向かい側の鐘楼が九時を告げた。「エツェリオン、御身の意向次第です。御身の固く賢明な手があれば、結び目は軽く解けましょう。愛する者は金を惜しまず、けちん坊は名誉を知りません。惚れた僧侶は、劣等な吝嗇漢に対し、我々は皆この立派なピツァグエラをそう見なしていますが、彼の望むものを投げ与えることでしょう。ジェルマーノは勿論剣を振り上げよう。しかし叔父上が剣を鞘に戻すよう命令なさるといい。彼は叔父上の部下です。歯ざしりするが、聞き入れることでしょう」。

「僧侶を」とエツェリオンは言った、「ジェルマーノの剣から守ることが正しいことか、自問してみよう。アストツレは生きることが許されるか。今、僧のサンダルを投げ棄てた後、履いていた乗馬靴も室内スリッパへと踏み潰して、僧侶の健全な歌を甲高い卑俗な流行歌としているとき、生きていていいのか。私は一 自分の権限の場合、一 移り気な者や無価値な者には露命をつながせる。しかしその運命には何もできない。アストツレがジェルマーノの剣に倒れる定めであれば、ジェルマーノに私が剣を置くように命令しようとも、ジェルマーノは斬りつけることだろう。私はこれは承知している。これは経験済みだ」。そして彼は物思いに耽った。

アスカーニオはおずおずと視線を逸らした。彼は残忍な話しを知っていた。

以前暴君はある砦を制服したことがあって、その砦を死守していた反乱者達を斬首刑に処した。一人ずつ傭兵が順番で、剣を振るって、処刑した。そのとき一人の美しい少年が死刑を受けるために、跪いていた。その面影に暴君は惹かれた。エツェリオンには自分の一族の者に思われて、その青年に出自を尋ねた。それはエツェリオンが若い頃、不義で愛した一人の女性の息子であった。彼はこの死罪人を赦した。この若者は、自身の好奇心と、息子達や縁者をかの斬首刑で失った者達のやっかみの当てこすり苛立ち、迫害され、自分の恩赦の謎が解けるまで落ち着かなかった。彼は自身の母親に剣を振るって、母親から邪悪な秘密を聞き出したと言われている。庶出の素姓が明るみに出て、彼の若い魂は毒さ

れた。彼は新たに暴君に対し、復讐を誓い、路上で彼に不意打ちをしたが、たまたま処刑のときの当の傭兵がエツェリーンの援助に駆け付け、その剣で若者は倒された。

エツェリーンはしばらく頭を右手で隠して、自分の息子の没落を考えていた。それから彼はゆっくりと頭を上げて尋ねた。「ディアーナはどうなるのだ」。

アスカーニオは両肩をすくめた。「ディアーナは星回りが良くない。彼女は二人の夫を失った。一人はブレンタ川へ、もう一人はもっと可愛い女へと失った。その上、しょうもない父親です。彼女は修道院へ入る。それ以外何があります」。

今や下の広場で一つの呟き声、一つの叱責、一つの呪詛、一つの脅しが生じた。「僧侶を殺せ」と個別の声が苛立った。しかしその声は皆の叫び声としてまとまろうとして、民衆の怒りは、奇妙な具合に、驚嘆、賛嘆の「いやはや」に移行した。「いやはや、何とも綺麗な娘だ」。暴君とアスカーニオはその窓から、登場の様を快適に眺めることができた。細身のバーバリ馬に乗ったサラセン人達が、ラバで運ばれる僧侶アストツレとその若い妻を取り巻いていた。ヴィチェドミニ家の新嫁はヴェールを被って、ラバに乗っていた。しかし民衆の千もの拳が自分の夫の僧侶に固めて向けられると、彼女は情熱的に彼の前に身を投じた。愛する身振りでヴェールが引き裂かれた。民衆の武器を奪い、投げ棄てさせたのは、彼女の顔の魅力だけではなく、その生長の若々しさでもなく、魂の作動のすべて、形となった感情、生命の息吹であった。これらが昨日は僧侶を魅了したのであったが、僧侶は今や微かな不安も見せず、花と咲く凱旋将軍として、祝われ、守られていると信じ、温かい生身の戦利品と共に入場していた。

エツェリーンは美女のこの勝利をほとんど蔑んで眺めていた。彼はその目を二番目の登場に共感しながら向けた。それは別な路地から塔の広場へ着いていた。三人の高貴な者達が、アストツレとアンティーオペに数多くの同伴者がいたように、群衆を抜け出る道を求めていた。中央に雪のように白い髪の毛の頭があった。老ピツァグエラの威厳のある出現である。彼の左手にジェルマーノがいた。ジェルマーノは、昨日自分のドイツ人が裏切りを知らせたとき、はなはだ怒ったが、しかしサラセン人によって先手を打たれ、このサラセン人が、翌日早朝、彼と父親と妹に、塔の中、代官の裁きへ出頭するよう召喚したのであった。ジェルマーノはその後、妹に僧侶の破廉恥な行為を、これについては復讐が済むまでむしろ妹には隠しておきたかったのであるが、白状せざるを得なかった。しかし彼女は取り乱さず、彼はそのことを感心していた。ディアーナは父親の右手を馬で行った。いつもと変わりはないが、ただその広いうなじは、心労のせいで昨日よりも深く落ち込んでいた。

この侮辱され、その権利回復を求める女性を一分前ならば、怒りの歓声で迎えていたであろう群衆は、アンティーオペの輝きで目がまだ眩んでいて、僧侶の裏切りを理解しつつ共犯者となっていたが、この圧迫された女性に今や同情の言葉を、「哀れな、とても哀れな女、いつも苦しんで来た女」と呟きかけて、満足していた。

今や五人が暴君の前に現れた。暴君は素っ気ない広間の中、床よりもただ二段高い階段上の椅子に面して座っていた。こちら側に両ピツァグエラ家の二人、少し脇の方にディアーナの大柄な姿、かなたに、手と手を絡ませて、僧侶とアンティーオペがいた。皆畏まっていた。一方アスカーニオは暴君の高い安楽椅子に寄りかかっている、あたかも二人の幼友達の間で、中間、中立性を保ちたいかのようであった。

「皆さん」とエツェリーンは始めた、「私は貴殿らの事件を政治事件として扱うつもりではない。政治事件の場合、不忠は反逆罪、裏切りは不敬罪となる。そうではなく、緩やかな家庭内事件として扱う。事実、ピッツァグエラ家、ヴィチェドミニ家、カノッサ家は、私同様、貴族の家柄であって、ただ崇高な皇帝陛下が陛下の諸国における代官として私を任命なさっているわけだ」。エツェリーンは至高の権力者の名を挙げながら、頭を傾げた。彼は帽子を取らなかった。彼は兜を着けないときは、いつであれ、雨風が強くても、古代の流儀で無帽であった。「それで十二の家柄が大きな家族を形成していて、私も私の女系先祖を通じてその一員である。しかし至高の世俗の職権に対する我々の中の何人かの不幸な幻惑や不埒な反逆によっていかに我々は滅んでいることか。私を信じて貰えるならば、我々は現有勢力をできるだけ温存したいものである。この意味で私はアストッレに対するピッツァグエラ家の復讐を引き留める。私はこの復讐を、その性質上、正当なものとする者であるが。仮に貴殿らが」と彼は三人のピッツァグエラ家の者達に向かって言った、「私の温情を理解できないと言うのであれば、次の一つのことだけは聞いて考えて欲しいものである。私、エツェリーノ・ダ・ロマーノが最初の咎人であり、それ故首謀者である、と。私が馬をある日、ある時刻にブレンタ川沿いに走らせないでいたら、ディアーナは身分にふさわしく結婚していたであろうし、こちらのこの男は聖務日課を口ごもっていたことであろう。私が私のドイツ人達にある日、ある時刻に視察を命じていなかったら、私のジェルマーノは僧侶を早まって駄馬で連れ去ったりせず、この僧侶は、今彼がその手を握っている女性の指から、邪悪なデーモンによって、――」。

「善良なデーモンです」と僧侶は小躍りした。

「――そのデーモンによって転がって行った結婚指輪をまた引き抜いていたことであろう。それ故、皆さん、この混乱した件のもつれを解き、収めるために協力して頂きたい。というのは貴殿らが厳格さを主張されるならば、私は真っ先に自分にも判決を下さなければならなりませんから」。

この尋常ならざる演説は、老ピッツァグエラに何の混乱ももたらさず、暴君が、「高貴な御当主、貴殿らが原告です」と彼に発すると、彼は手短かに、言葉少なに言った、「陛下、アストッレ・ヴィチェドミニは公に、全く慣習通りに私の子供ディアーナと婚約しました。しかしそれからディアーナは彼に対して過失はないのに、婚約を破棄しました。理由もなく、不法で、教会法を踏みにじるものです。この犯罪は重く、血を要求できないのであれば、陛下は血を流させたくないご意向で、重い贖罪を要求するものです」。そして彼は小売商の身振りをして、天秤に分銅を次々と置く仕草をした。

「ディアーナは過失はないのか」と暴君は繰り返した。「思うに、彼女に過失があった。彼女の前に狂った女が一人いなかったか。ディアーナは叱って、殴った。ディアーナは自分の正当な権利が侮辱されたと思う場合、短気で、無分別だからな」。

するとディアーナは頷いて、語った、「エツェリーン、それは本当です」。

「このことも」と暴君は続けた、「アストッレが心を彼女から引き離す理由となった。野蛮な女と思ったのだ」。

「御領主、それは違います」と僧侶は抗弁した。裏切られた女を新たに侮辱することになった。「私はディアーナを見ていず、殴打を受けた可愛い顔を見ていました。私は心から憐れんだ」。

暴君は両肩をすくめた。「いいか、ピッツァグエラ」と彼は微笑した、「僧侶は初めて強いワインを飲んで、その後酔って振る舞う元は行儀の良い娘に似ている。しかし我々は皆素面だ。どのようにしてこの件を取めるか検討しよう」。

ピッツァグエラは答えた、「エツェリーン、私はパドヴァに関する御身の功績故、御意に沿うよう大いに努めようと思う。しかし侮辱された家の名誉は剣を振るう以外に償えようか」。そのようにディアーナの父親は語って、腕である高貴な仕草をしたが、しかしそれはある身振り、開いた手という身振りに堕ちて、差し出されてはいないものの金を求める身振りに紛らわしく似ていた。

「アストツレ、差し出せ」と代官は二重の意味で言った、「手を差し出せ、あるいは金と財産を差し出せ」。

「御領主」と今や僧侶は率直に高貴に暴君の方を向いて言った、「御身が私を身を持ち崩した者、惑溺者と見なしますならば、立腹は致しません。その存在を予感できずに、私が否認してきた一つの強力な精神が、私に対し復讐をし、私を圧倒したからです。今でもその神は嵐のように私を狩り立てて、外套を私の頭上にまくり上げています。私が私の幸せを、
— 物乞いの言葉で、心貧しい言葉です、
— 人生のこの至高のものを生命で支払わなければならないのであれば、それを把握し、その値段は安く考えております。しかし私が生きることを許され、この女性と生きられるのであれば、私は値段を設けません」。彼は浄福に微笑した。「私の財産を取り給え、ピッツァグエラ」。

「皆さん」と暴君は言い添えた、「私はこの金遣いの荒い青年の後見をします。ピッツァグエラ、我々是一緒に協議しよう。聞かれたように、私には広大な全権があります。ヴィチェドミニ家の鉱山についてどう考えられるかな」。

尊き老人は黙っていた。しかし彼の間近に寄っている両目は二個のダイヤモンドのように煌めいた。

「その上私の真珠養殖業も取ればいい」とアストツレは叫んだ。しかし階段を降りて来たアスカーニオが彼の口を閉ざした。

「高貴なピッツァグエラよ」と今やエツェリーンは老公を試した、「鉱山を取めるがいい。貴殿の家の名誉はすべてに勝っており、金では買えないものと承知している。しかし同様に貴殿は立派なパドヴァ人であり、町の平和のために若干我慢されよう」。

老人は頑固に黙っていた。

「鉱山[Minen]を取るがいい」とエツェリーンは、言葉遊びが好きで繰り返した、「そして安産[愛Minne]を与えよ」。

「鉱山と養殖か」と老公は、難聴であるかのように、尋ねた。

「鉱山と申しておる、それで十分だ。それは何千ポンドもの所得になる。それ以上要求すれば、ピッツァグエラ、貴殿の志操に疑念が抱かれ、名誉を金で買うという醜い疑惑に身を晒すことになるう」。

吝嗇家は暴君を恐れていて、それ以上要求できなかったのもので、彼は自分の不満を呑み込み、僧侶にその手を素っ気なく差し出した。「生死の件故、文書にしよう」と彼はそれから言い、ベルトのポケットから筆記具と勘定書を取り出し、震える指で文書を起草した。

「御領主アツォリヌス御臨席の下」、そして僧侶に署名させた。その後彼は代官の前でお辞儀をして、自分は十二の家柄の一人であるが、高齢故に、僧侶の結婚式に列席しなくて

も許して欲しいと頼んだ。

ジェルマーノは自分の憤怒をかみ殺しながら、父親の側に立っていた。今や彼は自分の鉄の手袋の一方を解いた。彼に対し、暴君の示威で制止していなければ、それを彼は僧侶の顔に投げていたことであろう。

「息子よ、公の平和を乱すなよ」と今や老ピッツァグエラも警告した。「私の約束はそなたの約束でもある。聞き入れるのだ。私の呪いを受けるぞ、相続権を剥奪されるぞ」と彼は脅した。

ジェルマーノは笑った、「父上、父上はご自分の汚い取引を案じ召されよ」と軽蔑して打ち捨てた、「しかし、また貴殿も、エツェリン、パドヴァの御領主、私への妨害は許されませぬぞ。これは男の権利であり、個人の件です。私が皇帝とその代官である貴殿に対し、忠誠を拒めば、私は斬首に値します。しかしいかに貴殿が正しくとも、この僧侶殺害への妨害は受けませぬぞ。この僧侶は私の妹を虚仮にし、私を欺いた。不忠が罰されないのであれば、誰が生きていたいと思ひましょう。この世で、私と僧侶が一緒におれる場はほとんどありません。このことは彼自身が、再び正気になれば、分かることであろう」。

「ジェルマーノ」とエツェリンは命じた、「私はそなたの司令官だ。ひょっとしたら明日チューバが鳴るかもしれない。そなたはそなた自身のものではなく、帝国に属しているのだ」。

ジェルマーノは何も答えなかった。彼は手袋を結び付けた。「昔」と彼はそれから言った、「盲目の異教徒の間には、違約に対し復讐する神があったそうだ[ユーノか]。これは[キリスト教の]鐘の音と共に変わったのではあるまい。私の件はこの神に委ねよう」。素早く彼は手を挙げた。

「それがよろしい」とエツェリンは微笑した、「今晚ヴィチェドミニ家の宮殿では仮装の結婚披露宴が行われる。全く慣習通りにな。私が祝典を行い、その方らを、ジェルマーノとディアーナよ、招待する。甲冑なしだ、ジェルマーノ、短い剣でな」。

「残酷な方だ」とこの兵士は呻いた、「行こう、父上。これ以上長く我らの屈辱劇を続けたいですか」。彼は老人を連れ去った。

「それでそなた、ディアーナよ、いかが致した」とエツェリンは尋ねた。自分の椅子の前に残っているのは、ただディアーナと新婚の二人だけになっていた。「父親と兄と一緒に行かないのか」。

「御領主様のお許しを頂いて」と彼女は言った、「ヴィチェドミニ夫人と一言話したいのです」。彼女は僧侶を見過ごし、ひたとアンティーオペを見据えていた。

アストッレが握ってその手を放さないでいたこの女性は、暴君の裁判を、苦しみながらも深く動揺して聞いていた。あるときは恋するこの女性は顔を赤らめた。あるときはこの咎ある女性は蒼白になった、エツェリンの微笑と恩赦の裏に彼の本当の判決、彼女を弾劾する判決を知ったからである。あるときは処罰を免れた子供のように喜んだ。あるときは若い女主人、新しいヴィチェドミニ夫人としての最初の自覚が生じた。今やディアーナから面と向かって話しかけられ、彼女はディアーナに臆した敵意ある視線を送った。

ディアーナはまごつかなかった。「ご覧なさい、アンティーオペ」と彼女は言った、「この私の指は」、
— 彼女は指を突き出した、
— 「あなたの夫の指輪を嵌めています。この指輪をあなたは忘れてはなりません。私はそれほど迷信深くないけれど、しかし

あなたの立場であれば、私は気分が悪くなりましょう。あなたは私に対しひどい罪を犯しました。しかし私は善意に、穏やかに考えましょう。今晚あなたは慣例通りに仮装結婚披露宴を行います。私はあなたの前に現れましょう。反省し、遜[へりくだ]って、あなたは現れ、私の指から指輪を引き抜きなさい。

アンティーオペは不安の叫び声を一回発し、夫にしがみついた。それから彼の両腕の中に庇護されて、激して語った、「私が卑下しろだって、アストツレ。あなたは何と命ずるの。私の名誉はあなたの名誉です。私はもはやあなたの所有物でしかない、あなたの動悸、あなたの呼吸、あなたの魂でしかない。あなたの望むことがあれば、命ずることがあれば、その通りに」。

アストツレは、自分の妻を優しく宥めながら、ディアーナに対して語った、「妻はそうするようにするだろう。妻の遜りで心を宥めて欲しい、つまり私の遜りでそうして欲しい。今夜は私の客人となって、私の家に好意を寄せて頂きたい」。彼はエツェリーンに向かって、裁判と恩赦の件で恭しく感謝し、一礼して、彼の妻を連れて行った。しかし入口の所で、彼はもう一度ディアーナの方を向いて尋ねた。「それでどんな服で、そなたは我々の許に現れるのかな、そなただと分かり、敬意を我々が表せられる服とは」。

ディアーナは軽蔑して微笑した。再び彼女はアンティーオペの方を向いた。「私が参上するときの服は、私がそう自称している者、実際そうである者の服です、未通女、処女です」と彼女は誇り高く言った。それから彼女は繰り返した、「アンティーオペ、忘れなさんな。反省して、遜るのよ」。

「ディアーナ、裏表なくそう言っているのか。何か企んでいるのではないだろうな」と暴君は、今やピッツァグエラ嬢が一人残っていたとき、疑念を言葉にした。

「何もありません」と彼女は答えた。誓うまでもないとしていた。

「ディアーナ、そなたの行く末は」と彼は尋ねた。

「エツェリーン」と彼女は辛辣に答えた、「御身の裁判官席を前に、私の父親は子供の名誉と復讐を商って、二、三の金属鉞を得ました。私は陽光を浴びるに値しない。独房が似合いです」。そして彼女は広間を去った。

「大岡裁きの叔父上」とアスカーニオは歓声を上げた、「御身はパドヴァで最も浄福な二人を縁組ませ、危険な話しから魅力的メルヘンを紡ぎ出した。いつか私は、大層な老人となったら、孫の男の子や女の子に炉辺で語って喜ばせることにしよう」。

「能天気な甥だ」と暴君は嘲った。彼は窓辺に寄って、広場を見下ろした。広場では群衆がまだ熱く好奇心を起こして立ち止まっていた。エツェリーンは、自分の前に召喚された者達を裏門から帰すよう命令していた。

「パドヴァの諸君」と彼は今や威力ある声で語り、数千人が一つの荒野のように沈黙した。「私は諍いを調査した。これは複雑で、咎はそれぞれにあった。私は赦免した。帝国の陛下が不敬を受けない場合には、私はいつでも穏便に済ませている。今晚アストツレ・ヴィチェドミニとアンティーオペ・カノッサが仮装の結婚披露宴を行う。私、エツェリーンが祝典を行い、諸君皆を招待する。堪能するがいい。私がホストだ。居酒屋と路地は諸君のものだ。しかしヴィチェドミニ家の宮殿には誰も足を踏み入れてはならんし、危険なことをしてもならん、さもないと、私の手にかかる。 — それでは私の意志をよしとする者は、誰もが自分の家へ静かに帰るがいい」。

定かならぬ呟き声が上がった。それはさらさら流れて散った。

「皆がよしとしてくれる」とアスカーニオは冗談を言った。

ダンテは一息吐いた。それから速やかに述べ続け、終えた。

暴君はその裁判を行った後、正午に自分が建造した砦の一つに馬で向かった。彼はパドヴァに間に合って戻り、ディアーナの前で遜るアンティーオペを見たいと切望していた。

しかしその予定、意志に反して、町から数マイル離れたこの砦で足止めされることになった。こちらへ一人の埃まみれになったサラセン人が彼を求めて馬で騎行してきて、彼に皇帝手ずからの書状を渡した。これは折り返し返事を求めていた。この件は重大であった。エツェリーンは最近、フェラーラ地方の皇帝の砦を夜襲の攻撃で占拠し、皇帝のこの疑惑の砦代官を拘束していた。この砦の司令官、一人のシチリア人は彼の慧眼には裏切り者と映じていたからである。するとホーエンシュタウフェン家の皇帝は、自分の勢力圏へのこの賢明ではあるが、大胆な介入について釈明を求めてきたのであった。左手に頭を抱えて働かせながら、エツェリーンは右手を羊皮紙に滑らせ、彼の鉄筆を最初の文から次の文、更に次の文へと向けて行った。徹底的に彼は義父の陛下と、間近の、あるいは少なくとも腹案の遠征の可能性や目的について問答を行った。かくて彼の時間、時間感覚が消えた。ようやく彼がまた馬上の人となったとき、自分には馴染みの星座の推移から、一星々は全く明瞭に煌めいていた、一自分は真夜中以前にはパドヴァにほとんど着けないだろうと分かった。自分のお供をはるか後にして、幽霊のように素早く彼は夜の平原を飛んで行った。しかし彼は自分の道を選び、慎重に少し深い濠を迂回して騎行した。別の日であれば、大胆な騎兵である彼は楽々と越えていたであろう濠であった。彼は自分の旅を脅かし、馬を転落させる運命を避けた。再び彼は疾駆する馬で距離を呑み込んだが、しかしパドヴァの明かりはまだ見えなかった。

パドヴァのヴィチェドミニ家の広範な町の祝典の前、黄昏の速やかに暗がりになる中、酩酊した人々が集まっていた。放恣な人々がさほど大きくない広場で交互に茶番を演じていた。人混みの中、野蛮で怒りっぽい悦楽、バッカスの酔いが醸成され、これに大学の放縦な若者達が嘲笑や機知の要素を加味していた。

今や引きずるようなカンティレーネ[抒情的旋律]が聞こえて来た。我々の農民がよく歌うような一種の連祷である。老若の百姓達の行列で、ヴィチェドミニ家所有の数多い村の一つからの者達であった。この貧しい民は、僻遠の地の出身で、僧侶の還俗については何も知らず、ただおぼろに相続人の結婚の概略を聞いて、日の出前に普通の婚礼の贈り物を持って出発し、国道の埃の中を長く巡礼して来て、今や目的地に着いたのであった。その民は立ち止まり、一緒にうずくまり、ゆっくりと人波の広場を前進し、こちらでは一人の巻き毛の少年が、ほとんどまだ子供であるが、黄金色の蜜蜂の巣を持ち、あちらでは一人の内気な、誇り高い娘が、メエメエ鳴く、リボンで飾られた子羊を大事に腕に抱えていた。皆が新しい領主の顔を拝みたいと切望していた。

さて彼らは次第に門のアーチの中に消えた。門の左右では鉄の輪の中、松明が点火され燃え上がっており、最後の陽光と明るさを競っていた。門道ではアスカーニオが、祭典の差配者として、普段はとても親切なのだが、苛立った声で叫んでいた。

刻々と民衆の無礼講欲が増して、ようやく高貴な仮装の者達が到着したとき、この人々は突き飛ばされ、従者の松明は奪われ、舗石上で踏まれ、高貴な女達は男性の同伴者から引き離され、淫らなからかいを受け、剣の仕返しもない。普通の晩であれば、破廉恥漢は早速この剣の処罰を受けていたことであろうが。

同様に宮殿の門近くで、ディアーナ女神の服の背の高い女が、最も低俗な位階の僧侶や生徒達のますます密になる一団と戦っていた。一人の痩せた人間が自分の神話学的知識を誇っていた。「おまえはディアーナ女神ではない」。彼は鼻声で色目を使った。「おまえは別な女神だ。わしは知っているぞ。ここに小鳩[ヴィーナス、アフロディーテを象徴]がいる」。そして彼は女神の額の銀製の三日月[ディアーナ、アルテミスを象徴]を指さした。しかしこの女神はアフロディーテのように追従されず、アルテミス女神のように怒った、「豚ども、離れなさい」と彼女は叱った。「私は純潔な女神です。僧侶は大嫌い」。「クー、クー」とこのホップの支柱[のっぽ]は、鳩の真似をして、骨張った手で触ったが、即刻鋭い叫び声を発した。この惨めな男は情けない声で手を挙げ、自分の傷を見せた。その手は貫通して刺され、血が噴き出していった。怒った娘が背後の箆に手を伸ばし、一兄の狩りの箆を持ち出して来ており、一鋭く研いだ矢で厭わしい手を罰したのであった。

すでにこの速やかな場面も、別な同様に残酷な、しかし血を見ない場面と交代していた。すべての考え得る矛盾や際立つ不協和音をかき混ぜる音楽隊が、地獄の劫罰者達の狼藉の喧嘩に似て、轟して恍惚となった群衆の中を切り裂いて行った。最も低級で、最も劣等な民、一巾着切り、ポン引き、売春婦、乞食、一これらが、奇怪なカップルの前後で吹き、かきむしり、法螺を吹き、口笛を吹き、キャーキャー言い、馬鹿笑いをし、ぶつくさ言った。崩れた美しさの大柄の野蛮な女が、千切れた僧服の酔った僧侶と腕を組んで歩いていた。この僧侶は修道会士ゼラーピオンで、アストッレの例で唆され、夜僧房を抜け出して、一週間前から路地の泥土に転がっているのであった。暗い宮殿の壁から突き出ている明かりを受けた出窓の前で、集団が立ち止まり、先の女が甲高い声で、公衆のお触れ役の身振りをして言った。「皆さん、お触れです。しばらくの間、僧侶アストッレがその妻アンティーオペの側でお眠りなさいます」。この告知は弾けた哄笑を伴った。

すると出窓の細いアーチ形の窓からゴッチオラの鈴の鳴る帽子が頷き、路地にメランコリックな顔を見せた。

「叔母さんよ、静かにしてくれ」と道化師は泣きそうに下の広場へ嘆いた。「拙者は上品な育ちで聞いておれない、恥ずかしくてたまらない」。

「道化師のおっさんよ」と恥知らずの女が答えた、「怒りなさんな。高貴な人達がしなっしやることを、うちらが名前をつけてやっとうと。うちらが薬局の瓶にラベルを貼とうと」。

「地獄に墮ちようとも」とゼラーピオンが凱歌を上げた、「やったろう。真夜中まで我が同輩の結婚式をバドヴァの広場中ではやし立て、盛大に盛り上げよう。進め、行軍、ホップ、ステップ」。彼はサンダル履きの脚を剥き出しにして、だらしない汚れた僧服の襠褌の中から持ち上げた。

この群衆から荒々しく拍手された茶番は夜の館の急な窓際で消えた。館の窓や部屋は大部分が内側の中庭に面していた。

ある静かな、守られた小部屋で、アンティーオペは、侍女ゾッテと他の侍女の助けを借

りて、気付けをし、化粧していた。一方アストツレは客人達の途切れることのない訪問を階段の上で待ち受けていた。アンティーオペは銀製の鏡に映る自らの不安な視線を覗いていた。この鏡は侍女見習が腕を厚かましく剥き出しにして、羨望の表情で支えていた。

「ゾッテ」と若い妻は、彼女の髪を編んでいる侍女に囁いた、「あなたは私に似ているし、私と同じ背格好だ。私と衣裳を取り替えよう。私のことを思ってくれているのだったら。あなたが行って、あの女の指から指輪を抜いて来なさい。反省して、遜ってね。両腕を十字に交差させ、ピッツァグエラ嬢の前でお辞儀するの、最底辺の女奴隷のようにね。跪いて、床に転がりなさい。全く身を捨てて。ただ指輪は取って来るの。報酬は存分にするわ」。そしてゾッテが躊躇うのを見ると、「私の着ている高価なものすべてを取って、持っていていいから」とこの女主人は頼んだ。そして虚栄心の強いゾッテはこの誘惑に抗えなかった。

ホストの義務を一瞬中断して、自分の新しい妻の許に来たアストツレは、小部屋で衣裳を交換している二人を見つけた。彼は察した。「駄目だ、アンティーオペ」と彼は禁じた。「そのようにして切り抜けてはいけない。約束は守らなければならない。そなたの愛故に必要なことだ。そなたに命じておく」。彼はこの厳しい言葉を愛しいうなじに接吻しながら愛撫の言葉に変えたが、アスカーニオが急いでやって来て、彼を連れ去った。アスカーニオが彼に伝えた。彼の百姓達がすぐに彼に贈り物を渡して、夜の涼しいうちにまた家路に就きたいと望んでいる、と。アンティーオペが、夫に接吻を返そうと振り向くと、彼女は空に接吻することになった。

今や彼女は素早く衣裳を整えた。軽率なゾッテでさえも、鏡に映る顔の青白さを見て驚いた。両目の中の不安と、食いしばった歯の微光しか生氣はなかった。ディアーナの打擲の後の赤い条痕が白い額に著く残っていた。

化粧が終わると、アストツレの妻は動悸しながら、こめかみを震わせて、起き上がり、安全な小部屋を離れ、ディアーナを探しつつ、広間をって行った。彼女は臆した勇気に駆られていた。彼女は指輪を取り返して、歓呼して夫の許に駆け戻りたかった。夫には自分の贖罪の姿を見せたくなかった。

すぐに彼女は仮装の中から狩猟の大柄な女神を見分け、敵の女性と認知して、震えながら、怒りの言葉を口ごもりつつ、整然と歩いて行くこの女性に従った。ディアーナは中央広間を後にして、恵み深く、弱い照明の、ただ半分ほどの高さの隣の小部屋の一つに姿を消した。女神は皆の前での遜りではなく、衷心からの謙譲を要求しているように見えた。

今や薄暗い中、アンティーオペはディアーナの前で礼をした。「指輪をください」と彼女は絞り出し、その力強い指に触れた。

「遜って、反省していますか」とディアーナが尋ねた。

「他にできますか、姫君」と心安まらない女はうわごとを言った。「でもあなたは私をもてあそんでいて、残酷な方。指を逸らしているわ、今度は曲げている」。

アンティーオペは想像していたのか。ディアーナは本当にこの遊びをしていたのか。曲げた指とは何と些細なことか。カングランデ、御身は私のことを不当だと叱った。私はそのどちらとも決めない。

要するに、ヴィチェドミニ夫人はしなやかな体を上げて、叫んだ。燃える目はピッツァグエラ嬢の厳しい目に向けられた。「一人の妻をからかうの、生娘さん」。それから彼女はまた身を屈めて、両手で指から指輪を引き抜こうとした。一 そのとき一つの閃光に貫かれた。左手はアンティーオペに任せて、右手で処罰するディアーナが一本の矢を箠から抜いて、アンティーオペを殺害した。アンティーオペはまず左手に崩れ、それから右手に崩れ、回転し、首に矢を受けて、脇を向いて横たわっていた。

自分の田舎の客人達が去った後、僧侶は急いで戻り、自分の妻を愛しく探していると、昇天した女性を見つけた。叫び声は詰まったまま、彼はこの女性の側に身を投げ、その首から矢を引き抜いた。その後、流血が続いた。アストツレは気を失った。

彼が正気を取り戻して、目覚めたとき、彼の前にジェルマーノが腕を組んで、立っていた。「君が殺害したのか」と僧侶は尋ねた。

「私は女性を殺さない」と相手は悲しげに答えた、「これは私の妹がしたことだ、自分の正義を求めたのだ」。

アストツレは矢を探して、それを見つけた。一気に飛び上がって、血のついた先端のこの長い矢を剣のように使って、盲滅法、彼は幼友達に突きかかった。兵士はこの、髪を逆立て、手に矢を持った、黒服の色褪せた幽霊に少し慄然とした。

彼は一步退いた。短い剣を抜きながら、矢を、今日この甲冑を脱いだ男が携帯しているこの剣でしっかり受け止めて、彼は同情して言った。「アストツレ、修道院へ戻ることだ。君は還俗すべきではなかった」。

そのとき彼は突然、暴君に気付いた。暴君は長いこと待たれていて、祭典の一同が門まで駆け付け、出迎えたのであるが、その一同を従えて、丁度彼の向かい側にドアの所から現れた。

エツェリーンは右手を差し出し、和平を指示していた。そしてジェルマーノは恭しく自分の武器を将軍の前で下ろした。この瞬間を狂乱の僧侶は利用して、エツェリーンの方を向いているジェルマーノの胸に矢を突き立てた。しかし自分も致命傷を負うことになった。素早くまた振り上げられた兵士ジェルマーノの剣を受けたのである。

ジェルマーノは黙って崩れ落ちた。僧侶は、アスカーニオに支えられて、彼女の側に、口と口を合わせて、横になった。

婚礼の客人達が結婚した二人を取り巻いた。エツェリーンは死んだ二人を眺めた。その後彼は跪いて、まずアンティーオペの両目を、その後アストツレの両目を閉ざした。静けさの中、開いた窓から場違いな音が響いた。暗闇から次のような言葉が聞こえた、「今や僧侶アストツレが妻アンティーオペの側にお眠りになります」。そして遠くの哄笑があった。

ダンテは起き上がった。「私は暖炉の許での座席代を支払った」と彼は言った、「では微睡みの幸せを求めることにしよう。平和を司る主が我ら皆を守り給わんことを」。彼は向き直り、小姓が開けてくれた小門を通して進んだ。皆の目が、松明で明るい階段をゆっくりと上がって行く彼の後ろ姿を追った。

ある少年の悩み

国王[1638-1715]はマントノン侯爵夫人[1635-1719]の部屋に入った、そして新鮮な空気を欲し、天気には無頓着であったが、早速その君主らしい流儀で窓を開けた。窓から湿った秋の風がそれと著く侵入して来た。華奢な夫人は寒けがして、三、四枚のスカートをしっかり合わせた。

しばらく前から、ルイ十四世は晩年の妻の許への日々の訪問時間を延ばし始めていて、しばしばすでに早すぎる夕刻に現れ、夕食が準備されるまで滞在した。それから大臣達との仕事をしなくて、自分の分別ある恋人、注意深く黙って肘掛け椅子に座っているこの夫人の側にいるとき、そして天候が狩猟にも散歩にもふさわしくなく、コンサートでは、大抵あるいはいつも宗教的音楽が飽きるほどに反復されているとき、どのようにしてこの国王は四つの鐘の時間、愉しく気散じをして過ごせるものか、悩ましい問題であった。モリエールの大胆なミュージック、ラヴァリエール夫人[1644-1710]の優しさと気絶状態、モンテスパン夫人[1640-1707]の大胆な挙措や独創的な機知、その他諸々も、その時節があって、今や徹底的に過ぎ去り、色褪せた壁紙のように枯れていた。国王は中庸を尊び、ほとんど自足する人であって、常に勤勉であり、やはり制限と薄明かりを愛好するこの女性の許に至ることになった。

世話好きで、口が上手く、余人をもって代え難く、その年齢にもかかわらず、全く優美で、このアグリッパ・ドービニエ[1552-1630]の孫娘は、教訓的女家庭教師風な面影を有していた。自分の良心を権威と協議する傾向であって、彼女は自分のサン＝シールの学校では高貴な娘達を入学させてこの傾向を存分に展開させていたが、しかし支配者の前ではこの傾向はそのより高度な英知に対し謙虚におもねっていた。それでルイ王が黙ると、彼女も言うことはなくなっていた。今日は特にその良い例となっていて、国王の孫[Philipp von Anjou]の嫁、サヴォイアの若いレディー[Marie Louise Gabrielle von Savoyen]、この世で最も魅力的な女性がここに何らかの理由でいないのであった。彼女は子供っぽい仕草やせわしい甘言を言って、どこにでも生氣と笑いをもたらす女性であった。

こうした状況で国王の足音を軽い憂慮を交えて聞いていたマントノン侯爵夫人は今や安堵した。というのは自分には心底馴染みの国王の顔の熱心な、人知れず陽気な表情からこう読み取っていたからである。ルイ王自身、何か話すこと、それも何か楽しいことがある、と。

国王は窓を閉じて、安楽椅子に腰を下ろした。「マダム」と彼は言った、「今日の正午、ラシェーズ神父はその後継者テリエ神父[1643-1719、1709年後継者、国王の死後追放]を連れて来た」。

ラシェーズ神父は長年、国王の告解の師であった。国王はこの老イエズス会士が聾となり、全く衰弱しているのに手放したくなく、いわばすり切れるまで使っていた。というのは国王はこの神父に慣れ親しんでいたからであり、国王は 一 信じがたいことであるが、
一 ある定かならぬ、しかし現実の恐れから、自分の告解師を他の教団から選んではならないと信じていて、国王はともかくこの尊敬できる廃残の男をイエズス会のもっと若い勤勉な同志よりも優遇していた。しかし物事にはすべて限界がある。ラシェーズ神父は明らかに墓場に向かってよろめいており、ルイ国王は聖職者の教父に対する殺害者となりた

くはなかった。

「マダム」と国王は続けた、「私の新しい告解師は見目麗しくない。一種の狼顔で、斜視だ。まさに反撥を受ける顔だ。しかし、自分と他人に対して厳格な男、つまり良心を任せられる男として推薦された。これが肝心な点だ」。

「樋は外見がひどいものほど、そこを流れる天上的水は得がたいものです」と侯爵夫人は教訓風に述べた。彼女はイエズス会士を好いていなかった[しかしラシェーズ神父は国王との彼女の結婚のミサを行っている]。彼らはスカロン未亡人[マントノン侯爵夫人]の陛下との婚姻の絆に反対し、彼らの広大な倫理に基づいて、結婚の秘蹟をこの国王の場合には必要ないと説明したのであった。それで夫人はこの教父達を静かに締め上げることができるときには、彼らに時々悪さをした。今回彼女は黙って、その黒っぽい、アーモンド状の、穏やかに憂いのある目を夫の口許に謙虚に注意深く向けていた。

国王は足を組んでいた。彼の靴の締め金のダイヤモンドの光りを眺めながら、軽く言った、「あのファゴン、我慢ならん。何でも仕出かす者だ」[Guy-Crescent Fagon 1638-1718]。

ファゴンは国王の高齢の侍医で、侯爵夫人の保護を受けていた。

両人とも毎日国王の社交の中で暮らしていて、国王が先に亡くなった場合に備えて、逃げ場を選んでいて、夫人はサン＝シールで、彼は植物園であって、支配者の死後、各自あちこちに隠棲し、埋葬されることにしていた。

「ファゴンは国王に果てしなく帰依しています」と侯爵夫人は言った。

「確かにそうかもしれん。しかし勝手なことをするのも事実だ」と国王は答えて、軽く、半ば滑稽に額に皺を寄せた。

「何があったのです」。

国王は語り、すぐに話し終えた。自分は今日の引見の際、新しい告解師に尋ねた。テリエ家は、ル・テリエ家、宰相の家系と親戚なのか、と。謙虚な神父はこれを素早く否認して、率直に下部ノルマンディーの百姓の息子だと知らせた。ファゴンは遠からぬ窓の腰壁の所に立っていて、顎を竹のステッキに置いて支えとしていた。そこからこのイエズス会士の礼をした背中越しに、声を低めて、しかしはっきりとこう囁いたのだ、「屑の者が」と。「私はファゴンに指を挙げた」と国王は言った、「そして彼を威嚇した」。

侯爵夫人は不審に思った、「この正直な否認の件でファゴンが神父を叱ったとは思えません。別な理由があったのでしょうか」と彼女は分別して言った。

「いずれにせよ、マダム、それは不作法なこととしか言いようはない。善良なラシェーズ神父は、最後は聾になってしまっていて、勿論それは耳にしていない。しかし私の耳ははっきりと、一音節ごとにこう聞いた、『卑しい者が』とファゴンは神父に発した。そしてこの虐待を受けた者はすくんだ」。

侯爵夫人はこの発言の異同から、ファゴンはもっと粗野な言葉を使用したと推定した。国王の口許にもそれがびくついていた。国王は若い時から掟としていることがあって、そもそも生来その傾向であって、それから死ぬまで守ったのであるが、決して、話しとしても卑俗な罵りの言葉、要するに国王らしくない言葉は口にしないのであった。

高い部屋は黄昏れた。従者が馴染みの二本の腕木燭台をテーブルに置き、後ろ向きに歩んで引き下がったとき、こっそりと入室して待機していた者が出現した。背筋の傾いた、湾曲した、奇妙な曲がりの小さな老人、肉の落ちた両手を突き出した顎の下、金の握

りの長い竹のステッキの上に置いて、上品な頭を傾げ、霊のような青い目の白い顔であった。ファゴンであった。

「『ならず者め、与太者め』と短く言ったのです。陛下、ただ本当のことを話したのです」と今や彼の弱々しい、興奮して震える声が聞こえた。ファゴンは国王の前で恭しくお辞儀をし、侯爵夫人に優しく丁寧にそうした。「私が陛下の御前で一人の聖職者にそのように申しましたのは、私がこの卑劣漢に対して激昂した青い青年のままであったか、あるいは真実を言って良い然るべき老人になっていたかなのです。この神父の行った芝居に私が激したのは、単にこの頑丈ないかつい阿呆がその狼の鼻面を陛下の前でへいこら背を曲げて、陛下の気さくなご下問に対して、増長した自己卑下を披露して、倦むことなく自分の無価値を宣伝したからと思われませんか。『陛下は何と思されるのです』」とファゴンは神父を真似た、とんでもありません。私は卑俗な男の息子です。下部ノルマンディーの百姓のです、全く卑俗な男の、...』、すでに自分の父親についてのこの無価値なお喋り、この平伏した、偽善的な、徹頭徹尾、偽の謙譲、この徹底的贗造は全面的にならず者風と呼ばれるに値します。しかし侯爵夫人は正鵠を射ています。私が復讐したのは、更に何か他のこと、嫌悪すべきこと、悪魔的なことです。ただ言葉で言うしかありませんが、一つの不埒行為、一つの犯罪です。この奸計の狼を思いがけず目の当たりにして、それがまたまざまざと私の眼前に浮かんで来て、私の少ない血の残滓が沸騰し始めました。と申しますのは、陛下、この悪漢は一人の高貴な少年を殺したからです」。

「頼む、ファゴン」と国王は言った、「何というお伽噺だ」。

「それでは彼はその少年を大地の下に運んだと申しましょう」と侍医は嘲笑的に自分の告発を和らげた。

「どの少年だ」とルイ王は簡略を好む具体的やり方で尋ねた。

「若いブーフレール、元帥の最初の結婚のときの息子です」とファゴンは悲しげに答えた[元帥はLouis-François, duc de Boufflers, 1644-1711、本編の妻は虚構、現実の妻は將軍より長命]。

「ジュリアン・ブーフレールか、この者が亡くなったのは、私の間違いでなければ」と国王は思い出した。彼の記憶の間違いは稀であった、「十七のときで、...イエズス会学校で脳炎だった。勉強が過ぎて、この哀れな子供はこの病気になっただけだ。それでテリエ神父はその当時、そこの校長であったはずで、勿論、はなはだ比喩的に言って」と国王は嘲笑した。「この才能のない、しかし勉強には晩成のこの少年を墓まで運んだわけだ。少年はただ無理をしたのだな、私には父親が、元帥自らがそう語っていた」。ルイ王は両肩をすくめた。彼はもっと面白いことを期待していた。

「才能のない少年、...」と医師は物思いに耽って繰り返した。

「いや、ファゴン」と国王は答えた、「見るからに才能がなかった。そしてその上内気で小心、娘にも見られないほどであった。マルリー宮でのある日のことで、元帥が私にこの長男を紹介した。私がこの長男に関し、その司令官職の期待権を父親に認めたのだ。この着飾った、発育の良い青年は、その唇にはすでに最初の和毛が生えていたが、動揺していて、私に衷心から感謝しようとしたが、しかし惨めにどもって、痛々しく赤面した。そして私はただ青年を落ち着かせようと、あるいは少なくとも放っておこうと思って、ただ『結構』とだけ言って、背を向けてしまったが、ただ父親が期待していたよりも早かった

かもしれない」。

「私もかの晩のことは覚えています」と侯爵夫人が語った。「この少年の亡くなった母親が私の友達でした。私はこの少年をこの失敗の後、私の許に引き寄せました。彼は静かに、悲しげに、しかし感謝して、愛想良く振る舞い、少なくとも外見上は、この受けた屈辱のことをさほど感じさせなかった。彼はそれどころか、勇気を奮って話そうとし、日常のこと、通常のことを、愛想の良い声の調子で話し、そして私と親しくしているとやっかみを買うと言いました。この少年にとってはひどい一日でした。かのマルリー宮での日です。これは宮廷ではルイという名でない者は皆、自分の綽名を貰わなければならないもので」（繊細な侯爵夫人は、自分にはまさに正反対の、正直で恐ろしい、プファルツ生まれの女性、オルレアン公の皇太后が自分にとてもたちの悪い綽名を与えていたことを承知していた）、「生涯を毒するような、それを使用することはサン＝シールの私の寄宿生の娘達には厳格に禁ずるようなかの危険な綽名がこの謙虚な少年のために編み出され、それが口から口に伝わって、さほど悪意なしに、無邪気な若々しい唇からさえも囁かれて、数年後にはこの可愛い青年が拒絶しようもなくなったものです」。

「どんな綽名です」とファゴンは好奇心を起こして尋ねた。

「可愛い白痴、...高慢な対の眉毛が寄せられるのを見たとき、この少年に誰が綽名を付けたか分かりました」。

「ロザーンか」[Antonin Nompar de Caumont,1633-1723]と国王は察した。

「サン・シモンです」[duc de Saint-Simon,1675-1755]と侯爵夫人は訂正した、「あの人は私どもの宮廷で、皆を観察していて立ち聞きする耳、覗き見する目です」。 — 国王は陰気な顔になった、 — 「それに熟練の手で、この手は夜間に門をしたドアの背後で私ども皆について、紙に夢中になって戯画を描くのです。この高貴な公爵は、陛下、遠慮なく、この無垢な少年をその残酷な言葉の一つを用いて描いたのです。それは彼の嫌いなこの罪のない女の私が、この少年に一時目をかけ、親切な言葉をかけたがためです」。このように穏やかな女性は舌を回転させ、額に皺を寄せることもなく、自分の声の諧調を保ったまま、国王を刺激した。

「その美しい退屈男は」とファゴンはゆっくりと繰り返した、「悪くない。しかしこの公爵が、彼は劣等な特性の他に、若干の立派な特性を有しており、この少年と知り合っていたならば、私はこの少年と知り合いになって、この少年は忘れがたい存在となっているが、神掛けて、辛辣なサン・シモンも後悔していたことだろう。そして彼が私同様に、その少年の最期に居合わせていたら、そしてこの少年が熱病の幻覚の中で、自分の国王の名前を唇にして、敵の炎の中へ突進して行く様を見ていたら、我らの時代の秘かな閻魔様[サン・シモン]も — 伝説が本当なのであれば、誰もその書斎での彼の姿を見たことがないのだから、 — この少年を称賛して、彼のために一粒の涙を流していたことだろう」。

「サン・シモンはやめてくれ、頼む、ファゴン」と国王は両眉を引き寄せて言った。「自分には本当と見えることを彼は描けばいい。私に人々の書き物机の中まで窺えと申すのか。偉大な歴史もその鉄筆を握り、私のことを私の時代や本性の制限の中で寛大に判断してくれよう。彼のことはもう良い。しかしこの若いブーフルールについて承知している諸々のことすべてを語ってくれ。彼は健気な若者であったかもしれない。腰を下ろして、語ってくれ」。彼は親しく一つの椅子を示して、自分の椅子にもたれかかった。

「立派に、快適に、悠然と語ってください、ファゴン」と侯爵夫人は自分の置き時計の飾りの付いた指針を見ながら頼んだ。指針は不思議に早く進んだ。

「陛下、畏まりました」とファゴンは言った、「そして臣下としてお願いがあります。私は今日テリエ神父を陛下の御前で勝手に虐めました。経験的に承知していますが、私は一度この手のことをしたら、同じ日に容易に再発すると知っています。サブリエール夫人が、善良な、一 いや、やはり善良でない、一 ラフォンテーヌ、彼女の言う寓話の樹をその根を張った劣等な大地から掘り出して、再び立派な社交の場に移植したとき、この寓話作家は、今一度上品の人々の許で暮らすことに同意しましたが、しかし条件を付けました。毎晩最低限三回の自由[勝手]を一 彼が命名する自由を、一 自らに許して欲しいというものでした。同じような具合に、違いはありますが、私が話しを語る場合、三回の自由をお願いしたいのです、...」。

「それを許そう」と国王は結論付けた。

三つの顔が近寄った。医師の意義ある頭、国王のオリンピア的巻き毛の頭、その妻の上品な横顔があった、この横顔は高い額で、鼻や口、軽く描かれた二重顎という魅力的ラインを有していた。

「陛下がまだ詩人達の中で最大の詩人を有しておられたかの日々」と侍医は始めた、「そしてこの詩人は、すでに死神が彼の病んだ胸を狙っていたとき、この死神を舞台上で模すことに打ち興じて、傑作『気で病む男』がここベルサイユの陛下の御前でも上演されました。私は、普段ホメロスやヴェルギリウスの読書に費やす意義ある時間や、満天の星空の下での古代詩文の波動をば、舞台を見て過ごす現在のまばゆいランプや歪んだ諸々の顔よりも、鼻根にしておりますが、しかし無視することはできなかつたものです。私の職が嘲笑されておりますし、ひょっとしたら私自身や私の杖が」、一 彼はその杖を持ち上げた、彼は座っているながら、その杖を支えにして話し続けていた、一 「模写されているかもしれないのです。私のことではなかつた。しかしたとえモリエールが私のことをその茶番の一つで永遠化していても、モリエールに実際立腹することはできなかつたでしょう。彼は自らの最も痛々しい感情を滑稽に観察して具体化しています。このモリエールの晩年の諸作品を越えるものは何もありません。これは至高の喜劇でして、これは勿論あべこべのものばかりでなく、残忍に喜んで、極めて人間的なものまで嘲笑的に見ており、それで笑いが生まれ始めます。例えば、父親が自分の子供に対し何かうぬぼれを感じることほど、何か長所を得意がることほど、また自分自身の肉、血筋の弱点に盲目であるということほど、自然なものがありましようか。これは勿論滑稽なことで、嘲笑を要求します。それで想像の病気でも、阿呆なジアフォワリュスは自分のもっと阿呆な息子トーマのことを、完全な愚人ですが、称えています。しかし陛下はその箇所をご存じでしょう」。

「ファゴン、耳を愉しませてくれ、それを朗読してくれ」と国王は言った。国王は家族の不幸や、重大な公の事故以来人生を真剣に考えていて、喜劇的ミューズを抑制する習慣になっていた。しかし国王の笑筋は思わず、自分がかつて周りにいるのを好み、その仮面を見るのを楽しみにして良き若者を思い出して震えた。

「それは私が父親だからではない」とファゴンは医師ジアフォワリュスを真似た。彼は奇妙なことにその役を暗記していた、「しかし私は、この息子に満足できる理由があると言って良いだろう。事実息子を見る者皆が息子のことを偽りのない青年と称えている。息

子はとても利発な想像力があるわけでもなく、何人かに見られるかの情熱もない。子供のときから、息子は世に言う利発な者とか腕白ではなかった。息子はいつも穏やかで、諍いを好まず、おとなしかつた。息子は一言も話さず、所謂餓鬼の遊びをしなかった。息子に読み方を教えるのは難儀であった。九歳になってもまだアルファベットを知らなかった。よろしい、と私は自分に語った。晩成の木が最良の果実をもたらす。砂に彫るより、大理石に彫るのが難しい、と...そんな具合に続きます。このゆっくり滴る嘲りは、舞台上、この称賛された青年の言いようもなく単純な顔を見ると、徹底した嘲笑に変わり、観客の表情の中で、抗い難い嘲笑へと変わります。この観客の中に、私の目は一人の感動的美人、ブロンド髪の女性を見つけ、そのゆっくりと交替する簡素な顔の表情を迫りました。最初は学習の困難な、しかし勤勉な子供について正しく称賛される際の喜びの表情です。この青年が舞台でまことに不利な具合に見えようとも喜んでいます。それから悲しい幻滅の別の表情です。この観客の女性は、良くは分からないまま、こう自覚するのです。素朴な言葉を真面目に使っているように見えるこの詩人は、本来単に、父親役の自己幻惑に対し血の出るような嘲笑を放っているのだ、と。勿論モリエールは、大変立派な嘲笑家です、すべては等身大に、具体的に描かれていて、彼に立腹することはできません。長いことそして懸命に抑制されていて、深く痛みを伴った涙がようやくこの憔悴した女性の優しい頬に流れ落ちます。そして私は彼女は母親なのであり、才能のない息子を有していると気付いたのです。このことは自分がこの目で観察したことから数学的に確かなものと思われました。

これはブーフレール元帥の最初の婦人でした。

「あなたが名を呼ばなくても、ファゴン、あなたの描写から愛しいブロンドのあの人と分かりましたよ」と侯爵夫人は言った。「彼女は無垢と簡素な心の稀なる女性でした。何の邪心も偽りもなく、そもそも策謀や嘘の概念のない女性でした」。

二人の女性の友情、侯爵夫人にこのような感動的印象を残した友情は、本当のものであり、兩人にとって幸多いものであった。つまりマントノン侯爵夫人は彼女が昇進するまでの長く苦しい年月の間、この大人しい野心家の女性は、タフな柔軟さと一貫した辛抱でもって、常に陽気に、いつでも素早く、一人の国王を、時代の最大の国王を手玉に取って来たのであり、その利口な目で邪心のない高貴な女性を、他の自分に対して意地悪な敵対する宮廷女性達と区別して、この女性に若干懇ろな言葉をかけ、人懐っこく愛想を言って、自らの許に引きつけていた。両女性は互いに助け合って、自分達の出自や分別で補完し合っていた。

「元帥夫人は徳操と挙措が良かった」と国王は称えた。国王は記憶の中で浮かび上がって来る優美な体型、愛らしい顔、灰色がかったブロンドの巻き毛を眺めていた。

「元帥夫人は愚かでした」とファゴンは短く補足した、「しかし不肖私めが、一人の女性を愛したとすれば、一 私のパトロンの夫人を除いて」と彼は侯爵夫人に忠誠のお辞儀をした、「そして一人の女性のために自分の生涯を捧げたかったとすれば、それはこの最初のブーフレール公爵夫人でした」。

私はそれから間もなくして彼女と一層親しくなりました。残念ながら医師としてです。彼女の健康が覚束なくなりまして、いつの間にか、こうした愛らしいものすべてが吹き消された明かりのように消えました。彼女の臨終の数日前、彼女は私を呼びまして、私に世にも簡単な言葉で、自分は死ぬだろうと、説明しました。彼女は私の知識では及ばない自

分の状態を感じていました。私は病気に降参しますと彼女は言った。ただ一つ心配事があります。自分の少年の未来と運命です。『彼は良い子です、でも私自身と同じく、全く才能がありません』と彼女は私に悲しげに、しかしあけすけに嘆きました。『私の人生は容易なものでした。私はただ元帥の言うことに従えば良かったのです。元帥は何も両手から出さないというご自分の流儀で、たとえ私が賢明な女であっても、簡単極まる家事の他には私に責任を持たせなかったでしょうから。 — あなたは、ファゴン、元帥をご存じでしょう。あの人はやかましく、すべて自分で仕切ります。私は社交で黙っていて、私の話しを身近なことに限定して、何も無知なことや、ドジなことを言わなければ、それがあの人には一番都合が良かったのです。だって機知ある女や輝く女でしたら、あの人はやきもきするばかりであったでしょうから。それで私は上手くやって来られました。でも私の子供はどうでしょう。ジュリアンはその父親の息子として頭角を現すことを期待されています。でもできますか。信じがたいほど学習困難なのです。熱意には欠けていません。本当です。勇敢な子供なのです、...元帥は再婚することでしょう。どこかの利発な女性ももっと器用な息子達を生むことでしょう。勿論私はジュリアンが何か尋常でない者になって欲しいと願っているのではありません。これは考えられません。ただ単に、自分が弟達に遅れを取っていても、余りにひどく卑下して欲しくないのです。これは、ファゴン、あなたの案件です。息子が肉体的にも過度なことをしないよう見守ってください。これを忘れないでください、お願いします。だって元帥はこれを見過ごすからです。元帥のことは、ご存じでしょう。元帥は戦争、国境、要塞しか頭になくて、食事のときでさえ、仕事に没頭しています。国王とフランスにとって不可欠の男ですから。突然地図を持って来させたり、自ら取りに行ったりします。あるいは書記官達の午前中に発覚した何らかのぞんざいさに立腹したりします。義務の不履行が蔓延していて、もはや何も当てにならないと言いまして。それで偶然カップか深皿が一枚割れようものなら、この苛立った元帥は我を忘れて叱責します。通常元帥は黙って、あるいは寡黙に、食卓に座っていて、額に皺寄せていて、その視線の一つ一つを窺っている子供のことは相手にしていません。子供のちょっとした進歩も問い合わせません。元帥はこう前提としているからです。ブーフレールの者は自ら義務を果たす、と。それでこのジュリアンは自分の能力の限界まで挑戦することでしょう、...ファゴン、子供が傷付くことのないようにしてください。子供の面倒を見てください。繊細な年月を無事に凌げるようにしてください。遠慮なく介入してください。元帥は幾分あなたを頼りにしています。あなたの助言を容れることでしょう。元帥はあなたをフランスの実直な男と呼んでいます。...それで少年の件で私の身代わりになると約束してください、...約束を守ってください、そしてその上、...』。

私は元帥夫人に誓約しました。そして夫人は安堵して亡くなった。

夫人が寝ているベッドの前で、私は自分に預けられた少年を観察しました。彼は涙が溢れ、その胸はせわしなかった。しかし少年は絶望して死者の上に身を投げることはなく、生気の消えた口に触れず、少年は夫人の側に跪いて、夫人の手を握り、普段そうしているように、その手に接吻した。彼の苦しみは深かったが、内気に耐えていた。私は男の子らしい性質であり、自己抑制が早くから躰けられていると推察し、それは間違っていなかった。ちなみにジュリアンは当時およそ十三歳の可愛い少年で、その母親の情愛のこもった目と人好きのする面貌を持ち、もつれたブロンドの巻き毛の下の額は広くなかった。体格

は非の打ち所がなく、どの体育も名手の能力があった。

元帥は若いときからの妻を埋葬すると、一年後グラモン元帥の末の娘とまた結婚した。我々の良く知っている、よく働く、気転のととても利く、オリーブ色のとても痩せた女性であるが、元帥は自発的に私と、どこの学校にジュリアンを入れるべきか、相談した。というのは彼が父親の家に残るのはもはや長くないと考えられたからである。

私は、この子供をこれまで監督し、教えてきた聖職者の家庭教師と協議した。彼は私にこの少年のノートを見せた。これらは感動的な勤勉と果敢な持続力を証するものであったが、同時に信じがたく平凡な頭脳、コンビネーションと弁証法の完全な欠如、絶対的気転の不在を示していた。広い意味で機知と呼ばれているものが、かの情熱的な、一熱いものか嘲笑的な一喋りにおける煌めきが、明察によるすべての機鋒が、想像力によるすべての遊びが欠けていた。ただ単純極まる概念と最貧弱な語彙のみがこの少年の自由になった。せいぜいちらほらと一つの言い回しとその無邪気さ故に歓心を買ひ、その素朴さ故に微笑を誘った。奇妙にして悲劇的なことに、この聖職者の家庭教師は自分の教え子について無自覚にモリエールの言葉で語っていた。『偽りのない少年で、すべてを誠実に信じて受け入れます。炎もなく、想像力もなく、穏やかで、諍いを好まず、黙しがちで、それに』一と彼は付け加えた、一『この上なく綺麗な心を有します』と。

それで元帥と私は、一選択の余地は余りなく、一この子供にとってはイエズス会学校よりもましな学校はない、それもパリにある学校だ、と分かりました。我々はジュリアンを彼の身分の仲間や年齢の仲間から引き離すことを考えていなかったからです。これは教父達に任せる必要があろう。彼らは銜学者ではなく、快適に教え、親切に扱う点、教父達は称えて良いからです。ジャンセン主義の色合いの学校には我々は馴染めない。元帥はすでに立派な臣下としてできません。元帥はこの宗派に対する陛下の嫌悪を承知ですし、陛下の恩顧を勝手に踏みにじるつもりはありません。私もまさにこの理由からで、

一ファゴンは微笑した、一「それに私はこの才能欠如故にうんざりするほど抑圧されている少年にとって、この苦い厳格さとこの教義の暗い諸前提がふさわしくないと思いました、これに引き換え、イエズス会の軽快な大地と付き合いやすい天国は、ここでは妥当で、少なくとも完全に無害であると思ったのです。というのはこの少年の魂の根本原理は名誉であると私は知っていたからです。

その際私の側で、当然の前提条件としていたことは、敬虔な教父達が元帥から侮辱を受けてはならないということで、これは少しも不安に思う必要がなかった。元帥は教会のもめ事に関与しなかったし、兵士としてこの教団で厳格に遵守されている服従にそれどころか一種の快感を感じていたからです。

しかし生来遅れを取っている少年が、公のクラスと歩調を合わせるにはどのようにしたらいいか。そこで元帥と私は、二つの異なる補助手段を思い付きました。元帥はこの子供の義務感と名誉心を頼りにした。元帥自身は、単に中程度の才能の者で、その戦場では名声を得ていた。しかしこれは彼の倫理的性質のお蔭であって、天才的素質のせいではなかった。ジュリアンは元帥自身が鉄のような勤勉さで開発したかの中程度の才能も、さっぱり有していないということを知らないまま、あるいは知ろうとしないまま、元帥は、意志を強く持ちさえすれば、何も不可能ではない、生まれも変えられると信じていまして、彼の部下達は元帥のことをこう咎めているほどです。元帥はパレードの際、額から滴る汗滴

を規律違反と難じている、自分自身は汗をかかないから、と。

私自身はイエズス会の一般的な人間愛に、特にこれらの教父達が傑出している人間としての思いやりと声望とにかけました。私はこの教父達の何人かと話し合いをし、この少年の特性を打ち明けました。彼らの心にこの子供を更に引き留めるようにするために、その父親の身分を話しました。しかしすぐに彼らはこれに関心と分かった。元帥は専ら兵士であって、同時にその徳操を有し、策謀せず、名誉は彼の後に影のように従っています。それで教父達は元帥に対して何も期待せず、恐れもしません。この状況下で、私はジュリアンにより強力な推薦状を用意する必要があると思ひ、敬虔なる教父達に一つの目配せをしました。一」。話し手はつかえた。

「ファゴン、何をもみ消しているのだ」と国王は尋ねた。

「それについては後ほど話します」とファゴンは当惑してどもった。「そのときには、陛下、若干お許しを頂きとう存じます。要するに、この手段は利いた。教父達は競って、少年の学習を軽減させました。少年は温かい環境にいると感じ、彼の強張りは消え、彼の乏しい才能が開花し、彼の度胸は増し、立派に伸びました。そのとき一切ががらりと反対に変わったのです。

ジュリアンがイエズス会学校に入学して、およそ半年して、オルレアンであるひどい事件が起きました。教父達はオルレアン市の外部に所領があり、学校を有していて、この二つを拡大しようと欲していました。小さな貴族の四人兄弟がそこに一つの荘園を有し、そこはイエズス会の所領と接し、兄弟は共同で経営していました。この四人は皆、陛下の軍に所属していて、よくありますように、武具調達のためと、更にはもっと裕福な戦友達との交誼のために、少ない現金を食い潰して、田畑が借金の形代となります。するとかのイエズス会がこれらの担保証書をまとめて買い上げ、四人の貴公子達の唯一の債権者となっていて、この四人にその上まとまった額を自発的に前払いし、三年間据え置きで、その後一年間の回収催告を設けていました。その傍ら、教父達は貴公子達に口頭で、厳正に、全額をこの荘園領に預けておくことと約束していました。金を三年間を越えて寝かせておかないのは、単に自分達の教団経営の純然たる書式上の法であると述べたのです。

そのとき、かの教団の教父達がいつの間にか全員、世界の果てに送られるということが生じました。まことに、日本の方だと思います。それでその代わりに登場した者達は当然前任者達の口頭の約束について何も知らないことになりました。三年間の期限が満期となって、新しい教父達が借金の回収を知らせました。一年の期限の後、貴公子達は支払いができず、彼らに対し訴訟がなされました。

すでに敬虔な教団が彼らの田畑の獲得に乗り出しましたが、騒動となりました。勇敢な貴公子達はすべての門戸を叩き、ブーフレール元帥の門戸も叩きました。元帥はこの兄弟を勇敢な兵士として承知しており、評価していました。彼はこの諍いを彼の流儀で真剣に徹底的に調査しました。決定的な点は、この兄弟達は、敬虔な教父達から口頭の約束ばかりでなく、自分達を完全に落ち着かせ、不安を消してくれたものを、つまり何度か同じ内容の手紙を貰っていたということでした。しかしこの文書は不可解なことに消失したということでした。確かに手紙形式の折りたたまれた文書が、封を破られて、ちなみに空の封印のもので、教父達の手紙に驚くほど類似している文書が見つかったのですが、しかしこれらの文書は書かれていず、内容がいずれも欠けているということでもあります。

それで私がある日元帥の小私室に入りますと、元帥はその厳密なやり方で、かの白紙を裏返し、ルーペで隈なく観察していたのです。私は一時間ほどこれらを借り受けたいと提案し、元帥は真面目な目で同意してくれました。

陛下は、学問のためにと、陛下の名誉となっています植物園を私に贈ってください、私にとっては緑の場が晩年の静かな居場所となっております。そこから遠からぬ所、北の外れに、私は大きな化学実験室を設けました。陛下がいつかご来訪されるとお約束の所です。そこで私はこの疑わしい文書を有効な、ひょっとしたら学識ある教父達にもまだ未知の因子に晒しました。すると色褪せた文書から黒い文字が浮かび上がって、イエズス会士達の奸計を明るみに出しました。

元帥は告発するこれらの文書を持ってまっすぐに陛下の許へ急ぎました」。 — ルイ国王はゆっくりと額を拭いた、 — 「そしてそこにラシェーズ神父を見つけました。神父は深く、この田舎の自分の教団の同志達の不始末に驚きましたが、同時に陛下にこう進言しました。少数のあるいは個人の者の無思慮のために、かくも数の多い、善行の、倫理的教団を処分することは手ひどい不公正となりましょう、と。それにかの教団の、この個人の、先の責任者は、確かな筋から承知していますように、最近日本の異教徒の許で、晒杭により殉教したと聞いております、と。

この事柄の転換で最も都合の良かった者は、四人の貴公子達でした。借金の半分を当惑した教父達が免除し、他の半方を寛大な方[国王]が消したのです」。

寛大であったろう国王は表情を変えなかった。

「元帥に対して、ラシェーズ神父は特に、元帥が厄介な件で真実の究明に乗り出して、不当に荘園と関わらないよう教団の手間を省いてくれたことに感謝しました。それから彼は彼に、貴族が貴族に対するように、教父達に対し愛想尽かしをせず、教父達の秘密を守ってくれるよう頼みました、これはちなみにブーフルール元帥様ならば、自明なことでありましょう、と。

追従された元帥は肯った。しかし不思議なことに、このスキャンダラスな文書を渡すとか、これを破棄することを聞き入れなかったのです。ラシェーズ神父がまず丁重この上ない言い回しで説得しても、それから極めて明確な要求で襲っても甲斐がなかった。元帥はこの危険な手紙を敬虔な教父達に対して利用する考えは毛頭なかった。しかし彼はとにかくこの手紙を彼の文書の中に加えていて、これらの文書の整理と索引作りに彼は自分の時間の三分の一を費やしていました。この文書館に、そう彼は命名していましたが、一度収められたものは、埋蔵され続けるのです。それで元帥の整理好きと正確な慣習故に、教団に対する絶えざる脅威が漂うことになって、教団はこの脅威をこの無頓着な元帥に対して恨みに思いました。元帥はこのことを予見せず、自分が大目に見た教父達と上手く歩調を合わせていると信じていました。

私は別な見解で、至急警告することを怠らなかった。彼の少年を即刻、イエズス会から遠ざけるよううさく彼に説得しました。嘔み潰した憎しみ、呑み込んだ憤怒というものは、これは所有欲を裏切られ、いかさまがばれると明らかにその摘発者に対し向けられるもので、必然的に教団全体に広がり、一人の犠牲者を求め、ひょっとしたら、いや多分に、その犠牲者として無垢の子供を求めらるであろうからです。元帥は私を訝しげに見つめた。あたかも私が間違ったことを話し、お伽噺を語っているかのようであった。率直に言って、

元帥は分別が足りないか、あるいは自分の約束を華麗豪華に、自分の子供を犠牲にしても守りたいのか、どちらかでした。

『しかし、ファゴン』と彼は言いました、『一体全体、私のジュリアンはこの田舎で起きた事件と関係があるか。どこにまともな関連があろう。ちなみに教父達が少しばかりもっと厳しく彼の指を見るようになって、何の害もあるまい。彼らはひどく甘やかしはしなかった。今彼らの許から少年を離してみろ。これは品がない。人々はお喋りし、理由を探り、ひょっとしたらあの不浄な出来事を探し出して、私は約束を守らない男とされよう』。このように元帥は単に自分の名誉の後光のみを気にして、子供のことを考えていなかった。子供に対して、彼は存命の間、ひょっとしたら一度も関心ある視線を寄せたことがなかったのかもしれない。私はこの彼の高邁さに対し、この私の杖でぶん殴っていたら良かったと思われます。

それで、やむを得ざる仕儀となる他なかった。目立ってではなく、突然でもなく、本来不当というわけでもなく、教授の教父達は少年を沈めて行きました。少年を教父達は教団を侮辱した男の息子として憎み始めていました。彼らのすべてがこの話しをきちんと知っていたわけではない。より良い者達はほとんど知らなかった。しかし皆が、ブーフレール元帥は我々を辱め、害したと知っていて、皆が彼を憎んだ。

忍び寄る復讐の繊細な毒の気が学校の広間に充満していました。すべての好意的態度ばかりでなく、正当な思いやりもジュリアンに対しては消されました。この子供は悩みました。毎日、刻々この子供は侮辱を感じました。声高な非難によるものとか、叱責は皆無でしたが、これは教父達の通例ではなく、繊細に具体的に、ただ単にこのブロンド頭の貧しさに対してはや親切な支援をせずに、精神的貧窮に対し喜捨を拒み、それを惨めにさらけ出す具合だったのです。今やこの子供は絶望的に名誉心に刺激され、自分の覚醒を延ばし、微睡みを強引に縮め、脳を酷使し、健康を損なって行きました。一 このことについて話したくはありません。私が憤慨したのは、...」。

ファゴンは休止して、息を継いだ。

国王は、静かにこう述べて、休憩とした。「ファゴン、こうしたことすべてはどれほど現実のものか、自問している。つまり、学識があって、分別のある男達が、一人の子供を迫害するために、こうした静かな陰謀をするか、元帥のような根本的には無害の男に対して、一教団全体が憎しみを懐胎するかだ。元帥はその上教団に対して騎士的に振る舞ったのだろう。ファゴン、そなたは幽霊を見ている。そなたはここでは党派的で、ひょっとしたらこの立派な教団に対して、そなたの代々の偏見の他に、更に個人的な怨恨があるのかもしれない」。

「しれんなですか」とファゴンはどもった。彼は青ざめていたが、それ以上に色を失った。そして彼の目は燃え上がった。公爵夫人は不安になって、こっそりと自分が庇護する男の腕に触れたが、しかし彼はこの警告する手を感じていなかった。マントノン侯爵夫人は、この激しい老公は、苛立つと、全く我を忘れて、国王に対してさえも信じがたい言葉を敢えて口にするに知っていた。国王は勿論、自分の体のことを長年知悉しているこの識者に対し大目に見ていた。他の者であれば国王はそう簡単に許さなかったであろうが。

ファゴンは震えた。彼は関連のない言葉を呟いて、彼の言葉は乱れ、兵士が武器を取る按配であった。

「陛下、人間の心に通じておられる陛下が、信じられませんか。イエズス会の教父達は、知ってか、知らずにか、自分達を侮辱する者をすべて破滅するまで、憎むと信じられませんか。これらの教父達は、真も偽も知らず、善も悪も知らず、単に教団のみ命と思われませんか」。ファゴンは憤然とした笑いを上げた、「陛下は信じたくないのです」。

「国王、いかがです、陛下は現実の通であります」とファゴンは飛躍して更に急ぎ語った、「話しは事柄の信憑性が問題になっていますので、陛下は、陛下の国では新教の改宗の際、暴力が用いられることも信じられないことでしょう」。

「この問題は」と国王はとて真剣に答えた、「そなたの今回の三回の自由[勝手]の最初のものだな。それに返事をいたそう。あり得ないだ、ファゴン。ほんのわずかな事例を除いて、この改宗の際に、暴力は用いられない。私がきっぱりと表明して禁じているからであり、私の命令は遵守されているからだ。良心に対して強制はできない。真実の宗教が現在フランスでは数十万に対し、その内心の確信によって勝利を得ている」。

「ブルダルー神父の説教を通じてでありましょう」とファゴンは甲高い声で嘲った。それから彼は黙した。彼の両目から幻惑のこの頂上に対し、偏見のこの壁に対し、真実のこの全面的否認に対し、驚愕が固まっていた。彼は国王とその妻を慄然としてこっそり眺めていた。

「陛下、私は」と彼は続けた、「党派心があって、私の新教の先祖の血が私を通じて語っているわけではありません。私はある尊重すべき教会から外れました。何故か。私は、私が信じていて、晩年の日々背こうとは思わない神を別にして、宗教とか宗派について全体別様に考えているからで、かのルクレティウスの詩行にありますように、...」[Lucretius Carus, 紀元前99年頃 - 紀元前55年、「悪ヲ説得スル宗教」が知られる。『尼僧院のプラウトゥス』の語り手、ボッジョが写本『事物の本性について』を発見]。

国王もマントノン侯爵夫人もこの詩行については知らなかった。しかし二人とも、ファゴンは何ら敬虔なことを思っていないと推察できた。

「陛下は私の父の死をご存じですか」とファゴンは囁いた、「これは秘密になっています。しかし陛下に打ち明けましょう。彼は穏やかな男で、自らと妻と子供達を養い、私はその末の六番目の育ち損ないですが、オセールで舐剤を売って実直に細々と暮らしていました。オセールは空気が良くて、一ショック[六十]の薬局があったからです。私の父親を愛していた仕事熱心な住民は父の幸せを祈ってくれて、それで父を、暴力によらず、元の教会に戻してくれようと思いましたですね。陛下が仰有いましたように良心を強制できないからです。つまり彼らはつるんで、カルヴァン主義の薬局を避けたのです。私の父はパンを失い、私どもは飢えました。イエズス会の教父達はその際、どこでもそうしたように、最良のことをしましたですね。そこで彼の良心は自分自身と不和になりました。彼はカルヴァン主義を棄てました。しかし鋭いカルヴァン主義の命題は、少年時代すでにすり込まれていて、脳から簡単には消えず、この哀れな者は直に、主を裏切ったユダのように去って、同じようなことをしたのです」。

「ファゴン」と国王は威厳をもって言った、「そなたは哀れなテリエ神父を自分の父について趣味の悪い話し方をしたと罵った。それでいて、そなた自身、自分の父親について赤裸々に残酷に語っている。不浄な事柄にはヴェールが必要であろう」。

「陛下」と医師は答えた、「その通りです。陛下は、どのフランス人にとってもそうで

あるように、私にとっても品位の点での鑑です。勿論この虚偽の世界においては、ある種の気分を引きずられることがあります。この虚偽にもかかわらず、血の出る事実を引きずられてしまいます。この覆いの布をこっそり剥ぎ取ることも、極めて痛みを伴うことでありましても、...

しかし陛下、先ほどは最初の私の自由を行使しましたが、まことに、すぐにも私の二番目の自由を行使したい気分です」。公爵夫人は医師の変化した面貌を見て、彼の怒りは去って、このような勃発の後、今晚はもはや再発を案ずる必要はないと読み取っていた。

「陛下」とファゴンはほとんど軽快に言った、「陛下の臣下、動物画家のムトン[不詳]をご存じですか。否ですか。それでは大いに自由を発揮して、陛下にこの余り宮廷向きでない、しかしこの話しでは欠かせない芸術家を紹介しましょう。確かに自然裸体では行きませんが、穴だらけの帽子を被って、歯に短いパイプをくわえていて、一彼の安煙草の臭いがします、一シャツ姿のまま、だぶだぶのズボンを穿いて、ちなみに彼は墓に入っています。陛下はオランダ人は好みではない。キャンバスに描かれた彼らの大市も、彼ら自身の放恣な人柄も好みではない。しかしいいですか、陛下、陛下は一人の画家、一人のピカルディー人を有しておられました。これはその絵姿の具体性でも、その様式の自在さでもオランダ人達をはるかに凌駕してオランダ風です。

陛下、このムトンは、我らの許に生きていまして、その草を食む雌牛や、もうもうと寄せ集まって去勢羊を描いていて、陛下、御身の時代のもたらした偉大なもの、崇高なものを一条も予感していません。彼は御身の詩人達を知っていましたでしょうか。微かにも知りません。御身の司教や説教師はどうか。名前も知りません。ムトンは洗礼用水盤に縁がなかったのです。御身の政治家、コルベール、リヨンヌ、とか他の者達はどうか。ムトンは気にかけてがありません。御身の將軍達、鳥の顔のコンデとか、テュレンヌ、リュクサンプール、美しいガブリエルの孫はどうか。ただこの孫[ヴァンドーム]の方だけは別で、彼はアネでこの孫の広間を信じられぬほど厚かましい流儀の鹿狩り場面で一杯にしています。ヴァンドームはムトンが好きで、ムトンは自分のパトロンのこの公爵を称えて、家畜お命と呼んでいます。陛下の耳許でこの言葉を発してよければの話です。ムトンは我らの時代の太陽を知っていたでしょうか。つまり陛下、御身の存在を知っていたかです。信じられぬことですが、世界と歴史を充填しているこの名前を、一ほんの稀にでしょうが、御身の金貨が彼の両手を通過したかもしれませんが、ひょっとしたら御身の名前すら知らなかったかもしれませんが、と申しますのは、ムトンは読めなかったからです。彼の寵児、もう一方のムトンも読めなかったように。

この二番目のムトンは、賢いプードル、むく犬で、大きな頭蓋と物分かりの良い目をしてしています。目の上には黒いもじゃもじゃの額の毛がもつれた束となって垂れています。これは疑いもなく、一生まれつき制限されていますが、一私の三人の客人の中で最も才能豊かでした。と申しますのは、私の話題にしているジュリアン・ブーフレールと人間ムトン、プードルのムトンがしばしば私の許に機嫌良く一緒に座っていたからです。

陛下、ご承知のように、イエズス会の教父達は気前よく休暇を寄贈します。教え子達が、高貴な、いや最も高い身分に属していて、頻繁に、全員というわけではありませんが、狩りや喜劇やその他の楽しみ事に、家とかその他の地まで招かれるからです。それで私はジュリアンを、この子は自分の父親の元帥によって家へ帰るよう要請されることは根本的に

稀で、時々陛下の植物園へ同行させました。ここにはムトンが、彼は植物や動物と一緒にいることを心地良く感じていて、時折訪問して来ており、学あるフクロウとか茶番好きな猿を二、三の基本的チョークの線と共に紙上に描いていて、そしてまた、勤勉さと上機嫌が保たれているときは、私の静かな部屋をその怯えた馬や水を飲む雌牛の絵で一杯にしたものです。私はムトンには、マンサード屋根裏部屋の鍵を間近の壁小門の鍵と共に手渡していました。この浮浪者が画架とカバンを持ち込めるよう、宿を与えるためです。それで彼は私の許に随意に現れ、消えました。

あるとき、かの涼しく爽やかな夏の雨の日々、自然と精神にとって静かな、しかし急速な成長の見られるかの毎日の或る日のこと、私は自分の図書室に座って、そこの高い窓から、開いたフォリオ判と私の眼鏡越しに、私の向かい側の隣りの建物のマンサード屋根裏部屋、ムトンの巣穴を覗きました。そこで私は一人のブロンドの細い少年の頭が幸せそうに緊張して画架の方に傾いているのを見ました。その奥ではムトンの粗野な頭蓋が頷いて、毛むくじゃらの手で若者のほっそりした手を導いていた。疑いもなく絵のレッスンが行われていた。プードルのムトンはその側の赤いクッションの高い椅子に座っていて、大いにこの酔狂に興じているかのように、利口に同調していました。私は自分の本に印を付けて、向こうへ行きました。

私はフェルトの室内履きで、陽気な画家の耳に届かず、ただプードルのムトンに気付かれた。このむく犬はクッションから離れず、その挨拶を激しい尾っぽ振りに限定していた。私は静かに安楽椅子に腰掛けた。そしてかつて陛下の植物園でなされた会話の中で、最も奇妙な会話に耳を傾けた。しかしまず私は私の隅から、画架に掛かっている絵を眺め、洒落た潤沢に使用された油絵具のもたらず臭いを嗅いだ。何を描いているのか。ある何でもないもので、夕方の気分、川の情景、そこに幾つかの解けた赤い小雲と、苔むした橋のアーチが映っている。川の中には二頭の雌牛がいて、一頭は水を飲み、もう一頭は、これもまだ水を口の端からこぼしながら、周囲を眺めている。勿論ムトンが最良の手で描いていた。しかし少年も一種の絵筆の運筆を行っていて、これは私が知らないうちにムトンと一緒に描いた幾多のレッスンの成果に他ならないものであった。少年がこれまでいかに学んだか、学ばなかったか分からないが、すでに一つの成功の幻影、天才的活動の関与の経験があつて、多分空想を欠いた少年が以前考えたこともなく、一つの奇蹟として嘆賞したであろうこの創造的手による易々として幸せな手腕、大胆さと恣意へのこの関与の経験によって、少年は多くの自尊心喪失体験の後、大きな幸運を感じたことであろう。極めて温かい血が彼の内気な頬を赤くして、ある熱意で彼の手は自在に動き、それに勝るものは何もなく、私は明るい父親らしい喜びを感じた。

その間ムトンは少年に散策する雌牛の肩幅広い形状と難しい身振りを説明し、こう主張して結論付けた。雄牛の姿に勝るものはない、この形が創造の頂点である、と。彼は多分、正確を期せば、創造ではなく、自然の頂点と言ったのであろう。というのは彼は創造に関しては名前も、具体的にも、知らなかったからで、彼は教理問答も知らず、野生に育てたのである。

生来の陽気さを吹き出る噴水のように少年から誘導するのは、わずかなきっかけで十分であった。角のある家畜へのムトンの敬意を滑稽に思ったジュリアンは無邪気に言った、『アミエル神父は今朝、古代エジプト人は雄牛を神と崇めていたと教えられました。おか

しくない?』

『すごいね』と画家は情熱的に答えた、『その通りだな。エジプト人は気が利いている、家畜お命だ。だろう、ムトン。ええ。ジュリアンよ、そなたに聞くが、雄牛の頭はその威力といい、その恐ろしいサイズといい、神々しくないか。 — 阿呆な言葉を遣えば、 — 三角形とか、雄鳩とか、それどころか気の抜けた人間の顔よりも神々しくないか。だろう、ムトン。そなた自身思うだろう、ジュリアン。私が褪せた人間の顔という場合、私はそなたのアミエル神父の鼻のことを言っていると思っちゃいけないぞ。見とけよ』。ムトンは描いた。ちなみに何の嘲笑も述べなかったが、画架の縦の材の上で、一気に厚かましいタッチで、一つの鼻を描いた。しかし一つの鼻、巨大な鼻で、途方もないサイズのとても滑稽な鼻であった。

『ほらね』と彼はそれから全く真剣に続けた、『自然は停止しない。時に何か新奇なものをもたらすが、自然には愉しいのだ。しかしこれは今、流行らない。自然は婆になって火が消えたな』。

『アミエル神父は』と少年はおずおずと言った、『鼻のことで自然には感謝しないだろう。人々からかわれているから。鼻のせいで私の同級生のからかいを沢山受けているよ』。

『まさに餓鬼どもだな』とムトンは鷹揚に言った、『餓鬼には崇高なものへのセンスが欠けている。しかしところで、ジュリアンよ、最近私はそなたの学校を訪問したのだが、そなたに手本を届けにな、そなたはただヒヨコどもの許にいた。十三歳から十四歳の少年だな。それがそなたに合っているのか、産毛が生えて、恋人もできようと言うのに』。

この突然の襲撃で、若者の顔に二つの相反する感情が表現された。幸せな、しかし深い羞恥と、更にそれを上回る一つの根源的悲嘆であった。ジュリアンは嘆息した。『私は落第[居残り]をしたのだ』と思わず曖昧に囁いた。

『愚かな』とムトンは罵った、『何で落第だ。そなたは年齢と共に成長していて、細身の美しい人間だろう。学問が手間なのは、それはそなたの分別が健全だという証拠だ。誓って。私なら、髭のある者、少なくとも産毛のある者として、餓鬼どもと一緒にはいない。即刻ずらかっているよ』。

『でも、ムトン』と少年は言った、『私の父、元帥が私に要求したのだ、まだ一年間下の者達と一緒に残るように、と。この要請に応ずるよう私は頼まれたのだ』。彼はこのことを従順と、畏敬する愛情の混じった優しい表現で述べたので、私は感動した。もっとも同時に、私は子供の尊敬心を悪用する元帥に立腹したし、またジュリアンが、私や他の誰に対しても、頑固に口を閉ざしているのに、ムトンのような輩に信頼を示していることに極めて不快でもあった。これは不当なことであろう。我々大人であっても、前足を膝に預けてくる眼前の忠実な動物には奥底の苦悶を語るからで、自分達の交際を、自分達が同情され大目に見られていると感ずる者達の許よりは、もっと下位の者達の許に求めるのは、すべての生来障害を負っている者達の合理的衝動であろう。

『いいかい』とムトンはしばらく休憩した後、続けた。そしてもう一方のムトンはそれに耳をそばだてた。『そなたは家畜の絵を描くのが今では下手ではない。その上日々学んでいる。私は私の職人としてそなたを南方へ連れて行こう。グリニャン宮で採用職があるのだ。何とか夫人、 — 何といったかな、太った陽気なおばさんだ。そうだ、セヴィニェ夫人、 — この人が私を義理の息子、その辺りの知事に紹介してくれている。一緒に

行こう。そしてオリーブをふんだんに食べて育つのだ。自由で気ままな鳥になって、好きなだけ羽根を伸ばし、ついばむ。のびのび一日を暮らし、もはや印刷物はおさらば、元帥もおさらばだ。そなたの青い目の涼しいお上品な恋人ちゃんもここに残してな。そなたを見ていなかったと思うのか、悪太郎。一昨日のことだったな、あのもぐりの医者はベルサイユへ行っていた。猿どもの前に立って、古い薬草入りの箱[乾燥婆]と、大きな青い目の人形と一緒にいた。この人形の代わりには、きっと褐色の目の日焼けした代用娘が見つかるぞ』。

この最後の言葉で、これはもっと若干シニカルに聞こえたもので、私は激怒した。もっとも少年は私も承知しているように、気にしていなかった。今や私は強く咳をして、ジュリアンは恭しく私に挨拶しようと起き上がった。一方、ムトンは少しも当惑せず、髭の中でこう口ごもって、満足していた。『奴か』。ムトンは全く忘恩の徒である。

私は、ムトンが陽気に更に描き続けている間、少年を植物園に連れて行き、本当にこの犬儒家が学園に訪問に来たのか尋ねた。これは理由があって私には不都合に思われたのである。ジュリアンは肯った。構内の同級生の中で、と彼は率直に言った、ムトンの握手に応ずるのは、少し厄介でした。その袖の穴から裸の肘が見えていて、靴からは足先がはみ出していましたから。『しかし』と彼は言った、『私は応じました。その上通りを渡って一緒に歩きました。そのレッスンと楽しい時間に感謝していますし、好いてもいます、不潔であっても』。

そのように少年は語って、更に何か重要なことを語るわけではなかった。私は最近学校で上のバルコニーから下の遊び場を眺めたときの情景を思い出していた。学校へは一人の病気の生徒のことで呼び出されていた。下の方ではフェンシングの授業で、その教師は、あばたのある老下士官で、長年元帥の下で勤務していた。この教師は、つい先まで学校のベンチに座っていたその將軍の息子を、遜って、恭しく扱っていた。あたかも指示を与えるのではなく、指示を待っている按配であった。

ジュリアンはフェンシングが抜群であった。彼は高貴に剣を振るったとこうほとんど申して良かったであろう。この少年は暗記の間の長時間、手の関節を機械的にねじる習慣で、それで指の関節が異常に柔軟になっていた。それで少年は、申したように、一流の剣術家になっていた。騎馬も上手で、心得があった。このいつでも屈辱を受けていた少年が、この唯一の自分の卓越さを同級生に知らしめて、自分の評判を高めようとしたことは、当然なことに思われた。しかしそうではなかった。少年はそれを嫌った。この少年は、肉体の訓練に器用な者達と不器用な者達に対し、手に剣を持って対峙するとき、同じ礼儀正しきで扱い、かつて、器用な者達に対しては、熱く競って打ちかかるとか、不器用な者達に対しては、時にこれらを勇気付けるために鷹揚に負けることはあったが、からかうこともなかった。かくて少年は、フェンシング場で、上品な人目に付かないやり方で、自分自身は学校の授業時間その手ひどい欠乏を味わっていたかの平等さを取り戻していた。そして少年は同級生の間で、拳で勝ち取った敬意ではないが、説明しがたい彼の善意に対する物怖じと結び付いた尊敬を得ていた。これは勿論、彼のその他の[学業の]凡庸さに対する青年時には普通見られない率直な同情と混じり合うものであった。多くの魂を苦しめる気まぐれな運命が、彼の魂を育て、高貴なものにした。

私はジュリアンと一緒に陛下の植物園を散策しながら、陛下の野獣が鉄格子の背後に囲

まれている檻の所へ来ました。丁度そこでは一匹の狼を入れていました。狼は目を光らせ、斜めに急いで、檻を端から端へと歩いていた。私は少年に狼を見せた。少年はならず者の獣をちらと見た後、軽く身震いをして横を向いた。平板な頭蓋、偽りの目、厭わしい鼻面、邪悪に剥き出しの歯は恐るべきものであった。しかし私はすでに一緒に狩りをしたことがあるこの少年の恐れが不審であった。『おや、ジュリアン、どうしたのだ』と私は微笑した。少年は固くなって答えた、『この狼は誰かに似ています。』 — しかしそれから話しを止めた。というのは少し離れた所に、我々を注目させる高貴な二人連れの女性を見つけたからである。小さく丸々した老婆と若い娘で、先の老婆はミムール伯爵夫人[虚構]でした。 — 陛下は覚えておいででしょう。夫人は数十年前に宮廷を去っていますが、これは陛下をこの上なく尊敬していますが故に、等閑にしているのではなく、夫人の申すには、自分の皺で陛下の美意識を乱してはならないからなのです。醜く、しかし機知があって、私同様撞木杖を使っていて、変人の大胆な人物です。私は会うのが嬉しい。

『今日は、ファゴン』と夫人は私に向かって叫びました。『あなたの薬草を見ているのよ。ヌイイの私の庭用に、二、三本大黃の木を頂けないかしら。私は女医の端くれなの』。そして私の腕を取りました。『若いお二人、お互い挨拶なさい。初めて会ったような振りをしてないで』。

ジュリアンは内気な若者ですが、この少女に挨拶しました。娘は彼に指先を、さほど当惑せずに、差し出しました。私は訝しく思い、そして喜んだ。『ミラベル・ミラミヨンよ』と伯爵夫人は彼女を呼んだ、『素晴らしい名前、でしょう、ファゴン』。私はこの子供を眺めて、ムトンがこの少年をからかって言った、『青い目の恋人ちゃん』をすぐに思い浮かべた。実際彼女は大きな青い、懇願するような目をしていて、涼しげなお見通しの色合いで、まだ発育中の体、それは優しい魂の他まだ何も表現していなかった。

心に響く、子供らしい、鐘の音のように澄んだ声で、彼女は、伯爵夫人が私を国王の侍医として紹介すると、次のように始めた。『第一級のお医者様、科学者様、世にも有名なこの庭園でご挨拶申し上げます。ここはこの世紀に御名を刻まれる至高の国王様の慈しみで、人民の多い立派なこの首都に建造されたものでございます』。この冗漫な華麗なレトリックがこの小さな新春の娘の口から漏れるのを、聞きながら私が驚いていると、老夫人は口を挿んで、機嫌良くうんざりして叱り始めた。『ベルヘン、止しなさい。残りはファゴンには分かります。いいかい、親しい仲間内では、 — だってファゴンはそうで、嘲笑家ではないのだから、 — あなたを預かってからこの三週間というもの、こんな呪わしい気取った田舎風言い回しは止めるよう何度も頼んだわよね。そんな風に話すものではありません。こちらは第一級のお医者様ではなく、ただのファゴンさんです。植物園は単に植物園、あるいは薬草園、あるいは王立庭園、パリはパリで、首都とは言いません。国王様は国王であることで、満足しています。覚えときなさい』。娘の口は痛々しく開いた。一粒の涙が若々しい頬にこぼれた。

すると私が驚いたことに、ジュリアンが大層興奮して老夫人に向かった。『お許してください、伯爵夫人』と彼は大胆に激しく語った、『レトリックは必要不可欠なもので、習得が難しいものです。私は御令嬢の豊かな話し方に感嘆しています。この話し方を聞いたら、アミエル神父なら、...』。

『アミエル神父だって』、 — 伯爵夫人は頓狂な哄笑に弾け、横隔膜が痛むほどであ

った、一 『アミエル神父の鼻をご存じ。あの鼻よ、すごい鼻。ファゴン、考えてみて。ジュネ修道院長[Chares-Claude Genest,1639-1719]の鼻も恐れ入る鼻よ。この学園に何の用があったかとお聞き。私は私の甥を迎えに来てました。一 あのね、ファゴン、私は亡き姉妹の子供達を預かっていて、一 私の甥、あのギュントラムを迎えにね、一 哀れな子、哀れな。一 それで校長のテリエ神父が戻って来るまで、私はアミエル神父のレトリックを聞きました。それがまあ、何ということかしら』、伯爵夫人は揺れる腹を押さえた、『笑いをこらえるのに苦労しましたよ。最初は自殺するローマの女性です。神父は定規で胸を突いた。それから神父は甘美に口を歪めて、こう囁いた。<パエトゥス、痛みません>[夫に自殺を教える妻Arriaの言]。しかしこれはマムシで瀕死のクレオパトラの苦しみに比べて何ほどの苦痛でしょう。神父は定規を左の乳頭に当てていて、目をむいていた。ファゴン、あなたがご覧になっていたら。...いや』と彼女は突然金切り声を上げ、私は全身びくとした。『噂をすれば、テリエ神父だ』。そして夫人はその狼を指した。我々と二十歩も離れていなかった。『まことに、正真正銘のテリエ神父だわ。あなたの嫌な獣どもの許から、ファゴン、良い香りの植物の許へ行きましょう。ジュリアン、腕を貸して』。

『伯爵夫人、済みません』とジュリアンは尋ねた、『何故、貴女はギュントラムを哀れな若者と呼んだのです。彼は、国王の旗を自ら運ぶ名誉をすでに手にしていないとしても、百合の紋章[ブルボン家]の軍務に就いていましょう』。

『あら、嫌』と伯爵夫人は突然顔色を変えて、哄笑の涙の後に、悲嘆の同じ色の涙を続けた、『何故私がギュントラムを哀れな若者と呼んだかですか。彼がもうこの世にいないからです、ジュリアン。吹き飛ばされてしまった。そのために私はこの庭園に来たのです。あなたはここにいるだろうと思って、ギュントラムが戦死したとあなたに伝えにね。いい、軍に到着して日のことです。彼はすぐに採用されて、とても大胆にパトロールしたのだけど、無駄なことだったの、大砲の弾に当たってしまって。丁度亡きテュレンヌ元帥と同じ具合にね。ファゴン、いいですか、この若者はまだ十六歳にもなっていなかったのです。でも、速やかに上手に学習して、学園にいるときから、寝ても覚めてもマスカット銃兵を目指していたのです。その上、ファゴン、彼は近視でした。想像できないでしょう。とても近視で、二十歩離れていたら、その先は霧にしか見えなかったのです。勿論、私とか分別ある者達が剣は無理だと言いました。一 何の甲斐もなく、彼は頑固一徹だったから。私は母親然とこの少年に言い聞かせました。でもね、ある日逐電して、ジュリアンあなたの父親の許に駆け付け、元帥はオランダでの司令官を引き受けるために馬車に乗り込むところでした。あなたの父親がこの子に尋ねたそうです。私に元帥が自ら書いて寄越されましたが、父親の意志の下にまだいるのか[父親の許可が必要なのか]と、この子が否認すると、この子を元帥は自分の旅の一員に加えて、一緒に騎行させたのです。それでこの大胆な少年は向こうでお陀仏になった』。一 彼女は北の方を示した、一 『ベルギーの小村です。でも彼の五人の姉妹達の細々した遺産部分が少しばかり増えることになった』。

私はジュリアンの顔を見て、この遊び仲間の死がいかに深く、様々な動揺を誘っているか察した。元帥はかの遊び仲間を戦場に連れて行き、自身の子供は嫌な学校のベンチに居残りさせたのである。しかしこの少年は、たとえこの正義を理解しなかったとしても、ただ盲目に自分の父親の正義を信じていたので、疑念の雲はその若い額から速やかに消えて、

顕著な喜びの表情を露呈させた。

『ジュリアン、あなたは笑っているの』と老夫人は驚いて叫んだ。

『思いますに』とジュリアンは思案して言った、あたかも舌で一つ一つの言葉を味わっている按配であった。『国王のために死ぬことは、いずれの場合も、一つの幸運です』。

この騎士的な、しかし存命を喜ばない格言と、この少年が話す際の、不自然なほど幸せな調子を聞いて、善良な伯爵夫人は惨めな気分になった。溜め息を半分呑み込んだのは、夫人が少年の受難とその生きる苦労を良く承知していることを物語っていた。『ジュリアン、ミラベル嬢のお伴をなささい』と夫人は言った、『先に、向こうの棕櫚の方へ行きなさい、ファゴンと話すことがあるから、聞こえない程度に離れて、でも余り遠くはいけない、心配だから』。

『二人の歩き方はとても可愛い』と老夫人は遠ざかる二人の背後で囁いた、『アダムとイヴだ。ファゴン、笑わないで。娘は化粧して張り骨入りスカートを履いているとしても、二人は楽園を散策しているのよ。それに二人は純真だ。悩み多い青春の真っ盛りで、これは純粋な恋愛を感受させるのよね。その年齢に棘がない。青年の方よりも娘の方が数年年上で、数ツォル背が高くても気にならないわ、これは普通私の気に入らないことだけ』、

— 夫人は誇張していた、 — 『二人はとてもお似合い。』

ファゴン、先ほどはあの娘、滑稽な顔を見せてしまったけど、あの可愛い娘の没趣味な話し方を聞いて、あなたがあきれているのを見ていました。でも、あのむかつくでこぼこ語りはとても素直な育ちなのです。私の姉、子爵夫人は亡くなったけど、とても得がたい女性、気取った女性で、半世紀時代遅れの育ち方をされていて、ディジョンでこの娘を育てました。そこで夫は議会の議長をされていて、姉自身は詩人的庭園[サロン]の主宰をしていました。亡きスキュデリー嬢譲りの婉曲話法、物言いなのです。それでこの哀れな従順な子供の趣味が完全にいかれてしまったのです。賭けてもいいけど』 — そして夫人は杖で先の二人を指し示した。二人は、互いに懇ろに、しかし慎ましく向かい合っている姿から推察すると、至福の瞬間を味わっていた、 — 『今あの娘は全く無邪気にあの少年とお喋りしていることでしょう。あの娘は単純な魂の、内気な心の持ち主ですから。あの娘が吐き出す息は、あの娘が吸い込む空気よりもきれいです。でもあの娘が明日私と一緒に社交界に出て、大きな動物、大司教とか公爵の横に座るとなると、娘は致命的恐怖に襲われて、阿呆の馬鹿と見なされます。そしてその真っさらな天然に、ただただ不安の余り繕った修辞の襤褸を着せるのです。そんなわけで、私ども、明瞭に簡潔に語る者達の間では、可愛い女性も、まさに自分が恐れている者に、滑稽な代物になってしまうのです。これは一苦勞ですよ、この娘をまともにするのは、何という苦心でしょう。それなのに、ジュリアンは愚かな子で、娘に逆を勧めます』。

『やれやれ』と伯爵夫人は喘いだ。杖で歩くことに疲れて、ミルテと月桂樹の円形花壇の所の石のベンチにようやく腰掛けた。そこは、陛下、陛下の鏡像があるところです。

『あの少年について話しますと、ファゴン』と彼女はまた始めた、『あの子はさっさと学校を退学させなさい。言っときますが、あの子を子供達の中で落第させておくのは、腹立たしいことです。腹立たしい。元帥は、恐ろしく衛学的で、あの子をイエズス会士の許でかびさせるつもりです。ただ学業を終えるために。イエズス会士の許ですよ、ファゴン。私はアミエル神父を厳しく追及しました。彼の物真似を褒めて、彼の気持ちをくすぐりま

した。あの人は虚栄心の強い馬鹿です。でも心根はいい。彼はジュリアンのことを嘆きました。同時に、とても慎重に、でもはっきりと分かるように、教えてくれました。この少年は教父達の間で大事にされていないと。教父達は世の中で最良の人士なのだが、ただ若干気難しい。教父達を苛立たせてはいけないのだ。元帥は教父達の足を踏み付けたのだよ。新しい校長は教団の名誉を虚仮にされたくなくて、この子に父親の借りを返して貰うつもりなのだ、と。それから神父は自分があけすけに話してしまったことにびっくりして、周りを見回し、口に指を当てました。

私は少年達と一緒にいた。ギュントラムに、我らのジュリアン、ジュリアンは彼と何か秘密があって、それに三人目の少年、ヴィクトール・アルジャンソンを連れていました。この子は私の鼻根で、この子は勝手に、笑いが溢れているから。

かの晩、この子が羽目を外して。この子とギュントラムとが、ミラベル嬢を恐ろしく虐めて、すでにこの娘には、私が昼に長ったらしい言葉遣いのことで叱っていたのです。<お上手でした、ミロポラン嬢>と彼らは嘲っていた、<でもまだまだ十分に美しいとは言えません。もうちょい、高級に>とそんな調子。ジュリアンはこの娘をできるだけ上手く弁解したけど、ただ哄笑を強めるだけでした。突然この虐待を受けた娘は涙の洪水となって、私は腕白どもを大広間に追いやり、そこで私は一緒にボール遊びを始めました。しばらくしてジュリアンとミラベルを探しに出ると、二人は庭にいて、ベンチに静かに座っていました。アモールとプシュケです。二人は不意を突かれても、余り赤面しなかった。

覚えときなさい、ファゴン。今ではこのジュリアンは私の養子です。あなたが、ジュリアンを教父どもから引き離して、自分に可能な生活を彼にさせなければ、いいですか、私はこの杖でベルサイユへよろよろ歩いて行き、皺だらけの顔だけこの件を、ここのこの方へ訴えますよ』。そして夫人は月桂冠を被った御身の胸像を示したのです、陛下。

老夫人は更に百もの事柄を喋りました。一方私は夫人が去ったら、少年と徹底した会話をしようと決めました。

それから少年と少女がまた現れました。二人は静かに輝いていた。伯爵夫人の馬車の到着が告げられ、ジュリアンは女性二人を小門まで見送った。私はオランジュリー[大温室]の前の私の好きな席を探した。私はそこで上品な香りを楽しんだ。ムトンは、悪徳の安たばこを吹かしながら、両手をポケットに入れて、私の側を挨拶もしないで通り過ぎて行った。彼は夕方、庭園の外の居酒屋で締め括る習慣であった。プードルのムトンは、これに引き換え、私に激しく尾を振りながら別れて行った。この賢い動物は、私ならこの名手の没落をふせいでくれようと察していたのだと、私は確信している。というのは人間ムトンは火酒をがぶ飲みしたからで、これを報告することを私は忘れていたというか、陛下の前でこのことに触れるのは恥ずかしかったからであります。

少年はまた戻って来た。優しく幸せになっていた。『そなたのスケッチや描いたものを一度見せてくれ』と私は言った、『すべてはムトンの部屋にあるのだろう』。彼は出掛けて、カバンに一杯のものを持って来た。私は一枚一枚見た。奇妙な見もので、二人の異なる手腕の混淆である。ムトンの厚かましい仕事、少年の謙虚な手でおずおずと模倣され、そして一 微かに高貴化されている。長いこと私は一枚の青い紙を持っていた。そこにはジュリアンが、ムトンによって、ルーペの助けを借りながら、描かれた様々な羽根の恰好の何匹かの蜂を丁寧に再現していた。明らかにこの少年は小動物の形態が好きなのであ

った。小さな蜂のスケッチは少年を殺すことになると、不吉な予言を誰ができたろう。

カバンの一番下に更に不格好な紙切れがあった。そこにムトンが何か悪戯書きをしてあり、私の好奇心を誘った。『これは私の描いたものではありません』とジュリアンは言った、『くつついていたのです』。私はこの紙片を調べた。これはオウィディウスの一場面のパロディーを含むものであった[Ovid, Metam. III, 511-733]。マイナス[荒れ狂う女]達に追われたペンテウスの走る場面で、バッカス、残酷な神が、この逃亡者を破滅させるために、垂直な山岳を高くその前に出現させるものである[Ch. Gleyre: Penthée poursuivi par les Ménadesの絵のイメージ]。多分ムトンは、この少年が、時にその宿題を絵の部屋で片付けながら、オウィディウスの詩行を苦勞して翻訳するのを耳にして、そこから自分の題材を見つけたのであろう。一人の青年、明らかにその姿恰好からジュリアンと思われる者が、この姿恰好はムトンの画架としての目が少年自身よりも容易に良く把握しているもので、細身の一人の走者が頭を、死の不安の表情を浮かべながら、数人の自分に迫ってくる幽霊どもの方へ向けて、逃げていた。バッカスの巫女達ではなく、年齢不詳の女達、具象化した様々な非難や、不安、責め苛む思念、— こうした妖怪の一つは、刈り取られた頭蓋に高いイエズス会士の帽子を被っていて、手に一冊のフォリオ判を持っていた。— そしてまず岩の壁ときたら、荒涼として、登れるものではなく、陰鬱な運命のように、目の前で伸張して行くように見えた。

私は少年を見つめた。少年はこの絵を嫌悪感なく見ていて、その可能な意味を何も予感していなかった。ムトンも、何というひどい予兆をこの紙片にぼんやりと天才的に夢想して描いたか、明確に意識していなかったことであろう。私は思わずこの紙片を、隠すために、絵画の束の中に突っ込んで、それからこの束をカバンに詰めた。

『ジュリアン』と私は好意的に話し始めた、『そなたが私よりムトンを優先して、彼に色々打ち明けていたことを、私は残念に思うぞ。私には、何故か知らんが黙って口を閉じている、私の好意は知っておろうに。私には自分の不幸を打ち明けたくないのか。私がその不幸の大きさを正しく見積もり、判断するからか。そなたは際限なく思い悩んでくたばることを優先するのか。それは勇気のあることじゃないぞ』。

ジュリアンは痛々しく眉を顰めた。しかし今一度今日享受した至福の輝きが彼の顔に浮かんだ。『ファゴンさん』と彼は半ば微笑して言った、『実は私の悲しみをただプードルのムトンに話していました』。

この上手な言葉に私は驚いた。こんな言葉が彼から聞かれるとは思っていなかった。少年は私の驚いた表情を間違っただけで解釈した。彼は話し方をしくじったと思った。『ファゴンさん、私に尋ねてください』と彼は言った、『貴方に本当のことを話しましょう』。

『生きるのが辛いのか』。

『そうです、ファゴンさん』。

『人々はそなたを知恵遅れと見なしている。事実そうであろう。しかしひょっとしたら、人々が思っているのとは違うかもしれない』。厳しい言葉が発せられた。

少年はブロンドの頭を両手に収めて、黙ってどっと涙を流し始めた。これは涙が指の間から流れ出て、私がようやく気付いたのであった。今や呪縛が解かれた。

『私は私の苦しみを話しましょう、ファゴンさん』と顔を上げながら、彼は嗚咽した。

『話すがいい。お互い友達だから、私はこれからそなたを、自分自身を守るように、守

るつもりだ、と請け合うぞ。そなたに将来誰も危害を加えさせないぞ。そなたであれ、他の誰であれな。そなたはまた太陽や大気の許、跳ねればいいのだ。一日が楽しく始まって欲しい』。

少年は私の言葉を信じ、希望を持った目で信頼を寄せた。それから彼は自分の受難を語り始めた、すでに半分は過去の受難になっていた。

『あるひどい一日を体験して、その後の日々、ましなことにならなかったのです。ある秋の日、ギュントラムと彼の伯父さんの許に行きました。コンピエーニュの騎士修道会管区長の家です。二人でそこで射撃の練習をしたかったのです。私ども二人にとって新しい楽しみ事で、目の訓練になります。

軽快な二頭立て馬車に二人して乗って、ギュントラムは将来のことを、砂塵の中、話しました。将来は軍人しかないと言うのです。他には興味ないと。管区長は凝ったもてなしをしました。しかしギュントラムは落ち着かず、すぐに離れて、的の前に立つことになりました。彼は一発も当たらなかった。だってとんでもない近眼だから。彼は唇を噛んで、恐ろしく興奮しました。それで彼の手は不安定になって、一方私は当てました。私は見えて、狙いましたから。管区長は呼び出しがかかって、ギュントラムは従者達にワインを持って来させました。彼は数杯空けて、彼の手が震え始めました。目から涙を流して、顔を歪め、彼はピストルを芝地に投げ、それからまた拾い上げて、装填し、私のピストルにも装填し、私と一緒に公園の藪の中に入って行きました。

ある空き地で、彼は一方のピストルを持ち、私に別のピストルを差し出しました。<片を付けてやる>と彼は絶望して叫びました、<私は見えない、だから戦場で役立たない。戦場で役立たないのであれば、生きていたくない。君も一緒に行こう。君も人生で役立たない、羨ましいほど射撃は上手いけど。だって君は最大の馬鹿だし、世の笑い物なんだから>。<神様がお許しになるか>と私は尋ねました。<結構な神だ>、と彼は嘲って笑い、そして天に拳を見せました、<神は私に戦争意欲と盲目を下さり、君には精神のない肉体を下さっている>。我々二人は争って、私は彼の武器を奪い、彼は茂みに逃げました。

その日以来、私は不幸な男になりました。というのはギュントラムが私の承知していること、でもできるだけ私自身には隠されていたことを口にしたからです。いつも私は自分の背後で、馬鹿という言葉が囁かれるのを、路上でも学校でも耳にして来ました。私の耳はその残酷な言葉を聞き取ることに敏感になっていました。私の同級生は、普段は同級生に苦情を言ういわれはないけれども、私の耳に届かないと思うところで、手短にそう私のことを呼んでいるのかもしれないかもしれません。悪戯っぽい皺のパン屋の女将、リゼットでさえ、学園の前で商品を売りながら、まことに大抵下手な仕方で私を騙そうとします。私が馬鹿と呼ばれるのを聞いていて、そうして良いと思っているのです。でも学園の壁には、救世主の神が掛かっています。万人に対する公正さと弱者に対する優しさを教えにこの世に来た神です』。彼は黙って、考え込んでいるように見えた。

それから彼は続けた。『ファゴンさん、私は実物以上に自分を取り繕いたくありません。私も邪悪な思いになることがあります。遊びのときでさえ、私は不公平なルールにしたいくありません。それなのにどうして神様は現世の賭けで、一人の個人に重い鉛をぶら下げさせて、その後こう叫ぶのでしょうか。ゴールは向こうだ、他の者達と競争、と。ファゴンさん、私は入眠前に両手を組み合わせて、愛する神様に切に祈ります。私が苦勞して習得し

たことを、眠っている間に、頭の中で生長させ、増大させてください、と。他の人達は単に生まれつきそれができるのです。私は目覚めると、すべて忘れていて、私はお日様に愕然とします。

ひょっとしたら』と彼はおずおずと言った、『私は親愛なる神様に不当な言いがかりを付けているのかもしれませんが。神様は善良で助けたいのでしょう。でも神様の力がいつも及ぶわけではありません。そうでしょう、ファゴンさん。全くひどい按配のときは、母親が夢枕に現れ、こう言うものでした。＜耐えるのよ、ジュリアン。上手く行くよ＞』。

この信じがたいほどの素朴さと子供っぽい矛盾とに私は微笑に誘われた。これはにやりと笑ったのかもしれない。少年は自らと私とに驚いていた。それから彼は、あたかもすでに長く語ったかのように、素早く、若干辛辣さを込めて、言った。というのはまた語っているうちに、自己確信が消えていたからである。『それで誰もが私は馬鹿であると承知しています。国王でさえも。国王には隠しておきたかったのですが』 — ジュリアンはかのマルリー宮での日を当てこすったのかもしれない、 — 『ただ私の父は別です。父は馬鹿ということ信じようとしません』。

『いいかね』と私は言って、彼の細い肩に手を置いた、『私はそなたと一緒に哲学をしようとは思わない。しかし信じて欲しいが、私はそなたを荒波の中、運んで行くぞ。安全な港へそなたを、そのまま連れて行こう。確かにそなたは立派な名前にもかかわらず、軍隊も軍艦も率いることはないだろう。しかしまた戦いを軽率に率いて、そなたの国王と祖国に被害をもたらすこともない。そなたの名前は父親の名前のように、我らの年代記に載らないことだろう。しかし義の人の書には載る。というのはそなたも知っているように、天国は心の貧しい人達のものであると祝福の第一[山上の垂訓、マタイ5]にあるからである。

覚えておきなさい。第一の点はこうだ。そなたは戦場に行く。そして国王の為、そして今難儀しているフランスの為に、我らの陣営で戦う。弾丸の雨の中、自分が助かるか分かる。そなたが直に軍に入るよう、私が手配しよう。そなたは軍に留まるか、あるいは健気な者として、自己信頼を得て家に帰って来る。自己信頼がなければ男とは言えない。誰も簡単にそなたの顔を嘲ることはなくなろう。そのときにはそなたの国王の単純な僕になって、そなたにふさわしく、そなたの義務を厳格に果たすのだ。そなたは名誉と忠誠を得る。この二つは陛下が必要とされるものだ。陛下の周りにいる者で、それが過剰に見られる者はいない。厩舎であれ、狩りであれ、見張りであれ、そなたの果たすべき任務は見つかるだろう。そなたは自分の功績よりも、生まれのせいで、他の者達より有利になろう。だから謙譲に振る舞うことだ。陛下は、会議で働き草臥れたときには、黙しがちな者や無条件に信服する者に何気ない言葉をかけるのを好まれる。そなたは単純すぎるから、陰謀に巻き込まれることはないだろう。だからそなたは陰謀で破滅しないだろう。世間と同じく、人々はそなたの背後で笑ったり、嘲ったりしよう。しかし見回す必要はない。下僕達には親切に公正に接することだ。善行をしない一日はないように過ごす。[ティトゥス皇帝のDiem perdididi由来]。そもそも諦めることだ』。

少年は私を信頼する目で見つめた。『これは福音のお言葉です』と彼は言った。

『誰もが諦めておろう』と私は冗談を言った、『汝のパトロン、マントノン侯爵夫人でさえも、一つの装身具を、国王でさえ、一つの属州を諦めることだろう。ファゴンよ、私

も同様に諦めなかったか。自分自身の流儀とはいえ、ひよっとしたらそなたよりも辛い思いをしてな。孤児となって、貧しく、惨めな体一つで、この体はまさに若い日々、半端な育ち損ないで、厳しいミューズ、つまり学問を専攻しなかつたろうか。私には心がなかった、官能がなかったと思うか、優しい恋心が、ジュリアンよ。ー それなのに、きっぱりと存在の最大の魅力を、つまり恋愛を断念したのだぞ。この恋愛はそなたの細身の体と空っぽのブロンド頭には無造作に投げ込まれているではないか』。ファゴンはひよっとしたら青春時代とても辛い思いをしたかもしれないことを、とても滑稽に力を込めて述べたので、国王は興じ、侯爵夫人は愉しかった。

「私はジュリアンを小門まで付いて行って、ミラベルのことをからかった。『そなたらは早い首尾だな』と私は言った、『自然にそうなったのです』と屈託なく彼は答えた、『言葉遣いを責められ、彼女は泣き出して、そこで私は頼りになったのです。それに彼女は私の母に似ています』。

私の青春時代に聞いて、耳に残っていた一つのアリア、私に可能な唯一のアリアをララと口ずさみながら、私はオランジュリーの自分の席へ戻った。彼はすぐに戦場へ行く必要がある、と私は自分に言った。ほとんど、さっさと私の馬の一つに鞍を乗せて、まっすぐに国境の軍へ行くよう、彼に提案しかねないところだった。しかしこの大胆な手前勝手は、この少年に似つかわしくなかったかもしれない。その上元帥はいつか国境を固めて、フランドル地方の要塞を堅牢なものにして、決戦の前にベルサイユに戻って来て、陛下の最終判断を仰ぐ予定と私は知っていた。そのとき元帥を掴まえることにしよう。

私は残っていたカバンを今一度開けて、中身を整理して見ると、何と、灰色の岩壁を前にしてペンテウスが上に飛び出していた。誓って、私が絵画の真ん中に押し込んだはずのものであった。

その後しばらくして、むく犬のムトンがサントノーレ通りの混雑の中、自分の主人を探しながら轢かれてしまう出来事があった。この犬は、陛下、御身の庭園に眠っています。人間ムトンがその一本の梓の木の下に埋葬して、その木の樹皮にナイフでこう刻んだ。『ムトン二人』

実際間もなく彼もプードルの側に眠ることになった。潮時であった。飲酒が彼の体を蝕んでいて、彼の分別は脆くなり始めた。その間、私が自分の図書室の窓から彼を眺めると、彼は小部屋で画架の前に座りながら、むく犬の霊と声高にお喋りするばかりでなく、犬の表情であくびをしたり、あるいは素早く口で蠅にパクついたりして、全く亡くなった犬の様であった。水症でなくなった。速やかに進行して、或る日私が手に薬のスプーンを持って彼の臥所に近寄ると、彼は自分の恩人に呪いの言葉を発し、背中を向け、壁の方に顔を向けて、そして身罷った。

更に元帥が戦場からベルサイユに戻って来ることになった。元帥の滞在は長いとは考えられなかったので、私はこの機会を捉えることにした。私はジュリアンを連れて、彼の前に立ち、真実をすべて語る決心をした。

私はイエズス会士の許を馬車で通りかかった。正門の近くで、従者達によってもほとんど制御されない血気盛んな、元帥の四頭馬車が止まっていて、ジュリアンを待っていて、少年を速やかにベルサイユへ連れて行こうとするところであった。イエズス会の門が開き、ジュリアンがよろめいて出て来た。何という状態か。頭は前に垂れ、背中は折れ、打ちの

めされた姿で、覚束ない足取り、視線は空ろであった。一方この友を連れたヴィクトール・アルジャンソンの両目は松明のように燃え上がっていた。贅沢なお仕着せの従者達はびっくりして、競って自分達の若君を素早く慎重に馬車へ上げようとした。私は自分の馬車から飛び降りた。少年は質の悪い疫病に罹ったのだと思った。

『どうしたのだ、ジュリアン』と私は叫んだ、『何があった』。返事はなかった。少年は空ろな表情で私を見つめた。私のことが分かったのか分からない。私は普段も口を閉ざしたこの少年が今語ることはしないと分かった。その上厩舎長が迫って言った、『旦那様、乗るか、あるいはお引き取りください』。というのは苛立った馬どもが棒立ちになっていたからで、それで私は少年を出発させた。すぐに少年の後を追って、ベルサイユに行くことに決めていた。すでにイエズス会前のこの騒がしい情景の周りには人だかりができていた。群衆の好奇心からすり抜けたいと思って、ヴィクトールの方を見た。ヴィクトールは情熱的身振りで、矢のような速さで運ばれる幼友達に向かって呼びかけた。『ジュリアン、しっかりしろ。仇はとってやるからな』。私はこの少年を私の前に押しやり、私の馬車に乗せ、その後上がった。『どちらへ、旦那』と私の御者が尋ねた。私が返事をする前にこの気丈な少年は叫んだ。『修道院フォブール・サンタントワーヌ』。

こう呼ばれる修道院には、陛下、ご存じのように、理想的警察長官が静かな一角を設営していて、誰も押しかけない所に、こっそりとパリの公共の安全のために万全を期しています。『ヴィクトールよ』と私は車輪の騒音の中、尋ねました。『何ごとだ、何が起きたのだ』。

『とんでもない不正です』と少年が憤然となった。『狼のテリエ神父が、ジュリアンを鞭で懲罰したのです。彼は無実なのに。私が仕出かしたのです。私が犯人だ。しかし私はジュリアンのために仕返しをしたい。私は神父にピストルでの決闘を要求する』。この馬鹿げた言い草、不幸を招いたというヴィクトールの告白を聞いて、私はとても激昂し、思わず手ひどい平手打ちを彼に対して行った。『結構なことです』と彼は言った。『御者殿、遅いぞ、蝸牛だ』。彼は自分の一杯詰まった小財布を御者に差し出した。『急げ、鞭を当てて、飛んで行け。ファゴンさん、きっと父がジュリアンのために仕返しをしてくれます。いや、父はこれらのならず者、悪漢のイエズス会士のことを承知しています。彼らの汚らしい着物ときたら。しかし父を奴等は悪魔のように恐れています』。私はわめく少年を更に問い詰めることは無用と思った。少年は父親の前で自分の告解をすることであろうし、すでに飛んで行く馬は郊外の劣等な舗石を蹄で蹴っていて、火花が散っていた。我々は到着して、すぐ中に入れられた。

父のアルジャンソンは文書の束をめぐっていた。『お邪魔します、アルジャンソン』と私は詫びた。

『いえ、いえ、ファゴン』と彼は私と握手しながら答え、私に椅子を一つ差し出した。『この子はどうしたのだ。燃え盛る暖炉のようだ』、『父上』、『黙っている、ファゴンさんが話される』。

『アルジャンソン』、と私は始めた、『ひどい事件です。ひょっとしたら大きな不幸かもしれない。ジュリアン・ブーフレールが』、 — 私は長官を問うように見つめた、 — 『その哀れな少年のことは承知しています』と彼は言った、 — 『イエズス会士達の許で殴られて、少年はベルサイユへ運ばれたが、その状態は私の判断では重篤な病気の

端緒となっている。ヴィクトールが経過を知っているのだ』。

『話してみろ』と父親が命じた、『明晰に、落ち着いて、詳しく。ごく些細な点も重要だ。嘘はいけない』。

『嘘だなんて』と怒った少年は叫んだ、『真実しか役立たないときに、嘘をつくことはしない。これらのならず者達、イエズス会士は、...』。

『事実を言え』とラダマンテウス[冥府の裁判官]の表情で、長官は命じた。ヴィクトールは集中して、驚くほど明確に語った。

『アミエル神父の修辞学の前だった。我々は頭を寄せ集めて、この鼻男にどんな茶番をしたものか相談していた。＜何か新規のネタだ＞とあらゆる方向から声がした。＜まだ見たこともないこと、新趣向＞。そこで我々は思い付いた、 ー』。

『私は思い付いただろう』と父親が訂正した。

『 ー 私は思い付いた。とてもスケッチが上手いジュリアンに白墨で黒板に何か描いて貰おうと。彼は自分の席で本をめくって、一課の学習をしていた。 ー 彼はとんでもなく物覚えが悪いのだ。 ー その彼の首に腕を回して、私は頼んだ。＜何か描いてくれ＞、私は追従して、＜一頭のサイだ＞。彼は頭を振った、＜思うに＞と彼は言った、＜君らは善良な神父を怒らせたいのだろう。御免だね。残酷なことだ。鼻なんか描かないよ＞。

＜しかしくちばしを、メンフクロウはどうだ。君のフクロウはとても面白いぞ＞。

＜くちばしは止そう、ヴィクトール＞。

そこで私は考えて、思い付いた』。長官は真っ黒な眉毛を顰めた。ヴィクトールは自暴自棄になって、続けた、『＜蜂を描いてくれ、ジュリアン＞と私は言った、＜君のは最高だ＞。＜いいよ＞と彼は答えていそいそと、丁寧な線で黒板に可愛い蜂を描いた。

＜何か書き添えて＞。

＜では、ご要望で＞と彼は言って、白墨で書いた、＜蜂＞。

＜いや、それは洒落てない、ジュリアン、素っ気ないよ＞。

＜何と書いたらいい、ヴィクトール＞。

＜少なくとも、蜂蜜小虫、ベート・ア・ミエル[ベータミエル、蜜蜂]だな＞』。

長官は早速阿呆な言葉遊びを理解した。蜂蜜小虫とベータミエル[アミエル小虫]。『じゃ、これが応分』と彼は怒って叫んだ、そして駄洒落の発案者に平手打ちをお見舞いした。これに比べれば私の平手打ちは愛撫に近い。

『御免よ』と少年は言った、耳から血が流れていた。

『それからどうなった、簡潔に』と父親は命じた、『その後私の前から消えろ』。

『 ー その瞬間、アミエル神父が入って来て、あちこち歩き、黒板を嗅いで、察し、そしてから、何も分からないような振りをした、この道化者は。しかし＜アミエル小虫、アミエル阿呆＞と最初はパラパラだったが、それから何人かの席から、そして全員が言った。＜アミエル小虫、アミエル阿呆＞と。

すると ー 恐ろしいことに、 ー ドアがさっと開いた。猛然たる狼、テリエ神父だった。彼は廊下から窺っていたのだ。そして今や悪魔のように顔をしかめた。

＜誰が描いたのだ＞。

＜私です＞とジュリアンがはっきり答えた。彼は両耳を閉ざして、自分の一課の学習を続けていた。いつもほとんど把握できない生徒だし、今は何もさっぱり分からないし、

把握できないでいた。

<誰がこれを書いたのだ>。

<私です>とジュリアンは言った。

狼は彼に向かって跳躍し、この面食らった生徒を引き上げ、自分に引き寄せ、本用の革の紐を握って、それから――』、語っているヴィクトールは言葉に詰まった。

『それでおまえは黙っていたのか、この意気地なし』と長官は雷を落とした。『情けない奴だ、屑だ』。

『殺されそうになっている者のように、私は叫び声を上げたんだ』と少年は叫んだ、『私がやった、私だ、私』と。アミエル神父も狼にしがみついて、ジュリアンは無実だと誓った。狼野郎も聞こえた筈だ。しかし私には気も留めなかった。私は父上の息子で、父上をイエズス会士は恐れ、父上に敬意を表しているからだ。しかしイエズス会士は元帥を憎んでいて、元帥のことは恐れていない。そこでジュリアンが利用される。でも私はわたしのナイフを――少年はポケットに手を入れた、――『狼の脇腹に突き刺してやる、仮にこの狼が断って、――』

厳格な父親は彼の襟を掴んだ。彼をドアまで引きずり、ドアを開け、外に投げ出し、門をかけた。次の瞬間もう外から拳で叩きながら、少年が叫んだ、『私も一緒にテルモ神父の許へ行くぞ、証人として立って、言ってやる、化け物め、と』。

『ファゴン、有り体に言って』と長官は冷淡に私の方を向き、ノックの音に注意していなかった、『子供の言う通りだろう。我々二人で、この神父を早速訪ね、神父の前で、赤裸々に真実をぶつけて、テーブルクロスのように真実を広げてみよう。そして我々と一緒にジュリアンの許へ行くように仕向けよう。今日のうちにも、今すぐ、そして我々の目の前で虐待を受けたジュリアンに詫びて貰おう』。彼は置き時計の方を見た。『十一時半か。テリエ神父は農夫時間をきっちり守っている。彼は丁度正午に黒パンとチーズを食べよう。彼はいるはずだ』。

アルジャンソンは私と一緒に連れて行った。我々は馬車に乗り込み、進んだ。『あの少年のことは知っている』と長官は繰り返した。『ただ一点彼の話しのこと、分からないことがある。神父達が最初、彼をちやほやし、木綿にくるむようにして始めたという事実のことだ。彼の同級生達、私のやんちゃ坊も含めて、しばしばそのことを糞味噌に言って来た。神父達は、あの連中のことだ、元帥が無粋に彼らの正体を暴いて以来、あの子供を憎んでいることは理解できる。しかし何故神父達は、自分達にとって元帥はどうしても良いのに、あの子供をまず、弱者にふさわしい保護以上に大事にするメリットがあると思ったのか。この点が私には分からない』。

『そうか』と私は述べた。

『そのことをまさに私は知らなければならん、ファゴン』。

『それはだな、アルジャンソン』と私は打ち明け話しを始めた。――陛下、御身にもここで打ち明けます、陛下を最も傷付けることになりましたので、――『私はジュリアンのことを神父達の許で是非とも過保護に扱って貰いたかったが、無比の推薦状を欠いていた。時に人々は少しばかりお喋りするものだろう。それで、私はラパン教父とブウール教父に、あるレディー達との社交で出会った折、ジュリアンの母親は、陛下、国王に対して、覚えがめでたかったのだと話したのだ。ただ本当のことだ。それ以上何のニュアンス

もない、誓って、アルジャンソン』。アルジャンソンは顔を歪めた。

陛下、御身は陰気なご不快な顔をされています。しかし陛下、イエズス会の神父達の想像力が至純なものを曖昧なものに改作するとしても、私にその咎がありませんや。

『それで、神父達が』と私は続けた、『元帥を憎み、そして元帥に関心を寄せ始めたときに、神父達は彼らの流儀で聞き耳を立て、調査した。しかしジュリアンの母親は、今現世の上で微笑している天使であるが、天使になる以前も、この世で至純の女性でしかなかったということしか分からなかった。残念ながら神父達が自分達のこの錯覚に気付いたとき、まさにこの子供はその錯覚も最も必要としたであろう時だったのだ』。アルジャンソンは頷いた。

「ファゴンよ」と国王はほとんど厳しく言った、「これはそなたの第三の最大の自由[勝手]だ。そなたが私の名前と、そなたも崇拝している女性の評判とに、軽率な戯れをしたのであれば、そなたは少なくとも私に対してこの厚かましさを黙っているべきではなかったか。そのことでそなたの話しが分かりづらくなったとしてもな。それでいいか、ファゴン、そなたは悪評高い命題に従って行動していなかったか、つまり目的は手段を浄化するという命題に[イエズス会の原理と思われていた]。イエズス会に入会したのか」。

「我々は皆、多少そんなものです、陛下」とファゴンは微笑して続けた。

「道中我々はアミエル神父に出会った。神父は不幸者のように徘徊していて、私の馬車を見つけると、とても悲嘆の身振りで、私の馬車を止めさせた。馬車の扉の所で、彼の仕草、表情はとても戯けたもので、すぐに甲高く笑う路地の少年達の群れに取り囲まれた。私は彼を馬車に乗り込ませた。

『ファゴンさん、貴方に出会えたのは、聖母様のお蔭です。貴方の庇護されているジュリアンは辛い目に遭いました。彼は無実なのです。砕かれた小さなアステュアナクス[ヘクトールの子]同様に』とこの鼻男は大いに弁じた。『ファゴンさん、この少年がその処刑人に対して向けたあの稀な視線を目にしましたなら、戦慄と死の不安の混じったあの視線を』とアミエル神父は息を継いだ。『私が海を越えて逃げても、この視線はつきまとうことでしょう。暗い塔の中に隠れても、この視線は壁を突き抜けて来ましょう。私が潜り込んでも、 — 』。

『教授、貴殿には潜り込むことだけはしないで頂きたい』と長官は彼を遮った。『今はテリエ神父に面と向かって、 — というのはこの神父の許に我々は向かっており、貴殿も同行されるので、 — 証言することが肝要なのです。勇気がありますかな』。

『勿論、勿論』とアミエル神父は請け合った。しかし明らかに顔色を失って、その法衣の中でガタガタ震え始めた。テリエ神父本人がその繊細な教団では、粗野な男、腕力を振るう男として恐れられていた。

我々が誓願修練士の建物の所で、アミエル神父をまず先にして降りたとき、ヴィクトールが御者の横に立って同乗していたその馬車台から飛び降りた。『私も行く』と彼は反抗した。アルジャンソンは額に皺を寄せたが、しかしこれを認めた。二人目の証人を同行させることに異存はなかった。

テリエ神父は居留守を使わなかった。アルジャンソンは神父と少年を控えの間に残るよう指示した。二人は従った。神父はほっとし、少年は不機嫌であった。校長の神父は粗末で貧弱な小部屋に住んでいて、法衣も着古した、日夜同じものであった。彼は背中をかか

めて、がさつで野蛮な面貌に偽りの微笑を浮かべて我々を迎えた、『お二方、何の御用でしょうか』と彼は作り笑いで尋ねた。

『尊師』とアルジャンソンは答え、肘掛けの壊れた、埃の積もった椅子を差し出されたが断った、『生死がかかっています。急いで救出する必要があります。今日学園で若いブーフレールが間違っただけで懲罰された。間違っただけです。一人のずる賢い腕白が知恵遅れの少年に何かを黒板に描かせ、文字を書かせ、それがアミエル神父への阿呆な嘲弄へと発展したのだが、ジュリアン・ブーフレールは、何のために自分が悪用されているのか、皆目予感していなかった。この少年がこのような茶番を嫌っていて、できるだけ防ごうとして唯一の少年であること、このことは簡単に証明できることです。彼がこのいかがわしい悪戯をそのブロンド髪の頭で考え出したのであれば、懲罰は疑いもなく相応のものであったことでしょう。しかしこの懲罰は恐ろしく不当なものです。これはどんなに速やかに、どんなに精一杯償っても、十分とは言えないものです。その上に若干かなり重大なことが付け加わります。間違っただけで懲罰を受けた者は、精神の面では子供ですが、一人前の男の魂を持っています。一人の青年を罰したつもりでも、一人の貴人を虐待してしまっています』。

『おや、おや』と神父は驚いた、『閣下は何とあれこれ仰せられることでしょうか。単純な件がこれほど歪曲されまじょうか。私は廊下を歩いていました。これは私の義務です。修辞学の授業で騒音を聞いた。アミエル神父は教団の誇る一廉の学者です。しかし彼は規律の仕方を心得ません。我々教父は体罰を好みません。しかしこれでは済まなくなります。一罰百戒も必要でありまじょう。私は入りました。愚かなことが黒板に書かれていました。私が調べると、ブーフレールが白状しました。残りは自明なことです。』

才能がない、知恵遅れの少年ですと。逆です。彼はずる賢い、小心者です。静かな湖面は深い。彼に欠けているものは率直さです。彼は偽善者で、猫かぶりです。痛かったです、と。華奢な肌ですな。貴族の子息と仰有いますか。残念ながら、我らイエズス会の教父は貴賤を知りません。それに元帥本人が我々に息子を甘やかさないように、頼まれたのです。私が私の最後の最大の鞭打ちを受けたとき、あの子よりも年を食っていました。神学校で、聖パウロの如く、四十回よりも一回少なかった[『コリント二』、11,24]。聖パウロも貴人ですな。私がくたばりましたかな。憚りながら、私はその箇所をさすった、すると以前よりも快適になった。それに私の場合は無実だった。しかしこの頑固者の無実を私に納得させてくれる者は誰もいなかった』。

『ひょっとしたらいるかもしれませんが、尊師』とアルジャンソンは言って、二人の待機者を呼び寄せた。

『ヴィクトール』とこのイエズス会士は入室して来る少年に歯を剥き出しにした。『そなたがしたのではないだろう。そなたは保証する。そなたは立派な子だ。自分のせいだと説明したら愚かなことだ、誰も責めていないのに』。

反抗的身振りで近付いたヴィクトールはこの悪漢の顔を勇敢に見つめた。しかし勇気がしぼんだ。彼の心は、この募る野蛮さの面貌と煌めく狼の目を前にして震えた。

彼は迅速に行った。『私がジュリアンを誘った。ジュリアンは何も分かっていなかった』と彼は言った、『私は校長殿の耳に叫んだ。しかし聞こうとされなかった。悪漢だからだ』。

『もうよい』とアルジャンソンは命じ、彼にドアを示した。彼ははいそいと出て行った。彼は恐れ始めていた。

『アミエル神父』と長官は神父に向かって言った、『心に手を当てて、言ってくれ。ジュリアンが駄洒落を考え出したかな』。

神父は躊躇った。校長に不安な視線を向けていた。『神父、度胸を出して』と私は囁いた、『名誉ある男だろう』。

『閣下、アキレスが臆病でないように、またテルシテスが英雄でないように、考え出せないことです』とアミエル神父は誓った。自分の修辞学で勇気付けられていた。『ジュリアンは救世主のように無実です』。

校長の色を失った顔が憤然として歪んだ。彼は同僚達の間で盲目的服従を見いだすことに慣れていて、それで些細な抗弁も我慢ならなかった。

『御同輩、批判なさるのか』と彼は吠えた、『まずは最も愚かな少年にさえも嘲笑されている貴殿の頓狂な物真似を批判なされよ。私はあの少年に正当な仕置きをしたのだ』。

自分の物真似をこのように蔑まされて、神父は全く我を忘れて、一瞬すべての恐怖を忘れた。『正当なですと』と彼は嘆いた、『神よ、憐れみ給え、何度も頼んで来たことでしよう、あの少年の知恵遅れを考慮に入れて、この少年を壊さないでくれ、と。私にこう応えたのは、どなたです。＜奴がくたばっても構わない＞と。誰がこう言いました』

『恥知らずな嘘を吐くな』と狼が吠えた。

『尊師よ、貴方が一番恥知らずな嘘を吐いている』と鼻男がそれに勝る声を上げた。全身が震えていた。

『私の視界から消えてくれ』と校長は命じ、指でドアの方を示した。そこで小さな神父はできるだけ速やかに逃げた。

また我々三人となると『尊師よ』と長官は真面目に語った、『貴方に対して、少年を憎んでいるという非難が上げられている。重大な告発です。我々と一緒に出掛け、ジュリアンに詫びることで、この告発を否認し、無効にされたい。我々二人の他、誰も立ち会いませんので』、彼は私を指した、『それで十分です。この殿方は国王の侍医で、少年の健康に重大な懸念を抱いておられる。貴殿は顔色を変えておられる。我慢して、こう考えて頂きたい。貴方がその名前を頂いているその方は、日が暮れるまで怒ってはいけなさと命じておられる[『エフェソ』、4,26]。ましてや不当なことを放置してはまずいでしょう』。

一つの不正を白状して、償うのか。イエズス会士は憤怒のため歯ぎしりした。

『ナザレのイエスと何の関係があります』と彼は誇りを傷付けられ、抵抗し、ごねた。そしてこの醜い男は悪霊の如く天井に達するかに見えた、『私は教会の者だ、いや教団の者だ。私が少年と何の関係があろう。私は彼を憎んでいない。憎んでいるのは、我々を中傷した彼の父の方だ。中傷したのだ。恥知らずの中傷をしたのだ』。

『それは元帥ではありません』と私は訝しく思い、言った、『私の実験室で、教父達の恥が――明らかになったのです』。

『偽造だ、偽造』と校長は荒れた、『かような手紙は書かれてはいない。悪魔のペテン師が紛れ込ませたのだ』。そして彼は私に血なまぐさい視線を送った。

私は、白状すると、事実を否認し、真実を嘘に、嘘を真実に変えるこの権力、暴力に驚いた。

テリエ神父は、鉄の額をこすった。それから彼は表情を変えて、長官の前で、半ば平伏し、半ば嘲笑してお辞儀した。『閣下、私は貴方の忠実な僕です。しかし私は教団を低く

貶めて、一人の少年に許しを請うことはできません』。

アルジャンソンは少なからず敏腕に調子を変えた。彼は口の隅にこっそりと軽視の微笑を浮かべてテリエ神父の側に立った。神父は耳を貸した。

『貴殿は確信がおりか』と長官は囁いた、『自分は元帥の子息を鞭打ったが、同時にフランスの最も高貴な血筋を鞭打ったわけではない、と』。

神父はすくんだ。『それは関係ない』と彼は囁いて返した、『アルジャンソン、からかっておられる』。

『私に確信はない、このような事柄において確信はない。しかしその可能性がある以上、貴方は、
— 私の言っている意味はお分かりで、私の提案も理解されるであろうが、
— 身動きできなくなる可能性があるらう』。

陛下、高慢さと名誉心が陛下の告解師の陰気な面貌の中で戦っている様を見たように思います。しかしどちらが優勢か分からなかった。

『お二方と一緒に参りましょう』とテリエ神父は言った。

『神父、行きましょう』と長官は迫って、彼に手を差し出した。

『しかし私は法衣を着替えなければならない。これは繕ったもので、ベルサイユでは陛下にお会いするかもしれない』。彼は隣室を開けた。

アルジャンソンは肩越しにその部屋を覗いて、低い仕切りに剥き出しの架台と虫の食った聖遺物箱を見た。

『ちょっと失礼、お二方』とイエズス会士は恥じて囁いた。『私はまだ世俗の方々の前で着替えたことがないので』。

アルジャンソンは彼の法衣を掴んだ、『約束は守られますよな』。

テリエ神父は隅の暗がりには貼られている何か聖なるものに、三本の汚れた指を差し出して、消え、小さな隙間を残してドアを閉めた。アルジャンソンはこの隙間に靴先を入れていた。

我々は戸棚が開き、閉まるのを耳にした。静かに二分間過ぎた。アルジャンソンはドアを開けた。テリエ神父は逃げていた。彼はアルジャンソンの囁きを信ぜず、我々の目の前から消える機会だけを窺っていたのであろうか。それとも彼はその囁きを信じて、しかし彼の教団の一方のデーモンが別のものを、つまり誇り[高慢]が名誉心を圧倒したのであろうか。誰がこの陰鬱な魂の深淵を覗けよう。

『偽証者だ』と長官は呪って、聖遺物箱を開け、階段を見つけ、下へ突進して行った。私もよろめきながら、杖をついて追った。下の方に一人の上品な修練士が極めてびっくりした表情で立っていた。その作法ははなはだ洗練されたもので、神父の行方を問われると謙虚に答えた。神父は十五分前に仕事でルーアンに旅立たれたと承知している、と。

アルジャンソンは追跡をすべて諦めた。『この化け物をベルサイユへしょっ引くよりも、地獄からケルベロス[三つの頭の冥府の犬]を連れ出すのが楽だ。
— それに、この教団には百もの隠れ場があり、彼を探すのは手間だ。私は去る。ファゴン、新たに馬を仕立てて、ベルサイユへ急いでくれ。陛下にすべてを語れ。陛下はジュリアンに手を差し出して、語ってくださるだろう。王はそなたに敬意を払っている、そなたはむごい思いをした、と。少年の鞭の痛みが取れよう』。私はその通りだと言った。それが最良のことだ。唯一根本的解決法である、手遅れでなければ』。

ファゴンは自分の灰色のもじゃもじゃ眉毛の下から国王を眺めて、国王の告解師に関し、呈示されたその仮面が国王にいかなる影響を与えたか知ろうとした。ルイ王は自分の選択を撤回されるであろうと、自負するためではなかった。しかし人類のこの敵に対し、国王に警告を発したかったのである。此奴はその悪鬼の翼を広げて、輝かしい治世の晩年を影の多いものにしかねなかった。しかしファゴンはこの至高のキリスト者[フランス国王]の面貌に、須臾の間、この支配者の心になかった一人の女性のその子息の運命に対するまっとうな同情心と、それに或る語りに対する快適さしか読み取れなかった。この[ファゴンの]語りはその諸経路が庭園の道同様に、一つの中心点に向かっているもので、それは国王、常にまた国王なのであった。

「ファゴン、それからどうなった」と陛下は頼んだ。ファゴンは従った。苛立って、ぴりぴりした気分であった。

「馬車が到着するまで優に十五分かかると思われたので、私は誓願修練士の建物の向かい側に住んでいる湯屋理髪師の許に行きました。私の顧客です。そしてぬるいお湯を頼んだ。私は疲れ切っていた。お湯で私の気力が回復すると、私は自分を苦く叱責した、自分に任されていた少年を等閑にして、少年の解放を先延ばしにしていた、と。しばらくして薄い壁越しに法外なお喋りで邪魔された。下層の市民階級の二人の娘が隣りで湯を浴びていた。『とても辛いわ』と一人の娘がお喋りをして、愚かな恋物語を語り、『とても辛い』。一分後、娘達と一緒に忍び笑いをした。私が自分の怠慢をなじって、良心にツェントナーの重さの荷を担っているとき、私の横では二人の軽快な水の精が互いに巫山戯て、水を掛け合っていた。

ベルサイユでは、一」。

ルイ国王はこの時、侯爵夫人の近習デュボワに顔を向けていた。近習はこっそりと入って来て、囁いた。「陛下のお食事の準備ができました」。「デュボワ、余計なことだ」と国王は言った。老従者は、年季の入った顔に驚きの表情を微かに浮かべて引き下がった。というのは国王は時間にうるさかったからである。

「ベルサイユでは」とファゴンは繰り返した、「元帥が何人かの同輩と食事をしていました。ヴィラルールがいた。人々が言っているように、私も否認しないが、全くの自慢屋、英雄気取りで、それに陛下、御身もご承知のように、全くの恥知らずの乞食です。またヴィルロワがいた。敗残者で、死ぬべき定めの人間の中で最低の者、御身の恩恵のおこぼれで暮らしていて、不壊の自惚れと立派な作法が取り柄。高尚な頭のグラモンがいた。奴は昨日、陛下、御身の広間で、それも御身のトランプ台で、私を印付けのトランプで騙した。それにロザーンがいた。穏やかな顔の裏で、全く苦虫を嘔み潰した邪悪な奴です。済みません、私は御身の廷臣を心が臆する余り、グロテスクな明かりの下、歪めて見ていた。ミムール伯爵夫人も招かれていて、ミラベルはヴィルロワの隣りに座っていた。彼は哀れな娘を七十歳の戯言で不安な思いにさせていた。

ジュリアンは父親から食事の席へと命じられ、死神のように青白くなっていた。私は彼の悪寒の様子を見ていて、まじまじとこの犠牲者を神聖に気後れしながら眺めていた。

会話は、一 臨終の者を激しく持ち上げ、滑り落ちる者を残酷な足で深みへ蹴落とす促進術のデーモンが存在するのであろうか、一 会話は軍における規律違反処罰に関するものであった。様々な意見が見られた。そもそも体罰が許されるか、議論された。許さ

れる場合、どのような道具を用いるか。杖か、鞭か、それとも刀の平か。元帥は、人間的人柄で、すべての体罰に反対であったが、どうしようもない不名誉な違反行為の場合例外とした。グラモン、このペテン賭博者は、元帥に賛同した。ボワロー[Satire, X, 167f.]が言っているように、名誉は切り立った絶壁の島であって、この島には、一度後にしたら、もはや登攀できないからであると述べた。ヴィラールは、そう言って良ければ、半分道化師のように振る舞って、自分の擲弾兵の一人は、多分不当な懲罰を受けたのであろうが、ピストル自殺をした。それで自分 — ヴィラール元帥としては、一日課命令で述べることになった。ラフルールは自分なりの名誉心を有していた、と。会話は錯綜した。少年は混乱した視線で会話を追っていた。『打擲』、『名誉』、『名誉』、『鞭打ち』といった言葉があちこち飛び交った。私は元帥の耳に囁いた。『ジュリアンは辛そうだ。ベッドに就いた方がいい』と。『ジュリアンを甘やかしてはいけない』と元帥は答えた、『少年は気を確かに持てばいい。それに食事も間もなく終わる』。そのとき女性に丁寧なヴィルロワが内気な隣の娘の方を向いて言った、『御令嬢』と彼は鼻声で、気取って言った、『話して、ご神託を垂れよ』。ミラベルはすでに炎の上に座っている心地で、その上ジュリアンの途方もない様子に不安が募っていて、勿論いつもの慣れた口調になって、答えた。『体罰は王様達の中でも最も気位の高い王様の臣下には我慢できないものです。そのような辱めを受けた者はもはやこの世に長く留まりません』。ヴィルロワは拍手して、その小さな指の爪に接吻した。私は立ち上がって、ジュリアンを掴まえ、彼を連れて行った。この退出はほとんど気付かれなかった。元帥はこの退出を客人の何人かに詫びたかもしれない。

私が少年を着替えさせるとき、 — 彼自身はもはやそれができず、 — 彼は言った、『ファゴンさん、妙な気分です。私の五感が混乱しています。霊が見えます。多分病気なのでしょう。私が亡くなったら、 — 』彼は微笑した、『ご存じでしょう、ファゴンさん、今日イエズス会士の許で起きたことを。私の父にはそのことを知らさないでください。決して。父は死んでしましましょう』。私はそのことを彼に約束して、それを守った。犠牲を払うことになったが。今この瞬間まで元帥はそのことを何も知らない。

頭をすでに枕に置いて、ジュリアンは熱い手を私に差し出した。『有り難う、ファゴンさん。...すべてに感謝します、...私はムトンのように恩知らずではありません』。

陛下を煩わせますことは、今となっては余計なことになりました。すでに次の十五分間、ジュリアンは不明なことを口走っていた。経過と判断は自然の手に委ねられることになった。熱がひどくなって、動悸が早くなった。私は大きな部屋に折り畳みベッドを広げさせて、看病することにした。隣接の部屋に元帥は自分の地図や図面を運ばせた。彼は一時間ごとに仕事机を離れて、少年を見に来た。少年は父のことが分からなかった。私はこの父に敵意の視線を送った。『ファゴン、私に何の異存があるのだ』と彼は尋ねた。私は応えたくもなかった。

少年は空想に耽っていた。しかし彼の燃え上がる視線の中に浮かんで来るのは、単に好意的な、この世の生から消えた人影のみであった。ムトンが現れ、むく犬のムトンもベッドに飛んで来た。三日目には母親がジュリアンの隣りに座っていた。

彼は三人の訪問を受けた。ヴィクトールはドアを引っ掻き、開けて、私に招じ入れられ、とても動揺した悲痛の叫び声を上げて、私は彼を運び出さなければならなかった。それからミラベル嬢の指がノックした。彼女はジュリアンの臥所に近寄って、見つめた。ジュリ

アンは丁度落ち着かない半端な微睡みの状態であった。彼女はほとんど泣かず、干涸らびた口に情熱的接吻をした。ジュリアンは友達も恋人も感じ分けなかった。

いつの間にかアミエル神父もやって来た。私は彼を断らなかつた。病人が彼のことを他人行儀の目で見つめていたので、彼はベッドの前で戯けて跳ね、叫んだ。『ジュリアン、私のことをもはや忘れたのか。おまえのアミエル神父だ、小男アミエル、鼻男アミエルだぞ。一言言ってくれよ、私のことが好きだと』。少年は無関心のままであつた。楽園があるならば、私はそこにこの神父を見いだしたいと思う、高い帽子は被らず、均整な鼻の彼と手と手を取り合つて天上的庭園を歩きたいと思う。

四日目の夕方、動悸が激しくなつた。今にも脳卒中になりそうであつた。私は向こうの元帥の許へ行つた。

『どんな具合だ』。

『悪いです』。

『ジュリアンは助からないのか』。

『はい。彼の脳は疲れ切っています。少年は過労死です』。

『それは驚きだ』と元帥は言つた、『それは知らなかつた』。実際彼は知らなかつたのだと、私は思う。私の忍耐は限度だつた。私は容赦なく真実を彼に言つて、彼を非難した。自分の子供を等閑にし、その死を早めた、と。イエズス会士の許でのゴルゴタ丘での苦しみについては話さなかつた。元帥は黙つて私の話しを聞いていた。頭を彼の癖で若干右側に傾げていた。彼の睫毛が震えて、私は一滴の涙を見た。ようやく彼は自分の不当さを認めた。彼は兵士の自制心で自らを律し、病室に入った。

父親は少年の横に腰掛けた。少年は今、恐ろしい夢に圧倒されていた。『私は少なくとも』と元帥は口ごもつた、『私次第ならば、彼の死の苦しみを軽減させよう、ジュリアンよ』と彼はそのはっきりした口調で尋ねた。子供は父親と分かつた。

『ジュリアンよ、そなたは私のために犠牲を払つて、学業を中断する必要がある。二人で一緒に軍隊へ行こう。国王は国境で損害を蒙つておられ、年少の者でも今はその義務を果たさなければならぬのだ』。この語りかけは臨終者の旅立ちへの意欲を倍加させた。...馬を購入して、...出発し、...陣地に到着して、...前線に参列し、...彼の目が輝いたが、しかし胸は喘ぎ始めた。『末期の苦しみです』と私は元帥の耳に囁いた。

『向こうにイギリスの旗が見える、それを奪え』と父は命じた。瀕死の少年は空を掴んだ。『フランス国王万歳』と彼は叫んで、弾に当たつたかのように仰向けに倒れた。

ファゴンは終えていて、立ち上がった。侯爵夫人は感動していた。『哀れな子だ』と国王は溜め息を吐いて、同じように立ち上がった。

「何故哀れです」とファゴンは快活に尋ねた、「彼は一人の英雄として身罷つたのです」。

女士裁判官

第一章

「聖なる使徒ペトロとパウロに祈念申す」とアラコエリ[ローマ]で僧侶達が賛美した。一方カール大帝[742?-814、神聖ローマ皇帝800以降]は、ローマの三月の或る日、明るい空の下、カピトルの丘に導く階段のかなり傷んだ段を上がっていた。彼は厳かに皇帝の冠を被って歩いていた。この冠は先日、心から驚いたことに教皇レオ[三世]が速やかに熱中して彼の頭に被せたのであった。この世の至高の職務を拝受して、彼の真面目な顔に深い痕跡が刻まれていた。今日彼は旅立ちの前夜、自分の父小ピピン国王の冥福祈願の荘厳なミサに参列しようと思っていた。

彼の左手にはアルクイーン修道院長[735?-804]が歩いていた。一方廷臣のお供は、これはキリスト教国のあらゆる国々から選抜された宮廷学校の者達であったが、ほどよく離れていた。半ば敬遠して、半ば都合の良い折、穏やかに退却して、ミサから抜けだそうという魂胆で離れていた。頭为天辺から爪先まで鉄具で覆われた廷臣達は、無関心な表情と高飛車な身振り、高貴な足取りでぶらつき、周りの群衆の挨拶に手短に頷いて答え、永遠の都がいかに偉大なもの崇高なものを眼前に見せようとも、何ごとにも平然としているつもりであった。

今や彼らは最初の段の前で停止していた。一方上の広場ではカールがアルクイーンと一緒に青銅の騎馬武者像の前で立ち止まっていた。「この騎馬武者を眺めずに」と彼は学識ある頭目に向かって言った、「先へは行けない。何と穏やかに彼はこの世を支配していることか。彼の右手は祝福を与えている。この面貌は生き写しにちがいない」。

すると修道院長は囁いた、自分の学識で傲慢になっていた。「これはコンスタンティヌス帝[270 以降-337]ではありません。それはどうに分かりました。しかしそう見なされているのは結構なことです。さもないとこの武者と馬は火の中で溶けていたことでしょう」。小さな修道院長は爪先だって、大きな皇帝の耳に囁いた。「これは哲学者で異教徒のマルクス・アウレリウス[121-180]です」。「まことか」とカールは微笑した。

彼らはアラコエリの小門に向かって歩いた。その中へ消え、皇帝はすでに敬虔な思いに浸っていて、一人の優美な若者がラエティア人の服を着て、ほど遠くない所に立って、恐縮した挨拶を送りながら、彼の注目を引こうとしているのに気付かなかった。

「ちょっと諸君」とその間騎馬武者像の所に達した廷臣達の一人が叫んで、自分の側を歩いている左右の者達の手を掴んだ。「今はすべてが芽吹いて膨らんでいるから」、
大地の匂い、春の匂いが近くの庭園から迫って来た、
「私は自分の盃や、自分に好ましいものを董で満たしたいが、しかし香煙は頂きたくない、故人のミサの香煙はまっぴらだ。近くで一軒の居酒屋を見つけたぞ。乳飲み子を連れた雌狼の石造看板だ。飲みたくなかったな。もう少しこの武者を眺めて、それから居酒屋へしけこもう」。

「これは誰だ」と一人が尋ねた。

「ギリシア人の皇帝だな、
一」。

「これは退位させよう、
一」。

「両脚を何と広げているんだ」。
一

「奴は川の中を騎乗しているのか」。 —

「おや、馬丁だ」。

「いい馬だ」。 —

「太った豚のような膨らみだ」。

そのように続けざまに話された。生意気な洒落が飛び交った。古代の馬は徹底的に無慈悲に批判された。

優美なラエティア人は段々この嘲笑者達の輪の中に入ろうとしていた。彼の意図はそのグループの二人の哄笑者達の間に割り込んで、さりげないやり方でこの学校の人々と一緒になることであるように見えた。廷臣達も彼に注目していなかった。そこで彼は勇を鼓して、耳に聞こえる言葉でことさらに自分に語った、「大した人達だ、これらの宮廷学校の人々は。この学校に所属が許されたら、何という幸運の寵児か」。

甲冑の肩越しに一人の若い赤髭男が向き直って、悠然と語った。「我々は大抵ずる休みだ」。それからこの廷臣の体全体が、とても背の高い人間であるが、このラエティア人に嘲笑的顔で尋ねた、「少年、そなたの名誉ある両親は誰だ」。この少年は陽気に答えた、「私はクールの司教フェーリクス[不詳]の甥です。教皇への手紙を預かっています」。

「ラエティア人よ」と背の高い男は真面目に語った。「そなたは真実の源泉へと送られている。ここでそなたは使徒達の入口に立っているし、無数の告白者達の墓場の上にいる。正直に証言することだ。そして勇敢に告白しろ。私は司教の息子です、と」。

丁度そのとき、アラコエリの僧侶達は若々しい力強い声で、鬱然とした嘆き、許しの嘆願を詠唱した。「我が母ハ咎デ我ヲ孕ミシ」。

「ほらみる」とこの廷臣は教会の方を示した、「向こうの人達はご存じだ」。一群が甲高い笑い声に弾けた。

賢い僧侶の甥は怒りに駆られないよう用心した。須臾に赤面し、頭を軽く振って、彼は言った。「フェーリクス司教は、その山の影の中、貴殿らの学校から昇る教養の陽光を敬虔に言祝ぎ、歓迎されて、そのまだ若い向学心のある御自分用に、勃興する学問の主要な著作を若干、特にアルクイーン修道院長の議論の比類ない冊子を獲得する使命を私に託しました。そこで、この偉大で善良な教師は貴殿らの一人一人に立派な手本を渡されたと聞きました。そこでこの方々のお一人がひょっとしたら話しにに応じてくださるかもしれないと思ったわけです」。

「司教の息子よ、そなたは立派に真実を話しているわいな」と廷臣は彼を茶化した、「我がアルクイーンがとうの昔、ヘブライ人達の間には渡っていなかったら、我々は二人してこの時間それを元手に賽子賭博の慰みに興じていたかもしれん」。

「非キリスト者の手の許へですか。この神々しい英知が」とラエティア人は嘆いた。

「英知だと」と赤髭男は嘲った、「請け合うが、それは全く愚かな代物だ。ちなみに私は暗記してしまったことだ。いいか、山岳の住民」。彼は長い背中を、学校教師風に猫背に曲げて、眉毛を高くつり上げ、一同で最も若い者、縮れ毛の男に向けた。この者は、ほとんどまだ少年で、南方系の目で、陽気に愛しそうに笑いながら、罰当たりな遊びに入ってしまった。

「若者よ」と偽りのアルクイーンは説教した、「そなたの人柄は良い、学者向きの精神だ。そなたにとんでもなく難しい質問をしよう。いいか、答えられるかな。人間とは何だ」。

「六つの壁の中の一条の光です」と少年は敬虔に答えた。

「どのような壁だ」。

「左手、右手、前方、後方、上方、下方」。この方向のそれぞれを彼はある身振りで示した。五番目のとき、彼は輝く天を見上げた。あたかも天使の輪舞に驚いているかのようで、そして最後に床をじっと見つめた。あたかも埋められたタルペイア[罪人が投げ落とされた]の岩を発見したかのようであった。この茶番は歓声拍手で報われた。

宮廷学校生の陽気さが募って、司教の甥は不安に思い始めた。そのとき丁度良い折、一同から一人の者が、大胆な兵士が出て来た。この頑丈な体型の男は右脇に奇妙な渦巻きの角笛を掛けていた。「安心しろ」と彼は言って、ラエティア人の手を握った。「羊皮紙を一冊やろう。私のものだ。荷物の中に入れてある」。彼はこの若者を連れ出して救出し、カピトルの階段を下って行った。自分の仲間のことは更に気にしていなかった。

今や二人は親しく並んで歩いていた。もはや手をつないでいなかった。宮廷学校生の手は角笛へ滑り落ちた。司教の甥はこの角笛を注意深い目で観察していた。「この角笛は山岳からのものだな」。

「そうかい」と兜の兵士は言った、「どこの山岳だ」。

「我らの山岳だ、同郷の方。君の言葉遣いで君のことは分かる。君も私の言葉遣いで察したのだろう。宮廷学校生のからかいから私を救い出したとき、この点、感謝している。君に名乗ろう、私はグラシオズスだ」。 — 賢いラエティア人はこの優美な自分の名前を騎馬武者像の嘲笑家達には利口に黙っていたのである。 — 「あるいはドイツ語でグナーデンライヒ[恩寵潤沢]だ。君はヴルフリー、ヴルフの子息だな。この角笛が私の推察通りに君の世襲品ならば」。

ヴルフリーは額に皺を寄せた。故郷について聞くのは好ましいことではなかったのかもしれない。それから彼はグナーデンライヒを観察して、優美な恰幅の良い若者で、神にも人間にも愛でられる形姿は名前負けしていないと察した。彼は彼の丸い肩を叩いた。それは柔軟で、庇護するような愛撫に誘って、それから言った。「温かいな」。実際ローマの三月の太陽は輝いているばかりでなく、それどころか暑かった。

「いや、温かい」と彼は繰り返して、兜を持ち上げ、手で汗の滴を拭った。「一杯やろうか」、そして返事を待たずに、数歩進んだ後、修道院風な建物の開いた中庭へと折れて行き、そこの石のベンチに腰掛けた。グラシオズスも礼儀正しくその横に座った。「これ以上離れることは許されない」と廷臣は言った、「カール殿が学校生を呼び集めるときのホルンが聞こえる範囲でないと。それに私はこの若々しいものが好きだ」と彼は冗談を言って、一本の棕櫚を示した。わずかに離れた或る丘の先端にあって、軽い突風で揺れて、青空の中、そよいでおり、およそ一六年の年輪と思われた。「ここは新棕櫚亭と言って、門番のペトルスが渋いのを注いでくれる、おや、ペトルス」。このペトルスはもじゃもじゃ髭の老人で、炎の目、ベルトに二本の巨大な鍵を持っていて、ポットと盃を持って来た。

「新棕櫚[バルマ・ノヴェラ]と言えば女性名になるな」とグラシオズスは言って、口を湿らせた。

「そうかもしれない」とヴルフリーは答えた、「スペインでは記憶違いでなければ、そのような洗礼名、あるいは非洗礼名がうろちよろしている。私はこれには関知しない。女どもには私は関心がない」。

「君のラエティア人の妹も同じ名前だろう」とグナーデンライヒは無邪気に言った。

「私の　－　ラエティア人の　－　妹だと」。

「そうだ、ヴルフリー、ヒンターライン地方のマルモルト[虚構、モルトは殺害、Viamala 溪谷(悪路)を想起]にいる、私の隣人、女士判官[この職に女性がいたかは確認されない]の子供だ。君はその夫人の顔を見たことはないのだろう、シュテマ夫人、君の父親の二番目の妻だ」。

「三番目だな」とヴルフリーは呟いた、「私は二番目の妻の子だ」。

「君の方が詳しい。マルモルトに登場してからの、君の父親の突然の最期も、君は承知だろう。パルマはその死後生まれた」。

「そうかもしれん」とヴルフリーはうんざりして答えた、「それも有り得よう。しかし私に関心はない。私の気になること、これは父の従僕、石工のアルボガストが詳しく私に語ってくれた。私は彼とそのことを話し、数回議論し、最後にはベルトウーザ前のかがり火でも話した。ムーア人の矢がこの忠実な男を暗殺するほんの少し前のことだった。それは終わって、片付いたことだ。いいか、七歳のとき、私は故郷を追われた。　－　父は私の病気の母を修道院へ投げ入れた。私は一路カール国王の許へ逃げた。そちらへアルムガルトが私の遺産分を届けた。ヴルフ家のホルン、このこれだ。ヴルフ家の杯、これも遺産分であるが、これは異教徒風だな、　－　角笛は聖書起源だからで、　－　杯はマルモルトにある。そこにあるかもしれん、私が求婚するまでの間だ、これはしばらくかかる。それは保管されてあるだろうと思う。君はそちらへ行き来しているのであれば、それを君は多分見たことだろう」。

グラシオズスは頷いた。

「分かるか、両者、角笛と杯、これは二つの古代の品だ。徳操と力に関係している。杯をヴォルフ家の男児にヒンターラインの者達の一人の妖精、あるいは一人の精霊姫が与えた。ヴルフ家の妻がそれを自分のヴルフ家の夫に試飲して差し出して、そこに記された詩行を言う限り、一度は順に、一度は逆に、間違わずに言う限り、妻は夫に喜ばれ、嘉される。角笛に関しては意見は異なる。ある意見に従えば、これも一人の妖精の贈り物であって、夫が帰還したとき、砦の門で吹かれたら、ヴルフ家の妻は、とにかく夫の不在の折、犯した罪を何か白状しなければならなくなるのだ。他の意見ではこれに対し、こう言われる。つまり一人のヴォルフ家の男が約束の地で、この角笛を死海の硬直したピッチと硫黄の中から掘り出したものであり、それでこれは地上の騒乱の中、天上から落下し凍った戦笛であり、ソドムとゴモラの審判の際使用された審判の笛であろうとされている」。ヴルフリーはラエティア人の顔を見つめた。ラエティア人は　－　彼に　－　ずるいのか単純なのか　－　両の信頼している目を向けていた。

丁度風が故人のミサの断片をアラコエリから運んで来た。怒って脅かすように、僧侶達は向こうで歌っていた、「怒りの日、まさにこの日、大いなる、とても苦しい日」。

「美しいバスの声だ」とヴルフリーは称えた、「また杯の話しをすると、私はその力を信じない。きっと母は怠らず、その銘を祈念したのだ。順にも逆にも。何の甲斐もなかった。母は干涸らびて、父は突き飛ばした」。彼は嘆息した。

「角笛の方は」と悪漢グラシオズスは尋ねた。

廷臣は両手でそれを量って、微笑した。グラシオズスも同様に微笑した。

「ちなみにこれは軍で最良の角笛だ。よく鳴るぞ、聞いてみる」。そして彼は口に当てた。

「後生だ、ヴルフリー、止めろ」とグラシオズスは不安げに叫んだ。「ローマの町が暴動を起こすぞ」。

「その通りだな、それは考えていなかった」。ヴルフリーは角笛を運ぶ鎖の中に収めた。

「この角笛は」と今やグラシオズスは分別して言った、「私宛に図形を示されたことがある。それに従僕のアムガルトが石に刻んでもある、マルモルトの墓地の墓にな。それは君の父の伯爵を模写し、その横に夫人を模写しているものだ」。

「そうかい」とヴルフリーは恨んだ、「父は一人で休めなかったのか」。

グラシオズスは臆さなかった、「角笛の殿方に対し依頼されたことがあるのだ」と彼は言った。

「君は一杯依頼を受けているな。この依頼は誰からだ」。

「女士裁判官からだ」。

「どの女士裁判官だ」。ヴルフリーは飲み込みが悪い、あるいは速やかに彼の気分が悪くなるかのどちらかであった。

「それはシュテマ女士判官、君の継母だ」。

「その老婆と私が何の関係があろう。何故微笑しているのだ、若衆」。

「まだ美しく若い女性をそんな風に言うから」。

「老いた女性、と言ったろう」。

「頼むよ、ヴルフリー。君の父親が求婚したとき、彼女は十六歳だった。君の妹はそれより上ではない。計算してみろ。しかし若いにして、老いているにせよ、夫人が私に依頼した。私は依頼を果たさないでは帰れない」。

廷臣は一つの呪いを呑み込んだ。「クレッツァー[酸いワイン]が不味くなる。胆汁の味だ」。立腹して彼は盃をベンチから突き落として、その上に足を置いた、「では話せよ」。

「シュテマ夫人は」とグナーデンライヒは比喩的に話し始めた、「君の前で自分の手は無実だと洗いたいのだ」。

「盥を一つか」とヴルフリーは、外の路地に湯屋を呼び止めるかのように、嘲った。

「ヴルフリーよ、夫人が君の前に立っていたら、君の唇はお咎めを受けるところだろう。ラエティア人の中で夫人ほど道義の高貴な女性はいない。夫人の要求はもっともなことだ。夫人は砦の入口で、夫人の目の前で、突然君の父親は倒れた。これは恐ろしいことで、疑惑を持たれることである。シュテマ夫人はこう言っている、君を呼ばなければならぬのは奇怪なことである、自分は君をずっと、毎日、刻々、待っていた。君が成人に達してからのことだ。ただの呑気坊、怠慢の者、義務を忘れた者のみが、 — これは私の言葉ではなく、夫人の言葉だが、 — 夫人の責任を問うことを怠ったり、引き延ばしたりするものだ、と」。

ヴルフリーは陰気に見つめた、「この女は私の気に障る」と彼は言った、「私は父への恩義は承知している。父は私の母に対し、不届きなことをし、父への思い出は、 — 戦功を例外にして、 — 私には芳しくない。しかし私は父の最期を問題にして来た。目撃者のアルボガスト、彼は嘘を吐く男ではなく、彼を鋭く尋問した。こうなっては仕方な

い。君に下賤なことを機械的に唱えよう。ミサ・クレドの冒頭からアーメンまで。君はこの地方出身で、話しを承知していよう。何か欠けたり、余計過ぎたりしたら、文句を言えればいい。

父はイタリアからやって来て、マルモルトの判官宅に泊まった。ワインを飲み、賽子賭博をして、皆友達になった。父は、この父は、誓って、もはや若造ではなかった、――私が揺り籠から彼の白い髭をむしり取っていたはずだ、――この裁判官の子供に求婚して、この娘を得た。クールの司教の許で結婚式が挙げられた。三日目に諍いとなった。裁判官がその求婚を断ったと思っていたラエツェンツ[Domleschgの入口]の男が余りに遅滞してか、あるいは不当にか招待され、あるいは不適切な場に案内され、あるいは等閑な接待をされ、あるいは悪い泊め方をされ、あるいは他に何か不具合があった。要するに喧嘩となって、このラエツェンツの男が判官を打ち倒した。父はこの義父の仇を討つことになって、このラエツェンツ人を一週間追って、これに打ち勝った。一方嫁は判官を埋葬し、家に帰った。そこへ父が戦利品を持って帰って来た。父は慣例通り、角笛を吹いた。嫁は門に現れ、銘の言葉を称えて、ヴルフ家の杯を毒味した。これは父がクールでヴルフ家の慣習に従って、婚礼の贈り物として渡していたものだ。杯を嫁は三回毒味した。喉が渴いて横に立っていたアルボガストはその回数を数えていた。三回衷心からの毒味だ。父は杯を受け取って、それを一気に空けた。そして魂が消えた。この通りか、それとも違うか、司教の甥殿」。

「文字通り、誓ってそうです」とグラシオズスは証した。「砦の中庭を埋めた百人の証人にかけて、そう誓えます。彼らが存命である限りは、その通り。これが起きたのは、薄明かりの中ではなく、松明のゆらゆら明かりの下でもなく、清んだ正午の太陽の顔の下です。伯爵、君の父親は猛然と騎行して来て、鐙の上ですでに何回も飲んでいて、――」。

「しかし勢いのある肺で角笛を吹いたのだ、忘れるなよ」とヴルフリーンは嘲った。

「彼は汗が出て、ぜいぜい言った、――」

「彼は獵犬のように喘いだ」とヴルフリーンはもっと良く言った。

「彼は妻に憧れたのです」とグラシオズスが弱めた。

「酩酊して、発情したのか。白くなった髪ながらか。馬鹿なことを言うな。これを絵にするのか。壁に描くのか。この女士裁判官は何をしたいのだ。我々ヴルフ家の者は通常卒中で死ぬと私に誓わせたいのか。勿論これは真実かもしれない」。

「それが夫人の意志で、ラエティアでは皆、夫人の意志に従います」。

「ほら見ろ、夫人の意志だ」とヴルフリーンは嘲って笑った、「私の意志はそうではない。私の故郷は山の隅ではない。広大な世界だ。皇帝がその居城を移される所、あるいはその天幕を広げる所だ。君の女士裁判官に伝えてくれ。ヴルフリーンはスパイでもなく、邪推者でもない。その件には触れるな、父親を墓から引っ張り出すな、と。私は夫人を放っておく、夫人は私を放っておけないのか」。彼は手で、あたかも継母が彼の前に立っているかのように、手で脅かした。それから嘲った、「この女は判決や評決にのぼせているのではないか。誓いや証言に病的に執着している。正義や裁きに飽きることがないのか」。

「その点、何か真実がありましょう」と微笑してグラシオズスは言った、「シュテマ夫人は首切り役人の刀を愛し、数奇な錯綜して事件に好んで没頭します。夫人は鋭い明察を有し、それを常に発揮します。わずかな証拠から夫人はある犯行の全容を推察し、その織

細な指で隠されていたことを明るみに出します。自分の領地で犯罪がなされなかったということにはならず、消される犯罪は何もありません。犯人は夫人がすべて把握していると思ひ、夫人に見抜かれていると思ってしまう。夫人の視線は、瓦礫、壁を通じて見通し、夫人の前では何も秘匿されない。夫人は一つの名声を獲得していて、遠くから手紙や使者が送られ、彼女の英知が求められています」。

「この夫人はますます私の気に入らない」とヴルフリーンは恨んだ、「裁判官はその職責を劣等に司ろうと、正しく司ろうと、裁判官は大地の下に聞き耳を立てるべきではなく、消えた血の臭いを嗅ぐべきではあるまい」。

グラシオズスは宥めた、「夫人は自分の家を整理して遺言を定める意向なのです。夫人はまだ女盛りですが。ひょっとしたら夫人は、自分が亡くなったら、君が君の妹を不幸にしかねないと案じているのかもしれない、一」。

「不幸にするのか」。

「つまり、未解明のうやむやの件を口実にして妹から奪い、妹を追放しかねないという意味だ。だから、察するに、夫人は君をマルモルトに呼んで、君と和解したいのだろう」。

ヴルフリーンは笑った、「本当かい」と彼は言った、「夫人は私について上等な概念を持っているな。妹から略奪するのか。哀れな子を。その子がこの世に生を享けたのは、根本的にその子の責任ではない。しかし妹について何も知りたくない」。彼は話しながら、その視線は若いパルマ[棕櫚]の年輪を数えていた、「十五の年輪か」と彼は言った。

「十五歳」とグラシオズスは報告した。

「それでどんな容姿だ」。

「強壯で温かい」と溜め息を抑えてグナーデンライヒは答えた、「彼女は善良だが、野蛮だ」。

「それは結構、でも私は彼女について何も知りたくない」。

「彼女の方はわけても余所の好戦的なお伽噺のような兄について承知している、ザクセン人達と取っ組み合いをし、サラセン人達と喧嘩する兄だ。『兄が戻って来たら』、一

『これは兄のものだから』、一 『これを兄に尋ねなくては』、一 それで彼女の唇は乾く暇がありません。角笛を見るたびに彼女は飛んで行き、君の杯を握って、井戸に跳ねて行く。それを洗い、磨き、すすいでいる」。

「何故だい、この阿呆」。

「君のためにそれを毒味して差し出したいし、君の父がそれを飲んで死んだからだな」。

「愚かなことだ。それで君は彼女に求婚しているのか」。

凶星のグラシオズスは少女のように赤くなった。「母親は私を鼻屑にしてくれている。しかし娘自身に関しては自信がない」と彼は白状した。「君が家に帰ってくれたらいい。彼女と一言話してくれるよう頼みたい」。

再びヴルフリーンはこの親切な若者を観察して、再び彼の肩を叩いた、「彼女は君をからかっているのか」と彼は言った。

「彼女の話し方は謎めいている。私が最近自分の気持ちを仄めかすと、一」。

「両目を伏せたか」。

「違う、目は泳いだ。それから彼女は指で空の一点を示した。私が覗くと、禿鷹がいて、子羊を捕まえていた。分からない」。

「一点の曇りもなく明瞭だな、『私を奪って』。その娘は私の気に入った」。

「見てみたいか」。

「いや、一向に」。

このとき一人の宮廷学校生が中庭に人を探す眼差しで入って来て、それから素早くヴルフリーンに向かって来た。「ミサが」と彼は言った、「終わったのだ。国王は教会を去られる」。「皇帝」という言葉はまだ彼の舌先に上がる気配がなかった。

ヴルフリーンは飛び上がった。「私も連れて行ってくれ」とグラシオズスは頼んだ、「この地上の主君の間近に寄って、その話しぶりを聞きたい」。

「行こう」とヴルフリーンは愛想良く応じて、やがて彼らは皇帝の側に立っていた。皇帝の前に、一人の尊敬すべき、しかし若干粗暴な灰色髭の男が一膝を屈めていた。グナーデンライヒはマルモルトの城代ルーディオを認めて、このラエティア人は何の知らせを持って来たのか不思議に思った。というのはカール[大帝]は手に書状を持っていたからである。彼はそれを修道院長に渡し、アルクイーンが読み上げた。

「いとも崇高な御身、御身はローマからライン地方に移動されると聞きました。その道をラエティア経由にされるよう懇願致します。数年前から私どもの複雑な谷では、ロンバルディア人の分派が、公爵と称すヴィーティギス首領の下、巣くっております。私どもの地方の支配者達は、仲間内でさえ分裂していて、頭目がいず、彼らに太刀打ちできず、いや私どもの何人かは彼らに税を納めています。耐え難い状況です。御身は皇帝です。御身がこちらに来て、秩序を築き、御身の職責を果たされるよう要請します。シュテマ、女士判官」。

「簡明だ」と皇帝は言った、「私の使者達が私にこの女性のことは語ってくれた」。アルクイーンは書状を眺めた、「堅牢な筆致です」と彼は褒めた。

「アルクイーンよ、底なしの英知よ」とカールは微笑した、「ラエティアとは何だ。どのような隘路が通じているのか」。

小さな修道院長は称賛と質問とによって機嫌が良くなっていたが、しかし支配者の方を向かず、現実の廷臣、校長として、宮廷学校生の方を向いた。生徒達はすでに優に三分の一が、ブロンド髪も含めて、皇帝の周りに集まっていた。

「諸君」と彼は教示して、眉を高く擡めた、「ラエティアの山岳経由の道を行く者は、頑丈だが、しかし寸断されたローマ人道路の築堤を別にすれば、すべて上方ライン河畔の雪の向こう側に集合している幾つかの杣道を選ぶことになる。これらの道路や杣道は、万年雪の薄明かりの中、錯綜した谷の紛らわしい網目となって通じている。この網目からはいかがわしい人影や雪の恐怖の伝説が一杯生じている。こちらでは蛇の女王が、一鉢の牛乳に誘われてか、輝く水に向かってとぐろを巻いており、あちらでは暗い井戸から妖精が現れ、哀泣している」。

「師よ、妖精は何故そうしているのです」と赤髭男が好奇心を起こして尋ねた。

「妖精は、永遠の善を予感しているが、浄福になれない。奥の、雪と氷の間に、緑の草のある隅に、鈴のない家畜の群れが草を食んでいて、一人の巨大な牧人が、半分は万年雪、半分は雲であるが、家畜を見守っている。その下深く、最初の杣道が始まる所、罪のない無邪気な伝説はその威力を失っていて、人間らしい罪過がその洞窟や隠れ家を見いだしている。こちらでは破れた砦から煙が上がり、くすぶっているかと思うと、あちらでは一人

の殺人鬼が、カラスに囲まれて、千仞の谷を凝視している」。

「奴は誰を投げ込んだのだ」と赤髭男が嘲って尋ねた。

「何たることか」と修道院長は嘆いた、「我が寵児のそなたか。ベレグリーンか。我が最良の弟子、そなたの骨はラエティアの谷で白骨化しているのか」。彼は涙を拭った。それから彼は結んだ。「この双方、伝説と罪に対して、カールのフェーリクス司教は呪文を称え、その司教杖を振り上げておられる」。

「そのか弱い手で握ってか」と皇帝は冗談を言った。

「その杖は素敵な細工です」と合唱団少年の甲高い声でグラシオズスは叫んだ、「その曲がった杖では、告知の天使がこう銘を述べ、礼をしています。『地には平和を、人々には安寧を』と」。

カール[大帝]は司教の甥に陽気な視線を向け、学校生に向かって言った、「諸君の中にラエティア出身の者がいるか」。

ヴルフリーネが歩み出た、「主よ、私はそうです。若くして出奔しましたが、しかしその言葉、杣道を知っています」。

「それでは騎乗し、報告してくれ」。

「畏まりました、主よ」とヴルフリーネは去った。しかし頑固なグナーデンライヒに止められた。彼はヴルフリーネを掴まえて、皇帝の前に連れ戻した。「陛下」と彼は彼を訴えた、「彼はマルモルトの継母である女士裁判官の許への出頭依頼を受けています。この裁判官は他ならぬ先の手紙を御身に書いた女性ですが、彼はその気がありません。女士裁判官は、自分の夫、ヴルフ伯爵の突然の死去に関し、彼の前で身の潔白を訴えたいと主張しています」。

「かの男か」と皇帝は思案した、「彼は私にも、私の父親にも奉公した。そしてラエティアの山岳で不幸な目に遭ったな」。

「城の前、その妻、シュテマの足許です。妻は歓迎の杯を勧め、毒味したのです」とグナーデンライヒは思い出させた。

カール[大帝]は熟考した。「丁度私は亡き父の御霊の為にミサを捧げた」と彼は言った、「子供の絆は墓まで届くものだ。思うに、ヴルフリーネ、そなたはこの女士裁判官を無視してはならない。そなたの父親に対し責務があるう」。

ヴルフリーネは反抗的に黙っていた。このとき皇帝は右側の角笛を握って、全校生徒を集め、彼らに指示を与えようとした。角笛はなかった。皇帝はそれを宮殿に忘れたか、あるいはミサに温和な者として参列するために、意図的に残して来たのであった。「強情者め、そなたのを貸せ」と彼は命じ、ヴルフリーネは彼の角笛を頭上に持ち上げた。カール大帝はしばらくそれを眺めた。「大鹿からのものだな」と彼は言って、それを口に当て、吹いた。角笛はとても強力に恐ろしげな音色を出したので、廷臣達がカピトルのあらゆる隅、端から慌てて駆け付けたばかりでなく、また周りに集まっていたローマの人民が、突然の裁きが間近であるかのように、びっくり仰天して頭を伸ばした。しかしカール[大帝]は智天使ケルビムのように立っていた。

出発の人混みの中で、司教の甥は今一度廷臣に向かって言った。「マルモルトでまた会いましょう。同意して頂けますか」。

「嫌だね」とヴルフリーネは答えた。

第二章

岩の中から生長したようなラエティアの城の厚い壁の内側、僧院のような静寂の中、一つの泉が湧き出していた。苔むした楓のギザギザ葉を通じて、夕方の風が中庭を力強く吹き抜け、すでに黄昏の赤みががさつな壁に次第に上へと掛かっていた。井戸の泉の許では若い娘が立ったまま、勢いのある噴水を杯に受けていて、その古びて黒ずんだ銀器から水は泡だってこぼれ、剥き出しの娘の両腕に跳ねかかっていた。

「山も天候も穏やかだ」と娘は口ごもった、「私の足裏は朝早くからあの人[兄]を迎えたい一心だ。あの方は今日にも来るのかしら。それとも明日かしら、それとも遅くとも明後日かしら。グラシオズスが誓って言っていた、兄は皇帝と一緒に来ると、一 いや、皇帝に先駆けて夙にやって来る、と。皇帝は間近なんだ。その他にロンバルディア人が何を慌てて話題にしよう。どーんだ」。そして彼女は雪崩の鈍い打撃の音を真似た。それはやがて二番目、更に三番目の音となった。というのは広大なまばゆい万年雪の姿で尾根を見せていた山岳が今や絶えず溶けて崩れていたからである。

「白く崩落して深みに滑って行く髭の小人達、兄上に優しくしておくれ。小道を隠さず、馬の蹄の痕を消さないでおくれ。流れよ、湧き出でよ、死神の息吹から洗い出せ。兄上は陽気に生を飲み干して欲しい」。そして彼女は細い腕を差し出した。それから洗った杯を目の高さまで持ち上げて、妖精の銘を誦んじた。その銘を彼女は銀器の褪せた文字に刻まれているよりも明瞭に自分の心に銘記していた。銘は次のようなものであった。

「御身に祝福あれ、
剣を収めて、休まれよ。
里での憩いを愉しまれよ。
客人ではなく、主人として、
こちらのこのヴルフの杯を、
三回の私の試飲の後、
ワインを愛でませ。
ようこそ、...」。

ここで魔力のある銘は終わっているのか、あるいはたまたま風化したのでなければ、更に何か全く読めないものが続いているかであった。

彼女は元来すでに長いことこの銘を暗記していた。彼女はそれを順に言ってみた、上手く行った。逆に言ってみた、これも上手く行った。それから杯のその銘を見つめた。一 何度見つめたことか、一 銘は彼女の口で言って良いものか、妹が兄に対して述べても良いものかしら、と。というのはグラシオズスはこの思いを察知していたからである。彼女はヴルフ家の杯を持って立ち、その杯の試飲をしてヴルフリーンに勧めるという願いを抱いている、と。母親はこのことを許すかしら。母親はこの杯と何も関係しようとしなかった。母親は杯を昔から置かれていた所に放置していた。銘はこの娘の気に入っていて、娘は到着を思い描いていた。

「角笛が鳴っている。あるいは兄がこっそり私の許に来るのではないかしら。足音を忍ばせて来ないかしら。いや、来ない。私のことは知りたくないのだから。一 グラシオ

ズスの言葉がただ私への冗談でないのであれば。角笛が響く。杯を手に取ろう。母親より先に飛んで行こう。 — いや、もっと幸いなことに、母親は馬で出掛けている。私が家の女士領主。 — 今、あれは兄が近付く音、今やって来る」。彼女の心は動悸した。彼女は震え始め、言った。「兄上が来た、私の背後にいる」。彼女はようやく躊躇いながら、それからさっと砦の門の方を振り向いた。門の低いアーチの中に立っているのは、若い英雄ではなく、そこを窺うかのように貧弱な道化者が身を屈めていた。

娘は幻滅して哄笑に弾けた。そして愛想良く馬鹿面に向かって行った。それは一人のロンバルディア人で、その汚れて黄色のズボンの赤煉瓦色の結び紐でそれと分かった。貧窮と偶然の寄せ集めであるケバケバしい色合いのものを着て、この小男は先端の長くひねられたピッチのように黒い顎髭をしていた、ギザギザの眉毛と歪んだ顔とで茶番の仮面になっていた。

「あなたは何の用」と娘は尋ねた。

「叫ばないでくれ、小さな女士領主さん、いやむしろ大きな女士領主さんだな、だって、我がカトリック魂に誓って、そなたは手の幅三回分母親より背が高いからな。母親はどこだ」。彼は不安げに見回した。彼の視線は何かぞっとするものに止まった。中庭の中央、楓の影の中に幅広の石造の棺があって、そのプレートには武装した夫が、胸の上で両手を合わせている妻の側で横たわっていた。「おや、我らの親愛なる夫人が老亭主の側で静かに祈っている」とロンバルディア人が冗談を言った、「虫も殺さぬ様だ。その一方で夫人は女盛り、山を縦横自在に駆け、絞首刑にしたり、斬首刑にしたりだな」。彼は憂わしげに一本の楓の豪華な造型の燭台状の瘤を見上げた。「ここでさらし者になりたくないものだ」と彼は言った、「要するにだ、私は金細工師のラヒスだ、そなたとちょっと仕事の話しをしよう。そなたは兄を愛しているのか、若女士さん」。

この突然の質問にも娘はほとんど驚かなかった。娘は今日、昨日とずっとただ同じこの話題の主を考えてきていたからである。「私の命同様に」と彼女は言った。

「それは結構なことだ。しかしすんでの所で、そなたは死人を愛するところだったぞ。廷臣のヴルフリーンは我らの手に落ちたのだ」。

「兄は生きているの」と娘は不安一杯になって叫んだ。

「やむを得なければな。ヴィーティギス公爵は彼の心臓を狙っている、 — しかし女士裁判官が急に登場するのではないか」。

「いいえ、母はクールへ馬で出掛けました。話してよ、急いで」。

「それでよ、私は耳が良くて、それに壁のどこに穴があるかもご存じなんだ。ここのことは鶏小屋のイタチよりも詳しいからの。そんなわけで、そなたの兄は待ち伏せされた。彼は粗暴に荒れ狂って、それで我ら六人が彼にひるんだ。一人は傷を負って、他の者達は傷を負いたくなかった。しかし彼の馬が深みに転落して、彼自身は空いた岩地にさまよって上がって来たが、そこで我らは追い出し罠を仕掛けて、背後から彼の頭上に長い罠の網を投げたのだ。公爵のご意向は生け捕りだったからな。我らの敵、フランク族の進路を彼から聞き出すためだったのだ。しかしこの頑固者は一切黙っていた、自分の名前をもな。すると公爵は弓に矢を置いて、 —」、ラヒスは残忍な口笛を吹いた。

「それは嘘、生きているのでしょうか」と娘は勇敢に叫んだ。

「差し当たりはな。公爵は射なかった。というのは、 — ここから話しが面白くなっ

て、　ー　我らの仲間の一人のその若い妻が、女士裁判官の解放奴隷だ、そなたよりはほんの少し年上かな、　ー」。

「私の幼友達、ブルネッタね、ファウスティーナの子供、　ー」。

「まさにこの女がそこに飛んで来た。　ー　『神様の障りない耳目にかけて』と彼女は吠えた、『この哀れな殿方はヴルフ家の角笛を持っています。伯爵の子息に相違ありません。マルモルトの石像に横たわっている伯爵です。彼の実の妹、パルマ若女士は、私に小さいときからこの方のことを話されました。ずっと始終です。あなたは死んではなりません』と彼女は囚われ人の方を向いた。『若女士の大きな痛みとなって、若女士の可愛い心は砕けてしましましょう。いいですか、あなたは若女士の懸想している方です。若女士はまだ一度もあなたを目にしていけないけど。使いを出せば、若女士はすべての装身具であなただを請け出すことでしょう。若女士の宝石はすべて女士裁判官がその子供に、大きくなられるたびに、贈って与えたものです』。

それでヴィーティギス公爵はその囚われ人の名前を知って、その周りにいた[寵妃]ブロンド髪のロスムンデが素晴らしい宝飾の存在を知ることになった。夫人は公爵を抱擁して、マルモルトの装身具を懇願した。自分の額飾りの真珠が消失し、象牙の櫛はその歯が半分欠けてしまった、と。要するに金細工師のラヒスがそなたの許に送られ、この交換を交渉することになった。装身具か、それとも兄者か、選ぶがいい」。

このロンバルディア人がまだ言い終わらないうちに、この娘は砦に駆けて行き、急な階段を上がり、門内に消え、再び息せき切って、輝くもの、響くものを明るい色の上着の中、前掛け用に丸めて帰ってきた。これを彼女は左手で支え持って、右手で一個ずつ財宝箱からのように取り出し、金細工師の曲がった指に渡した。髪留め、額飾り、ベルト、真珠紐が、ラヒスの開けた袋の中に消えた。ロスムンデのブロンドのお下げ髪の為にも救世主と使徒の見事な浮き彫り細工の象牙の櫛があった。自分の両手の中を品物が通るたびに、金細工師は通人の褒め方をし、夢中になった娘にその喪失を感知させようと若干の意地悪な言葉も交えていた。彼女は一度もその口を開けず、自分のすべての所有物を投げ出すことに歓喜で輝いていた。

しかしそれでも彼女に疑念が湧いた。「あなたは正直な方なの」と彼女は言った、「兄者を私に渡すでしょうね。一緒に同行するのがもっと良いわね」。そして彼女は同行しようとした。

「駄目です、若女士」とこのロンバルディア人は抗弁した。「そうは行きません。若女士が我らの隠れ家を発見したら、兄者の命は言うに及ばず、若女士の命まで危うくなる。女士裁判官は若女士を我々が奪ったと思われるでしょう。お利口して、他人の勢力圏には入らない方がいい」。彼は袋を担いだ。「御令嬢、一つ微睡んだら、そしてまた目を開けたら、黄金と財宝をはたいた兄者が帰って来ます。請け合いますよ」。彼は憤然とした視線で大地に三本の指を垂らした。「下の地母神にかけて」と彼は誓約した。

「もっともらしい誓い」と女性の声がした。ラヒスはびっくりして振り向き、厳しい表情の兜の女性の前で跪いた。女性は手に持っていた槍を武装の下僕に渡した。女士裁判官は疲れた馬を労って、急な砦までの道を徒で登って来たと思われた。彼女はパルマの腕を庇護して掴み、このロンバルディア人を軽視して見つめた。「そなたが神やその聖人にかけて誓うと」と彼女は言った、「そなたの誓いは偽となる。むしろ嘘の神父にかけて、真

実を誓うことだ。そなたらは、ロンバルディア人よ、すべての神々しいものにかけて、二度とラエティアでは強奪も放火もしませんと約束したのではなかったか。それが今、そなたらすべての邪悪な者どもが、皇帝の目から逃れて、左右に灰燼と化す炎を放っている。私はクールから帰って来て、そなたらの犯行を承知している。偽証者どもめが。そなたのヴィーティギスに言うがいい。この女士裁判官が彼を追い詰め、懲戒してやるぞ、仮により高位の者が参上しなくても、と。しかしすでに皇帝はお見えだ。その手が彼を掴まえようぞ。たとえ地の果てに逃げようとも」。このとき彼女の目は金細工師の袋に落ちた。「何を奪って行くのか、泥棒」と彼女は軽蔑して尋ねた。

「まっとうな取引です」と金細工師は請け合った。袋を開けた。一方娘は急ぎ母親を抱擁した。「私が兄上を買い戻すのです」と彼女は叫んだ、「兄上はヴィーティギスの威力に抑えられていて、ヴィーティギスは彼の命を狙っています。そこで私は公爵夫人に、
— この無邪気な娘はブロンド髪のレストランを妻の立場へ昇進させていた、 — 私の装身具を差し出したのです、喜んで差し上げます」。

女士裁判官は彼女から離れて、ラヒスに尋ねた、「まことの事か」。

「私の首にかけて、女士領主」。

「この廷臣ヴルフリーンは皇帝に先駆けて来ると知らなかったら、そなたの言を信じなかったであろう。それに私自身、たった今、クールでロンバルディア人が一人の廷臣を捕まえたと聞いたばかりである。しかし嘘の可能性も考えられる。というのはカール大帝と食を伴にする者が、敵にその名前を名乗り、一人の娘に保釈を頼むとは信じがたいからだ」。

「違うの、母上。そうじゃないの」とパルマは叫んで、経過を語った。

「一人の生命を装身具の値段にする自惚れ女は、思いやりはある」と女士裁判官は言った。彼女は熟考しているように見えた。それから細工物に視線を投げた。「私は廷臣をビザンチン金貨で解放しよう」。

「それは私の委託にはありません。ロスムンデ夫人の気に召さないことでしょう」。

「それでは払わない」。

「それも結構です」とラヒスはにやりと笑った、「それではヴルフリーンの命はいらないということですか。女士領主には女士領主の理由がおありでしょう。全くご随意に」。

「母上、そうしないでください」とパルマは嘆いて、跪いて崩れた。

「そうね、そうはしない」と眉を顰めて思案して女士裁判官は語った。「何をしている。品物を持って行きなさい」。そしてラヒスは去った。

娘は歓声を上げて、母親の首にすがって、厳格な口に感謝の接吻を浴びせた。それから女士領主の戦闘的な兜を性急に奪って、それで黒髪のお下げ髪が解けて、下に散け、女士裁判官の決然たる顔に若々しい苦悩の表情を添えた。パルマの歓喜は収まる気配がなく、とうとう女士裁判官は疲れてしまった。「良い子、寝なさい」と彼女は言った、「暗くなってきた」。

「寝るの、ヴルフリーンが呼ぶかもしれないのに、どうして眠れましょう」。

「そのままベッドに寝なさい。きっと、あなたは微睡んでしまうから。さあさあ、ベッドに行きなさい」。そして彼女は両手を叩いた。

パルマは階段を飛び上がって行った。女士裁判官は城代のルーディオの方を向いた。城代はしばらく前から静かに彼女の前に立って待っていた。「何の知らせ」。

「女士領主、妙なことです。私は我らの牢へのドアが一杯に開いているのに気づいた。勿論門はしていなかった。丁度中には誰も入っていないのだから。私が降りて行くと、麦わらに人影があった。残りの明かりの中、ようやく誰か分かった。ファウスティーネだった。彼女は、ご記憶と存じますが、女士領主の許可を得て、その子供のブルネッタを一人のロンバルディア人、まああの男、女士領主が私の保証で召し使いとして採用していたこの男の嫁にさせました。ところが今余所者の民族移動が始まったというので、この子供、つまり嫁もその荷をまとめ、それで彼女は動転したと思われます。彼女は一方の手を鎖の輪の中に取めていて、それでも上機嫌なのです。『ルーディオ親方』と彼女は私に話しかけた、『あなたの斧を砥石で研いで、明日私を普通以上に痛くないように始末してください』と。私は彼女を叱って、彼女の腕を枷から外そうとした。『何という茶番だ』と私は言った。『そなたは貧しいがちゃんと糸巻き竿と蕪畑で働いて子供を立派に育て上げた。ここはそなたのいる場所ではない。そなたの類いは私の管轄ではない』と。彼女は反抗して言った、『あなたは知らないのよ、ルーディオ。女士裁判官の許へ行って、呼んで来て。女士領主はきっとこのもつれた糸を解いて、哀れな女の私に引導を渡してくれますから』。この阿呆な女を引っ張り出しますか。女士領主が下に降りて行って、きちんと教えてやってください」。

女士裁判官はルーディオに松明の用意をさせて、自分の先に行くよう命じた。低い小部屋に一人の囚人の女が座っていて、城代によって照らし出された。女士領主の合図で彼は燃える松明を鉄の輪に取めて、彼は去り、女性二人だけになった。

シュテマはこの自発的囚人に覆い被さって、有能な女医として自由になる方の手の脈を測った。動悸に熱の徴候はなかった。「ファウスティーネ」と彼女は言った、「何を気にしているの。どうしたの。自分の子供から離れなければならないと苦しんで、混乱しているのね。子供に付いて行きたいの。まだ時間はあります。あなたを解放しましょう。あなたはもはや私に隷属している身ではありません。皇帝はロンバルディア人達に定住場所を指示しましょう。あなたのブルネッタの所に行けばいい」。

ファウスティーネは頭を振った。「それは間違いです」と彼女は言った、「私がブルネッタの足跡を追いかけていて、娘にも呪われるほどだというのは。女士裁判官のシュテマ、それは関係ない」。「あなたは、私が夫を殺害したということを知っているでしょう」。冷静な眼差しでシュテマは同年齢のラエティア人女性の顔を見つめていた。それは鮮やかに照らし出された骨張った顔であった。それから彼女は一段上に腰掛けた。するとファウスティーネは彼女の両膝の所まで這って来た。膝には触れなかった。彼女の目は元気であった。「女士領主」と彼女は言った、「あなたは一切を承知でしょう。あなたが私を十年間、そしてそれ以上私を恵み深く、大事にして、私の犯行を隠してきたとしても、それは無邪気な娘、ブルネッタが被害を蒙らないようあなたが望んでいるからでしょう。私が娘を育てることを許され、この恵みを私に下さったのも、私があなただけの幼友達だったからよね。でも今は、ブルネッタは夫に従って行きます、だからもはやグズグズ遊んでいる理由はありません。この件に決着を付けましょう。私を裁いてください」。

女士裁判官はファウスティーネの身振り全体から彼女が正気であると分かった。この罪の告白に女士裁判官はとても驚いたが、しかし何でもお見通しという恐るべき自分の評判を落とす気はなかった。「罪の告白をしなさい」と彼女は厳しく言った、「それが懺悔の

第一歩です」。そしてファウスティーネは始めた、「話しは短いものです。射手のステニオが私に求婚しました、ー」。

「自分が狙い損ねた猪に引きずられ、殺害された男だね」。

「その男です。その後、判官がその騎馬兵のループルスに私を娶せました。私に不満はなかったけど、ー」、彼女は口をつぐんで、シュテマの汚れない耳を穢さないようにした。女士裁判官は彼女に助け船を出して、真面目に、悲しげに言った、「それでもあなたの心は亡き男の妻だった」。

ファウスティーネは頷いた、「すると、婚礼祭壇の前で、突然驚いたことに、ー」。

「あなたは自分が亡き男のものである、あなたも、生まれて来る子供もそうであると感じた」と女士裁判官は助け船を出した。

再びファウスティーネは頷いた。「これが全てです、女士領主」と彼女は言った、「ループルスはとても短気だったから、私を殺したかったことでしょう。でも生まれて来る子供のために私は口をつぐんで、夫に対して悪しきことを心に囁きました」。

「十分です」とシュテマは結んだ、「ただもう一点だけ。どこから毒を仕入れたの」。

「ほらね、女士領主」とこの女は叫んだ、「あなたは私が彼を殺したと分かっている。毒は私にペレグリーンが教えました」。

「ペレグリーン」と女士裁判官は覚束ない声で尋ねた、「あり得ないことです」と彼女は言った。

「彼はそれを私に見せて、注意するよう警告しました。私が絶望してジルブレッタの松林の中をさまよっていると、私は彼が長い、暗い色の外套を着て、屈んで根を掘り出すところを見つけた。花々は褐色の鐘の形で揺れていた。彼は私を呼び寄せ、手にこれらの花々の一つを持っていて、私に言った。『いいか、そなたも子供達もこの植物には用心するのだぞ。この葉液は医師の手以外では毒殺する』。彼は褐色のカールした髪の下、警告する眼差しで見えて、悪意はなかったけれども、私の心にとっても邪悪な観念を植え付けてしまった。彼の魂に咎はない。でも私は馬鹿げた話しをしてしまった。あの人はどうに神様に召されて天使となっています。噂では、あの人は大平原を目指して行きながら、山岳で没したと聞いています。その死はあの時からほどなくしてだった。まだあなたは覚えているでしょう。あなたの父上の判官は、傷を治してくれたあの方に賃金を払って解雇しました。あなたには好ましくなかった。あの人は賢い僧侶としてあなたにまだ沢山教えることがあったでしょうに」。

「お喋りは止めなさい」と女士裁判官は命じた、「それであなたの懺悔を終わりにしなさい。翌日あなたは自分の小屋からジルブレッタへ出掛けて、その根を掘り出したの」。

「はい、あなたは馬で通り過ぎた。私は見つからないよう、身を潜めた。あなたは二回馬上で振り向いた。それで、女士領主、慈悲を賜り、私に応分の仕置きをなさってください」。彼女は頭を胸の上に沈めた、それでその豊かな黒髪が顔の上に落ちた。

シュテマは、ファウスティーネの方を見下ろしながら、思案した。そしてファウスティーネの髪から、とりとめもなく指を動かして、一本の麦わら茎を引き出した。「幼友達のファウスティーネ」と彼女はようやく言った、「私にはあなたを裁けない」。

ファウスティーネの全身が興奮した。「どうしてできないの」と彼女は怒って叫んだ、「裁いてよ、さもないと叫ぶわよ、壁中に響く声で、夫を殺した女がいると」。

シュテマは彼女の口を塞いだ。「眠っている死人は放っておきなさい」と彼女は埋められていた骨を拾い出して来た犬を叱るかのように脅した。

「慈悲を賜え」とファウスティーネは懇請した、「私の頭を、それが神様にお祈りし、その十字架に接吻した後、刎ねてよ。その後、私の頭は天でまた蘇って、私どもは一緒に一つベンチに、ステニオは右手に、ループルスは左手に座って、互いに握手することでしょう。私はそれを望んでいます」。そして彼女は首を差し出した。

「馬鹿なことを言って。私はあなたを裁けない」とシュテマはより穏やかに言った、「理由は三つあります。聞きなさい。

あなたが犯行に及んだとき、まだ私の父が存命で統治していました。その死後、そして伯爵の死後、私が裁きの剣を引き継いだ。その時私は広く宣言しました。『過去のことは、すべて水に流す。自今誰も罪を犯すべからず』と。しかしたとえこう宣言しなくても、それでも私はあなたを裁けないでしょう。あなたは無罪放免です。だってあなたの犯行以来九十五年が経過していて、こちらでは太古からの慣習で、十五年経てば罪は時効になるのです」。

「時効って、それ何よ」とファウスティーネは呆気に取られて尋ねた。

「時間の作用でその力が無くなることよ」。

嘲りの笑い声が素早くこのラエティア人女性の白い歯に走った。「それでは例えば」と彼女は言った、「私が昨日のうちにも私の夫に毒を盛ったとして、一晩でその時が満期なのであれば、私は今日はもはや殺人者ではないわけ。たわけたこと」。

「いえ、あなたは殺人者に変わりはありません」とシュテマは気長に説明した、「でもあなたはこの世の裁判官とはもはや関係ないのです。ただあの世の裁判官と関係するのみです。善行で罪を償いなさい。第一歩は済ませました。十五年間の苦難の正直な年月はある程度評価されます」。

「何の評価も要りません」とファウスティーネは怒った、「あなたは私を労る気なのね。あなたは女士裁判官なのに、不正です。例外を見つけています。鼻屑しています」。

「黙りなさい」と女士裁判官は命じた、「私はあなたより聡いのです。あなたに言います。あなたの件はもはや裁けない、と。更に最後の理由があります。私はあなたを弾劾できない、あなたが望んでも。だってあなたにはあなたの阿呆な舌の他には証言者がいないのだから。でも分かるでしょう。クールに行って、司教に告解なさい。彼は牧人で、あなたは子羊です。司教はあなたにこの上なく厳しい贖罪を課すかもしれない。断食とか、重労働、山羊のシャツ、血の出る鞭打ちを。司教が優しすぎたら、これらを要求なさい。それで納得するでしょう。全身、教会に従いなさい。教会があなたの代弁をして、あなたは安心を得られるでしょう」。彼女はこれを確信して、微笑を浮かべて言った。

「私には分からない」とファウスティーネは嗚咽して言った、「私のような犯罪者が聖なる教会に従わないでいたら、神様に怒られましょう。でも本当に別の仕置きの方がもっと単純に思われたわ。私はずっとすでに苦しみながら、額に汗して無茶働きしながら、ただこう考え、計画して来た、私の子供が成人になって夫の許へ行ったら、さっさと天国へ行こうと。するとあなたがこの短い梯子を外して、私の道を邪魔する」。

「クールへの道は短いし、我らの大地の道は長いものではありません。聞きなさい、ファウスティーネ」。彼女は松明を握って、階段を歩いて上がった。ファウスティーネは打

ちひしがれた魂のように従って行った。

守衛が移動する松明に気付いていたので、砦の門が自動的に如く開いたが、その門の下で女士裁判官は外の夜を眺め、ファウスティーネに言った。「靴を脱いで、鋭い砂利でああなたの足裏を傷付けながら行きなさい。あなたは大きな犯罪人だから」。泣きながらファウスティーネは暗い夜道に踏み出した。

シュテマ夫人の言った通りであった。夫人が高い階の砦の部屋に入ると、パルマは眠っていた。彼女の深い息遣いの傍らには、三脚椅子に見守りの炎の微光があった。その娘は衣裳のまま寝台に横たわっていて、手は心臓の上に置かれていた。彼女は喜んで動悸する心を落ち着かせようとして、それで微睡んでいた。母親はその身振りを眺めていて、思い出を禁じ得なかった。

父親と夫の死後、そしてパルマが生まれた後、まだ二十歳になっていなかった女士裁判官が自分の世襲地の統治を決然としてその手に引き受けた。墮落して欲望の多い貴族階級の下、若くて美しい夫人に自ずと生ずる求婚者達と敵達とを、彼女は自分の年齢を凌駕する明察で分断し、順次自分の領民達の武器で制圧して行った。この勇敢な女士裁判官の兜や剣、それに正義の治世は、平和希求の司教フェーリクスによって、その堅牢なクールの宮廷で両手を上げて祝福された。激動の数年の後、シュテマの統治は安定し、大いなる静寂が始まった。すると過激な生活の反動が生じて、シュテマは眠れなくなった。自ら松明を燃やし続けて、果てしなく歩み続け、眠りを追放する始末だった。子供の臥所から遠くない所、低い窓のアーチ下の狭いベンチに彼女は当時よく腕を組んで座ったり、あるいは長いこと二本の瓶で遊んだりした。この瓶は壁に保管しているもので、薬学に詳しい若い僧侶のベレグリーンがマルモルトに残して行ったものであった。彼はマルモルトから去った後、手がかりなく山岳で行方不明になっていた。両方の瓶とも強力な水晶製で、ガラス製の栓の上には黄金の蓋があって、その一方のには「解毒剤」の言葉がギリシア文字で引っ掻くように刻まれていて、もう一方のには小さな蛇がとぐろを巻いていた。この二つの瓶で明け方まで遊ぶことがシュテマには癖になっていた。するとあるとき、それらで遊びながらとうとうとして、明け方の明かりで目覚めたとき、文字のない一方の小瓶が自分の半ば開けられた手から消失している出来事があった。彼女はとてつもない不安に陥って、探しに探した。ようやく彼女はそれを子供の小さな手の中に見いだした。小さなパルマが、彼女よりも先に目覚めて、裸足の足で忍び寄って、そのきれいな玩具を奪って、一緒に臥所に戻り、微睡みを更に続けたものと思われた。その子供は水晶瓶を小さな心臓に抱き締めていた。シュテマ夫人は慎重に小さな指を一つ一つ離して行った。

今や彼女は、以前の慣習に誘われて、長いこと鍵をかけたまま保管されていた水晶瓶を取りだした。彼女はこの水晶瓶をしばらく両手に持って、絶えず交替させながら、二つの瓶を昔からのやり方で愉しんだ後、その一方を自分のセーム革の靴底に置き、石造りのタイルの上で強い圧力をかけて、粉々に砕いた。流れ出た液体は快適なアーモンドの匂いを広めた。二番目の水晶瓶を靴底に置こうとしたとき、その黄金の蓋がまだ目に留まり、自分が瓶の選択を間違っていたことに気付いた。彼女はまず文字のない瓶を砕いたと思っていたが、それはまだ手に持っていた。頭を振って、彼女は小さな蛇の瓶を踵の下に置いたが、しかしより強固なガラスは頑固に抵抗した。彼女は再びそれを握って、すでに腕を上げ、それを壁で撃ち砕こうとした。そしてそれを中止した。投げて軋む物音で娘の微睡み

が妨げられることを恐れていた。あるいは別の考えが浮かんで、彼女はその瓶を丁寧に自分の広い胸元に隠したのであった。

シュテマ夫人は臉が重くなって、朦朧として安楽椅子に沈んだ。すると自分の椅子の背後からある物が浮かび上がって来た。それはゆっくりと微睡んでいる彼女の子供の臥所へ進んで行った。薄い霧のようなものが流れて来たが、その霧の中、部屋の諸対象は見えたままであって、一方花と咲く乙女はしっかりとした容姿のまま、力強く呼吸しながら横たわっていた。幽霊めいたものは、若者の幽霊で、衣裳から判断すると一人の僧侶、巻き毛を前に垂らしていた。この定かならぬ生き物は跪いて滑って行くか、あるいは石造りの床であったが、川の中を徒渉しているかのようにであった。シュテマは身震いすることなくそれを眺めていて、それが進路の半ばに達するまで、放置していた。それから彼女は優しく言った、「あなたね、ペレグリーン。あなたは長いこと見えなかった。あなたは眠ってしまったかと思っていました」。頭を向けず、更に一回ずつ前進しながら、この懈怠の男は答えた、「私を大目に見てくれて、有り難う。いずれにせよ、今回限りだ。私は消えてしまうつもりだ。しかし私の愛しい子供にまだ未練があるのだ」。

「あなた達死人は死んでいなかったの」と女士裁判官は尋ねた。

「我々はゆっくりと、ゆっくりと死ぬのだ」と僧侶は答えた、「どう思うかい、あのな」
— と彼はどもった — 「魂は体が朽ちたときでも、まだ成仏していないのだ。その間、私はこの哀れな外套を借用している」。その人影は自分の形姿の影を降る雨のように揺すった。「いや、現世の体というのは、何と激しく、悦楽の炎だったことだろう。この薄い上着では凍えて、棄ててしまいたいものだ」。

「その後は？」とシュテマは尋ねた。

「その後はか、その後はだな。聖書によると、 —」。

シュテマは額に皺を寄せた、「子供から離れなさい」と彼女はパルマにほとんど届きそうになっていた人影に命じた。

「厳しい女だ」とこの人影は呻いて、それから苦悩の頭を向けた。しかしそれから、シュテマの温かい腕に引き寄せられて、より速やかに彼女の膝へにじり寄って、その両膝に肘を突いたが、彼女はその接触をいささかも感じなかった。それでもこの人影は活気づいて、額は美しく湾曲して、穏やかな青い目が覗いていた。

「どこから来たの、ペレグリーン」と女士裁判官は言った。

「怠慢な葦と流れない河からだ。我らは岸辺でしゃがんでいた。愛しい娘よ、誰の隣りに私はこの間ずっといたか分かるかい、誰の隣りに、 —」と彼は験した。

「ヴルフ伯爵の隣り？」と女士裁判官は好奇心を起こして尋ねた。

「その通り。楽しい連れではない。彼はその槍に寄りかかっている、何か、いつも同じことを呟いている。それを忘れられないのだ。そなたが彼を殺めたかどうかだ。私は鼠のように黙っている」。 — ペレグリーンは忍び笑いをした。しかしそれから重い溜め息を吐いた。それから彼はこぼれた液を嗅いでいるかのように、鼻をクンクンさせ、別の瓶のあるシュテマの衣装の下をじっと見つめようとした。それでシュテマは素早く胸を手で覆った。

すると彼女は、この力のない生き物を自分の足下に投げ付けようという衝動に襲われた。「ペレグリーン」と彼女は言った、「あなたは何か計画しているわね。何か頭に筋書きを

描いているでしょう。パルマはあなたと何の関係もないのよ。あなたは彼女に関与していない」。

僧侶は微笑した。

「あなたは何か馬鹿げたことを妄想しているわね」と女士裁判官は嘲った。

「シュテマ、私は子供についておまえから聞かなくても分かる」。

「阿呆な、どうして分かるのよ。あなたに何が分かるの。夢を見ているのでしょうか」。

「私は覚えている」、一と須臾の生気を得た男は、自分の短く残酷な運命に戻って、一種の甘美さを味わっているように見えた。一「私が私の師の修道院長から離れて、山岳に向かったとき、そなたの父親が私を襲撃した次第を覚えている。判官は負傷していて、私の知識のことを聞いていた。そこで彼は私を呼び寄せて、私をそなたに引き寄せた。そなたはまだとても若く、それに何と美しかったことか。その残酷な黒い目をして。それでいて全く無知だった。私はそなたに文字と詩の作り方を教えた。しかしそなたはこれを好いていなかった。むしろそなたは村々の統治を好んでいて、諍いを収め、そなたの身内には女医として振る舞った。私はそなたに薬草の威力を示し、万物の醸造法を教え、そなたは装身具入れを私に二本の水晶瓶として持参した、一」。

女士裁判官は聞き耳を立てた。

「シュテマ、そなたはまだ若かった。そして私も若くて、おまえはお互いに愛し合ったときと余り変わらない」とペレグリーンは優しくすすり泣いた。

「お互いに愛し合ったわ」とシュテマは言った。

「そなたは私の腕に抱かれていた」。

「そのとき父の判官に襲撃されて、あなたは絞め殺された」と彼女は厳しく言った。ペレグリーンは喘いで、その痕が彼の首筋に見えてきた。「判官は私をラバに乗せ、それを引いて行き、私を深みに投げ込んだ」。

「ペレグリーンの、私は泣きました。でも考えてみて、咎はあなたにあるのよ。私は手に荷物を持って、三度あなたの前に立ちました。一緒に逃げてと脅して、懇願したでしょう。貧窮も悲惨も恐れず、一緒に歩いて行く遍歴を望んだのは誰です。でもあなたは青ざめ、真っ青になった。あなたは臆病なんだから。私はあなたを愛していた、命がけで。一あなたが一人前の男だったら、一父も故郷も、一切を私は足蹴にしたかったし、あなたのものになりたかったのです」。

「そなたはそうなった」と人影は囁いた。

「決してなったことはありません」とシュテマは言った、「私をご覧ください。私が咎ある女に似ていますか。情熱に身を任せる軽率な女に見えますか。私は躰正しい徳操の者なのです。私はいつもそうだったのです。あなたは私に触れたことがなかった。臆病な口でも私の口にほとんど触れようとしなかった。実際あなたはどのようにして度胸を得られたことでしょうか」。

すると人影は落ち着かなくなった。「いやはや、強引な二人だ、父親にそなた。父親は私を掠って、絞め殺した。そなたはシュテマ、血の滴で誘った。指を見せろ、そこに傷跡があろう」。

シュテマは両肩を上げた、「昔々よ」と彼女は嘲った。

するとペレグリーンは、すぐにまた穏やかになって、巻き毛を揺すって、秘めた声で歌

った。

「昔昔、遠い昔、
一人の侯爵とその娘がいて、
遠い昔、一人の若い僧侶が
その砦に仕えていた。

三人皆食事に座っていると、
この主君に郎党が呼びかけた。
判官の君、急ぎ馬を召されよ、
谷に獲物が見えまする。

判官は広い剣を帯び、
高らかに笑って家の短剣を、
娘と僧侶の間に立てた、
厳しい見張りの剣として。

素早く馬は判官を
嵐の如く運んで行き、
二人は静かに不安げに
目を打ち伏せていた。

シュテマは小さな指を上げ、
彼の心を乱さんと、
その光る剣の上に指を
上下に走らせた。

温かい血の一滴が逆り、一」

「黙りなさい、臆病者」と女士裁判官は怒った、「それはあなたが隠れた隅で夢想したことです。お天道様はそのような恥辱は知りません。シュテマは非難の余地なし。それに伯爵も、姿を見せればいい。釈明して見せましょう」。

「シュテマ、シュテマ」とペレグリーンは懇願した。

「失せなさい、意気地なし」。彼女は強い身振りで彼から別れ、彼の面影は崩れ始めた。

「我が妻よ、我が一」、「命よ」とかれは言おうとした。しかしこの言葉は気力の失せた者から出て来なかった。「助けてくれ、シュテマ」と彼は吐いた、「息するもの、花咲くものは、何と言うのだ、助けて言ってくれ」。女士裁判官は口を閉ざして、ペレグリーンは溶け去った。

目覚めて彼女は自分の子供の臥所の前に立っていた。彼女は娘の閉じた目に接吻をした。「知らないままでいなさい」と彼女は口ごもった。それから彼女はパルマの横、広い寝床

に滑り込み、娘を勝ち取った獲物のように腕に抱いた。「あなたは私のもの。あの消えて行った若者とは共有しない。私はあなたの居場所を日中のようにして、母ライオンのようにそっと見守ります」。夢は彼女のペレグリンを映しだしていたが、それは同時に彼のイメージが彼女の中で生きるのを止める過程であった。彼女はこの若者と結ばれていたが、それは愛情からよりも、反抗心や反逆心からもっと秘かに結ばれていたもので、この若者はどうに彼女の禁欲的な心から滑り落ち、沈滞していた。そしてかつて指先から迸った血の滴りはこの純化された女性にとって、誘惑的な没趣味なお伽噺に見えるものであった。すでに冥府の別の住民[伯爵]の方が彼女にとってはより信頼できそうに思われた。そして彼女は臥所で寝返りを打って、頭を枕に埋め、子供の肩から腕を離さないまま、眠りに落ちた。すると彼女は、伯爵が槍に寄りかかってうんざりして葦の間に座っていて、何か敵意のある言葉を髭の中で口ごもっている様を見た。嘲りの一つの微笑が彼女の小暗い顔に浮かんだ。というのはシュテマは身罷った者達の寄る辺なさを承知していたからである。

二人の睡眠者は夜明けの突然の角笛で目覚め、臥所から跳び起きた。声高な夜明けの呼びわりは女士裁判官の上品な耳に障った。彼女は誰が名乗り出たか察し、素早く決心し、確かな足取りで、ヴルフリーンに向かって行った。彼女より先に、パルマは素早くヴルフ家の杯を手握って、ドアから出て行った。

ルーディオによって開けられた門に歩み出て、シュテマは廷臣の前に立っていた。彼は夫人を賛嘆した目で眺めていた。その顔は彼に畏敬の念を生じさせていた。彼は四人の女達によって救出された自分の命について不躰な冗談を言うのを控えた。夫人の青ざめた面影の冷静に吟味する視線と高貴さとに圧倒されて、彼はただ言った、「まかり出ました、御夫人」、これに対して彼女は答えた、「マルモルトまで足を運ばれ、ご苦労に存じます」。

「妹はどこです、接吻の挨拶をしましょう」と彼は続けた。すると妹が、その間に杯に満たして、動悸する胸と光る目とで彼の許へ急いだのだが、しかし用心しながら、ワインをこぼさないようにして進んだ。彼女は兄の前に出て、銘を言い始めた。しかしシュテマは、伯爵に死をもたらした杯が子供の両手の中にあり、その縁に若い娘の口がかかっているのを見ると、反吐を覚え、深い嫌悪を感じた。彼女はしっかりとその杯を奪って、不意を突かれた娘はその杯を文句も言わず従順に離し、夫人が試飲して自らの口に持って行き、ただ簡単な言葉で廷臣に差し出した。「あなたとこの娘に祝福がありますように」。ヴルフリーンはこの杯を何の不安もなく、空けた。

パルマは狼狽し、恥じて立っていた。そこで母親は娘に鐘を鳴らすように命じた。鐘は高く上の空いた小塔の中であって、召使い達を広くお告げの祈りに誘うものであった。パルマは幼少時から軽いこの小鐘を鳴らすのが好きで、この役目はこの娘に残されていた。彼女は躊躇いながら従った。

「御夫人、何故あなたは娘さんの喜びを奪ったのです」とヴルフリーンは尋ねた。シュテマは彼に杯の銘を示した。「ご覧なさい、これは妻の述べる言葉です」と彼女は言った、「そのことは読み取れませんが」と彼は言った。

「ワインを愛でませ、
ようこそ、...」。

女士裁判官の指は消えた箇所を示した。そこにはより厳密に調べる目で見ると、まだ三文字が読み取れた、一つのi、大文字のK、一つのl。ヴルフリーンは苦もなく察した。

「ようこそ、小部屋[寝室]に」。

「その通りです、御夫人」と彼は笑った。

夫人は彼の手を取って、彼を石廟へ導いた。父は横たわっていた。左手で剣を握り、右手で角笛を握り、石の両足を伸ばしていた。ヴルフリーンは粗野ではあるが、誠実な面影を子供らしい感情を交えて眺めた。模写された角笛を見ながら、彼は脇に持っていた現実の角笛を突然の思い付きで、口に当て、力強く吹き鳴らした。「楽しき復活を」と彼は石廟に叫んだ。

「止めなさい」と女士裁判官は禁じた、「醜い音です」。

夫人は石棺の縁に腰掛けた。祈る両手を合わせている自身の平面な像の横であった。そして始めた。「あなたはマルモルトにいらしたのですから、ヴルフリーン、一聴取された証人達に基づいて、一私に対しこの夫の死に関し、告訴するか、あるいは免罪を宣言するかして去ってください」。廷臣は嫌そうな身振りをした。「従ってください」と彼女は言った、「あなたにとっては重要ではなくても、私に対しては果たしていただかなくてはならない形式的手続きです。私は厳密な女なのです」。

「グナーデンライヒがあなたにお伝えしたことでしょう」と廷臣は激昂して答えた。「私はあなたに嫌疑を抱いたことはない。私もアルボガストもない。彼は私に父の倒れた次第を語ってくれました。私は懷疑家ではないし、懷疑家として生きたくはない。どんな偶発時にも一つの作為を、どのような事故でも、その責任を追求する輩がいます。しかしこれらは欺かれた者であり、自ら欺瞞者です。この両者にはなりたくない。しかし仮に私が疑念を抱いていて、あなたに対して敵意ある心を育てていたとしても、今あなたの顔を見たら、私は武装解除していることでしょう。まことにあなたは殺人を犯しそうな人には見えない。仮にあなたが悪人であれば、どのようにしてあなたは悪を見いだし、それを裁く権利と品格を得られましょう。そんなことは自然に逆らうことです」。

沈黙が生じた。「しかしこの地底を揺する鈍い轟きは何です」。「これは奔流の音で」と女士裁判官は言った、「岩を削って、この砦の下、谷に落下しているのです」。

「御夫人」と廷臣は誠実に続けた、「私があなたを好きになれなかったのは事実です。何故か申しましょう。この白髪の子、私の父は、粗野な、腕力を振るう男でした。話したくないことですが、父は私の母を虐待し、思うに、殴ったのです。私は思い出したくありません。母の容色が衰えると、修道院に閉じ込めました。それで、母を追放することになったあなたに関して私が何も知りたくなかったというのは、我々人間の情として、不思議に思われないことでしょう」。

「私がしたことではありません。この点は誤解です。ここで一緒に会っていますから、ヴルフリーン、それを話さない法はないでしょう。私はあなたの母に何も悪さをしなかった。私の手が強引にあなたの父親の手に握り締められたとき、私の手はこの石像の手よりも冷たく、生きていなかった。私は父の判官によって、牢獄から引き出され、あなたの父親の許に投げ付けられたのです。判官は卑しい出自の臆病な震える私の恋人を絞め殺しました。ヴルフリーン、このようなことを、女なら誰でも話すとは限りません」。

「あなたの話しを信じます」とヴルフリーンは言った。

「一人の強制され、品位を奪われた女に」と彼女は強調した、「あなたの父親は臨終のとき、自由を与えました。そして私はマルモルトの女士領主になったのです。ヴルフリー

ン、あなたはこの件を調べてみる理由があります。この件は薄暗く、難しいものです。あらゆる面から点検してください。というのは、あなたも認めましょうが、私があなただの父を殺せば、私かあなたのどちらかが余計者になりますから」。

「私を嘲笑しているのですか」と彼は激した、「しかしそうではないでしょう。あなたは真面目で悲しげに見える。御夫人、いいですか、尋問と審判の永遠の明け暮れで、あなたは疲れ果て、参っているのでしょうか。まことに、思いますに」 — と彼の目は墓石を示した、— 「あなたは篤信の女性です」。彼はその女性の頭の周りに次の言葉を読んだ、「大きな罪の女のために祈り給え」。「ここのこれは大層なことです」。

「私は教会を信ずる女です」とシュテマは答えた、「しかし実際篤信な女ではありません。というのは私は単に、自分の心の裡で経験したことのみを信じているからです。あなたの下僕、石工のアルボガストは私の頭の周りに何と書いたらいいか、素朴な口調で尋ねました。彼のシュヴァーベンの故郷では、高貴な女性達の許では次のような銘が慣習的だと言うのです。罪の女のために祈り給え、と。『私用にはこう書いて』と私は言いました、『大きな罪の女のために祈り給え』と。だって、ヴルフリー、あなたが言った通り、私のすることは、大層なことなのです」。

「素敵だ」と廷臣は叫んだ、しかしこれはこの自己賛辞への返事としてではなく、頭を上げて、見上げたからで、パルマが立って、明るい音の小鐘を鳴らすのを見たのであった。彼女は長いこと回り階段で手間取っていて、天窓から長い間会えないでいた兄の方を振り返って見ていた。朝の陽光で金色に輝く塔の広いアーチの開口部から、明るい娘の姿が鳴り響く朝の天上に揺れていた。廷臣は鐘を鳴らす一人の天使を、あたかも何か色彩通の僧侶が高価な詩篇に描く可愛いイニシャル絵文字風に見ていた。自分で恥ずかしく思う親密な情が彼の心を捉え、満たした。この称えるべき小娘が何と言っても彼を死から救ったのであった。

その間に砦の中庭には女士裁判官の召使い達が集まっていた。多分百人強の男女で、黒っぽい、筋肉質の、日焼けした種族で、この兜の廷臣を興味深くというよりはむしろ敵対的に観察していた。廷臣は、再び地上に降りてきたパルマをその郎党の間に見つけて、進んで行き、浮世の材質の生き物に対して感じた須臾の敬虔な情に仕返しをしたいかのように、彼女の肩に手を置いて、花と咲く口を見つけ、その口に力強く接吻した。彼女は歓喜の余り震えて、答えようとしたが、しかしより素早く女士裁判官が左手で彼女の手を握り、右手をヴルフリーに差し出して、両人を人々の中央に連れて行った。

「兄と妹です」と彼女は伝え、反対の方を振り向いて、もう一度言った、「妹と兄です」。

おおよそ下僕や小間使い達はすでに察していた。というのはヴルフリーの石像の伯爵との類似は紛れもなかったからである。ただ父親よりも息子の方が更に生気があって、高貴な風であり、ヴルフリーの脇にある角笛は言うまでもないことで、これが目に顕著な証拠として、出自を明らかにしていた。

ただ皺だらけの全く耳の遠いおばさん、ジビレは何も聞こえず、何も理解していなかった。彼女は忍び笑いをしてちょこまか娘の周りを歩き、娘を窺り、撫でて、おまけににやりと笑い、歯のない口から吐き出した。

「私の可愛い御姫さん。母上は何という若衆を見つけてきたんじゃ。私や若返るよ。パリからの御曹司だな。偉い皇帝様に仕えとんなさるげな。カールした髪、文句なし」。

「黙れ、山姥」と下僕のディオニースがおばさんの耳許に叫んだ、「これは兄者だ」。すると彼女は答えた、「そう言っているよ、ディオニース。グナーデンライヒは慰めてくれる心根の優しい方じゃ。しかしこの殿方は激しい気性の荒ぶる兵士だ。幸せなパルムちゃん」。そのように不躰に彼女は更に長く喋っただろうが、人々が彼女を押し退けて、彼女は生意気な口を閉ざしてしまった。というのは朝のお祈りが始まって、より遠くのグループではすでに連祷が唱和されていたからである。あたかも自発的に早朝ミサは整然としてきて、半円を形成し、その中央で女性裁判官が後に続く歌を先導していた。歌は同じリズムと歌詞を、ますます緊迫し、ますます情熱的に繰り返して、マルモルトの上の天に呼びかけていた。

ヴルフリーンは、どのようにして敬虔な円の一方の端に来てしまったのか分からなかったが、自分の向かい側に妹を見つけた。皆が跪いていた。彼と女士裁判官は例外であった。彼の視線はパルマにかかった。両膝を突いて、膝の中で両手を組み合わせて、若いラエティア人の小間使い達と一緒に熱心に歌っていた。しかし彼女が胸一杯になって、やっと巡り会えた兄、新しい善良なこの若者と一緒に祝うこの歓喜の祝典は、彼女の目を煌めかせ、唇に歓声上がり、そのため連祷は黙ってしまった。開いた口は風を通じて兄の接吻に返事した。今や半ば起き上がって、彼女は両腕を彼の方へ差し出した。ほんの刹那の身振りであったが、しかし大いに若々しい情熱が噴出して来て、ヴルフリーンは思わず、暴力を受けたかのように、拒絶の動きをした。「跳ね上がり娘だ」と彼は内心笑った。「彼女にはきっと実直なグナーデンライヒは手こずることだろう。彼のためにこのやんちゃな娘を大人しく躡けて、この娘が敬虔な若者を蹴飛ばさないようにする必要がある。まあ、待ってなさい」。

そしてこの教育を始めようとして、女士裁判官がアーメンを称え、パルマが彼に向かって飛んで来たとき、彼は彼女からさっと身をかかわしたが、しかしシュテマ夫人の手に陥って、夫人が彼の手を握り、彼を厳かに中央に連れて行き、そして臆面もない声で話し始めた。「皆さん、男にしろ女にしろ、あなた方の中で、今から十六年前、ここに立っていて、私が伯爵を迎える様を見ていたほどの年齢の方、つまり撲殺された領主判官の復讐から帰って来た伯爵を見て、居合わせたほどの年齢の方、その方は残りなさい。他の若い方々は、ここから離れなさい、あなたパルマもよ」。

彼らは従った。パルマはふくれっ面をして一番外の砦の隅に戻った。半円の稜堡で、中庭より数段低くて、垂直な崖の上に突き出ている、その深淵には山溪の河が途方もない急流となって谷に落下していた。彼女はその胸壁の広い台に腰掛け、片腕で支えて、雪のように白い波の泡を覗き見た。それは繊細な雨飛沫となって彼女の頬を冷やした。そして深淵の騒音に、ただまた歓喜と自らの心の焦燥とを聞き取っていた。

彼女の背後の中庭では、その間法的な交渉が進行していて、尋問、反対尋問が続き、迅速かつ適切なもので、女士裁判官の指示に従っていた。

「ここに伯爵の息子がいらしています。貴方らは真実を述べなければなりません。それを証言してください。あのときの場面を覚えていますか」。

「今日のこのように」、 — 「私は伯爵が馬から飛び降りるのを見た」、 — 「我々皆が見た」、 — 「湯気が立って、喘いでいた」、 — 「御身が試飲された」、 — 「三回、長々と」、 — 「一気に彼は杯を空けた」、 — 「彼は沈んだ」、 — 「言

葉もなく、　－　「彼は横たわっていた」。

「十字架にかけて誓いますか」と彼女は尋ねた。

「そうするしかない。十字架にかけて我らは誓う」と多くの声の誓いの返事があった。

「ヴルフリー、お願いします。放心しているように見えます。どうなさった。しっかりしてください」。

急いで、不承不承彼は手を挙げた。

女士裁判官は彼の腕を握った、「軽いことではありません」と彼女は警告した。「私に無罪を言う前に、尋問し、調査し、吟味なさい。あなたは真剣な、重要な件を扱っているのです」。

ヴルフリーは彼女から身を引き離した。「伯爵の死に関し、私は女士裁判官に無罪を言明します。いつか私がこの件を蒸し返したら、私は罰当たり者です」と彼は怒って誓った。

砦の中庭は人が散り始めた。ヴルフリーは宙を見つめていた、そして女士裁判官の無実を確信して、それで安堵していたので、この厭わしい件を終了にしますという声を耳にした。　－　しかしながら彼は自分の内心から或る非難も耳にしており、あたかも父親を自分の不機嫌と性急さで犠牲にし、侮辱したかのようであった。それで彼は動かず立っていたが、女士裁判官がゆっくりと彼の方に歩み寄って来て、彼の胸元で背を伸ばし、彼の鎖と角笛を軽く彼の頭上に持ち上げた。「私の無罪放免と私どもの仲直りの担保とします」と彼女は親しげに言った、「私はこの音色が我慢なりません」。そして彼女は中庭と通って階段を降り、稜堡へ出て、右手を差し出し、その角笛を轟く深淵に投げ棄てた。

このときヴルフリーは我に返って、彼女の後を追って急ぎ、父親からの世襲品を取り戻そうとした。しかし遅すぎた。角笛を呑み込んだ耳を聳る絶壁を覗き見て、下の方でチューバや馬のいななきのような敵の凱歌を聞いた。彼の耳は、平野部にいたため、山溪の奔流の声高な音に慣れていなかった。彼がまた見上げたとき、女士裁判官の姿はなかった。ただパルマだけが彼の側に立っていて、彼を抱き締め、懇ろに口に接吻をした。

「放してくれ」と彼は叫んで、彼女を突き放した。

第三章

マルモルト[城]の或る窓辺で、そこから谷の地底がその塔や小村落と共に香る遠景として差し込んでいたが、女士裁判官はヴルフリーと一緒に立って、彼に自分の領地の範囲を示していた。「私が支配している所です」と彼女は言った、「そしてパルマが私の後を引き継ぎます。しかしヴルフリー、　－　兄としてのあなたの義務でもありましょうから、　－　私が亡き後、この広大な領地を妹がしっかり維持できるよう、あなたに支援の役目をとうに私は決めていました」。

「大いに練られています、しかし遠い先のことです」と彼は言った。

「遠かろうと、近かろうと、あなたは娘の生来の庇護者です。私は娘をこの国の有力者と結婚させられません。彼らは無法者で、自ら滅びてしまう一族です。私は鞭打たれる馬の尾に娘を結び付けるのは御免です。周りに殺害の血のこびりついていない砦は一つもありません。私の娘が一家の確執や復讐劇に巻き込まれてはなりません。いや、私は娘のた

めに、あなたのように善良で強い男を見いだせたら、私は安堵して、娘に対する何の義務もありませんと、あなたを自由に放免できることでしょう。私は娘の夫としてただグナーデンライヒしか知りません。彼は穏やかな男として、結婚後、この土地を所有しましょう。[柔らかな人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。マタイ,5.5]。しかしこの国を暴力沙汰から守れますまい。その数はこちらでは一軍団になるほどです。その息子の代になって、私の血のせいで、男と言えるものになりましょう。この若造が育つまで、あなたはあなたの武装の手でグナーデンライヒとパルマの上に立ち、統治を導く必要があります。というのは、あなたも永遠に皇帝と一緒に騎行されないでしょうから。ひょっとしたら皇帝はこの行政区一帯の伯爵へとあなたを昇進させるかもしれません。あるいは、その場合、私から一つの砦を得ることになりましょう。あれです、 — 彼女は地平線上の或る塔を示した、 — 「あるいは別の砦、あなたのお望みのままに。それともここ私自身の堅牢なマルモルトに住まれるか」。彼女は信頼して手を彼の肩に置いた。

「しかし御夫人」と彼は答えた、「妹に何か不都合が生じないようにすること、これは自明なことで、お約束します。しかし今は馬に乗る必要があります。今日のうちに、一時間後に」。

「皇帝の許ですか。すでにあなたはこの土地に詳しい私のルーディオを送って、ロンバルディア人達はマウルス山[不詳]での陣を固めていて、そこへ更に血なまぐさい襲撃をかける必要がありますと確かな情報を持たせてではありませんか。カール殿はメディオラーヌムにいると我らは承知しています。だからあなたは急ぐ必要はありません」。

「私はすでに余りに長くここに寝ていた。私は馬の鎧に乗りたい」と廷臣は言った。女士裁判官は譲歩して答えた。「それでは私に後一日ください。あなたがパルマを婚約させてくださるのを見たいのです。何故グナーデンライヒはここに姿を見せないのかしら。彼は多分、ロンバルディア人達のせいで、自分のプラトゥムに閉じこもっているのでしょう。彼は用心深いから。もっともこちらのロンバルディア人達は散っていると私は思うのだけど。あなたはご存じでしょう。行って、彼を連れて来ててください。それともあなたは妹のためにもっと良い男をご存じかしら」。

「いや、御夫人、彼女が彼を好いているのであれば。それに私が口を挿む件ではありません。これはあなたの件であり、二人を夫婦にする牧師の仕事です。私は私に贈ってくださった青毛馬に鞍を付けることにしましょう」。

夫人は彼を案じた目で見つめた、「どうしたの、ヴルフリーン。青白いわよ。ここで気分が悪いの。それにパルマへの扱いは、人形相手のようよ。投げ飛ばしたり、それからまた可愛がったり。あの娘が可哀想。どうしてそんな仕打ちをなさるの」。

「彼女は強引です」と彼は言った、「私は自分の肘は塞がれたくない。誰かが私にぶら下がってくると、私は我慢ならない。彼女は私の後を追いかけて来て、それで私が彼女を放すと、彼女は泣く。それで私はまた慰めなければならない。これは面倒だ。私は広大な平原にいて、大きな空間に慣れている。 — この岩場では万事混み合っている。山岳は威圧し、中庭は狭小にし、奔流は震え、 — どの隅、どの階段でも同じ顔が見えます。呪わしいマルモルトだ。ここに私を止めないでください。私はここで閉じ込められはしない。御夫人、計算をしないでください」。

「とても残念だわ」と彼女は言った。

厳しい言葉を彼は後悔した。「御夫人、私を行かせてください」と彼は頼んだ、「あなたにご満足頂けるよう、私は今日のうちにもグナーデンライヒを連れて来ます。妹を婚約させましょう。彼の家はどこです」。

「有り難う、ヴルフリー。グラシオズスはここから遠い所には住んでいません。プラトゥムです」。彼女は途切れた溪谷の方を示した。そこの上には緑色の高山牧場が高く聳えていた。「案内人を紹介しましょう」。彼女は下の中庭を指さした。そこでは一人の牧童が大鎌を研いでいた。パルマが彼の側に立って、お喋りをしていた。

「ガブリエル」と女士裁判官は彼を呼んだ、「プラトゥムへヴルフリー様を案内しなさい」。

「皇帝の後を騎行することを」と女士裁判官は説明した、「あの子は夢見ているのです。あの子を連れて行きなさい」。

「私も行っていい」とパルマが尋ねて、頭を上げた。

「駄目です」と女士裁判官は言った。

「兄上」と彼女は頼んで、両手を差し出した。

「またかよ、畜生」と彼は呪った。彼女の目に涙が溜まった。「それでは来なさい、阿呆めが」。

三人が無帽で、出発の用意ができて、湿った門に立っていると、周囲では陽射しが強くなって、見送る女士裁判官がヴルフリーに言った、「パルマをお預けします。守ってください」。

「万歳、出発、ガブリエル天使」と娘は歓声を上げた。

下の砦の道で牧童が言った、「若様、プラトゥムへは二つの道があります。一方は峡谷を通って行きます。もう一方は高山牧場を越えて行きます」。彼は手で示した、「若様と姫様に都合が良ければ、私はこちらにします。上の方が広大で陽気です。夕方にかけて少し崩れそうです。風に夕立の気配があります」。

「そうよ、高山牧場を越えて、ヴルフリー」とパルマは叫んだ、「私はそこで私の湖を見せましょう」。そして軽く裾をたくし上げて、彼女は明るい牧草地を越えて行った。それはやがて上向きになり、次第に急になった。

翼の上の如く軽快に、弾む息の胸で娘は山を上がって行き、照りつける陽射しの下、新鮮に涼しげに跳ねる源泉のようであった。山はこの娘のことを喜んでいるように見えた。娘の頭に綺麗な蝶が舞って、風がそのブロンドの髪と戯れた。

ヴルフリーはマルモルトの方を見た。灰色に煌めいて、ほとんど朝景色の中、判然としなかった。「一体」と彼は自問した、「向こうの石壁の中、私はどうしたことだろう。どうして私はこの無邪気な娘のことで胸騒ぎがしたのであろう。この陽気に戯れる、この明るい敏捷なシャモア、この素早い足の娘のことで」。彼は快活な気分になり、少年が喋り始めるのを好んだ。

ガブリエルは、女士裁判官のスパイとして忍んで行った先のロンバルディア人達のことを話した。彼らは神出鬼没であり、隘路に巣くいて、使者達を待ち伏せ、馬方から略奪する。彼らはイタリアから盗んだホット・ワインで酩酊し、奪った武器を自慢し、鉄壁の王冠の再建を威張り、世間の営みを否認したり、悪さをしたりする。彼らは連隊を率いるという悪魔を崇拝している。「しかし」と少年は結んだ、「彼らは敬虔なキリスト教徒です」。

だって、すべての聖遺物を我らの教会から見つけ次第盗むからです。皇帝様が正義の為に立って、彼らに確かな範囲を示し、一人の裁判官を与える潮時です」。

ガブリエルは、その刷新された威厳がその微光がこの荒くれた山岳まで及んでいる皇帝のことに話が進むと、彼の目は夢中になって、彼は叫んだ、「私は他ならぬこの皇帝にのみお仕えしたい。私はガブリエルと言う、それで拳で殴るのを好む。しかしむしろミハエルと言いたい、そして剣で斬り込むのだ。これは正義でなくてはならない。皇帝は常に正しい。だって皇帝は、父なる神、御子、精霊の三位一体なんだから。皇帝は世間の統治を引き受けられた。そして拳に煌めく剣を持って、キリスト教徒の平安を守り、千年王国を守護し給うのだ」。

そこでヴルフリーンは少年に皇帝のことを描写しなければならなくなった。皇帝の王冠の留め金、青色の長い外套、沈思した顔、短く刈った頭、垂れた口髭を描写した。「この口髭を我々廷臣は真似ている」と彼は笑って言った。

「皇帝の外見はどのようなか」とパルマは尋ね、ヴルフリーンは深く考えずに答えた。「穏やかだ」。

子供達は敬虔に耳を傾けていて、この世の君主と交誼のある人物に驚いていた。しかし芝地の広がっている高みに達すると、敬虔な話しはお仕舞いになった。ガブリエルは少年の歓声に善意に戯れて応答する真面目な岩の壁に跳ねて行った。パルマは廷臣の手を取って、深緑色の湖へ向かって行った。これは壁がその巨大な影を投げかけていて、すでに陽射しは高かったが、相変わらず隠されていた。三人は岩塊で覆われた岸辺を回って苔むした岬まで行き、そこに柔らかな座り場所を見つけた。ここで彼女は彼を腰掛けさせ、三人揃って座ると、彼女が言った。「一緒に山と谷とを歩き回わる兄と妹のお伽噺がやっと実現したわ。万事素敵に叶えられた」。

「この下にも一人妖精がいるかな」とヴルフリーンは少年をからかった。ガブリエルは返事をしないでした。というのは彼は廷臣に迷信深いと思われたくなかったからである。

「阿呆な話した」と廷臣は笑った、「妖精なんていない」。

「いません」とガブリエルは憂わしげに言った、そして耳を掻いた。「いません。しかし妖精に荒々しい言葉で呼びかけたり、それどころか水の中に石を投げたりしてはいけません。しかし若様、角笛はどこにあるのです。マルモルトに来られたとき、脇に持っていました」。

「奔流の中に落ちた」と廷臣はぶっきらぼうに片付けた。

「それは良くありません」と少年は言った。

「おーい、ガブリエル」と遠方から叫び声がして、別の牧童が現れた。「一頭の若駒がグリーン牧場に逃げた。真っ黒な毛に、額に白い印がある。賭けてもいいが、それはマルモルトのものだ」。

ガブリエルは一気に飛び上がった。「聖母様にかけて」と彼は叫んだ、「それは我らのマグラだ。私は追いかけなくちゃ。若様、御免ください。きっと行けましょう。人間は家畜より物分かりがいい。向こうです」、と彼は右手を示した、「向こうに赤い尾根が見えるでしょう。そこへ向かいます、その背後にプラトゥムがあります。姫様もご存じです、そして返事を待たずに、彼は去った」。

「パルマ」とヴルフリーンは笑った、「その下で妖精が光ったらどうする」。

「私は驚きません」と彼女は言った、「しばしば、私はここにいるとき、立ち上がることで、ゆっくりと岸辺から降りて行き、足先で水を試してみます。すると自分で没我の気分になって、泳ぎ、流れの中、水浴びをします。でもご覧なさい」。

彼女は荘厳な雪山を示した。それは二人の向かい側にあつて雲が晴れていた。その神々しい稜線が澄んだ空に綺麗に可愛く浮かんでいたが、しかし鋭さはなく、あたかも空を傷付けたくないかのようであった。そしてこれは、真面目さと魅力、力強さと愛敬の双方であつて、あたかも創造物が男と女、若さと老いとに分離する以前に形成されたかのようであった。

「今雪山が輝いて、歓声を上げています」とパルマは言った、「でも夜、月が明るくなると、雪山は青色の衣装をまとつて、親密に憧憬して語りかけます。最近ここに立ち止まることになって、その甘美な輝きに参つてしまつて、涙が溢れ、私の体から心臓が出る思ひでした。でもご覧なさい」と彼女は繰り返した。

一つの雲が白い山頂に、触れることなく、漂い、天上的祝典がゆっくりと移ろう形姿と共に始まつた。こちらでは杯を持つ腕が上がり、向こうでは友人達や恋人達が互いに体を傾け合つて、かすかに軽い豎琴の音が響いた。パルマは口に指を当て、「しっ」と囁いた。「浄福の者達です」。黙つて二人は遠方の移動を眺めた。しかし現世の眼差しで酩酊した天上的喜びは溶解して散つた。「残つてよ、でも仕方ない、行つて」とパルマは歓呼の身振りで叫んだ、「私どもも同じように浄福の者達、でしょう、兄上」。そして彼女は酔つた目で彼の目の底を見つめた。

魅惑的な魔力を持った蒸し暑い真昼の時であつた。パルマは兄を無邪気な愛の思いで抱擁した。彼女は風のように彼の巻き毛をさすり、足底の湖が岸辺に触れるように、彼に接吻した。ヴルフリーンは自然の中に落ち、大地の生命と一つになつた。彼の胸は憧れてきた。彼の心臓は千切れんばかりに動悸した。彼の目から炎が燃え出た。

すると子供らしい声がした、「ヴルフリーン見てよ、深みで抱擁し合っている」。

彼の視線は濃い影の流れの中へ滑つて行つた。岩や岸辺、兄妹の二人が倍加した。「この二人は誰だ」と彼は叫んだ。

「私どもです、兄上」とパルマはおずおず言つて、ヴルフリーンは妹を腕に抱いていることに驚いた。或る戦慄に襲われ、彼は飛び上がり、彼のすぐ後を付いて来るパルマの方を見ずに、陽光の中に急いで、それから間近の尾根に向かつて。そこにはこのときつば広の帽子の一人の男が長い杖を持って見張っているように見えた。

「今日は、今日は」とグナーデンライヒは、その場から一歩も動かさず、兄妹に歓迎の挨拶をした。彼はただ両手を二人に差し出した。「私は叔父殿に厳かに誓約しなければならなかつたのです」と彼は説明した、「ロンバルディア人達の危険が続く限り、我が牧草地の境界見張りをして回ります、しかし境界を越えては行きません、と。プラトゥムは司教区の封土であつて、教会は平和を守るからです。ようこそ、ヴルフリーン、それに劣らさうこそ、パルマ」。彼の視線は素早く廷臣と娘の間を走つた。両人は戸惑っているように見えた。彼もまた戸惑つた。というのは、二人が来た理由が分かるように思われたからである。二人が黙つているので、彼は大層なお喋り屋となつた。

「彼らは叔父殿にひどいことをしてしまつた」、と彼は語つた。「女士裁判官がクールにやつて来たとき、夫人は司教に対しロンバルディア人達と武器を取つて戦うよう説得す

る意向であって、それで我々は三人で、居間に座ってデザートを食べていたのだが、叔父殿は平和の申し子としてそれを断らざるを得なかった。シュテマ夫人と叔父は、時によくそうなるのだが、人間の性情の善意に関し、核心の部分で論争し合った。それというのも最近、二件ひどい事件が起きたからなのだ。モンタフンの男の若い妻、ユクンダが、この女にはフェーリクス司教が堅信礼を受けたのであるが、――」。

「私も一緒に授かった。彼女は司教のお気に入り」とパルマは叫んで、再び廷臣のすぐ横に立った。

「静かにしろ」と廷臣は苛立って言い、娘は一本の花の方へ走って行った。

「――一人の従者[貴族の出身]と共に夫によって捕らえられ、砦の窓から投げ落とされた。数日後、シャムスの男が、修道院墓地で短い口論の後、ベルギューンの男の頭蓋に殴りかかり、それでも二人は叔父の牧師らしい仲裁で互いに接吻をし、一緒に主の聖体を頂いた。このようなことをシュテマ夫人は叔父に対し非難した。しかし叔父は答えた、『これらは、感情爆発で、理性が一瞬眩んだものだ。しかし生来、善良であり、恩寵により、更に改善する』と。叔父殿はわずかばかりペラギウス[4-5世紀、原罪、恩寵を否認した]派なのだ、はっは」。

「ペラギウス派か」と廷臣はぼんやりと尋ねた。というのも彼の視線はパルマを呼んでいて、彼女は再び飛んで戻って来たからである。「それはギリシア人兵士の類いではないか」。

「違います、ヴルフリー、異端の類いです。つまり、シュテマ夫人と叔父殿は悪について論争した。そのとき司教は、近視なのだが、フェリーツィタスに、これは彼の夏の別荘のある近くの高台に、彼が命名した名前であるが、一つの炎を見つけた。『我々はロンバルディア人達の退却を祝っている』と彼は微笑した。シュテマ夫人はそこを見やって、平然とこう述べた。『思うに、あれはロンバルディア人達その者です。あの丘で炎の周りを悪鬼のように踊っています』。

すると広場で騒ぐ音がした。一人の悪漢が押し入って来て、言った。『司教よ、福音書に従って行動されよ。それで上着のポケットに金貨を詰めて、それを私に給え。向こうの祭具室の僧服はすでに頂戴致した』。叔父殿は固まった。この時そのロンバルディア人はシュテマに向かって行った。夫人は薄暗がりの中にいた。『そこの御夫人は』と彼は嘲った、『頭に後光が射している。その額飾りを出されよ』。するとシュテマ夫人は起き上がって、この者を恐ろしい眼差しで射抜いた。『控えろ』、『いやはや』と彼は言った、『女士裁判官だ』。そして跪いた。櫃や箱が開けられた後、ようやく哀れな叔父が安堵したとき、この地獄の悪漢はまた聖堂広場から窓辺の叔父へ叫んだ。彼は素足で、最も上等の修道院の馬に、深紅の祭壇用毛氈を掛けて、――自分はミサの服をまとって、この教会白馬のピカピカの尻に奪ったクールクールの司教杖でしたたかに打ち付けて、それで白馬は棒立ちになり、司教杖は砕けてしまった。『司教、祝福されよ』とこのロンバルディア人は叫んだ。敬虔な叔父は自重した。『安らかに行かれよ、我が息子』と彼は語って、両手を上げた。

『お主は、司教』とロンバルディア人は歓呼した、『悪魔に掠われろ』。

『お主も同様に』と叔父は返した。これは語らなかつた方が良かったかもしれない」とグナーデンライヒは半分後悔して終えた。「叔父はものすごく怒った」。

「ヴルフリーンよ、お互い永遠の間、会っていない気がする」と彼は言った、「君と会った後、すぐにローマを去った。しかしそこで何と色々体験したことか。何という知己を得たことか。私は君の冊子を取りに宮殿へ行った。そこでそれを著述した本人と会った。何という頭脳だ。小さな体の者にとってほとんど難し過ぎる。何とすべてその頭には詰まっていることか。この著名な男はほとんど十五分も要しなかった。しかしこのわずかな時間の中に、私が生涯かけて果たすべきすべての善行を確信させてくださった。それから全く謙虚なノックの音がして、こっそりと誰が入って来たと思う。 — 信じられるか、ヴルフリーン、 — 皇帝だ。私は畏敬の余り、消え入りそうであった。しかし彼は恵み深く、いいかい、ヴルフリーン、皇帝に尋ねられて私がした君についての話しを喜ばれたぞ。 —」。

このときグラシオズスは自身の言葉がもはや分からなくなった。というのは三人は家畜の群れの中に入ったからで、緑のプラトゥムは動物の鳴き声、咆哮で一杯になったからである。痩せて、狼に似た一匹の山犬が廷臣にクンクンと鼻を鳴らして、それから愛撫して飛びかかり、グラシオズスはその不躰さを咎めなければ、廷臣を舐めるところであった。パルマの方は家畜番の娘達に囲まれて、賛嘆の目で見つめられた。マルモルトの若い姫君は気さくであって、皆にその名前や家畜のことを尋ねていた。

「私は喋りすぎなかったと思う」と隙間ができたときグラシオズスは言った。「でも皇帝のご下問とあらば、君も分かってくれよう。 — 角笛や杯について事細かに報じなければならなかった。殊に驚嘆すべきシュテマ夫人に皇帝は関心を寄せておられた」。

廷臣はうんざりしているように見えた。

「何という男か」とグナーデンライヒは称えた、「世紀の果実にしてその高みだ。どのように称えても十分でない。しかしだ、しかし、 — ヴルフリーン、私は廷臣達から、その交誼を一切断つことはできなかったから、私の心を深く悲しませる若干のことを耳にした。レギーネという女性のことだ、...君は知っているかい」。

「それはお妾さんだ」とヴルフリーンは正直に述べた。

「ひどい、とてもひどい。太陽の中の黒点だ。完全無欠ではない例だ。それにカールの娘達はどうだ」。

「詰まらぬことを言うな」とヴルフリーンは激昂した、「私はカールの娘達の番人には任じられてはいない」。

「カールの娘達だって」と家畜の群れの中からパルマが叫んだ。「その名はね、ヒルトルート、ロートルート、ロートライト、ギーゼラ、ベルタ、アーダルトルート、ヒーミルトルート。グナーデンライヒはその一覧表を作ったのよ」。ラエティア人の娘達は自分達には馴染みのない名前を繰り返して、笑い声で弾けながら、若い姫君と一緒に連れ去った。

グナーデンライヒはその歩調を緩めた。親しげに、彼は廷臣の手を握ろうとした。「結婚は神聖なものだ」と彼は言った。「このことを皇帝も忘れるべきではなからう。皇帝は高みにおわすのだから。ヴルフリーン、私が婚外子であることを察知したろう。だから私は結婚に大きな意味づけをしており、自分の結婚では徳操の鑑でありたいと真に願っている。善良な娘が私と不仲になってはいけない。パルマでも時に心配になる私のこうした性向、私の堅持している性向を君は承知していよう。今は我々二人だけだ。 — 彼女は今日従順に見える。良い折かもしれない。 — 君の意志でもあれば、 —」。

「安心しろ、グナーデンライヒ」とヴルフリーンは勇気付けた、「その件は片付いている」。

ラエティア人の岩場の巣くっている乱暴者達の中の一人が、パルマに欲情して襲いかかっていたら、ヴルフリーンはその顔に刃向かって、剣を鞘から抜いていたかもしれない。しかしグラシオズスは余りに無邪気で、怒る気になれなかった。彼自身は突然、妹を嫁がせることに暗い恐怖を覚えていると感じた。

「片付いたというのは？」とグラシオズスは尋ねた、「君と女士裁判官の間で片付いたと言いたいのだろう。でも、どうかい、――パルマは結局私にとって、余りに野性的で、強すぎる女ではないか」。

「阿呆なことを言うな、尻込みするな。彼女が欲しいか」。

歩行者達ではこぼこの丘を越えていて、今や話題にしている娘を目にしていた。彼女は家畜番の娘達から別れて、高山牧草地を縦断する深い急流の小川の一つを前にしていた。彼女の横では群れから外れた迷子の子羊が鳴いていた。小川の縁では、発育不全の乞食女が、自分の傷付いた足から血の染みだした襤褸をしゃがんで外し、そして新鮮な水でそれを洗っていた。素早く娘は靴を脱いで、これを同情の視線と共にクレチン病の女の横に置き、子羊を腕に抱いて、流れと一緒に渡り、子羊を群れに戻した。

するとグナーデンライヒは閃いた。「私は挑戦しよう、彼女を貰う」と彼は叫び声を上げた、「彼女は良い、どんな生き物にもお慈悲深い」。

「それでは先に行って、婚約の宴を準備しろ。私が君の代理で求婚しよう。あれ君の砦か」。若干離れた所に、牧柵や馬小屋の地区から新築の円い塔がそびえていて、その上には丁度フェーン現象でとてつもない雲の竜が築かれていた。グナーデンライヒは橋を求めて、脇へ折れ、廷臣の方は勢いのある小川を一気に飛び越えた。

ヴルフリーンは妹の許へ行った。「裸足で歩いているのか、花嫁さんが」。

「私は花嫁さんではありません。あなたと一緒に世間を歩けないのであれば、靴は要らない」。

「そんなことを本気で話すような馬鹿娘ではないだろう。プラトゥムの令夫人が裸足で歩いてはならない」。

「グナーデンライヒは私に向かって口を利かなかった」。

「彼は私の口を通じて求婚しているのだ。他に好きな男がいないのであれば、彼と結婚するよう、私は勧める」。

彼女は頭を振った、「ただあなたがいい、ヴルフリーン」。

「私は勘定に入らない」。

彼女は澄んだ目を彼に対して向けた。「そうしたらあなたは満足かしら」。

彼は頷いた。

「ではあなたの気に入るようにします」。

「おまえは良い子だ」。彼は彼女の頬を撫でた、「おまえらが何もひどい目に遭わないよう、おまえらを守るつもりだ。おまえらの最初の男の子の際には名親になろう」。

彼女は赤面せず、目に涙を一杯浮かべていた。「それでは、まあ」と彼女は言った、「ゆっくりと歩き、一時間かけてプラトゥムに行くことにしましょう」。塔は二人の前に立っていた。しかし廷臣は妹を渡すこの時になって、彼女が自分にとってこの世で最愛の者で

あることが明らかになった。

「こちらで天使のように高みにいましょう」とグラシオズスは、彼の塔の小部屋を通過して螺旋階段を上りながら客人達を案内しながら女牆に着いたとき言った。そこに食事の用意が整っていた。食卓にはパンの側に一鉢の牛乳が木彫りのスプーンと共にあり、黒っぽいワインで一杯のジョッキ、それに司教の食器があった。というのはこの食器は司教冠と二本の司教杖の絵柄であったからである。三人は一つのベンチに座った。娘が中央であった。周りを囲む胸壁はとても高く、ほとんどその向こうは覗かれなかった。ただ天だけは見えて、天には不気味な硫黄色の雲が重なっていた。

「牛乳は私用で、君用にはワインだ、ヴルフリーン」とグラシオズスは言った、「このワインはロンバルディア人達が空けてしまう以前に、幸い司教の貯蔵庫から取り寄せていたものだ。しかしパルマ嬢は誰とペアになります」。「君とだ」と廷臣は言った。

そしてグラシオズスは食前の祈りを述べた。「もう一つの祈りをすぐに頼むぞ、さあ新たに、グラシオズス」とヴルフリーンは勇気付けた。

そこで、司教の甥は、大層雄弁であったが、この決定的瞬間のために彼が以前から考え込んでいた一切の優しい言葉、分別ある言葉をすっかり思い出せない事態となった。途方に暮れて彼は温かい褐色の目を眺めた。この時、彼は子羊と素足を思い出して、敬虔な気分になった。「パルマ・ノヴェラ」と彼は告白した、「私は御身を心の底から愛しています、全身全霊で愛しています」。

これは健気であった。娘は感動して、彼に手を差し出した。ヴルフリーンにとってこの求婚は悪くなかった。「それでは少しばかり陽気になろう」と彼は叫んだ、「二人のために一献」、彼はジョッキを上げて、飲んだ。グラシオズスはスプーンで牛乳を掬い、彼の花嫁の口に向けた。このスプーンはプラトゥムに一つしかないわけではなかった。しかしグナーデンライヒは象徴的行動を行いたかった。

彼女はすでに赤い唇を開けていて、言った。「今日、私は牛乳が嫌い。ヴルフリーン、私に飲み物を下さいな」。彼は彼女にジョッキを渡した。彼女はそれをとても素早く呑み込んだので、それで彼はまたジョッキを彼女の両手から奪った。その後、彼女は疲れて見えた。というのは彼女は頭を肩に沈め、次第に両腕の中に収め、居眠りをしたからである。フェーン現象の大気は窒息しそうに暑かった。ヴルフリーンもグラシオズスも同様に黙った。そしてグラシオズスは、スプーンで牛乳を掬い尽くして、最後はこの地方の習慣で、鉢を両手に持ち、口に近付けて、仕上げた。ヴルフリーンは若いうなじを眺めていた。彼はたまらず、うなじに唇で触れ、彼女は目覚めた。

「この塔の上で呪文にかかった三人の者どものようだわ」と彼女は言った、「グナーデンライヒ、行って、兄が描かれている本を取って来てください。修道院からの本、一分かるでしょう、— あなたがこの前訪問したとき、母に見せていたでしょう、私は母の肩越しに見ていたの」。グナーデンライヒは彼女の言うことに従ったが、明らかに不承不承であった。

パルマは探して、その頁を見つけた。ラテン語の文章の上に明るい色彩と綺麗な線で模写されていた。一人の武装者が腕を、付いて行きたげな身振りの一人の娘に対して拒絶して突き出していた。この武装者と彼とは兜以外共通点は何もなかったが、しかしその描かれた娘を長く見つめていると、その褐色の目とブロンドの髪は一層パルマに似て来た。し

かしその姿の周りに記されていた名は「ビュブリス」[カウノスの双子の妹、オウィディウス『変身物語』第九、450-665]であった。

「話して、説明してください、グナーデンライヒ」とパルマは頼んだ。グラシオズスは黙っていた。「それでは、私が説明しましょう。ここのこれはマルモルトの兄です、最初の兄の姿が描かれ、そして私を突き放すのです」。

「これは、パルマ、そなたと何の関係もない」とグラシオズスは不安げに断った。「放しなさい」。そして彼は彼女の手から本を奪った。

「二人とも退屈な人達」と彼女はふくれた。「私はいたくない。向こうの土手に密な茂みになって薔薇が花咲いている。花輪を作ってみよう」。

プラトゥム上空にまばゆい稲光が走って、廷臣の血管の中を炎のように貫いた。「何故その本を取り上げたのだ」と彼は苛立って尋ねた。

「娘向きのものではないのだ」とグラシオズスは自分を正当化した。

「何故そうではないのだ」。

「この本の妹は兄を愛している」。

「勿論妹は兄を愛するだろう。何が問題だ」。

グラシオズスは嫌悪の表情で答えた、「妹は罪深く愛しているのだ。妹は兄を欲している」。

ヴルフリーンは顔色を変えて、死人のように青ざめた。「黙れ、ならず者」と彼は表情を崩して、叫んだ、「さもないと貴様を壁から投げ下ろす」。

「後生だ」とグラシオズスはどもった、「どうしたのか、呪文にかかったのか。気が狂ったのか」。彼はヴルフリーンとその本から飛び退いた。ヴルフリーンはこの本を愕然とした視線で見入っていた。「頼む、ヴルフリーン、正気になって、聞いてくれ。これは異教徒の詩人が創作したものだ。軽率に嘘の虚構として書いたのだ。許されないもの、あり得ないもので、キリスト教徒の下でも、異教徒の下でも、怖気のするであろうものだ」。

「それで君はこんなひどいものを読んで、悪徳を喜んでいるわけか、ならず者め」。

「私はキリスト教徒の目で読んでいます」とグナーデンライヒは侮辱されて自己正当化した。「私は誘惑者の正体を知り、間違っ​​て罪を犯さないよう、自分への警告と防御のために読んでいるのだ」。

廷臣の手はこの頁の上で震え、痙攣した。

「すべての聖人にかけて、お願いだ、ヴルフリーン、その本を壊さないでくれ。この修道院で最も高価な本だ」。

「火に焼べてしまえ」と廷臣は叫んだ、広い空の燃える空の他には竈はそこになかったので、彼はその頁を引き裂き、細かくし、それらを高く渦巻く突風の中へ投げ棄てた。

一つの静寂が生じた。グラシオズスは呻いて、その切断された本を眺めていた。一方ヴルフリーンは腕を組み、不気味な目をして、考え込んでいた。するとパルマが戻って来て、そっと彼に忍び寄り、彼の物憂い頭に自分が編んだ軽い花輪を置いた。

彼は花輪を感知すると、縮み上がって、それを剥ぎ取り、引き裂き、駆けて来て上気した娘の足許に呪い声と共に投げ付けた。

彼女の目は燃え上がって、高く身を反らした。「まあ、嫌な人、私にそんなことをするなんて」。怒りの涙が溢れて来た。「ではグナーデンライヒも受け入れない。あなたお気

の毒」。

「パルマ」と彼は命じた、「すぐ家に帰りなさい。高山牧場を經由してだ。振り向くなよ。私は溪谷を通って行く。私を追ってこの道を来たら、奔流におまえを投げ入れるぞ」。

彼女は恨めしげに彼を見つめた。彼の死人のような青白さ、逆立った髪の毛、不幸な面持ちは、彼女の心を不安と同情とで一杯にした。彼女は彼に向かい、両手で彼の鼓動するこめかみを抑えたいかのような身振りをした。「離れろ」と彼は叫んで、鞘から剣を抜いた。

そこで彼女は向きを変えた。彼は胸壁越しに覗いて、彼女が荒々しく駆けて高山牧場を抜けて急ぐ様を見た。彼も砦を去って、奔流の間近の轟音を頼りに、溪谷への道に向かった。ラエティアでは最も恐れられている溪谷であった。グナーデンライヒは同伴しなかった。

彼が荒々しい奔流の谷底へ降りて行き、茂みの中に小道を探していると、彼の足や、照らし出す稲妻で、醜い夜鳥の妨害があったり、鋭い鳴き声のコウモリが、彼の髪へ迷い込んで来たりした。彼は一つの地獄に足を踏み入れた。すさまじい流れの上では不気味な形姿のものが、うごめき回り、煌めく天の閃光の中、分離し、また暗闇の中、抱き合った。そこにはもはや現世の何の明るい法則も、美しい節度も見られなかった。そこは恣意の、反抗の、反逆の世界であった。両腕が伸ばされて天に岩塊が投げ付けられた。こちらでは壁から脅す頭が伸びているかと思うと、向こうでは深淵の上に強力な体が掛かっていた。白い波の泡の最中に一人の巨人が寝そべっていて、胸の上にすべての崩落、落下を受けて撥ね返しており、歓喜して咆哮していた。しかしヴルフリーンは臆することなく、歩んだ。というのは、彼はこうした無法者達の下で、居心地良く感じたからである。彼も反逆の快感に囚われていた。彼は荒々しい平たい岩の上を滑って行き、足を彼に向かい呼びかけ、跳ね掛けて来る深みの中へぶら下げ、そして深淵と一緒に歌い、歓声を上げた。

そして振り向いた頭でまじまじと見てみると、一人の僧服の女が道に座っているのに気付いた。「尼僧よ、何の罪を犯したのだ」と彼は尋ねた。彼女は答えた、「私はファウスティーネ、夫を毒殺したの。それで、若様、あなたの犯行は」。

笑って、彼は答えた、「私は妹に欲情してな」。

するとこの夫殺しは驚いて、十字を何度も切って、大急ぎで去った。彼も自分の秘密を声高に言葉にして、驚愕し、魂消た。自分の言葉に責められ、彼は自分から逃げた。重く転がって来るものがあって、地底を揺さぶり、あたかも彼を呑み込むために、地底が開くかのようなであった。絶壁から彼の前に強力な岩塊が落下して、二度飛んで、飛沫を上げて奔流の中へ突入したのであった。

天はしばらく黙っていた。ヴルフリーンは暗い夜の中、覚束なく歩いた。すると再び溪谷は明るくなり、深淵の上に倒れた樅の木の上を、妹が裸足のしっかりした足取りで、彼の方へ向かって来るのを見た。今や妹は彼の前に跪き、彼の膝に触れた。

「私があなたに何をしたというのです」と彼女は泣いた。「何故逃げるのです。何故私を呪うのです。兄上、兄上。私が何の罪を犯しましたか。私は分かりません。ご覧なさい。私はあなたの後を追わざるを得なかった。私より強い衝動です。私は向こうを歩いていて、小道を見つけました。むしろ私を殺してください。あなたが私を憎むのであれば、私は生きて行けない。あなたが脅したように、なさってください」。

彼は叫び声を上げ、彼女を掴み、投げ、彼女が雷雨の光の中、岩へ向かい、よろめき、探るのを見た。彼女の膝は下に涼んだ。彼はこのくずおれた妹の上身を屈めた。妹は動かず、血が額にこびり付いていた。彼はその丈夫な腕で胸に妹を抱き上げ、この愛しいものを抱き締めながら、どちらへとも分からないまま、谷の方へ歩んだ。

彼は峡谷を後にした。すると彼の側で物音がし、一人の少年を目にした。少年は怖がる馬を手懐けようとしていた。「おや、ガブリエル」と彼は少年に呼びかけた、「女士裁判官に伝えよ。広間を整え、宴の用意をするように。千もの松明を燃やすのだ。私は妹との結婚式を行う」。嵐が狂乱の言葉を呑み込んだ。マルモルトはまだ稲光のする夜空に黒々とその塔と共にあった。

砦の小道をその荷と一緒に上がりながら、彼は上方で明かりがあちこち走るのを目にした。それから道の途中まで出迎えに来た母親に出会った。「ヴルフリー」と母親は両腕を差し出して嘆願した、「パルマはどこなの」。「お受け取りください」と彼は言って、生気のない娘を差し出した。

第四章

ヴルフリーが翌日目覚めたとき、彼は巨大なツェンブラ松の黒い影の束の下に横たわっていた。周囲の牧草地は昼の光を受けて煌めいていた。彼は丁度、かぐわしい森の香りを吸入しながら、快活に幸福に、ローマの円形闘技場での競技の夢を見ていた、槍投げで月桂冠を得たのであった。彼の血は平静に流れていて、額は澄んでいた。

彼は昨日パルマを母親の両腕に置いた後、暗闇の中へ退避した。足は迷いながら、休みなく、縦横に駆けて、彼はマルモルトの領地を、真夜中過ぎまで進み、それから朝のかわたれ時、崩れ落ち、鉛のように眠りに沈んだ。

彼は軽い傾斜の丘に囲まれた牧草地に至り、家畜の群れの鈴の音から遠く離れて、深く孤立した所にいた。ただ一羽のキツツキがつつき、二匹のリスがその緑の地の中央で跳ね回りじゃれ合っていた。ヴルフリーは微睡みを目からこすり落とし、見回した。すると丘の縁にマルモルトの切妻や塔の先端が見えた。彼は土手に滑り落ち、それらは視界から消えた。

次第に昨日のことが彼の頭に忍び寄って来た。彼はそれを振り払い、不審に思い、信じられないことだと思おうとした。自分は強力な者、自由な者、陽気な者、信頼できる者で、敵の目を直視し、間違いを剣で切り裂く者でなかったか。何が起きたのか。一人の謎めいた女が自分に呪文をかけて、自分に疑いがないことを意のままにした。山城で長い間、完璧な兄のことを夢想していた一人の娘が彼に向かって飛んで来て、巫山戯て彼の首にすがあった。見慣れぬワインの邪悪な杯、あるいは放恣なお伽噺の破廉恥な絵、あるいはフェーン現象の熱波、あるいはその他、何であろうと、ともかくこれらが彼を愚弄し、翻弄したのであろう。彼が岩に投げたもの、それは妹ではなかったろう、一　彼女がどうしてはっきり開いた深淵を渡って来られよう。　一　これらは何らかの雷雨の夜のまやかした。

「仮にそれは妹であって、私が妹を砕いたのであれば、今や私は彼女から自由だ」と彼は抗弁し、同時に果てしない同情を抱き、自分が虐待して始末した若い生命への切ない愛を感じた。彼は娘のすべての身振りを思い出した。彼女の甘美で無邪気な言葉の一つ一つ

が現前化して、彼はその浄福な目と、その後嘆き悲しむ目とを覗き見た。今や、泣きながら、甘えながら、彼と一体化する彼女を感じ、そして妹はまだ存命で、息をしていると思った。「我が命よ、私の血管の血よ」と彼は叫んで、再び、「パルマ、パルマ」と言った。

「ーアルマ」と木霊が繰り返した。

「パルマ、我が妻」。木霊はびっくりして、黙った。

致命的戦慄が彼の随を貫き震えた。右手で支えながら、彼は半ば大地から起きて、左手で、戦場でのように、出血する胸を触った。「本当だ」と彼は喘いだ、「私は無法者、不遜者、劫罰者だ。私は妹を生かすために、死ななければならない。しかし私は天を蔑するどんなことをしたか。どのようにして地獄を引き寄せたか」。速やかに彼は自分の人生を考えてみた。彼は何の失点も思い浮かばなかった。ただ許される間違いのみである。「犬も歩けば棒に当たるだ。私はまさに兜にひどい籤を引き当てた。戦場での残酷さは承知しているから、不思議なことではない。済んでしまうだろう」。かくて彼にとって生命は良きことに思われた。いつもは軽くあしらっていたのであるが、今やたとえひどい驚愕の下であっても、生命の深甚の魅力とその神秘的愛らしさを味わったのであった。あれは丈夫な両手を顔に持ち上げて、嗚咽した。

次第に影は長くなり、牧草地は静かになった。すると彼の肩に一つの手が置かれた。彼は頭を向けずに、言った、「参ります」。そして立ち上がろうとした。というのは彼の許に来たのは死神であり、最も急峻な深淵に彼を導くと知っていたからである。

「そのまま、ヴルフリーン」と優しく女士裁判官の声がした。「あなたの許に腰掛けましょう」。そしてシュテマ夫人が彼の横の苔の上に滑って来た。足先も覆っている長く広い衣装を着ていた。

「私に触らないでください」と彼は叫んで、後に退いた、「私は不浄の者です」。

「あなたを長いこと探したのです」と夫人は言った。「どうして遠く離れているのです。パルマのことが心配でしょう。パルマは単に軽く傷付いただけです。でも深く昏睡していました。目覚めてから語ってくれました。昨日溪谷で雷雨に見舞われ、彼女は滑って気を失ったのだ、と。あなたが抱いて娘を運んで来てくれました」。

ヴルフリーンは黙ったままであった。

「それとも娘の話は嘘で、あなたは娘を岩に投げ付け、娘を砕こうとしたのですか」。彼は頷いた。

夫人はしばらく黙っていた。それから手を上げ、再び彼の肩に触れた。「ヴルフリーン、あなたは妹を憎んでいるか、ー それとも愛しているのでしょうか」。夫人は廷臣が頭为天辺から足先まで震えるのを感じた。

「恐ろしいことだ」と彼は呻いた。

「恐ろしいことです」と夫人は言った、「でも説明できないことはありません。あなた達二人は遠く隔たって育ちました。互いの顔や姿に馴染みがなく、それで二人が出会った時、互いに新鮮で、物珍しく、未知の男女同様だったのです。勇気を出しなさい。あなたの思考や感覚にこう吹き込みなさい。パルマとヴルフリーンは同じ血である、と。二人は身震いし、冷静になり、もはや兄妹愛の天上的炎を大地の創造的熱愛と取り違えることはなくなりましょう」。

彼は答えず、ほとんど夫人の言葉を聞いていず、懇ろにこう口ごもった、「何故あなた

は娘にパルマ・ノヴェラと名付けたのです。稀な、美しい名前です」。

シュテマは答えた、「私は娘を若いパルマと名付けました。娘が墓の瓦礫から、瑞々しく、喜んで芽生えて来たからで、私の命にかけて、この細身の幹に対し不埒なことをする者は、私が裁き、殺します。まだパルマは罪を犯していません。あなたの狂乱の炎も、娘の睫毛の一毛も、衣服の一番外の縁をも焦がしていません。不幸な方、どうしてそのような難儀な思いをするのですか」。

「大地から蒸気のように発生する疫病のようだ。しかし私の守護天使はマルモルトに近付くなど警告しました。あなたが私を呼んだとき、私は耳を貸さなかった。私は道を曲がり、ロンバルディア人達の手に陥った。何故あなたはヴィーティギスの矢を妨げたのです」。彼は下の方を凝視した。それから彼は絶望して叫び声を上げ、女士裁判官の腕を握り締め、暗い目をその平静な顔にしっかりと据えて言った、「神の御頭にかけて、――」。

「パルマの頭にかけて」と彼女は言った。

「――娘は私の妹ですか」。

「他に考えられますか。他に言えません。何を考えていらっしゃるのです」。

「それならば、私の頭はおかしい。私の呼吸の一つ一つが罪です」。彼は飛び上がった。一方夫人はその逞しい腕で彼を抱いていたので、彼は夫人と一緒に高く飛ぶことになった。

「どこへ行くの、ヴルフリーン。深みへ、いいえ。あなたはこの強靱な体とこの勇敢な心を破壊してはなりません。馬に乗って駆けて行きなさい。皇帝の許に駆けて行きなさい。戦友の中に戻るのです。数日騎行したら、他の戦友同様に健康になり、自由な眼差しになります」。

「そうは行かない」と彼は悲嘆して言った、「我らは一軍の中に何の汚点も許さない。汚辱を隠して、裏切り者になって良いものだろうか」。

「馬に拍車を当て、日夜駆けなさい。山を越え、平野を越え、船に飛び乗り、娘とあなたの間に一つの海を、そして二つ目の海を設けなさい。イルカや水の精[ニクス]があなたを惑わすとき、青い世界から島や岬が出現して、大胆な冒険と新しい美しさを獲物として得ましょう」。

「それが何の役に立ちましょう」と彼は言った、「娘はいつも私と同行することになり、水の精は娘の顔を帯び、私はどの女を抱いても、娘を抱くことになりましょう。私は彼女と永遠に結婚しているのだから。いや、私は生きられない」。

「それは臆病です」と彼女は小声で言った。

その悪罵は一撃のように彼の顔に血を巡らせた。彼は反逆した。「あなたの言う通りだ、御夫人」と彼は叫んだ、「私は臆病者として死んではならない。あなた自身が私を裁き、判決を下すべきでしょう。白日の下、すべての人々の前で、私は自分の蛮行を告白し、贖罪を行いましょう」。そのように彼は激昂して叫んだ。しかし彼の表情は穏やかになった。というのは自分にふさわしい解決法を見つけたからである。

「無意味なことです」と彼女は言った、「そのような秘め事を公に晒すものではありません。だってあなたは考えの中だけでの犯罪者なのですから。でも実行したら、実行のみが、裁かれるのです」。

「御夫人、そのことは明らかになるでしょう。私の行うことを聞いてください。私は皇帝の許へ行き、皇帝に申します、『ご覧下さい、廷臣のヴルフリーンは己の血、父の子を

妻に望んでいます。仕方ないのです。この罪人をこの世から消し給え』。すると皇帝が仰せられる。『犯行は実行されていない』。するとヴルフリーンが答えます、『私は一息ごとに実行しています』と」。

「近親相姦は」とシュテマ夫人は脅した、「火刑です」。

「あなたは人々の前で告白なさるのですか」。

「私は自分が現にそうである者として」と彼は言った、「立つつもりです」。

「だったら秘密の罪を保持するという分別と力があなたには欠けています」。

「それは女の流儀で、女の悦楽だ」と彼は軽蔑して言った。

「それであなたは皇帝と一緒に現れて、私があなただを裁くことになるのですか」。

「あなたがその予定だ」。

「それでは致しましょう」と彼女は言って、ゆっくりと遠ざかった。

今やヴルフリーンは自分の運命が決定し、完結したと思い、夕方の安らぎが彼の中に生じた。彼は自分のツェンブラ松の下に、太陽が沈み、昼が夜になるまで、留まっていた。そして太陽の放射状光線が途切れて収まり、天上の流血が散ると、彼の姿は太陽と共に消え、その妹が、黄昏同様に、緑の衣装を着て、静かな足取りで彼の後を追って来るのを見た。剣を放棄したことを後悔していなかった。「向こうでも一人の兵士が必要であろう」と彼は自らに言って、すでに浄福の英雄達と一緒に散策していた。

夜になって、月が照り出すと、彼は穏やかに山を下って行った。というのは彼は脇の谷へ降りて、マルモルトや妹の足跡に接触せずに、皇帝の許へ行こうと考えたからである。両者には単に裁判日にのみ再会しようと思っていた。彼は瀑布なしに幅広く岩礁の上を流れているこちらの奔流に達した。月光に誘われて、彼は一片の岩の上に横になり、願望もなく苦痛もなく、波と共に流れ去りたい気分となった。彼自身が夢となっていた。

そのとき彼は妖精、あるいは精霊姫が出現するのを見た。それは奔流の中、白く泳いでいた。うなじが微光を発し、今やきらきらする腕が角笛を高く持ち上げ、月光の中、その角笛が銀色に光った。それは自分の失われた世襲品の角笛であって、彼は慌てず、驚かず、この好意的奇蹟に近寄って行った。

「ヴルフリーンさん」と少年が歓声を上げた、「喜んでください。幸運なことです。角笛が見つかりました」。そしてまた牧童の服をまとったガブリエルが彼の許に飛び上がって来た。

「すでに今日の正午」と彼は語った、「谷底で魚取りをしていて見つけました。すぐに分かったのですが、しかし一人つきりではなかった。それで夜まで待たなければならなかったのです。これはすでに長いこと放置されていたのですか」。彼は角笛を揺すって、入念に膨らみの部分から水を抜き出させた。「駄目になっていなければいいけど」。彼はそれを口に当て、吹き込んで、山々が木霊した。「どうぞ、若様」と彼は言った、「実際、何も悪くありません。頑丈な戦の角笛です」。

ヴルフリーンはそれを握って、自分の体に掛けた。しかし彼は金の指輪を、一何らかの戦利品を、一手から抜いて、少年の労に報いようとしたとき、ガブリエルは断った、「若様、結構です。むしろ皇帝が私を騎兵の一人に加えてくださいますよう、口添えを一言お願いします。でも今は家に帰らなければならない。馬小屋でまだ仕事があります。私と一緒に参りますか。上へ通ずる岩場の足跡は承知しています。裏の小門を通る方

が、砦の道を行くより、倍早く砦の中庭へ行けます」。

そしてヴルフリーンは従った。この少年の誠実な手際の良さのお蔭で彼の五感と精神は温められていた。自分の世襲品をまた得たことで、父のイメージと子供らしい志操とが目覚めた。妖精は人間の少年と判明したが、奔流の上には精神のご加護の微光がちらちらしていた。「結局は父の出番だ」と彼は自らに言った、「父の力があれば、父は私に加勢してくれよう。父がまだどこかに存在しているのであれば、私を惨めに死なせはしないだろう。私は父を呼び寄せよう。ひょっとしたら父は答えるかもしれない。使者は墓場で子供らと語るといふ信仰が存在している。私はそれに賭けてみよう。父を角笛で目覚めさせよう。そしてただこう尋ねよう。父上、パルマは御身の子供ですか、と。父は語らないとしても、頷くことはしよう。それとも頭を振るかだ」。廷臣は自分の威力を及ぼす人柄のシュテマ夫人に疑念を抱かなかったが、存命の女性に対する信頼と、亡き死人の男性へ質問することの間の矛盾に彼は余り頓着しなかった。彼は単純に、自分は父親に、一 父親に到達できるのであれば、一 自らを糾弾し、自らを裁いて貫う前に、質問し、助言を求める必要があると感じていた。しかし彼の安らぎは消え、彼の精神は緊張し、少年が途中お喋りしていることは一言も聞いていなかった。

同様に落ち着かず、シュテマも照明された窓際の奥を歩いていた。ヴルフリーンは砦の岩をよじ登って来ながらその窓を目にしていた。夫人の許に、遠方からと深みから、自分が憎んでいる音色、自分が消滅させたと思っていた音色が侵入して来た。彼女の娘が臥所で微睡んでいるとき、彼女は休まず、あちこち歩き回っていた。夫人はヴルフリーンが皇帝と民衆の前で、奇妙な信じがたい不埒な犯罪を自らに咎める様子を思い描き、自分が彼を裁くことになること、そしていかに裁くかということについて不安な思いに駆られていた。

自然がこのような間違いを犯すことが考えられようか、かくも純粋な人間がこのような罪に陥ることが考えられようか。ここでは錯覚あるいは嘘に基づいて、兄と妹が出来上がっているということがより蓋然性が高いのではないだろうか。女士裁判官は、自分がシュテマではなく、パルマが自分の子供でなかったならば、きっとそのように探求し、調査したことであろう。しかし彼女は調査することを許されなかった。というのは、彼女は何か埋葬したことを発掘することに、破壊された事実を修復することになったろうからであり、彼女自らが出来事の連鎖から引き千切っていた部分をまた補完する必要に迫られたろうからである。

今や突然彼女にとって明らかになり始めた。つまり、この無邪気なヴルフリーンの罪は、夫人自身に歩み寄って来る厄災に他ならない、と。「私に敵対するものなのか。私に反対する案が練られているのか。反逆が進行中なのか」。夫人は暗闇の中へ叫び込んだ。

すると夫人は一つの面影を見た。夫人は精神の目で、薄明かりの壁を通じて、遠く離れていながら同時にまた間近に、恐るべき美貌の強力な女性を認めた。この女性は長く青い衣裳を着て、組んだ膝の上に一枚の石盤を乗せて、手に鉄筆を持って、記述したり数え上げたりして、何らかの解決を探っていた。しばらく瞑想した後、厳格な口許に静かな微笑がゆっくりと広がり、こう言っているように見えた。これでよろしい、ほら、とても簡単なことだ、と。

すると女士裁判官は一人の敵の女性が自分の向かい側にいると思い、この女性に、敵対する女同士として抗った。「そんなことはさせません。あなたには証人がいません」。そ

の敵の女性は両手で石盤をその陽光のように澄んだ目の上に持ち上げて、消えた。「あなたには証人がいません」と女士裁判官はその女性の背後から呼びかけた。夫人に対して、すべての壁、すべての石壁から合図の音が浸透して来て揺さぶり、答えた。あたかもマルモルト中にラッパが吹かれたかのようにであった。

シュテマは震えた。夫人は子供の臥所へ飛び込んで、マルモルトが没しようと、子供をしっかりと両腕に抱き締めようとした。パルマは目覚めず、静かに眠り続けていた。女士裁判官は思案した。恐るべき音色が、現実、実際にこの大気、この空間、この石壁を震撼したのか。どんなに深い微睡眠の中であっても、パルマは起き上がったに相違ない音色だ。この強力な合図の音が、パルマを目覚めさせなかったのは信じられない。シュテマ夫人はこのような不気味な出来事に関し、無知ではなかった。夫人は想像による恐怖や、過敏になった感覚の言語について承知していた。夫人はこのようなことを自分が裁く罪人達の許とか自分の許で経験していた。

「私の耳の空耳だ」と夫人は言った。夫人はまだ全身が震えていた。

廊下や石壁を通じて夫人が見ることができたら、夫人は父の祖廟で跪いている青白いヴルフリーがホルンを吹いて、父を感動的に呼び出し、喋るよう懇ろに語りかけている姿を目にしていたであろう。墓石が黙しているのもう一度角笛を口に当て、最後に絶望して石壁を越えて行くヴルフリーンの姿を目にしていたであろう。

再びマルモルトではその深みで震撼した。最初の時よりも更に強かった。もはや疑いなかった。それは夫人が沸き立つ波や激流の中へ投げ棄て、誰の手にも届かない深みへ沈むのを目にしていたものであった。夫人は不安な謎に直面しながら、その謎を解けなかった。夫人は額の血管が浮き上がり、頭が痛くなるほど考えた。

そして彼女にとって邪悪なこの時、伯爵のことを思い浮かべた、葦の間に座って呟いていて、頭は重たげで、絶えず、シュテマ夫人が自分に対し毒を盛ったのではないかと思案していると言われる伯爵のことである。「伯爵が墓に詣でて、自分の角笛を吹いているのだ。伯爵が夜を乱している。マルモルトを混乱させている。この国に恐怖をまき散らしている。これは我慢ならない。伯爵にそのことを禁じよう。この反逆者を黙らせよう」。夫人の頭はこの妄想に取り憑かれていた。

パルマの方を振り向かず、夫人は怒って螺旋階段を駆け下り、伯爵と夫人の像が祖廟に刻まれている中庭へ向かった。中庭は、軽い雲が月を覆っていて、おぼろな薄明かりとなっていた。伯爵は自分の角笛を滑り落としていて、石造のシュテマ夫人は、秘密を守りなさいと祈るかのように両手を上げていた。

激昂して女士裁判官は、治安騒擾者の前に立っていた。「陰険な方」と夫人は叱った、「何と私の耳を痛めつけているのです。私の国に暴動を起こす気ですか。何を考えているのか、分かります。あなたに釈明しましょう。父判官があなたに与えたのは生娘ではなかったのです。他の男の子供を孕んでいました。酔っ払い男、あなたは私に触れてはならなかったのです。そして一週間後にはマルモルトであなたの葬儀となりました。この毒が分かりますか」。夫人は胸から小さな瓶を取り出した。「あなたの死のとき試飲[毒味]した私が何故生き延びたのか。馬鹿な人、解毒剤を私は持っていました。今あなたも分かったでしょう。私の腹の中のパルマ・ノヴェラがあなたを殺したのです。これ以上私を苦しめないでください」。

そのようにどぎつい、破廉恥な言葉を女士裁判官は話した。

声高な叱責によって正気に戻った夫人は、再び、今や澄んだ月光の中に横たわっている伯爵を眺めた。伯爵は恐るべき話しを気に懸けていず、動くことなく、足を伸ばして横たわっていた。このとき夫人は自分が石像に向かって話していたと気づき、笑い声を発した。「今日、私の頭はおかしい」と彼女は言った、「ベッドに就くことにしよう」。

彼女は向き直った。パルマ・ノヴェラが夫人の背後に立っていて、青白く、目は空ろで、顔は崩れ、驚きで硬直していた。二回目の角笛のとき、彼女は目覚めて、母親の後をこっそりと爪先だって忍んで来たのであった。

この幽霊二人が向かい合って立っていた。それからシュテマ夫人は娘の腕を掴んで、砦へ娘を引きずって行った。夫人自身が自分の秘密を漏らし、その証人を作り出していて、この証人は自分の娘に他ならないのであった。

第五章

廷臣がマルモルトから消えて以来、重たい石壁の中では沈黙と困窮に見舞われていた。郎党達は色々な噂話をし、下僕や下女は頭を寄せ集めていた。若い姫君は病気だとき、暴行されたとか。何らかの魔法で、一 女怪に出会ったか、毒草を飲み込んだか、有害な泉の水を掬ったかして、一 哀れな姫君は正気を失われたらしい。姫君は眠れず、絶えず泣いていて、慰めも聞き入れず、骨と皮になっているらしい。声高で野性的な姫君も全く静かな大人しい女性になって、その命の糸は切れそうなほど細くなっているらしい。案じた女士裁判官がいつも娘の後を付いて行き、目から離さないらしい。

二人の小間使いが井戸の所で一緒に立っていて、囁いていた。ベネディクタは若い姫君に廊下で偶然出会って、然るべく手に接吻しようとした。パルマ様は不安一杯に退かれ、叫ばれました。「私に触れないで」と。ヴェローニカは鍵穴から覗き見をしたことがあって、何を見たと思う。全く信じられないことよ。気位の高いシュテマ夫人が子供の前で跪いていて、娘を愛撫しながら、両膝を抱いて、口を開けて、一口食べるよう恵みを請うていらしたのよ。

二人の小間使い達は黙して、水差しを頭に持ち上げ、順に後を追って逃げ出したが、ゆっくりと女士裁判官がパルマと一緒に小門から出て、段を降りて来たのであった。シュテマ夫人は娘を支えていた。娘は、惨めな様子で、憔悴しており、もはや以前の面影はなかった。パルマは背中を屈めて、覚束ない足取りで歩いていた。大きく、しかし輝きも温かさもなく、目がやつれた顔から浮き出していた。「来なさい、パルマ」とシュテマ夫人は言った、「あなたは外気が必要です」。そして色々ざわめく草原へと導く木戸を開けた。その草原は高い砦の広大なゆるい傾斜の先端を覆っていて、目に見えない深みの境界線を越えて、明るい遠方へと通じていた。

二人はベンチに腰掛け、シュテマ夫人は自分の子供を眺めた。すると夫人は自分が愛する唯一の娘のこの荒廃に内心で憤ると共に泣いた。しかし夫人は気を確かに持ち、最後の力を振り絞って構えた。「どうして」と夫人は自身に語った、「この娘の頭を思いのままにし、この娘の心を探ることが私にできないことであろうか」。

「パルマ」と夫人は始めた、「ここで二人っきりです。今一度お互いはっきりと賢明に

話し合しましょう、ー」。

「母上がそうお望みでしたら」。

「ー あの晩の妄想についてお互い話しましょう。私は目覚めていて、あなたは眠っていた。すると中庭が騒がしかった。私は下りて行き、それは何ごとでもなく、私は自分の勘違いの恐れを笑いました。私が向きを変えた。あなたが私の前に夢遊病者のように目を据えて立っていた。私はあなたを掴まえて、家へ連れ戻した。するとあなたはおぞましい夢から目覚めた。今あなたを苦しめ、破滅させている夢から」。

「そうです、でも違います、母上。私はある呼び声で目覚めました。母上が急いで外に出るのを見て、私は急いで後を追いました。母上は中庭の石像の前に立って、父上を叱っていて、父上に話されました、ー」。彼女は戦慄しながら中止した。

「私は何と話しましたか」と女士裁判官は尋ねた。

「母上は言いました」とパルマは全くの小声で話した、ー 「私は父上の子供ではない、と。母上は言いました、すでに私は腹の中にいたのだ、と。あなたと私が父上を殺害したと母上は言いました」。

「おかしなことを言うわね」とシュテマ夫人は微笑した、「すべてしっかり思い出してごらん。私の言った言葉を一つも忘れずに。私が石像と話したとか、迷信深い女のようなだったとか、痴女のようなだったとか。私がそんな女に見えるかしら。あなたが伯爵の子供ではないのだなんて。だったら私は誰と結婚していたわけ。私は伯爵が私に求婚する前まで、マルモルトの牢に入れられていたとあなたに話したことがあるでしょう。私が夫を殺害したただなんて。私、女士裁判官、この国の女医である者が、毒を入れたと言うの。あなたはそんなことを信ずるの。それが可能と考えているの」。

「信じません、母上。でもあなたがそう言ったのです」。

「パルマ、パルマ、私を虐めないで。さもないと私はあなたを憎まなければならない」。

パルマは言いようもない涙が溢れ出て来て、母親の胸に身を投げた。母親は嗚咽する頭を抱き締めた。「あなたは泣いて私を殺してしまう」と彼女は言った、「馬鹿だね、私のことを信じなさい」。

パルマは顔を上げて、周りを見た。「この縁では雌子山羊が草を食んでいるかしら、母上」。

「そうよ、パルマ」。

「向こうの谷では MARIA 様の鐘が鳴っているかしら」。彼女は谷で微光を発している修道院を示した。

「そうよ、パルマ」。

「私が今、夢を見ているのではなく、雌子山羊が現に草を食み、小さな教会の鐘が鳴っているように、同様に、あなたがヴルフリーンの父親の前に立って父親に話しかけたとき、私は夢見ていたわけではありません。それは現実でしたし、今も現実なのです。あなたはいつも真実を話してきました、母上」。

「パルマ、言っておきますが、それは夢なのよ。夢であることを私は望んでいます」。

パルマは穏やかに答えた、「母上、私に嘘を吐かないで。私は先ほど、母上に抱き締められたとき、鋭い水晶瓶を感知しました。母上が胸から取り出して、伯爵に見せたものです」。

女士裁判官は飛び上がって、自分の子供に敵意ある視線を向けたが、しかしまたゆっくりとベンチに座り込んで、しばらく地面を見つめていた後、夫人は言った、「仮にそうだとした場合、私がそうしたのだったら、それはあなたのためにしたことでしょう」。

「分かっています」とパルマは悲しげに言った。

「私がそうしたのは」とシュテマ夫人は繰り返した、「あなたを思っただけの行動でした。自分の子供が汚点のないように、殺しました」。

パルマは震えた。

「何故あなたは私の秘密に割り込んで来るの、不幸な娘」とシュテマ夫人は憤然と囁いた。「私は秘密を守って来た。あなたを大事にして来た。私の秘密をあなたは奪った。それでこの秘密はあなたの秘密ともなった。私とその秘密に耐えられるようあなたは協力する必要がありますのに。偽善を習いなさい、パルマ、それは思っているほど難しいものではありません。でもあなたは何を考えているの。ぼんやりして、夢を見て、どこへ行くつもり」。

「ヴルフリーンはどうなったの」と小声で彼女は尋ね、微かな赤みが窪んだ両頬に射して、消えた。

「私は知りません」と女士裁判官は言った。

「ヴルフリーンは私を嫌っていると今なら分かります」とパルマは嘆いた、「惨めな私。彼は私の許に殺人を嗅ぎつけたから、私を突き放したのでしょう。私は自分の体が嫌だ。碎けてしまいたい」。

「心配しないでいいのよ。ヴルフリーンは邪推していません。あの人は信じやすく、私のことを信用しています」。

「あの人は母上を信用しているの」とパルマは怒って叫んだ、「では、私はあの人の許に急いで行き、ありのまま全てを話しましょう。あの人を見つけるまで、駆けて行きます」。彼女は飛び上がろうとした。しかし母親は彼女を押し留める必要はなかった。疲れて、脱力して、彼女は母親の膝に沈んだ。

「母上、私はあなたのことを打ち明けます」。

「そんなことをしてはいけない」とシュテマは冷静に言った、「私の子供が私に敵対する証人となってしまうはいけません」。

「母上、証人とはなりません」。

女士裁判官はパルマを撫でた。パルマはされるがままになっていた。その後彼女は再び言った。「母上、分かるでしょう。真実を告白することにしましょう」。

シュテマ夫人は陰鬱な眼差しで考え込んでいた。それから夫人は語った。「私を虐めないで。私がそう望んでも、許されることはありません。理由はこれです」、そして夫人は自分の領地を示した。「ここでは長年、罪が罪を裁いてきたことが、声高に明らかになると、千もの良心が混乱し、正義への信頼が崩れることでしょう。パルマ、あなたは黙っていなければなりません」。

「それでは黙っていきましょう」。

「あなたは勇敢な私のパルマです」。そして女士裁判官は娘の口に接吻した。「でも、パルマ、どうしたの」。パルマの目から涙が溢れ、心臓は母親がさすっても、ほとんど鼓動しなかった。母親はこの半ば気を失った娘を寝かせて、絶望して砦へ急ぎ戻った。

夫人はまた一鉢のワインと一片のパンを持って現れた。夫人は跪き、パンを割って、浸

し、それを脱力した娘に与えた。娘はそっぽを向いた。

すると女士裁判官は頼み、懇願した。「あなた、食べなさい。母のことが好きなら」。パルマは今やそれに従おうとし、生気ない口を開けた。しかし口は働こうとしなかった。

シュテマは瀕死の娘を見た。すると夫人も死ぬ心地がした。夫人の心臓は静止した。瀕死の痙攣で夫人の顔が歪んだ。しばらく夫人は硬直して跪き、石化していた。それから女士裁判官の顔は神々しくなった。純粋さの戦慄に夫人は頭の天辺から足裏まで襲われた。

「パルマ」と夫人は優しく言った。この温かい響きで子供の臉が上がった、「パルマ、どう思う。私は皇帝をマルモルトへ招待することにします。皇帝の前に手をつないで出ましょう。二人で告白し、皇帝が裁きます」。するとパルマの目が喜び、鼓動が戻った。

「食べ物を摂りなさい」と女士裁判官は言って、自分の子供に食べさせ、飲ませた。

夫人は新たに生き返った娘を中庭に連れ戻した。中庭の中央にルーディオが立っていた。まだ騎乗のせいで喘いでいた。「女士領主、御身に弥栄あれ」と彼は喜悅していた、「皇帝から言付かっています。至高の陛下が御身を訪問されます。間近に来られています。強力に動員していて、全ラエティア人が従っています」。

「高らかに陛下は称賛されることでしょう」と女士裁判官は答えた、「行きましょう、パルマ。私どもは身繕いをしましょう」。

カール大帝は皆と一緒に砦の道を上がると、郎党や従者に門の前に残るよう命じて、一人でマルモルトの中庭へ入った。シュテマとパルマは白い衣装で立っていた。女士裁判官は支配者に向かって歩み、膝を屈めた。その背後のパルマも同じことをした。カール大帝は女士裁判官を大地から上げて、言った。「御身がフォン・マルモルト令夫人か。御身の使者を受け入れ、御身の要請に基づき、規律を整えるために参った。こちらでは自由が不埒に、力が恣意に退化していると言う。私はこちらの山岳に一人の伯爵を置こうと思う。これに適した男をご存じかな」。

「承知しています」と女士裁判官は答えた、「ヴルフリンです。ヴルフの子息で、御身の廷臣です。誠実で勇敢な男です。確かにまだ軽率で未熟な点がありますが、しかし年齢と共に成熟していきましょう」。

「私は彼を同行させている」と皇帝は語った、「しかし自らを告発し、御身の裁きを望んでいる。自ら告発している件は、大きな不埒であり、私は信じたくないものである。御夫人、今日私はこの輝かしい山上の天の下、ある徴候に出会った。御身の砦の前で、私の馬が道の中央に伏している一人の死んだ女に出会って臆していた。その女を持ち上げさせたが、御身の家中の者だ。その女は敷居前に置かれている」。

皇帝は声を潜めた。「御夫人、マルモルトの秘密は何だ。御身は見かけの者とは別の女なのか。御身が秘匿された悪事の上に立っているのであれば、御身の秤は偽りで、御身の裁きは不正ということになる。長年御身はこちらで名誉正しい支配を行って来た。私の両手に御身を預けられたい。私の仕事は恵みだ。それとも敢然とヴルフリンを裁かれるか」。

「陛下」と彼女は答えた、「私は彼と自分とを御身のお目許で正義に従って裁きとう存じます」。

カール大帝は夫人をびっくりして眺めた。夫人は真実で輝いていた。「それでは御身の職責を果たされたい」と彼は言った。

それから彼は跪いている娘に向かった。「パルマ・ノヴェラ」と彼は言って、彼女を自分の許へ起き上がらせた。彼女は彼を懇願する親しげな目で見つめ、彼の心は感動した。

「ルーディオ」と女士裁判官は命じた、「ファウスティーネをこちらへ運びなさい」。城代は従って、墓石にもたせかけていた重荷を運んだ。「今度は門へ言って、広く開けなさい。皆の衆、中へ入って、見られよ、聞かれよ」。

すると小門を通じて、皆が流入して来て、そこは一杯になった。廷臣達は皇帝の周りに群がっていて、その中にはアルクイーンとグラシオズスがいた。一方群衆は頭を寄せて立っていて、門の石壁にさえよじ登っていて、密な沈黙の一円が出来上がっていた。その中心には皇帝の姿が抜きん出ている、長く青い外套に、輝く目であった。

皇帝の横にはシュテマとその子供がいた。この三人の前にヴルフリーンは立っていて、視線を動かさず、しっかりとシュテマに据えて、語った。「それでは私を裁いてください」。

「辛抱なさい」と彼女は言った、「まず私はこの女性について話します」と彼女は魂の去ったファウスティーネを示した。彼女は締まらぬ目で、両腕を垂らして、墓場に座っていた。

「ラエティアの方々」と彼女は語った。深い静寂があった。「皆さんは向こうのあの女性についてご存じです。彼女は正直な女としてあなた方の間で暮らしていて、そのように正直な女と見なされてきました。今、彼女の口は閉ざされています。生きていたら、この口はこう語ったことでしょう。私のことは皆が勘違いしています。私は罪を犯した女です。他の男の子供を孕んでいた私は、夫を殺害したのです、と」。 — 「御夫人」とヴルフリーンは苛立って、叫んだ。「この女に何の用があるのです。私に話しをさせて、私の悪事を裁き、そしてお仕舞いにして頂きたい」。

「それでは始めましょう。でもまず、ヴルフリーン、 — そうでしょう、仮にこの娘が」、 — 夫人はパルマを示した、 — 「あなたの父親の子供ではなく、つまりあなたの妹ではなく、別の、他人の女性であるならば、あなたの悪事は自ずと瓦解するでしょう」。

「御夫人、御夫人」と彼はどもった。

「皇帝、それにラエティアの方々」とシュテマは強力な声で叫んだ、「私はファウスティーネと同じことをしたのです。私も亡き男の妻だったのです。私も夫を殺害しました。女士領主は家中の女と同じなのです。お聞きください。この二人の間には一滴も同じ血はありません」。夫人はヴルフリーンとパルマの間に腕を区別するように差し出した。「お聞きください。この若者とこの娘には一滴も同じ血は流れていません。疑念を抱かれますか。一人の証人を呼びましょう。パルマ・ノヴェラ、この娘はシュテマと僧侶ペレグリーンとの間の子供ですが、私の秘密の犯行を聞いていました。娘はそのことを確信し、死を賭けて誓うことでしょう、私の話しは真実である、と。証言なさい、パルマ」。

皆の視線が、頭を垂れて立っている娘に向けられた。パルマは唇を動かした。「もっと大きな声で」と女士裁判官は命じた。今やパルマは聞こえる声で、ミサの詩句を語った、「我が母ハ、過チテ、我ヲ孕ミシ、...」。

すると人々は信じ、驚き、両膝をついて、口ごもった、「我ヲ憐レミ給エ」。ヴルフリーンは両腕を差し出し、天に向かって叫んだ。「お蔭で、私は不埒なことに及んでいないわけだ」。カール大帝はパルマに近寄って、彼女をその外套で覆った。

「では皇帝、御身が裁いてください」とシュテマは語った。

「自ら裁くが良い」とカール大帝は答えた。

「私は裁きません」と彼女は言って、人々の方を向いて、叫んだ、「神の裁きです。皆さんは神の裁きを望まれるか」。

人々は語り、叫び、どよめいた。「神の裁きだ」。

すると女士裁判官は厳かに語った。「消え去った毒、消え去った犯行。生きている犯行、生きている毒」。そして胸から水晶の瓶を持ち上げ、飲み干した。

しばらく夫人は立っていた。それから夫人は一步步き、二歩目、ヴルフリーンに向かってよろめいた。「気丈になさい」と彼女は溜め息を吐いてくずおれた。ルーディオが死んだ女性に屈み込み、彼女を両腕で持ち上げ、ファウスティーネの許へ運んだ。向こうの墓の所に彼女は座っていたが、この家中の女が傾いて、顔を女士領主の膝に埋めた。

母親の方へ悲しみで一杯の視線を向けていた娘を今や皇帝は外套から出し、両手を組んで、命じた。「大いなる罪人のために祈ることにしよう」。人々皆が祈った。

それから彼は穏やかな声で言った、「この娘はどうしたものだろう。私はこれがはっきりするまで去らない。アルクイーン、そなたは何と助言する」。

「世俗を断つ誓願をしたらいい」と修道院長は助言した。

「世俗の生を知らぬ前にですか」とヴルフリーンは不安一杯に叫んだ。

「では別案があります、グラシオズスは」、一 修道院長は彼の手を握った、「この青年は、敬虔な若者で、この哀れな娘に好意を抱いています」。

「修道院長殿」と興奮したグナーデンライヒは遮った、「それは人間の力を越えています。殺人者の子供は恐ろしい。すべての良き精霊は主なる神を称えます」。

ヴルフリーンは中央に飛び込んだ。「皇帝、それに皆の衆」と彼は叫んだ、「パルマ・ノヴェラは私の妻だ」。

するとカール大帝が話した、「ヴルフの子息よ、そなたは殺人者の子供に求婚をするのか。悪霊どもに打ち勝つか」。

「私は悪霊どもを両腕で窒息させます。皇帝、私が打ち勝つよう、助けてください」。

カール大帝は娘に跪くよう命じて、彼女の頭に手を置いた。「孤児の娘よ、私はそなたの父親代わりだ。そなたの母親であった人を埋葬するがいい。この若者は私の戦場へ伴をすることになる。神の裁きに任せよう。この若者が戻って来て、角笛を吹いたら、パルマ・ノヴェラよ、喜んで杯を満たし、銘文を称えるがいい。するとルーディオが婚礼の松明を燃やして、それをマルモルトの砦の梁に投げ入れることだろう」。

ユルク・イエナツチュ[1596-1639]

グラウビュンデン[スイス東部の州]の歴史

第一の書

ヴァーザー氏の旅

第一章

真昼の太陽がグラウビュンデン国のユーリア峠の岩塊に囲まれた荒涼たる高地に輝いていた。岩壁は刺すような垂直の交線の下、燃え上がり、照り返していた。時折、丸まった雷雲が湧き起こり、通り過ぎると、山の壁は、一層間近にせり出して来るように見え、風景を狭めながら、素っ気なく、不気味に集中して来るように見えた。岩のギザギザの間から垂れ下がるわずかな雪塊や舌状つららがどぎつく煌めいたり、緑色の薄暗がりの中に退行したりしていた。重苦しい静けさに覆われていて、ただ岩雲雀の低い飛行が剥き出しの岩塊の間に生じ、時々マーモットの鋭い鳴き声が荒野に走った。

広がる峠の頂きの中心に、そのラバ小道の左右、二本の折れた石柱が立っていて、時間に抵抗すること千年以上と思われた。一方の石柱土台の風化によって盤状にくりぬかれた断面には雨水が溜まっていた。その縁を一羽の鳥があちこち飛んで、澄んだ天からの水をつつきながら飲んでいった。

今や一匹の犬が吠え、遠方から木霊の、エコーが嘲笑的に繰り返された。所々草の生えた山腹の高い上方では、一人のベルガモ[北イタリア]の牧人が昼寝をしていた。さて牧人は飛び起き、肩にしっかりと自分の外套を引き寄せ、大胆に跳躍して、突出した岩の塔から駆け下り、羊の群れを迎えに行った。羊の群れは白く動く斑点となって、深みの方へ消えていた。そのもじゃもじゃ毛の犬どもの一頭が牧人の後を追った。もう一頭は、ひょっとしたら老犬で、主人の後を追えなかったのかもしれない。その犬は突端に立っていて、どうしようもなく、クンクンと鳴いていた。

ますます鬱陶しく静かに昼が輝いた。太陽は先に進み、雲が移った。

黒い、氷河の水で湿った岩壁の麓では、音も立てず流れ落ちる銀色の糸状のものがさらさらと小さな湖の盤に集合していた。巨大な、奇妙な形の岩塊が、澄んだ、地底まで透き通った水を包んでいた。その水は、ただ平たい一方の端では、谷の方へ分流しながら、瑞々しい緑色の芝地の一角に消えていたが、その反映はラバ用小道の高みからも見えていた。この緑の地では、今や草を食む馬の褐色の頭が見え、また消えて、しばらくすると二頭の馬が芝地で快適に草を食み、三頭目の馬が冷たい流水をすすった。

ようやく一人の旅人が現れた。西側の溪谷から登って来て、つづら折りのラバ用小道に従って、峠の頂きに達していた。山岳の住人とか、日焼けした職人といった者ではなかった。この人は町の服を着ていて、その旅囊に締めてあるものは、軽快な市参事会員の剣に、その外套であるように見えた。しかし彼は若々しく柔軟に山を登って来て、素早く賢明な眼差しで、自分にとって馴染みのない山岳世界を見回していた。

今や彼は二本のローマ時代の石柱の許に来た。ここで彼は背囊を下ろし、それを一方の石柱の底部にもたせかけ、清潔なハンカチで顔の汗を拭い、もう一方の石柱の窪みに小さ

な水盤を見つけた。そこで彼は額と両手を洗い、それから一步引き下がって、畏敬の念と共に好奇心を起こして、その古代の水盤を観察した。素早く思案して、彼は革の札差を取り出し、熱心にその二つの立派な瓦礫を白い紙にスケッチし始めた。しばらくしてから彼は自分の手仕事を満足げに眺めて、その開いている小冊子を丁重に旅囊に収め、自分の杖を握った。その杖には様々な尺度の記号が刻み付けられていたが、跪き、そして正確にこれらの珍しい石柱の寸法を測った。

「四・五フィートの高さ」と彼は思わず言った。

「貴方はそこで何をしている。スパイか」と彼の側で強力なバスの声が出た。

自分の静かな仕事の邪魔をされた男は、突然飛び上がり、粗雑な従者服の灰色髭男の前に立った。この髭男はそのきらきらする目を敵対的に彼に向けていた。

動じずに若い旅人は、大地から湧き出たかのような男に対し、片足を突き出して向き直り、片手を脇に当て、流暢な巧みな言辞で始めた。「グラウビュンデンの大地での私の学術研究に敢えて文句を付ける貴殿はどなたです。こちらの大地は、我が町チューリヒ共和国と何度も厳かな誓いと共に同盟関係にある国です。貴殿の侮辱的嫌疑は軽蔑して拒絶します。私の進路を妨げないで頂きたい」と相手が半ば当惑し、半ば脅迫して、根が生えたように立ち尽くしているとき、彼は続けた。「我々は暗黒の中世にいますかな。それとも我らの教養ある十七世紀の初頭にいますかな。誰を相手にしているか、ご存じでしょうか。..それでは申しませう。書記官ハインリヒ・ヴァーザー[Johann Heinrich Waser,1600-1669]、チューリヒ市民」。

「戯言を」と老グラウビュンデン人は歯の間から吐き出した。

「その殿方とは関わるな、ルーカス」とこの時、岩の瓦礫の背後、道の右側から命令する叫び声が高く響いた。思わずこの声の響く湖の方に向き直ったチューリヒ人は数歩、歩いた後、旅の一行が昼休み中であることに気付いた。

黒っぽい目から覗いているほとんど子供時代を抜けきっていない娘の横に、この娘は岩の影の中、広げられた絨毯に座って、休んでいたが、堂々たる貴人が立っていた。というのは簡素な旅の服と、装飾のない武器にもかかわらず、その姿全体から判断して貴人であったからである。湖の縁では三人の旅人の鞍と勒を外された馬どもが草を食べていた。

チューリヒ人は、この一同を鋭く目に収めながら、ますます自覚的になる足取りで、このグラウビュンデンの殿方に向かって行った。一方大胆な笑い声を発して、青白い娘の面影が突然明るくなった。

すると若い男は重々しく帽子を取って、深くお辞儀して言い始めた。

「恐縮に存じます、ポン、...」。ここで彼は自ら打ち切った。あたかも呼びかけられた相手は、この地ではその名前をひょっとしたら秘匿する存念かもしれないという思案に至ったかのようなであった。

「こちらこそ恐縮、ヴァーザー殿」とこの貴人は答えた、「これらの山岳地で心やすくポンペーユス・プランタ[1570-1621]と発することに遠慮は要らない。貴殿も、私が生涯グラウビュンデンから追放されており、私は保護剥奪、追放刑であり、私の生け捕りには千フローリン、私の首には五百フローリン賭けられており、等々である旨、多分聞いておられよう。私はトゥージスの新教牧師裁判所が私に厚かましく送りつけた下らない文書を引き千切った。貴殿はその金を得ようという魂胆ではないと、私は承知している。我らの許

に腰掛けて、この杯を干されよ」。そう言って彼は縁まで濃いヴァルテッリーナ・ワインで満たされた浅い酒杯を差し出した。

このチューリヒ人が一瞬黙して、赤い液体を覗いていた後、良く思量された乾杯の辞を述べた。「正義の勝利を祈念し、古代から自由なラエティアの諸党派の公正な和解を祈念し、―― 何よりも貴殿の健勝を祈念しまして、ポンペーユス殿、また貴殿が再びすべての貴殿の威厳と権利とを獲得されますよう祈念致しまして」。

「忝い。とりわけならず者の賤民支配の没落を祈念しよう。この支配が今や我らの国を血と汚辱で覆っている」。

「済みません」と相手は用心して述べた。「私は中立の者として、複雑なグラウビュンデンの事象への私の判断を若干遠慮致します。勿論発生している作法損傷と不規則活動は極めて遺憾であり、私と致しましてもそれを弾劾するに吝かではありません」。

「作法損傷だ、不規則活動だと言われるのか」とポンペーユス氏は怒って荒れた。「これは、反乱、略奪、焼き払い、誤審の死刑執行に対する何とも弱気な表現だ。平民どもが私の砦を取り巻いたり、納屋に火を放ったりすること、これらは大して私には問題でない。私を平民に対して国の裏切り者と烙印を押ししたり、そのように平民を私に対して使嗾していること、このような悪質な嫌がらせも私は我慢出来る。しかしこのような新教牧師達の飢餓亡者が人民の屑から裁判官を選抜し、拷問を行い、我らの救世主の受難のときの偽の証言者達よりもひどい輩を証人として立てるとなると、―― これは神と人間に対する蛮行だ」。

「すべての新教牧師達を縛り首に」と彼らの背後で馬の出発用意に取り掛かっている老従僕のバスが響いた。

「しかし貴殿らチューリヒ人は」とプランタは続けた、「貴殿らの故郷では分別ある品行方正な政府が築かれていて、革新と転覆を忌み嫌っている。貴殿らの所で我らの新教牧師イエナツチュのような一人の若者が出現したら、その者はヴェレンベルクの砦に門を掛けて幽閉されることになるだろう。それともさっさと貴殿らはその者を打ち首にすることだろう。しかし遠くからでは、貴殿らにはこの妖怪は珍しく見え、貴殿らのツンフト[同職組合]は彼の蛮行に歓呼して喝采を贈ることだろう。貴殿らの興味津々の精神、落ち着かない精神は、反乱の炎が明るく燃え上がれば、それが貴殿ら自身の棟を脅かさない限り、楽しく興ずることだろう」。

「済みませんが、―― 」とヴァーザー氏は繰り返した。

「いやもういい」とグラウビュンデン人は彼の言葉を折った、「私は私の血に毒を服用する気はない。私はここに私の党派の頭目としているのではない。単に父親の責務を果たすためだ。ルクレーツィア[1665年逝去、名前はKatharina、古代ローマの伝説等絡んで混同]は、私の娘だが、―― 貴殿も知っていよう、―― この嵐が私に対し勃発したとき、私が尼僧達の許へ逃げさせたのだが、そのカーツィス修道院[トゥーゼス近郊]から出て来たところで、今辺鄙な小道を歩いてイタリアの修道院へ案内している途中だ。そこで技芸を習う予定だ。それで、貴殿は、貴殿の方はどこへ向かわれる」。

「ポンペーユス殿、休暇旅行です。文書の埃から抜け出しまして、ラエティアの植物相を調べたいのです。我らの同郷人コンラート・ゲスナー[Conrad Gesner,1516-1565]が植物学を築いて以来、私どもはカロリーヌム学院[1523-1832,プロテスタント神学校]で熱心にそれに

取り組んでいます。その上出来ずに終わった旅行計画に対するわずかな補償が運よく行われたのです。つまり私は、彼は若干臆していたが、しかし秘かな虚栄心も交えて続けた、「ボヘミアの陛下[Friedrich V. von der Pfalz,1596-1632]の宮廷のあるプラハへ参ることになっていたのです。格別のご鼻屑で小姓職が約束されていたのですが」。

「行かなかったのは、賢明であったな」とボンペーユスは嘲った、「この惨めな国王はすぐに恐怖と恥辱で終わりを迎えることだろう。それに今」と彼は探るように続けた、「貴殿がラエティアの植物相と親しいのであれば、ヴァルテッリーナの植物相も調べたくはないか。すると貴殿の学友イエナッチュをその懲罰教区[1620年ベルベンの牧師]へ訪ねる機会が生ずるかもしれない」。

「そのようなことになりましても、私はそれを犯罪とは思いません」とチューリヒ人は答えた。自分の旅行計画への不躰な介入で額と頬に憤怒の赤みが射した。

「つまらぬ若造だ」とボンペーユス氏は恨み言を言った。

「済みません、貴殿は怒って話しておられます。貴殿は私の学友について嘆く正当な理由がおありでしょう。貴殿に対し、彼のことを今この時弁護することを断念します。一むしろ向こうのあの珍しい石柱について好意ある解明を授けてください。これらはローマ時代の起源でしょうか。貴殿はご承知に違いない。貴殿の高名な一族はトラヤヌス帝以来、この山岳地方を故郷とされていますから」。

「それについては」とプランタが答えた、「貴殿の博識の友、冷血の牧師が情報を与えてくれよう。一ルクレーツィア、用意はいいか」と彼は令嬢に呼びかけた。令嬢は会話が熱を帯び始めると、案じた表情で、静かにラバ用小道を上がって離れ、石柱の所に留まっていた。そこに丁度ルーカスが再び勒を嵌められた一頭の馬を彼女の許に連れて来た。

「お達者で、ヴァーザー殿」とプランタは挨拶し、素早く二頭目の馬の鞍に飛び乗った。「貴殿を貴殿の帰路、ドムレシュクの私の許へ立ち寄るよう招待できない、事情が別なら是非そうしたいところなのだが。今我が国の舵取りを行っている卑劣な輩は、ご承知のように、私の堅牢なりートベルクの家を封鎖して、奴等によって穢されたグラウビュンデンの紋章で封印してしまった」。

ヴァーザーはお辞儀して、しばらく思いに耽って、高地を越えて行く旅の一行を見送っていた。それから彼は開かれたまま道端に置かれているメモ帳に屈み込み、それを閉じる前に、更に自分のスケッチを一瞥した。これは何か。二本のさっと描かれた石柱の間に、子供っぽい不慣れな手で大きな文字が記入されていた。はっきりと読み取れた。「ジョルジョ[ユルク]、注意して」。

頭を振りながら、備え付けの鉛筆と共にその小冊子を閉じて、自分の包みの底に仕舞った。

その間に雲が湧いて来て、空が曇った。ヴァーザーは足取りを速めて、太陽の見えない岩場の風景の中、道を進んだ。なおも彼の活気ある目は、時折、大きく薄暗い、今や不気味にグロテスクな岩の塊に向けられた。しかしその目はもはや、朝方のように、絶えざる好奇心で、この馴染みない奇妙な形を焼き付けようとはしなかった。その目は内心を覗いていて、古い記憶の助けを借りて、たった今生じたことを理解し、解明しようとした。明らかに警告の言葉は、ただ若いルクレーツィアによって記入されたはずである。彼女は話しがイエナッチュに及んだとき、この旅人が青春の友を訪問する気であると察したに違

いない。明らかに彼女は、自分の心の不安のままに脇に姿を消して、ヴァルテッリーナの若い牧師の身に迫る危険について警告の印を与えたのであろう。明らかに彼女は、そのメモ帳を彼が目にするのであろうと計算している。[1620年ヴァルテッリーナ殺害予告]

丁度体験したことに関し、ヴァーザーの思いは自分の少年時代に戻って素早く幾つもの糸を紡ぎ出した。ユーリア岬の陰気な背景の中、彼の魂は多彩な像を描いた。その中心にはまたしてもポンペーユス氏がその娘ルクレーツィアと共に立っていた。

第二章

西暦一六一五年の年であった。ヴァーザーは自分が大きな聖堂の側にあるロッホ[穴]館の薄暗い教室の最前列に座っている姿を思い浮かべた。ある蒸し暑い夏の日のこと、立派なマギスターのゼムラー氏が若い聴講生達にイリアスからの詩行を説明していた。明るい響きの与格マガディーで終わる詩行であった。「マガスは」と彼は説明した、「トランペットのことで、自然音を模した響きの良い言葉だ。アカイア人[ギリシア人]の陣営でのトランペットの響き渡る音色が、この言葉を叫ぶとき、聞こえる気がするだろう」。彼はギリシアの多島海の大きな壁の地図の前で歩みを止めて、明るい甲高い声で叫んだ、「マガディー」。[マガディスはギリシアのハーブ、ホメロスには出現しない。Xenophon由来と思われる]。

この強調は、弾ける哄笑で報われた。これをマギスターは報われた思いで聞いていたが、陽気な生徒達の喝采に混じっている嘲笑に気付いていなかった。この毎年繰り返される効果たっぷりの情景は、とうの昔から戦闘的綽名マガッディーを彼に贈呈していたのであって、この綽名は学年が替わるたびにクラスからクラスに引き継がれていることを彼は知らなかったからである。

しかしハインリヒ・ヴァーザーの注意は数分前から別な対象に釘付けになっていた。彼は朽ちたドアに面して座っていた。そのドアでは、かなり長い間隔を置いて、二回、三回のノックが聞かれ、それからこっそりと、こっそりと開いた。隙間から両の覗く子供の目が明らかになった。トランペットの吹奏が響き渡ると、この幼い訪問者は、響く言葉を外国語で自分の発せられた入室要請と受け取ったのかもしれない。音もなくドアが開いて、高い敷居を越えて、ひょっとしたら十歳ぐらいの少女が、黒っぽい目、反抗的に物怖じした表情で入って来た。手に小さな籠を持って、彼女は躊躇わず立派なゼムラーに近寄って、彼の前で上品にお辞儀して、語った。「お許してください、先生」。それから彼女はユルク・イエナッチュに歩み寄った。彼女は一瞥してクラスの群れの中で彼を見つけていた。

この少年は、見慣れぬ風采で、頭の高さの分、抜きん出ている、十五歳の同級生達の間で座っていた。その陰気な眉毛と生え始めた髭がその褐色の顔にほとんど男らしい表情を与え、その力強い手の関節は、とうに寸法を上回る体になった彼の貧弱な胴着の窮屈な袖をはるかにはみ出していた。この少女が入室して来ると、彼の目立って広い額に濃い羞恥の赤みが射した。彼は真面目な姿勢を保っていた。しかし彼の目は笑っていた。

今や少女は彼の前に立っていて、座っている彼を両腕で抱いて、懇ろに口に接吻した。「ユルク、あなたが飢えていると聞いたの」と彼女は言った、「それでちょっと持って来ました。...干し肉よ、あなた大好きでしょう」と彼女はこっそり付け加えた。

放恣な哄笑が教室にどよめいた。ゼムラーの右手が威嚇して挙げられたが、長いことそ

れを制止できなかつた。少女の両目は怪訝に見つめていて、それから不服と羞恥の重たい涙が溢れて来た。その一方彼女はイエナッチュの手を固く握っていて、彼一人が頼りで自分を守ってくれると思っている風であつた。

ようやく今やマグスターの咎め立てる声が発せられた。「阿呆ども、何を笑っているのだ。――素朴な行為だ。純粹にギリシア的だ。[『オデュッセイア』の]神々しい豚飼の比類ない姿とか王女ナウシカの洗濯姿を笑うようなもので、諸君らの態度は単純極まる。これはとても不作法であると共に馬鹿げている。諸君らによく注意して来たことなんだが。

――そなたはグラウビュンデン生まれの女か。そなたは誰の子だ」と彼は今や少女に父親らしい好意を見せて対応した。「誰と一緒にこちらへ来たのだ。というのは」と彼は、自分の愛するホメロスを茶化しながら、付け加えた。「そなたはチューリヒへ歩いて来たようには見えないからな」。[そなたがこちらまで歩いて来たとは考えられない。『オデュッセイア』I,173、XIV,190]

「私の父はポンペーユス・プランタと申します」と少女は答えて、それから静かに語り続けた。「私は父と一緒にラパースヴィールへ来て、美しく青い湖を見て、そして向こう岸にチューリヒの町があると聞いたとき、出掛けたのです。ある村で私は二艘の船が出発の準備をしているのを見て、とても疲れていたもので、私、乗せて貰ったのです」。

ポンペーユス・プランタ、評判の男、最もグラウビュンデンで声望ある男、全能の党派の頭目のことであつた。この名前は、ゼムラー氏に圧倒的な印象を与えた。すぐに彼は授業をお仕舞いにし、この小さなグラウビュンデンの娘を自分の客室へ案内した。若いヴァーザーは、彼の母方の叔父であるこのマグスターの許で、平日はこの日昼食を摂る習慣で、叔父に従っていた。

彼らが急な坂のローマ人路地を下って行くと、頑健な質の畏怖の念を与える殿方が長靴を履き、拍車を付けて向かって来た。

「ルクレーツヘン、やっとならぬと捕まえた」と彼は言って、その子供を腕に抱えて、激しく接吻しながら言った、「どうして私の許から逃げだそうと思ったのだ、小娘」。

それから、返事も期待せず、その少女を腕から離さず、彼はゼムラーに対し優美ではあるが、ほんの軽い礼をして、流暢な若干異国人風に聞こえるドイツ語で、言った。「貴殿の学校に妙な訪問がありましたな、教授殿。私のお転婆が碩学の講義を邪魔して申し訳ない」。

ゼムラーは、若い令嬢と、それに令嬢を通じて高貴な父親殿と面識を得まして、格別嬉しく、光榮に存じますと請け合つた。「私と、私の親愛なる妻と一緒につましい食事を共にして頂ければ、恐悦至極に存じます、高邁な領主殿」と結んだ。

男爵は、自ら更に頼まず同意した。そしてその途中、ルクレーツィアの行方不明を後になって気付いたが、しかし即座に馬に乗って、この放浪娘の手がかりを容易に得て追つて来たと言つた。彼は更に、自分はラパースヴィールに、万一に備えて勝ち取つた一つの館を有する。グラウビュンデンでは神聖ローマ帝国の外部同様にもはや安全ではないからだ。ルクレーツィアはそちらまで私と同行を許されていたのだ、と言つた。――そして彼はゼムラーから、娘が何故チューリヒへ向つたか知ると、甲高い哄笑を發したが、しかし快活に響くものではなかつた。

食事が終わった後、殿方達はワインを飲みながら座っていて、マグスター夫人はルクレ

ーツィアを相手にしていたが、プランタは、会話から脱線して、突然若いイエナッチュのことを尋ねた。ゼムラーは彼の才能と彼の勤勉さを称え、そしてヴァーザーが使いに出され、賄い食事付きの実直な靴職人の家から彼を呼んで来ることになった。ほんのしばらくしてゲオルク・イエナッチュが部屋に入って来た。

「ユルク[ゲオルク]、元気かい」と男爵は少年を好意的に迎えて叫んだ。ユルクは謙虚に答えた。しかし幾分気位高く抑制して、「出来るだけのことをしていきます」と言った。男爵は彼の父親の許で彼を褒めると約束し、合図をして彼を去らせようとした。しかし少年は立ち止まっていた。「ポンペーユス様、一言お許してください」と彼は軽く赤面して言った、「小さなルクレーツィア嬢は私のために街道の埃を被って巡礼者のように来られました。私のことを忘れずに、故郷から贈り物をされました。勿論丁度同級生達の前では渡さない方が良かったのですが。しかし私はそのことに感謝しています。早速私の名誉のためにもお返しの贈り物を彼女にしたいと存じます」。そい言って、彼は布切れから小さな内側が金鍍金された、簡素な形の銀杯を出した。

「この少年は途方もない」と男爵は思わず言った。しかしすぐに彼は落ち着いた、「ユルク、何を考えている」、と彼は続けた。「その杯は父親由来のものか。...私は彼が金、銀に縁があるとは知らなかった。それとも書記の仕事で、額に汗して自ら得たものか。いざれにせよ、それを手放して贈ってはなるまい。そなたは十分にかつかつだし、その杯は高価なものだ」。

「私はこれを勝手に出来るのです」と少年は自負して答えた、「私はそれを自分の命を賭けて得たのですから」。

「その通りです、ポンペーユス様」と今や活気づいたヴァーザーが夢中になって発した。「その杯は私からのものです。ユルクは私を水泳のとき、私を引き掠って行く奔流のジール川の渦から命がけで救ってくれました。その感謝の印なのです。それでイエナッチュと私、それにルクレーツィア嬢、我々三人皆してその杯から貴殿の健勝を祈念して飲みたいと存じます」。そう言い終わると、彼の叔父が彼に向けている、その前代未聞の大胆さを嫌がる視線にも関わらず、その杯を花柄の蓋付きジョッキの中の香るネフテンバッハのワインで満たした。

ユルク・イエナッチュはその杯を握り、目でルクレーツィアを探した。彼女はその経過を切に注目して追っていた。今や彼女はマギスター夫人から離れて、真面目に一同に加わった。ユルクはそのワインを味わって、それをこう言って、「ルクレーツィア、そなたの健康を祈念して。それにそなたの父親の健康を祈念して」、黙っている娘に渡した。あたかも厳かな行事であるかのように、娘はゆっくりとそのワインをすすった。それから娘はその杯を父親に渡した。父親はうんざりして一気に飲み干した。

「まあ仕方ない、阿呆な少年よ」とプランタは言った、「しかしもう去ってくれ。我々も間もなく出発することにしよう」。

イエナッチュは別れた。そしてルクレーツィアはマギスター夫人によって小さな家庭菜園のスグリの灌木へ案内され、子供に親切な夫人の言葉によれば、自分のデザートを自ら取りに行くことになった。殿方達が今度はイタリア語で談笑しながら、今一度杯を握っている間、ヴァーザーは静かに窓辺の壁龕に『世界図絵』[絵入り教科書]を手に腰掛けて、それに熱心に没頭しているように見えた。この抜け目ない少年はイタリア語にも通じてい

て、イエナッチュと一緒に半分遊びながら習得していて、鋭く聞き耳を立てながら、興味深い会話を一言も聞き漏らさないようにした。

「私は少年に対しその小さな杯の十倍の埋め合わせをしよう」とプランタは始めた。「あれほど高慢で閉じこもった心情の者でなければ、別に悪い奴ではない。家にパンが少ない者の高慢さは、似合わない。彼の父親は、シャーランスの牧師で、実直な男だ。私の隣人として、しばしば私の許に出入りしている。以前の方が今より頻繁だった。マギスター殿、我々の新教牧師にどんな精神が生じているか、貴殿には想像できまい。彼らは説教壇から、スペインの兵役に雷を落とし、国のすべての官職の最上位と最下位とを同権であると説教している。これは我々の国家小舟に対し最慎重な運転を要求している危険な政治情勢下であって、必然的に国を破滅に導くに違いないものだ。彼らがヴァルテッリーナでの我らのカトリック的家臣どもを苦しめる際の、阿呆なプロテスタント的宣伝について私は語りたくない。私はまたカトリックに戻った。私の両親は新教派の出自なのだが、何故か。プロテスタントでは、反逆の原理が、政治的権威に対しても向けられているからだ」。

「貴殿の牧師達の待遇をより良くなされば」とゼムラーは心地良く微笑しながら、口を挿んだ、「すると彼らは自足した声望ある輩として、家臣どもに人間的諸関係の必然的不平等について正しい概念を教えるようになりましょう」。

プランタはこのグラウビュンデン人の自己犠牲心に対してなされた要求を若干嘲笑的に笑った。「あの少年のことに戻ると」と彼はそれから言った、「彼は戦争で使いものになろう。説教壇には向いていない。戦場でなら災いは少ないだろう。私は老父によく言ってきた。あの若者を私に寄越せ。今のままでは残念だ。しかし老父はスペインでの兵役を断った。そちらへあの可愛い少年を推薦しようと思っていたのだが」。

ゼムラーは慎重にワインをすすって、黙っていた。彼はシャーランスの牧師の息子に対して呈示されたキャリアへの反撥に不同意ではないように見えた。[イエナッチュの父はSilva plana、後にSt.Moritzの牧師、イエナッチュ自身が1617/18シャーランスの牧師。プランタ家との付き合いは不明]。

「世界的戦争が迫っている」とプランタは一層情熱的に続けた。「一体どんなに大胆な血が流されることになるか、分からない。あの若造は法外に豪胆だ。それで若干話しておく必要があろう、マギスター殿。何年か前の夏、 — あの少年はまだ家にいた、 — 彼は毎日私の兄[1569-1638]の息子のルドルフ[不詳]や、ルクレーツィアと一緒にリートベルクを徘徊していた。あるとき私が庭園を歩いていると、ルクレーツィアが目を輝かせて、嵐のように私に駆け寄って来た。『父上、ご覧ください』と彼女は息も継がずに叫んで、私の城の塔の高い燕の巣を示した。マギスター殿、私がそこで何を見たか、当てて頂きたい。...ユルクが、屋根の天窓からはるかに突き出された、上下に揺れる板の一番端に馬乗りに座っていた。その上この悪ガキは、フェルト帽を振って、歓声を上げて、我らに挨拶をした。この即興のシーソーの内側の安全な端にはもう一人座っていたかもしれない。それにルドルフは、 — 言いたくはないが、 — 悪巧みの少年であるから、この大胆さには怖気がした。私は威嚇して手を上げ、上に急いだ。私が着いたとき、すべては元通りになっていた。私はユルクの襟を掴んで、彼の生意気な振る舞いを叱った。しかし彼は冷静に、ルドルフが私にその勇気がないだろうと言ったのです。このチャンスを逃したくなかったのです、と答えた」。

ゼムラーは、この話しの際、不安げに両手で自分の椅子の肘掛けを握っていたが、彼の中で生じて来る懸念を敢えて表明した。つまりこのように野性的な少年達とのルクレーツィアの交際は、特に彼女とは越えがたい、時と共にますます大きくなる溝を有するイエナツチュとの交際は、この幼い令嬢の優しさや、貴族的に上品な嗜みを損なう恐れがありましよう、と。

「つまらぬことだ」と男爵は叫んだ、「あの娘が少年を追って、チューリヒへ来たことを貴殿は案じなくてもよい。これは他ならぬルドルフのせいだ。彼は娘に僭主的で、娘のことを幼い許嫁と呼んで、娘を不安がらせている。――多分そのようなことを自分の父から聞いたのであろう。私の兄にとっては、満更でもないことだろう。私の方がもっと裕福だからな。――しかしこれはずっと先のことだ。要するに、娘は、ルドルフが恐れているもっと強いユルクを自分の守護者にしたのだ。――勿論子供同士のことだ。――ルクレーツィアは間もなく修道院で貴族の教育を受ける。そして石壁の中で、十分慎む深くなることだろう。娘は思慮深い心根の者だ。――ちなみに貴殿の言われる越えがたい溝に関しては、我々グラウビュンデン人はこう考えている、口に出しては言わんが、それは偏見だ、と。プランタ家の娘に求婚しようと思う者は、自明のことだが、名誉と権力、所有を有しなければならない。数世紀の出自であろうと、昨日の出来星であろうと、その点我々は気にしない」。――

ここで吹きすさぶ嵐が、若い遍歴者の視線の前で幻惑していた少年時代の映像を追い払った。ヴァーザーは再び五年年取って、ユーリア峠の人気のないラバ用小道を元気よく歩んだ。彼は粗野な具合に現実へ引き戻された。エンガディーンの谷の入口から呻って来る突風が彼の帽子を頭から吹き飛ばし、この帽子を二番目の突風がこの軽い獲物を深みで渦巻く山岳小川に投げ込む前に、死に物狂いで脇へ跳び、かろうじて彼は掴まえたのであった。

第三章

ヴァーザーは自分のフェルト帽を一層深く額に押し付け、自分の背囊を一層きつく締め、今や急斜面の山腹で、ラバ用小道の遠い旋回を短縮して、急いで飛び降りた。まず彼は稲妻で黒くなった、奇妙に歪んだツェンブラ松の根を越え、干涸らびた山岳小川の固い溝を越え、それから柔らかな芝地に入り、突然ビロードのような緑色のエンガディーンが彼の足許にその煌めくイン川と共に山岳の湖の並ぶ装飾品のように広がっていた。しかしそれは雲の間からの最後の陽光であって、この陽光が、一帯を照らし、明るい遠方の谷を下って、聖モーリッツの湖と牧場を越えて、虹色に戯れていた。

下りて行く男の向かい側に露わな薄暗いピラミッドが聳えていて、その側には谷の上方にかけて同様に高い、緑色に微光を発する氷河を携えた尾根が見えた。それらを結ぶ鞍部[Fuorcla Surlei]の背後で雷鳴が湧き起こり、隙間からその低く雷鳴のする雲が迫って来た。時折、その隙間には、より遠方の雪山の頂が鮮やかに浮かんだ。

この遍歴者の右手で、他の谷の壁となっている山々が、かの急峻な岩の階段[隘路]という正体を隠していた。この階段はほとんど突然に深く切り込まれた谷に通じていて、軽快

な山岳の空気を下の暑いイタリアへ導いていた。向こうのマローヤの背後では、南風に吹き上げられて、蒸し暑い靄が霧状に発生して、バゼルジャ・マリア[Sils MariaとSils Baselgia]の湿った平原に及んでいた。そこの白い塔は雨のヴェールの背後にあって、まだほとんど目に見えなかった。

今やラバ用小道は最初のエンガディーンの村に達した。控え壁と格子付き天窓を備えた小さな城砦に似た堅牢な家々のある路地であった。しかしこの若いチューリヒ人は重たい木のドアの一つもノックせず、黄昏であったが、谷の通りを諸湖を伝って、元気よく南方へ歩む決心をしていた。彼の計画は、マローヤの宿坊に泊まり、翌日早朝、ムレット峠を越えて、ヴァルテッリーナへ出発するというものであった。というのは、一ポンペーユス氏が推察していたように、一学友のイエナッチュを抱擁したいという欲求があったからで、それは以前よりも現在、募っていた。

これらの遠い山々の間では、早くに夕方となり、涼しくなった。道はさざ波の寄せる岸辺沿いに果てしなく続いていた。繊細な冷たい霧雨が一帯を覆っていて、同じ歩調で急ぎ前進する者の衣服を次第に濡らしていた。昼の暑さの中では感じなかった眠気に彼の感覚と思考は軽い麻痺のように襲われた。あるとき、イン川がその狭い河床上を素早い波となって彼の側に打ち寄せて、他方の岸辺には伏したような教会の鈍い塔が現れたとき、馬の蹄の音を聞いたように思った。彼の左手の木の橋の上を一人の騎乗者が飛んで行った。この者はマローヤを目指していて、彼の前を駆けて行き、夕闇の中に消えた。この外套に身を包んだ人物はポンペーユス氏であったろうか。いやそれは単独の臆病な夜の騎乗者であった。男爵なら自分の娘を導き、守っていよう。娘のために彼はきっと彼の一族の安全な接待を、上品なエンガディーンの村々の一つに確保していたことであろう。

ようやく、ようやく、最後の湖の周りを歩いて、最後の岩の張り出しを後にした。霧を通じて微光となる炎の輝きと犬の吠え声とで、一軒の家が間近であると分かった。これは峠の宿に違いない。薄暗い岩塊に向かって歩きながら、ヴァーザーは中庭壁の小門が開いているのに満足して気付いた。すると亭主は、瘦せて骨張ったイタリア人であったが、吠え立てる犬を鎖に繋いでいた。厩舎の少年がピッチの松明で、これを照らしていた。これは客人の接待準備と思われた。この時、亭主は松明を握って、到着する遍歴者の眼前に持って来た。

「何の御用です、何をお手伝いしましょう」と彼は尋ねた。予想外の不都合という小声の呪い、亭主の最初の感情表明を抑えていた。

「良い質問です」と陽気な調子でヴァーザーは答えた、「服を乾かすための暖炉前の場、夕方のパン、それに寝床です」。

「残念です、旦那、一出来ません」と亭主は、自分の遺憾の念と同時に自分の不退転を極めて生き生きと表現する身振りで答えた、「宿は塞がっています」。

「何です、塞がっているのですか。まだ客人を待っているように見えるのに。どのようなものであれ、このような荒地にあって、このような冷たい雨の夜に、旅行者に庇を断るのは、非キリスト教徒的でありましょう」。

このイタリア人は手を差し出して、南の方を指した。そこは霧がもっと薄くなっていて、マローヤの天気境界の向こう側、千切れた山の先端に丸い月が微光を放っていた。「あちら方面に行くのがましです」と彼は言って、家から杯に満たしたワインを持って来た。「こ

れで温まりなさい。バゼルジャに戻るのが一番賢明です。良い晩を祈ります」。

グラス・ワインは松明の明かりを受けて、炎のルビーのように光った。ヴァーザーは赤い輝きを貪欲に欲して、更に何も考えず、喉を潤した。亭主は彼を丁重に、支払いも要求せず、中庭の小門から押し出し、門を閉めた。

若いチューリヒ人は賭けに負けたとまだ認めていなかった。丁度急いで来た道を不承不承帰る代わりに、彼は自分の状況を考えながら、数歩離れた岩山に登った。これは展望台のように、こちらでは急斜面となっているブレガリアの谷の上に聳えていた。今やこの谷は立ち上る霧の釜となっていて、そこから月の明かりを受けて、高く縁の方に立っている樅の先端が見えていた。ヴァーザーは短い外套を広げて、その上に腰掛け、聞き耳を立てた。

宿の馬小屋から時折一頭の馬のいななきが響いた。－その他は万事静かであった。深みの山岳小川の流音は、霧で弱まり、ほとんど聞こえなかった。このとき遠くの物音から分離して、一つの微かな明るい音色がした。鈴のような音色で、それが今や消え、－

間もなくまたより鮮明に上がって来た。再び消えたかと思うと、また新たに始まった。今回はより間近で、より甲高く、小道のつづら折りに従って、山の壁を忍び上がって来るかのようにであった。長いことヴァーザーは、夢の中でのように、この愛らしく不気味な山岳の不可思議に聞き入っていた。しかし今回は人間の声の調子が彼の耳に響いた。明らかに彼らの動物を叱咤する騎乗者や荷方であった。－そして彼は速やかに結論を下した、－亭主の待ち受けている客人達であろう、と。

彼は見つからないよう、大地に平らに伏せた。彼は自分の夜の臥所を奪ったのは誰か知りたくなかった。かなり経って二頭のラバが高みに達して、二人の騎乗者が飛び降りた。明らかに主人と従者であった。すぐに数回強く叩かれ、すぐにドアが開かれ、亭主がいそいそと相変わらず照明されている宿の中へ案内した。

不愉快な気持ちと好奇心とに若いチューリヒ人は突き動かされた。新たに活気づいて彼は飛び上がり、神秘的なこの砦を忍び歩いた。自分が到着したとき出迎えた火の輝きを思い出したが、これは中庭の側から照らし出すものではなかった。その通り、家の裏側には個々の窓があって、その重たい鉄格子越しに燃え上がる輝きがあった。彼は家の壁に接してある山羊小屋の残骸に飛び乗った。すると彼は煙っぽい部屋の底を覗くことができた。

すると勢いよく燃える竈の火の側に真っ正直な顔の真正な老婆が手にフライパンを持って立っていた。その中では、脂身で爆ぜる虹鱒があった。一人の青白い若者が、その病的に硬直した面影は、黒っぽいもつれた巻き毛の襲来の中にほとんど隠れていたが、羊の革をまとして、奥のベンチの上に眠っていた。

今や抜け目なく振る舞うことが肝要であった。ヴァーザーは、初心者 of 外交官として、まず聞き耳を立てて、状況を把握し、それから自分が利用できる観点を見いだそうとした。偶然都合良く行った。青白い夢想者は、－不安な夢と戦い始めた。最初彼は喘ぎながら、あちこち身を投げ、転々とし、それから突然目を閉じたまま起き上がり、鈍い心労の表情を浮かべて、武器を掴んでいるかのように、拳を丸めて、一撃し、くぐもった夢の中の声で言った。「御身の望みだったのです、聖母様」。

この時、老夫人は素早くフライパンを退けて、この夢想者の肩を不躰に掴んで、揺さぶり、声を掛けた。「目覚めなさい、アゴスティーン。あんたをこれ以上キッチンには置け

ない。これは、始祖ヤーコブの夢ではないね[創世記28,10以下]。悪人に苦しめられている。干し草の中へ行きなさい。地獄の罫から主があんたをお守りくださいますように」。

長い巻き毛の細い顔は、頭を垂らしたまま、起き上がり、抗弁せず、離れた。

「私の息子、アルデンの牧師アレクサンダーにあんたが持つて行くべきもの、これは、明日早朝、あんたが背負籠をこちらまで取りに来たとき、私が自らその上に結び付けましょう」と老婆は彼に呼びかけた、そして頭を振って付け加えた。「元々、カトリックの偏屈頭に大事な形見を預けたくないけど」。

「御夫人、それは私の方がもっと良く手配できましょう」とヴァーザーは信頼しても大丈夫のような声で、鉄格子の間から部屋に語りかけた。「私は明日ムレットを越えて、ヴァルテッリーナの牧師イエナッチュの許へ参ります。この牧師は貴女の立派なご子息、ブラージュス・アレクサンダー氏の友人にして隣人です。ご子息の名前は良く存じています。ご子息はプロテスタントの地区で声望があります。早朝まで乾いた寢室をあてがってくださいますならば、協力致します。ご亭主が、他に客人があると私を断ったのです」。一

老夫人はびっくりしたが、しかしうろたえず油ランプを握った。風に対し手で小さな炎を守りながら、夫人は窓の開口部へ近寄り、格子越しに語りかける男を見つめた。

快活で賢明な若い顔をと上品な襷襟を認めると、彼女の鋭い灰色の目はとても好意的になり、言った。「あなたも新教牧師ですか」。

「その片割れです」とヴァーザーは答えた。彼は故郷では軽々しく嘘を言わなかったが、しかしこの荒れた厳しい大地では、状況故に若干の潤色が許された。「中に入れてください、おっ母さん、残りはいんじょう行きます」。

老夫人は彼に頷きかけて、口に指を当てて、そして消えた。更に山羊小屋横の低い小門がぎしぎし言い、ヴァーザーがすがって下りると、老婆が彼の手を握り、二、三の暗い段を越えて、台所へ引き入れた。

「温かい小部屋を多分用意できましょう、一 私の部屋です」と彼女は、煙道の側の梯子段を示しながら、言った。それは煉瓦作りの天井の中のハッチの戸に通じていた。「私は一晩中火の側で仕事があります。一向こうの殿方達がようやく食卓に着かれます。上で静かにしていなさい。そこは安全です。神の言葉に仕える人を飢えさせはしません」。

そう言って彼女は彼に吊りランプを渡した。彼は遠慮せず、梯子を上がって、右手でドアを上げ、剥き出しの牢屋のような小部屋に入った。老婆はパンとワインを持って続いて来た。それから彼女は脇の小門を通過して、広く風通しの良いと一 そう思われる一 隣室へ入った。そして立派な量のスモーク・ハムを持って戻って来た。余り心引かれないベッドの上の壁には大きな、大量に銀を使った角製火薬入れが掛かっていた。

「これを、若様」と老婆はそれを示しながら言った、「私は息子に明日送りたいのです。これは彼の名親でもある叔父の形見です。ムッソ城戦争時[1525/26、1531/32、二回目の時、勝利してグラウビュンデンはヴァルテッリーナを確保]の戦利品で、百年以上古いものです」。

しばらくヴァーザーは寝台に寝そべり、眠ろうとした。しかし出来なかった。一瞬、彼はうたた寝をした。夢の像が彼の眼前に現れた。イエナッチュとルクレーツィア、マギスターのゼムラー殿、それに火の側の老婆、マローヤの亭主、粗野なルーカスが、奇妙極まる関連の中で混じり合った。突然皆が一つの学校ベンチに座っていた。ゼムラーはギリシアのラッパとして、珍しいことに、大きな角製火薬入れを口に当てて、そこから聞いたこ

ともない嘆きの音色が発生して、すべての隅から響く甲高い悪魔的哄笑を浴びていた。

ヴァーザーは目覚めて、自分がどこにいるのか思い出そうと努めた。そしてまた微睡みに入ろうとしたとき、隣室からと思われたが、活甕に対話する遠方の男性の声が響いて来た。彼が今耳にしたものは、夢の中の哄笑ではなかった。

若いチューリヒ人を寢床から追いやったものは、旅による興奮であったろうか、秘かに募る不安を打倒せんとする速やかな決意であったろうか、それとも単なる好奇心であったろうか。いずれにせよ、彼はすでに隣接する部屋のドアの許に立っていて、まず聞き耳を立て、それからそっと開けながら、そこは空であると納得した。今や彼はこっそり爪先だって、空の部屋全体を横切って、その向こう側の壁から漏れて来る細い明かりの微光に従って行った。その弱い赤みがかかった光線は、手探りの若者の確信によれば、朽ちて重たい鉄の帯を嵌められた櫺のドアの隙間越しに漏れているのであった。慎重に彼は鋭い目を穴の開いた木製ドアに当てた。彼が見て、聞いたものは、思いの外で、彼は自身の状況を忘れて、その位置に呪縛されて止まっていた。

彼が覗いている部屋は、笠付きの吊りランプで照明された部屋であった。話している者は二人で、小さな、書類や、無秩序に脇へ押しやられた瓶や皿で覆われた食卓に向かい合って座っていた。間近な男性は、ドアの方に背を向けていて、激しく語るこの男性の幅広い肩、雄牛のうなじ、もじゃもじゃの縮れ毛の頭が、時折隙間に許された視界の全体を覆うことがあった。

今や彼は示威的身振りで、前方へと身を屈めて、そしてその肩越しに、どぎつく鋭い明かりの中、片手に頭を支えている相手、 — ヴァーザーは驚いたが、 — ポンペーユス・プランタ氏を認めた。彼は何と緊張して悲嘆しているように見えることか。彼の豊かな眉毛は深く刻まれた皺をその落ちくぼんだ、しかし不気味に光る目の上に引き寄せていた。気位の高い力強い生命意欲は消えていて、彼の面影には激しい憤懣と深い悲哀が戦っていた。彼は今日の昼からすると十年ほど年老いて見えた。

「私は自分の一族の幾人もの以前の親しい男を代償にする虐殺に同意したくはない。それ以上に更に次に必要となるスペイン人による加勢には同意し難い」とプランタは今やゆっくりと控え目に語った。相手はその進むような、ヴァーザーにとって不明瞭であった話しを終えた後であった。「...しかし」とここで男爵の目から憎悪の稲妻が走った、「血は流される必要があろう、ロブステッリ[1583-1646、ヴァルテッリーナ殺害の主犯格]よ、少なくとも彼だけは忘れないでくれ」。

「ジョルジョ[ユルク]・イエナツチュカ」とそのイタリア人は野蛮に笑って、そのナイフで自分の側の小さなパンを刺した。そしてポンペーユス氏の前に槍に突き刺した頭のように差し出した。

このように誤解の余地のない象徴的返事をしながら、イタリア人は自分の粗野な顔の半分を、ほんの間近な盗聴者に向けた。この盗聴者は竦み上がって、物音を立てずに自分の寢床に戻る判断を下した。この情景は彼に多くのことを思案させた。そしてヴァルテッリーナへの近道を急ぎ、自分の友に警告を発しようという思いを強めた。自らはこの極めて危険な事案に巻き込まれずに、どのようにこれを遂行したらいいか、このことを考えながら、彼は眠り込んだ。疲れが勝っていた。

むしろ銃眼と呼ばれるべき細い小さな窓から、最初の朝日が薄明るく射し込んだとき、

ヴァーザーはハッチのドアがロックされて、起こされた。彼は自分の服をさっと着て、旅の用意をした。老婆は自分の息子への挨拶を彼に頼み、丁寧に角製火薬入れを彼の肩に掛けた。これを彼女は大切な家庭聖遺物として敬っているように見え、台所の小門をくぐって、野外に出ながら、若干不安げな言葉を口にした。野外で彼女は、山の中、マローヤの左手へと消えて行く、今日の道のりの最初の箇所を教えた。カヴェロッシュ[Cavloccio]溪谷への狭い入口である。

「一度中に入ったら」と彼女は言った、「湖の左手に剥き出しの山腹の方をご覧ください。すると小道がつづら折りになっていて先が見通せます。それで、何はともあれ、アゴステイーノを見つける必要があります。彼は十五分前に背負籠を持って出発し、あなたと同様にソンドリオの方へ向かいます。この人に語りかけ、付いて行きなさい。あの人は勿論ここが」と彼女は額を示した、「全く正常とは言えないけど、でも道は諳んじています、その他は変わらない人です」。

ヴァーザーは衷心より感謝して別れ、急ぎ足で、まだ静かな家の周辺から去った。小道をほとんど通させない、荒々しい岩の瓦礫の間を抜けて、彼はやがて卵形[楕円形]の、氷河を積んだ壁に囲まれた、閉ざされた谷の中へ入った。彼は山腹に沿って細い小道を歩んで行くアゴステイーノの姿を見つけ、彼を追って急いだ。

この若い男は昨夜の印象をまだ払拭していなかった。それを克服し、そして明確な考えに変換しようと努めていたのではあったが。彼は自分が覗いたものは、はなはだしい不幸を意味すると予感した。また偶然はただ、準備しつつある途方もない諸運命の中の、わずかな、自分にとって関連のない不分明な部分のみを開示していると予感した。彼の軽やかな青春の血にもかかわらず、彼はそれに深く震撼されていた。というのは、ここで敵対関係にある二人の人物、彼の友人とポンペーユス氏は、それぞれ違う流儀であっても、彼の愛と賛嘆の対象であったからである。

まさに独自に、魅惑的にかつ戦慄的に、この今、朝焼けで赤い一帯は思われた。下の緑色の湖深く、豊穡に茂った岬や茂みの島に縁取られて、すべてが、血の布に沈んだように、暗赤色に花咲く石楠花の、どこまでも浸透する無限の荒野に沈んでいた。周りでは垂直な、微光を発する岩壁が聳えていて、激しい流れの氷河の小川による、銀色のくねくね蛇行が岩壁を縫っていた。そして南方では、ジグザクに上方へと折れ曲がる小道が谷底からの唯一の出口を明らかにしていたが、輝く雪原で目がまぶしい。この雪原からは赤々とした大岩やピラミッドが目に見え込んで来た。

今やヴァーザーは自分の先導者に追いつき、挨拶しながら、この寡黙な男と会話を紡ごうと試みた。この男は、緩慢な物思いに没頭していて、彼のことは無関心でほとんど見ず、連れのを不思議にも思わず、詮索もせず、甘受していた。ヴァーザーは彼からほんのわずかな言葉しか絞り出せなかった。それでなくても小道はますます粗くなり、やがて滑りやすい雪道となったので、彼は付き合う努力を放棄した。

ヴァーザーが予期していたよりも早く、彼らは高い峠に達した。ここでは高く聳える陰鬱な山岳塊が主に南方の眺めであった。ヴァーザーはこの威圧的巨人の名前を尋ねた。「名前は色々ある」とアゴステイーノは答えた、「こちらの上のグラウビュンデンでは、下の我々のソンドリオでの呼び方と異なる。こちらではこの山を不幸の山と呼ぶ。我々は悲哀の山と呼ぶ」。この受難の名前を聞いて不快な思いになり、ヴァーザーはその寡黙な同伴

者を先に行かせて、しばらく休憩し、それから、彼を目から離さずに、ある道のりそのまま背後に留まり、力強い山岳の大気の中、一人っきりで遍歴の自由な気分を味わっていた。

かくて数時間、泡立つ、岩塊に荒れるマレロ川に沿って下って行った。一方太陽はますます燃え立って、溪谷に照りつけて来た。このとき力強く草の大地から高く曲折する栗の木々が小道に影を投げかけ始め、最初の葡萄畑がその蔓を漂わせて挨拶した。丘では華麗な教会[カトリック]が微光を発し、道は次第に多くが、舗石のある村の路地へと変わった。ようやく彼らは最後の溪谷を渡って、彼らの前に、黄金色の夕方の靄の中、廣大豊穰なヴァルテッリーナがその暑い葡萄畑とジメジメした稲作地[田圃]と共に横たわっていた。

「あそこがソンドリオだ」とアゴステイーノは今やまた自分の横を歩んでいるヴァーザーに向かって言い、そしてほのかに輝く宮殿や塔のあるイタリアの町を示した。この町は荒地から参上した男に対して、岩の門の薄暗い枠を通じて、妖精の魔法のように笑いかけていた。

「陽気な地方だ。そなたのヴァルテッリーナだ、アゴステイーノ」とこのチューリヒ人は叫んだ、「そして向こうの岩の所には、私の間違いでなければ、葡萄の真珠、称えるべきサッセラ・ワイン[Perla di Sassella]が育っている」。

「それは四月に凍えてしまった」と憂鬱そうな気分でアゴステイーノが答えた、「我々の罪の処罰としてな」。

「残念だな」とヴァーザーは答えた、「一体どんな悪さをしたのだ」。

「我々は仲間内で異端の有毒な癩病[新教]も甘受しているのだ。しかし我々は間もなく浄化される。そして腐った肉は切除される予定だ。死者達、聖人達が厳かな集会で、五月八日、賛否を論じ合った。向こうの聖ジェルヴァージオ兼プロタージオ教会でな、真夜中のことだ」と彼は彼らの前にある教会を示した、「一番人はそれを聞いていたのであろう。驚きの余り病気になってしまった。一皆鋭く論じていた、一しかし我らの聖カルロ[Carlo Borromeo,しかし甥のFederigo B,1564-1631との混同]が、その票は一人で二十人分に匹敵して、勝利されたのだ」。

自分の同行者が脇から目の隅に笑いを浮かべていて、嘲笑的に彼を見つめていることに気付かないまま、彼は今や、道端に十字架や聖人像があるところでは、途中すでに決まって行って来たことを行った。つまり彼は、聖母のカラフルな神殿の前で、自分の背負籠を下ろし、跪き、そして格子越しに燃える目で凝視した。

「聖母が私にされた合図を見たかな」と彼は更にしばらく歩き続けた後、放心したかのように行った。

「勿論」とチューリヒ人は愉快そうに行った、「聖母様の受けが良いように見えるな。聖母様は何を促されたかな」。

「私の妹を殺害しろとだ」と重たい嘆息と共に彼は答えた。

これは若いチューリヒ人には沢山過ぎることであった。「ご機嫌よう、アゴステイーノ」と彼は言った、「私の地図には、ベルベンへの脇道が書かれている。あれがそうだろう。私は近道出来よう」。そして彼は受難の若者の手に一枚の貨幣を押し付けた。

ヴァーザーは葡萄畑の壁の間を歩き、山岳の麓で右手に向かって、しばらく進んだ後、緑の栗の影の下、ほとんど隠されていた村、ベルベン、旅の目的地を認めた。半分裸の少

年が彼に牧師館を示した。貧相な家であるが、しかしその前面には葡萄や、豊かな葉の華麗なものがぶら下がり、重なっていて、とても豪華な葡萄の葉の豊穡な花輪となっていて、その下の貧弱な建物は見えなくなっていた。朽ちた木の柱の上の広い格子屋根がこの重たい富のか弱い支えとなっていて、小家屋の控えの間であった。上方では夕陽の最後の光線が温かい金緑色の花の上に掛かっている、その下ではすべてが深い影の中にあった。

ヴァーザーがこのようなまだ見たこともない自由な充実を驚いて眺めていると、軽快な姿が戸口に現れて、そして彼女が緑色の影から出て来ると、それは水汲みに甕を頭に乗せている、美しい、まだ少女のような女性と分かった。剥き出しの腕が軽やかに、太くて褐色のお下げの上に乗せた容器を支えていて、彼女は顔を伏せて、優美に漂うように歩み寄って来た。そしてヴァーザーが丁重な姿勢で、恭しく挨拶して、彼女の前に立ち、そして彼女がその穏やかに輝く目を彼に向けたとき、彼は自分の人生でまだこのような美の勝利を目にしたことがないような気がした。

彼が牧師殿のことを尋ねると、彼女は静かに空いた手で、葡萄園亭と暗い通路を通じて、家の裏門の方を示した。そこは黄金の夕陽が差し込んでいた。その向こう側からヴァーザーが不思議に思ったことに、戦闘的の歌が響いて来た。

「敵の前で散ることほど、
この世で美しい死はない、...」。

かくも死を喜び、それでいて勇気付けるように響く、このドイツ人傭兵の歌は、疑いの余地なく、単に彼の友の力強い喉のみが発し得るものである。事実彼は強力な楡の木陰に跪いていた。そしてベルベンの牧師が一日の仕事の締め括りとするものは何か。彼は砥石で大きな太刀を研ぐのであった。

ヴァーザーは驚いて、一瞬言葉を失って立っていた。跪いている男は彼に気づき、太刀を芝生に投げ、飛び上がって、両腕を広げ、「心のヴァーザー」と叫んで、友を彼の厚い胸に抱いた。

第四章

到着した若者が、牧師の抱擁から抜け出した後、二人は互いに喜ばしい目つきで観察し合った。

ヴァーザーは若干啞然としていた。しかしそのことは少しも気付かれないようにした。彼はこのグラウビュンデン人の運動選手のような姿の横で少しばかり劣等感を覚えていた。イエナツチュの褐色で、ひげ面の頭部から炎のような野性的力が漲っていた。以前は自分の同級生の、陰気な、ほとんど眠たげな面影の中に微睡んでいたかもしれない放恣な意志の力が目覚め、激しい公の生活の危機の中で、解き放たれたものと予感した。

イエナツチュの方では、利口に謙虚な眼差しのチューリヒの友人が、彼なりに確固として自分の前に立っていて、その完成した清潔な姿に接して明らかに満足していて、町の文化の代表者と辺鄙な地で付き合うことを明瞭に喜んでいて。

グラウビュンデンの牧師は、その客人を手の仕草で、楡の幹の周りを取り巻いているベンチに座るよう指示して、よく響く声で叫んだ。

「ワインだ、ルーツィア[ルチーア]」。

ヴァーザーがこの家に入るとき出会った美しい、静かな女性が、間もなく陶製のジョッキを二つ満たして持って現れた。彼女は愛らしく内気なお辞儀をしてそれを友人達の間、木製ベンチの上に置き、すぐにまた遜って去った。

「この優しい方は誰だ」とヴァーザーは、気を良くして彼女を目で追い、尋ねた。

「私の妻[史実ではAnna Buol von Davos, 一緒にヴァルテッリーナ殺害を逃れた]だ、分かるだろう、こちらの聖職者の間では」とイエナッチュは微笑した、「プロテスタントの説教者は妻帯していないと駄目なのだ。それが主要事の一つだな。その上現今の生ぬるい教会当局が、私を排除しようと思っていて、私をこの孤獨な牧師職に処刑のように任命して、[カトリック]の迷信の水溜まりから出来るだけ多くの者を引き上げるよう、明白に私に迫ったのだ。これは、正直、私の計画であった。しかしこれまでのところ、私にはただ一つの改宗しか成功していない。美しいルーツィアの改宗だ。どうして改宗させたのか。私自身を抵当にしたのだ」。

「彼女は法外に美しい」とヴァーザーは憂わしげに述べた。

「丁度私には十分の美しさだ」とイエナッチュは言って、客人に一方のジョッキを渡し、自分はもう一方を口に当てた。「それに穏やかそのものの女性だ。ー 彼女は私のせいで、カトリックの彼女の親戚からかなり難儀な目に遭っている。しかし君は何という立派な角製火薬入れを持っているのだ。いや、これはアレクサンダーの家族の形見だな。...その通り、ポントレジーナの老公は、亡くなって、今や正直なブラージュス、アルデンの私の同僚の貰う番だ。その点、彼が羨ましい。しかし君は一体全体どうしてそれをヴァルテッリーナへ持参したのだ」。

「これは私の旅の思い出の一つで、後で君に詳しいことを話すことにしよう」とヴァーザーは答えた。彼はマローヤでの警告すべき冒険について、この熱血兼によって、自分の話しの腰を、自分の意図に反して、あちこち折られることなく、どのように明らかにしたものか、自分自身まだ決めかねていた。「しかし今は、親愛なるユルク、とりわけ珍しい出来事について説明してくれ。君の祖国では、ここ数年の間、すべての政治家達の関心の的となった出来事だ。ソノ出来事デハ、君ガ主要ナ役ヲ演ジタ[Aeneis2,6]。君が主役だったのだ」。

「それについては、私より君の方が容易に良く教示されていよう。少なくとも関連に関してはな」とイエナッチュは答えた。その間、彼は砥石に左足を置いて、両脚を組んだ、「君は君の国の官房に勤めていて、チューリヒのお偉方は、惜しみなく費用を出して、いつも最新の情報に通ずるようしていることだろう。ちなみにすべては全く自然に進行したのだ。原因と結果の連鎖に従っている。君も承知していよう、君らの顧問官会議の話題は、数年前からスペイン・オーストリアが我らのカトリック教徒を買収していて、その戦争同盟のために、我らとの同盟や自由な軍の移動を確保しようとしていることであり、今や、この手先が何の役にも立たないことにうんざりして、向こうで」と彼は南方を示した、「すべての条約に違反して、日々の脅迫として、我らの国ヴァルテッリーナの境界にフエンテス要塞[Graf Alzevedo de Fuentesによる]を築いたのだ、とな。ー ハイナリヒよ、君にそ

の気があるなら、明日そこを訪問してみよう。すると君は、チューリヒの君の恵み深いお偉方の覚えがめでたくなるぞ。直接視察した問題の対象を報告すればいい。 — この要塞は不快なことであるが、しかし我らの死命を決するものではなかった。しかしカトリックの強国は、ドイツのプロテスタント達の壊滅戦争を用意していると、明瞭に考える頭脳がどれも確信を抱いたとなれば」。

「議論の余地なく」とヴァーザーは口を挿んだ。

「...すると、スペインにとって、ミラノからチロルへ、我らのヴァルテッリーナを通り、我らの山岳を経由する軍用道路を是が非でも確保することが、死活問題となり、我らにとってはこれを是が非でも妨げることが死活問題となったのだ。我らのスペイン派は二度と再起できないよう叩きのめされなければならなかった」。

「全くその通りだ」とチューリヒ人は言った、「ただ君らがあれほどに暴力手段に訴えさえしなければ、君らのトゥージスの人民裁判所が、もっと作法や規律を重んじて、その処罰があればほど残酷なものでなければ良かったのだが」。

「グラウビュンデン人の問題だ。 — 我らの許で政治に関わる者は、その首を賭けている。これは慣例的なもの、習慣的なものだ。ちなみにそれほどひどいものではない。我々は大袈裟な報告で中傷されている。両プランタが君らの会合や、すべての諸国に出掛けて、我らの悪口を言い、我らを悪人に仕立てたのだ」。 —

「どの党派にも属さない、すべての正直者の尊敬を受けているフォルトウートゥス・ユヴァルト[1567-1654]がチューリヒに書いて来た。君らは彼に対して無慈悲であった、と」。

「その銜学者には正当な仕打ちだ。難しい時代には人は旗幟を鮮明にしなければならない。つまり、生ぬるい者どもは、口から吐き出されるのだ[黙示録,3,16]」。 —

「彼は訴えたぞ、自分には偽の証言者が立ったのだ、と」。

「そうかもしれない。彼も実際命は助かった。そして曖昧な志操故に、単に四百クロネの罰金を課されたに過ぎない」。

「分かるよ」とヴァーザーはしばらく間を置いた後、続けた、「君らはポンペーユス・プランタとその兄ドルフを国外追放にせざるを得なかった、そのことは。しかし彼らを卑劣な犯罪者のように烙印を押して、四つ裂き刑の脅しをする必要があったろうか。彼らの祖先の輝かしい功績や彼らの地位が深く国に根付いていることを顧慮していない」。 —

「卑劣な裏切り者達だ」とイエナッチュは怒りの眼差しで激した、「我らの危機と混迷全体の責任は彼らにある。万死に値する。まず、とりわけ彼らはスペインと手を結んだ。ハインリヒよ、彼らを擁護する一言も無用だ」。 —

この支配者然として激しさで傷付いて、ヴァーザーは若干苛立った声と感情になって、今や触れるべきでない事に触れた。

「それで、大司祭、ニコラウス・ルスカ[1563-1618、Sondrioのカトリック]、 — 彼は一般に無実と思われていたぞ」。

「彼は無実だったと思う」 — とイエナッチュは囁いた。彼は明らかにこのことを思い出して不快な気分になって、黄昏の中、宙を見つめていた。

相手はこの奇妙な率直さに驚いて、しばらく黙っていた。「彼は拷問の後、舌をかみ切って、亡くなったのだ、...」と彼はようやく非難一杯に言った。

イエナッチュは短い、途切れ途切れの言葉で答えた、「私は彼を助けようと思った、...

この弱虫が最初の拷問段階を凌げないとは思っていなかった、...彼には個人的敵が多かった。ローマの僧侶達に対する反乱はその犠牲者を必要としていた。ここヴァルテッリーナにおける我らのカトリックの家臣達に対して脅しをかける必要があったのだ。聖書にあるような具合になった。つまり民衆全員が駄目になるより、一人死ぬ方がましである、とな」。[一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか。ヨハネ、11,50]。

悲しい気分を振り切るかのように、今やイエナッチュは起き上がって、友人を暗くなくって行く庭園から家の中へ案内した。壁越しに細い教会の塔が黄昏の最後の金色を受けて、浮かび上がっているのを二人は見た。

「ちなみに、かの不幸な長老は、ここいらでまだ数多くの信奉者を持っている」と彼は言った。それから彼は教会を指し示した。「向こうで彼は三十年前、最初のミサを読み上げた」。 —

玄関に面して開いている中心居間で、一つのランプが燃えていた。両人が家に入るとき、若い妻は表口ドアの所で一人の女性の友と話していた。妻はこの女性に呼び出されたもののように見え、この女性は不安げな身振りで妻に何か囁いていた。女性達の背後では、黄昏の村の路地を人々が走って通り過ぎ、混乱した声のざわめきが聞こえ、今や明瞭に一人の老婆の叫び声が甲高く生じた。「ルチーア、ルチーア。神様の恐ろしい奇蹟だ」。

このような情景には慣れていたと思われるイエナッチュが、自分の客人を先に行かせながら、部屋の敷居をまたごうとしていたとき、若い夫人が彼に近寄って、彼の袖を不安一杯に掴んだ。振り返ったヴァーザーは、夫人が死人のように青ざめて、組み合わせた両手を夫に向かって持ち上げるのを見た。

「いいかい、竈のところに行きなさい。そして静かに夕食の準備をするのだ」と彼は親しく命じた、「そして自分の腕を発揮して、我らの客人からお褒めの言葉を頂くことだ」。それから不機嫌に笑いながら、ヴァーザーの方を向いた、「狂ったイタリア人の脳髓の妄想だ。そのせいでこう言っている。亡くなった大司祭のルスカが向こうの教会に立っていて、ミサを捧げている、と。私はこの奇蹟に釈明を求めよう。一緒に行くか、ヴァーザー」。

ヴァーザーの背中に冷たいものが走った。しかし好奇心が勝った。そして「勿論」と彼は勇敢な声で言った。それから二人が大勢前方に駆けて行く狼狽した人々に従って、村の路地を教会の方へ向かって行く時、彼は囁いて、尋ねた。「大司祭は本当にもはや生きていないのだろう」。

「何を言う」と若い牧師は答えた、「私は人々が彼をトゥーゼスの絞首台下に埋めるとき、居合わせたのだ」。

今や彼らは正門を通過して教会へ入った。二人が丁度抜けて行った身廊はプロテスタントの礼拝のために、全ての聖具が片付けられ、聴衆のためのベンチの他には単に洗礼盤と剥き出しの説教壇があるにすぎなかった。小さなドア付きで仕切られて、身廊は広い内陣と区別されていて、内陣はカトリック教徒用に、彼らによって礼拝堂にされていた。

イエナッチュが開けると、二人は中央祭壇を眼前にしている、そこの神聖な装飾品や銀製の十字架は、狭いアーチ形窓から侵入してくる黄昏の最後の光の中、もともどもはや判然としなかった。二人の前では跪いて口ごもっている群衆がひしめき合っていた。女達、不具者、老人であった。壁に沿ってみずぼらしい男達の姿が押し合いながら、長く瘦せた

首を前方に出して聞き耳を立て、フェルト帽を震える手で胸に当てていた。

高い祭壇では二本の陰気な蠟燭が燃えていて、その明かりが、外部から侵入して来る黄昏の最後の微光と戦っていた。二本の小さな炎は破れた窓ガラスから入って来る、吹き消そうとする風で揺れていて、踊るような影が祭壇で奇妙な戯れを見せていた。撫でるような風が時折、微かな物音を引き起こし、祭壇布の弱々しい微光の襞を動かしていた。興奮した感覚なら、段上に一人の跪く男の白い衣装を見たかもしれない。

イエナッチュは中央通路を友人と一緒に前進した。恍惚状態に陥っている一群れの者達にはほとんど気付かれず、他の邪悪な、敵対的視線の者達からは、小声の呪いを受けながらも、しかし誰も引き留めなかった。今や運動選手の男[イエナッチュ]は、皆の目にはっきりと、祭壇に向かい合って立っていた。しかしこの祭壇の前には、すでにかかなりの数の不気味な若者達が、聖物窃盗に対する防御施設のように威嚇して集まっていた。ヴァーザーは煌めく短剣を見たように思った。

「一体何という非キリスト教徒的誑かしだ」とイエナッチュは甲高い声で叫んだ。「私を中に入れろ。誑かしを片付けてやる」。 —

「聖物窃盗だ」とヴァルテッリーナの者達の密な列から眩き声が漏れた。彼らはこのグラウビュンデン人[イエナッチュ]の周りに囲む輪を作り始めた。二人が彼の差し出した右手を掴んで、他の者達は背後から彼に迫った。しかしイエナッチュは一気に強力で振り解いて、自由になった。前方に活路を見いだしながら、彼は自分を襲った一番間近な男を鉄の拳で掴んで、この者を背後の高い祭壇へ投げ飛ばした。飛ばされた男は、両腕を広げて、素足を人群れに突き出して、段に強く叩き付けられ、髪豊かな後頭部を祭壇布に沈めた。燭台や聖遺物匣が軋み、長く響き渡る痛みの呻き声が生じた。

この混乱の時に乗じて、牧師は助かった。彼はこれを迅速に利用し、強引に動揺する人だかりを突き進み、自分の友の手を引きながら、開いた祭具室に達し、戸外に出て、ヴァーザーと一緒に自分の家へ急いだ。

安全な居間に達すると、家の主人[イエナッチュ]は壁の引戸を引いて、台所に声をかけた。

「私のルチーア、用意してくれ」。

しかしヴァーザー氏は衣服から、喧嘩の埃を叩き落とし、カフスと襷襟を直した。「僧侶のペテンだ」と彼は言った。この仕事に丁寧な没頭していた。

「ひょっとしたらそうかもしれない。ひょっとしたら違うかもしれない。人々が何か見なかったはずがあるか。何らかの空想物か。このアッダ川の沼水から湧き上がる靄はいかに感覚を混乱させるものか、君は知るまい。 — 民衆は気の毒だ。その他は別に悪くないのだが。上部ヴァルテッリーナではまさに有能なタイプが生存している、こちらの黄色のクレチン病患者とは全く別だ」。

「君らのグラウビュンデン人達は、人々に若干の限定的市民の自由を認めるのがより賢明だったのではないか」とヴァーザーは反論した。

「単に市民的自由ばかりではなく、政治的権利も私なら与えていたであろう、ハインリヒよ。私は民主主義者だ、分かるだろう。しかしひどい難点があるのだ。ヴァルテッリーナ人は熱心なカトリック教徒で、我らの発祥国の三分の一を占める教皇主義者達と一緒に、グラウビュンデンをカトリックの国にするつもりなのだ。 — これは要注意だ」。

その間、今やとても打ちひしがれて見える魅力的なルチーアが、この地方特有のリゾットを運んで来て、若い牧師は杯に注いだ。

「ボヘミアでのプロテスタントの武勲に乾杯」と彼は叫んで、ヴァーザーと杯を打ち合わせた、「君が計画を断念して、今プラハにいないのは、残念だ。ひょっとしたら、向こうではこの瞬間、勃発しているかもしれない」。

「私にとってはここで君の許にいたことがもっと名誉なことかもしれない。最新の情報によると、プファルツグラーフ[宮中伯、フリードリヒ五世,1596-1632]は優美に乗っていた種馬を御しているか疑わしいようだ。一 君達はボヘミアと同盟したことにはまだなっていないのだろう」。

「残念ながら、余りそうではない。確かに何人かグラウビュンデン人が向こうへ出掛けた。しかし少しも大した連中ではない」。

「むしろ冒険だな」。

「逆だ、少しも冒険ではない。テーブルで全てを賭けない者は、何も得られない。我らの当局はいい加減だ。中途半端の方策ばかりだ。それでも我々は我らの船[内通者]を焼き払い、スペインとは破談同様にし、フランスの仲介を粗放に拒絶した。我々は全く自分達のみを頼りにしている。一 ヴァーザー、信じられるか、一 何の防御も講じられていない。二、三の哀れな堡壘が築かれ、二、三の中隊が招集された。これらは今日にも来て、明日には逃げ散る間に合わせだ。軍の規律はないし、金もない、指揮もない。それに奴等は、私自身の我が儘な介入と彼らが呼ぶもの、私の職とは相容れないものなのに、そう呼ぶもののせいにして、一切の公の事柄への私の関与を断ち切っていて、かくて奴等の会議室から出来るだけ私を遠ざけ、この山岳牧師職に封じ込めている。立派な教会会議は、つまらぬ穏便主義を説教するよう、私に警告しているが、その間、我が祖国上空にはスペインの猛鳥どもが狙いすまして漂っているのだ。私は狂いそうだ。一 ここヴァルテッリーナ人の許で、計画されている陰謀の徴候は、日々増えている。私はもはや座視できない。明日私は自らフェンテスへ偵察に行くつもりだ。一 ヴァーザー、君も一緒に行こう。私は体裁の良い口実を持っている。一 そして明後日には馬で、ソンドリオのグラウビュンデン知事の許へ行く。彼はこの豊かな国の随を食らう他は何も知らない。我々が明日にも失うかもしれないこの国の怠惰な吸血鬼だ。しかし私は彼の全身の穴から不安の汗が噴き出すよう、責め立てるつもりだ。一 君は私の加勢をしてくれ、ヴァーザー」。

一

「実際」とヴァーザーは躊躇いがちに秘密めかして述べた、「私もグラウビュンデンを通じての旅で、若干何か生じているかもしれないと嗅ぎつけた」。

「おいおい、不幸の申し子よ、それを今頃になって私にようやく話しているのか」と相手は鋭く、緊張して叫んだ、「すぐに全てを一切整然と話してくれ。何か聞いたのか、どこで、誰から、何をだ」。

ヴァーザーは速やかに頭の中で体験したことを整理して、それを腕力行使の友人に適切に提供することにした。「マローヤの宿坊で」と彼は慎重に始めた。

「亭主はスカピーだな、ロンバルディア人。だからスペイン人と通じている、それで」。

「私が聞いたのは、勿論半ば微睡んでいるときで、私の小寝室の隣りで会話が合った。君のことを話していると思った。一 ロブステッリとは誰だ」。

「グロゾットのヤーコプ・ロブステッリは極めつきの悪漢で、ヤクザな騎士、穀物の高利で儲けて、スペインの引きで貴族になった。すべての香具師、追い剥ぎどものパトロン、相棒だ。ー どんな悪行も、どんな裏切りもやってのける」。

「このロブステッリが」とヴァーザーは強調して言った、「私の耳が正しければ、君の命を狙っている」。

「あり得ることだ。それは肝要ではない。彼と一緒に企んでいる相手は誰だ」。

「私は彼の名前を聞かなかった」とチューリヒ人は答えた。ポンペーユス氏に対し、秘密を守ることを、彼は義務と考えていた。イエナッチュが彼を脅すようににらみつけても、彼は率直に続けた、「名前を知っていても、その名前を告げるつもりはない」。

「知っているのだな、...吐き出せ」とイエナッチュは彼に迫った。

「ユルク、私のことは知っているだろう。こんな脅迫は苦手と知っているだろう。勘弁してくれ」とヴァーザーは出来るだけ冷静な表情で防衛した。

すると相手は愛撫するように強力な腕を彼の肩に置いて、優しく温かく言った、「心のヴァーザー君、率直になれ。私を見損なうな。私は自分の身を案じていない。はるかに大事なグラウビュンデンを案じている。ひょっとしたら、この救出、それに何千人もの命が、君の口一つにかかっているかもしれない」。

「名誉に関わる沈黙なのだ」とヴァーザーは答えて、情熱的抱擁から逃れようと試みた。

このときグラウビュンデン人[イエナッチュ]の顔に陰鬱な炎が走った。「いやはや」と彼は、友を抱き締めながら、叫んだ。「君が話さないなら、絞め殺すぞ、ヴァーザー」。そして驚愕したヴァーザーが黙っていると、彼はパンを切るときのナイフを掴んで、その鋭い切っ先をチューリヒ人の襷襟に向けた。

チューリヒ人はこのときでも多分毅然としていたのであろうが、というのは内心立腹していたからで、しかし不用心に抵抗の動きをして、鋭い鋼が彼の首を傷付け、二、三滴の血が不気味に温かく襷襟へ流れ落ちた。

「放してくれ、ユルク」と軽く青ざめて、彼は言った、「君に見せたいものがある」。彼はまず白いハンカチを取り出して、注意深く血を拭き取った。それから自分のメモ帳を取り出して、ユーリアの石柱のスケッチの頁を開けて、それをイエナッチュの前のテーブルに置いた。彼は素早くその小冊子を取った。このグラウビュンデン人[イエナッチュ]はスケッチを最初一瞥して、石柱の間にルクレーツィアが書き留めた言葉を見つけ、突然陰鬱な物思いに沈んだ。

ヴァーザーは彼を黙って観察していたが、自分が心ならずも引き受けたユルク・イエナッチュに対するルクレーツィアの警告の知らせが及ぼした影響に内心驚いていた。何と速やかにこの民衆の指導者の明察は、事実関係を察知していることか、何と確実に、仮借なくそれらの事実を関連付けていることか、と。悲しみと怒り、優しい思い出と厳しい決意とが、半ばそっぽを向いたこの男に交互に影響しているように見えた。「哀れなルクレーツィア」とヴァーザーは彼の真心からの嘆息を耳にした。それから彼の表情はますます謎めいて、閉ざされたものとなって、寄せ付けないほど厳しいものとなった。ー 「彼らはユーリア峠にいた、...彼女の父はグラウビュンデンにいるわけだ。気位の高いポンペーユス殿、貴殿はロブステッリを相棒としている、...深く落ちてしまったな」と彼はほとんど平静に語った。

突然彼は飛び上がった。「だろう、ヴァーザー、私の激しやすさには閉口だろう。学校では君にそれで迷惑かけたな。相変わらずそれを制御できないのだ。…ベッドに入って、君の邪悪な冒険を眠って忘れろ。　ー　涼しい明日の朝方、二頭の立派なラバで、フエンテスまで行こう。そのときには、以前のほどよい若造の私となろう。途中色々心地良く喋りながら行こう」。

第五章

ヴァーザー氏は夜明け前に目覚めた。彼は苦勞して鎧戸を開けた。鎧戸は無花果の木の過剰な枝や葉の茂みで、閉ざされ、密にそれらが絡まっていたのである。彼の思いは混乱し、錯綜していた。彼は腕力行使の友と全く危険なヴァルテッリーナとを、さっさと、キアヴェンナ経由の近道で後にする計画であった。しかし眠ってさっぱりすると、昨日の印象が和らいで、自分の決心が揺らいだ。自分の注目すべき青春の友への愛が上回った。この激しい、彼自身の言によると、都会の教養がなく洗練されていない性情が、故郷と生命とが危機に晒されているとき、爆発することになっても、それを強く咎め立てできようか。それに彼は以前からユルクの突然の気分の交替、彼の野蛮な、熱血の冗談をよく知っていたのではないか。いずれにせよ一つのことが彼にとって自明であった。つまり突然自分が旅立っても、ユルクに強いられた中途半端な告白から生ずるであろう災難を防止することにはならないということである。しかし彼が留まったら、そして自分が友人に体験したことを十二分に伝えたら、きっとユルクは彼の信頼に応え、そしてルクレツィアの父親に対するユルクの関係はどうして際限もなく苦いものとなったのか分かるであろう。そうやって初めて、自分の融和的影響の出番となるであろう。

かくて二人は親密に語りながら、フエンテスへ騎乗して行った。イエナッチュは昨日のことに触れなかった。明るい朝同様に喜ばしげであった。ほとんど気軽に彼はヴァーザーの詳細な旅の報告に対応し、ヴァーザーの立ち入った質問にも気前よく返事した。しかしヴァーザーは期待していたほど、重要なことを余り聞けなかった。　ー　バーゼルでの最後の大学生活の後、自分はドムレシュクに戻った、とユルクは語った。そこで自分は、自分の父親の臨終に立ち会い、その死後、シャーランスの人々は青二才の十八歳の自分を、満場一致で牧師に選んだのだ。自分はリートベルクにはただ一回訪問をただけだ。勿論ポンペーユス氏と政治的事柄について意見を交わした。個人的な事柄は交えていない。しかし二人の印象としては、お互い避けるのが無難であるという印象だ。プランター族に最初の民衆蜂起が生じた時には、自分は説教壇から止めとけと言ったものだ。だって当時はまだ自分の意見はこうだったのだ、つまり聖職者は政治に手を染めるものではない、とな。しかし危機が増大して行くのに、国家の舵取りに勇敢な舵取り役が見受けられず、自分の民衆が気の毒で見ておれなくなった。トゥージスの刑事裁判所、これは苦くも必要なものと思われるが、勿論導入の手伝いをし、その日々の運営を指示した。これに対し、プランター族への判決、ちなみに彼らの活動は国中に知られており、自分は弁護も妨害もしなかった。この判決は民衆の中から、一致した叫び声となって発生したものだ、とこのようにユルクは語った。

かくて会話は完全に政治に向けられた。もっともヴァーザーは最初、会話を友人の個人

的關係に限定しようと努めたのであった。しかし彼はユルクがチューリヒ人のヴァーザーにとって極めて興味深い、自分が根本的に精通しているヨーロッパ政治の諸問題を扱うときの情熱に圧倒され、引き込まれた。ユルクが厳しい難点を大胆に踏みこむときの厚かましさに驚き、興奮させられた。これらの難点を用意して解決することを、ヴァーザーは外交の至高の課題、願わしい勝利と見なしていたのであった。

答弁と反対答弁のこの速やかなやり取りのとき、彼はルクレーツィア嬢がドムレシユクでの悲しい混乱の時期、リートベルクに住んでいたのかという唯一の内気な質問も上首尾ではなかった。そのとき、ユルクの顔は昨晚のように突然また陰気になって、手短かに答えた。「最初はな。 — あの子は苦しんでいた。忠実なしっかりした心だ。...しかし私が一人の子供のことで拘泥していいだろうか。...それにプランタの娘だ。 — 阿呆な。

— 私はけりを付けた、と分かるだろう。 —

ここで彼は自分のラバに激しく拍車を掛け、ラバは驚いて跳ねて前進し、ヴァーザーはただかろうじて自分のラバをおとなしくさせていた。

アルデンで二人は彼らのラバを牧師の戸口まで行かせたが、ここは閉まっていた。ブラージウス・アレクサンダーは在宅ではなかった。イエナッチュは孤独に暮らす友の生活習慣に慣れているように見え、倒壊しそうな家を回って、裏口のドアの鍵を古い梨の木の窪みに見つけて、友と一緒にアレクサンダーの居間に入った。荒れた庭園の木々で暗くなった部屋は窓際に沿って置かれている木のベンチと大きな聖書の見られる虫食い状態のテーブルを除いて、空っぽであった。この聖職者の武器の側に、隅の方に世俗的武器が見えた。そこには古風なマスケット銃が立てかけてあって、その上にイエナッチュは、同行者が彼に差し出したミュッサー戦争以来の角製火薬入れの木釘に掛けた。それから彼はヴァーザーのメモ帳から一枚の紙を千切って、その上に書いた。「敬虔な一人のチューリヒ人が君を今晚、アヴェ・マリア祈祷時に私の許で待っている。こちらに来て、彼の信仰を強めてくれ」。その紙片を彼は開かれていた聖書の「マカバイ記」の所に置いた。

すでに太陽は暑く燃えていたが、イエナッチュは同行者に広がっているアッダ川溪谷から脅すように聳えているツヴィング城砦を見せた。彼は怪物と呼んだが、それは前足の一方をグラウビュンデンのキアヴェンナへ、もう一方をそのヴァルテッリーナへ差し出していた。堡壘への通りでは長い埃の雲が見えた。このグラウビュンデン人[イエナッチュ]の鋭い眼光は、その中に重たげな荷馬車の列を認めた。それが多いことから、彼はフェンテスが長期にわたって、強固な駐屯のために食料備蓄をしていると結論付けた。しかしながらグラウビュンデンでは、スペインの部隊は、ここいらに見られる沼地熱病で半数に減少しており、要塞への入城は、スペイン人の間では落命と見なされていると喋々されていた。このことをイエナッチュは自由伯[ブルゴーニュ伯]の出の極若い少尉から証言を得ていた。彼はフェンテスで病気になって、このような情けない没落を回避するために、数週間の休暇をベルベンの山岳空気を吸いながら過ごしたのであった。退屈凌ぎに彼は新しいスペインの本を持参していて、とても面白い話して、彼は自分一人が笑って過ごすのもつたいないと考えて、その話しを自分とは友好関係にある若い牧師に伝えたのであった。この牧師[イエナッチュ]は、彼にとって、その精神といい、そのスペイン語の知識といい、この話しを享受する完全な能力があるように見えたのである。この本は牧師館に残っていて、今日イエナッチュはこの創造豊かな騎士ドン・キホーテの本を、 — そうその表題は言っ

たが、一 スペインの要塞への鍵として利用することを考えていた。

丁度一番外の堡塁の門が最初の糧食馬車の前で開いて、イエナッチュは自分の疲れたラバを駆り立て、この機会に容易に入城しようとした。しかし二人の友人が要塞に達すると、跳ね橋の所に、入城を監視しながら、一人のスペイン人の大尉が立っていた。黄色い、タフな、一 ただ骨と皮ばかりの若造で、熱病で、消耗されるべきものは消耗されていた。彼は参入して来る者達を、空ろな不審げな目で調べていて、イエナッチュが上品に挨拶して、自分の若い知人の消息を尋ねると、簡潔に返事した。「旅立った」。彼がそれを不審に思い、どこへ、どれほどの長さで行ったのか更に尋ね、この若者のものをまだ借りているのだと付け加えると、このスペイン人は辛辣に答えた、「あちらだ。永久にだな。貴殿はそれを形見と考えたらいい」。一 そう言いながら、彼は骨張った手の人差し指で、遠からぬ墓地教会の小暗い糸杉の方を示した。それから彼は門番に命令を与え、兩人に背を向けた。

イエナッチュは厳しく警護された要塞に侵入する他の手立てを有しなかったので、友にコモ湖の岸辺まで更にラバで行こうと提案した。そこはわずかばかり離れていて、魅力的に煌めいて見えた。やがて二人はその北の端の活気ある船着き場に達した。涼しく青い、明るい帆船の帆のはためきで活気のある波の息吹が二人に吹き寄せてきた。湾は船で一杯で、船は丁度荷を下ろしていた。豊かなロンバルディアのオリーブ油、ワイン、生糸、他の生産物が、山岳を越えての輸送のために荷車やラバに積まれていた。大きな石造りの宿の前の広場では、けたたましい声や楽しげな人の群れの多彩な市場が見られた。兩人のラバは、はち切れそうな桃や香りのいいすももで一杯の籠の側を苦勞して通り過ぎ、旅館のドーム状の小門まで行った。薄暗いその門道では、亭主が一つの樽の前に跪いて、赤い泡立つ飲み物を渴して寄って来る客人達に注いでいた。そこに隣接する酒場を一目見て、イエナッチュは、ここの騒がしい客人達とうるさい犬どもの間では涼しく休めないと納得して、庭園の方へ向かった。庭園は一個の密な葡萄園亭となっていて、その蔓のある緑の葉で覆われた壁と朽ち果てた船着き場の階段は波で洗われていた。

二人が門のホールを通過して亭主の側を過ぎて行くと、亭主は、空のジョッキを差し出している百姓達の密な群れに囲まれていて、不安げな身振りで、グラウビュンデン人[イエナッチュ]の意図に異議を称えたいかのように見えた。しかしこの瞬間、二人に対し庭園の方から異国風な仕立て服を着た貴族の少年がやって来て、若いチューリヒ人に優美な挨拶を行った。彼は品のいいフランス語で次のような依頼を述べた。

「私の御主君、アンリ・ロアン公爵[1579-1638]は、こちらにヴェネツィア旅行の途次、立ち寄られています。庭園での休息地より、二人の新教の聖職者が宿の前で下りられるのをご覧になり、殿方に、人混みを避けたいご意向ならば、庭園を訪問されても苦しゅうないと言上するようにとのことです」。

明らかにこの運の良い出来事と自分に向けられた名誉とに喜んで、ヴァーザー氏はぎこちなく、しかし申し分なく、同じ慣例語を遣いながら、答えた。自分と自分の友は、自分達に向けられたご配慮に感謝し、殿下に対し自ら謝意を述べる恩恵に与りとう存じます、と。

二人の友人は、自分達の前を歩んで行く美しい少年に従って園亭へ向かった。南方に園

亭はバルコニーに似た張り出しを有し、その葉叢の壁を通して、色とりどりの絹の服が見え、お喋りする女性達のざわめきが、一人の子供の明るい歓声で遮られながらも、聞こえて来た。そちらではピロードのクッションの上に細身の青白いレディーが寄りかかっている、その早口と素早い顔の表情は、活発な精神の所在を物語っていて、レディーは精神を休ませて英気を養おうという気配ではなかった。彼女の前の石造りのテーブルでは二歳の少女がちょこちょこ歩いて歓声を上げ、可愛いお下げを両手で持ち上げていた。そこに一人のイタリア人の少年が臆して離れたところで弾いているマンドリンによる民謡のメランコリックな旋律が響いてきた。

公爵自身は庭園のより静かな北方の端に引きこもっていて、そこで一人っきりで、波で洗われた低い壁に座っていて、両膝に一枚の地図を広げ、その線を見ながら、彼は威勢良く自分の前に聳えている山岳塊と比較して、訝しげにしていた。

ヴァーザーは今や公爵の休憩地に達して、自らと友人とを、深くお辞儀して、紹介した。ロアンの目は早速、野性的活力で奇妙に魅力的風采のグラウビュンデン人に据えられた。

「貴殿の上着で私は新教の聖職者であると思ったのだ」と彼は、関心を抱いて彼の方を向いて言った、「だから貴殿は、ここで遭遇はしても、貴殿の目も黒っぽくても、イタリア人ではなかろう。多分近くのラエティア人の子息だろう。それで貴殿に頼みたい。昨日、シュプリーゲンを越えて、私が通って来たこれらの山脈について、一部はまだ眼前に見えるのだが、明確に説明して欲しいのだ。私の地図を見ると途方に暮れる。私の横に腰掛けてくれ」。

イエナッチュは熱心に立派な兵站地図を眺め、すぐに合点した。彼は公爵にわずかなきびきびした筆致で、自分の故郷の地理学的状況図を描き、その様々な谷を、そこで発生している奔流、三つの異なる海に注いでいる奔流に従って整理した。それから彼は数多くの山岳経路について話し、熱中しながら、偏愛と驚くべき事情通を示しながら、その軍事的意義を強調した。

公爵は明らかに好感を抱いて、関心を募らせて、素早い議論に付いて行き、今やその穏やかな、しかし見通す目を自分の側に立っているグラウビュンデン人に向け、物思いに耽って視線を彼に留めていた。

「私は兵士で、それを誇りとしている」と彼は言った、「しかし私は、民衆に対し説教することを許されている者を幸せと称えたいと思う時がある。『平和に仕える者は、浄福だ』と。今日ではもはや同じ手が、使徒の剣と将軍の剣とを握ること許されない。我々は新しい同盟にいる、牧師殿、もはや英雄達と予言者達の古い同盟ではない。サムエルとギデオンの二重の役割は昔の話だ。今日では各人が自らの職責を果たせだ。私は次のことを重大な不幸と思っている」とここで彼は嘆息した、「つまり私のフランスでは、新教の聖職者達が熱意の余り、人々の心を内戦へと焚きつけることに夢中になってしまったことをな。新教徒の教区民の市民的権利を保障することは、政治家の職務であり、教区民を守ることは兵士の職務だ。聖職者は魂を守るべきで、それ以外不幸を引き起こす」。

若いグラウビュンデン人は不機嫌に赤面し、返事しないままであった。

この折、小姓が現れ、恭しく告げた、公爵の旅の小舟は出発の用意が整いました、と。ロアンは二人の友に好意的手の仕草で暇乞いをした。

家へラバで帰りながら、ヴァーザーは公爵の政治的役割について考察した。公爵は丁度当時自分の新教の市民達に対し、領地での諍いとき、名誉ある和平[1629年6月27日, Alaisの和平]を勝ち取っていたのであった。ヴァーザーはこの和平は長続きしないだろうと述べ、ロアンとフランスの新教徒の状況を自分の友にこの上なく暗い色調で描いて、満足していた。彼は自分が公爵にとってユルクに比べて、とても目立たず、いや全く消失していたことに若干気分を害して、陰気になっていた。 — 彼は言った、アンリ四世以来、フランス人の政治は、ドイツの新教徒を皇帝や帝国に対して庇護すること、これに引き換え、自国の改革派[新教派]には生存の根を断ち切ることを目標にしているのだ。その政治は、国家統一の回復により、外部への進撃力を高めるように努めている。このことから奇妙な状況が生じていて、フランス人新教徒は抑圧されなければならないが、それはドイツ人新教徒にフランスの政治的軍事的援助が確保されるようにするためであって、ドイツ人新教徒はこの援助を極めて必要としている。 — かくて公爵は、その地位と性格は高度なものであるけれども、その身には悲しい厄災が待ち構えていて、自分の力を癒やしがたい葛藤の中で消耗し、フランス宮廷で、ますます土台を失って行く見込みである。今彼は多分妻と子供をヴェネツィアに移すのであるが、これは間近に新しく勃発するであろう嵐の際に、より自由な手を確保するためであると思われる、とこのようにヴァーザーは語った。

「君は狡猾な外交官になったな」とイエナッチュは笑った。「しかしこの平野は恐ろしく蒸し暑いと思わないか。向こうに一軒納屋がある。 — 我らのラバをしばらく影の中につなぐのはどうだろう。そして君は君の賢い頭を干し草の中に休めたらどうか」。

ヴァーザーは了解して、短時間、二人は薄もやの臥所に手足を広げて、微睡んだ。

若いチューリヒ人が目覚めると、イエナッチュが彼の前に立っていて、嘲笑的視線で彼を眺めていた。「いや、君は眠りながら何と神々しい顔をするのか」と彼は言った、「語るがいい。何の夢を見たのだ。君の思慕する娘のことか」。

「私が衷心から敬う許嫁[1624,16歳のAnna Füllli と結婚]と君は言いたいのだろう。これは珍しい話ではない。しかし私は、事実、不思議な夢を見た、...」。

「今度は分かったぞ。...君は自分がチューリヒの市長となっている夢を見たのだな」。

「そうだったのだ、...珍しいことに」とヴァーザーは考えを集中しながら言った、「参事官会議室にいて、グラウビュンデンの事柄について、 — フェンテス要塞の意義について講演していた。私が言い終えると、間近に座っている参事官が私の方を向いて、こう語った。『私は全く厳格な市長殿の意見と同じです』と。私は市長の方を見た。すると、何と、私自身が市長の椅子に座って、その首飾りを帯びていた」。

「私も夢を見た」とイエナッチュは言った、「やはり奇妙なものだ。クールではハンガリー人の占星術師、霊媒師がその生業を行っている知っているだろう、あるいは知らないかな。私はこの学者と先の教会会議のとき、夜間に付き合っ、どんな具合なのか知ろうと思ったのだが」。

「何ということですか。占星術だなんて、...君は聖職者なのに」とヴァーザーは驚いて叫んだ。「これは人間の自由を否定するものだ。自由こそはすべての倫理的なものの基盤です。 — 私は人間の自由に決然と帰依する者です」。

「それは君の健気な点だ」と相手は迷わず続けた、「ちなみに私はこの魔術師から何か

堅牢なもの、理解可能なものを取り出そうとしたのだが、出来なかった。彼は何も知らなかったか、あるいは私に正体を掴まれることを恐れたのであろう。――しかし先の夢の中で私はこの男をまた眼前に見た。私は彼の胸に性急に怒って、剣を突き付け、私の運命を知ろうとした。すると彼は、それを私に見せようと決心して、そして『これがそなたの運命だ』と厳かに言いながら、彼の魔法の鏡のカーテンを引いて開けた。

最初私は明るい海の景色しか見えなかった。それから緑の葉の茂った壁が浮かび上がり、グラウビュンデンの地図を前にして、私が丁度目撃したように、穏やかに青白くアンリ・ロアン公爵がその上に座っていた」。

第六章

このように会話しながら二人の友は、ヴァルテッリーナを通じて延びている埃っぽい街道をかなりの距離進んだ。すでに遠方にモルベーニョ宮殿や壁が輝いていた。

このときイエナッチュは鋭く、広くカーブしてこの小都市の方へ向かっている道の最後の蛇行を見つめていた。そこにゆっくりと小さな褐色の騎乗者が向かって来た。

「すごい」とグラウビュンデン人が叫んだ、「得がたい知り合いに会えるぞ。向こうから神父のパンクラツィー[虚構]がやって来る。以前の――十年前のことだが、――アルメンスのカプチン派僧侶で、カーツィスの尼僧達の聴罪司祭だ。我々は彼の修道院を教会から切り離れた。我らのカプチン派が皆彼のように立派なグラウビュンデン人であったら、そして機知に富んだ若者であったら、邪魔されずに済んだであろう。それ以来彼はコモ湖畔のどこかの教団の家に宿を見つけていて、こちらの周辺で、説教したり、喜捨を求めたりしながら、放浪生活を送っている」。

「彼のことは私も知っている」とヴァーザーは答えた、「昨年彼はチューリヒで、山崩れに遭った君達の町ブルールス[Piurol]の困窮した存命者のために募金活動をして、このような災害の良き面として、雄弁な言葉で、こうした悲しい出来事の場合、宗派の違いを乗り越えて、キリスト教的に共に同胞の手が差し出されると強調した。しかしその後すぐに、彼の活字になった懺悔説教を目にしたが、その中で彼は、――立腹して私が驚いたことに――粗野な言葉でこう主張していたのだ、山崩れは警告の審判であり、異端を甘受していることに神が処罰を下したのだ、とな。つまり彼は二枚舌を使っていて、咎むべきやり方だ」。

「カプチン派で実用的男であれば、やむを得まい」と相手は笑った、「ほら、彼はロバを速歩にした。私のことが分かったのだ」。

カプチン派の彼のロバは、彼の他になお二つの一杯の籠を運んでいたが、彼はこのロバを速やかに近寄らせて、それで埃の渦が巻き上がって飛んだ。しかしヴァーザーの予期していた陽気な挨拶はなかった。パンクラツィーの短軀が素早く前方に駆け、二人に警告する身振りで右手を差し出した。二人の旅人に、そのラバの向きを変えるようにとの合図に見えた。彼は、ほとんど二人の許に達すると、こう叫んだ。

「イエナッチュ、戻れ。モルベーニョへ向かってはいけない」。――

「どういうことだ」とイエナッチュは冷静に尋ねた。

「変事だ」とパンクラツィウムは答えた、「ヴァルテッリーナでは奇蹟や予兆が見ら

れる。民衆は興奮している。ある者達は教会で跪いている。別の者達は銃に弾を込め、その小刀を研いでいる。モルベーニョに姿を見せるな。君の牧師館に戻るな。ラバの向きを変え、キアヴェンナの方へ逃れろ」。

「何だと、私の妻を見殺しにしろと言うのか」とイエナッチュは激した、「私の友人達に警告もしないのか。健気なアレクサンダーにも、山の村ブグリオにいる実直なファウシュ[史実では『塵埃の小屋』亭亭主だが、新教牧師Bonaventura Toutschの面影]にも出来ないのか。大したことではないのだろう。私は戻るぞ、一 勿論その小都市は迂回して、アッダ川を經由して行く。ここにいる私の戦友、チューリヒのヴァーザー氏は怯む男ではない。...それでパンクラツィーよ、私の言うことを聞いて、一緒に来てくれ。今晚は私の許に泊まれ。我がベルベンの者達は罰当たり者ではないから、聖フランシスコの僧侶には敬意を惜しまないだろう」。

ちょっと考えた後、このカプチン派僧侶は同意した、「構わない、結局は君の言う通り」と彼は言った、「今日は私が君の守護聖人だ、別な折、君が私の守護聖人だ」。

かくて、彼らは、ベルベンへ、その動物を全速力で走らせて、向かった。この野蛮な出来事は、少しもヴァーザーの好むものではなかったが、それでも立派な表情をして、勇敢であると彼に付与された称賛に値すべく努めることを名誉なことと思った。

彼らがベルベンの牧師館前で下りたとき、丁度穏やかな晩祷の鐘が響いた。木立屋根の低いアーチの入口の所に、小さな体格ではなるが、表情豊かな顔の、肩幅の広い、真面目な男が、物思いに耽って、注意深く自分の帽子を眺めていた。彼はその帽子を、どの面も回しながら、それを陽にかざしていた。それは黒い色の高く尖った帽子であった。

「一体何という深刻な吟味をしているのか、同僚、ファウシュよ」とイエナッチュは彼に挨拶した。「君のフェルト帽はどうしたのか。見ると、上の方が千切れている。自分のバスの声を強めるために、これをメガホンとして使うつもりか」。

この小男は精一杯憂慮して答えた、「この穴をもっと仔細に見てみろ、ユルク。この縁は焦げている。これは弾がぶち抜いたのだ。私に対し、君のベルベン人達の一人が発砲したもので、私が葡萄畑を下りて行く時のことだ。勿論弾は君を狙ったのだ。壁の上ではただ私の頭だけが見えて、私の頭は、君も承知のように、君の頭と紛らわしく似ている。私は何で教会の仕事をしているのか、さっぱり分からない」、彼は更に激して続けた、「公正な役割ではない。我々に許されているのは、ただ精神の剣のみであって、一方人々は我らの肉を鉛や鉄で襲って来る」。

「ファウシュ、我が息子よ、殉教に至るまで、福音を説くと誓ったことを忘れるな」と深く影となったベンチの園亭の奥から、灰色髭の男の若干こもった声が響いて来た。この男はそこに垂直な姿勢でテーブルに着いていて、美しいルチーアからサッセル・ワインを注いで貰っていた。しかし若い妻は夫を見かけると、すぐに駆け寄って、青白くおずおずと彼の側にすり寄って、恐るべき不安からの庇護を求めているかのようであった。

「除外がある、ブラージュス、除外が。殉教死の間近までだ、死んだらあかん」とファウシュは答えて、彼の同僚の方を向いた。そのグラスを彼は取って、最後の一滴まで飲み干した。

一方イエナッチュは彼のチューリヒの友を、揺るぎない信仰心の牧師、ブラージュスに引き合わせ、また笑いながら牧師、ローレンツ・ファウシュにチューリヒの「ロッホ[穴]

館」の同窓生を紹介した。このファウシュのことをヴァーザーは数年上級のかかなり自堕落な生徒としてそれどころか良く覚えていた。「この男はグラウビュンデンでの事柄に爾来傑出した役割を演じて来た」とユルクは主張して、この小男の肩を叩いた。

カプチン派僧侶は両牧師と旧知の間柄に見え、ファウシュは今度はヴァーザーに向かって、その興奮した話しを続けた。

「チューリヒからの殿方、信じられますか。お主がお主の結構な町で風紀正しく説教に出掛けて、賛美歌本越しにしっかりとお主の乙女子を眺めているとき、神の哀れな戦士の私は、説教壇に上がるたびに、背中に寒けが走るのだ。教区民の一人の小刀、あるいは弾が私の肩に向かって来るかも知れないと案じてな。ーしかし」と、彼は男達と一緒に居間に入った後で言った、「私は今や十分に長く牧師を務めたと思う。これを体験したら」と彼は自分のフェルト帽の穴を示した、「決定的だ。もう我慢ならない。私はパルパンの叔母から二百グルデンの金貨を継承した。確実な生業を始めるにまさに十分な額だ。ー牧師服よさらば」。そして彼は自分の聖職者服に手を置いた。

「友よ、待て」とイエナッチュが叫んだ、「それは我々が一緒に決めよう。私も今日で我慢の限度だ。敵の弾に追われて私は説教壇を去るのではない、親切な演説のお蔭だ。アンリ公爵の仰有る通りだ」と彼はびっくりしているヴァーザーに向かって言った、「剣と聖書は協同するものではない。グラウビュンデンは剣を必要としている。私は聖職者の武器を脇に置いて、安んじて世俗の武器を手にしよう」。こう言いながら、彼は説教師の服を脱ぎ捨て、壁から剣を下ろして、それをきちきちの革ジャケットの周りにくくりつけた。

「おったまげたな、面白い見本だ」とカプチン派の男は甲高く哄笑して叫んだ、「貴殿らの真似をしたいと私もうずうずする。しかし私の褐色の僧服は残念ながら頑丈過ぎる。貴殿らの小さな上着よりも、織りが強固なのだ、尊敬する諸君」。

この成り行きを不思議に思わず、しかし同意もせず眺めていたブラージュス・アレクサンダーは今や両手を組み合わせて、厳かに語った。「しかし私は職務の終わりまで、殉教に至るまで、留まるつもりだ。殉教死までだ、神の加護でこの名誉を得たい」。

「敵の前で散ることほど、

この世で美しい死はない、...」。

とイエナッチュは燃えるような目で歌った。

「私は菓子パン屋になる」とファウシュは勿体ぶって説明した、「勿論その横にはちょっとしたワイン販売があるのは勿論のことだ」。そう言って、彼はテーブルに着いて、体に巻き付けていた胴巻きを外して、金貨を、熱心に数えながら、高く重ねて置き始めた。

一方ユルク・イエナッチュは、丁度入って来たルチーアを抱き締め、懇ろに接吻を浴びせた。「安心しろ、私の愛しい人、喜ぶがいい。たった今、そなたのゲオルクは黒い聖職者の上着を脱ぎ捨てた。この服のせいでそなたはそなたの一族から敵視されて来た。我々はここを去る。そなたも幸いなことになろう。そなたの夫には沢山の名誉が待ち受けていよう」。

ルチーアは喜びの余り赤面して、至福に賛嘆して、ユルクの野蛮な喜びに弾ける大はしゃぎの顔を見つめていた。明らかに薄暗い恐れは、彼女の心から去っていた。彼女は日々一層重く、この恐れを抱き、故郷での彼女の生活はこの恐れのために苦いものとなっていた。

「ここに、ユルクよ、我が同胞よ」と自分の勘定を終えたファウシュは今や言った、「ここに騎士ゲオルクの洗礼[誕生]日のための祝い金がある。馬と甲冑代だ。この資本は立派な投資となろう。私は百金貨あれば十分だ」。そして彼は自分の小さな遺産の半分を彼に押しやった。

ユルクは自分に差し出された短い幅広の手を握り、荒っぽく握手したが、しかし格別感動していず、その金を収めた。

一方ヴァーザーは、パンクラーツ神父に向かって腰掛け、彼を厳しく追及した。チューリヒ人にとってこのカプチン派僧侶の大胆な振る舞い、彼の陽気さ、自制心は、若干曖昧なもの、疑わしいものに見えた。しかしグラウビュンデンの同郷人の運命についてのこの神父の飾らぬ衷心からの配慮を知ると、彼の不信は消えた。そしてパンクラーツはいかに的確に危険な状況を把握しているか、いかに鋭く、迫り来る嵐の予兆を観察していたか、ヴァーザーは感嘆せざるを得なかった。

「今回この芝居の支配権を握っていて、その物欲や支配欲の目的のために」と神父は言った、「ヴァルテッリーナの人々の敬虔な単純な信仰を悪用しているのは、偉いさん達ではなかろうか。スペイン人か、ひょっとしたらグラウビュンデン人かもしれない。何てことだ。彼らは地獄の火を掻き立てて、彼らの流す血は、彼らの喉元まで上がってきて、彼らを溺死させる。 — モルベニーヨでは、ロブステッリの殺人団が谷を下りる途中と言われている。このような蛮行はただイタリア人の頭が思い付くことであって欲しい。しかし一つのことは確かだ、 — このことを銘記すべし、男性諸君」、 — と彼は起き上がって、三人のグラウビュンデン人の方を向いて語った、「ヴァルテッリーナでのプロテスタントの時代は終わったのだ、と」。

今やイエナッチュが声を上げた、「疑う余地はない。同志諸君、パンクラーツの助言は良いものだ」と彼は言った、「一瞬も無駄に出来ない。ここを離れなければならない。我々は素早く、我らの少数の信仰同胞を集めなければならない。我らの宗門の群れ、男、女、子供を山を越え、グラウビュンデンに追い立てて、武装してこの退却を援護するのだ」。

彼は長持ちを開けて、素早く手紙類を取り出し、あるものは千切り棄てながら、別ものは彼の胴着のポケットに収めた。

ブラージュス・アレクサンダーは、逃走について話しが及ぶと頭を振って、息らず持参して来たマスケット銃に、不満そうに、自分の腰に下がっている大きな家宝の角製火薬入れから火薬を詰めた。それから彼はその武器を膝の間に置いて、ゆっくりとしかし絶え間なく、杯を次々に干し続けた。その際、熱いワインが彼の冷たい落ち着いた視線を活気付けることも全くなく、彼の色褪せた顔が赤くなることもなかった。

若いチューリヒ人はこの行為を由々しいものと眺めていて、このように過剰に摂取しては、この高貴な飲み物はブラージュス氏の頭に昇って、差し迫った危機の瞬間にとっても大事な精神の明澄さを損なう恐れがありませぬかと最後には危惧の念を抑えがたく発した。

すると老公は彼に若干馬鹿にした視線を投げかけたが、しかし悠然と侮辱を感じることなく答えた、「主は私を強くされるので、主と共に私は何でも出来るのだ[フィリピ,4,13]」。

「それはキリスト者らしい言葉だ」とカプチン派僧侶は叫んで、グラスを合わせて鳴らし、灰色髪の新教牧師にテーブル越しに手を差し出した。

その間に月が昇っていた。外では楡の樹冠と無花果の濃い葉叢に明るい光がこぼれてい

た。しかし単に乏しい明るさが、小さな窓を通じて、広く奥行きのある小部屋に届くのみで、その多くの格子細工が石造りの床に影を投げかけていた。

ルチーアはイタリア製の鉄の油ランプをテーブルに置いて、芯を高くして、三つの明るい炎を煽っていて、そのランプに屈み込んだ彼女の愛らしい顔には炎の赤い反映が見られた。

その無邪気な口許は微笑していた。というのはこの若いヴァルテッリーナ人の妻は、その強い庇護を無条件に信頼している夫と一緒に、喜んで故郷を去る心積もりであったからである。その温かく照らし出された姿を見ながら、心惹かれたヴァーザーは、感動して、子供のような信頼のこの表情を眺めていた。

するとランプが突然軋んで、床に落ち、明かりが消えた。窓から一発銃撃されていた。男達は皆飛び上がり、同時に若い妻は声も上げず、沈んだ。穏やかなルチーアは致命傷の弾を胸に受けていた。[史実ではイエナッチュの母死亡]。

慄然としてヴァーザーは、臨終の美しい頭部を見た。その頭部には月光が掛かり、イエナッチュは跪いてそれを腕に抱いていた。ユルクは大声で泣いた。神父がランプにまた火を点そうとしている間、ブラージウス・アレクサンダーは自分の銃を持って、静かに月明かりの庭に歩み出た。

殺害者を彼は長く探す必要はなかった。

木々の幹の間に背の高い人間がしゃがんでいて、その前屈みの顔には黒っぽい、その顔を覆うような巻き毛の髪が掛かっていて、手にはロザリオを持ち、呻きながら祈っていた。彼の側には、まだ煙の出ているかさばったピストルがあった。

躊躇わずブラージウスは銃を彼に据えて、こめかみから一撃で彼を倒した。それから彼は顔面から沈んだ男の側に寄って、この男を仰向きに変え、観察して、口ごもった、「そうだと思った、一彼女の兄、狂ったアゴスティーノだ」。一しばらく彼は聞き耳を立てて立っていた。そして彼は庭園の壁越しに見張りながらまた家に忍んで行った。夜の静寂の中、不確かな騒ぎ声が彼の耳に迫って来た。「二羽の小鳥が鳴いた」と彼は思わず知らず言った、「やがてこの屋根に群れ全体が飛んで来る」。

この時、突然、鋭い叫び声が村から起こり、今や彼の頭上に響き、一教会の鐘が打ち鳴らされ、素早い震動で警鐘を告げていた。アレクサンダーの視線は、また暗闇の中を照らし出している、正体暴露のランプの明かりに向けられ、地階の厚い鎧戸を閉めて、家の中へ戻った。友人達と一緒に家を要塞に見たてて、最後の一人まで死守する覚悟であった。というのは、すでに路地から銃声がして、正面の戸口では打撃音がしたからである。ファウシュが丁度戸口に門を掛け、屋根裏への階段を駆け上がって、屋根天窓から外を覗いた。しかし新教牧師はまたマスケット銃に装填をし、路地に面している狭い、格子付きの台所の窓で、銃眼の許でのように、構えた。

「ならず者達め」と彼はチューリヒ人に呼びかけた。彼は丁度、部屋から出て来た所で、そこへ彼は自分の背囊を取りに行き、軽い旅用の剣を身に付けたのであった。「我らの命を狙えば、高くつくことになるものを」。

「後生です、ブラージウスさん」とヴァーザーは警告した、「神の言葉に仕える者が、人々に発砲するお考えですか」。

「言うことを聞かない者は、痛い目に遭わなければならない」というのがこのグラウビ

ユンデン人の冷血な返事であった。

しかし今度はパンクラツィーが勇敢な老公の体を両腕で掴んで、この壁穴から引き戻した。「気違い染みた応戦で、我々皆をお陀仏にするつもりですか。ー 諸君は退避して、山岳へ退かれよ」。ー

「南無三」とファウシュの声が階段口から下の方へ響めいた。「雲霞となってやって来る。ポレット[暴動に参加せず、殺されたカトリック教徒]の家に押し入ったぞ。我々は駄目だ」。

「ここから去り給え」と神父は叫んだ、両戸口に対する斧の切り込みがますます激しく音立てて行った。

「分かったよ、カプチン派殿」とブラージュスは言った。彼は今や両腕に柴の束と麦わらを台所から引きずって来て、慣れた手つきで、両戸口の間の通路に重ねた。「我々はここからボンダスカ氷河を越えてベルベル地方へ上がる。ファウシュ、全ての屋根天窓を開ける、風が入るようにな。済んだらこちらへ来い」。

ファウシュが階段をがさごそ降りて来た。上で見つけた色々な食料品を持参していた。今やヴァーザーはイエナツチュの方を見た。

「ここで道が分かれるな、パンクラツィー」と新長老牧師は言って、神父と柴の防塁越しに握手した。その間、玄関の中央は侵攻者達のわめき声の中、割れ始めていた。「正面玄関は君用だ。裏口を通じての我らの退却は炎が守ろう」。彼は薪の山に点火した。「退避だ、新教の男衆」。

火が垂直に燃え上がって、風通しの良い屋根裏までの通路を吹き上がっているとき、イエナツチュは腕に死者を抱いて、居間からメラメラ燃える明るみの中に出て来た。

彼の右手には長い剣が輝き、左腕には、その重さを感じていないかのように死者を抱いていた。死者の静かな穏やかな頭は彼の肩に折れたかのように休らっていた。彼は殺害の場所に彼女を置き去りにしたくなかったのである。ヴァーザーは緊急時であったが、この無言の憤怒と癒やしがたい悲しみの夜の情景から視線を逸らすことができなかった。彼は、炎の中、無垢の魂を運ぶ裁きの天使のことを考えざるを得なかった。しかしこれは明かりの使者ではなく、恐怖の天使であった。

グラウビュンデン人達が庭を通過して、山の麓まで逃れる間に、台所の神父は炎と煙の側で、戸口が壊されて飛ぶ瞬間をじっと待っていた。今や彼は柱の間に飛び込み、右手に持った十字架を差し出して、血に飢えた人々に向かって叫んだ。

「聖母様にかけて。諸君らは異端と一緒に焼き出されたいのか。...天の炎が彼らを焼き払った。消すのだ。諸君の村を救え」。...そして彼の背後で威勢のいい炎が弾けた。

もはや何も人間とは思えない呻き声を上げて、仰天した者達が後ずさりして、筆舌に尽くしがたい混乱が生じた。素早く伝説が広まって、聖フランシスコ本人が新教の牧師館で異端を滅ぼし、崇高な姿となって信者達の前に出現したと言われた。

かくてカプチン派僧侶は、近くの馬小屋に繋いでいた自分のロバにこっそり乗ることができた。火災と殺害の叫び声を後にして、彼は迂回して行き、フードを深く顔に被せて、コモ湖畔の自分の修道院に向かった。

第七章

この異常な出来事から五日目の夕方、ハインリヒ・ヴァーザーは自分の父祖の町へ向かっていた。彼はラパスヴィールからチューリヒへ向かう正規の市場船、郵便船に乗っていた。両大聖堂の細い塔の先端が、澄んで赤みを帯びた西の空にますますくっきりと大きく描かれてきた。そしてこの大変愛しい光景を見て、若い書記官は心の底から、予想以上に危険であった休暇旅行が無事済んで、良き摂理のお蔭と感謝した。

ラパスヴィールから出航の際、彼は単に乗船員達とのみ一緒であった。というのはブライスガウからの巡礼女達の一群れ、疲れた老婆達は、その日焼けした顔をおずおずと赤いスカーフの下に隠し、船の前方部分に密に固まって、身を屈めていたからである。彼女達は祈っているか、眠っているかであった。彼女達は聖なる恩寵の地、アインジーデルンからやって来て、更に長い橋を渡って、ラパスヴィールのカプチン派の許に参詣して、霊媒師や祓魔師として認定されている師父達から人間や家畜の病気に対する、それに悪魔的幽霊に対する秘薬を入手していた。そこでこの巡礼者達は山岳の向こうのある溪谷で異端に対して勃発した恐ろしい処刑について耳にしていた。異端は皆、火や剣で処分されたという噂であった。

確かにこの女達は異端の信仰者達のこの不幸を聞いて、恐ろしくも喜ばしい思いに満たされていたが、しかしまた、自分達が遍歴すべき新教徒の地方に背を向けて、境界の向こう側のカトリックの故郷にこの大きな出来事を伝えたいという願いにも包まれていた。

かくてヴァルテッリーナでの新教徒殺害のこの噂は、すでにこちらでは若いチューリヒ人の到着以前に、いややはり到着と同時に達していた。ヴァーザーも帰路、これは彼が相変わらず心の底では信じたくない思いでいたことであったが、自分が共に体験したベルペンでの襲撃は単に単発的なものであり、長く練られて、前代未聞の虐殺という極めた残酷なものは体験しなかったのである、と知った。船が着く村々で段々と乗船して来る市場の人々でさえ、そのことを十分に知っていた。

乗船員は、昨日初めて知り合った仲ではなかった。二人の船員、父親と息子は、すでに何年も前から、両湖畔の端の往来を舵取り下僕と一緒に請け負っていた。若者の方は、日焼けして黒い、力強く育った質の男で、ヴァーザーの同年輩であった。彼の父親は息子を幼いときから湖へ連れ出して、息子を早くから使い、町のために船を利用する手紙や小荷物の運送を任せていた。かくてこの若者は、シャーランスの牧師がそのユルクをチューリヒの学校へと連れて来たとき、すでに若いイエナツチュとも知り合っていて、後に彼に何度か知らせを届けたのであった。ヴァーザーが休暇の最初に、学校の同級生の帰省に同伴して、湖を上がって行くとき、舌鋒鋭い当意即妙のクーリ・レーマンが同行していなければ、この陽気な一日に最良のものが欠けていたろう。

彼はまた、父親と一緒に、疲れた小さなルクレーツィアが船に乗ったとき、チューリヒのカロリーヌム学院への道を彼女に教え、とにかく元気に臆せず学校のベンチに座っているユルクに彼女のがらくたを届けるよう勇気付けた当人であった。

更に村の人々、一 毎週チューリヒの市場に子豚を出すシュテーファの老公も、蜂蜜売りも、漁師も、二、三人の鶏売り、卵売りの女達もこの大きなボートの常連であった。

ラパスヴィールの郵便船がもたらした暗いニュースはその乗員をいつにない興奮状態に導いた。彼らの恐怖のイメージで怖じ気づいた想像力は、滅相もない飛躍を行った。伝えられた事実に満足せず、人々は純粋な教義に帰依するすべての民衆に対する教皇主義者

達の一般的陰謀を推定した。結局人々は、皆が噂で知っている、何人かは面識のあるポンペーユス氏を、この虐殺の首謀者とあてがって、アンティクリストの將軍へと祭り上げ、陰險なイエズス会士と炎の悪魔どもの一軍を率いているのだという見解に近くなった。

「悪の最終的勝利と最後の審判が間近に迫っている」と厳かに老子豚売りは語った。彼は若干聾であって、それだけに一層熱心に解説の奇妙な技と、聖書の独学研究に切り替えていたのであった。「すべての予兆が現れている。――偉大な動物が[黙示録,11以下]、...」。

「貴殿は間違っているかもしれません」とそれまで自分の中に入って黙っていた書記官が彼を遮った、「使徒の時代から、キリスト教徒の民に降りかかる難儀な災害のたびに、いつも、今日明日にも世界の終末が予期された、そのことはご存じでしょう。それでも貴殿と変わらず、ヘルヴェティア人[紀元前100年頃、スイス地方]の時代同様に、アルビス山もウート[ユトリ]山も立っています。そしてリマ川も古い川床を流れています。だから貴殿の精神と貴殿の舌も邪説を述べず、勝手な解釈をしないよう用心すべきです」。

老公は頭を垂れたが、しかし齒の間から呟いた、「これまでは当たらなかったが、今まさに当たると明らかなのだ」。

クーリ・レーマンは、ヴァーザーのすぐ横に立って、長い權を使っていたが、今やヴァーザーに、低い、黒くもじゃもじゃの眉毛の影を帯びたその水色の目から鋭い視線を放った。この射抜くような、普段は沈着冷静な目が生意気な炎に燃えていた。

「何故、書記官殿、チューリヒのお偉方は、我々湖上の衆をヴァルテッリーナのスパニオーレ[15、6世紀スペインから追放されたユダヤ人]やイエズス会士に対抗して送らないのだろう。肝っ玉が小さくなったのだろうか」と彼は言った。

「無駄口を叩くな、頼むぞ、少年」とびっくりして老レーマンが叫んだ。彼は舵の所でこの不屈きな話を聞いていて、右手を高く上げ、その減らず口を叩き潰したい存念のようであった。しかし彼は気を取り直して、いつになく甘言を添えた。「チューリヒのお歴々は賢明にきつと的確なことを講じていなさる」。

クーリは構わず続けた、「ヴァーザーさん、貴方は我々よりももっご存じだ。二週間前私は貴方を旅囊と一緒にラバースヴィールへ案内致しました。貴方は少しばかり山の方へ行ってみたいと仰有っていた。誓って、イエナツチュの所だったのでしょ。彼はいなかったのですか。ユルクは教皇の坊主どもにやり込められる玉じゃありません、誓って。貴方の目はとても悲しげだ。彼の身に何かあったのではないでしょ。それとも具合が悪かったのですか。従わざるを得なかったのですか」。

「彼は達者だ、クーリ」とヴァーザーは答えた。自分の言葉を吟味して、一言も言い過ぎないようにしている者のようであった。

「それでは賭けをしましょう、私がこの靴を履きつぶすより先に」、――クーリは勿論この靴を大事にしていた。というのは彼はこの靴を脱いで、自分の側の船の箱に置いていて、チューリヒでようやく盛装用に使っていたからである。――「つまり私がこの靴を履きつぶすより先に、イエナツチュはポンペーユス・プランタを亡きものにしてしましよう。そうでなければ彼はイエナツチュとは言えません。そのことを考えてください。御令嬢は気の毒です。ユルクも同じく気の毒だと思うでしょ」。

この気ままに発せられた言葉は、ヴァーザーが自分では認めたくないほど、自分にきつい印象を残した。しかしクーリの父親は新たに怒らなかつた。父親の目はキュースナーハ

[Küsnacht]村からほど近い、高い胡桃の木の影を受けた緑色の船着き場に据えられたままであった。そこでは急な、ニワトコの茂みと絡む根で繁茂した棚の間に一本の小川が湖に注いでいて、静かな透明な小川であったが、その下の窪んだ、洗い流された岸辺は、いかにその小川は春荒れるものか明らかにしていた。高台からは一件の別荘が下を覗いていた。その木々の下では一人の小さな苛立った若者が剣を持ち、羽根飾り帽子を被って、影の多い芝地を地団駄踏みながら歩き回っており、その側には威厳のある家庭教師風な姿があった。

「ヤッホー、レーマン、こちらへ来い、町へ行きたい」と少年が叫んだ。一方師傅はポケットからハンカチを取り出して、ボートに近寄るよう合図していた。

余計な苦勞であった。老レーマンはすでに、「おや、ヴァンピスパツハ[Wagensbach]の貴公子ヴェールトミュラー[モデルは1614-1677]だ」と叫んで、彼の船を胡桃の木に向けて、乗船用に厚板を用意していた。

数分後には、じたばたしている少年は、教師とヴァーザーの間の名誉席に座っていて、船の床にまだ届かないその落ち着きのない足を勝手に絶えず揺すって、二人のズボンに汚しかねなかった。

神ノ言葉ノ司、デンツラー氏[虚構]、そうこの教師は名乗っていたが、この貴公子越しにヴァーザーとひそひそ話しを始めていた。彼は狂信主義の身の毛のよだつ影響をはなはだ嘆いていた。ヴァーザーは自分が体験したことを出来るだけ簡潔に語り、自分のことは謙虚に背後に押しやっていたけれども、この家庭教師は、書記官殿が大胆に身を晒して、前代未聞の命がけの危険な冒険について、十分に驚いてくれなかった。それからこの教師は自分の個人的案件に話題を持って行き、その際ラテン語を利用することを結構なことと思っていた。

「書記官殿、この少年は」と彼は述べた、「素晴らしい天性のものを有しますが、内緒の話し、邪悪な悪ガキです。恵み深いシュミット大佐[Caspar Schmid]が、私が彼の満足の行くような教育の成果を上げたら、私は彼の養子の仰天するような大旅行へのお供が許されようと約束されなかったら、私は決してこの難しい教育を引き受けなかったことでしょう。我々はドイツの国々、イタリア、フランスを訪問する予定で、それにカエサルのように、イギリスへも侵攻するのです」。

「いや、神ノ言葉ノ司は、一緒に行く必要がある」と突然ここでこの小さなコーボルト[いたざら小僧]は、話題を察して、叫んだ、「しかしその前に私にすべての言葉を教える必要があるぞ、私がすべての言葉で司令出来るように」。

「ルドルフ、君は一体何になりたいのだ」とヴァーザー氏は尋ね、マギスターの露呈した弱みを隠そうとした。

「将軍だ」と小僧は叫んで、ベンチから飛び上がった。というのは丁度グレンデルの水門を通過して行き、今や船着き場に着いたからである。 —

やがてヴァーザー氏はまた慣れた仕事に戻って、以前と同様、参事会官房に勤めていた。しかし憲法業務は彼にとってもはや空虚な条文ではなくなった。自分の敏捷な思考の単なる訓練ではなくなった。彼は民衆の幸福と苦難が掛かっているという思いに貫かれた。彼は現実の危機に瀕している顔を覗いたのであった。

彼がグラウビュンデンを旅行し、すべてのプロテスタントの国々を恐怖に陥れたヴァル

テッリーナの殺害から無事救出されたことの結果、この若い書記官の声望はその父祖の町で異常に高まった。いや、ある日曜日、彼が市長殿の背後、自分の教会席に座しているとき、チューリヒ教会のアンティステス[改革派牧師長,Breitinger]の口から、皆の目が関心を持って彼に注がれる中、次のような彼の謙虚さには歓迎できない言葉を耳にする出来事があった。

「皆様は、世界を股にしたファーマ[風説]女神のトロンボーンによりこう承知されていましょう」と説教壇から響いて来た、「教皇至上の狂信主義が何と恐ろしい数の犠牲者を我々の同盟の国で積み上げて来たことか、一我々の新教の同胞の六百人が剣の切っ先で根絶やしにされ、一血で染まったアッダ川には辱められた死体が流され、一方その他の死体の残骸は切り詰められて、野に放置され、わめく野鳥類のおぞましい餌になっている、と。しかし天は破壊が一般的趨勢となっている時にさえ、その選ばれた逸材を保持する術を心得ていまして、その例証が、愛しい皆様、我々の許にはあります。つまり、生きてここに臨席されている人物、我々の同僚市民のお一人でありまして、衷心からの感謝を喚起する証言となっております。この方を天は、人間的諸力を通じて、その用心深さと勇敢さにより、将来の高次な目的のために備えて、この破滅の最中、救出されたのです」。

別の結果は、ヴァーザーの上司達が彼の旅行以来、彼を有能な、グラウビュンデンの事柄に通じた若者として、最も有為な任務を約束したということであった。人々は彼の判断を尊重した。優先して彼の達者な筆に、グラウビュンデンの官庁との公的なやり取り、それにこの運命が危ぶまれる国におけるチューリヒ寄りの殿方達との秘密の往復書簡が任された。そして、不思議なことに、今や次々とクールから到着する報告の死んだ活字が、以前はそうでもなかったのに、彼の明察と関与する以上に、はるかにもっと彼の心を捉えた。行間から気位の高いプランタの、炎のようなイエナツチュの、冷静な狂信家のブラージュス・アレクサンダーの力強い頭脳が浮かび上がって来て、彼に対し、この制御できない、党派心の強い、冷静な外貌の下、深く情熱的で、何にもましてその野性的自由を愛好する民衆の根幹を明らかにしていた。

彼が邪魔されることなく仕事机に向かっているとき、しばしば彼は我知らず過去に引き戻された。彼は再びベルベンの燃える家の前に立っていて、学友が炎の中から、青白い死者となってもなお美しい妻を肩に担って、出て来るのを見た。彼はイエナツチュが絶えず、疲れも見せず、無言で危険な山道を進み、砕けた氷河を渡るのを見、そしてヴィコソプラノの教会墓地で、この無言の男がその荷を下ろして、そこのグラウビュンデンの大地に埋葬するのを見た。ますますハインリヒ・ヴァーザーは強くこう印象を受けることになった。つまりグラウビュンデン人の家の竈を焼き尽くしたこの炎は、彼の胸の中で、秘かな消えることのない復讐の炎となって燃え続けることであろう、鉄のような意志によって燃るべきときまで隠され続けるであろう、と。そしてユルクが涙も見せずに、ルチーアの墓に立っていたとき、彼は彼女と一緒に青春のすべての無邪気さを、すべての優しい感情を、ひょっとしたらすべての人間的憐れみの情をも埋葬したのだという印象を受けた。ヴァーザーの心からの共感も彼は受け入れなかったのであり、一言の返答もしなかった。イエナツチュは友に対して石の如くなっていた。最後の発話、この旅でのほとんど唯一の発話は、彼がシュタラでの別れの際に、彼に向けたものであったが、若いチューリヒ人には不安な

厄災めいた響きの感じられるものであった。「私のことは噂で知ることだろう」と彼は彼に呼びかけた。唯一の同伴者としてブラージウス・アレクサンダーがユルクと一緒に去った。ブラージウスもルチアの墓では祈りを捧げて、その際恐ろしい旧約聖書風の言葉を並べて、ヴァーザーはほとんど理解できず、それは神を蔑する復讐心の発露に思えたものである。そもそもブラージウスは彼好みの男ではなかった。未だかつて、彼の陽気な、事物の様々な面に開かれた性情が、このような無愛想な反対物にぶつかったことはなかった。彼の友が、現今の気分するとき、この冷たい狂信者と一緒であると思うとぞっとした。

申したように、ヨブの知らせ[凶報]が次々に届いた。虐殺の直後、スペイン人達は、フエンテスから侵攻して来て、軍勢でヴァルテッリーナ全体を占領した。プランタ家の兩人はオーストリア兵をミュンスター溪谷へ率いて来て、失った地方を再獲得しようとする二回の試みは成果がなかった。グラウビュンデンの内部では日々、ヴァルテッリーナでの殺害の首謀者を裏切り者として、特に追放されていたポンペーユス・プランタに対する憤怒が増した。彼は混乱の拡大に乗じて、リートベルクの自分の堅牢な家をまた我が物としたのであった。

それで、ヴァーザーは、或る日、騎乗の使者が、この城の襲撃とポンペーユス氏殺害の知らせをもたらして、驚くよりももっとショックを受けた。その書状は騎士のフォルトウナートゥス・シュプレッヒャー博士[1585-1647]からであった。この法律学者は、この政治的情熱に支配されていた時代、尊敬される、比較的難点の少ない立場を保っていた。彼については、大胆な民主派の農政も、スペイン人の策謀も、同等に嫌悪を感じていて、平静な時には、すべての失敗や蛮行を毎日正確に描写することによって、自分の中で湧き起きている苦い辛辣な思いを、出来るだけ宥めようと努めている人として知られていた。これらの蛮行は彼にとって厭わしい極端な党派の罪に由来するものであった。彼はこのことを、年月の経過の中、一日の印象として生じたスケッチを、自分の祖国の詳細な、彼の自負するところの、完全に偏見のない歴史へと加工せんとする意図で行っていた。この情報に通じた男とチューリヒ政府は関係を持っていたが、それはイエナッチュが自ら言っていたように、情報に遅れを取らないためであった。この騎士は用心深くて、彼の書簡を国の官房宛てに送らず、私人のハインリヒ・ヴァーザー宛てに送っていた。

ヴァーザーが重苦しい思いの中で、再三読み、知らないうちに度々涙で濡らしていたこの書状の日付は、クールにて、一六二一年二月二十七日であった。これは厄災に満ちた出来事を、報告者の怒った興奮が窺われる或る言語で語っていた。

二十四日から二十五日にかけての未明、プレティガウのグリューシュ、陰謀の拠点であるが、ここの民衆党の指導者達が出発した。二十人の精力で、皆立派に武装し、馬に乗っており、先頭は狂気の沙汰のブラージウス・アレクサンダー、それに悪魔の化身イエナッチュであった。眠っている国の中を騒然と駆け、陰鬱なフェーン現象の温かい夜風を受けながら、彼らは未明の薄明かりの中、幽霊の如くリートベルクに出現し、門を斧で叩いて打ち壊し、寝惚けてびっくりした従者どもの抵抗を歯牙にもかけず、ポンペーユス氏の寝室へ侵入した。しかし空であった。呪いながら、荒らしながらまた退却にかかっていると、イエナッチュは狭い控えの間で、老いて盲の犬に一同の注意を向けさせた。犬はくんくん鳴きながら暖炉の煙道に鼻を上げていた。この煙道からポンペーユス氏は破廉恥な拳によって長い寝間着を掴まえられ、引きずり下ろされて、憤激の斧の打ち込みで殺害された。

殺害者達は、理解しがたいことだが、戦うことなく、破廉恥な凱歌を上げて、周りに警報が鳴り響く国を通して、グリュージュに戻って来た。日中クールからの通りを常歩で進んだ。そこで私、シュプレッヒャーは、馬の足音を耳にして、窓辺に寄り、自らこの恐るべき者達を目撃し、血に飢えたイエナツチュから嘲りの微笑混じりの挨拶を受けた。正午頃、この手紙の発信人たる私は、裁判所の依頼を受け、十分な警護の下、リートベルクへ赴いた。そこではポンペーユス氏はまだ自分の血溜まりの中に横たわっていて、痛ましく切り裂かれていたが、しかし死の平静の中にあっても、気位が高く、侮蔑的に感じられた。殺害の斧を、老城代のルーカスは裁判員の目から隠し、誰の手も届かないところに隠した。彼の言によれば、それを神の裁きのために鋭意保存するためであり、このことを老公は多分プランタ家の血の復讐[Blutrache,近親者の復讐,当時はまだ慣習]と考えているのであろう。彼の主人の臨終の場所に関しては、彼は壁に大きな十字架を記した。

シュプレッヒャーの手紙は黒い展望の、タキトゥスからの借用の見解[不詳, Historien I,3]で終わっていた。善人にとってすべての力が奪われているこの時代、悪人達の処罰が支配している摂理の唯一の印である、と。そして悲痛な叫び声が最後であった。「ラエティアよ、哀れ、汝は哀れ」[1618年、Pompejus Plantaの言葉]。

この悲痛な叫び声は不当なものではなかった。これは間近に続く将来が明らかにしている。事物のより良き転回をグラウビュンデンに約束するかに見えた若干の須臾の陽光の後、その運命が成就した。ポンペーユス氏の殺害以来、一年も経たないうちに、オーストリアとスペインの軍勢がラエティアの国に溢れた。民衆は絶望的戦いに蜂起して、女達や娘達でさえ、荒々しい殺害の武器を振った。

或る日、ザース[Saas]の教会で抑圧された者達が神の助けを求めて祈願していたとき、一匹の白い子羊が牧場から開かれた祭具室に迷い込んで来て、武装した農民の目の前、洗礼盤の横に現れた。追い込まれた人々は、自分達の件の無罪と正義とを証言する神の使いとそれを見なした。

ゲオルク・イエナツチュは反乱の主導者であった。彼は血を流し、彼の超人的勇氣は伝説となった。かくて彼は、伝説によれば、クロスターズ近郊の野外戦で、三人の仲間と彼のみで、数百人のオーストリア人を打ち負かしたとされる。

勇壮なグラウビュンデン人も優勢な強国に屈服させられた。ヴァーザーはその頭目達が次々にチューリヒに逃れて来るのを目にした。ザーリスが、ルイネルが、ヴィオラントがやって来た。 — ユルク・イエナツチュは現れなかった。多分、自分の山々の堡壘を離れることが彼には難しかったのであろう。

優勢な国オーストリアを恐れて、今回チューリヒの町の歓待は萎縮した。チューリヒは普段、亡命者達を受け入れて来た。ツunft[同職組合]の祝勝会するとき、若い市民達はグラウビュンデンのテル達に対して、人々はポンペーユス・プランタ氏の殺害者達のことをそう呼んでいて、熱烈に乾杯を上げていたが、今や避難者達に対して差し出される手はほんのわずかになった。人々は彼らに対し、静かに家の中で過ごして欲しいと頼んだ。滞在していないと、ウィーンでは証言するためであった。人々の精神は薄暗い予感に怯え恐れていた。三十年に及ぼうとする戦争の歳月がその影を投げかけていた。

或る冬の晩、ヴァーザーはいつもより真面目に、そして深く動揺した気分で若き許嫁の家を後にした。この許嫁と彼は間もなく結婚する予定で、この声望ある家庭で、夜は食事

をする習慣になっていた。ここでは彼は普通、玄関の前で、国家案件を忘れ、人生の日常を愉しんでいた。しかし今日は食べ物が喉につかえた。彼の義兄が、若い聖職者であるが、丁度会合のあった教会会議から、大事なニュースを家にもたらしっていた。彼の尊敬するアンティステス[新教牧師長]がある書状を読み上げ、殉教者ブラージウス・アレクサンダーの毅然とした最期[1622年12月]の知らせを伝えたのであった。詳細に彼の牢屋仲間の一人によって、彼が逃走中捕らえられ、インスブルックへ送られた次第、彼が牢獄で頑固に、新教の教えを棄てることを拒否した次第、結局右手と頭を切断する判決を受けた次第が語られていたのである。彼の右手が断たれて処刑台にあったとき、彼は進んで左手も差したのです、あたかもこの殉教では十分でないかのように。

自分の情緒を落ち着かせようと、ヴァーザーはいつもの習慣に反して、素早い足取りで雪の市壁を回って行った。彼が自分の薄暗い居間に戻って、火打ち石でランプに火を点火すると、窓の壁龕に高い人影があった。今やこの人物がしっかりと彼に向かって歩いて来て、彼の肩に手を置いた。ユルク・イエナツチュであった。

「ハインリヒ、驚かないでくれ」と彼は穏やかに言った、「私はただ一晩いるだけだ。早朝、門が開いたら、ここの市壁から去る。以前のように、君の小部屋に私を寝せてくれるかい。...握手したのか、迷っているのか。...この手は公正に裁いて来たのだ。...しかし今はグラウビュンデンですることはもはやない。すべてが失われた。ーこれがいつまで続くか分からない。私はマンسفエルト[Ernst von Mansfeld]の許へ行く。そこの大規模なドイツの戦場で、プロテスタントの武器が勝つか負けるかで、私の故郷の運命も決まる」。

ー

第二の書

ルクレーツィア

第一章

透明に青い冬の空がラグーン[潟]の町[ヴェネツィア]を覆っていて、同等の力と明るさで、その多くの細い水路のリボンの鏡からまた深く覗き合っていた。ここでは静かな水路はまた細身のアーチ状の大理石橋の鋭い薄暗い似姿 [反映]を見せていて、橋はヴェネツィアの最も狭く最も人口の密な一角をカンポ・デイ・フラーリ[フランシスコ会士広場]と結んでいる。この小さな広場は、ニコロ・ピサーノの異国風に崇高な傑作建築、赤く微光を発するマリア・グロリオザ・デイ・フラーリ大聖堂への小さな控えの間となっている。[ピサーノとは関係ない、Vasariによる誤解]。

橋の向こうのラグーンに建てられた家の狭い小門に、真面目な髭面の、短軀の引き締まった体つきの一人の中年男性が立っていた。彼の視線は、音もなく滑って行く、時折橋のアーチの下をくぐるゴンドラを静かに追うか、あるいは乞食達を観察していた。乞食達は大聖堂の石段にしゃがんでいて、丁度朝食を摂っていた。彼の頭上には、石壁に、ドアのアーチの半円に沿って、巨大な黒い文字、それにイタリア語でこう読まれるものがあった。ローレンツ・ファウシュ、グラウビュンデン出身のパイ職人。

広場の接岸階段に止まっている貴顕用ゴンドラからすでに幾人かの華奢なレディーが降りていた。何人かの優美な姿が、黒っぽい絹の柔らかな襪に包まれ、寒さからビロードの半仮面で守って、階段を上がり、広場を横切って、教会へ入って行った。グラウビュンデン人の顔つきは少しも変わらなかった。しかし今やこの真面目な無関心な顔に何か珍しいものが浮かんだ。橋の下に、日焼けした白髭顔の漕ぎ手が出現した。彼はその不器用な動きから判断すると、このラグーンには馴染みが薄い者であった。ゴンドラの後尾に立っている相棒の男は、若々しく敏捷な、真のゴンドラ船頭で、ゴンドラを素早い櫂の動作で岸壁に押し付けていたが、老公の方は、低いゴンドラのドアをゆっくりと開けて、ほんの手軽にヴェールをまとった、公然と大きな目で見つめている女性の降船に手助けをしようと構えていた。しかし女性は彼の手を取らなかった。いつの間にか、彼女は階段に立っていて、周りを見回しもせず、大聖堂の門に向かって歩んでいた。ゴンドラで働いていた老公がその女主人に追いつけないでいるとき、その表情が突然明るくなったファウシュ氏はラグーンの端に歩み出て、くぐもったバスの声でロマン諸語の挨拶を「ブン・ディ[今日は]」と呼びかけた。しかしかの老公は、知遇を求めている者の方は振り向かず、単にもじゃもじゃ毛の眉毛の下で一瞥しただけで、半分不審げで、半分了解合点した風で、それからゆっくりとポケットからロザリオを取り出し、ファウシュ氏には背を向けて、教会の方へ歩んで行った。

更にファウシュ氏は思いに耽った目で老公を追っていたが、そのとき脇の路地から素早く抜け出て来た小柄の痩せた伊達騎士が彼の側を飛び過ぎ、強靱に跳ねて、橋上に立った。ここで彼は自分の右手にこのパン屋とその快適な挨拶に気づき、一瞬彼にその若い、少しも可愛くないが、極めて独特な顔を向けて言った。「ちょっとまだお仕事だが、ファウシュ師父、私にキプロス・ワインの小ボトルを頼む。一分分かっているだろう、貴殿が個人的に推奨の品種だ。二分後に戻って来るから」。

ファウシュは陽気な日向から、自分の若干陰気な、この朝の時刻にはまだ空席の酒場の部屋に戻った。この部屋はその数多い椅子と清潔な白い大理石食卓を備えていて、明らかに上等の身分の客人を当てにしていた。彼が秘密の、良く施錠された部屋、この海辺の町で地下室として使っている部屋に行き、麦わら編みの[薦]包みの小ボトルをその薄暗い名誉[上等]席から取り寄せ、その若い伊達騎士の命令に従い、すべてを慎重に然るべく準備していると、この騎士が自分の用を終えて、早速また端を通して戻って来た。

彼は教会に足を踏み入れて、その背丈の高い女性をまた見つけた。この女性を彼の視線は遠い路地から素早く見つけ、その暗い、力強い美しさを彼は魅力的と思ったのであった。

敬虔に彼女は、顔を十字架の者に上げて、両手を組み合わせて、中央祭壇の段上で跪いていた。懐疑とか、慰謝への欲求、憧憬といった理由で彼女はこちらに参ったようには見えなかった。この背の高い女性は、内的動揺とか落ち着かない情熱に突き動かされているのではなかった。確固とした落ち着きがその美しい、まだ青春の柔らかさが残る面影には窺われた。しかし彼女の表情は尼僧院風に冷たいものではなく、力強い生命の輝きがあった。彼女は懇願せず、聴聞を切望していなかった。彼女は自分の魂の充実であり、自分の人生を捧げている日々の犠牲を実践し、慣習の誓願を行っているように見えた。

若い伊達騎士は好奇心を募らせて、ますます接近して行った。最後に彼女は立ち上がり、彼の不躡眼眼差しに、気位の高い余所余所しい視線で直接応じた。それから彼女は教会を

去った。二重に幻滅して、一 というのは、彼の遠目では、このレディーはもっと若そうに見えたからであり、彼女の単純な高貴さに対しては、彼のヴェネツィア風な経験と慣習は覚悟がなかったからであるが、一 彼は更に様々な教会の像に視線を投げかけ、寺男と一言言葉を交わした。

ファウシュが銀製の皿に小ボトルを載せて、若干厳かに持ち進み、自分の酒場の部屋の裏口に立ったとき、その客人はすでにぞんざいな姿勢でドアのすぐ近くのオットマン[長椅子]に座っていた。彼はこのとき、自分の足を載せていた大理石の小卓から両足を引いた。しかしパン屋のファウシュは、上品に磨かれた小さなゴブレット[足付きグラス]を取って来て、それをボトルの横に置き、習慣通りに自分の会話を始めた。

「貴殿にお許しを願って、お尋ねしますが、あの目と心を奪う女性は何なたです。少尉殿は鉄砲玉のように追って行かれましたが」。

「何だと、ローレンツ師父、貴殿も知らないのか」と話しかけられた男は言った、「生きたヴェネツィアの毎日の年代記、宿泊人名簿が知らんのか」。

「私には奇妙に馴染みの女性に見えました。誰なのか探り出しましょう。こちらの怠慢なヴェネツィア人女性の一人じゃありません。それにしても足取りが軽すぎます、ヴェールトミュラー殿。私は先ほど彼女がかくも美しく自由に広場を歩む様を見たとき、一種感動を覚えました。この腐って行くラグーンの横を歩いているのではなく、垂直な絶壁と泡立つ小川の側、私の故郷の山道を歩いているように思われました。更にもう一つ。彼女の従者、白い髭の老悪漢は、ロザリオを持って、猟師の目をしており、確かに私同様にあれはグラウビュンデン人です」。

「それでは貴殿の山岳の出か」とヴェールトミュラーは答えた、「そして貴殿のタイプか」。

「ちなみに何の不思議がきましょう」とファウシュは言った、「我らのフランス人党派のザーリスとか他の頭目が、この時節、客接待の良いヴェネツィア目指して来たに致しましても。実際我々の誰一人として、貴殿の御主君、高貴なアンリ・ロアンが、軍勢をグラウビュンデンに派遣するようリシュリュー[1585-1642]から全権を得られましたことをもはや疑っていません。今や私の国がオーストリア・スペインの圧政から脱出する時がようやく来ているのです」。

「よろしい」と相手は彼を嘲笑的に見つめて言った、「それではガリアの雄鶏は、ファウシュ師父よ、貴殿らのためにオーストリアの鷲と突き合いをし、羽根をむしり取れと言うのだな。貴殿らは大変寛大にフランス人を信頼しているが、スペイン人の爪にしっかり掴まえられているからか。公爵の副官という私の立場では勿論、貴殿のように政治的秘策計画には通じていない。そんなもの、ヴェネツィアの暇人が考え出したラグーンの神託、似而非神託だ。ちなみに」と彼は辛辣さを抑制しながら続け、このパン屋の目を見つめた。パン屋は真心を侮辱され、顔を赤くして彼の前に立っていて、このような蔑視に反論しようと激烈な表現を探していた。「ちなみにだ。我々公爵の宮殿で、今日、毎日繰り返されているのは、政治ではなく、芸術だ。まさに朝食のとき、ティツィアーノが話題になった。我々の公爵夫人と親しいノービル夫人が主張した。私どもの芸術愛好の御夫人も、今日までこの名手の最も高貴な作品の一つ[TizianのPala Pesaro]を見逃しておられます。こちらのフラーリの大聖堂にあるものです、と。先回公爵夫人がヴェネツィアに滞在された折には、

何らかの理由でこれはある画家の工房にあると明らかになったものだ。私は夫人から、それが現在どこにあるか確認に送られた。これはまた向こうの大聖堂にある。それで私は主人ご夫妻に、知らせに飛んで行くのだ。お方々は、ティツィアーノへの巡礼にすぐに踏み出すご意向だ」。

「旦那、貴殿はだからと言って私から離れることは許されません」とファウシュは言って、彼の大きな体で出口を塞いだ、「貴殿は私にとって何が神聖で、大切なものか残酷に見誤ってお出です。 — この苦痛の亡命生活の中、私の精神を生かしめ、高く持してくれるもの、それは日夜育んで来た希望、我が十年以上も、砕かれ、荒らされ、捕らえられて来たグラウビュンデンが再び解放されてある姿を見たいという希望でなくて何があります。それで私がニュースを気にしなくてよろしいでしょうか。触覚を四方八方に伸ばしていけないでしょうか。都合の良いニュースを渴いた穴から吸い込んではいけないでしょうか。 — ヴェールトミュラー殿、祖国のために貴殿の心が脈打つことはないのですか、...」。彼は深く息をしながら、太った手を胸に押し当てた。「グラウビュンデンにとって不名誉なフランス人の加勢を私は歓迎していると思わないで頂きたい。これは悪魔をベルゼブル[悪魔の長]によって追放するに等しい。しかしこの加勢が、情けないことに、この最も苛酷な隷属状態からの最後の抜け道なのだ。今でもグラウビュンデンには疲れた種族が生き残っている。勿論かの偉大な時代、私や、死の天使イエナツチュ、それに殉教者ブラージュス・アレクサンダーがレオニダスやエパミノンドスの事績を成し遂げていた時代には、皆むしろ胸に傷を負って、フランス軍に入るよりも、広い墓に入る方を選んだことだろう。そして我らの魂を、フランス人の枢機卿よりも、むしろ実在の悪魔に委ねることだろう」。

この場面が秘かに、貴重で愉しく思われた若いヴェールトミュラーは夢中になったパン屋を脇に退けて、ドアに手を掛けようとしていたが、しかし結論を述べないわけに行かなかった、「ローレンツ師父、私が世界史を存知している限り、貴殿はこの世界史に登場しない」。

この時ファウシュは彼の手を激しく、しかし友好的に握った、「少尉殿、今日日歴史はどのように書かれますか。甘い果汁もなく、同情もありません。しかしながら大衆的に偉大な行為という伝統は消えていません。たとえ学術的な歴史家が意地悪くそれらを、灯火を升の下に置く具合にして[マタイ、5,15]、照らさないようにしようともです。それらの行為は、山を越え、谷を越え、口から口へと伝わります。私の口から、貴殿の知らない、我らのグラウビュンデンの重要な歴史の頁をお教えすることもできるのです。

かつての二十年代、我らの国で高貴な民主制が支配していた時、ここは立派な、まことに世界史的一幕を演じたのです。フランスは当時、明かりと夜の間、プロテスタント政治とカトリック政治との間でインチキを行っていました。ダヴォスに集合した刑事裁判所は英知を見せて、これに終止符を打つと率直に決めました。フランスの公使に対して、 — ゲフィエで、彼は当時マイエンフェルトに宮廷を開いていましたが、その市民の一人、単なる市民、ただの新教牧師が、即刻荷をまとめるようにとの命令を、このフランス人に渡すことになったのです。...この勇敢な共和主義者は、恵み深い旦那様、他ならぬローレンツ・ファウシュ、ここに貴殿の眼前に立っている者だったのです。このフランス人が自分の帽子を頭から取って、この帽子を狂ったように両足で踏み潰す様をご覧頂きたかった

ものです。『私に命令するのが、少なくともザーリスかブランタといった男ならまだしも』と彼は怒って叫びました、『このような手合いでは、...』とここでファウシュは止め、言葉を探した。 —

「酔っ払い[ワインの革袋] — これが立派な会話の正確な言葉だ」と明るい強力な声が、開けられた入口から響いて来た。入口はこの瞬間、敷居に入って来た大きな人影で暗くなった。そしてびっくりして振り向くパン屋の前に威圧的な体型と支配者的眼差しの軍人が立っていた。

「彼は本当にそう言ったのか、ユルク」と当惑したローレンツ氏は気を取り直した。しかし彼に答える代わりに、この堂々たる余所者は軽く礼儀正しく若い将校に一礼し、将校はこの挨拶に軍人的に返礼しながら、開いたドアから陽光の中へ急いで出た。

第二章

この軍人[イエナッチュ]は細く、奥行きのある部屋の奥へがちゃがちゃ言わせながら、歩んで行き、剣を外し、それを羽根飾り帽子や手袋と一緒に空いた席に置き、自分は不機嫌な厳しい動作で他の席に座った。

ファウシュはまさにこの客人を今日少しも予期していなかった。それに彼は、敷居での傲慢な言葉とは裏腹の、大胆な顔に浮かぶ苦悶と弛緩の表情を見逃していなかった。彼はユルクの顔に更に案じた視線を注いだ後、慎重に酒場のドアを閉めた。

細い部屋は今や薄暗がりであった。ただドアの上の高い丸窓から赤みがかった、黄金の小さな埃の戯れる陽光が部屋の奥まで差し込んで来て、上品に磨かれて並んでいる小さな台付き杯の中で煌めき、更に深紅のワインを照らし出していた。ワインはローレンツ親方が自分に没頭しているユルクに黙って差し出したものであった。頭を腕で支えて、なお十分にしばらくユルクは黙っていた。一方ファウシュは両手を輝かしい大理石面上に置いて支えとしていたが、案じながら彼の前に立ち、話しかけられるのを待っていた。

ようやく客人の胸から重たい溜め息が漏れた、「私は不幸な男だ」と彼は思わず語った。それから自分自身の度胸のない言葉で悪い夢から覚めたように、そして自身の誇りを傷付けたかのように、突然反抗的に起き上がり、自分の陽気な目をしっかりと、しかし衷心から好意的にローレンツ親方に据えて、始めた。「私はまだダルマティアで長い仕事に従事していると君は思っていただろう[史実ではイエナッチュは1628-30ヴェネツィア軍]。しかし結局思っていたよりも早く仕事を片付けられ、流血も少なかった。ダルマティアの盗賊達は蹴散らかされた。サン・マルコ共和国[サン・マルコはヴェネツィアの守護聖人]は私に不満はないはずだ。簡単な遊びではなかった。神掛けて、私は故郷での山岳戦争には熟知している。しかし彼らの中に裏切り者を見つけて、奴等を幾多の策謀や偽装で仲違いさせるといったことがなかったならば、私はまだ向こうのジャーラの山壁の前で攻めあぐねていることだろう。それに立派な戦利品も得ていて、いつものように君にも、ローレンツ、君の取り分がある。君が私に君の乏しい遺産の中から金を割き、私を一等の甲冑に収め、兵馬に乗せてくれたことを私が忘れたら、私はイエナッチュとは言えないだろう」。

「感謝の気持ちは、美しくて得がたい宝石だ」とファウシュは喜んで言った、「しかしイエナッチュ大尉、名声と戦利品を仰山持って帰ったというのに、何を心配しているのだ」。

「私は最後の歩みのとき、我が陰険な運命の罠に落ちてしまった」と大尉は、眉毛を痛々しく寄せながら答えた[史実では1627年3月16日のこと]、「昨日正午、私はブリグ型帆船でリヴァに上陸した。私は義務上、知事[ヴェネツィア総督]の許に出頭した。私は彼とは格別懇意ではなく、彼は私に早速パドヴァの連隊へ戻るよう命じた。そこには夜になろうとするとき着いて、我が大佐は、市門の前、半マイルの所の旅館で、酒杯と賽子に興じて興奮しており、獐猛な状態であった。私が馬で通りかかると、彼は丁度窓辺で顔を赤く火照らせて、風に当たっていた。『面白い』と彼は私に吠え掛かった、『悪魔野郎がその子分イエナッチュを寄越した。上がって来い、大尉、ダルマティアからの仰山の分捕り品と一緒にな』。 — 私は下馬して、報告した。それから一行と一緒にになり、我々は明け方まで賭けをした。その際大佐は私相手におよそ百ツェヒエネ金貨負けた。しかし彼は憤懣を抑えて、喧嘩もしないで、町に達した。しかし彼は自分の不機嫌を威勢の良い自分の青毛馬にぶつけて、それでこの馬は泡食って駆け、青物市場で一人の少年をその蹄で蹴飛ばした。少年は教師に従い、早朝ミサに行こうと学童と一緒にぶらぶら付いていたのだ。我々はペトロッキー亭[ペドロッキー、パドヴァ]で下馬して、朝食を摂った。勿論すぐに学校教師もやって来て、厳かに悲しい表情をして、その学童のため、領主の高邁さと高い身分に相応の慰謝料を要求した。しかしルイネルはこの哀れな教師に猛然とくっかかり、それで私は同情心を起こし、仲裁に入った。すると私はたっぷり御見舞され、大佐はもはや正気ではなくなっていて、分別を忘れ、私の胴着を掴んで、パドヴァの嘘つき平民と雑魚寝の[ぐるになる]ならず者の民主主義者となじった、...」。

「君はそうだよな、立派なユルク」と民主主義者という言葉を目にすると、早速このパン屋は叫んだ。というのはこの魔法の言葉に抗することができなかったからである。「君はやはりそうだ。君の実直な心は抑圧された民衆にいつも率直に振る舞う」。

...「私が一層悠然と身を守るにつれ、一層放恣にこの我を忘れた男は私に向かって来た。『大尉、剣で決着だ』と彼は荒れ狂った。『近くの市門の所まで私と一緒にしよう』。少なくとも明日まで延期して、私が上司に対し剣を取る必要がないように頼んだのだ。しかし彼は私を侮辱し、武器で決着を付けようとしなのは臆病だと言った。そこでとうとう名誉に関わる不愉快事に終止符を打つために、私は彼に従い、不承不承、聖ユスティーナ聖堂の背後の防塁へ行った。我々の同行者は堂々たるもので、町の司令官もその部下達、刑事達も、およそ考えられる限り勇敢な人々でな、ローレンツ、他人の喧嘩に巻き込まれないよう十分に用心しているのだ。それなのに野外で、この非常識な男は私の剣にただ闇雲に怒って突いて来るだけで、数回手合わせをすると、 — お陀仏だ」。

「そんな」とファウシュは縮み上がった。もっとも彼はこの話しの結末を靈感豊かに前もって予期していた。それから彼は、小さな写字台の上、インク壺と、大部分が小さな傾斜を除いて空になっているゴブレットの間にあった自分の勘定書を取り出し、慎重にめくって、ある頁を開けた。そこには「ヤーコプ・ルイネル大佐」と見出しが記されていた。彼はペンを浸して、太い線を二本その全頁に十字に交差させた。それから彼はまた名前の横にも小さな十字の印を書き、それに添えた、「彼は一族の最後の者として、この命日に亡くなった」、そして日付を書いた。「安らかに眠れ。彼の咎は許されるべきだろう」と言った、「人々は彼の一族の最後のこの男を紋章と兜と共に埋葬する。私はルイネルの勘定を終わりとする。誰もそれを私に支払ってくれないだろう」。

「それでは私がそれも私のつけにしよう」と相手は溜め息を吐いた。

「逃げるつもりかい」とファウシュは尋ねた。

「いや私はヴェネツィアから出て行かない。私はロマン公爵から外へ投げ出されはしない」とイエナッチュは情熱的に答えた、「我が祖国解放のための戦いがまた燃え上がろうとしているまさに今の時にはな」。

「イエナッチュ、忘れるなよ」とファウシュは、その鼻に人差し指を付けながら、策謀的眼差しで言った、「ヴェネツィア総督は貴方を無駄にダルマティアに送ったわけではない。彼の目的は、貴方をロマンから遠ざけることだ。やはり彼は予感していたのだ、貴方の率直な人柄がすぐに高貴な公爵の信頼を得るであろう、そして貴方がグラウビュンデンで、彼の右腕となるに違いない、とな。すでに貴方の青年時の民主主義的偉大な活動が、この軟弱なヴェネツィア人にとっては、疎ましく、危険に見えるのだ」。

「天国も地獄も、私を私の故郷の運命から切り離そうとしてくれない」とイエナッチュはいきり立った、「そしてこの運命は今や公爵の手に懸かっている。ちなみに」と彼は辛辣に微笑して続けた、「グリマーニ総督は計算違いをしている。私はすでに数ヶ月前からこの学識ある公爵と軍事上の手紙のやり取りをしている。というのは、ローレンツ、かつてやむを得ない時の流れで私に課されたこの手仕事[軍事]を私は本気に思っているし、グラウビュンデンについて私より上手に地図を書ける者はいないからだ」。

「分かった」とファウシュは言った、「しかし貴方は、差し迫ったことをどう考えているのか。貴方はヴェネツィアの軍法では命の危険があるのだぞ。上司との果たし合いは死刑と禁じてあるのだ」。

「バーカ、私がかろうじて自分の命を守ったに過ぎないことに関しては証人が欠けていない」と大尉は口を挿んだ、「グリマーニは勿論、グラウビュンデン以来、すでに私を憎んでいる。一 彼は以前グラウビュンデンでは、君も覚えていようが、ヴェネツィアの公使であった。一 彼はとても徹底して私を嫌っているから、私を運河に投げ込ませるチャンスは歓迎であろう。しかし彼はこの悦びに浸ることはできない。私は数時間先駆けているのだ。決闘の直後、私は馬に乗って、メストレへ急いで戻った。ヴェネツィア総督への職務上の報告は正午以前にはヴェネツィアへ届かない。私が君の所へ来た些細な仕事はすぐに終わる。その後、私は大運河の側の公爵の宮殿へ行く。私がまさにそこで歓迎されるか、それは知らない。しかし公爵は彼の客人として、私の庇護と安全とを拒むまい」。

「ユルク、私の小屋から一步も出るな」とローレンツ親方は熱く言った。「公爵は間もなくこちらに現れるだろう。公爵は向こうのフラーリ大聖堂でティツィアーノをご覧になるつもりだ。このことはたった今、彼の副官、チューリヒのヴェールトミュラーが述べた。彼は教養ある男、上等な頭だ。しかしまだ青い、青い。彼はよくここで話し込み、私相手に公の案件を扱って、健全な政治的判断を培っている」。一 その間、彼はこっそりとドアを少しばかり開けて、その大きな顔を隙間に当てて窺った。「おい、見ろよ」と彼は続けた、「向こうの乞食どもがすでに動き出して、両側に感涙の人垣を作っている。公爵が間もなく着くな」。

こう言って彼は両開き戸を大きく開放した。戸口の暗い石壁枠が輝かしい色彩、生命と太陽の絵図を囲んでいた。

前景には、まさに接岸階段のリングに二艘の可愛い彫刻と垂れ下がる羽根飾りで飾られ

たゴンドラが繋がれていた。十二名の赤と黄金色の、つまり公爵紋の色の服を着たゴンドラ船員や小姓が、乗り物の警備のために、岸壁で緑色の影になっている運河に残っていて、ゴンドラの中で、色々な冗談や巫山戯をして時間を潰していた。公爵夫妻は降りていて、階段を上がり、教会前の明るい広場へと歩んでいた。広場で夫妻は更に立ち止まって、正面の美しさを賛嘆し、活発に論評していた。

その高貴な痩せた体型と、威厳のある優美な姿勢、それにカルヴァン主義の簡素さ故に黒っぽい生地 of 服をまとっている、このことから容易に公爵と察せられた。公爵と同伴の細身のレディーは、四方八方に絶えず体を動かしていた。今や彼女は愛想良く一人の短軀のずんぐりした殿方に向かって前傾姿勢であり、この殿方は夫人に若干重々しく、大聖堂のゴシック様式の建築について説明すべく腐心していた。軍服姿の若い貴族のお供は、適度に離れていて、フランス人らしい活発さで談論に興じていたが、明らかに栄光の聖母は話題に上がっていなかった。彼らの中央に小柄で大胆なヴェールトミュラーが傲然としていて、闘争心の強い雀がその餌を求めるときのように、ある主題を、その若い同僚達のすべての機敏な攻撃から躲して守り通しているように見えた。

イエナッチュは、門を開け放したまま、ファウシュと一緒に酒場の若干奥に座っていたが、しかし目は広場に向けていて、パン屋の肩越しに、緊張して注意深く一行を眺めていた。公爵の姿が彼の心のすべてを捉えた。公爵はまたしても彼にとって忘れがたい印象となっている青白い顔をしていた。彼はかつて何年も前コモ湖畔でこの顔を見たのであった。この瞬間、公爵は彼に対し、その鋭い輪郭の面影の横顔を見せた。熟練された自制心と痛々しい穏やかさの表情が、若干老いた機知豊かな顔に紛れもなく浮かび上がっていて、奇妙な具合に旧来の愛を目覚めさせ、力強く、グラウビュンデン人の心を掴まえた。彼を磁氣的に魅了するこの男は、彼の生涯を決定する時に、不思議な影響を彼に及ぼして来た。自分が相変わらず秘かな具合に結ばれていると感じられるこの高貴な男が、ここ彼の眼前に立っていた。彼は自分にとって、自分の故郷を決定づけるべく介入する定め of 男に他ならないように思えた。ロアンはまたしても両手に運命の籤箱を持っていた。

「向こうで雪のように白い丸い襟の、公爵夫人の前でへつらっているあのご立派な殿方は、我らの昔からの同級生、チューリヒのヴァーザーではないか」とファウシュは大尉の嵐のような思考飛翔を中断させた。「彼のカフスは以前、穴蔵館でのノート同様に、清潔で見事なものだ」。

「その通り、ヴァーザーがいる。 — 奴はヴェネツィアで何の用だ」とイエナッチュは囁いた。

「私の推測だが、...ひょっとしたらチューリヒは、サン・マルコ[ヴェネツィア]での軍務にある中隊のために、何らかの支払いの必要があるのかもしれない。 — しかし、それは単に、きつと口実で、 — あそこの狐は翼のある獅子[ヴェネツィアの紋章]よりももっとフランスの公爵に関心があるのだろう。公爵が戦いの舞台で率いるであろうフランス軍は、人々の噂では、アルザスに集結している。それで公爵はただプロテスタントのスイス州の大地を越えてグラウビュンデンへ連れて来られる。しかしチューリヒのお歴々は、フランスとオーストリアとの間で、自分らの中立を厳密に事細かに維持したいのだ。...この中立はただ思いもよらぬ速やかな突破によってのみ差し当たり阻止され、厳密極まりない監視も裏をかかれることになろう。この、チューリヒの支配者達の用心をすべてあざ笑

う出来事を、向こうにいる、健気な奴等の宰相は公爵と謀って、八百長談合をしているな」。

「なるほど」とイエナッチュは言って、剣の帯を締めた、「しかし今は我らの仕事を片付けよう」。

彼は札差と袋を取りだした。

「これらの二百ツェヒーネ金貨は君のものだ、ファウシュ」。そして彼は一巻き彼にこっそり渡した、「馬と甲冑代だ。私の他のダルマティアからの戦利品、 — これはここに手形と黄金とである。 — 両替人ア・マルカに持って行って保管すればいい、 — ヴェネツィア刑務所行きにはならんと思う。しかし十分注意することが必要だ、ではさらば」。

ファウシュは温かく差し出された手を握って、言った、「ご機嫌よう、ユルク、我が誇りよ」。

第三章

大尉もマリア・グロリオザ聖堂の門を通過して行った。彼は素早く周囲を見回し、それからこっそりと左手の側廊の高いアーチの下へ向かった。その中央では公爵の一行が祭壇画を眺めていた。ゆっくりと進みながら彼は一同に近付いた。

公爵は物思いに耽ってその絵に没頭していた。一方彼の妻は夫に、うっとりとした身振り、懸河の弁で、これまで味わう機会がなかった傑作に対する賛辞を述べていた。 — 一歩離れて、ヴァーザー氏は自分の背後に立っている寺男から小声で、この絵の様々な人物像の説明をして貰い、そしてそれらの名前を、上品な文字で、自分の札差から引き抜いた銅板腐刻の小さな頭部の上に記していた。

「ペーザロの高貴な一家は」と潜めた歌うような調子で、寺男は説明した。その間彼の足許にはへつらうように白い愛猫がすり寄って来た。この猫はその飼い主同様に、大聖堂では馴染みで、また同様に信心ぶっていて、彼の行く所にはどこにでも付いて来た。「高貴なペーザロ御一家は、守護聖人の聖フランシスコ、聖ペトロ、聖ゲオルクによって至高の聖母に紹介されています」。ここで彼は聖人達にお辞儀をして、恭しく間を置いた。それから彼は囁き声になった、観客に向き合っている可愛らしく青ざめた、末のせいぜい十二歳のペーザロの娘の頭を指し示しながら、注意深いヴァーザー氏に頼んだ、彼女の透明な褐色の目の類いなく特徴をお忘れにならないように、と。「...旦那様、この魔法の眼差しは、ひたすらに私に向けられています。私がこの甘美な小さな令嬢をどこから眺めようと変わりません。私が祭壇に歩み寄ると、私に挨拶します。私が仕事でどちらを向こうとも、このきらきらする明眸は決して私から去りません」。

ヴァーザー氏が自分の位置を何度も変えて、この主張がやはり自分にも都合の良い結果となるか熱心に試していたとき、若い貴族達の興味は、彼らは公爵夫人が支障なく芸術を享受できるよう配慮して、若干奥に控えていたのであるが、別の目の動きに魅了されていた。彼らを引きつけた視線は、ティツィアーノによって描かれた子供の不思議な視線ではなかった。寺男もわざわざ、この自然の魔法に彼らの注意を向けさせる必要はなかった。間近の支柱の脚部に二、三人のヴェネツィア娘が跪いていた。若々しい優しい姿である。顔を覆っている黒いレースのヴェール越しに、更に黒い眉毛と睫毛が見えて、視線が放た

れていたが、その憧れの炎の視線は聖母とその軍人的な見物人に分割されていた。見物人に不利というわけではなく、見物人もこの視線の恩義に借りがあるわけではなかった。

「この一家はどんなに素敵なことでしょう」と今や立派なプロテスタントであると同様に芸術愛好家でもある公爵夫人は、腕を上げ、開いた扇で三人の聖人と一緒に聖母を自分の視線から隠した。「この一家が、つまり信仰心の深い一家が、その信仰心をこの上級の宮廷国家の仲介なしに、見えざる者[神]の王座の前で捧げていたら、どんなに素敵なことでしょう」。

「そなたは立派なプロテスタント女性として語っている」と公爵は微笑した、「しかし案ずるに、ティツィアーノ巨匠はそなたに満足はしないだろう。そなたは結局この神聖な芸術全体を弾劾せざるを得なくなろう。だって、我らの天国や、天国の中にあるものは、線や色合いでは表現されないのだからな」。

公爵夫人のこの言葉のときに、このレディーの背中の奥にいた小柄のヴェールトミュラーは自分の同郷人ヴァーザーに嘲笑的視線を敢えて送った。それでヴァーザーは驚いたことであろうが、しかしこの時両人は余所者に気付いた。これはヴェールトミュラーがすでに一時間前、菓子屋の入口で出会った男であった。

「聖人ゲオルクのために、恵み深い奥方様、私は一言言上仕らざるを得ません」と今や影から出て来て、公爵夫人に礼をしながら、大尉イエナッチュは言った。「私は筋金入りのプロテスタントです。少なくとも私は純粋な教義のために血を流して来ました。しかし聖ユルクのため、私の名と同じ守護聖人のためなら私はいつでも祈りを捧げます。この竜退治の聖人は、以前その勇敢な槍で、カッパドキア[小アジア]の王女を救いました。しかし私ははるかにもっと悲しい境遇の娘を知っています。強固な岩に繋がれて、炎を吐き出す竜の爪で掻き毟られ、天から送られる救助者を憧れて待っているのです。この高貴な娘、これは私の哀れな祖国のことで、三つの同盟州の共和国です。この娘をスペインの竜の爪から解放されるであろう方、その娘の栄光の聖ゲオルクたる方、その方は私の眼前に実在される方です」。

「貴方はグラウビュンデン人かな」と公爵は、話者の強力な追従の弁よりも夢中になった熱意に心地良く感動して言った。一方公爵夫人は追従を聞いて、好意的微笑を浮かべていた。「私の間違いでなければ、貴方はゲオルク・イエナッチュ大尉かな」。

イエナッチュは肯って礼をした。

「貴方はジャーラウより私に手紙を下さった」と公爵は続けた、「私の副官ヴェールトミュラーの返事から」、そして彼は大尉に、このグラウビュンデン人の登場以来不審げに鋭く観察していた華奢な体つきのチューリヒ人、自分の名前が呼ばれて早速近寄って来たこの男を紹介した、「ヴェールトミュラーの返事から、貴方は察して頂いたことだろう、つまり貴方の祖国の状況についての知らせは、すべて私の注目に値するよう見えたと、添付された地図は有益であった、と。私の時間が遠征の準備で完全に費やされてしまうのでなければ、貴方に自ら、大方の場合、私の同意を述べ、その他の場合、疑念や反論を述べることに吝かではなかったのであるが、仕方なかった。それだけに一層今私にとって貴方がヴェネツィアに居合わせることは歓迎だ。貴方と手紙のやり取りをするようになってから、一度ならず、私は友の、グリマーニ総督にダルマティアからの貴方の帰還命令を頼んだのだ。いつも駄目だった。貴方は向こうで不可欠だという返事であった。貴方がここ

にいるのは驚きだ。貴方が急ぎ帰還した理由は何だ」。

「その大方の理由は、貴方にお目にかかりたいという私の熱い願いです。殿下、貴方にお仕えしたいという私の切望によります」とイエナッチュは言った、「この欲求のせいで、私は突飛なことを思い付きました。この目的を達成するために、大胆極まる手段を取りました。私のジャーラでの任務は終わりました。そこでヴェネツィア総督が私に対してどこか遠方の島で新たにヘラクレスの難事業を押し付ける以前に、急ぎ私はヴェネツィアに戻ったのです。このようなことをしても、貴方のご愛顧を得たら、この異例の勤務態度を好意的に、真実の明かりの中でご判断の上、私の上司に対しこの態度の詫びを入れることも貴方には容易でありましょう」。

公爵の詮索的視線はしばらく、彼にとって何らかの遠い思い出と結び付いているこのグラウビュンデン人の燃えるような顔に留まっていた。しかしこの視線は次第に一層好意的になった。暗い影のある目の心からの依頼に籠絡されていた。

この会話の間に一行は出口の方へ向かった。寺男は門の重たいダマスク織りのカーテンを上げて、平身低頭して、公爵の金貨とヴァーザー氏の丁寧な紙に包んだ贈り物を受け取った。

「イエナッチュ殿、貴方のためにグリマーニ総督に対し推挙の弁を述べる、その手筈を今日のうちにも整えよう」と公爵は彼らが外の日の当たる大気の中に出たとき言った。「彼は私の許で食事を摂る。今晚、私が時間を得て、貴方に対する彼の好意の度合いを高めた後、私の許へ来て頂きたい。その時に、時間を設けて、私は貴方の案件につき、貴方と話し合うことにしよう。貴方の祖国の利害は私の利害でもある。夕方の早い時間に、大運河での拙宅で貴方を待つことにしよう。一 ヴェールトミュラーよ」と彼は叫んだ。「それまで大尉のお供をしろ。貴方の愛想の良さを発揮して、私の客人がこの誘惑の多いヴェネツィアで余所の方へ誘われないように責任を持つのだ。洒落た話しをして、貴人らしいもてなしをし、彼を私の許に時間通りお連れしろ」。

公爵夫人はすでに慈しみ深い挨拶をして、待機しているゴンドラの一つに乗り込んでいた。さて公爵も去った。ただヴァーザーは何人かのお供の殿方と二番目のゴンドラを利用するつもりで、なおしばらく残っていた。

ヴァーザーは公爵と青春の友との会話を邪魔したくなかった。彼はこの青春の友をこれまでの年月視界から失っていた。彼も出来れば旧交を温める時を少し引き延ばして、折を見て、ユルクの現在の姿に適応したいと思っていた。チューリヒでのかの希望を失った別離以来、イエナッチュとその運命については、様々なプロテスタントの軍における様々な知らせが彼の耳に届くだけであった。しばしばより高い身分の相手が思いがけず致命的結末を迎える陣営での度々の決闘とか、肝を冷やす冒険、流血の襲撃といった話題がもたらされた。名誉ある戦場での称賛される武勲についても噂があった。しかしすべて不明確な輪郭の中で漂い、揺れていた。時が経過する中、ユルクのイメージはヴァーザーの魂の中で一つの謎めいた夢の像に歪んでいた。一

それで彼は友好的にユルクと握手した。しかし若干形式的で、当惑下もので、時に彼の現在の状態や現在の地位を尋ねることに限定されていた。それから彼もゴンドラに乗って、両将校[ヴェールトミュラーとユルク]がフラワー広場に二人つきり向かい合って残った。

「大尉殿、貴方に都合が良ければ」とヴェールトミュラーは始めた、「私の三つの使命

のうち、二番目のをまず実現して、貴方をマルクス広場の私が実地検分してお墨付きの旅館鏡亭へご案内致しましょう。その後アーケードを小一時間、ヴェネツィア美人達を冷やかしながら散策致しましょう。この案で戦友殿のご同意を得られますかな」。

厳格な学問的訓練を受けて、名誉心の強いヴェールトミュラーは、この打ち解けた語り口が、年上ではあるが、常識的な経歴を歩んで来たのではない武人に対しては許されると思っていた。

「貴方のご随意に、ヴェールトミュラー殿」とイエナッチュは一見快活に同意して、言った、「しかしまずはもう少し散歩しよう、　　ムラーノまでどうだ」。

この陽気な声で強く発声された言葉は、瞬時に二人の Gondola 船員によって受け入れられた。二人は通り過ぎながら広場に二人の将校を認め、接岸階段の所でこの立派な獲物を窺っていたのであった。早速二人はその軽快な空いた乗り物を岸壁から外して、權を握った。

大尉は素早く Gondola に飛び込み、ヴェールトミュラーも従った。

第四章

公爵の依頼は若いチューリヒ人ヴェールトミュラーのせわしい好奇心にとってはなほだ歓迎すべきものであった。

彼の故郷では、以前このグラウビュンデンの党派指導者について、極めて多様な判断を耳にしてきていた。職人達の騒がしいツunft [同職組合]の部屋では、当時ユルク・イエナッチュは民衆の英雄であり、一方祖国愛の、外交の色合いの圏内では、良心のない、血に飢えた一人の山師であった。

しかしドルフ・ヴェールトミュラーは自分の故郷に早期に背を向けて、軍人としての養成課程に進み、そのため彼は運よく十六歳で高貴なアンリ公爵の戦時のお供として個人的に近侍することになった。[公爵に仕えたのは史実では1635-38]。

今でも彼は、かつてのスペインとの民衆の戦いでイエナッチュが披露してきた信じがたいその大胆さ、豪胆さにいかに自分の若い空想が刺激されたことか、まざまざと覚えていた。しかし更に古い記憶となると、この新教牧師は、ならず者の民主主義的刑事裁判に、脅迫や政治的暗殺を駆使して関与しており、彼の家庭内では嫌悪されていたこと、そして彼の家庭教師がこれらを嘆いて天に両手を挙げたとき、特に面白いと思ったことも思い出されるのであった。

その他に子供時代の別の体験が極めて鮮明に思い浮かんできた。町の年の市のとき、彼はかつて大道歌手のおどろおどろしい絵画の前で固唾をのんで聞き入っている群衆の最中にいて、悲劇的殺人囁の長々しい詩行に耳を澄ましていた。手回しオルガン弾きが、どぎつい絵具で描かれた看板絵の情景を鞭を振って一つ一つ示していた。中心部には所謂三人のグラウビュンデンのテルが、ただ肌着姿の、煙突から引きずり下ろされた犠牲者、不幸なポンペーユス氏と共に立っていた。三人の中の一人は長い柄の肉屋の斧を振り回していて、　　これが有名な牧師イエナッチュであった。　　それからこの興奮した少年が夕食のとき、自分の継父、シュミット大佐に新しい三人のテルのことを語ると、大佐は怒りで赤くなって、自分のいるところでこれらの血に飢えたヤクザどもに言及することを禁

じた。

今や彼はこの毀誉褒貶の甚だしいこの人物の目を直接覗き見た。デマゴグの聖職者という粗野でいかわしい人物ではなく、言葉も動作も名誉の騎士の安定感と自由とを備えた世間的如才ない男性が眼前にいた。 — かつての牧師に見られる尋常ならざる軍事的才能については、彼が、公爵の名の下、彼と交わした手紙が十分にそれを証していた。しかし思いがけず彼を感動させたもの、それはイエナッチュが公爵と話した際の一種の優美さの魔力であった。これがこのグラウビュンデン人[イエナッチュ]の大胆な面貌や熱い言葉を美化していた。 — 無邪気なチューリヒ人とはとても言えない彼は、この誠実さは本物か自問した。いや、確かにこの誠実さは、一杯に自然にほとぼしり出ていた。しかし彼は見逃さなかった。この温かく公爵へ浸透して行くこの必至の効果は、意図したものであり、ひょっとしたら前もっての計算づくのものであろう、と。

ゴンドラは幾つかの細かい水路を滑って行った後、しばらくヴェネツィアの往来の大動脈である大運河を行き、そこでは遠方のゴンドラや獵師の小舟の蝟集している中に、更にゆっくりと誇り高く滑って行く公爵の乗り物も見えてきた。それからゴンドラは、新たに狭いラグーンの影の中に収まりながら、北方の町境となっている静かな海の平面を目指して進んだ。

「大尉殿、貴方はサン・マルコ共和国[ヴェネツィア]に軍務を申し出る以前は、ドイツで戦っておられたのでしょうか」と辛抱強くないヴェールトミュラーは会話を始めた。彼の連れが自分の考えに没頭しているように見えたからである。

「マンスフェルト旗下だ。それから私はスウェーデン国旗[グスタフ・アドルフ、事実是不詳]に参じた。リュッツェンでのあの不幸な日までな」。

「不幸な、ですか。決定的な勝利だったのでしょうか」と若い将校は述べた。

「むしろ敗北であれば良かった。そして輝かしい両目が閉ざされなければ良かったと思う」とグラウビュンデン人は言った、「一人の男の死によって世界の状況が別のものになった。グスタフ・アドルフ[1594-1632]の下での戦争は、面白半分の流血ではなかった。彼が戦争をしたのは、大きな思想のためであって、新教の自由を守ろうと、強力な北方の帝国を樹立しようとしたのだ。このような帝国があれば、すべての小さなプロテスタントの共同体の、私のグラウビュンデンも含めて、支柱、砦となったことだろう。この切望されていた目標は、偉大な死者と共に潰えた。彼の魂が消えてからの戦争は、退化して殺戮の野獣と化した。何が残っているか。無益な殺傷と戦利品の貪欲な分割だ。グスタフ・アドルフの旗の下であれば、グラウビュンデン人は喜んで戦えたらう。プロテスタントの教えのために血と生命を流しながら、これは自分の小さな祖国に恵みの小川となって帰還することになろうと確信を抱けたであらう。 — 今は誰もが、故郷に帰り、自分の分を守ろうとあくせくしている」。

「それでは貴方は、個々人が、それはグスタフ・アドルフであらうと、それと同様に重く、世の運命の秤で、計量されるべきとお考えなのか」と素早く矛盾を愛好するヴェールトミュラーは尋ねた。「ドイツ人の侯爵達の嫉妬が、沼地植物のもつれのように、彼の[グスタフ・アドルフの]足を邪魔し、彼を羨望する同盟者のリシュリューは、彼がドイツの王冠へ手を差し出そうものなら、策謀して彼を罠に陥れたことでしょう。そして彼が達成することは、古くかびってしまった、神聖ローマ帝国の機械の崩壊だけになったことでは

う。 — 根本的に私にはこのスウェーデン国王は、ヴァレンシュタインとは敬虔な反対物に見えます。ヴァレンシュタインは無法な反逆者として悪魔のように黒く壁に描かれます。一方グスタフ・アドルフは神聖という噂の中で亡くなっています。しかし私見によれば、兩人とも不当に世間に対し、自分達の恣意的計画を押し付けており、兩人とも炎の流星の如く、短い光輝の後、消えました。そこで今日、世間の歯車装置は再び規則的進行を始めていて、我々は再び慣用の数字を用いて既知の法則に基づいて計算しています。フランスとスウェーデンは、ドイツの新教徒に対し、彼らが熱望している新教の自由を与えていますが、しかしこの両恩恵者もこの親切と引き換えに、然るべく、ドイツの国の肥沃な部分で支払って貰うことでしょう」。

「いやはや、若い友の方」とグラウビュンデン人は注意深くなりながら語った、「恥ずべき国の略奪について、ありふれたがめつい取引の如き説明をなさるな。貴方はスイス人であろう。 — 恥を知れ、ヴェールトミュラー、...そう私は言わざるを得ない、もしこれが貴方の真面目な話しなのであれば。 — ではこれを事物の普通の経過と呼ぶのか。貴方は強者の権利がこの上なく粗野で無残な姿を取ることを認めるのか、それが人格の力を得て、神々しい姿で現れることを否認するのか」。

ここでヴェールトミュラーは気付かれない嘲笑の面影をして彼を見上げ、こっそりと口笛を吹いた。彼の前に座っていて、彼の概念によれば、いずれにせよ揺れていて、曖昧な人格は、彼にとって、世界史に介入する召命を余り有しないように見えた。

相手のイエナッチュは彼を怒った視線で見ている。「大地から離れた個別の男性の人格というものを」と彼は言った、「私は考えていて、この人格が根を有さずに、利己的に歩き回っているというのが、私の考えと貴方が仰有るのであれば、貴方は情けなく私を誤解している。そうではなく、私が話しているのは、一つの全民衆の人間化であって、民衆がその精神やその情熱と共に、その悲惨さやその恥辱と共に、その溜め息やその怒り、その復讐と共に、民衆の息子達の中から幾人かの、一人でも構わないが、息子として具体化して、この民衆が所有し、生气付けるこの息子に、必然の行為への全権を委任し、この息子は、自分が望まなくても、奇蹟を行わざるを得なくなるということだ。...

周りを見てみる。貴方と私の小さな祖国、これは周囲の偉大な君主国の圧迫に抑圧されていないか。話してみろ。我々が自立した生活を主張したいとき、通常为祖国愛、家計簿単位の犠牲心で十分と思うか」。

こうした傷付いた感情の激しさから吐き出される言葉に少尉[ヴェールトミュラー]は最初返事をしないでした。彼の抜け目ない灰色の目には、君は英雄かね、それとも喜劇役者かねの問いが浮かんでいた。彼は自分の若い尖った顎髭を撫でて、町の方を振り向いた。そこには丁度このとき最も目を引くイエズス会の新教会建物の屋上に、印象に残る立像の群れがあって、その極めて奇妙に短縮された後ろ姿が見えた。鉄の棒で支えられた天使や使徒で、その翼や翻る外套姿は顕著に巨大な突き刺された蝶を思わせた。 —

「チューリヒでは」と彼は今度口を挿んだ、「人々はその環境同様にちんけなものです。そしてグラウビュンデンについては、悪く思わないでください、大尉、私はこれまで単に自分の専門を通じてのみ、つまりとても面白い演習地の一つとしてのみ、存知しているにすぎません。貴方がそこでレオニダスを演じたいのであれば、レオニダス本人よりも上手く演じたいと思われようが、私は羨望しません。 — しかし私が思いますに、尋常

ならざる人間達の出現、偉大な情熱の燃焼、これは人間性情の天来の欠陥によりとにかく持続しないもので、どこの土地でも不足しています。世間のごちゃごちゃした諸要素から十分に計画されたものを合成すること、このためには、管見によれば、かなり冷静な特性を必要とします。人間通、つまり人々を踊らせる操り糸に熟知していて、鉄の規律を持ち、人間や事物が変わっても変わらぬ関心を有し続けることです。 — この観点により、私は向こうの奴等を巨匠と称えざるを得ません」、そして彼は滑稽な、真面目さと嘲笑の混じった表情で、イエズス会士の豪華な切妻を指さした。

そして少尉はこの折の気まぐれなつれづれに誘われて、この有名な教団への賛辞を述べた。これはチューリヒ人にして、カルヴァン主義者の公爵の副官が口にする賛辞であって、どんな悠然たる聞き手も怪訝に思ったに違いない。

最初彼は、細切れの試作賛辞を述べた。しかし今日彼が刺激し、茶化すことを格別の使命と思っているこの大尉がそのボールを受け取り、投げ返さないで、彼は敬虔なカトリックの教父達にますます途方もない王冠を捧呈して行った。この教父達こそ、と彼は大胆に主張した、最初に、仲介されないキリスト教世界という矛盾した、人間や国家に敵対する教義への理解とセンスをもたらした人々だったのです。まずはこの賢い教団が敢行したキリスト教徒のモラルの改変を通じて、このことが受容可能となり、いや魅力的なものになったのです。かくてこれらの比類ない教父達は、若干元来は曖昧なもの、計算できないもの、世間に敵対するものを、驚くべき器用さを発揮して、実用的に価値付け、すべての欲求や教養課程に適合させたのです、と。

「貴方はこの新教会の内部をご存じですか」と彼は突然尋ねた。「この教会は、誓って、激情のように、とても愉しく、陽気に設立されています」。

グラウビュンデン人はこうした大胆な飛躍するお喋りを黙って受け流していた。 — 自分の小屋にいる大きなドッグ[大型番犬]のようなもので、うるさい客人として自分の小屋に這い込んで来た話し好きな小さな犬の巫山戯たきゃんきゃんに、ただ小声で呻って耐えているようなものであった。

ゴンドラはそのうちムラーノに着いて、教会から遠くない所で接岸した。

イエナッチュは最寄りの旅館に入って、簡素な食事を頼み、連れにこう詫びた。自分は昨日の船旅、それにパドヴァまでの夜間の強行騎乗で、疲れて空腹である。ここで海を見ながら一時間休み、今日の鏡亭での食事とマルクス広場でのヴェネツィア人女性達を断念することを提案する、と。

ヴェールトミュラーは、昼食のこの交換と、グラウビュンデン人の相変わらずの沈黙で若干気分を害し、一人で会話を仕切りながら、ますます気まぐれな思い付きの考えを述べて行った。彼は秘かな憤懣に刺激されたかのように、新たに自分の父祖の町について話した。するとグラウビュンデン人は高貴なチューリヒとそこの青春の友ヴァーザーを単に称えるばかりであったので、矛盾好きな少尉は、炎のイリュリア・ワインの作用もあって、故郷の最も声望のある紳士達について生意気な戯画を述べだし、三本目のワインのとき、厳格なる市長殿を鶏糞まみれ雄鶏と呼び、アンティステス[新教牧師長]猓下を寝取られ雄牛と呼んだ。

大尉はこの馬鹿げた無趣味な思い付きをワインによる靈感のせいにした、これはこの野心的な、他人のすべての功績に嫉妬深い性質の者が述べそうなことである。それでこの若

い将校は大尉に放置され、自分の話しの対象にのめり込み、時間を忘れて、心地良く自分の気まぐれにはしゃぎ回っていたが、しかし大尉はこう主張し続けた。チューリヒは先の危険の多い時代、賢明さと堅牢さを発揮した、もしチューリヒが用心深い中立という看板を隠れ蓑にしているのであれば、これはスイス同様に、グラウビュンデン人達にとってもまことに有益なものであった、と。

それから、ヴェネツィアでは安心できないと感じている、このグラウビュンデン人は、ヴェールトミュラーは予感もしないことであったが、自分の練達の広く見通す目の届く範囲すべてに細心の注意を払い、辺鄙な旅館であっても、心の安まることがなく、ヴェールトミュラーの嘲笑的哄笑は意に介さず、外の細い海辺へと出て行った。

「中立ですか」と大尉の後を追って、ゴンドラに乗り込みながら、ヴェールトミュラーは叫んだ、「そこで偶然の気まぐれでしょう、私の手に或る紙片が残っていました。これは我々の率直な、厳密に思量された中立性にとって、また我々の質素な市民的徳操について、感動的証言をなすものです。 — 偽善者どもめが、パリサイ人どもめが...大尉殿、我々の参事官達、ツンフトの親方達、それぞれの値段を知りたいと思われませんか。私は最近、私の公爵の名の許に」と彼は言って、自分の札差を取り出した、「ゾーロトゥルンのフランスの公使に一冊のノートを送る必要がありました。それにはヴァルテッリーナにおける差し迫った戦役の際、様々な可能な場面を想定して公使の振る舞いを私の主君が提示したもので、それが返送されたとき、公使により端に注釈や添え状がありました。これをご覧ください。私とその頁の間に見つけたもので、たまたま挿入されて残っていた葉の形をしていたものです」。 — 彼は細い紙の帯を開けた。そこにはチューリヒの有力者の一連の名前が記載されており、高額や低額の数字が添えられていた。それらの隣にはリーブル通貨の印が暴露されて、紛れもなく読み取れた。勿論全体、単に瑣末な額であった。

今回イエナッチュは心からの笑いを禁じ得なかった。「認めよう、立派な賄賂だ」と彼は嘲った。「思いもよらぬことだ。しかしまさに人々がこうした小遣い銭をととても恥ずかしげに用心深く懐にするという事実、このことは徳操の全く上品な名残として過小評価してはならない。我々のザーリスやプランタは外国からの黄金を白昼、高貴な風に頓着せずに着服している。それも全く異なる額なのだ」。

ヴェールトミュラーが自分の膨らんだ札差の中の書類を更に点検している間、イエナッチュは幾分緊張してこの不名誉なリストを走り読みし、そこに名前ヴァーザーが欠けていることを知って満足していた。すると彼は突然その紙片を小さく千切った。すでに白い細片が夕風に揺れる流れに従って遠くへ漂って行くとき、ヴェールトミュラーはこの損失に気が付き、自分の怒りの爆発をかりうじて抑えていた。

イエナッチュは彼に冷静に説明した。自分は友として最良のことに気付いたのだ、この紙片は、貴殿にも他の人にも不愉快にしか思えないからな。チューリヒは貴殿の揺り籠の地であり、大切な母親の些細な弱点を隠すことは、息子の義務なのだ、と。

「大尉殿、貴方への注意が疎かになってしまったのは、この手紙のせいです」と少尉は言った、「まだ開封していないことに気がきました。すでに三日前から私の札差の中にあります。これを読むのをすっかり忘れていました。これは私の従兄弟からのもので、従兄弟はミラノで、新教徒ではありますが、商人として立派に商売をやっていて、知事セルベッローニの鼻屑を得ています。貴方の眼前で書状の内容を確かめることをお許しください

い」。

イエナッチュは肯って合図をし、ヴェールトミュラーはかなりの時間手紙に没頭して、最初は、大尉の勝手な振る舞いがしゃくに障っていたから、気分を落ち着かせるためそうしていたのだが、しかし次第に関心を募らせて行った。

「見事な話しです。神かけて、古代のローマ女性です」と彼はとうとう叫び声を上げた、「貴方に話さざるを得ません、大尉殿。貴方はまさに私の戦友としての信頼を策謀的に虚仮にしてくださいましたが。貴方にとってこの出来事は言わば身内のことですので、なおさら黙っておれません。主役はグラウビュンデン女性なのです。この小商人風情の言葉では、一つつまりこの手紙の差出人、私の退屈な従兄弟のことですが、勿論貴方に伝えたくありません。この点は残念です。この珍しい話しを自由に話すことをお許しください。つまりです。

ミラノには、貴殿もご承知でしょうが、貴殿の辛辣な老ルドルフ殿、ツェルネッツ生まれのプランタは、その同名の、健気な熊の前足の紋章にもかかわらず臆病者の息子と一緒に無残な境遇にあります。親父の方は、知事の許で食事をし、彼と策謀していて、息子の方は知事の甥と一緒に、町の名高い評判の賭博場やいかがわしい酒場に出入りしています。この若い二人連れは同様な気質の者です。老プランタがこの知事から政治的希望故にかろうじて養われている一方、息子の方はこの甥から贅沢に現在を享受する潤沢な資金を得ています。この甥にとって愚行の連れは願ってもないもので、この勇敢さに関しては疑問符の付く助手の武器の腕前が不可欠のものになっています。そこでルドルフ少年はこれに感謝しようと思ったのですが、しかしこの気前の良い友に、立派な奉仕をするには度胸も知恵も欠いていて、思い付いたのは恥ずべき劣等なものでした。極めて人気のない町の一角の朽ちた宮殿に住んでいる老プランタの許に、一人の孤児の姪が避難して来ていました。この家のいずれの傍系の追放された筋の娘か私は知りません。この娘は、稀に見る美人で、グラウビュンデンでは大きな所有権利を有しているようですが、しかし現在の政治的状況ではその権利は確実ではなく、それでもともかくこの見通しのため、老ルドルフはこの娘を自分の息子の妻と定めていました。しかしルクレーツィアは志操が高貴で、この無益で役立たずの若造を嫌っていました。そこでルドルフは、一気に自分の憤懣を片付けると共に自分の借りを返すべく、若いセルベッローニと卑劣な取引を行ったものと思われます。ただ教会にのみ現れるこのグラウビュンデン人の娘の美しさがこの甥には至高の財産に見えたのです。要するに、ある夜、老ルドルフは知事の許に、若いルドルフは賭博場に、ルクレーツィアは老いたロンバルディア人の下女と二人っきりで荒れた家にいたとき、彼女は隣室で不審な物音を耳にしました。盗人と思って彼女は咄嗟に見つけたナイフを手にとって、月明かりのほんの弱い照明の小部屋に歩いて行きました。暗い人影が影の中に消えた。ルクレーツィアはこの人影に向かって行き、呼びかけた。若いセルベッローニは彼女に歩み寄り、彼女の足許に崩れ、彼女の膝を抱いて、この上ない熱い愛の言葉を誓った。しかし彼女は彼を役立たずと呼び、冷たく軽蔑して扱い、それで彼の懇願は突然脅迫へと変貌し、彼女は彼の腕の中に囚われており、ドアは監視されていると述べた。しかしルクレーツィアは、堂々たる体型と高貴な心情の持ち主で、高く飛び起きた若者を左手で強引に押さえつけ、右手で上の方から彼の胸へナイフを突き刺した。彼はよろめき、自分の下僕達を呼び寄せた。このとき買収されていた下女は、ドアで聞き耳を立てていましたが、

嘆き声を上げて部屋に入って来て、人殺し、助けてと大声を上げて、近隣の者達を眠りから覚ましたのです。強引に拉致することに失敗して、かくて人々は血を流しているセルベッローニを起こし、彼を運び出しました。真実は糊塗され、出来事はプランタの息子への不意の訪問によるものとやむなく釈明され、人々は一つの誤解として肩をすくめて、嘆いて終わりです。しかし美しいルクレーツィアは早速翌朝、知事の宮殿へ赴き、彼の庇護を頼み、甥の傷が致命傷でなかったこともあり、彼女は伯父からとても懇ろに、いや賛嘆されて受け入れられました。彼女は、自分にどんな運命が待ち受けていようとも、自分はグラウビュンデンの山に戻る決意であることを、知事に知らせました。故郷で飢える方が、追放されて屈辱のパンを食べるよりもまだだから、と述べました」。 —

かなり長い間があった後、ヴェールトミュラーが続けた、「手紙の結末は珍しいものです。人々はこう言っているそうです、彼女はヴェネツィアへ向かった、我が公爵から故郷への旅の赦免状を得たいからである、と。 — 貴方はこのグラウビュンデンのユーディット[眠っていたホロフェルネスの首を切り落とした、聖書外典]に誇りを感じませんか。今回の私の話しには、きっと貴方の賛同をいただけると存じますが、貴方は立像のように黙っていらっしゃる、大尉殿」。

好奇の目で少尉は向かい側に座っているイエナッチュを覗いた。イエナッチュは、夕方の風から身を守るために、しっかり外套をまとって、その顔はスペイン製の帽子で影になっていた。しかし少尉が彼に投げかけようとしていた冗談の言葉は彼の唇の上で消え、彼は悪寒に襲われた。

ゴンドラの中で背を寄り掛けたイエナッチュの褐色の顔は、一日の経過の中、炎のような気質と柔軟な精神による極めて多様な発露を見せて、絶えず活気づき、動揺して見えていた。その顔が死んだ如く、冷たく金属的堅さに変っていた。まじろぎもせず、その顔は思わず知らず、黄昏の赤らんだ波を見つめ、硬直して異様に歪み、不吉に見えた。

しかしチューリヒ人は困惑したくなかった。何も適切なこと、気の利いたことが思い浮かばず、彼は今一度グラウビュンデン人のユーディット[眠っていたホロフェルネスの首を切り落とした、聖書外典]という称賛を吐露した。

「無益な、その上不当な比較は止める」とこのたび相手は激しく鋭く、夢の中からのように声を上げた。 — 「どんなグラウビュンデン女性もルクレーツィアの立場であれば、彼女のようにしたことだろう」。

それから彼は突然、近づく町の明かりに気付いたように見え、それを指しながら、いきなり愛想の良い調子に移った、「いや、もう着くな」と彼は軽く言い添えた、「公爵家の階段を上がる前に、ツァッテレ[Fondamenta delle Zattere]の接岸まで行けないか。そこに従者達に命じて、ダルマティアから、わずかばかりの私の持ち物を送らせてあるのだ。この荷を安全にすぐ公爵の宮殿に運び入れたいのだ」。

「ほとんど無理です、大尉。迂回は手間取り、夜になってしまいます。私は貴殿に張り付いて、公爵は時間にとっても厳格なのです」とチューリヒ人は答えた。彼は内心不思議に思い、自問した。何故イエナッチュは自分と自分の持ち物の安全を確保したいのか、と。

今一度彼は眼前の深い影の顔を読み取ろうとした。しかし丁度ゴンドラは狭く暗い家並みのラグーンへ入って行き、ただ両の燃えるような明眸がライオンのそれのように、夜の

中から煌めいていた。

ゴンドラが大運河の公爵宮殿の大理石階段に着いたとき、側に別の出発用意の出来たゴンドラがあった。美しいドーム状の門の入口に盛装した二人の男性の姿が見えた。輝かしく照明された明るいホールを背景に、印象的シルエットとなって浮かび上がっていた。一方は上品な体つきで、高貴なヴェネツィア人の落ち着いた、しなやかな身のこなしで、もう一方は小太りにどっしりしていて、正直なドイツ人風外貌で、幾分小都市民風に丁重に先に行くのを遠慮していた。

「お先にどうぞ、ヴァーザーさん。貴方は私の大事な客人です」と細身の男が言い、この男に対し今やイエナツチュとヴェールトミュラーはヴェネツィア共和国の総督を認め、丁重に挨拶した。グリマーニ総督はグラウビュンデン人に魅力的好意を見せて対応した。

「今回は尋問をしない」と彼は言った、「貴殿は高貴な公爵に待たれているから。ここで貴方を引き留めない。後ほどこの些事について話そう。ではまた」。

ヴァーザー氏も彼の方として、ゴンドラに足を踏み入れる前に、青春の友に手を差し出して、彼にこう囁かないわけに行かなかった。「公爵は君にとっても好感を抱いている、グリマーニもそうだ。グリマーニは、私をヴェネツィアで親切にもてなしてくれた。君の人柄について好意的に話し、君の仕事ぶりを称えていた」。

ゴンドラは去った。二人がホールを進むとき、イエナツチュは微笑して、ヴェールトミュラーに言った、「私はダルマティアの山で荒れてしまった。それなのに今準備もなく、優しい公爵夫人のサロンに入る定めだ。一 夫人は間違いなく、その位階と精神の点で、私の摂理の星々が、私をその足下へ跪かせる最上級のレディーだ。少尉殿、私が貴殿の部屋で私の胴着の埃を払い落とすことを許して欲しい、そして貴殿の最も上等のレースの襟を貸して欲しい」。

そう言いながら両将校は素早く跳ねて、広い階段を上がって行った。

第五章

「公爵は一人つきりだ。多分親密に貴方と話されたいのであろう」とヴェールトミュラーは、幾分遅れてからイエナツチュを公爵の部屋に案内するとき、彼に言った。彼はまず彼をほどよく照明された、黒っぽい木材で飾られた控えの間へ連れて行った。そこから柱で分割された三重のアーチ型入口を通じて、数段高い所にある豪華な広間が完全に見通せた。

この豊かに金鍍金された長い部屋は五つの一連のアーチ型窓を備えていた、煌びやかなこの建物の運河に面する正面となっていた。公爵は黄昏の窓の壁に背を向けていた。彼は一冊の本を読んでいて、大理石の高い、絡み合った人物像や花綵で縁取られ重なっている暖炉の前に座っていた。暖炉には勢いよく炎が燃えていた。

早速ヴェールトミュラーは足をトルコ絨毯の敷かれた階段に足を踏み入れ、大尉の到着を告げようとしたとき、公爵は自分の本を閉ざし、座席から起き上がって、本を暖炉の蛇腹に置き、しかしながら、入室して来る者達の方に振り向かず、彼はまだ二人に気付いていなかった。

同じ瞬間、イエナツチュは、彼のことを紹介しようとしていた若い将校を、自分の鉄の

手で素早く握って、押し留めた。「待て」と彼は囁いて、二番目の彼らと丁度向かい側の隣室のドアを指して言った、 — 「今は間が悪い」。

このドアを通じて、活発な動作と泣きはらした目をして、公爵夫人が出て来た。そして手に連れている大柄の静かな女性を夫に差し向けた。ヴェールトミュラーはその女性を一瞥して、フラーリの中央祭壇の前で祈っていた女性と認めた。

思わず、彼を引っ張って行くイエナッチュの感情に従って、彼はイエナッチュと共に入口のドレーパリー[カーテン]の背後に退き、そこで秘かな、しかし注意深い証人として、広間で生ずることが些細なことであろうとも立ち止まって聞くはめになった。

「夫のあなた、ここに運命により迫害された女性をお連れしました」と興奮した公爵夫人は始めた、「この女性はあなたのキリスト教徒としての救援を、騎士としての保護を必要としています。まことに彼女の庇護代官となることは、あなたの気高い徳操にふさわしいことです。 — 彼女は私に全幅の信頼を寄せてくれました。そしてその苦痛に満ちた運命を遠慮せずに打ち明けてくれました。それで私は — これはあなたの目の前でも黙っておれることではなく、 — 苦難の運命と戦う、古代風な性格の女性の悲劇を窺うという感動に恵まれました。この高貴な方の名前は意味深くもルクレーツィアと言います。彼女の出自は、かの山岳の国、貴方をその救助者として待ち望んでいる国の最良の家系の一つなのです。彼女の愛の唯一の対象である彼女の父親が、残忍な敵どもによって夜、殺害されたとき、まだ彼女は無邪気な子供だったのです。...そして庇護もなく、追放されて、この無法の世界の悲惨さと邪悪さとに晒されたとき、それでも彼女の心は純粋なままで、彼女の勇敢な手は、剣で悪徳の罟を断ち切ったのです。手を差し伸べてやってください、御領主様。この愛しいルクレーツィアに示されたお恵みを、すべて私は、あなたが私相手に示されたものと見なしましょう。だって彼女の不幸は私の魂のすべてに及んでいるのですから。 — 」。

ここで感動した代願人は新たに涙にくれて、顔を両手で覆って、肘掛け椅子に身を投じた。

高貴なユグノー女性のこの話しの間、ちなみにこの話しには当時流行であったコルネイユの調子が感じられるが、公爵はその親切そのものの眼差しを黙って謙虚に彼の前に立っているグラウビュンデン女性に向けていて、その平静な面立ちと温かく黒っぽい目に、彼女が彼の許に伺うことになった理由を読み取ろうとした。というのはこの理由が彼にとってこれまで彼の妻の熱心な尽力にもかかわらず、完全に不分明で、隠されていたからである。

「私はポンペーユス・プランタの娘、ルクレーツィアです」と今やこの見知らぬ女性が、彼の内心の質問に答えた、「私の父はグラウビュンデンで追放されたとき、十五歳の私をモンツァの尼僧院へ連れて行きました。そこで父の殺害の知らせを受けました。この父親の殺害で私の人生は壊され、それ以来私は全くの孤児となったと申しあげることをお許してください。故郷のグラウビュンデンに私は帰ることができず、今でも貴方のご援助がなければなりません。グラウビュンデンは戦争とひどい内戦で打撃を受けています。と申しますのも、名分のない殺害の呪いがグラウビュンデンにはかかっている、私の父親の血が天に恨みを叫んでいるからです。 — 確かに私にはまだミラノに一人伯父が存命で、追放されたルドルフ・プランタですが、今日まで追放地で私と一緒にパンを分け合っています。

した。それも私がモンツァの修道院へ入っていないからで、それは私が余りに貧しくて、また自分の故郷の山を永遠に後にするつもりもなかったからです。 — 私は幹から千切られた枝、奔流に漂っている一本の枝です。故郷の大地に戻って、正しい贖罪の血で浸されるまでは、根を張ることができません。

高貴な御領主様、グラウビュンデンへの赦免状を私にお与えください。貴方の影響は今日すでに向こうの地でも強大であって、それに間もなく勝利が確かな武器で不動のものとなろうと聞きました。私は自分の祖国に対して、不遜なことをしたことはなく、私の伯父やスペイン人の党派的襲撃には、思想の面でも行動の面でも全く無縁でした。私は自分の世襲の家を取り戻し、私の父の権利を求めたいのです。私一人がそのためにまだ残っているのですから」。

公爵は美しい異邦人の言うことを注意深く聞いていて、今や父親のごとくその手を握って、思慮深い穏やかさで言った、「御令嬢、私は貴女の寄る辺ない苦しみを理解しました。それに貴女が故郷の大地にまた帰り、そこで父親を偲びながら暮らしたいことも了解しました。喜んで赦免状でそのお手伝いをしましょう。 — 贖罪が必要であれば、その贖罪はいつかなされることでしょう。我々の生涯全体が、いや人間の生活が、その端緒以来罪と贖罪の連鎖です。しかし人間の近視にとっては、正しい報復を選ぶことは難しい。しかしいずれにせよ、悪事を愛の犠牲によって打ち消すことは、暴力によって暴力の復讐をすることよりも、あるいは呪詛に呪詛を重ねることよりも、より安全なものです。 — 殊に不確かな女性の手は、決して内戦の情熱に駆られて、個人的な復讐という両刃の剣を取るべきではありません。私も一度ならず我らの故郷の戦いで、殺人者の手の脅迫を受けました。しかし仮に私がそれで倒されたとしても、虫の息の時に、私は妻と子供に懇願することでしょう、復讐を考えるな、ましてや復讐の行動で自らを汚してはならない、と。というのは、主は復讐するは我にありと語られるからです[ローマの信徒への手紙、12,19]」。

ルクレーツィアは公爵を真面目な、訝しげな視線で見つめた。この将軍のキリスト教徒らしい穏やかさは彼女には馴染みのないもので、彼の非難は彼女には思いがけないものであった。しかし彼女が更に返事のために考えをまとめている最中、彼女の顔つきは突然変わった。何かあり得ないものを見たかのようにであった。彼女の魂全体がびっくりして、それが目に現れた。目は呪縛されたように、入口の中央支柱に据えられていた。

そこには、確かな足取りで階段を上がりながら、一人の昂然とした男の姿があった。宣告を受けた国王が処刑台に上がるように誇り高く覚悟して、ユルク・イエナツチュが剥き出しの頭で、びっくりしている女性に向かって来た。

公爵夫妻に黙礼をした後、彼はポンペーユス氏の娘の前に進み出て、その視線を久しぶりに会った女性に向けて、途切れ途切れに語った、「ルクレーツィア、そなたの正義を振るうがいい。父プランタを殺害した男が正義によりそなたの手に落ちた。この男はそなたの前に立って、ここでそなたの判決を待っている。この男の命を奪うがいい。これはそなたのものだ。 — 二重にそなたのものだ。すでに少年のときそなたのために犠牲になって良かった命だ。私はそなたの父を手をかけなければならなくなって以来、私には自分の存在が疎ましい。この命を数千人の我が民衆のために賭けることができないでいるのだ。私の魂はそのことを切望していて、そのためにこの高貴な御領主がひょっとしたら明日にもその機会を下さるかもしれない。ルクレーツィア・プランタ、このことを考慮してくれ。

そなたの一存にかかっている。そなたら兩人、つまりグラウビュンデンかそなたか、そのどちらが私の血に対してより大きな権利を有するか、そなたが決める」。 —

令嬢に対するこの釈明の印象は強力なもの、困惑するものであった。彼女が自分の責務と思っていた父親殺害者の追求、この当の殺害者が自分の命を彼女の手に乗せた。殺害者は高邁な心でそうして、それで同等の魂の者ならば、自らも赦すという偉大な行為でそれに並ぶよう刺激するものであった。少なくとも高貴な感情のこの競合を、公爵夫人は期待しているように見えた。夫人はグラウビュンデン人のこの話と、この話のルクレーツィアに及ぼす印象の威力から容易に察知していた、兩人は一緒に過ごした青春と温かい思慕とで結ばれている、と。夫人は自分の情緒から判断して、ルクレーツィアは一瞬内的動揺で、青春の友に振り上げた両腕を、速やかに彼の首に回して、正当な、長年の憎悪を、旧来の愛の魔力と、この抗しがたい不思議な男のために、犠牲にするであろうと思っていた。

しかしそういう具合にはならなかった。挙げられた両腕は沈み、公爵夫人はルクレーツィアの美しい姿が震えるのを見た。深甚の嘆きに打たれていた。彼女は大声で呻き声を上げ、それから自分の青春の間、気位高く耐えて来た悲惨さを口に、自らと異国の環境をすっかり忘れて、この悩み多い困窮した女性は情熱的に嘆きの奔流を解き放った。

「ユルク、ユルク」と彼女は叫んだ、「何故こんなことをしたの。私の子供時代の遊び仲間、私の青春のかばい手のあなたが。しばしば、イタリアの暗い修道院でも、私の叔父の不気味な家の中でも、私の心が故郷を求めて叫び、そして父の復讐を果たさずには故郷に帰れないというとき、私は不安な夢うつの中、あなたの姿を見てきた。忠実な若者のあなたが、逞しい兵士へと成長して、私はあなたに呼びかけるの、ユルク、私の父の復讐をして、あなたより他に頼る人はいないの。あなたは昔、私のためなら何でもしてくれた、私の目を見て察してくれたわ。ユルク、今こそ私を助けて、私の神聖な義務を果たして頂戴と。...そしてあなたの強力な手を握ったものよ。...でも哀れな私、その手は血が滴っている。恐ろしいあなた、あなたが殺害者なのだ。私の目に見えない所へ行って。だって私の目もあなたとぐるなんだから。 — そして罪を犯して、 — そして私の父の殺害の共犯になっている。出て行って、あなたと一緒にでは安らぎはありません。和解はありません」[ルクレーツィアはユルクが自分の父を殺したことは当初から承知している]。

そのようにルクレーツィアは嘆いて、両手を、内心の不和と慰めのない絶望の中、揉んだ。

公爵夫人は宥めて、自分の上品な腕で、この動揺した女性のうなじを抱いた。そしてルクレーツィアは泣きつつ同意して夫人と一緒に隣室へ退いた。それから高貴なレディーは今一度敷居に現れて、夫人に向かって来る夫に囁いた。「私はあなたの同意を得て、彼女が気を取り直したら、自ら私のゴンドラで彼女の住まいまで彼女を送ります。彼女はあなたの両替商、ア・マルカの許にいます。そこの妻が彼女の遠い親戚なのです。忠実なエチヤグに同道して貰いましょう」。

公爵はこの頼りがいのある夫人に彼の好意的同意を与えた。この情感豊かなレディーは、グラウビュンデン人を最後に、半ば非難に満ちた、半ば賛嘆する視線を送って別れた。

「貴方は重い運命を担っていた、ゲオルク・イエナツチュ」と二人つきりになったとき、公爵は大尉に言った。大尉の顔の青白さが公爵の目に留まり、大尉は昔の傷口の刺すよう

な痛みと戦い、強引に隠しているかのような、厳しい表情を顔に浮かべていた。「しかし貴方には、貴方が犯した流血の殺害に対する贖罪が示されている。貴方が青春に荒々しく燃えて犯したことを、精錬された成人男性の仕事で償えば良い。貴方は性急な自助努力、恣意的憎悪の活動で、祖国を解放しようとし、破綻に導いてしまった。今日では貴方は祖国を、従順と戦闘時の規律という自己否定的活動を通じて、指導的計画的意志の下への服従を通じて、救出しようとする。―― 蛮勇が有益なときには、貴方を前面に立てよう。何故貴方が危険を求め、愛しているのか、今分かった。―― 今から私は貴方を私の配下の者と見なそう。貴方をこちらで自由の身にするのに、私の影響力で十分であると今日確信できたのだから。グリマーニ総督が私に貴方のことで文句を言うとは思えない。貴方に対する彼の関心は抜け目ないと私には思えない。貴方を休職させる可能性について彼の意見は無関心だ。いつ貴方のヴェネツィアでの勤務年限は終わるのか」。

―― 「殿下、一ヵ月もありません」。

―― 「それでは結構だ。私に仲介を任せてくれ。貴方は今日からすでに私の許に住めば、最も簡単であろう。早速従者達や荷を呼びなさい」。――

ここで、それまで控えの間で姿を隠していたヴェールトミュラーが憤然とした、悲喜劇的表情で近寄って来た。というのは、彼が鋭く観察していた情景は様々な印象を彼に残したからで、そして告げた。大尉はツアッテレの棧橋に荷物と郎党を残しています。大尉が自分に全権を与えるならば、自分がこれらと呼び寄せます、と。

イエナッチュは或る窓のアーチの下へ行って、鋭い眼差しで、月光に照らされた運河を覗いた。岸辺の宮殿で深く影になった所まで覗き見た。水路は上がりも下りも通常の平和的夜の図を呈していた。そこで彼は速やかに振り向いて、公爵に自ら自分の持ち物と従者達を探しに出掛けると申し出た。従者達には自分の口頭の指示以外、別の指示に従ってはならないと厳しく命令してあるのだと彼は言った。

公爵は狭いバルコニーに出て、まだその夕べの奇妙な出来事の余韻の残る中、静かな月光の夜を覗き見た。彼はイエナッチュが、―― そのゴンドラに乗って、岸から離れ、素早い微かな櫂の動きと共に、運河の曲折に従って進むのを目にした。―― ゴンドラは決断できないように止まっていたかと思うと、―― 今や速やかに次の棧橋を目指して進んだ。どうしたことか。或る脇のラグーンと向かいの宮殿の影の中から、突然四艘の細い、覆いのない乗り物が走り出て来て、その中で武器のようなものが煌めいた。すでにゴンドラは四方八方から囲まれていた。公爵は緊張して聞き耳を立て、胸壁越しに身を屈めた。公爵は一瞬、覚束ない月明かりの中、剣を抜いた大きな人影を取り巻かれた小舟の船首に見たように思った。この人影は岸辺に飛び移ろうとしているように見えた。―― するとこの一同は混乱して、不分明な取っ組み合いに変じた。微かな剣の物音が公爵の耳に届いた。この時、甲高く鋭く、夜間の静寂を、一つの叫び声が破った。

明瞭に響き迫って来た。

「ロアン公爵、御身の下僕[部下]を解き放て」。[1634-35の冬、史実の逮捕は1630]。

第六章

翌日の朝の時刻、遅くなって、グリマーニ総督は自分の宮殿の小さな快適な部屋に座っていた。唯一の高い窓は、緑色の絹の豊かな、床まで垂れ下がっている襞で半分覆われていた。しかし全き光線が銀色に輝く朝食の食卓にかかっている、蠱惑的な優しい色彩に惹かれて、ティツィアーノ派の等身大のヴィーナス像に止まっていた。この女神は陽光を浴びているように見えた。女神は鈍い背景に、広いドアの上に漂うが如く、喜悅して息をし、前屈みになっているように見え、静かな部屋をまぶしい美しさで満たしていた。

総督に向かい合って、名誉ある客人、ハインリヒ・ヴァーザー氏が、今回は憂慮した顔で座っていた。彼は自分のホストの、日常的なことについて機知的に優美に洒落る上品な会話に付いて行く気分ではなかった。そしてそれどころか、自分の高い背もたれ椅子を、この誘惑的な女神像に背を向ける具合に置くことを怠っていた。これは普段彼が忘れずにそうすることであった。というのは勝利の印のパリスの林檎を手を持ったこの柔軟な姿勢は毎朝彼を立腹させ、悲しませるのが常であったからである。この姿勢はいわば彼の若くして亡くなった亡き妻を思い出させた。しかしまたこの魅力的な幻惑画は、忘れがたい妻とは何と全く異なることだろう。この妻の魂の鏡は、豊穡さの息吹で曇ることは決してなかったし、この妻は少しでも倫理的謙虚さから外れると、それにはすべて明白に嫌悪感を覚えていたのである。

しかし彼は今日この女神に反撥を感じなかった。彼はこの女神を気にかけることすらしなかった。彼の全思考は、会話を自分の友イエナツチュに導くことに向けられていた。その際、総督の確かな話術によって、その道筋から逸らされたり、その圏内を戯れに引き回されたりしてはならなかった。

彼は今日すでに早朝、チューリヒでの故郷の習慣同様に、短い散歩をしていた。これはラグーンの町の路地や水路の迷路の中ではスリルのある訓練となるものであった。彼はまずその世俗的に陽気な豪華さで自分を日々びっくりさせてくれるマルクス広場を訪れて、ここから意義深く、狭く騒がしいメルチェリアを通して、リアルトへ抜け出た。そこでは彼は橋のアーチの高い所から、注意深い目で、海を支配するこの町の果てしない日常の商取引を観察した。それから彼は突然思い付いて、近くの魚市場へ下って行き、丁度陸揚げされた奇妙な形の海の怪物を視察した。ここで彼の視線はロアン公爵の住んでいる宮殿に落ち、そして彼の心の中で、昨日二回ただそそくさと挨拶した青春の友を訪問し、その旅や行く末について、友達らしく尋ねようという願いが生じた。きっと、公爵の宮殿に行けば、イエナツチュの住まいを尋ねることが出来よう、ひょっとしたらそこで個人的に会える希望もないわけではない、と彼はゴンドラ船頭に合図をした。この船頭は数回櫂を動かして、彼を宮殿の棧橋階段へ連れて行った。そこで彼は従者達から、イエナツチュはここにはいない、公爵は工作中と知って、公爵夫人へのお目通りを願った。

この高貴なレディーは昨日の出来事を感じ動して、効果的に、しかし極めて不明瞭に描き、その際彼の友を撃ち砕くような厄災について灰めかした。それでこの冷静な男は呆気にとられて、極めて心が落ち着かなくなった。夜の暗闇の中での逮捕の場面を彼女は想像力の松明で勝手に照らし出したわけではなかった。しかしながら賢明なチューリヒ人にはイエナツチュはただグリマーニの強権の中に捕らえられたのであることはすぐに明らかであった。彼はこのことを完全に確信した。というのは、今、この偽装の名手が、昨日公爵の食卓でこのグラウビュンデン人の不当な帰還について口を濁したときの、ぞんざいな平

静さを思い出したからである。他の状況であれば、彼はきっとこの帰還を重大な規律違反として咎め立てしていたであろう。

ヴァーザーは早速帰宅した。今や彼は難攻不落のグリマーニに向かい合って座っていた。彼からグラウビュンデン人の咎と運命を聞き出さなければならなかった。

総督はこの上なく上機嫌であった。彼は快活な旅の思い出を語り、ロンドンとジェームズ一世の宮廷について語った。そこへ彼は数年前、外交官として派遣されていた。そして奇妙に銜学的な、しかし急いで付け加えたが、少しも馬鹿ではない国王について愉しい肖像画を描いた。更に極めて愛想良く、チューリヒのヴァーザー家を訪問した時のことも描写した。騒がしくて放埒なロンドンの後では、まことに爽やかに感じられたと述べた。ここで自分はスイスの盟友関係[共和国]の特別な性格とヨーロッパ政治におけるその地位に思いが至った。自分はチューリヒ人に対して、この小さな国が期待していた和平条約締結[1648年ヴェストファーレンの和平を暗示]によって、きっと確たる条約により保証された国家的独立を育て上げて行くであろうことを祈念したものであった。

「ニコロ・マキャベッリによって予告された世界的地位を貴方らは勿論断念しななければならないだろう」と彼は微笑して言った、「しかしその代わり貴方らは独自の竈の火とささやかな模範的経済を得ている。この経済には偉大な領主達も幾多のことを学ぶことが出来るよう」。

これに対してヴァーザーは微かに頭を振って、このそれ自体願わしい結論も、幾多の明かりの側面の他に、また幾多の影の側面を見せており、一 自分はただ胸の痛む思いで、プロテスタントのドイツからの分離を見ていると述べた。するとヴェネツィアの政治家は彼のことを了解して頷き、こう言った。国家の独立は立派な事で、小さな領域でも外部に一種の影響を及ぼし得るのであるが、前提となるのは、政治的才能が存在することであり、その涵養のために、すべての努力を傾注することであろう。しかし世界を動かすほどに影響を持つためには、国家としての偉大さが必要である。現在のところ、これは単にその天才的枢機卿[リシュリユー]に束ねられているフランスが所有しているようなものである。自分はしばしばこの偉大さの本質について、つまりその偉大さの根差す究極の根拠について思索検討して来た。そして一つの自分なりの独自の結論に達した。即ち自分にはこの物質的威力は純粋に精神的威力に基づいているように見えるのである。この精神的威力なくしては、物質的威力は遅かれ早かれ瓦解するもので、魂のない肉体のようなものだ。そこでこの秘かな創造的守護霊というものは、自分の見解によれば、極めて繊細で鋭敏な具合に、母国語と文化として出現するものである。

「この点で勿論スイスは三つの種族と三つの言語を有し、遅れを取っている」と総督は続けた。彼は明らかにイタリアを鼻屑して考えていた、「しかし私は貴方らのことを心配していない。貴方らは別の強い絆で結ばれている。しかし我らの恵まれた半島は、嬉しいことにこの私の見解が充足されている。今日様々な支配者に、部分的には異国の支配者に分割されているが、それでも相変わらず素晴らしい言語、それに不壊の、明るく輝くギリシア・ローマの古典古代に遡る文化という共通の財産、遺産を有している。思うに、この不死の魂はそれにふさわしい体を見いだすことだろう[1860-70からのイタリア統一を暗示]」。

ヴァーザーは、この神秘的思考過程がとても縁遠くて、普段は冷たく、外交官的なホストの彼の口から聞くと、訝しく思えたのであるが、今や、サン・マルコ共和国[ヴェネツィ

ア]をあっばれと礼賛する演説の口火を切って、この共和国がイタリアでは唯一、古代ローマの国家の英知と正義感に引けを取っていないと述べた。

「恣意的司法という作り話や秘密裁判による闇の処刑といったものに関しましては、尊敬するホスト殿、私はこのようなお伽噺を信ずる男ではありません」とこのチューリヒ人は結んで、思わず、自ら確信していたように、熱く切望している目標へと舵を切れて喜んでいた。「それで私は腹藏なく、私には不分明な出来事について、貴方とお話しできることとなります。昨日大運河で生じた出来事で、私の青春の友、ヴェネツィア奉職の大尉ゲオルク・イエナッチュがあとかたもなく消えたとされるものです。ロアン公爵夫人妃殿下は、昨日忝くも、その事故のことを私にご教示下さいましたが、私はその暗示を理解した範囲では、大尉はダルマティアからの不当な旅立ち故にヴェネツィアの獄舎に囚われたという意見に近いものに見えました。至高の文化的段階に到達しているヴェネツィアの法律とその執政官の穏やかさを」と彼はここで総督に対し愛想の良い手の仕草をしたが、「一 それに公爵の食卓でのこの執政官の昨日のご意見を考えれば、あり得ないと思える推測です」。

「イエナッチュ大尉については確かな情報を得ている」とグリマーニは自分の客人の機敏さにこっそり微笑して言った、「彼はヴェネツィアの獄舎にいる。しかし親愛なる友の方、それは規律違反故ではなく、殺人の廉だ」。

「何を仰有る。証拠があるのですか」とヴァーザーは叫んだ。彼は我慢出来ず、飛び上がって、小さな部屋の中を、気持ちが狼狽して、あちこち歩いた。

「貴方はお望みでしたら、書類を閲覧出来ましょう」とグリマーニは落ち着いて答えて、書記を呼び、自分が指示した書類挟みを即刻この場に持参するよう命じた。

数分後、ヴァーザーは、イエナッチュとルイネルとの間のパドヴァの聖ユスティーナ聖堂裏での決闘に関する二枚の書類を手にして、彼はそれを熱心に読みながら、若干高い窓の壁龕へ退いた。

この文書のうち一つは、パンフィリオ・ドルチェ[虚構]に対して行われた尋問であった。この中で、マギスターは、自分に教育と庇護を一任されている少年の事故を感動的な言葉で綴っていた。それからペトロッキー亭での重大な場面に移り、この旅館で野蛮な大佐は、名誉ある学問に従事して白髪になった自分に罵倒の言葉を浴びせました。しかし高邁な大尉は、自分の一 つまりマギスターの名誉ある風采と謙虚な要求に感動され、立派な人間性と古代風な高貴な度胸を発揮され、自分に肩入れされました。一 マギスターは命を奪うことになった決闘には居合わせなかったのですが、裁判所のこの調書に重要な巻紙を添えることをお許し頂きたい。ヴァーザーはこの巻紙を手にした。しかしこの時は、単にその最初の頁をチラと覗いただけであった。この頁に記されている献呈の辞で、これは手書き文字芸術の一つの傑作であったが、マギスターは述べていた。自分は運命により、思いがけず自分に恵まれた機会を利用致しまして、すべての学問の高貴なパトロンであられる総督殿下に克己勉勵の長い人生の全成果をここに謙虚に恐懼しつつ呈上申しあげます、と。これは、その不滅の名誉市民、ティトゥス・リヴィウスのパドヴァ方言について、つまり彼の比類のないラテン語に影響を及ぼしたパドヴァ方言についての論文である。

ヴァーザーが開いた二番目の文書は、町の署長の報告で、これは専ら諍いの結末部分に関係している。

一人のびっくりした市民が自分に報告したことによると、聖ユスティーナ聖堂裏で、ヴェネツィア軍の二人の将校の間で、危険な決闘が行われそうであるとのことでした。自分は、道で出会った勇敢な部下達を皆集めながら、駆け付けました。そしてすでに遠くから、決闘の用意をしている者達と二人の周りに集まった野次馬を見かけ、ガリソン[イタチ]殿達の一方は、猛烈に怒り、荒れ狂った身振りで、決闘を主張し、もう一方は冷静に、真面目に品位を持って、相手を宥めようとしていて、居合わせるパドヴァ市民達の分別ある非難と丁重な信頼によって、この点を支持され、それから程々に、ただやむを得ず防御している様子ははっきりと分かりました。自分は自分の部下に先駆けて、迅速に近寄って、自分の名誉ある職責を果たすべく、自分の体をこの法に対し不遜な者達の間で柵として投じて、共和国の名において剣先に停止を命じました。自分がこのことを命の危険をかけて敢行したとき、確かに一方の者は従順に退きましたが、もう一方の者は、剣で斬られて呪いを発しながら倒れました。自分の思いを貫いて、この無茶な男は、怒りで盲になり、ただ防御のために差し出されていた相手の剣に突進して身を投じたのです。自分が両人の剣を自らの剣で叩き落とすほんの一瞬前のことでした。 — かくて自分は自らの義務を犠牲を払って全うしたと信じておりますし、尊い共和国による顕彰、並びにそれにふさわしい報奨を期待しても不遜ではないと存じます。 —

「これらの書類では、総督殿、殺人の告訴立証はできないでしょう」とヴァーザーは自分のホストの前に歩み寄って、怒りを明確に明示しながら、文書を置いた。その時、リヴィウスのパドヴァ方言に関する論文は大理石の床に落ちた。「彼らは全く大尉に好意的に発言し、この出来事を厳密な正当防衛と記しています」。 —

「更に他の証人達の陳述も覗いて見たいですか」とグリマーニは冷たく言った。「ちなみにそれらは全て、物乞い風の銜学者や、威張り屋の大言壮語居士と一致している。これら賤民どもの証言は」、 — 彼は靴先で、パンフィリオ・マギスターの博識な論考を蹴って、この論考は滑らかな床のモザイクの星々の上を転がって行った。 — 「ただ行間を読む術を心得ない正直者だけを混乱させているにすぎない。この不吉なイエナッチュはその偽善者めいた温かい心とならず者の技で、どのような画策事もその場での靈感とか、無邪気な偶然に見せかける魔術、ペテンを弄しているのだ。例外なく上から下まで、高貴なロアンからこれら下々の者まで騙される。 — それで、これらの証言が事実関係を完全に正しく表現していると仮定するとしても、真相は、大尉の事情の認識とその策謀好きな性格の認識を正しく深めることによってまず得られることになる。そしてこの認識を媒介に、私は、我が立派な友よ、ひょっとしたら貴方の無邪気な情緒がびっくりすることになるかもしれないが、ルイネル大佐殺害のこの話しの真相に迫ることが出来よう。

私は手短かに話そう。イエナッチュはどのようなことがあっても、四つのグラウビュンデン連隊の一つを得ることを目標にしていた。これらの連隊は、ロアン公爵がフランス人の給与で差し迫ったヴァルテッリーナ戦役のために編制したものだ。しかしこの四つはすでに任命されていた。その一つはルイネルに決まっていた。つまり大佐達の一人は除かれる必要があって、最も楽なのはルイネル、これは野心家の剣で片付けられる男だったわけだ。そこで、学校教師が頭に血が昇りやすい大佐を、恥知らずな物乞いで煩わせると、敏捷なイエナッチュは電光石火、彼を刺激する機会を利用し、この銜学者に肩入れしたのだ。一度炎が上がると、冷静沈着な者には、邪悪に息を吹きかけ炎を焚きつけることは容易なこ

とだ。彼はわざと穏やかに振る舞って、怒った大佐が猛然となるまで刺激し、巧みな剣客として剣をさばき、誰の目にも微かな必殺の剣の技が見えないようにしたのだ。一 我が正直な殿方よ、この共和国の総督が人間に無知な新人ではないのであれば、事の次第は以上のようなものだ。貴方のイエナッチュ殿は、ダルマティア派遣時には、この哀れな酩酊者を片付けるのに要するその十倍もの謀略を用いたのだ。

ヴァーザーはこの議論をぞっとする思いで聞いていた。どの被告人にもこうした鋭利な邪推による解釈が、それ自体明白な事実に対し生ずるに違いなど、この危険を思い浮かべて心が凍った。好意的で、大尉とは友達の男の心にさえ、一瞬、このヴェネツィア人の残酷な論理は正しいかもしれないという思いが過った。しかし率直な人間的分別、正当な心情によって、速やかに、この不安なまやかしは克服された。その可能性はあるかもしれない、しかし、いや、事実はそうではないのだ、と。一 彼は邪推がヴェネツィアでは一つの国家原理であることを思い出した。

「事実が決めましょう」と彼は確信を持った揺るぎなさで言った、「その恣意的解釈では決まりません。イエナッチュ大尉はヴェネツィアで庇護がないわけではありません。と申しますのは、サン・マルコ[ヴェネツィア]共和国では、グラウビュンデン人の公使が欠けるからです。不肖私は、ヴェネツィアにおいて、チューリヒと同盟の国の利害を出来る限り尊重することにすれば、我が上司達の意にかなう行動になりましょう」。一

「更に一人別の守護聖人が、大尉イエナッチュという人物における無実、私が問題にしているこの無実に対して現れましたな」とこのヴェネツィア人は毒づいて言った。というのは、丁度赤い服を着たフランス人の小姓が招き入れられて、彼の主人、アンリ・ロマン公爵の書状を総督殿自身の手へ渡したからである。

「公爵殿下は訪問の栄を私に賜るご意向だが」とグリマーニはその行を通読しながら言った、「これはお受けできない。私が一時間したら公爵の許に伺うと伝えてくれ。一 貴方の同道があれば、ヴァーザー殿、嬉しく存ずる」。

そう言って、上品な青白い男はメランコリックな目をして起き上がり、着替室に退いた。

ヴァーザーは躊躇って立っていた。それから彼はテーブルの許へ行き、入念に残りの証人の陳述を通読した。最後に彼の視線は、パドヴァ出身のパンフィリオ・ドルチェ・マスターの椅子の下に転がった論文に落ちた。その恥辱的運命が心苦しかった。「多くの汗の結晶だ」と彼は言って、巻紙を持ち上げた、「我らの新建立の町立図書館にきっと汝のために一つの席が見つかる。薄暗い実存の中の労作よ」。

第七章

総督とヴァーザー氏は公爵の図書室で応接された。公爵は余り睡眠を必要とせず、早朝の孤独を愛好していた。それですでに午前中何時間も仕事を妨げられずに、その書記官ヴェネツィア人のプリオロとそこで過ごしていた。

公爵はグリマーニが伺候して来たことに感謝の言葉を口にして始めた。

「貴方はきっと私の数行の文言から」と彼は言った、「私の個人的願いについて、何の

ために私がすでに今日こうしてまた貴方との話し合いを至急願ったか、その件を察知されたことでしょうか。私は昨日夜、私のバルコニーから或る事件の目撃者となりました。これはある犯罪人の逮捕としか思えなかった。様々な事情を勘案して、この共和国の囚人となったのは、グラウビュンデン人ゲオルク・イエナッチュに違いないと推論しました。我が高貴な殿方、貴方にすでに私は灰めかしましたが、私は当該の男の仕事として、グラウビュンデンへの差し迫った私の遠征をあてがったのであり、この男の軍事的才能と、彼の祖国に関する私には極めて得がたい知識を大きな利点として私は期待したわけです。彼が法を破るようないかなる罪を犯したのか、それを知りたいし、仮に彼の犯罪が重大で汚辱に満ちたものでなければ、彼の釈放を申し出たい、こうした要望が私にとって今喫緊のことであることはご理解頂きましょう」。

「殿下、私は世の誰よりも、進んで貴方のために尽力したいと思っています」とグリマーニは答えた。「そしてこの私にはどうに疑わしいこの人間、多くの危険の芽を孕んでいるこの人間を取り除いたならば、実際貴方に対して少なからぬ尽力をしたと思うことでしょうか。今彼は人を殺める行為で私の手に落ちています。彼は、文書の調書からお分かり頂きますように、我らの法の文言によれば、死罪を犯しています。私が、情状酌量で恩赦を与えるか、これは完全に私の一存にかかっています。これを私に対し貴方がお望みであれば、私は決して拒みません。しかしその前に、私がこの人物についてどう考えているか、是非お聞きください。一 事件そのものは、私の尊敬する友、ヴァーザーにここで報告して貰いましょう。彼は丁度それらの文書に目を通したところです。この報告を彼に任せるのは、私には都合良く思われます。彼は内心、私のことを有害な邪推を抱き、恥ずべき人間蔑視の者であると咎め立てていましたから」。

このチューリヒ人はこの依頼を友としての熱意を持って、また専門知の有能さを発揮して片付けた。結論として、彼は自分の意見をまとめて、この件は純然たる正当防衛である、とした。

「そこで、私の方としても貴方に発言することをお許しください」とグリマーニは言った。彼の声は内的動揺で翳りがあった。「私の見立てでは、この件は事前に準備された、全く計画的なもので、この人物に特有のものであります。ゲオルク・イエナッチュは法外に野心的です。思うに彼は、この野心を挫くどのような妨害も見境なく踏みこむ男です。どのようなものであれ、です。軍人的な従順であれ、命じられた言葉であれ、神聖極まりない恩誼の義務であれ構わない。私は彼を、忠誠と信仰のない人間、際限もなく放胆な人間と見ています」。

彼は、ヴァーザーに向かい合って述べた時よりも、もっとわずかな、しかしもっと鋭いタッチで、公爵に対して、イエナッチュが、彼の判断によれば、自分の同郷人殺害によって達成しようと図っている自己中心的目標について述べた。

公爵は口を挿んだ、山岳の申し子と言って良いこのような根源的温かい性質の男がかくも冷淡に首尾一貫して錯綜した流儀を会得しているとは自分にはほとんど信じられない、と。

「この人間は私には自然力のように、無拘束で、正直に思える」と彼は付け加えた。

「この人間は自分の怒りの爆発の一つ一つを計算していて、自分の血の沸騰の一つ一つを利用しています」とヴェネツィア人は答えた。彼の自制心から想定されるよりも苛立つ

ていた。「彼は貴方にとって一つの脅威です。私が彼を消してしまえば、貴方には何よりの私の功績となりましょう」。

公爵はしばらく沈思黙考していた。それからはなはだ真面目に語った。「それでも私は貴方にゲオルク・イエナッチュの恩赦を願い出ます」。

グリマーニは一礼して、枢密書記官のプリオロの仕事机の許へ歩み寄った。書記官は窓の壁龕で落ち着いてペンを執っていた。グリマーニは紙片に二言三言走り書きし、この若者に獄舎まで命令を持参するよう頼んだ。ロマン公爵は言い添えた。副官ヴェールトミュラーが書記官と同道して欲しい、と。

このときグリマーニは、彼の落ち着いた黒っぽい目を公爵に据えて、突然尋ねた。更に短い間、内密で話し合いを続行するのを許して頂けないおのか、と。ロアンはヴァーザー氏に向かって、微笑して言った。

「まさに貴方に私に代わって、伝言を頼みたい、公爵夫人に対して、イエナッチュ大尉の運命は、差し当たり安堵していいと、夫人も同情して案じていることだろう」。

この好意に気を良くして、また良い知らせの使者となることに喜んで、このチューリヒ人は辞去を述べて、小姓に従って行った。小姓は苛立って待っている高貴な夫人の許へ彼を案内した。

「高貴な公爵殿、私が全く私の慣例に反して、厚かましく、他人の事情へ不躰に介入するという非難を浴びる事態になっているとしても」とヴェネツィア人は始めた、「これは私の格別なご奉公の一つの印とお考え頂きたい。私どもの共通の政治的利害を度外視しても、私が貴方の性格に厚い尊敬の念を抱いていることは十分にご承知のはずで、この尊敬を唯一の原動力として、この尋常でない手段が生じているとご理解頂き、この尊敬故にこの手段も弁解されると確信しています。

貴方のために私はこの男を無害なものにしようと思いました。私は彼の過去を知っていません。私が数年前、我が共和国の利害を公使として代表していたグラウビュンデンで、私は彼が蜂起する民衆の先頭に立っているのを見ましたし、荒れる大衆に対する彼の統治力に驚嘆しました。

親愛なる殿下、生じつつある未来を一瞥させて頂きます。私が心ならずも我らの共和国の実現しつつある運命を覗くときと同じ視線となります。私は我らの参事会で不吉な名前カサンドロ[アポロによって予言能力を得たが、アポロを受け入れず、ために予言を信じて貰えなくなったとされる、トロイの王女]を得ています。それも当然なことです。私は苦痛を感じているのに、私の言うことは信じて貰えなかったのです。 — 勿論私はアポロの力で予言者になったのではなく、幻滅した精神、凍った心情で予言者になったのです。

貴方はまさにグラウビュンデンをスペインの力から解放しようとしています。私は貴方の軍の勝利を一瞬も疑いません。しかしそれからどうなります。スペイン人を追放した後に、いかにフランス王室の意図を実現しますか。つまり、フランス王室はこの戦略的に重要な国を、一般的和平の時まで両手から離せないというのに、ここの野蛮な住民が旧来の独立を激しく要求してきたら、どう折り合いをつけるのですか。リシュリューは、 —

これがフランス国王と言って良いでしょうが、貴方の主君です。彼が貴方に任せる部隊は、ドイツで不可欠の彼の軍隊のうち最小の部隊となるでしょう。そこで貴方はグラウビ

ウンデンでは自ら徴募なさって、度重なる参事で疲弊したこの国に対し新たな犠牲を要求しなければならなくなりました。しかしこれは　―　貴方がきつととうに検討なさったことで申しあげるのも恥ずかしいことですが、　―　ただ単に迎合した約束という手段でのみ切り抜けられることでしょう。私は少なくとも、こうとしか考えられません、つまり貴方は自分の人柄を前面に出して、グラウビュンデン人に自分の言うことを保証せざるを得ない。彼らに、貴方が勝利を戦い取ったらすぐに、彼らの元来の領地と古来からの独立とを削ることなく元に戻します、と。　―　それ故に、私が推測しますに、リシュリユーはまさに貴方を、貴方の名前は純然たる名誉で輝いていますから、グラウビュンデンに派遣されるのです、プロテスタント人の心に訴える貴方の威力は、向こうでは一軍に匹敵するのですから。かくて、高貴な御領主、貴方には難しい時節、それに枢機卿とグラウビュンデン人との間の難儀な板挟みが待ち受けているのだという私の見立てをお認めになりましょう。確かに貴方の英知で、貴方がお仕えになっているフランス王室の利害と、山岳民族の貴方のお墨付きを得ている主張とを、王室の利害も否認せず、山岳民族も騙さずに、慎重な政治と賢明な延長策で宙づりにし、最終的に調停することができましょう。しかしこれは単に支援されたグラウビュンデン人が決して貴方とフランスに反旗を翻さない場合に限られます。　―　恵み深い御領主、貴方は微笑されています。　―　実際、グラウビュンデンで強力なフランスに抗して、陰謀を企むとか、それどころかあからさまな暴力行為に訴えることを誰がやりましょう。確かに誰もしません。ひょっとしたらの男を除けば。かのどうしようもない奴、　―　貴方がかばっている男、ゲオルク・イエナッチュのことです」。

公爵は拒絶する手の仕草をしながら、傷付いた自負心の痛々しい表情を浮かべていて、背もたれに寄りかかっていた。彼の額には一つの雲がかかっていた。グリマーニの憎悪が描くグラウビュンデン人のイメージは彼には誇張され歪曲されたものに見えた。しかしこの彼の人間鑑定を疑問視し、彼が自分の道具に選んだ有能な半野蛮人、イエナッチュに対するグリマーニの極端に劣等で物々しい意見は、彼には手痛いものでなかった。しかし手痛く思われたのは、このヴェネツィア人が彼の人生の秘かな傷、リシュリユーに対する厄介な立場を明敏に認識していて、敢えてそれに触れて来たことであつた。フランスを大きな計画に基づいて支配していて、彼を個人的には嫌っているリシュリユーは、　―　ロアンには良く分かっていたが、　―　彼のプロテスタント的な信条を、目的に対する手段として、利用し尽くし、彼個人を犠牲にすることができるのであつた。自分自身が言い繕おうとしてきたこの危険、眠れぬ夜、再三心配して吟味して来たこの危険は、結局他人の目にも明らかなものであつたのである。

―　「済みません、得がたい御領主。ひょっとしたらこれは貴方に対する心配からの取り越し苦労かもしれません」とグリマーニは言った。彼はその冷たい表情に公爵の秘かな苦悶を読み取っていた。フランスはその最も高貴な子息に忘恩の振る舞いをしてはならないし、またそうしますまい。ただ一つだけ、懇願、嘆願致します。不肖私めのことを信じて頂けますならば、　―　ゲオルク・イエナッチュにはご用心ください」。

この言葉が発し終わらないうちに、速やかな足音が控えの間にかがちゃがちゃ聞こえ、その名指しされた男が副官ヴェールトミュラーと共に部屋に入って来た。丁度まだ高貴な男と人間蔑視の明察の男が、彼について審議し、議論しているところであつた。イエナッチュ

ユは以前より陰気に見え、深く感動しているように見えた。彼の間近に立っていた総督に対し、彼は家臣としての挨拶をし、致命的憎悪の視線を向けた。これに対し総督は高貴に平静に応じていた。それからイエナッチュは速やかな足取りで公爵の前に進んだ。彼は情熱的感謝の気持ちで公爵の両膝を抱き締めたいかのように見えた。しかし彼はただロアンの手を握って、下向きの目を隠しながら、熱い涙をこの手に落とした。

冷淡なグリマーニは、この熱い感動に厭わしい印象を受けて、最初に沈黙を破り、鋭い小声で述べた、「イエナッチュ殿、貴方の命が助かったのは、貴方の件が問題ないからではなく、この気高い御領主の取りなしのお蔭だということをお忘れないように」。

大尉は感動していて、ヴェネツィア人の言葉を聞いていなかったように見えた。彼は彼の燃える眼差しを公爵に向けて、語った。

「いとも尊い御領主、私の感謝を早速行為で証したく存じます。貴方は私には幾多の危険な仕事を用意されたと期しています。 — その一つを先に受けさせてください。私のみが、ご期待に答えて、仕掛けられる仕事で、この私に贈られた命を十倍に賭ける仕事をお任せください。しかしその仕事を果たしてもまだ大した名声とは言えず、それで私のことを誰かが羨むことも問題にすることもあり得ない仕事です。 — 私はここで勝手に話しています。事情は皆さんがご承知です。 — 私の戦友ヴェールトミュラーがその手紙の中で貴方の計画を私に仄めかしていますが、貴方は北方からベルニーナ峠を通過してヴァルテッリーナへ侵攻されたらよろしい。偉大な将軍の目で敵の位置を中央に捉えるのです。そしてスペイン人とオーストリア人を片付けながら、一方は山岳へ押し戻し、他方は下の湖へ追いやります。そこで極めて重要になることは、スペイン人によって新たに幾層にも設置されたヴァルテッリーナの堡壘を正確に調べることです。私を行かせてください。私は色々な地図をそこから持ち帰りましょう。この国については誰よりも詳しいのです」。

「それについては明日話そう、ゲオルク」と公爵は言って、彼の細い手をそのがっしりした肩に置いた。 —

イエナッチュ大尉を公爵にご奉公する少尉ヴェールトミュラーの同僚としたこの日の夕方、ヴェールトミュラーは、ミラノの従兄弟の手紙に返事を書くことを思い付いた。

彼は、自分はチューリヒへの短い休暇を取った、自分の古巣の香りをまた嗅ぐことは格別嬉しくはないけど、と書いた。勿論、自分はそこで、アルザスからグラウビュンデンへ向かう公爵の出陣に合流し、その間の待機期間をフランスのために徴募して過ごすことになるだろうということはこの際秘匿していた。これに対し彼は以下の通り冗漫に報告した。ミラノから逃げ出した剣を使う美人と自分は面識を得たばかりでなく、それどころか名誉なことに、上述の勇敢な女性を公爵の命を受けて、山岳を越え、グラウビュンデンまでお伴することになった。これは自分自身の旅行ルートから外れるものではない、と。 — 従兄弟から彼の座興にと供せられた話しへの報酬として、その話しの画竜点睛として、彼は公爵の広間での思いがけない場面について語った。この場面には、自分は関与せず、腕を組んで、忘れられた観客として、大きな支柱の影に隠れて見守っていたのであるが、 — 半ば感動し、半ば苛立っていた、 — というのは、自分は元来感情を激しく逆らせるのは好みでないからである。しかし感傷的公爵夫人によってこの場面に案内された謙虚な、庇護を嘆願する女性の演技が、このような火山的爆発へと、突然転じたのだ。自分自

身がこの火縄に点火する次第になった、自分がこの主演男性を連れて来たのであった。これは勇敢な兵士だが、しかし残念ながら先の牧師で、自分にはこの男、若干の有能な特性があるものの、余り好きにはなれない。この男には一種大袈裟な趣味が染みついている、多分説教壇からの名残で、忌々しい壮大な喜劇癖がある。若い頃にはこの牧師、猛烈な民主主義者だったそうで、ポンペーユス・プランタを殺害した邪悪な若造どもの一人だったのだ。静かに、自分、如才ないヴェールトミュラーがそうしていたように、背景に留まっておればいいものを、この山師、早速このグラウビュンデンのレディーに対し、彼女の父親の殺害者として、同時にまた以前の心優しい恋人として見得を切ったのだ。それで突然狂ったような爆発が生じた、いや見ものだった、今日でもまだ自分の頭がおかしい。公爵夫人にとっては、ご自分の詩的翼がすべての分別に勝っているから、恍惚となられたことだろう。御夫人は池の家鴨のようにべちゃくちゃと涙の海を漕ぎ回っていた。 — 今や御夫人は現在パリで大当たりを取っている喜劇を手本に、立派な最終シーンの演出に余念がない。パリの著者は鳥の名前、 — コクマルガラスとかカラスといった — 名であり、全く似た題材を扱っている[コルネイユ『ル・シッド』、恋人が自分の父親殺害]。パリではもめ事は結婚の見込みで幕となる。しかしこちらではそうならないのが望ましいし、それにこちらの人生はまだ理性が勝っている。この娘御は残念なことだ、自分はこの娘御を民衆の英雄なんかにはやらない。彼女は確かにパオロ・ヴェロネーゼ[1528-1588]や洒落たティントレット[1518-1594]の描くような、生身では見られない、黄金を織り込んだダマスク織りからこぼれ出るブロンド巻き毛の豊満な美女ではない。それに夜のように半分眠った目もしていないし、穏やかな策謀的なこめかみに青黒く微光を放つお下げをしているわけではない。自分はこんなよりこのラグーンの町の別な娘達が好みだ。しかし自分とはかくいわばこの名誉ある偉大な御仁に魅了された。ルクレーツィアの場合真実であるもの、これはイエナッチュの場合自分には見せかけに思える。これはまさに、自分が先に話したように、かの偉大な作為だ。

ちなみにイエナッチュ大尉は大きな芝居を狙っていた。それが昨夜は自分の意気込みを殺がれかねないところだった。

見得を切って感動している最中、捕吏に連行され、獄舎にぶち込まれたのだ。グリマーニ総督は、このグラウビュンデン人を珍しいことに、重大な国事犯と見なしていて、出来ればすぐさま運河に放り込みたかったところであろう。しかし慎重な老公は貴重な時間を無駄遣いして、公爵にこの時間を利用して、老公は公爵の新たな寵児をまた連れ戻すよう要請されることになった。これは自分個人にとっては、必ずしも嫌なことではない。この新しい戦友の珍しい生活事情のせいで、更に幾多の洒落た偶然の出会いが期待できるし、特に楽しみにしているのが、この先の牧師と一緒にグラウビュンデンの以前の教会まで馬で出掛けて、一体奴が教会で民衆にどんな扇動をしたか、白状させることなんだ。

ここで少尉は満足して、瘦せた顎を撫で、ミラノの従兄弟宛の書状を結んだ。

第三の書 善良な公爵

第一章

愛しいハイツェン[ベルク]山の麓、ライン左岸の或る高台で、カーツィス尼僧院の小さな石壁で囲まれた素っ気ない建物がカトリック信仰に帰依したままの村の小さな家々に向かい合っていた。その或る房の狭いアーチ形窓の許で、美しいルクレーツィア・プランタが座していた。その房からは灰色の、今は朝日を受けて照らされているリートベルクの宮殿の塔が覗き見られた。

春は過ぎていた。ラエティアのアルプスの北方でも生温かいフェーンの風がとうに山腹の雪を溶かして、荒れた高山の小川となってライン川に注いでいた。南からの嵐はヴィアマラ[悪路]の岩の隙間から轟々と音立てて、若々しい奔放な流れと競い合っていた。何週間も、泡立つライン川はその狭い牢獄の岩肌を怒ってぶつかり、より平らな岸辺を荒らしながら飛び跳ねて行った。今やこの辺りライン川はより平静に、穏やかになった流れを溪谷に導いていた。周りには粗い北風から守られたドムレシュクの温かい牧草地や豊かな果樹園が見られた。

六月初頭の澄んだ朝であった。最長老の尼僧ペルペーチュアは丁度かなり長い相談の末、高貴な令嬢の許から去って行った。

カーツィスの敬虔な尼僧達は長いこと心にかかる願いを持っていた。尼僧院長の職が長年の戦争の間、空席のままであった。その席によくまた立派に、或る偉大な家系の、神にも人にも嘉される一人の末裔が就任し、尊敬されるようになることが願われていた。この谷で成長して、領主の娘であるルクレーツィア・プランタの他にこれにふさわしい聖人があるか。

この修道院はすでに宗教改革以前の時代からプランタ家から幾つもの贈与を受けていた。そして今やこの著名な家系の何人かが[新教から戻って]、先にはポンペーユス氏が、唯一浄福を約束する教会[カトリック]の懐に戻って来ていた。しかしこの高貴な殿方は臨終の秘蹟を受けないまま、突然不本意な死を迎えていた。 — そこで彼の孤児となった娘がヴェールを被り、彼の冥福を祈り、そしてこの修道院を、この多分すぐには終わりそうにない劣悪な時代、その高貴な御名で守護し、その遺産で修道院を豊かにすることほど、自然なこと、キリスト教にかなったことがあるか。

彼女の父親の財産を取り戻すこと、これについては、プランタ家の反逆罪、ヴァルテッリーナでの虐殺の共犯ということで、スペイン人による隷属の時代でさえ、話題にならなかったが、今や、奇妙なことに、ゲオルク・イエナツチュ大佐の仲介により、取り戻す見込みが近くなった。目下ヴァルテッリーナでロアン公爵の下で戦っているこのシャーランスの牧師の息子の行状は、その故郷の谷で口から口に伝わって、その名声はこの国中で日に日に上がっていた。

この取りなしにイエナツチュ大佐が至ったのは、多分良心に責め苛まれたからであろうし、あるいはその取りなしは、世俗的な理由、カーツィスの尼僧達の分別では見通せない理由であったかもしれないが、神は以前から邪悪な者達の考えをも神の目的のために転ずる術を心得ていたのである。しかしカーツィスのこの高貴な令嬢が、永続的居場所を見つけ、尼僧院長として、見棄てられた群れの番をするよう望んでいるのは、それは明らかにこの修道院がその規則に従っている聖ドミニクスの意見と思われた。

ルクレーツィアはすでにモンツァの修道院で、聖ドミニクスの天上的好意を自らに引き寄せていた。当時は皇帝軍の一味の兵士達がカーツィスの教会を荒らし、非キリスト教徒的にそこで生活し、ためにベルペーチュアが令嬢宛に書いているように、聖母様のものでもただの材木しか残らない状態であった。この若い娘はその後、器用なイタリア人の尼僧学校で、略奪された故郷の聖母のために、高価な服を刺繍し、それを気さくな旅好きな神父パンクラーツを通じて、それが役立つように届けさせたのであった。

それ以来、聖ドミニクスは釣り合わない尼僧ベルペーチュアに何度か姿を現して、その願いや意志を表明してきた。しかしこれが最も明瞭に不可思議に生じたのは、過ぎた夜のことであった。沈んだこの尼僧は、有り難い夢の中で、荒れた尼僧院長の房に入って、そこで突然、ルクレーツィアを見かけた。彼女は生身の体であったが、しかし謙譲な顔をし、目を伏せていた。しかしその側には聖ドミニクスその人が、天上の光輝の中、雪のように白い僧衣をまとっていて、彼女に百合を渡していた。それからこの夢想者には、その聖人の後光がルクレーツィアの選ばれた頭に射しているかのように思われた。

尼僧は喜びに満ちて目を開けた。この啓示は自分一人のものにしてはならないという思いに駆られていた。それで尼僧はルクレーツィアの顔を夢に見たと知らせに行き、彼女とこの意味について話し合った。

しかしながら夢についての令嬢の印象は、尼僧が期待したほどの喜びと確信を抱かせるものではなかった。尼僧はこれまで長いこと苦勞して、この令嬢が相変わらず外部に留まっているのは、いかなる世俗的悦楽あるいは憂慮の根によるものなのか探ってきた。というのは令嬢は修道院について、確かに修道院には好意的なのだが、単に自分の一時的な宿として語っていたからである。

ルクレーツィアの心は現世の所有に執着しているようには見えず、更に現世の恋愛への執着は少ないように見えた。というのはベルペーチュア尼僧が専ら意図的にこの方面を取って令嬢に問い質したとき、この幾つかの尼僧らしい控え目な冗談には、気位の高い微笑の拒絶が返ってきたからである。

更に一つの可能性を思ってこの尼僧は憂慮していた。つまりルクレーツィアは古来からの国の慣習に従って、残酷に殺された自分の父親の死をその殺害者達の死でもって償う立派な復讐者を見いだすまで、世間に留まるつもりではないか、あるいは結局、自らその残忍な思いを、この修道院の安らぎとは相容れない思いを胸に抱いているのではないかと案じていた。

この恐ろしい推測は、これは元来おとなしい、早期に修道院の躰で育てられた尼僧の情緒には縁遠いもので、一ベルペーチュアは憂鬱症のグラウビュンデン女性ではなく、実直なツークの家系の出身であって、これを彼女の耳に入れたのはリートベルクの老ルーカスであって、彼は令嬢を故郷に連れ戻すためにイタリアへ旅立つ以前に何度かこれを吹き込んだのであった。彼自身が全くこの考えに浸っていたのであり、変えられない必然のようなものであった。しかしこの推測も有効ではなかった。ルクレーツィアは尼僧にとって今日とても子供のように優しく和解的に見えており、尼僧はこのような嫌疑は孤児となった令嬢に対して不当なことと却下した。

実際ルクレーツィアは今日復讐の考えを抱いていなかった。彼女は、甘美さを秘めている悲哀感と共に、ヴェネツィアからの帰還の旅の諸体験を振り返っていた。奇妙な運命で、

彼女の復讐の手に落ちた男の命が彼女の手に委ねられ、彼女はその命を受け取らず、彼女は今日、全く心から確信して、自分はその命を奪ってはならないと悟ったのであった。彼女の感情の葛藤が収まっていた。彼女は平静になっていた。

ルクレーツィアは、忠実なルーカスに伴われて、ヴェネツィアを春、後にした。伯爵領キアヴェンナの近くまでの長い距離、まずヴェローナとベルガモを經由し、それからコモ湖畔の花咲く岸辺に沿って、ほどよい日中の騎乗で、滞在も冒険もせずに進んで来た。グリマーニはヴェネツィア領通行の護送状を彼女に下賜していた、ミラノ領では彼女の名前で十分であった。そしてロアンは彼女に庇護する名誉の騎士として若いヴェールトミュラーを添えていた。

確かに公爵夫人は、夫人の主張するかくも美しい旅人に対して、少しも適切とはいえないこの護衛のことで最初異議を称えていた。しかし公爵は、ヴェールトミュラーの性格の裏表を昔から承知していて、自分のこの風変わりな副官は、真面目な試練となるとこれまでいつも正直に、確実に、勇敢にこなしてきたと理解していた。

かくてルクレーツィア嬢は、意気揚々と自分の側を騎乗して行く少尉から、心が安まる以上の洒落を聞かされながら、自分の故郷の山岳の銀色の先鋒が次第に日々大きくなるのを目にし、或る日、この小さな旅の一行は、湿原に入った。この湿原を歩いてアッダ川がゆっくりとコモ湖の北端に注いでいるのであった。彼らは涼しい早朝に出発していたので、脅威的要塞フエンテスに間近の或る交差路の一軒の旅館の前で、短い昼休みを取ることに決め、それから今日のうちにもキアヴェンナに達し、翌日にはシュプリューゲン峠を越えるラバ道を進む予定になった。

ルクレーツィアは、不潔な宿の中に入るのを好まなかった。彼女は一人葡萄園亭に腰掛けた。そこは春の薄い新緑が丁度生育中の芽から綻びかけていた。彼女はしばらく鶏を見守っていた。鶏は餌を食む馬からこぼれ落ちる餌をついばんでいた。そのとき彼女は飼葉桶の横、華奢な葉と若々しい蔓の間に、埃っぽい街道を行く人々の一行を目にした。その一行に彼女の関心は全て引きつけられた。彼女は、一人の捕縛者が連行されていると察した。この捕縛者がもっと近寄ると、彼女の心は震えた。六人ほどのスペイン人の兵士が、先頭は騎乗の老いて干涸らびた首領で、その中央にヴァルテッリーナの百姓の普段着姿の一人の男を連れていた。その服は千切れて、全体泥水で黒ずんでいた。埃と血で彼の顔は損なわれていて、両手は荒縄で背中に縛られていた。令嬢は驚愕して、その高い背丈、反抗的姿勢はユルク・イエナッチュと認めた。この連行された逃亡者の足跡をスペイン人の猛犬どもが嗅いでいた。この犬どもが多分この人間狩りで成果を上げたのであろう。そして黄色の、半裸の若者達や、虚けた小人の者達が歓声を上げながらこの強靱な、武器を奪われた男の背後を歩いてきた。一行が近付くと旅館の住民達が戸口から駆け寄ってきた。ルーカスも、丁度また馬に鞍の準備で出て来て、ヴェールトミュラーはルクレーツィアの背後に来ていた。

スペイン人の首領は部下に停止を命じ、旅館の門の影に立って、その髑髏めいた頭から歩兵用兜を脱いだ。その褐色の骨張った頭は、単に両の熱い、深く窪んだ目のみが生きているように見えた。それから彼は革紐の千切れた草臥れた馬を天水溜めまで連れて行くように命じ、短く粗野に尋ねた、「このスパイは、先の異端の新教牧師で、何人も殺めた殺人鬼、ゲオルク・イエナッチュと分かる者がここにいるか」。

老いた下僕が履きつぶした靴を引きずりながら寄って来て、平伏した表情で言った、「閣下、申しあげます。私は一六二〇年ベルベンに住んでいました。この時目にしましたが、この不屈き者は呪われた手で私の兄を聖ペーターの中央祭壇に投げ付け、ために哀れな兄は終生まともに歩けません」。

「そうだな」とスペイン人は言った、「私も同じ夏、我らの要塞の跳ね橋でこの新教牧師と出会ったのだ。その方、その方の言い逃れは役立たない。縛り首は確実だ」。

ルクレーツィアは園亭の奥でこの場面を高く動悸しながら見つめていた。自分はゲオルクを助けられるだろうか。そう望んでいいのだろうか、それが許されるのだろうか。…彼女の背後にはヴェルトミュラーが立っていた。彼が攻撃したくてうずうずしているのを彼女は感じ、彼がこっそりとピストルの撃鉄を起こすのを耳にした。ルクレーツィアは立ち上がり、抗しがたい力に引かれて、ゆっくりと前に進み出た。スペイン人の最後の言葉のとき、彼女は彼と、園亭の石造りの支柱に括り付けられた囚人の間に立っていた。この瞬間一握りの石や糞尿が笑っている出目蛙から囚人の額に投げ付けられた。しかし彼の表情は気位高く平静で、唇を囁くように動かした。「ルクレーツィア、そなたの復讐がかなうぞ」とロマンシュ語で響いて来た。彼は彼女に視線を向けていなかった。

「隊長殿」とこのグラウビュンデン女性は確固たる声でスペイン人首領に話しかけた、「私はルクレーツィアで、ゲオルク・イエナッチュに撲殺されたかのプランタの娘です。私は父の死後、復讐のことだけをよく考えてきました。しかしこの男は私の父の殺害者ではありません」。

スペイン人はその邪悪な視線をまず問い質すように、それから嘲笑的に彼女に向けた。しかしルクレーツィアは彼を気にかけていなかった。すでに彼女は小さな旅行用短剣を手にしていて、躊躇わず囚人の戒めを断ち切り始めた。

彼女の五感は、今自分の周囲で起きていることをほとんど捉えていなかった。それでもルーカスにヴェルトミュラーが素早く、「馬を出せ」と命ずるのを聞いて、それにこの少尉が手にピストルを持ってスペイン人に向かって行き、このスペイン人が鞆から剣を抜くの気付いていた。その後、彼女は素早く馬に押し上げられ、馬は、マスケット銃の銃声を背後に聞きながら、そこから彼女を乗せて乱暴に跳ね、疾駆してフエンテス要塞を通過し、キアヴェンナへの街道を進んだ。埃っぽいこの軍用道路を彼女はギャロップして行った。びっくりした馬にかりうじて掴まり、味方かそれとも敵かどちらが追って来るか不安一杯に振り向いたりした。更に、すでに遠くになっていたが、散発の銃声が聞こえて来た。その他には、自分の馬の鼻息と蹄の音しか聞こえなかった。

ようやく彼女の背後でギャロップの音がして、すぐ彼女の右側に、千切れて、出血していたが、しかし明るくはしゃいで、ゲオルク・イエナッチュが騎行して来た。その背後には、憤然とした表情で彼を掴んでいる老ルーカスが馬上にいた。令嬢の左手には一瞬遅れて、二頭目の馬の頭から鼻息が荒く出された。この馬の頭越しに、小さな少尉が興奮した顔で挨拶した。少尉は退却の援護をして、自分の果たした役割に極めて満足している様子であった。

「要塞で警報が鳴らされよう」とイエナッチュは言った、「あの森の丘の背後でこの軍用道路から左手に折れよう。軍用道路は追跡される。アツダ川の浅い支流を馬で抜けて、通行可能と分かっている道を、湖に沿って、山々を越えて行き、安全なベレンツまで行こ

う」。 —

馬が川床の滑りやすい砂利に入ると、ルーカスは飛び下り、令嬢の馬の前に立って、忠実な手で、その手綱を握った。「根本的には貴女は正しい」と老公は言って、ルクレーツィアの幸せな顔を見上げた、「今日は都合の良い折でもありませんし、適切な場でもありません。 — 貴女のためなら私はこの厄介な悪魔本人とも騎乗しましょう。しかし、 — 正直、 — 実直な馬も、実直なカトリック教徒も今日日かなりの我慢を強いられます」。 —

その後続く困難な旅の日々は、ルクレーツィアの心に浄福な思い出として残り続けた。アルプスの南側の麓の山々を横切って行く疲れる行程の後、一行はベレンツで休み、イエナッチュは自分の馬を用意した。その後彼らはゆっくりと滝のざわめく音がするミズックスを抜けて行った。グラウビュンデンで最も南方の最も美しい渓谷である。サン・ベルナルディーノ山岳村の上の峠は急に上がり始めて、この早い季節、直にまぶしい雪の覆いを進むことになった。空は深く澄んでいて、まだ南方の青みを帯びていた。ルクレーツィアは故郷の力強いアルプスの風に吹き付けられるのを感じ、数瞬、あたかも子供時代の楽しい旅の日々に戻ったかのようであった。というのはポンペーユス氏はしばしば彼女と一緒に、自分の堅牢な邸宅を次から次へと、渓谷の多いグラウビュンデンの山の峠を越えて行ったからである。彼女の目は性急に小さな山の湖を探した。それは、彼女がはっきりと覚えているように、自分の故郷の分水界ではどこでも欠けていないものであった。ようやく、北側の山腹に、今日の鋭い陽光に照らし出されて、輝いているのが見えた。確かに短い解放の輝きであった。というのは、夏はこの高地では、騙される先駆けがあるが、遅くに始まるからである。それでこの天を写す目の湖も、寒い嵐に遭って、多分また[凍って]見えなくなることだろう。

半分溶けた雪道を馬はただ苦勞して進んだ。グラウビュンデン人達は、 — ルクレーツィアも — 高い鞍から降りて、ただ頑固なヴェールトミュラーだけが鞍に乗り続け、そして山が下りになり始めると、馬が歩むたびに滑って、次第に他の者達より遅れることになった。最後に彼は、紛らわしく雪で覆われていた隙間に落ち、そこから、残りの馬の手綱を握っていたルーカスが、時間をかけ、苦勞の末、彼を引き上げた。ルーカスと、呪いを発している少尉とを残して、イエナッチュとルクレーツィアは元気よく二人っきりで下って行き、故郷の大気を胸一杯に吸い込むといういつにない悦楽に身を任せた。令嬢は始めてイエナッチュと二人だけで旅しているとは考えなかった。しかし彼女が静かにユルクの側を歩いているとき、彼女の他の二人の同伴者は、 — 少尉の方は快適な印象を与えようとか不快な印象を与えようと絶えず努めていたけれども、そして老公の方は、復讐心を隠さなかったけれども、 — 無関心な、お節介のできない距離に離れていたのである。

彼女は自分の山々と自分の初恋という魔法の下、夢のような幸福の中に生きていた。彼女はこの魔法を残酷な現実を思い出させる言葉で壊してしまうことを恐れ、用心していた。

この時、二人は狭く木のない渓谷に最初の緑を目撃し、陽の当たる岩に腰を下ろして、遅れている少尉を待つことにした。湿った黒っぽい大地から小川が湧き出していた。ルクレーツィアは跪き、手をくぼめて、その水を掬おうとした。「このグラウビュンデンの山の水が」と彼女は言った、「若い時と同じ味なのか、確かめてみよう」。

「駄目だ」とイエナッチュは警告した、「貴女は冷たい湧き水には慣れていない。ここに杯があれば、私の水筒から二、三滴のワインを垂らして、飲めるようにするのだが」。

するとルクレーティアは情愛深く彼を見つめ、自分の服から小さな銀杯を取り出してそれを彼の手に置いた。 — それはかつて少年の彼が、彼女が大胆に子供の旅をしてチューリヒの彼の学校を訪ねたとき、返礼として彼女に贈ったものであった。彼女はそれを肌身離さず持っていたのである。ユルクはそれをすぐに察して、跪いている女性を抱き、自分の胸元に引き上げ、心からの接吻をした。彼女は彼を見つめた。あたかもこの唯一の瞬間が彼女の全生涯であるかのようであった。それから彼女の涙がどっと溢れた。「これが最後ね、ユルク」と彼女は途切れる声で言った、「では、この杯に混ぜて頂戴。二人でそれを飲みましょう。お別れに。そして私の心を落ち着かせてください」。

黙って彼はその杯を満たした。そして二人は飲んだ。

「私どもの間のこの小さな溝をご覧なさい」と彼女はまた始めた。「これは下では奔流となります。このように私の父の血も、私とあなたの間を流れて行きます。あなたがこれを越えたら、私ども兩人とも駄目になりましょう。ご覧なさい」と彼女は優しい声で続け、彼を自分の横の岩に導いた、「私は捕吏達の手の中にあるあなたを見つけたとき、あなたが惨めな死に方をするよりは、むしろ私の手であなたを殺したいと思いました。あなたはその権利を私に下さった。あなたは私自身のものです。あなたは私が始末します。でも私はあなたの言うことを信じます。この大地、この愛する故郷の地に、まずあなたの責務があるのだ、と。では行きなさい、そしてこの土地を開放しなさい。 — でも、ユルク、もう二度と私とは会わないで。私がどんなに苦しんだか、分からないでしょう。私のすべての青春の喜び、生命力がいかに暗い考えや計画へと変わってしまっ、最後には盲目の、意志のない復讐の道具になってしまっているか。愛しい人、私の前には現れないで、私とは出会わないようになさってください。私の心を乱さないように」。 —

そのように兩人は荒地に座っていた。

イエナッチュは公爵夫人の許で、ポンペーユス氏の娘と再会して以来、激動の戦闘生活の豪胆放逸な中でも決して全く忘却したわけではない子供時代の愛が灰の中から燃え上がって来て、同時に自分の運命に対する憤然とした反抗的精神も燃え上がった。若い時には正当な民衆の判断の執行と信じていたが、今の成熟して、経験を積んだ自分には無益な殺傷として呪わしく見える残虐行為のせいで、以前から自分のものであった偉大な、慈悲深い心から永遠に別れるという運命になってしまっていた。

この反逆と絶望の精神が今や彼を刺激して、自分の前に願わしい妻として立っているルクレーティアを何としてでも獲得し、彼女が彼に刃を向けても、 — だってそうする女性と知っているのだから、 — 凱歌を上げて彼女と一緒に没落したくなった。

しかし彼はこのデーモンを抑えた。彼は、男が全霊を上げて取り掛かることを要求し、自分の力や情熱の全てを一本化して集中すべき別の闘争の最中にあるのではないか。彼の性情もかの鋼のようなもので、これは不可能という石壁に打ちかかって、再三、希望という明るい火花を散らすのである。彼は決して絶望せず、決して諦めないということに慣れていた。

ルクレーティアの情緒もまた澄んで来るのではないだろうか。過去を尋常でない偉大な行為で償うことは、全く不可能であろうか。名声の輝かしい段がすぐ自分の現前で隆起す

るその折に、最も好ましい褒賞を相変わらず断念する必要があるだろうか。

ルクレーツィアも今日はとても優しい。彼女が小さな銀杯を彼の手にしたとき、彼をその信頼に満ちた褐色の目で覗いていたのは、あの少女、彼をかつて子供遊びのとき、自分の庇護者、番人として選んでいたあの少女であった。...かくて彼は自分の強い意志で自分の情熱を抑え、彼女の頭を穏やかに自分の胸に抱いて、その額にさらにこっそり接吻をして、何年も前、二人が喧嘩したときには、泣いている少女によく言っていたように、言った、「良い子だ、おとなしくしろ。これで仲直りだ」。 —

ルクレーツィアはこの言葉を本気にした。落ち着きがまた彼女の心に戻ってきた。人生の高みに上がって、思い出が自分の最大の財産になったという思いになった。そして今数ヵ月前からカーツィスの修道院の石壁の中に住んでいるのであった。不埒な行いを新たな暴力行為ではなく、愛の犠牲によって償うことの方がより確実であるという敬虔な公爵の言葉が、彼女の沈静した心の中で根付き始めた。 — 彼女がカーツィスの尼僧達の願望を受けなかったのは、リートベルクの塔がそこから眺められるからであったろう。その塔は彼女に、自由な子供時代を思い出させた。砦の女領主として、召使いや村の人々に囲まれて自立した生活を送る姿が現前に浮かぶのである。彼女は昔からの宮殿の部屋に憧れた。そこで彼女は父親の家政をまた行いたかった。 — それにまた自覚していなかったが、彼女の心の中にはある矛盾した考えも微睡んでいた。自分は、ユルクが行動三昧にあって、ますます大きな戦闘に乗り出して行く限り、この世間を修道院に入って断念することはできない、と。

開かれたまま令嬢の近くの蛇腹にあったミサ典書の頁を、開いた窓から吹き付ける山の風がすでに長いことあちこちめぐっていたが、ルクレーツィアは気付いていなかった。しかしこの時馴染みの声の調子で彼女は夢から起こされた。

彼女はアーチ形の窓辺に寄って、小門の横にパンクラーツ神父の褐色の僧衣を目にした。彼の大胆な、日焼けした顔は、今回いつもより更に確信ありげに世間を窺っていて、彼は早速令嬢の前に案内されることを性急に望んでいた、良い知らせだ、と。

すぐその後、彼は入って来て、自分の知らせを告げた。「ルクレーツィア嬢、お喜びなさい。貴女はまたリートベルクの女領主です。我らの偉大な大佐が、昔の重大な咎の贖罪として行う立派な仕事が始まります。 — 明日クールから裁判官達がやって来て、封印を解き、貴女の父祖の家をまた開けます。貴女のご帰還を神が嘉されんことを」。

第二章

ただ同じ年の夏と秋の数ヵ月の間に、アンリ・ロアン公爵はヴァルテッリーナでの遠征を迅速かつ決定的な攻撃で終わりに導いた。一人の将軍が勝ち取るには極めて稀な四つもの勝利[Val Livigno, Mazzo, Val Fraele, Morbegno]の、新鮮な月桂冠で彼の名前は称えられた。

今回彼の才能は、大胆に喜ばしく発揮された。というのは戦闘はフランス外部の敵に対してなされたからで、フランスの大地で、同じ土地の者同士の間でなされたわけではなかったからである。以前彼は、領民同士、自分のカルヴァン主義の信仰の同胞達を、カトリック教徒のフランスに対し心を痛めつつ指揮することを強いられていたが、今回初めて、両信仰者達[新教徒とカトリック]融合のフランス軍を率いたのであった。モルベーニョの

戦い前、このとき彼の軍は、有利な立地で脅威的で優勢なスペイン軍を前にしていたが、彼はフランスの戦争の慣習に反して、部下達に跪いて神の加護を祈るようにさせた。公爵のカルヴァン主義者の牧師はプロテスタントの者達と一緒に祈り、一方カトリックの司祭はカトリックの信者達に十字を切る祝福の祈りを行った。

このときほどロアンがこの深い溪谷で寸断され、氷河の山々で狭小になり、見通しがたい戦場で、天才的な將軍の眼差しを發揮したことはなかった。彼の迅速かつ確かな指示に続いて、すぐに賛嘆に値する彼の持久力が見られた。これは珍しい耐久力という禁欲的性質のお蔭であった。彼は眠って英気を養わずとも、四十時間緊張して活動を続けることができた。

かくて彼は、両方の側から迫って来る敵に挟まれていても、その上その両軍がどちらも倍の精力で優勢であっても、溪谷を上下に急ぎ移動して、あるときは一方に、あるときは額を返して、別の方に向き、常に勝利を収め、遂に彼は両軍を、つまりスペイン人達とオーストリア人達を、グラウビュンデンの大地から追い払い、アツダ川沿いの全く長く延びた溪谷を、つまり数十年来、領主が欠けて、諍っていたヴァルテッリーナを彼の軍の支配下に置いた。

この勝利の三回目のとき、フラエレ溪谷の戦いでは損失の差は信じがたいものであった。公爵は自身の証言によると六人の兵も失っていなかったのに、戦場には千二百人の敵が[起き上がれず]残っていたのである。死の運命がかくも不平等になったことの説明はただ一つしかない。フランスの將軍はオーストリア人達よりも、この人跡稀な高い溪谷について完全な知識を有していたのである。ロアンはこの山国を、父祖のツェンブラ松で鏡張りされた部屋の如く、玄関の上の紋章の如く承知しているグラウビュンデン人達を自らの傍らに有していて、それにゲオルク・イエナツチュほど、グラウビュンデンの山々に詳しい者はいなかったからである。

公爵はグラウビュンデンの当局に対しこの勝利を知らせた書状の中で、大佐イエナツチュと、彼に率いられたこの故郷の連隊の勇敢さを熱烈に顕彰した。この籐が外れて見えるが、しかし冷静でもある放胆さや、プレティガウでの以前の民衆蜂起の信じがたい伝説が、今や訓練を受けたフランス軍や、殊に辛辣な少尉によって批判的目で吟味され、率直に称賛された。そもそもゲオルク・イエナツチュは絶えることなく、公爵のいやます尊敬と信頼を受け、ロアン自身そうと自覚しないまま、この公爵に最も好んで相談される助言者となっていた。大胆さと慎重さのどちらを取るべきか議論となるような場合に將軍が作戦会議を開くと、イエナツチュはいつも極めて大胆な攻撃を主張して、自分自身には最も危険な仕事を望んだ。しかし彼の助言は奏功し、彼の大胆な行動が失敗することはなかった。彼は運命の好意を得ていた。 —

しかし彼はいつの折でも、公爵本人の間近にいるようにした。危険な折は自分の体で彼を守るようにした。戦場の群れの中にいるときよりも、人気のない山岳の小道にいるときもっと用心した。この山岳の小道に、彼は時折、將軍を、敵の陣地を調べるために案内した。それであるとき、將軍の足許で邪悪な岩が崩れ、彼は將軍を絶壁の縁で素早く両腕で掴んで支えたときがあった。また別なとき、茂みからマムシがしゅっしゅっと公爵の手に向かってきて、彼は素早く狙って断ち切ったことがあった。

かくて彼は次第に公爵に近寄って行った。公爵は、この重要な精神を恥辱的暗闇[獄舎]

から引き出し、自分の影響で発展させたことを喜んで自負していた。ロアンはしばしばこの奔放なグリソン[イタチ科]がいかに進んで厳しく軍務規定に服すことか、そして同様に高く評価する点であるが、何と無条件に信頼して、以前のグラウビュンデンの民衆の指導者が、戦争の最終結果やグラウビュンデンの未来に関し、不吉な意見を述べることを一切止め、避けることか、感心せざるを得なかった。

この結果を、公爵は、出来るだけグラウビュンデンに有利に取り計らうよう考えていた。フランスの宮廷が彼のことを嫌っている点を知らないわけではなかった。しかしそれでも宮廷で、自分の公正に、賢明に考慮された提案を貫き通したいと期待していた。わずかな部隊で、彼の個人的魅力で勝ち得た一連の勝利、フランス軍にまばゆい栄光をもたらしたこの勝利は、アンリ四世の息子[ルイ十三世]の許で、いやそれどころか、ロアンの政敵である、フランスの百合紋の戦旗をいずれにせよ高く掲げ、誇っている枢機卿[リシュリュー]の許でさえ、決定的に重いものにならざるを得なかった。すでに内戦の時代から国王の気持ちの中に、ユグノー達の以前のこの戦争指揮官に対して書き記されていたことが、

— 公爵自身述べたように、 — 今やフランスの年代記に公爵のこの戦勝が記入されて、全面的に帳消しになったのである。

ロアンはグラウビュンデンの国と、その北方的に男性的で、同時に南方的に柔軟な民衆を愛していた。これらの山々の中に滞在すると彼の精神は落ち着き、自分の生命力が活気付いた。しかし彼が勝利を得た、真剣な、涼しい風の吹き抜ける高地の谷が、そのごつごつした岩や冠雪で、彼に魔法をかけたわけではなく、彼は時代の趣味や自身の穏やかな情緒に従って、中等の、柔らかな緑に覆われたアルプスを愛好していた。アルプスの小屋や鈴の鳴る家畜の群れの見られるところである。彼の寵愛するところは、温かいドムレシュクを包み込む高地であった。彼はハイツェン[ベルク]山が世界で最も美しい山であるとよく言っていた。

彼の愛着という贈り物にグラウビュンデン人は高利のお返しをした。国中で彼は単に「善良な公爵」と呼ばれるだけであった。クールでは彼はすべての身分の者達の偶像であった。というのは彼は高貴な家庭の者達を自らの貴族的習慣である上品さで引きつけたし、民衆に対しては真心のこもった何とも言えない人なつっこさで魅了したからである。その上この国のプロテスタント教区では、ほとんど毎日曜日、説教壇からグラウビュンデン人に彼の称賛が発せられた。彼は新教の忠実な信仰の手本であり、すべての国での迫害されたプロテスタントの者達の一つの砦であると示され、称えられた。

彼の戦闘遂行を応援した幸運の星は、今や彼の政治的遂行をも照らすように見えた。彼は何人かの傑出したグラウビュンデン人を自分のいるキアヴェンナへ召喚し、彼らと協定の案を一文ずつ協議した。そしてこの協定はすぐその後トゥージスで開かれたグラウビュンデンの連邦参事会で採択された。両方の側とも極端な譲歩をなしていた。グラウビュンデン人の主要な要求を呑むために、ロアンは彼らにこの条約でヴァルテッリーナをフランスの名の下に返還した。しかし彼は自分の国王の軍事的利害とカトリックの名誉を確保して、こう定めた。グラウビュンデンの山岳の峠は、一般的な和平締結までの間、フランスの給料を貰うグラウビュンデンの部隊によって監視されなければならない、ヴァルテッリーナの支配的宗教はカトリックであることが承認される、と。

アンリ・ロアン公爵によってグラウビュンデンの指導者達とキアヴェンナで協議され、

ドムレシュクで承認された条約の項目、所謂トゥーリス条項は以上のようなものであった。

フランスの国王が、このロアンによって国王のために結ばれた条約を承認すると、一国王がそれをしないはずがあろうか、一 グラウビュンデンの昔の国境は回復され、アンリ・ロアンは自分の約束を果たすことになった。というのは実際、この昔の国境を回復させることを、戦役前に彼は自らグラウビュンデン人達に保証していたからであり、一 保証しなければならなかったからである。この約束を拒むことは、この疲弊した国を今一度戦争に奮い立たせるためには、出来ることではなかったであろう。この点、明察のヴェネツィア総督の仮借ない論理は正しく予見していた。しかしこの総督は、公爵にゲオルク・イエナツチュを警告する必要があると信じた点、この点、全く、完全に間違っていた。

まさにこのトゥーリス条項の採択のために、この大佐は信じられぬ働きをした。これは実際簡単なことではなかった。この条項を邪推深い、独立にこだわっているグラウビュンデン人達に納得させるためには、民衆の寵児といえどもしたたかな機敏さと持久力を要した。しかしイエナツチュは八面六臂の活躍をした。谷から谷、教区から教区を駆け、どこでも自分の弁舌の魔法を見せ、どこでも自分の強力な意志の炎の影響力を発揮した。彼は確実な部分を、不確かな、いや考えられない、より大きな儲けのために手放すことを主張しなかった。彼は肝要な点で満足し、フランス国王の許でのグラウビュンデン人の高貴な弁護人[公爵]に対し忘恩の振る舞いをせず、年ごとに減少して行くフランスの圧力の残部を進んで我慢するよう提案していた。

しかし更にある心配事で公爵の名誉は損なわれかねなかった。ドイツでの戦費が途方もない額に膨らんで、フランスの疲弊した国庫の財務大臣からのロアン公爵への送金はすでに長いこと乏しくなっていて、今や途絶え、公爵はしばらく前からもはや自分のグラウビュンデンの部隊に給与を払えなくなっていた。勿論フランスの連隊も同じ運命に遭っていた。サン・ジェルマンの宮廷では、名声ある將軍旗下という名誉があれば、兵士達には食費と衣服の代替となろうと信じている節があった。ロアンは書状を連日出し、返事として約束を連日貰った。フランスで新たな軍事税の引き上げがあるから間もなく不都合は解消されようとサン・ジェルマンの宮廷から公爵に伝えられた。

従って公爵の仕事は、自己中心的な利害追求圏を打破するこの正当な解決策に対する、人間や事象に内在する抵抗によって、いかにも妨害や遅滞を受けることになった、一しかし彼は自分の目標のすぐ間近に立っていて、グラウビュンデン人達は、ロアンによって彼らに課された自制のお蔭で、自分達の国の解放を獲得した。

そのとき突然、落葉の時節、グラウビュンデンの溪谷に不気味な知らせが広まった。善良な公爵がもはや存命ではないと噂された。彼はソンドリオの自分の宮殿で沼沢熱に罹って没したとされた。すでに一人の急使がシュティルフサー・ヨッホ[ステルヴィオ峠]を越えてブリクセンへ向かった、彼の死体のミイラ処理のための香辛料を取り寄せるためだと言われた。[1636年8月、ロアン病氣]。

この噂は、これを耳にした人々の心を驚愕させた。人々は突然、一切がこの高貴な命を頼りにしていることを知って憂慮した。山では一片の雲が太陽にかかると、風景が一気に暗くなり、同時にその個別の切り立った特徴がより鋭く浮き上がって来るように、そのようにグラウビュンデン人にとって、公爵がいなくなった場合には、不確かな従属性や自分

達の状況の危険性が明確に危ういものに思われた。フランスは単に信頼出来そうな彼の姿を借りて、救援国として近寄って来ただけなのだ。彼こそは、自分の国王のために彼らと交渉した人物であり、彼らの欲した戦争の代価[独立]を承認したのであり、フランスは約束を守る誠実な国だと自ら山国に対面して保証したのである。彼らの仲介者、善良な公爵が消えたらどうなるか。リシュリユーは彼の後継者に誰を任命するのか。世間を冷たく計算して睥睨している枢機卿が、情け容赦ないこの政治家が、正義の人、プロテスタントのアンリ・ロアンの楽しくない遺産を引き継ぐであろうか。

今回この不幸は避けられた。公爵の死の噂は嘘であった。数週間後に人々は、彼は十日間、目を閉じたまま気を失っていたが、その後また蘇って、次第に快方に向かっていると知った。しかし彼は何という邪悪な懐疑に苛まれていたことか、そしてとうとう疲れ果てて臥せったのだということを当時はまだ誰も知らなかった。

第三章

或る晴れた温かい十月の日、トゥージュスの一角の、シュプリュージェン通りにある都会的に豊かな露地に、陶然として群衆の動きが見られた。ここでイタリアから戻って来る旅行者は、苦難と危険を乗り越えた後、楽しい一日を過ごすのであり、これに対し北方からの旅人は、自分の度胸を鍛錬し、ラバを借り、難しい旅に備えて、最後の買い物をした。この商売と交易に適した立地のため、大火災の後、新たに再建されたこの土地はすぐにまた立派に繁栄して行った。

今日はその上盛大なトゥージュス年の市が開かれていた。近隣、遠方から人々が誘われて、すでにグラウビュンデン溪谷の様々な体型、衣服、言語の者達がハイツェンベルクの麓に集まっていた。中には善良な公爵を眺めるために来ている者もいた。公爵は、噂では、昨日駕籠に乗って、高い峠を越えて、シュプリュージェン村に宿泊したそうであった。今晚彼はトゥージュスに予期されていて、若干離れた貴顕の家に静かな夜の宿が用意されていた。何人かのシュプリュージェンの者達が、昨日村で彼の顔を眺めており、この高貴な紳士は顕著に年老いていて、青白く、消耗し、彼の髪は完全に白くなっていると、描写されていた。

更に大胆な、戦闘的な姿も群衆の中を歩いていた。グラウビュンデンの連隊の大佐達が、公爵の接待のために来ていた。彼らは彼に再会したいという激しい欲求のために、オーストリアとの国境から離れるという兵士としての規律無視をしたのであろうか。彼らの部隊も奇妙なことに、公爵に挨拶するために、トゥージュスからクールへの彼の行路に等間隔で配置されていた。何故大佐達は彼らを国境から国の内部へ引き戻したのか。

この晩、立派な宿、黒鷲亭では、野蛮に騒然と過ごされた。この裕福な宿はその飲み物を、つまり濃い色[赤]の、その渋みで血液をただゆっくりと温めるヴァルテッリーナ・ワインと、ライン河畔四つの著名な村[Trimmis, Zizers, Igis, Untervaz]のより危険で澄んだ[白]葡萄酒を、国の風習に従って、二つの異なる部屋で供していた。この部屋は舗石のある廊下で、左右に分かれて向かい合っていた。一方の部屋は、本来の居酒屋で、樅の木でできた粗いベンチやテーブルが置かれていて、騒がしい市場の商売人や、家畜商、酪農家、猟師が一杯詰めかけて、自分自身の言葉が分からないほどであった。若い酒場の女将は、落ち着いた、黒っぽい髪のプレティガウ生まれの女性であったが、手に負えないほど忙しくて、

どっしりした陶器のジョッキに何度も注いでいて、四方八方から呼ばれ、引き留められて、ますます反抗的に頭を後ろに反らし、ますます陰気に眉毛を顰めていた。向かい側の殿方の部屋でも、高貴な軍人達が劣らず大声を発して、杯を更に熱心に注ぎ重ねていた。

両部屋の間を、堂々たる亭主、アマン・ミュラーが、この混沌を一望しながら、変わることなく悠然と上機嫌で、行き来していた。丁度彼の広く角張った体がまた居酒屋のドアを占有した。ここでは丁度政治が行われていた。勿論卑俗な男がよくやる類いのもので、ただ個人的困窮の観点からの政治である。

「神と人間に対する一つの冒瀆だぞ」とエンガディーンの家畜商が騒がしい声を上回って言った、「我々グラウビュンデン人が自分自身の国境を、フランスのパスポートがなければもはや渡れないなんてのはな。最近わしは牛の群れをヴェルデンベルク領まで連れて行こうとしたのだ。すると国境で無体引き留められた。クールフランス人官房での襤褸紙の交渉を怠っていたからな。わしの牛を全部連れ戻せたのは、まだラッキーだったぞ。奴等はこの素晴らしい牛をマイエンフェルトの角面堡に追い込み、奴等の言い草では、要塞の糧食としてわしから買い上げたいのだ、と。買い上げだ。それは立派な取引だな。しかし奴等の屠殺人、無礼な小男が提示した額は、明らかにこんな見事な牛をまだ見たことがないのだろう、話しにもならん」。 —

「この小男連はよく言うぞ、自分らの家のパンがわしのご立派なパンよりも上手い、と」とパン屋が言った、トゥージスの市民である。「奴等が昨年この宿営地にいたとき、ある男がわしのライ麦パンをわしの足許に投げ付けよった。ただ柔らかい白い小麦パンしか食ったことがないのだな。これだけで済みはせん。わしはその後すぐに店長としてきちんと示しを付けたんじゃ、この猿公の手から我らの褐色肌の小娘、オーバーハルプシュタイナー産の娘を放してやったのだ。この娘なら彼の口に合うのだな、この娘はまことわしのライ麦パンよりも黒くて、この半分も美味しくはないのだがな」。

この時一人のカモシカ猟師の陰気な顔に奇妙な微笑が浮かんだ。彼はパン屋に向かい合って、背を壁にもたせかけて、腕を組んで、テーブルの奥に座ったまま、今や表情も変えず、その口髭の下に整列したまばゆく白い歯を見せていた。

パン屋はこの静かな嘲りの微笑に気付いて、非難一杯に咎める口調で言った、「ヨーダー、わしはおまえさんのようには、こいつが浅ましい色ぼけだからと言って命までは奪っていないぞ。哀れなアンリヨ伍長だったな、アーメン。あれは無駄に残酷な仕打ちだ。おまえさんのすらりとしたブリーデ、これに彼は色目を使ったが、堅い内気な女じゃないか」。

話しかけられた男は極めて平静に答えた、「おまえさんが話しているわしについての奇天烈な話しを誰が広めたかは知らん。あの事件に関しては、わし自身がすぐに、包み隠さず、当局に話した。あの件は単純なことだ。あのフランス人は毎日わしの銃をいじりに来て、自分をカモシカ猟に連れて行けとそそのかすのだ。わしよりも自分の方が上手いと主張してな。わしは彼を連れて、一緒にピッツ・ベーヴェリンをうろついた。我々が氷河を越えるとき、長雨で隙間が少しばかり変化していた。わしはダブルの幅広く飛んだ。そして振り返って見ると、もうこのフランス人は消えていたのだ。彼の跳躍は短すぎたのであろう。事情はこうで、このことを裁判所で申し上げた。 — これは大將が証人となってくれるよな、アマン・ミュラー」。

「黒いヨーダーよ、裁判の証人となろう」と落ち着いて亭主はとても親切に言った。 —

方個々の客人の顔には疑わしげな詮索やあっさり他人の不幸を喜ぶ気持ちが明瞭に読み取れた。

「それで一件落着だ」と家畜商は冷淡に言った、「誰にも不都合はない。フランス人もはやそのことは気にせんだろう。数週間もしたら、神様と善良な公爵のお蔭だが、外国人とは一人残らずおさらばだ。これはトゥージス条項の先頭に書かれている。条項は国王の署名で有効となる。そしてこの署名を、噂によると、今日公爵が持参するのだ」。

「持ってくればいいが」とゆっくりとルグネッツ出身の、炎の目と白髯の立派な老人が言った。この老人はそれまで両手を鉤形杖に、そして顎を両手に置いていて、注意深く黙っていた。

「間違いないよ」とアンマン・ミュラーが言った、「ユルク・イエナッチュがハイツェンベルクとドムレシュクの集まった我々に、この重大な件を説明し、上手く運ぶだろうと請け合った。カズットよ、彼は知っているはずだ。彼は善良な公爵の右腕だからな」。

「ユルクの言うことは私も信ずるつもりだ」と白髯の男は言った。「彼は我らのルグネッツでも同様に、我らはトゥージス条項を受け入れることによって簡単に外国人と手を切れて、再び自由と名誉を回復できると保証した。彼は向こうで悪太郎どもと一緒に飲んでいるのか。彼と一言話したいものだ」。

「向こうではまだ彼を見かけていない」とミュラーは言った、「しかし彼は到着している。黒馬を見たから」。

こう言って彼は窓越しに通りを示した。通りでは豪華な馬具に、泡を吹いている漆黒の馬が馬丁に曳かれていた。この宿の前の広場で詰めかけた民衆の雑踏の中、時々深紅の服の微光と高く揺れる青い[帽子の]羽根飾りが見えた。

この老人は速やかに玄関に出て行った。今やイエナッチュ大佐の良く響く声が宿の門前の石段から聞こえた。彼は人の群れに囲まれて、新たな性急な質問者達に落ち着くよう指示していた。白髯のルグネッツの男は大佐を掴まえて、今や両人が居酒屋部屋の開いた入口に現れた。そのドアは年の市に敬意を表して外され、客人が自由に出入りできるようになっていた。

「ユルク、こちらに入ってくれ」と老人は叫んだ、「私や皆に報告してくれ」。大佐は快くルグネッツ男の腕力に従って、この男と並んで輪の中へ入った。それはすぐに座席から飛び上がった者達が彼の周りに作った輪で、次第に密な輪になった。

「諸君は一体どんな疑念の精神に囚われているのか」とイエナッチュは言った。彼の目は好意的に輝いていた。「キアヴェンナの条約が確かに署名されているのか、盛んに私に聞き立てている。勿論署名される。今私はフィンスターミュンツから戻ったばかりだ。国境のいざこざを調停するためだ。だから最新のことは耳にしていない。しかし私が公爵と別れたとき、公爵はこの件には確信されていた。この文書を公に布告するのが遅れているのは、多分ただ公爵殿下の病気のせいにすぎないだろう」。

「ユルク、いいか」としばらく沈思していた後でルグネッツ男が答えた、「公爵のことは知らん。しかしわしはそなたを知っている。すでにそなたの信心深い父親の許、シャールランスへ参詣に行ったとき、そなたはまだ内気な恥ずかしがり屋の坊やだった。だからそなたを信用している。そなたの生地が何であるか、知っているからな。 — 我らのザーリスとかブランタの生地ではない。奴等は祖国を右や左の方に売り飛ばして、我らが蒙っ

た惨めさの大半は奴等のせいだ。政治家の策略についてはわしは知らん。しかしそなたは心得ておろう。そなたの金の縫い込まれた飾り帯で、偉いさんはそなたの両手を縛るまい。そしてこの深紅の上着の下では」と彼はスラッシュの入った袖の上等の生地に触れた、「それでもそなたの心は民衆と祖国のために動悸していよう。また昔の自由を取り戻してくれ。公爵と一緒に、公爵が役立つときにはな。 — しかし他に仕様がなときは、公爵抜きだ。そなたはそれができる男だ」。

大佐は笑いながら自分の大胆な頭を横に振った、「カズット、世の中について独自の考えをお持ちだ」と彼は言った、「しかしおまえさんの信頼が潰えることはないと思うぞ。ここにいなされ。ひょっとしたら今夜にも私自身が確実な知らせを持って来られるかもしれない」。

「畜生」とイエナッチュの背後で陽気なバスの声が響いた。「戦友殿、入るドアを間違えているぞ。向こうで皆がお待ちかねだ」。そして強力な軍人が大佐イエナッチュの腋に自分の腕を押し込んで、遠慮なく、彼を殿方の部屋へ拉致して行った。彼はそこで騒々しい歓迎を受けた。

大佐は挨拶した。しかしその戦友の誰にも発言させなかった。「とりわけ、諸君、一点について教えて欲しい」と彼は彼らに向かって叫んだ。「何を血迷って、諸君の国境での警備を放棄して、諸君の連隊を安全なドムレシュクに配置したのか。静かにしろ、グーラー、お主は頭に血が昇っている。 — トラヴァース伯爵、どうぞ教えて頂きたい、貴殿は最も冷静だ」。

伯爵は、彫りの深いイタリア人風な風貌のまだ若い男で、表情に確固たる上品さが窺われたが、こう語った。皆、公爵死亡の知らせを聞いて、公爵の名誉を重んずる人柄が自分らの唯一の担保であったわけで、自分らの連隊の未払いの給与すべてがふいになると案じた次第です。この未払いは、イエナッチュもご承知であろうが、百万リーブルを上回るものです。この損失補填は、契約にともかく記されているように、自分らが兵士に対して身銭をきらなければならないものだとすると、自分らは完全に破産してしましましょう。これを避けるために思い付いた手段はただ一つで、皆が一致してこの手段を取ることに決めたのです。即ち、国境で警備を解いて、こう宣言する、フランスの軍財務長官が未払い分を払った後でなければ、警備にまた就くことはしない、と。公爵死亡の知らせは幸い本当ではなかった。しかしこの一步を踏み出したからには、戻ることはしない、自分らの正当な要求が聞き入れられるまでは、皆がいとも尊敬するアンリ公爵に対しても、自分らの決意に固執することにしたのであります。

公爵はこのことを耳にされると、自分らに軍財務長官ラスニエを通じて、少額の分割払い、三万三千リーブルという端金を送らせ、同時に、遅滞なく、国境の先の警備にまた戻るよう指示させたのであります、...

「そんなこと道義的に許されない」とグーラーが吐き出した。「するとこの小さな悪漢長官は、我らに毒や、胆汁を振りかけ、我らの腸を断つというとてもない脅しをかけたのだ」。

「断腸の思いだろう」とイエナッチュは嘲った、「それは他愛もない言葉だ。お主は我らの戦友のフランス語からただ悪態だけを習得しているようだな」。

「ちえっ」とグーラーは熱く叫んだ、「お主に別な言葉を教えてやろう。私一人が理解

したこの邪悪なこわっぱの汚い洒落を知っているぞ。奴は嘲って言った。公爵がわしを送ったのは、お主らを国境へ追い戻し、わしの名前通りに職務を遂行するためなのだ、と。これを聞いて私は落ち着かなかった。私は辞書を取り出した。これはパリで亡くなった兄が、一 確かに放蕩息子でな、一 唯一形見として残したものだ。それでラスニエは何の意味か。諸君分かるか。一 ロバ飼いだ。奴がまだ居合わせているとき、そのことを知っていたら、この小男を、サソリの毒も構わず、親指と人差し指の間で押し潰していたことだろう」。

この話しの間、眉を顰めて熟慮していたイエナッチュは突然、一行全員に向かってこう言った、「貴方らは、私に支払い能力があると思うか。...貴方らは、私の家政は常になかなかのものであると、承知されています。私は自分の戦利品からダヴォスで立派な家を建て、周りの美しい牧場を購入した。その上ヴェネツィアのア・マルカ商会にはかなりの額がある。これを賢い両替商は無策に寝かしてはいまい。このすべてを合わせても、勿論貴方らに足りるものではない。しかし私の信用は生きている。不足しているものを私が借り出すのも不可能ではないだろう。私は貴方らに文書契約で全額を、貴方らに公爵が借りている全額を保証しよう[虚構、Prioloが一部負担]。今日、公爵を煩わすべきではなからう。公爵は疲れて病気なんだから。然るべき時に、私が公爵に、貴方らのために、それに私のためにも弁ずることにしよう。貴方らの件は、私の件でもあるし、この件が駄目になったら、私は乞食になってしまうのだからな」。

すると猛然と話し合いが生じ、感謝や賛同や驚嘆の声が、諍い、混じり合った。騒がしい熱狂が支配的であった。

そのときドアが開き、鋭い顔、公爵の副官、ヴェールトミュラーの小柄な引き締まった姿が敷居に現れた。彼の素早い、灰色の目は、放恣な嵐のような場面を捉え、潔癖な嫌感を感じていた。彼は簡潔な言葉で伝えた。公爵閣下はトゥージュスに間もなく到着される、しかしすべての公の歓迎を固辞されている。公爵は休息をお望みである、と。

「ただ貴兄にのみ、一時間して公爵に面会が許されます」と口数の少ない少尉は結んで、イエナッチュ大佐に対して、軍人的作法にはまだ許されているわずかな須臾の挨拶をした。

第四章

イエナッチュ大佐が日没の時刻に公爵の短期休息用の住まいに入ったとき、石段を駆け上がりながら、二階の開け放たれた控えの間に、チューリヒ人の少尉を見つけた。うるさいドッグ[大型犬]の注意深さでヴェールトミュラーは無資格者が誰も侵入しないように將軍のドア番をしていた。

丁度、辞去しながら、細身の上品な姿の者が、こっそりした足音でホールを歩いて来た。公爵の私設秘書プリオロで、副官が邪悪な眼差しで追っていた。一 というのは彼は苛立った気分で、一 明らかに祝福とは無縁の静かな挨拶であった。

「この秘書は天のどの方角から来たのか」と大佐は抑えた声で尋ねた、「秘書は、公爵と一緒に山を越えて来ていないと私は承知しているのだが」。

「彼はすでに一週間前、クールへ送り出されて、最新のパリからの急報を受け取りに行ったのです。主君はそれを強く望まれていた」とヴェールトミュラーは答えた。

「急報を公爵は手にされたのか」とイエナッチュは小声で尋ねた。いつになく早口であった。彼の心は脈打ち始めていた。「決定のことを貴方にご存じか。国王の署名はあるのか」。

「私は自分への命令しか存じません」と相手は無愛想に言った。「この命令は、イエナッチュ大佐は即刻ご案内しろです」。

ヴェールトミュラーは先に、夕方の反映で照らされた居間へ入った。そこの窓は美しいハイツェン[ベルク]山の陽の当たる山腹や秋の紅葉した森に面していた。大佐は小さな出窓に近寄った。一方ヴェールトミュラーは公爵がまだ休んでいる隣室へ音を立てず向かった。

「しばらくお待ちください」と戻って来ながら少尉が怒鳴って言い、またさっさと控えの間での自分の守衛地に戻った。

一人残った者の視線は、開けられた革カバンと二通のその横の、テーブルに投げ出され、開封された手紙に釘付けになった。そこに蔵されているペンの筆致が彼の国の幸運、あるいは悲運を決定するのであった。

このとき、ゆっくりとドアが開いて、アンリ・ロアンが敷居に、青白い痩せた姿で現れた。彼は思わず喜ばしい仕草をして、このグラウビュンデンに向かって歩み寄った。イエナッチュはこの高貴な領主にすぐいそいと窓の側に深い背もたれ椅子を用意した。この窓辺で、旅で疲れた公爵の視線は、彼の山の金色の黄昏の山を見て癒やされるはずであった。公爵は今や目に著く弛緩して、腰を下ろし、澄んだ目をゲオルク・イエナッチュに向けた。それから彼は小声で、問いかける調子で始めた、「貴方はフィンスターミュンツからいらしたのか」。

イエナッチュは恐懼して、安楽椅子にもたれかかった公爵の前に立ち、まじまじとその高貴な面影を眺めた。この面影は様々な点で面変わりして見えた。重篤な病気という予期されていた痕跡の他に、彼が訝しく思ったのは、そこに黙した、絶望的悲憤の深く刻まれた特徴が、痛々しく、公爵がその澄んで輝く視線を時に沈めるたびに、浮かび上がってくる点であった。

イエナッチュは、彼が休まず努めてグラウビュンデンで結んだ条約がサン・ジェルマンで国王の署名により決定的なものとなったか是非とも知りたいと切望した。しかしこの顔に向かい合っていると、普段は何ごとにも臆しない彼も尋ねる勇気がなくなった。彼は公爵の問いかけに答えることに満足し、チロルと下部エンガディーンの間の国境画定に関し、休戦中いかに定めるか、正確な報告を行った。

「オーストリア人はゆっくりしていて、面倒です。私は引き留められ、インスブルックまで行かされました」と彼は言った。「私が国内にいましたら、閣下、閣下の命令もないのに、私の強情な戦友達が持ち場を離れることはなかったことでしょうか。トゥーゼスでの貴方への最初の挨拶が、厭わしい不服従の光景ということはないことでしょうか」。

貴方の目の前で更に不謹慎なことが起きないように」と彼は躊躇いながら結んだ、「私はかろうじて抑えることができました。私は、他に有効な手立てを思い付かず、私の戦友達に、滞っているフランスからの給与の見返りに、私の全財産で保証することにしました。私の際限のない恭順の意がご不快を招かないよう念じております」と彼は追従して言い添えた。

公爵は、ぎくっとして、一層深くクッションに寄りかかった。かくも前代未聞の、自分が欲したものでもない貢献の借金を引き受ける人間は、いかに危険な力を握ることになるものか、その考えが公爵の頭を過った。しかし公爵はその考えを述べなかった。

「友よ、私は貴方に感謝する」と彼は言った、「私自身がまだ若干有している限り、貴方に損害を及ぼしてはなるまい。案ずるに、ラスニエは、私が大佐達を宥めるために、金を持たせて送り出したのだが、大佐達とのやり取りは、的確な言葉遣いではなかったのではないか」。

「彼は大佐達を深く侮辱しております。閣下、その点、私は大佐達の味方をしなければなりません。そして彼ら同様に、彼は召還されるべきと主張します。彼が短気で怒りっばいからではなく、我らの人柄を嘲笑することがいかんというのでもありません。しかし彼が、確かな筋から聞いて知っていますが、我らの祖国が、小さな国だからと言って、そもそも存在する権利を否認している点、この破滅的主張を我ら自身のグラウビュンデンの大地で我々に投げ付けている点、我らをフランスのつまらぬ付属品として扱っている点、こうした点がグラウビュンデン人の心を逆撫でしており、このような男がこれ以上我らのパンを食い、我らのワインを飲むことは許されないことです。

ご海容ください、高貴な御領主」と彼は穏やかな調子で頼んだ、「そして彼の召還を計ってください」。 —

「ラスニエの召還は、私も腹の中で決めている。これは枢機卿が疑いもなく、計られるであろう。決定したことと考えて頂きたい。

より重要なことを話すと」とロアンは転じた。彼はこのグラウビュンデン人の祖国愛が、この弛緩の時、まぶしく思っているように見えた。「貴方はインスブルックへ行かれた。そこでは大公[オーストリア皇太子]宮廷の我々の気分について若干知り得たことであろう。オーストリア人は今一度ヴァルテッリーナで我々に攻撃をしかけるつもりかな」。

「閣下、まだ貴方の月桂冠は余りに鮮烈で、その気はありません。貴方の手が將軍の杖を握られる限り、彼らにその勇氣はありません。 — しかし」とグラウビュンデン人は深く嘆息した。「私の心の杖をすべて貴方の前でぶちまけさせてください。貴方の逝去の誤報で、またしても策謀のすべての地を這う虫けらどもが動き出し、スペイン派の我らの国外追放者どもが再び地下でうごめき始めています。これらの反吐の出る墓掘り人は、早速こう信じています。グラウビュンデンの二つの至宝、つまり閣下とその大事な自由、貴方が保証人であられる自由が、同じ墓穴に沈んだ、と。

インスブルックでは」と彼は間を置いた後、動揺を隠さずに続けた、「また貴方が再起された今でもキアヴェンナの条約を信じていません。さもないと、どうして彼らが、フランスから我らを切り離す見返りに、スペイン側から昔の国境のままグラウビュンデンの独立を提示する度胸を持ち得たことでしょうか。いや、私を卑俗な黄金で買収して、貴方と切り離そうともしました。...高貴な御領主、お願いです、貴方が、我らの間で合意され、貴方の国王が署名された文書を、すべての国民に布告して、このようなペテン策謀に終止符を打ってください。さもないとグラウビュンデン人はフランスの意図を読み誤って、スペイン人の約束に心が迷い、私どもはまた内戦の血の湖に、貴方が我々を引き上げてくださったその湖に沈むことでしょうか」。

公爵は答えなかった。彼は速やかに身を起こして、窓際に寄って、物思わしげに外の山

の風景を眺めた。その下の麓は影の中にあったが、極めて高い所にある村落はまだ陽を受けてきらきらしていた。

「いかにこの国が私の気に入っているか知る人ぞ知るだ」と彼は今やイエナツチュに向かった。「そしてこの国をまた幸せに、自由にするために、いかに好んで私がすべてを賭けていることか。だから他の誰よりも私が、貴方の嫉妬深い祖国愛についても、それが性急に粗野に、そして今日、残酷に、これはグラウビュンデンの最も実直な友に向かって正直に申し上げると、私に告げられた場合でも、最も良く理解している。しかし貴方は同時に私に対し、貴方の犠牲心や誠実さについて納得の行く証明を提示しておられる。貴方は貴方の戦友達の許で、フランスの正直さに対して貴方の全財産を投じて肩入れし、私にスペイン人達の策謀や買収の試みについて打ち明けられた。それで思うに、私は貴方に全幅の信頼を寄せていいし、どんなに難しい局面でも貴方の確かな奉公を当てにできよう。一 ゲオルク、そうして良いかな。たとえ私が貴方に多くの辛抱や自己否認を要求することになっても」。

「どうして私に疑念を抱かれるのです」とイエナツチュは情熱的に温かく言い、痛々しく咎める視線を送った。

「では赤裸に対しては赤裸に話そう」とロアンは続けて、手をグラウビュンデン人の肩に置いた。「信頼には信頼だ。話すのは辛いことだが、キアヴェンナの条約はパリから署名がないまま、変更の指示と共に戻って来た。この変更は私が同意できないもので、貴方の民に要求も提案もしないつもりのものだ」。

この悲しげな小声で話された言葉の際に、公爵はグラウビュンデン人の物言いたげな顔を見つめた。渋々話した告白の効果を測っているようであった。その顔は動かなかつたが、しかし次第に血の気が失せて行った。

「それでこれらの変更はいかなるものです、恵み深い御領主」とイエナツチュは短い沈黙の後、尋ねた。

「二点、肝要な点がある。ライン堡壘とヴァルテッリーナでのフランス軍駐留を、一般的な和平の時までとすること、それにこのカトリックの国土に領地を有するプロテスタントのグラウビュンデン人は、滞在期間を年に二カ月に限定することだ」。

不気味な稲妻がグラウビュンデン人の面貌に走った。それから彼はほぼ悠然と言った、「一方は我々を政治的にフランスに引き渡すことであり、もう一方は我々の所有地管理への耐え難い介入です。両方とも不可能な条件です」。

「やはりこれらは条約に記載されてはならない」とロアンは明確に言った、「私は国王に対する自分の個人的影響力をフルに活用するつもりだし、全力を上げて説得に努めるつもりだ。枢機卿には状況が決定的に深刻であると説明しよう。ジョゼフ神父の始末に負えない介入を阻止するために、何でも試みることにしよう。察するにこの神父が、我らの小麦の下に雑草を植え付けている張本人と思われるからだ。このカプチン派僧侶が欲しがっている恥ずべき赤い帽子のせいで、この赤帽のためなら、他の権力の勝手になるはずがない政治において、教皇へ配慮すべきであるとされても、一人のロアンの約束が反故にされてはならない。すでに私は私の有能なプリオロをパリに、国王自身宛てと枢機卿宛ての至急便を持たせて派遣することに決めた。明日彼は旅立つことだろう。傷付いた私の個人的名誉心のことを考えれば、まこと今日のうちにも司令権を投げ出したところだ。しかし

これは諸君達のためにできない。貴方らに対する私の愛着と、私の個人的恩誼の念が私の司令権と共にグラウビュンデンの私の後継者に引き継がれるものか、疑わしく思われる」。

「我々に対して、そのようなことをなさらないでください」とイエナッチュは驚いて叫んだ、 — 「貴方の弥栄のために、 — いや、我々の弥栄のために、 — そうなさらないでください。御身の仕事を放棄し給うな。[詩編,138,8参照]。我々を途方に暮れた深淵の中に突き飛ばさないでください」。

「だから私は最後まで耐えるつもりだ」と公爵は、明確に認知された義務から生ずる堅牢さで続けた、「しかしイエナッチュ、承知しておいてくれ。この国で私は貴方に一切を期待している。私は際限もなく信頼しているから、貴方に私の憂慮と運命に対する揺さぶりのことを打ち明けた。この運命は私が貴方の故郷にすでに確保したと確信しているものだ。これは貴方一人に打ち明けたことだ。貴方は沈黙を貫くことで私の信頼に伝えてくれると私は承知している。貴方の同郷の者達を宥めて欲しい。この者達の心に貴方は何と途方もない、いや素晴らしい力を及ぼすことか、私には分かる。期限を設けるといい。フランスへの信頼を揺るがさないで欲しい。キアヴェンナの条約は、今日はまだ告知されなくても、間もなく有効になるに違いないとグラウビュンデン人に保証するのだ。この真実を守り通すのだ。神のご加護を得て、我々は嫌な奴等を克服して行くのだから。 — 今夜にも私は更にクールへ向かう。クールまでこの国の雰囲気について直に知らせて欲しい」。

イエナッチュは公爵の手の上に深く身を屈めて、それから今一度彼の目に無言の痛みを込めて表現しようとした。ロアンはこの長い奇妙な視線に、自分の例外的に辛い運命に対する、忠実な男の同情を見ていた。彼は、このグラウビュンデン人の精神の中で、この時、いかなる転回がなされたか、そしてゲオルク・イエナッチュが、内心の重大な闘いの後、公爵から離反したことを予感していなかった。

「高貴な御領主、立派な町クールに」と大佐は、辞去しながら言った、「落ち着かれることは結構なことと存じます。貴方はそちらでは人気が高い。クールの人々は貴方を目の当たりにしていて、そしてグラウビュンデンでフランス国王の代弁者は貴方ですから、この国はフランスから最良のことを希望して止まないことでしょう」。

公爵はこの去って行く男を憂慮して見送った。不信感を抱いてはいなかったが、しかし公爵自身が、自分の疲れた心の中では見られない一つの確信を述べたように、このグラウビュンデン人も自分の奔放な気持ちの嵐を抑制していて、公爵の前ではそれを隠していたと感じていた。公爵は今しばらく、内奥では意気消沈して、悲しげに、向こうの暗くなっ
て行く山を眺めていた。ある嘆きが彼の胸に浮かんだ、「主よ」と彼は嘆息した、「何故御身は、御身の僕を、名誉の最中で逝かせなかったのです」。

第五章

イエナッチュは急いで外に出た。荒々しく諍う想念の嵐が彼の内部で渦巻いた。公爵の前でこれを抑えるのは難儀なことであった。この心の裡での戦いの間に、誰かと話さなければならない事態を彼は嫌った。目覚めている村の雑踏を下の方に見ながら、彼は薄明か

りの山の草原を急ぎ足で駆け上がった。彼は自分の怒った感情を、食んでいる馬の口へ一束放り投げるように、投げ放った。しかし彼の計算する精神は手綱を握って、自分の情緒の沸騰する諸力を、絶えず新たな、ますますより危険であるが、良く測量された軌道に導いた。

彼が生涯をかけて立ち向かった目標、日中没頭し、夜間心配して、それがために自分の様々な力を駆使して戦ってきた目標、それを求め、殺戮の迷路を重い心で、そしてここ数年は、意志を制御して、一人の高貴な、自分が思うに、その勢力圏では絶大な人物の従順な道具として、正義と名誉の安定した道を進みながら近寄って来た目標、一 今日にも自分が手で触れたこの目標が、自分の手から滑り落ちた。一 いや、自分の眼前で沈んだのであった。というのは一つのことを、自分の魂の前で、恐るべき明瞭さで記されていたからである。グラウビュンデンは、フランスの弱い国王を支配し、国王の内政、外政を随意に導いている圧倒的で良心の欠けた精神の意図に従属して、一般的和平の時まで運営されるならば、決して解放されないであろう、と。その和平の時には、リシュリューによって、意のままになる諸州という塊に分割され、他の交換対象物と混ぜ合わされて、彼の哀れな故郷の避けがたい運命は、和平締結の諸国売買人達によって、市場に出され、あれこれの有利な取引を申し出る者に分配される定めである。

公爵にこの咎はない。彼はグラウビュンデンを愛し、ここを解放しようと思った。しかし公爵は、公爵を悪用しようとする枢機卿の意志に立ち向かうに、十分強くない。彼は一人の競争相手、良心という歯止めを有しないこの相手と敢えて競うことをしない。彼はリシュリューが名人芸を見せるかの最も有効な武器でライヴァルと戦うことを恐れている。

一 このロアンが子供っぽく蔑んでいる武器を手取ることはできないものだろうか。獵師その者に一つの罟を仕掛けることはできないか。

公爵が実現しようと思った人間的正義は何の価値があるか。現世の正義に名誉をもたらし、それに報いる原像、神々しい正義はどこにあるか。両方とも徒な夢だ。敬虔な阿呆だけがそれを信じよう。...公爵は十分に虚けでこう思っている。枢機卿は強大な者が弱者に約束した言葉の有効性を承認するであろう、と。彼は十分に阿呆でこう思っている。ユグノーのために内戦時抜いた剣のことを、いつかリシュリューが忘れ、許してくれるであろう。戦争で手柄を立てたら、強力なこの宰相の憎しみを消すことができよう、と。...公爵はとても盲目で、まさに彼のフランスの名誉を高めた英雄的行動が、嫉妬深い猥下によって、公爵を疑い、公爵を排斥する一つの理由以上のものになっていることを見抜いていない。

しかしこのキリスト教徒的騎士は、どこに到達するのだろうか。彼は深淵の縁に立っている、彼は失われた男だ。...そこでイエナツチュは、このとき、公爵が欺かれた男、敗者であるが故に、公爵を憎んでいた。しかし憎めようか。彼自身、実際、この高貴な人間像に対し賛仰の愛の気持ちを抱いて幻惑されて来たのだ。自分を感動させた純なる志操という価値は、枢機卿の計算の中でも一つの数であると信じていた。...いや、多分リシュリューはこの数で計算したのだ。一 抜け目ない漁師が自分の餌を数えるようなものだ。一 そしてイエナツチュ自身が、一 いや彼だけではない、一 彼は絶望に襲われたが、一 自分の祖国がこのペテンの犠牲者なのだ。

ひょっとしたらまだ救出は可能かも知れない。今やすべての有害な躊躇いを棄てるべき

だ、すべての感謝の絆、すべての愛による感動を、純然に保たれた性格というすべての利己心を棄てるべきだ。過去を切り捨て、その好ましく思われた確信や偏見の足かせを外すべきだ。感謝や誠実さという縛りはすべて解かれるべきだ。

今やイエナツチュは、危機の感情で鋭くなった精神を基に、フランス政治の蛇行や打算に没頭した。ロアンが彼に打ち明けた或る危惧は、枢機卿の思考に対する一つの鍵を見いださせた。「仕方がない」と彼は自らに言った、「リシュリユーはこのプロテスタントの將軍を、この自ら欺かれた男が我々を率直に騙すことが出来る限り、我々に残すことだろう。公爵への信頼、あるいは我々の信頼が消えたら、リシュリユーはこの公爵を突然召還し、キリスト教徒的信義の者に代えて、彼の息のかかった兵士で穴埋めすることだろう。...しかし私はこのユグノー的名譽を足場にしてみよう。この岩に立てこもるのだ。この立派なフランス人の担保を掴んで離さない」。...そして彼は鉄のような拳を握り締めた。これがどうしたら可能か、彼は考えた。一　すると彼の魂から一つのユダの考えが浮かんで、突然自分の顔間近に、醜く現れ、彼は身震いした。しかし彼は納得した。微笑と共に自らに言った、「善良な公爵は私のことを見抜けないことだろう。主がユダを見抜けなかったように」。

すぐに彼はこの純粋な男への裏切りから視線を逸らした。自分は裏切りを行えるだろうが、裏切りを考えたくない。

彼は向こうの遠方のフランスへ目を向けて、偉大な枢機卿に対し、彼の山国の柵内での決闘を申し出た、一对一、策謀対策謀、不埒対不埒の決闘である。

そして彼の心は荒々しい歓喜で燃えた。グラウビュンデンに、抜け目ない猊下に対し引けを取らない者が一人出現したからである。

このようにイエナツチュは倦まず考えを巡らせて、すべての可能性の範囲を検討した。彼は道に注意を向けていなかった。今や彼はすでに、最も近い、谷を下って行く村の中、長い墓地の壁沿いに急いでいたが、その時、素足の百姓の子供が、彼の長い歩幅の側に急行して来るのに気付いた。小さな娘はとうとう一通の手紙を高く持って、恭しく差し出しながら、恵み深い大佐殿へとベルペーチュア尼僧から頼まれたのです。尼僧は大佐が尼僧院庭園の木戸を通りかかるのをご覧になったのです、と言った。一

大佐は周りを見た。ここはカーツィスであった。彼は小さな娘と別れて、運命の女神の指に触れたかのように、すでに明かりの点されていた村の路地へ折れた。彼は最後の黄昏時の明かりの中、封筒に昔からの友、パンクラーツ神父の筆跡を認めることができるように思った。地階の窓辺には灰色髪のおばさんが吊りランプの明かりの下、糸紡ぎをしていた。彼は外の石壁に寄りかかって、乏しい明かりを紙片に当てて、読んだ。

「有為な大佐殿、

貴方と我らの国にとって重要であると思われる若干のことを敢えてお伝えします。キアヴェンナの条約は、パリの枢機卿猊下が我々に見せかけている儂い騙し絵です。これはすでに以前、コモ湖畔の私の修道院でたまたま耳にした会話で推察していたことでしたが、ミラノに滞在して以来、これは確信に変わりました。

葡萄摘みの直前、向こうのコモ湖畔で、フランス人の教団会士が宿泊しました。雄弁な説教師で、疲弊した肺の回復のためと、永遠の安息のために、一　これには我々すべて

に神のご加護が祈念されますが、　ー　ローマへの途次にあるのでした。食堂での夕食の時、修道院長が会士と共に世の出来事を嘆き、ヴァルテッリーナがキアヴェンナの条約でまたグラウビュンデンに併合されることを残念がっていました。『その件は心配いらない』とこのフランス人は述べました。彼は善良なるグラウビュンデン人が食卓にいることを知らなかったのです。『この条約が一ソルド[イタリア貨幣]の価値もないことを私は最良の筋から聞いて承知している』。　ー

拙者がパリで拙者の出発前に、拙者の修道院長、ジョゼフ神父に暇乞いをしたとき、丁度神父と教皇大使が上述の条約の草案を吟味している最中でした。教皇大使は厳しくそれに異を称えていました。しかし激したジョゼフ神父はその書類を拳の中に引き掠って、ボールのように丸めて、隅に投げ、こう言いました、『一人の異端が異端の者達とまとめた条約だ、無効でしかない』と。　ー

私は音も立てず静かにしていました。しかし色々考えました。ジョゼフ神父が何ものか、貴方が私よりもご存じでしょう。

私が教団の仕事で十日前から滞在している、ここミラノでは、私は昨日知事の宮殿に呼ばれて、その召使い達の良心に、この邸宅内での窃盗に関し訴えました。その時この公爵は、私がグラウビュンデン出身と知って、呼び寄せ、半ば冗談、半ば本気で私に言いました、『パンクラーツ神父、今貴方を眼前にしているように、イエナツチュ大佐の実物を眼前に見たいものだ。この分別ある男にこう教えることは簡単なことだろう。つまり、キアヴェンナの条約は腐った羊皮紙でしかなく、貴方らにフランスはヴァルテッリーナを決して返さないし、スペインは貴方らに、全く別様な景色になるような、条件をグラウビュンデン人に提示するかもしれないぞ、とな。　ー　パンクラーツ神父、貴方は盗まれた印章指輪を取り返して見せてくれた。貴方がイエナツチュを、私が交渉相手にできる唯一のこの男を、同じように静かな迅速なやり方で、この小部屋に連れて来るなら、貴方らの側でも奇蹟のようなことを体験できることになろうぞ』と。　ー

それで、貴方にこの珍しい話しを知らせようと思いついた次第です。

貴方が現れたら、私は当分の間ミラノにいますし、貴方がこの方以外誰とも会わないよう、手配しましょう。貴方が不幸にして、故郷を離れられないのであれば、全権委任者を送っていただきたい。しかしこれは、そのような男がいるとしても、貴方が自分同様に信頼する男です。

私の出しゃばりを寛恕されたい、そして遅滞なく進められたい。

我が大佐殿の現世での幸運と永遠の安寧を毎日祈念しながら、

パンクラーツ神父」。

カプチン派僧侶のこの書状を読んで、人間通で賢く、用心深く抜け目ないこの男のことは良く承知していたので、この知らせの重大さと真剣さを見誤ることはなかったが、瞬時に、首が絞められそうになる窮屈な隘路が思い浮かんだ。ひょっとしたら意気阻喪したひどい折に、彼の視線はすでに早くからしばらくそこに迷い込んで引かれたかもしれない。しかし軽視する気持ちを奮い起こして、再三自ら驚きつつ、反吐と共にその視線を転じた。スペインとの同盟は、危険と恥辱のこうした道であった。これは彼の幼少来、若い心が全力を挙げて憎んできたかの力であって、この力に対し、その後大胆な青春の度胸でもって、

ほとんど狂気じみた、どんな蛮行をも恐れない情熱で戦いを挑み、この力に生涯不倶戴天の敵として対峙して来て、その利己的な不忠の政治を今日でも深く軽蔑しているのであった。 — その力が彼に手を差し出している。彼はこの手を握ることができよう。 — 誠実に、信頼してではないが、 — しかし多分にこの手を借りて、フランス人の罠から抜け出し、この罠を突き放すために。

今や彼はそうする決心をした。

ゆっくりと彼はトゥーゼスへの暗い軍用道路を戻って行った。過去の一切から手を切ることは難しいことであった。自分自身がそうすると人生の深みの中で破裂することを承知していた。ドムレシュクのライン川の向こうにシャーランスの小村があって、その貧しい牧師、彼の敬虔な父親が、彼を真っ正直に、簡潔に育て、彼をプロテスタント的信仰の誠実さへと促し、スペイン人の誘惑を憎むようにと警告したのであった。そこから遠からぬ向こうに、リートベルクの塔があり、そこで彼はルクレーツィアの父親を、この、子供時代彼に好意的であった父親を、夜間襲い、気まぐれな処刑裁判官として、この誠実な少女の「ジョルジョ、注意して」に劣等に報いて、残酷に撲殺したのであった。向こうで微光を発しているのは、孤独なルクレーツィアの明かりの点された窓であった。

するとまた彼の想念は新たな軌道へ滑って行った。彼自身はセルベッローニの依頼を受けたパンクラーツの至急の呼びかけに応ずることはできない。自分は誠実さの仮面を着けて悪辣なデーモンとして公爵の側にいなければならない、邪推の番人として、公爵の動きのすべてを観察して、どんなことがあっても、この疲れた病人公爵が司令権を最後リシュリュウの手に渡さないよう阻止しなければならない。

しかし誰が自分の代わりにセルベッローニと交渉できようか。勿論彼が自分を信用するほどに信用する他人に限られる。しかしこの男は存在しない。 — 今一度彼はリートベルクの窓の方を眺めた。素早い考えが、彼の頭を過った。そして一瞬熟考した後、明瞭な決心が確定した。

彼は素早い足取りでトゥーゼスに戻った。宿の前では一群れの市場の人々が、黙って重苦しい気分で立っていた。彼と公爵からの幸いな知らせを待っていたのである。ルグネッツの老人が暗闇の中、固まっていた人々の群れの中から出て来て、皆の気持ちが不安に思っていることを問いかけようとした。

しかしイエナッチュは彼に語らせなかった。

「親愛なる同郷の諸君、聞き給え、そしてその立派な胸に収めていてくれ給え」と彼は良く通る、しかし潜めた声で叫んだ、「冬が戸口まで来ている。諸君は村々で静かにして、春を待つしかない。三月の雪解けの季節になったら、準備して、正義の武器を取るのだ。私は諸君を或る日クールに招待する。時刻や合図については、今後連絡する。そこで我らは神の名において、三つのグラウビュンデンの州が昔からの自由を再び取り戻すようにするのだ」。

人々は厳かに沈黙して聞き入っていた。イエナッチュが終えた後も、静寂がしばらく続いた。それから人々はこの件をひそひそ解釈し始め、やっと夜遅くになって家路に散って行った。

彼は、この人々に語ると、もはやこの一同の中にはいなかった。グラー大佐が彼を迎

えに来て、今や将校達のいる客室で、一枚の紙片とインクに浸されたペンが彼に差し出されていた。

「これは証文だ、一 軍人流に簡素なものだ」一とグーラーは言った、「貴公が今日自慢してくれた高貴な度胸を有するものならば、こん畜生日、これに署名してくれ」。

話しかけられたイエナッチュは明かりの下に立って、読んだ、「グラウビュンデンの連隊の滞っている給与がフランス側から支払われない時には、グラウビュンデンの大佐達に対しその額を、全額であれ、残余であれ、最終署名者が、そのすべての不動産、動産で保証する」。

イエナッチュはペンを執り、二つの単語、「フランス・側から」を消してサインした。

第六章

ペルペーチュア尼僧は、とても重要なものとして自分の知恵に託された不在の聴罪師の手紙を無事預けた直後、彼女は、薬草籠を腕に、手には小さな角製ランタンを持って、ジルス村近くのライン橋を小走りに渡った。橋の向こう側に修道院は一つの農園を有していたが、その請負人が病気で臥せていた。薬草に詳しいこの尼僧は、今日、修道院の学校に通っている彼の子供の一人を通じて、熱病で衰弱したこの男に対する助言と救助を求められていた。尼僧は夜間の通行を恐れていなかった、一 ほとんど気にせず、それで尼僧は、この病人が尼僧の訪問を喜び、感謝すると、また橋と自分の修道院に向かうことをせず、暗いけれども、自分には馴染みの通りを更に、リートベルクの宮殿の明かりが微光を発して見えている方向へ急いだ。

早速尼僧がドアをノックすると、老ルーカスがぶつくさ言いながら開けてくれた。そしてすぐその後、尼僧は古風に飾り気のない、しかし可愛く照明された部屋の中、高貴な女領主の隣り、秋の暖炉の炎を前に座っていて、自分の僧衣の夜露で濡れた裾を乾かしつつ、黙しがちなルクレーツィアに対して打ち明け話をして楽しませていた。

神父の書状、この神父の説得力をこの尼僧は高く評価していて、それにカトリック修道院の木戸前で大佐をチラと見たこと、大佐がああ小さな素足の使いの娘に渡したきらきら光る金貨、こうしたことが尼僧の敬虔な想像力の中で活気付いた。こうしたことすべてに使喉されて、いかなる思考連鎖の故か神のみぞ知ることであるが、すぐさま令嬢の許に夜間訪問をして、この出来事を事細かに話す気になっていた。大佐はまことに良心の呵責に苛まれたカインの如く、神聖な駆け込み避難所の石壁の周りをさまよっていましたよ、と彼女は述べた。神様がこちらで大変な奇蹟を準備されて、このカトリック信仰の不倶戴天の敵を、異端どもを恥じ入らせようと、唯一成聖のカトリック教会の懐へ導くことになっても、私はただ賛美歌を歌い、敬うことでしょうが、しかし驚きません。

これに対してルクレーツィアは、彼女の物静かな流儀で、ただ悲しげな微笑をして答えていたので、敬虔な尼僧は熱意を募らせて続けた、「親愛なるお嬢様。この強大な罪人が改宗するかもしれないという至福の見込みに対し、冷淡に不信仰であってははいけません。むしろ祈ることです。この前代未聞のことが、生じますように、と。というのは、ルクレーツィア御令嬢、貴女は自然な人間として、血なまぐさい男を憎み、避けられましようから、貴女の祈りは、勿論至聖の者達には格別の効き目があって、特に痛々しい犠牲として

喜ばれましょう。勿論貴女が修道女、神の花嫁として、三重の誓言を通じてすべての世俗の思い出を断ち切ったお心で、この祈りを捧げられますならば、もっと力強いものとなりましょう」。

ペルペーチュア尼僧はこのことを深い嘆息と共に言って、返事を期待して、炎のように燃えていたが、返事はなかった。いや、尼僧は見逃していなかった、尼僧が断固信じていたルクレーツィアの修道院生活は、相変わらずルクレーツィアにとってはっきりしたものにならず、いやこの孤児の令嬢が父の家に移って以来、またしてもはるかに遠のいてしまった、と。令嬢は、この戦時下で荒廃した人心の宮殿の召使い達の下、貧窮化して、フランス人の圧政に対する嘆きを毎日彼女の耳に告げる村人と共に、孤独に暮らしていた。明らかにこの孤独は彼女にとって好ましいものではなかった。ルーカスがいたが、彼は灰色髪になっても復讐心に燃えていて、殺害の壁の箇所黒い十字架を色落ちさせずにいて、相変わらず鋭い刃先の殺害の斧を、聖遺物のように虫の食った櫛の長持ちに丁寧に保管していた。この令嬢は、と尼僧は嘆いた、ますます深く自己沈潜して、自分の情緒に全ての面から絡みついて、全ての新たな生命の息吹を窒息させる思い出の中に沈んで行くに違いない、と。令嬢は、古いものと新しいものを区別している隙間を克服できない。令嬢はほとんど現実世界に生きていず、精神の中、亡き父親と交流している。令嬢は亡き父親の情緒を継承していて、年ごとに顕著に令嬢の外見も一層父親に似て来ている。同じ形姿の立派さであり、同じ気位の高い姿勢である。彼女の伯父、ルドルフ男爵は国外追放の中で死亡し、彼女には伯父の浅はかな利己的息子の他には近い親戚がいない。彼女の母の一人の縁者の女性がまだクールに暮らしていて、彼女はよくこの女性を訪ねている。しかしこのトラヴァース伯爵夫人は、辛い運命と長寿により化石化していて、立派にカトリック的であるが、ほとんど過ぎ去った昔日の鈍い木霊でしかない。ルクレーツィアがフルステナウのユヴァルタ家やその他の近隣宮殿の貴族と交流しないことを、勿論ペルペーチュアは咎めることができない。というのはこれらは皆プロテスタントで、フランス人の党派に属しているからである。かくてルクレーツィアは全く一人っきりになっている。何故彼女は自分の陰気で孤独な生き方を止めないのか。何故彼女は聖ドミニクスの謙虚な尼僧達の共同体に入らないのか。

この尼僧がこのように自分のいつもの思考過程を急ぎ追っている間に、ルクレーツィアは黙ってその紡錘を回し、別の思考過程を追った。

彼女は自分の心に問うていた。ユルクが彼女の心や理解力から、今ほど隔たっていると思われてしかたないのは一体どうしてだろう、つまり彼が国の参事会にいて、フランスの公爵の軍勢の中、貴顕氏の一人として数えられている今ほど、そうなのはどうしてだろう、彼の最も野蛮で残忍な時代でさえ、これほどではなかったのに。

彼女は故郷に帰ってから二回、ゲオルクを遠くから眺めた。クールの彼女のおばさんを訪ねたときであった。ある晩、彼女はこの老レディーの背もたれ椅子の側に立って、窓の格子籠の鉄製葉飾り越しに外を眺めた。陽光が丁度広場の舗石を去って、わずかに市場の泉の噴水を照らしているときであった。大佐は向かい側に並んでいる家並みに沿って、その上手や下手を重々しい役所の人物と一緒に歩いていた。この役所の人物は、彼の唇から漏れる一言一言を貪欲に注意深く聞いていて、彼の主張に賛同して頭を頷かせながら付き合っていた。重大な訴訟事件に関連しているように見えた。

別な折、この大佐はフランス人の貴族達の一団に囲まれていた。彼は、昼食の後で、素早く陽気な冗談を交わしながら、彼らと付き合っていた。――しかし常に明るく彼の口から響いて来て、彼の額はとても機知豊かに輝いていて、彼は全ての成功の道を切り拓き、平坦なものにする術を心得た、かの稀な幸運の寵児達の一人であるかのように見えた。過去と変更できないものを煩わしい足かせの如く投げ棄てる一人である。

今、私には分かるわ、――と彼女は自らに告白した、――この八方美人の友は、もはや私の愛したユルクではない、――黒っぽい黙した目の内気で大胆な少年、私の守護人であった少年ではない、――洗い流す荒々しい山岳小川のように私の幸せを瓦礫にする怒って濁流となる男ではない、――私が私の復讐の夢の中で、自分の手で打ちかかろうとする男ではない、――私が嘆きの数年の後、ベルナルディーノ峠で再会したと思ひ、両腕で抱き締めた誠実な男ではない、――違う、これは如才ない廷臣である、計算高い政治家になってしまっている。...彼は私から別れようと思って、手切れ金を渡したのだ。だから私にこのリートベルクを返した。彼は私のことを、非難を恐れるように避けている。死んだ女の顔のように、私の顔から逃げている。――そして彼女は、自分の家の敷居を彼が二度とまたぐことのないよう自分が脅して彼に頼んだことを忘れていた。――

「聖母様にかけて、一体何の騒動です」と今やペルペーチュア尼僧が発した。というのは宮殿のツイヴィンガー[庭]で城の犬どもが猛然と吠え立てたからである。犬どもを宥める下僕達の叱る声が聞こえた。その間に門を叩く音が反復され、ルクレーツィアが窓を開けると、ルーカスと門を開けるよう求める支配者然とした声の男の間でのゆっくりと慎重になされた交渉が聞こえた。

するとこの老ルーカス自身が極めて狼狽した表情で現れた。彼の岩のように頑丈な面貌には珍しいものであった。「御令嬢、貴女と二人っきりでの話し合いを求めています」、...と彼は言った、「イエナツチュ大佐です、罰当たり者が、...」と彼は小声で、内心憤然として付け加えた。

ルクレーツィアはすっと、青ざめて立っていた。彼女は中庭への門前の最初の声で見分けていた。

「待たしてはいけません。こちらにお通ししなさい」と彼女は老公に命じた。老公は彼女を問うように見つめ、躊躇いながら従った。

尼僧は立ち上がって、深い窓の壁龕に静かに見守る姿勢でいた。そのベンチに尼僧の夜間外套があった。尼僧はそれを直したが、着用はしなかった。

速やかな足取りが近付いて、ゲオルク・イエナツチュがルクレーツィアの前に、決然とした喜びの表情をして、彼女に久闊を叙した。大いに恭しいものであった。

ペルペーチュア尼僧は敬虔な素朴さを装っていたが、半分閉ざした目の極めて鋭い視線でこの偉大な二人の形姿を観察していた、――そして彼女は不思議がっていた。

大佐の高く広い額にカインの印は何も見つからなかった、――そして、――珍しいことに、――プランタ嬢は彼の側に目を輝かせて、大胆に反抗的に、かつてのポンペウス氏のように見つめていて、その強力な敵の高みに引けを取らないように見えた。

ペルペーチュアが切望していた会話は、しかし、始まらなかった。宮殿の女領主はルーカスに向けて言葉を発した。ルーカス威嚇的表情でドアの所に立ち止まっていた。「敬虔なる尼僧はお帰りです。夜は暗く、道は遠い。少なくとも老朽化しているライン橋の向こ

うまでお伴しなさい」。そう言って令嬢はペルペーチュアから懇ろに別れた。

かくて尼僧は、いつの間にか中庭の門に立つことになって、ルーカスがピッチの松明に火を点して、この煙る明かりを手に、尼僧を先導して夜道を進んだ。「丁度の時に、令嬢は私を追い出される」と彼は聞こえよがしにぶつぶつ言って、敬虔なる尼僧に訴えるようであった、「まさに然るべき時、所だったのに」。

イエナッチュは令嬢と二人っきりになって、令嬢に向かい合って窓辺に座ると、手短な明瞭な言葉で始めた。

「ルクレーツィア、私が貴女の父親の家に足を踏み入れて、貴女は当然驚いておられよう。しかし私がこちらへ来て、自分の心の奥底に蔵している願いを述べても、それは貴女の心を迷わすためではないと信用していただいていると思う。さもないと、貴女は、リートベルクのこの城内では平和が回復されている時に、私を中へ招じなかったであろう。

— しかし私が来たのは、若干やはり貴女に頼み事があったからで、— 大きな仕事なのだ。貴女が、私の推察している通りに、また私自身と同様に、我らの国を愛しているならば、この大きな仕事を貴女に果たして貰いたいのだ。というのは、私の代理で行動しなければならないからだ。— 私はスペインと一つの同盟を結ぶ。これが我らの唯一の救いだ。リシュリュウは我らを裏切り、善良な公爵は彼の玩具になっている。公爵は、—

良心のないリシュリュウが我らを欺く手段にしている美しい見せかけに過ぎない。しかしこの救助の綱を結ぶのは誰だ。— 私自身はここを離れられない。私は私の民に、彼らに降りかかってくる危険を察知させ、私が担保として押さえている公爵に、恭順な私を見せて、公爵を眠り込ませなければならない。...スペインの敵である私がこの毒に手を出すので、驚いていよう。...不思議に思うことはない。私は自分の過去を壊し、古い自分を自分から棄てなければ、自分の国を救えないのだ。グラウビュンデンが失われてしまう。セルベッローニは私自身を待っている、あるいは私が自分同様に信頼する者を待っている、—

— 彼が言うには、私がそんな者を知っているならば、と。— 私はただ貴女だけを信頼している」。

ルクレーツィアは炎に照らし出された旧知の顔に疑念の問いかける視線を向けた。そしてそこに極めて緊迫した実行力と恐るべき真剣さとを読み取った。

「イエナッチュ」と彼女は言った、「私の父がどの党派であったか、どうして、何故死んだのかご存じでしょう。私が父をいかに愛しているかご存じでしょう。私は父の考えと同じでない考えを決して歓迎できなかった。それでフランス人の本性は、— 故郷喪失者の私に対する公爵の父親らしい親切は別にして、— 私にとっていつも縁遠い、見知らぬものでした。フランスに対して居心地良く感じたことはなかった。でも貴方は昔からスペインとは多くの流血の惨事のために距離があった。それにユルク、貴方の命と名声は善良なる公爵のお蔭です。公爵は貴方に信頼を寄せておられ、公爵の私どもの故郷に対する衷心からのご好意をご存じです。— 公爵のことが嫌いになったのですか。... — 故郷のために良かれと思ってでしょうが、— 絶えず新たなことを目指して、— 古い自分を蛇の皮のように投げ棄てたら、それで没落しないで済むのかしら」。

「ルクレーツィア、そなたに公爵が問題になろうか」と彼は叫んだ、「他人のことを心配して何になろう。そなたはあらゆる辛酸を嘗めた後も、私自身がそなたとそなたの家に対して犯したあらゆる不埒な行いの後も、まだそのような優しい心遣いを見せるのか。...

そなたの周りを見てみろ。...我らの溪谷のすべてに瓦礫や焼け跡がみられる。こちらに平和があってはいけないのか。こちらに自由と法が戻って来てはいけないのか。公爵は我々を救い出せない。公爵は敬虔で無垢の礼服を汚したくないのだ。しかし私も神の言葉を有している。主のお話では、一 天は主のものである、地上の場は、人間の子に委ねる、[天は主のもの、地は人への賜物、詩編115,16]と。...ルクレーツィア、思わないか、我ら皆、この内戦下で生まれた者は、不遜で、咎ある種族である、と。...その上、不浄な種族だ。向こうでは兄弟同士が殺し合い、こちらでは互いに愛し合い、縁のある二人の間に、二人を引き裂く一つの死体がある。それ故、我らは、我らの運命よりも卑小であってはならない。私は舵の所に立っていて、グラウビュンデンの小舟を岩礁を縫いながら、夙に流血甚だしい両手で操っている。一 権を一つ取って、私を助けてくれ。今は私のことに疑いを挟まず、私を助けてくれ、ルクレーツィア」と彼は彼女に迫った。

「私にどうして欲しいと仰有るのです」とグラウビュンデンのこの女性は言った。彼女の両目はやる気が出て、煌めき始めた。

「ミラノへ行くのだ」と素早く、喜んで彼は漏らした、「向こうでパンクラーツに会うのだ。彼がそなたを知事の許へ案内することだろう。セルベッローニはそなたを小さい時からありのまま知っている。彼と共に、私がそなたのために書き記すことになる条件のことで交渉するのだ。私に何か報告するときには、神父を通じてすればいい。神父がそなたを助けるであろうことは、何が起きようとも確かなことだ」。

「本気なの」と彼女はびっくりして尋ねた、「私をあなたの代理人としてイタリアへ送るとするのは。政治の迷路の中、どうして迷わないように進んだらいいのかしら」。

「そなたが出来ることしか」と彼は勇気付けた、「それにその他そなたにやれると信頼していることしか頼まない。そして私のことは秘密にしなければならない。これは場合によっては命をかけて守らなければならない。そして交渉のときは、私の条件から寸毫も譲歩してはならない。ちなみに正直なパンクラーツがそなたに的確な助言をしてくれよう。私にインクとペンを貸してくれ。そなたが守るべき要点を記すことにしよう」。

ルクレーツィアは立ち上がって、塔の部屋の枝の多い胡桃の木で化粧された奥の壁に向かった。そこで羽目に技巧的にはめ込まれていた写字台の平面をフォーク状の鉄の支柱に下ろした。大佐が書き始めると、令嬢は注意深く彼の肩越しに覗いていた。

「ルクレーツィア・プランタ嬢、私の全権委任者は、セルベッローニ公爵閣下と、私に代わり、以下の条件を土台に交渉することになる、即ち

知事殿は一万人以上の兵力をヴァルテッリーナの入口、フエンテス要塞に配置する。

知事殿は、インスブルックで、オーストリア皇帝側が同規模の兵力をグラウビュンデンの北の境界、フィンスターミュンツ近郊とルツィエンシュタイク峠に進めることを宮廷と取り決める。

両軍の指揮者は、イエナツチュ大佐に従うものとし、グラウビュンデンの大地には、この大佐の文書による指示がない限り入らない。

イエナツチュ大佐はスペインに対する責務として、一年以内にすべてのグラウビュンデンに駐留する部隊を、一兵も残さず退却させるものとする。

これに対して、スペイン国王は、三つのグラウビュンデンの完全な独立を、旧来の国境

のまま、承認し、保証すると約束する」。

今一度イエナッチュは乾いて行くペンの筆跡を眺めて、それから自分の完全な名前を文書の下に書いた。[ルクレーツィアの全権委任は虚構、Schorsch大尉の仕事か]。

彼は途方もない行為の全貌が明確になるにつれ、秘かに震え、自分を救うことになるか、破滅させることになるか、呪文で呼び寄せたデーモンに対して震えるような按配であったが、令嬢は、紙片越しに彼の視線を追いながら、その実用的面が自分に直感された活動のことを、予期されるよりも速やかに自分に納得させていた。彼女にとって、これは迅速な、明瞭に計画された、ひょっとしたら流血をみない奇襲のここのように思われた。これはあっさりした性情の彼女にとって、複雑な策謀の網の紐を手にとって、まとめるように頼まれるよりも好ましいものであった。

イエナッチュが全権委任状を折りたたんで、令嬢に渡した瞬間、老城代が敷居に現れた。彼は出来るだけ急いで帰って来たのであった。大佐は彼に、自分の黒馬を引いて来るように命じた。

「この灰色髪の熊公を旅に連れて行くのを忘れるな、ルクレーツィア、彼の忠誠は揺るぎなく、彼の前足はまだ危険だ」と彼は好意的に言って、飛び起きて、窓辺に令嬢と共に寄った。彼は去るのを躊躇った。「夜が澄んできた」と彼は外を見て語った、「いつ旅立つつもりだ」。

「明日夜明け前に」とルクレーツィアは答えた、「まずパンクラーツを通じてお知らせしましょう、ユルク、あなたは偉い殿方になりました。 — カプチン派僧侶や女どもがあなたの使い走りをするのだから、大したものですよ」。そして涙が彼女の目から溢れた。

この半ば冗談の、半ば悲しげな言葉はまた全く、幼い日々のルクレーツィアにふさわしい言葉であった。彼女は彼の側に立っていて、より背が高く、堂々としていて、山々の息吹を浴びて、褐色な健康色へと新たに花咲いていた。夜風で彼女のこめかみの巻き毛が揺れた。それは天辺の太くて濃いお下げ髪の束から解けたものであった。そして彼女の輝く目は、澄んだ威力を帯びていたが、これは南方の物憂い空の下では栄えない類いのものであった。

昔からの愛しい思い出が彼の中で目覚めて、彼は躊躇わず、彼女を抱いた。

「あちらの下で一緒に遊んだのが、遠い昔のことではないかのようだ」と彼は優しく言って、下のリートベルク城の庭園の秋の風で微かにそよぐ木々を示した。

彼女はぎくとして縮み上がった、 — 彼女の父親が彼女の前に姿を見せた、 — そして彼女は、ユルクから離れて、外の暗闇を見つめた。

「ハイツベルクに沿って通りに行く明かりは一体何かしら。葬列かしら」と彼女はライン川の向こう岸を指して尋ねた。

イエナッチュは鋭い視線を向けた、「あれは夜陰にクールへと下って行く公爵の松明だ」と彼は言って、今一度彼女の濡れた両目を見て、それから素早く彼女の手に接吻をして、そして去った。

第七章

アンリ公爵はクールでは騎士のフォルトゥナートゥス・シュプレッツヒャー博士[1585-1647]の立派な家を宿営地に選んだ。学識あるこのグラウビュンデン人は喜んでいそいそとこの家を公爵に用立てた。というのは以前から、高貴で歴史的な人物に近付いて、このような人物と自分の歴史著述に有益な交流をすることが彼の野心でもあり至福でもあったからである。

公爵家の家政が共和主義の山岳の国で可能な限りその身分にふさわしく、部屋数の多い貴族の邸宅の最良の部屋部屋でようやく整備され、一連の陰気で嵐のような日々が過ぎ去った後、雪が重たい雪片となって舞い落ち始めた。冬は早期に始まって、白い覆いが古い司教の町の急傾斜の屋根や地味な段々の切妻の上にはほぼ休みなく積もって、二月末、フェーンの嵐が国を一掃し、三月初旬、太陽が力を発揮するようになるまで続いた。

冬は善良な公爵を閑暇に強いて過ぎて行った。公爵はヴァルテッリーナにいる自分の軍とは山々の不動の雪によって隔てられ、フランスの宮廷との彼の交流は停滞し、何の合意にも達する気配がなかった。他の憂慮や不確かな点に混ざって、条約の仕上げに関する憂慮もなく、更に將軍の日々の精神を蝕む閑暇の強制もなかったならば、公爵はシュプレツヒャー家において満更でもなかったであろうし、自分の簡素なプロテスタント信仰の同胞達と一緒に、交流は楽しかったであろう。

シュプレツヒャー博士はロアンの居合わせることを自分にとってとても光栄なことを感じていた。偉い客人の履歴に関し、原典に当たりながら描写することが許されるという長年の夢が叶ったのである。極めて親切に愛想良く公爵は、自分のホストに日々自分の運命の断片をイタリア語で語ることを厭わず、この言語で博士も一つの贈り物となる伝記をまとめた。というのはこの高貴な客人ははっきりと公爵夫人とロアンの娘に対する贈り物の伝記を望んだからである。夫人は相変わらずヴェネツィアにいて、娘マルゲリットはベルンハルト・フォン・ヴァイマルと婚約していた。シュプレツヒャー博士は自分の良心的で素晴らしい仕事に対するこうした喜ばしいものの私的な使用目的について、全面的に同意してはいなかった。彼はむしろ公爵の名誉ともなり、著者にとっても不名誉とならない伝記を、謙虚さの擬態抜きに、さっさと印刷して永遠化し、世の中に送り出したかったことであろう。

公爵の副官、若いヴェールトミュラーは別な風に活動した。休みなく彼はこの小さな町の高貴な地区、低俗な地区を隈なく回った。またたくうちに、彼はクールで馴染みの人物となった。上は司教の宮殿に始まり、ここで彼はその鋭い眼差しと意地悪な弁舌故に煙たがられたが、一 逆に賭博場ではいつでも歓迎されており、下は片隅の暗黒の居酒屋に至った。こちらでは人々は賭博場同様に、長い冬の夕べ、彼を歓迎したが、しかしまた去って行く彼も更に喜ばれることが稀ではなかった。彼はこちらで粘液質[鈍重]なグラウビュンデン人達をその諷刺や、政治的騙し話法、幾多の他のイラクサではなはだ刺激し、とうとう人々は本音を吐いて、後にそれを口にしたことをはなはだ後悔するのであった。

彼は、聞き手に好奇心があり、無学で空想力が強い相手と分かると、更に別の、公爵の部屋では使わない秘密の知識を披露した。これは彼が徹底して学んだ数学や物理学を応用したものであった。これは、少尉の活動圏の最下層民の間で本当の魔法使いという評判を取ったランプの奇術や魔法であって、彼にとって心地良い評判であったが、しかしびっくりした頭がすぐに粗野な拳に変わりやすい地域では、命取りになりかねない評判であっ

た。

ちなみに夜間の襲撃や喧嘩は、この少尉の冷淡な勇敢さを更に刺激して、彼は自分の阿呆な慰み奇術を控える気にならないのであった。それに彼は実際常に無事、それも迅速にその襲撃を切り抜けて、彼の武人としての名誉は損なわれず、騒擾の幽霊や、拳の喧嘩は、彼がすでにシュプレッヒャー家の静かな邸宅の公爵の部屋部屋を通過して、忍び足で自分の寝室へ向かっているときに、ようやく最高潮に達するのであった。

ヴェールトミュラーは無条件に誠実に、そして休みなくせつせと公爵に奉公していて、公爵はそれ故彼に対し多くのことを大目に見ていたが、しかし間断なく彼の鋭い発見や警告する報告が続いて、心が休まらなかった。

イエナッチュは、状況が難しくなるにつれ犠牲的忠誠心が募って、公爵を毎日訪問し、公爵の憂いを取り除き、公爵のほんの少しの願いも察知して、不安に耳を傾け、自らの陽気な確言で不安の根を断ち切るか、あるいは雄弁な言葉で説得し、反駁するという使命に徹していたが、一 このイエナッチュ、公爵の最も有益な助言者、そして大衆の寵児に、頑固な少尉は特に狙いを定めていた。ヴェールトミュラーの思考は大佐のすべての足取りを探索していて、公爵が彼の警告を微笑して無視すると、ほとんど彼は激昂した。公爵が彼の警告を、公爵の寵児に対する止めどない嫉妬のせいにするか、二人の根本的に相反する気質の違いのせいにするからであった。

ヴェールトミュラーが何でもかんでも注進することよ。

ロアンが秘密を漏らした唯一のグラウビュンデン人[イエナッチュ]は、守秘すると信頼していたのに、キアヴェンナの条約の頓挫は、少尉の語ることを聞けば、すでに皆に知れ渡っている。いや、意図的に遠く外れた小屋にまで広まっていて、これはこっそりと耳打ちされて伝えられている知らせではなくて、ラエティアのアルプスの此岸、彼岸の諸溪谷で木霊している知らせとなっている。

しかしこれは取るに足りないことである、一 もっとひどいことに、一 グラウビュンデンはスペインと交渉していると、ヴェールトミュラーは注進して来る。これは個々の主義主張者とか騒擾目的者が触れ回っていることではなく、民衆全員が沸騰していて、フランスに敵対しているようで、イエナッチュが、このどうにも食えない偽善者が、ペテンの全芝居の元締めだそうだ。

公爵は普通軽く答える習慣であった。そのようなことはまだ起きたことがない、民衆全員が秘密結社のように陰謀を企むということはまず考えられないし、少なくともこの国の実直な自分に対する信奉者の誰一人自分に警告もしないということはある得ない。最悪の場合でも、自分のホストの、物静かな、立派に教育を受けて、何の党派にも属していないシュプレッヒャー博士がこのような前代未聞の裏切りの襲撃に対して用心するよう述べることだろう。この博士の正直な志操には少尉も異を称えはしないと思うぞ、と。

頑固なチューリヒ人はこれに同調しなかった。

民衆全員の陰謀に関しては、自分は喜んでこう主張したいと、彼は述べた。つまりグラウビュンデン人の許でほど可能性のある所はないであろう。この人々は北方人の鈍重さと南方人の狡さを幸福に混交させて一致させているのです。この民の誰でも、最もすれっからしの外交官の先生になれるのです。こちらでは政治は一般化して、習慣化しており、民衆全員が一人の武士であるかのように、明瞭な利点が問題となっているときには、弁じ、

黙します。従って難しいのは単に、理解のとろい者達に計算をはっきり教えることで、そのために大衆弁舌家のイエナッチュは大いに苦心したはずです。

学者の博士殿に関しましては、余り接近したいとは思いません。勇気のある人物とは思いません。少なくともひそひそ話される一種の秘密裁判に対して勇気はないでしょう。この根拠を言おうとは思いません。しかし自分は信じています。この国では連鎖文書、一蓮托生文書と呼ばれる規約を有する秘密結社があります。一 多分同盟者達の固い絆、結束を示すためでしょう。裏切りは死刑だそうです。博士がこうした一蓮托生の一員であると主張するものではありません。彼はこの結社の鉄の部分ではないでしょう。しかし彼がこの同盟者達からの仕返しを恐れているのは、とてもあり得ることです。

裏切り者は死罪というこの陰謀を公爵は閑暇の中から発案され、思い込まれたスリラー話しと解釈した。「貴方にそのことが話されたのは、ヴェールトミュラーよ」と公爵はよく冗談を言った、「貴方の邪推に、即刻強烈な薬味を添えるためであったろう。貴方の毒舌が若干災いしていると思うぞ」。

少尉にとって、イエナッチュが公爵に対して、フランス宮廷における公爵自身の地位を甘言によって騙そうとしているとき、その大胆さが最も疑惑的に思えた。これについてはアンリ・ロアン自らがはっきり自覚していただかなければ困る。グラウビュンデン人が何故こんなことをするのか、とヴェールトミュラーは自問した。善良な公爵を四方八方から、欺瞞と魔神的錯覚の網で閉じ込めて、この確保した男をそれだけ一層確実に破滅させるという悪魔的意図の他にはない。そして大佐に対する彼の憎しみは途方もなく増大した。

プリオロはパリから不首尾のまま戻って来た。一 ヴェールトミュラーは想定した、プリオロは枢機卿の遅滞戦術を教えられ、枢機卿に取り込まれている、と。一 そしてプリオロは新しい手紙と共にまた送り出された。これらの手紙は、フランスにとって比較的条件の良い条約の署名をこれ以上引き延ばさず、グラウビュンデン人にスペイン側からの申し出に応ずる口実を与えないようにと至急の提案をしているものであった。

プリオロが旅立つと、すぐに勇敢なドウ・レック氏、ロアンがヴァルテッリーナの彼の軍の司令官に任命していた者が、グラウビュンデン部隊で不服従という危険な徴候が見られると報じて来た。これは民衆の間の一般的な憤りとされた。スペイン人がかなりの数となって国境に集合していて、公爵はその軍と離されて、案ずるに、フランスの政治に日々不満を募らせている国の中心地に住んでいらっしやるので、こうした個々の出来事に神経をとがらす必要がありますと彼は記していた。彼は最後こう結んでいた。自分が公爵に対し切望し、是非とも願っていることは、公爵がヴァルテッリーナでご自分の切り離された部隊と合流されることです。これがなされまして、自分レックが、段々と厳しいものとなって行く責任を終えて、司令権をいとも高名な御手に委ねることになりますれば、自分は喜んで、将軍のお側で、剣を手に、全世界に反抗する所存であります、と。

ヴェールトミュラーはこの救いの提案を歓呼して聞いていたが、大佐が直に訪問した後、こう知らされて、ほぞをかんで呪った。大佐は公爵に対して、公爵のクール滞在は全く危険のないものであります、グラウビュンデンにおけるフランスの利害にとって有益であり、お人柄がこの国で受けている尊敬の念を考えれば、人心の安定のためにはそれどころか余人をもって代え難い必須のものでございますと、上手に納得させた、と。

疑念が一瞬、高貴な公爵に生じたこともあった[史実として類似のエピソードはあった]。ヴ

ヴェールトミュラーはある手がかりを追求することに成功して、その追跡で彼はかくも盲目の信頼を揺さぶることができた。居酒屋「塵埃の小屋」亭[小屋は小帽らしい]で、彼はあるイタリア人の藪医者を知り合いになって、偶々この男が今や月桂冠とミルテの国[イタリア]へ戻るつもりであると知った。冷たい気候の中、胃を危険なマランス・ワインで温めていたこの山師の小男は、ワインの酔いで勢い付いて、自分の高度に外交官的な縁故や能力を吹聴した。彼を褒めながら聞いていたヴェールトミュラーは、盛んに注ぎながら、ある記憶を蘇らせていた。最近彼が夜遅く、司教の宮殿を去ったとき、彼はこの見紛いようもない人物が薄い月明かりの許、中庭の隅、ホロフェルネス[アッシリアの将軍、ユーディットに殺された]似の人影の側、この人物と熱心に会話しているのを思い出した。 — ほんの一瞬であった。というのは問答に彼の足音がすると消えたからであるが、しかし彼の鋭い目にとっては十分に長くて、この呪術医者の独特な形姿を明瞭に見分けていて、相手の、暗い外套にくるまった人物をイエナッチュ大佐と推測していた。これは、冒険心に富んで、冬休みで徒然の少尉を派手な奇襲へと煽るには十分なものであった。彼はこのイタリア人の旅立ちを聞き出して、数日休暇を取り、遍歴の呪術医者の後を追ひ、その最初の旅立ちの日の夕方、彼を元気な栗毛の馬に拉致した。追い剥ぎのように彼は山岳の通りの人気のない箇所を襲った。驚いた藪医者はまず自分の医療箱を開けて見せなければならず、それから身体検査を受けた。ヴェールトミュラーは、好意的にドクトルの背中を叩きながら、軋む紙片の音を聞きつけた。これは、生地と裏地の間に縫い付けたあったもので、そこでこの抗う男の膏薬鉢でその深紅の上着から、秘かに彼の敵[イエナッチュ]のカプチン派神父に宛てた自筆書状を切り出した。紙片はイエナッチュがこの神父に宛てたミラノのセルベッローニ知事への依頼書であった。勿論文言は曖昧なものであった。しかし事実そのものが一層明瞭に語っていた。少尉はがたがた震えている歯抜き医師を宥めて、旅行用水筒で元気づけた後、喜んでギャロップでクールへ戻って来た。今や裏切り者イエナッチュの証拠を掴んだのであった。

彼が町に着いたときは、夜の深更であって、ほとんど面会を許されなかった。苛立ったこの男は、自分の主君に裏切りの書状を、事情を大雑把に記載して渡す他なかった。ヴェールトミュラーが翌朝、ぐっすり眠った後、公爵に面会すると、公爵はとても沈んだ気分で、公爵の言うには、自分に不分明な、とても痛ましい出来事についての話し合いには今応じる気になれない。自分は他の面からもこの件について解明しなければならない、というものであった。

イエナッチュが毎日公爵に伺候する習慣の時間直前に、少尉はライン堡壘への日々命令を受けて、それで迅速に騎乗しても、戻りに時間を要して、アンリ公爵の前で大佐と直接対決することはかなわなかった。

彼が戻って来ると、公爵は上機嫌で、重い責務から解放されたかのようにであった。

「いつも立派にお勤め、ご苦勞、健気なヴェールトミュラー」と彼は副官を迎えた、「今回は貴方の容赦のないアルゴスの目の明察をもってしても、粗野な畏に誘い込まれたな。

— 貴方の自負心を傷付けて、心苦しい。 — イエナッチュがこちらに来て、私は率直に彼と語り合った。彼は完璧に自己弁護した。手紙は偽物だ。筆跡は珍しく器用に模倣されている。大佐には敵が色々いる。その敵の関心は、彼に対する私の信頼を殺ぐことだ。彼らはその奸策で、逆にますます信頼を強固にしていると気付いていない。つまり敵は司

教の宮廷にいて、賭博台での貴方の聖職者仲間だ。ヴェールトミュラーよ、奴等は貴方のことを知っていて、貴方の邪推と冒険心を当てにしているのだ。貴方は大佐が嫌いだし、もっとも貴方の名誉のために言うと、貴方の私への忠誠心は明瞭なものだから、それで聖職者達の陰謀が仕組まれたのだ。惨めな山師は買収された道具だ。要するに彼は自分の役を上手に演じた。イタリア人はいつでも喜劇を演ずるとなると、乗り気になるのだ。最後に、イエナッチュとこの藪医者の間、司教の宮殿近くでの夜間の話し合いに関しては、貴方が訝しく詮索しているものだが、その真相はこうだ。 — それは魚の目を切り出していたのだ。貴方は大佐が数日前左足にスリッパを履いて現れたとき、大佐のことを笑ったのを覚えておろう」。

ヴェールトミュラーの渋い顔は、この話しを聞きながら、はなはだ曇って、それで公爵は彼の肩に手を置いて、優しくこう言いながら別れた、「いいか、もうその話しは止めよう。その件は重要ではない」。

それでも大佐にどのように仕返しをしようかと空しく考えながら、ヴェールトミュラーは公爵の部屋から去った。ほぞをかむ憤怒の状態の中、彼は一人のブロンドの天使の娘が、階段を上がって彼に向かって来ているのに気付いていなかった。それはこの家の金髪の娘、アマンティア・シュプレッヒャー嬢で、早咲きスノーフレークの花束を持って公爵の許に来たのであった。この取り乱した男は、彼女を見過ごしたばかりでなく、大きく跳ねて、石段を急ぎ降りて行き、ほとんど彼女を投げ倒すところであった。慌てて彼女は豊かに絡まっている鉄の手すりを掴んで、その無垢の青い目で、訝しげに非難して彼の姿を見送った。

これは、いつもは顕著に愛想良く、自分に世辞を言うあのヴェールトミュラーと同じ人かしら。冬の間はずっと自分が最悪していた踊り相手の一人であったあの人かしら。明日も彼はまた彼女を舞踏会に、謝肉祭の最も晴れをする舞踏会に招待していた。今日はどんな毒蜘蛛に噛まれたのであろう。

彼は多分その他のときでも、時に、無分別に見えたことであろう。彼がグラウビュンデンの状況や慣習について嘲笑的に投げ棄てるように話すときである。そもそも彼の毒舌から守られる人とか物事があるろうか。でもこれまでは彼女を例外としていて、彼女はそれに気付いていないわけではなかった。

彼女の穏やかな子供らしい美しさと全く平穏なバランスの取れた考え方は、この水銀的辛辣な将校にとって、魅力的で、心和むものであった。こう見ている女性は、時折、おとなしいながらも、この乱暴者のチューリヒ人は夫となったら、どのような振る舞いをするだろうか、思いを巡らすことがあった。そして彼の勇敢さ、高貴で敬虔な公爵に対する彼の忠誠心という紛れもなく立派なもの、賢い心を持った前途洋々の人生展望というものを一方の秤に置き、彼の乱暴さ、彼の口の悪い本性、聖職者や礼拝に対する彼の嘲笑と比べてみた。これらの嘲笑は根本的には、ひどいものに聞こえるけれども、さほどひどい心のものであるまい。しかしこの秤は、 — 自分はこの不躰な出会いの後ではこう告白せざるを得ない、 — 少しも好意的結論に達しないわ、と。

かくて彼女は、大いに心を労さずとも、こうした考えを忘れて、手の中の銀色に明るい花束を整えながら、ゆっくりと最後の階段を上がって行った。

アマンティア嬢は自分の父親の高貴な客人に対して、尽きることのない尊敬の念を抱い

ていた。これは公爵の人当たりの良い愛想のため心の気後れが消えるせいであった。彼女は毎日、公爵に支障のないとき、応接室に現れ、公爵の要望を尋ねる習慣であった。公爵は急ぎの用のないときは、この善良な子供を押し止めて、彼女のその日の関心を尋ねることを怠らなかった。

今日彼女は丁度平日説教を聴いて来たばかりであった。啓発されるというよりは疑念に陥っていた。というのはザールツ牧師は、順番外のテキストについて大いに熱く説教したからで、それも恐ろしいテキスト、―― マタイの二十六章のイスカリオテのユダの裏切りについてであった。聴衆は不安げに、この当てこすりは何を狙っているのかと疑い、アマンティア嬢の言うには、ほとんどその昔弟子達が尋ね合った具合であったそうである。「主よ、あなたを裏切るのは誰ですか」と。

第八章

その後数日して、三月十九日、学識ある騎士、フォルトゥナートゥス・シュプレツヒャーは階段を駆け上がり、その偉い客人の部屋へ急いだ。この早朝の時間は、公爵の伝記を続けるのに適しているとは思えなかった。騎士の顔も今日は特に陰気であった。騎士の手には震えながら大きなグラウビュンデンの紋章で飾られた印刷紙が握られていて、壁に公の通達として張り出される類いのものであった。

上に到着すると、彼は一瞬息せき切っていて、気を落ち着けた。しかし彼は近習にほとんど取り次ぐ時間を与えず、いつもの配慮や丁重さを省略して、公爵の仕事部屋に侵入した。公爵は出窓に座って、聖書を読んでいて、この妨害にびっくりして、乱入して来るシュプレツヒャーを見上げた。

「前代未聞のことです」とシュプレツヒャーは始めた、「そのため私は、閣下、貴方の朝のお祈りの時間にお邪魔しています。ほとんど申し上げる勇気がありませんが、ここに駆け付けましたのは、高貴な御身の無事を願ってのことです。私の赤心を覗いていただけますなら、私の紛れもない、どのような試練にも耐える恭順を、―― この口が申し上げるよりもはっきりと認めていただけます。自分の歴史の研究に没頭してしまして、日中の徒な物音を余り気にしない習慣で、残念ながら、最近私の耳にまで聞こえていたうるさい音の意味を過小評価していました。貴方のお心をいたずらに乱したくなかったのです」。

公爵は素早く起き上がった、「要点を話してください」と彼は明確に冷静に言った、「一体何の紙片です。寄越してください」。

シュプレツヒャーは厄災に満ちた印刷紙を渡して、声を落として呻いた、「フランスに対する反乱です。ユルク・イエナッチュを三つのグラウビュンデンの総司令官に任命しています」。

ロアンはその紙片を通読して、青ざめた。

これは民衆に対する布告で、フランス国王に対するグラウビュンデン人の苦情を簡潔的確な言葉でまとめ、スペイン・オーストリアとの同盟を勧めていた。スペイン・オーストリアはグラウビュンデンの昔からの国境と独立を認める用意があるとされ、グラウビュンデンの兵はすべて、ユルク・イエナッチュの司令下に置かれるとのことであった。

結びはこうであった。

「三つのグラウビュンデンの教区民よ、剣を握り、主の御名の下、国民軍に参ぜよ。クール間近のツィーツァース付近に三月十九日、集合せよ」。これに続き、三つのグラウビュンデンの頭目達の署名があつて、先頭にはクールの市長、マイヤーの署名があつた。

公爵は激昂して、その紙片をテーブルに投げた。彼は従者達を呼び、馬の準備を命じ、ヴェールトミュラーを探させた。ヴェールトミュラーとライン堡壘まで彼は騎乗しようと思っていた。彼の精神の機敏さと軍人の緊張感を、彼は一瞬も失っていなかった。

彼の従者が彼に服を着せている間に、不安に陥ったシュプレッヒャーは更に若干の請け合いや、暗示や、助言を申し立てた。

「署名者達は皆一蓮托生同盟のメンバーです。私はこの同盟を危険な隠し事のない公益結社と思っていました。 — この市長マイヤーは、いつも軽蔑して、無節操のイエナツチュと罵り、教皇主義のスペインを目の敵にしていました。...閣下、案じますに、我が家と申しまして、ここで貴方を守れないかもしれません。...ツィーツァースへ向かう人々の群れで、貴方はもはやライン堡壘へは行けないことでしょう。...いや、あの音は、この町でもすべての塔の早鐘が鳴っています。...ひょっとしたら夜間に、チューリヒまで逃げのびることができるかもしれません。そこから迂回して、ヴァルテッリーナの貴方の軍に到達できましょう」。 —

こう話している間に一頭の馬のギャロップが舗石に響いて、すでに副官ヴェールトミュラーが公爵の前に、職務姿勢となって、しかし目を怒らして立っていた。

「ドムレシュクのグラウビュンデン連隊が反乱を起こし、クールへ旗を持って行軍しています、閣下」と彼は伝えた。「私はライヘナウへの朝の騎行の際に、彼らの手に落ちそうになりました。奴等は私の跡を追って来ています。この町には、御領主もご存じのように、プレティガウ人の義勇軍のみが残っています。忠実な部下です。彼らを北門に集めています。その隊長、ヤネットは、私に誓って言いました。自分の命は貴方のものであって、すべてのスパニオーレ[スペインから追放されたユダヤ人]や偽証者どもに敵対して貴方の味方をする、と。貴方の馬や郎党も下で用意が来ています。プレティガウ人が我らの背後を守ってくれたら、ライン堡壘へ突破して行くことは、まだ可能です。ならず者どもが我らに向かって来ても、蹴散らすまでです」。

アンリ公爵は、自分自身の決意と同じこの勇敢の提案に、同意する頭の仕草で、よろしいと述べ、シュプレッヒャー氏に短く挨拶して、素早く出口に向かった。

しかしすでに彼は囚われ人であった。

ヴェールトミュラーが控えの間のドアを引き開けると、下から数多くの声のざわめきや、階段を上がって来る足の擦り音が響いた。拍車の軋む音や、潜めた言葉のやり取りが聞こえた。公爵は立ち止まって、手を剣に置いた。

ドアの前で人影が押し合いながら躊躇っていた。軍服の者達と盛装した者達であった。誰も先頭に立とうとしなかった。そのとき、側面に人々が避けて、中央が空いた。ゲオルク・イエナツチュが人々の中から現れて、敷居を越えた。彼に続いて、グーラー、トラヴァース伯爵、それに市長の正装の、黄金の首飾りを付けた堂々たる男が現れた。市長は彫りの深い、肉付きの良い顔、それに軽い斜視であった。

イエナツチュ大佐は、その決然たる足取りの後に、ほっとして留まっている他の者達を

残して、無帽のまま、凝然として青白い面持ちで、公爵に近付いた。公爵は気位高く、問うように、彼の前に立っていた。彼の声は、話し始めたとき、平静に、奇妙に冷淡に響いた。

「閣下、貴方は我らの手中にあります。我らの蜂起は防衛のためのものです。相手は貴方ではなく、フランス国王です。貴方に隠されていたことが、我々に明らかになったのです。枢機卿は貴方と我々とは合意した条約を署名する気はありません。枢機卿は、我々を人質にして、フランス側商品として、将来の一般的和平条約の取引の際に高く売りつけるつもりです。枢機卿が我らの手に与えた貴方の汚れなき名誉という保証、担保を卿は簡単に汚してしましましょう。それで我々は、フランス国王とその枢機卿の仕打ちで、我らの不倶戴天の敵により公正な救いを求めざるを得なかったのです。スペインの楯の下に、我らの独立を計るとは、何とも難儀な話しです。――

貴方に対する我々の要求は何か、何故貴方はそれを我々に対し呑まざるを得ないか、簡単にご説明しましょう。貴方のライン堡壘前にグラウビュンデンの全国民軍が集結します。連隊はクールに進軍します。私は貴方に対する忠誠の義務を解除し、我らの三つのグラウビュンデンの頭目達に連隊の忠誠を誓わせたばかりです。オーストリア人達はルーツェンシュタイクに駐留しており、スペイン人達はフエンテス要塞に詰めています。両者とも優勢です。私から一言命令があると、彼らは国境を越えます。――ここにスペイン・オーストリア軍に対する皇帝自身とセルベッローニ知事の署名した私の全権委任状があります」。――そして彼は二枚の書類を広げた、「レックは貴方を救えません。彼がアルプスの峠に向かって一歩でも進めば、スペイン人達がフエンテスからヴァルテッリーナに侵入して来るからです。――貴方の軍は四方を囲まれています。貴方の国王に対し、これを救えるのは、貴方のみです。これは、貴方が次の協定に署名されたら、完了します」。イエナッチュはクール市長の手から三番目の紙片を受け取って、読んだ。

「『ライン堡壘とヴァルテッリーナからフランス人は退却すること。

フランス人は友人としてグラウビュンデンから迅速に期限内に去ること。

アンリ・ロアン公爵、フランスの名門貴族にしてフランス軍の総司令官は、この我らと締結した協定が履行されるまで、クールに我らの保証人として留まること。

更に公爵閣下は、この協定を、フランス宮廷からその反対命令を受けても、自らの名誉にかけて誠実に履行すると約束すること』。――

以上のようなものです。閣下、我々はグラウビュンデンに対する貴方の愛に訴える必要もありません。我々は貴方の力を借りずに、また貴方に敵対して、自らを救ったからです。しかし貴方がこの協定に署名されなければ、貴方を親切な天使として敬う習慣であったこの国が、貴方の抵抗で、血なまぐさい、途方もない悲惨な状況に陥ることをお考えいただきたい。[史実では、蜂起の後、1週間後にライン堡壘で、協定された。1637年、4月20日から、5月5日までにフランス軍は撤退する、と]。

公爵は巻き紙を受け取らなかった。彼は怒った涙を見せて、そっぽを向き、それから述べた、彼の声は震えていた、「私はすでに多くの忘恩を経験してきた。――しかしこれほど辛辣に、私の信頼が裏切られ、不肖私に授けられてきた名誉が屈辱的奸計で噛み切ら

れたことはない。 — 私は署名しない、 — かくも深くフランスとその将軍をその陵辱に晒せない」。

このとき生じた静寂は、開け放たれたドアの中から生じた騒動で中断された。階段に詰めかけた民衆を押し分けて、肩幅の広い、赤い髭の兵士が現れ、この男が至急イエナッチュ将軍を求めている声が聞こえた。イエナッチュは彼に無愛想に呼びかけた。「ガルス隊長、今は邪魔だ。どうしたのだ」。

「命令を頂かなくてはなりません」と荒っぽい声がした、「ヤネットのプレティガウの連中が新しい忠誠をしようとしません。スペイン人の坊主どもに売られたくない、自分らはフランスに誓ったのであり、公爵の言にしか従わない、と言っています」。

イエナッチュは憤怒で真っ青になった。彼は頭を話し手の方に振り向け、かすれ声で言った、「私の連隊を彼らに向けろ。皆射殺しろ」。それから彼はまた公爵に向かって、我を忘れたかのように、声を詰まらせて、脅した。「ロアン公爵、彼らの命は貴方にかかっています」。

公爵はびくっと痙攣し、しばらく痛々しい内心の葛藤が続いた。ようやく彼は震える手で、テーブルに置かれていた巻き紙を取って、自分の仕事部屋のドアの方を向き、歩いて行った。彼の後にヴェールトミュラーが従って行き、しっかりと彼の後、施錠した。

イエナッチュは相変わらず深く青ざめたまま、市長の方を向いた。「我らの件は上首尾です」と彼は言った、「ロアン公爵には休息が必要です。人々を遠ざけましょう。彼は署名すると保証します」。

それから彼は、決断できずに残っていたガルス隊長に命じた、「ヤネットに告げろ、勇敢なプレティガウ人達には忠誠の件を不問にする。公爵は三つのグラウビュンデンの政府と了解されて、その連隊に、しばらくしたらご自分の存念を知らせるであろう、と」。

——

数分経過して、公爵の最前の部屋にいた人々が少なくなり始めたとき、内部のドアが開き、ヴェールトミュラーがロアンによって署名された協定を手を持って現れた。

「こちらの殿方のどなたが現在、グラウビュンデンでの不適切な名前『合法的権力』と記されているものを所有されていますか」と彼は鋭く尋ねて、真面目な職務顔で進み出たクール市長に、グラウビュンデンの運命を決定づける巻き紙を差し出した。ただ彼の顔のみが能う軽蔑的辛辣さを浮かべていた。

丁度階段の上の方で、何人かのグラウビュンデンの政治家達に賀詞を述べながら別れの挨拶をしていたフォルトゥナートゥス・シュプレッヒャー氏は、旅行服の若い男が息せき切って階段を上がって来るのを見て、彼の手を握り、脇の方に引き寄せて、今の出来事について遺憾の意を交えながら伝えようとした。これは長いこと待たれていて、この厄災に満ちた瞬間、まさにパリから戻って来たプリオロであった。

「済みません」とプリオロは叫んだ、「博士殿、邪魔しないでください。ひょっとしたらまだ間に合うかもしれません。公爵の許に急がなければなりません。 — キアヴェンナの条約は署名されました。 — すべて、そしてそれ以上に認められています。決してスペインとの同盟はなりません」。彼は控えの間を急いだ。

イエナッチュは市長と会話していたが、狼狽した顔で彼が通り過ぎるのを見ると、市長

に辛辣な微笑を浮かべて言った。「枢機卿は運命を支配できると考えていたろうが、今回はかつがれたな」。

マイヤーは答えなかった。しかし両手を組み合わせて、その運命の巻き紙を抱いた。

一時間後、公爵の外部の部屋は静かに、人気がなくなった。イエナツチュは一人っきりで控えの間をあちこち歩きながら、この出来事から生ずるであろう将来のことを吟味した。彼が不安に思ったのは、彼の囚人、公爵の運命であった。彼はここに、先日まで彼に対し好意的であった顔に今一度会いたいと期待して残っていた。アンリ公爵は自分の約束した言葉を守る奴隷となるであろうことに、この裏切り者は疑念を抱かなかった。しかし枢機卿がロアンを憎むであろうこと、つまりその高貴で上品な鋼が、悪用者の手にかかって、砕けてしまったこの道具を憎むであろうこと、そして公爵はリシュリューの復讐を受けずには、二度とフランスに戻れないであろうことも同様に確かに思われた。イエナツチュは公爵をこの復讐から守って差し上げたいと思った。 — しかしどこだろう。枢機卿の腕から逃れて、公爵が選択を躊躇わないような、絶望的な亡命地ではない地はどこであろうか。

彼は待機していたが、空しかった。公爵は出て来なかった。ようやくドアが開いて、副官ヴェールトミュラーが、札差に書状を挟みながら出て来て、彼の側を挨拶なしに通り過ぎようとした。

「ヴェールトミュラーよ、公爵に短い謁見の時間を設定してくれないか。...公爵御自身の今後についてだ」とグラウビュンデン人は尋ねた。

「構わない方がまだ良いと思う」と少尉は答えた、「貴方の姿を見ると、分別が吹き飛ばう。公爵の今後に関して、喜ばしい手筈が貴方にできるわけがない。公爵が自ら丁度お考えになっている」。

「公爵は将来の身の振り方を決められたのか」とイエナツチュは緊張して尋ねた、「チューリヒへ行くのか、ジュネーブか。そちらなら、優雅な徒然、研究に専念できよう」。

「軍事的教本を書けと仰有るのか」とヴェールトミュラーは嘲った、「それはない。貴方が巧みにお膳立てしたこの状況下でロアン公爵に残されているのはただ一つ、戦死だな。貴方のユダの腕から解放されたとき、我が主君が向かう先を知りたいのであれば、嘘を吐かずに教えよう。 — 嘘は貴方がこの国に導入されたもので、御国の美しい風習に反することになるが。

私は私の高貴な主君の書状を、ヴァイマルのベルンハルト公爵[Bernhard Herzog von Sachsen-Weimar,1604-1639]に届ける。公爵の婿殿だ。ドイツ軍に一兵卒の騎兵としてご奉公することを申し出ておられる。貴方も若干ベルンハルト公に推挽しようか。私の記憶が正しければ、貴方もかつて彼の軍旗に参じたことがあったろう。彼は貴方に驚かれよう。今日のうちにも私は馬で去る。当方としてお目にかかるのは最後だな。お目にかからなかった方がどんなに良かったかと思うぞ。特に以前フエンテス要塞の前、然るべき榮譽を受けて、連行されていたな。すでに当時、スペイン人を従えていた。今ではもっと都合良くなって、夙に然るべきポストに昇進なさってござる」。

「腹は立たないよ」と相手は陰気に言った、「私は流血の惨事はうんざりだ。貴方から個人的敬意を何も受けなくても、応えない。 — 私の祖国に対する思いは、貴方には分

からない。一行って、ベルンハルト公爵に伝えるがいい」とイエナッチュは結んだ。そして頭を傲然と後ろに反らせながら、入口に向かった、「公爵殿は、私がグラウビュンデンでそうしたように、フランスの爪から無事アルザスを解放するよう、腐心されたい、とな」。

第九章

温かい五月がライン川の溪谷を花々や豊穡な緑で覆ったとき、フランス軍は三月協定で帰還を強いられて、ヴァルテッリーナから、ライヘナウ起点の埃っぽい街道をクールの町の市門に向かって進んでいた。

ロアン公爵から強請り取り、プリオロによってパリへ運ばれた協定は、パリで承認された。もっとも回りくどい表現の承認であって、枢機卿の反撥の嫌悪は明瞭に見て取れた。遠方の山の片隅で、例を見ない策謀で立案されたクーデターに対するフランス宮廷の驚愕と立腹は、甚大なものであった。それまで、これを遂行した未知の山師の名前は、誰も注目に値するとは思っていなかった。にもかかわらず協定に同意したし、同意せざるを得なかった。抜け目ない計算でも枢機卿に引けを取らないこのグラウビュンデン人はその網の目を余りにしっかりと固く結び合わせていて、リシュリユーの狡さをもってしても、その隙間を見つけて、すり抜けることはできなかった。ひよっとしたらリシュリユーは、暴力でこの目を引き千切る方策を考えたかもしれない。しかしこのためには、約束を気高く神聖に守るロアンがいて、使えもしなかった。

ロアンは近付いて来る自分の軍に騎乗して出迎えに行けず、軍の中心には見られなかった。シュプレッヒャー家での無残な場面の後、彼の不調はぶり返して、病床に臥せることになった。今やかろうじて回復して、自ら自分の軍を率いて、クールから数マイル離れたグラウビュンデンの国境を渡ることになった。彼は将軍として最後に、自分の部隊の先頭に立ち、彼らと共にこの国を去るつもりであった。この国は彼がかくも尽力したのに、彼の愛に対して、ひどい仕打ちをしたのであった。

軍勢を告げる大きな塵埃の雲が近付くと、町から大勢の人々が、老いも若きも、行軍して来るフランス人を出迎えに来た。フランス人に対して、クールの市民達は、山岳溪谷の野蛮な人々のようには、決して反撥せず、今やこれが最後であって、長年の客人が翌朝、永久にこの国を去るというわけで、それだけ一層会いたがっていた。

すると騎馬の一团が市門から飛び込んで来て、暑い通りに侵入して来る群衆を蹴散らした。グラウビュンデンの将校達で、先頭の黒馬には深紅の服の騎乗者がいて、その折り返された帽子から青い羽根飾りが揺らいでいて、どの子供も知っているユルク・イエナッチュであった。

人々は疾駆して行く塵埃の雲となって騎乗の同伴者と共にまた消えて行く男を、賛嘆と軽い戦慄の混じった思いで見送った。というのは、この哀れな牧師の息子、国で最も強大で裕福な領主となったこの男は、自分のキリスト教徒信仰を棄てて、自分の魂を忌々しい悪魔に売り渡したが故に、この絶体絶命の襲撃で成功を収めたのだという伝説が生じていたからである。

軍楽がより大きく間近に響いて来た。人々は道の両側の緑の平原や山腹に分かれて、生

きた垣根を形成した。フランス人の先鋒が過ぎて行った。しかし日焼けした兵士達は、好奇心の強いクール人達の呼びかけの挨拶に答えず、速やかなテンポで歩いて行き、この呼びかけは弱くなり、次第に沈黙して行った。

今や近付いて来る中核隊の先頭には、ユルク・イエナツチュの側に、フランス人の司令官レック男爵が目についた。しかしこのフランス人はイエナツチュの同伴に感謝している気配はなかった。気高く、黙して、両人は並んで騎行して行った。この古武士は、このグラウビュンデン人が居合わせることにほとんど我慢ならなかった。彼の目の若々しい炎は憎悪の火花を散らして、彼の短く刈られた髪の色は嘘に見えた。彼は今日雪のように白い口髭をいつもより更に強張って挑戦的に上向きにねじって、その対照的に元気な赤褐色の顔は抑えた怒りで輝いており、彼の拳は好戦的に、勇敢な刃先を煌めかせていた。

連隊は市門に入らず、市壁を左手に旋回して行った。連隊は、短く温かい五月の夜、北門から間近な国境まで通じている、野外の軍用道路上に陣営を構える予定であった。これが済み、陽が沈むと、将校達は、数百人を越える数で、町を訪れ、将軍のロアン公爵に自己紹介をし、クールの商店で、個人的備品の不足を補い、各人が自らの趣味に合わせて、最も快適な晩を過ごすことにした。

レックも、早朝出発のための最後の諸命令を伝えた後、兵士達が丁度夕餉を準備していて、燃え盛る炎の列の側を抜けて、全陣営を鋭い眼差しで点検し、ゆっくりと町の方へ向かった。町ではまず旅館シュタインボック亭に行った。将校達はここに申し合わせで集合していると承知していた。その後すぐに、彼はロアン公爵の許へ赴いた。この遅い夕方の時間、彼は人を交えずに公爵に会いたいと思っていた。

彼は出発の用意の整った公爵と出会った。公爵の用件は片付いていて、宿の友人達との別れは済んでいた。将軍はフランス人将校達に対応していたが、しかしねぎらいの言葉をわずかに述べた後、すぐにまた退去させていた。クールでの最後の時間、彼は静かな人中で、幾分静かに過ごしたいと願っていた。

公爵はまた、翌朝のための全ての同行も、全ての別れのパーティーも断りたかったことであろう。しかしフォルトゥナートゥス・シュプレッヒャー氏は涙ながらに彼に迫って、クールの町は彼に対し、全グラウビュンデン同様に、無限に多くの感謝を負い、その高貴なお人柄への恭順の意は、邪悪な見せかけにもかかわらず、常に変わらないのであって、このような面目ない別れはしのびないと言って、公爵はこの奇妙な感情の混乱から生じている願いに、静かに皮肉な微笑を浮かべて、順応したのであった。

レックが近習によって案内されると、アンリ・ロアンは高貴に落ち着いて迎え、彼に対し、周到に素早く、公爵の命令に従って、軍をヴァルテッリーナから帰還させて来たことを称えて言った。

「決められたことはしなければならないので」と彼は言い添えた、「素早くなされたのは、それだけ一層名誉正しいことだ。一 貴方が素早く行軍して来て、クールの町での私の辛い滞在が短縮されたのは、有り難い」。

レック男爵はその将軍の青白い顔を探るように見て、若干鋭く言った、「私と致しましては、殿下、迅速に従って、そのためフランスの利害を危険にさらしたのではないかと案じております。貴方の書記がバリから取消命令を持って帰って来たことを貴方もご存じで

しょう。しかし書記は、貴方が私に急ぐよう命じられましたので、遅すぎました。遺憾ながら、プリオロが私に出会ったのは、すでに山岳のこちら側、シュプリーゲンの村だったのです」。

「プリオロは昨日私の許を辞去した」と公爵は肩をすくめて答えた、「私は彼の話しを聞いていない。帰還命令を取り消す、二番目の命令、私が仲介して貴方に送るべきであつたらう命令について、私は何も知らない」。

レックは自分の札入れを開けて、公爵に、国王とリシュリューの署名のある、明確な表現でまとめられた指示を見せた。彼に対し、ヴァルテリーナを自分の部隊で守り、フランスの名誉を勇敢な軍でどんなことがあっても回復すべしとの命令であった。

公爵の澄んだ額に浮かぶ悲痛な皺は、一層鋭く刻まれた。彼はテーブルにある書類入れを開けて、グラウビュンデン人達によって彼に強要された協定締結のために彼に届けられた全権委任状を開けた。それはサン・ジェルマンにて、三月三十日の日付であつて、ルイ十三世とリシュリューの署名があつた。彼はそれを、レックが彼に渡した命令と一緒にした。

「両記録とも国王と枢機卿のサインがある」と彼は真剣に言った、「比較するがいい。これらの署名はどちらも本物であることは疑いを容れない。一 貴方に与えられた命令は、私の名誉、それに恐らく私の命も犠牲となるものであろう。...何故貴方はこの命令を履行しなかったのだ」。

「遅すぎたからです。私はすでに要塞を出ていました」とレックは素っ気なく言った。

「そして特に」と彼は素早く、熱を込めて、付け加えた、「私は、この状況では、殿下、貴方抜きに行動したくなかったからです。私の意見では、私の手にあるこの国王の最終命令は、今でもまだ全く失しておらず、国王の願いと意志に報いるために、フランスを侮辱する裏切りに報復するには、まだ十分に間に合うものです。将軍と軍とが一体化した今となつては、一層確実なものです。一 私は計画を練っております。それを聴いていただけますならば」。

彼は公爵を、塔のように突き出た出窓へ連れて行った。その窓は生温かい静かな五月の夜、開かれたままであつた。彼は声を潜めて続けた、「町とその周辺にグラウビュンデンの部隊はいません。イエナッチュは連隊をプレティガウに移しました。面目ない退却で苛立っている我らの兵士との無用の摩擦を避けるためです。国民軍のわずかな塊が市門を見張っているだけです。イエナッチュと大佐達は、我々を明日破廉恥に、我々の不幸を喜び、嘲って、国境まで儀仗同行するつもりですが、この夜、我らの退却を祝して、居酒屋鐘亭で乾杯しています。向こうの二番目の通りの明るい窓は、酒盛りの明かりです。一

復讐は我らの術中にあります。町には百五十人の将校がいて、ひたすら勇敢な貴族で、皆、裏切りによってフランスに加えられた侮辱を剣によって晴らそうと決心しています。

我らは慎重に鐘亭の出口を押さえて、圧倒的な数で侵入し、酔っ払った抗命者どもを一人残らず片付けます。陣営と私とで打ち合わせてあつた合図で、市門は外部から爆破装置で破壊します。その後我らの部隊が侵入し、町を占拠します。クール人達は、大多数が以前からスペイン人達の策謀に反対しており、我々フランス人には好意的だったので。クール人達は、半ば強制され、半ば了解して、叫びましょう。フランス、万歳、と。そして、御主君、確実なことです、数日したら全グラウビュンデンが同意しましょう。根本的に人

々はスペインとの同盟を嫌っているのですから。一人の男がこの裏切りの案全体を企みしました。まずは、このユダに報復を加えたら」と彼は怒りを抑えきれずに、叫んだ、「状況は一気に変わります。誓って」。

「貴方はフランスの名声を破約と虐殺とで回復するつもりなのか」と公爵は厳しく言った。

レックは彼の全権委任状を示した、「私はこれでもって我が主君の国王の意志を実現します」と彼は弁明した、「学識ある枢機卿は、良心の呵責問題に関しては名手です。彼の教理問答には、こう記されています。裏切りには裏切り、と。三月十九日、この家の客人の権利を踏みにじって、粗放な暴力行為によって、貴方に強いられた約束を、貴方は神に対しても、人々に対しても守る必要はありません。たとえ、それはホステリアにかけて、あるいは福音書にかけて誓われたものであっても」。

「私の良心の決定は別様だ」とアンリ・ロアンは明確に冷静に説明した。「まだ私は貴方の将軍だ。まだ貴方は私に従う義務がある、従って貰うことになる。襲撃のことはもはや話さないでくれ。襲撃が成功したら、国境に駐留しているオーストリア兵、スペイン兵が国内に侵攻して来て、すさまじい戦争となろう。貴方自身言ったではないか、この冷淡な裏切りを犯したのは、ただ一人の男であった、と。民衆に罪はない。一人が犯した罪を残酷な運命で償う必要はない。私は協定を守る。我らの百合の紋[フランス]の栄光がそれで陰るとは思わない。しかしたとえ、貴方の言うように、フランス軍の栄光がそれで陰るとしても、一 私はそれでも協定を守らざるを得ないだろう」。

「フランス人ならそのように言い方はしません」と相手は激した。

公爵は手を心臓の方へ動かした。彼は承知していた。しかし今日初めて、彼にとって明らかになった。一 自分は祖国を失ってしまった、と。

「私にとって、同時にフランス人であり、名誉ある武人であることが出来ないのであれば」と彼は小声で言った、「私は名誉ある武人を選ぶ。そのことでたとえ祖国を失うことになっても」。

そして二人は部屋へ戻った。

冷え冷えとしてきて、窓が閉ざされた。その邸宅前の静かな広場に見られた月光の中へ、今や大きな人影が出て来た。この人影はすでに長いこと腕組みをしたまま、壁に背をもたせかけていて、二人の話者には見えない所、出窓の下に立っていた。ドゥ・レック氏が硬く軋む足取りでその邸宅を去って、角を曲がって行くと、その人影は今しばらく頭を垂らして、向こう側の家並みの影の中をあちこち歩き、時々、視線を公爵の出窓の方に向けていた。そして部屋の明かりが消えた。するとこの人影は或る脇道の入口に立ち止まった。再び足音がした。スペイン貴族の服を着た、千鳥足の痩せた男が近付いて来て、一瞬逡巡して立ち止まっていた。まず彼は広場で夜警をしているこの男を鋭い眼差しで窺っていた。それから彼に歩み寄り、知人として話しかけた。

「イエナツチュ殿とお見受けするが」とスペイン風外套の男は始めた、「貴方の獲物を懇ろに見張っておられる。鐘亭では貴方がどこか、誰も知らなかった。お会いできて、結構、まさに推測通り。貴方は公爵を旅立たせてはならんぞ。さもないとスペインに対する貴方の貢献がふいになろう。これまでの貴方の行状、率直さに、懸念が生ずるかもしれな

いぞ。セルベッローニは、貴方が公爵を手中にして離さないこと、公爵の著名な軍が再びスペイン、オーストリアに刃向かわないようにすること、これを貴方に勧めることは説くまでもないことと思っている。彼は言った、これはいわば、スペインとの貴方の協定の際の、自明な秘密条項のようなもので、貴方に格別署名して貰う必要のないものだ、と。しかし私は彼に申し、自分は子供のときから貴方のことを知っており、貴方との付き合いでは、ちなみにこのことは、この回転している地球上では、最新の学者どもは回転していると主張しており、誰を相手にしても同じことで、立派な文書による取り決めほどに確実なものはないのだ、と。これを私は持参して来た。貴方は、私が何と結構な提案を申し出ているか、驚かれるであろう。

アンリ・ロアンと引き換えにフエンテス要塞だ。

つまり勿論、グラウビュンデンが夙に熱望していたこの要塞の取り壊しだ。公爵を貴方が押さえる、あるいはむしろ、シュプレッヒャーの家は家格が低く、三月十九日の貴方の訪問で好ましい所ではないだろうから、この敬虔な殿方をミラノへ送るのだ。ミラノでは静かで快適な私人の生活が保障されている。勿論、知事殿の願いでもあって、私が貴方宛てに書いたように、貴方がすでに数週間前、スペインの貴方の同盟者達の手で公爵を追い払っていたら、もっと賢明であったろう。フランス軍がシュブリューゲンの峠を越えて来る前にだ。私は今日この峠に手間取った、 — まっすぐにミラノから来たのに、 — 貴重な時間を無駄に使ったな。

何故私の手紙に返事をくれなかったのだ。利口じゃないぞ。それに幼馴染みに対して麗しくもない。幸いまだ時間はある。公爵はまだいて、その上、私が耳にしたところでは、病気だそうだ。貴方のような有能な外交官なら、貴方の魔術にかかっている御領主に、今しばらくご親切にクールに滞在していただく口実を見つけられよう。彼自らが軍を率いてフランスへ戻ることができようか。我らは交渉しようではないか。公爵と引き換えにフエンテスだ。黙っているのか。...つまり、貴方の場合、絵の聖人や、美しいレディーの場合と同様、然りだな」。

イエナッチュは、言葉を失って、怒って、軽蔑して聞いていた。「ルドルフ・プランタ、ここから失せろ」と今や潜めた、しかし激しい声で、言った。「貴方はグラウビュンデンから追放されている。こちらで貴方を見かけたら、貴方を倒して良いのだ。セルベッローニは、私が貴方の類いの郎党とは交渉しないと承知している。彼は私の条件を知っており、そこからは、剣の刃先にかけて、譲歩しない。私がスペイン人と交渉したのは、私の祖国の自由と尊厳を確保するためだ。しかし貴方はそんなことを案じたことがない。そうでなければ貴方は私にそのようなさもない考えを申し出ないだろう。セルベッローニはそのことを承知しておるまい。それは貴方の考えそうなことだ。貴方の利を計算している。貴方が貴族の血を売って、卑劣な、臆病な、恥辱的な人身売買を行っているのは、今回が初めてではない。 — 恥を知れ」。

プランタは嘲笑的に高笑いをした、「おや、おや、高貴な殿方、スペインの金貨は嫌いではなかろう。[イエナッチュの軍に20000グルデン支払われた]。...どうしてそれ以外に貴方が富貴に達しようか、一方私ときたら、グラウビュンデンのすべての私の世襲の財産や堅牢な居場所を、一人のいわば民主主義者の牧師によって、今ではこれは多分貴方の好みではないのだろうが、そして此奴の民衆どもによって追放されたのだ。それに、 — 恨めし

や、神様、 — 相変わらず借金があって、哀れな遍歴の騎士でござるよ。 — しかし恨むまい。我々は今や同じ主君のパン[釜の飯]を食べている。私は貴方にどれだけの金が送られたか、知っている。 — 私が実入りの良い商売を考えたからと言って、貴方に馬鹿にされる筋合いはない」。

「屈辱だな」とイエナッチュは発した、「このようなならず者と同類に数えられることは。フランスが我らの部隊を騙した分の給料を、スペインに補填させて、どこが悪いか」。

「ドゥカーテン貨幣が潤沢に貴方の指の間を流れて行った」とプランタは嘲った、「それで通過する際に、貴方の指は金に染まらなかったかな」。

「失せろ、餓鬼、殺されないうちに」とイエナッチュは震えながら叫んで、鞘から剣を抜いた。

しかし相手はすでに最後の話しの中に、脇路地の隅に引き下がっていた。「ミラノで、貴方のご立派な、ご志操を吹聴致しましょう」と彼は更に家並みの影から忍び笑いを発して、消えた。

第十章

クールの塔の先端が雲一つない五月の朝の最初の金色の陽光を浴びたとき、すでに市壁の前と、シュプレッヒャー家から北門へと通ずる長い路地は、活気付いていた。フランス人の将校達が、町の中から、テントがすでに片付けられた陣営の方へちらほら馬でやって来て、そして行軍の用意のできた部隊から公爵の許へ戻って来た。公爵に対する輝かしいお伴として取り巻き、フランス人の栄光を戦闘的姿を維持して守るためであった。彼らにとって、この国ではフランスの栄光が損なわれてしまったように思われていた。

ロアンが騎乗して行くことになる通りには、帽子を取ったクール人達が家並みに沿って、二列に押し合いながら立っていて、すべての窓が上げ蓋天窓に至るまで、好奇の視線で占められていた。すべての民衆が善良なる公爵を今一度目に納めたいと思っていて、彼の多幸を祈りながら、率直な涙で見つめていた。

彼が誇り高い行列の先頭で、市門に近付くと、この町の一人の立派な参事官と聖職者達が彼の右側に並んだ。殿方達は完全な正装で、各人がその位階に応じて、名家の小門に通ずる広い正面外階段に配置されていた。ドアの両翼は広く開け放たれていて、その玄関の間には、黒の絹服を着た女性達の姿が見えた。貴頭の夫達の妻達や娘達であって、その身分のために、町の人々の頭越しに、公爵に対し、最後の挨拶の仕草をすることが許されていた。彼女達は別れを惜しんでいた。彼女達は思いやりがあって、陽気な見世物のように、バルコニーや窓から覗く気になれないのであった。

参事官達の中では、市長マイヤーの実に堂々たる姿が人目を引いた。大きな丸いメダルの付いた市長首飾りが、この幅広の胸に飾られているときほどに、これまでこれほど快適に居心地良く輝いていたことはなかった。今日、彼の頑丈な、厳かに広げられた脚に見られるほど、絹の靴下と花結びリボン靴とがぴたっと美しく決まったことはなかった。しかしながら仔細に観察してみると、いつもの健康な落ち着いた顔に浮かぶ戸惑いと、さまよう瞳の不安げな表情には、彼の完全なる姿勢の威厳ある安定感とは裏腹の彼の内心との間の内密な矛盾が感じられた。

貴顕氏のグループの向かい側、市壁内部を走る路地の終点で小さな四角形の広場になっている所に、母国軍の代表者達、最も高貴なグラウビュンデンの将校達が集まって、騎乗して待っていた。公爵の相伴に接合して、儀仗護衛として国境まで赴くためであった。テミス[正義と法の女神]の子息達[役人]の下、路地の反対側の陰鬱な気分とは逆に、こちらのマルス[軍神]の子等[兵士]の下では、元気な、陽気な気分であった。彼らは屈託がなく、気にかけていなかった。グラウビュンデンの独裁者[イエナッチュ]は、彼の犠牲者との別れには姿を見せないと思われていたからである。

今やロアン公爵が正面外階段前の広場に達した。彼はその細身の栗毛の馬を恭しく止めた。市長が黄金の杯を持ち上げて、丁度その側の一人の灰色髪 of 参事官が銀色のポットから注ぐのを見たからである。マイヤーは決然と進み出て、閣下におかれては、クール of 町が感謝を込め、幸運を願って差し出す別れの杯を断らないでいただきたいと感動して述べた。ロアンが唇を湿らす間に、市長は精神を集中して、自分が入念に準備していた上手なフランス語の演説に取り掛かった。

市長マイヤーは雄弁家ではなかった。市役所や地区共同体では、自分の考えを簡潔に合目的に表現し、的確な結論に達することは造作ないことであった。しかし雄弁に文飾を重ねて、分裂した感情や両義的思考を秘匿する芸はなかった。

彼は、公爵の高名な勇敢さと崇高な政治的英知を称えることで始めた。この両者がグラウビュンデン救出のために翼のある両守護霊のように馳せ参じて来たと言った。それから公爵がグラウビュンデンの民を引き上げてくれたときの深淵について一瞥した。今や薄暗い箇所となって、こんがらがった出来事や、奇妙に天上的な好状況や、ルイ十三世の大いなる心情に話が及んだ。 — ここでマイヤー氏は熱くなり、いつの間にか論理的障害を飛び越えて、感動してこう主張した。グラウビュンデンへヴァルテッリーナがスペイン・オーストリア側を通じて返還されるのは、ロアン公爵の功績であり、あり続けます。公爵こそが、親切な神様の次に、グラウビュンデンに対する唯一の救助者、救援者でありました、と。

「いとも高貴なる御領主、この国の感謝の念は」と彼は叫んだ、「私どもが貴方に、グラウビュンデンが有する限りの岩や山々で記念柱を建てましても、私どもの山々のそれぞれが一つの立像となりましても、十分とは言えないでしょう、...」。ここでこの弁士は止まって、自ら石像へと凝固した。

一人の遅参の騎乗者が脇路地を抜けて急ぎ駆け付け、市長の向かい側の小さな広場、グラウビュンデンの将校達の間へ飛び込んで来た。大佐達はびっくりして、足踏みする馬を両側面へ退かせた。ゲオルク・イエナッチュの参加を誰も予期していなかった。しかし彼はやって来た。泡を吹く黒馬に乗って、空いた場の中央に。皆が避けていた。

同時にすぐ公爵の背後に並んでいたレックの馬が棒立ちになった。レックはイエナッチュに憤然とした視線を送った。公爵の目は丁重に市長を見つめていた。しかし市長は、グラウビュンデンの裏切り者の汚名の解放者を、自分の弁舌のけば立った不作法の象徴としてまさに眼前に見て、ドゥ・レック氏の威嚇的姿勢も見逃さず、かくて彼は自分の話しの糸口を見失ってしまった。彼の不安一杯の眼差しは、いつも以上にやぶにらみとなり始め、覚束なく話し続けた。「グラウビュンデンのすべての山が石像となりましても、...すべての石像が山となりましても、...」。

「市長殿、もうよろしいです」と公爵は親切に打ち切って、別の側、グラウビュンデンの将校達の方を向いて、静かに命じて言った、「私は殿方達のお供を辞退致します。貴方達のお一人が国境越えに参加されますと、十分礼にかないでしょう。トラヴァース伯爵に同行をお願いします」。

静かなこの若者は褐色の彫りの深い顔であったが、すぐに感謝の挨拶をして彼の馬を公爵の左手に並べた。

「立派な殿方達、貴方らと貴方らの良き町を神が見守らんことを」と公爵は叫んで、軽く帽子を取って、市門を抜け、外の春の香りの風景の中に駆けて行った。

老レックはわざわざ最後の一人として残っていた。今や彼は馬を回して、ゲオルク・イエナツチュに対し数歩寄って、ピストルを引き出し、彼に吠えた。「裏切り者からレックの別れ方をご覧ください」。

彼は引き金を引いた。撃鉄が下ろされ、火薬が火皿で燃えた。しかし銃は発砲しなかった。

第十一章

春の出来事で、クールの町と国中が緊張した興奮状態にあったとき、ルクレーツィア・プランタは一見その出来事とは関係ないよう見えた。彼女は一人っきりで自分の堅牢な居住地、リートベルクにいて、そこは、軍用道路から遠く離れた山腹にあって、その咲く平原や手入れの行き届いた畑や木々の庭園の中、地方的平和な一幅の絵となっていた。

これに対し、カーツィスの尼僧達は、国と一緒に、全身全霊で恐れ、期待し、喜んでいて。彼女達は、ユルク・イエナツチュの布告が響き渡ると、ヤクザなフランス人達の攻撃に備えて、すべての修道院の人々を、下僕の小倅に至るまで配置した。彼女達は陽気な寄贈者として、自分達のささやかなワイン貯蔵庫を空にして、ライン堡壘に向かったり故郷にまた戻って行く国民軍兵士に振る舞った。斧槍や鉄弾付き棍棒が尼僧院の墓地の平和な十字架に立てかけられていた。老いも若きも修道院の壁沿いに集まって、尼僧達が軽快に行き来して、小さな木製の鉢に最後の一滴まで果実酒やワインを注いだ。

フランス人の退却で明るい歓声に包まれたドムレシュクでは、ルクレーツィア嬢が秘密交渉でいかなる役目を果たしていて、お蔭で、クールでの奇襲[クーデター]が可能になったのか、誰も予感していなかった。カーツィスの尼僧達すら知らなかった。尼僧達はその聴罪師の要望に基づいて、令嬢との付き合いをますます熱心に、信頼して育てていたのであった。パンクラーツ聴罪師が、リートベルクのプランタ家の最後の末裔は、抗い難く修道院の輪の中に入るということになるという利己的な考えを尼僧達に植え付けたせいではなかった。尼僧達は神父の英知を信頼して、彼女の将来や修道院の目論見と関連するような問いかけや依頼をせずに、主に社会的関心や生来の気立ての良さ故にルクレーツィアと付き合いしていた。一 国の中で起きている珍しい出来事について、尼僧達自身が様々な道で聞き知った出来事について、遅滞なく令嬢に教えていなかったら、令嬢が気の毒に思っていたであろう。

勿論尼僧ペルペーチュアにとって、少なくともルーカスの許で、山の向こう側への最近の令嬢の長い留守について、若干のヒントを得ていなかったら、あるいは最も確かな手が

かり、神父パンクラツィウスの手紙そのものから、次のような次第と知らなかったら、彼女らしくないことであつたらう。つまり、すでに冬に、ここでは話せない不愉快な財産継承の件、家系に関する件のために、ルクレーツィアはミラノに赴くことが必要になった、と。

昨年のミラノへのルクレーツィアの旅は難儀なものであつた。しかし彼女はイエナツチュから依頼された目的をたゆまず追い、彼女の強固な意志で達成もした。冬には危険な山越えという[往復で]二回に及ぶ苦難の行路は、彼女の勇気を最大の試練に晒した。この艱難をこの強力な女性は、忠実な、風雪に耐えたルーカスとその山育ちの息子達の一人の同伴を得て、臆することなく、疲れも見せずに、克服した。しかし彼女が、ミラノで関係するパンクラツィに会い、セルベッローニの許に案内され、この利口でタフな政治家に直面して、自分が自分にとって不慣れな領域に迷い込んで、これまで自分が考えたこともない問題に巻き込まれていると感じたとき、勝手に違つた。

グラウビュンデン軍大佐の全権委任者という彼女の立場は極めて独自のもので、この状況のすべてに疎い人々の目には曖昧な立場に見えたに違いない。彼女のことを良く知っていて、自分の父親の殺害者は彼女にとって憎悪の対象であると承知していたセルベッローニは、この錯覚に陥ることはなく、彼女が自分の父親と叔父の政治的目標を全力を傾注して追求していると理解していた。しかし彼は別の錯覚に陥っていた。

彼はこう思っていた。彼女は最初から、スペイン党派側のグラウビュンデン亡命者達の政治的策謀を承知しているのであろう、と。それで互いに対立する利害の全ての織り生地に通曉した女性として彼女を扱おうとした。彼はこの無垢な女性を、万事自分の周りを劣等な息吹で汚し、有毒なものとする彼女の従兄弟との無益な政治的疎通関係に導いた。彼は、彼女を傷付ける気はないままに、関連する策謀を上手く導く者達に与える報酬を知らせ、その顕彰を暗示して、彼女の心を混乱させた。成功すると、彼らの前途に広がる輝かしい展望を示した。彼は、そう述べることで、政治の卑俗な策謀や秘密の手段に対するルクレーツィアの軽蔑の念が募って行くことに気付いていなかった。

ゲオルク・イエナツチュも彼女にとって別の照明を受けることになった。彼の純粋な祖国愛に対する信頼も、彼女の感受した一般的反吐による侵食を受けた。彼の本性が確固としてものであるという彼女の信頼は揺らいで、それでいて咄嗟に、この疑念でいかに彼に対する自分の関係が心の中で陰ったか、すっかり自覚しているわけではなかった。

彼女を支えたものは、自分自身に対する忠誠であつた。彼女は、自分に任された五つの条件をどんなことがあつても譲歩せず、どの一点も値切らせないと約束していた。これに関して揺るぎなかつた。自分の父親の思い出を彼女は忘れなかつた。彼女は疲れた折には、父親の姿を思い浮かべて英気を養い、専ら父親を思い出すことに集中して、イエナツチュが提案した協定締結のために働きながら、父親の精神で行動しているのだと、その自覚を活発にさせた。

彼女が自分の課題を、積極的で忠実な道具として果たし、スペインによって承認され署名された条件を持って山岳をまた越えて来た後、彼女はリートベルクの隠棲生活に戻り、自分の保管している文書が、一 彼女の推測では、カーツィス修道院の仲介によって一 要求されるまで、そこで待っていた。

かくて三月となったのであった。するとある晩、夜になったときに、イエナッチュ自身がまたリートベルクに現れた。パンクラーツ神父一通の手紙がミラノから届いて、ルクレーツィアが旅立ったこと、彼女に認められたスペインの全権委任状は彼女の城で保管されていることを知らせていた。そこで彼は、セルベッローニの署名した文書を彼女の手から受け取るためにやって来た。

彼が入って来ると、ルクレーツィアの心は激しく動悸した。しかし喜びよりもむしろ突然の驚きのためであった。

今一度彼の側で一つの変身がなされていた。今日彼の目から煌めいていたのは、もはや以前の若々しい傲慢さではなかった。どのような障害にも尻込みしない確信、彼女が再び彼と知り合ってから以来、彼が帯びて彼女に向かってきた確信でもなかった。それは彼の本性における何か度外れのもの、彼の声や姿勢に窺われる苛立った暴力的なものであった。あたかも超人的な力の緊張で、彼は軌道や、最後に自分の本性に対し置かれた境界石から投げ出されたかのようにであった。

彼はようやく文書を握って、通読すると、彼の顔に野蛮な歓喜が燃え出た。彼は勝利を祝って、彼の使いの女性の両膝を抱こうとした。しかしルクレーツィアは誇り高く、震えながら、退いた。

すると彼は手を天に突き上げて、挑戦的歓声を上げた。「ルクレーツィア、これが首尾良く行ったら、これから先、私に不可能なものは何もないと、誓って言えるぞ。...そなたの父の血をも乗り越えられよう。...復讐の天使の両手から剣を奪って、そなたを得てみせるぞ。そなたを、ずっと昔から欲しかったそなたを」。

ルクレーツィアは、彼の手を握って、彼と一緒に狭い戸口を通過して、ドーム状の隣室、狭い納戸に入った。その奥の壁は、一つの旧式の使われていない暖炉が置かれていて、その上には粗雑に描かれた十字架があって、禍々しかった。

「リートベルクでは結婚式はなりません」と彼女は言って、それから、顔を両手で覆って、自分の最も奥まった部屋に逃げた。

数週間して、ロアン公爵への裏切りとグラウビュンデンの解放が一つの既成事実となると、国中がこれで湧いたが、一人っきりのルクレーツィアの心に不安な感情が忍び込んできた。自分の秘かな協力作業でゲオルク・イエナッチュと永久永遠に結ばれ、救出の彼の仕事に関与しながら、彼の咎にも関与したかのようにであった。自分の心が彼の前で驚き始めた瞬間、彼女は解きがたく彼と結ばれてしまい、彼女は、心の中で彼に対して一つの防御を築きながら、その度に思い返していた。自分の人生の義務はまだ果たされていない、自分の父親の精神は、父親にふさわしい血の贖罪でまだ償われていない、と。

グラウビュンデンから公爵が退去した後の五月の末に、ルクレーツィアは自分の嫌いな従兄弟の短い訪問を受けて、落ち着かない気分になった。彼は彼女に、自分は急いでミラノに戻る必要があると仄めかした。ミラノにイエナッチュが現れ、セルベッローニと直接、グラウビュンデンとスペインの関係について最終的合意の交渉をするのだ。大佐イエナッチュはその性格の一貫しない党派鞍替えといかがわしい雄弁術で、この知事に厄災の多い影響力を有しており、それでグラウビュンデンの昔からのスペイン支持派の利害が危うく

なっており、自分自身スペインに対し長年忠誠を尽くしているのに、その果実を奪われかねないのだ、と。ルドルフは更に付け加えた。自分がこのグラウビュンデンにおける故郷の権利とその地位を取り戻す丁度の潮時になっている。自分はミラノでの交渉の際にこのことをやり遂げたい。以前から知事のお気に入りであったルクレーツィアが自分の求婚の手に応じてくれるならば、そして彼女との婚約で、リートベルクのプランタ家という著名な家柄を自分が再興するならば、自分には、利を求めて、セルベッローニの好意を得る自信はあるのだ、と。更にルドルフは言った、自分はルクレーツィアが承諾の返事を与える条件は何か、多分承知している。 — イエナッチュに対する血の復讐の完遂であろう。

— この条件を果たしてみせよう。このことは今では以前よりも容易になっている。大佐の敵どもが極めて多様な理由から増大していて、それも日ごとに増えている状況だから。しかしまずイエナッチュはスペインとの条約の最終的合意を仕上げるに違いない。イエナッチュのみが、これを仕上げられるのだから、と。 —

かくて彼は山岳を越えて行った。

彼が姿を現したことの印象は、ルクレーツィアにとって憎むべき、心落ち着かないものであった。しかし彼女はルドルフの人柄をほとんど評価していず、それで彼の計画を聞いても本気で驚きもせず、関心も湧かなかった。この出会いは彼女の心に長くは残らなかった。彼女の魂は別な不安の懷疑で揺れていた。

第十二章

盛夏であって、真昼の太陽がミラノの通りに照りつけていた。大理石の水盤の上品な噴流で冷やされた或るホールの薄暗がりの中、二人の政治家が向かい合って座っていた。明らかに重要な交渉を行っていた。四頭の金鍍金されたグリフィン[鷲と獅子の合体]で支えられた大きなモザイクのプレートの上に様々な言語と書式の議定書や条約草案が重なっていた。このテーブルに着席していた二人は、あるときは一方が、あるときはもう一方が、力を込めた右手をテーブル上に差し出して、小声の返答で用心深く、ある観点を攻撃したり、あるいは主張したりしていた。

一方の、深紅の服の、頑丈な体型の者が、今や一枚の紙を手にとって、陰気な眼差しでこの紙を通読したが、その上には、この紙片に記されている小さな文字の上に、大きな渦型装飾の、ある丁寧な官庁から発行された文字がこう記されていた。企画または案。

しかしこの企画または案は、通読者に納得感を与えず、不快感を引き起こしていた。というのは時折、苦痛や嘲笑のように彼の面影がびくつき、その力強い、大きな印章指輪で飾られた手は、その紙片を千切りたいかのように見えたからである。しかし彼は最後まで読んで、ほとんど苛立ちを隠さず、それをテーブルに投げ返した。

相手の、瘦身の高貴な六十代の男は、彼を悠然と眺めていた。この貴人の姿勢は、イタリア風の都会性とスペイン風な大公性とが混じったものであった。しかし等分ではなかった。というのは、セルベッローニ公爵が自分の著名な先祖[Gabriele Serbelloni]、カール五世旗下の将軍から畏れ多い鷲鼻と外交官的練達さを受け継いでいたとしても、しかし彼

にはその柔軟なイタリア人風な人間操作術は伝わっていなかった。彼の母親は一人のメンドサ家[軍人]の出であって[作者の虚構]、その血筋で、一 赤らんだ髪と明るい肌色の他に、一 スペイン風な尊大さと近寄りがたさの特徴を貰っていた。彼はこれを隠す術を心得ていたが、しかし内密に彼の本性全体に浸透していた。

公爵は最初に口火を切ることを、自分の威厳を損ない、知恵のないこととされていて、表情を変えず、目を閉ざして、読んだ男の感想表明を待っていた。しかしこの男は胸の上で両腕を組んで、黙っていたので、彼はとうとう発した。

「どう思われますか、イエナツチュ殿」。

ゲオルク・イエナツチュは辛辣な高笑いを発した。

「ご尊台は」と彼は言った、「私を暇な政治の素人と思し召しであろう。さもなければ、私のほとんど完成間近の真剣な仕事を、滑稽な間奏曲で中断なさりはしないでしょう。洒落は道化師的です。一 二、三の朽ちたライン河畔の町、ラウフェンブルク、ゼッキンゲン、その他、二日旅程と二晩の余所の宿の距離、我々から離れている所と交換に我々は肥沃な諸州を差し出せというのですか。ヴァイマルのベルンハルト公爵がそのアルザスから一人のラップ手を騎乗させて、これらの町に攻め入った場合には、明日にもその腐った門を開けるであろう町と引き換えに。...確かに落ちのない冗談です、ウィーンの宮廷官房とも思えない冗談だ。一 ご尊台、我々にふさわしい観点に戻りましょう」。

公爵は、素朴な、あるいは素朴な人々向けのウィーン宮廷の提案をただ利用して、時間稼ぎをしているだけであっても、いずれにせよこの素早い、遠慮ない提案の拒絶によって傷付いた思いがした。しかし彼の不快な思いは、若干強張った姿勢のため、ほとんど外に漏れなかった。

「交渉が止まってしまっていて」と彼は言った、「グラウビュンデンの殿方達を満足させるために、新たな逃げ道や妥協点が探されることになりましたら、貴方御自身の頑固さ故となりましょう」。

「満足させるとは」とグラウビュンデン人は訝しげに繰り返した、「しかしただ我らの所有物を完全に返却するだけのことですよ」。

「満足させることです」と公爵は強調した、「公正な方法で」。

「高貴なルクレーツィア嬢によって提出された私の条件は」とグラウビュンデン人は苛立って答えた、「我らの諸州の完全な返却、先の状態の回復を述べています。この要求を満足させると、ご尊台は約束されました」。

「文字通りこの要求を容れるのではなく、そもそもグラウビュンデンの殿方達を満足させることです」と公爵は威厳を持って答えた。

ゲオルク・イエナツチュはこの小さな策略に吟味の視線を送って、その中に危険はないか、調べた。それから彼は公爵を放胆自在な目で見つめた。

「ご尊台のわざわざの意味深い言葉詮索です」と彼は快活に言った、「当時、危機が迫っていて、言葉には拘泥しなかったものです。今でも、諸事象の如く、大きな価値を置いていません。これに対してもっと大事になるのは、一 とにかく言葉の多義性が問題になりますので、別の言い回しの件です。これも勿論単に音節と文字から成り立つものですが。即ち『スペイン・オーストリアとグラウビュンデンの間の永遠の平和』というものが、我々の協議する最終記録文書上に記されるべきではなく一 若干愚見を申し上げるとすれ

ば、 — 『条約あるいは同盟』です」。

「平和は素敵言葉だ」と公爵は神聖な表情で述べた。

「我々、平和と無縁な、死ぬ定めの人間どもにとっても美し過ぎるものです」とグラウビュンデン人は辛辣に答えた。それから微笑して続けた。「ご尊台も承知されていますように、聖アウグスティヌスはこう書いています。戦争は単に平和の先駆け、あるいは入口にすぎない。戦争は平和に達するのに役立つのみである、と。[『神の国』、19.12] — いずれにせよ、この両神聖なものは余りに間近で親しいものであって、一方よりも他方を信じてはなりません。従って条約あるいは同盟です。地上的な事象に対する謙虚な言葉です」。

彼は真面目になりながら付け加えた、「貴方の御主君、カトリックの国王陛下の良心のご懸念、 — ご尊台が私に伝えましたように、 — これがために — 非カトリックの勢力とは同盟を結べないわけですが、今やこれもいずれにせよ障害ではありません」。

「どういうことです」と公爵は不審げに尋ねた。

「今回グラウビュンデンはカトリック勢力と見なされます」とイエナッチュは冷淡に主張した、「イタリア人の領主達を含めまして、その住民の過半数、それに交渉している国家代表者自身、この信仰、カトリックに帰依しているからです」。

「貴方は改宗されたのか」とセルベッローニは不快な感動を覚えて述べた、「私は善良なキリスト教徒としてそのことに言い知れぬ喜びを感じ、貴方に率直にお祝い申し上げます」。そして彼に果てしない軽蔑の視線を投げかけた。「厳しい選択であったろう」。

イエナッチュは軽快な言葉を舌先に浮かべていた、しかし突然彼の顔は怒りで黒ずんで、反抗して叫んだ、「易しかろうが、難しかろうが、 — 結構 — 済んだことです」。

彼の激しさは自身にさえも、目に付いた。彼は自制して、囁き声で続けた、「カトリックの国王陛下は、私の改宗に喝采されたと聞いています。しかしピレネーのこちら側でも、私が嬉しく驚いたことに、この改悛で、ジョセフ神父との和解が私にもたらされました。神父は最近、他の良き知らせに並んで、神父のパトロン、リシュリュエ枢機卿が、クールでの三月の出来事について、ロアン公爵の報告を不完全なものだと判断なさり、私の筆によってその完全な説明を求めていらっしゃる」と書いて来ました」。

沈黙が生じた。

「事象を冷静に観察すれば、イエナッチュ殿」とそれからセルベッローニは言った。彼は自分の驚きを嘆賞すべき冷静沈着さで抑えていた、「それに事象のバランスの取れた配置を見れば、我々はそれほど互いに隔たっていない。事情に疎い者には意外に思われるであろうが。ただ二点、二点が議論されている。スペインは、貴方にすでに私が打ち明け、いずれ貴方自身が承認されるであろうように、ヴァルテッリーナでは我々のカトリック信仰を国家宗教とすることを要求している、 — これがまず、より重要なことだ。その次に、戦争が続く間、カトリックの国王陛下の部隊に対し、ステルヴィオ峠[シュティルファー・ヨッホ]の自由な通過を要求している」。

「より大事な点に関しましては」とイエナッチュは躊躇わず答えた、「私はもはや若き時代の狂信家ではありません。ヴァルテッリーナはカトリックに留まるべきでしょう。住民の過半、いや完全な数の者が我らの信仰に帰依しているからです。我々グラウビュンデン人は同じ原理に従って、下部エンガディーンのカプチン派僧侶に休職を命じます。ここでは一人のカトリック教徒に対し、九人の新教徒です。 — 御領主、お認めください、

私は唯々諾々と応じています。防御させてください。 — 通過は断念してください」。そして彼はテーブルに置かれている紙の一枚を公爵に署名用に渡した。

しかし公爵は遺憾の手の仕草で断った。

「まだです。慌てないでください。スペインは通過許可を得なければならない」。

グラウビュンデン人の目から不気味な炎が燃え出た。あたかも彼の髪が鉄の額の上で反抗的に逆立っているかのようであった。

「私は通過許可を貴方の手に置けません」と彼はかろうじて抑制された声で叫んだ、「私はフランスとスペインの間で、私のグラウビュンデンを実直な平和な状態に保ちたいのです。 — 我々は窒息させられています。 — 我々がこの両巨人の間で息ができるよう、隙間を頂きたい。この両国はまだ長く互いに戦うことでしょう」。

そしてグラウビュンデン人はその強力な腕を水泳選手のように前後左右に広げた。あたかも自分の故郷の奔流に対し、はげ口を求めているかのようであった。

公爵はこの全て作法を構わない身振りに手痛い思いを味わっていた。彼は、善良なる公爵の自由権利に対するこの大佐の謀反計画、自分自身が賛同した計画を思い出した。そしてこの時間、この粗野な成り上がり者が、侯爵級の男、自分のような身分の者を威嚇してきたことに立腹した。

彼は誇り高く強張って起き上がり、嘲りの微笑を浮かべた。「貴方は私に握手を強要するのか。私はロアン公爵ではない。それにここはクールではなく、ミラノだ」。

これは場違いな言葉であった。

この思わず発せられた、グラウビュンデン人にとって以前とても大切であった名前、自分が裏切った者の名前は、直接の侮辱のように彼を傷付けた。あるいは、自分の、流血はなかったものの、最悪の行為のメドゥーサ[見た者を石に変える]の頭に彼は見つめられることになった。彼は青ざめ、分別を忘れた。

「通過許可は不可能です」と彼は公爵に吠えた、「いい加減にして、署名しなさい」。

「私の前に」と公爵は冷たく言った、「いるのは誰だと私は自問せざるを得ない。貴方は同郷人のために尽力しているとは思えない。私はしばしばグラウビュンデン人、それもプロテスタント派の者達とも交渉してきた。いつも彼らは、賢明で、中庸、有徳な男達であると思ってきた。彼らは自らと、自らの小国の地位とを見誤ることがなかった。 — 貴方の主張の仕方は、単にアレクサンダーのような世界征服者か、あるいは — 一人の狂人の口にするものだ」。

ゲオルク・イエナッチュは自分の席から飛び上がった。燃えるような眼差しで、霊のように顔色を変えて、彼は公爵の前に立っていた。

「ご尊台の前にいるのは誰か。...賢明な有徳な男ではありません、いや、まこと違います、...そうではなくて、自分の祖国を徹頭徹尾完全に救おうとしている一人の男です。

— どんな犠牲を払っても。これが私の運命であり、私は運命を完成させます。

公爵、聞かれよ。私がこちらに参上する前、グラウビュンデンを去る前に、シュブリューゲンの村に人々が押し寄せて、涙ながらに私に懇願しました。平和な国にして欲しい、と。そして文字通り、『私は民衆を哀れと思った』のです。すると長い白髪と髭の一人の老新教徒がよろめいてやって来ました。 — 公爵、彼は私の父に似ていました、 — そして胸を打つ言葉で、スペイン人の策謀に注意を促しました。しかし私は馬の鎧に乗っ

て、すべての民衆の前で三本の誓いの指を突き出して、山々に響く声で誓ったのです。『神のご加護を得て、グラウビュンデンを救出する所存だ。たとえ、スペインとフランスとを二頭の狼同士のようにけしかけて、互いに全滅するまで殺し合いをさせなければならなくなっても』と。それで、...ご尊台、...」、と彼は正気付いて言った、「貴方が今日、この時間、私の条件に署名なさらないのであれば、そのようにする手筈です」。

そして再びゲオルク・イエナッチュは三本の誓いの指を上げた。

「まことに」と彼は叫んで、彼はデーモンに駆られていた、「ポンペーユス・プランタを殺害したこの手にかけて、そして善良なる公爵を騙したこの口に掛けて、誓い申す」。

セルベッローニはこの法外な男を注意深く見つめた。彼に対し、ゲオルク・イエナッチュが交渉の過程で、徹底した分別と、それに野育ちであるが、しかし少なくとも彼と同等の政治手法の日々の活動成果を見せていなかったならば、この制御されない野蛮さの発作は、このグラウビュンデン人を、彼の目の中で、一人の向こう見ずな男という下位の段階に突き落としていたであろう。かくて、この過敏な活動力に接して、彼はむしろ不安になり、自分の立場を考えて、この危険な具合に規律を無視して戦う男とは実害なく縁切りしたいと思った。

その間にイエナッチュは再び完全に自覚して、公爵は一人の軍人にして政治家を眼前にすることになった。これは鋭く、分別ある語りかけをする人物である。

大佐はセルベッローニを納得させようとして、実際彼は納得し、騙されたフランスとの同盟は全くあり得ないことではない、危ういものに見えるが、事象の流れから見れば、理屈に合っていようと悟った。

「フランス人の貴顕は度量が大きい」と彼は言った、「そして私に対し個人的に含むところがあっても、政治のことになれば抑えます。私が私のグラウビュンデンを再びフランスの利害圏に引き込めば、この貴顕は私を援護する用意があります。他方私の方でも抜かりはありません。ヴァルテッリーナの諸要塞はすでに私の手中にあります。数日して我らの全部隊、まだ武装解除していない部隊がそこに投じられます。私は常に用意の良いヴァルテッリーナ人達に、そのグラウビュンデンのパトロン達への忠誠を誓わせています。何ら異議申し立ての懸念もありません」。そして彼は軽快に掌に息を吹きかけた。

「まさに今」と彼は続けた、「ドイツの戦争芝居で気まぐれなペロナ[戦の女神]は、スペイン・オーストリアに対しまた一層無愛想に出現していますので、グラウビュンデンでのこの急速な展開は、カトリックの国王陛下の御不興を買うに違いありません。私の条約へのこの署名が取り返しが付かないほど遅滞した場合には、ご尊台のマドリッド宮廷への個人的関係も若干冷え込まないかお考えください。...比較するわけではありませんが、

ご承知のように、高貴なロアン公爵は全く、我らのグラウビュンデン人の流儀や性質を知らなかったために、彼の政治家としての名声をふいにしてしまいました。こんな目に貴方は遭ってなりません。一 私のことを案ずることはありません。私はカトリックの国王陛下の前で自分の正当化はできますし、この物事の必然的経過について陛下にご進講できます」。

大佐は秘密めかして、知事に身を屈め、自分の改宗によってスペイン国王陛下の耳へと開かれた聖職者の道、回路を囁いた。

セルベッローニは網の中の自分を見た。彼の中にこの大胆な策謀家に対する致命的憎し

みが生じた。この男をここミラノですぐに逮捕して殺害したかったことであろう。それは彼の権力でできることであった。しかし彼は利口で、誇りもあって、この権力の乱用を控えた。自分にとってふさわしいのは、万国法[国際法]で守られている公使を無事帰すことであろう。

条約に署名しないままにか。

駄目だ。自分はこの男が、その脅しを実行しないという確信を抱けない。この場合、彼自身にとって、国王の不興が確実なものに見えていた。

しかしこのグラウビュンデン人に対して彼の実行力を最も萎えさせたのは、この卑劣な男がその改宗でフェリペ四世[1605-1665]の敬虔な魂に対して獲得したように見える聖職者的影響であった。これはどうにも計算の仕様もないことであった。

「落ち着き給え」と彼は威厳を持って言った、「貴方は不必要に熱くなっておられる。複雑で詳細な国家的交渉の落とし所に不慣れなようだ。レモネードを飲まれよ。一緒に考えることにしよう。冷静になる時間を待とう」。

グラウビュンデン人は、自分の意向通りに書記に書かせた条約をまた、テーブルの上の書類の中から取りだして、それを公爵に再度提示した。

「今日の話はすべて」と彼は言った、「単にオーストリアからの軽率な提案にすぎず、精神力の演習、訓練にすぎません。事実を変えるものではなく、事実の上を滑って行くものです。...ご尊台、これらの事実を、金箔や付属品を付けずに、直視致しましょう。一

事実はこのようなもので、この解決を求めています。一立派に決着を付けてください」とゲオルク・イエナッチュは衷心から頼んだ。「私は貴方の偉大で賢明な政治を称えるのに吝かではありません」。

公爵がこの追従に気を良くしたのであれ、自分を脅したこの男の眼差しをこれ以上我慢したくなかったのであれ、彼は眉毛をつり上げて、今一度ゆっくりと条約の要点に目を通し、機械的にペンに手を伸ばした。

イエナッチュはペンを取って、それを浸し、愛想の良いお辞儀をし、昔からの不屈の表情を浮かべて、ペンをスペインの政治家に渡した。

署名が完了すると、公爵はグラウビュンデンの全権委員の方を向いて、少なくとも二、三日ゆっくりして、条約締結の際に慣例の贈与や名誉勲章を受けて頂きたいと頼んだ。それから彼は部屋の敷居まで彼と同伴した。

ゆっくりとした足取りで戻りながら、彼はホールの中ほどで立ち止まった。

「この人間は余りに私に接近して来た」と彼は自らに言った、「彼を生かしてはおけない」。

第十三章

森は山腹で紅葉して、実の落ちた果実樹がかさこそとその黄金の葉を散らす時節、最後の陽光の日々、カーツィス尼僧院の聴罪師、その不在を嘆かれた男が、長い滞在の後、ミラノからまたドムレシュクに戻って来た。パンクラーツ神父は、アルメンスの修道院の再興に成功しなかった。ミラノの条約交渉の際は、その為に尽力していたのであった。しかし彼は別の驚くべき、とても喜ばしい知らせをもたらした。早速彼は自分が戻った夕方、

リートベルクへ赴き、令嬢との会談を求めた。令嬢に対し、彼は喜びで輝く目をして、將軍イエナツチュ閣下は、以前彼女の良きカトリックの家系の不倶戴天の敵であったが、一ヵ月前、自分の罪の総告解を済ませ、完全な赦免を得た後、唯一成聖[カトリック]教会の聖母の懷に戻って来られたと語った。

この報告をしながら彼は令嬢を勝ち誇って見つめた。彼は、彼女の運命をこの喜ばしい出来事と関連付けているように見え、こう思っているように見えた。他の全ての不埒な罪と共に、この大きな贖罪の行動で、彼女の父親の死も、殺害者の良心から洗い流され、神や人間の面前で償われている、と。しかし彼女は青ざめた。そして彼が黙っている令嬢の返事を、ずる賢い期待に満ちた視線で窺っているとき、彼女はようやく気を取り直して言った、「これは神々しい恩寵の前代未聞の奇蹟です。それでこの恩寵に対する私の感謝の念は、ただ一つの方法でしか表明できません。 — カーツィスの修道院で尼僧のヴェールをまとうことです」。 — この神父の長年の修練の人間知をあざ笑う一つの返事であった。数年前からイエナツチュに傾いているルクレーツィアの心情を、自分が良く承知しているその心情を、旧来の復讐の義務から解放することを、もっと簡単なことと考えていた彼は、この義務を必ずしも非難せず、名誉を重んずるこの国の風習にかなっていると尊重していたが、しかし殊にこの場合、キリスト教的愛や世俗的知恵と馴染まないものに見えていた。

ルクレーツィアは神父の知らせに驚いていた。イエナツチュが自分のプロテスタント信仰を取り消したことが本気なのか、これはあり得ないことと、彼女は承知していた。あたかも彼はそのことで、自分の最初の、内奥の確信を否認したかのように、あたかも今や全く不誠実な人になって、自分の本性を否定したかのように見えた。何故そのようなことが出来たのか。この濁った行為をグラウビュンデンに対する自分の愛で弁解するつもりなのか、ロアン公爵に対する裏切りを自分の運命の一種の必然と言い繕うようなものなのか。

何でこのようなことをしたのであれ、これは単に計算や思慮思惑にすぎない。以前のユルクには考えられなかったことであろう。

いずれにせよ、彼女の弱い心が最後に頼りとしていた彼と彼女の間の一つの柵が、このことで取り払われてしまった。

雪が高く、静かな溪谷を埋めて、リートベルク城の屋根と塔に積もった。すると一月末にかけて、こう告げられた。つまりグラウビュンデンの旧来の国境と独立を回復するスペイン・オーストリアとの堅牢な和平[史実では1639年9月3日で、イエナツチュの死後]がようやく締結された。それは、この国がかつて有した中で最も偉大な男のすべてを計算した賢明さと鉄の意志力の賜物である。即ち、ユルク・イエナツチュが、同盟をミラノで晩夏にセルベッローニ公爵と協議し、ウィーンとマドリードの両宮廷での承認は遅れながらも、年末には決定の運びとなったものである、と。更に続いて布告された。グラウビュンデンの公使は翌週にクールに到着し、どのような異議申し立てに対しても慎重な条文の飾りや門で防御された文書、皇帝陛下、国王陛下の署名や印章で効力ある文書は、厳かな会議で、グラウビュンデンの参事官達に渡されるであろう、と。

二月の初旬には雪解けの陽気が流れ込んで来た。フェーンの風がヴィアマラ[悪路]の谷

間に吹き荒れ、リートベルクの古い石壁の周りに呻き、口笛を吹いた。大気は生温かく、春が時期尚早に国に侵入したいかのようにであったが、しかし重苦しく脅すような雲が空を覆っていて、不気味に夜の中、さらさら解けて行く雪の音や、暗く星の見えない闇の中を抜けて行く威力ある溪流小川の轟音が響いて来た。

ルクレーツィアは窓辺に立っていて、彼女の視線は、ハイツェン[ベルク]山の巒に沿って這い込み、向かい側のライン川岸辺や軍用道路の上に灰色のヴェールのように垂れ込めている霧を透視しようとしていた。霧の中を、長い、途切れた行列が進んでいた。そして遠方の混乱した物音が、個別の音色となって、彼女の許まで聞こえて来た。ギャロップする騎乗者の群れと推察された。そして荷を引く獣の首の鈴音も風に運ばれて来た。

これはただ、和平文書の伝達者としてクールへ向かいつつあるイエナッチュとしか考えられない。しかし次第に新たに霧の中を進む者が現れて、今や後に残っていたお供の人々の一部が、道路がリートベルクへ分岐するところで、その行列から離れ、城[宮殿]の方へ向かって来た。

彼は、その凱進行列の途次、世間への見世物として、ルクレーツィアを迎えに来て、自分の最難関の戦利品として、敢えて彼女と一緒に連れて行く気になっているのであろうか。

しかし違う、一 彼は先に進んでいる。彼女は霧の隙間越しに彼の輝かしい馬具を付けて黒馬が先駆けて行くのを目にした。その馬の踊りや騎乗者の手の仕草は彼女への一つの挨拶を意味しているように彼女には思えた。

その間その霧の塵埃は雨に変わった。しかしリートベルク通りの馬は今や湿った平原の間の全く間近のカーブの所に出現した。それは令嬢の従兄弟ルドルフであった。今回は彼の切り詰めた状況にもかかわらず騎乗の下僕達を沢山従えていた。彼は堅牢な邸宅に泊めて貰う伯父由来の権利を主張した。彼の郎党の大方はいかがわしく不潔な外見であった。彼はその郎党を、身なりや武具から判断すると、グラウビュンデンの南方の溪谷出身者から徴募したものと思われた。ただその群れの中の一人だけは違ったろう。まことに巨大な男で、粗野な肢体、顔色は赤らんでいて、ルクレーツィアはその者を、その伝説的に強壮な体つき故に、広く恐れられている乱暴者、シュプリーゲンの居酒屋の息子と見知っていた。彼は雨のため熊の皮をフード付きコート代わりに被っていて、処分された熊の鼻や耳の下から獣のような森人間が覗いていた。

ルクレーツィアは、自分の到着をマスカット銃の銃声で知らせるこの野蛮な召使い達を、城代を通じて、隣接する建物へ案内させ、そこに泊まらせることにした。歓迎せざる従兄弟の接待は夕食の時、ようやく始めた。その時には彼女の従者達も参加する習慣で、ルーカスが家の番頭の役目を果たした。

食事を一緒にした者達が去った後、ルドルフは従姉妹との面談を求めて、頼まれもしないのに部屋に居残った。その部屋ではルーカスが令嬢の合図で、食事容器の片付けをただゆっくりと段々に済ませていた。老従僕が居合わせても、彼は遠慮なく、彼女に近寄って、小声で脅し文句を囁いた。彼は彼女に面と向かって、自分は、明日クールで偉そうに凱旋するであろう新たなグラウビュンデンの独裁者のために、ミラノで使者の務めを最初に果たした人物は誰か多分に承知している、と。「この成金は王侯のような随員を連れて、高価なベルベル産の馬に乗って、山越えの間ずっと私の後を付けて来た」と彼は羨望して言った、「シュプリーゲン峠では彼に道を譲らなければならなかった。絶えず彼の小姓達

が、私の背中にプランタ家は貧乏だと嘲笑を浴びせていたからな」。

ルクレーツィアはミラノへの彼女の旅の目的について、静かに誇り高く同意した。

するとこの破廉恥漢は臆面もなく、彼女は大佐に対し親しく言いなりになっていると咎めた。「彼とは決着を付ける潮時だ」と彼は彼女に叫びかけた、「私同様に、この卑怯者を血祭りに上げようと望んでいる騙しと嘲りに甘んじていた者は今日数多い。彼の敵はスペインでもフランスに劣らず多い。

しかしルクレーツィア、そなたは復讐という神聖な義務を恥ずかしくも忘れており、父親に対し全くの不忠者となっている。一 彼とは縁を切れ、明日と言わずに、早速今日のうちに。ポンペーユス・プランタの殺害者がその娘の好意を得ていると自慢させてはならない。私はこの家の名誉を回復する役目を担っている。裏切り者が転覆したら、私はそなたを妻にする。私はプランタ家の財産を不埒者の手には渡さない」。

令嬢は答えなかった。しかしルーカスは、自分の女主人がひどい扱いを受けているのを見て、憤怒の余り心が激して、拳を固めて、彼女の横に立った。ルクレーツィアは唇を閉ざして、真っ直ぐに青ざめて、侮辱者の前に立っていた。「あなたの言葉は一つ一つが全て嘘であると、ご自分でも分かっています」と彼女は心を圧迫され、呻き、そして部屋を去った。

彼女は自分の塔の部屋のドアに入って、施錠する前に、一人の下僕をカーツィス修道院へ送って、パンクラーツ神父をリートベルク城へ呼び寄せさせた。しかし神父はアルメンスへ呼ばれていた。神父を向こうからこのひどい嵐の夜、戻させるのは考えられないことであった。神父は明日早朝伺うことでしょうか、とペルペーチュア尼僧が知らせて来た。

今やルクレーツィアは一人きりになった。彼女は窓辺に寄って、外の夜の国を眺めた。嵐は収まっていた。しかし星は空にかかっていた。重たく垂れ込める靄が月を覆っていて、その千切れた縁にはほとんど月の明かりの弱い反照も見られなかった。至る所に山岳や雲の黒々とした圧迫する塊が見られた。真夜中が過ぎて、それでもルクレーツィアはまだ塔の窓辺に座っていて、途方に暮れ、明確な思いも抱かず、ライン川の鈍いざわめきを聞いていた。

巨大な薄暗い厄災のように、彼女の前に、自分の人生から生じたもの立っていた。しかし自分の父親への哀悼、失われた青春、現在の寄る辺なさ、未来に対する恐怖、これらは定かならぬ鈍い苦痛となって沈んで行き、そこからただ一つの、次第に強力に響き渡る非難が発生してきて、彼女の心を捉えた。彼女は自分の父親にふさわしくない、自分の復讐を怠ってきた、と。

今でもこの重荷から自由になることはできないのか。今でも彼女に対し、彼女自身の心と一緒に、復讐の義務を軽率に忘れていざと告発する権利を、一人の臆病男から取り上げることができないのか。できない。自分は余りに弱すぎる。一 駄目だ、自分は十分に強くありたくない。

自分一人に復讐の権利はあるのだ。自分はそれを実行していない。しかし一人の別人が彼女からその権利を取り上げることがあるかもしれないと考えたとき、彼女は怒りに震えた。勿論ルドルフにこれができるとは、これは今でも全く信じられない。彼女は彼の臆病な本性の姿を、最高に厭わしい憤激発作の際に見ていたからである。このマムシが彼女の

誇り高い驚の高みに達せられようか。

しかし彼女は自分の魂の分裂に驚愕した。旧来の復讐心を抱いて行けない自分の無気力と、自分の権限に踏み込んで来ようとする他人すべてに対する手ひどい嫉妬とに驚愕した。

かくて彼女は決着を付ける決心をして、世俗を断念する決心をした。

修道院の中に入れば、彼女は安全であった。彼女はそこで自分の所有物の一切を諦めた。自分の誇り高い、常に制圧された[忘れがたい]愛を犠牲にし、余りに長く、聖なるもののように大事にされてきた復讐を諦めた、―― 修道院に入れば、ユルクの不埒な求婚も、ルドルフの反吐の出る利己心もはや手が届かない。

城の中では静かになっていた。村の中では明かりは点されず、ただカーツィスから弱い微光がライン川にかかっていた。それはすでに尼僧達が早朝ミサを歌っている修道院教会からのものであった。そこに彼女の安静の地が開かれている。自分はもはやその門のところで躊躇うことをしない。彼女は消えようとしているランプに油を差して、自分の書類を整理し始めた。彼女は自分のすべての財産に関し、カーツィス尼僧院への贈与文書を発行し、神父パンクラーツ到着まで自分の部屋に閉じこもっていることに決めた。すべてが終わった後、彼女は服を着たまま尚しばらく休んだ。

朝方になってフェーンは新たに猛然と唸り声を上げた。老下僕[ルーカス]がよく繰り返し語ったように、彼女の父親が撲殺されたかの晩のような荒れ方であった。彼女は落ち着いた微睡みに陥り、嵐の物音に起こされ、再三微睡みからびっくりして目覚めることになった。

ある夢で彼女は父親の死の場面に導かれた。彼女は父を見た、―― 父は大きく、血を流して伸びていて、彼女は嘆いて、父の上に身を投げようとした。―― しかし亡骸は消えた、彼女は一人立っていて、血の付いた斧を手をしていた。そして殺害者達の馬が蹄で蹴って逃げて行くのを耳にした。新たに一陣の風が塔を揺すって、彼女の部屋の窓ガラスが枠の鉛のところまで軋んだ。ルクレーツィアは目覚めた。

中庭で彼女は馬の足音を聞き、ガラガラと門の開く音を耳にした。彼女は窓辺に急いで、嵐のかわたれ時、二頭の馬が駆け去るのを見た。一頭は従兄弟の白馬であった。びっくりして彼女はルーカスを呼び寄せた。ルーカスはもはや城にはいず、ルドルフ殿とクールに向かわれました。ルドルフ殿のお供は、後で出発し、昼時にクール近郊の居酒屋「塵埃の小屋」亭でこの殿と合流するように命じられていますと、彼女に告げられた。

忠実なルーカスが昨日の場面の後、ルドルフ・プランタと一緒に馬で出掛けたこと、ルーカスが今までの例になく、暇を取らずに去ったこと、これはルクレーツィアにとって理解できないことで、悪い予感で一杯になった。彼女はこの老公の部屋に入って、木製の長持ちを開けた。そこには彼女の父親を殺害した斧が収められていて、老公はそれを勝手に敬っているのであるが、彼女はその斧を目にしたくなくて、すると白髪の老下僕はそのことに憤慨しているのであった。長持ちは空であった。ルクレーツィアは青ざめた。彼女の父親を殺めた斧は彼女の許から消えてしまった。彼女一人に資格のある復讐が、今日にも一人の臆病者の手によってか、あるいは彼女の下僕の手によって遂行される運命である。プランタ家の血が荒々しく彼女の心の中で騒ぎ、このような僭越な介入に対して憤った。過ぎた夜の諦念は彼女の心から消えた。今日はまだ自分はリートベルクの女領主である。

―― 今日はまだ自分の父の遺産継承人である。自分の職責を、これを最後に司るのだ。

明日何が起ころうと、彼女はどうしても良かった。カーツィス修道院は向こうのライン川を渡ったところに静かな墓地のように横たわっている。

今一度彼女は神父が来ないか、陰気な嵐の吹き荒れた一帯を一瞥した。彼女は神父に、自分が夜に認めて封印をした文書を渡したいと思った。しかし時間が経過しても、彼は来なかった。ルドルフのお供がその領主の後を追って出発した。今や彼女も馬の用意をさせて、クールへ向かった。最も若い下僕、老ルーカスの息子を同伴させた。

彼女はゲオルクの許に行き、彼に警告をし、彼を救いたかった、あるいは純粋な正義の手で彼を殺したかった。「ユルクは私のものだ」と彼女は自分の心に向かって言った。

正午頃になってようやく遅参の神父が門戸を叩いた。そしてルドルフの出現を聞き、更に令嬢が早朝クールへ旅立ったと聞いて驚いた。このカプチン派僧侶を塔の部屋へ、女主人が執筆する習慣である部屋へ案内するよう親しい女中が依頼を受けていた。そこで彼は完全に書式の整った贈与文書と、ルクレーツィア・プランタは世俗を棄て、カーツィス修道院で尼僧ヴェールを被る旨の宣言文を見いだした。

重大な、厳しい心の戦いの末に仕上げられたこの証言を前に、僧侶は憂わしげに悲しげに立っていた。この決定は、神聖なフランシスコ会士の純粋な申し子の場合には、思いも寄らぬほど、彼の心を喜ばせなかった。ルクレーツィアがクールへ騎行したことも、彼の心を不安がらせた。自分の告解者は難しい状況にあって、世俗的知恵というささやかな方便も逃げ道も有せず、ルクレーツィアの感情は不壊の愛情を抱いて、一度把握したものに執着して、彼女の思考は恐ろしく強引に一度侵入した軌道を進み続けるものだと、彼は承知していた。彼女にとっては、他人ならば危険なもの、前代未聞と見えるものが、逆に親しくて、自然なものに思えるのであり、そしてそれをごくあっさりと行ってしまおうと彼はしばしば気付いていた。

彼は前夜の出来事について従者達の報告に耳を傾け、次第に不安を募らせた。彼は証文を丁寧に自らの懐に収め、小さなロバに乗って、悪天候であったが休まずにクールを目指した。クールの老トラヴァース伯爵夫人の許で彼女に会えるであろうと期待して、あれこれ不幸が起きて、令嬢を安全なカーツィスへ連れ戻すと固く決心していた。

第十四章

この時刻、フォルトゥナートゥス・シュプレツヒャー博士はクールの自分の邸宅で一人の立派な客人と祝典用意の整った昼食のテーブルに着いていた。食卓の一行の温かい気分とこの部屋の堅牢な豊かさは外の路地の悪天候とは居心地の良い対照をなしていた。外では吹きすさぶ大風が屋根の雪解けの雪を飛ばして、金鍍金の鉄格子に無益な勢いでぶつかっていた。格子は、下の方が広く膨らんだ籠の形をしていて、明るいガラスの広い窓を守っていた。

銀器やヴェネツィア杯の置かれたテーブルが部屋の中央を占めていた。この美しい家族部屋の最大の、豪華兼、郷土的に快適な装飾は、技巧的に彫り込まれた胡桃の木の羽目で、これは可愛らしいコリント式木柱によって十二のトロフィー[狩猟の角等]の埋められた地に分割されていた。最上の蛇腹は半身像の女像柱によって支えられていて、その間は輪状

に周囲にある木のフリーズ[带状装飾]が狩の様々な場面を、射手や犬や寓話的獣を配して、浮き彫り細工で表現していて、これらの作品を博士はもっともなことに特に自慢していた。天井画の箇所は、ベルネックのシュプレッヒャー家の大胆に彫り込まれた紋章が占めていた。

部屋の隅を占めていたのは、立派な花輪を被せられたカッヘルオーフェン[壁タイル暖炉]の温かい設備であった。堂々たるもので、同時に愉しい眺めであった。というのは易しい色合いの天使や花綵装飾の間に何枚かの絵のシリーズで太祖アブラハムの全ての話しが展開されていた。聖書の場面は、董色や黄色、青色の輪郭や明暗で、白いカッヘルに大いに勤勉に描写され、その下に設置された機知豊かな銘文で説明され、有益なものとなっていた。

食卓に残っているものは、今やただ三名であった。この家の下の子供達は、食卓の末席に陣取って、謙虚に静かに立ったまま食事を済ませて、すでに去っていた。賓客席には、家の主人とそのブロンド髪の子供の間に、祝典の客人としてハインリヒ・ヴァーザー市長殿が座っていた。今日、和平文書の公の伝達式の日、この日のために、グラウビュンデン三州とはいつも懇意の自分の父祖の町、チューリヒ共和国が彼を派遣したのであるが、完全な職務正装で、その市長としての首飾りをまもって現れていた。この国[町]の最高位に、彼はその思慮深い業績と、段々に日の目を見るよう計算された謙虚な功績のために、異例の早さで、嫉妬を受けずに達していた。というのは彼は、ようやく四十歳代の入口という、新鮮な生命欲の年代であったからである。若々しさの息吹が、その饗宴で赤らんだ面貌に浮かんでいた。以前の動揺しやすい繊細さは、好意的な、しかしずる賢さとは表裏一体の賢明さという悠然たる表情に変わっていた。

今日彼は興奮して見えた。殊に自分の隣の娘と話すときがそうで、娘の言葉や表情に彼は吟味するような愛情に満ちた視線を向けていた。青い生地の上のほっそりとした首筋で、母親から譲られた、透明なウィング・カラーのオランダレースの上に漂うその子供っぽい顔は、彼にとって何か特に魅惑的であった。その明るい顔の優しい丸み、そして長いブロンドの睫毛と快適な巻き毛の髪の下から覗いている目の、その顔と調和した穏やかな輝きは満ち足りた平静さの印象を与えた。それはヴァーザー氏に、チューリヒ湖の澄んだ湖に反映している銀色の月を思い出させた。この優美な月は、自分の晩年の空に幸せを運んで昇って欲しいものだと彼は次第に憧れて願っていた。

博士の人生観はその痼疾性気質のために全体陰鬱なものであったが、自分の目の下で育ちつつある家庭的出来事を父親らしい満足感を交えて見つめていた。しかし彼の考えはとりとめがなかった。ヴァーザー氏が全く打ち解けて、昼食前のある知らせを伝えたのであった。この知らせを市長はアマンティア嬢には差し当たり、今日のうちは知らせず、悲しませたくないものであった。―― ロアン公爵逝去の知らせであった。その死を感動的言葉で綴ったドイツの号外がチューリヒに届いて、ヴァーザーはそれを歴史家のこの友に持参したのであった。

その上博士は今にも始まりそうなクールへの凱旋將軍の入城のことを考えていた。この將軍の人となりは博士にとって以前から馴染みがなく、厭わしいものであった。それにこの將軍は、シュプレッヒャーの家、かねて博士が名誉の要塞と誇り高く言う習慣であったこの家を、裏切り行為で汚してしまったので、これは最も許せないことであった。

しかし奇妙なことであった。市長が令嬢に対し、この祝典で会合しているこの時間、まだ秘しておきたかったことが、磁氣的引力を令嬢の予感的心情に及ぼしたごとく、少なくともアマンティアは今日善良なアンリ・ロアン公爵の思い出や彼への言及を忘れず、このことと関連して、公爵の副官のことも関心を持って思い出さざるを得なかった。

ヴァーザー氏は自分の同郷人ヴェールトミュラーに対し格別の偏愛を見せなかった。ヴェールトミュラーの武勇や利発で教養ある精神に対し、彼の口は褒めた。しかしこの少尉の辛辣で、矛盾をわざと弄ぶ本性については遺憾なものと頭を振った。そんなわけで同郷の者達は、彼を見ると心落ち着かず、故郷の町では芳しくない評判を得ています。彼はチューリヒに滞在することは稀ですが、それでも高位の聖職者を攻撃してわざわざ反感を買い、それなりに興味深い都市的案を高慢に低く見下して、皆の衆の不同意をことさらに買い、色々な物理学的仕掛けで、これは勿論魔術という馬鹿げた嫌疑を招いているのですが、普通の男に不気味な恐怖を植え付けている始末です。それで彼はチューリヒで、自らの道が閉ざされており、立派な市民達の信頼も将来ずっと潰えています。信頼というのは、綺麗な良心と同様、真の共和国主義者の命の気と言えものなのですが。 — 「しかし、この若い男に関して、最悪のことは」と公正な以上に興奮して、市長は結んだ、「全ての一切の敬虔さの欠如です。 — つまり、何と申しましょう、衷心から敬う、 — 申して良ければ、衷心から愛する、敬虔さです。 — 乙女のシュプレッヒャー嬢、宗教的情緒の基盤に欠けた一切の世間知、如才なさは何になりましょう」。

「少尉殿で私が素敵と思うのは」とアマンティア嬢はほとんど恥じて言った、「高貴なアンリ公爵への彼の忠誠です。あの裏切り者ゲオルク・イエナッチュと並ぶと、彼は真の名譽の騎士に見えます。イエナッチュは立派な方ですが、私にはいつも邪悪な霊に見えたものです、あの人が私どもの階段を飛び上がって、公爵の許に来られるたびに」。

「判断するのが難しい性格です」とチューリヒの市長は言って、悲しげな真面目な調子に移りながら、フォルトゥナートゥス氏の方を向いた。「少なくとも一点で、ゲオルク・イエナッチュは我らの最大の同時代人達に勝っています、 — 彼の過大な祖国愛の点です。私が見るところ、その祖国愛が血のように彼のすべての血管に流れています。これが彼の多面的本性を解くいつでも合致する唯一の鍵です。私は認めざるを得ません、彼は祖国愛に対して率直な良心には担えないほどのものを犠牲にした、と。しかし」と彼は躊躇いながら、声を潜めて続けて、「祖国の繁栄ために必要な行動が、純粋な手によっては実現されないとき、このような無法者の腕力人間によって引き継がれるというのは、我々正直者の政治家にとって一つの幸運ではないでしょうか。 — この人達には、然る後、全知全能の神がその正義の裁きを下されるかもしれません。と申しますのは、彼らも神の道具でしょうから、 — こう書かれているようなものです。主は人間の心を水路のように司る、と[箴言、21,1]」。

「それは稀なる危険な命題です」とフォルトゥナートゥス氏は憤激して叫んだ、「貴方のように厳格な方の考察、格言の中にそれを見いだすとは驚きです。そんなことをすれば、単刀直入、最悪の犯罪を弁護することになります。お考えください。何と容易にこのような無法者、良心のかけらもない者が、一度計算不可能な軌道に投げ飛ばされて、自分の情熱の赴くまま台風の如く自ら仕上げた作品を破壊してしまうか。ユルク・イエナッチュの場合、どんな具合であったか、ご承知かな。私は確かな筋から聞いています。つまり彼は

ミラノでの交渉の際に、彼の提案に文句を付けるセルベッローニ公爵を狂人の如く脅してこう言ったそうです。スペインが自分の意志通りに動かないならば、フランス人をまたグラウビュンデンに呼ぶぞ、と。いや、彼は、スペイン国王陛下の聴罪師の心を得るために、
— というのはマドリッドでセルベッローニに対抗する別の影響力を天秤に投げたいからで、
— 自分の生来の新教の信仰も不埒にも破棄したそうです」。

「神の許されんことを」と市長は率直に驚いて言った。

「我らの小国はこの今や怠慢になってしまったが、それでも活動にはまだ法外な人間をどうしようというのか」とシュプレッヒャーは続けた、「此奴は我らの窮屈な関係から抜け出して、例を見ない成功に酔い、狂気にまで至っています。
— ミラノでの交渉の休憩中、彼は我らの伯爵領キアヴェンナで、ここで彼はグラウビュンデンの三州からアンリ公爵への自分の裏切りの報酬として、民事及び軍事の権力一切を無制限に自らに委譲させて、贅沢なネロのような治世を行い、王侯以上の宮廷生活を送っています。貴方にその幾多のことを語るができますよ。私は彼の活動を毎週クリオの鋭い鉄筆で描いているからで、その鋭い機鋒を誰のためにも緩めるつもりはないのであって、息子とか
— 婿のためにすら緩めはしないのです」とフォルトゥナートゥス氏は暗く微笑して結んだ。

「まあ何て嵐、神様助けて」とアマンティア嬢は叫んだ。この驚愕の叫び声で華奢な赤面を隠していた。実際外の嵐は倍加していて、窓辺の飾り格子を突き飛ばしかねないその突風は、堅牢な邸宅を揺さぶり、食卓上のグラスが微かに震えて鳴った。ドアが開いて、びっくりした女中が現れ、報告した。聖ルーツィーの古い鐘楼が何回か揺れるのが見えた後、この嵐で音立てて崩れてしまいました。丁度イエナッチュ大佐がお供と一緒に門から入って来られた時でした、と。

「これは予兆だ」と真面目にフォルトゥナートゥス氏が言った、「我々はティトゥス・リヴィウス[紀元前59頃-17年、歴史家]から承知していることだが、それにこの点、何度か経験もしているが、自然は人間界の出来事と秘密の関連を有しており、偉大な事件を予感して、その恐ろしさを伝えながら同伴するものだ」。

他の状況であれば、多分市長はこの迷信的見解に上品な微笑を浮かべて返事としたであろうが、今回は痛々しい予感を抑えることができなかった。

ルーツィーの塔の瓦解は、彼がベルベンに滞在した際のヴァルテッリーナでの虐殺に先立つ日々の出来事、当時の予兆や不思議、美しいルチアの殺害を思い出させた。

嵐は吹き荒れて収まったかに見えた。しかし大気は湿っていて重く、暗い雲が低く垂れ込めていた。路地は啞然とし、狼狽した様相の下々の民で一杯になった。この時一人の騎乗者が角から宝石の煌めく赤い服を着て、外套をなびかせ、羽根飾りの揺れる帽子をしっかりと額に収めて、飛び込んで来た。それはユルク・イエナッチュで、彼は自分の不穏な黒馬をしっかりとシュプレッヒャー家の前で制御して、自分の儀仗護衛の方を振り向いていた。護衛は嵐で引き留められて、道路一つ分、先行者から遅れていた。

ヴァーザーは青春の友の姿から視線を外すことができなかった。彼は呪縛されたように、金属のように褐色の面立ちの凝然とした表情を見つめていた。その偉大な面影には平然とした反抗心が宿っていて、それはもはや天国も地獄も、死や裁きも問題にしていなかった。その目は達成した勝利を越えて、ただ余所余所しく見つめていた。
— どんな未知の目標を目指しているのか。...再び市長にとって昔の思い出が蘇ってきた。ベルベンでの火災

である。彼はユルクが、美しい亡骸を腕に抱いている姿を彷彿した、彼の忘れることができない、かの炎と冷たさの混じった表情であった。ユルクは今日彼の名声の絶頂にいるのに、よりによって当時と同じように悲惨さの深みを覗いているようなのはどうしてなのかと彼は自問した。

「ご覧なさい」とシュプレッヒャーは自分の方に注意を払っていない無関心な姿勢に苛立って囁いた、「彼はコンポステーラのサンティアゴ[聖ヤコビ]教団の綬をこの気遣いは帯びています」。

ヴァーザーは答えなかった。というのは彼の頭上で、一 春の始めには珍しいことであったが、一 鈍い雷鳴が轟いて、突然色褪せた稲妻が低く垂れ込めた雲を引き裂いたからである。

「裁きの光線です」とシュプレッヒャーは青ざめて呟いた。

ヴァーザーも、天の炎がこの反抗者に当たったと思った。しかし彼の眩んだ目がまた見開いたとき、イエナッチュは動じず、棒立ちになって、脚を踏みならしている黒馬に乗っていた。彼は馬をしっかりと抑えていた。彼一人が稲妻と雷に気付いていないように見えた。

ヴァーザーはもはや長いこと留まっていなかった。彼は、ユルクを遠目に見て心痛むその印象を、二、三親切な言葉を口から口に伝えて、和らげるべくユルクに会いたいと切に思った。祝典の参事官会議の始まる前に会いたいと彼は思った。イエナッチュに敵対する気分がグラウビュンデンでは一般的な気分かもしれないと彼は案じた。彼は、分に甘んずるよう、そして彼が和平文書を参事会に渡して、彼の名声の履歴の頂点に達した後、しばらく引き下がって、神々と人間達の羨望を刺激しないようにしろ、と説得することにしようとしてヴァーザーは自分に語った。ヴァーザーは彼に助言しなかった。彼は軍人としてのキャリアを外国で続けるがいい、もしくはダヴォスの自分の領地に家を構えて、その落ち着かない魂を平静な道へ導くよう試みるがいい、と。

家の門の下でフォルトウナートゥス氏に同伴されて、ヴァーザーが彼に、イエナッチュはどこで馬を下りるのかと尋ねると、この騎乗者は辛辣な調子で答えた、「友よ、何故そんなことを聞くのか。勿論司教の宮廷だ」。

市長が一人の従者に案内されて、司教の宮殿の響く廊下を歩いていたとき、右手のドアから自分の友の馴染みの声が聞こえてきた。激しく興奮していた。それは会話で、口論とまでは行かず、相手は若干太い、不器用な声であった。ヴァーザーは司教の近習によって、向かい側の部屋へ案内され、近習は彼の到着を伝えに先に行った。遠方の二人の声は聞こえなくなった。しかしすぐその後、通路の或るドアが開いた。それは辞去したイエナッチュであった。

「そのことは当てにしないでください」とヴァーザーは、彼が外の通路でしわがれたほとんど叫ぶような声で返答しているのを耳にした。「それはできません。私は国内で修道院を再建しません。聖職者の介入は受けません」。

「大佐殿、今日の貴方の栄誉の日には」と内側から宥める声が落ち着かせていた、「我らの謙虚な願いを述べ立てて、貴方を煩わせることはしません。しかし我らの小さな意見の相違は、時間と共に自ずと解消されると確信しています。貴方はまた信仰を蘇らせて、

一人のサウロからパウロになられたのですから[イエナッチュの墓碑にある]。 —

部屋のドアが勢いよく開いて、ユルクが彼の青春の友に腕を広げて歩いて来た。彼は彼の両肩を掴んだ。「ここにも目標を達成した者が一人いる」と彼は昔からの陽気な高笑いと言った、「市長殿、おめでとう」。

「新しい地位に就いたばかりのときに」とヴァーザーは答えた、「同僚諸氏から君の凱旋のためにクールへ派遣されて、私は格別に嬉しい。私は君にこう言わざるを得ない。君は前代未聞のことをなして、不可能なことを可能にした、と」。

「ハイニー、どんな犠牲を払ったことか、自分の本性をどんなにねじ曲げたか、言えはしない。最後の瞬間になっても、奴等は私の故郷に対し、私が奪ったものを騙そうとしたのだ。 — 私は最後のカードも使い果たした。 — 汚いカードだが...嫌なことだ。しかし私は前進した。前進だ。とにかく私の人生の悪寒からも成果を出すように、無益に終わらないようにしたのだ。そこで目標に達した。私はこう言いたい。私は疲れた、と。私は、未知の、空虚なものへと前進するよう、私を鞭打つデーモンに出会わなければ良かったのと思うぞ」。

「その最後の汚い手段とは」とヴァーザーは不安になってただ一つの考えに執着して言った、「我らのスイスの改革派信仰から教皇主義への墮落のことではないのだろう...そんなことはあり得ない、考えられないよな」。

「考えられるのだ」と相手は、不埒な快活さで叫んだ、「一つの茶番に対し一つの茶番を仕掛け、取り替えたのだ」。

「君はチューリヒで神学を専攻したのに、...」とヴァーザーは動揺し、脇を向いて、顔を両手で覆った。重たい涙が彼の指の間から流れた。

するとイエナッチュは腕で彼の体を抱いて、怒ったような諧謔で言った、「市長、女のようにめそめそ泣くな。何か変か。今は我が堅牢な良心に全く別な案件を抱いている」...それから突然調子を変えて、切迫した風に尋ねた、「ラインフェルデン近郊での皇帝軍に対するベルンハルト公爵の戦争に関して、チューリヒではどんな知らせが届いているのか。私はまだ詳しいことを知らない」と彼は付け加えた、「トゥーゼスではロアンが軽傷という噂であった」。

ヴァーザーは覚束ない声で答えた、「彼の状態は最初信じられたものよりも重いものだ」、...ここで彼はつかえた。

「ハイネリヒ、はっきり言えよ」とイエナッチュは乱暴に叫んだ、「彼は亡くなったのか」。そして彼の顔に灰色の死神の影が差した。

この瞬間に鐘が鳴った。 — ヴァーザー氏にとっては、面白くなかった。彼は自分の友に警告を発し、自身の気持ちを彼に静かに話して、軽快にしたかった。鐘は兩人を市庁舎に呼んでいた。

イエナッチュはグラウビュンデンの救出を含んでいる巻き紙を握って、ヴァーザーに対し持ち上げ、叫んだ。「高い買い物であった」。

最終章

クールの市庁舎では、ゲオルク・イエナッチュが和平文書を手渡した厳かな議会が終了した後、輝かしい祝典の準備に入った。この日の夕方、この町はこの祝典で彼を称えようと思っていた。カーニバルの季節で、クールの女性達はこの陽気な慶事を楽しみにしていた。この冬、前年までの賑わいに慣れっこになっていた人々にとって、余りに物静かで厳粛な年になっていた。フランス人貴族達の創意工夫の余興も欠いていた。彼らは毎週近くのライン川要塞からクールへ駆け付ける習慣だったのである。今日はそのお預けになっていたものが取り戻される予定であった。この町のお歴々は、夏にはこの国の繁栄のために協議をしていた広くて快適なホールを、渦巻く輪舞や無礼講の仮面舞踏会のために供することを拒まなかった。この広間の右手と左手にある両会議室には、酒を用意したテーブルが準備された。

これらの対の部屋の一方は、その入口が細い、玄関から広いホールへ通ずる螺旋階段の上端となっていたが、ユスティティア[正義の女神]の部屋[虚構]であって、そこの木彫りの、色彩を塗られた寓意画は、鹿の角の珍しい席に収まっていて、天井からの三本の鎖に吊り下げられていた。その寓意画の下に、高い木びき台が置かれていて、この台には肥満した、祝典係りの亭主がいて、強力な角に蠟燭取り付けの仕事をしていた。彼の両手が忙しく働いている間、彼の舌も寡黙ではなかった。その舌は若い人々の一座に重みのある言葉を放っていた。若者達は絹の、ベント[切り込み]の入ったカーニバルのジャケットに、広いレースのカラー、リボン付きズボン、それに大胆極まる花結びの靴を見せびらかしていた。そしてすでに杯を手にしていて、彼らの言うには、カーニバルのワインを吟味していた。そしてお喋り男の発言の言葉尻を陽気に捉えては、更に新たな発言へと促していた。

「それじゃ、ファウシュ神父」と一人のスマートな若造が笑った、「貴方が大佐の天分をお襦袢の時から育てたわけだ。かくて貴方は、偉大な出来事の、小さな理由とは言わないまでも、隠れた理由となられた。そこで貴方は、ニコロ・マキャベツリ[1469-1527]も顔負けの彼の計画をも吹き込まれたわけだ。しかし何故その主役を自ら演じられなかったのです」。

「フランスをスペインにけしかけ、スペインをフランスにけしかけること、そしてこっそりとその罫から頭を引き抜くことが」と小男は、手に蠟燭を持って、その高みから下へ答えた。「有効であろうことは、我らが美しい町ヴェネツィアで我らが再会したとき、多分ユルクに親密な話し合いで、私が仄めかしたのかもしれない。しかし自らその仕事を引き受けるとなると、私の渋い思考様式のワインに不純な添加物を加えずにはできないこと、私の民主主義的過去を傷付けずにはできないことだ。私はフランス人の大使に、国境から出て行けと命じたかの偉大な日ほどに、グラウビュンデンにとって名誉ある日を見たことがないのだ」。

「聞いた話しだ、天地創造の話し同様聞き飽きた」とすべての隅から声が響いた、「ローレンツ神父。何か別の話を頼む。 — むしろ筋金入りの異教徒[新教徒]の親方が、司教猥下の蔵頭へどうしてなったのか話してください」。

「喜んで、諸君」とファウシュは答えた、「我らの時代、教訓の多い話しだ。」

猥下がその世界的に有名な司教の厨房のために心にかなう一人前の男、必要な知識と徳操を兼備した者をお求めになったとき、ヴェネツィアの私にこう書かれたのだ。私の人柄ではただ一点支障がある、 — 信仰の相違だ、と。猥下の思し召しでは、その蔵頭、典

座が、将来劫火の中、永遠の渇きに苦しむであろうという確かな展望の中にいるのであれば、そのマランス・ワインの味もしないことであろう、と。それでその厨房と私の魂の弥栄のためにプロテスタントという邪教の破棄を迫った。しかしローレンツ・ファウシュは、諸君、頑固そのものであったが、しかし首尾良く行った。交渉は、背教者が、純粋なワインを注ぐ男であってはまずかろうと狎下が納得されて、妥結したのだ」。

ファウシュは黙った、というのは丁度若い参事会会員が一同の中に入って来て、いかに誇り高く大佐がマイヤー市長に文書を手渡して、どのように立派な言葉でチューリヒの代表者がグラウビュンデンの栄光ある奇蹟の再興に対して、その父祖の町の賀詞を披露されたか、威勢良く語ったからである。

「あのハイニー・ヴァーザーも同様に私と同じクラス仲間だ」とローレンツ親方はその木びき台から下に叫んだ、「これもずるい奴。しかし我らのイエナツィオと比べたら、二流の玉だな。ただユルク君は自惚れちゃいかん。ー 私は今晚、仮装舞踏会の無礼講利用して、彼の最初のつましい服、牧師服と彼の名声の最低の出発点、つまり哀れな説教壇を思い出させて、お灸をすえよう。諸君、私の冗談にご注目。私は寺男として、彼の後を忍んで行き、その説教に合わせる賛美歌を尋ねてみよう。ローレンツ・ファウシュという名前にかけて」。

その間にすべての明かりが点されて、広間は一杯になり始めた。広い窓の壁龕では若いレディー達が囁いていて、その扇に、自分達の前に立っている伊達男達に約束した踊りを記していた。次第に身分の高い人達も現れて、先頭はクール市長マイヤーで、上品な眼差しの夫人と一緒に、夫人は丸まった首と豊満な両腕に真珠の紐飾りを巻き付けていた。金糸で縫った曳き裾服を着て、夫達の中で最も立派な夫の横を歩いて入って来た。やがて彼らの後、騎士のフォルトゥナートゥス・シュプレツヒャー博士が広間に入って来た。皆が博士をここで見て驚いていた。彼の顔も悲しげで祝っている風ではなかった。すべての陶酔的な享樂を嫌っている博士は、多分チューリヒからの友人にして客人のために今日意を決して来たのであろう。博士はその上、この友人を通じて、自分の愛しい娘御を登場させて、この友人に敬意を表していた。シュプレツヒャー嬢は、その白い絹服を着て、前面に宝石の花で止められた紗をうなじと肩の周りにまとって、名誉ある有徳なチューリヒ市長の手に引かれて幸福そうに恥ずかしそうにしている、ほとんど内気な花嫁に見えた。

ヴァーザー氏が彼女をその女友達の許へ案内し、その女性達は階段上端とユスティティア[正義の女神]の部屋に対面した広間の別な側に若々しいグループを形成していたが、男性達が上がって来る足取りが聞こえ、イエナツチュが数多い将校達のお供を連れて、ダンス・ホールへ入って来た。彼の頑丈な体つきとその炎のような顔は、相変わらず彼を皆の中で最も強力で美しい男としていた。

彼は多方面から挨拶を受けて、まだ広間の中央に、市長とその妻の側に立っていたが、そのときこのクール市長が少なからず驚いたことに、シュプレツヒャー博士が墓掘り人の表情をして、人々と間近なシャンデリアの下に進み出て、右手で静寂を要求する仕草をして、話し始めた。

「市民の皆様、私の顔の悲しみは何を意味しているのかお尋ねになる方もありましょう。今日の名誉ある祝典のために陽気な仮面を被って隠そうとしながらも抑えられない悲しみ

です。私が味わっている大きな痛みをもはや隠すつもりがないことをお許しください。これは完全に皆様も同じであり、貴方らの喜びを悲しみに変えるに違いないこの報告者と変わらないと確信しているからです。

我らの気高い守護者にして誠実な友、アンリ・ロアン公爵が逝去されました」。

ここでシュプレッヒャーの視線は、まずは声もなく沈黙して、今や最後の彼の言葉で狼狽している一同を見回した。「丁度彼の最期を知らせる号外が私の手に入りました。この訃報を聞きたいですか」と彼は尋ねて、胸ポケットから印刷された紙片を引き出した。

「読み上げて、読み上げて」と四方八方から声が響いた。

シュプレッヒャーは目を拭い、読み始めた。

「ドイツ国民のすべての新教徒の諸兄、諸都市、諸地域にここで報知申し上げるが、ベルンハルト・フォン・ヴァイマル公爵はラインフェルデンの宮殿及び町の近郊で皇帝軍と戦い、輝かしい勝利を収められた。この二日続いた野戦で、下級騎士の装いで我らに味方して戦ったアンリ・ロアン公爵は勇敢に防御しながら敵によって負傷を受けた後、捕虜とされた。しかし二日目にルドルフ・ヴェールトミュラー大尉とその騎兵部隊による再度の攻撃により、的確に勇敢に救出され、凱歌を上げて陣営に連れ戻された。ベルンハルト公爵はロアン公爵をご自分のテントに運ばせ、そこで傷を調べ、浅い傷と分かったが、しかし高貴な公爵は衰弱されていた。ベルンハルト公は側を離れず、見守られた。その後五日して、アンリ公爵は臨終と覚悟されたとき、軍で格別にその歌声を聞くのを公爵が好まれていたドイツの教会の歌を所望された。そこで陣から騎兵や歩兵、百人ほどが集まって、皆この陽気な歌には馴染みがあって、練達していて、公爵のテントの前で、公爵のために新教会の歌を歌った。これは比較的最近この陣営で歌われていたもので、そのうち大変好まれるようになっていたものである。その詩節の後、つまり、

汝、忠誠の申し子よ。

汝は忠誠によって

勝利とその栄冠を

感謝の声高く得て、輝いている。...

静かにテントが開けられて、御領主が身罷られたことが合図された。医師達が、公爵に防腐の香油を塗るために、解剖すると、心臓は悲痛のためにすっかり壊れていることが判明した。かくてフランス出身の高貴なアンリ公爵は名誉に包まれて崩御された。いつか、我々皆が不動の思いで期待しているように、新教の自由と偉大な栄光の中、ドイツ帝国が刷新されるならば、この敬虔なフランスの公爵も追悼されることだろう。公爵は信仰のせいで祖国を失い、そして自らの高貴な名誉を屈辱的に奪われた後、新教のドイツ軍の中で敬虔な騎士として戦死を迎えたからである。アーメン」。[史実ではロアンの命日は、1638年4月13日、イエナツチュは1639年1月24日]。

深い感動に集合していた一同は包まれた。小声で話すグループが見られた。イエナツチュは、かつて公爵がクールの市門で別れを告げたときと同様に、しばらく一人っきりで暗い顔をして立っていた。

するとクール市長マイヤーが彼の許に歩み寄って、彼に衷心から恭しく語りかけた。「大

佐殿、我々クール市民が、貴方に申し出ました感謝と栄誉の祝典を後日に延期すると貴方に提案致しましても、貴方のご承認は頂けるものと確信しております。貴方御自身が他の誰にもまして、善良なる公爵殿の我々の国に対する好意的な心情をご存じですから、我々が情け知らずに、公爵の死を松明を照らし、輪舞を行って祝っているように見えましては、貴方御自身のお心も痛みましょう」。

大佐は黙っていて、その暗い視線を一人の消えた者、死者にかまけて、救出者の居合わせることを忘れた忘恩の群れの方に蔑むように漂わせた。

広間の上端ではすでに明かりが消されていて、着飾ったレディー達はその伊達男達に伴われて、階段へ向かっていた。シュプレツヒャー氏は真っ先に市庁舎を後にしていた。或る手が大佐の腕に案ずるようになんて置かれて、彼が不機嫌に振り向くと、チューリヒ市長の問いかけるような顔があった。彼は涙にかきくれるアマンティア嬢を連れ去ろうとしていた。

「私は君と話す必要がある。ユルク、今日のうちに。ここに残っているかい」とヴァーザーが囁いた。そしてイエナツチュが彼に軽く頷くと、「ではまた来るから」と彼は言った。

このとき大佐は全身を伸ばして、頭を反抗的に後ろに反らして、まだ彼の返事を待っているマイヤーに向かって言った。彼の震える声が広間中に響いた。

「市長、私は祝典を望む。行くなり、残るなり、貴方のご随意に」。

混乱が広間に充満した。不気味な薄明かりが広がり始めて、その暗がりの中に隠れて、大方の声望あるクール市民やほとんどすべての女性達が気付かないうちに遠ざかっていた。しかし大佐の支配者然とした言葉で新たに明かりが点り、始まりつつある輪舞を照らした。しかし客層は別様になっていて、祝典は野蛮な娯楽に変化しようとしているように見えた。

ヴァーザーが階段に達する前に、彼の目は濃いヴェネツィア風衣装の大柄な女性の姿に据えられた。この女性は、急いで階段に押し寄せるクール人女性達の流れに一人逆らって進んで来た。この高貴な形の頭の独自の姿勢、このピロードの半仮面から覗き、探している目の悲しげな熾火は何か、彼の心を奇妙に慄然とさせるものがあった。

彼は彼女を見送った、彼女は、踊り手の混雑を避けながら、ユスティティア[正義の女神]の部屋へ入った。この背の高い、豊満な人物を彼は知らなかった。しかし彼女はイエナツチュの目に留まったに違いない。というのは大佐は早速、その歩行を同じ入口に向けたからである。彼が彼女に追いついたか、ヴァーザーはもはや見ていなかった。階段の人混みは今やとても密になって、市長は、惑乱したアマンティア嬢を無事、狭い通路を通じて案内するために、自分の全神経を傾注していたからである。階段を駆け上がって来る者は、狂った仮装行列であって、野蛮な若造達が一人の巨大な雌熊に率いられていた。この熊のもじゃもじゃの首には、三つのグラウビュンデンの紋章の描かれた大きな盾が鎖に付いて下がっていた。

ヴァーザーは家に連れ帰したアマンティア嬢を老女中に頼んだ後、また市庁舎に急いだ。博士のことは尋ねなかった。博士のことは、博士が罪のない号外を、大佐への仕返しにかくも策謀的に敵対して利用していたので、簡単に許せるものではなかったのであるが。

すでに遠くから彼は市庁舎の前にぼんやり照らし出されて混乱した人混みを見つけた。その正門に達するのは難しかった。半時間前に階段で出会った同じ仮面の者達が、今や猛

然と玄関から抜け出て来た。三十人の仮装者の群れの中に、彼は突然一瞬炎上する松明に照らされて、巨大な雌熊を見たように思った。この熊は肩に人形か死体をつぎ、血なまぐさく疲弊して歩いていた。ヴァーザーはドアに達した。彼は螺旋階段を覗いた。そこはまた乱れた客人達で一杯で、惑乱して呼び合いながら、急いで去ろうとしていた。

上では音楽は止んでいて、途切れ途切れに音色が聞こえた。

この時ヴァーザーは自分のすぐ側にずんぐりしたフランシスコ会の僧侶に気付いた。そのフード[カプチン]の陰の両目が自分に探るように向けられているのを感じた。それは仮面ではなかった。僧侶は雨の滴るフードを後ろに向けた。するとヴァーザーは冷静な、精神力のある顔とその賢く見つめる両目でパンクラーツ神父と分かった。両男性は握手を交わした。

「市長殿、一緒に行動しましょう」と神父は小声で、しかしきっぱりと言った。「世俗と教会、名誉の綬と僧侶の縄が一緒になれば、どんな狂乱の幽霊をも凌げましょう。貴方は私同様、大佐のことを案じていると、ご尊顔から拝察致します。上では何か起きています。彼らがそこに引きずって来ているもの、―― 私はその垂れた頭を鋭く見つめたのですが、―― それはルドルフ・プランタであり、死んでいるか、気を失っています。彼のことは構いませんし、カーニバルでは血まみれの頭は珍しくない。しかし我々は上に行ってみるのが良いでしょう」。

こう言いながら彼は市長を安全な片隅に押しやって、彼をかばった。というのは、二、三人の酔った将校達が丁度、剣を振り回しながら、群衆の中に降りて来たからである。

神父は自分が最も心配している―― ルクレツィアのことを黙っていた。彼は、嵐で遅れて、一時間前によくクールに到着していて、老トラヴァース伯爵夫人とは、夫人が年で脆くなっていて、早くに休んでいて、面会できなかつたが、従者達からこう聞き出していた。令嬢は正午前には到着して、彼女のおば様に面会して、その後、時によくそうするように、自分の訪問用にいつも支度されている部屋に引き下がって、着替をなさいました。ついしばらく前、彼女はゆったりとした服にくるまって、この家をまた後にしました。彼女の下僕は、リートベルクの城代の息子で、松明を先に持って、このお出かけの道案内をしました。彼女がどこへ案内させたか、誰も存じません、という次第であった。

リートベルクの従者達の報告から、パンクラーツィウスは、自分が臆病者と見なしていた若いルドルフ・プランタがグラウビュンデンで度胸のある仲間を見つけたのかもしれないと推測していた。ゲオルク・イエナツチュに辱められた強力な家系の嫉妬が、ゲオルクの最近の最大の成功によって焚きつけられ、暗殺の暴力沙汰へと発展しかねないと案じられた。これとルクレツィアの行方不明は関連があるかもしれない。というのは彼女の心の有り様から、彼女は共犯者あるいは警告人としてこの厄災に組み込まれているのは間違いないと見ていたからである。この厄災は大佐の頭上に漂っていて、―― 彼女は共犯者かあるいは警告人として彼の間近に呪縛されている。それで彼としてはそこへ駆けつけ、彼女を探しているのである。

実際、チューリヒの市長が広間で異変[ロアン公爵戦死の知らせ]があつて混乱したときに、その真面目で厳かな人影に出会ったのは、ルクレツィアに他ならなかつた。そして

イエナッチュは喜びに顔を輝かせて、その人影の足取りに従って、ユスティティア[正義の女神]の部屋に入ったのである。

「ルクレーツィアようこそ」とゲオルクは彼の方に向きを変える女性に向かって叫んだ、「有り難う、私の祝典に来てくれて。そなたが来ると嬉しい。この世間は味気ないものになってしまった。この世間の獲物や名誉は反吐が出る。私にまた若い頃の新鮮な魂を返してくれ。それはどうに失われてしまった。 — その魂はそなたの許に残っている。それをそなたの忠実な心で蘇らせろ。そなたの心の中でその魂は温められているはずだ」。彼は彼女を両腕で抱擁して、仮面の落ちた彼女の顔を彼の胸に抱き締めた。

「用心なさい、用心なさい、ユルク」と彼女は囁いた。彼の抱擁に逆らいながら、彼に對し、言い知れぬ不安と愛で一杯の目を上げた。

彼は彼女のことを誤解した。「分かっているよ」と彼は叫んだ、「リートベルクでは結婚式はならないのだろう。向こうへは二度と戻るな。そなたは永遠に私の許にいるのだ。我らは今日のうちにもダヴォスへ騎行する。 — しかし今は輪舞だ。 —

広間では陶酔的な野蛮な踊りのメロディーが響いた。イエナッチュは剣のベルトを解いて、武器を椅子に投げ、ルクレーツィアをよりきつく抱いた。彼女の目はドアの所を凝視していた。そこでは、中を覗きながら仮面の者達が押し合っていた。彼女はルドルフの鋭い、厭わしい声を耳にした。

この時、長く黒い寺男の上着を着た小さな不格好者が、滑稽な挨拶をしながら、大佐の前に来た。片手に石盤を持って、もう一方の手に一本のチョークを持って、鼻声でこの者が尋ねた、「シャーランスの牧師殿は、どの賛美歌、あるいは歌詞を今日の説教前に歌わせますか」。

イエナッチュは即座にこの大きな頭と短く実直な指は蔵頭ファウシュと悟って、呼びかけた、「教会の鼠にしては太りすぎだぞ。しかし歌詞はこうしてくれ。

愛の抱擁を知る者は、
浄福に生き、喜んで死ぬ。...

私のためにそう歌ってくれ」。

蔵頭は悪戯っぽく観察する視線を、まだ抱擁にとらわれている二人に向けて、二人の邪魔をしたくないかのように、その太った体をドアの仮面の群れから広間の中へと抜けて行った。広間ではカップル達が、バイオリンとティンパニーの狂乱に乗せられて、ますます急速に旋回して行った。ファウシュは、いかに不安げにルクレーツィアが、イエナッチュを自ら導きながら、彼の後を追おうと努めていたか、気付いていなかった。

しかしすでに遅すぎた。その部屋は野蛮な仮面の群れで一杯になった。混雑した出口のところから出て行くのは不可能になっていた。イエナッチュももはやそのことを考えていなかった。彼は、自分の花嫁の不思議な、破壊的内面の炎で照らし出されたかのような美しさに魅了されていて、その部屋の中心にいる仮面のグループを避けながら、窓の壁龕へ彼女を連れて行った。しかし三つのグラウビュンデンの紋章を持つ、一行を率いている巨大な熊が不器用に彼の許に歩み寄って、右の前足を差し出して、彼の体に触れ、呻り声で始めた。「私はグラウビュンデン三州共和国です。我が英雄との一踊りを所望致します」。

「それは断れんな、私のレディーと離れたくはないが」とイエナッチュは答えて、雌熊に進んで右腕を出し、足を踊り出すように上げた。しかし雌熊は両前足で差し出された腕を掴んで、鉄のような男性の力で押さえた。同時に仮面の群れがこの取り押さえられた大佐の周りに密に群がって、一斉に剣が剥き出しになった。

ルクレーツィアはこの囲まれた大佐の左側にひしと寄って、彼をかばおうとした。彼女は彼に渡すべき武器を持っていなかった。再びルドルフの声が彼女の耳に届いた。「これは、ルクレーツィアよ、プランタ家の名誉のためだ」と彼は彼女のすぐ背後で囁いた。彼女が半ば頭を向けると、彼の鋭いスペイン製の刀がゲオルクの肩甲骨の間の脆い箇所を慎重に狙っているのに気付いた。彼女はイエナッチュによって前方に押し出された。というのは、イエナッチュは、彼の殺し屋達の取り囲む円陣を崩して、近くの食器棚へ身を乗り出して、自由になる左手で重たいブロンズ製の燭台を握って、前方から斬りつけてくる攻撃を躲しながら、その重量ある底部を自分への攻撃者達に振り回したからである。

その時、彼女の側で斧の一撃が見られた。彼女は忠実な老ルーカスの姿を見た。仮面を着けずに、無帽のまま、奥の方から前に進み出て、古い斧を二度目には、ルドルフの青白い頭目がけて振り下ろし、こう叫んでいた。「悪党、消えろ。これはそなたの仕事ではない」。それから彼はこの瀕死のルドルフを脇に投げて、ルクレーツィアをはね除け、斧を振り上げて、イエナッチュの前に立っていた。この強靱な大佐は、すでに多くの傷を受け、出血していたが、頑丈な拳で燭台を握って、闇雲にこの灰色髪の頭に殴り付けた。音もなく、老下僕はルクレーツィアの足許に沈んだ。彼女は彼の上に屈み込んだ。彼は目の光を失いながら、虐殺の斧を彼女の手へ渡した。それは以前ボンペーユス氏を撲殺した斧であった。絶望して彼女は身を起こし、ユルクがよろめくのを見た。彼は雇われた殺し屋に取り巻かれ、謀殺者達の剣に囲まれ、傷付いて、包囲され、救いのない状況であった。今や、夢の中でのように決然として、彼女は両手で自分の形見の斧を振り上げ、全力を込めて、愛しい首に振り下ろした。ユルクの両腕は沈み、彼は自分の前に直立している女性を全霊の愛を込めて見つめ、陰鬱な凱旋が彼の表情に浮かび、それから彼は重々しく崩れ落ちた。

ルクレーツィアが再び正気となったとき、彼女は亡骸の横で跪いていた。撲殺された男の頭は彼女の膝の中にあつた。部屋は空であつた。彼女の上で漂っていたユスティティアの像の周りでは蠟燭が燃え落ちていて、その蠟燭は彼女の首や額に燃える滴となって落ちてきた。彼女の横にはパンクラーツが立っていて、手を彼女の肩に置いた。一方ファウシユがドアの所で、市長ヴァーザーにその出来事を嘆きながら語っていた。

子供のように率直に彼女は僧侶に従った。僧侶はその不幸の場から彼女を連れ去った。しかしヴァーザーは亡骸の見張りを引き受けた。

ほどなくして人々が現れた。最初の驚愕が済み、人々の心の乱れが落ち着くと、町の主立った人々が次々にこの部屋に入って来て、グラウビュンデンの最大の男、その解放者、再興者のことを悼んだ。

彼らは、彼の死の首謀者達を裁判にかけることを断念した。彼らはこの必然的運命の道具に過ぎないように思われたのである。彼の虐殺からは、新たな党派とか復讐が発生してはならない、一彼自身それを望まないであろう。しかし彼らは、彼の葬儀を、国に対するその功績にふさわしい、法外な荣誉で称えて挙行すると決めた。

[史実ではイエナツチュの死は大体以下の通り。イエナツチュはキアヴェンナからクールに来ていた。1639年1月24日、月曜日、彼は何人かの大佐とLorenz Fauschの「砂塵の小屋[小帽]」亭でカーニヴァルの夜、酩酊していた。音楽が鳴る中、20名の仮装者が入って来た。毛皮に包まれた男が、イエナツチュを踊りに誘った。死の踊りとなって、この仮装者がイエナツチュの左頬をピストルで射た。イエナツチュが蠟燭立てで応戦すると、別の男が逆さの斧で額を割り、六回斬りつけ、彼を倒した。...殺害者の中には、イエナツチュによって殺されたボンペーユスの息子、Rudolf Planta、それに決闘で倒されたRuinelli大佐の近親者もいて、その時の刀を持参していた。Lukretiaも仮装者に混じっていたとされる。斧は彼女の父親を殺害した斧で、彼女が保管していたものである。彼女はTravers von Ortenstein男爵と結婚していた。...その他、異説も多い]。

聖者

第一章

ゆっくりと雪が軍用道路の左右の個々の農園の休耕田や屋根に積もっていた。この道路はリマト川沿いの温かい湯治場から帝国都市チューリヒに通じていた。次第に密に雪片は舞っていた。あたかも生気ない朝日を消し去り、世間を静かにし、道や杉道を覆って、その上を移動するわずかばかりのものも覆ってしまいたいかのようであった。

その時一頭の馬の鈍い蹄の音が、屋根のある橋の木造床で響いた。橋は町の近くのジール川の流れにかかっていた。そして陰気な、町の市壁に面した開口部の垂木組みの下に一人っきりの騎手が現れた。その堅牢な人影は、粗いウールの外套を温かくまとっていた、そのフードをしっかりと頭上に被せていて、その人物は広い灰色髭の他には直接何も覗かせていなかった。その故郷[スイス]産の強壯な馬のすぐ背後に大きなプードルが背に雪を負って、メランコリックに尾を垂らして駆けていた。木造のアーチを蹴る蹄の反響で、この三様の同行者は、寒さと雪のために陥っていた微睡み半ばから目覚め、門と宿が間近であると展望した。速やかな速歩で、門に達した。低い門のアーチの下で、この騎手はフードを返し、外套から雪を払い、その精力的額から革の帽子をずらし、齢を重ねているが、立派な軍人的姿勢で、皇帝陛下の居城[現リンデンホーフ]の麓を間近に通過している通り、レン通りを進んで行った。

西暦一一九一年の最後の日から三番目の日であった。この旅行者はクリスマスと年越しの間に帰省する習慣だったのである。

右手ではパン屋が新鮮なパンを提供し、左手では煤けた屋根の下、車大工が鉄槌を叩き、火花が飛び散る一角で、この騎手は今日も、チューリヒに帰省するといつもそうであるように、石弩のハンス、イギリス人のハンスと甲高く呼ばれて歓迎されていた。しかし彼が挨拶や会話を返すときのドイツ語の音は、その口からとても流暢に率直に響くもので、彼の二番目の綽名は遠方の故郷に由来するものではなくて、彼が旅好きで、大胆に放浪するからであった。

この旅行者は、獅子亭の旅館亭主に対して、この亭主は蹄の音を聞いて、木戸口に好奇心で出て来たのであるが、通過して行く男を引き留め、帽子を取りながら、貯蔵庫での最近のシャフハウゼン・ワインの出来について情報を求めると、とても専門的な、関係者と分かる返事をしたので、今日イギリス人のハンスは、どこのパンを食べ、どこのワインを飲むか、推察するのは難しいことでなかった。

これまで、石弩のハンスが尼僧院長王女の町チューリヒ[853年ルートヴィヒ・ドイツ王がキリスト教を最初に広めて殉教した聖フェーリクスとレーグラを称えて尼僧院を建て、娘を尼僧院長とした]を数十年前から承知している具合にすべて進行していた。しかしこの日、祭日でもないのに訝しく思うことが一つあった。いつもはこの厳しい季節、それに早い時間、家の前に出て来る女性はほんのわずかであった。しかし今日は女性達が着飾って戸口から急いでいた。ハンス親方が、町の中心部の急峻な小道を通って、リマト川の早い流れに近寄り、下部の橋を越え、市庁舎の側を通りかかると、川の両岸辺に、上手にかけて蟻の行列の如き、人々の群れを見かけた。一群れに続きまた一群れが続いていた。色々な身分の女性達、

手に高価なミサの本を持った高雅な貴族の女性達、職人の親の実直な娘達、躰正しい尼僧達、気楽に生きている可愛い娘達が咳をしている皺くちゃのお祖母さん達の側を急いでいる。お祖母さん達は吹雪の中、哀れな白髪の上に外套を被っている。皆が湖畔の方へ向かっていた。リマト川の川口に二人の兜の兵士のようにチューリヒの大聖堂があった。

しかし — これは何か、 — ただその大聖堂の一方、我らの聖母マリアの大聖堂[左岸にあって先の尼僧院に属する]が早鐘でその至急の招待を知らせていた。その向かい側の聖堂[右岸にあって司教座参事会に属する]は、不同意の如く沈黙を守っていた。

憂わしげにこの石弩屋は、皆の流れに従って、リマト川に沿って、上方、跳び梁の下、有名な聖マインラートの大鴉旅館[マインラートの殺害者は目撃していた大鴉に追跡され、後の旅館の場で処刑された伝説がある]に向かって行った。毎年彼はここに泊まる習慣であった。しかし今、下の丘の所で、かつて聖フェーリクスとレーグラが血を流し死んだところで、彼は鹿毛を止めた。彼は急峻な教会露地を一瞥した。露地は大聖堂からこちらに下って来ていた。そこで何ものが動いた。彼の方に向かいながら、溶ける雪の中、最良の場所を丁寧に求めながら、一人の司教座参事会員の上品な威厳のある、貂の毛皮に包まれた姿があった。黒いビレッタ[聖職者の帽]の下、青ざめて見える顔は濡れた靴を痛々しい表情で見つめていた。それで彼は石弩屋にすぐには気付かなかった。石弩屋は急いで馬から飛び下りて、この老公に対し謙虚な姿勢で、まだ吹雪が続く中、帽子を取って待機していた。

「尊敬する旦那様、神様と聖母様のご加護を祈念します」とこの老人が彼の側に来たとき、イギリス人ハンスは言った。

軽く驚いてこの老公は賢い目を挨拶するこの男に向けて、その澄んだ表情に突然思いを過らせたが、明らかに喜ばしい類いの思いであった。しかし彼はそれを悪戯っぽく押さえた。

かくて石弩屋はまず次のように語りかけた。「お尋ねしますが、貴方の立派な御同輩、高貴なクーノー一氏に聖堂参事会で会えますでしょうか。修理した石弩代がまだ未払いで、更にイギリス製の武器の購入代です。これは三年前発注して納品したもので、全て私の習慣で、新年前に集金しているものです。前年の十二月とその前年の十二月、この殿方の金庫は空でした。賽子賭博でいつも負けが続いておられて」。

「私の所で一服してから、直接彼に尋ねると良い」と老公は答えた、「彼は聖堂参事会に晩方帰ろう。同胞は皆、修道院長も参事会員も、狩に出掛けた。ご覧のように老人の私だけ、例外だ。私は新しい聖人のこと[ベケット列聖は虚構]で外出しようと思った。その殉教と奇蹟は向こうで」、 — 彼は聖母大聖堂のすらりと高い内陣の方を示した、「この時間、一人の機知あるルツェルンの牧師によって信仰篤い民衆に説明されている。その栄光について、私の同胞はこの点は不同意で、面白くなくて今日町から出払っているのだが、敬虔さよりも私は好奇心で出て来たが、天の雪がこの好奇心を妨害しよる、それで私の魂を損なうことなく、戻ることにしたい。

そなたの鹿毛は大鴉旅館まで連れて行け。そこではこの聖マインラート旅館の馬丁が川辺に植え込みのように突っ立っていて、聖母大聖堂の方を見つめていよう。そなたのプードルは、そこ雪の中にやるせなく座っているが、私のキッチンの火の所で温まればいい。しかし聖フェーリクスの殉教にかけて、私はもはや濡れそぼって立っておれない。この雪の水溜まりには、やっところを持った意地悪な魔女が潜んでいる。つまり、痛風が痛む、こ

の冬はこれに悩まされていて、最近やっと治ったばかりだ。すぐ私に付いて来い、イギリス人」。

こうした馴染みの言葉の後、ブルクハルト氏は震えながら自分の毛皮にくるまって、来た時と同様、用心しつつ、湿った露地をまた上がって行き始めた。

ハンスはぶらぶらしている下僕を呼び寄せて、自分の馬の手綱を渡ししながら、宿の亭主とこの大鴉旅館の常連客への様々な依頼や指示を伝えた。というのはそこでは貴族が立ち寄るからで、この石弩屋は貴族の中に数多くの顧客や負債者を有していたのである。

それから馬の背から旅囊を外し、その荷物を腋に抱えて、プードルと一緒に聖堂参事会へ通ずる急な露地を上がって行った。プードルは主人の所有物から離れないのであった。

司教座参事会員の招待はハンスにとって都合良かった。石弩屋のハンスは儉約家であったのである。

第二章

この冬の日はとても暗くて、自分の客人をもてなしている司教座参事会員の狭い居間は、唯一の高い所にあるアーチ形の窓からの明かりよりも、むしろ竈の燃え上がる金色の炎から多くの明かりを得ていた。

石弩屋がその食事を終えるまでの間、ブルクハルト氏は繊細な体質と節制の生活様式故にすでにしばらく柔らかなフリース[羊毛被]の張られた肘掛け椅子に沈んで、毛皮にくるまった足を火の方に向けていた。同じように高齢の管理人がテーブルの用具を片付けて、強壯な土地ワインのポットを二個の銀杯と共に暖炉の石の蛇腹に置いた。

司教座参事会員は明らかにご満悦の気分であった。彼はこの陰気な冬の日、世間通、人間通の、それに広く旅した頭の巡りの良い男を自分の小部屋に誘い、夙に励起していた好奇心を満たすことになって喜んでいた。わずかな雪のように白い巻き毛の上品な頭が背もたれの赤いクッションにあって、目を閉じて、提案の上首尾には目を見張る表情であった。

そして今や突然輝かしく目を開けて、言った。「ハンス、ご馳走様かな。そなたの椅子を向けて、こちらに寄れ。新規に、聖母大聖堂で称賛された、しかし我々司教座参事会員には不人気の聖人は誰かと、そなたは尋ねたな。食事中は、教会のこととかそれどころか天上界のことについて話すのは、私は不謹慎と思う。しかし今は情報を与えて良いだろう。新規の、キリスト教界の教皇によって認定された天国の代弁人は私と同じ年にこの世に生を享けている。[ベケットは1118/19年12月21日生まれ、1170年12月29日殺害、1173年アレクサンデル三世教皇により列聖]。にすでにこのことが彼に対する異議だな。聖人については、ワインと同じことが言える。古いほど、一層結構で、奇蹟を起こす。このワインが」、 — 彼は自分の杯から啜った、 — 「我らの大地の精華が、我らの血と等しく、はるか昔から我らの血を刺激し、強化しているように、同様に我らの聖人聖フェーリクスとレーグラは作用している。この両人の体の上にこの聖堂参事会とこの町は築かれている。代々にこの両人は苦難の救護人達を庇護してきた。我々は両人に、両人は我らに親しく、恩誼を感じている。彼らの肖像と印章によって、我らは、我らの父祖の慣習に従って、我らの行為や使役を有効なものとしてきた。私は得意気にこう主張しない、両人は流血の殉教の後、文

書通りに、断ち切られた首を両手に持って、リマト河畔の処刑場からこちらまで、つまり山手へ四十歩運びましたと、もっともこれは弱体化した新規の聖人達はようせんことだがな。私にとって考える必要があるのは、聖フェーリクスとレーグラは、自分達の信仰を、異教徒の皇帝に抗して、その血で殉教したのであり、私と同じ年の新規の聖人のように、キリスト教徒の国王とその封建領主に抗し、反抗、反撥したわけではないということだ。

しかしこのように正しい考察を我らのお上の司教座参事会員の尼僧達の頭はようせんのだ。

女達は新規なことや異国的なものが好きなのだ。

我らの市の顧問官は上述の理由から、この件は嫌いで、尼僧達に天の恵みの加勢がなかったら、この件は沙汰済みとなっていたらう。

長い日照りの先の収穫の月[十月]、ヴィーディコーンの尼僧院の大きな農園屋敷の側、干し草で一杯の納屋が燃えた。フェーンの風で炎がまさに職長の家に吹き寄せ、家は煙を出し始め、駄目かと思われた。すると強靱で敬虔な寺男夫人、ベルタ夫人が丁度居合わせて、職長とその息子達の力を借りて、重たいスレートのテーブルを家の前に引きずり出し、ポケットからチョークを取って、その甲板に、腕の長さ、文字を書いた。

トーマ聖人、助けて。

何が起きたか。この聖人が天から覗いて、読んだのか。いずれにせよ、風は瞬時に向きを変え、納屋は燃え尽きて、崩れ落ち、職長の家は助かった。その後町からの助けがやって来た。こちらにテーブルがあって、向こうに炭化した瓦礫がある。一 奇蹟と聖人の件はもはや論難されない。

かくて我らは今日彼の祭日を祝うことになったのだ。つまり私が忘れずに言うことになる、カンタベリーの聖人トマス[Thomas Becket,1118-1170,12月29日逝去]の日だ。

この詳細な語りの後、司教座参事会員はその台付き杯を握って、数回ちよっと飲み、そしてポットを握って、聞き手の方見て、その杯に注ごうとした。ハンスは、火の側の木製床几に座っていた、小さな声を上げた。何か奇妙なことが彼の中で生じていた。最初彼は、膝に肘を突いて、両手で頭を支えて、司教座参事会員の話しを注意深く聞いていた。ブルクハルト氏は聖人の名前をわざと最後まで黙っていたが、しかし石弩屋はすでに早くから察知していたかもしれない。彼は今や自身の中で瓦解したかのように動けなかった。あたかもある戦慄が全身に走っているかのようなようであった。司教座参事会員は彼の杯になみなみと注ぎ、関心と若干の他人の不幸を喜ぶ思いの仄見える眼差しで彼を見つめていた。

「そなたをようやく掴まえたな、抜け目ない男よ」と彼はまた始めた。「聖レーグラの流血のお下げにかけて、今日、石弩屋よ、私にカンタベリーの聖トマスについて、そなたの知っていることを話して貰わずには、この敷居から帰さないぞ。向こうの聖堂参事会で我らの恵み深いレディーにルツェルンの牧師が講釈を垂れているものとは全く違う話しを頼む。あるいは私にこの高貴な尼僧院長が我が魂の安寧のために貸与してくださった羊皮紙に記載されている話しとも異なる話しだ。そなたはこの聖人にその生前に会っている、否認してはならんぞ。そなたが、私の同輩達に、司教座参事会員達に、一年前のことだ、我らの飲み合う部屋で、大声出して、一 大いに杯に注がれていたからだが、一 得

意然として身振りで、自分はヘンリー国王[Henry II,1133-1189,王位1154より]に侍ること、胴着のボタンの如くで、いや、体の肌の如くであった、と述べる様をこの耳で聞いていたのだ。そなたは烈火の如くおだを上げていた。というのは他の殿方達は、ヘンリー国王はその長男のあの不吉な戴冠式のとき、歡喜の涙を流しておられたというそなたの話に懐疑的であったからな。そなたは叫んだ、『涙が頬を伝うのを見ました』と。そしてそなたの魂の淨福にかけて、そう誓っていた。私は皆と一緒に調子を合わせてまず飲み始めたばかりで、調子を合わせるとはそれだけまだ私は若かった。そしてそなたが自分の話しは本当だと誓うのを聞いた。私はそれを信じた。そなたは自慢屋ではないからな。しかしそなたが確かにヘンリー国王の側に伺候していたのであって、そなたが請け合うように、国王に衣装や杯を渡して、その笑い声や泣き顔を見ているのであれば、国王の体と魂を撃ち砕いた男のことも知っているに違いない。この男が宰相として国王に仕えていた時のことであれ、あるいは後年の、この男が聖なる司牧として国王の敵、そして犠牲者となって、国王を絶望と破滅に導いた時のことであれ。結局、不幸な男よ、そなたはこの聖人が殉教死するよう足を引っ張ってやった連中の一人になるわけだ。いや、違うか。尼僧院長の羊皮紙にはこう書かれていた。この聖人の殺害者どもは、その罪により、人間以下のものになって、この者達を前にすると全被造物が慄然として、その愛玩犬でさえ、その手から餌を貰うことを怖がる、と。しかしこのプードルは、 — 彼は石弩屋の膝の間で注意深く窺っているプードルの頭を示した、 — 「そなたが渡すものをすべて食べているな、私を見るかぎりでは」。

「神様のご加護で、そうはなりたくないものです」とハンスは口ごもった。「でもこの聖人のことは、 — いや、 — 私は貴方のこと同様によく存じ上げています、ブルクハルト様、それに貴方が知りたいと仰せられるのであれば、かのウィリアム・トレイシー[William de Tracy († 1189)]が中央祭壇の前で聖人の頭蓋を砕いた時も居合わせておりました。その微笑をまだ覚えています。それは、 — 神様、仏様、 — 神聖な嘲りの微笑で、この微笑を浮かべて聖人は身罷りました。あたかも彼の首切り役人がその仕事を丁寧にしたかのようでした。いえ、旦那様、これは難しい、極めがたい話しです」。

「ハンスよ、話してくれ」と司教座参事会員は震えながら活気付いて叫んだ。そして老いた両手を肘掛けに置いて、貪欲にその椅子の中で伸びをした。

石弩屋は黙って火を掻き起こし、自分の考えをまとめた。彼の堅牢な角張った面影は陰気になって、彼のきらきら輝く目は思案した。明らかに彼は自分のもてなしの良い友の願いに公正に対応する気になっていた。しかし渋々であった。というのはかの一連の出来事は、遠方にいる者達にとってのみ、驚くべき不可解なものであったばかりでなく、側にいる者達にとってもそうであったのであり、これが彼の話しの最も肝心な部分であって、それでこの無口な男にとって、語ることが難しいものになっていた。彼は魂の深みまでこれらの出来事に捉えられていて、それで彼の感受性は分裂し、彼の思索は深淵を前にしているように立ちすくんでいた。

彼は慎重な言葉で始めた。「ブルクハルト様、貴方は我が主君、国王の治世上の騒ぎや業績に関しましては、容易により良くご存じでありましょう。しかしその人となりの日常や性質に関しましては、 — これはトマス・ベケットの人間のお顔のこともそうですが、 — と彼はおずおずと小声で付け加えた、 — 「実際、一年前かの酪酊しまし

た夜、自慢したわけではありません、お二人を存じ上げていると主張しましたが、もっともそのことは黙っていた方が良かったと思われまます。今でも私は両目を閉じさえすれば、国王も司祭も生き生きと眼前に浮かびます。それは愛らしい眺めではありません。こちらの貴方の町の聖人方が両手に運んでいるこの長く静かなお顔の眺めのように行きません」。そして彼は壁に飾られている色彩豊かな絨毯の中心の図を示した。「私はイギリスから故郷に戻って以来、何年も日中は頭の中で、夜は夢の中で、かのお二人の不幸な殿方のことを思いました。日中私は一方の方の穏やかな悪戯っぽい話しを、それにもう一方の方の軽い冗談や、厳しい脅迫や絶望に満ちた怒りの言葉を間断なく反復し、両者の破滅がいかに避けがたいものとして展開してきたか、沈思することを強いられました。夜、私は丁度使徒ヨハネが黙示録の中[9,17]で記しているように、彼らが煙と炎の中、衝突するのを見ました。私の妻の誰一人として、
一 私は何人かの妻を娶り、死別しています、
一 不安と恐怖に駆られて眠っている私を起こす毎日から逃れられなかったのです。と申しますのも、国王と聖人との衝突は、我らのシュヴァーベンの飲み屋で叫び合い、喧嘩沙汰になるのとはわけが違うからです。よろしい、貴方にこの話しをしましょう。ひどい話しで、始末を付けるのは難しい話しです。しかしおもてなしの友のご要望には応えないわけに行きません」と石弩屋は辛辣な微笑を浮かべて結んだ。

「それでは約束通り、頼むぞ」と司教座参事会員は言って、期待しわくわくした表情で安楽椅子に身を沈めた。

第三章

「私は自分の青春時代を語るのを好みません」、
一 とイギリス人ハンスは自分の話しを始めた、
一 「神や聖母の前で遜るために、祭日前に暗闇の中から生じてくる場合を除き、また羨望家や敵対者が私の晩年に私の青春を私に罵倒する場合を除き、私は青春時代を考えることがありません。

親愛なる旦那様」、
一 そして石弩屋は深く溜め息を吐いた、
一 「青春は実直なものではなく、汚れたものでした。それでも私はそう告白して、貴方と私の心にとって遺憾なことと言わざるを得ません。というのは、私の哀れな履歴はこの聖人とこの国王の履歴から切り離せないからです。少なくとも私の古い頭の中では切り離せません。私は貴族の出であると貴方のご承知に違いありません。貴方がホーエンクリンゲンとかホーエンクレーエン[Hohenkrähen bei Singen、作者に縁]と仰有るなら、確かにそれは私の出自の、瓦礫に沈んだ家と同一ではありませんが、しかしその名前は同様の響きで、かの堅牢な家々同様に、ボーダン[Bodensee の古語としては Bodman]やラインから遠からぬ所にありました。すでに私の父親は負債がひどくて、何故かは神の知るところですが、
一 自分一族から嫌われ、避けられて、父は債権者達から逃れるため、そして自分の魂を救うために、十字架を自分の服に縛って、約束の地に移り、そこから二度と戻って来なかったのです。私の母さんは、私の誕生以来病気がちで、泣きはらして盲目になりました。つまり私の兄が騎士的決闘ではなく、俺のものおまえのものの邪悪な喧嘩沙汰で殺されたからです。といひますのは、私どもは精一杯、自活していたからで、道端で窺って、何か通りかかるのを待ち伏せしていた次第です。私は一族に助言も救助も求めなかった。求めても得られなかった

でしょう。唯一の味方は私にとって、石弩や私の犬どもでした。犬を連れて私は森へ行っただ。しかし私自身、私が悪魔のように忌み嫌う邪悪な敵によって一人の野蛮人のように追い立てられました。それはユダヤ人のマナッセで、これはシャフハウゼンに居を構え、高利貸しでした。私の父は此奴にその城の小屋やわずかばかりの耕作地を抵当にしていました。そこで私の母がこのユダヤ人の許へ私を送り、猶予を願うことになりました。しかしこの高利貸しは何ら慈悲がない。そこで私は突然大いなる苦悶に襲われ、私の病弱な母さんのこと、それにユダヤ人達によって残忍な迫害を受けた我らの主の血まみれな受難のことが哀れに思われました。私はこのマナッセを拳骨で殴り付け、殺してしまっただ。神は私にこの殺害のことで責めないで欲しい。私が彼を殺したとき、私はすでに大人の背丈で強壯であったが、まだ子供で、その上軟弱で、激しやすい情動だったので。しかしこのユダヤ人は町の中、周辺の貴族の間に多くの友人を有していて、アラーハイリゲン[万聖]の修道院の門戸が開かれていなければ、私は終わっていたことでしょう。その門戸が私を守ってくれて、そのことを私が喜ばなければならなかったとき、私は思いがけず僧生活に入り、一年が経って、僧侶となりました。全ての面で私は正直に行動し、一度も間違いを犯さなかった。しかし私は僧侶に向いていず、私の自然な発育とそれが栄える土壤に関し、予感していなかった。旦那様、誤解なさないでください。我らの出自の両親の罪障の血だけのことではないのです。むしろ、私が出来ている粘土へ父祖の創造の手から伝播した発火する火花のことです、つまり、力とか分別、企画力、造型技術、それに遍歴欲です。しかし人間的[世俗的]技芸とか学問はアラーハイリゲンでは何も学べません。詩人ヴェルギリウスは別です。これは今日でも諳んじています。

修道院長は、この詩人について、敬虔な異教徒であり、神はこの詩人に対し、その徳操に報いて、予言力を吹き込み、それでその詩文には幼子イエスを抱く聖母の姿が反映しており、明確に認められると称えておられました[Eclogue『牧歌』4の解釈]。それ故私が学んだ巻き紙は全くナイフの先で穴だらけになっていました。私がアラーハイリゲンから別れる夏至の夜、この壁を飛び越えて行く前に、私はこれをナイフで三回刺すことになったものです。三つの聖なる御名を熱く叫びながら、その言葉を当てました。矢[sagittas]、葦矢[calamo]、弓[arculi]と。ヴェルギリウスは正しく述べていました。矢と弓に私は終生関与することになったのです。

かくて私はまた私の素早い足を愉しんで、山岳の森[der Schwarzwald]を抜けて、アルザスに向かいました。ライン川の大きな蛇行を直線で短縮したのです。昼頃、私は平原の堅固な地に達すると、色々な人々が弓の競技をしていました。私は途中すでに現世の息吹、悦楽に酩酊しているかのように、手足を使っている、射的者達の愉快な人混みの中、脱走の僧侶を歓迎する放恣な若者達から一本の弓を譲り受け、片足を踏み出して、何度も的を射る次第になったことも不思議ではありません。私の視線は、憚りながら、鋭いもので、天性確実で、子供のときから間違いなかったものです。

思いますに、私は杯に慣れていず、酩酊させられたのでしょう。私は暑くなって、袖をまくり上げ、僧衣を太股の所までたくし上げました。私は眼前が暗くなり、気分が悪くなり、最後には嘲りと哄笑の中、両腕、両脚を剥き出しにして、道化の凱旋となって運び回される始末です。

翌朝早く、ある立派な若者に貰った下僕姿で、更に遍歴しながら、きまり悪くなりなが

ら、我が身の状態を観察しました。汚れた紋章が右手に、左手に、千切れた僧服が、私の後、道端にありました。残っていたのは、手仕事のみです。私は私を騎士的一族から全く遠ざけるわけでもなく、その一族を戦時であれ、平時であれ養う筈のものを一つ求めました。するとヴェルギリウスの合い言葉が浮かび、私は、弓造り、石弩屋になる決心をしました。親愛なる旦那様、何ごとも最初は難しいものです。追い剥ぎと僧侶の怠慢なる慣習の他に更に軟弱なる心から生ずる多くの愚行も克服する必要がありました。私は堅牢な身分に達する必要がありました。と申しますのは、すでにユダヤ人を殺害し、修道院の誓いを破ったけれども、私の敬虔な心のせいで、ほとんど三回目の破戒を犯しそうになったからです。このことも話しておきましょう。 — その他は手短にします。

私はシュトゥラスブルクへ遍歴しながら、放浪の学童の一味と一緒に、この有名な町の石壁建築や塔の先端を眺めながら、ある居酒屋で痛飲しました。すると私はかつて私の母さんがシュトゥラスブルクの修道院で聖なる生涯を送った敬虔なおばさんのことを良く話していたことを思い出しました。母は悲惨さの水で窒息しそうになると、天のこのおばさんの代願を頼りに祈禱する習慣だったのです。このようなことを私の迷いの旅路でもしてみたいと私は思いました。それで私は明朗率直な顔つきのこの遍歴の者達の一人に、この町のことを以前から良く知っているとのことでしたので、私のおばさんヴィリベルクが聖女という噂を残して亡くなった修道院はどこか教えてくれないかと優しく言葉をかけて尋ねました。

『お安い御用』と彼は答えました、『色鮮やかな屋根の向こうに八角形の塔が見えるだろう。その横、市壁に沿った長い建物、向こうで君のおばさんは仕切っていた』。

そこで私は跪いて、その家の方を覗き込みながら、神聖な聖女に熱心に嘆願しました、私に有り難い霊験あらたかな加護を賜え、と。すると私の背後で聞こえたのは、抑えた忍び笑いと、爆発したような哄笑でした。すぐ顔を振り向けて、私はその衣装の裾を二本の長い耳に丸めている遍歴の学童を見ました。彼はそれを私の耳の側で[おいでという具合に]合図し、振っていました。同時に他の者達が野放図に笑いました。『阿呆が向こうの美女[女郎]の家に向かって祈っている、...』。しかしすでにこの悪党は私の膝の下に取り押さえられ、私はこの世の邪悪さと劣等さに腹が立って重い涙を流しながら、彼を締めつけていました。他の者達が彼を私から解放しなければ、彼の生命の息は絶えていたことでしょう。

シュトゥラスブルクで私は或る弓造り屋の許で初歩を習いました。彼は私を正直に預かり、彼の知る限りのコツを実直に教えてくれました。しかし彼は従来通りの慣習の男で繊細さと改善に関しては頑固に頭を振って許しません。これは石弩の本性や形に関して可能な筈で、当時はイギリスやフランドルから、特に異教徒のグラナダから我々のドイツ帝国まで伝わって来ていたものです。しかし若く好奇心の強い精神の私にとって、一度初歩の段階が済んでしまえば、一時も休んだり休憩する気になりません。と申しますのも、旦那様、どの技芸でも、取るに足りない技芸でも、完成という目標が潜んでいて、それを目指して日夜励むよう、誘い、督励するものだからです。

当時私はしばしば夢の中でも石弩を作って、投げ矢を工夫していました。サラセン人の射るものよりも更に遠くへ飛ぶものです。しかし明け方になると私の発明品は愚かな鬼火のように色褪せます。それらは無様な試作品、恣意的な思い付きにすぎたのです。私は若干のコツを知っていましたが、まだ技芸の根拠や法則について会得していなかったの

です。

そこで私は遍歴して、師匠について学ぶことに決めました。フランスやアキテーヌ[フランス南西部]を遍歴し、ピレネー山脈を越え、毎晩日没の赤い雲の中に驚異の町グラナダを見ていました。私の魂はそちらへ惹かれていて、その町がとうとう本当に現実に私の前、夕方の空に立っていました。私はそこで披露されている世にも豪華なものを眺めることができました。それらの宮殿の透かし彫りの装飾建築、その妖艶な庭の棕櫚や糸杉、ざわめく噴水仕掛けの上昇する水流です」。

「それで哀れなハンスよ、体に割礼を受けず、元の信仰のまま戻って来たのか」とブルクハルト氏は口を挿んだ。

「ご懸念に及びません。そこに参ったときよりも、肩の上の頭ははるかに賢くなっていました。しかし私のキリスト教信仰に関しましては、旦那様、私は偉大な哲学者をも論駁して、キリスト教を推しました。私はこの哲学者が天の星座を眺めるときの望遠鏡を仕上げる手伝いをしたものです。毎晩彼は天のゆっくり移る軍勢を示して、如何に永劫この方、これらの輝く星々、その星座、これらの動物の図柄、馬車に人間の運命が鍛錬されているか、私に説明してくれ、何の手も、人間の手も神の手も、この炎の車輪の回転する輻[スポーク]には介入できないし、人間が選択する余地も、神が怒ったり、恵んだりする余地もないのだと、申します。

しかし私は彼の言うことを信ぜず、自分が罪を重ねた場合、後悔の洪水になると反論しました。

ちなみに私はグラナダで、そこまで私が探しに来て求めていたものを見つけ学びました。親愛なる旦那様、異教徒の弓造りは天下無双というのは、まことでございます。彼らは大昔、洒落た言い方で、弓の寸法から石弩の短縮された簡素な形を引き出したと伝説で言われており、私もそう信じたところです。と言いますのは、神はこの異教徒に多くの技芸や学問を教えているからです。数学に力学、建築学、数えられ、吟味されるすべての教義を教えています。思いますに、彼らに永遠の死の前に、短い間の誇りを恵むためです」。

司教座参事会員はこの賢い言葉を肯い、頷いた。弓造りは続けた。

「三年間、私は異教徒の町にいました。毎日は仕事との競争で過ぎて行き、夕方には私は、次第にアラビア語も堪能になっていて、屋外のホールへ出掛け、ワインも飲まず、喧嘩もしないで、そこで彼らの語るお伽噺を楽しみました。そこであるとき、褐色の、燃えるような目の若者の口から、ある話しを聞きました。それは彼の他の噺同様、似たり寄ったりのものです。この若者は最も人気がありましたが、それは彼が男女両性の身振りも、どの年齢の者、身分の者の身振りも、表情や肢体の仕草で表現する術を心得ていたからです。貴方には余計な話しに見えましょう。しかし私は放置できません。これは本題と関連するからです。

それは月光王子のお伽噺です。[ベケットのスペイン滞在は知られていない]。

ある若い異邦人が北にある島からコルドヴァにやって来て、そこでその姿と弁舌の魅力、それにチェスの名手ということで、カリフの寵愛を得ました。その他、彼は優美な青年でありましたが、鋭い分別、政治的英知を備えていて、それで彼の助言を得たカリフは、戦争も流血沙汰もなく、単に政治学の応用をするだけで、ほどなくしてムーア人の王達の中で最強の王になりました。それ故王は、この月光王子を、　　—　　そうコルドヴァ人達はこ

の異邦人をその顔の青白さと穏やかさ故に名付けていましたが、一 全く夢中になって好きになり、思案せず妹達の中で最も美しい妹を、太陽王女を与えました。この王女はこの異邦人を一目見て、その輝く目をもはや彼から逸らすことができなかつたのです。しかし太陽と月とは一年以上一緒にはおれなかつた。王女に一人の娘が生まれたとき、王女は身罷つたのです。この後、この異邦人に敵対する百人もの廷臣が嫉妬しながら、王子の地位が危うくなつたと思ひ、秘かに陰謀を企みました。この賢い王子は彼らを暴き立てましたが、穏やかな志操のために、彼らの命乞いをしました。すると或る日、王の奴隷達が十頭のラバに同様に多くの袋を背負わせて、王の門から追放しました。そして[王子の]召使い達が袋を開けますと、彼の敵の百人の斬首された頭部が中庭の大理石の床に転げ落ちました。しかしこれを贈られた王子は、血塗られた贈り物を見て、青ざめ、自分の部屋に引き下がり、夜になつたとき、揺り籠から一人の子供を引き上げ、馬に乗って、微睡んでゐるコルドヴァを後にしました。しかし彼がいなくなると、王の幸福と力も永久に潰えてしまいました。

このお伽噺の語り手は、自分の話しに熱中して、月光王子を直接知っていると言ひ、王子がしばしばコルドヴァの市場で、胸の上で腕組みをして、謙虚に挨拶してくれたと言ひました。二人は年齢がそれほど違はず、かの出来事があつてから十年と経っていないと言ひます。

彼は自分は本当のことを話していると確信してゐました。私は必ずしも確信してゐません。と申しますのは、尊敬する旦那様、ムーア人は我々よりもあつげらんかと嘘を吐くからです。彼らの想像力はめざましく、実際は起きてゐないのに、起きたことのように錯覚して思ひ浮かべてゐるのです。

私は旅立つ直前、この褐色の若者が、月光王子のお伽噺を再度話してゐるのを聞きました。一 彼には公正に対処しましょう、一 目立つた誇張も改造もありません。これが私の注意を引きました。しかし私は彼に問い詰める時間がなかつたのです。私自身が月光王子のようにこれらの異国の習俗慣習から離れて、キリスト教界の静寂さの中に戻らうと準備してゐたからです。

私はイギリスへ船で向かいました。やがてロンドンの町で最も高貴な弓造り屋の許で自ら仕事を見つけることができました。彼はその工房をテムズ川沿いの堅牢な塔の近くで開いていて、多くの職人を雇つてゐました。彼の技は国王や騎士階級に人気があつて、彼の富は増大してゐり、彼は声望ある男と呼んで良かつたでしょうが、ただ職人皆がそうであつたようにザクセン出身でした。しかしザクセン人は、そのノルマン人の支配者達の征服以来、不正直者と見なされてゐて、非キリスト教徒的具合に弾圧されてゐました。

「おやおや」とブルクハルト氏は遮つた、「これがヘンリー王の背後で、その生涯の半分を尊大に騎乗してゐた男の語る事か」。

ハンスは司教座参事会員に氣転の利く視線を向けて、長いこと思案せずに答へた。

「旦那様、判断は射撃同様、単に立脚点によります。当時、私は、ザクセン人の間で暮らしてゐて、私はノルマン人の一行が甲冑を付けた馬に乗って飛び過ぎて行くとき、脇に退いたり、帽子を取つたりしました。その後、私自身が馬上にあるときは、ザクセン人から帽子を取らずに挨拶されたら、私は無然としたことでしょう。今では、ザクセン人もノルマン人も私にとっては色褪せた絵となつてゐますので、白髪頭の英知を得てゐる他に、

中等程度の節度ある立場になっていて、それでこう申し上げます。権力や征服は神の定めたものである、と。それにノルマン人達はより鋭い血気であり、より性急な精神でありますので、支配者向きでありましょう。しかしこの同じ神が下僕姿となりまして、我々皆をその有り難い血で購っておられます。それで上に立つ者は、その召使い達に寛大であるべきで、その下僕の妻や子供にむごいことをしてはならないのでありましょう。

私の親方もそんな目に遭うことになって、不吉なことに、美しい娘がこの家で育っていたのです。

実際金髪のヒルデはロンドンで最も美しい娘で、彼女が夕食の後、何度も依頼されなくても、そのバラードを歌って聞かせるとき、私は彼女から目を離せなかったものです」。

思い出に圧倒されて、この髭男は、その広く突き出た額を揺すって、音程の外れた調子で口ずさんだ。

「ロンドンで生まれた若いビーハン[Beichan]、
異国を見て回りたいかった。ー」[A.Thierry:Histoire de la conquete,...S.308]

「ハンス、どこへ脱線して行くのだ」とブルクハルト氏は英語が理解できず、不機嫌になり始め、叫んだ。

石弩屋はその夢から醒めて、その老いた聞き手の弛緩した表情から、この老公には序言が長すぎて、退屈なものになっていると読み取って、急いで語りかけた、「若いヒルデが私どもに歌ったこのバラードは、何のことか分かりますか。...

サラセン人女性の胎から生まれた一人の聖人のことで、あの聖人トマス、その方のお話しをするために私はここにいるわけです」。

ハンスがその小舟を自らの人生の水路からより大きな水路へと導いてきたこの突然の転換に司教座参事会員はあるショックを受けた。彼は安楽椅子の中で、その年齢が許す限り、素早く垂直に起き上がって、驚嘆して叫んだ。

「聖人トマスの血にはサラセン人の血が流れているのか。お主は正気か」。

「貴方に大聖堂の尼僧院長が、仰有るように、貸与された羊皮紙をよくよく読まれたら、貴方はそんなに驚いた目で私をご覧にはならないでしょう。と申しますのも、まさにこの点が、賭けてもいいですが、その中で強調されていましょうから。だってロンドンの牧師界はすべてこの件に強い関心を示して、この異教徒の女性は、キリスト教徒との結婚生活に入る前に、入念に改宗させられたのです。彼女はグラツィア、あるいはグレイスという名前で洗礼されました。ドイツ語で恩寵です。聖母様がこの異端の女性に示された大いなる恩寵のことなのです。

このサラセン人女性の新婚の夜、ロンドンの予言能力のある尼僧がある夢を見て、この新しい婚礼から一本の白い百合が生まれ、天に向かって育つのを見ました。つまり一人の聖人のことです。

そしてこの尼僧が見たような具合になりました。

しかしこの異教徒の子供が聖人に育つまでには、色々な苦難がありました。流血、果てしない嘆き、国王の失墜、そして一つの王国の没落ではなくても、動揺があったのです。

さて、旦那様、貴方のお耳に入りやすいよう、まことに整然と、トマス・ベケットの両

親は誰であったか、お話ししましょう。

この話しは私にとって馴染みのものです。と申しますのは、これはブロンド髪のアイルランド人の大好きな話で、彼女は当時まだ若くて、無邪気で、互いに愛し合う二人が陸や海を越えて出会うという奇蹟を自然なことと信じていたからです。

かつて、何年も前に、ロンドン出身の商人、ギルバート・ベケットという名前の者が、東洋へ出掛け、そこで騎馬の者や家畜の群れと一緒に砂漠を移動して行く王侯に出会い、捕縛されました。この異教徒の自分の娘[王女]がその捕縛を憐れみ、それを断ち切った。それから一年経たないうちに、彼女はこのザクセン人の後を追って逃げた。[史実のトマスはThierryの説とは違い、ノルマン人系]。というのは彼に心を奪われたからです。そこでイギリスでは人々がこう歌い、言ったのです、高貴な異教徒の娘が、二つの言葉しか操れず、考えられなかったけれども、つまりロンドンとギルバートの二語を持って、自分の愛する男を求め、探した、と」。

「いいか、ハンス」と司教座参事会員は募る不信感を言葉にした、「そなたはお伽噺の翼のある子馬に上手に乗ること、コルドヴァのお伽噺の語り手、そなたの褐色の友に負けていない。ただ自分もその場に居合わせましたと言い張っていない点が違うだけだ」。

弓造り屋は無造作に両肩をすくめた。

「親愛なる旦那様、居合わせたのは、私ではありません。しかし私の親方、この親方は厳密な素っ気ない男でしたが、しばしば私に語っていました。自分は、若い独身の頃、町の通りを抜けて、進んで行くサラセン人女性の後を付けたものだ、と。と申しますのは、この女性は通行中の男を呼び止めては、こう尋ねたからです、『ギルバート』。そのことで彼女は町中の話題になったようで、仕舞いには多くの人々が後を追って、彼女と一緒に『ギルバート』と叫んだのです。ある者達は、苦悶の余り、一切食事を摂らないこの美しい腹ぺこの女性の姿に同情していましたが、別の者達は、平凡な名前なのに、ロンドンに何千人もいる中から一人のギルバートを探しだそうとする阿呆な女性を嘲っていました。ようやく本物のギルバートがその窓辺、家の敷居の前に現れて、その異教徒の女性の手を握って、自分の嫁に迎えたのです。

しかし親方はこの話しをするときに、必ずこう言い添えることを忘れなかったものです。

『ハンスよ、進んで来る異教徒の女達は我々キリスト教徒達に何ら良いことをもたらさない。この砂漠の娘はそのテントに残っておれば良かったのだ。我らのイギリスに向かって泳いで来ず、こちらで我らに宰相を生んで、民衆に対する裏切り者を育てずともな』。

宰相、イギリスの世界的に有名な宰相、国王の歓喜にして英知、ノルマン人達の称賛にして羨望、ザクセン人達の憎悪にして秘かな恐怖、とこう当時皆が噂したものです。

その急速に輝く星、無尽蔵の豊饒の角からのように彼の上に注がれる恩寵と名誉、彼の塔、砦、修道院、彼の驚異の庭園、無数の森、数百人、その後の数千人の彼のお供の騎士、彼の馬やラバの黄金の馬具、彼の祭典の贅沢な食卓、招待客の果てしない列、彼の高価な衣装、まばゆい宝石、
一 こうしたことすべてをロンドンの人々は嘆賞し、話題にしました。

工房で私は仕事の間、耳を閉ざすことができず、それで絶えずこのザクセン人とサラセン人の間の息子のことを聞かされました。彼に対して国の人々が皆、悪口を言うのに私は驚かなかった。これには国の事情がありました。つまりこの宰相は、国王の恩寵という陽

光を浴びている唯一のザクセン人だったのです。しかしいずれにせよ、今やザクセン人の子息達が跪いて仰いでいるこの男は、その父祖からは立派な評判を得ていなかったというのは、忘れてなりません。

父祖のオリーブの樽や品物の梱の匂いを嫌っている劣等な息子であったと言われていきます。贅沢なノルマン人司教の下の仕事にこの青年はまず就いて、そこでフランス語の操りを学び、その後実直なザクセン人の言葉を口にしなくなったそうです。彼の父親側のザクセンの血筋を嫌って、軽率にもこのノルマン人の両手から初めの聖別式を受けたとされます。それから、父親の死去によって裕福になり、海を渡り、カレーで忠実なザクセン人の従者達を解雇し、フランス人の召使い達を雇い、高価な衣装を購入し、騎士として登場したそうです。アキテーヌ[フランス南西部]とスペインを経由して、ムーア人の宮廷を訪ね、母方の異教徒の血が騒いだのでしょうか、コルドヴァの国王の許で大いに厚遇されたそうです。そこで東洋の賢者達と占星術や秘伝の学問に熱中し、やがてその師匠達を凌駕して、それで帰郷後は、ヘンリー国王をいたく感銘させて、自分に対し揺るぎない信頼を抱くよう取り込むことに成功したとされます。

旦那様、これらのことに真実の黄金の粒を見いだすことは難しいことです。それだけに、これらの生きたお伽噺を直接この目で見たいという欲求が高まりました。しかし長いこと我慢する必要がありました。トマス・ベケットは当時、国王と一緒に海峡の向こう遠くのアキテーヌにいたからです。ここはご承知のようにその皇后の女子相統領地でした。

ようやくその日が来ました。私は工房で石弩の矢を作っていました。すると通りが不穏になって、騒がしく、うるさくなり始めました。私の職人達は道具を置いて、床几やベンチに乗って、窓辺に頭を押し付けています。ティンパニーやシンバルが打ち鳴らされます。馬上の楽人の後、胸に三頭の豹の紋章楯の伝令官が従っていて、道を異教徒の女、グラツィアの息子のために、準備しています。

彼は美しい男でした。王侯然としていて、ソロモン王のようでした。ノルマン人の殿方達とは多分、顔の血色の良さや体型の威力の点で遅れを取ったかもしれません。しかし彼は類い稀な優美さでその黄金の馬具を付けて踊るアラビア産馬を操っており、その色合いの失せた顔には、真面目な愛敬がありました。

下層の人々に混じって、私が当時、彼を賛嘆していたとき、私自身がしばらくしたら国王に近侍して、そこでこの風変わりな殿方に毎日、いや時々刻々と会うようになるであろうことは、思いもよらぬことでした。

こうなったのは次のような次第でした。

私の親方の工房には、ノルマン人達が入り込んでいました。というのは、新しい技法で発明されたか、完成化された石弩がいつも試されていたからです。残念ながらこの訪問の際、内気なヒルデは必ずしも隠れていなかった。彼女を目にすることは、私の喜びであり、それを望んでもいました。それでノルマン人の騎士達の目が鋭く、彼女に据えられていて、危険なものになっていることを、私は見逃さなかった。彼らの一人、彼らがマレルブのギー[虚構]、つまり害草のファイトと呼んでいて、宰相のお供や贅沢な食卓に着いて害毒を垂れ流している者、生意気な無頼の貴族の小倅が、女性に対しては洒落た作法を心得ていて、私にとっては日々苛立つ毒針となっていました。彼がザクセンの娘に対し、婉曲ないちやつきと剥き出しの男の欲望の間の境界領域を楽しむのを見ると、私の心は痛みました。

見ていながら、ナイフで彼の胸を刺すのが許されないのですから。ひょっとしたら命を懸けても良かったかもしれません。しかしそんなことをして、親方と娘さんの一生を台無しにしたくなかったのです。

言うまでもないことでしょう。我がブルクハルト様も自分の青春時代から覚えがありました。悪漢はこのような場合、いかに敏捷にその網を投げ、引き締めるか。

或る日、親方と私はロンドンから数マイル離れた城に呼ばれました。ノルマン人の領主の武器庫を造るためです。約束の芝居だったのかもしれませんが。私どもはあらゆる口実でそこに引き留められ、ロンドンへ戻って見ると、若いヒルデが消えていました。一 近隣の者達の供述では、強引に拉致されたもので、この人達は夜間の馬の足音と嘆きの声を聞いています。臆病な職人や怖じ気づいた女中は、親方に話しを聞かれたとき、いそいそと従って出掛けましたと嘘を言うのです。

私はマレルブ[害草]のギーを疑いました。一 何と言おうか。この件は私には確信がありました。それで私は親方に助言しました。宰相が通る道に身を投げ、跪いて、我らの工房の側を、国王によってその城代へと昇進させられたロンドンの堅牢な塔へ向かって馬で通りかかるとき、宰相が耳を傾け、そのノルマン人の下僕を懲らしめるまで、譲らないことです、と。

それで或る日そうになりました。我が哀れな親方は、砂塵の中、宰相の煌びやかな馬具の側対歩の馬の前に身を投げ、その白い髭を掻き毟りながら、声を詰まらせて、両頬から涙を流して、自分の娘の盗賊に対する裁きを要請しました。この盗賊は反抗的な顔つきで、しかし落ち着いた目をして、その煌びやかな主君の背後、三番目の列を騎乗していました。

私は忘れることもできないことで、今でも眼前に浮かびますが、この宰相が悠然と動じずに、表情一つ変えず、不安に駆られている親方をほとんどその半ば閉じられた目の黒っぽい眼差しで触れもせず、馬をゆっくりと親方の側を通過させたのです。

それからこの絶望しているザクセン人親方が飛び上がって、握り締めた拳を彼に振り上げ、彼の背に向かいこう叫ぶと、『坊主め、そなたに子供がいないのは、残念だ。ノルマン人にやられてしまう子供がいないのは』。すると、トマス・ベケットはうるさい昆虫につきまとわれているかのように、軽くそのアラビア産馬に触れ、若干早い運歩に変えた。しかし私は老公を家へ押し戻して、宰相の伴をしている騎馬隊の嘲りの視線や軽蔑の冗談から遠ざけました。

そこで嘆きの日々が続きました。今日でも痛々しい思いで思い出されます。当時はほとんどこれには打ち勝てないと思っていました。或る日哀れなヒルデが、いつの間にか、暗くなったとき、人気ない工房に座っていたのですが、それでも気分は晴れなかった。彼女は父親を待っていて、父親は夜になると自分の手で店と玄関に門をすると知っているのです。

ノルマン人のマレルブ[害草]が囚われの娘を自発的に返したのか、彼女に飽きたせい、それとも宰相が秘かに彼に圧力をかけたせい、分かりません。

それに対し一つのはっきり分かりました。親方は誠実な意図から、私を店から追い払いました。親方は、自分の虐められて怖じ気づいた娘を、親戚筋の一人のアングロサクソン人の嫁にしようと考えていました。彼は工房で働いていて、トラスタン・グリム

[虚構、ベケット暗殺者に抵抗したEdward Grim由来]と言い、粗放な赤髪の男です。親方はそれを私に見せたくなかったのです。それで親方は私に毎日、より良い職を探すよう勧めました。私はその当時、憤懣や憤激を抑えるために、当時の他のどの人のものよりもより遠くへ飛び、より軽く張ることのできる石弩を工夫しました。一 立派な品で、後には更に何度も改良しましたが、一 それで親方は、私の発明品をヘンリー国王に直接持参し、推薦するよう、私を説得しました。国王は高貴な投擲術、弓術の後援者、保護者だったのです。私は、親方が善意で私のことを気にかけっていると分かり、親方の助言に従いました。

第四章

私がウィンザー城で初めてイギリス国王の前に歩み出たとき、私の心は全身で震えました。と言いますのは、国王は強大な体型で、支配者然とした仕草で、その青い、隈のない目は二つの炎のように燃えていたからです。国王は最初私を無愛想に見つめていましたが、すぐに何の話しか分かると、私の詰まった言葉からよりも早く捧呈した石弩を手を取られて、矢を置き、構え、開いた窓辺に近寄って、カラスを射ました。カラスは凧の風の状態で、城の塔の動かない旗の上に止まっていました。王の顔に明るい笑い声が弾け、旗は回転し、そのカラスは舞いながら、雨樋に墜落しました。

今一度国王は指で弦と引き金を調べ、それから私に満足した視線を向けられました。「これは若造、巧みにできている」と国王は私の作品を褒めました。「では、これを武器庫に運び、軍備長官に私の御用掛として名乗り出るが良い。ドイツ人よ、そなたを採用する。石弩を私の狙撃猟に持って参れ」。

抗弁はなりません。たとえ私自身の心が、この世の芝居での最高のこととして、国王にお仕えしたいとは思わなくても。

ヘンリー王がまだ私に話しかけておられるとき、その三男のまだ子供のリチャード卿[1157-1199]が歓声を上げて飛び込んで来ました。「父上、ノルマン人達の雄馬が到着しました。素晴らしい血統です」。そしてヘンリー王はその寵児に連れられて行きました。

この時、低い壁龕から一人起き上がりました。私には見えない所で、文書の積まれた大理石のテーブルの前に座っていた、高貴な青白い男で、高価な衣装をまとい、この衣装を優美にゆっくりと動かしながら、私に寄って来ました。彼の方でも私の発明品の教示を受けたい風でした。それは宰相でした。私は、一 国王を前にしている時よりも戸惑って、私の説明を繰り返しました。一 信じられましようか。私は不安になりました。宰相は、注意深く聞きながら、私に腹藏なく喋らせていて、あたかも私の一人語りは余りに大胆に、声高に高いドーム状のホールで響いているように見えたからです。

『閣下は』と私は結びました、『学者です。戦争の武器はお気に召さないのではないでしようか』。

宰相は黒っぽい目を伏せ、気さくに答えました。『私は思索と工芸が好きで、分別が腕力をねじ伏せて、より弱い者がより強い者を遠くから射て、負かすのは好きなのだ』と。

石弩に対して、このように素敵な洞察力のある褒め方をされて、親愛なる旦那様、宰相はそれとなく私の気持ちをくすぐりました。私はこの青ざめた、超人的に賢い顔の方への怖気を払うことができましたら、この宰相の英知に対する私の感謝と好意を言葉にしてい

たかもしれません。

武器庫に足を運ぶと、そこには軍備長官がいました。白髪のノルマン人で、多分私より頭一つ背の高い人です。このロロ氏[Rollo、虚構、ScottのIvanhoeに登場]が私を高慢に見くびって迎えてくれました。しかしそれから詳しく私の発明品を調べました。彼はイギリスで、すべての武器に関し、最良の通であったからです。彼は何か賛同の言葉を歯の間から漏らして、最後には私の考えに同意してくれました。彼はそれから私の故郷のことを尋ね、私がシュヴァーベンの海[ボーデン湖]から遠くない地の出身であると知ると、その厳しい皺の顔から注意深い視線を贈ってくれました。

『シュヴァーベン人は誠実だ。この連中をここの我らの宮廷では必要としている』と彼は言いました。『ドイツ人よ、正直に振る舞うことだ。するとここでは鼻屑して貰え、報酬を得られる。強力な主君にお仕えしているのだ』。

彼はノルマン人の国王達の人となりを大仰な言葉で褒め始め、その諸帝国や支配者達を数え上げました。『海のこちら側でも、向こう側でも彼らは強力だ』と彼は自慢しました、『彼らは掴んだものを決して離さない』。

そう言って彼は征服王[Wilhelm der Eroberer,1027/28-1088]とその息子[ウィリアム赤顔王,1056-1100]の鎖帷子や王の兜を見せました。それらは長く伸びたホールの壁の最前列に軍備や武器の果てしない列の中に掛かっていました。

『ただ一つのことだ』と彼は頭を振って続け、ある錆びた矢に手で触れることを私に禁じました。その矢は二番目の国王の武具の下、石のタイルの上にあります、『一つのことだけ、最後のことだけが、上手く行かない。高貴な殿方達は皆、邪悪な死を迎えている。この矢が、一 これを誰が射たか、神と悪魔のみがご存じのことだが、一 ウィリアム赤顔王の命の緒を陽気な狩の最中に断ち切った。しかし大したことではない。輝く太陽はどれも流血の色をして沈むのだ』。

かくて私はこの時から狩や戦役に、私の主君、国王の後を追って、騎行し、最初に出会った時の国王と同じ国王を見いだしました。つまり四月のように目まぐるしく気分が変わるのです。無愛想で、性急、激しやすく、怒ると恐ろしい、しかしまた話し好きな性格で、親しみやすく、気さく、それで機嫌の良い時には、冗談を話して良く、そんなわけで、この崇高な主君が、その召使い達と一緒に笑われて、その両頬からきらきら涙が落ちるのでした。

しかし私が馬小屋や武器庫から控えの間に伺候するようになり、最後には国王の寝室の近くで雄犬のように寝ることを許されるようになったのは、一挙にではなく、一歩ずつでした。

ヘンリー国王は強壯なニムロデ[狩猟好きなバビロニアの王]で、一頭の鹿を追いかけて、長距離の狩に飛び込むことを好まれ、そのお供をはるか後に置き去りにし、そして、長い眠りを必要とされる方ではなくて、夜暗くなると、どんな臥所でも構わずすぐに横になりました。そこで私は、私の荒い鼻息の馬に乗って、すぐ国王の後に従いながら、しばしばお側に残っているただ一人の者となっていて、狩をして汗をかいた後、国王が杯に注がれるとき、私も一緒に酔って、そして国王を寝床に運ぶものでした。かくて国王は私のご奉公に慣れられて、そこで邪悪な策謀を抱いてへつらわずとも、私も十分に洒落たことが言えるようになっていて、自分の立派な芝居を不器用に壊すことはしなかったものです。

その際、三点が私の役に立ちました。私がノルマン人でもザクセン人でもなかったこと、そして私が私の主君からのみ賃料や贈り物を頂いたこと、 — ただ宰相のみは例外で、この方には誰も断れないもので、時折のことで事情によります、そしてまさに愚かなハンスの振りをしなくても、自分の天性よりも若干素朴者の振りをし、また自分が実際経験しているよりも若干初心者らしい振りをしたことです。かくてヘンリーは私のシュヴァーベン人らしい忠誠心を心地良く感じたのです。

しかしトマス殿も更に私が国王の寵を得られるよう加勢され、私に恵み深い視線を送ってくださいました。 — と申しますのは、国王はその宰相の目で見られるからで、 — それで、宰相は時折、私に冗談の意味深な言葉を投げられました、それはヘンリー王には恐れ多くて直接言えないことであっても、しかし国王には知って頂きたいと宰相が望んでおられることだったのです。

宰相の好意は、或る日、宰相と私が口に指を当てた日、明らかなものになりました。

つまり、私の国王ご奉公の最初の年、ヘンリー王が或る蒸し暑い夏の午後、自分の部屋で昼寝をされて、その時、宰相が緊急の御用で王を訪問されました。私はトマス殿に歩み寄り、唇に指を当てて、囁きました。『閣下、国王は眠っておられます、...』、尊敬する旦那様、貴方もご存じに違いないでしょうが、グラナダの異教徒は、貴賤を問わず、微睡眠とか睡眠が話題となるたびに、こう付け加える習慣があります。『眠らず、微睡眠者は、幸いなるかな』[千夜一夜物語由来]と。これは幼少の時からのごとく、我々シュヴァーベン人が『今日は、[神様の挨拶があれかし]』というほどのことで、それ以上のことを深く考えません。私は異教徒の許で暮らしていましたので、この呪文にすぐに慣れまして、無邪気に若干この国の色合いを付けました。私自身が微睡眠で醒めていなかったのか、それともカーテンのある部屋ではいつもより青ざめて見える宰相を見て、ムーア人のことを思い出したのか、それとも単に習慣になっていて、その威力が強かったせい、 — 要するに私はこう言いました、『閣下、国王は眠っておられます、 — 眠らず、微睡眠者は幸いなるかな』。

すると宰相は意志に反して微笑され、遂にはその真珠の白い歯の列がすべて微光を発し、それから真面目な調子で私に尋ねました、『どうして一人のドイツ人がそのような挨拶をするのか』と。

私は、国王が目覚めるのを予期しながら、三年グラナダで弓造りを学んだのだと、宰相に語り、そして月光王子の話も語りました。これは勿論大胆な悪ふざけで、私にとって汚点となっていたことでしょう。しかし月光王子と宰相とが同じ人物であるか、尋ねたい、そして永久に冷静沈着な男が少なくとも今回ばかりは急襲されないか試してみたいという誘惑に駆られていたのです。トマス氏はしかし表情を変えなかった。宰相はしばらく、いつもの習慣のように、目を思案して伏せて、それから目を私に向けて、ゆっくりとその白い指をその口に当てました。それに対し、私は彼の前で膝を曲げ、それから宰相を国王に取り次ぎました。国王はその寝室で丁度物音を立てられたのでした。

そこでこの両殿方が私を鼻屑にされて、同じように私を信頼されましたので、国王がその宰相と国事につき相談される時、我が国王の椅子の背後に侍る稀なる厚遇を私が頂戴したという奇蹟を貴方も信じて頂きましょう。ヘンリー王はそのとき、私にフランス産の真珠のような白ワインを注がせて、策謀的な目をし、満足して打ち解けながら、その宰相

の鋭い議論やチェスの指し手[策略]を追うのでした。この宰相は、ほっそりした白い蛇のように、王侯の厚遇を得て、日光を浴びていました。

ヘンリー国王は、国王によって無の中から高位に引き上げられた者を、自分の被造物として満足して眺めておられました。しかし、尊敬する旦那様、この被造物は創造主にとって不可欠の者となっていて、穏やかな頑固さでこの主を牽制するものです。

しばしば私は、宰相がこの国王を、その馬が狩の用意が出来て、すでに宮殿の中庭でいななき、足踏みしているとき、そして王がその敷居を跨いでいる最中に、呼び止めて、巻き物を国王の前で広げ、この勝手な王に対し、穏やかな言葉で強制力を発揮して、聞く耳を持たせるようにする場面に居合わせました。宰相は石筆を片手に、羊皮紙をもう一方の手に持って、ヘンリー王の指示された言葉を繰り返し、敷衍して、その言葉を美しいしなやかな弁舌に変えて、それで流麗なこと、流れる黄金のようであることを私は耳にして、賛嘆せざるを得なかったものです」。

「そなたの弁舌も流麗、私は賛嘆せざるを得ない」と白髪の司教座参事会員は当てこすった。

「私に話しをさせてください」とハンスは叫んだ、「そしてこの地上に出現した、類い稀なこの男、この世紀の手本にして流行の人物のことを描写させてください。イギリスの最も高貴な貴族が、その子弟を小姓として彼の見習いに就かせています。この成り上がり者のザクセン人の手からその騎士叙任式を受けなかった若殿は、こうした高慢で無礼な若者達の間で一人前に見なされなかったのです。

この気取った少年達が、彼らは決してその花と咲く唇をイギリスの言葉で汚したくはなかったことでしょうか、トマス・ベケットの干涸らびた唇に魅了されているのを見るのは嬉しいことでした。勿論トマス・ベケットは少年達の誰よりも上流階級のフランス語を上手に話しました。彼らは彼の喋り方、言い回しに丁寧に注目し、宮廷的完成の至高のものとして、その冗談の洒脱さを賛嘆し、その衣装の裁断を真似し、その平静な身振りを模倣しました。

しかし一つのことを、思いますに、この宰相には欠けていました。男らしい血筋の、性急さと鋭意さです。

彼は臆病でしたというわけではありません。女々しいとヘンリー王の宮廷では一日も保たなかったでしょう。ノルマン人達は名誉の点では他の貴族と違って敏感です。すぐに鞘から剣が抜かれるもので、一瞥あるいは一太刀の一撃に対し、防御、応戦できない者は、敗者になってしまいます。

トマス殿は、半ば僧侶でしたが、すべての騎士的鍛錬や武術を心得ておられました。その柔軟な体型が役立っていました。それで、政治上都合がつくのであれば、国王に従って戦役に臨まれました。私はあるとき、攻城梯子を宰相のすぐ後登って行き、かのフランスの砦の輪状石壁を越えてから、一人の憤然としたピカルディー人とつかみ合いになるのを見たことがあります。実際死人のように青ざめて、歯をがたがたさせていました。しかし宰相は敵の剣をかくぐり、心臓に正しく狙いを定めてその背に剣を突き、それから勿論、敵が血溜まりに倒れると、その剣を厭わしそうに眺めて、投げ棄てました。『弓造りよ、私に綺麗な剣をくれ』と私に命じました。しかしこの棄てられた剣は、余所の鍛冶技法の傑作でして、どんな甲冑の目をも布のように切断するものでした。私はそれを拾い上げて、

長年、自分の護身用に使いました。

トマス殿は血を見ることを好まれなかった。

宰相の広大な所領地では、野獣が森の空き地で楽園にいるかのように戯れ、草を食べていました。宰相が森に行かれると、獐鹿が近寄って来て、その手から喜んで食べていました。

一人の人間の死刑判決も、青ざめずには署名することができなかった。死刑は、きちんとした国の制度の下では頻繁に見られますが、この死刑を見守ることは、宰相の力に余るもので、これに比べ、我が主君の国王はよく下って来られて、正義の具体的発露として死刑を見守られました。しばしばヘンリー国王は、宰相と一緒に処刑場を馬で通りかかり、トマス殿が不快げに頭を背けますと、笑われました。それはそこに住みついている霊のせいではなく、(宰相は霊を信じておられなかった)、そこで、千切れた肢体が車輪上で痙攣するという具合に苦しんだ人間に対し慄然とするからで、宰相はあるときそう漏らしました。

その悪魔的所業を白状した著名な魔法使いの女、魔女の判決に署名することさえ、宰相は拒否されて、そのことで、普段はとても賢い方なのに、その異教徒的気分に従われて、イギリス全体と敵対することになりました。国王、貴族、民衆、それに僧侶達です。

それは黒いメアリーで、ロンドンから遠くない或る村で、悪さを行い、嵐を起こし、疫病を広め、家畜や子供を絞め殺して、遂に僧侶の裁判で拷問を受け、自分の悔い改めた魂を永遠の劫火から救い出すことに同意した後、現世での火刑という恩赦を受けたのです。

すると、柔弱な宰相がこの妖怪の女をそのひどい牢獄に訪ねて、彼女の無残な青春時代や、後の悪魔との付き合いを聞き出すということが生じました。トマス殿は、熱い涙ながらに浄化の炎を求めて叫ぶ黒いメアリーに対し[悔悛のファウスティーネに類似、拙訳224頁]、悪魔祓いをして、彼女は他人と自分自らを欺いているのだと咎めたということ、貴方は信じて頂けますか。彼女が宰相に具体的に全てを語るにつれ、一層この異教徒の宰相は、悪魔のことを信じなくなりました。トマス殿は国王の前に持ち出しました。国王はしかし恩赦のことを聞き入れようとなさらず、厳かに言われました。『宰相、私はイギリスのキリスト教の良心だ。そうはできない』と。すると宰相は悠然と言われた。『世紀の高貴な英知に対し、つまり御主君、御身の英知に対し、不肖私が何を言えましょう』。そして死刑に署名しました。

後に、宰相が広間を去るとき、敷居の側に立っていた私に向かって言われました。『メアリーは魔女だ、私が聖人であるように。人間が何であるか知って慄然とするのと同様に、人間が何であるか自惚れていることを知って慄然とする瞬間があるぞ』と。

この話しは何のことか分からなかった。しかしトマス殿は高慢な哲学をしていて、悪魔の魔法を信じていなかったと推定せざるを得ません。

その後黒いメアリーが引き出され、処刑されることになったとき、その牢を人々が見てみると、空になっていました。ヘンリー王が指で脅して、宰相にその説明を求めると、宰相は答えました。これは以前と同様、詐術です、と。かくてこの件は片付けました。

後に噂が生じて、黒いメアリーはこのような悪巧みで逃げたのではなく、宰相の辺鄙な農園で静かな引きこもった生活を送っているとされました。彼女が率直に自ら引きこもったのであれば、この新しい生活が恵まれても良かろうと思います。白状致しますが、彼

女がその黴の生えた麦わら束の上に座って、そのもつれた髪の房の下から、黒い迷った目で宰相を見上げているのを見たとき、そして彼女が自分の惨めな青春時代を嘆くのを聞き、自分がまだ無邪気であったときに、人々からなされた仕打ちを聞いたとき、私もこの罪人への同情に駆られたものです。私も結局こうした仕打ちを二、三回経験しています。

旦那様、お分かりでしょう。私は実直に打ち明けているのです。宰相はこの魔女を訪ねたとき、私を信頼できる男として一緒に馬で同行させたのです」。

司教座参事会員は石弩屋を探るように見つめた。「ハンス、そなたが」と彼は叫んだ、「その邪悪な女を逃がしたのだな」。

「本当にそう思われますか」とハンスは答えた。あたかもその髭の下で、口が歪んだかのようにであった。それから彼は話題を変えた。

「あの当時イギリスで暮らしていたもっとひどい魔女も火刑にできなかったものです。それもまことにもっともな理由がありました。

我が主君の国王が彼女と結婚していました。

ヘンリー王がエレオノール夫人[Eleonore von Aquitanien,1124-1204]、このフランス国王と離婚した女性と何故結婚したのか、これは世界地図を眺め、彼女が持参する国々を数えてみれば、誰でも分かります。それは、ガスコーニュ、サントンジュ、ポワトゥーで、無数の砦と町が付いています。夫人は若いとき、愛らしく謙虚であったとされています。私は夫人の王冠から、この春の花を抜きたくありません。当時、私が夫人の前で跪いていたとき、夫人は豊饒な髪の毛の黒い兜に、落ち着きのない、せわしい目、それにいつも休まらない足の方でした。ヘンリー王も夫人を遠ざけられて、あるときは尼僧院に籠もり、夫人は時に敬虔になられたからで、あるときはわずかな召使い達と一緒に、人里離れた砦に籠もりました。そこには時折、野心的な、年若な息子とか、あるいは高貴な女性と交際したいという虚栄心の強い流れ者が加わり、人数が増えるという風でした。

宰相は夫人に対しては、応対せざるを得ないとき、大いに恐懼して仕えましたが、宰相の方は乗り気でなかったと思います。というのは宰相は女性に関しては、その優しさや上品さを愛していたからです。それで宰相は目の愉しみとして、一 もっとも偉大な似而非予言者[モハメッド?]は弟子達にこのイメージの愉しみを禁じていましたが、一 しばしば貞潔な大理石女人像の白く落ち着いた肢体を眺めていました。宰相はこれらの像をその宮殿に置いていました。まだご覧になったことはありますまい。それらは、破壊されたギリシアの神殿の瓦礫から取り出されたもので、ビザンチンの総主教が宰相に対し、政治的好意を得ようと、その若干を寄贈したものです。それは目の視線や力のない死滅した石です。しかしそれは長く見つめるにつれ、生き始めて、しばしば私もこれらの冷たい被造物の前に立ち止まって、この像は楽しい気分なのか、悲しい気分なのか確かめるものでした。

これに対しエレオノール夫人は、宰相のお気に召さなかった。そして夫人の方では、彼のことを衷心から憎んでいました。宰相が夫人の手に、無実のヨセフが[誘惑され]エジプト女性[ポティファルの妻]の手に残したように深紅の外套を残したからかもしれません[ポティファルはヨセフに誘惑されたと偽証した、創世記39]。というのは夫人は、まことに正統派信仰の人であったか、一 この点に関しては何ら悪い噂を聞いたことがありません、一 異教徒に対し或る嗜好があったからです。夫人は最初の敬虔な夫に従って、約束の地へ

十字軍の遠征に行ったとき、以前サラセン人の若い燕を有していたのです。

このことは貴方も初耳ではないでしょう。地球上に知れ渡っていましたから。

あるいは夫人が宰相を憎んでいたのは、単に宰相が、夫人のなすこと一切に、王国に対する一つの危険として、一つの脅威的混乱として注目していたからにすぎないでしょう。親愛なる旦那様、夫人の三つの国が、ヘンリー卿[1155-1183]、ジェフリー卿[1158-1186]、リチャード卿[1157-1199]、ジョン卿[1167-1216]の四人の国王ご子息に母系遺産として残っていたことを、お考えください。かくて宰相は英知を働かせて、エレオノール夫人が、ほどほどの行状を保ち、適度の手綱さばきの中に収まるよう努めました。余りにも緩くて、夫人の熱い血の気まぐれで、国王とイギリスに恥辱をもたらしてはなりませんし、余りにも厳しくて、夫人が突然不機嫌に棒立ちになって、夫人の国々やご子息と一緒に逃げ去ってもなりません。

トマス殿はこのご子息達を側から離さず、ご子息達にとっては懇ろな父親、時間ごとの教師という風でした。その天性が驕に従うというよりはしばしば嘲るというものでなければ、このイギリスの四人のご子息達に匹敵するものはなかったことでしょう。宰相はこの四人にとっても大きな愛情を注がれ、素晴らしい英知を向けられました。しかし貴公子ヘリーは宰相の、単にその衣装の襞や、その身振りの高貴な雄弁さを評価しているだけでした。彼は青二才で、役者でした。貴公子ジェフリーは、これに対し、一晩すると、昨日愛したものを、誓ったものを忘れていたものです。そして落ち着きのない性情で、何の楽しみごとも真面目なことも最後までやり遂げられなかった。

国王の第三子[長男夭逝]、リチャードは、獅子の心臓で、トマス殿が格別に愛し、私も大事に思っていました。彼の天性の調べは、角笛を吹くときのように正直なもので、若い競走馬が嘔むときのように泡がこぼれました。すると逆らえないもので、彼には善意にならざるを得ません。 — しかし賢明さはなかった、一文もなかった。それで彼の発作的血の所業の処罰を受けて、今この時間オーストリアの下方の塔に幽閉されています。[第三回十字軍(1190-1192)のとき、オーストリアのレオポルド五世を侮辱して、帰路、ウィーンで捕まり、身代金で解放された]。

貴公子ジョン、第四男は、 — 彼の悪口を言うことを神よ見逃し給え。と申しますのは、彼が今最も王座に近いからです。 — しかしこの地上にこの餓鬼よりも無益で邪悪な者はいません。彼が私とか他の被造物に悪行を行うとき、しばしば私の手は彼に対して打ち震えました。 — 彼が私の技法豊かな石弩をわざと貶したり、あるいはおとなしい動物を虐待するときです。

彼の笑い声ときたら。私は自分の人生で、居酒屋であれ、市場であれ、これほど品のない笑い声を聞いたことがありません。

宰相は私がこの四人に射的を教えるとき、時に見物していました。それから宰相は休みとなると、慰みにか教訓用に、動物の寓話を語って聞かせました。これは私にも猟師として面白いものでした。そのとき、その性情に応じて、あるいは少なくとも、人間と関連する動物のその種類に応じて、鳥類とか四本足のものが言葉を話したり、行動したりしました。この賢い遊びもアラビア人が発案したもので、動物の仮面の許、罰されずに、権力者の欠点を非難したり、嘲笑するためのものです。

さてこれらの寓話の動物どもの一頭が宰相の口によって恥をかき、被害を蒙ると、熊の

鈍重なブラウンが穴に落ちたり、狼のイーゼグリムが罠に嵌まったり、等々になりますと、小さなジョンはいつの間にか甲高い、悪魔的な笑い声に弾け、私は、彼の性情には慣れておりましたが、縮み上がって、宰相は、知恵を愛する者故か、その子供を悲しい目で見守るのでした。しかし宰相は自分の嫌悪感をこの内面の欠如人間に感知させず、むしろこの子供の目線まで下りて来て、他の者達よりも彼のことを配慮していました。私が宰相にジョン卿の新しい不品行について報告するたびに、宰相の溜め息を聞くことになりました。普段宰相は溜め息を吐かなかったものです。

実際、帝国宰相は国王のご子息を自分の子供のように愛していたのですが、悪しき報いを受けることになりました。

今や私は極秘の不正について話すことになります。これは確かにどの年代記にも記されていません。しかしトマス卿とヘンリー王とを、次々に葬ることになった墓穴掘りのシャベルです」。

石弩屋のハンスは、機械的に老いた強力な両手を組み合わせた。あたかもこの手もシャベルで墓穴掘りをしたかのようであった。

第五章

「今、貴方はヘンリー王の家政を覗かれたわけで」と石弩屋のハンスは続けた、「容易にまた、王はエレオノール夫人の許では、休息も楽しみ事も得られず、戦役や行幸の際、海峡のこちら側と向こう側で、その領地の娘達に混じって、しばしば物色して回ったと納得されることでしょう。

私は隠し立て致しませんが、この王の幾多の騎行の際、私はお供をしました。これは最初は僧侶の戒律の中で育った者として、むしろ遠慮したかったもので、時に告解することも困難になりました。しかし国王は身のまわりに安心できる人物が少なく、私は私の忠誠を尽くして、どのような状況下でも、家庭内不和や、いや、暗殺、毒殺を防いできました。

と申しますのは、エレオノールは嫉妬深い悪魔だったからです。夫人自身夫に対して誠実であったとは言えないのですが。夫人はヘンリー王の近習を何人か買収していました。買収される者がいて、それで夫人に王のすべての浮気が筒抜けで、夫人は恋敵をあくどいやり方で始末できたのです。国王は死んだ恋人を見つけたり、あるいは突然恋人が国王の腕の中で息絶えるのです。

かくて私が信頼できる下僕と国王には分かって、まことに私は国王にとって重宝だったのです。

或る日国王がわずかのお供を連れて、辺鄙な森で狙撃猟を行ったことがありました。そこは私が知る限り、普段猟をしないところでした。夕方頃になって、稲妻の荒天となり、殿方達は散り散りになりました。私は国王の側において、国王のために岩穴の中に避難場所を見つけ、そこで雷雨の過ぎるのを待ちました。雷鳴が轟きが止んで、雨が樅の木に葉に漏れてくるばかりのとき、自分らがやって来た道を探して、その道が千切れた枝や剥き出

しに洗い流された根が絡み合って、封鎖されているのに気付きました。その上には小川から溢れた黄色の水が湧き出ています。私は角笛を吹きましたが、どこからも返事がありません。すると私は国王から、森が明るくなっている方へ歩いて行くよう命令されました。私はそのようにして、国王のために狩の剣で切り開き小道を造りました。やがて沈んで行く太陽が深紅に目の前の幹に輝くのを目にしました。私は国王の方へ向きを変えました。しかし国王は苛立って、私の側を通り過ぎ、赤みがあった明かりの方へ向かって行きました。とても急で、私は国王の後を追うのに精一杯でした。

すると国王が不思議そうに突然歩みを止めました。森の端、垂れた小枝の下に国王は立って、右手を挙げて目にかざして、覗き、まじまじと沈む太陽の方を見えています。私は爪先だって、国王の肩越しに覗きましたが、それは一種の幻惑、魔法のように見え、次の瞬間には消えるに違いないと思われるほどでした。

金緑色の森の草原の上に、小さな宮殿が立っていました。多分グラナダの王国でこのようなものを目にしたかもしれませぬ。黄色の石の高い滑らかな壁で囲まれていて、その上に小さな青色の微光を発する丸屋根が聳えていて、細く暗い木々の先端が見え、ここがもっと南方の天の下であれば、糸杉と命名したくなる木でした。

可愛く堅牢なこの建物は、斬新で新しく、黄昏の中、宝石のように輝いていました。

国王は一言も発せず、急いだ足取りで、細い小門に向かって行き、その剣の柄でノックしました。中では何の動きもありません。そこで私も奥の石壁のアーチの中に隠れていた門の板戸を叩き始めました。すると脇の小窓の狭い隙間に老人の顔が現れ、また消えるのを見たように思いました。その後すぐに門が音もなく引き抜かれました。

一人の白髪のザクセン人が開け、国王の前で、黙って震えながら膝を折りました。『そなたは、エッシャーではないか』とヘンリー王は語りかけました。性急に笑いながら続けました、『そなたは国王を外に放置するつもりではないだろう。私は濡れて、腹が減っている。この綺麗な櫃は誰のものか。宰相のか。それともそなたはもはや宰相には仕えていないのか。聖ゲオルクにかけて、厳格なあの殿方が一人の森の妖精を囲っていると踏んでいるぞ。一体どんなメルジーネ[水の精、昔のフランスの伝説]が男を休みと快楽へ誘っているのだ。すぐにその愛らしい妖精に私のことを取り次げ』。

すると私もこの老公のことを見分け、彼がかつてロンドンで、宰相のお供の一人として、私どもの弓造り工房の側を馬で通り過ぎて行くのを見たことがあると思い出しました。そのときはその憂鬱そうな外見と白い頭髪の下に黒く密集した眉毛が目につきました。宮廷ではトマス殿の背後に再び見ることはなかったものです。

このザクセン人は国王を懇願するような目で見つめ、自分の命にかかわることです、とどもった。

『我が国王の言葉にかけて、そのようにはならない。そなたが受けた命令は私には通用しない』とヘンリー王は迫って、片足敷居を越え、一方私には、外で待機するよう目で合図しました。

エッシャーははなはだ狼狽して、まず事態がどうなるのか承知していなかったが、我が主君は、支配者然とした言葉で叱正された。

『門を閉めて、そなたの女士領主にこの王の訪問と恩寵とを伝えよ』。

私は待機して腰を下ろし、背中を壁にもたせかけました。夕方の涼しさが私には快適で、

休息は有り難いものでした。このアバンチュールは私には陽気に思われました。私は自分の髭の下で、ヘンリー王の最後の勿体ぶった話しぶりを笑って、自分の精神の中で、主君が今回は、自分の空腹と成熟した年齢を考えて、歌う吟遊詩人として門前に立ち止まらずに、この小宮殿のレディーに、要するに簡明に、自分の威厳と王侯の偉大さを見せつけたことを称賛していました。

とんだ阿呆な見方でした。

かなりの時間が経った後、小門がまた開き、ヘンリー王がこの小さな城から出て来たとき、その年の夏の最中でありましたが、真夜中になっていました。ザクセン人が松明で細い小道を先導し、やがて私どもは人気ないこの農作業園に達し、そこで馬と一人の案内人を得ました。

我々が明け方、城の門に着いたとき、昨日ここから国王と狩に出たわけですが、国王の鎧を私が支えますと、国王は私にその輝く目を向けて、左手で私の口を封じながら、右手で宝石の付いた留め具を帽子から千切って私に投げ与えます。

国王は財布に持っていた金貨のすべてを、老エッシャーの手に注いでいました。

これが発端でした。しかしこの年の夏至から、そして落葉の時節まで、私はしばしばこの平和な森を通って、国王のお供をし、もっと頻繁にただ一人っきりで騎乗して、国王の訪問を告げたり、あるいは国王の熱い恋の象徴を、海からの珍しい真珠や、この地球が懐胎する貴重なものを国王の秘密の愛人に渡したりしました。私は一度もこの女性を眺めたり、あるいはこの城の中庭に足を踏み入れたりしたことはなかったのです。ただ小門のところで、老エッシャーと付き合いました。勿論彼は、私の姿を目にするたびに、哀れに溜め息を吐くものでしたが、しかし服従を拒むこともなく、国王の手から彼の方へ落ちて来るものを突き返すこともなかったのです。

私はこの小道に日中姿をさらすことを厳しく禁じられていました。この中の人達も、私がかつて馬で騎行した中で、最も孤独な人達でした。その小道で生き物に出会ったことはなく、例外はかわたれ時に草を食んでいる一頭の動物と、二回ほどの、私が遅刻したときの、寂しげな森の旅行者でした。

このアバンチュールが始まってから月が変わっていて、或る日、私の栗毛の馬、ハンスが後ろ足を挫いてしまいました。私はこの馬を兄弟のように愛していて、この城の農作業園に、この馬が大丈夫と分かるまで一緒に残りました。それから私は徒歩で帰路に就きました。私はそこから急ぎました。澄んだ日中で、私がある広大な緑色の、嘲るような木霊のスポットに囲まれた空き地を横切って行くと、その端の、そこが端緒の岩石道路で馬の蹄の音が響きました。私は素早く茂みに隠れ、腹ばいになり、目を長い草原の小道に向けて覗き見をしました。すると私はそこに宰相のアラビア産白馬を目にしました。その主人の宰相はゆっくりと無造作に手綱を取っています。美しい馬は欲情的に鼻を鳴らし、鼻の穴を広げて、朝の空気と森の香りを吸い込んでいます。

旦那様、私はこの緑の草原で宰相に出会っても驚かなかったものです。この道を進んで来る宰相に、遅かれ早かれ出会うであろうと覚悟していました。この可愛い砦は彼の下僕が番をしていますし、そのムーア人風な建築様式、城の庭園の異国風な木々、周囲の猟師から守られた獣は、この建築主について夙に確信を与えていたからです。そこから国王も

最初の日、ここは誰が何か秘蔵のものを隠しているか察知していたであります。

私は実際以上に自分をより良く見せようと思いません。私は英知のこの父親、深い学識の方の何か人間的な部分に触れて、嬉しく思いました。そしてヘンリー王が、唯一の、罰せられずにそれが許される者として、宰相の邪魔をしたということに、私は安心して笑いました。それに太古以来、愛人関係、恋愛沙汰では、僧侶や学者は、王侯や軍人から泣きを見ることになると思定されています。

しかしながら私は自分のこの存念をヘンリー王に対し何も悟られないようにしました。ずる賢く当てこすすることもせず、陽気な顔もしなかった。と申しますのは、旦那様、国王と下僕の交誼は危険なもので、気さくな国王といえども、分際というものがあるからです。私は静かに自分の中で考えて、王侯的悪ふざけと私には思われる行為が、愉快に思われました。しかし私は一つの蛮行、一つの愚行に巻き込まれていました。これはヘンリー王の王冠、生命、 — いや、何と、 — その魂の浄福を代償にするものだったのです。

旦那様、最初私はこう思っていました。宰相は成熟した甘美な葡萄をどこか特別なアキテーヌ地方の葡萄畑からイギリスの霧の中へ取り寄せたものであろう、と。そこで宰相がこれは腐った果汁であると知っても、宰相はこれを無造作に、あるいはせいぜい、繊細な方だから、若干反吐を覚えながら、脇に退けるであろう、と。すでに私は宰相が、国王を、自分の創造主を、恋敵と知って、丁重な、軽く蔑視した表情で退場して行く姿を思い描いていました。

このように私はこれが露見しても、災いは少なく、危険はないと踏んでいました。

他人の不幸を喜ぶような好奇心と共に、私は自分の隠れ場から、ゆっくり騎乗して行く宰相を見上げていました。宰相は、国王の僧侶達によって相談されていたカンタベリーから数日前に戻ったばかりでした。宰相は今や毎晩、ウィンザー城で、自分が不在の間手つかずであった案件を調べていました。ギリシアの吊りランプという安定した穏やかな明かりの下、宰相は倦まず筆記していて、それで国王は、落ち着かない眠りから飛び起きて見ると、中庭越しに、国王と帝国のために努めている宰相の姿を目にすることができました。

しかし同じ宰相か。これは冷たく吟味する眼差しと国の将来を案じている無口な宰相と同じなのかと私は不思議に思って自問しました。聖杯を求めている敬虔な騎士、巡礼者ではないか。 — 貴方は、貴重な血の杯の伝説[聖杯伝説、最後の晩餐で使われ、キリスト処刑の血を受けているとされる。『パルチヴァール』等]をご存じでしょう。これは、甘美な音色と共に天から落下しながら、モントザルヴァッチュの山上に落ちたものです。 — その青白い、夢想的面影には、浄福の善意が見られ、顔は月や星のように微光を放っていました。堇色の絹の彼の長い外衣は、司祭的な装束を有して、銀色の婦人用白馬の肩に掛かっています。この馬は普段ツィンクやティンパニーの楽器の炎の音色に合わせて踊る習慣なのに、今日はゆっくりと柔らかな小道を進んで、その可愛い足を、隠れた森の神の奏するフルートの音色に合わせるかのように上げていました。

この似而非聖人が罪深い愛人の許へ向かって行くときの敬虔さに私は驚きました。 —

私の王侯の破廉恥な、愛に飢えた主君とは全く別で、 — それでこの装われた敬虔さに私は同情を抱き、それから突然恐れました。向こうのこの青白い男は、以前から私は一種慣れぬ怖気をこの人物に感じていたので、自分の神聖なものの略奪のことで、私どもに、つまり我が国王と私に、秘かに、しかし前代未聞の残忍な復讐をするのではないだろうか、

と。

この瞬間、宰相の上品な眉毛の間に、垂直な、深い、国事を憂う皺が見えました。トマス殿は馬を駆っていましたが、性急ではなく、募る心配事に迫られて、そうしているように私には見えました。

再び新しい月の三日月が空に懸かっていました。私は再度この道で発見の明かりに出会いました。国王は真夜中頃、その愛人から別れて出て来ました。ノルマンディーへの国王の旅が間近に迫っていました。しかし森の外れに来ると、私をまたこう連絡するよう戻しました。国王は今一度彼女に会い、明日発たれる、と。

この伝達依頼を済ませ、私は疲れて眠くなり、すでに秋の湿り気のする森を馬で戻りました。私の馬がいなき、黄色の葉を枝からむしっているとき、私は無窮の青白い星の明かりを草原上に見ながら、いつもこうした場合のように、現世の生き物の無常について物悲しい思いに耽っていました。

間近で甲高いいなき声がし、私は夢想から醒めました。小道を曲がった先に、一頭の鞍の置かれた馬を見ました。農作業園の垣に繋がれていました。私は下馬し、馬を茂みに連れて行き、物音を立てずにこっそり忍び、作業園の高い垣根越しに覗きました。中では、痩せて甲冑を付けた若造が、不審そうに眺めている農園管理人と話しています。この若造は最初私に背中を見せていましたが、会話の最中、素早く頭をひねって、真っ直ぐ小宮殿の方へ向け、その猛鳥の顔の鋭い鉤鼻を見せました。私はこの禿鷹が分かりました。国王の行楽地を徘徊しているのは、他ならぬノルマン人マレルブ[害草]でした。私にとってはヒルデの誘拐以来、かつてアラーハイリゲン修道院の受難像に見かけたかの傭兵の如きものとして厭わしい者でした。我らの主、救世主の顔に唾した傭兵で、此奴に対しては私はすでに幼児の時から格別の憤怒を覚えたものです。宰相はこの悪たれをお供の中から外して、こう噂されていました。此奴はエレオノール夫人の許に奉公し、寵愛されている、と。私は切迫しているものが分かりました。エレオノール夫人が、潜んでいる森の妖精のことを知ったら、この華奢な妖精の命は一文も保証できません。

私がこの不吉な出会いについて国王に報告しますと、国王の頭には、怒りと愛のために、赤黒く血が昇りました。

『我らはこの小さなレディーと一緒に海を渡らなければならない』と国王は言って、眉を顰めました。『それも即刻だ、灰鷹が鳩を砕かないうちに』。

国王は私に夕方三頭の鞍を付けた馬と国王用の地味な服を準備するよう命じられました。

宰相からようやく遅くなって放免された主君が外套と帽子を取って、乗馬されたとき、すでに暗くなっていました。

速やかな騎乗後一時間して、すでに道のほとんど半ば過ぎたとき、国王は私に目配せをして近寄せ、私に言いました。私は早朝国王と一緒に戻らず、明日はその小宮殿に残り、女士領主に侍女を一人付けて、夜暗くなったとき、国王の間近な城まで案内すること、そこから国王は、海を越えて、彼女を送ることにする、と。

すぐに私どもは目的地に着きました。主君は自分の頭に柔らかな寝床を見つけ、私は石

壁の下部に固い寝床、つまり私の馬の鞍を用意し、馬には他の二頭と一緒に、夜間勝手に草を食べられるようにしました。

霧で湿った森の梢が金色になって、丁度また私が三頭の馬を捕らえたとき、国王が小門から出て来られ、腕には可愛い、十五歳を越えていない女性を抱えていました。私がかつて見た中で最も美しいこの少女の頭は、国王の肩に寄りかかっている、国王の悦楽に酔った目に、両の懇願するような臆した目を据えていました。真っ黒な髪の毛が、黄金の飾り輪でまとめられて、華奢な肩と腰の方へ解けて流れていて、ほとんど下の大地に届きそうでした。彼女は涙に暮れていて、ヘンリー王は勇気を出すよう彼女に説いていました。

『そなたにこのこの男を残しておく。彼は私の忠実な下僕だ。きっと自分の目玉のようにそなたを大事にするだろう。今晚は心配せず馬に乗ればいい。そうするしかない。そうしよう。グレイス。しばしの別れだ。すると温かい空の下で再会できよう』。

国王は彼女に接吻し、馬に飛び乗り、そこから去って行きました。一方その子供は両腕で挨拶を送っていました。しかし私はすべての血が心臓から失せる思いでした。真実が鋭い光線のように私の中を過りました。お聞きください。国王は宰相の豪華な野心的な美人を奪ったわけではありません。喪であり、罪であります。国王はトマス・ベケットの罪のない子供に手を付けたのです。いいですか。国王が呼んでいたグレイス[恩寵、グナーデ]は、宰相と瓜二つの似姿で、二人は若く世間知らずの顔と冷淡な世慣れた顔の違いに過ぎなかったのです。宰相の眉毛の高貴な特徴、宰相の黒っぽい、憂愁の目、宰相の口許の真面目な微笑、宰相の身振りの穏やかさ、――これらは紛れもありません。グレイスは、余りに若くて、宰相の妹とは言えないでしょうし、まさに宰相の血肉なのです。ヘンリー王は、キリスト教徒の国王ですが、未成年の魂とまだほとんど成熟していない肉体に対し、異教徒よりもひどい罪を犯していたのです。

私は哀れな下僕ですが、我が主君に対して怒り、私の拳を丸めました。あたかも私自身の子供が破壊されたかのように。すぐにまた私は大きな苦悶に襲われて、私の好きな国王が罪のない子供を殺して神の怒りを招いていることに血の涙を流したいところでした。私はこの高貴な主君のことを、その強壯な血、その全権、その盲目の、知恵のない時間のせいにして、弁解しようとしてしました。しかし駄目です。私の耳の中で声がします。そなたの主君は死罪の罪を犯した、と。私の五感が開いて、私は見ました。グレイスの守護天使が、悲哀と恥辱から両手で顔に白い布を当てています。私は聞きました。最後の審判のラッパが力強く鳴り響きます。

しかし私は気を引き締めました。私がおの間に立っていた、二頭の馬は落ち着きがなかった。私はこの馬をよりしっかりと押さえ、私の妄念を消しました。

宰相の娘は城の中へ消えました。エッシャーが一人門道に立っていて、私を初めて、その小さな、厚い輪状壁の中に造られている番人の小部屋へ誘いました。

彼は物怖じして、悄然として見えました。とても散漫になっていて、彼は私に食べ物や飲み物の手配をすることを忘れていました。私は自分が驚愕した後、猛然と飲み食いを必要としていました。私が自らパンを見つけ、壁の戸棚からワインのジョッキを取って来ると、彼は躊躇いがちに告白しました。私の国王が命じられた美しいグナーデの逃亡は、危険がないわけではないだろう。自分は主君の宰相に、まことに忠実、率直に報告したのだ。

この森の城はノルマン人のマレルブ[害草]によって数日前から狙われ、包囲されています。自分は時々刻々と宰相が武装した者達を連れて来られ、この壁の背後の守りを固められるのをお待ちしています、と。

『私が悪魔の所業に抵抗していたら』と彼は情けなく後悔して嘆いていた、『そして我が主君に、そなたの主君の最初の訪問のことをすぐに打ち明けていたらと思うぞ。私の命はなくなっていたろう。 — しかし今は私の魂まで売り払ってしまった。 — しかし至高の権力に抵抗して見せる度胸をどこから得られよう。惑乱する驚愕に、そなたの国王を前にすると襲われる。我が生誕の時に呪いあれ。一切を、善悪についての判断さえも、これらのノルマン人達は奪ってしまう。...しかし我が主君、宰相にも罪がある。宰相は英知の化身なのに、グレイス[グナーデ]を劣等に育てた。弓造りよ、私の言うことが信じられるか。我々はこの家に何の十字架も、何のミサ典書も、何の聖人も有しない。...向こうの壁の壁龕の粗末な聖ヨセフだけが我々従者のために例外として残っている。 — 宰相はアラビア文字で記された羊皮紙を娘のために持参して来る。異教徒のお伽噺で、残酷な世の経過を甘美なアバンチュールに偽造しているものだ。 — この娘は日夜この美しい嘘、ペテンに熱中している。モナ・リザ[虚構]も、これはイタリア人のリュート奏者で、彼女の侍女だが、宰相にこの点について言葉に出さずともしばしば非難して来た。哀れな女だ。この侍女は国王の歩みを跪いて押し留めた。しかし国王は侍女の手に金を握らせ、侍女を押し退けた。女達の許ではそなたの主君はすぐにその心を勝ち得る殿方だ、我々男性にとっては残酷な国王だが。それで阿呆なことがなされた』。

白髪のザクセン人がこのように不安げに無益に嘆いている間、私は飲み食いをして次第に元気づき、心がタフになりました。

『ハンスよ』と私は自分に言いました、『無駄な老婆心切、 — 落ち着け。災いは起きてしまった。しかしより良い方向に変わる可能性はまだ残っている。エレオノール王妃がその盛時以前に逝くかもしれないし、盛時以降或る旅行者と一緒に出奔するかもしれない。すると主君は自由になり、そしてグレイス[グナーデ]を王妃にするであろう。彼女は王侯的血筋を二重に有して、そうなる。まず今日のことを案じて、この娘を海の向こうへ連れて行くのだ』。

旦那様、私は自分を慰めるためにそのようなことを言いました。私の苦勞して奉公で得たすべての動産を、私の技芸を、私の血の半分を投げ出して、ヘンリー王をその行為から、私をその協力から身請けしよう。この罪はとても重く、神の秤の上にのしかかっている、その重みで主君と下僕は押し潰されそうです。

ヘンリー王は娘の信仰心を悪用していました。グレイス[グナーデ]は両親の血筋が異教徒であって、アラビアの女性達は従属的で、王笏の前では塵となって平伏致します。国王は彼女達にとって、神の代理、法の代理であり、父親や母親以上の存在なのです。かくて、グレイス[グナーデ]は国王の邪悪な秘密を父親に隠してきたと私は察しました。

宰相は何と熱く、何と無分別に娘を愛しているに違いないことでしょうか。宰相は普段四方八方に目配りし、事物の生起に聞き耳を立てているのに、娘を自分の近くに連れて来て、かくてノルマン人の宮廷の間近に近寄せてしまったのです。 — このように私はこの謎を解きました。宰相はこのことを必ずや後悔することだろう。 — しかし私はまた素早く気を取り直し、必要な手筈を整えました。 —

私は三個の丸いパンを腋に抱えて、外に繋いでいた二頭の馬を近くの森の溪谷の澄んだ小川へ連れて行き、餌[パン]を与え、水を飲ませ、その手綱を二本の唐檜の幹に結びました。二頭の賢く忠実な馬の世話をすることは快適でした。馬どもは裏切りや罪について知らないのです。

私が溪谷からまた登って来ると、角笛が、森の別の隅から響いて私はびっくりしました。この音に、青い丸屋根を取り巻いている女牆から一枚の布が翻って、呼応していました。

素早く私は急いで、砦の壁から隔たった道のりを抜け、壁の影に隠れて小門の方へ忍んで行きました。青ざめたエッシャーが小門から私を震えながら中に入れてくれました。彼の小さな番人小屋は狭い三つの天窓を通じて、野外、門のアーチ、城の中庭が見えます。

およそ十二人の武装した者達が森から飛び込んで来ました。先頭には宰相がいて、私はその素晴らしい細身のアラビア産白馬とその馬を御する厳かな流儀で宰相と分かりました。彼は面鎧の面を下げて、完全に武装していました。皆が下りた門前で、彼は何人かに馬を農作業園の方向に連れて行かせました。残りの者は彼に従って、私は嬉しくなかったが、門から入って、中庭で、周囲の石壁の女牆に散るよう命令を受けました。

私は自分の居場所を変えて、宰相から目を離さないようにしました。今やエッシャーは宰相に説明をしているように見え、それから宰相は城の中に消えました。老番人は私の隠れ場の鍵をベルトに持っていて、私は畏に落ちています。私は待ち伏せすることにしました。

私の丁度向かい側、城の中庭中央に丸屋根建築がありました。それはその宿り木の低木が過剰に生い茂った半円形のテラスで囲まれています。しばらくしてトマス殿が、グレイス[グナーデ]の手を取って、高いアーチ形ドアから出て来て、彼女と一緒に白い微光の大理石ベンチの上に腰を下ろしました。側に赤い脈管の水盤があって、その上では吹き上げた噴水が空中で交差していました。私はこの宰相の心配そうな、しかし邪推深くない表情とグレイス[グナーデ]の小顔をととても間近に眺めていましたので、突然私は頭を引っ込めることになりました。私が覗き見をしているこの壁は木蔭で覆われていたのですが。

このとき宰相は、侍女に離れるよう合図したのでした。侍女は目を伏せて、ドアの下に立っていました。一 多分、あのイタリア人、モナ・リザでしょう。この侍女の徳操は丁度エッシャーから聞いたばかりでした。しばらく二人は黙って座っていて、グレイスは父親の目から逸らして、玉となっている水を眺めていました。

すると宰相はアラビア語で話し始めました。

『我が娘よ、そなたはあとわずか数日こちらに残ることにならおう。そなたがこの短期間でも襲撃のことで不安に思うことはあり得ることだ。しかし怖がることはない。そなたに十人の勇敢な者達を残しておく。彼らがこの壁を敵の襲撃から守ることは完全に可能だ。段々とそなたも戦ごとに慣れなければならない、臆病小鳥のそなたも。これはこの規律のない放埒な時代、すべての城を守る女人の定めだ。』

可愛い娘よ、私がそなたと別れ、そなたを嫁に出す時期がやって来た。それはこの湿った天の下ではない、海の向こうの日当たりの良い国、穏やかな風習の所だ。可能であれば、そしてそなたの星の導く所であれば、それはそなたの養父母のポワトゥーから離れた所ではない。まだ正直なカラスのことを覚えておろう。彼はアラビア語が分かるから、ムー

ア人の血を引いていると陰口を言われているが、しかし彼は我々二人同様、主の祈りを唱えている[マタイ、6,9]。この老父が、そなたをこちらに連れて来て、涙ながらにそなたと別れて、まだ一年も経っていない。

これが良いことかは分らんのだが』と彼は額に皺を寄せて言いました。

『私は』と彼は自ら詫びるように続けた。グレイスは黙っていた、『私の人生のほんの一時もそなたの貞淑な青春時代を独占してはならんのだろうか。

しかし私に許された最後の期限も過ぎた。別れの時が来ている。

私はこの愛しい頭を危険にさらしてはならない』。そして宰相は彼女の天辺にその細い手を置きました。

『主君の国王は明日大陸へ旅される。私は数日後に従って行くことになる。しかしそなたは私と一緒に行くのだ。ヴェールを密に被って、侍女達と一緒に。そして私の側から離れるな、私がそなたを勇敢で上品な男の庇護に委ねるまで。

国王とて私に一日を免じてくれよう、国王が不純な喜びに酩酊しているとき、私が純な喜びに浸れるよう計ろう。この国王ときたら』と宰相は、あたかもその実物を眼前にしているように、軽蔑した口ぶりで言いました。 — 私はまことに、宰相がそのように話すのを聞いて不思議に思いました。

『恐れなくていい』と宰相は続けました。というのは彼の握っているグレイスの手が彼の手の手で震えたからです。『私は目利きだ。そなたを誰に委ねるか、見きわめることにしよう。遠くからでも私の庇護の手をそなたの上に置くようにしよう。私はすべてのノルマン人の国々で強力なのだから。

修道院の中に閉じこもる気はないのだろう。それはないとそなたの眼差しが語っている。そなたは償うべき罪を犯していないし、明かりと太陽を必要としている』。

賢いトマス殿が自らの考えに没頭していなければ、宰相は自分の子供の不安な魂について気付いたに違いありません。しかし彼の目は気付いていなかった。言葉を探していたグレイス[グナーデ]はようやく、弱く囁きました。

『父上、ここで私を危険に窺っているのは誰です』。

『誰かって』と宰相は小声で震えて繰り返しました。そして自分の娘に邪悪な世の習いをもはやこれ以上隠しておけないと決心した風に、隠さずに言いました。『汚れた王妃だ。王妃は私を憎んでいる。そのスパイ達がそなたの存在を王妃に知らせたのだ。私はエレオノール夫人にそなたのことを知られたくないし、夫人がそなたのことを探ることを臨まない。 — 王妃の考え自体が不浄だ』。グレイスは青ざめた。そこで私はヘンリー王は彼女の前では自分の妻のことを、何ら評判の良くないこの夫人のことを賢明に黙っていたのであろうと察しました。

しかし彼女は気を取り直して、また囁きました。『でも我が父上様、あなたはいつもそう仰有ってきたわけではありません。いつか私を国王の御前で紹介すると決めていて、国王の寵愛のことを、善意で威厳のある御主君からの寵愛と自慢なさっていたでしょう。リチャード様のことも私の前で褒めていらした、...』。

『そのように話したな』とトマス殿は真面目に答えました、『そなたの父親としていい気になって馬鹿げた間違った話しをした。私はもっと良く考えてみたのだ。先の自惚れた話しは、その言葉が反響した空気同様散ってしまった。そなたは宮廷に行ってはならん。

宮廷はペストのはびこる所で、純粋なものは栄えない。しかしそなたの言も一点は正しい。国王には畏敬と従順が然るべきものである、とな。

しかし十分だ。私の時間は終わった。子供らしく、あれこれ考えずに、私の指図に任せなさい。私がそなたは愛していると分かっているのか。途方もなく、愛しているのだ。我が唯一の子よ、私のすべての子よ』。

そして宰相は彼女の額に優しい接吻をしました。

トマス殿は起き上がりました。彼はその吟味する視線をぐると女牆に向け、その武装者の各人が命じられた配置に付いているか調べました。その視線は容赦ないもので、私は自分の暗い隠れ場の床に身を潜め、ただ言葉だけを聞き取りました、『三日後だ、準備しなさい。さらば』。そして十人を指揮する者にこう命じました、『自分の命にかけて、誰もこれから出入りさせてはならんぞ』。

私が用心してまた身を起こしてみると、大理石のベンチは空でした。トマス・ベケットとその不幸な娘は消えていました。

私は身震いしました。すべてお見通しの者として私が恐れていたこの宰相は、初めて一人の騙された者、欺かれた者となっていたのです。一人の子供の誠実な無邪気さを信じている父親の思いが、この上なく賢明なこの男の眼光をくらませ、完全武装の者に毒の矢を放つという悪魔的所業に利用されなければならないことに私は慄然としました。

しばらくして外で宰相のアラビア産の雌馬が引かれて来て、トマス殿が騎乗して去り、私の小部屋のドアで物音がしました。エッシャーはその寄る辺ない、疲れた目で私を見つめました。私は彼には全く方策がないと分かり、私は主導権を握りました。

『向こうへ行って』と私は言いました、『リュート奏者のモナ・リザに国王の名で命令を伝えるのだ。失敗したら死刑覚悟で、若い姫君と一緒に旅行準備をし、そなたの吊りランプが消え次第、今夜、この門のドーム下に現れるように、と。急げ』。

彼はこのイタリア女性は命じられた通りにするという返事を持って戻って来ました。私は黄昏れて来たので、その明かりを点すように、そして例えば向かいの女牆であちこち動いている見張りが不審げな視線をこの明るい窓に向けたときのために、手に白墨を持って、計算盤の前に座るように、彼に命じました。そして私は隅の彼の臥所に寝ました。私は日中の緊張の後、休息を必要としていました。しかし老公が呻いて、私はその不安げな呟きと単調な自己懺悔を聞かされうんざりしました。私は彼に休むよう命じましたが、しかし眠れなかったのです。

心は不安で圧迫されているというのに、冷静な思考は、疲れもせず、無関心に、その独自の道を進むということが残酷にも見られますように、私の思考は、いかなる理由で宰相は自分の不幸な子供にグラツィア[グナーデ、グレイス]と名付けなければならなかったのかという点に関して働きました。宰相自身の、洗礼を受けた母親の恩寵の改宗を称えてであろうか、それともグラツィアは多分天上的な恩寵を意味していて、異教徒的気まぐれに従った命名か、
— 我々皆に神よ恩寵を賜れなのか、
— しかしこの恩寵は、人間的性情や優美さの極上の開花でもあり得るものだ。

更にまたこうも考えました。つまりトマス殿はグレイスに自分の寵児リチャードのこと

を話しており、それで多分しばらく、自分の娘をヘンリー王の宮廷へ導き、王侯的名誉に至りたいという不謹慎な野心に浸っていたわけだ。このように考えながら、私は微睡み、夢の神が様々なベテンの戯れで私を欺きました。夢見られた悲しみは喜びを意味し、夢見られた悦楽は涙を意味すると知られています。ー 私は、再び、ヘンリー王の後、森から出て、王の顔が突然若返って、その息子のリチャードの顔に変わったかのように思われました。この奔放な王子が森の城の門を叩き、その甲冑を付けた拳の一撃で小門を砕きました。しかし忠実なエッシャーが大胆に王子の小道に身を投げ、モナ・リザはその有徳な涙を流して怒りました。しかし、見よ、そこに宰相が、グレイスの手を握って、城の中から出て来て、リチャードの右手を握り、宰相はこの兩人を木々のドームの下に案内しました。しかしこのドームは、ウィンザー城のホールのドームに変貌しました。両親として見守っているヘンリー王とエレオノール王妃の前で、美しく香るカップルが跪いています。ティンパニーとトランペットが響き渡り、私はフェルト帽を空中に投げ、叫びました。『リチャード王子とグラツィア王妃、万歳』。

このとき私は目覚め、生氣のない罪人エッシャーが祈りを呟くのを耳にしました。そして窓辺に寄って、城の部屋の明かりを目にしました。そこではモナ・リザが老王の未成年の妾と一緒に私の吊りランプが消えるのを待っていました。

邪悪な夜でした。私の生涯で最悪の夜です。空では黒く、長い雲が移ろっていて、上弦の三日月をその引きずる雲の衣装で覆っていました。丁度女牆で一味の足音が響きました。私は吊りランプを消しました。『エッシャー、馬は二頭用意してある』と私は言いました、『そなたはモナ・リザと一緒に馬に乗れ』。我々は螺旋階段を手探りで下りました。門道に二人のヴェールを被った女性が立っていました。そのうちの一人、細身の、密にヴェールを被った女性は嗚咽で震えています。私は慎重に門を引き抜き、門から忍び出て、上方を窺いました。あたかも壁の上で弓の弦が引かれる音を耳にしたように思われました。[ScottのIvanhoe,第3部に類似場面]。しかしそれ以上何も動かない。ー 私の錯覚に違いない。

三回の主の祈りをして、生涯これほど熱心に祈ったことはありません、私は待ちました。一頭のブランケ[獵犬]が吠え、それからまた一切静かになりました。

このとき私は震えるグレイスを引き寄せて、私の腕に抱き、全力で森に向かって彼女と走りました。突然私どもの周りが明るく、より一層明るくなりました。雲が風によってとても素早く散らされ、月が雲の曳き裾から転がり出たのです。

笛がピッと鳴って、ふんと飛んで来ました。この矢が私に当たれば良かった。私の両腕の中の軽い女性が痙攣して私の首を掴みました。温かい血が私の上に流れ、宰相の子の喉を突き抜けた勢いのある矢の先端が私の頬を擦りました。窒息して喉を鳴らせ、グレイスはこときれました。

私はこの若い死体をすぐ私の後ろを走って来るモナ・リザの両腕に移しました。この軽率な女が周囲に響く叫び声を上げている間、私は矢の飛ぶ中、森に達しました。エッシャーがぜいぜい息しながら付いて来ます。

私は一頭の馬に飛び乗りました。エッシャーはもう一頭の馬です。私どもは夜の森の道を駆けました。私と、鞍の上で揺らめくエッシャーは、二人とも頭を馬のたなびくたてがみに押し付け、葉のない枝に引っかからないようにしました。小枝は、喪中であるかのように、いつもより黒く、低く垂れ下がっていました。

しかし私どもは無事、月明かりの、大きな空き地に達しました。その端の方では道が下がっています。こちらに我らの不安に駆られた馬は飛んで来たのです。すると私は背後で気味の悪い叫び声を耳にしました。振り返って見ると、エッシャーの黒馬が、普段はおとなしい馬なのに、たてがみを逆立てて、真っ直ぐ棒立ちになっていて、突然身悶えして背中から倒れました。素早く動いて行く白い影にびっくりしたのです。白く輝く雌鹿だったのかもしれませんが。宰相が珍しいからとその安全な森で保護していたものでしょう。

一 一群れの荒石の側にこの馬は転がっていて、その横には顔の歪んだ一人の死者がいました。私の髪の毛は逆立ちました。私は自分の馬を駆り立てて、もはや虫の息の黒馬のことも、裁きを受けた不忠の下僕のことにも気遣わなかったものです。

第六章

私はドーヴァー[イギリス南東部]に向かい、海を渡ってノルマンディーのヘンリー王に従うことにしました。しかし風がひどくて、王は足止めされていました。まだそこで王に会い、思っていたよりも早くこの不幸について報告する時間を得られ、それにまだイギリスの大地にいるのです。

王は激しい悲嘆の涙に暮れて、その寝室に閉じこもりました。しかし私は危険が迫っているときよくそうしていたように、我が国王の近くで横になりました。寝室で王の眠りは消えて、我が国王は夜間、厳しい足取りであちこち歩まれる音が聞こえてきます。その間情けない悲嘆の声を漏らし、自身に声高に性急に語りかけ、それでその溜め息交じりの語りを良く聞き取ることができました。

『あれは私の喜びであった』と王は嘆きました、『可愛い子羊を安全な牧場に移しておくべきであった。しかし我が王妃の邪悪なやり方に対し、それに我が下僕の愚かさに対し、何ができよう。運命の悪戯に対し何ができよう。...私と宰相にとって、一 我々兩人にとって、一 あの森の草原で大きな心の痛みが生じた。...しかし私は宰相に私の気持ちを書き送ろう。...私は宰相に、以前よりももっと好意と恩寵とを振りまく所存であること、宰相は永久に、私の心と私の王座の至近の者であることを知って貰おう』。

朝方、王はより平静になって、最初の曙光の時、自分で机と椅子を用意して、一通の手紙を書き始めたように見え、一文ずつ自分で呟きながら書き記していました。一 最後のその印章が重々しく押されるのが聞こえました。

国王は私を呼び、私に一枚の書状を渡しました。

『これを宰相自身の手へ渡してくれ』と王は言いました、『宰相が見つかるまで探すのだ』。

このようにして国王は海を渡りました。私は手紙を持ってロンドンへ行きました。これは簡単な仕事ではありません。そう信じて頂けましょう。私は我が国王の言い付け通りにしたわけですが、私の良心は重苦しいものでした。それで宰相の前に出ることに、神聖な恐れを感じていました。と申しますのは、宰相は今やグレイス没落の真の理由を知っているに違いないからです。

私はまず宰相をロンドンで探しましたが、宰相はいなかった。数多くの宰相の宮殿のど

ちらにいるのか、ロンドンの宰相の家来達は言えなかったし、言おうとしなかったのです。私はそれを知る必要もなかった。私は知っていました。

私は日中、元気な馬に乗って、――もう隠れる必要はないので、――自分が何度もよく薄明の時、月明かりの時、通った同じ道を駆けて行きました。黄色の樹冠の上、ここかしこですでに落葉している小枝の間に、この上なく澄んだ天が薄く光っています。

微光を放つ小宮殿を見て、馬から下り、普段はしっかり閉まっている小門が開け放たれているのを見たとき、私の心臓は早鐘を打ちました。門番が私の用件を聞くことはありません。城の中庭は静かで、ただ風だけが異国の木の常緑の小枝に囁いており、噴水がその黄金の玉の滴と音立てて戯れています。

私は歩みを止めました。生きている人物を探しました。すると庭の壁の所でそこに祀られている聖人の厨子の前で跪いている一人の女性に気がきました。彼女は頭を両手に沈めていて、私がやって来ることに気づいていません。しかし私はきつくモナ・リザの肩に触れました。彼女はびっくりして振り向き、私を涙で赤くなった目で見つめました。すると彼女は私に、両手で素早く去るよう合図しました。そこで私は彼女に手紙を示して、国王の使者として、今すぐ宰相の許に案内するよう、要請しました。

震えながら、しかし抗弁せず、彼女は私に先立って、丸屋根建築への階段を上がって、黄色い柱の許、ドアを開けました。『彼女は礼拝堂に眠っています。――私の手でなお女王のように化粧しました』と彼女は怯えて言って、姿を消しました。

私は上から照らされた丸い小ホールの明るい部屋に足を踏み入れました。丸い壁に沿って、高価なクッションが付いていて、中央に黄金の鳥籠があって、飛び交い囀る鳥が一杯います。小さな棕櫚の下、色鮮やかな異国の小鳥が戯れています。しかしそれを楽しむ人間はどこにも見えません。

私はモザイクの床の色とりどりの像の上を小幅の大理石階段へ向かって歩きました。私はアーチ形小門に通じていて、そこを開け、内側に掛かっているダマスク織りカーテンをこっそり開けました。

ある光景が出現し、私は唇から言葉が途絶え、胸の息が詰まりました。この城の薄暗い礼拝堂を覗き込みました。しかし十字架像もなく、常明灯もなく、祭壇の下の聖人の遺体の代わりにあったのは、祭壇前の厨子の、同じように立派に飾られた故グレイスでした。唯一の、高い所から差し込む光線がこの世ならぬ美人を照らしていました。彼女の頭は深紅のクッションに休らっていて、宝石で煌めく小さな冠を被っています。華奢の身体は、厨子の壁からはみ出ている衣装の、黄金の刺繍と真珠とで強張った襞の中に隠れています。小さな透明な両手が胸の上で交差していて、彼女の黒いヴェールのような髪を貞淑に押さえています。その髪は天辺から流れるように優しく両頬を縁取っていて、首の二つの傷を隠し、その両腕の青白い大理石色の交差の下でまた合流しています。

しかし可愛らしい死者の顔の側に、別の顔が沈み込んでいました。同じ陽光を受けて、死体の顔よりも更に生氣なく身罷ってしまった顔で、絶望の瀕死を経験しており、その痕跡が残った顔でした。それは宰相で、髪をかきむしって、衣装が乱れたまま、棺の横に、棺の縁に両腕を置いて、休んでいました。

音のない静寂に包まれています。ただ葉擦れの音が開けた窓の中で聞こえます。そして微かな葉影の踊りが深紅のクッションと両者の顔に見られます。

私はどうしてなのかわかりませんが、この不安の時、グラナダのムーア人の本性が心に浮かびました。貴方にまさにこれがどのようなものかお話ししましょう。何の沙汰かわかりません。明るい精神の囁きか、それとも黒い精神の囁きか、私はアラビア人風にコーランの詩の一節を発したくなりました。―― 聖なる神は私に咎め立てして欲しくないものです、―― 青ざめたグレイスの顔を見て、異教徒達の樂園とそこの天使達を思い出したのかもしれない。―― 異教徒の詩文は次のようなものです。

『いや、天使らは美しく、愛らしい。百合やヒヤシンスのように綺麗だ。天使らは臉を垂れ、その純粋な顔は駝鳥の卵のように白く、砂の中で安らっている』。

この詩文を私の唇が発しますと、宰相の顔に変化が現れました。そこには喜びと愛の動きが生まれました。宰相はゆっくりと、このコーランの詩文で宰相にお悔やみを述べた者の方を向きました。

私はこの瞬間のことに気づき、宰相に近付き、膝を屈して、不安に慄きながら国王の手紙を渡しました。

宰相は安心して、この世に戻って来るまでしばらく要しました。そして宰相は国王の印章の三頭の豹に目を留めました。―― 私がこの書状を取めた先の手が、一匹のサソリに刺されたかのように震え、激しい痛みを感じて、それを投げました。拷問されて、言いようもない苦しみに耐えている男のように宰相は、その高貴な眉毛を歪めました。非難を一杯込めた目が私に向けられ、その深みで一つの炎が燃え出しました。地獄のように残忍残酷に。この視線は投擲の槍の威力で私に突き刺さり、私の心は驚愕して、辞去を告げずにそこから逃げました。

第七章

そこで、旦那様、貴方はびっくりなさって、この時に国王とトマス・ベケットの間の敵対が勃発したと推測なさることでしょう。―― それは間違いです。確かにしばらくお二方とも一方の呼吸や顔を避けられました。しかしこれはもっともな理由があって、自然な具合になされました。ヘンリー王は海の向こう側で、カペー王朝の者達と戦っておられ、その間宰相はイギリスで国事に携わっていたからです。

と申しますのは、宰相の英知と忠誠に対する我が国王の信頼は不壊のものだったからです。いや、この岩のような信頼がそもそも揺らぐことはなかったのです。そしてトマス殿の方も、国王の偉大さのために努める宰相の熱意故にどんな重荷の仕事や敵意が生じて、この時ほど喜んで引き受ける時はなかったのです。

宰相は当時楽な状況ではなかったのです。宰相は国王の権利拡大のために高貴なノルマン人の僧侶達とやり合っていて、難儀していたからです。旦那様、貴方はこれらのいざこざをご存じでしょう。これらはどこでも見られましたから。イギリスでは、これらは征服王によって司教職と結び付けられた途方もない特権から生じています。余所の国でもそうですが、僧侶同士の諍いは国王による裁判を免れるばかりでなく、一人の僧侶から被害を受けた非僧侶[俗人]も、宗教裁判所にこの敵の僧侶を訴えなければならないのです。すると、―― まことに単純化して言えば、―― どのカラスも同じカラスの目を突くことはありませんので、より軽い件は言うまでもなく、僧侶の人殺しであれ女略奪であれお構い

なしで、あるいはもっと悪いことにとても穏やかなお仕置きとなって、それで悪い冗談に似た風になり、僧侶達の情欲は留まることを知らず、次第に広がって行ったのです。

このことに我が主君の国王は怒りました。国王は日常の件では正義の男でしたから、それで僧侶達に制限を設けようと思いました。簡単な仕事ではなかったのです。

カンタベリーの首座、大司教の椅子には当時反抗的ノルマン人[Thibaut]がいました。征服王はかつてこの椅子を国家的理由から他のイギリスの司教区より完全に上位にしていました。それで首座の剃髪は、その封建領主の国王に対し反旗を翻すのにまことに都合が良かったのです。すると当時のローマの教皇[Hadrian IV,1154-59か]も、一 噂ではある修道院から抜擢されて、教皇の座に就かされたそうで、生涯大して世間のことや、その事情を知らずに疎かたと言われてはいますが、一 このノルマン人の司教の味方をしました。そもそも僧侶の権利を失いたくなかったのです。そこでイギリスの宰相はこの教皇に対し数多くの公文書を送りました。教皇が聞く耳を持たないのを咎めて、この悪ふざけに墮した宗教裁判に規則や規制を設けて欲しいと教皇に訴えたのです。

そこで、貴方に申し上げます、旦那様、一 聖フェーリクスとレーグラの司教座参事会員達はどの側に立っておられるか承知していますので、一 僧侶達の世俗的権力に対して、宰相がそのしなやかな筆で流麗に書いたものほどより正当に、より抜け目なく書かれたものはないし、永遠に書かれないであろう、と。侮辱的言辞や退屈な[半聖半俗]ベガルデン会・説教で宰相は自分の仕事をぶち壊すことをしません。これは外交文書の慣例ではありません。むしろ教皇の簡素な精神に対し、顕著な事例を並べました。宰相は、比喩的に言って、窓の鎧戸を次々に開けて、大変明るくなって、子供でも分かるようにしたのです。ヘンリー王の僧侶達の有する吝嗇、所有欲、強奪、策謀、姦淫、暴行は、救世主とその十二名の使徒の純粹無垢な行状とは若干異なるものである、と。

単に自分の痛みを忘れるためであろうとも、宰相は男らしく戦いに臨みました。聖書や教父、法学者達を使って自分のために戦わせました。彼の最も鋭い剣は、美しい福音の言葉、『わたしの国はこの世には属していない』[ヨハネ、18,36]だったのです。

私がどうしてこのようなことを知ったのか、貴方は疑問をお持ちでしょう。お聞きください。宰相の使者、あるいは公文書が陣地に届きますと、これは国王の署名が必要なもので、一 と申しますのは、宰相は国王の名代、威光で、教皇と論争してしまして、一 丁度国王の聖職者達の誰も居合わせないとき、その文書をこの不肖下僕に代読させたからです。国王は私が青春時代、僧侶の道を歩んでいて、読書が出来ることを承知しておられました。しかし国王自身の目は、まだ鋭くて、確実に遠方を捉えましたが、文書を解読するのは難しくなっていたのです。

国王は、宰相がその僧侶達を形容する的確なスケッチに心からお笑いでした。『いいか、ハンス、彼は楽しいのだな』と多分国王は仰有ったことでしょう、『我が僧侶どもの髪の毛を引っ張ることが。宰相は信仰心のない哲学者で、世を忍ぶサラセン人だからな』。

その際私も笑いました。しかし陽気な笑いではありません。時に教皇はそのように思われましたが、教皇が気の毒であったからではありません。宰相の忠実なやり方に対し、我が国王が全く見過ごしていたことですが、この戯れる機知の下に、真面目に咎める暗い悲しみの深淵が燃えているように思われたのです。

旦那様、私は城の礼拝堂での顔を忘れることができなかったのです。

しばしば私は矢を削りながら、自由に物を考えて、自問していました。トマス殿はまたいつか国王の食卓に座って、ヘンリー王と冗談を交わされることがあろうか。自分の口の息と国王の口の息を交えながら。国王はこのときを疑っているようには見えず、生来の果敢さで過ぎたことを水に流しているように見えました。

しかし私は自分の精神の中で、国王の反対に賭けていました。と申しますのは、これは私の心情の判断によれば、人間としてあり得ないことだからです。

我が主君の国王は戦が終わった後、ノルマンディーのある城にいました。すると或る日、私は珍しく暇な男となって、塔の上で、気の良い若造の番人とお喋りしていました。彼はしばらく私にその役目を任せました。彼の気の良い娘が菜園で合図をしたのです。

私が見張りをしていると、間近の丘の、葛折りの道を下りて来る小さな軍勢を見つけました。夕陽の中、先頭に煌めく武装の者がいて、角笛を吹きます。これは獅子の心臓[リチャード]王子です。その後を三人の兄弟が騎乗して来ます。それに一人の武装したお供がいます。今や私は何か光る白いものを目にしました。一 宰相の白馬です。嘲るような安心の高笑いに私は襲われました。一 私は大きな番人の角笛を手にとって、リチャードの呼びかけに答え、宰相に挨拶しました。勿論単に私の生来の、この距離では聞こえない口からの発声で、生意気な言葉です。『トマス殿、貴方は骨に男子の意気地を有しない、血管に騎士の血を有しない。おめでとう。我が主君が貴方を生きながらグリルで焼いて、貴方を一人の聖ローレンツとしようと思いついても、私は知りません』と。私は白い馬を見たとき、国王と下僕は、宰相のことを何も恐れる必要はない、天もこの臆病な男の復讐心を沈めるであろう、と思えたのです。

私は下へ急いで、そして入城を見守りました。自分は出来るだけ脇の方にいました。

トマス殿は何も変わっていなかった。彼の挙措は平静で、彼の衣装も以前同様に高価なものでした。国王はその激しい流儀で、息子達と宰相の方に突進された。国王は多分、息子達の方よりも、もっと宰相の方に憧れを感じていたことでありましょう。宰相は国王の羞恥や外面的後悔の場が生じないようにし、恭しく国王の前でお辞儀をし、丁寧に好意的に王子達のことを話して、それから穏やかに、落ち着いて言い添えました。自分の時間の都合上、国事の案件が募り、旅行や使節のこと、それに以前には見られなかった疲れのせいで、王子達の教育を直接行うことはもはや出来なくなっております、王子達には著名な男達を教師に招く予定で、彼らが自分の代わりを容易に果たしてくれましょう、と。

国王はこの話しに当惑して立っていて、彼の子息達は宰相を取り巻き、涙ながらに抱擁して、頼み、懇願していました、自分達を見棄てないで欲しい、と。ただ幼いジョンだけは渋面で、満足していました。そこでヘンリー王も王子達と一緒に、王子達を手放さないでくれと頼みました。

すると宰相の雄弁な舌は、新たな優美な言い回しで、自分の拒絶を繰り返しました。しかしその黒っぽい目は国王に向けられていて、こう言っているように見えました。『残酷な方よ、御身は私から子供を奪っておきながら、私には自分の子供達の面倒を見るように要求なさる』と。

ヘンリー王がこの視線にこの真実を読み取ったか、私には分かりません。しかし王はそれ以上宰相に要請なさらなかった。

かの時以来四人の王子達の間で、諍いが勃発して、宰相の愛が王子達を宥めることはなくなりしました。宰相にとって王子達はどうしても良くなったのです。宰相は王子達をその衝動に任せました。

すでに貴方にお話ししましたが、私は弓術と石弩に関して、四人の王子達の教師でした。私は、王子達から勝手に離れたり、あるいは石弩を王子達の手へ渡すことを厳しく禁じられていました。というのは王子達の性格は異なり、仲が良くなくて、自分達が弓矢で狙い合うことを阻止しなければならなかったからです。

或る日、私が四本の石弩を持って、四人の王子達の許、城の奥庭へ行ったとき、すでに遠くからブラッケ[獵犬]の吠え声に交じって、騒がしい雄叫びを聞きました。この貴公子達が向こうで激しく取っ組み合いをしていて、私は彼らを引き離すのに苦労しました。獅子の心臓[リチャード]卿は右手でジェフリー卿の喉を掴んでいて、左手ではヘンリー卿の巻き毛を掴み、二人を頑固に揺さぶっていました。二人のこの年長者の味方をしている小さなジョンは、これまた獅子の心臓卿の背中に爪を立て、その首に噛みついています。私はまずこの幼い野生の猫を掴んで、それからヘンリーとジェフリーの両卿を獅子の心臓卿の諍う拳から解放しました。

するとリチャード卿はめらめらと怒りに燃えて、私にくっついてかかり、私に叫びました。『悪魔の名にかけて、石弩屋、そなたは我らの代々の遺産を奪うつもりか』。『どの遺産です、貴公子卿』と私は当惑して尋ねました。 — 『互いに憎み合う権利だ』と彼は叫びました。『この遺産は誰もが諦めないのだ』。 — 未成年のこの言葉に対して、私は深い憐れみを覚えました。私は彼を脇に引き寄せ、キリスト教精神でこう説得しました。兄弟が仲良く一緒に住むことはどんなに素敵なことか、と[詩編,133,1]。リチャード卿はしかし激しく涙を見せて、嗚咽しました。『彼は今日私を見もしなかった』。そして私は、トマス殿のことを話していると察しました。『宰相が貴卿に以前より構わなくなったとしたら』と私は慰めました、『それは忙しい国事案件のせいで、貴卿の父上殿への愛情と奉仕のためなのだ』。すると若いリチャード卿は反抗的に頭を振って、その大きな青い目で私を見つめて、叫びました。『それは嘘だ、石弩屋。宰相は父上を愛していない』。

しかしこの四人はお互いの間で諍い合ったばかりでなく、 — 情けないことに、 — 父上の陛下に然るべき敬意を表さなくなりしました。私は自分の心が痛んだときのことをまだ覚えています。かつて私が我が主君の国王を寝室までお連れしたとき、見聞しなげならなかったことです。国王は頭を国事のことですり減らし、体は鹿狩りでお疲れでした。それで国王は寝酒のせいで、重い頭を傾げ、テーブル上に置かれた両腕にいびきをかきながら伏しておられました。

私どもは通路で、その子息の仲で劣等な者達に出会いました。長男と末っ子です。小さなジョンは厚かましく、国王が寝惚けていないときには、平伏していたことであろうのに、酔っ払いを嘲るかのように、よろめきながら国王の足取りの後を付けて来まして、長男の衣装狂いは、自分の生みの親にそっぽを向いて、高慢に舌打ちします。私我が国王に十分に手配した後、出て見ますと、貴公子ヘンリーはまだ通路にいました。そこで私は彼のことを激しく咎め、彼のことを黒いハム[ノアの第二子]と呼び、宰相に言い付けると脅しました。『トマス殿は父上を軽蔑している』と少年は当てました。『上品なベルベル産雄馬

が剛毛の雄豚と仲良くできましようか』。びっくりして私は彼の口に手を当てました。しかし彼は顔から長く柔らかい巻き毛を振り上げ、鋭く高笑いをして、飛び去りました。

しばしば経験の浅い子供でも隠れた心情の動きを敏感に感じ取ることに、私は感嘆せざるを得なかったものです。と申しますのは、実際、国王に対する自分の嫌悪感を若干でも気付かせるトマス殿ではなかったからです。どんな場合にしろ、率直な畏敬の念を欠かすような宰相ではなかったのです。

毎晩この不可欠の宰相は国王の夕食にお伴し、その卓話の上品な戯れで国王を上機嫌にさせました。

今でも宰相が背もたれ椅子に寄りかかって、陽気な国王が宰相のほとんど動かない唇に耳を傾けている様が思い浮かびます。私は我が主君の椅子の背後に立っていて、時折静かに臆して、この肉体的でない顔を眺めていました。この顔は、吊りランプの明かりの下、日中のときと同じように青ざめていて、そこにはかの死の面影が、当時グレイスの頭の側、棺の枕の上に置かれていた面影が、祝宴の活気ある気分の時でも完全に消え去ってはいないように思われました。

シャフハウゼンのアラーハイリゲン修道院で、僧侶が最良の宝として大事にしているビザンチン由来の聖像をご覧になったことがありますか。それは死せる救世主で、目はくぼみ、瞼は閉じられています。しかしそれを長く見つめると、それはスケッチの悪戯と影の配分のせいで、表情が変わり、貴方を開いた両の痛む目で悲しげに見つめます。旦那様、騙し絵技法です。画家は曖昧なことをすべきではなく、明確な筆致で描くべきでしょう。[Gabriel Max: Das Schweißstuch der Heiligen Veronikaかもしれない]。

しかしこの宰相はこの逆です。私は彼の顔を長く見つめると、宰相はまさに黙して、あたかもその瞼は閉じられ、一人の死者が国王と食卓に着いているかのようです。

私は確証を得ているわけではありませんが、旦那様、私はこう信ぜざるを得ません。つまり我が国王は、かの日々、宰相に対して、自分の意志に反して招いてしまった不幸について、自分の心情を述べられた、と。ほんのわずかな言葉であれ、あるいは装われた言葉であれ、多分ご自分の苦しみを表明され、告解されたことでしょう。国王は自分の重荷を外そうとされ、それも私の肩へ転嫁なさろうとしたと思います。私は国王をお咎めしません。それが世の流れであって、だからといって、私は何も恐れる必要はなかったのです。宰相は余りに賢明でしたから、道具とそれを使啖した手とを混同なさらなかったし、余りに気高くて、一人の下僕を自分の復讐相手に格上げなさろうとはしなかったのです。

お分かりください。 — ヘンリー国王は偶然の戯れと私とを、その娘御の邪悪な死に関係するものとして、訴え、嘆いたかもしれませぬ。ご自分の娘御強奪と肉欲とを格別咎めなかった。と申しますのも、この点に関し、国王は[自分を縛る]何の権利も何の法も知らなかったのです。それに当時はその犯行を軽いものに考えておられたと思います。我々のすべての裁判官が国王に対して、まだ十全に真剣に重々しく、考量していなかったからです。

かの日々、宰相があるとき、夕方頃、国王の狩に付いて馬で行かれたことがあります。両殿方は一本の樫の広大な影の中に陣取っていました。私は幹の明るい側に座って、猟犬の首の後ろを撫でていました。国王は私の忠誠をご存じで、私の前では寛がれる習慣で、

トマス殿も私を見ても気に留めません。あるいは宰相が私に視線を恵まれるときは、無愛想のものではなかったものです。と申しますのは、グレイスの棺の側で私が発しましたかのコーランの詩文は、宰相のお気に召して、それをよしとされていたからです。かくて私は不思議な、人間の分別にとっては信じられない会話の立ち会い証人となりました。この会話は、私がここ貴方の側に座っていること同様に、文字通り、真実で確かなことごさいます。

この両殿方は、トマス殿がその衣類から取り出したフランス国王の或る書状について話しておられました。つまり宰相はパリのカペー王朝と秘密の文通を行っていたのです。このカペー王朝では、その頃、宰相のズゲリウス修道院長[シュジェール1081-1151]が亡くなっていて、この王朝は、その代わりに、トマス殿をこの世で最も賢い男として、出来ればその主君に背いて貰い、自らの政務へと誘おうとしていたのです。宰相は満更でもなく、構えずとも自らの手に入った仮面の下、簡潔かつ確実なやり方で、自分の国王とノルマン人の王冠に対し、異国の国王が仕掛けようとしていること、宰相として徹底して知っておく必要のあることの一切を知っていたのです。

宰相がヘンリー王に渡したその手紙では、フランスの国王が宰相にまた強く、自分の政務へ移るよう、説得していたに違いありません。と申しますのは、我が主君はこの書状をまことに王侯らしく喜んでいたのでした。

『見ろよ、見ろ』と彼は嘲りました、『一万ポンドを彼はそなたに提示している。ちょっと弾んだ気なんだな。しかしそうは行かん。我が従兄弟のフランス殿。私はこの値の張る男を手放しはしない』。そして国王は愛想良く、手を自分の寵臣の肩に置きました。それから思い切って傲慢な気まぐれの冗談を述べました。

『我がトマスよ、そなたが私に何か含む所があるのであれば、そして私に意趣返しをしたいのであれば、剛毅な男よ、命や体に別状がないままにそうしたいのであれば、助言してやろう。明日私はそなたを送る、一 そなたが承知している仕事で、一 そなたを求めている王のいるパリへな。そなたを誘惑して、甘言でそなたを籠絡できるか、見せてやれ』。

この無分別な冗談、我が国王の思い上がった安心ぶりにそれほど驚く必要はありません。一緒に座っている二人をご覧になれば、一方は強靱な体に獅子の頭脳をしており、他方は上品な肢体に穏やかな表情であり、貴方は納得されましょう。

その後一つの静寂が生じました。深く自分の負い目を感じていたヘンリー王は、宰相の従順で、従属する天性の人柄を、これは陛下お一人に重宝なものですが、残酷で軽薄な風に指摘したくなるとそう苦々しい思いで宰相は感じたことであろうと私は思いました。しかしトマス殿はしばらくしてから、格別怒りを見せずに、平静な一 申し上げますと、一 哲学的な口調で答えました。

『私が陛下に含むところがあろうとも、それは大小にかかわらず、陛下は、私の御主君で、私の忠誠を疑うに及ばないご承知でしょう。私は陛下の裏切り者になるほど、邪悪でもありませんし、近視眼でも、山師でもありません。しかし陛下の冗談の英知は、私の痛いところを突いています。私の未熟な性質、つまり私の屈服して奉仕する風が出来上がっている本性について、陛下はご承知です。それは早期に宮仕えした慣習によるものであれ、私の出自と血の特性によるものであれ、私は国王方の聖別された御頭や高貴な眉毛に

太刀打ちできません。それに陛下は上機嫌であられ、陛下の下僕に好意を抱いておられましょうから、不肖下僕は、この親密な二人っきりのときに、一つの助言を大胆に申し上げましょう。私を陛下の手から陛下よりも強力な別の主君の手へ渡さないでください。一と申しますのは、私は屈辱的に穏やかなものですから、その別の主君にも全く従順にお仕えして、その方の命令を、陛下に敵対しても、いや、何とイギリス国王に敵対しても実行することでしょうから。...しかし阿呆な言い方をしています。...陛下より強力な国王がどこにいましょう。どこの支配者が、陛下と喧嘩して実害、損害を受けないことがあります。そうです、陛下を裁判に引き出そうとする者は誰もいません。...それ故私は阿呆なことを話し、存在しないものについて話しています。一つの夢、一つの息吹、一つの無についての話しです』。

国王はこの話しを宰相ほど真剣に評価したくなかったのでしょう。と申しますのは、国王は少し考えた後、無益で不快な考え方に対するが如く、あくびをなさったからです。国王は私に、ワインを一杯ご自分に渡すよう命じられました。一私も宰相のこの話しを大したことに思わず、後になってようやく、この秘かに致命傷を負った宰相は、婉曲な疑わしい方法で、神の薄暗い[不可知の]ゆっくりした復讐のことを話されたものと解釈致しました。

ヘンリー王は杯を上げられ、ライン・ワインの微光を発する黄金色を眺められました。その明澄さにご自分の精神を楽しんでおられるかのように、一息でその強いワインを空けて、それから笑い、目から涙を溢れさせました。

『我がトマスよ、そなたは』と主君はろれつが怪しくなった舌で言いました。威勢良く飲んで、ワインが頭に上がって来たからです、『ますます崇高に見えるのう。...誓って、一何を話し出すか分からんが、しかしそなたの山羊の首にミサの小鈴をぶら下げて、悪魔の名にかけて、そなたを一気にカンタペリーの首座に就けるのも一興だぞ。...そこで私のために司教となって、教皇に敵対するお触れを出すのだ、...』。

宰相はいつもの習慣よりも素早く起き上がりました。『この檜の木の下にいるのは良くありません』と彼は言いました、『昔の世、この下では残酷な魔術が行われていたのかも知れません。一この影は頭を混乱させます』。

ここで会話は終わりました。

ちなみに、我が主君の国王はその酷酈した気まぐれの発言で全く的を失っていたわけはありません。宰相が、時に深く奇妙な考察に没頭しているという意見に関しましては。私自身それについてご報告することがあります。私は控えの間で、しばしば主君をお待ちして何時間も待機したことがあり、宰相も時に私に気付かずに深く沈思して、そこをあちこち歩かれたものです。控えの間の陰気な隅に、大きな木製のキリスト十字架像が掛かっていました。粗雑な細い作品ですが、しかし感動的な面影の御頭です。国王はそれを高く尊崇していました。ご先祖のウィリアム征服王が、それをヘイスティングズ近郊の戦い[1066]前に熱心に祈願し、その御利益で勝利を得られたのでした。宰相はこの彫刻に対し、普段はその肥えた目を向けることを遠慮なさっていました。宰相は流れ出る血とか醜悪なものを嫌っていたのです。しかしかの時代、私は時に、奇異な思いで、宰相が褐色の十字架像と対話されるのを聞いたことがあります。アラビア語で、私は宰相がその像と囁かれ

るのをはっきりと耳にしました。 — ほとんど不気味に思われましたが、宰相が立派な癒やし手のイエスに向かわれることを私は喜びました。と申しますのは、旦那様、私が耳にしたのは、少なすぎるか、多すぎるか、それにここでは繰り返したくない事柄だったのです。これらは、貴方の魂を危うくするものではなくても、貴方の敬虔さを苛立たせるかもしれない類いのものだったのです。トマス殿ほどの程度、ムーア人の本性を自分から遠ざけていたのか、そもそも宰相は、我々同様に、十字架に掛かっているとも尊いキリストを聖なる神そのものとして、礼拝しているのか、私には分からなかったのです。個々の吐き出す溜め息、脈絡のない単語のみを、次第に私の記憶の仲からは薄れて行く言語で聞いたわけです。これらに私は教化されたり、驚いたりしていました。内密に、痛々しく、宰相は静かな磔刑のキリストに向かって語っていました、しかしまた瀆神風で、自分と同様な者を相手にしているように見えました。

或る日また、宰相が、私に気付かないまま、この像の前に立っていました。私の方は、広い部屋の隅、床几に座っていて、静かに、小さくなっていました。

『汝も苦しまれた』と彼は囁きました、『汝がここで受難に遭っているように、まさに残酷に。...何故か、何故か。...世の罪を背負うため、と聖書に記されている。...汝は何を償ったのか、天上の心の者よ。...平和を汝はもたらす定めで、人間達に安寧をもたらす定め。...しかし見よ、この世はまだ血と蛮行が立ちこめ、悪臭を放っている。...咎があれ、無垢であれ、共に汝の世以前と同様に、殺害されている。...

奴等は汝を打ち殺し、唾して、拷問にかけた。...しかし汝は勇敢に愛を保ち、十字架上で汝の殺害者達のために祈った。...私の心を食い尽くす和解しがたい憤怒の浅ましさを祓い給え。...私が汝の足跡に倣うようにと。...私は死ぬ定めの人達の中で、最も哀れで、惨めな者だ。...見よ、私は汝の一員であり、汝から離れられない、汝、嘲られ、十字架に掛けられた人間達の中の辛抱強い国王よ、...』

宰相は今しばらくこの像と囁いていた後、ゆっくりと向きを変え、床几に座っている私を見つけました。私は驚いた振りをせず、宰相に傍聴していたか聞かれても果敢に嘘を吐く決心をしました。

宰相はゆっくりした足取りで近付いて来て、ふと微笑していました。 — 『ヤベテ[ノアの息子]の息子よ』と彼は私に語りかけました、『そなたはセムの子孫の間で暮らしていて、彼らは永遠の者[神]は自らの息子を十字架に掛けたという話しを信じていないと承知していよう。 — 彼らにそなたはどのように説得するつもりか』。

私は目をしっかりと宰相に上げて、臆せず答えました、『我が救世主は、裏切り者ユダに接吻し、自分を苦しめる者達を許しました。しかしこのようなことは普通の人間にはできません。自然や生まれに反することですから』。

トマス殿は軽く頭で頷きました。『その通りだな』と宰相は言っていました。『これは難しく、不可能だ』。

しかし宰相の言葉は、全面的にキリスト教徒的ではなかったとしても、宰相としての仕事は段々とそのようなものになりました。かの日々、トマス殿は、自分の威光に疲れて、荘重さを脱し、ご自分では平安のない、心を病んだ男でしたが、力の及ぶ限り、災いを治し、平和を取り戻すご意向に見えました。しかし宰相は細心に賢明になさっていて、それ

で国王もノルマン人達も宰相のことを嘲らず、宰相に対し邪推を抱くこともなかったのです。

法外にザクセン人達を虐めず、ザクセン人達を絶望に追い込まないのが賢明であり、ザクセン人達の上に善意の者として立ち、彼らの下僕や女中を好き勝手に虐待したノルマン人達よりも寛大である方が有利であることを、国王に教示することは、宰相にとって難しいことではなかったものです。かくて宰相は国王の法律でザクセン人の民の苦勞を軽減させ、それも人目に付く挑発的なやり方ではなく、慎重な、目に見えぬやり方であって、ノルマン人達を刺激しない風にしたのでした。要するに、ラバの背中の荷物を減らさずに、包み方を変えて、そしてその紐が余りに肉に食い込まないようにただ配慮したのです。

しかし宰相はまたノルマン人達にも貢献しました。ノルマン人達への気前の良さを倍増しました。好意や王侯的贈与を振りまき、個人的諍いを賢い審判で調停しました。二人の権力者が喧嘩しますと、調停者として二人の間に入りました。

『私は誰だろうか』と宰相は多分言ったことでしょう、『偉いさんの案件に割って入るなんて。我が主君の一人の従者であって、王座を支える一人になりたい』。二人の敵対者が和解して行きます。彼らの誇りが満足させられているのです。

フォーコンブリッジ殿[シェークスピア『ジョン王』のファルコンブリッジからか]も用心しておれば良かったのです。この人は宰相が、両国王、ヘンリー王とカペー王朝の許で寵愛されていることに嫉妬して、剣を抜いて宰相を追いました。しかしまた秘かに中傷して、偽造された宰相の、フランス国王宛の手紙という文書を振りかざし、トマス殿の手で反逆罪が行われていると咎めました。自分自身がフランスの宮廷と組んで危険な策謀を練っていたのです。

しかしトマス殿は彼のことを見抜き、察していました。宰相は彼を、国王には知らせず、国王の心を乱すことなく、自らの許に呼び、
— 私自身はその招待の手紙を運び、
— 彼に悠然とした言葉と共に、また確かな証拠と共に、真実を開陳しました。
— しかし宰相は彼に復讐をせず、またそれが出来たはずなのに、一気に彼を壊滅せずに、自らの許から彼を去らせたので、このノルマン人は宰相のことを、決定的な喧嘩を怖がる用心深い臆病者と見なしました。そして彼は引き続き、倍して、安心しかつ破廉恥に、振る舞って、とうとう彼は公然たる不忠の行動に出て、王座を攻撃し、それで勿論人々は彼の処刑場を準備しなければならなくなったのです。

このようにしてフォーコンブリッジ殿は自分の遺産と自分の頭を宰相の悠然たる慈悲心のせいで失ったのです。彼の先祖は征服王と一緒にやって来たのでありますが。

宰相が後に国王に、自分はこの反逆者男爵の生き方を最初から承知していて、目に留めていたと話したとき、国王は宰相に、何故もっと早くにこの裏切り者の仮面を剥がなかったのかと尋ねましたが、宰相はこう答えました。『いや、陛下、何故かですか。...どの人の行動の許でも、目に見えぬ腕が働きます。すべての事象は成熟に至り、どの人にも最後に決着の時が来ます』。

第八章

そして或る日、国王が宰相と国事について話し合われることがありました。それはノル

マンディーの或る城でのことです。国王は私に国王の愛好するかの軽い発泡性ワインを杯に注がせていて、宰相は丁度イギリスから届いたばかりの使者のバッグを披露していました。カンタベリーの印章のある一通の手紙を最後まで宰相は握っていて、それからその手紙を国王に広げながら、その平静な流儀で語りました。

『カンタベリーの首座は、過ぐる週の当初に亡くなりました、陛下』。 — ヘンリー王はさほどこのことに驚かれませんが、何か応えもせず、国王は好意的視線を宰相に向けていました。

『彼はすでに長いこと病気でした』とトマス殿は続けました。『しかし私は彼が自分の目標までまだ近寄れたとは思いません。今、陛下、国王にとって、そしてイギリスの国権にとって、都合の良い時、決定的時が生じています。陛下は陛下の国の厄介な潰瘍を切り取って治せる時が来ています。我が主君がこの危険の地位に対し、大胆な人選をなされば、その国王としての願望の実現に近づくことでありましょう』。

国王は悪戯っぽく目を瞬かせました。いつものように宰相の英知を喜んだのであれ、また国王がこの英知に対し、自らの英知で今回も上回り、びっくりさせてやろうということであれ。

トマス殿は国王のこのずる賢い表情を見て、悠然と見守っていました。『数ヵ月前、ローマで教皇座に押し上げられた教皇[アレクサンデル三世、在位1159-81]もこれ以上都合の良い方はいない方です。私どもが人間的に近付けるようなある情熱をお持ちです。学識ある素早さで、貨幣を収集、観察なさっています。素晴らしいことに、古代のローマ皇帝達を幾つかの保存の良いサンプルで所有することに満足なさる一方で、陛下、御身の金貨を幾ら所有しても飽き足らず、数百枚、数千枚と欲しがられます。その金貨が陛下の崇高なお顔を描いているからであり、そのお顔を、教会の忠実な息子の顔として見飽きないからであります』。

ヘンリー王は腹を抱えてお笑いです。一方宰相はこの酷評を、いつもの冗談を言うときの習慣で、真剣な、悲しげな口調で述べられます。『しかし我が主君は、首座を誰になさいますか』と彼は更に尋ねました、『あの司教でしょうか』、それとも『この修道院長でしょうか』。 — 私はもはや名前をはっきり覚えていません。それに貴方に対し一言も、ほんの些細なことであれ、嘘を言いたくないのです。 — 『兩人とも我が主君の目的にふさわしい人物です。しかしひょっとしたら修道院長の方がましかもしれません。こちらの方がもっと悪です』。

『そちらの方がもっと簡単に使えるな』と国王は宰相の考えに乗りました。

『司教の方がもっと扱いにくい』とトマス殿は答えました、『修道院長の利点は別です。私が次のような陛下の政治の危険がどのような顔をしているか明らかにしましても、それは我が国王の英知を言葉にしているに過ぎません。陛下、御身はご存じでしょう。征服王、つまり陛下の崇高な著名なご先祖が、イギリスの司教区に、僧侶達に関する裁判権ばかりでなく、国家の力を弱体化し、破壊することですが、僧侶達と俗人達との諍いに関する裁判権も与えたのは、何故なのか、どうしてなのか。これは当時はそれが便利だったのです。初代の司教達は征服王の家来だったからです。今では有害で耐え難い。御身のノルマン人達のすべての我が儘が司教職の下で育っているからです。陛下のご威光に反逆する者はすべて首座を狙っています。御身の正義の稲光を、罰せられずに、嘲笑うためなのです』。

—

我が主君の国王は、椅子の肘掛けに置かれている手を固めました。というのは国王は秩序と正義の友でしたから。

『陛下の英知は、お見逃ししないことでしょう』とトマス殿は述べました。『何故教会の篡奪された権利は、かくもそぎ落とすことが難しく、何故無効にできないのか、と。教会は二重体制であって、体と魂からできているからです。体は一群の剃髪した独身者どもです。数千の大聖堂と修道院があって、一束の慣習と誓願があり、寓話や偽造に基づく格言があります。—しかし教会の魂は、徳操、謙虚、憐憫、貞潔です』。—国王は思わずある仕草をして、睫毛を震わせました、—『要するに、人々が磔にしたかの別のお方が教えられた一切です』。

ブルクハルト殿、ご承知おき頂かねばなりません、宰相は救世主を決して、何か尊崇して称えられた御名では呼ばず、いつもただ『別の方』なのです。つまり聖なる御名を発することは宰相の異教徒的血が嫌うのです。

『しかし陛下、民衆は容器と内容とを区別できません。その徳操でイギリス人の魂に影響を及ぼすような首座と陛下が対峙することになりましたら、陛下はその特権のほんの名称すら奪えません。それ故に、陛下はあからさまな罪人、我らの修道院長のような紛れもない悪人を選ぶべきです。...』

このように石弩屋は、極めて調子良く、宰相の語りを続けていた。しかしブルクハルト氏は彼の方に寄りかかって、彼の袖を引っ張った。

「石弩屋よ」と彼は反論した、「私はそなたを正直な男と思っている。しかし勝利の教会の現在の会員が、存命中に、たとえ改宗前であろうと、現世で戦っている教会にかくも蔑んだ言い方をし、そなたの国王にかくも悪辣な言い方をしたとは信じがたい。私はそなたに申した通り、新しい聖人に対して納得していない。しかし過ぎたるは及ばざるがごとしだ。それはそなた自身の言い草であろう」。

「旦那様」とイギリス人ハンスは、その灰色髭の下で邪悪な微笑を浮かべて、答えた。「宰相は文字通りこの言葉を発せられたわけではないということは考えられましょう。しかし意味としてはそのような言葉を発せられたわけで、これは信じてください。それも、よろしいですか、—政治家としてであって、一回ではなく、百回です。宰相は国王の前でたびたびこの問題を議論されました。しかし若干私の考えが混じっている、これは考えられます。と申しますのは、残念ながら、僧侶達の慣習が話題となりますと、私どもは皆同じ文言を繰り返しますから。—勿論貴方の参事会は当然例外で、それ以上に貴方御自身の立派な人柄も別です。—

しかしたとえ私の話しが若干不確かなものになったとしても、これからこの話しは、福音同様に、本当のことで転覆できないことです。と申しますのは、これからお話しすることは、私の白髪の上に転倒した[一マイルのごとの]里程標のローマ文字の如く残っているからです。その断片にはまだ消しがたく刻み込まれた文字が彫られているのです。聖母様の恩寵にかけて、私は真実を話していて、嘘ではありません。しかし尊敬する旦那様、私の話しは、どこで貴方に中断されましたか」。

「そなたの悪という修道院長のところだ」と老公はまだ若干苛立って答えた。

「宰相が彼を推挙したのは間違いないことです」、とハンスは熱くなって続けた。

『陛下』とトマス殿は言いました、『この動物人間では、その椅子の諸権利を神々しい権利として擁護することはできなくなりましょう。陛下はその諸権利を奪い取られることでしょう。 — その後で、彼をお払い箱にします』。

宰相はこれらの言葉を自分の上品な唇から軽蔑を込めて吐き出し、言い添えました、『その上、この不浄の者は、自暴自棄となることでしょう。陛下、たとえ、他の司教達のように、妾を囲うことで満足しなくても、無実の若い娘を襲い、駄目にしてしまひましょう』。

宰相は単にかの国中に知れ渡っていた罪人のことを考えていたにすぎないと私は思います。しかし思わず私はグレイスのことを思い出さざるを得ず、国王も心が落ち着かなくなりました。しかし素早く国王はこの恥ずかしさを克服し、この嫌疑を棄てました。トマス殿は自分の内面を、当てこすりて露呈してしまうことを嫌うであろうと国王は承知していたからです。

大きな贈り物をしようとして取り掛かっている気前の良い男の気まぐれな陽気さの中、喜んで目を輝かせて、国王は続けました。

『トマス、どうしようと言うのだ。二人の聖人にして学者が占めていたこのポスト、そのうちの一人は、故ランフランクで、化体を否認する異端、ベーレンガル[999頃-1088]を打ち破った者で、もう一方は、聖アンゼラム、神の存在について誰にも負けない証明をした者だ。このポストに一人の豚を推挙しろと私に言うのか。それは王侯としての私の意志からは遠く離れているぞ』。そして我が主君の国王は自分の知識を喜びました。

宰相の表情には、ヘンリー国王は突然の気まぐれを起こして、長く練られた案をつぶす気なのかという非難一杯の疑問が読み取れました。

国王は自分の杯を握って、楽しげに飲み干しました。『私は我が僧侶どもに一人の首座を置くつもりだ、僧侶どもが驚くまいことか、高貴な汚点のない男で、ひどく細かい哲学者、その上私には恭順の男で、教皇体制の生来の敵対者なのだ』。

しかしトマス殿は信じられないという微笑で答えました。『私は、陛下、御身の僧侶達を我が目で見回してみても、そのような者は選び出すことはできません』。

『そなたは察せないのか』と国王は迫りました、『助けて進ぜよう。いいか、まこと、首座の席にはそなたしかおらん』。

宰相は平静でした。しかし次第に青ざめて、その顔からすべての色合いが消えました。宰相は安楽椅子に寄りかかりました。それから宰相は、国王の眼差しを避けながら、その黒っぽい目を脇の私の方へ向けました。力なく垂れ下がっている右手の二本の指で、宰相は深紅の衣装の一本の髪をゆっくりと高く持ち上げて、その高価な靴の上向きに反った先端が見えて来ました。

『石弩屋よ』と宰相は冗談を言って、軽蔑した視線を、その宝石で微光を発する衣服に滑らせました、『まずこの聖人を見てみるがいい。...国王の宮廷で着用される雅な衣服を蔑視するこれは洗礼者ヨハネだ、 — この善良な羊飼いを見るがいい。これは迷える子羊を肩に担って連れ帰り、群れのために命を捨てる者だ』。

国王は甲高い笑い声を発しました。 — しかし私は気分が悪くなりました。

その間宰相はその冷淡な顔を国王に向けていました。『陛下』と彼は言いました、『こ

の選択は真面目になされたとは言えません。これは御身の司教達、御身のノルマン人達、御身のザクセン人達の目には、不可能な選択です。イギリス人僧侶が、その師父として、一人の従順な廷臣に従いましょうか。この廷臣が昔、青春時代、偶然に、あるいはその方が利点があるという理由で、最初の聖別を受けているからと言って。 — 一人のザクセン人が御身のノルマン人達の魂を見守っているのでしょうか、あるいは一人の背教者が、 — そのように呼ばれていますが、 — 御身のザクセン人達の魂を見守っているのでしょうか。陛下、御身の宰相はこの劣等な選択を諫めます』。

『最も素晴らしい選択だ』とヘンリー王は頑固に主張しました。 — 『そなたがカンタベリーの首座となれば、聖ペトロの王座[教皇座]はガタガタになる。そなたが司教冠を被れば、教皇冠は頭上で揺れる。王手詰みだ』。

『陛下』と宰相は真剣に嘲笑を続けました、『自分の衣装を替えて、聖職者の服をまとった人間に生じ得る、かの突然の変化について、かつて陛下が耳にされたことがあるか存じません。二人の今は栄光の中にいる者達が手にしていた司牧の杖を握ることは容易なことではありません。麦穀[パン]と葡萄の果実[ワイン]を神の体と血と認めた故ランフランク、それに根拠付けられない者を根拠付けた聖アンゼラムの二人です。そこでもし、一つの奇蹟が起きて、私が真の司教になるとします。これは陛下が予期なさっていないことで、最も都合の悪いことでありましょう』。

『トマス、口を慎め』と国王は指で宰相を脅しました、『神聖な事柄への嘲笑を聞きたくない。私がそなたのことを見通せるようになってから、すでに長いことになろう。そなたはアラビア語の哲学で育ち、一つの秘教を信奉していて、敬虔なキリスト教徒ではない。しかし私はそのようなキリスト教徒として生きたいし、死にたいのだ』。

『国王陛下、御身には信じられないことでしょう』とトマス殿は悲しげに答えて、自分の胸を示しました、『この干涸らびきった木にもまだ天の露の滴が落ちかかるかもしれないとは。 — その通り落ちないことでしょう。しかし敬虔さがなくてもこの世には疲れ果ててしまいます。御身の力強い翼の下、私はこの王国を長いこと統治して来ました。どのような手段を用いてか。威力、賄賂、破約、...それに言葉にしたいくもっとひどい手段です。...そのように世の諸王国は管理されます。しかし私は疲れてしまいました。私にとってイギリスは何でしょう。私はノルマン人ではありません。ザクセン人ですらありません。私の血管には異国の血が流れています。 — 寛大な陛下が振る舞ってくださる宝物、 — これを私は誰のために集めていましょう、 — 赤錆と衣蛾のためです』。

ここで私はすぐに、トマス殿はグレイスの死のことを思い出していると察しました。国王もそれに感動しました。涙が国王の頬に流れました。ヘンリー王は心が優しいのです。

『人ノ世ノ事柄ニ泣カナイ者ガアロウカ』[『アエネイス』 I-461]と宰相は思わず呟きました。[Sunt lacrimae rerum,物事の涙、マイヤーは良く言った]。

『石弩屋、この詩は誰のものだ。そなたは僧侶だったろう』と宰相は新たに私の方を向きました。一瞬失った平常心の仮面をまた被ろうとするかのようなようでした。

『ローマの詩人、ヴェルギリウスです』と私は躊躇わず答えました。『人間の事柄を余りにきつく絞るべきではないという意味です。その内部では涙が一杯ですから』。つまり私は我が主君、国王に助け船を出そうと思ったのです。

『私の古い軛を取ってください』と宰相は頼みました、『新たな軛を私に掛ける代わり

に。これでは私は二枚舌の者、曖昧な者になります』。

別の宰相を探せということか。できない。トマス殿は不可欠だ。これは本気ではないのだろう。そのようにヘンリー王は自らに語りました。これは私の想像です。と申しますのは、国王は突然こう発せられたからです。

『そなたは野心的だ、野心的だぞ。一 そなたは自分の値をつり上げている。聡い奴よ。自らを代替不可能と承知しているのだろう。いいか、トマス、それは気に入らない。楽しく恵み、楽しく受け取るのだ』。

『陛下の宰相に私は留まらなくてはなりません。私どもの星と私どもの生誕の時は互いに関連していると私は思うのです』とトマス殿は答えました。『しかし、陛下の首座となることを強いないでください』。

『手を出せ、手を出せ』とヘンリー王は叫びました。屈服のこの徴候に煽られていました。

『国王陛下、お止めください』と宰相は同時に叫びました。一 尊敬する旦那様、私が忘れることのできない眼差しでして、死ぬ定めのある者の眼差しです。宰相は手を額に、そこで傷が疼くという風に上げました。そしてその声は囁き声に沈みました。

『どちらへ私は参るのでしょうか。どちらの疑惑へと。どちらの奉公、従順へと。どちらの死へと』。

それから宰相は再び脅すように声を上げて尋ねました、『国王陛下、私のことに確信を抱いておられますか』。

『自分自身よりももっと信頼している』とヘンリー王は請け合いました。国王の耳は繊細ではなく、それで囁かれた言葉を聞き逃していました。『謎々は結構。一 トマス、私はそなたを必要としている。そして自分にはイギリスは関係ないと言わないでくれ。私は夙にそなたをザクセン人達よりも寵愛して来た。そしてどこぞのノルマン人のためよりもそなたのためにもっと尽力して来たのだ』。

ここで嘲りの一閃が宰相の顔に浮かびました。しかしヘンリー王はこれに気付かず、性急に叫びました。『これ以上抗弁ならん。私は好きなようにそなたを抜擢する。そなたは聞き入れよ』。

そこでトマス殿はその青ざめた頭で礼をして、言いました。『陛下の御下命通りに、なされますように』。

第九章

かくて宰相は絶対的な国王の全権と共に、その主君の意に従って、イギリスへ戻り、そこでその有能な指を使い、首座を選出することになる司教達を、柔軟な粘土のように捏ね、象って、そして司教達をその名手の手によりその被造物として出現させ、その声を自分の都合の良いようにまとめ上げました。すべて最良に経過しました。トマス殿は任命され、ノルマン人のウィンチェスターの司教が甘辛い表情で、極めて厳かにその同胞としての祝福を彼の頭に授けました。

すると或る日信じられないお嘸がノルマンディーに届きました。我が主君の国王にこう伝えられたのです。その宰相は世俗生活の一切の華美を一気にすべて自ら断ちきりました。

その司教就任の慣例の祝宴に彼はすべての流儀、風習に反して、自分の同胞、司教達、その他高貴な僧侶達を、ノルマン人達の精華の貴族共々、招待せず、貧窮者、癩病病み、乞食や不具者を路上や救貧院から招き寄せ、その広大な広間、その司教の食卓に一杯堂々と並ばせました、と。

国王はこの驚くべき出来事を法螺、少なくとも自分の寵児を嫉妬する輩、敵どもによる誇張された話しと見なしました。国王はこのような新しい事や前代未聞のことが嫌いなノルマン人の宮廷人達をからかっていました。『諸君』と国王は彼らに巫山戯て言いました、『これは我が宰相には大目に見てやらなければならぬ。彼はすべての身分の表情や適切な服装について弁えている。すべての面で彼は趣味が良い。廷臣としての完成という点で彼は貴方らに先んじていた。上品な騎士的優美さという点で貴方ら皆に勝っていた。今や彼は自分の新しい同輩、司教達に、真の使徒的行状の気高い手本を見せている。世にも稀な、唯一独自の人間だ』。

新しい知らせが、最初の知らせを肯って、首座はその高価な司教服を聖別の厳かな行事の後、すぐにまた脱いで、そして痩せて、断食した顔で、粗末な僧服をまとって、カンタベリーの通りを歩き、その客人達、つまりザクセン人の乞食達を、どこに行く場合でも従えていますと付言されると、ヘンリー王は心配な気分になって、気まぐれな冗談を言わなくなりました。しかし国王はすぐにこう察していました。この類い稀な賢人は、聖人の仮面を着用しているが、それは単に、差し迫った教皇との交渉の際、イギリスにおける聖職者の裁判権問題に関し、優位に立つためであろう、と。

いずれにせよ、自身でこの件につき見きわめることに決め、イギリスへの渡航を速めました。

ドーヴァーとロンドンの間の途中で、国王は度々、ノルマン人の殿方らに呼ばれて、新しい首座に対する権利のことで請願されました。自分達の許から逃れたザクセン人下僕達を連れ戻すことに首座は難色を示していると訴えるのです。殿方らの嘆きによりますと、この下僕達は今や群れをなして修道院を目指しており、そこで剃髪してしまうそうです。これに対しヘンリー王は不機嫌に自分の頭を振っていました。

国王の到着した朝、ウィンザーではその城の大ホールにすべての貴族が集合して、帰郷した陛下に挨拶することになりました。陛下はまだ微睡んでいました。しかし私は国王がホールに足を踏み入れるときいつも使用されるドアを見張っていました。そこから輝かしい集団が容易に見通せます。

すべての殿方らの中での話題は、トマス殿の説明しがたい突然の変化に他なりません。人々は首座の出現を固唾を呑んで見守っていました。首座は陛下に挨拶するために現れるであろうと知っていたからです。そして人々は国王の部屋にふさわしく小声で活発に話し合っていました。ただ老公のロロ氏だけは、皆よりも頭一つ背が高く、何の遠慮もせず、その口調は鈍く転がる雷鳴の如く轟いていました。

彼は年輩の殿方らの群れの中、広間の右側に立っていました。その中で最も痩せて、素っ気ない姿で、独自に剃髪僧侶達の全体について、格別に新しい首座について悪口を言っていました。

『私は首座に男の気概を見ない』と軍備長官は叱りました。『青白いおばさんだ。偽善

者の臆病な奴隷がその細い体を僧衣に隠している。その方が国王の紋章の楯の下にいるよりも安全だと思っているのだ。この偽善者とは、奴が剣を帯びている間にやり合うべきであった。今に分かるぞ、この策謀家は我らにひどい難儀を仕掛けることだろう』。

殿方らは彼に賛同しました。

他方の側では若者達が嘲り、忍び笑いをしていました。ウィリアム・トレイシー氏がその戯画小冊子を見せていたのです。

この殿方は一人前の素描家で、ご承知のように、司教座聖堂参事会を他の誰よりも嘲笑する術を心得ていました。少し歪曲するだけで、彼は人間の顔を動物の顔や、静物の模写に変えて、世間の笑いものにします。私も一度彼の絵筆にかかったことがあります。私はがに股の獵犬になって国王に大きな鼻面先に鳴を啞えて運んでいました。当時私はその冗談が気に入らなかつたけれども、真っ先に笑いました。極めて気転が利いていましたから。他の、私よりももっと激しやすい生まれで、良家の貴族の者であれば、ウィリアム氏による冊子の画面上のこのような悪戯描きの変身に怒つたことでしょう。その小冊子を彼はベルトに鎖留めして置きました。彼の剣さばきがその絵筆同様鋭いものであつたのは、幸いでした。さもないと絵筆の鋭さは命取りになつて置いたことでしょう。

この嘲笑家が今や若い騎士達にそのスケッチの新しい頁を見せて置きます。好奇心を起こして、私は美男のリナルド氏、そう呼ばれて置ける方に近付いて置きました。丁度まさにその戯画小冊子を手にして置いたのです。彼は笑つて向きを変え、その際小冊子を床に落し置きました。私はそれを拾ひ上げ、中に奇妙な植物を目に置きました。一本の細い莖、その莖から垂れ下がつた両方の葉は、一枚の僧衣の袖となつて置いて、穂先として細い首の揺れる葉柄に、馴染みの殉教者の顔が育つて置きました。それは生き写しの一人の隠者、首座の信心ぶつた姿で置した。

かくも速やかに宮廷では一人の畏怖された人間が嘲笑される者となつて置きました。

その小冊子は更に回覧され置ましたが、遠方で奇妙な物音が聞こえ置きました。それは敬虔な単純な連禱で、城の中庭にゆつくりと近付いて来ます。何千もの熱心な声で、半ば戦闘的に、半ば嘆くように歌われて置きます。

『首座とその乞食どもだ』と広間で響いて、殿方らは窓辺に急ぎます。私も隙間を見つけて、ロロ氏が間近の高い女牆から甲冑を付けた右手を命令するように突き出すのを見置ました。

『跳ね橋を上げろ、門扉を閉めろ』と彼は下の城の中庭へ叫び置ました。そこでノルマン人の兵士達が門を警備して置きました。しかし穏やかな人の群れです。僧侶に乞食、子供達、それぞれ卑小な民で、家畜の群れのように執拗に中に押し入つて来ます。兵士達はもはやロロ氏の指示に従えなくなつて置いて、思はず引き置ました。というのは、トマス殿が人々に両腕を広げて、祝福したからです。首座はその貧しい行列の先頭、高く担がれた十字架の後を歩いて置きました。彼は、宮廷ではいつもこの上なく高価な身なりで、この上なく高貴な護衛と共に参上する習慣であつたのに、粗野な山羊皮の衣装で、その剥き出しのサンダル履きの足の指先が、黒ずんだ毛皮の下、一片の象牙のように輝いて置きました。

恭しく、臆して国王の従者達は、首座を迎えて、首座を城内へ案内置しました。今一度首座は敷居で彼の郎党の方を向いて、郎党に辛抱して自分の帰りを待つように命じ置ました。

郎党は従順で、謙虚に地面を陣取つて置いて、中庭の石造りベンチや大理石の階段は空い

ていました。私の視線は、首座の十字架を担っていたザクセン人に落ちました。彼は群れの中央に立ち止まっていて、自分に任されたその御印を相変わらず高く保っていました。赤色の髭が大部分その粘土色の顔を覆っています。それでも私にはこの粗野な面貌に見覚えがあるように思えました。まことにそれはトラスタン・グリム、ロンドンの弓造り屋の娘、我がヒルデの婚約者でした。私は彼が僧侶と知って喜び、ヒルデが自分の恥辱と父親の意志を忘れて、彼のことを侮辱したのであろうと推測しました。それはやはりその通りで、そのことをようやく後になって確かなことと確認しました。

その間トマス殿は城の中の階段を上がって、丁度私がまた窓から戻って来たとき、広間に入りました。皆の視線を受けて、首座はこっそりと部屋の中央に歩きました。ここで首座はゆっくりと視線を一同に上げ、師父らしい身振りで祝福の右手を上げました。ある不機嫌な呟き声が一同の中から漏れ、軍備長官の叱る声の中から明瞭になりました。

『坊主、そなたの素寒貧の祝福など我らは望まん。自分だけ祝福しろ』。

トマス殿は黙って開け放たれた窓辺に動き、ノルマン人達に蔑まれながらも、その慈悲深い右手をザクセン人の民衆の上に広げました。

すると下の中庭から甲高い物音が生じました。流涕と歓喜の叫び声が混じったもので、歓声と悲嘆との区別や分離ができないものでした。というのはザクセン人達は自分の故郷の国王達を失ってから、数百年来、初めて、国王の窓から自分達への挨拶と祝福に恵まれたからです。

しかしノルマン人達は拳を固めたり、その拳を剣の柄頭に置いたりしていました。

首座は誰にも注意を向けず、国王の馴染みのドアの方へ向きを変えました。すると丁度そのとき財宝掛が内側からドアを開け、ヘンリー王が上機嫌の朝を迎えて広間へ入って来ました。トマス殿は国王の前に恭しく立って、頭を垂らしたまま、国王の言葉を遜って待っていました。

ヘンリー王はその宰相をしばらく注意深く観察していました。 — こう申しては何ですが、長年の寵愛のもの、 — 馬とか獵犬を — 尾を刈り取ったり、断尾して、その姿が奇妙に変わったとき、訝しく眺めるのと変わりません。国王の顔に驚きと哄笑が浮かびました。しかし国王はその王侯としての威厳と英知を思い出して、まず廷臣を人当たりの良い仕草で去らせました。

『諸君、有り難う』と国王は言いました、『こうした慇懃を尽くした愛情の挨拶に感謝している。再会の喜びと楽しさは我らの祝宴の時用にとっておこう。我々は諸君を皆この祝宴に招待しようと思う。我らの恵み、諸君らの貢献にふさわしい祝宴だ。しかしまず我らの宰相との仕事を片付けたい。諸君らはその間、我らの新しい庭園を覗きに行くと良い。奥庭の新しい噴水装置は一見の価値がある。怒れる獅子の鉄製の頭だ。これは我らが不在の間、ワロン人の名手が完成させたものだ。また会おう、貴公子一同』。

国王のこの言葉の後、広間は空になりました。渋々出て行った最後の者は、ロロ氏、軍備長官でした。

すると我が主君の国王はもはや堪えられません、『畜生、トマス、そなたは何のという恰好だ』と国王はからかって自分の宰相に語りかけました、『換羽が済んだばかりか。羽根がすっかり落ちて、そなたの騎士の靴の雄山羊角を履き飛ばしてしまったな。 — い

や、見ると、靴そのものが消えている。...おい、おい、そなたのような哲学者のやらかすことは何でもありだ。 — そなたは脱皮する色鮮やかな蛇ではあるまい。若干の節制は司教に似付かわしいと言っても、それは善行のやり過ぎだぞ。ご立派過ぎるぞ。...砂漠の苦行者のように禁欲するつもりか。そんなことしたら私はそなたと食事をできんではないか。私の楽しみとしてきた食事を。水や木の根は王侯の胃に合わんぞ』。

トマス殿はこうした陽気な言葉を、表情一つ変えず、額を垂らしたまま聞いていました。さて首座は国王の顔へ目を上げました。すると我が主君は、厳しい断食と残酷な禁欲とで司教の頬がこけ、頭蓋の形が先鋭化して、いつも真面目な眼差しが異様な深みを帯びているのに気付きました。

そこで我が主君は同情に襲われました、『トマス、我が寵児よ』と国王は始めました、『仮面を投げ棄てよ。我らは内緒で、誰にも聞かれていない。そなたの覆面は私のためを思っていることと承知している。しかし私とその目的を知っていながら、そなたにそんなことをさせたら、神は私に劫罰を課そう。この変身は何ごとだ。はっきり申せ。謎めいた者よ、神秘めかした者よ』。

『我が主君の国王、陛下のお話しは、私には思いがけないものです』と宰相は答えました、『私はお見かけ通りの者、身なり通りの者に他なりません。陛下のご存じの者、陛下に仕える者です』。

『では謀られているのか』とヘンリー王は叫びました、『これは私の手か。 — 私は国王か。 — そなたは我が宰相か。 — 我々は毎日会談して来て、この国を治めて来た。... — いや、時季外れの冗談は止そう。謝肉祭の夜ではない。明るい、素面の日中だ。何という不気味な精神にそなたは襲われたのだ。そなたの存念を私の前でぶちまけて見ろ。私の心はそなたにいつでも開かれていると承知していよう』。

『国王陛下、陛下が御身の被造物に、臆せず話すよう激励されることに感謝申し上げます』と首座は答えました、『では敢えて告白致しますと、この手は余りに弱く、同時に、司教の杖と陛下の印璽とを握ることができません。必然的に私に任された一方の宝石か、あるいは他方の宝石かが、損害を蒙ることでしょうし、私は余りに忠実な下僕でありますので、陛下にとって使いものにならない宰相にもなれませんし、教会にとって劣等な司教にもなれません。それ故に、いや、陛下、切に懇願致します、私を陛下の道具として選ばれた陛下の強力なご意向のこの徴、長年私が幸せに感じてきました陛下の広大な、報われぬままの恩寵のこの担保、これを今日再び私から取り上げてください』。

そしてトマス殿はその余りに広い衣服の襞の中に手を入れて、三頭の豹の国璽を取り出して、国王の手に渡すために、それを渡した。

『ならん』とヘンリー王は叫んで、一步退きました、『宰相よ、話しが違うぞ。一時間たりとて、そなたの奉公を欠かすことはできない。そなたとそなたの知恵があればこそ、我々が一緒に考えて、見守って来たことが実現したのだ。私は私の強力な手でそなたの指の華奢な織物を壊しかねないのだ。逆らうな。そなたは私の宰相だし、そのまま続ける』。

『私を破滅させないでください』とトマス殿は王に頼みます、『寛大になってください。いや、私の案じますことは、陛下御自身が私を預けられたより高い者の怒りを買うことです。その主は嫉妬深い名手で、自らの側に自らを凌ごうとする者を許さないのです』。

この解しがたい話しは国王をはなはだ混乱させて、国王は印璽を思わず受け取りました。

国王は邪推して額に皺を寄せ、その声はちぐはぐに響きましたが、国王は尋ねました、『誰に私はそなたを譲ったのだ。ローマの教皇ではないだろう』。

首座は頭で否みました。

この世ならぬ光が突然その額の周りで輝きました。首座は痩せた腕を上げて、僧衣の袖が広くずれ落ち、首座は上方を示しました。すると我が主君の国王は驚き、その魂の奥底が震撼しました。国璽が国王の手から滑って行き、軋んで大理石の床に落ちました。私は足を踏み出して、その高価な道具の方に屈みました。その取っ手は純金です。私が調べて見ると、いや、それは亀裂が生じています。その宝石、つまりイギリスの紋章を通じ、中央に繊細な裂け目が見られます。黙って私はそれを、我が国王の安楽椅子の側にある、四本の龍の脚部のテーブルの上に置きました。

私が再び両者の方を向いたとき、我が主君は平静さを取り戻して、はなはだ気まぐれな冗談を発しました、『聖ゲオルクにかけて。トマスよ、そなたは私に敬虔な畏れを吹き込んでくれた。しかしもう仰天するような手品は結構だ。...いつものように、私の側に腰掛けてくれ。事務的仕事をしよう』。

国王は椅子に腰掛け、私は別の若干低い、しかし同様に豊かに飾られた椅子を宰相のために運びました。いつもの国王の側に腰掛けるときの椅子です。

しかしトマス殿は国王の前に恭しく離れたまま立ち止まっています。

『偉大なる陛下、時間をください、そしてご辛抱ください』と彼は言いました、『陛下の国の諸状況、諸権利を調べるために、私は生涯の半ばを費やしました。一陛下に任されました神聖な教会の諸々のことを、教会には長年構わずに、いや、敵対して来たというのに、どうして今日から明日という具合に知り得ることができましようか。それ故ご辛抱願います』。

『トマス、かいつまんで、かいつまんで言え』と国王は迫りました。『私がそなたを何故首座にしたか分かっておろう。つまり我らは一緒に宗教者の裁判権を取り上げて奪うまでだ』。

『私がおの気であることはお分かりでしょう』と司教は考えに耽って答えました、『しかし私の目にはこれらの権利、これらについてはあれこれ議論されていますが、様々な姿をし、形式を変え、永遠の正義のワインを純粋に保っているか、毒を入れているかの陶器の容器で、役に立ったり、役に立たなかつたりするように見えます。私は名手自身にどういうつもりだと質問をぶつける所存です』。

『トマス、誰に尋ねるつもりだ』と国王は笑いました。『聖なる三位一体か』。

『福音書です』とトマス殿は囁いた、『不正が見つからなかった主です』。

『そんなことは司教は言わんぞ』とヘンリー王は率直に怒って叫びました、『そんなことを言うのは単に邪悪な異教徒だ。いとも神聖な福音書は真珠の刺繍の祭壇毛氈の上がふさわしい。世の仕組み、諸事柄の現実とは何の関係もない。トマス、私の目を見ろ。そなたは私の敵となるつもりか。それともそなたは要らざる断食でそなたの精神の瑕疵のない明澄さを損なっているのか。要するに、宗教者の裁判権を私のために打ち壊すのだ。そのために、そのためにのみ、私はそなたをカンタベリーの立派な椅子に据えたのだ。一私は、坊主どもの破廉恥を見逃して、神々しい稲妻の裁判権を私と我が家に導くつもりではない。最近その上、一人のザクセン人僧侶が、説教壇で我が先祖、征服王の業績と名誉

とを反逆して貶し、また一人のノルマン人僧侶が一人の娘の無垢を穢したものだ』。

『陛下』と首座は答えました。彼の落ちくぼんだ頬が燃えました、『私は世俗の裁判所よりも厳しく我が僧侶達の犯罪を裁くつもりであると保証致します。...おぞましいことです。...この上なくおぞましい。...』、ここで彼は中断して、それから声を落とし、声の調子を変えて結びました。...『陛下の先祖と陛下への、 — キリスト教徒の国王達への反逆や反乱。 — これには私は神の意志を承知しています。 — しかし神は、神は修道院へ逃げ込んだザクセン人達を、その迫害者達、御身の貴公子達に引き渡すよう命じられるか、これには私は自問し、懐疑的です』。

このときヘンリー王は明確に、首座は国王に宗教者の裁判権を戻す気がないこと、国王に神聖な嘲りをなしていると悟ったのです。

『私は騙されたな』と国王は叫んで、その席から飛び上がりました。

この瞬間に城の中庭で待っているザクセン人達が、ひょっとしたら、首座に対する心配を吹き払うためでしょうか、新しい連祷を始めました。彼らは勝利を確信する『神ノ御旗が翻ル』[Vexilla Dei prodeunt]を歌いました。[Venatius Fortunatus 530頃-600、Vexilla Regis prodeunt,...]。

するとすでに苛立っていたヘンリー王が窓辺に突進し、下を覗きました、『トマスよ』と王は命じました、『そなたが引き連れて来た強盗どもに黙るよう命じよ。そなたの飢えた群れの吠え声は厭わしい』。

トマス殿は動きません、『一人の司教が、十字架の後に従うことを貧民や難民に禁じられましょうや』と彼は謙虚に尋ねました。

すると国王は憤怒で青白くなりました。『そなたは私に対しザクセン人を扇動しておるぞ。反逆だ。裏切り者』と王は叫び、首座に向かって一歩踏み出しました。その青い目の眼窩から涙がこぼれ、神経質な両手で空を掴んで、あたかも静かに自分の前に立っている首座を絞め殺したいかのようでした。

そのとこドアが開きました。エレオノール夫人が駆け込んで来て、涙ながらに首座の足許に身を投げました。

『私は罪深い女達の中で最も罪深い女です』と夫人は嗚咽しました。『御身のサンダルの塵を吸い取るのにも値しません、御身、聖人様』。

トマス殿は夫人に屈み込んで、穏やかな言葉で夫人を宥めました。

この光景で我が主君の乱れた心はまた落ち着きを取り戻しました。国王は司教の足許に横たわっていた女性を長い間眺めていました。それから国王は両肩をすくめて、一笑いし、背を向け、ホールを去りました。

第十章

かの日、一つの毒の矢がヘンリー王の心を傷付けました。最初その傷はただ小さくて、そのうち治るかのように見えました。しかし傷は深く化膿し続け、ますます痛く、肉を蝕みました。そして結局この一点からヘンリー王の全体が崩され、その国王としての命が破壊されました。

確かに腐敗が素早く広がることはなく、我が国王の強靱な喜ばしい性情はそれに抵抗し

ました。仕事が立ち込み、生活の挑戦、展開が続き、国王はその恨みを堪え、忘れることもありました。しかし夜になると国王は眠り込んだと思うとすぐに不穏な夢を見て、目覚め、臥所から飛び起き、そして寝室の中を休みなくあちこち歩き回りながら、国王の許に夜間の幽霊となって現れ、国王の心を乱す者であるこの忘恩の寵児を相手に、あるときは侮辱を感じて脅すように、あるときはまた愛想良く優しい言葉で話します。国王は首座に、忘恩のすべての例を、聖書の話しや世間の話しから集めて提示し、そして首座の忘恩が最大のものと証します。我が国王の苦悩を描ける人間の口はありません。トマス殿は居合わせようと居合わせまいと、同じように国王を苦しめます。

首座が実際に静かに耐え忍ぶ者として国王の前に立っていますと、国王はこの憐れむべき眺めに憤然とします。トマス殿が国王の視界から離れて、司教の住まいに安んじていますと、ヘンリー王はそれだけ一層心が乱れて、それで今や国王の最も信頼篤かった者が、国王のことを他の誰にもまして知っている以前の国王助言の精華であった者が、自分から離れ、別れて、超人的に鋭い賢明さを国王に敵対して向けていると怒り、嘆きます。

それでも首座は和解的な言葉遣いや、臣従した対応を欠かしません。それで国王は向かって行き、素早く、条件付きで差し出された手を握ります。するとすぐに、勝ち誇って握り締める相手に驚いた首座が、冷たく引き下がります。そのように我が国王は、以前の宰相を、この細い、しなやかなウナギを捕まえたと思っても、雲を抱擁した思いになったことでしょう。

しかし首座がこの論争の点について真の現実的告白をしようと思っても、それは許されなかったのです。ウィンザーへ旅する途中、一人の浮世離れした隠者と出会ったりします。この僧は丁度自分の洞窟から出て来る定めで、過度に誠実な司教[首座]に、神と貧民の、神の子らの権利を世俗の侯爵[国王]に譲ってはならないと説得するのです。あるいは国王の敷居への数歩前の所で、拳に十字架を握った夢想的な僧侶が首座の道を塞いで、陶醉した言葉で、この謙虚な首座にカンタベリーへ戻るよう追い返すのです。

貴方は真実を知りたいでしょうか。

イギリスの国王の権力と慈悲深い教会の権利とを等分に思いやって保証するような仲介的な文言は、思いますにすでに存在していて、宰相の知恵が発明していたことでしょう。確かに国王は非人間的な人柄ではなく、トマスはカッとなる狂信者ではなかったのですから。しかし二人の殿方の心はもはや離反していました。二人が互いに最後の歩み寄りをしようと思っても、その消えた愛という亡霊が二人の間に青ざめた敵意となって生じていました。

それから忘れてならないことは、エレオノール夫人が今や憤り深い妻となって我が主君から離れず、夫人の改心以来[史実ではない]、日夜、神の聖人を侮辱しないよう国王の耳に説くようになったのです。それで国王は立腹し、頑なになりました。

同様に宮廷の慣例で、狩り立てられ、悪口が囁かれ、熾火が入れられ、火が煽られます。ノルマン人の貴族全体が、征服した領地からの逃散隷属民達に修道院という難攻の避難所を開放したこの浄福の反逆者に憎しみと嫌悪を放ちます。日々刻々と国王に報告されます。いかにこの司教はザクセン人の民の許で太り、大きくなって行くか、いかにその偽善者の両手を広げて、いつでもどこでも祝福し援助していることか、と。首座は魂を秘かに育てる敬虔な反乱で国を掘り崩しています。これは武器で打倒できず、公然たる肉体的な反乱

よりも危険なものです、と。

このような邪推が国王に囁かれますと、苛立った国王は、寵愛の猟犬に一蹴り入れたり、私をも無愛想に扱います。特に私が国王に、首座はその寛大な右手で振る舞ったものを、左手で不安げに取り戻しましたというかの微妙な書状の一つを渡した場合がそうです。

すると多分に、主君は惑わしの文書を呪って、拳の中で握りつぶして、狩猟のラッパを吹かせます。自分の不機嫌を野外の荒地で晴らすためです。しかしそうできません。国王に鹿が狩り立てられて、私が国王に石弩を渡しますと、国王は不安げな鹿の代わりに、その狩り立て人を眺めて、苦しそうに呻きます、『細首のトマスよ、用心しろ』。そして鹿の心臓を突き刺します。

ようやくヘンリー王は決心されて、首座をその貴公子達の一つの裁判へ出頭させ、反逆罪の判決を下し、永久に自分の国から追放しました。しかしその同じ日、トマス殿が犯罪人のように海を渡って逃亡しなければならない日に、エレオノール夫人が夫から離れて、遠くまで聞こえる嘆き声を発しながらウィンザー城を去ったのです。

今や我が主君の国王の耳に、日夜、海を渡って、トマス殿が何を始めているか、届き始めました。

最初こう噂されました。カペー王朝は、首座を向こう岸で畏敬の念を持って出迎え、その祝福を請いました。首座にこう確約されました。カペー王朝は、キリスト教徒の侯爵として、まことに生涯、一人の僧侶を侮辱したことはないし、ましてや司教を侮辱したことはない、と。

これはルイ王[ルイ七世1120-1180]のことです。人々は若王と呼んでいました。彼は髭もない少年のときに王位に就いたからです。この名前はこの王に付いてまわります。この国王は丈夫な男性に達しなかったからです。エレオノール夫人も、彼が夫人を王妃として迎えたとき、夫人は若さを持て余し、血が騒ぎ、辛辣に嘆いたものです。自分は聖なる僧侶と結婚させられた、と。

この国王は聖職者の生来の友で、キリスト教徒の師父に黄金の小銭を添えて、聖なる首座の件ではヘンリー王に敵対してお味方すると誓いました。ヘンリー王はこの国王とこの国王の家の不倶戴天の敵であり、ヘンリー王を世俗の戦いで負かすよりも教会の武器で負かすのがより効果的と期待していたのです。

当時教皇は天秤を入念な手に持っていて、その恩寵を、添えられた黄金の重みによって沈んだ天秤皿の片方へ熱心にその分だけ考慮されていました。

この教皇の知恵は、我が国王にとってその当時有り難いものではなかったのです。アイerlandの戦争で莫大な金を使っていて、国王にとってキリスト教徒の父に対して残っている金は以前より少なかったのです。

それでも教皇はトマス殿に対する遠慮ない肩入れを躊躇っていました。教皇は首座に全き信頼を寄せることができず、その心の中で、追放された司教と以前の宰相とを区別できなかったのです。教皇は首座のことを何度もしたたかな政治家として経験して来ましたが、首座がこの際自分の手管を使わず、最初の教会の偉大な使徒のように、あるいは最近の時代の陶酔的な異端のように迫害を受けていることが疑わしいことに思っていました。

これは信頼できる証人の証言があることで、トマス殿を存じている私は本当のことと思っているのですが、首座は自分の件を神聖に考え、自分の両手を主君の国王に対するどのように裏切りにも染めず、教皇に更に要求することもせず、カペー王朝に対しては、自分の頭を休ませる修道院の房だけを望まれていたのです。

このようにして首座は、教皇からは見棄てられ、カペー王朝の宮廷を避け、修道院から修道院へと困窮の遍歴の杖を頼りに旅し、しばしばその消息を絶ちました。このようにしてフランスで首座の生身が減少し、消えて行く間に、イギリスでは首座の威力、精神的現存が募り、悲しむザクセン人達の上に夜の満月のように昇ることになりました。あるいは貴方の好みに合わせますと、トマス殿は馬小屋の幼子イエスのように、卑しく、華麗に、すべてのイギリスの小屋や心の中に住むことになったのです。首座はそこで国王として君臨し、心の怖れを追い払ったのです。

この私の目で直接見たのですが、ザクセン人達は、いや、それ以上にザクセン人の妻達は、今やヘンリー王が首座を裁いたので、国王陛下に畏敬と膝屈みの礼を捧げることを拒み、国王が馬で通りかかると、そっぽを向くようになりました。未だにその一片を覚えています。或る日我が国王がその庭園を散策していました。そこは森や川に接し、野外と通じています。私は習慣で離れて王の後を追っていました。すると花と咲く茂みからブロンド髪の子供が這い出て来て、国王の足の間に挟まりました。この日上機嫌の主君は、この少年を抱き上げ、愛撫し、その小さな手に銀貨を一枚握らせました。『我が少年よ、しっかり持て』と国王は言いました。すると母親が飛び出て来ました。母親は最初、畏敬の念に駆られ、震えて、木の幹の背後に隠れていたのですが、目を燃やして、子供から貨幣を奪い、あなたも呪わしい三十枚の銀貨[ユダがイエスを売って得た]の一枚であるかのように、驚いて、藪の中に投げ棄てました。私は駆け寄って、子供を抱き締めて逃げるこの生意気な母親を捕らえようと思いました。しかしヘンリー王は言いました。『ハンスよ、逃がしておけ』。そして国王は見るからに気分を害して、先へと歩いて行きました。溜め息を吐き、物思いに耽っていました。

我が国王は、いかにしてトマス殿の首座としての権威を、合法的に、永久に剥奪するか、日夜、寝ても覚めても考えていました。この権威があればこそ、ザクセン人達は崇拝しているのだと、国王は思い込んでいました。この件に関して、額に拳を押し当てて、思索し続けている国王の姿をしばしば私は目にしました。ある朝、国王はその寝室から顔を輝かせて出て来ました。謎を解いたと思ったのです。

それは我らの主の昇天日でした。ヘンリー王はその貴族達一同の前に進み出て、こう紹介しました。自分の広く繁栄した領国は、第二の頭目を必要としている。自分は、王冠を長男と共有して、重荷と憂慮とを軽減する意向である、と。

殿方らは彼らの熟慮や意図が良きものであれ、悪しきものであれ、ヘンリー王子が父親と一緒に王位に就くことに同意しました。そしてノルマン人のヨークの司教がこの長男を戴冠させ、聖別しました。その後、この慶事にふさわしい祝宴が続き、そして私が一年前ここで、貴方の同胞の方々、司教座聖堂参事会員達に紹介し、本当のことだと請け合いましたように、我が主君はこの若い国王ヘンリーの食事の給仕をし、若君に自らの手で料理を取り分けたのです。『今日[1170年六月4日]、私は重い責務から解放された』と国王は叫び、喜びの涙を流しました。

旦那様、この件の策略が明瞭ですか。我が国王はいかなる重荷を投げ棄てる考えであったか、分かりますか。

頭を振っておられます。よろしい、ここにその鍵があります。偉大なる特権、カンタベリーの司教帽の比類ない宝石とは、イギリス国王の戴冠式だったのです。戴冠式を別の司教が仕切ることで、首座の権威は破壊され、トマス殿は引きずり落とされます。そのように我が国王は計算して、自惚れの強い若ヘンリーを自分の横の王座に押し上げるという手段を取ったのです。国王はこう思っていたのです。自分の長男は、自分の頭上の微光を発する小王冠を鏡の中で眺め、その小王冠を衣装や馬の掛布に刺繍させることで満足するであろう、と。

この計画は、今や世間の奸智によって亡き者にされた宰相のかつての助言同様に、巧妙で、政治的上策ではなかろうか。

しかしこれは、ヘンリー王にとってこれほどひどいものは考えられない、悪魔の発案でした。

数週間後にそのことは明らかになりました。災難の知らせは同じ日にウィンザーに届きました。

その一報はこう語っていました。ヘンリー若王は、気まぐれなジェフリー卿と一緒に連れて、比武を行うという口実でパリへ騎行されました。しかし実際は、海峡の向こう側にあるノルマン人達の領土の諸国をカペー王朝から、不必要な上に屈辱的なことに、封土として拝領するためでした、と。

もう一報はこうでした。消息不明のトマス殿が聖霊降臨祭に或るフランスの町に現れ、鐘の音が轟く中、大聖堂の中央祭壇の燃える蠟燭を口からの息で吹き消し、カンタベリー大司教の権利に手を出したヨークの司教を破門にしました、と。

老国王は、この面白くない名前を我が主君は、息子の戴冠式以来甘受せざるを得なかったのですが、この二つの知らせを受け取ると、一人の狂人の発作に見舞われました。国王は荒れ、自分の下僕達の前で服を脱ぎ、呻いて臥所に身を投げ、絹の掛け布団を引き裂き、歯でクッションのウールを切り裂き、絶望した拳で胸を打ち叩きました。

『ならず者の吸血鬼を我が心から離してくれ』と国王は喚きました。口から泡を飛ばして、トマス殿のことを言っていました、『奴が私の身も心も砕いてしまう』。

ブルクハルト氏はこの噺を不快に聞いていた。というのは彼は[神聖ローマ]帝国に忠実な[ドイツ]皇帝党员[反教皇主義者]であって、それ故他の国民の諍い事でも王侯派の男であったからである。

彼は頑なな石弩屋に一つ諷して、自分の不快を表明した、「同じ日にヨブの悲報が二回か、...ハンスよ、夢を見とろう。一 その間には丸一年あろう。私の年代記の縁に記載されている数字に間違いがなければ、...」。

「詰まらぬ数字で私を煩わさないでください」と石弩屋は不満を述べた、「それは異なります」と彼は、自分の無愛想な言い方に気付いて、穏やかに言い添えた、「ある人がまだ存命であり、その時は働いていたか、あるいはすでに死んでその生涯の本が閉ざされて

いるかは。一度その最後の砂粒が尽きてしまえば、その人間は日々の時間の流れから出て行き、完成した明確な人物として神や人間の裁きの前に立ちます。貴方の年代記も、私の記憶も、両方とも共に正しく、また不正です。年代記はその羊皮紙に記載された文字に従い、私は我が心に刻まれた印に従います。

しかし遮らないでください。親愛なる旦那様、私は終えたいのです。と申しますのは、私は眼前に血まみれの亡くなった頭と、それに我が国王の鞭打たれた背中を見ているからです。

第十一章

我が主君にして国王がその盲目の憤怒で、自らの品位を損ない、下僕達の前で恥ずかしい振る舞いをした日の夕方、私は悄然と一人っきりで、厩舎の側の小さな壁の上に座っていました。我が主君に対する恥ずかしい悲しい思いで一杯になっていました。そのとき私は不意に、肩に一叩き受けて、馬を見に来たりチャード卿が、下僕相手によくそうするよう、気さくに私の壁のすぐ横に飛び上がって馬乗りになりました。

『ハンスよ』と彼は端的に言いました、『そなたの目も見ていたろう、何と無意味に騎士らしくなく、父上は今日振る舞ったことか。今日の日は、永遠に闇の中に消えて欲しいものだ。...我を忘れた獣だ、...情けなく恥ずかしい、...』。二粒の子供らしい怒りの涙がその頬に流れました。 — 『しかし反抗者、ヘンリーとジェフリーがこのようなことを目にしなかったのは、まだまだ。奴等はこの惨めな父上をフランスの宮廷と他のすべての王座で、一人の狂人、不能者として触れ回すことだろう、自分の国も自分の感情も抑え、治めることができない者だと。このままであれ、あるいは父上がもっとひどいことになると、父上の頭から冠を奪い、私の遺産分をもせしめることは、兄者達にはいとも容易なことだろう。しかし神の御目にかけて』と彼は誓いました、『そんなことはさせない...』

『リチャード卿、落ち着かれよ』と私は彼を遮りました、『病気の父上を見放さないことです。貴方が確実に遺産を受け継ごうと思うなら、神の約束を信頼なさることです。神は父親と母親を敬う者に長寿とその国の所有を約束しています』。

『我が事に関してのみ、物事は決着する必要はない』とリチャード卿は言いました、『私は三男だ、誓って、私は一つの領国を自分の拳で捕まえる方が、征服王の国を引き継ぐことよりも面白い。しかし、...』と彼は両足で跳び、手を天に振り上げました、『私はノルマン人征服王の国を見殺しにしない。その血が私の血管に流れている限り。海の向こう側とこちら側でこの国は統一されたまま、世界を治めるべきだ』。

彼は高く立派に私の前に立っていて、その輝かしいお姿を私は目から外せなかったものです。しかし彼は私の方を向いて、性急に述べました、『ハンスよ、いつ始まったのだ。いつからそんなに悪化したのだ、父上は英知と、つまりトマス殿と不和になった時を教えてください。 — 私に異を称えないでくれ。 — 私は覆面をして、海を渡り、首座が断食して祈っている修道院へ行きたい[父と首座を和解させるリチャードの試みは作者の虚構]。首座は私を可愛がってくれ、今のこの時まで、まだ彼の人の柄の一筋でも僧侶に化けきっていないのであれば、私のことを愛していよう。 — 私を諦めさせようとしなないでくれ。 —

私は彼の膝を抱き締めに行きたい。私は懇願し、嘆願したいのだ。 — 国王の息子と

してではない、ただの人間相手のつもりでもない、...私はこの二人を互いに引き合わせて、和解させないでは、ゆっくり休めない。首座にはまた父上の宰相になって貰う必要がある。ただ首座の偉大な唯一の英知のみが、この混乱を取めることができよう』。 ー

私はリチャード卿がとても変装好きで、冒険を求めて騎行していることを知っていました。しかし今回はその血筋よりも、敬虔な子供らしい苦しみで駆り立てられていました。

私はこの実直な腕白に、いかに容易にしくじった和解がより鋭い敵意へと変貌するか説きました。それから躊躇わず、彼と私用に目立たぬ衣装を用意して、喜んで彼の旅路に付いて行くことにしました。というのは彼の楽天的な確信に、経験を積んでいた私も眩惑されたからです。

我が国王に私は暇乞いをしないままでした。私は国王の恥辱の証人となっていましたので、私の姿を数日見ないで済むことを国王自身許されることだろうと思っていました。

私どもは二人の貧しいドイツ人騎乗者で、兵役と俸給を求めている者どもの振りをしてフランスを旅しました。繕った外套からでも、リチャード卿の若さと高貴さは輝き出ましたので、私は一切の疑惑を逸らすために、すっかり我が宮廷作法を棄てて、宿や軍用道路では粗野な呪いや誓いを、自分の母語のドイツ語方言で発しました。それに私どもは夜間騎乗して、日中休みました。

するとリチャード卿がある宿の遠く離れた寝室で眠っているとき、ある男と出会いました。暗い力で人心を操作する術を得た男で、鋭い剣と、それ以上に鋭い舌を使い、どこにいようと行こうと、諍いの天使のように生来の絆を断ち切り、和平を殺してしまう男です。獅子の心臓王[リチャード卿]も後にこの男を知ることになりますが、しかしかの日には卿はまだこの男に会わずに済みました。

私は酒場で軽食を前に座っていました。すると舗石の通路で馬の足音と、やって来る武装の一団の騒音を耳にしました。五、六人の高価な服を着た、槍試合の武具を備えた騎士が入って来て、上等の飲み物を至急求めました。

それは敏捷な肢体、燃える目、流暢な喋りの南フランス人で、私はすぐに分かったのですが、有名な町パリでの槍試合から、喧嘩が勃発したせいで、逃げるようにそこを後にした連中でした。

彼らは薪を火に投げ入れさせ、燃える竈の周りに冗談や当てこすりを言いながら腰掛けていました。言葉があちこち飛び交いました。青年達の一方は、パリの女性達を、アルルやタラスコンの美人達と比較してこき下ろし、他の者達は、彼らの祝典を台無しにし、短いものにした喧嘩のことでまた熱くなっていました。

誰がこの喧嘩を仕掛けたのか、これについては私は確信がありました。今まさに彼がまた自分の席から彼らの中央に飛び込んで来ました。燃える眼差しで、髪をなびかせ、会話の主導権を握っていました。

『まことに、私が足を踏み入れる所では、どこでも大地から炎が燃え上がっている』と彼は彼らに叫びかけました、『高く、気前よく、諸君の炎のように、窒息させる炎ではない。諸君は奴等を内心憎んでおろう。諸君、プロヴァンス人よ、アキテーヌ人よ、太陽の子らよ、北方からの甲冑を付けた肢体と強張った身振りのこの連中を、支配者然とした言

葉と物欲しげな目をしたこの郎党を。しかし諸君は感じておろう、いかに奴等が諸君を羨んでいるか、諸君、恵まれた者達よ、諸君のオリーブオイルとワインの滴る丘を、諸君の古いローマ時代からの町の独立不羈を、大地の商品と思想が交換される幸せな港を、海と空を、諸君の完全なる妻達を、諸君のこの上なく甘美な言葉を。諸君は感じておろう、奴等は諸君を太陽の国から追い出し、害虫のように踏み潰すつもりだ、と。

そのようになろう。というのは、地球の民は互いに殲滅し合い、憎しみは世界の全能の王だからだ。しかし諸君は邪魔されたくなからう。 — それで諸君はねぐらを作り、自己錯覚の国で休み、冗談を言っているがいい。諸君、ソネット作りの詩人どもよ。愛するがいい、諸君が愛して、そこに憎しみを見つけ出すまで。

しかし私を怒らせてくれ。真実の物事に対する見せかけについて怒らせてくれ。憎しみ万歳だ。地球のこの輝かしい息吹よ。この心を見給え。憎しみの華麗な炎の器だ。憎もうと思う者は、このベルトラム・ドゥ・ボルン[1140頃-1215, Troubadour]の燃える心の許まで巡礼に來い。この祭壇の前で志操が打ち明けられ、諸々の手が剣を握るのだ』。

そして彼は黄金と深紅で刺繍された燃える心臓を示した。それは彼の黒く、窮屈に締められている胴着の左側に飾られていた。

『ベルトラム殿、貴殿の胴着のそのハートを私は別な風に解釈していた』と若造が内気に嘲った。彼は董色の青を — 多分自分のレディーの色を、 — これ見よがしに着ていた。『貴殿も愛して女達には目がないだろう、それもただ王妃達だけだとしても。この前も貴殿は海を渡って、昔の情熱の許へ、王妃エレオノールの許へ行った。ヘンリー国王の貞淑な妻に対し貴殿が黄昏の時に歌った戦争の歌を我々に歌ってくれ』。

『そんなのは歌えないし、話せない』とこの野蛮人は嘲った、『私は二言、夫人に囁いて、別な二言をヘンリー若王に囁いた。種は蒔かれた、後は血の収穫が始まろう。

ルシフェル[悪魔]の翼にかけて、私はヘンリー国王とその息子達を一匹の竜の爪の中に投げ込むぞ。これは司祭のラオコーンとその子供達を押し潰した竜[大蛇]よりも毒のあるものだ』。

私は視線をこの男から逸らすことができません。この男は今や — ぞっとすることに、 — 私どもが目指している修道院のある方向を向いて、両腕を広げて、遠くへ挨拶を送っていました。

訝しく思う必要はありません。彼が眼前に誰を見ているか、分かりました。

『向こうでは、私よりももっと激しく憎んでいる者が祈っている』と彼は叫びました、... 『御同輩、御挨拶を申し上げる』。

そして彼は自分の目が眺めている遠方の男に向けて、厳かに、一杯に満たした杯を献杯して飲みました。

『汝、静かな、ゆっくりと墓穴を掘る男よ。汝は汝の主と同様に耐え、主と同様に自らを殺そうとしている。汝は愛に奉仕しようと思うが、しかし憎しみはもっと強く、汝の死は、汝の神の死と同様に、人類の劫罰だ。

司教よ、こう賭けよう。我々二人のどちらがイギリスのヘンリー国王を最も深く地獄の底に落とすか、だ。地獄に私はこの王を見いだそう。そして私は王の喉に膝を押し当て、勝利の歌を歌って、地獄のその圏を広げてやろう。劫罰を受けた者が、巨人に育って、その上にあつたものが空無となって消えるまでにしよう』。

優しいペリカンが我々皆には、愛と思いやり故に胸を開かないかのような[母ペリカンは胸を傷付け血を流して子を育てるとされる]、この残忍な災いの言葉を聞いて、私の髪は逆立ちました。一方この異端の冗談に慣れたプロヴァンスの殿方らは、それを大して気に留めなかったのですが、しかしこのベルトラム殿の共同憎悪者は誰なのか、そのことを探ろうとしていました。

それから会話は奇妙な予兆のことに飛びました。最近アルルの人々の心胆を寒からしめたものです。当地の古代ローマの広場で、大理石の、目の痛んだ少女の頭部が現れ、口許には死の辛さが浮かんでいたそうです。その編まれた巻き毛をよく見てみると、それらは舌を出しているマムシだったそうです。この悲しい頭部は日の当たる自分達の国々の来るべき大きな没落を意味していようと彼らは言っていました。

こうした将来の悲惨さと、我が国王の現在の悲惨さを思い、私の心は重くなって、思わず私は大きな溜め息を吐きました。それまで私のことを気に留めていなかったこの殿方らが、今や私の方を珍しげに見つめました。そこで私は私の杯から起き上がり、重たい騎乗者の足取りで、また実直にシュヴァーベン訛りの『今日は[神様の挨拶があれかし]』を述べて通り過ぎました。彼らは丁重な人々として躊躇わず、可愛く頭を頷かせました。しかし私が上の階から、リチャード卿を起こしに行ったその階から、彼らの方を振り向きますと、彼らは来た時と同様、迅速に馬に飛び乗って、嵐のように去って行きましたが、丁度そのときまだこの放埒な者、彼らの首謀者は、私のシュヴァーベン訛りの溜め息に無遠慮な嘲りを述べていて、その殿方らは、鋭いフランス人風哄笑を甲高く発しながら、騎乗して行きました。

躰正しいブルクハルト氏はこの異邦人の悪態に対し、何度か内心で十字を切った。今や彼は憂わしげに述べた、「ハンスよ、この話しの硫黄の臭いから、そなたは容易に分かるう、そのフランス人の酒場でそなたと一緒に座っていた者は誰かと。かの旅の男に取り憑いて、この男を夢中にさせていた者は、疑いを得ない。悪魔に他ならない、最初から反乱者、殺害者でしかない。

だから彼もトマス殿の殉教死を予知していたのだ。同じように、案じられることだが、この不気味な男が予言した、かの南の国々の荒廃の怖れも、現実のものとなるかもしれない。これはまた発掘された恐怖の女像も暗示していることであろう。

かの海岸には、あらゆる迷妄の異教徒、殊に頑固なマニ教徒[カタリ派]が蝟集していると言われている。私は平和を愛し、人間に対して優しく、喜んで軽い罪を許すものだ。しかしここでは恩赦は非難されよう。それで私は、まことに、聖職者や世俗の紳士と一緒にあって、こくした頑固者達をキリスト教界の中心から引きずり出して、この地がこうした人々を排除しても、遺憾なことに思わないだろう。

しかしもっと良いのは、こうした悲しい事柄に拘泥しないことだ。ハンスよ、リチャード卿の旅で何か恵みがあったか、語ってくれ。彼はそなたのイギリス人達の中で、唯一私の魂が好意を抱ける者だ」。

「私の馬をこの獅子の心臓[リチャード卿]の素早い、河原毛馬の側に付けるのはほとんど出来ないほどでした」と石弩屋は喜んで続けた、「というのはトマス殿への彼の憧れが刻

々と募って、姿の見えない修道院のその塔が、澄んだ青い秋の空に大きくなって、修道院を包んでいる石壁が天上の町のように微光を放つと、彼の憧れはもはやほとんど抑えられなくなったからです。

私は我が獅子の心臓と彼の感情の激しさを知っていますので、この卿に、私を彼より先に馬で行かせ、その機会を探らせるよう頼みました。このことを卿も、渋々、叱りながらも、結局認めました。

門番の同志は、私の誓願を不審を抱かずに聞き入れ、私がトマス殿の名前を呼びますと、とても畏怖した身振りになり、敬虔な顔になりましたので、私は多分こうだと察することになりました。つまり宰相はここでは声望が高く、聖人と評価されている、と。門番は私に言いました、首座は教会にいらっしゃる、自分は首座の敬虔な祈りの邪魔をしたくない、それにそれは罰当たりなことでありましょう、と。

しかしこの僧侶は私に、カンタベリーの司教の宮殿から追放された人物の何もない房を見せました。そこにあるのは荒石で、それに首座は微睡みながら頭を置く習慣でした。この固い枕に私は驚きました。と申しますのは、いかに宰相が敏感な生まれで、華奢な肢体であるか知っていたからです。しかし結局、このままでは済まず、それにこの神聖な人物の敬虔な祈りは終わることがなかったので、門番は、祈っている宰相の目に触れないよう静かに沈思して振る舞うよう約束させて、私を教会の内部に入らせました。かくて私は注意深く柱の間に入って行き、やがてトマス殿に気付きました。彼は高い背もたれの内陣席に立っていて、祈るというよりもむしろ瞑想していました。私はこの瞠目すべき殿方を何年間も目にしていなかったもので、その顔の不自然な痩せ具合と深く痛々しい目とにびっくりしました。視線は外部よりもむしろ内部に向けられているように見えました。

私は中央祭壇の影の中、階段の上で跪き、トマス殿を目から離さずに、至高のものを拝跪しました。彼が私のことに気付いたか否か、私には分かりません。彼の方では一切動きがなかったからです。

しかし私が十分間を置いて、ゆっくりと拝跪から起き上がりますと、宰相は、私の方を見つめることなく、あるいは表情一つ変えず、私に質問をしました、『我が主君の国王はどのようなご様子か』と。一 以前宰相がウィンザーの、国王の寝室の敷居前で私に出会ったとき、尋ねる習慣であった調子と全く同じでした。そこで私の目から熱い涙が溢れました。

しかし彼はこっそりと階段を下りて来て、手で自分の後に付いて来るよう合図して、私より先に修道院の庭園へ漂うように出て行きました。楽しげな緑の四角の地で、花咲く薔薇の茂みがあり、最新の建築様式の技法豊かな回廊の中心にありました。外部ではすでに落葉していましたが、僧侶達の手入れの行き届いたこの緑の空間では、まだ自然の凋落死滅の影響は見受けられません。

首座は豊かな灌木林の間、石造りベンチに腰掛けて、自分の質問を繰り返しました、『我が主君の国王の具合はいかがです』。

『トマス殿』と私は言いました、『国王は人間皆の運命にありまして、更に憐れむべきものです。国王はもはや見分けがつかえません。貴方がご覧になれば、気の毒に思えましょう。断腸の思いになられましょう』。それから私は、首座に、動揺した言葉で、以前はとも威厳のあった侯爵[国王]の零落と取り乱しについて語りました。

首座は私に長く話しをさせたかったことでしょう。

旦那様、首座は、他人の不幸を喜ぶ気持ちは微塵もなく、同情を露わにするのでもなく、また余所余所しく、無関心でもなく、多分に、自分が長いこと予想していて、精神の中では覚悟していた不幸が勃発したことを聞いている按配でした。

かくて首座は黙しました。しかし私は首座の心は軟化したと私には思われました。それで私は敢えて、こう叫びました、『トマス殿、貴方は聖人です、そして苦行されたキリスト教徒です。貴方が、ヘンリー王から蒙った罰当たりなことを、王に対して許されますならば、...今日のうちにも良い結末となりましょう』。

しかし首座は黙っていました。

『国王を許してください』と私はまた叫びました、『グレイス[王の恩寵]が消えたことにつきまして』。

するとトマス殿は頭を垂れて、謎めいた返事をしました、『大事なグレイス[神の恩寵]が消えたのであれば、よくない、一 そんなことはあってならないだろう』。

この瞬間私どもは僧侶達の嘆いて叱る声を耳にしました。門番を不意に襲って、回廊に侵入した若い騎手の両腕を彼らは押さえていました。それはリチャード卿でした。変装して待機していることに、この獅子の心臓は飽きたのかもしれませんが。

僧侶達を振り解きながら、彼は首座の足許に飛び込んで叫びました、『我が父上、我が父上、彼らは私を父上の許へ行かせてくれません』。

首座はしばらく彼を黙って眺めていました。それから首座は穏やかな手で、額の汗で濡れて混乱したブロンドの髪を撫でて、母親のように滑らかにしていました。

獅子の心臓[リチャード]に対するこの優しい愛の徴を見て、私は私どもの取引が成功したと思い、私は回廊のドームの下におとなしく引き下がり、お二人をその天使や守護聖人に任せました。

私は一束の上品な大理石の棒で分割された窓の開口部のアーチの下、幅広の石のプレートに腰を下ろして、向こうの緑の庭の二人の殿方の方に時々偵察の視線を送っていました。この回廊は彫刻が一杯で、申しましたように、最新の趣味で建てられています。その柱には様々な蛇腹が飾られていて、列が変わる度に、それぞれ天上界や地獄界からの生き物が座っていて、こちらでは賛美歌を歌う天使がいるかと思うと、向こうでは奇形児が滑稽に笑っていたり、意地悪げに笑っていたりします。私はこの飾りにはほとんど注意を向けなかった。と申しますのは、私の目は再三、修道院庭園の石造りのベンチに引きつけられたからです。

王子は宰相の膝を抱えています。宰相は単に穏やかに抗っているように見え、そしてとうとうリチャード卿は頬を輝かせて、最後の依頼を述べて、更に懇ろに首座の膝を抱きました。このときトマス殿は、悲しげな顔をして脇を向きましたが、しかし王子は首座から離れず、とうとう宰相は折れました。私はこの青年がその父親の心を得ようと努めて、接吻[baiser]の言葉を再三叫ぶのを耳にしました。そしてこれは首座が国王との次の会談を聖別し、会談を始めると約束するはずの教会との和平の接吻のことだと察しました。

十分しばらく経ってから、二人の殿方は、苦行の司教の左手に花と咲く青年が立って、手に手を取って、私の側、回廊の中を歩み、その回廊のまだ内部で、別れました。私も従

いました。ー リチャード卿は宰相の青白い手に身を屈め、その手を子供らしい感謝の涙で濡らしました。私の心も、我が国王のまことに哀れな苦しみが終わるので、歓声を上げました。そのとき、私は嫌なことに、二人の頭上に、石像の小さな怪物を目にしました。それはある柱の飾り迫持にうづくまっついて、蛙足で嘲笑的に二人に飛びかかり、その上舌を出していました。これは偶然でしたが、私の気に入らなかった。私はむしろこの二人の殿方が次の柱の許で別れるのを目にしたかったと思いました。そこではハーブを弾いている天使がその白鳥の翼を広げていました。

リチャード卿は、それから私を大至急、その父親、国王の許へ書状と共に派遣しました。その書状で卿は父親に、神の聖痕にかけ、王自身の安寧のため、息子の依頼を受け入れて、首座との会談を急ぐよう懇請していました。

ヘンリー王はこの手紙によって、司教が神聖な和平の接吻を約束していることを知ると、もはや自分の城にじっとしておれず、騎士達を騎乗させ、下僕達を叱りながら、数時間後に私どもは大急ぎで出発することになりました。ー それほどに国王は唇の接吻を望まれていて、国王の思いでは、その接吻があれば、長年の苦悩が静まり、自分の人生に平和が訪れるはずでした。

二人の殿方が出会ったのは、灰色の空の日、陰気な荒野でした。わずかな僧侶達を伴に現れたトマス殿は、馬から下りるのに難儀されていました。首座は姿が細くなっていて、よろめき、風や日にさらされ、枯悴した葦のようでした。国王は駆け寄り、首座の鎧を支えました。しかしすでにその僧侶達が首座を腕に抱いていました。首座は恭しく我が主君の前に立っていました。疲れた男となっていました。深い眼窩から目が覗いていて、首座が第一声を放つと、その声は震えて響きました。『恵み深い御主君、他の者達を退かせてください。内密に話すことに致しましょう』。首座は僧侶達に合図して去らせ、国王も急いで従い、その騎士達を退かせました。和平の接吻に憧れていたからです。しかし私は二頭の馬の手綱を握って、二人の殿方から少し離れて、馬と一緒にいました。一方他の者達、僧侶達や騎士達は、多分弓の一射程距離分、二方面に退いていました。

ヘンリー王は今やもはや抑えることができません。国王は口を尖らせて、そのやつれて、浮腫んだ顔を、宰相の苦行した神聖な頭部に近付けました。我が国王の顔は醜く、反撥を覚えるもので、しかし感動し憧れた風で、あたかも神々しい体の享受を求めているようでした。

旦那様、このとき何が起きたか、宰相の内部で何があったか、誰が言えましょう。

つまり、この醜さと欲望の一体化を見て、首座は娘グレイスの殺害を思い出したのです。首座は反吐を覚えて、国王から自分の唇を引き、間近な頭部を慄然として眺めました。あたかもすべての抑圧と陵辱行為の権化を目にしている按配でした。

しかし国王は盲目に憧れていて、宰相の両腕を握り、その口を求めました。しかし宰相はびっくりした叫び声を上げて、国王を突き放しました。

首座が約束にもかかわらず、和平を国王に認めようとしないとヘンリー王は気づき、痛々しくまた怒っていますと、突然国王の気持ちが硬化して、絶望し、こう言葉を発しました、『トマス、そなたはどうしたのだ。何故私の心を苦しめるのだ』。

しかし宰相はまた自分の意志を取り戻して、気丈になりました。宰相は平静に気高く答えました、『御主君、陛下は長いこと私の性情のこと、つまり私はより偉大な方の足跡に従わざるを得ないにご存じます。私が現に所属し、その跡を行こうと努めているナザレ人[イエス]は、陛下の汚れた唇に触れることをなさるか確信が持てないのです。イエスは裏切り者ユダに接吻をしました。ユダは、イエス、つまり無垢であり、愛そのものである人を売って、死へと引き渡した人間です。しかしイエスは、自分の娘の魂を毒し、その無垢の体を汚した者の口に接吻したであろうかとなりますと、私は疑わざるを得ません。イエスは教会の教えでは同時に一人の神でありますので、イエスは自分の子羊に対する殺害には、重く、完全な贖罪なしには許さないことでしょう。イエスは自分自身を、つまり御自身の本性であります正義を壊してはならないからです。それに対し、私は、一人の人間であり、それも異教徒の出身で、見かけほどには寛容でなく、こんな私の場合、自分の主でさえ難しいことでありましょうのに、簡単にできることでしょうか。しかし、それはなされるべきでしょう。しかし身代金が必要です。一人に対し幾人もの引き換えです。国王陛下、気を確かに持たれて、私の言うことを聞き入れ、熟慮してください。

つまり、私にはまだ子供達がいるのです。御身のザクセン人達のことで、陛下御自身がかつて彼らの庇護を私に任せたのです。

しかしこのザクセン人達を追放された司牧が世話できましようか。彼らの体が陛下の狼ども、陛下の飽き足りない貴族達の所有物であるとなれば、彼らの魂はいかに自由に栄えられましよう。陛下の先祖、征服王が、この何千人もの敗者のザクセン人達を一握りの鉄のようなノルマン人達の下に置いて以来、この略奪された者達はもはや自前の土地に住んでいません。陛下は陛下の野蛮な狩猟法で、有害な害獣が一匹ザクセン人に倒されると、この男達を不具にします。そして若者や娘達を修道院の影の中に追い込んでいます。彼らは陽光の下、平和に耕して、子孫を増やすべき、受け継いだ実り豊かな大地にいるべきなのです。

私の希望を容れてください。お聞きください。私は陛下と、陛下の許に留まっているご子息のために一つの民族を育てるつもりです。征服や暴力行為を通じてではなく、英知と正義によって、司教の穏やかな杖を持って、克服したいのです。私は人々の心を支配しますので、陛下のノルマン人達の剣を怖れません。私は盲目の怒りに駆られたままの無様な策謀のこれらの日々にありますとも、相変わらず死すべき定めの人間達の中で最も賢い者として留まっています。

いや、我が国王陛下、何と馬鹿げた振る舞いをなさったのです。私の力を殺ぐために、陛下のヘンリー若王を即位させるとは。それに不正なことです。陛下御自身が私を陛下の首座になさったのであり、私は永久に陛下の首座なのです。

これをご覧ください』、　一　と彼は胸から一巻き取り出しました、『陛下が私の椅子の権利に手を伸ばされたので、陛下に下されたローマ教皇の破門状です[史実ではない]。　一　私が陛下の頭に下そうとは思わなかった不純な炎です。　一　今日教皇は陛下の従兄弟、フランス国王の言いなりです。教皇はかつて私が奉公していた頃、陛下の言いなりでした。陛下はラテン人の心がお分かりでなく、お金の配分時を間違ったのです。

我が御主君、私の許へ戻って来ててください。この買収可能な破門状は踏み潰しましよう。私は、我が椅子への権利も、それを、陛下の王国で、どこの場所であれ、権利であれ、陛

下のため、一つの民族を育て上げるために使い切ったとき、手放すことにしましょう。と申しますのも、私はラテン人の下僕ではなく、ナザレ人[イエス]の従者であり、同志であるのですから』。

この驚くべき言葉を聞いて、国王の顔は燃え上がったり、青白くなったりしました。時折、圧倒されたように見え、時に国王としての誇りが、司教とその英知に傾斜し、屈服してしまうことに逆らっていました。再び敵意と戦慄とが優勢になって、国王の魂は分裂したままでした。

『いや、私の足は疲れました』とトマス殿は優しい声で続けました、『私は消えて行く炎です。しかしこの憎悪と分裂の時代に、神と人間の顔が唾されず、殴られない或る国を築くことは、生き甲斐のあることに見えます。

征服王の継承者の陛下、陛下は正義の国王となられる御意志がありますか。

陛下は陛下のご先祖の末期よりも穏やかな末期をお望みですか。陛下の上に漂っているのは、
— とトマスは国王の頭部の上の空いた空間を見つめていました、私は心の中で煌めく剣を握った手を見たように思います、
— 『私の復讐とは別な復讐です。私は陛下のためにそれを償いましょう。私は陛下を守ります。今の方が以前の野心的な宰相のときよりも陛下に立派にお仕えできましょう。私は陛下の友です。と申しますのは、陛下のご息子リチャードが陛下のために懇請したからです』。

この素晴らしい聖職者としての語らいは、この賢明なトマス殿がただ獅子の心臓をこの話しに交えないでさえいたら、ひょっとしたら我が国王の心を捉えていたかもしれません。

我がヘンリー国王は、三男を誰よりも愛していたけれども、若いヘンリー卿とジェフリー卿の子供らしくない裏切りと離反によって、自分自身の血肉に対し邪推深くなっていました。この時には、自分の息子リチャードが国王のために懇請したことに怒りました。そして王の心の中に、黒い不信が膨張し、煮えたぎりました。

『トマス、そなたは私をどこへ押し込むのだ』と王は始めました、『私のノルマン人達に怒れと言うのか、何を考えている。...我がザクセン人の下僕達を解放するのか。...それが善行だと言うのか。...私を駄目にするつもりか。...』、王は額に皺を寄せて、考えようと努めているように見えました。しかし突然、怒りの惑乱させる精神に襲われました、『そなたのことが分かった』と彼は叫びました。『そなたは私と私の国を破壊するつもりだ。...忌々しいことに、グレイスが身罷ってから、日夜そなたは私の没落を仕掛けているのだ。偽善者、破壊者、復讐心の強い異教徒のそなたは』。

しかしトマス殿の顔は天使の顔のように輝いて、彼は目を輝かせて言いました、『私はグレイスの死んだことも、陛下の雑言も許しましょう。陛下が私の同胞、ザクセン人達を自由にし、これから先、神の道と人間の道を歩いてくださいますならば。ヘンリー王、その気がありますか。...』

この瞬間、ノルマン人の殿方らの一群が不穏になりました。彼らは国王がかくも長く追放された司教と交渉しているのを見て、不機嫌になったのです。司教の英知を彼らは恐れていましたし、彼らの侯爵[国王]に対する彼らの畏敬の念はすでに明らかに減じていました。彼らは槍や盾の物音をさせて、馬をぐるぐる回らせ、叫びました。『国王陛下、止めてください、止めてください』。

ヘンリー王は驚愕し、首座に素早く自分の許から去るよう合図しました。

『戻るがいい』と王は叫びました。『フランスの修道院へ。そなたの足は二度とイギリスの大地を踏んではならん。民衆の扇動者よ。こちらでも向こうでも私は二度とそなたとは会談しないし、相手にしない、不吉なカラスよ、魔術師のそなたよ、...』。

首座の顔から生気がすべて消えました。

首座は穏やかな声で答えました、『私は陛下の言葉に従えるか、分かりません。私は長く遍歴していて不在で、司牧と群れは互いに求め合うからです。それに私は自分の休息の地を切望しています。それ故、陛下、お言葉に従うと約束致しません。ーしかし私のことはご懸念無用です。私の歩みは和平を求めています』。

『そなたの命にかけて、我がイギリスの大地に足を踏み入れぬよう用心することだ』と国王は我を忘れて叫び、とても激しい動作であったので、獅子の心臓のリチャード卿が至急に狼狽した顔つきで馬を寄せました。卿はお二人に注意して、ノルマン人の騎士達の側で待機していたのです。

しかしトマス・ベケットは悲しい微笑を浮かべて、国王から離れました。『私の昇天[解放]の時が近いと思います』と首座は言いました、『死が近いのであれば、臆病者の私がどうして、頭を上げて、我が主君の国王の怒りを買う勇気があるでしょうか』。ー

このようにしてヘンリー王とトマス殿は互いに、両者とも実直に求めていた和平を得ることなく、別れました。

第十二章

私どもが灰色の荒地、この拒絶された接吻の地を跡にして、黙って、内心に閉じこもって堅牢なノルマン人の町ルーアンを目指していたとき、温かく長かった晩秋の後、荒々しい冬の風となって、最初の雪片が降りかかって来ました。私は窮屈すぎる胸甲のような苦悶に襲われました。私は我が国王の案件に失敗したからです。リチャード卿に隠すこともしなかったのですが、善意の陽光で溶け出した心の雪は、新たな冷淡さに出会うと、二倍に硬化するものだと良く承知していました。私はこの目で、首座が獅子の心臓[リチャード卿]故に、我が国王の唇に触れるべく、自分の内奥の性情に無理強いをし、そしてそれがかなわなかった様を見ていました。

コクマルガラスやカラスに取り巻かれて、ヘンリー王はゆっくりと雪で覆われて行く平原を疾駆されました。

そのとき、ある交差路で、リチャード卿が自分の河原毛馬に拍車をかけて、その騎乗の間、ずっと慣習に反して、後部の列に並んでいたのですが、国王のベルベル産雌馬の側に寄って、頭を垂れて父親から辞去しました。沈思した陰険な表情に見え、普段の勇敢な顔では決して見たことのない表情です。彼は口実を述べました。彼の伯爵領ポワトゥーではいかなる個人的事情や紛糾があるのか、私は存知しませんが、私はこう理解しました、卿は確かに兄上達のように国王に反旗を翻さないが、しかしその争いの圏外に留まるであろう、と。

ルーアンの町にヘンリー王はクリスマスまで滞在しました。これは間近で、国王は立派な規律とキリスト教徒らしい懺悔の中、熱心にミサを聞き、断食やあらゆる節制の苦行を

行いました。と申しますのは、国王はこの大事な祭日の朝、神聖なパン[聖体]を拝するお考えだったからです。

かくて国王は敬虔に喜んで実行されました。それから貴族のお供と一緒に、豊かに準備された食卓に着かれて、苦行した胃を慰労されました。祝宴がたけなわとなったとき、悪人が起き上がり、一人の平和紊乱者を送って来ました。

長靴を履いて、拍車を付けて、一と言いますのは、丁度馬から転がって来たからで、一ヨークの司教が広間をぜいぜいとやって来て、七面鳥のように赤くなって、怒りの仕草で宴の国王の前に立ちました。この短躯の、カッとなったノルマン人は、その手足の乱れた激怒ぶりで、悠然とした健康な人間の落ち着いた気分を害します。ましてや我が国王の前です。この司教の側に国王の僧侶の一人が現れました。全く分別のある長い顔の男で、司教を慎重な物言いで静め、落ち着かせようとしていました。

『私を助けてください、正義のヘンリー国王』とこの短躯は叫び声を上げました、『首座だけでは十分でなく、今やローマの教皇までが、私の頭に破門を寄越しました。神に忌み嫌われて欲しいトマス・ベケットは、その勅令を違法に自らの体に持参して、陛下のイギリスまで来て、丁度今、神聖なクリスマスの際に、その勅令がすべての教会で、ザクセン人のミサの際に、厳かに告知されていて、私と我が国王の恥辱となっております。この邪悪さの申し子はいかにしてカンタベリーまで来たのでしょうか。...凱旋將軍のように、馬と馬車と長いザクセン人の隊列を引き連れてです。...』

ここで分別ある僧侶が、自分の声が聞き届けられるよう計らいました。首座はそうではなかったそうです、と僧侶は反論しました、敬虔な雌ロバに乗って首座は来られたそうです。しかし人々が首座の前で、衣装を広げて、冬の時期でもまだ緑であったものを、その路に蒔いたのは、本当だそうです。この追放された首座はカンタベリーへ疲れた男として戻って来られ、その司教の家から、いや、その寝室から、それ以来離れていないとか。勿論首座は二通の教皇の勅令を自分の衣装に蔵してイギリスへ来られたそうです。しかしその一通を首座は竈の火に投げ、もう一通は、その好戦的な僧侶達によって、抵抗空しく、奪われてしまったそうです。トマス殿は臨終にあるそうで、間もなく自然そのものがヘンリー国王をその難儀な敵対者から解放するであろうと聞いています。

これが素の真実です。首座の、私と親しいその屋敷の者が私に誠実に語ってくれました。

司教はしかし、この分別を強引な言葉で床に投げ棄てました。『トマスが臨終だと』と彼は叫びました、『私の司教帽にかけて、このタフな男は三世生きて、そなたの陛下を害するぞ。トマスが平和の使者だと。戦争をそなたのイギリスへ持ち込むぞ。彼の行く先々で、至る所、ザクセン人が反乱を起こして、斧を握るぞ。私は目にして来たのだ』。

これはすでに当時でも私にはあり得ないことに思われました。ザクセン人の意気地なしを知っていました。しかし私は癩癩を起こした司教の言葉をほとんど聞いていませんでした。私の五感はずべて我が国王に向けられていました。国王の内奥が沸騰し始めていました。

国王は怒りで頭が麻痺していて、分別ある僧侶の訂正に耳を傾けていません。

そこで燃え出る炎が爆発しました。ヘンリー王は、首座の反乱であれ、恭順であれ、変わらず立腹して、正気を失って怒り、座席から飛び上がり、自分の杯を激しく突き飛ばし、それで杯は遠く食卓の上を転がって、ワインはリンネルの上に赤い流れとなってこぼれ、

雪の上の血のようでした。

『私は首座が我が大地に足を踏み入れるのを禁じたのだ』と国王は声を震わせて叫びました。『首座がその胸、衣装の中に、私に対する、国王に対する一通の破門状を隠しているのを私は承知している。首座は自らそれを私に見せた。あの悪』。そして今や国王は絶望して両拳を互いに叩き合わせて、嘆きました。『私は彼に恋人にするように衣装を与え、宝石で飾ってやった。彼は甘えて子犬のように私の手からパンを食べた。この忘恩の徒は私を足蹴にし、我が家を壊し、我が国を破壊する』。

国王は黙した食卓の一同をぼんやりと見つめ、自分の騎士達に悪態を投げ放ちました、『私は下僕達を太らせている。彼らは我が国々の髓をむさぼり、我が潤沢な食卓の下に足を広げている。しかしこれらの大食漢の誰一人、一人の裏切り者をつまみ出す勇気がない』。

国王が目玉をぎょろぎょろさせて、あちこち歩き回り、誰も主君に話しかける度胸を持たずにいたとき、国王の客人の大多数は起き上がっていて、司教を取り巻き、司教に質問や非難を浴びせていました。

私は国王の椅子の背後に立ったまま、突然まばらになってしまった食卓の下端の方に、四人が座っているのを目にしました。互いに怒りを了解し合った眼差しで、あたかも秘密の協議をしているかのように囁き声で、興奮した言葉を交わしていました。旦那様、彼らの名前のご存じでしょう。その名は世の四方のすべての風に乗って呼ばれており、すべての風説の中で最も不吉な者達であり、イギリスではどのキリスト教徒の子ども彼らの前では十字を切ります。

その第一はウィリアム・トレイシー殿、嘲笑家で、それからブルターニュ出身のリチャード殿[Sir Richard le Breton]、美男のリナルド殿[Sir Reginald Fitzurse, 1145-1173]、これは女達の寵児です、そして最後に寡黙なヒュー殿[Sir Hugh de Morville]です。

私は余りに離れていて、彼らの言葉は聞こえません。しかし彼らの身振りは十分明確に語っていました。

今でも私は、ヒュー殿が唇を噛む様、リナルド殿がその柔らかな長い髪を指に巻き、引き千切る様、リチャード殿の額が怒りで赤黒くなって、ウィリアム・トレイシー殿の軽妙な口が、普段は大口の哄笑だけなのに、辛辣な嘲りに歪む様を思い浮かべます。それから彼らは一致したように見え、一緒に裏口から消えました。

私は窓の方を向いて、この四人が城の中庭で、苛立たしげに自分達の馬を待っていて、それから素早く馬上の人になるのを見ていました。

私がこのひどいクリスマスの夕方、明日の、国王の狩のための命令を伺いに、我が主君の小部屋に現れますと、よく怒りを爆発させた者達に見られますように、国王が黙って、悄然としているのを見つけ、それで敢えて私は、自分が不安に思っていることを打ち明けました。

『正午に、陛下の舌鋒鋭い卓話の後』と私は始めました、『四人の陛下の客人が』、そして私は名前を挙げました、『威勢良く馬に拍車を掛けて、思うに海岸へ疾駆して行きました。一 彼らは陛下の激怒された言葉から、一つの望み、あるいは一つの命令を聞き取ったと思われます。一 いや、御主君、どうなりましょう。彼らが陛下の言葉を陛下

の行動へと移しましたならば、 — それは陛下の御意志とは異なりましょう。 —

国王は私を見つめていました。苦勞して自分の考えをまとめながら、お答えになります。

『至福の飼葉桶[クリスマス、厩で生まれた]にかけて』と私は懇願するように警告しました、『これは無視できません。すべての聖人、天使のご加護があって、陛下の御霊が殉教者を背負うことのないよう願うものです。 —

このとき国王は突然私の言うことを理解されて、私の肩を掴みました。『いつ彼らは疾駆して行ったのだ』と王は尋ねました。丁度私はそのことを話したばかりなのですが、『何故そなたは臨機応変私に注進しなかったのだ、鳴きガラスのくせに』。

『まだ手遅れではありません』と私は驚かず答えました、『北から吹き寄せる雪雲をご覧ください。きっと海は荒れていて、向かい風です』。

『私のベルベル[産の馬]に乗って行け』と王は命じました、『あれは嵐に負けない。四人に追いついて、連れ戻して来い。四人を捕らえろ、 — 私の意志だ』。

『陛下』と私は言いました、『四人は私の言うことは聞かないでしょう。陛下が、名誉をかけての、決死の行動に駆り立てたのです。それより、私は別な道を駆けて行き、海峡が最も狭い海岸へ参ります。誰の船であろうと、そこで最も速い船を徴発して、陛下の怒りで急き立てられたこの四人より先にカンタベリーに着くようにします。そしてトマス殿を陛下の名において安全に守りましょう』。

『その方の仕事だぞ』と王は脅しました、『一つ承知しておけ。私は首座に災いが生ずるのを望んでいない。この立派な頭が髪の毛一本でも損傷を受けたら、その方の責任だ。すぐ近くの絞首台に晒してしまうぞ』。

私に対してこのような無意味な脅しは無用だったことでしょう。私はこれほど素早く鞍を置いて、休まず騎乗して行ったことはありません。途中私は知りました。この四人は、人々が恵みの港と呼んでいる近くの海港に向かった、と。そこで私はこのフランスの国を横切り、カレーへと急ぎました。そこから高速帆船で数時間でイギリスへ渡りました。その間、私は荒れる波の最中、聖母様に、熱心に祈願しました。少なくとも、二十回のアヴェ・マリアの晩禱時には、四人の短気者達に会えますように、と。そして実際聞き入れられたのです。

イギリスの大地では、私はしばしば巡回中の甲冑を付けたノルマン人達に呼び止められました。国内が不穏で、首座はカンタベリーでザクセン人の武器で自衛しているという噂が至るところに広まっていたからです。

こうした大氣中にこもっている不安の精神に追い立てられて、私はベルベル産馬のなびくたてがみに身を伏せて、この高貴な馬を疾駆させました。しかしそれでも、カンタベリーの一群の家の上にある大聖堂の塔は、それを私の目は見据えて、見放さなかったのですが、一向に大きくなりません。

私がようやく汗だくになって市壁に近付きますと、市門の前の通りは新たに折り取られた樅の枝や、香り高い冬の青葉が蒔かれていました。ある平和の入場があったことを証しています。

私は馬から下りて、鼻息の荒い馬を、裏通りに入って、いつも立ち寄る習慣のビール醸造所に連れて行きました。私はよく我が国王の伴をして、カンタベリーまで来ておりました。

て、そこの完成したばかりの大聖堂は新しい建築技法の傑作と目されていました。そこの亭主は一人のザクセン人で、同時にカンタベリーの参事会員です。丁度、長い中央路地に面した窓の列の錠戸を閉めていました。何故この明るい日中に暗くするのかと私が彼に尋ねますと、彼は左手で私に黙るよう指示し、右手で窓の梁の広い隙間の前へ私を押しします。私が覗いてみますと、国王の食卓での四人が完全武装して、路地をあちこち騎乗しているのが見えました。剣を突き出して、窓や家の玄関を示しています。

『皆、家の中に入っておれ。誰も路地へ出てはならん』とウィリアム・トレイシー殿が命じました。彼はその黒馬の向きを参事会員の住まいの前で変えさせ、馬は激しい息をその鼻の穴から冷たい冬の風の中に蒸気のように吐き出していました。

この殿方は馬の向きを変えると、命令を繰り返しましたが、高慢なノルマン人がザクセン人に叱りつけるときよくそうするように軽蔑したやり方ではなく、厳かな伝令の叫び声でした。

びっくりした市民達は従いました。こちらでは屋台が閉まり、向こうでは行商の女が嘆きながら、籠を運んで行きます。更に下手では、不安になった母親が、路地で遊んでいる子供を腕に抱き上げ、家に逃げて行きました。

洒落者のウィリアム殿は面変わりしていました。その目は真面目に、不幸に、黒い眉毛の下、青白い顔から覗いていました。私は明瞭に察知しました、四人は途中で話し合って、国王の彼らの魂に恥辱的な熱い言葉に対し、怒りの殺害を敢行するのではなく、裁判と死刑判決で解決する考えである、と。

私も市参事会員と協議し、我が主君の国王の最終的真正的意志を明らかにして、彼に命じました。四人が去ったら、市民達を勇気付け、武装して、一緒に私の合図を待つように、と。

それから脇の小道を抜けて、堅牢な大司教の屋敷に達しました。そこでは人々は私を国王の家来[下僕]として、またイギリスでは良く知られた人物として遇し、何の面倒もなく、いや非常時の助っ人として喜んで中に招じてくれました。

人々は私を豪華な、心地良く温かいホールへ案内しました。そこでは首座が多くの僧侶や奉仕の同胞の許、食事をしていて、私は人々の背後に隠れ、渋々辛抱して、トマス殿に近づく機会が許されるまで待ちました。

首座自身は一口も召し上がらず、幽霊のような頭部を、目を閉じたまま、司教の椅子にもたせかけていました。カンタベリーからの一人の貧しい敬虔な男に耳を傾けていて、この男が震える声で四人の到来を告げていました。

この男が首座に、危険が迫っていることを納得させた後、このザクセン人は首座に、逃亡して、その命を救出するよう説きました。不安げな呟きが食卓の周りで見られました。

しかしトマス殿は動かせません。『もう十分だ』と首座は平静に言って、この泣いている男を祝福して、去らせました。それから首座は語りました。『杯を私にくれ』。そして首座に話しかけられた若い僧侶が、白い襷のある衣装を着たブロンドの巻き毛の少年ですが、首座に水を満たした水晶のカップを渡しました。首座はそれをゆっくりと飲み干しました。

このとき私は進み出て、首座の足許に身を投げました。『尊き師父様、私は国王の許か

ら参りました。 ― 国王は首座のことを気遣っておられます』と私は叫びました、『国王は私を至急船、早馬で遣わされました。首座を身命を賭してお守りし、首座の頭の上にも国王の力を及ぼすようにとの仰せです。…敬虔なる同志、立たれい』、そして私は首座の僧侶達に向かって言いました、『立たれい、私に加勢をするのだ。汝らの司教を一番奥の堅牢な部屋に案内するのだ。そして他の者達は、私と一緒にすべての門を閉ざし、すべての戸口を固めるのだ。四人の殿方の最初の火の手が燃え尽きて、最初の攻撃が撃退されさえしたら、私はカンタベリーの郎党の助けを借りて、首座を間近の国王の城までお連れする。 ― トマス殿、祝福された聖母の御名において、拒まないで頂きたい。国王の庇護の下に入ってください。首座の髪の毛一本触れさせません』。

その場から動かず、僧侶達はすべて視線を首座に向けました。しかし首座は数語悠然と発して、私の提案を撥ね付けました。『そなたより、私にはそなたの国王の意志が見えている。私ははっきりと国王の心が読めるのだ。神の永遠なる摂理と我が国王の意図が私に対して実現すれば良い』。

『五つの御聖痕にかけまして』と私は、我を忘れて叫びました、『国王は首座がこちらで殺害されることを望んでいません。首座が首座のお体と国王の御霊をわざと、罰当たりにも損なわれるという反抗心をお持ちであっても、その咎は国王にあると仰有るのですか』。

すると突然、トマス殿は私に向かって、聖書の言葉で私を打ちました、『ここから出て行け、汝、悪漢よ、邪悪な下僕よ、私の邪魔をするな』[マタイ、16,23参照]。 ―

びっくりして私は飛び上がり、僧侶達の間に戻きました。私は悲しく、それ以上に憤慨していました。トマス殿が、殿は今日まで私とは清らかに交誼されていましたが、その内心が明らかになったこの瞬間に、あたかも私は長いこと筋金入りの悪漢であったかのような邪悪な不名誉な呼び方をされたのですから。 ― これは一つの不正ではありませんか。ご判断は今、貴方にお任せします、貴方は私の若い時からの行状をご存じで、私は少しも自分の弱点を貴方に隠しておりません。

この不当な打撃の痛みを私が克服していないうちに、ドアが開き、四人のノルマン人の殿方がホールに入って来ました。武装もせず、武器も持たず、通常の宮廷服です。彼らは首座に対し、非の打ち所のない作法と上品な表情で挨拶しました。

司教は彼らが入って来ると、その椅子で起き上がりました。私はその姿の崇高さに感嘆しました。どんな弱さも消えているように見えました。首座はその陰気な客人達の挨拶に同様に貴族的に応じて、手を微かに動かして、彼らを自分の卓に招きました。彼らは腰掛けました。

『我が主君の国王はどのようなご様子ですか』と首座は彼らにしばらくしてから尋ね、返答を得られずにいました。

『息災ですか』と彼は再び尋ねました。

しかし四人は司教を観察していました。ある者達は額を垂らして、威嚇的眉毛の下から、別の者達は、臆して、横目で覗いていて、ただ不明瞭な呟き声が彼らの唇から漏れて来ました。

まず最初にリチャード殿が、その手に負えない拳故に、ノックアウト拳、つまり我らの言葉では必殺拳と呼ばれている者です。『国王の御名において我らは参りました』と彼は

言いました。

『信じましょう』と首座は答えました、『貴方らは国王のお側にいて、国王の合図を理解され、その意志を遂行されます』。

『ヨークの司教の破門を撤回されよ、首座、それとも自らイギリスから出て行かれよ』とノックアウト拳は続けました。そして寡黙殿が同意しました、『破門を撤回されるか、自ら出て行かれるか』。

『私だけではなく、現在では私とは別の方、ローマの教皇も司教を破門宣告された』とトマス殿は冷静に答えました、『教皇にヨークの我が同胞は向かわれると良い。これはもはや私の関知する所ではありません。私はただ和平だけを求めています』。

『そんな言い草では誤魔化されないぞ、二枚舌首座』とウィリアム・トレイシー殿が迫りました。この方は四人の中で最も雄弁です。『首座が司教に放った破門から司教を救って頂きたい。この破門がローマ教皇の破門よりも司教には応えている。区別や逃げ口上は無用だ。首座も国王と封建領主に誠心誠意お仕え申せ、我々皆と同様に。首座も単に国王の恩寵のお蔭に過ぎんだらう。誰が首座を無一文から育て上げ、一人のザクセン人を一人の人間に変えたのだ。首座の崇高な力はどこから来たのか。忘恩の首座よ、敵愾心の強い者よ、正直に述べよ、誰の手からその力を得たのだ』。

するとトマス殿が良く通る声で叫ばれました、それでホールが震えました。

『我が国王の御手から国王を裁く力を得ている』。

この頑固な説明に四人は激しました。美男のリナルド殿は、それまで戯れに左手に持っていたその手袋の指を捻りました。ノックアウト拳のリチャード殿は背中と足で椅子を後に飛ばして、その樫の木材が物音を立て、寡黙殿が言いました、『決した』。

しかしトマス殿は神聖な威厳を持って語りました、『思うに、諸君は脅しているのか、勇敢な諸君。我が国王は私に何を望まれている。陛下のものは陛下にお返ししよう。私の体か。体はここにある。もって行かれよ。しかし私の良心は陛下のものでもないし、私のものでもない』。 —

『騎士としての作法を忘れないようにしよう』とウィリアム殿は語りました。『諸君、私に質問は任せ給え』。

彼は立ち上がって、死人のように青ざめて、首座の前に進みました。

『トマス・ベケット殿、ヨークの司教への破門を撤回されるか。話し給え』。

トマス殿は黙っていて、それで自ら死罪の判決を下しました。

『トマス・ベケット殿、貴殿は国王の意志に反し、また議会の議決に反し、再びイギリスの大地に足を踏み入れた。イギリスから去られよ。貴殿には海までの安全な同行が認められている。貴殿はいつここから発たれるのか。話し給え』。

しかしトマス殿は黙っていました。

しばらくウィリアム殿は返事を待っていました。それから陰鬱に結論を出しました。『これは重罪です。貴殿は自らの血を浴びることになります』。 —

四人は歩調揃えて広間を去りました。私には、彼らは武器を取りに行くところだと分かりました。

さて大きな静寂が生じて、私は自分の心臓がハンマーのように肋骨を打つのを聞きまし

た。すると沈黙の中から、力強く毅然と、一つの声が響きました。私は最初何のことか分かりませんでした。それはトマス殿の声で、自分の向かい側の壁に掛かっている十字架像に熱心に語りかけていました。

『苦痛の王者よ、この体に宿り給え』。

再び長い間私は、自分の心臓の音しか聞こえません。それからトマス殿はもう一度語って、その細い両腕を差し出されました。

『この手を貫き通して、私に御身の受難を許されよ』。

そこで私は畏敬の念で震えて、もはやトマス殿のお顔を拝しておれなくなりました。三位一体の神がお体に浸透して、威儀を正してその目から覗かれると畏怖したからです。

しかし私は通路で武器の物音を耳にすると、自ら集中して、門の方に突進し、すべての門を掛けました。私が駆けると、夢の呪縛から解けたかのように、僧侶の群れ全体が首座を取り巻き、何人かは首座の足許に伏し、別の者達は首座を連れ去ろうとし、首座の腕を掴みました。更に別の者達は首座の腰に抱きついて、首座を我が物とし、愛しく力尽くで、首座を運び去ろうとしました。

その間に外からドアに対する斧の打撃が轟きました。

しかし首座は自分が裁きを受けた席から離れようとしません。そこで細身の、賢い眼差しの助祭が首座の前に現れて、口に指を当て、遠くの小さな鐘の音に注意を向けさせました。この騒音の中、ほとんど聞き取れない音でした。『晩祷の鐘です。師父様、教会では皆がお待ちです』と助祭は促しました。

トマス・ベケットは逆らわず、起き上がりました。一つの行列が出来上がって、首座は担がれた十字架の後、長い通路を歩きました。これは司教の館の内部から大聖堂の内陣へ通ずるものです。私も賛美歌を歌う僧侶達と一緒に列を組んで歩きました」。 —

ここで石弩屋は話しを止めた。彼の視線は自分の側の暖炉の蛇腹にある砂時計に向けられた。この時計は丁度最後の砂粒が上のガラスから下のガラスへ滑り落ちたところであった。ハンスは時計を逆転させて、言った、「今日は祥月命日に当たります。そしてトマス殿がその最後の行進を行ったのは、午後のこの時間です。

大聖堂の内陣に達すると、首座は本祭壇で身を投げ跪かれました。首座は僧侶達に取り巻かれて、僧侶達の何人かは、内陣格子のアーチ形ドアの所で耳を澄ませ、身廊の奥行きに沿って、中央玄関まで臆した眼差しを漂わせていました。ノルマン人達がこの玄関から今にも侵入して来そうです。と申しますのは、助祭はこの避難場所を、堅牢さ故ではなく、この場所の不可侵の神聖さ故に選んでいたからです。

私も玄関から目を逸らさず見守っていました。最後の瞬間には、四人の殿方に剣を向けるのではなく、 — これは下僕の身の私には禁じられていました、 — トマス殿を自分の体で守ると決めていました、流血の殉教死を招いた咎を我が主君の国王から雪ぐことができるかどうか試すのです。

すべての時間、猶予が終わりました。玄関に物音がし、稲光しました。四人が門に入って来て、頭の天辺から足裏まで武装していて、剥き出しの剣を持って、教会の身廊の中を突進して来ました。『我が後に続け、国王の忠臣よ』とウィリアム・トレイシー殿が叫び

ました。

急いで私はまだ開いたままの、内陣と教会堂とを隔てる固い格子の門を閉めようとした。しかし首座は、起き上がって、自分の刺客達の方を向いていて、嫌がる身振りで、私を止めました。しかし僧侶達は皆首座を取り囲みました。より若い、より勇気のある僧侶達は階段に詰めました。前列の最下段には、確固とした足のトラスタン・グリムが立ち、十字架を担っていました。他の者達は司教の周りに立っていたり、跪いていたりして、羊飼いが打たれそうなので互いに驚愕して混乱している家畜の群れのように押し合っていました。

『裏切り者はどこだ』とウィリアム・トレイシー殿が叫びました。すると勇敢な僧侶トラスタンが十字架を両手で、守護するように、威嚇するように、彼に対し振り上げました。剣が一閃し、血飛沫が上がり、体から切り離された腕が、十字架と共に落ちました。今や四人は、峰打ちで斬りかかり、不安の僧侶達に襲いかかり、慌てふためく剃髪者達を臆病な逃走に追い込みました。しかし私は、中央祭壇前の中心に立っていたトマス殿の側に寄って、両腕を広げ、十字架に掛けられた者のように首座に覆い被さり、あたかも十字架が二つになった按配でした。

『国王は、貴殿の死を望んでおられる』とトレイシーは言って、剣を上げました。『しからばそのように』とトマス殿は答えました。

私は両腕で首座を抱き、一撃が一閃するのを感じ、同じ瞬間、『退け、下僕』という叫び声の下、ただノックアウト拳に違いない鉄のように拳に掴まれ、投げ飛ばされ、私はビュンと頭蓋諸共柱にぶつかったのです。

私の意識が消えて行く間に、私は目の前に血の海と、その中の瀕死の、微笑する頭を見ていました。

どれほどの時間私は石の床に横たわっていたのか分かりません。私の意識が戻って来たとき、私は教会にただ一人いました。私は起き上がろうとしましたが、しかし私から二歩離れた祭壇前の聖人の死体を覗く勇気は私には湧きませんでした。しかし私はまた沈み込みながら、自分の革のジャケットが殺害された首座の血で濡れているのが分かりました。

今や身廊の薄暗い底から悲痛な嘆きの声が起こり、哀悼の声が募り、教会は自分達の師父を求めて叫び、天の復讐を殺害者達に対し切願する哀れなザクセン人達で一杯になりました。不気味な素早さと愛着とで私の側ではこの神聖な亡骸に人影が殺到し、死んだ両手、両足を抱き締め、傷跡に接吻をし、傷を涙の雨で洗っていました。しかし彼らは貪欲に自分達の衣装や襦袢をその殉教者の流された血溜まりに浸していました。

ようやく私は跪いて、まだぼんやりした意識の中、一枚の布切れを取り出して、私の胴着の滴る雫を拭きました。すると私は嘆かわしい気持ちになって、呻きました。

『我が罪、我が最大の罪故に』。 ー

このように話しながら、石弩屋のハンスは、あたかも過去が再び蘇ったかのように、呻きながら床几から落ち、膝を突いた。ブルクハルト氏は同情して、自分の老いた両腕を彼の方に差し出して、労りの言葉をかけ、彼を慰めた。

第十三章

その間に冬の日の乏しい日光は傾いて行き、丁度雪片の密な舞いが窓の前で渦巻いたかと思うと、突然その細い部屋は暗くなって、それで二人の老人はもはやお互いの面貌を識別できなくなっていた。二、三の最後の火花が炭の上で鬼火のように煌めいた。というのは話者も聞き手も火を掻き起こすことを忘れていたからで、すぐ竈の前で寝そべっているプードルの微かないびきと、パン箱の近くでせわしい小さな鼠の囁る物音しか聞こえなかった。

そのとき司教座参事会員の老下僕が一杯木材を片腕に抱えて入って来て、熾火に近付き、がらがら物音を立てて、鎖に吊り下げた三本芯のオイル・ランプを下ろした。それはしばらくして、同等の明るさのランプとなって、ドーム状の天井の部屋を静かに照らした。

「終わりにさしかかっています」と石弩屋は溜め息を吐いた。「貴方が石段の砕かれた流血の頭部を目にされてから、更に何を言うことがありましょう。国王とそれに国王の哀れな下僕の私について、何を更に述べられましょう。

私の主君がいかにか、ますます重くのしかかってくる神聖の亡骸に対する責務のせいで瓦解して行ったか、一 トマス殿は栄光の天におわしても国王を許されなかったからですが、一 それにいかにかこの心を乱された王が下僕の私を一人の共犯者として憎んで、自分から突き放したか、貴方が知りたいと仰有るならば別です。もっともヘンリー王は、殺害された首座の廟で、自ら鞭打たれ[紛らわしいが、現実には王が自ら鞭打ちしたのではなく、居合わせた僧侶達に鞭打ちさせた]、首座に対し率直に祈願されたのです。年代記に記されている通りです」。

「我が年代記の信頼できる記述によれば」と司教座散在会員は熟慮して述べた、「そなたの国王はカンタベリーの聖トマスの墓で自ら鞭打たれた。しかし賢明で世俗的打算がないわけではなかったとされている。というのは国王は息子達との諍いで自らの力を強め、国王に対し愛想尽かしをしたザクセン人の心をまた得たかったからだ。そなた自身が、ハンスよ、そなたの国王は深い罪人であったと打ち明けているからな」。

「偽善者として、猫かぶりとして鞭打たれたと仰有るのですか」と驚いて石弩屋は叫び、この告訴に更に我を忘れて続けた、「神の荊冠の頭部にかけて、ヘンリー王がああ時に、つまり聖人の石像の足を涙ながらに接吻して抱いた時ほどに、一人の人間が実直に祈ったことはありません。ザクセン人の石工が聖人を模刻していました。聖人の廟に安置されていますが、両手を胸の上で十字に組んでいて、静かに微笑しています。一人前の男の芸術とは言えませんが、しかし像ははなはだ聖人に似ています。石工は聖人の存命の間に十分聖人を記憶に留めていて、その顔を写しています。

私は私の主君が自分の罪を懺悔する間、主君の背後に跪いていました。そして主君が自分の背中を鞭打ちのために露わにすると、私の背中にも熱くまた冷たく走るものがありました。私も聖人に、神の足跡に倣うことを、そして聖人の殺害者どもを許すことを認め給えと祈りました。

その間ヘンリー王は呻きました、『ただ我が寵児、獅子の心臓だけは私から取り上げないでくれ。汝、強力な神の戦士よ。何と私は汝を知らなすぎたことか、汝、神聖な男よ。汝の間近で息をしつつ、罰当たりに共に生きる名誉を得ていながら』、...

角笛が吹かれました。私はこの合図を知っていました。フランスの我が国王の陣営から一人の騎乗者が来ています。素早く私は国王の肩のみみず腫れに外套を掛けて、門前に出て、知らせを受け取り、その書状を持って、我が国王の許に駆け戻りました。

トマス殿が国王のことを一瞬聞き入れ、息子達に対する国王の勝利を許されたのだと私は思いました。

国王は震えながら封印を破りました。しかし文字が国王の眼前ではかすみます。『読んでくれ』と国王は、勝利と和平を渴望する余り怒って命じました。しかし私が読みますと、別な具合でした。

『私こと、ポワトゥーのリチャード伯爵は、自分の案件で訴えているのではない、天にまします我が師にして、聖職者の父上の件である。この師父の殺害者達は、地上を無事放免されて歩き回っており、彼らを追求すべき国王は判決を下していない。私はこの怠慢を弾劾するものである。更にこの件で誰からも疑念を抱かれぬよう、私は諸王、諸国民に布告する。国王自身がキリストとその証人から離反した以上、私は実の我が父親との縁を切るものである、と』。

私がどもりながら、この残酷な文書を言葉にしている間、主君は凝固した目を突き出しながら、私に迫って来ました。私は言葉を失いました。しかし国王は私の喉に両手で向かって来ました、『恥知らず、嘘を言うな』と国王は叫び、気を失って倒れました。

しかしトマス殿はその墓石で微笑していました。 —

「もう十分だ」と青ざめて司教座参事会員は叫び、その両手を拒絶するように、石弩屋に突き出しました。

ブルクハルト氏は、高齢者の常で、快適なもの、愉快なものを愛好していた。高齢者は後わずか人生の最後の残りを享受するだけである。彼が石弩屋を自分の部屋に招いたのは、聖人の人生から、二、三の逸話や人間的なことを聞き出して、微笑し、新しい聖人の後光の黄金に対し、 — 謙虚さの徳故に、 — 少しばかり黒染めにするためであった。しかしハンスは悩み多い闘争と、苦痛に歪んだ二人の人間の顔を示してくれた。彼はこの印象を持て余した。彼はこれを和らげるために、冗談の言葉を探した。

「そなたが」と彼はしばらくしてから言った、「私の前に敬虔な正直者として座っているのは結構なことだ。まことにそなたはするりと抜ける奴で、そなたの国王がそなたのベルトを掴まえて、倒せなかったのも宜なるかな」。

石弩屋は目を輝かせて、自分の床几で姿勢を正していた。彼は話すことで、告解をしたように気が楽になって、筋肉もすべて元気づいていた。彼は灰色髪になっていたが、勇敢な心を有していたからで、それは人間的事柄に隠されている正義の厳しい銘文に耐えることが出来るものであったのである。

「私も打撃を受けずに抜け出したわけではありません」と彼は言った、「しかし時期を見て失礼しまして、幾多の善行も積んでいます。これを更に少しばかり報告しましょう。現在の私に至った次第です。

馬は馬小屋に近付くと、より速く走るようになります」。

私のかの鞭打ちの後、ヘンリー王の背後をウィンザー城まで騎乗し戻ったとき、国王に奉公してここに滞在するのものはや長くはないであろうと確信しました。首座の死後、私は国王には目障りな存在になっていました。国王は、首座を殺害者達の手から守ることの出来なかった私を怒り、許せないと言葉で非難しました。主君は私を見かけますとそっぽを向かれます。上品なアキテーヌ出身の教養ある小姓が髭面の私に代わって酒の酌をするようになりました。狩のお供も私はほんの稀になりました。カンタベリーでの贖罪に国王は私を馬で同伴させましたが、これは私の前では恥ずかしい思いをしないで済むからでした。

ウィンザー城では軍備長官のロロ氏が私を尋問しました。と申しますのは、鞭打ちが評判になって、ザクセン人の間で、教化を兼ね、他人の不幸を喜ぶ思いも加わって、口から口に広まっていたからです。彼は恥辱的真相を聞いて、その額の血管が怒りで浅黒く腫れて千切れんばかりで、彼なりに不遜な言葉で憂さ晴らしをしました。

『首座の廟に這って、あの臆病者に嘆願したそう。あの青白い首座はその洞窟で忍び笑いをしたことだろう。首座が地下に入ってから、なお国王に一刺し報いたのは、蛇らしいことだ。...鞭打たれたノルマン人の国王とかあり得ん。...しかし不思議でもない。ハンス、そなたも気付いていたろう、すでに何年も前からヘンリー王は坊主の顔を肩に乗せている』。

この点ロロ氏は真相を語っていました。我が国王の顔はもはや見分けられません。やつれて、頬は弛んでいます。以前の喜ばしい輝きはなく、わずかに鈍く白く反映するのみで、夜の腐った材木です。

『イギリスの空気は私には臭くなってきた』とロロ氏は怒りました。『私は火を噴くシチリア島へ移住する。そこには、私の甥が住んでいる。ハンスよ、向こうの竈から炭を取ってくれ』。 — 私どもは武器庫に立っていました。 — 『私のために壁に別れを書いてくれ。私は、鞭打たれた国王には、奉公しない、とな』。私はこの高貴な殿方は文盲と知っていました。私は彼の考えを力強くラテン語文にし、その文面に彼は満足しました。それは次の通りです。

『私こと — ノルマン人ロロは、 — ヘンリー国王に — 別れを申し上げる』。
しかし私は隅で書く前に、こう述べました、『私も辞去します、長官』。

『何だと、弓造り、そなたも去るのか。国王は寂しく思うだろう』と彼は述べて、額に皺を寄せました。

私は締められた私の首の青あざを示して、言いました。『すでに三回私はヘンリー国王に災難を知らせました。この黒カラスが嫌になっても不思議ではありません。私が国王に奉公しても、もはや国王に幸せをもたらしません。国王の怒りを誘って何になりましょう。サウル国王[サムエル記上、18,11]のように王が不機嫌の折、私に一本の槍を投げる前に、私は去るつもりです。しかし長官、貴殿が王の許から去ると、長官を王は、ノルマン人の名声の最古参の証人、名声その人として高く評価していますから、国王は遺憾な予兆としてあやしみ、残念に思われるでしょう』と。

すると軍備長官は私の手から未使用の炭を取り上げ、竈に投げて、暗く呟きながら、私に背を向けました。

その日のうちに、私は我が主君の前に進み出て、私が国王にその同じ部屋で私の完成した石弩をご覧に入れて、私が宮仕えをすることになった最初の日よりも、重たい心で解雇を申し出ました。国王は私を無愛想に見つめてはいなかったのですが、ただ余所余所しく、悲しげで、私をねぎらって解雇しました。それで私は金持ちになったわけではありませんが、しかしヘンリー王はその財務長官を通じて、私に名誉ある報酬を指示されました。

私はウィンザー城で私の部屋を片付けていたとき、長持ちの底に、聖人の血の付いた布切れを見つけました。私が投げ込んでいたものです。これをどうしようか。これは、ヘンリー国王が私に支払わせた報酬全体よりも高価なものでしょう。と申しますのは、すでに当時、トマス殿の取るに足りない遺物でも、黄金で、何百倍も、いや、何千倍も値が付いていたからです。しかし、私自らが罪がないわけでない血に関し、それを売却することは、私の思い出の気分障ります。この血の付いた布切れを自ら所有したり、あるいは抹消したりすることも、この残りの二つの逃げ道も、同様にまずく思われます。

私はイギリスを去る前に、怠ることなく、私の以前の親方、ロンドンの弓造り屋を訪ねました。親方は私に親切な方でした。しかし私は国王に奉公している間、親方とは疎遠になっていました。親方は私を大層敬ってもてなしてくれました。私が不興を蒙っていると知らなかったからです。そして子供のように笑い、泣きました。苦境と心痛のため、心身が弱っていました。私はヒルデのことを尋ねました。娘は消耗性の熱で臥せっていると親方は言いました。そして私を娘の寝室へ案内しました。

彼女は私と分かると、その深く窪んだ青い目から輝きが生じました。彼女は来てくれて有り難うと感謝しました。今一度死ぬ前に会いたいと願っていたと申します。私の中で同情と共に、昔の愛が力強く蘇って、私は彼女に提案しました。運命の打撃によって、私は屈しているけれども、彼女が元気になりさえすれば、彼女を正式に結婚した妻として家に迎えたい、と。彼女は頷きましたが、懐疑的で、悲しげでした。

そこで私は私の貴重な聖遺物を思い出しました。というのは、イギリス中で、聖トマスの聖遺物の効験たる治癒や奇蹟は大評判となって自慢されていたからです。死人達でさえ、これに触れると現世に戻れたとザクセン人の僧侶達は説教しました。私は全速力でウィンザーへ騎行し、また戻りました。私は布切れを持って、彼女の寝室へ急ぎ上がりました。彼女は微睡んでいました。私はそれをこっそりと彼女の胸に置きました。すると彼女は動き、優しく微笑し、二、三回重い息をして、目を輝かせて開け、また軽く溜め息を吐いて、目を閉じました。旦那様、彼女は死んでいました。

そこで私は憤然とした驚きと怒りに捉えられました。死者を蘇らせるというトマス殿は、私を容赦なく迫害し、私の恋人を殺してしまうのだ、と。私は逃げ去れました。その血の付いた布切れは多分、彼女と共に埋葬されたことでしょう。

私は嵐の海を渡航しました。二回私はその波でイギリスの海岸へ戻されました。私がようやく大陸に足を踏み入れますと、私はシュヴァーベンを目指しました。と申しますのは、人生を経験して、すっかり遍歴や世俗的好奇心の快樂が消えてしまったからです。私はともかくまた馬にライン川の水を飲ませると、抑えがたく流れの上流へと郷愁に襲わ

れ、とうとうシャフハウゼンの市門をくぐることになりました。

そこで私はユダヤ人のマナッセが忘れられているのを知り、自らは世間通の著名な男として敬意を持って受け入れられました。私の栄誉の金ぴかが色褪せないうちに、私は若い未亡人と結婚しました。この嫁は、最初の結婚からの二人の小僧の他に、シャフハウゼンの一つの塔とそれにライン河畔の日当たりの良い葡萄畑を持参しました。

旦那様、信じて頂けましょう、私は貴族出の男であり、先の国王の下僕でありましたが、自分の手仕事を放棄することなく、むしろ躊躇わず工房を楽しく開いて、やがて色々な城や町の広範囲に大小の飛び道具を届けたのです。

私の国王については、ご自分や息子達と不和のままであったとしか聞きませんでした。

するとある日、私が私の妻の上の小僧を連れて、ラインの瀑布に向けて出掛け、新しい石弩の性能を流れの上で試験に行くことになりました。その川の上で渦巻いている風によって、この飛び道具の飛行がどの程度損なわれるか試すのです。

私が向こう岸のある目標点を覗きますと、ある騎士の灰色の姿が見えました。岩の上に座っていて、こちらの大聖堂の塔のカール大帝のように剣を膝の上に横に置いています。私の小僧は怖がり始めます。誰がこの奇妙な自然な彫像を一夜で河畔の荒地に置いたのか、私は頭をひねりました。

するとこの騎士はゆっくりと甲冑の手を上を上げて、見ると私を手招きしています。このとき私は彼と気づき、小さな渡し舟に飛び乗り、私は棹さして、向こうに行きました。ロロ氏が私に呼びかけました、『シュヴァーベン人よ、久しぶりだな。そなたの家で夜、飲ませてくれ』。

家に帰りながら、彼は私に言いました。自分はパレルモへの旅の途中だ。今日ライン河畔のこの小都市に着いた。雄馬と従者達をそこに休ませている。それから遠くの轟音に誘われて、興味津々流れを下って、この面白い流れの戯れの箇所まで来たのだ、と。

私どもと一緒にシャフハウゼンの路地を歩み、人々がこの強大な老殿方に驚いているのを見て、私は以前異国の巨人一族の許に暮らしていたかのような気がしました。ロロ氏は私のワインを何杯も飲んで、ワインを称えました。しかし私はようやく敢えて、私の主君の国王について質問しました。軍備長官は空中に息を吹きました。それで私はヘンリー国王の魂はこの世を去ったと理解しました。

『それでご臨終の様子は』と私は不安一杯に尋ねました、『いかがでした』。

『抹香臭くなかった』と彼は返事をしました、『父親としての赤い怒りで、国王は稲妻に打たれたかのように亡くなった。そなたの偶像、リチャード少年が、国王をカペー王朝の助けを借りて攻略していて、和平の最初の条件に、父親らしい祝福を求めたのだ、ただの空疎な身振りで構わないから、と。』

するとヘンリー王は起き上がって、私の腕で支えられながら、その患いの床で、静かな憤懣を湛えて、渋々右手を息子の頭上に差し出した。しかし偽りの祝福の指は、臨終の痙攣で縮こまり、空中で強張ってしまった』。

『止めてください、ロロ殿』と私は慄然として叫び、そしてしばらくしてからこう続けました、『お許し願って、貴方のお供をして私は少し先まで同道します。アインジーデル

ソの黒い[顔の]聖母まで巡礼します。我が御主君の御霊のために祈りたいのです』。

二日目に私どもは、聖マインラートの独房のある不毛の高原に達しました。ロロ氏は寄らず、私に軽く頭で頷いて別れを告げ、修道院の諸塔の方には唾を吐いて、馬の向きを変え、馬に拍車をかけました。

しかし私は馬から下り、裸足と無帽の頭で、聖地まで馬を引いて行きました。そこですべて慣例なこと、清浄なことを済ませ、別れに今一度泉のそれぞれの管から飲みました。この泉は、ご承知のように、聖マインラートの祝福された体から生じたものです。

私がある管から口を敬虔に離れたとき、私はその次の管に一人の巡礼の渴した頭部が据えられているのに気付きました。その巡礼の右の袖は空のまま脇に垂れていました。このとき、この男も私の方に顔を持ち上げ、私どもは互いに目を合わせました。

私どもは更に何も考えず、兩人とも飛び上がって、互いに喉の所でハグし合いました、
— トラストン・グリムと私です。

すると私どもの側で力強いバスの声が響きました。「手を放せ」、そして花と咲く若々しい僧侶が私どもに出自と故郷を訪ねました。

私どもの一方は、聖トマスの十字架担ぎ手であったし、もう一方はヘンリー国王の近習の下僕であったと彼が知ると、私どもが互いに首の所でハグし合ったことを許せると判断しましたが、しかし各自同じ数主の祈りを称えるよう同等の贖罪を課して私どもから去って行きました。そして小人どもは、偉大な殿方達の諍いに加わらないよう立派な説教もしました。殊にこの殿方達はすでに三つのあの世の地[天国、煉獄、地獄]の一つに然るべき居場所を得ていることだろうから、と。

かくて私どもはそれぞれの道を行きました。私はライン河畔の私の工房の方、トラストン・グリムは神聖な[聖マインラートの]墓場の方で、その赤い髭の中で、生ぬるいシュヴァーベンの僧侶達に対し、まだ何か邪悪なことを口ごもっていました。

十年後に、今日もなおその地位にある教皇が、イギリスとキリスト教徒の叫び声に耳を傾けて、トマス殿を教会の聖人達の輝かしい一員に列聖しました[トマスの列聖は1173年、死後三年]。三つの奇蹟が必要ですが、それに対しては百を超える奇蹟が告げられ、保証されました。それに祭壇の階段上での立派な逝去が、その尊厳の秤で少なからぬ重みとなりました。

このようなことがキリスト教諸国に布告されると、私はトマス殿の名前を、私の自家製カレンダーに記入しました。すぐ、幼い最初の殉教者達、ベツレヘムの無垢の子供達の下です。勿論トマス殿は、剣による暴力の死を除いて、この子供達と共通するものはほんのわずかです』。

この瞬間、プードルが吠えながら、目覚め、やがてこのプードルに路地から獵犬の吠え声と馬の足音が呼応しました。ギラつく松明の明かりが部屋を通り、兩人が木製のバルコニーへと出て見ると、石弩屋は急な路地を下って騎乗して来る狩の一行の先頭に、自分のパトロン兼負債者を見つけた。つまりクーノー氏で、氏も彼のことが分かった。というのは、若いこの司教座参事会員の左手が手綱をたぐり寄せているとき、彼は右手で自分の服

から一杯詰まった革の財布を取り出して、それを石弩屋に大層気前よく差し出したからである。

ハンスは辞去しようとした。しかしブルクハルト氏はその震える手を彼の肩に置いた。

「友よ」と彼は言った、「そなたは聖フェーリクスとレーグラの宿に泊ってみるがいい。今日こちらで列聖される聖人はそなたを悪漢と呼んでいるのだぞ、いとも容易に聖人は、妥協をしない方だから、そなたの宿への暗い夜道、そなたに畏や待ち伏せを仕掛けよう。今は出掛けて、クーノー氏の借金を、賽子を振らないうちに、徴収することだ。その間、私は私の部屋にそなたのために臥所の準備をしよう。私は余り眠らない。それに今夜は、自分の側で生きた寝息を聞いていたい。聖人トマス殿の血まみれの頭がこの夜の暗闇の中、浮かんで来そうな気がするのだ。

しかし明日は、神に嘉されるダヴィデ王の日[12月30日]だ。安んじてそなたは旅を続けると良い」。

ペスカーラの誘惑

第一章

ミラノの城砦のある広間で、若いスフォルツァ公爵[フランチェスコII・スフォルツァ1493-1535]が国庫帳簿に取り組んで座っていた。公爵の横には宰相[Girolamo Morone 1470-1529]が腰掛けて、指を滑らせながら数字を説明していた。

「恐ろしい数字だ」と公爵は嘆息し、至急なされた要塞工事に飲み込まれた総額に驚いていた。「我が哀れな空腹のロンバルディア人の無数の汗に等しい」。そして災いに満ちた数字の眺めから逃れるように、そのメランコリックな目を壁に転じた。壁は明るい色彩のフレスコ画で覆われていた。

ドアの左手では、バックスがその神話学のお供と一緒に酒宴を開いていた。右手には対照的に砂漠の食事が描かれていたが、粹な、しかし無造作な、神聖な対象[マタイ,14,小栗記]を軽薄すれすれにまで俗化させている名手によるものであった。上の高みには、小さく、ほとんど見えなかったが、主たる神が座っていた。一方前景には、陽気な一行が散っていて、その服装や表情の点で、昼食を摂っているロンバルディア人の刈り手の一団によく似ていた。おかしな具合に健康な食欲の身振りをすべて象徴していた。

公爵の視線と、公爵を注意深く追っている宰相の視線は、戯けた少女に落ちて行った。この少女は、大きな籠を腕に持っていて、多分残り物の屑を集めているのであろうが、彼女の隣で構えていた若者に捕らえられて、まばゆく光る歯の間に焼き魚を押し込まれていた。「この少女は少なくともまだ飢えていない」と宰相は気まぐれな目つきで冗談を言った。

公爵の上品な口に悲しげな微笑が浮かんで消えた。「何故要塞を建てるのだ」と彼は自分の憂慮の対象に戻った。「これは無用の仕事だ。ペスカーラ[1489-1525,12月3日説]、攻城の名手は、要塞を素早く奪って、それから戦費を私に押し付けることだろう。いいか、ジローラモ」。そして彼は藪草のように細い体を起こし立ち上がった。「そなたの秘密の同盟、その条項から私を除外してくれ。汝、疲れを知らぬ策謀家よ、私は関知したくない。そなたは私と私のロンバルディア人を破滅に導いている、汝、処罰の神よ。私は皇帝に罪を犯したくない。彼は我が封建領主だ。私は新しい味方の仲間から利用され、裏切られるよりも、むしろ地獄の皇帝のスペイン人達によって皮剥の刑を受けたい」。彼は諦めにかかっている者のように、安楽椅子に沈み込んで、尖った膝を突きだし、全く絶望して叫んだ、「皇帝の従姉妹か妹と結婚したいものだ。そなたが手配しても良からう。そなたが自ら自惚れている通り、偉大な政治家であるのであれば」。[彼は神聖ローマ帝国皇帝カール五世(在位1519-56)の姪と結婚した。五世はスペイン国王カルロス一世でもある]。

宰相は放恣な哄笑に弾けた。

「ジローラモ、笑うのも良からう。そなたはどんな急斜面の屋根から転げ落ちて、猫のようにいつもまた両足で着地する。しかし私は粉々だ。私と我が公爵領は、そなたの頭の中で沸騰する魔法のヤカンみたいなもので、蒸気となって消えて行く。ミゼレレ[憐れみ給え]、教皇[クレメンズ七世、1478-(1523-1534)本名、ジュリオ・デ・メディチ]と、サン・マルコ[ヴェネツィアの守護聖人]と百合[フランスの紋]との同盟だ。何という邪悪なクライマック

スカ。いやはや、神聖ならざる三位一体。道を歩くとき、教皇に信頼はしない、私もしないし、他の誰もしない。教皇はメディチ家の出だ。聖マルコはしかし、我が生来の敵であり、隣人であり、すべての聖人の中で最も悪辣だ。そしてフランスときたら。我が父上[ルドヴィーコ・スフォルツァ1452-1508、通称イル・モーロ、ムーア人、色黒]を牢の穴に閉じ込め、腐敗させた。そなたが売った哀れな兄マックス[マッシミリアーノ・スフォルツァ1491-1530]は、汝、悪漢よ、パリで扶養されている」。この王侯の少年の動揺した面影が崩れ、あたかも自分の家の守護霊が松明をゆっくりと下ろして、消すのを見ているかのようであった。一粒の涙がその痩せた頬に流れた。

宰相はその頬を父親のようにさすった。「阿呆なことを言わない、フランチャー君」と彼は慰めた、「私がマックスを裏切ったとでも。そんなことはありません。彼がスイス人の壊滅後に、降伏したのは、理の当然です。私は国王のフランソワと彼の年金について、協議し一致しました。その上更に十分値を引き上げたのです。彼自身私が実直に交渉していると理解していて、私に感謝しました。彼は一個の哲学者です。言うならば、世間を上から見下ろしています。彼はここから馬に乗って去るとき、すでに足は鐙にありましたが、なお英知の窺えることを言いました。『私は天を祝福している』と彼は言いました、『自分は将来、スイス人の粗野な拳にも、皇帝の長い指にも』、一 これは、フランチャー君、亡き陛下のことを言っていました、『それにスペイン人の闇討ちの手にも関係しなくて済むのだ』と。やはり、マックスはイタリアの王侯たる器ではなかったのです。鈍重で不純な点がありました。その点あなたは別です、フランチャー君。あなたが威儀を正すとき、あなたは王侯的なものを有します。それに弁舌の才があります。あなたのムーア人の比類ないお父上譲りのものです。あなたは年と共にそのうちイタリアで最も賢明で幸福な王侯とおなり遊ばされます、と申しておきます」。

公爵はその宰相を疑わしげに見つめた、「そなたが私を早くも売却して、私の隠居分をとんでもなく高く交渉するつもりでなければな」と彼は微笑した。

このとき、長く黒い司法服を着て公爵の前に立っていたモローネは懇ろに対応した、「優しいフランチャー君、あなたに私は何の悪さもしません。あなたは私の心になんて成長なさっているとご承知でしょう。私が正真正銘モローネである以上、あなたはミラノの公爵でいらっしやいます。しかし立派に勉強され、ご自分に最良のことを納得される必要がありますでしょう」。

「そなたの新しい焼きたての同盟について、私にはただの一つも結構な理由を教えてください。私はとにかく我が封建領主[皇帝ハプスブルク家]に反抗したくない。それは罪深いこと、危険なことだ」。

宰相は、自分の想像力が得手とするペテン像、眩惑術に関し素早く精神を巡らせ、十分にもっともらしい、効果的仮面を選んで、それを自分の動揺しやすい支配者に差し出し、公爵をびっくりさせて得心させようとした。

「フランチャー君」と彼は言った、「皇帝はあなたに対して門戸を閉ざしています。どんなに感動的な手紙を書かれましても、皇帝はあなたに返事して来なかった。皇帝は遠くで霞んで見えない青年です。そしてブルゴーニュの廷臣達の言いなりになる従順な蠟人形とされています。その点あなたが勝っています。あなたは物事を自ら判断します。しかしマドリード[皇帝兼任]の天候はあのブルボン[Karl von Bourbon1490-1527,シャルル]次第です、

贅沢な元帥です。元帥は手一杯の黄金を振りまき、その忠誠は紛れもないものです。元帥は自分の国王フランソワを裏切っていて、今や永遠に皇帝に奉仕すべく劫罰を受けています。しかしこのブルボンがミラノを欲しているのです。あなたの封土は彼のものと見なされています。彼は母方がゴンザーガですから、イタリアの王座を狙っているのです。何故皇帝はあなたが皇帝に数十万の金貨を支払ったのに、あなたに封土を与える決心ができないのでしょうか。皇帝はあなたのミラノをブルボンへと申し召しだからです。これが嘘なら私は毒を飲みます。ブルボンは自分の件は確実と思っています。少し前、あなたの命で私は皇帝の陣営に参りましたが、私は彼の愛撫を受けてほとんど窒息しそうでした。それどころか、私に一つ財布を差し出しまして、都合の良い時の準備金をくれました。勿論私どもはフランス支配の時から旧知の間柄です」。

それは嘘であり、本当のことでもあった。元帥はワインの酔いで頓狂になって、その客人の機知的思い付きに王侯的に報いたのである。

「で、そなたは受け取ったのか、恐ろしい」と公爵は驚いた。

「一点の疚しさのない気持ちで受け取りました」とモローネは軽薄に答えた、「フランチャー君、女は自分の操を守っているのでありさえすれば、与えられるものをすべて受け取って良いと詭弁家は教えているとご承知でしょう。これは宰相にも言えます。それでこの貧窮の時代、時に自分の給与を断念することも可能になります。それであなたも時に立派な絵を買えるわけです。あなたも結構な目の保養が必要でしょうし」。

スフォルツァは青ざめた。自分の城内と自分の領国におけるこのブルボンの恐ろしい像をイメージすると彼は正気を失った。この人物はすでに、
— その著名な裏切り以前に、
— 何年もフランスの副王として、この城と領国の二つを所有していたのである。「いつもそれは思っていた。この思いはどこへ歩いて行こうと付きまとう」とこの世にも哀れな者は嘆いた。「あのブルボンが私のミラノを狙っているという思いだ。ジローラモ、私を助けてくれ。同盟を結ぶのだ。躊躇わず、さもないと私は負けだ」。彼は飛び上がって、宰相の腕を掴んだ。

宰相は悠然と答えた。「いや、そう短兵急には行きません、フランチャー君。しかしひょっとしたら、今日のうちにも若干事を運べましょう。事情は好都合です。昨日はナーシ閣下が、
— ホラーチオの方ではなく、美男子のレーリオの方が、
— 私どもの両替商、ロリに立ち寄りました。それに幸いな偶然ですが、グイッチャルディーニ[Francesco Guicciardini 1483-1540, Gian Matteo Gibertiの役も含まれる]もこちらに着いています。これは剛毛ですが、ヴァチカンでは歓迎されています。この二人の機転の利く人物達は話せます。私はこのヴェネツィア人とフィレンツェ人とを殿下の夕食に招待しています。殿下は、無邪気にお喋りされますし、楽しい社交を好まれると承知しています」。

「いや、おぞましい、何にもならない陰謀だ」と公爵は嘆いた。

「それに、更に別の方が騎行されました。朝まだきの時です。この方は午後の三時に名乗り出ると申しています。まずは一眠りしたい、と」。

「他の者とは、誰だ」と公爵は震えた。

「ブルボンです」。

「あの青白い裏切り者にはペストの神罰を」とスフォルツァは叫んだ、「彼はここに何の用があるのだ」。

「彼本人があなたに告げるでしょう。ほら、大聖堂で晩祷の鐘が鳴っています」。

「宰相、そなたが彼の接待をしてくれ」と公爵は懇願し、ドアから逃げ去ろうとした。しかしモローネは彼の腕を掴まえて、彼を安楽椅子に連れ戻した。元帥が入室して来たら、殿下は起き上がって、立ったまま接待なさることです。短くて済みます」。宰相はその主君を椅子に掛かったままの外套を着せた。すると公爵は次第に、自分の不安と戦いながら、より王侯らしい拳措になり、公爵は自分の様になる体型を自覚し、自分の有する生来の上品さを帯びてきた。

その間、宰相は窓から外を覗いた。そこから城の広場とその背後の城砦の新たに建造された稜堡の輪郭が見えた。「結構」と彼は言った、「この忠実な元帥が立っているのが見える、自分のお供の十歩前だ。遠慮せずに、我らの新しい堡壘をポケットブックに描いている。私が行って、案内することにしましょう」。

かくてモローネと一緒に、この著名な裏切り者が入室して来た。細身の高い背丈で、自負心の強い、色艶のない頭部が繊細な面立ちと、顕著に黒っぽい目と共に現れた。不気味な、しかし偉大な姿であり、丁重にフランチェスコ・スフォルツァの前で礼をした。スフォルツァは彼を臆して見つめていた。

「殿下」とシャルル・ブルボンと言った、「恐縮して言上奉り、皇帝陛下の使節に対する謁見を願い申し出ます」。

フランチェスコ公爵は、自分は崇高な封建領主殿のご意向を謹んで拝聴する所存である旨、威厳を持って答えた。しかしそれから動揺し、自分の安楽椅子に戻って座り込んだ。

元帥は公爵が腰掛けるのを見ると、彼も椅子とか、少なくとも床几はないか、見回した。何もそのようなものではなくて、小姓も居合わせない。そこで彼は自分の高価な外套を、公爵の向かい側、大理石の床の上に投げて、洒脱に、左腕を支えにして、右腕を腰に当てて、しゃがんだ。「殿下、お許しを」と彼は言った。シャルル・ブルボンはその裏切り以来、自己憎悪という焼け払うような消耗の雰囲気の中で暮らしていた。誰も、最も高貴な者でさえ、この気位の高い男に対して、ほんの一表情でさえも、その行動を思い出させるようなことを敢えてする者はいなかった。つまり、彼の世紀の世論が一致して、尋常ならざる厳しさで彼に下した判決を彼に自覚させる者はいなかった。しかし彼はこの厳しい判決を知っていて、彼の良心もそれを証していた。彼は根本的人間蔑視を、自身の例で始めながら、世間全体に持ち込んだ。しかし彼は完全に自らを制御していて、誰も彼ほどに申し分なく振る舞う者はなく、誰も彼ほどに素っ気なく話す者もなく、どのような嘲笑も、どのような皮肉も、ほんの軽い暗示すらも、自分とそれにまた相手に向けられていなかった。ただほんの稀に、突然大地から吹き出る炎のように、地獄的機知や、シニクな冗談が彼の魂の状態を明らかにすることがあった。

元帥はしばらく考えた後、快適な声で、軽く頭を向けて始めた。「殿下にお願い致しますが、私の派遣が殿下には歓迎できないことでありましょうとも、ご容赦ください。私の存念は全く控えまして、私は殿下に、皇帝陛下の決議をお伝え致します。それは陛下がその閣議で決められたことで、即ち陛下の三人のイタリア人将軍、ペスカーラ、レイヴァ[Antonio de Leyva]、それに不肖私を聴取してのことです」。

「ペスカーラはどんな具合です」と宰相は尋ねた。宰相は二人の殿下とは同じほど離れて立っていたが、不遜に割り込んで来た、「パヴィアの戦い[1525年2月]での槍の傷は癒え

たかな」。

「御同輩」と元帥は軽んじて答えた、「尋ねられていないときには、黙っていることです」。

すると公爵がその質問を引き受けた、「元帥殿」と彼は言った、「パヴィアの勝者はどのような様子です」。

ブルボン丁重にお辞儀をした、「ご厚情のご下問、殿下に感謝致します。我が尊い親愛なる同僚、フェルナンド・アヴァロス・ディ・ベスカーラ侯爵は完全に回復しています。彼は弱音を吐かずに十時間騎乗しています」。それから彼は続けた、「殿下、これから本題に入らせて頂きます。苦い薬は素早く渡す必要があります。皇帝陛下は、殿下が新しい同盟から退かれることを強く望まれています。つまり殿下が、ローマ教皇と、フランスとイギリスの王冠、それにヴェネツィア共和国と結ばれた、あるいは結ぼうとなさっている同盟のことです」。

今度はミラノの領主が流暢に話し出して、上手に驚いて見せ、衷心から立腹して、こう誓った。自分はそのような同盟のことは何も知りません、と。もし上部イタリアで陛下に対してそのようなことが計画されていると自分が知っていたら、自分本人が間違いなく真っ先に、封土の義務に従って、遅滞なく皇帝に報告致しますでしょう、と。そして彼は手を臆病な心臓に置いた。

前方に低頭して、丁重に聴きながら、元帥はこの若い偽善者にその嘘を絶えず新たな言い回しで反復させた。それから彼は涼しい調子で、それとなく蔑視の同情の色合いを浮かべて、答えた。「殿下のお言葉に反論致しませんが、殿下にはこの間の事情が正確には伝えられていないと思わざるを得ません。私どもは見立て通りであろうと考えています。皇帝に対する邪悪な意図を持つ、フランスとイギリスの間の講和は、一つの事実でありまして、これはオランダから確かなことと私どもに伝えられました。同様に、上部イタリアでも私どもに敵対して武装されていると確信を抱いています。それで教皇に関して判断して見ますと、教皇も、私どもが甘いのを良いことに、隠れて私どもに敵対して画策しているように見えます。何がなされ、何がその途中であるか、区別することは、私どもの使命ではありません。私どもは予防致します。この同盟が」と彼はより小声になって意味深に付け加えた、「一人の将軍を見つけ出さないうちにです」。

それから彼は自分の要求を持ち出した、「殿下は、一ヵ月内に、中立を保つ意向であることの保証を私どもになさってください。これが皇帝陛下の切なる要望です。保証とは陛下の意味では以下のことです。スイス人の解雇、ロンバルディア人の休職による武装の半減、すべての一切の要塞建築の中止、それにこれなる機鋒鋭い男の」、 — 彼は頭で脇の方を示した、 — 「皇帝陛下への委任です。この保証がなければ」、 — そして彼は、あたかも馬に飛び乗りたいかのように、性急に立ち上がった、「これがなければ、九月末、真夜中に進軍ラッパを我々は吹きます。それより一時間早くもなく、一時間遅れもしません。そしてわずかの進軍でこの公爵領を占領します。殿下はお考えください」。彼はお辞儀をして去った。

モローネが彼にお供をしようとする、ブルボンは彼の頓狂な気まぐれの一つを思い付いて、宰相を戯けた身振りで拒絶した。「さようなら、我が友、お調子者」と彼は肩越しに浴びせた。

モローネはこの呼び掛けに憤然とした。これは彼の人物像のすべての真面目さと重みを否認するものに見えた。そして激してあちこち歩き回りながら、足で元帥の置かれたままの外套を踏み付けてしまった。しかし若い公爵は、宰相をしっかり抑えて、彼の腕にすがって、泣いた。「ジローラモ、私は彼の様子を見ていた。彼はすでにここを我が物としている気分だ。同盟を結べ、今日のうちにも。さもないと私はこの悪魔に廃位させられる」。

なおもこの寄る辺ない少年は宰相の腕の中にいたが、一人の老いた侍従が、少年の前で背を屈めて、厳かに述べた、「殿下の食事の用意が整いました」。両人は侍従に従った。侍従は勿体ぶった表情で一連の部屋を先導して行った。これらの部屋の一室、独自の出口のない或る私室があって、モスグリーンのビロードの壁掛けと、同じ色の四脚の床几があって、親密な打ち合わせのために用意された隠れ家の雰囲気があった。その中央に公爵は不思議そうに立ち止まった。というのは普段は空いているこの部屋の奥の壁に今や一枚の絵があって、それは自分の所有物としては知らないものであったからである。それは秘密裏に宮殿に運び込まれていて、公爵をびっくりさせるために用意されたもので、マントヴァ辺境伯[Federigo I. Gonzaga]からの贈り物であった。それは額縁に記載されていた。この二人のイタリア人はこっそりした足取りで、静かな敬虔な喜びに包まれて、力強い絵画に近付いた。白い大理石の小卓上で、等身大の一人の男と一人の女がチェスをしていた。この、女王らしい衣装の明るく温かい女性は、躊躇いがちな指でチェスの女王に触れて、同時に盗み見る視線で一緒にチェスをしている男性の表情を窺っていた。この男性は、真面目な鍛錬された面影の武人で、厳格に押し下げられた口の隅に一つの微笑を隠していた。

両人、公爵と宰相は、すぐに彼を見分けた。それはペスカーラであった。女性も彼らは容易に察した。ヴィットーリア・コロナ[Vittoria Colonna, 1492-1547, 90年生まれと以前思われていた]、ペスカーラの妻、イタリアの真珠以外、他に誰が考えられよう。二人はこの絵から離れられなかった。この絵の最大の魅力は高貴な優しい愛であって、この愛が女流詩人の柔らかな面影と、將軍の厳しい面影を温かい生命の中に溶かしている、そしてまたそれに劣らず両人の若さが魅力である、というのは傷跡のある日焼けしたペスカーラも英雄的な青年に見えているからである、と彼らは感じていた。

実際、両人は十八歳[同年齢ではなさそう]のとき、一緒に婚礼の祭壇に上がって以来、身も心も互いに忠誠を誓い合って来ていて、しばしば長く別れていても、夫人は貞淑な吊りランプの下[ミケランジェロのdie erythräische Sibylleのイメージ]、イタリアの偉大な詩人達に没頭し、夫は陣地の篝火の明かりの下、地図を眺めて過ごし、それからようやくまた侯爵の所有地のイスキア島で、そこを浄福の島として一緒に和合しているのである。このようなことを不埒なイタリアは知っていて、疑いもせず、微笑して賛嘆していた。

この絵の前に立っている二人も、女性の詩文への熱中と男性の自己制御のこの結合の美しさを感じていた。二人はその美しさを心で感じたのではなく、美術愛好の繊細な指の感触で感じていた。それで二人は、侍従が二人の招待客が食堂の控え室でお待ちですと遜って警告しなかったら、更に長く立っていたことだろう。二、三のドアを更に行く控えの間に達し、客人達の手短な紹介の後、食堂に入った。

今や四人は盛り沢山ではないが、しかし洗練された食卓に着席していた。手始めの軽い会話の間に、公爵はこっそりと客人達を観察した。この三人ほど、別々の感じのする顔はなかつたろう。彼の宰相の醜い頭部とグロテスクな面影は、勿論諷んじていた。しかし

今日は宰相が、燃えるような目を落ち着かずぎょろつかせていて、大胆な額の上の真っ黒な縮れ毛が逆立って見えるのが、公爵の目に付いた。その横では、グイッチャルディーニの頭部が、男らしい造作と共和主義的に誇り高い表情とで、とても高貴に際立っていた。最後にヴェネツィア人は、完全に柔らかな髪の色、軽く嘲笑的な目、愛敬のある暴露的な微笑を有して、美しい男の像となっていた。色合いの点でも三人の顔つきは異なっていた。宰相の顔は黄褐色で、ヴェネツィア人はラグーン[潟]の住民の透明な青白さを有しており、グイッチャルディーニはとても黄色く胆汁的に見え、公爵は思わず彼の健康について尋ねたくなった。

「殿下、私は黄疸を患っています」とこのフィレンツェ人は答えた、「私の胆汁が溢れ出たのです。これは不思議でもありません。教皇は私を教皇領地に派遣しまして、これをきちんとした国家にまとめさせたわけです。僧侶達が仕切っている所で、規律を申し渡すのです。もはやこれは話したくない、さもないと熱が出ましよう、ミラノの健康に良い空気と立派なドイツのニュースにもかかわらず」。彼は甘い鉢を退けて、自分で胡瓜サラダにオイルよりも酢をむしろかけた。

「ドイツからのニュースとは」と宰相が尋ねた。

「それはね、モローネ、詳しい筋から手紙を貰っている。暴動の農民ども[1525年の農民戦争]は蹴散らかされている。 — 最も素晴らしいことだ、 — マルティーノ師[ルター]自身が文書と言葉で農民どもに強引に敵対して現れた。これは嬉しい。私はルターの使命を信ずることになった。というのは、皆さん、世界を動かす人間は二つの職務を持っているからです。彼は時代が要求するものを実行します。しかしそれから、 — これが彼のもっと重い職務ですが、 — 彼は巨人の如く、世紀のほとぼしり出る飛沫に対抗して立ち、登場して来る阿呆どもや、邪悪な連中を背後に投げ飛ばします。この連中は、協力しようとしながら、正しい仕事をやり過ぎたものにし、恥ずかしいものにするのです」。

公爵は少しばかりがっかりした。というのは、戦争や暴動は、それが山々の向こう側で荒れ狂い、自分の想像力を刺激するとき、そして自分自身には危険が及ぶものでない場合、彼は大好きであったからである。しかし宰相は一つ溜め息を吐いて、真実の人間的感情を持って、言った。「ドイツでは今や多くの残虐なことが見られましよう」。

「残念なことだ」とフィレンツェ人は答えた、「しかし私は全体を目に留めている。今や反抗的騎士達[1522-23帝国騎士の反乱]や反逆的農民どもの収まった後、指揮を執るのは侯爵達です。宗教改革は、あるいはそれが何と呼ばれようと、救出されます」。

「貴方は共和主義者なんでしょう」と宰相は嫌味を言った。

「ドイツではそうではない」。

美男のレーリオも冗談を言った。「グイッチャルディーニ、貴方は教皇に宮仕えしているのでしょうか」と彼は囁いた。

いやに甘い微笑に不機嫌になり、自分の黄疸に敏感に反応して、グイッチャルディーニは大胆に主張した、「いや、皆さん、我が罪を罰するためなんです。教皇はメディチ家の出で、フィレンツェはこの家に屈しています。しかし私は我が父祖の地から追放されたくないのです。亡命者は最悪の運命です。それに自分の故郷を敵にして戦うことは、最大の犯罪です。教皇は私の出自を知っていて、私をそのような者として評価しています。私は教皇に文句を言われぬように、教皇に奉公しています。しかし口まで縛られてはいませ

ん。それで仲間内では喜んでこう発言できるわけです。マルティーノ師[ルター]は正義を述べており、正義はいずれ明らかになる、と」。

これは侯爵にとって面白かった。公爵は、偉大なドイツ人の異端が教皇の一人の代弁者によって賛美されるというのを体験して、一種他人の不幸は鴨の味を味わっていた。勿論このようなことが目の前で、自分の宮殿内で起きていることに、鳥肌の立つ思いがした。彼は、丁度果実を置いて、緊迫した談話を静かに傾聴している従者達を去るようにと仕草で合図した。

自らの椅子で前後に体を揺すっていたモローネが燃える目を、フィレンツェ人に投げかけていた、「グイッチャルディーニ、貴方は政治家です。私もこれを手慰みにしています。では、マルティヌス同志[ルター]正しい仕事をしており、この仕事は成功するだろうし、続いて行くだろうという珍しい命題を立証して頂きたい」。

グイッチャルディーニは静かにその杯を空けた。一方美男のレーリオはクッキーを砕いていた。公爵は我流に安楽椅子に自堕落に寛ぎ、モローネは感激して安楽椅子から飛び上がった。

「そうでしょう、皆さん」とこのフィレンツェ人は始めた、「どんな子供も、どんな阿呆も、あるものが反対のものに変化した後でも、同じものであると僭称されたら、例えば羊が狼に変わっていたり、天使が悪魔に変わっていたりしても、そう主張されたら、我慢ならないでしょう。さて、我々の教養あるイタリアにおいて、教皇達として継続している神聖な人物について、どのように考えようとも、この人物がただ善なること、美しいことしか欲して来なかったという一点は否定し得ないことです。ナザレ人[イエス]の仕事と職責を引き継いで来たその後継者達のことです、一ここでこの世紀の変わり目の四人を考えて頂きたい。我らの善良なジュリアーノを暗殺した陰謀者[Sixtus IV. 1471-1484 メディチ家と対立]がいます。それから神の恩赦の破廉恥な販売人[Innocenz VIII. 1484-1492]が現れます。彼の後には殺人者[Alexander VI. Borgia, 1492-1503,縁故主義者]で、かの不気味な優しい一門の父親です。童話の人物はいません。血と肉を持った怪物です。巨大な諸関係の中、現在我らが眼前に立っています。そして四人目は、先の三人と私は区別しますが、我らの偉大なユリウス[Julius II. 1503-1513 Borgiaの敵対者]で、英雄、軍神です。しかしかの三人よりももっと甲高く、穏やかな和平構築者[イエス]の対立物です。四回次々にこうした矛盾であって、人間的理性に対する一つの嘲笑です。これは終わりになります。かの最初の天上的人物[イエス]がこの蒸気を発する地獄や炎の武器鍛冶屋の許で消えてしまうか、あるいは同志マルティヌス[ルター]がこの人物イエスをその後継者や同僚達から鋭く切り出して、釈放するかであります」。

「それは面白い」と公爵は言った。一方宰相は取り憑かれたかのように拍手していた。

「サヴォナローラ[1492-1498]の説教をしますと」と美男のレーリオが発した、あくびを抑えていた、「マルティーノ師[ルター]を我らがヴェネツィアに有していたら、我らは彼を躡けて、実用的人間へと役立てていきましょう。しかしそのドイツ人らしい反抗的頭に任せていると、彼は、案ずるに、遅かれ早かれ、別な者、つまりサヴォナローラの後を追って、火刑台に上がりましょう」。

「いや」とグイッチャルディーニは陽気に答えた。「彼の善良なドイツ人侯爵達が[Friedrich der Weise von Sachsen]、彼の前に彼らの剣を置いて、彼を守ることだろう」。

「しかし誰がその侯爵達を守るのか」とヴェネツィア人が嘲笑した。

グイッチャルディーニは楽しげな笑い声を発した。「教皇だ」と彼は言った、「いいかな、皆さん。これはかの忌々しく繊細な必勝の詰み手で、世界史では偶然や、偶然以上のものが手にするものです。我々の教皇達が世俗化して、イタリアに一つの国家を所有して以来、教皇達にとって、この小さな王笏が長い司牧の棒よりも大事になった。この王笏大事故に、我らのクレメンス[クレメンス七世、1478-(1523-1534)本名、ジュリオ・デ・メディチ]は敬虔な皇帝に文字通り戦争を布告しかかかっていないだろうか。しかし自分に大砲をぶっ放すような教皇に対して、カールはその勇敢なドイツ人傭兵に[カトリック]教会へ戻るよう強いる気にはほとんどなれないだろう。逆に言って、異端的なドイツの侯爵が皇帝陛下に反対して、反旗を翻したら、教皇は差し当たり彼らの魂を呪うことはせず、秘かに彼らの武器を利用しないだろうか。しかしその間木は育って、根を広げるわけだ」。

このとき公爵は落ち着かない気分になった。彼の日課の楽しい時間となっていた。彼の犬どもや、鷹に自らの手で餌をやる時間である。「皆さん」と彼は言った、「このドイツ人の僧侶[ルター]は私の心を誘いません。私は彼の肖像を見たことがあります。鈍重なる百姓の頭部で、首はなく、深く肩の間に沈んでいます。彼のパトロン達、ザクセンの侯爵達はビール樽です」。

グイッチャルディーニは上品な杯を手の中で砕いた。そして一つの呪いを歯の間で漏らした。「この広間は蒸し暑い」と彼は詫びた。すぐに公爵は食事を終わりとした。「新鮮な空気を楽しむことにしましょう」と彼は言った、「また会いましょう、皆さん、日没後に、緑のキャビネットで」。

彼は部屋を後にして、自分が好感を抱いたヴェネツィア人に自分の建物やテラス、庭園を案内した。まだ最後のヴィスコンティ[Filippo Maria Visconti,1412-1447]が建造し、その靈感ある営みで満たしたかの比類ない施設が残っていた。かの「幸せの砦」の遺物で、その魔法の楼閣の内気なデーモンさながら、彼がイタリアをその完全な技法で支配した所であって、彼は自分の寵臣達が病気になると運び去らせて、決して死がこの大理石の門を叩くことのないようにしたのである。

豪華な昔のかなりの部分が朽ちているか、あるいは戦争で踏み砕かれ、散っていて、また新しく建造された稜堡となっていた。いずれにせよ、美男のレーリオの追従的賛辞のためにはまだ十分な分残っていた。そしてフランチェスコ・スフォルツァは二、三時間楽しく過ごした。ただ二人が、ブルボンがそのミラノの代官時代建てた馬場に足を踏み入れたとき、王侯的面影に影が差したが、しかしまたすぐに快活になった。彼はグイッチャルディーニの甲高い哄笑を聞き、それからこの本人自身の姿を目にした。グイッチャルディーニは、この土地風なヴェランダにシャツ姿でロンバルディア人の馬丁達を中心に座っていて、彼らとカルタをしながら、辛口の土地ワインを味わっていた。「共和主義者のお楽しみだ」。フランチェスコ・スフォルツァは嘲った、「君公との付き合いからの骨休みであろう」。美男のレーリオは曖昧に微笑し、二人はその散策を続けた。

モスグリーンキャビネットに最初に入って来た者は、食事が終わった後、すぐに入って来て、また出て行ったのでなければ、ジローラモ・モローネであった。彼は絵画に没頭して立っていた。しばらく彼は陶然とした目で、その優雅な女性を愛でていたことであろう。しかし今や、自分の視線を強いて、ペスカーラの顔を調べていた。彼がこの強力な面

影から読み取るにつれ、またこの面影の中に読み込むにつれ、それは、この興奮した男の中で、激しい身振りを伴うものになったり、途切れた声になったりした。「ベスカーラ、汝はいかなる手を打つのか」と彼は口ごもった。ヴィットーリアの罪のない目の中に浮かんでいる悪戯っぽい質問を憤然と繰り返して、真っ黒な眉毛を顰めていた。

その時彼は力強い一打を肩に受けた。「神々しいヴィットーリアに惚れているのか、汝、泥沼よ」とグイッチャルディーニは粗野な高笑いをして彼に尋ねた。

「冗談はさておき、グイッチャルディーニ、君はこの赤い胴着の男をどう思うのか」。そして宰相は將軍を指した。

「死刑執行人に見えるな」。

「そうじゃない、グイッチャルディーニ、つまり、この面影についてどう思うか。これはイタリア人風か、スペイン人風か」。

「モローネ、その混淆だね。両者の悪徳がある、偽造、残酷そして吝嗇だ。そのような男として私は経験してきた。君自身が、宰相、私にそう描いていた。覚えているか。ローマでだ。二年前、洒落者のジャコモ[16世紀30年代伝説の渡し守]が我々と一緒にテヴェレ川を渡してくれたときだ」。

「私が言ったのか。それなら一時的印象による間違いだな。人間も事柄も変化している」。

「事柄は変化しよう。人間は変化しない。人間は仮装し、気取る。しかし本性は変わらない。そうでしょう、殿下」。グイッチャルディーニは公爵に面と向かった。公爵が丁度入って来て、その後にヴェネツィア人が続いた。

四脚の緑の床几にそれぞれ人が座って、ドアが施錠された。開いた窓に輝く夕方の空が一杯に見えた。

「皆さん」と公爵は威厳のある表情で始めた、「全権はどの程度のものでしょうか」。

「不肖私は」と美男のレーリオは言った、「締結の委任を受けています」。

「教皇の御英知は」とグイッチャルディーニが続いた、「同様に決定をお望みです。同盟は長いこと温めてこられたお考えです。同盟は、それに相応しく、優先順位第一です。勿論至高の司牧の務めという慈悲深い作法の留保が付きます」。

「同盟は決定されました」と公爵は大胆に叫んだ、「宰相、報告を頼みます」。

「皆さん」と宰相は始めた、「フランス摂政はその手紙によりますと、マドリッドに幽閉中の国王の了解の下、かなりの軍勢を約束しました。そして同時に、最終的に、ナポリとミラノへの要求を、教皇に賛同して、諦めました」。

「素晴らしい」と公爵は歓声を上げた、「我々はスイス人を好きなだけ得られよう。彼らに鳴らしてみせるドゥカーテン金貨がありさえすれば、仰山に。そうだろう、宰相」。

「援助もありましょう」と他の二人が請け合った。

「しかし、諸兄」とモローネは迫った、「事は急ぎます。ブルボンが来たのです。我々の手の内は見られています。我々が武装解除しなれば、一ヶ月の猶予の後、三人の將軍でミラノを占領すると脅しています。先に攻撃しなければなりません。攻撃するためには、我々は司令官を選ばなければなりません。今、即刻です」。

「そのために我々は来たのだ」と二人がまた一致して語った。

「同盟に一人の將軍を配するのです」と宰相がまた繰り返した、「これはイタリアの運命を決するに等しいことです。我々はベスカーラ、現在のこの最も偉大な將軍に誰を対抗

させましょうか。同等の英傑を上げてください。我らの偉大な武人、アルヴィアーノ[d'Alviano,1455-1515]も、トリヴルツィオ[Trivulzio,1440-1518]も夙に墓碑が刻まれています。残りの者はパヴィアの戦いで亡くなっています。名付けて見てください、強力な姿を示してください。どこに私が掴める頼りになり甲冑の手がありましょう」。

悲しい気分一同は襲われた。そして宰相は、同盟者達の打ちのめされた様を楽しんでいた。

「我々には、ウルビーノ[Herzog von Urbino,1490-1538]がいるし、あるいはフェラーラ[Alfonso d'Este,1486-1535]がいる」とナーシが言った。しかしグイッチャルディーニは的確に説明した。フェラーラ公爵を教皇は自分に背いた臣下として除外するでしょう、と。「ウルビーノ公爵を選ぶことにしましょう。彼はしみたれて、利己的です。広い視野がなく、永遠の引き延ばし屋で、優柔不断です。しかし経験を積んだ武人です。我々には他に誰もいない」とフィレンツェ人[グイッチャルディーニ]は額に皺を寄せて言った。

「メディチ家に誰か[Giovanni Medici,1498-1526、黒帯、傭兵隊長]いるだろう、グイッチャルディーニ、貴方の心にかなう若い無鉄砲者がいるだろう」とヴェネツィア人が彼をからかった。

「ナーシ、私を嘲るのか」とグイッチャルディーニは怒った。「若い極道が我らの愛国的案件を穢していいか。無鉄砲者の若造が、我らの最後の戦いを軽薄な賭博風戦争でスッてしまっているか。ウルビーノは戦争を引き延ばして、致命的熱伝染病の助けを待ったり、皇帝軍の傭兵達の逃亡を待ったりするだろうから、少なくとも我々の損にはならんようにするだろう。彼を選ぶことにしよう」。彼は嘆息した。そしてこの瞬間、憤然と宰相に食ってかかった。宰相が彼の話しを絶望的な物真似の仕草で追っている姿を目にしたのである。「阿呆、人の物真似は止せ」と彼は嘯みついた、「...殿下、お許してください、腹が立ちましたので。殿下は私に賛同と思いますが、...」。公爵は宰相の方を見た。

「いいでしょう」とモローネは言った、「我々は賛同します。しかし渋々の賛同で、殿下は我らの同盟の魂を欠いた出だしに渋々賛同されます」。公爵は悲しげに頷いた、「いや、駄目です」と宰相は叫んだ、「殿下はそうされません。殿下は退かれます。殿下は、この公爵領の最後の力を使い果たす責任を負えません。殿下は戦場に出ません。最初から意気阻喪して、打ちのめされてしまっては。同盟は延期です。それとも我々は一人の勝利する将軍を求めるかです」。

他の二人は不機嫌に黙っていた。

「私は一人案があります」とモローネは言った。

「案があるのか」とグイッチャルディーニは叫んだ、「畜生、それを早く言え。言うのだ。ペスカーラに対して誰を天秤に上げるのだ」。

「宰相、話してください」とヴェネツィア人も急かした。

モローネは、床几から飛び起きていたが、一歩前進して、強い声で語った、「ペスカーラに対抗して、誰を天秤に上げるか。誰が引けを取らない者か。ペスカーラ本人です」。

一同はある驚愕で固まった。公爵は目を剥いて、その尋常でない宰相を凝視した。一方グイッチャルディーニとヴェネツィア人はゆっくりと手を額に持って行って、考え始めた。兩人とも、賢い者として、モローネの言っていることを難なく察した。彼らは、どんな種類の裏切りも破約も日常茶飯である世紀の申し子であった。通常の傭兵隊長が問題であれ

ば、つまり仲間を最も金払いの良い者に売却するかの侯爵的山師や平民的山師が問題であれば、二人は宰相の不遜な言葉をその唇から先に奪い取っていたことであろう。しかし皇帝軍の筆頭指揮官となると、ペスカーラとなると、出来ないことであった。しかしペスカーラでいけない法はない。するとモローネが情熱的に語り始めたので、二人は彼の言葉に聞き入った。

「皆さん」とモローネは言った、「ペスカーラは我々の許で生まれています。彼はスペインに行ったことはありません。最上のイタリア人女性が彼の妻です。彼はイタリアを愛しているに違いない。彼は我々の一員です。我々が、まだ残っている片方の腕で、すでに自由にならないもう一方の腕を解放しようと思うこの運命の時に、我々は、この故郷の最高の息子、そして彼らの無二の将軍を我が物とします。我々彼の許に出掛け、彼を抱き締め、彼に呼び掛けようと思います。ペスカーラ、イタリアを救え、イタリアを引き上げろ、と。さもないと貴様も地獄に道連れだ、と」。

「演説はもうよろしい」とグイッチャルディーニは叫んだ、「宰相、君は空想逞しい。放恣に想像力を飛躍させて、不可能なことを考え出し、発言しようとしている。しかしこれは、ひょっとしたら、もっと仔細に見てみると、全く不可能ではないかもしれない。しかし話しを止めて、分別ある者達に、君が熱にうなされて、予言したことを、きちんと点検、検証させてくれ。狂った者のような物言いは止めて、腰掛け、私に話しをさせろ。

皆さん、しばしば、そして絶望的状况においては常に、大胆さが最良の、そして唯一の救いです。ウルビーノの指揮下での戦争は空ろな目の仮面のように、我々を凝視します。彼は我々を段々と麻痺させ、方法的に我々を破滅させると、我々は皆感じます。むしろ首をへし折るような冒険です。従って、これは賛成。私の意向としては、ペスカーラを試すことにします。彼が我々のことを皇帝に裏切ったら、我々は皆破滅でしょう。しかし彼が自分のデーモンに屈しないか、誰にも分かりません。まず我々は自問しなければなりません。ペスカーラとは誰か。私はこう答えましょう。天才的な計算家であって、可能性を鋭く区別し、吟味する男である、物事をその惑わしの外貌の下、真の価値と真の力を調べる習慣を有する男である、と。そうでなくてどうして彼が、現にそうである、ビコッカとパヴィアでの勝者となりましょう。我々が彼の許を訪ねたら、彼はまず憤然と怒って吠えることでしょう、彼がきつとすでに自ら、ひょっとしたら単に自分の働き続ける分別の訓練に過ぎないとしても、数時間目に留めて、考察したことのある事柄でしょうが。それからまた彼はゆっくりと丁寧に吟味することでしょう。我々が彼に提示する素材について、つまり我々のイタリアについて、ここから一つの軍隊が、後には一つの領国が形成されるかどうか、一 それに自分の報酬について、吟味しましょう。この素材は確かに高貴ですが、しかし脆いもので、一つの強力に造型する力を必要としますから、我々は彼に最大の報酬を提供する必要があるでしょう。一つの王冠です」。

「どこの王冠です」と公爵は不安一杯にどもった。

「一つの王冠と、殿下、私は申しました。公爵帽ではありません。ナポリの美しい王冠を私は考えました。これは敵の手にあり、つまり空いています。それにこれは教皇の一つの封土です」。

「我々が王冠を配るのであれば」とヴェネツィア人は嘲った、「何故ペスカーラに即刻お伽噺の王冠、イタリア全土の夢の王冠を差し出さないのです」。

「夢の王冠です」。フィレンツェ人の顔が痛々しく痙攣した。それから彼は反抗的に語った。自分と周りの者達を忘れていた、「イタリア全土の王冠です。ペスカーラが我らの軍の先頭を騎乗すれば、その王冠は名付けずとも、彼の前に浮かぶことでしょう。彼がその王冠を、我らの歴史の最高の者として、この理想の王冠を掴み、握って欲しいものです。この王冠を求めてすでに幾つもの手が、最も不遜な手でさえも、差し出されたものです。彼の頭上で現実になって欲しいものです。そして」と彼は大胆に言った、「我々は今日、どんな通常の尺度も忘れて、我々の最終思考、衷心の願望を明示しようとしていますから、皆さん、こう理解されたい。ペスカーラが、可能性として、前もって選ばれた者であれば、時代の中に大いなる便宜が見られ、星々の中に幸運の約束が見られましょう。彼がイタリアを建造するのであれば、彼がイタリアを支配もしましょう。しかし、宰相、私は君を一人の空想家と呼んだが、君よりもはなはだ空想している。我々は胎児の国から現実へ戻って、こう質問することにしよう。誰が誘惑者の役割を引き受けるか、と」。

「私はクルティウス[ローマの伝説、地割れに飛び込み神々を宥めた]のように深みへ飛び込もう」と宰相は叫んだ。

「まさにその通り」とグイッチャルディーニは同意した、「君が打ってつけだ。他の者であれば、声が震えよう。そしてペスカーラの前に出て、ペスカーラと共に彼の裏切りについて話すとなると、恥ずかしくて、縮んでしまうだろう。君は鉄面皮だから何でも平気だ。それに君の道化の鈴の帽子が、他の者なら途方に暮れる状況、錯誤から君を救い出すことだろう。ペスカーラが同意しないならば、彼は君の道化の面を見て、君を道化師と思っているわけだ。彼が同意すれば、彼は君の悲劇的身振りと滑稽な皺の中に、この件の真面目さと偉大さをすでに見てとれると判断しているのであろう。君が行けばいい。我が息子よ、そしてペスカーラを試すのだ」。

物思いに耽って床几にしゃがみ込んでいた公爵は丁度明かりを求めて叫ぼうと思っていた。黄昏が暮って、公爵は暗闇を恐れていたからである。そのとき彼は物事が思いがけず極端になっていることを知り、不安になった。「宰相、そなたは行ってはならない」と彼は禁じた。「私はこの強力なペスカーラとは何も関知したくない。我々が彼を得たら、彼はまず、戦争を誘っている私の平原と、彼らが要求している私の要塞を奪うことだろう。彼がそれを得たら、それを維持しようとするだろう。しかし彼が負けたら、私はまず最初に償うことになって、容赦なく我が封建領主の皇帝の命令に服することになる。いや、諸兄の考えが透けて見える。諸兄は皆、この方すらも」、 — 彼は悲しげに宰相の方を見た — 「諸君のイタリアのことだけを考えている。私の価値などは」、 — 彼は平手の上を吹いてみせた、 — 「この程度のものだ。しかし私は君公であり、我が遺産、我がミラノを欲する。ミラノしか要らない。ジローラモ、そなたはペスカーラの許へ行ってはならん。諸々の仕事がある間停滞しよう。私はそなたを一時間たりとて失いたくない」。

このとき、美男のレーリオが言葉を受けて、囁いた、「殿下がそのご意向であれば、殿下の反対で我らの計画は潰えます。別の計画を申しましょう。我々とはにかく、奇妙な具合に、我らの司令官を皇帝の將軍達に目を付けておりますので、ブルボンが大きな提示の見返りに、二回目の裏切りを決意しないか試してみたいかがでしよう」。

公爵は縮み上がって、「そなたはいつ旅立つのだ、ジローラモ」と今度は尋ねた。

「まずは、宰相」とグイッチャルディーニが割り込んだ、「君をローマへ連れて来るよ

う、私は依頼を受けている。教皇は君をもっと良く知りたいと願っておられる。教皇は君を高く評価しているのだ。教皇は君をプロテウス[変幻自在]宰相と呼び、君のことを、君の頓狂な目にもかかわらず、イタリアで最も賢い男達の一人と主張している」。

「それは結構なことだ」とヴェネツィア人は述べた、「ジローラモ・モローネがペスカーラの誘惑者として登場する決定的時が引き延ばされるからな。私はこの時に先立って、世論一つの理由、一つの根拠を与えたいと思う。これについて詳しく述べてよろしいかな、皆さん」。

このヴェネツィア人の色褪せた顔は、黄昏の中、まだ区別することができる限り、情熱的表情を帯びていて、そして力のこもった声で話した、「宰相が重要な名前を発せられてとき、我々は疑いもなくびっくりしましたが、しかし本来は驚くことではありません。パヴィアでの負け戦のために我々は皇帝の足許に我らの全イタリアをなすすべもなく投げ与えましたが、その後世論は自ずと脅威的全権の皇帝に対し一つの柵を求めており、物事の自然な流れで我々の同盟が育って来ています。同時に世論は報酬に関心を示していて、ペスカーラには、その完全な勝利とフランス王の捕縛に対し、相応しい処遇を求めています。皇帝の出し惜しみと忘恩は世間周知のことですから、世論の結論はこうなります、皇帝はその将軍を満足させることはできないだろう、将軍は余所にその代償を求めることだろう、と。今や世論はこの二つのことを結び付けています。つまり、我々のすでに微光で浸透しつつある愛国的同盟とペスカーラというより大きな獲物の可能性です。かくて彼の異動は、それが実現する前に、信憑性の高いものとなっています。この根拠のある一般的な見解に対し、巧みな手さばきで、納得の行く形を整え、流暢な舌で、イタリア全体のために分かりやすい説得を行うこと、これがまさに肝要です。さて、最近遍歴の才能が我々の間に出現しました。大いに前途有望な若者で、多分まだヴェネツィアに滞在していることを願う次第ですが、...」。

「あのアレティーノ[Pietro Aretino,1492-1556,後の頁のアレティヌスと思われる]には一蹴り入れてやれ、奴は私をぼろくそ中傷した、...」、「神々しい男だ[アレティーノはミケランジェロ風に、神々しいと自称した]。彼は私をイタリア随一の君主と呼んだ」とグイッチャルディーニと公爵がこもごも叫んだ。

「この男は」とナーシは微笑した、「やはりここでもその値打ちが知られていると分かります。彼の手紙は、本当の人物や架空の人物宛のものですが、何千もの部数でばらまかれて、一つの力を有し、世間を支配しています。私は彼にかなり強力な額を送りましょう。貴方らは美しい色合いの毒茸の苗床に仰天されることでしょう、これが一晩でイタリアの全土壌から育ってくるのです。詩文や論考、書簡のやり取り、仮装したり、裸であったり、脅したり、誘ったりする人物像や文言のバッカス祭的な飛び跳ね、よろめく、輪舞で、すべてがペスカーラを中心に回るもので、彼の裏切りの蓋然性と美しさを中心とするものです。かくて克服しがたい一般的な確信が醸成され、これがペスカーラを我らの許へ引き寄せ、同時に彼の立場を — これがキモです、 — 皇帝の宮廷で徹底的に最終的に掘り崩し、それで彼は、自分が望もうと望むまいと、必然的に裏切り者にならざるを得ないのです」。

「それは駄目です、閣下」と宰相は暗闇の中から叫んだ、「諸兄は私の芝居を壊しています。イタリアの解放者は、完全に自由に意志決定をすべきです。悪魔的籠絡の犠牲者と

なるべきではありません、...」。

「宰相、君が倫理的懐疑を持ち出すとは、見上げたものだ」とグイッチャルディーニが遮った、「いいか、私の心も激して、救い難い罫に落ちた者に同情を禁じ得ない。しかし私は人間らしい情動に黙れと命じ、政治家として行動しよう。閣下の手段は、今晚発案されたものの中で、比類なく最も悪辣なものであるが、しかしまた最も賢く、効果的なものだ。今ようやくこの件は、まことにペスカーラにとって、危険なものとなって、彼の裏切りが現実味を帯びて来た。仕事にかかるか」。

「彼はここにいて、聞き耳を立てているぞ」と公爵は金切り声を上げて叫び、皆が竦み上がった。彼らの視線は公爵の不安げな視線を追った。まばゆい銀色の円盤として地平線上に上がって、その斜めの光線を小さな部屋に投げ込み始めた月が、絶妙にチェスの勝負に映えていた。ヴィットーリアの浮き出た目が怒って見つめていた。あたかも、ペスカーラ、あなた聞きました、何と不埒なことでしょう、と語っているようであった。今やその目はこう尋ねていた。ペスカーラ、あなたどうするつもり。ペスカーラは、口の隅に一つの微笑を浮かべて、死神のように青ざめていた。

第二章

かの高貴なヴァチカンの部屋の広く明るい窓の壁龕に、その部屋の床や壁にはラファエロが人間精神の勝利を崇高に描いているのだが、立派な面貌の一人の老人が、威厳のある姿で座っていた。老人は慎重に彼の足許に座っている一人の女性に語りかけていた。彼女の頭部は、濃いブロンドのお下げが巻かれており、老人を上向きに見ていた。彼女は、その血管に温かい人間の血が流れていて、ウルビーノの男[ラファエロ]が素晴らしい女性の姿で具体化して描いている法学と神学の権化同様に美しかった。その長い曲がった背中と流れるような白い衣装の老人の教皇は、教訓的に若い女性とお喋りしている賢明な貫禄年配おばさん[Matrone]に似ていた。

まだヴィットーリアがその床几に座ってから少しも長く経っていなかったのであろう、というのは、教皇はそのときようやく彼女の夫、ペスカーラ侯爵の状況を尋ねていたからである。「パヴィアでの脇腹の傷はもう感じられないのですか」と彼は言った。

「侯爵は完治しています」とヴィットーリアは無邪気に答えた。「脇腹の傷はもっとひどい額の傷と同様に塞がって来ています。侯爵は恵み深い皇帝がお認めになった休暇に入りましたら、教皇猊下にご挨拶に参上することでしょう。そして休暇になれば、私ども浄福の二人は」、 — 彼女は歓呼の目でこう述べた、 — 「私どもの海の島[イスキア島]で一緒になります。しかし侯爵本人は休暇を差し当たりまだ取っていません。これは、いつもより、希望があるとも、ないとも言えない政治的状況のせいであるというよりは、 — 彼はそう書いておりますが、 — 丁度今は軍を去りたくないからだということです。この殺人者は」、と彼女は微笑して言った、「つまり改良された銃器と新しい演習に取り組んでいて、外せないのです。これをまずはある程度の成果にまで持って行きたいのです。それで侯爵は、私とまずここローマで会う予定だったのですが、ノヴァーラの彼の陣営まで来るように命じ、私は明日旅します。私の駕籠に乗って蝸牛のように進むのではなく、私の元気なトルコ産の馬に鞍を置いて参ります。翼を願う気分です。夫の傷が癒えて欲し

いと願っています。夫の顔を私は、夫を不滅の者としたかの有名な戦闘以来、見ていません。それで私は我が心の喜ぶがまま、教皇様の許へ駆けつけて、猊下に辞去のご挨拶に参ったのです。これが私の訪問の目的でございます」。そのようにヴィットーリアはローマの泉のように、溢れるように、こみ上げるように、話した。

彼女の率直な言葉を聞いて、ペスカーラは自分の活動を、教皇も愛好する曖昧さの中に同様に留めていると、教皇は察知した。ただ違いは、若いペスカーラは決定的瞬間には稲妻のようにその雲から飛び出すが、教皇クレメンスの方は、決断出来ずに、自ら立腹しながら、自分の雲の中に隠れたまま留まるという点である。教皇は老齢による過度な知恵故に、その瞬間を掴み損ねてしまうのである。教皇は別の比喻で話せば、鉛筆を長いこと鋭く削って、とうとう腹立たしいことに、まことに繊細な先端が折れてしまうのであった。そこで教皇はこっそり歩み、手探りをする。

「侯爵は休暇を望まれたのか」と彼は不思議がった。「辞任かな。アキレウスはテントで怒っている、と私は聞いたが」。

「それについては存じません。そんなことは信じられません、教皇様」とヴィットーリアは答えて、気位の高い身振りで頭を後ろに反らした。「何故辞任です」。

「薔薇色のブリーゼイス[捕虜のこの女性を巡って、アキレウスとアガメムノン対立]のためではない、令夫人」とクレメンス教皇は寒い冗談に苛立って答えた、「捕縛した国王の報酬とそれにソーラとカープリの諸塔をだまし取られたからだ」。

教皇はこう述べて、二つの周知の事実を当てこすっていた。ナポリの副王がパヴィア近郊の戦いでは、ペスカーラに先んじて、フランス国王の剣を受け取っていた。かくて、国王陛下という獲物をスペインへ連れて行く榮譽を先取りしていた。また皇帝はソーラとカープリを強欲なコロナ達に、つまりヴィットーリア自身の親戚に贈って、同じようにそこに目を付けていた偉大な將軍には贈らなかったのである。

ヴィットーリアは不機嫌に赤面した。「教皇様、貴方は私の夫のことを軽くお考えです。小者のペスカーラを想定されています。私を去らせて、旅をさせ、貴方のペスカーラは私のペスカーラではないと納得させてください。急いで本物のペスカーラの許へ参ります」。

彼女は立ち上がって、教皇の前に気高く立っていたが、しかしすぐにまた深く、謙虚な身振りでお辞儀して、教皇の祝福を嘆願した。そこで教皇は、また腰掛けるよう促し、彼女は従った。クレメンスはこの機会を逃すわけに行かず、ペスカーラをその妻の愛しい口を通じて、離反へと説得することにした。しかしコロナの場合、眼前に明らかなように、暗示や諸々の準備は何の効き目もないことが容易に見て取れた。曖昧なことには、彼女は憤然とするか、あるいは何か意味不明な、詰まらぬこととして目もくれず、片隅へ投げ棄ててしまうかであろう。教皇は、真実に迫って行く、この真実の性情の女性に対しては、事柄を明確な輪郭で描き、完全な光を当てる必要があったろう。さもないと彼女はこの事柄に一瞥もしないだろう。しかしこれは教皇の流儀に反することであり、教皇は重たい溜め息を吐いた。

その時、教皇は、機知にも策謀にも欠けていないある逃げ道を見つけた。教皇は漁師の指輪[ペトロ由来、教皇の指輪]の手を、金鍍金の鍵[天国の門の鍵]の付いた青いピロードの装丁の本に置き、ヴィットーリアに無邪気な表情で尋ねた。「愛しい娘よ、そなたはまた何か詩文を紡いでいるかな。まこと、私はそなたのミューズの崇拜者の一人だ。善なること、

神聖なことが主題だからな。私はこのミューズが格別好きだ。倫理的諸問題を提起し、それに答えている。しかし最も難しい倫理の問題をまだそなたはソネットで扱っていないぞ。何のことか、分かるか、ヴィットーリア・コロナよ」。

コロナにとって、教皇のこの突然の思い付きは不思議なものではなかった。彼女はここでは自分の分野に立っていたし、それに彼女のすでに称賛されていた名前の許では、学者であれ、素人であれ、多分よく類似の質問を彼女に向けていたであろうからである。彼女は自分を自覚し、闘争的に自分の細身の体を持ち上げていた。彼女の両の目が光り輝いていた。「最大の倫理的戦いは」と彼女は躊躇わず言った、「二つの至高の義務の間の戦いです」。

かくて教皇は水路を獲得した。「その通り」と彼は神学的真面目さで保証した、「つまり、見せかけの二つの至高のものだ。というのは、両者の一方が常により高いものだからだ。さもないと倫理的世界秩序は存在しないであろう。私は神と聖人達に祈ろう。これらがそなたの加護をして、そなたにより高い義務を認識させ給うようにな。そなたが、これらの方を、より取りに足らぬものよりも優先するようにな、そなたとそなたの夫がな。というのも、この偉大な重大な戦いがそなたら兩人に関わってくるであろうからな」。

ヴィットーリアは青ざめた。というのは、彼女にとって突然アカデミックな質問が生きた肉体に斬りかかってきたからである。しかし教皇は厳かに語った、「我が娘よ、聞きなさい。私が今そなたに話していることは、すべて侯爵にも話しているつもりのことだ、私の言葉はそなたを通じて伝わるのだから。いいかな、教皇席は、今この時、皇帝陛下から別れて、皇帝陛下に挑戦する。つまり私は君公と司牧の二人になる。君公となるのは、これは今日イタリアの運命の時だからだ。これを無為に過ごせば、我々イタリアの君主は皆数世紀の間、スペインの桎梏に服することになる。そなたが誰に尋ねようとも、皆事情通はそのように判断する。しかし至高の司牧としてもそうだ。かの謎めいた青年の裡に、この青年はその血によって諸民族を、その頭上の帝冠によって諸王冠を和合させるのだが、旧来の皇帝の考えが蘇るのであれば、我が昔の教皇達のすべての苦心の仕事が水泡に帰すことになろう。そして教会はこの新しい政治でより窮屈に縛られ、より深く屈辱を受けることになろう。つまりかのお伽噺のようなゲルマンの怪物ども、ザリエル王家やシュタウフェン王家の鉄の拳で縛られたときよりもな。そのような次第だ。イタリアが恐怖と希望で一杯になっていることが、そなたには初耳かな」。

「侯爵には信じられないことでしょう」とヴィットーリアはすぐに赤くなって言った。教皇は微笑した。「教皇様、忘れないでください」、と彼女も同様に微笑した、「私はコロナ家の娘です。これは皇帝派です」。

「そなたはローマの女性だ、我が娘よ。それにキリスト教徒だ」とクレメンス教皇は諭した。

間が生じた。それから彼女は尋ねた、「それでベスカーラは」。

「ベスカーラは」と教皇は答えて、声を潜めた、「皇帝の臣下というよりは、むしろ私の臣下だ。彼はナポリ人だし、私はナポリの封建領主だ。ヴィットーリア、私が軽々に話していると思うなよ。私は世界の良心だから、そうできるはずがない。まこと、言っておくが、私は眠れぬ夜、苦悶の朝までき、ベスカーラに対する自分の権利を検討してみた。自分の政治的見識に自信がなくて、二人の最も偉大なイタリアの法学者に助言を請うた。

アコルティーとそれに、...ええと...もう一人」。

教皇はその名前を賢明に舌先で潰した。この二番目の法学者、チェルヴィアの司教は、極めて買収され易い恥ずかしい悪評の男であると丁度思い付いたのであった。「兩人とも」
ー クレメンス教皇は漁師の指輪[教皇の指輪ペトロ由来]で青い本をノックした、ー 「同意した、厳格な法で見ると、皇帝の部下というよりは、はるかにむしろ私の部下である、とな。そして兩人とも、私はその上、私の鍵の職権[天国の門の鍵]によって、皇帝が私の敵になっている今、教皇座の敵に対して誓った侯爵の忠誠の誓いを解除する権能を所有していると私に思い出させてくれたのだ」。

教皇はすでにゆっくりと立ち上がっていた。「それでそうするつもりだ」と彼は司祭的に言った。「私はフェルナンド・アヴァロス[ペスカーラ]を皇帝から解放し、その忠誠の誓いを無効にする。私はペスカーラ侯爵を教会の旗手に、そして同盟の将軍に任命する。これは神聖同盟だ。キリストがその後継者の人物となって、その筆頭に立っているからな」。教皇は休止した。

今や教皇は右手と左手を同じ高さに上げて、あたかもコロナの頭に一つの王冠を置くかのような仕草をして、コロナは、驚愕して、跪いた。教皇は強い声で言った、「私と神聖な教会に対する我が旗手の功績に前もって報いて、私はフェルナンド・アヴァロス・ペスカーラ侯爵をナポリの国王に就任させる」。若い王妃は喜びで震えた。彼女は王位に値すると思った。黙って、両頬を紅潮させて、彼女はその祝福を受けた。それから彼女は立ち上がって、整然とした、しかし急ぐ足取りで、去った。あたかも昇格した夫にその王冠を運ぶのも待っておれないかのようであった。

教皇は、自ら興奮して、素早く彼女の後を追って、それでほとんどそのスリッパを失いそうになった。敷居の所で、教皇は彼女に追いつき、青いビロードの巻を渡そうとした。「侯爵へ」と彼は言った。

すると教皇は彼女の背後に、モローネと一緒にグイッチャルディーニを目にした。二人はひょっとしたらドアの所で少しばかり聞いていたかもしれない。熱い歓喜で一杯の輝く目をしたヴィットーリアは、宰相にとって得がたい奇蹟に思え、宰相はほとんど正気を失った。しかし速やかに気を集中させて、教皇に懇願した。「教皇様、不浄の私を、天上的ヴィットーリアに紹介してください」。これに対しクレメンスは彼の肩を軽くピシャと叩いて、彼のことを言葉で紹介した、「ミラノの宰相です、聖なる精神が宿り始めている俗界の申し子です」。それからヴィットーリアの耳に囁いた。「モローネ、道化師だ」。

ヴィットーリアは自分の幸運に混乱して消えた。一方教皇も自分の幸運に混乱していて、大事な青い本を渡し損ねていた。というのは、教皇は美しいこの夫人を見て夢中にのぼせて行った大胆な象徴的行動にまだ全く陶醉していたからである。しかし今は自分が平常心を忘れていたことを感じた。教皇は手の仕草で、フィレンツェ人[グイッチャルディーニ]とロンバルディア人[宰相]の訪問を断り、ラファエロの間に戻った。

謁見を断られた二人は互いに一瞬顔を見合わせたが、それからグイッチャルディーニは笑って宰相の腕を掴んだ。彼を穏やかな段差の階段の下、ヴァチカンの庭園へと連れ出した。そこでは影の通り道を探す必要はなかった。天は黒い雲で覆われていたからである。

「元来」とグイッチャルディーニはお喋りした、「私はこの老公が好きだ。とても繊細に考え、とても慎重に話すけれども、しかし内面では、私同様、情熱的で、怒りっぽい人

間なのだ。今は極度に興奮していた。コロナに我らの危険な内密のことを打ち明けたからだ。君は恍惚となって勿論見落としていたろうが、教皇は彼女の手にあるアコルティーとアンジェロ・デ・チェジスの鑑定書を渡そうとしたのだ。偽証を聖書の箇所を称えながら述べるこの二人は、買収される悪漢だ。ちなみに、クレメンスがその晩年にかくも大胆なこと、先の見えないことを敢行するという事は、相当な事柄だ。その上、教皇は、自分自身に深く不信の念を抱いていて、自分の幸運の星を信じないまま敢行しているのだ。というのは、教皇は内心自分をついてない男と見なしているからだ。これは良くない。その点あのレオ[レオ十世1475,(1513-1521)本名、ジョヴァンニ・デ・メディチ]は別だった。いつでも自信たっぷり、勝ち誇っていた、だからいつでもついていた。一方現在の教皇は最近私にエレミアの調子で予言したが、この永遠の都がすでに略奪されて、これらの屋根から」、

— 彼はヴァチカンを示した、 — 「煙と炎が上がるのが見えるというのだ[1527年の当てこすり]。それでも教皇は皇帝に対する戦いを始めた。これを私は高く評価している。彼にとってもまずは自分のフィレンツェが大事なのだが。教皇は血管にまだ血が流れていて、教皇はこのカピトルの丘を高慢なスペイン貴族がナポリやブリュッセル同様に堂々と闊歩するのを見ると、残っている限りの歯で、歯ぎしりしている。しかし宰相、君は何を夢想しているのだ。女のことか、勿論だな」。

「私は古代ローマの男のように、ローマの女に話しかけたい」と宰相は叫んだ。

「結構。ただ感激して、君のトガ[古代ローマの長い上衣]の下から古典的な君の山羊足を覗かせないように用心しろよ。せいぜい慎み深くし、大言壮語して、しっかり彼女の虚栄心を掴むことだ」。

「彼女の心を掴みたい」。

「つまり、彼女のインク壺を掴むことだな。詩文を書く女の心はインクで満たされているからな」と誹謗好きなフィレンツェ人は戯れ言を言った。「しかし、いいか、宰相」、

— そしてグイッチャルディーニは彼の腕を強く抓んだ。 — 「我らの計画で眠れなくなっているのは、教皇一人だけではない。私も今週はまだ目を閉じたことがない。絶えず私はこのペスカーラのことを考えざるを得ない。皇帝に対するペスカーラの憤懣を私は重く見ていない。それは一夜にして宥められよう。同様に妻の影響も重く見ていない。彼女は彼に教皇の知らせを伝えることは許されよう。それ以上彼は彼女に耳を傾けない。しかしまた私は彼の封建的忠誠心も信じていない。ペスカーラはエル・シッド[シッド・カンペアドール、Rodrigo Diaz de Vivar,11世紀後半]ではない、あるいはスペイン人がその忠実な英雄を呼ぶときのような類いではない。その点彼は余りにイタリアとこの世紀の申し子だ。彼はただ権力と、そして偉大な人間の唯一の義務だけを信じている。様々な手段で、時代の諸課題に完全の応えるという義務だ。彼はそのような者であり、それで彼は我々に合う。間違いなく、彼は我々の獲物となるし、我々は彼の獲物となる。しかしながら、...モローネ、私を笑うがいい、...何かが私に吹き掛かってくるのだ。私は隠されたもの、秘密のものを何か嗅ぐ思いがする。何か本質的なこと、同時に偶然なもので、何か肉体的なもの、あるいは彼の魂の癖だ。要するに、未知の障害、これが我らの道を邪魔しており、我らの正確な計算を騙し、挫いてしまう」。

「しかし」とモローネは慎重になりながら言った、「彼が君の考えるような人間であれば、いかなる霊的源泉からかの敵対的なものが生じて来るのだろう」。

「それは分かん。ただ、一 このペスカーラについては、こういう評判だ。彼は、攻撃して来る敵には、どんな高みも登らせておいて、それから突然敵に、最後の火器を備えた敵殲滅の防塁を出現させる術を心得ている、と。彼の内部で我らに対して、このような防塁が築かれているとしたら、どうなる。それも丁度我らが彼の魂を掴まえたと思う瞬間にだ。しかしこの幽霊は考えないことにしよう。これは嵐の前の蒸し暑さ、自然の不安、不確定要素にすぎないだろう。これらはどんな偉大な、危険な行為にも先んじて生ずるものだ」。

ヴァチカンの上に稲妻が閃いた。それは白い炎となって、新しい建築物の美しい均衡を明示した。雷が鳴る間に二人は柱廊玄関の支柱の間に隠れた。グイッチャルディーニは当惑して、この予兆は何の意味か考えていた。宰相は天やその徴候には無関心であった。というのは自分がコロナの足許にいとすでに実感していたからである。

コロナは感激して酔って、ヴァチカンをすでにその数多い階段の間近のものを通して、別門の一つを抜けて、後にしていた。中央門の所で空しく待っていた駕籠とお供のことを彼女は失念していて、襲来する嵐に追われるというよりも、自分の野心的な夢に耽って、彼女は歩きながら、服を揺らしつつ、自分の使徒広場の宮殿まで戻った。彼女は最初のトゥツリア[Servius Tullius, 紀元前534頃のローマの伝説の王の娘]のように、王冠を奪って、歩いていた。それは父親の死骸を越えるためではなく、国家への忠誠心を闡明にされたからであった。というのはファブリツィオ・コロナの娘、そしてペスカーラの妻は、ナポリ女性で、皇帝カール五世の、つまりナポリの国王[兼任]の臣下であったからである。

教皇の王冠を授ける仕草で彼女は圧倒されていた。慣習と環境、世紀の信仰、それに伝承的形態のせいで、彼女は、中心的頭に相当する教会に、これが如何に退化していても、相変わらず神的意志の作業場と至高の決断[神慮]の器を見ていた。一 そして自分の自負心や、それ以上に自分の夫の価値に対する誇りを有するとき、この極めてそれに相応しい頭に一つの王冠を置くという教皇の権利にどうして疑念を抱けたであろう。かくて彼女にとって、メディチ家の教皇の僭越な行動が、時代が変わっているにもかかわらず、神の意志として見えることになったのである。

この新しい王妃はお供を連れずに、ボルゴ地区を通して急ぎ、サンタンジェロ橋を渡って、すでに「真っ直ぐな路地」と呼ばれる所を、人混みの中、通っていた。人々はコロナに恭しく道を空けた。供を連れていないことにも、そして身分の高い夫人の急ぎ足にも驚いていなかった。夫人は今や雷雨に先駆ける嵐のために飛ぶように急いでいた。しかし次第に彼女の歩みは、広くない通りでの雑踏が密になって、緩慢なものになった。一方その上の細長い天はますます黒く、脅かすものになった。

その時、彼女は人混みの向こうに、或る騎馬行列を見かけた。スペインの使節の殿方達が、多分ヴァチカンでの謁見のために、ロンバルディア地方の第三の皇帝軍将軍、レイヴァに随行していた。この将軍は、先の厩舎長官で、居酒屋亭主と売春婦の息子であり、下僕の野心と鉄の意志でのし上がって来たが、不格好な体とブルドッグの顔つきであった。この顔の額、鼻、唇は、同じ剣の一撃で割られていたのである。彼の側には、立派なアンダルシア産の純血種の馬上に、白い外套をまとった、褐色の髪の高貴な男が精力的表情で座っていた。この男は今や恭しくお辞儀してヴィットーリアに挨拶しているように見えた。しかし彼は近くの教会の石像の聖人に礼をしたのであった。

これはどぎつい雷雨の稲光のせいであつたらうか、それともこの三重の教皇冠を戴く支配者によって、彼らの王[皇帝]は秘かに裏切られていると承知しているこの殿方らの、ローマの町での整然とした敵対的姿勢のせいであつたらうか、それともヴィットーリアの興奮した想像力のせいであつたらうか、彼女は騎乗者達や馬の荘重さの中に、また腰に当てられた腕の中に、蔑視的に半ば肩越しにロムルスの子孫達[ローマ市民]を見下ろす視線の中に、そして強張った髭の先端先にまで、始まりつつあるスペイン人による世界支配の嘲笑と侮辱を目の当たりにし、それを感じていた。彼女は戦慄と反吐を覚え、自分のローマ人女性の胸の中に、致命的憎悪がこれらの余所者の盗賊達や尊大な山師に対して生じて来るのを感じていた。この者達は新旧両世界からぶんどるのである。何故若い皇帝は、同時にこのならず者の国民の王なのか、彼らの血管にはムーア人の血が流れていて、イタリアをそのボルジア家で害したのである。

普段彼女は多分、皇帝派の一族の古くからの家の守護霊のせいで、これは何世紀も、皇帝に臣従せずに従うことに利点を見いだしていて、カール[五世]に引きつけられていたことであろう。いや、違う、たとえ彼がスペイン人でなくても、この皇帝ではないだろう。彼女は、自分が顔を見たこともない不分明な少年に対しては、この少年が入国を躊躇うイタリアでは、彼女であれ、他の誰であれ、相手にしようと思わないだろう。

勿論皇帝はパヴィアでの勝利の後、彼女に対し、一通の手紙を寄越していた。彼女がペスカラの妻であることを、言祝いでいた。しかしまさにこのつましい数行には、情けない情緒が映し出されているように見えた。そしてこの気宇壮大な女性にとって一番気に入らなかったのは、彼女の目には不安げな信心ぶった謙讓であった。若い皇帝はこの謙讓心を抱いていて、勝利のすべての栄光を神とその聖人達の加護のせいにしていた。ヴィットーリアは自らも天に感謝していたが、一人の男や一人の支配者の場合、このような謙讓心を低く評価していた。これは感激的勝利も遠方にいる皇帝を冷静にさせていると告白しているものではないか。いや、ここには、ペスカラの月桂冠にケチを付けようという卑小な見解が見えないか。だから天が勝利のためにすべてを計ったことになるのであろう。しかしヴィットーリアは夫の名声のために燃えるように躍起になっていた。何とカール五世はちんけな振る舞いをしたのだらう。皇帝は、彼のお蔭で、イタリアが手に入ったというのに、この将軍に二つの哀れな町も授けないということをやってくれた。いや、こんなちっぽけな人間を裏切ることはできない、せいぜいこの人物からは離れて、この人物を無視することぐらいしかできない。

このとき強力な稲妻が彼女の目を眩ませた。宰相とグイッチャルディーニをヴァチカンの屋根の下へと追いやったのと同じ稲妻であった。そしてまさに雨が激しくなり始めたとき、彼女は、右手の脇の露地に折れて、パンテオンとその崇高な控えの間の薄暗い段に達した。荘厳な神殿の内部には入らずに、彼女は生じた冷気を吸い込みながら、密に揃っている強大な石柱の一つに寄りかかった。そしてその古代の建築物の庇の下、彼女の精神は更にもっと早期の古代世界へと遡って行った。この古代の徳操を、この世紀の流麗な造形力は賛美していたが、その単調な強張りとは厳格な現実性故に、その徳操を所有することも出来なかったし、ただ理解することもかなわないでいた。

かの有徳なルクレーツィア[Lucretiaは、ローマの王Tarquinius Collatinusの妻、親戚の男に辱めを受けて、自害した]やコルネリア[グラックス兄弟の母]が彼女の古代世界に酔った目の前に、

姉妹のように出現した。彼女はこの二つの名前を所有していたのである。二つのとてもローマ的に響く名前で、それでいてかの高貴な女性達同様に、女性特有の邪悪さを免れていた。かの簡潔で、気位の高い女性達は、世界の征服者達を生んだ。ヴェルギリウスの偉大な言葉、「汝は世界を支配せよ」[Aeneis,VI,851]は、彼女がしばしば自分に予言したのであったが、今この時、涙が出そうなほど、彼女を圧倒した。彼女は神殿に入り、稲妻が煌めくドームの下、両手を揉んで、懇願した。ローマとイタリアは下僕の墓場へ零落しないで欲しい、と。彼女は上のキリスト教の天と、それに劣らず、自分の上で轟くオリンピアの神に、そして救う力のあるものすべてに、祈った。移行の時代の、奇妙な、しかし自然でもある神々の混淆であった。

彼女がパンテオンを離れたとき、―― どれほどの間跪いていたか、彼女には分からなかった、―― 丁度またイタリアの空は晴れ上がっていた。そしていつもの歩調で、軽快に、整然と、彼女は自分の宮殿までの道のりを終えた。

この時、彼女の考えはまたペスカーラに戻っていた。こうした彼女の女性の手がスペイン人達を追い払ったはけではなく、ただ彼のみが追い払えることであった。彼は、彼女や状況が彼を説得する場合、自分の両手のどちらでも勝利を握ることができた。彼女はそれを願って良いだろうか。彼女は彼にそのような圧力をかけられようか。するとヴィットーリアは自分に言わざるを得なかった。自分は長い、親密な結婚生活にもかかわらず、最も内密なペスカーラを知らない、と。彼女は、彼の顔、彼の身振り、彼の慣習の最も卑小なことさえも諳んじていた。この禁欲的男性が彼女に誠実であることを、彼女は信じていたし、間違いなかった。彼が彼女を崇めて、自分の至高の財産として、極端な愛を抱き、その愛を丁寧に、懇ろに、そして敬意と共に育てていることに、彼女は誇りを感じていた。彼らの短い、すぐにまた遠征や入営で中断される同棲生活の浄福の時に、彼は計画や地図や自分のリヴィウスの書を投げ棄て、自分の妻を眺め、そして彼女と一緒に、青い海や進んで行く帆船を眺めた。彼は彼女とチェスをし、そして彼女は勝った。彼は彼女にリュートを弾いてくれと頼み、目を閉じて、聞き入った。彼は彼女のソネットのために、気の利いたテーマを課して、時に二人の共通の考えや迂遠な言い回しの輪郭を鋭敏なものにした。というのは、彼自身、以前、捕虜という拘束された閑暇のときに、―― 一人の武人にとっては実際少しもひどくない出来で、―― ヴィットーリア賛美のために一つの「愛の勝利」の詩を作ったことがあったからである[1512年、ラヴェンナ近郊の戦闘で捕虜になったとき、作り、ヴィットーリアに捧げた]。

しかし彼は、以前は若造であったし、もっと偉大な勝利を狙っていたので、決して自分の妻相手に、自分の勝利について語らなかった。彼の言うには、自分は彼女を退屈させたくないし、また血で彼女を汚したくない、というのは、戦役は屠殺台の赤い血溜まりに導く長い忍耐の試練であるからというものであった。政治に関し、彼は彼女と一切話しをしなかった。過去のことも、現在の案件も話さなかった。もっとも、あるとき、人間と事柄を目に見えぬ手で差配することは、人生で最も極上のことであるという言葉が漏れたことがあった。一度この味を覚えたら、他のことはもはや何も味わいたくなくなる、と。しかし通常彼はこう言っていた。政治は汚れた市場であって、自分の妻は決してこの反吐の出る沼に自分の足の綺麗な先端を入れてはならない、と。

そこでヴィットーリアは、自分にとって、すべてを間違いなく見通しているペスカーラ

は不透明な人で、彼の思考と信仰は自分には隠されていると自らに告白した。

それでいいのだろうか。自分の夫の心には、自分には禁じられたドアとか隠された部屋があっただろうか。将軍の諸作戦とか、政治家の策謀のことを彼女は知りたいと思わない。しかし彼女は彼の名誉心とか彼の良心のことに熟知したいと切望した。今、ペスカーラはとてつもない決断を前にしているから、いや、今この時、夫の戦う心から振り放されているわけに行かない。愛撫や冗談で誤魔化されているわけに行かない。今この時こそ、一緒に協議し、一緒に行動したい。自分は夫に新鮮な魂と純粋な青春をもたらしていないだろうか。自分はコロナとして知られた者ではないか。自分は今日一つの王冠をもたらしていないか。夫がこの王冠を退けるか、夫がそれを彼女の手から受け取り、それが頭上に置かれるか、この点、彼女は彼と共犯の妻になりたいし、彼と一緒に諦念する妻になりたい。彼の語られない魂の自覚した一部分になりたい。もうペスカーラの許へ行きたい気分だ。彼女の心も足裏も焦って燃えていた。そしてすでに使徒広場を通り抜けた時、甲冑を付けた一人の青年が彼女の方に向かって来た。彼女の宮殿の門の下で彼女を待っていた青年である。

「令夫人、貴女のことを心配していました」と彼は彼女に挨拶した、「貴女の駕籠も、貴女の郎党も貴女を連れずに、ヴァチカンから戻って来ましたから。お帰りなさい、名様。そう呼んで良ければ、だって、子供の時から馴染んだ呼び方ですし、私の立派な権利でもありますから」。返事をせずに、彼女は彼と一緒に階段を上った、ほとんどその差し出された腕に頼っていなかった。

この青年のいつもの奉仕の受け入れを、この青年のことがどんなに嫌いであっても、彼女は拒めなかった。というのは、デル・グアスト [Alfonso del Guasto, 1502-1546, 創作も含まれる] は、一 そうこの青年は言ったが、一 ペスカーラの甥で、彼同様にヴァロス家の者であったからである。十五歳のペスカーラと、それに同年齢のヴィットーリアがこの少年の洗礼を一緒に行っていた。そのようにヴィットーリアの父親、ファブリツィオ・コロナ将軍は取り計らって [将軍に政治的理由で指示したのは、ナポリ国王]、その二人の秘蔵っ子、若い武人と、自分の花盛りの娘とを一緒に洗礼盤の前に立たせて、この二人が互いに顔と形姿を眺められるようにしたのであった。

後にヴィットーリアはこの良く育って、熱血の少年を養子にした。この少年は貴重な洗礼帽姿で、彼女のペスカーラとの結婚生活を築き、その後、両親が早くに亡くなったのであった。この子は少年のままでいて欲しかった。しかし彼の面影の柔らかさが消えるにつれ、彼はその魂の愛敬も失って行った。美しい横顔は、禿鷹の眼差しになり、猛鳥のますます鋭く曲がる輪郭となり、その無慈悲の心が明らかになるにつれ、ヴィットーリアは反撥を覚え、心が離反し始めていた。その後ペスカーラは彼を戦争に連れ去り、この青年の崇拜する将軍による唯一の学校で、彼は大胆な兵士に育ち、パヴィアの戦闘では、公園の壁を取り壊して、勝利を切り拓いていた。しかしまた厳しく、残酷な人間ともなって、プロヴァンスから昨年急ぎ退却するとき、家の地下に十二名ほど自分の郎党が逃げ遅れていたとき、表情一つ変えずに、家に火を点け、燃え上がらせたのである [史実は酷薄なペスカーラの指示による]。

しかしヴィットーリアは彼にもっとひどいことを叱責しなければならなかった。女性の自分には我慢ならない不埒な行動のことで、この青年にその説教をするつもりであった。

最近のこの犯行以来、彼女の前に今始めて現れたからである。彼女は、彼がペスカーラの許から来たのか、何の用かと尋ねた。彼は答えた、自分はノヴァーラまで領主夫人様の同伴をすべく参っています。自分は、自分の姿は領主夫人様には御不興であると承知しています。しかし、將軍の依頼を断ることはできません。將軍は侯爵夫人様をただ最も安全な警護の者に委ねようとの判断なのです。と申しますのも、通りも、世間の情勢同様に安心ならないからです。自分は侯爵夫人様に、明日早朝の出立をお願いしなければなりません。自分は早く陣営に戻りたいのです。戦争はいつどの瞬間にも勃発しかねない状況です。自分は外せないのです。ミラノ人、ヴェネツィア人、教皇様が、競って、その平和を守るといふ志操を誓い合っています。従って、戦争が迫っています。「このことは我々がすでに長いこと承知していることです。ただ機を窺っていて、いつかという問題だけです。しかし」、
— 彼は一步退いた、 — 「何か別のこと、何か新しいこと、何か途方もないことを、私は中部イタリアを旅していて、耳にしました。聞き耳を立てることすら必要ないことでした。町や宿で、公然と広場の泉のようにせせらぎ、聞こえてきます。勿論私は変名で旅しており、従者は一人いるだけです」。彼は休止して、燃える目で見つめた。あたかもある狩猟の手に汗握る展開を追っているか、月光の薄明かりの中、匍匐している待ち伏せを追っている按配であった。

「話しなさい、ドン・ファン」とヴィットーリアは囁いた。

「令夫人、ヴァチカンから戻った貴女にとっては秘密ではないものです。秘密でさえなくて、申したように、公然たる囁きです。他人の不幸は鴨の味、復讐心の強い忍び笑いで、ほとんど抑えきれないイタリア人の歓声、一般的なお喋りと激励であって、これについて私は大至急、將軍に報告しなければなりません。將軍は何も知りませんので。これは私の推測で」と彼は疑り深く言い添えた。

ヴィットーリアは青ざめた、「何と囁かれているの」と彼女は重苦しい気持ちで尋ねた、「誰のこと。ペスカーラのことではないでしょう」。

「彼のことです。どこでも彼のことです。人々は言っています」、
— と彼は声を潜めた、「將軍は皇帝から別れる、そして教皇様とイタリアの有力者達と交渉中、と」。

ヴィットーリアは彼の顔の燃えるように官能的な表情に驚いた。「それで、ペスカーラは、...」と彼女は不明瞭に言った。

「將軍が羨ましい」とドン・ファンは夢見るように言った、「何という興奮でしょう。何という享樂。イタリアが彼の腕の中に飛び込んで来ています。...將軍はイタリアを愛撫し、傳[か]しずかせ、投げ飛ばします。...いや、將軍はイタリアと、猫が鼠を相手にするように戯れています」。彼は右手でさっと捕らえる仕草をした。

めらめらと怒りがコロナに燃え上がって来た。「不埒者」と彼女は叫んだ、「私はペスカーラはどうするのかと尋ねましたか。あなたに分かるわけないでしょう。彼のことを憶測するよう言いましたか。...鼠相手の猫のようだなんて。...おぞましい。そんな具合にあなたはユーリアをいたぶったのでしょうか、破廉恥漢」。

このユーリア[虚構]はノヴァーラの貴族の家柄で、学識のある医師、ヌーア・ダーティ殿[虚構]の孫娘であった。ペスカーラの槍の傷を治した医師である。この医師の家に宿営したデル・グアストは、娘を辱めて、住まいを替えていた。その後見棄てられた娘は、恥辱で立ち直れず、何も知らない、ノヴァーラの祖父の眼前から遠く、ローマの修道院へ逃

げて来て、力強いコロナの前で跪いて懇願したのであった。自分のことを憐れんで、自分の名誉を回復させて欲しい、と。

ヴィットーリアが彼のことを破廉恥漢と呼ぶと、ドン・ファンは唇を噛んだ。「お静かに、領主夫人」と彼は言った、「言葉遣いに注意してください。私は破廉恥漢ではありません。私がユーリアを袖にしなかったら、本当に破廉恥漢でしょう。私はアヴァロ家とダーティ家の血筋の違いを言っているではありません。単に、私はどの男もそうであるように、花嫁には、無垢の娘を望んでいて、身を持ち崩した女は望んでいないと言っているだけなのです」。

ヴィットーリアの人間的心は激昂した。「あなたでしょう、あなたがこの哀れな女性に、愛撫や約束、ひよっとしたら偽りの誓願や誓言で、罨にかけたのでしょうか。そうじゃないの。それを否認するの」。

彼は答えた、「私はそれを否認しません。しかしそれは私の戦時国際法です。戦争は男性的意志と女性的無垢の間の戦いです。仰せの通り、私は彼女を騙しました。何故彼女は抵抗しなかったのです。何故屈服したのです。何故貴女は、彼女が弱かったこと、そして今や私が彼女を軽蔑し、撥ね付けていることを、私のせいにし、咎めるのです」。

ヴィットーリアは驚愕して凝固した、「ならず者」と彼女は叫んだ。

「令夫人」と若者は会話を切り上げた、「これは辛い会話です。残念でなりません。貴女に一種の法廷の場を提案致します。ノヴァーラに着きましたら、我々は將軍の前に出頭しましょう。貴女は私を訴えるといい。私は自己弁護致します。世間とその秩序のことをご存じの將軍は私に無罪を言い渡しましょう。私はそう信じています。今はこの場を離れます。まだ人を集めなければなりません。強力な警備がなければ、この不穏な時代、貴女に対し責任を負えませんので」。彼は一礼して、昂然たる頭で去った。

ヴィットーリアは不快に体の向きを変え、反対側の出口を選んだ。彼女は冷気の必要を感じて、庭へ下りた。そこは高い壁に囲まれていて、沢山月桂樹やミルテがあり、雨の余韻で爽やかであった。彼女は庭園の締め括りとしてある園亭へ歩いて行った。

明るさはまだ残っていて、かろうじて福音書の文字が識別できた。彼女はこの福音書を文庫から通りすがりに手に取って、これを前にして腰掛け、熱い額を組んだ両手の中に押し当てた。ユーリアの運命、それにペスカーラのもっと偉大な運命に心奪われて、彼女の目は無念無想、開かれた頁を追い、胸一杯に新鮮な空気を吸い込んだ。しばらくしてから彼女は自分が読んでいる内容に気付いた。それは砂漠での悪霊による主の三回の誘惑であった。彼女は、自分が子供のときから諳んじていることを、肉眼で読むというよりは心眼で読んでいた。

彼女は救世主の前に悪霊が出現するのを見た。主は誠実と忠実の単純な言葉を、誘惑者の悪知恵に対置させていた。誘惑者がより激しく迫ると、人間の息子イエスは、将来の槍の傷の箇所を示した。...するとその白い衣装は明るく輝く甲冑に変わり、穏やかな右手には武具が着けられていた。それは、自分の仄かに白く輝く傷の上に手を置くペスカーラとなった。一方悪霊の方は今や長く黒い司法服を着用していて、香具師のような身振りをした。そのような具合にコロナは自分の前にある聖書の頁を見た。自分の感覚の戯れに立腹して、彼女は自分を覚醒させ、目を上げた。

「あなたは誰です、何のご用です」と彼女はびっくりして叫んだ。彼女の前に立ってい

る暗い人影が答えた、「私はジローラモ・モローネです。ヴィットーリア・コロナ様と話すために参りました」。ヴィットーリアは今日教皇によって紹介された人物を思い出し、同時に案内している従者にも気付いた。従者は領主夫人の上に吊されているランプに火を点し、宰相に床几を差し出し、そして去った。その間、侯爵夫人は、照らし出す明かりの中、醜いがしかし精力的な、夜間の客人の顔を眺めていた。おの顔は反感を覚えるものではなかった。

「遅い時間に」と彼女は言った、「訪問なさっています。しかし多分私の主人へのご依頼があるのでしょう。明日早朝夫の許へ旅します」。

「私自身ペスカラ様には間もなく面会を求める考えです」とモローネは答えた、「彼について貴女に話そうとは思っていません。ただヴィットーリア・コロナ様についてです。私は貴女をイタリアの皆と共に、崇拜し、女神のように尊崇しています。しかしまた怒ってもおり、嘆きを感じてもおります」。

そんな風に私と語る貴方は一体誰なのですかと侯爵夫人の唇に浮かんで来たが、しかし彼女は素早く、温和に尋ねた。「私のことで何を嘆いているのです。モローネ、私の咎は何ですか」。

「貴女が貴女の明るく熱中した顔を巻き物や書物に埋めて、影の世界、物語の世界に生きていらっしゃることです。貴女が最初のカエサルを放念し、最新のカエサル[ペスカラ]に臣事し、貴女のトロヤを嘆きながら、貴女の民を忘れてのことです。プロメテウスの鎖に縛られていて、イタリアの束縛の痛みを感じていないということです。三人の女性がこの鎖を鍛冶したのです」。

「どの三人ですか」。

「最初はベアトリーチェ・デステ[1475-1497]です。彼女の老齢の夫、イル・モーロ[ムーア人]が、彼女の求める口に接吻した時、彼女は嘔きました。自分のブロンドのお下げ髪には、王妃冠が似付かわしい、と。この賢明なイル・モーロ[ムーア人]はブロンドのお下げ髪に編み込まれて、自分の甥に毒を盛り、ミラノの遺産を狙いました」。

「恥ずかしい女」。

「この毒を盛られた少年は気位の高い、情熱的妻を有していました。アラゴン人のイザベッラで、彼女はベアトリーチェを死ぬほど嫌っていて、その若々しく力強い腕で、自分の夫の長患いの少年を取り上げられた王座に就かせようとし、彼女は自分の父親、ナポリ国王に懇願し、直訴し、このナポリ国王がイル・モーロ[ムーア人]を脅したのです」。

「最低の女」。

「このイル・モーロ[ムーア人]は、フィレンツェの支配者、若いメディチ[ピエロ・ディ・ロレンツォ・デ・メディチ,1472-1503]がその間に立っている限り、安泰でした。この若いメディチは、その美しい妻、高慢なアルフォンシーナ・オルシーニ[1472-1520]の玩具でした。この妻は夫に働きかけ、この愚昧公がイル・モーロ[ムーア人]との友情と同盟を解約するようにしました。そこでこのイル・モーロは外国人[フランス王]に声をかけたのです」。

「不吉な女」。

「この三人がイタリアを捕縛しました。四人目の女性、貴女がこれを解かなければなりません」。

「宰相、私は老人の妻でもなく、少年の妻でもなく、まだ愚昧の妻でもなく、また妻に

よって差配される類いの夫の妻でもないのです。それに、...私は王妃冠を求めています」。彼女は赤面した、真っ赤になった。

「領主夫人」と宰相は言った。「王妃冠が貴女を求めています。貴女の民を憐れんで、ペスカーラの許で民の代表となってください。私は、ペスカーラを愛撫し、畏にかけ、好きに導け、と申ししていません。貴女と密約をするのでもなく、役割分担の協議もしていません。私は貴女に旅を任せます。貴女と一緒に出立して、どちらが先に彼に会えるか賭けをしましょう。そして貴女が先でしたら、彼の膝を抱いて、貴女の溢れる思いを語って、嘆願してください。ペスカーラ、私はイタリアで、あなたの足許に跪いています。私を引き上げ、胸に抱き締めてください、と」。

ヴィットーリアは感動し、宰相は涙を流した。

「令夫人」と彼は言った、「このように貴女に話しかけることを許される私は誰でしょうか。私は貴女の衣装の縁に接吻する値打ちもない男です。イル・モーロのルドヴィーコは、私のいとも尊い御領主ですが、私をミラノの路地で拾い上げ、戯けた小さなプードルのように私を彼の足許で遊ばせました。そこで私は教育を受け、その宮廷と、後からはその奉公で、私の時代の顔や身振りを学び、この世紀のすべての放恣な凱旋行列を観察しました。

哀れなイル・モーロです。彼の不運、それにフランス人が彼をロシュへ連行し、そこで十年間牢獄にいて、喘ぎ苦しみました。彼の晩年、私はそこで彼に再会しました。[再会を確認されていない]。と申しますのは、当時、状況の巡り合わせで、私はフランス人に奉公していて、私の恩人の尊顔を拝したくなかったからです。私は彼を見たとき、驚き、彼と見分けられないほどでした。彼は一人の亡霊のように見えました。牢獄と悲惨さのせいで、彼の表情は奇妙に高貴なものに変わっていました。彼が口を開けたとき、また私は以前の彼と分かりました。彼は微笑して、その比類なく上品な流儀で言いました。「ジローラモ、そなたか。私を訪ねて来てくれて、忝い。そなたが私の敵側に奉公していることも、私は気にしていない。状況の変化はやむを得ない。そなたのことだから、幸運の女神の車輪がまた回れば、そなたは再び我が息子達の忠実な友となり、助言者となってくれよう。そなたは今では老練な政治家となっている。これまでひどいことを学んで来たようには見えない。覚えているか、そなたには、その滑稽な顔つきを改め、その物真似を控えるよう注意して来たろう。そんな仕草で新しい友を得て来たのではあろうが、と」。

そのように彼はしばらく寛大に冗談を言いました。しかしそれから真面目な話しになって、言いました、「いいか、ジローラモ、私は閑な折、ここで何を考えていると思うか。我が運命のことではない。イタリアのことだ。いつもただイタリアのことだ。私は、我が魂の苦しみとして、自分が妻に唆されて、外国人[フランス王]を頼ったことを遺憾に思っている。今ではそなたらは、フランス人と付き合わざるを得ず、彼らは私の体を破壊する部分となりそうである。しかし、そなたらがどうしたら元に戻れるか、私は考えている。かつてはヴァレンティノーノ[ヴァランス公爵]、かのチェーザレ・ボルジア[1475-1507]がいて、純然たる悪を行った。しかし、ジローラモ、我が倅よ、悪はただ小出しにして、用心してのみ使用しなければならぬ。さもないと破壊する。今ではローヴェレ、教皇ユリウス二世[本名ジュリアーノ・デッラ・ローヴェレ、在位1503-1513]だ。これは外国人[フランス人]に対し、雷雲に乗って刃向かっているが、この外国人を私に劣らず彼自身が頼りにして来たものだ。

しかしこの老公は消耗している。その強権的魂はやがて黄泉の国に浮かぶことだろう。そして彼の後任は通常の大司祭となって、これは余りに弱くて、イタリアを築けないだろうが、しかしそれでもまさに十分強くて、他の誰に対しても救国の仕事の邪魔をすることだろう。

ジローラモ、我が寵児よ。私は我がイタリアが没落するとは思わない。イタリアは自らの裡に不滅を有しているのだから。しかし私は隷属という煉獄の火をイタリアに免除してやりたい。倅よ、私はそなたの目を見ていると分かる、我がロンバルディアの大地に猛烈な出来事の輪舞が吹き荒れたら、そなたは一役演ずる覚悟である、と。或る日、この交替して行き映像の中から一つの威力が、この須臾の形姿達の中から一人の人物が現れるとき、しかしこれは不埒者でもなく、司祭でもなく、将軍であって、勝利をその鉄の足裏に縛り付けている者だが、どこの出身であろうと、外国人ではないこの将軍に、そなたは自分を預けろ。全身全霊で仕えるのだ。束縛や嘘が必要となれば、 — なぜなら他に国は築けないのだから、 — それをそなたが引き受けろ、我が倅よ、しかし彼に傷を付けるな」。

宰相は飛び起きていた。彼は演説に熱中して、そうと気付かないまま、 — 感動したヴィットリオも気付かなかったが、はるかに真実の境界を越えた話しになっていた。「この選ばれた男の側には」と彼は叫んだ、「最も美しい、最も純粋な妻がいて欲しいものです。イタリアは徳操に従って生きるために、徳操が実物となって進んで行くのを見たいと願っています。我らの墮落は、倫理からの逸脱であり、規範の千切れた帯であります。これに対し勝利が得られなければなりません。戦場の勝利よりも偉大なものです。この魔法の杖が振られるべきです。元帥杖よりも強力なものです。私はこの徳操の女王が眼前に見えます。聖なる火を守る女司祭です。支配の護民女官です、万歳。全イタリアがこの女性の歩みに従って動きます、称賛しながら、欣喜雀躍しながら」。宰相は、ヴィットーリアの足許に忠誠のために跪く仕草をした。しかし彼は退いて、恥ずかしげに囁いた、「そのようにイル・モーロのルドヴィーコはその牢獄で語りました」。

ヴィットーリアは目を伏せた。というのは自分の目が歓喜に包まれて、二つの太陽のように燃えているのを感じたからである。

すると宰相は言った、「高貴な御夫人、私は貴女を煩わせました。お目がお疲れです。明日早朝の御出立です。微睡眠が必要でしょう」。そしてこの策謀の男は夜の中へ戻って行った。この間にこの永遠の町に夜の帳が落ちていた。

第三章

ある窓辺、そこからの眺望は、ノヴァーラの諸塔や、蒸し暑く水蒸気の立つ平原を越えて、モンテ・ローザ[アルプス]のまだ澄んだ朝の冠雪の峰々まで届くのであるが、そこにペスカーラは座っていて、皇帝の軍をミラノまで指揮することになる行軍凶面の計画に取り掛かっていた。間断なく彼は自分の考えに没頭していたので、彼は従者の忍び足に気付かず、従者がレモネードを差し出して始めてそれに気付いた。彼はその軽い飲み物をスプーンで混ぜながら、こう述べた、「バティスタ、そなたが昨夜、私がはっきり厳命していたにもかかわらず、私の許に入って来たことを咎めない。隣で寝ていて、いつもより私の息が苦しげだと聞いたのであろう。 — 或る悪夢が、心配事があって、...話すに値しな

いことだが」。彼はグラスから一口飲んだ。

バティスタは、抜け目ないナポリ人であるが、自分の驚きを恭しい表情の下に隠していた。彼は、嘘を吐いて、聖母様にかけて、自分は名前を呼ばれたと思ったのだと言い張り、決して命令がない限り、敢えて殿下の寝室に入らなかったはずでございますと述べた。一方、彼は、真実本当のところ、呼ばれもしないのに、自分の主人の厳格な禁止にもかかわらず、立派な人間的情動から主人の許へ飛んで行ったのであった。彼は主人の恐ろしい呻き声を聞いて、それから臥所で自分の両腕で高く持ち上げ、將軍の息を回復させたのであった。

「何でもないことであった」と將軍は繰り返した、「私は助けを必要としていたのではなかった。しかし私は、申したように、そなたを叱ろうとは思わない。今は離別がやむを得なくなっているのだから。私はそなたを手放したくない。しかし息子の義務が優先する。そなたの老いて、長患いの両親がトリカーリコで難儀している、私はそなたを置いておけない。ここを去って、両親に不安のない老後の面倒を見るがいい。申し分のない床屋であり、舌も達者なそなたは、私がそなたを見込んでいるように、どこでも自活して行けよう。我が息子よ、神と同行二人だ、そなたに十分な金を取らせよう」。そして彼はペンを執った。

バティスタは雲から落ちた思いがした。絶望の身振りで、彼は請け合った、今回は本当の言で、自分の父はとうに天に召されていて、母親はカラムバッチャと言い、商売熱心で頑丈であり、ウナギのように脂身があります、と。ペンと執っている將軍は答えた、「その通りだな、バティスタ。そなたの哀れな両親はポテンツァに住んでいて、トリカーリコではない。しかしどちらも近くだろう」。彼は暇を取らせた従者に支払い指示書を渡した。

バティスタはとても打ちのめされていたが、一 彼は、ペスカーラの一言は撤回されないと承知していて、一 それでも一瞬横目で睨んで、総額の数字を追った。それはただつましい額であった。將軍は大きな事でも、小さな事でも浪費せず、皇帝の財産も、自分の財産も無駄遣いしなかった。それに多分彼は余りに沢山金を施して、夜の出来事の重大性に注意を向けさせないよう用心したのであろうし、また守秘義務を買収する素振りに見えないよう用心したのもあろう。というのは、將軍は全くこう確信していたからである。バティスタは、將軍の実際の状態について、正確な情報が欲しいと関心が抱かれている所では、その機会があり次第、自分の知識をもっと高値で売りつけるであろう、と。

痛々しく幻滅して、自分の生誕の時を呪いながら、バティスタは恵み深い領主の足許に跪き、膝を抱いて、その手に接吻した。「達者でな」と將軍は言った、「これも片付けておいてくれ」。彼は食器を示した。そして自分の命令に違反した者を、その奉公から去るよう、優しく合図した。

彼が再び自分の作戦に没頭しないうちに、外でスプーンが落下し、グラスが飛び散って破片に碎ける音がして、打ちのめされたバティスタを容赦なく脇に突き飛ばして、ブルボン公爵が、案内を請わずに、その背の高い細身の姿で現れた。というのは、彼は將軍の許に、いかなる時でも自由に入ることが許されていたからである。

「殿下ですか」とペスカーラは彼の方を向いて、椅子から起き上がった。

「済まない。私は自分の部隊へ騎乗して行く途中だったのだ」と公爵が説明した。「すると郊外で旅行中の商人が目付いた。この商人は丁度貴殿の医師、ヌーマ・ダーティ殿

の門前でラバから下りた。この人物、ご立派な顔つきでなかったならば、これは我が忘れがたい友、ミラノの宰相に間違いなしと誓っても良いところであった。私は自分の部下の一人にこの見知らぬ男のことを調べさせ、こう知った。この旅人は、医師の客人で、ミラノの宝石商、名前はシピオーネ・オズナーゴである、と。ひょっとしたら、多人格の宰相の数多い仮面の一つかもしれないし、またそうでないかもしれない。彼はある仕草で体を捻って、その特徴は紛れもない。私はまだ市門を抜けずにいたので、容易にまた馬で戻って、貴方にこの得がたい男の訪問が多分あるだろうと知らせに来たのだ。

「私は夙に、ミラノの逃げ道や誓言として彼が現れると予期していた」と將軍は答えた、「しかし彼は現れず、確かな筋から、彼の公爵は要塞を固め、戦争準備を継続していると聞いてから、宰相のことを放念し始めていた。今頃やって来ても遅い。明日、真夜中に、公爵に対して与えられていた期日が終わる。十二時の時と共に、我々は行軍する。モローネが大きなニュースを持って来ない限り、猶予はない」。

「いや、このモローネと来たら」とブルボンは喋った。「奴はきっと何か持参することだろう。私は我々の最後通牒をミラノへ届けたとき、蟻塚でのように、彼の額の奥内で、考えが蝟集する様を見ていた。侯爵、此奴は、一体どんな不遜な頭脳をしているか、貴方には分からんだろう。私がミラノで統治していて、彼が私の顧問官、書記であったとき、彼はテーブル越しに、
— 私は彼と食事を共にし、彼の法螺話や思い付きに興ずるのを好んだからであるが、
— すべての侯爵令嬢と取り持って、私をあらゆる王座に就けたものであった。とても頓狂極まるものであったが、この戯言には分別が見られた。自らとその公爵を窮地から救い出すために、また何を考えつくか、興味津々と言ったところだ。きっと何かとてつもなく天才的なもので、一つの高峰、一つの深淵だ。例えば、
— と公爵は心底笑った、
— 「我ら兩名の皇帝の將軍に同盟側の指揮を申し出て、手付金として二個の魅力的なイタリアの王冠を彼のトガの襜から出現させるかもしれない[トガで膨らみを作って、戦争か平和かどちらか選べと言った故事、Livius,21,18]」。

「ご冗談を」。

「他にあるか、侯爵」と公爵は答えて、辞去しようとした。そのときなおも將軍の手を彼は握り、優しい調子で言った。世間の前では秘匿されている友情[作者の虚構、犬猿の仲の説もある]を明らかにする調子であった。「ペスカーラ、レイヴァを私の首から離してくれて、忝い。君が私に右翼の軍を任せて、彼には左翼の軍を任せているからな。あの男には虫唾が走り、一緒には騎乗して行けない。災難が生じかねない。最近ノヴァーラの広場で生じた災難よりもひどいことになりかねない。またしても私に対し我を忘れ、彼を私は狂犬の如く始末しなければならなくなるのだ」。彼はそう小声で言って、視線を落とした。

ペスカーラは公爵の右手を持って、警告し、頼んだ。「何という見世物だったことか」、と彼は言った。「こちらの皆のしている広場で。宿営のいざこざで詰まらない話した。私はレイヴァをすぐナポリへ派遣した。副王に我らの遠征への部隊を要請するためだ。彼は一部隊も送らないと分かっているけれども、ただ貴方が気兼ねせずに暮らし、嫌な相手の顔を見ないで済むようにするためだ。どうして貴方は同じ將軍仲間にあんなことをしたのだ。立派なことじゃない。情けない。二度と繰り返さないでくれ。頼むよ」。

「きっかけは、話す甲斐もないことだ、ペスカーラ、しかし、—」。

「レイヴァが遣った最低の言葉は、証言によると、自分は一人の貴族から何も差配され

たくない、だそうで、そして貴方は剣を抜いて、貴方の郎党が貴方を抑えなければならなかったそうだ」。

「いやはや」と公爵は囁いた、「一人の貴族からか。私の耳は繊細だぞ。別の言葉だった。...私が皇帝や教皇の喉に突き刺し、返したくなる言葉だ」。

「別の言葉だと言うのか」とペスカーラは言って、すぐに自分の質問を後悔した。公爵が青ざめ、完全に生気を失うのを見たからである。老レイヴァは、自分は裏切り者からは何も差配されたくないと呟いたか、ブルボンの傷付いた良心がそのように理解したのであろうと彼は察した。単なる貴族の男と、王侯の出自の男とを無言の友情が結び付けていた。二人の若々しい、すでに著名な将軍の間の生来の嫉妬心を抑制する奇蹟が生じていた。二人の将軍の権力と権限は完全に明瞭に区別されるものではなかったが、この奇蹟は単純に公爵の次のような意識、つまりフランスの敵側に彼が従事していても、ペスカーラの彼への敬意は決して損なわれないという意識に基づいていた。それは賢明さであろうか、倫理的事柄に対する無関心であろうか、すべての偏見、たとえどんなに根拠のあることであろうと偏見であるものからの自由なのであろうか、それとも完全なる人間知という至高の正義なのであろうか、いずれにせよ、―― ペスカーラは皇帝軍に仕えるようになった王侯出身の反逆者を両腕を広げて迎え、仲間意識と敬意を繊細に混淆させて、彼に対処した。ひょっとしたらペスカーラは、自ら呪いながら、自分の祖国を外国の武器で荒廃させるこの自棄的男に根源的不壊の貴族を認めていたのかもしれない。この点に関し、公爵はペスカーラに感謝していた。

不幸な公爵の手を自らの手で握って、将軍は穏やかな声で語りかけた、「殿下、幽霊です。貴方は話されなかった言葉を聞いています。投げ棄ててしまうことです。深淵は月桂冠で埋めればいい。貴方は軍神の寵児ではありませんか。それに政治の名手です。我々兩人とも、無数の日数を残している若者で、まだ三十代後半にもほとんど達していません。人生の高みの此岸にあって、世紀もまだ最初の三分の一の時代です。この世紀は大いなる可能性と広大な展望を秘めています。我らの世紀は充実した実存です。シャルル、生きて行きましょう」。

将軍の胸から漏れた秘匿された溜め息をブルボンは聞いていなかった。彼は、激しくペスカーラの手を握って、彼の黒っぽい目は血気盛んに煌めいた。それから彼は内心の動揺を隠すために、彼の流儀で両足で飛び上がり、シニクなものへ移行した。ペスカーラの熱い調子で、彼の大胆極まる若々しさが目覚めていた。「それに我々は眉目秀麗な二人だ」と彼は歓声を上げた、「君は分かるだろう、華麗なヴィットーリアの夫だから、皇太后のあの雌豚が是が非でも私を夫にする気であったとき、私の心と胃とが裏返しになったことを。私が国王フランソワの父親に見えるかな。あれが愛しい継息子だ。『令夫人』と私は言って、深々と礼をした、『そうは参りません。貴女は貴女の鼻で私をベッドから突き落としましょう』。そして完全に向きを変えて、国境を越えることになった」。彼が放恣な笑い声を発している間に、旅の埃を被ったままのデル・グアストが入って来て、叔父の将軍に挨拶し、陽気な殿下の前でお辞儀した。

それから彼は再びペスカーラの方を向いた。彼はペスカーラを、あたかもイタリアの陰謀で将軍に割り振られている役割によって、その姿勢が拡大されているかのように、驚嘆し、賛嘆する目で見つめていて、こう語った。「我々はローマから馬で来ましたが、領主

夫人の喜びとはならぬ、数多くのお供を連れ、またナポリから戻るレイヴァ殿や、高貴な方、人々の言うには王侯の出自で、モンカダ[Ugo de Moncada,1476-1528,かなり潤色]という名前の、貴方がご存じであろう方と一緒にいた。彼は貴方に副王からの知らせを持参しております。私は先駆けて参りました。ヴィットーリア夫人の到着をお知らせに参りました。夫人はまた貴方に再会する喜びで笑顔が見えますが、同時に固く唇を閉ざしています。察しますに、御夫人は政治的の秘密を携えていらっしゃいます。私の予感では教皇の神秘を巡るものです。それにこのヴィットーリア夫人は、その御不興を蒙っている甥のことで、額に皺を寄せられました。夫人は貴方の前でこの甥に関して法的にあらゆる書式で訴えられることでしょうか。若干人間的なことに關するものです」。

「あるいは若干非人間的なことに關するものだな」とペスカーラは嘲った、「他に何かあるか、ドン・ファン」。

「私の目の錯覚でなければ、ミラノの宰相が到着しています」。

「そうか」とブルボンが笑った。

「私は彼とはすでにローマで出会いました。コロナ様の宮殿の近くです。夜間そちらへ戻ろうとしていた時です。壁に沿って、私は長い衣装を着た盗人めいた忍び歩きの男を見かけまして、私が従者の松明で、この怪しい者を照らし出して見ると、恥知らずの獅子鼻と司法官帽の下の生意気な縮れ毛で分かりました。この縮れ毛は私がバヴィア以来承知しているもので、人々に頓狂な宰相と呼ばれているこの男は、戦闘の後、貴方の許に挨拶に来たのでした。彼はヴィットーリア夫人に教皇の最後の内密な話しを持ち込んだのかもしれない。夫人はかの日の午後、教皇へ暇乞いに出掛けられたのです」。彼はこのことを悪意を隠して告げた。

將軍は厳しく眺めていた。「ドン・ファンよ」と彼は言った、「貴方はヴィットーリア夫人の行状を案じなくても良い。ましてやそれを監視する必要はない。彼女の歩みはどんなものでも、ほんの微かな表情や身振りであれ、私はまずそれを承認し、称賛する」。

ドン・ファンはお辞儀した。「ノヴァーラへの途中」と彼は続けた、「私はそれから彼に何度か出会いました。つまりマルケ地方からの穀物商とかのパチャウディで、鼻に不気味な黒子のある人物です。私が彼に話しかけると、彼は私に隠しておけず、言いました。自分は奈落に落とされた男だ。思いがけない教皇の措置で、輸出が禁じられている。自分は貴方の將軍閣下と厳格な供給契約を結んでいる、と。そう言いながら宰相と大して変わらぬものがく仕草をしました。宰相は現在、あらゆる種類の商売をしていて、茶番めいた人物に化けています。イタリア半島の至る所で、宰相の姿を、一何の類似性もありませんが、一貴方の偉大なお姿同様に、お見かけします」。

「ドン・ファンよ、何を言いたいのだ」。

何に対してもたじろがないデル・グアストは、それでもペスカーラの冷たい表情の前で返事を躊躇っていた。それに公爵が居合わせたので、遠慮した。

「私は殿下に対して秘密はない」と將軍は言った、「話すがいい、ドン・ファン」。

この命令にもかかわらず、大胆な若者も、皇帝の陣地の最中、この場所、この時刻、自分が窓から行軍中のスペイン軍隊の整然とした歩調を聞き取っていると、一般的な話しも全く途方もないものに思われて、それでイタリア人の陰謀の厚かましい率直さに軽く衣装を掛けた。

「叔父上」と彼は軽んじて報告した、「私の耳許で相変わらず反響していることは、猛然たる論争でありまして、すべての階級、居酒屋、理髪店、舞踏会場で、それに思いますに、祭具室の片隅でのお喋りに至るまで勃発しているものです。一 アヴァロス家の真の有効な祖国に関するものです。我々がナポリ人なのか、それともスペイン人なのかです。そして叫び声や手振り身振りだけでは十分でなく、新聞や文書も我々の出自に関し、一杯に空中に舞って論じています」。

將軍は両肩をすくめた、「その文言なら」と彼は言った、「私のテーブルにまで散らばって来ていて、私は投げ棄てた。暇人の口論だ」。

ドン・ファンは頑なになった、「同時に人々は私にこう語っていました、諸大学の法学者や神学者の間で、教皇のナポリへの封土権の範囲、境界に関し、また激しく論争されている、と」。[ナポリは十六世紀初頭以来スペインの副王支配下にあつて、皇帝と教皇の支配に関しもめた]。

「それはこの学者どもに任せれば良い。そうでしょう、殿下」、とペスカーラは冗談で言った、「そしてアヴァロス家の祖国に関しては、甥よ、そなたに助言しておく、スペイン人の名誉であれ、ナポリ人の名誉であれ、名誉を保つことだ」。

このとき奉公の小姓が現れ、大きな無垢の目の華奢な少年で、医師ヌーマ・ダーティの孫で、デル・グアストに碎かれたユーリアの弟であるが、オルヴィエート出身のバルダッサレ・ポージという名前の薬剤師の来訪を告げた。この男が小荷物を持って控えの間に立っていて、どうしても引き下がりません。この方は、自分の祖父の許で下馬致しましたが、祖父はこの客人に將軍閣下へのこの紙片を渡しました、と。そして少年はこの紙片を渡した。そこには震えた筆跡で「モローネ」と記されていた。

ペスカーラは一瞬思案した、「その余所者は、殿下らの居合わせていることを承知しているのか」と彼は小姓に尋ねた。

「閣下、そうは思いません」と小姓は答えた。

「では案内せい、しかし、私が呼ぶまでまず待つのだ」。

今度は素早く彼は公爵の方を向いた。「殿下には相談に乗って頂きたい。貴方は、ミラノの宰相が私に対し陰謀を企てる気であると睨んでおられますから、私がこの外部の人間と証人もいない場で話しに応じたら、自明の用心にも欠けることになりましょう。そのような証人、二人の極めて信頼に値する証人に、我らの顔を見るのではなくても、我々の言葉の一つ一つを聞いて頂く必要があります、マドリードの邪推も、我らのレイヴァの嫉妬も、それに」と一 彼は声を潜めた、一 「ドン・ファン、貴方が一緒に馬を進めて来たかの危険人物、副王の使者という口実の下、こちらで私の見張り役を言い渡されている者も、私に対し、裏切りとは言わないが、ただの間違った一歩も咎め立てる根拠を見いださないよう用心しよう。そこでこの宰相を尋問して見よう。彼は愚かに熱中して、敵側の諸計画や手段を明らかにすることだろう。彼は他の誰より明らかにしよう。こういう切羽詰まった状況ですから、殿下は卑賤な盗み聞きを引き受けて頂きたい。そして貴方、デル・グアストは殿下のお相手をしてくれ」。彼は黄金の総の付いた重たい赤色のカーテンの方へ歩いて行った。その広い襷は隣室への入口を敷居の箇所まで深く隠しており、彼は今やそれを二つに引き開けた。「こちらに殿下は留まっています」と彼は言った。

公爵はこの薬味の利いた冒険にとっても惹かれたが、それでも一瞬決断できずにいた。「し

かしモローネがこの覆いを開けたら」と彼は尋ねた。侯爵ペスカーラは答えた、「彼は開けません、心配ご無用です。保証致します」。デル・グアストは楽しみで鼻の穴を膨らませた。彼は公爵のために床几を差し出し、その背後に立って、第二の盗聴者の姿勢を取った。赤いカーテンが閉ざされた。

ペスカーラは小姓のイッポーリトに抱きつかれた思いがした。彼は目に涙を浮かべて、彼の方へ上向きに囁いた。「もはや薬剤師はいません。長く黒い衣装を着た魔法使いです。胸に護符を付けていて、恐ろしい顔の人です」。

「臆病だな、連れて来い」。

「もう来ました」とイッポーリトは叫んで、逃げ出した。

「貴方は、モローネ殿ですか。官服ですか。察するところ、旅で汗をかかれていますな。貴方の三つの仮面で息が切れたのでしょうか」。

モローネの息は荒く、聞こえるほどであった。額に汗が浮き出ていた。彼は無言で立っていた。

「御英知は何の相談です」と將軍は真面目な目で尋ね、この口ごもる男から何ら明確な返事を得ずにいた。しばらくしてからペスカーラは宰相が重たい黄金の鎖で胸に下げているメダルを戯れに握った、「宰相、レオナルド[ダ・ヴィンチ]の作ですか。これは誰です。イル・モーロですか。機知的肖像だ」。[ダ・ヴィンチはミラノに滞在したが、この肖像は造っていない]。

しかし自分の好きな領主にさえ宰相は話しの糸口を結ぶことができずにいた。彼は完全に我を忘れていた。

そこで將軍は更に迂言せず、始めた、「モローネ、貴方の公爵はもっと都合の良い条件を望んでおられるのか。公爵殿下の立派な意図について私を納得させるつもりならば、協議致しましょう。まずは私の最終通告について互いに一点ずつ点検致しましょう」。彼は机に寄って、一枚の書類を探した。

すると彼は頬に熱い息を感じ、ある囁き声が彼の耳を満たした。「ペスカーラ」と喘ぎ声がした、「それは問題ではない。イタリアが君にその軍を委ねるのだ」。

「それなら結構」と將軍は、頭を回さずに答えた、「イタリアは皇帝に降伏するのか」。

すると彼の背後で叫び声がした、「皇帝にではなく、君に対してです。君が皇帝から離反するならば」。

今度はペスカーラがこの素っ頓狂な男に向き直って、敵対的身振りで脅した、「気は確かか。君を掴んで、窓から投げ飛ばしても、やむを得ないと思うぞ」。

宰相は臆せず留まり、もう一度目を輝かせて叫んだ。「ペスカーラ、今この時、君の偉大さが告げられている。この時を失するな。君は後悔するぞ。君は終わりかもしれないぞ」。

「うるさい、何と叫ぶのだ。盗み聞きされて見ろ。このカーテンの奥に、一 私自身が一 私は開ける勇気がないと思うのか。自分で調べてみる、覆いを開けてみる」。

モローネは、最初の言葉かけの恥ずかしさと驚きを克服した後、再び完全に自分を取り戻していた。「ペスカーラ」と彼は言った、「最も抜け目ない者でも、そして大方の邪推深い者でも、結局自分が信用し、信頼しなければならぬある箇所に達するか、ある崖っぷちに立つことになるのだと、私はこれまで経験して来た。それでヴァレンティーノ[チェーザレ・ボルジア(1475-1507)]は、ローヴェレ[教皇ユリウス二世]を相手に、我が最愛の公爵

イル・モーロは自分の忠臣やスイス人を相手にすることになった」。

「兩人とも裏切られたな、モローネ」。

「その通り、ペスカーラ。しかし上品なイル・モーロも、ならず者のボルジアも、二人とも信頼しながら没落した。これは彼らの甲斐ある崩壊という暗がりの上に見られる人間性という明るい微光だ。私が最大のことに挑戦し、君に対し最大のことを要求するとき、この神聖な瞬間に滑稽な振る舞いをして、カーテンを開けるようなことをするだろうか。自分の妻の隠れた情夫を探す欺かれた夫のような振る舞いを。いや、私は自分を犠牲にする。私の言うことを聞いてくれ。それから、君に出来るのであれば、私を断頭台へ引き渡すがいい」。

「それは卑小な振る舞いではない」とペスカーラは嘲笑せずと言って、それから懐疑的に付け加えた、「私が君の言うことに耳を傾けると思うか。私の好奇心は湧いて来た。それは白状する。それにかくも勇気のある人間に単純に出て行けとドアを示すことはできない。しかしまずは、宰相、私に言い給え。私は自分の将軍としての忠誠心に疑いを抱かれるような理由とか、ほんの些細なきっかけであれ、貴方や貴方の君主に見せたことがあるか、どうかを」。

宰相は否認した。

「多くの嘘が話されている。皇帝陛下が私に対し報酬をケチったとか、私がこのことを根に持っていると言っている。貴方がこうした皇帝の忘恩やこうしたペスカーラの憤懣を基に考えているのであれば、先へは一步も進めない。貴方は惑わしの土壤に沈むことだろう」。

「それを基にはしていない」。

「あるいは貴方はイタリアのかの公然たるお喋りで意を強くしていないか。私に追従を言って、私を脅迫したり、賛美したり、不審に思ったりするあのお喋りだ。このイタリアの世論は、奸策による細工だ。これは私のマドリードでの根を引き抜き、イタリアで私を虐待しようとするものだ。私は先手を打って、この策謀の文書を蛇のように籠に閉じ込めて、皇帝に渡した。貴方も貴方の指をこの毒に浸したことがあるのか、モローネ」。

宰相は青ざめた、「下界の神々にかけて、私はその罪を犯していません」と彼は叫んだ。

「君は私を策謀にかける気ではないのだな、宰相。では君は私を説得するつもりなのか」。

「違う」。

「どういうことだ」。

「納得させます」。

「最善だな。しかし時間がかかろう。腰掛け給え、宰相」。彼は素早い動作で、二脚の椅子を用意した。今や二人は向かい合って座っていた。モローネは体と膝を前傾にして、一方将軍はぞんざいに後方に寄りかかっていた。

「ペスカーラ、どれが君の戦闘で最も見事なものですか。戦術の奇蹟と言えるものは」。

将軍は返事しなかった。返事は自ずと自明であったからである。しかし彼は軽く溜め息を吐いた。

「それで皇帝はパヴィアの君の勝利から何をしたかな」。

ペスカーラの灰色の目から一つの閃光が走った。「皇帝は勝利を破壊した」と彼は口ごもった。

「君は戦利品のフランス国王を引き渡した。カールはこの国王をどうしたらいいか分かっていなかった。彼は国王を高利貸しのように脅した。彼は可能なこと、単純なことを要求せず、複雑なこと、不可能なことを要求した。兄弟よ、イタリアを諦めろとこう偉大なパヴィアの勝利者はフランソワ国王に説得すべきであったろう。これが、フランソワ、君の身代金代わりだ。これなら君のフランスに迷惑をかけずに、君はできよう。断念し、引き上げろ」。

ペスカーラは微笑した、「モローネ、君が思いを察しているのであれば、君は危険な人間だ。しかし思いを言葉にしたのは、君であって、私ではない。私は何も話していない」。

「私は皇帝に感謝している」と宰相は夢中になって語り続けた、「皇帝はパヴィアの勝利の女神を侮辱した。そして、我がペスカーラよ、女神は君の許に戻って来たのだ。女神は皇帝のためにばかりでなく、皇帝に敵対しても戦ったのだ。女神は外国の支配に対して、イタリアを団結させた。女神はイタリアにその将軍を示したのだ。

我がペスカーラよ、君の上と君のために何という星の配置であろうか。事は成熟し、君自身成熟しているのだ。決定的な時が来ている。必死の戦いだ、神々と巨人達、自由が棒立ちになって強制支配に対し立ち上がっている。世界は今日のうちはまだ動揺して流れている。しかし明日はひょっとしたら溶岩となって硬直するかもしれない。一つの行動だ、君のためにそれが用意されており、君はそのために生まれて来た。君の形成する手がそれを求めて、ぴくつかないか。一つの理性的な仕事だ、永遠の根底となるものだ。地図を見て、二つの海の色合いと山脈の雪の間にあるこのイタリア半島を眺めるがいい。歴史に尋ね給え。生きた絡み合いであり、しばしば強引に引き千切られ、再三また癒着している。共和国と君主達によるもので、二つの旧来の敵同士、二つの偽りの理念、二つの残酷なキメラ、教皇と皇帝だ。神の差し出された指を見給え。それにすがって、新しい人類は身を起こしている。自ら支配しながら、自ら高貴化する人類で、最高位の職はない、世俗と僧職の最高位もない。自由に発展した天才達の輪舞で、同等の諸国家の協奏曲だ」。

ペスカーラは天翔る弁士の腕をあたかも押さえつけたいかに握んだ、「ジローラモ、飛んで行くなよ」と彼は冗談を言った。

ジローラモは身を振り解き、言った、「この神々しい作品の邪魔をするなよ、迷信の偏見や、古くさくなった概念で邪魔するな。これらは君の頭の中にも、君の心の中にも、事象の性質の中にも見られないものだ。ペスカーラ、私は君を知っている。君はイタリアの申し子で、イタリア同様、忠誠や良心を越えて崇高だ」。

「貴方らイタリア人は悪徳の種族だ」とペスカーラは微笑した、「しかし君は実際よりも、悪の点で自分を更にひどくしている。というのはこの知恵は、君由来のものではなく、貴方らの幽霊、あのフィレンツェ人が君に吹き込んだものだからだ。彼はまだ生きてるかね」。

宰相は、ペスカーラが誰のことを言っているか分かった、「彼は窮乏している、忘れられ、軽蔑されている」と彼は恥じて答えた、「我らの最高の精神なのに」。

「当然の報いだ。冷静な頭脳にとって、そして思慮ある手にとって有意義な政治的命題があるが、しかしそれは破廉恥な口が語ったり、科あるペンが執筆すると、非難すべきものになる。しかしこれは一般的なことだ。一切は応用の仕方にかかっている。宰相よ、例えば私の裏切りの実際的なことについてどのように君は考えているのか」。

宰相は無尽蔵に語ることがあるかのように、口を開けた。するとペスカーラは軽く指で彼に触れた。「穏やかに、慎重にな」と彼は警告した、「今や君は細い、揺れる板の上に足を乗せている。私は君を、君の話しによっては陰謀家として捕縛しなければならないかもしれないぞ。君自身の名前で語らない方がいいと君に勧める。君の好む仮面を使用することだな。それも消え去ったフィレンツェのあの書記の仮面が良くないか。まだ彼は我らの間をさまよっているかもしれないし、いやすでに霊界にいるかな。語り給え、ニコロ・マキャベツリ[1469-1527]よ。私は黙って称賛しながら、君の言うことを聞こう。それからひょっとしたら、君は政治家としては相変わらず余りに多くの想像力を有していると証明して見せるかもしれない。いや、私は君を批判したくなる、我がニコロよ、始め給え」。

将軍のこの引き続き冗談を語る調子に宰相は侮辱を感じ、それに対して怒った、「そのお戯れは今止めて頂きたい。その生涯を賭けて、祖国の救出に当たっている者を役者に貶めないで頂きたい。ペスカーラ、真剣になって欲しい」。

「真剣にだど。そうだな」と将軍は答えて、目を、もっと良く聞こうとするかのように、閉ざした。すると宰相は、瘦せた顔の青白さと厳格さを目の当たりにして、一瞬驚いた。しかし彼は決然としていた。

「閣下」と彼は始めた、「貴方が皇帝に報告されたことは、悪いことではありません。貴方が出来るだけ長く皇帝の信頼をつなぎ止め、教皇と同盟とがその声明を発布したからでも、貴方自身が立場を明確にされないのは結構なことです。その間に貴方は貴方の立場を固め、貴方の軍を視察されます」。

ペスカーラは額に皺を寄せた。

「レイヴァは退けなければいけません」と宰相は要求した。

ペスカーラは指で数えた。

ペスカーラは平静に答えた、「レイヴァを片付けなければならないのであれば、私のドイツ人の家臣も生きてはならんだろう。彼らは皇帝と帝国に従っているからな。彼らの頭が落ちることになる。それとも客人としての飲み物に毒を入れるか。宰相、どう助言するか」。

モローネは青ざめた。

「それに私は我がスペイン人の貴族をどうしたらいいのか。彼らも殺害させるか」。

「カスティリヤ人は」とモローネは心臓を動悸させながら答えた、「多分皇帝の許に戻ることでしょう。他の者達は、戦利品は無尽だと言って誘えばいい。彼らは逆らわないでしょう。ナポリ出身のアラゴン人は最も逆らわないでしょう。私はこの種族を知っています。これは新世界の盗賊のようなヒーローに似ています。貴方のデル・グアストを考えて見ればいい。何という怪物でしょうか」。

「しかしこの地上のすべての国々から流されて来た貴方の配下は、貴方の揺るぎない魂によって、貴方の鉄の戦争規律によって、別けても規則的な給与によって、貴方が支配することになります。この給与を皇帝は払えなかったのですが、しかし今やイタリアのすべての宝が貴方のものです。貴方の配下に不足が生じたら、軍をスイス人で満たせばいいのです。彼らは今ではいつでも借用できます。スイス人は司令官不足と国家概念喪失とですでに獲得していた世界での地位と外交政治を台無しにしています」。

「残念だな」とペスカーラは自らに語った。彼はスイス人に対して一種の優しさを有し

ていた。彼はスイス人を二回征服し、ビコッカ近郊では、特別にその狂暴の突撃隊用に開発された大砲の配置で、数分のうちに丸一千人の強靱な軍を壊滅させたのであった。彼はバヴィアで槍の傷をスイス人の槍部隊の一突きから受けていたが、この勇敢な民を愛していた。「彼らの自由は残ることだろうが、しかし残念だ」と彼は繰り返した。

「貴方の軍を確実なものにして」と宰相は続けた。 —

「私はミラノを取る」とペスカーラは補足した、「我が作戦は練られている」。

「貴方はミラノを取る必要はありません。公爵は同盟の一員ですし、貴方は同盟の將軍なのです」。

「そうだな、忘れていた。いずれにせよ、ミラノは眼目だ。それから」。

「貴方は教皇とヴェネツィアとナポリの部隊を指揮します。より小さな部隊は名付けませんが」。

「待て、モローネ、ナポリはスペイン側だろう」。

「ナポリへは貴方が貴方の甥を貴方の副王として送っておけばいいのです。この副王は残酷ですから、数週間で傘下に収めましょう」。

「私の副王としてか。私はナポリ国王か。いつから私は王冠を得ているのだ」とペスカーラは悠然と尋ねた。

「ご覧なさい、貴方にそれをもたらす翼のある足が、貴方の玄関前に来ております」と宰相は赤くなって語った。

將軍の冷たい表情は、一条の光線に触れたかのように温かくなった。王冠のせいと言うよりは、彼の近くに来ている妻の光の環のせいであった。「モローネ、夢の続きを話してくれ」と彼は言った。

「ひとたび、イタリア連合部隊の先頭に立ち、難攻不落の配置に着けば」と宰相は驚くべき確信を抱いて続けた、「貴方の皇帝との対決を妨害するものは何もありません。ひょっとしたら戦闘すら必要ないでしょう。と申しますのは、貴方は、時代の第一等の將軍であるにもかかわらず、いや、そうであるが故に、鋭いチェスの試合や戦術の包括的な計算の方を、戦場によるかの突然の、いずれにせよ盲目的な決定よりも優先なさるからです。つまり、ひょっとしたら、血を流す必要すらないのです。というのは、皇帝は、貴方と貴方の軍を失った後、少なくとも、フランスとイギリスとが、我らの同盟に際して、彼らと交わされた協定に従って、皇帝に対抗する場合、そう簡単に新しい將軍を見つけられないでしょうし、二番目の軍をイタリアに集結させることもできないでしょうからです」。

「私はフランソワ王との君らの同盟については、その文言さえも承知している」とペスカーラは口を挿んだ、「しかしそれに価値を見いだせない。フランス国王はスペインの牢獄で苦勞している。一時間でも早く馬上の鞍に飛び乗るためなら、彼は百度と言わず君らの同盟を裏切ることだろう。私はそう睨んでいる」。

「数日前にも」と宰相は滑稽な顔をして誓った、「パリの皇太后ルイーズは私に手紙を寄越しまして、自分は自分の操のように固く同盟を守ると書いています。 —」

部屋に一つの口笛が過った。...宰相は不思議そうに耳を傾けた。窓辺を一羽の鳥が飛び過ぎたのであろうか。

「皇帝の関心を引いている他のものがまだあるのです」と彼は続けた、「三日月[トルコの紋章]とドイツの侯爵達です」。

「三日月はそうだな」と将軍は判断した、「ドイツの侯爵達に関しては、その新しい宗教教義のことでさえ、皇帝は勿論折り合えよう。そう思わないか、モローネ」。

モローネは考えながら答えた、「そう見えますが、しかし正しく判断すると、やはりそうではありません。いずれにせよ、新しい教義のことでは折り合えない。皇帝は母親譲りの自分の重々しく暗い情緒のために教会を必要としています。新しい信仰はより強力な魂を要求しています」。[母親、狂気のJohanna,1479-1554は1506年来狂気であった]。

「君はこうした事柄について何か理解しているのか、宰相」と将軍は好奇心を起こして尋ねた。

「ペスカーラ、私はとんでもない。私は君同様、我々皆と同様、現実の中に住んでいて、明るい日中の申し子です。つまり古代の英知であって、終末の先には、仮面や影絵しか見えないし、波打つ霧の中には、この我ら自身の現世の存在の巨大な反映しか見えない。しかし民衆と一緒に、善悪を信じ、肉体と魂、それに最後の審判のお伽噺を信ずる人々の間では、今でも、君も承知しているように、ラッパの吹かれるかの日に備えて何をしたらいいか、和解し難く様々に論争されています。我らの賢明な教会は、その屋台を開けて、分別を持って良き仕掛けの備品を販売用に並べている。しかしドイツ人の僧侶は喧嘩して、叫んでいる。これはぼったくりだ。諸君の金を投げ棄てるな。それは無料だ。諸君の罪は支払い済みだ。信ずればいい、罪はもはやない。しかしこのようなことを信ずるには、大きな勇気を要します。というのは、これは信じられないことの中で、最も信じられないことだからです。しかしこれらのドイツ人の頭はこれを仕上げてみせます。かくてドイツ人の頭脳はもはや僧侶を必要としません。そしてその反抗的確信の点で、我々イタリア人に強力に勝っています。我々はそんなことを信じませんし、というか迷信深いのです。

ペスカーラ、私は乱暴に話している。しかしこうした観念は、それ自体取るに足らなくても、生活の中で現実の力を有することになって、これを政治家は無視してはならなくなります。ペスカーラ、君は、君の偉大な使命を考えると、決して無視してはならない。たとえ君自身、私が良く知っているように、ならず者[神知らず者]であっても」彼の微笑には返答がなかった。

「宰相、この点君は間違っている」とペスカーラは真面目に言った、「私は或る神性なものを信じている、まこと、想像上の神性なものではない。しかし他の点は、君の言う通りだ。私はこの目で見て来た。私の戦闘での夕べのこと」、
— 彼はパヴィアの戦いのことを言っていた、
— 「私は野戦病院で二人の極めて破廉恥な人間が死ぬのを見た。一人のドイツ人と一人のスペイン人だ。スペイン人はその聖遺物の下、二人の司祭の腕に抱かれて、震え、慄いていた。ドイツ人は一人っきりで、しかし確信に満ちて、喜んでいて。私はドイツ人に語りかけた。私は二、三のドイツ語を知っているからな。そして彼が自分の悔悛を信頼して、得意に思っているのを知った。しかし魂のこうした色合いのことは止めておこう。本題に戻ろう、君の話は終わっていないのだろう」。

「ペスカーラ、確かに終わっていない。それで、君が剣によってか、あるいは策謀の協定によって、皇帝を試合の局外に置いた暁、ようやく君は、君の偉大さとイタリアの自由を打ち立てることになる。ヘラクレスの十二の難事業だ。しかし君は君の本性のすべての側面と特性を武器として招集することになる。忍耐、決意、熱狂、計算、策略、そして大いなる志操だ。君の中のどの小部分も無為は許されない。ペスカーラ、君はまだ少しも分

かっていないだろう。その暁にようやく、君は本当の君として、その全貌を見せることになる。民族にとっては恐ろしくまた慈悲深いデーモンであり、軍にとっては不敗の勝者であり、愛国者にとっては、イタリアの完成者であり、学者にとっては、再活性化したローマの名誉心であり、侯爵達にとっては、君が彼らを存続させる限り、支配の同盟者だ。君は世紀のすべての可能性と有効性とを利用する。君は教皇の擁護者となって、教皇の町や地方を取り戻して、それを自分のものとする。君は、末期の喉を鳴らしているフィレンツェ共和国とメディチ家の間に審判員として馬で駆けつけ仲裁し[メディチ家は1494年フィレンツェから追放され、1512年復活、1527年また倒され、1530年皇帝の力で再興、公爵領となる]、その双方とも君の言うことに従うことになる。いや、アドリアの海の誇り高い王女[ヴェネツィア]も君は君の勢力圏に引き入れるのだ。私は君が」と彼は歓声を上げた、「ヴェネツィア総督となって海と結婚する様[ブチントーロの小舟から黄金の指輪を投げる]様が見える。

かくて君は生長して、君と君の素晴らしい妻をローマのカピトルの丘で千もの喜びに沸く腕が崇拜しながら空中に持ち上げ、君をイタリア全土にその国王として披露するまでになる。イタリア全土を、君は、案ずるに今まだ出来ないことだろうが、君の所有地として、君の名声として、少しばかり愛することになって、かくて私は、自分が始めたことでもって終えることになろう。というのは、ただ私のイタリアへの愛故に、私の有する最良のもの、唯一の善故に、私は君の足許へ、無慈悲の君の許へ飛び込んで来たからだ」。そして彼は將軍の膝をととても逆上せた身振りで抱き締めて、將軍は飛び上がって、このような崇拜から身を離れた。しかし内心感動しているように見えた。一人の嘘っぽい精神の中のこの感情の真実さに心が動いたのかもしれない、あるいは彼の強力な分別が、彼の偉大さと、イタリアの可能な偉大さという暗示された特徴を思わず一つの実存可能な全体へとまとめ上げたのかもしれない。

彼は宰相を離して、胸の上で腕を交差させて、何度かゆっくりと部屋の中を歩き、最後に偶然のように、また彼の前に立ち止まった、「モローネ、君は私に何年要求しているのだ」と言葉をかけた。

「疑いもなく、何年もです」と宰相は答えた、「多ければ多いほどますます結構です。物事は静かに絶えず生長して行き、壊れないと見える障害を嚙り取り、良心を宥めて落ち着かせ、根源的に破廉恥なことさえ償って癒やす、そうしたかの長い実り豊かな休止を通じてのみ、ただこのような幅広い、必須の段階を経てのみ、国家の礎は築かれます。ペスカーラ、君の最良の同盟者は人生だ。十年、二十年、いや何故三十年でいけないのか、君は力の充実の最中であり、それでこそ手で溢れる泉からすくい取れるのだ。君はまだ君の宝にほとんど手をかけていない。別けてもこのためイタリアの不滅の神々は、君を、この君の素晴らしい仕事のために召命したのだ。ローマ人的に話して、君はまだ一人の若者[20歳から40歳]であって、まだ当分長く死の影が君に届くことがないからだ」。

突然厳しく陰鬱な影が浮かんで、將軍の顔が変わった。彼は敵意ある視線で宰相を睨み、それで宰相は一步退いた。「いいか」と彼は脅した、「私が野心に襲われたら、最初の犠牲者は君の領主スフォルツァに他ならないと君は承知しているのか。君らのミラノをブルボンに与えることが私の仕事の第一歩だ。ブルボンは第二の私、私の右手であり、ゴンザーガー一門だ。私は彼にそれを恵む。君はスフォルツァ公を私に渡すか」。

「すべての神々に賭けて、出来ません」と宰相は驚いて叫んだ、「私が公爵を裏切るな

んで。金輪際、決して出来ません。それに」と彼は怒って叫んだ、「ペスカーラ、どうして我らの純粋な神聖な案件をブルボンで汚すといったことを考えつくのです」。

「この人間と来たら」とペスカーラが彼を嘲った、「これ以上、破廉恥なことがあるか。自分では哀れな主君に忠誠を尽くすつもりで、私に対しては、私の崇高な皇帝への忠誠を破るよう要求している。この整合性のない精神を見よ。私を裏切りに誘っているが、自分では裏切りに手を染めたくないのだ」。

「それは全く別のことです」と宰相は嘆いた、「フランスの元帥は祖国を裏切りました。しかし君は祖国を救うのです、君が自分の主君ではない一人の皇帝から離反することによって。私が私の公爵を、我が優しい主君を犠牲にすると、イル・モーロが私に夢枕に現れましょう」。...彼は哀れな溜め息を吐いた。...「しかしそれでもやむを得ない。しかし今は、ペスカーラ、君もこれ以上抗わないでくれ。イタリアを憐れんでくれるか、返事をしてくれ。残酷な男よ」。そして涙が目からほとぼしり出た。

「モローネ、今日は出来ない」とペスカーラは彼を慰めた。「我々は兩人とも疲れている。休息が必要だ。昼寝の時間だ」。彼は呼び鈴を引いた。「イッポリト」と彼は少年に指示した、「偉大な政治家のこの殿方を塔の翼へご案内しろ。執事に上の階のすべての部屋を開放し、彼に丁重にお仕えし、豊かにもてなすよう伝えるのだ。宰相、選別された文庫もあります。新鮮な外気が欲しい場合は、庭園へ下りて行かれると良い。影があつて、防塁まで通じています。食事へのお誘いは出来ません。私は妻のヴィットーリアを待っています、夕方は塞がっています。気散じをしてお過ごしください。明日またお目にかかりましょう」。

「気散じなどできましようか」と宰相は嘆いた。

「すべて経過して行きます。もう一言。どうぞ守衛には近寄らないことです、ドイツ語が分からない場合」。彼は宰相が青ざめるのを見た、「心配ご無用です」と彼は優しく結んで、彼を放した。

彼が再び向きを変えると、公爵とデル・グアストが近付いて来た。隠れ場から出て来たもので、兩人ともすっかり興奮していた。青白いブルボンは頬が熱病のように赤らんでいて、デル・グアストは燃えるような目をしていて。盗み聞きした会話と呈示された名声とで兩人とも誘惑され、魅了されているとペスカーラは察した。デル・グアストは戦利品に飢え、公爵は[恥を]浄化してくれる月桂冠に飢えていた。兩人は沈黙を続けていた。しかし彼らの圧迫し、嘆願する身振りは、言葉に変わろうとしていた。そこでペスカーラは兩人の口を閉ざす言葉を発した。

「皆さん」と彼は言った、「ここでは芝居がなされた。この作は長いものでした。諸君は栈敷席であくびが出なかったですか」。

するとブルボンは突然はね上がる気分となって、甲高い笑い声を漏らした。「悲劇かそれとも茶番か」と彼は尋ねた。

「殿下、悲劇です」。

「タイトルは」。

「死神と道化師」。

第四章

その長い部屋の並びを通じて、ミラノの宰相は、休みなくあちこち歩いていた。窓の鎧戸は熱い午後の陽射しに対して閉ざされていて、ただ隙間から薄明かりの中へ、からかう光線を差し込み、反射させていて、タイルの上にどぎつい条光線が浮かんでいる一方、それぞれの部屋の奥は神秘的に包まれていた。しかしどんな狭い閃光も、ペスカーラの魂を宰相に対し明らかにしてくれなかった。彼は自分の一身を犠牲にしたが、ペスカーラは自分の一部分すら犠牲にしなかった。今や宰相は一人の罪人、白状した者であるばかりでなく、捕らわれた者でもあり、これと大して変わらなかった。しかし自分の告白を後悔しているとか、この半ば囚われの身に不安を覚えるとかは全くなかった。逆に彼は自分の完全な献身という高邁さを堪能していた。自分の屈辱的に裏切られた公爵さえも、今や彼の良心の呵責とならず、ペスカーラを説得しようとする情熱とこの唯一無二の人間に対する自分の攻勢成果にすっかり夢中になっていた。彼はたった今終わったばかりのこの場面におけるペスカーラの偉大な挙措と真面目な演技に率直に心奪われていた。彼はこの場面を継続させていた。二人の会話の一つ一つの言葉が彼の耳の中で繰り返され、会話のときのすべての表情や身振りさえもその面影が形成され、その筋肉が動き続けた。 — しかし発話されたものの意味やその有効性について、彼は解きがたい、致命的懷疑の中へ絡みとられていた。解釈を次々と投げ棄てながら、まだ、ペスカーラは捉えられず、まだ、自分と格闘中であるという最後の真実の結論に達した。

そこで彼は自分の同盟の女性のことを憧れて考えた。今この瞬間にも到着するであろう女性である。そしてこのヴィットーリア・コロナの価値は彼にとって途方もなく偉大に思われた。ただこのような女性のみがこのような男性に勝利を収められよう。当時イタリアでは良く見受けられた扇動的で支配欲の強い女性ではなく、この時代の最も高貴な女性が彼の案件を担っていた。そしてこの、イタリアのすべての美と徳操とを具体化している女性、イタリアの悪徳と罪を免れている人物の中で、彼の祖国は比類ないものに映じ、イタリアを再び取り戻すというその名声は独自のものに映じ、それでこの点、ペスカーラであってさえ、いやまさにペスカーラであるが故に、抵抗し得ないと思われた。不埒な手段で活動している同盟は、こうした天上的目で見れば、神々しい純粋なものとなって、「神聖な同盟」という名前を自由な世俗の意味で正当化していた。彼の思うにイタリアを救うために召し出されている神々しいこの女性への賛嘆は、宰相にとって崇拜と浄福な衝動と化した。というのは彼はどんな崇高な感情にも、どんな卑俗な感情にも同等に同じ強さで浸ることが出来たからである。

今や確信を得られて、内面が明るくなり、彼は陽光を求め、一つの鎧戸を開けて、周りを見回しながら、所謂蛇の広間に立っているのに気付いた。彼の公爵がしばしば彼に話していた広間であるが、自分ではまだ見たことがなかったのである。羽目の上、四つの壁に沿って、絡まった蛇が描かれていた。二匹ずつ絡み合って、一方はスフォルツァ家の火を吐く竜であり、もう一方はヴィスコンティー家の恐ろしい紋章の像、喉に子供を啜えている蛇である。伝説にせよ、真実にせよ、甘美なレオナルド・ダ・ヴィンチがこのおぞましい花輪の創造者と見なされていた。彼はイル・モーロに長く仕えている間に、ノヴァーラの公爵家に一度滞在したことがあって、数時間のうちに、その領主の家を賛美するという口実の下、残忍な気まぐれのこの遊びを開始し、終了させたのであった。あり得ないこと

ではない。というのは微妙な微笑の画家は、同時にしかめっ面や戦慄も愛したからである。最初は至福の目で、やがて不安げな目で宰相はこの野蛮な争いを観察した。怪獣どもや飲み込む喉の中の裸の子供に一連の自然な動作を付与することに習熟した冷静沈着な想像力による作品である。それから突然この花輪が生きて、回転するかのように、宰相には思われた。宰相は慄然として向きを変え、また窓辺に寄った。

彼は人気のない宮殿の庭園を眺めた。庭園は木々の広大なドームの下、深い闇の影の中へ消えていた。その上にはまぶしい光の海が漂い、時折ギザギザの市壁の断片が見えた。ただ若干離れた所に、豊饒な緑の中から三段のテラスの上に小さな別荘があって、隅の部分と二面だけが見えていて、その面のそれぞれが一つの図柄となっていて、一方の面は塔の建物で終わり、もう一面は葡萄の蔓の巻き付いた石柱通路に続いていた。これを見て、モローネは思った、別荘の諸部分が容易に元の部分から派生しているこの優美な別荘は、ヴィットーリアのためと定められており、ペスカーラはこう考えているに違いない。つまり重々しい見張りの靴音の轟く宮殿ではなく、一つの気さくな、穏和な箇所、愛する妻を迎えたい、と。それに幾多の向こうで忙しく行き来している召使い達も或る客人の到来を物語っていて、今や彼は反対方向から或る到着の物音を耳にしたように思った。するとモローネはもはや不快な部屋にこれ以上留まりたくなくて、階段と小門を求め、やがて或る緑の木陰道を散策していた。

彼は歩いていて、やがて広大な円形広場に達した。そこはとても好ましい薄暗がりとなっていて、その中心部では一つの泉がその微光を発する水盤に、ゆっくり流れる噴水で透明に、眠りを誘うようにヴェールをかけていた。周りに四つの広い大理石の座席があった。その一つ、背に二頭のスフィンクスが描かれている席に将軍が微睡んでいた。頭を胸の上垂らしていた。

軽く驚いた後、モローネは用心した足取りで近付き、この今や意志を失った表情に、秘匿の考えが象られて浮き出ていないか、その眠る顔を観察に来た。いや、この頭は、野心を抱いて夢見ているものではない。裏切りも考えていない。この自制されていない表情は、勝利のための策謀の痕跡もなく、苦しみと諦念の表情に他ならない。モローネは観察するにつれ、彼自身の興奮した表情が凝固した。というのは、この静かな頭部の表情はとても明瞭であって、彼も抗しがたく或る宿命論者の気分に襲われたからである。つまり人間の策謀の無意味さと運命の全能性を確信しているのである。この強力な顔は敬虔さと服従しか表していない。

するといつの間にか一つの手が宰相の肩に置かれていた。あたかも彼の前で微睡んでいる者の精霊が彼の背後から触れたかのようにあって、ちょっとした霊的驚愕を感じた後、彼が振り向くと、黄色の頭蓋と高齡のために脆くなった形姿が見えた。両の褐色の賢い、しかし果てしない憂いを含んだ目がその唯一の生氣あるものであった。

「ヌーマか、まこと、びっくりしたぞ」。

「そうでしょう、しかし、宰相、こちらへ。彼はうたた寝をさせておきましょう。向こうで向かい合って座りましょう。私は遠くから彼を観察します」。二人はそうした。医師は多分八十歳を数えていたろうが、しかし鋭敏な聴覚を維持していて、宰相と囁き声の会話をを行った。「君は成功したと思っているのか」と彼は尋ねた。

「分からない」と宰相は言った、「そう願っている」[Horaz,Satiren II.6,1]。

「ジローラモ、お気の毒様。いいかい、たとえ彼はその気であっても、彼は出来ない」。

「出来ないと言うのか、何故。秘密めいているな。どの神が、あるいはどの女神が彼に禁じているのか。私を磔にしないでくれ。話してくれ」。

「話していいものなら、君に我が家の玄関から、そしてノヴァーラから追い払う仕草を見せていたことだろう。しかし口では言えない。しかし君を、この上なく哀れな君を、見棄てることもならない。君はここで言葉を失うことだろう、ひょっとしたら君の命も失うかもしれない。誓って、彼は出来ないのだ。彼には無理だ、運がない。逃げるのだ。すべて無駄だ」。

「逃げるのか。ペスカーラの前から。私はそのことを考えていない。彼をしっかりと抱き締めて離さない。すべてのデーモンにかけて、何故彼には運がないのだ」。

すると医師は口をパクつかせて、モローネはほとんど理解できないままであった、「すべてこの世の生起は、時空の中だろう。しかしこの時空が彼には恵まれていない」。

彼は唇に指を置いて、唇に沈黙を命じ、それからすぐに再度、宰相に近付く足音に注意を向けさせた。「静かに、ほら見ろ」と彼は囁いた。

こっそりした足取りでヴィットーリア・コロナが広い緑の間に現れ、夫好みの場所に夫を探していた。まだ彼女は旅装のままであった。馬から下りたばかりかもしれない。夫の微睡む姿を見て、彼女は立ち止まり、その姿を見飽きず眺めていた。それから突然彼女は涙に崩れた。法外な喜びからか、あるいは、この愛しい、今や苦勞と外傷とでより深く刻まれた面影の神聖な真剣さに驚いたのであろうか。しかし数瞬であった。そして彼女は彼に近寄った。無限の愛を込めて、彼女は手を厳しい顔の下に置き、その顔を穏やかに引き上げながら、熱い接吻で目覚めさせた。ペスカーラは目を開けた。穏やかに彼は妻を右の胸に抱いて、その額に接吻をした。

将軍が起き上がったとき、モローネは珍しく内気な情動に駆られて、こっそり去っていて、ペスカーラはただ眼前に医師だけを見ていた。左手をヴィットーリアに回して、彼は右手でヌーマの手を握り、自分の妻に語った。「こちらは私の医師だ」。そしてヴィットーリアは、彼女らしく情熱的に、膝を折って、弛緩した手に接吻を浴びせた、「我が英雄の傷をこの手が塞いだのですね」と彼女は感謝の念を一杯込めて歓声を上げた。それから彼女は起き上がって、深く感動して尋ねた、「ヌーマ・ダーティ殿ですか」。

老人はお辞儀した。

そしてヴィットーリアは、温かい心が弾けて、夫の方を向き、すぐ夫の口許で、嘆いた。「私どもが喜ぶ前に、私とこの医師に正義を見せてください。私どもの甥は、この方の孫娘を誘っておきながら、その罪を結婚して償おうとしないのです、ひどいわ」。

「そうなのか、ヌーマ」と将軍は言った。そして老人が悲しげに肯うと、「何故そのことを黙っていたのだ」。

「最初は、閣下、単に憶測だったのです。孫娘は我が家とノヴァーラをこっそりと去っていました。貴方は自らの大きな運命を相手にしているのに、どうして一人の娘の小さな運命のことで貴方のお心を煩わせましょう。今日ようやく確証を得ました。ローマからの書状で、哀れな孫娘が逃げていた尼僧院の院長から頂いたのです」。

このときヴィットーリアは嘆願して、彼女の英雄の左側に迫った。ペスカーラは妻の体の圧力で、体に痛みを感じたように見えた。痛みを隠し、そして克服するために、彼は二、

三歩先に進んだ。

三人は泉の戯れる明かりの前に立っていた。「美しい妻よ、再会を心から願っていた」と將軍は言った、「愛しいそなた、やっと会えた」。彼は彼女の輝く目を見つめた。「しかしそなたの高貴な臉はまだ旅の塵が付いたままだ。ハンカチを寄越せ」。彼女はそれを渡した。彼はそれを濡らして、彼女は目を閉ざし、彼は彼女の額、臉、頬を洗った。

「私は、ヌーマ、そなたの孫娘のことをよく覚えている。ほとんど会っていないが。濃い青色の目に、栗色の髪の毛、この妻のような具合、そうだろう。ユーリアという名前かな。彼女の件は、私には難しく、悲劇的に思える。ヴィットーリア、私はそなたが知っているこの悪人を、――私でもそう呼ぶしかないが、――彼女と結婚するよう強制することを躊躇わないだろう。彼は疑いもなく従うことだろう。というのは彼は私の息がかかっていて、彼は私の言うことを聞き入れるからだ。しかし私はこの辱められた女性を、一人のならず者、極道に縛り付けることが良いことか、自問している。彼は勿論、その不遜な才能でこの世で最高の地位まで出世するであろう男だ。彼女本人の意向はどうなのだ。彼女はそれを望むだろうか。ヴィットーリア、そう思うか。彼女はローマでそなたの足許に身を投げ出したとき、それを要求したのか。そう推定しているが、彼女と会った時のことだ」。

「そう要求しました」とヴィットーリアは嘆願する声で言った。

「彼女はそなたの純粋な目に耐えられたのか。本気で言って、そなたは彼女を辱めた男に彼女を預けるつもりか。彼女が我が娘なら、私は娘を尼僧院に閉じ込めよう。しかし令夫人、貴女は人間的で、慈悲深い。誰に分かろう、ひょっとしたら彼女はまだ彼を愛しているかもしれないし、あるいは、同時に彼を愛し、また憎んでいるかもしれない。――私にはこれは分からない。しかし私は彼女の肩を持つことにしよう。彼女は選択すればいい」。

この時、医師は干涸らびた口を開けた。「哀れなユーリア、何という選択でしょう。今は選択しないで済むのは、浄福なことです」。

「何故だい」とペスカーラは尋ねた。

「薄暗い、しかし賢明な神慮によります」。

「分かった」と素早く將軍は言った、「彼女はもはや生きていないのだな」。

「その通りです、閣下」。

「自分で自分を傷付けたのですか」とヴィットーリアは嘆いた、「守護天使が守って欲しかった」。

「どうしようもありません。貴女に打ち明けた後、彼女は修道院へ戻って来て、亡くなりました。告白したせいで、死ななければならなくなったのでしょうか。令夫人、それに貴女の純粋さを目の当たりにして、閣下の仰有った通りに。ひょっとしたら心臓発作かもしれませんし、ひょっとしたら、――この率直な娘は、しばしば私の薬局で器用によく理解して手伝っていましたから」。

ここで將軍が判断した、「それは詮索しないでおこう。彼女は平安の地に向かって行き、今では神聖な力の務めに奉仕していて、そこは我らの哀れな正義の及ぶ世界ではない」。

ヴィットーリアは泣いて、老人は嘆願した、「もはや耐えられません。もう十分です」。

「そう、十分だな」と將軍は締め括った。

それから彼はヴィットーリアに手を差し出して、軽く言った。「高貴な御夫人、我らが一緒に過ごせる間、貴女と私のために、この古い宮殿よりも明るい家を準備した。宮殿は鈍重な梁付きで、裏切りの住まいだ。この跳ね橋を通じてイル・モーロは引き渡された。向こうの松の側に優美な建物が見えるだろう、令夫人。あれを貴女のためにと定めていた。あそこが貴女の清浄な日常に相応しい」。

彼らは公園を横切って行き、三つのテラスの下段に達し、そこで老医師は立ち止まった。息を切らして、將軍の戻りを待つことにした。ヴィットーリアが三段目を上がると、彼女は二つの彫像を目にした。一番上の段の左右を飾っていた。「これ若いフランチェスコ・スフォルツァが発案したもので、彼の趣味は相変わらず最良だ」とペスカーラはお喋りした。「これらのペアはその浅薄な頭脳からの可愛いひらめきだ。例えば右手のペアだ。最初とても気に入ったが、何なのか良く分からなかった。するとそれを最初に運んだ庭師が私に銘を教えてくれた。しかし繊細な公爵はそれを消させて、見物人が感じ取り、察するようにさせたのだ。その銘はだ、...しかし、そなたは、愛しい者よ、分かるだろう」。

ヴィットーリアは、左手のペア、屈託なく愛撫しているカップルにチラと視線を向けた後で、長いこと右手のペアを眺めていた。それは二人の女性像で、一人は横たわっていて、何か、花か蝶を軽率に引き千切っていた。もう一方の女性は立っていて、自分の内面に没入しているか、あるいは遠方を思っただけの空ろであった。しかし三人の娘は、愛撫している者、忘我の者、憧憬している者、様々な表情の下、同じ顔であった。ヴィットーリアは考えた。すると將軍が、学校で少年が少女に囁く按配に、悪戯半分に彼女の耳許で囁いた。「目を開けて見な、二、三の文字がまだ読める」。ヴィットーリアは左手に見つけた、弱く浮き出していた、「Pres,...」、しかし右手ではいくらかより明瞭であった、「Ass,...」。「現在[Prezenza]と不在[Assenza]」、と彼女は恥ずかしげに補完した。將軍は言った、「現在は厚かましい。しかし忘我の不在はとりとめもない。私は現在の不在を称える、つまり憧憬だ」。

「私どもはもはや離れないでいきましょう、フェルナンド、あなたが私を好いているなら」。

「ただ後一回だ、数日間だけ。せいぜい一週間だな。令夫人、私がミラノを接収するまでだな。私の後に付いて来ればいい。そしてその後は、貴女の望みなら、もはや離れることはないだろう。ヴィットーリア、そなた次第だ」と彼は優しく言った。

「望まないなんて」。

「愛しい人、覚えているかい」と彼はまた冗談を言った、「かつてイスキア島の波の寄せる浜辺で私にこう言ったことを。恋したことのある一人の女が、いつか別の男に惹かれるようになることは考えられない、と。それは恋愛に矛盾する、とそなたは言った。勿論そうだが、しかし経験とそれ自体の人間的性質もある。不在のとき、不在のとき」。

するとヴィットーリアは背を伸ばし、気位高く自分の全身を示して、輝く天に素晴らしい腕を突き上げて、袖が滑り落ち、そして誓った。「この太陽の純粋な光線にかけて、決して私は別な男に惹かれません」。

將軍は宥めた、「お子さん、向こうにそなたの侍女達が立っている。そなたの誓言に驚いているぞ、彼女達はまこと、そなたの真似をする気はないだろう」。彼は恭しく離れて待機している侍女達に合図し、侯爵夫人に別れを告げた。「領主夫人、貴女は着替をなさるといい。私自身はまだ夕方まで仕事がある。ここで別れよう。日没後、夕食時に再会だ」。彼は向きを変え、彼女の方を振り返らずに去った。下の段の所で、彼は老医師の腕を取っ

て、ゆっくりと医師と一緒に糸杉の道を宮殿の方へ戻って行った。

「閣下は昨夜いかがでしたか」。

「いつもと変わらない」とペスカーラは答えた、「ヌーマ、そなたは客人に対して余計なことを言わなかつたらうな」。

「貴方のご命令通りに致しました。...しかし何故貴方は、宰相や我が哀れなイタリア相手にこのような残酷なお戯れをなさるのです。何故です」。

「私がイタリアを弄んでいると言うのか。逆だ。ヌーマ、そなたの民が私を弄んでいる。彼らは生きてると嘘を吐いている。しかし彼らの法外な罪作りの点で、死んでいる」。

彼らはしばらく黙って歩いた、「ヌーマ、最近な」とこの時將軍が嘲った、「一人の占星術師が私を訪ねて来て、私の前にホロスコープ[黄道十二宮図]を置いたのだ。彼は私を六十歳まで生きると見た。私は少ないと言ったのだ」。

老人は溜め息を吐いた。

再び彼らは無言で歩いた。城の狭い門の前でペスカーラは老人に別れを告げた。「我が將軍達が私を待っている。この時間に招集したのだ」。その時、善良な褐色の目と、齒のない口の老人に対する同情が彼の心に浮かんで来て、彼は優しく言った、「ヌーマ、心配するな。私はそなたのイタリアを虐待しない。私は公正に、穏やかに行うつもりだ」。

その控えの間では、ブルボン公爵とレイヴァが向かい合って立っていて、その間に、二人を引き離すかのように、デル・グアストが立っているのを、將軍は見つけた。更に一人、四人目の男が、腰壁に寄りかかっていた。この男は年配の貴族で、半ば僧侶、半ば俗人の様子で、銅色の顔をし、深い、謎めいた面貌で、僧服に似た白い外套をまとっていた。ペスカーラは彼を見たとき、少し慄然としたように見えたが、しかし將軍は彼に向かって行き、挨拶をした。

「モンカダ殿、光栄ですが、ご用ですか」。

相手は答えた、「閣下、私は副王の名代で派遣され、会談を望んでいます」。

「よろしいですが」と將軍は答えた、「しかし遠征の前夜であり、手短にお願いします」。

「内密の会談を希望します」。

ペスカーラは思案した、「内密ですか、騎士殿。出来ません。この二人の殿方、私の同僚に、仕事面のことを隠してはおけません。その面倒を省いてください。こちらの私の甥は秘密を守ります。貴方の申し出は何ですか。騎士殿、語ってください」。彼はモンカダに椅子を出さなかった。

モンカダは居合わせる面々を観察した、「貴方の御意志に従います」と彼は言った、「閣下、副王はいたくご心痛です。イタリアの同盟は既成事実となっており、閣下もご承知のことと存じます。閣下はレイヴァ殿を通じて副王に部隊を要請されましたが、副王は自らそれを必要として、勿論手放せません。戦争が勃発した際に、間違った道を進む教皇、あるいはミスリードされた教皇に、恐れながらも威嚇の動きを示すためです。閣下は、我らの軍が、イタリア半島の南部と北部で連携した同じ作戦に従事しなければならないと同意されています。この意味で、副王は、貴方に同道して、作戦を計画通りに維持すべく私を派遣されました。閣下は了承されますか」。

將軍は自らの不快の念を抑えて、同意した。

「もう一件です」とモンカダは続けた、「貴方が内密の私の話しに応じられなかったの

は残念です。しかしこの機会に申します。マドリードでは、閣下がミラノを征服されたら、貴方が厳格に徹底的に処分されることを望んでいます。推奨されるのは、背いた公爵は鎖に繋がれること、そしてスペインへ移送されることです。反抗的ロンバルディアの貴族は、その地所を没収され、断頭台へ上げます。強力に占領して、重い戦費を要求して、市民を抑え込み、ミラノには恐怖政治を敷くことです」。彼は将軍の表情を探った。

将軍は冷静に立っていた、「恐怖だと」と彼は繰り返した、「あり得ない。私が生きている限り、そして我が皇帝に仕えている限り。ミラノは帝国の領地だ。皇帝は帝国が虐待されるのを望んでいない。誰の願いだ、誰の推奨だ。助言とか願いは私には勘弁してくれ、モンカダ殿。私にはそんなもの必要ない」。

「ミラノ公爵は猶予を願い出たのですか」とモンカダは不審げに尋ねた。

「騎士殿、それはない」。

「宰相を通じてもないのですか」。

「ミラノの殿下の宰相は、今日この城に泊まっています。貴殿は宰相と直接話せますし、自ら宰相に聞かれるとよろしい。貴殿は彼にとって気晴らしとなりましょう。案ずるに彼は退屈しておりますから」。

「閣下は宰相を接見しなかったのですか。これは好奇心からではなく、ここの我々皆がお仕えしている王家の関心からの問いです」。

「私は宰相と話しました。今日の午前中、二時間ほど」。

この率直な発言にモンカダは驚いた。しかしこれは初耳のことではなかった。彼は、ペスカーラの召使い達の中で自分が給金を払っているスパイの耳を借りて、モローネの到着と謁見のことを正確に知っていた。

「長い会談ですな。きっとただ公爵の投降のみが話題だったのでありましょう」。

ペスカーラは黙っていた。自分の前に立っている者に、不必要なことをただの一言でも恵むのを秘かに嫌っていて、そうしないでいると思われた。

「閣下が手短に打ち切らなかったことが」とモンカダは更に続けた、「不思議に思えます。この卑劣漢をそもそも接見されたことに驚いています。今閣下には例の中傷がイタリア中に知れ渡っているのですぞ」。

「それ以上言うな。どの一言も侮辱となり、時間の無駄となろう。私はこの流言飛語を我が皇帝に報告してある。それで十分だ。私は自分の敵を承知している、...」。

「賢い。閣下が、モローネとの会談を疑惑のない証人達に聞かせていたら、同じく賢明だったことでしょう」。

「それは行った」とペスカーラは軽蔑して答えた、「ここの殿方二人だ」。ブルボンとデル・グアストが頷いた。「しかし会談の内容に関しては、貴方はそれを知りたいと熱望しているように見えるが、貴方が望むなら、私が貴方の面前で、明日宰相に与えようと思っている返事からその内容を察するとよろしい。その後、宰相は私の軍に囚人として付いて来ることになる。ここのこの広間で行う。しかしまた後ほど」。そして彼は自分の奥の部屋に入った。そして他の三人が彼に従った。

モンカダは一人っきりで立っていた。「仮面だ」と彼は考えた、「考え尽くされた仮面だ。その仮面の下にはどんな顔があるのか。...知りたいものだ、...ペスカーラ、そなたは私から逃れられないぞ、そなたの周りに潜んでいるぞ」。彼は諍う考えを抱いて、ゆっく

りと離れて行った。

三人の将軍が中で戦争準備をしている間に、控えの間はしばらく空になって、番人がいなくなった。小姓のイッポリトは、領主夫人ヴィットーリアの許へ忍んで行った。夫人の到着を耳にして、その美貌と人当たりの良さを彼は子供らしく賛嘆していた。彼は挨拶して、奉公を申し出たくて、うずうずしていた。しかしその後、その厳かな広間は陽気な一行で一杯になった。元帥の五頭の銀灰色のグレーハウンドが、まだ全く若い猟犬であって、宮殿に見張りのいないどこかの入口を見つけ、ドアの隙間から鼻を鳴らして、主人の痕跡を嗅ぎつけたのであった。この種族は流行の犬であった。するとベスカーラ侯爵のグレーハウンドも、何ごとかとやって来た。高貴な猟犬で、疲れを知らない走行犬であるが、この軽薄な連中に納得していなかった。この連中は、この真面目な部屋に似付かわしく思えず、そこでこの猟犬は唸り声を上げて、自分の不機嫌を伝えた。

すると見よ、更に一頭の華奢な、可愛らしいグレーハウンドが現れた。極めて上品な容姿の雪のように白い生き物で、微光を発する銀の首輪には、「ヴィットーリア・コロナ所有」という銘があった。最初は歓喜と称賛とで迎えられたが、この飾りの玩具は、やがて追い立てられ、狩り立てられる獣と化して、これを追って若い猟犬の群れは吠えながら輪を描いていた。すると小姓が飛び込んで来て、領主夫人に頼まれたのであろうか、領主夫人の所有物を両腕に抱き上げて、これを騒動から連れ去り、その後に荒々しい狩猟犬を引き連れて行き、これにベスカーラの思慮深い走行犬は従わないでいた。その瞬間、レイヴァが奥の部屋から出て来て、一同の逃走を速めた。彼は元帥の一番遅れている子犬に一蹴り入れて、子犬はクンクン鳴きながら空中を飛んだのであった。

白髪のこの将軍は、怒りで顔を赤くして、同行して来たベスカーラの手でもほとんど押し留めることができなかった。「レイヴァ殿」と侯爵は言った、「お願いします、残ってください。冷静になってください。公爵に対し真っ当に振る舞うよう貴方に強制はできません。しかし少なくとも作法は守ってください。公爵は貴方に対し模範的に、非の打ち所なく丁寧に振る舞っています。しかし貴方は百姓のようににやけた表情をしている。まだ我らの協議が終わらないのに消えようとしている。これは貴方の地位や功績に相応しい振る舞いではありません」。

「ベスカーラ、私はこれ以上裏切り者には耐えられない。この高慢な男はあらゆる表情、あらゆる動作で私の侮辱にかかっている。嘲笑でしかない。奴の冷淡さは私を馬鹿にしており、奴のお辞儀は私のお辞儀を嘲っている。私は、どこから彼が私を見下す権利を得ているのか知りたい。彼は高貴な生まれだが、私の方が彼の上なのだ。私の名誉は純粋なままで、我が国王の忠実な下僕だからだ。しかし彼は彼の国王を裏切ったのだぞ。彼は札付きだ。その滑らかな顔は、ここの私の傷よりも見苦しい。しかし侯爵のすべてが私を馬鹿にしているわけではない。私の価値を認めている侯爵達もいる。例えば私が一緒に旅して来た分別あるモンカダだ。少なくとも彼は私に信頼を寄せている」。

ベスカーラはととも真剣になった、「レイヴァ殿」と彼は言った、「私はいつも貴方の価値を全面的に認めて来た」と貴方は満足して保証してくれよう。私は生まれで判断しない。私は人間を自分の評価基準で判断している。私が高慢であったとか、けちくさく考えていると貴方が思ったことはないだろう。私に対し何も文句はないだろう、老公」と彼は信頼して言った、「我々は了解し合っている」。彼は明るい灰色の目で、同僚将軍の目を求め

た。しかし相手は頑固に頭を下に垂らして、目を避けた。「異存はない」とレイヴァは呟いた、「貴方が他の者と友情を結んでいること以外は。しかし私は急いでいる。閣下は指示を私に後から送られたい。そのようなものは文書で貰うのが私は好きだ。このレイヴァは義務を遂行する。それは任せておけ」。

將軍は彼を去らせて、憂わしげに自分のグレーハウンドの上品な頭を撫でた。犬は彼の手にその頭を触れさせるためにやって来た。

それから彼が部屋に戻ってみると、ブルボンとデル・グアストが興奮した会話を、多分宰相について、交わしているのに出会った。彼らは塔の部屋の方を視線で示した。將軍は微笑した。「皆さん」と彼は言った、「君らは今朝奇妙なお喋りに耳を澄ましていた。そして、 — もっと奇妙なことに、 — このお話しに私は乗らなかったが、しかし我が証人達は乗っている。私の忠誠は揺るがない。しかし君らの忠誠は、思うに揺るがされている。宰相の意図しなかった一つの勝利であるが、しかし宰相は気を良くすることだろう」。

それから彼は表情を変えて、デル・グアストに向かい合った。「ドン・ファンよ、貴方の目が貪欲に獲物を求めて燃え上がっているのが見えるぞ。貴方を喋らせずに、貴方の上司が皇帝への裏切りに進むよう仕向けなかったことを感謝するのだぞ。というのは、まさに貴方は、ドン・ファンよ、陛下に変わらぬ忠誠の誠を捧げなければならないからだ。裏切り者になりたくないならな。君公への忠誠は、貴方がやむなくやってのける唯一の徳操だし、貴方に残されている最後の名誉概念だからだ。この忠誠は、貴方が墮落や激昂に抗して仮借なく遂行するならば、貴方の仮借なさを高貴化することだろう。そして貴方の残酷な衝動も、地上の正義のために一役買うことになろう。このことは私の善意の助言として受け入れることだ。そして今日は去って、ヴィットーリア夫人の目を憚れ。貴方を目にする、彼女の目が憎悪する。その目は殺害者を見ておれないのだ」。

「殺害者とはあんまりな」とドン・ファンが反撥した。

「殺害者なのだ。貴方は貴方の犠牲者のことをまだ知らないのか。貴方のために言おう。ユーリアだ。我がヌーマ・ダーティの孫娘だ。失意のためにローマで亡くなった。彼女を葬ったのは、貴方だ。彼女にとっては死んで幸いであろう。しかしだからと言って、貴方の罪が減るわけではない。彼女が貴方の前に化けて出ると案じなくても良い。彼女は安らぎの世界に沈んで、貴方を貴方のフリアイ達[復讐の女神]に委ねている。遅かれ早かれ後悔するようにと」。

デル・グアストは青ざめて、彼の髪の毛は密集した蛇のように逆立った。自分の行動に驚いたわけではなく、將軍のすさまじい真剣な審判ぶりに驚いていた。將軍の破壊的処罰力は墓場の彼岸から来ているように見えた。彼はうろたえて、この目の稲妻から逃れて行った。

「家庭的事件だな」とブルボンは述べた。

「しかし、フェルナンド、宰相は君の考えている以上にもっと私を感動させたを知っているか。彼の誹謗にもかかわらず、 — 彼は私が何も悪く受け取らない唯一の男で、 — 彼は途中全く私を呆然とさせたし、あるいはむしろ君が私を呆然とさせた。君が、私を君の第二の自我と呼んで、私にミラノをやると言ったからな。君は私のことをからかっていて、私は鈍くて、その冗談が分からなかった」。

「許してくれ、シャルル。私は宰相がミラノの公爵に忠誠を尽くすか興味があったのだ」。

しかしシャルル、信じてくれ、君にも皇帝に付く案件しか残っていない。イタリアの没落はどうしようもない。イタリアは自ら瓦解して行く。この案件を注視するのだ。イタリアは、真実と偉大さの見せかけを伴いながら、私に嘆願し、無条件で申し出ている。同時にイタリアは完全に企んで、私の地盤の大地を引き抜いており、私にこの深淵を飛び越えるよう強制している。このような悪評や中傷があればこそ、私にマドリッド側が一人の監視人、盗聴者を派遣している理由が分かることになる。しかし何故私の敵を送ってくるのか。何故モンカドなのか。確かに彼は私に何も難癖を付けられないだろう。私は日々の業務を仕上げて、シャルル、君に私の出来る限りのものを、私の職務と私の後継を引き継いで貰うことになろう。...そうだろう、シャルル。君はイタリアに対して公正であろう。イタリアを苦しめないだろう。法外にイタリアを押し潰さないよな。そのことを君は私に約束して欲しい。イタリア人は私にとってそれに値しないけど。私は君のことを知っている。君は人間としてイタリア人を扱うことだろう」。

「教皇は例外だ。教皇は私の悪口を言っている。しかしフェルナンド、君は何を話しているのだ。私はびっくりする。我々は同じ年頃だ。君の前で一発の弾が私を倒すかもしれないし、兩人一緒に倒れるかもしれない。あのモンカダが君に霜のような作用を及ぼしたな。君がぞっとしているのが分かった。二人の間に何があるのだ」。

この時、太陽が沈んで、こっそりとドアがノックされた。イッポリートは入って来ると、嘆願してその主君に向かって言った、「閣下、令夫人を待たせないでください。向こうで食事の用意が来ています。令夫人は、テラスで立ってお待ちです、今にも段を下りて来られるかもしれません」。

「我が子よ、行って、もうすぐだと伝えるがいい」。

「そうは出来ません」とイッポリートは可愛く反抗して答えた、「さもないと閣下は殿下とまた果てしなく難しい政治の話しをなさって、おきれいな夫人のことが忘れられます」。

将軍は少年が側にいるのを我慢して、公爵との談話を続けた。彼は公爵の肩に親しげに腕を置いて、スペイン語を利用した。これは小姓には分からないと承知していた。「私とモンカダの間にあるものは何かと言うのか。シャルル、何か恐ろしいものだ。私にとっては一つの真実である一つの嫌疑だ。これに対しては私は証拠を握っていないが、しかし確信を抱いている。私は信じている、いや確信しているのだ、この人間は私の父を殺した、と[虚構]」。彼はその子供の巻き毛を撫でた。子供は無垢の目で彼の方を見上げていた。

「世紀の転換後のことだった。私はここのこの子供と同じほどで、いずれにせよ、もっと年上ではなかった。私の父は立派な将軍で、私より優れた男、忠実な心の男であったが、当時の副王、後にスペインの忘恩を骨身に染みて経験することになった偉大なゴンサルヴォ[1453-1515]に派遣されて、バルセロナに向かった。そこでは丁度老フェルナンド[フェルナンド二世、カトリック王、1452-1516]が統治していた。そこで父は我らのナポリ王家の最後の血族、かの不幸な若者を目にした。王子はフェルナンドの猜疑心の強い目の下、枯れざるを得ず、子宝に恵まれない妻と結婚していた。父は無邪気で、利口ではなくて、一いいかい、これ以上純朴な男はいないのだ、一 王位を奪われた王子と立ち入った会話をすることになった。それから時折宮殿を訪問するようになった。それで国王の疑惑を招いてしまって、この疑惑だけで、自分の命を失うに十分であった。

この件は、私が後に調べて、付き合わせてから、君に話しているのもあって、後年もっと分別が熟し、人間知を得てからのことで、過去のことが自分にとって意味や意義を有するようになってからのことだ。国王自身が、たとえ単に半端な言葉か、短い身振りであっても、その犠牲者を示したということは、十分に考えられる。しかしその秘密の指令を実行したのは、国王が自分の身邊に有していて、国王の庶出の息子という[虚構]噂の若い人間であった。この若いモンカダ、他ならぬ彼が、王子の許から戻って来る私の父に宮殿の歩廊で出会い、刺し殺した。決闘ではなく、暗殺だ。というのは、私の父の右手は古い傷で萎えていたのだからだ。それに父ペスカーラは無実なのに倒された。誓って、君の肩に手を置いているように、この実直な父にとって、陰謀や謀反ほど縁遠いものはなかったのだ。これは卑劣なことではないか。しかしひょっとしたら、若いモンカダは、自分の国王の目の合図に従ったとき、義務を果たそうとし、そして善良なキリスト教徒として行動しようと思ったのかもしれない。シャルル、そのようなことは君らの許でも可能かな」。

「フランスでか。状況次第だな。いや、違う。そう簡単ではない」。

「数年後、私が私の最初の手柄を立てたとき、私は私の將軍、そして義父のファブリツィオ・コロナのテントでモンカダと会った。彼は私を抱擁し、私を若い英雄、スペインの昇る星、そして希望と呼んだ。そして彼の視線は静かに観察しながら、私の面貌の上を滑って行った。彼は私が、自分の知っている私の父に似ていると請け合った。私の血は血管の中で固まった。というのは、自分を父ペスカーラの殺人者が愛撫して、抱擁していると確信したからだ」。

「君は彼を逃がしたのか」。

「かの日の晩、私は彼の命を奪いに、あるいは彼に私の命を奪わせに行った。彼は消えていた。私は彼の後を追って行けなかった。いつもテントの中や、諸決定の最中に暮らしている私にそんな時間があるはずがない。しかし殺害された父の霊は、いつも私に付きまとっていた」。

後に私は知った。この忌まわしい男は、ある罪の贖罪のために、どこかのカルトゥージオ会修道院に身を投じた、と。それか彼は海の向こう側、キューバにまた現れた。フェルナンド国王が彼に豊かな領地を与えていて、そして大胆なコルテス[ピサロ1485-1547]に同伴してメキシコに渡った。思うに、この野心的な征服者を監視するためだろう。というのはモンカダはその父親の考えや作戦の中で暮らしていて、かの皇帝の宮廷における狂信的スペインの党派と関連しているからだ。この党派は、幸いブルゴーニュ人とオランダ人が拮抗しているわけだ。海から戻って来ると、彼は自分の隠れた働きで、王家のため新スペイン[メキシコ]を維持して来たという功績を作り上げた。そして自分の甥の皇帝[モンカダをカトリック王の庶出の子と設定しているため]の許でも、半ば畏怖される声望の中にいる。今彼はイタリアに来ている。私を隷属させるか、痛めつけるためだ。これがモンカダだ」。

「いいか、フェルナンド」とブルボン注意深く聞いていて言った。「私はずっと君のために一肌脱ぎたいと思っていた。君の父親の仇を討とうか。そして同時に君の敵を片付けてやろうか。暗殺ではない。これは私の流儀ではない。合法的決闘によるもので、このために私はすでに一つ口実を持っている。私に危険性はない。気を悪くしないで欲しいが、君も認めていよう、我々フランス人は彼らスペイン人よりも剣さばきは上手い、と。君はこの勝負の外におればいい。私はその後王侯の出自が守ってくれる。その気があるか。君

の要望に私は応ずるぞ」。

するとペスカーラはほとんど神々しく、青く目を光らせて答えた、「いや、遅すぎる。私は今、別なやり方を考えている。そしてこの殺人者に永遠の裁きを示してやる」。

ブルボンはいびつくりして見つめた。しかしペスカーラはイッポートルの手を取って、行った、「では、これ以上ヴィットーリア令夫人を待たせるわけには行かないだろう」。

彼は公爵を先に行かせた。螺旋階段で彼は少年に尋ねた、「そなたが今日初めて目にした領主夫人は、そなたの気に入ったかな」。

「夫人はすぐに親切にしてくださいました」とイッポートルは答えた、「夫人は今やもはや会えない姉に似ています」、一 澄んだ涙が彼の頬を流れた、一 「姉はローマの修道院に入って、そこで誓願を果たしたからです。いつもは姉ユーリアはとても陽気でした。しかし勿論最近はとても物静かになっていました。姉はどうしてそんなに若くして身を始末したくなったのでしょうか」。彼は、彼らが野外に出たとき、そう言った。

「私を閣下の奥方に紹介してくれ」と元帥は頼んだ、「最近私は、ある本を開いて、自然は最も素晴らしいものを造り、その後鋳型を壊した。ヴィットーリア・コロナがただ一人残るようにするためだったと書かれているのを讀んだ。一目会いたいものだ」。

彼らは長い糸杉の道を歩んでいた。この時彼らは若干離れた所に、乱れた情景を目にした。前に進もうとしている女性が一人の男性から身を離していた。男性は彼女の足許に跪いていた。この瞬間イッポートルが叫んだ、「あそこにいるのは、邪悪な魔法使いだ。領主夫人に悪さをしようとしている」。そして真っ直ぐにヴィットーリア令夫人の救助に急いだ。一方宰相は跪いた姿勢から飛び起きて、月桂樹の生垣の奥へ消えた。

解放された女性は急ぎ足で、微笑している夫の許にやって来た。若々しく、力強い赤面をしていて、ペスカーラはこれほど美しい彼女を見たことがないと思うほどであった。彼女の衣装がまだそよいでいるとき、息も切らさずこの女性は、到着し早々言った。「一人の嘆願者が私を襲って、自分の件を夫の閣下によしなに取り次いで欲しいと懇願しました。自分は懷疑と期待で憔悴していて、余りに長く返事を引き延ばさないと欲しいと依頼しています」。

「彼は、マドンナ、取り成し人の選択に間違っていない」と將軍は答えた、「しかしすべては時期が来てからだ。今はブルボン殿下を貴女に紹介させてくれ」。ヴィットーリアはとても活気があって、女性らしい関心の表情を隠さず浮かべた。

公爵は、跪き宰相を見て興が湧いたことをおくびにも出さなかった。公爵は恭しくお辞儀して、ペスカーラを思いやり、一時も忘れたことのない自分の恥辱の名声を自覚していて、上品に気高く振る舞った。公爵は、自分の黒っぽい目を彼女の顔とか全身に据えることをせず、ヴィットーリアの美貌を称賛した。彼は追従を言わず、褒めちぎらず、簡潔にこう言った、「私は、ヴィットーリア令夫人を、我が友、侯爵の奥方を、拝顔できて嬉しい。然るべき敬意を表します」と。それから彼女の左手を歩きながら、彼女と軽快な、愛想の良い、しかし取るに足りない会話を行って、彼女が彼を食事に誘うと、感謝して、別荘の階段の下ので冷静な丁重さで別れた。ヴィットーリアは、とても謙虚であったけれども、それ以上のことを期待していた。慣れのせいもあった。というのは、彼女に対しては時代の有名人達から極端な敬愛が寄せられる習慣であったからである。しかし彼女は容易に微笑を浮かべて、自分の失望を克服し、將軍と一緒に段を上がって、すでに濃くなっ

ている黄昏の中に入って行った。

食事は、ペスカーラが好んでいたように短いものであった。ヴィットーリアは自ら夫に食事を出す主張して譲らなかった。しかし彼はデザートするとき、そのお返しをした。アイスクリームと果実、お菓子のとき、彼は彼の菓子職人によって技巧的に作られたアーモンド入りの王冠に気付いた。「見てご覧」と彼は冗談を言った、「我が野心的なヴィットーリアのためのものだ」。彼はその王冠を彼女に出した。彼女の心はときめき始めた。

二人は立ち上がって、隣室に入った。その部屋は一本の吊りランプで同等に明るく照らされていて、まだ新しい飾り物に微光を反映させていた。四方の壁には花輪を被った子供らが走っていて、天井の木舞張りはその格間に、黄金の地の上に灰色に描かれた英雄達の胸像が描かれていて、ランプで照らされた四方のその中心部には、恣意的に選ばれた一行が並んでいた。アエネイス、国王ダヴィデ、ヘラクレス、それにペスカーラである。道具としてあるものはただ、休憩のためのベッドで、その栗の板の背もたれには浮き彫りの文字でこう記されていた。「ここではお喋りをする事」。

ペスカーラの側に腰を下ろしながら、ヴィットーリアは尋ねた、「どうして元帥は、丁重な作法なのに、私に面白くない印象を残して、 — あけすけに言って、 — 私を振ったのかしら」。

「哀れな男だ」とペスカーラは冗談を言った、「軍神とミューズ、粗野と優美、見苦しいレイヴァと美しいヴィットーリア、その双方から同じように、カペー王家の者から侮辱を受けたと感じている。この王家の男は、兩人に対し、私の見るところ、一点の落ち度なく振る舞っているのに。彼と外の者達の間には、外の者達が誰であれ、何か忍び込んで来るのであろう。私が思うに、この歪める霧、この憎ませる霧は、彼の裏切りであらう。あるいは彼の王からの離反だ、それを何と呼ぼうと」。

ヴィットーリアの顔は軽く青ざめた。

「裏・切り、...」、ペスカーラはこの言葉の二つの部分を引き延ばした。「高貴な女性がこの罪を嫌うのは理解できる。私が私の主君に対する忠誠を破るか、私の友人に対する、あるいは私の天然の妻に対する、あるいはそれどころか私の共犯者に対する忠誠を破るか、こうしたことはすべて同じ志操の変奏だ。...すでにそなたの陰鬱で偉大な詩人[ダンテ]が、そなたはこの詩人を基に自らの魂を刷新しているが、裏切り者を最も重い罪と見なしている。ジュデッカ[裏切り者の地獄、第四の円]では、彼のケルベロス[冥府の番犬]やルチフェル[墮天使]の三つの喉のそれぞれで、裏切り者が砕かれている。私は最初の男を知っている。救世主[イエス]に接吻したかの男[ユダ]だ。しかし他の二人は誰だ。ルチフェルが両足を啜えていて、頭を下に浮かせている者どもだ。今この瞬間ど忘れした。その箇所をお語ってくれ。そなたは百もの歌を暗誦していよう。

ヴィットーリアは朗詠した。[地獄篇、第三十四歌、64ff.]

「ほかの二人は頭の方を外に出しているが、

黒い顔から垂れているのが、ブルトゥスだ。

見ろ、身をよじり悶えているが声一つたてぬ。

もう一人はカシウスだ。筋骨隆々としている」。[『神曲』、平川祐弘訳 1967]

「ここでブルトゥスは体を捻って、固く黙っている。

第三の口からカシウスは垂れ下がっている。

その体のすべての筋肉が見えている」。[原作者の注釈によるドイツ語訳より]

快適に將軍は更に話し続けた。この黙って体を捻っているブルトゥスはよろしい。しかし、一 畏敬を忘れていないが、一 ユリウス・カエサルがその痩せた姿を恐れていた痩せ細ったカシウス[シェークスピア,Julius Caesar.1,2]、この男をダンテはどうして筋骨逞しいと呼ぶことができたのか。そもそも、ヴィットーリア、このケルベロスの食べ物はそなたの気に入っているか」。

するとヴィットーリアは勇敢に答えた、「御主人、カエサルの殺人者達は地獄にはいません。この点私は私の詩人を難じます」。

「それは断じて違うな」とペスカーラはからかった、「しかし、結構、我がローマ女性よ。忠誠は一つの徳操ではあるが、至高のものではない。至高の徳操は正義だ」。

そのようにペスカーラは自分の魂の深淵の上、秘密の上で自分の妻を揺さぶって、彼女が足場を固めるのを邪魔した。彼女は自分の全本性の激しい気迫で、勝利を求めている。この勝利を目指して彼女はノヴァーラへ駆けつけたのであった。絶えず新たな道を通して、彼女は目標を追ったが、ペスカーラは彼女を遠ざけていた。今や彼女は靈感を得て、イタリアの最大の生きた愛国者を助けに借りることにした。

「ペスカーラ、私はいつも不思議に思っていたわ」と彼女は言った、「あなたは、実際、私どもの造形家や詩人の中で、強力な者達、つまり崇高なダンテ[1265-1321]よりも、そしてその後の世の同等の兄弟、ブオナローティ[ミケランジェロ1475-1564]よりも、愛らしい者達、アリオスト[1474-1533]やラファエロ[1483-1520]を鼻屑にしているわね。でもあなた自身は深い、秘められた性質なのに」。

「ヴィットーリア、私が愛らしいものが好きなのは、まさに深いからだ。芸術は一つの楽しみだ。しかしそなたのミケランジェロに関しては、そなたが如何に賛嘆しようと、私は鼻筋の折れた一目巨人[キュクロプス]に嫉妬なんかしない」。

ヴィットーリアは微笑した、「私は彼の顔を見たことはありません。知っているのはステイーナ礼拝堂の絵だけです」。

「預言者達やシュビラ[巫女]達はどうか。私は数年前これらを見て、注目した。しかしまた、二、三の個別な点を除いて、これらも消えてしまった。例えば、鏡を見て怖じけて引き下がる逆立つ髪の間人だ、一 」。

「鏡の中に彼は現在の脅威を見ているのでしょうか」と彼女は興奮して補足した。

「それから女像柱[カリアティード]、途方もない重荷に潰されていて、短い、四角形の、嘆かわしい生き物だ。疑いもなく最も醜い女だ、そなたの方は最も美しいが」。

「暴行された女、隷属させられた女、奴隷の女だわ、一 」。

「そこでまた預言者達が思い浮かぶな。禿げたザカリア、あるいはそれは誰であろうと、一方の脚は上、もう一方の脚は下であり、それにターバンをした叱るエゼキエル、ダニエルは書いて、書いて、書き続けている。シュビラ達も思い浮かぶ。灰鷹の鼻の背の曲がった老婆、小さな冊子に見入っている微光を発する目、油を、消えつつある吊りランプに注いでいる隣の女と一緒に。その皆の中で最も美しい女は、デルフォイの三脚に座った若々

しい女だ。すべては素早い活気の中にある。この嵐は何の謂いか。これらは何を説教し、予言しているのか」。

するとヴィットーリアは、自らこの予言の女達の協議に参加しているかのように、燃えるように熱中して叫んだ、「これらはイタリアの下僕状態を嘆いていて、来るべき救助者、救世主を告げています」。

「違う」とペスカーラは厳しく判断した、「治癒の時は過ぎ去っている。それらは恩寵を告げるものではなく、審判を告げている」。[ミケランジェロ『最後の審判』を暗示]。

ヴィットーリアは震えた。しかしすでにまたペスカーラの面影から厳しく罰する真面目さは消えていた、「我々は予言的礼拝堂を後にしよう」と彼は追従的に言った、「恐怖させ、震撼させる芸術も後にしよう。そなたがイタリアの救世主と呼んだとき、私のことを考えていたはずはないだろう、勿論私はすでに脇腹に傷を受けているとは言え」といつもの彼独特の渋い冗談の一つで締め括った。

ペスカーラがかの傷に言及したとき、これは、傷は塞がったと彼が彼女に書き送るまで、彼女を、日夜、絶えず悩ましてきたものであって、ヴィットーリアの優しさすべてが溢れて来た。愛する妻は左手で彼を抱き締め、右手で彼の赤みがかったブロンドの、軽くカールした前髪を低く額まで撫でて、それで彼は吊りランプの明かりの中、喜ぶ妻の間近で、全く若々しい姿を見せていた。

その時彼女は、一緒に暮らした、さほど遠い昔ではない或る日のことを思い出した。彼らの領地の一つ、タラント近郊でのことだった。そこで彼らは、勿論焦げ付くような収穫時の陽光が完全に落ちた後、夕方の天の残光の下、まだ元気な刈り手達と一緒に鎌を握って、銘々が穀物の束を結んでいた。彼女は何度か将軍が自分の束にのんびりと寝そべっているのを見ながら、自分は刈り手の少女達に軽く即興の、新しいカンティレーネ[抒情的旋律]を、そこの南方で慣習化しているものを手本に教えていた。これは後に若い人々が夜中まで繰り返して飽きない唄であった。今や彼女は将軍にかの晩のことを思い出させた。

彼は喜んで、「そなたはまだかの小唄を覚えているかい」と彼は尋ねた。

「どうして」。

「それはな、一つの韻であった。刈り手[Schnitter]とツィター[Zither]だな。それ以外ではあの小唄には、畑でも天でも歌が歌われ、束が運ばれるという意味しかなかった。あの謙虚な小唄はひょっとしたら、私や、後にはそなたがとうに黙ってしまっただけから、民衆の口に残っているかもしれない。率直に言って、あれは最近私に送られて来たソネットよりも私の気に入っている。そのソネットでは莊重にそなたが私に語りかけているのだ。ヴィットーリア、落ち着け。そなたの作ではない。そなたの作ではないと私は承知している」。

彼女は怒りで燃えた、「私の仮面を被るなんて」と彼女は叫んだ、「そして私の名前であなたに語るなんて。誰が仕出かしたの。何という厚かましい人でしょう。どこにその駄作はあるの。私が破って棄てます」。

「いや、それは気の毒だ。そなたに恥をかかしていない詩だ。これだ」。将軍は胸から一枚の紙片を取り出した。彼女はそれを奪って、吊りランプの下に寄った。胸をドキドキさせながら、素早く唇を動かして、彼女は始めた。

ペスカーラに寄せるヴィットーリア

ペスカーラ、私は勝利という名前、それで私は
あなたの戦闘、戦役を、月桂冠で飾ります。
でも私の名前の誇り高い響きを悪用して、
祖国を隷属させるなら、私は値しない。

ローマ人の血筋で、王族の一員の私は
若い青春の花盛りにあなたと結婚し、
イタリアであなたに市民の権利を与え、
イタリアの子息達の愛を贈りました。

明るい犠牲の火の中で、ただあなたにのみ
捧げられた一命に対する報酬を伺いに参りました。
何をあなたは妻に贈りますか、英雄のあなた。

あなたの周りにいる精霊達が見えます。
剣でイタリアの束縛を断ち斬って
私に賜え、我が祖国という報酬を。

一つの詩の印象に関し、ある気分がこれほど奇妙に変化したことはなかった。不機嫌に
コロナはその紙片を手にとって、やがて彼女は穏やかになり、それから親密に語り、最
後の行は、歓声を上げて夢中に読んだ。「私はこのような者で、このようなことを希望し
ています。私がこれを書いたのではないけれども」。

ペスカーラは嘲笑的に見つめた。「そのソネットは」と彼は言った、「そなたの唇によ
って不思議に高貴なものと化したか、しかし本心は空ろなもので、卑俗な魂から生まれた
ものだ。愛は報酬を求めない。愛は無償で贈るものだ。愛は計算しない。このようなもの
は卑俗だ。違う、ヴィットーリアはそのように考えない。一人のお先棒担ぎがこの詩を作
った。私はその名を知っている。その途方もない虚栄心で、この仮面を生意気に明かさず
にはおれなかったのだ。これを見ろ」。ペスカーラは指で二つの小さな文字を示した。一
つのPと一つのAで、紙片の右隅に書きなぐられていた。「自分で言うには、神々しい者だ。
私はこのアレティヌスが飲み仲間のジョヴァンニ・メディチ[Giovanni de' Medici,1498-1526,
傭兵隊長]、このイタリアの無法者の青年と一緒に、ワインを垂らしながら、洒落を飛ば
して、彼に冒瀆の言を吐くのを見た覚えがある。『いいか、ジョヴァンニ、神々しいヴィ
ットーリアの身になって考えるのは生やさしくないぞ』。そしてファウヌスの[サチュロス
的]歓声だ。このアレティヌスは椅子をひっくり返すほど笑って、身を揺さぶり、喉全体
が笑った、ー」。

「首の骨を折れば良かったのよ、恥知らずな人」とヴィットーリアは嗚咽した。という
のはペトルス・アレティヌス[Pietro Aretino,1492-1556]とその人柄は当時すでに世間周知の
ことであったからである。[Feuerbachの『アレティーノの死』の絵では椅子から逆さに落ちて死ん

だ、しかし、上述の詩はマイヤー作と考えられる]。

「結構、我がローマ女性」とペスカーラは宥めた、「しかし一点、彼も正しい、恋人よ。そなたの名前にすでに新郎は参っていたのだ。勝利と結婚するのは、結構なことだ」。

しかしコロナはもはや冗談を解さなかった。彼女は彼女の魂の奥底をかき回されていた。彼女の本性の根底が揺さぶられていた。涙が一杯で、同時に熱い情熱で一杯であった。「でも別な点でやはり不当だわ」と彼女は激しく語った、「どんな気持ちであなたは聞いていたのか、分からない。あなたの心を読み取ろうと努めて、空しい。あなたはあなたの妻をからかっている。あなたは私を抱擁して、私を突き放している。あなたは残酷で、私は自分の心が歓呼している最中、あなたに伝えようと思う知らせすら話せない」。

「その知らせは察しているからだ。私は私の高貴な妻を使い走りに悪用して、真実の女性のそなたを使者として策謀に用いる教皇を許し難いと思っている。この知らせは教皇にもそなたにも相応しくない。嘘と詭弁に満ちたものだ。これは、すぐ次の日々に、教皇に撤回と取消を要求しなければならないものだ。教皇は私がナポリを占領すると、ナポリを私に与え、私が良心を鈍磨させると、私の良心を免罪する。しかし私はもはやこのような縛ぐこと、解くことを信じない。世俗的事柄の点でも、もはや私も他の者も信じないし」と彼は嘲笑的に言った、「聖職者的事柄の点でも信じない。それはサヴォナローラ以来、ゲルマンの僧侶[ルター]以来、終わったことだ」。

「あなたが磁石のように引きつけている私のイタリア、これもあなたの許で挫折させるつもりなの。イタリアは何にも値しないの。イタリアを軽蔑しているの」とヴィットーリアは絶望して叫んだ。

将軍は穏やかに答えた。「私にそなたを贈ってくれた一つの民族をどうして軽蔑することが許されよう。しかしそなたに隠す気はないが、イタリアが説得しても無駄だ。その甲斐はない。私はその誘惑を長いこと承知していた。私はその誘惑がやって来て、近寄って迫る大波のように高まるのを目にした。しかし私は揺るがず、一瞬も揺るがず、ただ秘かに考えることすらなかった。というのは私には選択の余地はなかったからだ。私は自分のものではない。私は世の事柄の外部にいるのだ」。

ヴィットーリアは驚愕した、「何ですって。あなたは人間ではないの。肉や血のない一つの精霊なの。自分が踏みしめているのは、大地ではないの」。

「私の神は」と彼は答えた、「我が權の周りの嵐を静めてくれた」。

するとヴィットーリアは嘆願した、「あなたの神なの」、そして彼女は両腕で彼を抱いた、「私はあなたを離さない。それではあなたの神を呼びなさい」。

ペスカーラは穏やかに身を離して、痛々しい目で答えた、「それを知りたいか。しかしまずは一緒に庭へ行こう。新鮮な空気が欲しい」。

二人がテラスに足を踏み入れたとき、頭上にすべての星が輝いていた。そして向こうの古い宮殿に地上の色合いの孤独な明かりが目についた。「向こうでは」と彼女は同情して言った、「宰相が微睡みもせず、不安と希望で憔悴していることでしょう」。「私はそうは思わない」とペスカーラは答えた、「むしろ彼は巫山戯た本や詰まらぬ本を読んで眠りに就こうとしているだろう。明かりは燃え尽きつつ、壁に反映しているのであろう」。彼は推し当てていた。苦悩の時間の後、モローネはカトゥルス[紀元前一世紀、ローマの恋愛詩人]の作品で眠り込んでいた。

将軍は白い大理石のベンチのある植込みへの道を進んだ。そこで休む習慣であった。二人は、手に手を取って、暗い葉の屋根の下に座っていた。

そしてヴィットーリアは囁いた、「では話して」、しかし将軍は黙っていた。

足音が近付いて来て、別のベンチが塞がって、囁き声が聞こえた。「モンカダ、本当に将軍はそうなのか。信じがたいことだ」。

「レイヴァ、私もまだ信じられない。しかし調べている。確証を得たら、私は出て来るから、行動しよう。国王はイタリアでその軍を失ってはならない」。

「そう思うのか」。

「君は、君の部隊を集結させる。そして我々は彼を逮捕する」。

「彼は防衛しよう」。

「すると戦死だ」。

「で、皇帝陛下は」。

「案ずるな、皇帝陛下は我らを必要としている。我らは陛下を支配している。君が私への助けを断れば、暗殺者を雇って彼をやらなければならない。君を当てにできるかな」。

「それはいいが、...難しい仕事だ、...」。その時、相手が彼を引っ張った、「どうも」と彼は言った、「ここでは人の呼吸が聞こえる」。

実際湿った夜風のせいで、聞き耳を立てていた将軍は息苦しくなって、呼吸が出来なかった。彼は低く喘いだ。今度は彼も言った、「行こう、露が降りて、風がすえている」。彼女は彼に身を寄せた。

古い宮殿から、三回角笛が響いた。

「伝書使だ。今日のうちにも私は読む必要があるだろう」。

「フェルナンド」と彼女は嘆願した、「あなたは囲まれている。皇帝はあなたのことを疑っているのでしょうか。終わりだわ。イタリアの腕の中へ身を投じなさい。それがあなたの救済、あなたの唯一の救いよ」。

「私は何も恐れていない」と彼は言った、「道は暗い。しかし私の避難所は出来ている」。

今や二人は別荘の小さなホールに立っていて、ペスカーラは床几でうたた寝しているイッポリトを起こした。「向こうへ行ってみて」と彼は命じた、「たった今届いた知らせを持って来てくれ」。それから彼はヴィットーリアに向かって言った、「マドリッドからの知らせであろう。ひょっとしたら皇帝陛下御自身の一筆かもしれない。時折、私に、大臣には内密に、書かれることがある。見てみたいものだ」。

この時、古い宮殿の塔の時計が真夜中を告げた。疲れて、震えるような音で、打音が大変間延びして、それぞれの間隔に一生が宿っているように見えた。十二番目が鳴って、一 繰り返されることはなかった。

イッポリトがドアを引っ掻いて、小荷物を持って来て、将軍が開けた。それは若干他の手紙と共に、皇帝の勅命も含んでいて、それはミラノへの進軍を裁可し、上級将軍に、接收した町で、すべてその判断に従って、状況に応じて、指揮する全権を委任していた。

「これで全部か」とペスカーラは尋ねた。

すると少年は恭しく膝を折って、伝令からようやくもぎ取った、一通の小書簡を渡し、そして去った。それはこう上書きされていた。「侯爵自身の手許へ」。

「皇帝からだ」とペスカーラは謂って、開けた、「これだ、ヴィットーリア、読んでく

れ。皇帝は金釘だ」。彼女は従った。それは多くなく、わずかな行で、こう書かれていた。

「我がペスカーラよ、

この全権を大臣達の意に反し、裁可したのは私だ。貴殿には敵が多い。モンカダには用心しろ。しかし私は貴殿を信じている。私は貴殿のために祈ったところ、貴殿の手を支える一人の天使が見えたのだ。私は信頼している。

貴殿の国王」。

ペスカーラは苦勞して微笑した。「カールは余りに簡単に人を信じている」と彼は言った、「これでは、私と違う他の者の場合、実害を受けかねない。しかし、一 妙なことだ、一 皇帝は私の守護霊を目にしている」。

「それでは今あなたの神を教えて」とヴィットーリアは懇願した、「お願い、ペスカーラ。それを教えて」。

「思うに、今、神はここにいると思う」と彼はかすれ声で喘いだ。彼はますます苦しげに呼吸し、呻き、喉をごろごろ鳴らせ始めた。恐ろしい痙攣で、彼の胸は重苦しくなった。手を痛む心臓に当てながら、彼は長椅子に沈み込んで呼吸を求めた。するとヴィットーリアは彼の側で跪き、自分の腕で彼を抱き、支え、彼と共に苦しんだ。彼女はイッポリトを呼んで、少年をその祖父の医師の許へ送ろうとしたが、彼がある仕草をしてそれを禁じた。ようやく彼は、ヴィットーリアが、彼は死ぬのではないかと思うほどに極度に疲弊してから、寝入った。彼女も十分に涙を流して、寝入った。それから吊りランプの明かりが消えた。

第五章

ヴィットーリアが目覚めたとき、彼女の頭は空の褥の上にあって、開けられた窓から朝の風が流れ込んで来た。彼女は飛び起きて、夫を探し、そしてテラスの上をあちこち歩いている夫を見つけた。夫は微睡んだことで爽やかに活気を取り戻していた。彼女には自分の両腕の中での昨夜の残酷な戦いが信じられなかった。それは夢のようであった。

するとペスカーラが始めた、「親愛なる領主夫人、昨日貴女は私に私の守護霊の名前を尋ねた。貴女の前でその名を呼ぶことに私は不安を感じていた。ほとんど貴女に私の秘密を漏らす寸前であった。愛する妻に何か隠し事をするのは難しい。しかし霊自身が現れて、私に触れたのだ。それで貴女も霊のことが分かったろう。その恐ろしい名前は言わないでおこう。泣くことはない。貴女は昨日大いに涙を流した。今は私に、貴女はどこへ行きたいか言って欲しい、私が皇帝軍をミラノへ率いて行く間のことだ」。

「フェルナンド、どうして私にこんなに長くそのことを隠していたの」。

「まずは、一 長いことではないが、一 自分自身にも秘密にしていた。いや、違う。私はすでにパヴィアの戦いの晩に、自分の運命を悟っていた。かの血まみれの冬の太陽のとき、私も没落したのだ。自分のゴール、自分の命数を確信しながら、どうしてそなたのゴールまでも早まって暗いものに出来ようか。そなたは時に言っていた、甘美に眠っている女を起こすのは、むごい。我慢ならない、と。私はむごくないのだ」。

「むごいわ」と彼女は答えた、「そうでなければ、私をこんなに辛くがっかりさせないわね。私を呼び寄せて、看病させていたことでしょう」。

「誰にも悟られていないのだ」と彼は言った。

「あなたの医師も気付いていないの。知っているはずでしょう。私に嘘を吐いたと医師に対して私は怒るわ。私が医師宛に書いたとき、本当のことを言っていると誓ったのよ」。

「哀れなヌーマ」と将軍は言った、「私を治せなかったことだけでも彼はすでに十分に不幸だ。彼は当時、私にイスキア島での長期休暇を勧めた。しかし、私は甲斐ないことだ、と言った。しかし今更話しても詮無い。ヴィットーリア、そなたはどこへ行こうと思うか」。

「いえ、フェルナンド、話して。私に何も隠さないで」。

「甲斐ないことだ、と私は彼に言った。肺は突き刺さっていて、心臓は苦しい。ヌーマ、しばらく命を保ってくれ。私の命脈を保ってくれ。夏も、秋も、そして最初の雪が降る時まで。私の勝利を完成させるには、それほどの期間がかかる。とりわけ、秘密を守ってくれ、と私は言った。誰も我らの秘密を知ってはならん。知られたら、敵の力が三倍にもなり、私も私の軍も負けてしまう、と。今一度言う、黙っていてくれ。それを望むと私は彼に命じた。...それで私は生命を装ったのだ、とても上手に。それでイタリアは私に婚約指輪を差し出した」、彼は微笑した、「それで私は今一度馬に乗るつもりだ。しかしヴィットーリア、そなたは、約束してくれ、一 誓約でなくていいのだ、そなたは私のためにしてくれよう、一 呼ばれもしないのに、私の後を駆けて来ない、我が行軍の塵埃の雲や、血溜まりの戦場を抜けて来ない、と。そなたでも、兵士達に嘲りの種を与えることになろう、そなたは善良で美しいから、そなたが嘲りの対象にはなるまいが、甘やかされた将軍はその種となろう。だから、そなたは残ることになる。しかしどこに残るか、ここか」。

ヴィットーリアは思案した。面影に慰めようもない痛みが浮かんだ。それから彼女は言った。「昨日、こちらへ参る時、すでにこの町の圏内にある小さな尼僧院の側を通りました。名前は聖痕尼僧院と知りました。そこであなたから呼ばれるのを待ち、贖罪をし、あなたの治癒祈願を致しましょう」。

「私の治癒祈願か」と彼は微笑した、「そうしてくれ。それに聖痕尼僧院ではそなたも退屈しないだろう。その尼僧院の歌声は素晴らしく、その賛美歌合唱は有名だと聞いている。間もなくしたら、そちらへ馬で行こう。今はまだ新鮮で、軍用道路も塵埃が舞い上がっていない」。彼は軽快な足取りで公園を通過して、古い宮殿へ向かい、鞍の準備をさせることにした。

ヴィットーリアはゆっくりと歩いて、それに従った。その時、彼女は医師のヌーマを見かけて、彼の方へ痛々しく動揺した表情で医師の方に向かって行った。医師は将軍の昨夜の様子を尋ねにやって来ていた。彼女は医師に、本当のことを隠していたと非難したかった。そして同時に、その技倆の最後の薬剤や秘術を使って、愛しい命をつないで欲しいと懇願したかった。しかし医師はコロナがやって来るのを見ると、自分の無力を思い知っている風に拒絶して、自分の震える両手を差し出した。あたかも、勘弁してください、私は何もできませんと嘆願しているかのようなであった。彼女はその身振りを理解して、自分の道を進み、彼女の前で跪いたイッポリトの側を通り過ぎ、彼女は彼に気付かず、少年の心を大いに悲しませた。

宮殿の中庭で、彼女は重々しい高価の馬具を付けたペスカーラの黒馬と、自分の同様に

鞍を付けた河原毛のベルベル産馬を見つけた。将軍は彼女を馬に乗せ、二人は連太鼓の中、渡された跳ね橋を越えてロンバルディア平原の見通しがたい稲作地の中を進んで行った。二人に続いて、適度の距離を保って、ペスカーラの一人の馬丁、つまり南方の太陽で黒くなったカラブリア人と一頭のラバに乗ったヴィットーリアのローマ人侍女がいた。

この旅行者の背後で、宮殿の中庭では、忘れられていた宰相が慌てて助けてくれと叫び声を上げたが、聞き届けられず、次第にその声は消えて行った。彼はひどい夢から目覚めて、すでに早朝庭をさまよって、再三壁や防塁にぶつかって、こちらではドイツ人の見張りに、向こうではスペイン人の見張りに観察されていた。シュヴァーベン人達は彼の袈裟な[落胆の]パントマイムを見て大いに楽しみ、スペイン人達は訳知り顔で、他人の不幸を喜ぶ視線を交わしていた。彼らは、将軍が敵の大臣を罠に誘い込んだと疑ってはず、彼が軍の後に引っ張られて行くことになったら、明日心ゆくまで苦しめて、徹底的に身ぐるみ剥ごうと約束し合っていた。ようやく彼は、円形花壇の中に入って、疲れて、例のベンチに、つまり昨日微睡んでいるペスカーラを見つけて様子を探ったそのベンチに沈み込んだ。その時、彼は門番の礼砲を聞いて、宮殿の中庭に駆けつけ、跳ね橋を越えて、追いかけてしようと思った。しかし銃槍を差し出した番人に引き留められて、彼は遠方の霧の中に消えて行く将軍とヴィットーリアを嘆きながら見ていたのである。

輝くような一日の後、陰気な一日が続いていた。風のそよぎ一つなく、雲が出来るその微かな気配すらなかった。雲雀は飛ばず、鳥は歌わず、冥界の野原の上のように静かな薄明かりの曇であった。尼僧院が見えて来て、次第にその穏やかな壁が大きくなった。勿論二人はほとんどただ常歩で馬を進めていて、寡婦覚悟のヴィットーリアは深く沈黙していたが、一方奇妙な対照で、今や休息に向かう将軍の記憶は、軽快に愛して、燃えて、振り上がり、青春時代に帰還して、そして自分の側で喪に服している女性を再びつぼみの少女と優しい花嫁という魅力的感動的な姿に変えていた。彼はかの幸福な日々の些細な事柄を彼女に思い出させないわけに行かなかった。しかし彼女の苦悶から微笑を引き出すことはできなかった。彼は自分の煩わしい秘密を片付けていた。彼女はその苦さを今一度に、全面的に味わっていた。

さて彼らはすでに間近に来ていて、尼僧院の合唱の歌が聞こえて来た。「何を彼女らは歌っているのだ」と彼は無関心に尋ねた。「レクイエムかしら」と彼女は言った。

彼らが尼僧院の前で下馬すると、門から尼僧院長が迎えに出て来た。その後二人の謙虚な尼僧が控えていた。尼僧院長はどこかの子供を田圃に見張りとして送っていたのであろう。その子供が先に素足で急いで戻っていた。尼僧院長はノヴァーラへのヴィットーリア夫人の到着をすでに昨日聞きつけていて、すぐにこう自負していた。敬虔で気さくな夫人は聖痕尼僧院を訪問しないはずはないだろう。だってこの修道院はその合唱の修練された声の他にもっと偉大な特徴を持っているのだから。つまり神秘的で、毎日臨終を迎える尼僧ベアーテで、これはその病んで消耗した体に血の付いた聖痕を有しているのである、と。企画力があって勇敢な尼僧院長は、夫に対し影響力を期待できるコロンナから、重たい戦費の減免を頼み込んで取り付ける算段であった。この戦費は、罰当たりで貪欲な将軍が、
— ペスカーラはイタリアの僧侶界ではこういう評判であって、
— 教会法上の条文を無視し、すべての公正さに反して、修道院の財産に対して課していたものであった。しかしキリスト教の神域を遠ざけて来た将軍が、ヴィットーリア令夫人を同伴するである

うことは、尼僧院長が夢にも思わないことであった。

彼女は、黒っぽい、賢い目と、愛想の良い表情の人当たりの良い女性で、高貴な夫妻に、言葉を選んで簡潔に挨拶した。それから彼女は注意深く、ペスカーラの話しを待って、黙っていた。ペスカーラの高貴な姿に彼女は感銘を受けていた。

「尊い尼僧院長」と将軍は始めた、「ヴィットーリア夫人は私が明日取りかかり、一週間要すると私が見ている遠征の間、ここ、貴女の修道院で、二、三日の平穏で敬虔な日々を過ごしたいと願っている。戦が終わって、私が彼女を呼び寄せるまでのことだ。それに適した部屋を用意して頂けるだろうか」。

御用意致します、と素早く尼僧院長は答えた。

「通常の調度の、下位の尼僧の房同様に、簡素な房を希望します」とヴィットーリアは言った。その青ざめた顔は尼僧院長には意外に思われた。しかし彼女はこの青ざめた顔を遠征へ赴く将軍への心配のせいと分かりやすく解釈していた。

「ヴィットーリア夫人の用意ができたなら」とペスカーラは結んだ、「そのことを私に知らせて欲しい。私はまだ妻と話すことがある。それで禁域と房に入ることを許して頂きたい。私は修道院に好意を抱いているので、例外的に認めて頂きたい。私は教会で待つことにしよう」。彼はお辞儀して、教会へ向かった。

ヴィットーリアは、尼僧達は何を歌っていたのかと尋ねた。そして返事を得た、「レクイエムです。若いユーリア・ダーティのためです。私どもの老医師の孫娘で、ローマで亡くなったのです」。それから彼女は尼僧院長に従って行った。一方二人の尼僧は囁かれた命令を果たすために出掛けた。

一方将軍は、帽子を取らず、また通常の恭謙の礼を取らずに、教会の中をしっかりと足取りで、隅から隅へ胸甲の上で腕を交差させて、歩いていた。彼は、帰路ノヴァーラで完全武装して進軍して来る部隊に合流する必要があったので、軽く兜を被り、甲冑を付けたまま、祈りと謙譲の神域で、英雄のように、支配者のように歩いていた。

「いや」と彼は口を閉ざして、自らに言った、「今日が最後となろう。存命の者として妻に別れを告げよう。私の苦しむ姿は見せないことにしよう。妻が私に再会するのは、私が逝った後だ」。

自分は一人つきりだと思っていたが、彼は内陣の格子越しに聞かれていた。尼僧達は尼僧院長の命令で、この内陣にまた入って来ていた。ペスカーラに尼僧院の歌声を聞いて貰いたかったのである。神秘的ベアーテさえもやって来て、その陶酔的視線を、英雄的姿勢のペスカーラを見つめる多くの燃えるような褐色の目や黒い目の視線と合わせていた。集合した天の花嫁達[尼僧達]は皆、コロナを幸せと称え、彼女の現世での楽しみを羨望していたが、一方この幸せ者と信仰された女性は、そこから遠からぬ或る房で、両手を揉んで、絶望していた。尼僧ベアーテも世間の誇り高い領主を賛嘆する誘惑に屈していたが、しかし勇敢に自分を克服して、コロナから、彼女の魂の幸せのために、その偶像を奪うよう熱心に天に祈っていた。しかしこの激しい感情は、俗な徒し心のより無邪気な感情に譲って行った。ちょっとした協議の囁き声と微かな咳の後、尼僧達は歓声を上げて、その豪華な作品、テ・デウム[神賛歌]を歌い出した。これはパヴィアでの勝者にとっては、他のプロローガ[中世宗教詩文]や続唱よりももっと相応しいものであった。

彼は傾聴していたかったことであろう。しかし彼は、大きな祭壇画の磔刑にされ、すで

にこときれたキリストに呪縛されたかのように、動かずに立っていた。その明るい色合いはまだ新鮮そのもので輝いていた。しかし彼が見入っていたのは、神々しい頭部ではなく、その槍を聖なる体に突き刺している雑兵の方を観察していた。これは明らかにスイス人傭兵であった。画家はこのような兵士の服装や姿勢を特に正確に調べて、その実人生から新鮮に描き出していた。その男は脚を広げて立って、その左脚は黄色の、右脚は黒色のズボンを履き、手袋をした拳で下から上へしたたかに徹底的に突き刺していた。前面の開いた兜、首飾り章、胸甲、籠手、股甲、赤い靴下、幅広靴、欠けるものは何もなかった。しかし将軍が熟知しているこの衣装に、将軍は興味を惹かれたのではなく、猪首に座している頭部の方であった。小さな、青色の、水晶のように澄んだ目、引っ込んだ獅子鼻、にやりと笑った口、ブロンドの縮れた八字髭、薔薇色の頬をした褐色の色合い、牛乳柄杓形のイヤリング、そして実直さと狡猾さの不思議に混じり合った表情であった。ペスカーラはすぐに、軍指揮者の顔識別能力で、自分はこの小さな、広い肩の敏捷な若造をすでに一度見たことがあると分かった。この黒と黄のズボンはウーリーの住民を意味している。しかしいつ、どこであったか。するとあたかも一突き受けたかのように、脇腹が痛くなった。そして誰を眼前にしているか、分かった。それは、パヴィアの戦いで彼の胸を突き刺したスイス人であった。間違いない。自分の側で大地に屈んだ男の槍の突きを受けながら、彼は一瞬、この水晶のような目を見て、この口がにやりと満足そうに笑うのを見たのであった。この思いがけない再会は、そうと分かった後、将軍にはそれ以上何の印象も残さず、将軍は優しい表情で、ヴィットーリア夫人の許へ彼を案内するために来て、今や彼の側に立っている尼僧院長に、誰がこれを描いたのか尋ねた。彼女は目をすぐに伏せながら答えた、「二人のマントヴァ人で、才能有る若者達でしたが、しかし風紀的にかがわしく、修道院としては去って貰ってほっとしています」。

ペスカーラが房を開けると、ヴィットーリアが跪いているのが見えた。しばらく、彼は邪魔をしたくないかのように、連結された半円アーチの窓から、その壁面のベンチに彼は腰掛けていたが、芝地の丘と、墓の十字架を黙って見守っていた。そして最後に尋ねた。「ヴィットーリア、何をしているのだ」。

「贖罪よ」と彼女は言った。

「誰のせいだ」。

彼女は起き上がって、まだ両手を組み合わせたまま答えた、「私は自分のこと、貴方のこと、イタリアのことで、贖罪をしています。イタリアに関しては、その誇り高い不遜、尋常でない罪のせいで、イタリアは滅びてしましましょうから、だって貴方がイタリアを救えるであろう唯一の方だったのですから。私に関しては、貴方を誘惑に導くために、私は来たのですから。貴方に関しては、貴方はこの地上を去ることを望んでいますから。私は貴方の不壊の部分のために祈りました。しかし天は」、 — 彼女は悲しげに頭を振った、 — 「まだ私の祈りを聞き入れていません」。

彼は彼女を窓下の壁面のベンチへ引き入れて、兄が妹に対するように、彼女の手を取った。自分と妻との間で秘密がなくなったせいであろうか、あるいは二人の最後の一緒の時間を長引かせたいという無意識の願いのせいであろうか、帰依したい気分になった。

「小さな信心家だな」と彼は陽気に始めた、「私のことは私の薄暗い[計算しがたい]守護霊に任せればいい。少年の時、私は一人の聖女であった母と共に、教会の約束するものを

信じていた。今私は周りに永遠の流れを目にしている。死の天使は私には身近であった。すでに私の最初の戦いのとき、その天使に指名されて、私の戦友は、一 そなたの兄上だ、ヴィットーリア[Ascanioがいるが、しかし1557年死亡]、一 心臓に弾を受けて、声もなく、崩れ落ちた。私はこの天使のために幾多の大虐殺を捧げた。天使もまたしばしば、ほとんどの戦場でも、挨拶代わりに私に触れた。私は他の者達よりも、傷を受けやすいと見えるのだろう。しかし私がこの刈り手のことを愛せるようになるまでには、時間を要した。パヴィアの後の週になっても、天使が私を召したと分かってからも、私は天使に逆らい、棒立ちになって、反抗的青年のように怒った。しかし次第に予感して、今では天使は正しい時を知っていると確信している。私の存在の結び目は解きがたい。それで天使はこの結び目を断ち切っているのだ」。

青ざめたヴィットーリアは彼の唇にとらわれて、凝固した目で、最も素晴らしい宮殿が炎上し、燃え上がる炎ですべての柱頭が照らされているのを見ているかのように驚いていた。

「いいか、妻よ」と彼は続けた、「我が道は私の前で沈んでいるのだ。私は自分の勝利のせいで、自分の名声のせいで没落する。私に傷がなかったとしても、それでもやはり私は生きられないであろう。向こうのスペインでは、嫉妬や、裏での中傷、当てにならない、結局掘り崩されている宮廷での聾盲、不興、墜落が控えており、こちらのイタリアでは、イタリアを侮辱した者に対する憎悪と毒が控えている。

しかし私が私の皇帝から離反したとしても、私は自分自身のせいで破滅し、自分の忠誠破棄のせいで死ぬであろう。私は我が胸に二つの魂を持っているからだ。イタリア人の魂とスペイン人の魂だ。これらが殺し合おう。私は自分が活気あるイタリアを創造し得たであろうとも思わない。確かにイタリアは、輝く精神の吊りランプを有している。しかしイタリアは反抗的実存の制御しがたい欲望の中で永遠の法に反逆している。イタリアは贖罪する、とヴィットーリア、そなたは言った。イタリアは捕縛されて苦しみながら、自由を学ぶべきだ。しかしこのスペインの世界帝国は、海のあちら側とこちら側で、赤い血の雲となって湧き上がり、私を戦慄させている。奴隷達と首切り役人だ。私は自分自身の中にこの残酷な血の流れを感じている。そして最も恐ろしいものは、すべてに勝る僧侶的狂気だ。しかし少なくともそなたの駄目なイタリアは人間的だ」。

ヴィットーリアの目は神々しくなった。ペスカーラがイタリアを愛していることが分かったからである。「あなたがイタリアに自由を、自由がイタリアに徳操を与えていたら良かったのに」と彼女は叫んだ。しかしペスカーラは聞いていなかったように続けた、「しかしそこで私はその最中、救済された者となって引き上げられたのだが、私の救援者は私に善意であって、穏やかにこちらから連れ去るであろうと信じている。どこへか。休息の地だ。それでは別れだ、ヴィットーリア」。彼は彼女の目からの涙に接吻しようと思ったが、彼を迎えたのは、情愛のとても込められた口であった。

「もう一言」と彼は言った、「私のことは世間に好きなように判断させるといい。私は裂け目の向こう側にいる。ご機嫌よう、私に同伴するな。ミラノの私の許に來い、しかし私が呼んでからだ」。

ヴィットーリアは約束したが、言う通りにはしないつもりだった。

ペスカーラは尼僧院長の許を辞するとき、院長は自分の関心事を述べる必要さえなかつ

た。将軍は自分の妻のために用意された宿に対する自明な返礼として戦費の減免を認めた。経済的困窮とつましい食卓のこの終止符で、尼僧院はとても喜びに包まれ、尼僧達は客人の名誉を称えて、食卓を選び抜かれたご馳走で飾った。しかしヴィットーリアの席は空いたままであった。

ペスカーラは、修道院の祝福を受けて、町の塔の方へ馬で戻った。彼の果敢な黒馬は整然とした歩調に驚いているように見えた。平原で甲高い軍楽や至る所で行軍している部隊のために、この馬は遠征が始まることを察知していた。すでに火薬の臭いを嗅ぎつけたかのように、馬はくくん鼻を鳴らして、すでに勝利しているかのように誇り高く進んだ。

別れは辛い、と将軍は考えた。別れを繰り返したくない。今一度人生が彼の許へ凝縮されて、彼は実存の最良のもの、美と勇敢な心とを両腕に抱いたのであった。彼の中で青年が燃え上がった。そして彼は、ヴィットーリアにかくも宗教的に語りかけた後、自分の消滅に抵抗して立ち上がった。死すべき命に流れている高貴な血、行動力が、永遠の平穩に抗して怒った。彼の明るい灰色の目に、絵画の中に再び見いだした自分の殺害者に対する怒りが閃光を発生し、籠手を付けた右手で胸を叩き、かくて自分を刺した雀蜂を潰した気になった。この時、黒馬もいななき、短いギャロップに移行した。思わず将軍に踝で触れられたか、将軍と一緒に癒着して育ち、馬も将軍の不機嫌を察知したのであろう。

このような気分の時、間近の田圃で、頓狂な闘いの目まぐるしい展開に気付いた。このため田圃は踏み潰されていた。一人の男が絶望的に多勢に抗していた。黄色と黒色の布切れのぼろぼろにされた小さな男が憤然とその槍の残骸で十二名ほどのスペイン人を相手にしていた。彼は二人を突き刺していたが、今や残りの者達に圧倒されて、すでに喉に剣先が突き付けられていたが、彼の上に跪いているこのスペイン人は、別の者によって引き離された。飛び込んで来る将軍に気付いたのであった。

ペスカーラは合図して、この囚人を連れた部隊は彼に従って、国道沿いにある大きな榎の下に集まった。蒸し暑い平原にただこの一本の木が周りに聳えていた。将軍は下馬して、苔むした巨大な幹に寄りかかった。彼の胸は急速な騎乗で喘いでいて、尋問という口実で休憩を取って、胸を休めることは都合の良いことであった。

スペイン人の曹長はこう報告した。自分達は一人のスイス人が穀物畑を駆けるのを見つけました。多分パヴィアからの潰走兵で、これまでどこかに潜んでいたものでしょう。そしてひょっとしたら、ミラノ人のスパイかもしれないので、捕まえました、と。その報告を終えながら、このとんがり顎髭の男は、榎の木から水平に突き出ている太い枝を見上げていた。

スペイン人達をペスカーラは去らせたが、彼らは若干離れて、見張りながら、分散していた。それから彼はこのスイス人を頭の天辺から足先まで検分した。甲冑はとても錆びていて、黄色と黒色のズボンはとても草臥れていたけれども、彼はすぐに修道院で見た絵の服と、それに輝く目の光が少なからず同じと認めた。そして今やまことに、この彼の前に立っている男はその顔を歪めて、にやりとかの微笑を浮かべたのであった。不安からであれ、あるいは彼も将軍のことを思い出したからであれ。

「それを取って、渡してくれ」とペスカーラは命じて、槍の残部を示した。兵卒の一人が捕らわれ者の足許に、自分達の仲間を傷付けた証拠品として投げ出していたものであった。それは半分に折れた槍の前方部分で、先端には血が付いていた。スイス人は従った。

将軍は先端を指で調べて、それからこの残部を投げ棄てた。

「そなたの名前は何か」と彼は尋ねた。

「ウーリー出身のブレイジ・ツグラッゲン」が答えであった。将軍は人口に膾炙しないこの姓名を繰り返すことを断念した。あるスイス山岳の辺鄙な尾根からの出身に思われた。そしてファーストネームの方を利用して、これをイタリア語化した。「ビアージョ」と彼は言った、「そなたは我が二人の郎党を傷付けた。ここで縛り首にしようと思う」。

ブレイジ・ツグラッゲンは反抗的に答えた、「貴殿が私を吊すのであれば、それはこの最後の諍いのせいではなく、むしろ私が、一」。

「黙れ」と将軍は命じた。彼は戦時国際法を勝手に行使して、復讐することが出来たであろう。しかしこのような復讐を自分自身にも、自分の犠牲者にも認めることはできなかった。「ここにどのようにして残っていたのか」。

流暢なロンバルディア語を話すツグラッゲンは、率直に話し始めた、「パヴィアの戦場で私は傷付き、落馬して、折れた槍の側に寝ていました。それから夜間に、山々の方に向かって、空腹で物乞いしながら歩きました。御領主、二本のポプラの右手に長く赤い屋根が見えましょう。あそこに夫と一緒にナツラチヴァリア女将が住んでいます。この夫が私を野良仕事に雇ってくれました。一 戦争が余所に移らない限り、私は国境を越えられないであろうというわけです。この後私にナツラチヴァリア女将が目をつけました。すると眠っているとき、父と二人の祖父が現れました。皆故郷に暮らしているのですが、勿論これらの先祖はとても弱って来ております。まず父が現れ、指を上げ、言います、『注意しろよ、ブレイジ』。それから父方の祖父が、両手を組み合わせて言います、『自分の魂のことを思え、ブレイジ』。最後に母方の祖父がやって来て、ドアを示して言います、『逃げろ、ブレイジ』。そこで私は飛び起きて、服を探しました。勿論私の絹の手袋とかがりを付けた首飾り章をナツラチヴァリア女将は私に言い寄って取り上げていました、教会で見せびらかすためです。私はまだ自分の分別の半分を確保していましたが、しかしこの半分も失うことになりました。私が朝方、お告げの祈りのために聖痕教会に入りますと、一 私の驚きと言ったらありません、一 私そっくりの実物の私を、そして神様を刺している私を見たのです」。

「ほほう」とペスカーラは微笑した。

「悪漢の仕業です」とツグラッゲンは怒った、「いいですか、御領主、対の絵師が以前道具を持ってここらをうろついていて、あるとき農園で一杯の牛乳を恵んで貰ってました。一方の者が私に注目しました。『モデルに打ってつけの男だ』と彼は言って、私の黄色と黒色の服をしげしげと見ました。『貴殿の槍と甲冑を持って来られよ』。私はその通りにしました。今度はこの絵師は股を広げるように命じ、同じように股を広げて、一枚の画布に私を写したのです。それからこの悪漢どもは、私の写しをととても榮譽のあるものにすると約束したのですが、聖痕教会に私は立っていて、救世主に槍を突き出しているのです」。

将軍はこの正直な若造に一種の好感を抱いた。「これを受け取れ」と彼は奇妙に上機嫌になって叫び、このウーリー一人に一杯詰まった財布を差し出した。このウーリー一人は右手でそれを受け取り、金貨を数えながら、真面目に、猜疑心を抱きながら、左手に移した。それからドゥカーテン金貨をポケットに入れ、財布を将軍に戻そうとした。

「それも持っておけ。黄金の引き締め紐だ」。

ウーリー人はこの財布もドゥカーテン金貨の方へ仕舞い込んだ。「御領主、私をどこへ配置するのです」と彼は尋ねた。彼はペスカーラは自分を徴募して、手付金を渡したのだとしか考えられなかった。

ペスカーラは答えた、「私はそなたを雇ったのではない。つまり、三人の先祖が真面目にそなたに警告したのであれば、故郷に戻るのが一番良い。諺にある通りに、そこで正直に暮らせ」。

「しかし何故かくも沢山お金をくださるのです。貴方に対し何も良いことはしておりません」とツグラッゲンと言った。むしろ苦しい思いにさせたのにと彼は頭の中で補足した。ペスカーラのこの返礼はこのウーリー人の理解力を越えていて、その公正感覚を不安にさせていた。

「雅量による」と將軍は冗談を言った。

ブレイジはその言葉を知らなかった。するとこれは自慢の一種かもしれないと思い付いて、大口叩きが両手一杯の金を投げるのを陣地でしばしば目撃していたので、それで納得した。「そうですか」と彼は言った。ペスカーラは、自分の馬を進めると合図した。

「そなたが通り抜けられるように」と將軍はすでに鎧に乗っていて、言った、「これも持っておけ」。彼は彼に安全通行証を投げ与えた。そこですんでの所で、ツグラッゲンは彼に感謝の言葉を述べそうになった。少なくともお達者でと願おうとした。しかし將軍を別れ際眺めながら、彼はその表情に浮かぶ長患いをそのアルプス人の眼光で見抜いた。長患いのことは、ペスカーラの精神生活ですべての世間を欺いていたのであったが、この目を誤魔化すことはできなかった。思わず彼は願った、「御領主に極楽浄土を願います」。それから自分自身の話した、その邪悪な意味に狼狽して、彼は田圃を突っ切って、槍の残骸を持って駆けた。その残骸を丁寧に持ち上げて、今や旅の杖として使っていた。スペイン人達は不思議そうに見守っていた。しかし老曹長は、儉約家の將軍が珍しく気前が良いことに憂わしげに、縁起でもないと頭を振っていた。

ウーリー人を捕まえていた部隊は、今や塵埃の雲を起こしながら蓮太鼓の後に続く中心軍隊の一つであった。將軍はその勇者達の許へ馬で進み、沸き立つ歓声の中、迎えられて、馬を軍楽と最初の中隊の間に割り込ませた。中隊の隊長が恭しく間を開けた。

しばらく彼は部隊の先頭に一人っきりであった。するとノヴァーラから白い外套の一人の騎乗者が近寄って来て、彼と一緒にになった。二人は一緒に城の門を進んだ。黙って同行者はペスカーラの歩調に従い、彼の後を追って来て、部屋の敷居を越えた。

ペスカーラは向き直った。「モンカダ、何の用です」と彼は尋ねた。モンカダは答えた、「証人抜き会の会談だ。二度目の拒絶はしないだろう」。

「仰せの通りにします」。

「閣下」と騎士は始めた、「私は、貴方が話されたように、向こうで宰相と話した。宰相は、不安で一杯、青ざめていて、千回も誓って言った。自分は延期とより軽い条件を得るためにやって来た。ただこのためにノヴァーラへ来たのである、と。それから彼は良心の呵責に責められているかのように、千々に乱れて、お喋りした。この人間は嘘の固まりの深い谷で、見通しが利かない。しかし彼は同盟の名でここに来ていると私は確信している」。

「その通りです」と将軍は言った。

「更に彼は貴方に同盟の指揮を申し出たと言う」。

「その通りです」。

その時、控えの間で騒動が生じた。イッポリトを脇に投げ飛ばして、凶暴化し、憤然とした表情、狂おしい目をして、宰相が駆け込んで来た。彼の足に続いて、すでに甲冑を付けた兩人、ブルボンとデル・グアストがやって来た。宰相は二人と通路で出会っていて、二人は彼を引き留めようと思っていた。絶望して彼は将軍の足許に身を投げた。一方モンカダはゆっくりと奥の方へ退いた。

「我がペスカーラよ」と不安になった宰相は叫んだ、「もう辛抱できない。これ以上拷問に耐えられない。一刻一刻が長く延びて、苦悶の永遠となる。私は死んでしまう。慈悲深くなって、私に返事を賜え」。

ペスカーラは落ち着いて答えた、「宰相、貴方を待たせたとしたら、お許し願う。これまで時間が塞がっていたのだ。しかし丁度貴方を呼びに人を遣わそうと思っていた。貴方の昨日の話しを、私は考えてみた。一民族の運命は小さな問題ではないのだから。一しかしまあ、腰掛け給え。貴方にそんな大層な身振りで迫られたら、私は話せない」。

宰相は震えながら安楽椅子の肘掛けを掴んだ。

「私はその件を思量した。...しかし宰相、我々はまず個人的なことを省くことにしよう。貴方自身のことや、私のことは除いて考えるとすると、残る問題は、イタリアは今この時、独立[自由]に値するか、だ。イタリアは現状のまま、独立を受け、それを保持するに向いているか、だ。私の考えは、否だ」。将軍はゆっくりと語った。あたかも自分の言葉の一つ一つを正義の天秤で計っているかのようであった。

「二回、イタリアは独立を経験して来た。異なる時代だ。最初のローマ共和国の時、その時は国家の安泰が一切であった。それからかの素晴らしい共同体の時代、ミラノ、ピサ、その他だ。しかし今は隷属の入口にある。というのは、イタリアはすべての名誉、すべての徳操を失い、欠いているからである。これでは誰も助けられないし、救えない。人間でも神でも救えない。どのようにして失った独立を回復できるか。民族の深みから生じて来る倫理的諸力の突き押しや流れによる。大体今のドイツで愛憎の炎を持ってその諸力が信仰を飲み込んでいる様を考えればいい。

しかしこちらではどうか。イタリアとなると、信仰や良心を私は口にしない。これは貴方らにとって、古くさい事柄だから。ただの合法性や納得にしてもこれがあるか。名誉や恥すら貴方らには残っていない。ただ剥き出しの利己心だけが残っている。貴方らイタリア人は何が出来るか。誘惑、裏切り、暗殺だ。何を頼りにしているか。状況の好転、偶然の賽の目、政治の博打だ。それでは国民は築かれないし、刷新されない。まことに、いいかな、宰相」。一そしてペスカーラは声を判決文のように張り上げた、一「君のイタリアは出たとこ勝負で、空想的だ、君自身と君の陰謀同様にな」。

「本当だな」とモンカダの声がした。

「モローネ、それに貴方らが選んだ英雄も根が抜かれている」。

しかしペスカーラのこの小声の最後の言葉は、別の叫び声でかき消された。モローネが素早く頭を転ざると、騎士が認められた。彼は自分の提案がこのスペイン人に漏れていると察して、彼は憤然となって、彼の面貌は歪み、憑かれた者のように荒れ狂った。「ペテ

ンに残忍、ペテンに残忍だ。私はめくらで打ちのめされた」。それから無闇に復讐心に駆られて、彼はモンカダに対し叫んだ、「騎士殿、いいか、この者こそ」、一と宰相は將軍を指した、一「張本人だ。筋書き全体を描いたのは、この者だ。私は踊らされている。私はこの怪物の犠牲者だ」。

この時、公爵が飛び込んで来た。公爵はペスカーラの背後に、デル・グアストと共に立っていて、この熱演を楽しんでいた。「我が友、道化師よ、踊れ、皆のために踊れ」[Béranger, Chansons II 1816]と彼はモローネを嘲った。「いや、我ら二人が聞き漏らすものか。二人して、向こうの赤いカーテン、その黄金の総の奥にいたのだ。相棒、これが語らずにおれるか、抱腹絶倒だ。君に口笛吹いて冷やかしたのを聞き逃したか」。それから突然真剣になって、彼は視線をしっかりとモンカダに据えて、手を脇に置き、誓った、「我が王侯の血筋にかけて、將軍は昨日のかの会談の折、寸毫もその名誉と忠誠を穢されなかった」。

モローネは撃ち砕かれた。デル・グアストは彼に手を置き、自ら彼を連れ去った。「宰相殿」と彼は嘲った、「有り難く思われよ。我らが聞いていたので、貴方は拷問の手間を免れている」。公爵も、ペスカーラの頼むという身振りに従って、出て行った。

「閣下」とモンカダは始めた、「私の確信を申しますと、宰相とは単に芝居をなさったのですな、ひょっとしたらスペイン人の誇りには似つかわしくないほどに、くだけた具合に。このような人間とはペスカーラ家の者は陰謀しますまい。しかし、閣下、この騙された男は、やるせなく憤然となって本当のことを話しております。貴方がイタリア側の陰謀の張本人であると、彼は貴方に罪を着せました。張本人でなくても、支援してやったのでしょう。陰謀の火を消さず、貴方はそれを育て、大きくなさった。陰謀に対し、決定的言葉を吐いて、怒り、よく分かる身振りでストップをかけるのは、簡単なことだったはずで。貴方はそれをなさらなかった。貴方は、薄暗い、両義的な姿で立っていたのです」。

「騎士殿」とペスカーラは彼を遮った、「私が自分の行状について弁明すべきは、貴方ではなく、ただ我が皇帝のみです」。

「貴方の国王の方だ」とモンカダは答えた、「貴方に畏敬の念があれば、皇帝をそう呼ぼう。スペインの国王の方が皇帝よりも上だからだ。フェルナンド[アラゴン王1452-1516]のこの孫はスペインの一廉の国王になるであろう。カール[五世、カルロス一世]はゆっくりと成長している。様々な影響、諍う影響を受けながら、しかしそのスペインの血が強化されて行き、最後の一滴までそのドイツ人の血を吸い上げてしまうであろう」。彼はこのことを静かに微笑して、陶酔的に目を輝かせて述べた。

「アヴァロスよ」と彼は続けた、「そなたの先祖は異教徒ムーア人に抗して信仰のために戦い、その先祖[Inigo d'Avalos]がかのアルフォンソ[五世、1396-1458]と一緒にナポリへ船で向かった。そなたの起源に戻ることだ。最も高貴な血がそなたの血管に流れている。偉大なことを愛するそなたであれば、どうしてスペイン人の世界的思考と哀れなイタリア人の陰謀との間で迷うことがあろう。我々が考えているのは地球だ、かつてはこの地球はローマ人に従っていた。神の不思議な業を見るがいい。カスティリヤとアラゴンは結婚し、ブルゴーニュとフランダースは編入され、皇帝位はスペインのものとなり、新しく発見されて、征服された新世界がある。そしてこのすべてを支配しているのは、二度、異教徒の血で洗礼を受けた、祝福された剣を有する一つの鍛錬された民族だ。かの哀れな宰相が、そなたに呈示したものを、スペインは千倍にして与えよう。宝物、国々、名声、それに一

浄福の天国だ。

というのは、我々は天国のために戦っており、現世では一つの教会が支配するというカトリックの信仰のために戦っているからだ。さもないと神が人間となった甲斐はなかろう。これらの日々、地獄がいかに使徒の座[教皇座]を汚すものか、地獄の最後の異端を、つまりドイツのあの僧侶[ルター]を吐き出すものか、神は予見していて、それで神はスペイン人を創ったのだ。教皇座を浄化し、ドイツ人を踏み潰すためだ。それ故神は我々に世界を戦利品として与えている。すべて現世的なものには天上的目的があるからだ。私はこのことを長いことシチリアの修道院で考えて来た。そして多分自らはこの僧侶的戦役のために選ばれていると考えたのだ。すると神は私にその姿を見せられた、別の者、召された者としてだ。しかし私は自分の罪のせいで、このような栄誉に相応しくないといい、私は世間に戻った」。

ペスカーラは黙って、この陶醉した男を眺めていた。

「しかし私は日中働いている。私がエルナン・コルテスの後ろに立ってから一年と経っていない。コルテスに悪魔が山上でメキシコの黄金の女壻を示したのだ。丁度、ペスカーラよ、そなたに今悪魔がイタリアを示しているようにな。この手はつまずくコルテスを支えたものだ。今私はこの手を、そなたに、ペスカーラ、差し出して、そなたがスペインの息子として留まるようにしているのだ。スペインは世界なのだ。このスペインを栄光に包まれているカトリック教徒のフェルナンドが守っているのだ」。

この時將軍は沈黙を破って、怒った、「彼の名前を呼ばないでくれ。王は私の父を殺した」。

モンカダは思い溜め息を吐いた。

「後悔しているのか」。

騎士は顔を歪めて、胸を叩き、自らと語りながら、呟いた、「我が罪だ、...我が罪だ、...告解させないまま、聖体拝領させないままであった」。

そこでペスカーラは、この敬虔な男は、自分の殺害を後悔しているのではなく、宗教的に死後の準備がなされていない男に対して殺害を行ったことを後悔していると察した。「私の許から去って欲しい」と彼は命じた。

モンカダは敷居の所まで、夢から覚めたように、引き下がった。それから彼は気を取り直して、言った、「済みません、閣下。私はぼんやりしていた。もう一言冷静に言おう。私は貴方の目標が分からない。まだ私は貴方の敵ではない。ともかく貴方はミラノを接収するであろう。この最初の一步は忠誠とも不忠とも言えない。私は貴方の二番目の目標を待っている。貴方がミラノ公爵を廃して、反逆を罰するかだ。貴方がこうしない場合、貴方はスペインと国王を裏切ることになる」。そして彼は消えた。

ペスカーラは引き返して、食事を摂った。それから彼は秋の晩に欠かせない暖炉の火が燃えている前で、ブルボン公爵とデル・グアストを迎えて、最後の指示をした。残りの時間を、自分の秘密の書類の整理に当てた。一人の権力者の周りを回っているものは、劣等な一世界である。彼は大方の書類を処分して、竈の中へ投げ入れた。彼は誰をも破滅させたくなかった。皇帝の親書も焼却すべきであろう。しかしその灰を他の灰と一緒にしたくない。彼は燃え残る炭火鉢を持って来させて、皇帝の手紙を青白い小さな炎とさせて、燃やした。彼が終わったとき、その蠟燭はすでに半分まで減っていた。真夜中に向かっ

た。ペスカーラは胸の上で腕を組み、深く瞑想していて、或る者が入って来てもその足音に気付かなかった。この男が彼に言った、「そなたの目標は何だ、アヴァロス」。彼はモンカダの姿を認めた。

将軍は手を消えた炭火鉢に入れて握り、手を閉じ、それをモンカダに差し出した。「私の目標か」と彼は言って、その手を開けた。塵と灰であった。

その時ラッパの音が城中に響いた。太鼓の連打が続いた。すべてが動き出した。将軍は従者達に自分の身支度をさせた。彼が煌めく松明の明かりの許、その光が槍や武器に反射している中、一階の舗石のホールに足を踏み入れた時、自分の黒馬を目にした。それは高価な馬具が付けられ、苛立たしげに蹄で床を蹴って、火花を散らしていたが、その側に二頭の軽装の速歩馬の付いた輿があった。その二つを彼は命じていて、その選択はその馬で決めることにしていた。溜め息を吐きながら彼は輿に乗って、その中で再発する痛みの進行を隠すことにした。そして門を通過して消えて行くと、彼の辱めを受けた黒馬は怒った身振りをして、それに乗ろうとした馬丁を振り落とす。馬はその主人を欠いたまま連れて行かざるを得なかった。

さて捕虜の宰相も連れて来られた。スペイン人の兵士達が彼を取り巻き、彼の首飾り、指輪、財布を奪って、彼を、ミラノの軍厩舎からの高貴なラバではなく、哀れなロバの上に反対向きに座らせた。ロバの尻尾を彼らの残酷なやり方で、彼の縛った両手に通させた。それから悪罵の哄笑の中、門を通過して行ったが、この哄笑に宰相も絶望して同調の笑いを上げていた。

最終章

その間、幸福な城から不安の住処と化したミラノの砦にフランチェスコ・スフォルツァは嘆きに満ちた日々と、更にそれよりも惨めな夜中を過ごしていた。途方に暮れ、寄る辺なく宰相を呼んでいた。彼はデル・グアストの訪問を受けていて、こう伝えられていた。我が将軍は、期限が切れる前にミラノの宰相を迎えましたが、しかし宰相は将軍に期待されていた譲歩をもたらさず、殿下の名前で、愚かにしてかつ犯罪的な打ち明け話をして、それで将軍は遅滞なく、ちなみに最初の警告と全く同じ主旨で、ミラノに行軍して、殿下を犯罪者として処遇することになりました、と。デル・グアストは侯爵が震える様を見て楽しみ、そして町から消えていた。皇帝軍の部隊が迅速な行軍で近付いて来て、すでにミラノの防塁からできえもその部隊が見えて来た時、この小心な公爵は降伏と防衛の間で揺られて、しかしその後、二、三人の勇敢なロンバルディアの貴族達によって名誉の道へと拉致され、とうとう自らも戦闘的気分を駆られていた。この気分に至ることもその祖父譲りの血で全く不可能なわけではなかったのである。公爵は工芸的に立派に鍛錬された武具を身に帯び、素晴らしい細工の兜を弱い頭の上に被せた。

ペスカーラがその部隊をこの堡壘へ攻撃させたその瞬間に公爵は大きな堡壘に立っていたというのは事実である。公爵は震える声で選りすぐりの大砲に点火を命じた。煙が晴れると、一帯は倒れたスペイン人で覆われていた。死者達や負傷者をかき分けて、ペスカーラは進み、もはや自分の側にはわずかしきいなくて、デル・グアストの指揮下、彼の後を突撃急襲して来る多数の兵士達もまだ追いついていなかった。彼は甲冑を付けていなかった。

た。兜は彼の頭から剥がれていて、黒っぽい外套を千切れて舞っていた。燃えるような赤い制服を着て、悠然とした同じ歩調で、彼ははるか先を歩み、煌めく両刃の剣を振り回していた。あたかも死神が人間となって堡壘へ歩んでいるかのようにであった。そのとき堡壘では、その同じ瞬間、悪い知らせ、即ちブルボンが南門を抑え、レイヴァが北門に攻撃して来るといふ知らせが広まって、守備側は青ざめた恐怖に襲われた。再び装填されていた野戦砲は点火されなかった。恐怖に駆られた兵士達に抗して身で防いだ将校達は踏み潰され、公爵はパニックになって自ら逃げ出した。

公爵が自分の宮殿に戻って来て、よろめく足取りで謁見の広間に入ると、何と自分の目の前で王座の天蓋の、ライオンと鷲を織り込んだ金欄の覆いが瓦解した[メリメ：『シャルル九世年代記』、第二十一章参照]。至る所の混乱に乗じて、公爵家の壁紙貼職人が広間に忍び込んで、この豪華な作品を盗もうとこれを緩めていたところ、物音が近付いて目論見に失敗し逃走したのであった。この劣悪な予兆に驚いて、公爵は暗澹と絶望して肘掛け椅子に身を投げ、両手で顔を覆って、自分の運命と勝者を待った。[史実ではミラノ陥落は、1526年7月で、ペスカーラ逝去後、ミラノ公爵はもっと毅然としていたらしい]。

勝者は長くは待たせなかった。短い騒動があつて、忠実なスイス人の宮殿番人が打ち倒されたか、武器を取り上げられて、一そしてペスカーラが広間に入って来た。無帽で、剣を持たず、その後にシャルル・ブルボンが兜を被り、完全武装で、血の付いた拳に剣を持っていた。ブルボンは攻城梯子の先頭に乗って、この梯子と共に町の濠に投げ落とされていたが、しかし重い傷を受けていなかった。

ペスカーラ侯爵は、敗者の前で礼をした。すると敗者は席から飛び上がった。「殿下、落ち着いてください」とペスカーラは語った。「私は敵として参っていません。殿下を新たに封建領主の皇帝への義務に引き入れるために参っています」。

スフォルツァは目を上げた。そして彼は優越者のペスカーラの顔に嘲笑も処罰も読み取れず、むしろ同情した明察と穏和さを読み取ったので、この寄る辺ない少年は涙をどっと出して、どもって言った、「私は心の中ではいつも皇帝陛下に忠実だったのです。陛下にはこれ以上忠実な従者、これ以上に良好な封臣は見いだされなかったことでしょう。しかし私は不幸にしてミスリードされ、間違った道に連れて行かれました。...私の極道の宰相が、...それに武装蜂起も私は命じなかった、...私は突き上げられ、押し退けられて、...あのヴァラブレガと、二、三名の他の貴族達によって、...すべての使徒や殉教者にかけて、私はイタリアの愛国主義者ではありません。にっちもさっちも行かない状況での進退窮まった君主なのです」。

二人の英雄の子孫のこの完全な身悶え自滅は將軍には見ておられないものに思えた。しかし彼はこの贖罪を自由にやらせた。しかし一見敬意を表するかのように、彼はこの最後黙ってしまった若者に自分の手を差し出さなかった。若者はこの手を握ろうと探していた。この全く打ちのめされた君主はその手に接吻するかもしれないと案じていた。

この自己卑下の間、自分の苦い心の奥底で、この卑下を味わいつつ、シャルル・ブルボンはゆっくりとちびりちびりと一杯に満たされた杯を啜っていた。彼は小姓に目配せして近寄せ、この杯を取り寄せ受け取っていた。

「殿下」と將軍は言った、「私は全権を得ています。殿下が間違つて危険な賭けに引き込まれてしまったと痛感されていますならば、そしてこれからは、殿下の幸せを、それが

実在するところ、つまり皇帝の許に探すことにして、皇帝陛下からは二度と決して離反しないとしっかりと決意を固めることができるのであれば、私は敢えて、私の責任において、殿下にお許しを保証し、殿下の手をそれに対する誓約として受け入れる覚悟です。殿下は私の言を信用して頂きたい。いずれにせよ、殿下は同盟と一緒に進まれるよりも、皇帝と一緒に進まれるのがよろしいでしょう」。

この思いがけない穏やかな言葉に、イル・モーロの息子が突然また不信感を抱く様、運命によって邪推深く育った若造が一つの策謀を推測する様、そして自らの手が躊躇い、震える様を今やペスカーラは目にした。「殿下、信頼されたらよろしい」と彼は力強く語った、「皇帝と私は約束を守ります」。

スフォルツァは手を差し出し、将軍は親しげに付け加えた、「私には殿下の難しい状況が分かります、一 そう発言して良ければ、不幸な青春故に貴方の魂は病んでいて、気力を抜かれているのです。魂はとりわけ恒常性を必要とします。皇帝の路線を堅持して進まれると、殿下は時代の波に呑まれることはないでしょう。私個人としては」と自分の教訓調を和らげて、ほとんど真心からの調子で結んだ、「殿下にはいつも好意を寄せていました。私のお手本への感謝からで、貴方のご立派なご先祖は、もっともこのご両人は」と彼は冗談を言った、「私の青春時代、幾つもの眠りを奪ったものです。このような魅力、刺激は男らしさと魂の偉大さにあります」。

フランチェスコ・スフォルツァはこの好意に慰められた。しかし不安げに尋ねた、「それで私は公爵のままですか。ペスカーラ、どう思われますか」。

「勿論です。私が皇帝に口添えが出来ます限り、また貴方がお心を固めることが出来ます限り」。

「宰相もお咎めなしですか」。

「そう思います、殿下」とペスカーラは約束した。

「彼は私の大臣として残れますか」。

将軍はこの二人の御神酒徳利ぶりに微笑を抑えることができなかった、「殿下は、殿下がたった今ジローラモ・モローネをすべての助言者の中で最も劣等な者と呼ばれたことをお忘れになっています。殿下には、皇帝陛下から、この難しい職務のために、別のもっと賢い頭脳を貰い受けることをお勧め致します。イタリアにはそうした者がいます。スペイン人である必要はありません」。

「殿下、そうした者はいない。殿下は宰相を得られないでしょう」と今やブルボンが会話に割り込んで来た、「このヘレナ[モローネのこと]は私の戦利品だな」。[史実としてモローネは許され、ブルボンに仕えることになった]。

フランチェスコ・スフォルツァはブルボンを不安一杯の目で凝視した。「彼がここにいるのか」と彼は叫び、「彼は我がミラノを望んでいる。彼は長いことそれを夢見ていた。助けてくれ、強力なペスカーラ」。

するとブルボンは、自らを壊すかのように、その水晶のグラスを大理石の床に一気に怒って投げ付け、グラスはけたたましい音を立てて、微塵に砕けた。「殿下」と彼は叫んだ、「我が侯爵領ミラノが散っている」。

破片がまだ飛んでいる間に、モンカダがレイヴァと入って来た。レイヴァは上から下まで埃や血で汚れていた。「閣下」と騎士は始めた、「貴方の今日の立派な勝利にお祝いを

申し上げる。この勝利は、再び全力で戦い勝ち取られたもので、他の多くの勝利と遜色ない。私は然るべく控えの間で控えていた。しかし痛飲され、笑いが起こるのを聞き、レイヴァがまた到着し、レイヴァは北門を抑え、同様に飲む資格を有するので、私は敢えて入室した。私は良い時に参ったと思っている。つまりここで法廷が開かれるであろうし、ブルボン殿下はこの裏切り者の公爵に対し象徴的作法で報いとしての没落を告げられたからだ。しかし殿下、そう激しくなさらなくても。思うに、将軍が戦時法廷を開催されよう。私は王家の関係者として陪審席と表決権を要求して良からう。勿論、マドリッドからの決定を期待しての暫定的審判だ」。

ペスカーラは冷静であった。「それでは私が執り行おう」と彼は言った、「私は裁判官として我が二人の同僚、ブルボン殿下とレイヴァ殿を任命する。私が議長を務める。貴殿、騎士殿は、位階がないので、退席を願わなければならない。ここに私の信任状がある」。彼は胴着から皇帝の全権委任状を取り出した。

モンカダは書状を握って、読んだ、「その判断に従って、...状況に応じて...フム、..閣下、失礼ながら、...この皇帝の指示は貴方が接收したミラノにおいて随意にすべての軍事的民事の方策を講ずる全権を得ていると述べているように見えるが、しかし少しもカトリックの王家の権利や利害を仮決定しているものではない。それ故、私は黙って、しかし注意深く傍聴者として残ることにする」。

「構いません」とペスカーラは辛抱して言った。

するとレイヴァも身動きして、ジローラモ・モローネを引き出すよう要求した。「彼は宮殿にいる」と彼は言った、「私は彼が捕らわれて、ミラノの民衆の呪詛を浴びながら、糞を投げ付けられながら、運び込まれるのを見ていた。民衆はこの惨めさのすべてを彼のせいに行っている」。ペスカーラは命令を述べた。

痛々しい間が生じた。当惑した従者達によって椅子が用意された。従者達はその告訴された主君に恭しく王冠と紋章の付いた公爵椅子を持参した。そしてモローネが、虐待の痕跡を見せながら現れたとき、三人の将軍が裁判官として座っていた。ペスカーラが中心にいて、裁判官達の前に彼の公爵が座っていた、「フランチェー君、勇気を出せ」と彼は彼に囁いた。公爵の側に昔からの習慣で立っていた、「すべて私のせいになさい」。

ペスカーラが言葉を発した、「ミラノの殿下はその封建領主への忠誠をゆるがせにしない、単に成り行きで道を踏み外し、反逆の外観を呈するに至った、この男の囁きを受け入れたせいだと誓った」。公爵は頭を頷かせた。

「その通りです。私一人に咎があると白状致します」と宰相は動じずに語った。

「皇帝軍に対するミラノの防衛も殿下は誓って命令していない、それは何人かの反逆的ロンバルディア人の勝手な行動であると保証された。私はこれを信頼できる発言と思う。レイヴァ殿はいかに思われるか」。

レイヴァは醜い顔を歪めて、呟いた、「このフランチェスコ・スフォルツァには反逆の咎があり、明白な事実によって証明されています。彼は嚴重に留置されるべきです。皇帝は、愚生の見解では、公爵を廃し、スペインへ移送させましょう」。

「そして貴方の考えは」。ペスカーラはブルボンの方に向かって尋ねた。

元帥は千切れた手袋を弄んでいて、メロディーのある声で述べた、「殿下は、かの風変わりな香具師に翻弄されたものです。この香具師は私や他の多くの者を手玉に取って、と

うとう我らの将軍を自分の師匠に祭り上げました。しかし殿下はまた正気に戻ったように見えます。つまり殿下に捕虜の辱めを与えることは相応しくなく、必要ありません。この町は我らの手中にありますので。ミラノの殿下は放免されるべきです」。

「一票対二票。というのは私の意見もそうだからだ」とペスカーラは決定した。モンカダは腕を組んだまま黙っていた。レイヴァはその大きな傷跡に血が充満するようになって、口髭を引っ張った。しかしブルボンも立ち上がり、フランチェスコ・スフォルツァに腕を差し出して、広間から彼を連れ出した。

外で彼はデル・グアストと鉢合わせた。彼は彼に囁いた。奇妙なことにレイヴァの軍が宮殿に向かって来ます、と。ブルボンは額に皺を寄せた。「良く見張って、報告してくれ」と彼は命じた。デル・グアストは急いで去ろうとしたが、振り返って叫んだ。「もう一言です。ヴィットーリア夫人が門に着いて、将軍に面会を求めています」。

ブルボンが広間に戻って来ると、丁度レイヴァが宰相に対し、牢獄と拷問を要求して、モローネを青ざめさせて、完全に白状させた後に、断頭台と斧とを要求していた。

「拷問にかけるなんて」とモローネは叫んだ、「貴方らが私を一枚の布のように絞っても、私からは血と汗しか絞り出せないことでしょう。私は将軍の前でさらけ出しました。ペスカーラ、君は残酷なことはしないだろう」。

「レイヴァ、止めろ」とブルボンは、また一同の中に座りながら、叫んだ、「貴殿はこの道化師の顔のひきつきりを見て楽しみたいのか。私の好みではない。我がモローネを虐めないでくれ。ジローラモ、震えることはない。君の髪一本触れさせない。君は我が書記になればいい。我が恵み深い判決はこうだ。ジローラモは自宅に蟄居、私が皇帝から彼を貰い受けるまで、見張りが付けられる、だ」。

「私にもそれで十分と思われる」と将軍は決定した。「モローネは三人の信頼出来る商人の前で白状した。三人の中の一人はこの私自身だ。拷問は不要で、しっかり拘留することだ。一票対二票。殿下、彼を連れて行かれない。私の予感では、ジローラモ・モローネはもう一度変身して、皇帝陛下に仕える気がする」。

するとモローネは、命が助かり、拷問を免れて喜ぶ余り、はしたなく叫んだ、「ペスカーラ、君がいなければ、イタリアはない。それは夢だった。私は君の好きなようにしてくれ。私は君の度量と善意から生まれた子だ。...更に話して欲しいなら、皆さん、聞きなされ。話してならんことはこれだ、同盟は教皇の頭が考え出したことだ、アテネがゼウスの額から生まれたようにな、...」。彼の舌は突然沈黙した。自分の横に旅行服の声望ある男が丁度入って来たのに気付いたのである。それから彼は叫んだ、「そのことを誰よりも知っているのは、この男だ」。それはグイッチャルディーニで、その視線は興味深く一同を見回していたが、しかし最後にしっかりとペスカーラの顔に据えられたままとった。

「閣下、お邪魔ですか」と彼は言った、「しかし手短かに述べます。私は教皇の至急便を持参しました。今回は別の者を派遣した方が良かったでしょうが。教皇は閣下にこうお伝えしています。教皇は宣戦布告の第一報を知り、最も信頼する者の一人をマドリッドに遣わして、皇帝にこうお知らせしたところです、つまり教皇はイタリア諸国家の同盟には関知しておりません、と。神聖同盟は存在していません。最上位の牧人は剣を忌避しています」。

「ハレルヤ[神は褒むべきかな]」と宰相は叫んだ。彼は命が助かって陶然となり、全く

有頂天になっているように見えた。しかし將軍は反論した、「何だと、グイッチャルディーニ。たった今モローネが白日の下にしたばかりだ、同盟は教皇の仕業である、と。真実は何だ」。

「両方です」とグイッチャルディーニは答えた、「私の依頼は果たされました。それで十分です」。彼は一礼して、広間を去った。しかし悪魔にこの時取り憑かれたブルボンが教皇の使者に後から呼び掛けた。「フィレンツェのお方よ、そなたの主君に伝えられたい。尊い教皇様の上履きに接吻するために、私がローマへ参りますと。ただ、ルター主義者達や改宗回教徒達と一緒に。そして夜になったら、我が燃えている蠟燭を投げ倒して、教皇に明かりを見せてやろう[1527年ローマ略奪の当てこすり]」。この不吉な男が放った笑い声がけたたましくドームのアーチから、広間の隅々から反響して、あたかも他人の不幸を喜ぶ悪霊どもの口からのようで、それでグイッチャルディーニは驚いて振り向いた。將軍の方はさて、自分の番人を付けて宰相も去らせた。キリスト教界の頭目を犠牲にすることを不適切なことと思ったのかもしれないし、あるいは人間的喜劇に飽いたのかもしれない。

グイッチャルディーニと宰相は外で出会ったので、グイッチャルディーニは尋ねた。「君は断頭台へ連れて行かれるのか」。

「とんでもない」。

「抜けられたのか。素晴らしいな。しかしノヴァーラではどうだったのだ」。

「いや、私はロバの上に座って来た。...このペスカーラは謎のスフィンクスだ」。

「宰相、これは私が彼の顔から察したことだ。ヒポクラテス[古代の医師]の特徴がある。ひょっとしたら教皇に訃報を届けなければならない気がする。ジローラモ、私が君にバチカンの庭園の中で言ったことを覚えているか。ペスカーラの胸中で最後の障害となり得るものことだ。文字通り私は本当のことを話していたのだろうか。將軍がパヴィアで致命傷を受けていて、それを秘密にしている場合だ。我らがもはや誘惑し得ない者を誘惑している場合だ」。

宰相は自分の頭を叩いた。「君はそう言った、グイッチャルディーニ。その時は私は理解しなかったのだが、似たようなことを將軍の医師、ヌーマ・ダーティ殿もノヴァーラで私に仄めかした」。

「ではそれが真実だ」とフィレンツェ人は結論付けた。「ペスカーラは騙したのではない。我々自身が騙されたのだ。人間どもの英知よ」。こう考察して二人は別れた。

謁見の広間は不気味な空気に支配されていた。三人の將軍と、彼らの許に残っていたモンカダは遠く離れて立っていた。ペスカーラは全く脱力して見え、王座の上に広げられた金襴の上に身を投げていた。彼の顔は青ざめていて、胸は波打っていた。ブルボンは広間を軽快なダンスの歩調で歩き回り、その際鋭くモンカダを観察していた。モンカダは窓下の壁面に寄りかかっている、別の壁面にいるレイヴァに合図して呼び寄せ、彼の耳に囁いた。「時間だ。彼は正体を現した。殺すか、あるいは生きたまま、...」。

この時ペスカーラも公爵を呼んだ、「シャルル、私の側に腰掛けてくれ」。彼は微かに喘いだ。「紙と鉛筆を持っているか」。

「フェルナンド、後生だ。気付いていないのか。君は脅されているぞ。二人が囁いている。レイヴァは怪しい。二人は君を逮捕しようとしている」。

「紙と鉛筆を持っているか」と將軍は繰り返した。公爵はそれを出した。数行書いてペ

スカーラは言った、「私の手は震える。シャルル、君が書いてくれ」。

「フェルナンド、君はめくらか。モンカダが興奮している様が見えないのか」。

「彼は私を掴まえられない」と将軍は言って、抑えた声で口述筆記させた。「皇帝陛下へ。崇高なる御領主、ミラノは陛下のものです。ペスカーラは臨終に至るまで陛下に忠誠を尽くしました。次の彼の三つの願いを叶えて報いてください。...」。

「頼むぞ、フェルナンド。彼は君を目がけている。しっかりしろ、我々は戦うぞ、...番人を呼ぶぞ、...」。ブルボンが飛び起きようとした。しかしペスカーラは彼をしっかりと抑えた。「書くのだ。彼は私を掴まえられない、と言ったろう。君はどこまで書いたか。三つの願いか。陛下、スフォルツァをお守りください。陛下、モローネを許してください。陛下、私の指揮権を元帥に譲ってください。...」

「彼は君の数歩先に立っている、剣を抜け、君の剣はどこだ」。

「私はもはや血を流さない、...」。ペスカーラは署名した。そして鉛筆が手から滑り落ちた。弱い叫び声を上げて、目の光を失いながら、彼は友の腕の中に沈んだ。

今や将軍のすぐ側まで来ていたモンカダは狼狽して立ち止まった。「将軍はどうしたのだ」と彼は尋ねた。彼は眺めていて、そして言った、「身罷ったのか」。

「亡くなった」と公爵は泣いた。

「心臓発作だな。戦役で亡くなったのだ」とモンカダは言って、床に落ちていた紙片を拾い上げた。彼は読んだ。そして三番目の願いのところに来ると、彼は思案して立っていた。それから彼は表情を変えずに、紙片を公爵に渡して、こう言った、「彼の遺言を尊重することにしよう。殿下に指揮権はある。殿下が命令されよ」。

ブルボンは故郷喪失者として、不名誉の者として、カトリック王のフェルナンドの息子にとって、危険のない者に思えた。そしてブルボンは、ペスカーラ亡き後、レイヴァにとっても憎しみが減じていた。というのは、偉大な将軍の最期をめぐって、レイヴァは元帥を羨望していたからである。

シャルルは彼らを去らせて、ペスカーラを金欄の上に寝かせた。宮殿は全く静かになった。門の番人達でさえこっそり歩いた。将軍はこの時間、習慣通りに昼寝を取っていると思っていたのである。公爵も愛しい頭を膝に抱いて、白昼夢に陥っていた。彼は死者の悲劇的運命、それに自らの名声と恥辱にあざなわれた運命を忘れていた。彼はただ唯一の友の喪失による鈍い痛みだけを感じていた。

声が広間の入り口前で響いた。「駄目です、令夫人。彼は休んでいます」とデル・グアストは禁じた。ヴィットーリアが良く通る声で叫んだ、「退きなさい、悪人。夫の許に行きたいのです」。ブルボンは近づく足音を耳にしたが、彼は頭を向けることさえしなかった。彼は口に指を当てて、囁いた。「こっそりと、令夫人。将軍は微睡んでいます」。

ヴィットーリアは夫の許に近寄った。ペスカーラは武器も持たず、武装もしていず、沈んだ王座天蓋の金欄を床にして横たわっていた。彼の面影の強力な意志は消えて、髪が彼の額にかかっていた。それで彼は若い、痩せた、収穫で疲れて、わら束の上に眠っている刈り手に似ていた。

アンジェラ・ボルジア

第一章

フェラーラ公の世嗣[Alfonso von Este1476-1534]の新婦が、教皇の娘そしてルクレツィア夫人[Lucrezia Borgia1480-1519]と呼ばれていたが、夫のアルフォンソ・デステ殿によって、華々しく自分の居城に迎えられたとき、夫が輝かしい行列を率いて行く中、その行列の中央、雪のように白い婦人用馬に乗って、その大学の教授達が新婦のために頭上に掲げている深紅の天蓋の下、進んでいた[1502年2月2日]。

威厳のある男達は、厳かにそれぞれ四名ずつその天蓋の片側を歩いていて、その隣には別の八名[四名ずつ]が並んでいて、金鍍金の棒の許の四名と交代しながら、自分達もその奉仕と名誉とに加わっていた。時折その何名かが、風になびく黄金の髪の毛、華奢な色合いの明るい新婦に含蓄のある視線を向けていた。博物学の教授は、彼女の明るい目の色合いを調査、思量して、それは特定し難いと見なしていた。一方倫理学の教授は、揺るぎない皺の老人で、このような過去の、不気味な、蛇どもの充満した背景にありながら、かくも陽気で能天気な生き物は人間として考えられるであろうか、それともむしろルクレツィア夫人は未知の法則に従っている魔神的な半陰陽ではないかと自問していた[彼女は兄のチェーザレ・ボルジア1475-1507、他のもう一人の兄弟、それに彼女の父親、教皇アレクサンデル六世、在位1452-1503との近親相姦が噂されていた]。三番目の教授、数学者にして天文学者は、この領主夫人を普通の妻と見なしていた。ただ放恣な諸状況と珍しい星の位置の影響を受けて、軌道から外れていたもので、星々が移り、新しい環境になれば、通常の女らしい軌跡になるであろうと思っていた。

四番目の教授は、縮れ毛と大胆な面影の青年で、その炎の視線で上に漂う形姿の全体をうなじからくるぶしまで食い入るように見つめていた。それはヘルクレス・ストロツィー[Ercole Strozzi1473-1508]で、法学の教授、その若さにもかかわらず、同時にフェラーラの最上位の裁判官であった。彼女が領主夫人でなかったならば、彼はフィレンツェの共和主義者として、彼女を自分の法廷に引っ張り出していたことであろう。しかしかくも恥辱的な行動や受難の後、法や風紀を越えてのまさに輝かしいこの無法の勝利に彼は賛嘆驚嘆に掠われていた。

こうした様々な思惑に煩わされず、しかしそれを容易に察しながら、この凱旋の若い女性性は、明澄賢明であったので、この祭典行列に、微笑して明かりと幸せをもたらしていた。しかし彼女もこの愛らしい仮面の下に、真面目な考察を忍ばせていた。というのは彼女は、自分をフェラーラへ導いていて、そして自分と自分のおぞましい過去との橋を破壊するこの時の決定力を考えていたからである。この過去はまだ彼女の背後から脅かし、復讐の女神の頭のように揺さぶりをかけるであろう。しかし彼女自身が慄然として振り向かず、過去を見ないならば、彼女に手を伸ばすことはない。このような力を彼女は自分に信頼していた。

幸福な植物で、罪障の温室育ち、ヴァチカンの恥知らずの柱の中の繊細な人影で、最初の夫[Giovanni Sforza von Pesaro]を偽証[夫とは性交渉がないと述べた]で振り落とし、二番目の夫[ナポリのアルフォンソ二世の息子アルフォンソ1481-1500]を自分の胸から、恐ろしい、もっと

愛する兄の剣の中へ追いやり、このルクレツィアは、その間風習に従って機械的贖罪のために隠棲した修道院の回廊の中で、単純極まる倫理的概念を、異国語の発音のように苦勞して学習していた。というのは、それらの概念は自分の魂には馴染みのないものであったからである。かつて一人の贖罪を説教する僧侶が、ちなみにこの僧侶を父親はその後罰としてテヴェル川に投げ込ませたのであるが、突然彼女の頬に赤みを帯びさせたり、全身に戦慄を走らせたりするのが関の山であったのである。彼女の信じがたい父親譲りの若返りの才能で、彼女は毎朝新たな女として寝床から起きた。完全な忘却の沐浴の後のようであった。そのようにして彼女は、正当な魂なら最も難儀な、贖罪で償うには不可能と思えること、自己破壊へと導かれるであろうことを、易々と乗り越えていた。前代未聞の行為の後、霊界の迫害する声や足音を背後に聞いても、彼女は両耳を閉ざして、霊達よりも、その若い足で一足先に飛んでいた。

ただ彼女の分別に関しては、これは大きくて、ローマの出来事を、他の全世界の、つまり生きた現世界と過去の世界の諸概念と比較することによって、あるいは何らかの耳にした男性的な判断を通じて、あるいは彼女を目にした際の罪のない男の驚きを知ることによって、彼女は納得して行った。 — 彼女の分別のみが、次第に彼女を、自己の実存の無自覚な劫罰から、しかし格別に漸次徹底的に抗い難く導いて行き、新たな実存を始め、ローマを邪悪な夢のように忘れたいと彼女は憧れて、日々憧れは強まり、そう願っていた。

彼女の熱望を、その激しい欲求を彼女は隠していたが、彼女の三番目の夫が満たしてくれた。フェラーラ公の世嗣である。この平静に閉ざされた表情を見て、彼女は自分に向かって言った。今やかなった。この人となら私は救われる。きつこの人は私の過去を承知していよう。そしてこの点に関しては、私がいかに魅力的でも、一瞬も幻想を抱いていないだろう。私と指輪を交わすことは、私を取り巻く騒ぎ声を聞けば、そして市民の間での自分の名誉を考えれば、難しいことであろう。しかし自分の国の安寧のために、私を妻として迎え、そして両手を一杯にして聖なるペテロ[教皇]の宝を汲み出すと、 — どんな理由であれ、決心したからには、 — この夫は、現にそうであるように、私の過去を大胆に消してくれよう。そして私の過去を決して咎めないであろう、私が新たな罪に陥らないかぎり、...しかし、陥らないようこれには用心しよう。そして夫に私の才能を知って貰おう、夫は私の統治力を称賛することだろう。 — ルクレツィア夫人はすでに侯爵領を所有していたし、父親が不在の折は、自ら使徒の教会[教皇庁]を管理していた。 — 私の動じない精神力、私の公正さ、私の人当たりの良さ、...決して私は夫に、自分の妻の忠誠や従順さを疑わせるような隙やきっかけを作らないようにしよう。...そう行かないとき、例外的に、...喜ばしい眉毛の間に皺が寄った。 — 父が命ずる場合を除いて、でも父はローマにいるし、あるいは兄が呼ぶ場合を除いて、でも兄はスペインの牢獄にいる。[アルフォンソとの結婚後も、兄の呪縛力が見られたというのはマイヤーの創作]。

彼女は民衆に微笑みかけて、自分の従属性の恥辱を深く隠そうとした。この従属性によって彼女は父親と兄と一緒に結ばれて一つの地獄の妖怪となっていた。それから彼女は自分の全力を集中させて、この連結から一気に抜け出した。

この瞬間、行列はある砦の前で止まった。その壁の贅沢な頂部から一人の綱渡りが下りて来た。彼女はこの曲芸を見て、自分に言った、「滑り落ちてはいけないよ。私も用心しよう」。

下の方へ綱から飛び下りたのはアモールであった。アモールは彼女の前で膝を折り、彼女にミルテの花輪を忠誠の言葉と共に差し出した。「貞淑なルクレツィアに」。人々の歓声の中、彼女は花輪を被って、この座興を一心に楽しんだ。

この時丸い塔の胸壁から稲妻が走って、轟音と共に煙に包まれた。アルフォンソ殿は大砲の情熱的愛好家で、一 すべてカノン砲、一 時間、時期を選ばず砲撃音を響かせて飽きなかった。しかしルクレツィア夫人の繊細な白馬の繊細な耳はこの強烈な音で魂消てしまった。白馬は後ろ足で棒立ちになり、領主夫人は穏やかに鞍から教授達の腕の中へ滑り落ちた。一方彼女のすぐ背後では、カールした髪の輝く目の立派な少女は、自分の仰天した黒馬を臆せず制御し、静めていた。

彼女の側では、瘦せた騎士が武具を着けた腿で自分の馬の脇腹を締めた。この嘲笑的仮面の男は、フェランテ殿[1477-1540]と言い、ローマでの結婚式ミサでは兄アルフォンソ殿の代理を務めたのであるが、フェラーラの人々は短く、人間嫌いと呼んでいた。彼は今日旅の同行者の女性に、フェラーラ、及び、彼もその一員である領主家を彼なりに紹介し、いずれにせよ嫌いになるよう仕向けることを自分の使命にしていた。

安定した乗馬の女性は、アンジェラ・ボルジアで、領主夫人の近い親戚の女性で、彼女の侍女であり、フェラーラまでお供して来て、この魅惑的女性の影で慎ましく世間の舞台上に上がったのであった。[アンジェラの父ジョフレは、アレクサンドル6世の妹ジョヴァンナとグリエルモ・ランソルの息子でした(機械翻訳)。1500年アンジェラは婚約し、また解消している]。

そしてこの劇場は今日尋常でない豪華さで展開していた。輝かしい天、眩い衣装、公然たる歓声、この地上で恵まれた者達、幸せな者達の祝典の交易、陶然たる音楽、誇り高い馬、魅力的な女性達、惚れた若者達、追従的忠誠、動悸する脈、着飾って微笑して鏡を覗き込んでいる世間、すべてのこうした充実した陽気さが彼女の前に広がっていて、そして彼女の側の嘲笑する悪魔によって水を浴びせられていた。

「いいか、一 若い姫君」と今や彼は嘲った、「いかにも優美にルクレツィア夫人は落ちて、徳操氏達や学問氏達によって」、彼は教授達を示した、「いかにもまた厳かに馬に持ち上げられた。私も軽業師と一緒に、彼女の貞淑を称えよう。ただ彼女は家庭では孤立していて、父上と兄上の強制下にあった。だから彼女はアルフォンソの求婚に応じた。ここで」と彼は間近の塔やフェラーラの丸屋根を示した、「もっと好ましい交際を求めたのだ。しかしルクレツィア夫人は間違っている。我々は教皇殿やチェーザレ閣下と比べる気は毛頭ないが、それでも我々はこの公爵の息子である。公爵自身、やはり我らの流儀で、ならず者の家系なのだ。勿論我々各人のその力量に応じて、その尺度に従っての話しで、素人の分際でのならず者なのだ。

私がここ公爵の行列にいながら、とても勝手に話すので、貴女は驚かれよう。しかし、お嬢、いいかな、これは公然と貶め、戯れ言を言う私の性格仮面だ。この私の仮面を私の父、公爵は大目に見て、許している。本心から公爵に楯突くことを私が控える限りだ、これは昔からこの家系の血に潜んでいる一種の悪癖だな。

勇敢な娘御よ、いいかな、貴女はとろくなくて、私のように、人間を恐れず、真実に目を留めている点、すぐに私は貴女が気に入った。一 必要とあらば、公然と仮面を着けることだ。我らの背後の他の者達ときたら」、と彼は軽蔑して、この宮廷の並んでいるカップル達を指さした、「奴等は何だ。化粧した賤民、悪漢、売女だ。偽善者とすれっから

し女だ。お天道様に照らされるに値しない。 — 勿論百頭のラバは例外だ。これらはルクレツィア夫人の婚礼の持参物を運んでいる。これらは実直で甲斐ある生き物だ。しかしこの婚礼持参物を教皇とその教皇領の爪の下から引き出すのに、私や兄の枢機卿は苦労したぞ。しかし私は言った、イエスカ、ノーか、どちらかしかない、と。私の父、公爵が私にそう言えと頼んだのだ。しかし教皇を、ヘルクレス[Ercole]、我らの父が花嫁の分と認めた寡婦領地で騙すときは、もっと簡単だったのだ」。フェランテ殿は忍び笑いをした。「つまり我々は教皇に我らの有名なフラヴィアーンの領地のことを喋ったのだ。それは我らのフェラーラの国庫が管理しているのだが、しかしコントラーリオ伯爵から裁判に訴えられて係争中なのだ[虚構]。コントラーリオ伯爵のことは承知していよう。イタリア中で最もタフな論駁者、権利主張者だ。この領地が、元来、ヘルクレス公爵、我らのしわい親父がこの結婚で最も喜んだ点だな。それですべてが法に基づいて整えられた。結婚ミサが済んだ後、いかさま私は喜んで待機している急使のために急報を認めたことか。持参金了承、教皇眩惑、ルクレツィア夫人結婚の後、不審皆無、だ。最後の意味はこうだ。夫人は今日ポケットに白い散薬を忍ばせていないということだ。実際、思うに、兄上アルフォンソは頭を今晚この黄金の髪と一緒に」、と彼は先の尖った顎髭で天蓋の下を指した、「同じ枕に並べても、危険はなかろう」。

このボルジア家の毒殺への当てこすりですら少女は涙を見せたが、しかし怒って長い睫毛から振り払った。「フェランテ殿、貴方の舌の方が暗殺します」と彼女は言った。

アンジェラ・ボルジアは有名なスペインの一族の傍系の出で、当時の多くの子供同様に、早期に悲劇的に両親を亡くした後、他の貴族の女子と共に教皇領のある尼僧院で躰を受けるといふか栄養を受けていた。教皇の庇護された縁戚女性というわけで、彼女は尼僧達の鼻屑を受け、遊び仲間の間ではリーダー役を任されていた。

当時、奇妙な、けたたましい矛盾で鞭打たれた世間が出現していて、いつもは現実に見られるすべてのことを屈託なく受け入れやり過ごすイタリア人娘にとってさえ、本当に不安に思われ、頭と心とを混乱させるものであった。若いアンジェラに絵図や説教として倫理的な美や完成が示されたが、それなのに、その現世の代弁者、この老人が、同時代のスルタンの自称同様、キリスト教界の礎たる人が、穏やかに言っても、とんでもない役立たずとされ、尼僧達はそのならず者の所業に泣き、彼女の遊び仲間の最も劣悪な女子達もこっそりとそのことをからかっていたのである。

しかしアンジェラは驚き、そして人生を一つの矛盾として嘲ることをしなかった。

彼女は今や、自分の親戚、教皇のこと、また従姉妹ルクレツィアのことを思い、自らに重い贖罪と鞭打ちを課すことを始めた。ルクレツィアについては尼僧院で同様に秘密の嫌悪の横目と共に話されていた。しかし分別ある尼僧達は彼女のこうした鞭打ちを引き留めるようになった。彼女がどれほど励んでも、このように法外な罪を前にしては、全体不十分で甲斐もなかろうと説明された。

その代わり、アンジェラの中で、全体的低劣さに抗すべく、絶望的防衛の必要が芽生えて来た。つまり頬に華奢な和毛を生やして、目に炎を燃やしながらの、一種の騎士的勇敢さである。女性の聖人達の耐える手本ではなく、当時の詩文に出現する甲冑を着けた乙女達[アリオスト『狂えるオルランド』1516]、かの非の打ち所のない王女達の大胆な例に従うもので、彼女達は自分達女性の弱さを恥じて、行動しつつ防御する術を心得ていて、同時に

優美さを失っていないのである。

かくてアンジェラは高貴な性情故に抵抗力のある自覚した娘に育った。これはこの世紀が称賛の意味で女丈夫[Virago]と呼んだものである。

さて、ある夏の日のこと、この尼僧院を支えているアペニン山脈の岩の麓を囲む檜の森の薄暗がりの中に、白い婦人用馬に乗って、明るい森の妖精がそのお供を連れて、あるいはひょっとしたら女神ディアナとその狩の連れかもしれない、いやそれどころか、ルクレツィア令夫人閣下が侍女達と一緒に、上がって来て、門を叩くということがあった。

実際ルクレツィアであった。彼女は尼僧院長の接待を受け、手を接吻され、祝福された。それから彼女は尼僧達やその見習達を紹介され、各人にその位階や身分に応じて相応しい言葉を優しく、心地良い声でかけてやり、その声は彼女が話し終わった後も、長く余韻を残していた。最後に彼女はアンジェラを脇に呼んで、手に手を取って、彼女と一緒に庭園の月桂樹の道を行き来して、彼女に喜ばしげに告げた。自分はデステ公の世嗣の婚約者となっており、自分はアンジェラを自分の親戚の女、それに自分の女官としてフェラーラと一緒に連れて行きたい、と。「従姉妹さん」と彼女は微笑した、「私はあなたを幸せにするつもり。あなたは私の気に入った。私があなただを嫁入りさせるまで、私の許にいなさい」。

同じように従兄弟として好意的にヴァチカンで彼女にルクレツィアの恐ろしい兄が挨拶した。彼女は秘かに慄いて足を踏み入れたのであるが、この兄は上品な身なりの若者で、緑色に光る眼差しであった。屈託なくルクレツィアといちゃつきながら、彼は言った、「私はそなたら二人と一緒にフェラーラへは行けない。仕事の都合だ。しかしジュリオ殿[1478-1561作者はおよそ十年後の生まれとしている]にそなたらを勧めておこう。向こうで会うはずだ。アルフォンソ殿の弟[異母弟]だ。謙虚な、しかしとても才能ある若者だが、ただまだ官能に溺れがちだな。しかし紹介に値しよう。彼が一人の高貴な女性に夢中になるよう、彼に恵んでやりたい」。

そして今やアンジェラはルクレツィア令夫人の後を騎乗していて、カノン砲が繰り返され、門が近いことを知らせていた。

フェランテ殿は、町へ入る前に、若い同伴女性の中での兄弟達に関する見解を、完全に転覆させたいのであれば、急がなければならないかった。彼は敢然と仕事にかかった。「不思議に思えるのは」と彼は言った、「公の声とかあるいは男どもの想像力では何か異常なこと、天翔ることが囁かれるルクレツィア夫人が、私の兄、その将来の夫、死すべきすべての人間の中で最もありふれた男、朝から晩まで食事でも暖炉でも大砲を鑄造している男と家庭を築けるかどうかだ。煤で汚れた鍛冶の神ウルカヌスとヴィーナスだ。しかし古代と同様上手く行くかもしれない。彼女は彼の素晴らしいファイアンス焼きの絵図を賛嘆し、それで彼を幸せにできよう。しかし用心して欲しいぞ」と彼は続けて、彼の嘲る声は脅すようになった。「用心して欲しいぞ。アルフォンソ殿は我らの中で最も復讐心が強い。ただ彼はその時を窺っており、その復讐は法律なのだ。いや、そうではない、それでは弟の枢機卿[Ippolit1479-1520]に不当だ。彼の復讐が最も残酷だ。彼は頭がもっと切れるからだし、我々皆に不可欠の男に相応しく、法務官を恐れる必要がないのだ。彼は我らの家の外交官であり、我らの政治の糸は皆彼のしなやかな指の間を通っており、彼は我らの最悪

の秘密を知っている。この禿鷹を恐れることだ、若い姫君」。

まさにこのイッポーリト枢機卿、政治家、深紅の衣の瘦せた人物、同様に婚礼に関連してローマに来ていて、今もまだローマに残って、教皇と領地の持参分の譲渡の件で打ち合わせていた。彼は慇懃無礼であったが、アンジェラと大いに話し合いをしていて、彼女を勇気付けて、フェラーラに来るとその姿で華やかさが増すと述べていた。

ある不安な思いにアンジェラは襲われた。太陽、埃、騒音、フェランテ殿の有毒なお喋り、自分の眼前に浮かんで来る枢機卿の瘦せた姿、見棄てられた寄る辺ない思いでこの力強い少女は失神しそうになった。 — 彼女は小さな叫び声を漏らした。

すると彼女の前に漂っているルクレツィア夫人が素早く彼女の方へ振り向いた。その青い目から青白い閃光が走って、彼女は叫んだ。「アンジェラ、何か不安な思いにさせられたの。いい、フェランテ殿、よく覚えておきなさい。アンジェラに近寄りすぎる者は、私に近寄り過ぎる者です。ルクレツィア・ボルジアを敵にしたいくないでしょう」。

フェランテは毛頭これを望まなかった。彼は愛想良く微笑した、「令夫人閣下、勘弁してください。アンジェラ嬢に誠心誠意話しかけて、我らの家を気に入って貰えるよう懸命なのです」。

「若い姫君、まだ素敵な話しをしましょうか」と彼は、領主夫人がまた向き直った後、続けた、「私の弟ジュリオ殿の比類のない、犯罪者の目について。彼のことをご存じですか」と彼女の顔にある動きを認めながら、彼は尋ねた。「多分評判だけでしょう。大した噂ですから。しかしちょっとしたら、彼本人が貴女らの前に現れましょう。貴女らが彼の牢を開けましたら、ルクレツィア夫人と貴女とが」。

「彼の牢を開けるのですか」と彼女はびっくりして尋ねた。

「勿論です。すべての犯罪者達の牢を開けます」とフェランテ殿は陽気に説明した。「ルクレツィア夫人はその登場で犯罪者達をお咎めなしになさるでしょう。このようなことは、フェラーラでは君主の結婚のたびにいつもなされる習慣で、全く寓意はありません。本当の犯罪者どもです。彼らは果たして本当に放免されて、それで我々は祭典の間、我らの装身具をしっかりと握って、夜間、松明や武装者なしで外出しないよう用心しなければならなくなるのです」。

「ジュリオ殿は何の犯罪を犯したのです」。

「いや、何でもなし。彼はその目で、一人の女を魅了し、その夫の胸を刀で刺したのです」。

「ひどい」。

「彼は羨のない少年だ。人生のブドウ園に侵入して、きちんと一つの房を摘み取らずに、両手で掴める限りのものを、ブドウ棚から奪って、貪欲に甘い果漿を押し潰し、赤い果汁で胸や顔を汚したのだ」。

そしてこの破廉恥な青年と彼女をチェーザレ殿の考えは結び合わせていたのである。

再び大砲が轟いた。シンバルとティンパニーが鳴り響いて、門の中を進んで行った。教授達は歩調を速めて、やがてルクレツィアの凱旋行列は宮殿に着いた。その重々しい建築物の下に牢があった。

老公爵が近寄って来て、領主夫人を馬から下ろし、新婚の二人とアンジェラと一緒に階段を下りて、そこに看守長が立っていて、ルクレツィア夫人にビロードのクッションの上

の巨大な錆びた鍵を渡した。彼女は鍵を受け取り、ほとんど鍵を使わないうちに、ドアは蝶番で回転し、魔法のように広く開け放たれた。すると囚人の群れが飛び出て来て、ルクレツィアの足許に倒れ、彼女の両手に接吻した。彼らは皆その前に身を清めていて、その情熱的感謝の身振りには品位も欠けていなかった。しかし彼らの中には、憐れむに値する惨めな姿もあれば、恐ろしい犯罪者の表情も見られた。

最後に、牢がその反吐の出る中身を空にした後、更に最も高貴な育ちの青年が腕を組んで暗い階段を上がって来た。日中の光の中に出て来ながら、彼は太陽に挨拶するかのようになり、両腕を上げた。それから腕で目を守って、あたかも鋭い陽光で、あるいは上に立っている両女性の美しさで眩しいかのようであった。ルクレツィア夫人の前で膝を折って、彼は夫人にこう感謝の言葉を述べた、「令夫人閣下、また義理の姉上、どの女性の心にも宿っている貴女の慈悲心、並びに領主としての恵み深さに御礼申し上げます。お蔭で縛めが解かれました」。

こうした言葉や、更にもっと美しい言葉で彼は新婚の領主夫人に忠誠を捧げ、それからその目をより若いボルジアの方へ向けた。その目は本当に深い青さを湛えていて、黒っぽい眉毛の高貴な面影の許、稀な魔力を伴っていた。そして彼は率直に、ほとんどまだ少女の女性の厳格な挙措に驚いていた。

「いや、救い主の領主夫人」と彼は続けた、「貴女のお連れは誰です。恩寵の女神で穏和にされた正義の女神ですか」。

アンジェラはすでに旅とフェランテ殿の邪悪さとで興奮していた。今は罪人の女性による罪人の恩赦というペテンの芝居と、それに言葉遣いの安直さに怒っていた。この不思議な泉の目の中を見つめるにつれ、彼女は怒りと嘆きで震撼された。彼女は自分の内奥の強い性情に圧倒され、すべてのヴェールが剥ぎ取られて、彼女の本性が剥き出しに現れて来た。彼女の実直な目が彼の目に向けられ、そして彼女の表情豊かな唇に何か不分明なものが動いた。

「姫君は何を言いたいのです」とジューリオ殿は尋ねた。

すると一気に破裂した。アンジェラは何百人もの証人の前で明瞭に語った。そして彼女の声が広場に響いた。「残念です、まことに残念です、ジューリオ殿。神の裁きを恐れてください」。 — 大きな沈黙が生じた。

そして今一度少女の声がジューリオ殿について響いた。

「貴方が残念です」。 —

奇妙なことだった。フェラーラの人々は君主の子息の非難すべき危険な営みについてのアンジェラの感情と判決、その墮落についての遺憾な思いと、苦痛の思いを完全に共有していた。人々は彼を美貌と優美さ故に愛していたのである。

周囲である呟き声と反響が生じた。「残念だ。彼女の言う通りだ。その通り。彼は残念だ」。

しかしルクレツィア夫人はアンジェラの手を握った。姉が、何か不適切なことを仕出かした妹の手を握るようであった。

「どうして我を忘れてしまったの」と彼女は言って、この動揺した女性を引き連れて行った。この女性は恥ずかしさと興奮で嗚咽し痙攣を始めていた。この様を見て、これまで悠然としていたジューリオ殿も途方に暮れていた。

第二章

フェラーラ平原のベルリグアルドの広大な公園が境の壁なしに終わるところで、常緑の檜の木影の中、最後の見棄てられたベンチに二人座っていた。彼らは挙措や表情から判断すると互いに別れるところであった。

若い、ヴェネツィア風の黒い服を着た男は、手を誓うように心臓の箇所にはいたり、静かに内心を見つめるルクレツィアの姿を、永久に心に刻み付けるかのように、眺めたりしていた。

「ベンボ[Pietro Bembo 1470-1547]、それではお別れですね」と彼女は言った、「私は貴方を止めません。私が貴方に言わずにお願いすることを、そうして叶えてくださるのだから。貴方は去られる。貴方が私を忘れるまで、どれほどかかることでしょう」。

「ルクレツィア夫人」とこのヴェネツィア人は感動して答えた、「どれほど長く貴女のことを考え、愛することになるか、まことにそれは私には分からない。いつが命日になるか分からないのだから」。

彼は声にとてもしげな優しさを込めてそう話したので、公爵夫人は感動して答えた、「私の思い出をあなたの中に保つために、私のものを一緒に持って行ってください、友の方」。そして彼女は瘦せた、黒っぽい少女の人影に合図した。この少女は森の縁をあちこち歩いていたが、それは多分領主夫人が取り乱さないよう見守るためか、あるいは好ましくない目撃者の接近を伝えるためであった。

「アンジェラ、私の横に腰掛けなさい」と彼女は言った、「そして私の頭の巻き毛を切って」。彼女は自分のベルトのバッグを開けて、黄金の柄の小さな鋭いナイフを取り出し、アンジェラに差し出した。アンジェラは命令通りにして、豊かな髪から溢れる巻き毛を切った。

領主夫人はこの螺旋の輪を入れる包みを探したが、同じベルトのバッグには黄金と圧縮革で製本された七つの懺悔賛美歌の版しか見つからなかった。これは当時宮廷で愛好された簡易文庫であった。気兼ねせず彼女はそれに自分の巻き毛を入れて、ベンボにこの愛の担保を渡した。ベンボはそれを胸に抱き、それから口に当てて、渋い皮の中の甘美な芯に情感一杯の表情で感謝した。その表情には全く微かな、皮肉な微笑が潜んでいた。

「私にお便りをください」と彼女はそれから言った、「確かな便を通じて、私に危険が迫っているとか、貴方の助言を私が必要としていると予感されるときには、いつでもお願いします。遠くにいても、私の側にいてください。フェラーラで、私の新しい幸福の屋敷を築くことに貴方が手伝ってくださった後でも、私のことは忘れないでいてくださると思っています」。

「貴女の賢明な手が築かれるのを見守ることは、喜びでした。貴女の仕事は難点がなく、ほとんど揺るがないものです。私は今懷疑で胸を痛ませながら自問しています。貴女の安全のためには、私がフェラーラを離れ、貴女を目にしないという犠牲が必要なのだろうか。貴女がいると、黄金の大気のようにすべての命が明るく輝き、神々しくなるのに、と」。

「私がそうなのは、父親譲り」と彼女は無邪気に言った。

繊細なヴェネツィア人は眉毛を顰めた。

「貴女の血の絆、貴女の家デーモン、これは貴女の危うさです」と彼は溜め息を吐いた、「だから私は貴女から離れたくないのです。しかし私は去るのがもっと良いでしょう。貴女の安全は、アルフォンソ殿が貴女に寄せる信頼に基づいています。私どもの精神的愛については、彼は客観的人間ですから、ほとんど邪推しないでしょう。しかし離れるのがより良い。...愛する者は、自らを犠牲にします」。

「その方がより良い」と小声で彼女は証した。

「別れに当たって、愛しい夫人、率直な、庇護の言葉をお許してください」と彼は頼んだ、「諸事情は貴女の眼前に貴女の鋭い分別の明かりを受けています。しかしこの明るい日中の範囲は影の圏と接する所まででして、その影の圏は父上と兄上の貴女の愛の世界です」。

ここでルクレツィアの顔色が変わった。彼女の青白い目はメドゥーサの視線[見る者を石に変える]に凝固した。

「令夫人、怒らないでください」とベンボは叫んだ、「貴女は無垢の子供としてこの難儀な紛糾に巻き込まれたと承知しています。貴女の安寧のために話さざるを得ません。思い出してください。貴女の参内から、数年経ちました。貴女の夫は統治の公爵となり、貴女はフェラーラに根を下ろし、民衆の愛を得ました。このとき貴女の父親が亡くなりました[1503]。しかし貴女は果てしなく涙を流され、法外な喪に服され、とうとう私が参りまして、貴女の耳に囁いたのです。貴女はその過度な流涕でアルフォンソ殿を侮辱して、殿が帳消しにしてくださった嫌な事柄を忘れて、と」。

ルクレツィアは注意深く彼に傾聴していて、彼女の分別は、自分の情熱的感情とは裏腹に、彼の言う通りと認めざるを得なかった。

「このように故教皇についての貴女の判断は — 眩惑されたものであっても、教皇が逝かれた今は、もはや貴女にとって厄災は生じません。しかし、貴女の恐ろしい兄上、チェーザレの場合は別です。兄上は存命で、まだその竜の力を持っています。彼は若者で、きっと今日、明日にもその縛めを断ち切って、再び冥府から蘇って、イタリア中を混乱させることでしょう。この黒い大岩は貴女の小舟を脅かしています。これで座礁しないよう願っています。チェーザレの再興は貴女の運命の時です。貴女は」、 — 彼は彼女に苦い薬を飲ませないでおくか、思案したが、しかし決然と愛を抱いて、続けた、「情けないことに、貴女はチェーザレ殿に呼ばれたら、それに従うことでしょう。貴女は父親同様に、悪魔に従うことでしょう。貴女の父親は臨終の床で行ったと伝えられています。汝が呼んでいる、私は行く、と」[父は悪魔に魂を売って、教皇選挙の票を買収したと思われていた]。

ルクレツィアは十字を切った。

「大切な領主夫人」、ベンボは彼女の足許に伏すような仕草をしたが、しかし押し留めた。丁度散策しているアンジェラが彼らの方を向いたからである。

「ルクレツィア、私は頼みます」と彼女の方に屈んで、彼は囁いた、「この危険な時がやって来て、自分で自分を抑えることができないと感じたら、公爵の前に身を投げて、自分は公爵の禁止を踏み越えそうだと告白なさることです。と申しますのは、チェーザレと企むことは死罪であると臣下達に禁じているであろうからです。チェーザレの出現はイタリアを地震のように揺るがすことでしょう。...しかし令夫人、私の依頼は無駄でしょう。貴女は手綱を失うであろうし、公爵の禁止を足蹴にするであろうと私には分かっています」。

「そうするかしら」とルクレツィアは、上の空で尋ねた。しかし彼女には自分がそうするであろうことは本当らしく思えた。彼女は自分の絆を承知していたからである。

「領主夫人」とヴェネツィア人は嗚咽した、「チェーザレが牢を破ったと私が知りましたら、私は真っ先にフェラーラへ飛んで来て、貴女が彼の腕に飛び込まないように、貴女にしがみつきます。ーしかし私が遅すぎたら、貴女がまた正気を取り戻し、思案するたびに、私の忠告を思い出してください。公爵の胸元で、公爵の処罰を逃れ、身を守りことです。兄上と連絡を取るために、道具として人間を使った場合には、この道具を躊躇わず犠牲にし、公爵の復讐に任せることです。ー公爵は貴女を愛しています、...」。

「公爵は私を愛していると思います」とルクレツィアはまた明るくなって言った。

「そのことは確信なさってください」とヴェネツィア人は請け合った。「最近公爵は食卓でチェーザレの名前を呼びました。ー何の気もなしにはありません、ーそしてその脱出についての薄暗い噂について話しました。その際、貴女を鋭く見守っていました。...貴女は平静でした。ただ杯を持つ貴女の手が震えていて、その杯から貴女は囁かれた。公爵は貴女を長いこと観察していました。しかし好意的で、何が貴女の性情にとって相応しく、どのような抵抗が貴女には可能であろうか、正しく吟味しているようでした。貴女が厄災に強引に拉致されなければ、公爵はきっと貴女を支え、救うことでしょう」。

再び完全に陽気になった公爵夫人は、今や不思議に軽快に語った、「心配して頂き、有り難いわ。でも、友の方、もう私のことは十分です。むしろ向こうのあの女性のために助言をください。ー」。彼女は散策しているアンジェラの方を見た、「彼女ははるかにもっと身近な危険に接しているように見えます。ご覧なさい」。

森から、猛鳥が叫んで一羽飛び上がり、平原の上に輪を描いた。同時に茂みの中で物音がして、瘦せた、深紅も衣に身を包んだ男がアンジェラの方に歩み寄り、しかし振り向いて公爵夫人の側のベンボを見つけて、夫人に挨拶した。

「猯下、ご覧の通り」と公爵夫人は屈託なく言った、「愛想の良いヴェネツィア人の訪問とのお別れなのです。離れがたい思いです」。

「ベンボ、ここから去るのですか」と枢機卿は気さくに言った、「それは残念だ、どちらへ行かれる」。

「ウルビーノです、猯下」。

「またこちらの方へ戻って来るのですか、貴方は我らの方に属していて、貴方を我々は欠かせない。こちらから送り出そうと思っている別な女性同様欠かせない」。

領主夫人は自分の横に立っている少女を自分のベンチに座らせて、彼女の手を自分の手で握った。あたかもアンジェラを所有しているかのようであった。

「我々はここでしっかりと編まれた彩り鮮やかな花輪を形作っています」と彼は続けた、「それで一本の花を引き抜くことは不当でしょうし、ましてや最も甘美な蕾みを投げ棄てられません」。

ルクレツィアは目を大きくして枢機卿を見上げ、ベンボがまだここに証人としている今、夙に暗闇に忍び込んで来ている厄災を明るみに出す時、厄災を照らし出して日中の明かりで破壊する時が来ているのではないかと思案した。

彼女は機敏な精神なので、長くは考えなかった。

「枢機卿殿」と彼女は言った、「私どもから直に去って行く別の女性をこの女性とお考

えなら、お知らせしましょう。私は彼女が去ることを願っている、と。彼女は結婚する年頃です。しかし彼女に相応しい夫はこちらにいません。一方コントラーリオ伯爵は、貴方もご存じの方ですが、彼女と結婚しようと願っていて、私がアンジェラの守護者として夫たる人に要求して差し支えない特性をすべて所有しています。これが私の意志です。しかしこの点に関する貴方の意見を伺いたく存じます」。

ベンボは謙虚に離れていようとした。しかしルクレツィアの視線で引き留められた。彼女は枢機卿の性質には不意打ちするものがあることを知っていて、この驚きを警戒していた。

枢機卿は領主夫人の言葉に挑戦的な響きを感じていないように見えた。ヴェネツィア人ベンボが女性達の側の法面に腰を下ろす間に、彼は悠然と一本の栗の木の暗がりの中、女性達に向かい合って快適な席を選んだ。その栗の幹は地面の近くで分岐していて、枝が茂って、芝を覆っていた。そして彼は片方の足を揺すって、逃げるトカゲを突きながら、平静な言葉で始めた。

「私のコントラーリオ伯爵についての判断を言えば、彼はボルジア家の女性には役立ちません。哀れな人間で、惨めな徳操と永遠の矛盾から合成されていて、独善的原理原則の一山で、大山鳴動してケチケチした算術鼠を一匹生み出しますが[Horaz: Ars poetica 139]、しかし一人の女性をその女性ために偉大に贅沢に愛することは、全く不可能です。私は主張します。この美人、この恋愛の求婚には、粗雑な算数例題が根底に見られます。この石盤にそれを書きましょう」。

彼は小さな石盤を取り出して、石筆で書き、同時に読み上げた。

「エツトレ・コントラーリオ伯爵は、情愛深いアンジェラ・ボルジア嬢に求婚している。フェラーラの国庫と、重要な、フェラーラの地にある領地を巡って父親以来裁判で係争中であるからで、この裁判の権限はフェラーラの裁判所にあり、彼は多分敗訴になるであろう。しかし高貴な影響力のある庇護を得れば別で、それは例えば我らの領主夫人の庇護であって、夫人が一度微笑してくだされば、惚れている最上位裁判官のヘルクレス・ストロツィーは名譽と魂を売り渡すであろう。この完璧な伯爵が、この無垢の女性に求婚すれば、我らの領主夫人とその奴隷のヘルクレスは買収されるであろう。なぜなら、この女性をルクレツィア夫人はフェラーラから遠ざけようと思っているからで、遠ざけるのは、つまりこの若い娘をイッポーリト枢機卿が極めて丁重にかつ猛烈に愛しているからである。一方この女性本人は、純然たる女性として、無知のまま希望もないのに、この世の最大の役立たず男に熱中しているのである。

この燃え上がる火の中に手を入れる決心は、内的闘争がなければ、凡庸に勇敢な伯爵はできないことであろう。しかし彼の所有欲がその臆病さに勝ることはあり得ることである。貴女は、別様に判断されますか、公爵夫人」。

ルクレツィアはこの破廉恥な告白と大胆な事実の暴露に驚いた。この暴露は彼女自身の、出来事と人物の評価から全くかけ離れているものではないが、彼女の望んでいることではないから、これを認めることはできない。

しかし彼女が答えないうちに、丁度アンジェラの震える手から滑り落ちた、軽い草の茎を組み合わせて彼女が作った輪の方へ屈んでいたイッポーリトがまた言葉を続けた。

「丁度この輪のように、アンジェラ・ボルジア、意図と意図とが連鎖していて、貴女を

取り持とうとしています。しかし私は貴女のことを知っていて、愛しているので、貴女はこの輪を引き千切ることでしょう。私がこの役立たずのものを千切るように。というのは」と彼は熱く囁いた、「アンジェラはデーモンが彼女を愛するならば、デーモンに引かれて地獄へ落ちる方を、一つの算術例題の総額となるように身を差し出すことよりも選ぶことでしょう。 — 私はこのように申し上げます。義理の姉上、貴方のご意見はいかがです」。

彼はルクレツィアの方を向いた。威嚇して悲しむ表情であった。

彼女ははっきり答えた、「私はアンジェラをコントラーリオ伯爵と結婚させます。彼は計算高い、 — これは認めます、 — 人生の要求に従ってそうです、しかし気高くないわけではない。伯爵はアンジェラを守ることでしょう。私が出来る以上に守るでしょう。でも、枢機卿、貴方はアンジェラをどうするつもりですか。 — 貴方の妻にはならないでしょう。貴方が深紅の法衣を着ている限り、そしてそれを一人の娘のために投げ棄てる気がない限り」。

「領主夫人、分かりませんよ」と彼は馬鹿にしながら答えた、「貴女の兄上は法衣を一公爵領と引き換えにしました[ヴァレンシアの大司教からフランスのヴァランス公爵となった]。私はアンジェラを羨望の一領地と見なします。それに彼女が貴女の寵児コントラーリオに好意を抱こうと、心配しておりません。アンジェラはそうしないでしょ。好意を抱こうと努めましょうが、そうは行かないでしょう。私から逃れるためであってすら、できないでしょう。...というのは彼女も心の中で私の言い分を認めていて、彼のことを凶星だと思っているからです。三文銭の顔は反吐が出ます。この有徳な伯爵は、従って、気になりません。別の拷問が私を苦しめており、日夜私と一緒に回っています。イクシオンの車輪のようです。 — 娘さん、聞き給え」。

アンジェラはびっくりした、しかし勇敢な目で、彼の鋭い眼差しに耐えていた。

「そなたが私の愛を拒むなら、私はあの他の男へのそなたの愛を禁ずる。彼の命にかけて、そなたの命にかけて、それを禁ずる。 — いかにもそなたは猛然と赤面している。...私はそなたが、そなたの心の中に隠している男を憎む。その男を引き出せ。...この男は高貴な神殿を汚す。...私には我慢ならん。...自分が誰か思い出すがいい。そしてコランバ嬢とかの、あるいは今日日の売女の名の者の腕の中で、そなたを罵り忘れてる者から軽蔑して身を転ずるがいい。 — 聞き入れるのだ、さもないと不幸が起きるぞ」。

この激した場面の最中、一人の女性が、見棄てられた影の広場に入って来て、一同に公園に戻るよう頼んだ。集合した宮廷の者達が公爵夫人を待っています、そして公爵は、そのキャビネットで、ヴェネツィア人の殿方とのお別れを、そしてその後猓下とのお話しを願っています。公爵は最上位裁判官を陛下の許へ呼びにならされており、その後ジュリオ殿をお呼びすることになっています、と。

第三章

素晴らしい木々の影の中、ささやかな一行が、女達を先頭に、枢機卿はベンボと当たり障りのないことを喋りながら、公園の中心の方へ散策していた。そこから彼らは一直線となっている宮殿に向かう糸杉の並木道に足を踏み入れた。この宮殿は、適度に均整の取れた簡素な建物で、蒸し暑い鉛のような七月[史実では11月]の天を仰ぐ土台にそびえ立ってい

た。丁度新しく固定された側面のパビリオンが増築されたばかりで、木製の足場はその壁からまだ外されていなかった。

明るく小さな宮殿正面は、幅広の二重[左右]階段が設置されていて、公園の方へ進んで行く宮廷人達は玄関前アプローチの上から、精力的公爵を目にしていた。公爵は、その閑雅な宮廷人達を待たせながら、新建築を視察していて、作業員達に引き留められ、一緒に熱心に仕事の論評をしていた。

中央並木道の影の中、ゆっくりと公爵夫人は散策した。夫人は今や枢機卿の腕に支えられて、道の左右に集まっている宮廷人達に挨拶し、彼らを自分の後に従わせていた。

兩人の前に、恰幅の良い中背の男が歩み寄って来た。彼は好意的に頷きかける公爵夫人よりも、更に一層枢機卿に取り入っていた。彼の方に格別平伏しているように見えた。

「貴方は、ルドヴィーコ殿[アリオスト1474-1533]、ミューズ達の光輝圏からやって来たように見えますよ。貴方の顔が明るく輝いています」と公爵夫人は言った。

「今日はむしろ東洋の友との洒落た交際のせいで、私は陽気になっています」とアリオストは答えた、「それにいつものように貴女のお姿を拝して、幸せになっています」。

彼は自分の同伴者を公爵夫人に紹介した。同伴者は上品な育ちの男で、両腕をオリエント風に胸の上で組んでいたが、真面目にお辞儀した。

このペルシア人の絨毯商、ベン・エミーンがフェラーラでは今日の話題の的であった。ヴェネツィアに一時的に定住して、そこのメルチェリア通りで極上の商品を並べていたが、フェラーラへ飛んできて、贅沢な宮廷人にその高価な織物を売りつけていた。しかし実は、少なからず、アリオストとの知己を得る目的があって、その英雄の歌から、一 その最初の歌が最近印刷されたばかりで、一 彼はより高度のイタリア語を習得していて、そもそも多様な享受を味わっていたのである。というのはベン・エミーンは通であって、その偉大なペルシアの詩人達を諳んじており、特に詩文の文飾での倫理を愛好していたからである。

「令夫人、余所の国民の教養ある男と交際し」、とアリオストは始めた、「慣習風紀の違いを知って、微笑し、こんなにも違いがあるのに、絶えず歴然と明らかになる好ましい一般的人間的風貌に出会って喜びとするのは、全く独自の楽しみでございます。しかしいづれにせよ、この違いは大きく奇妙なものです。それで、例えば」と彼は冗談を言った、「男が女を称賛するとき、贈り物をするのは、どこでも普通に見られる特徴に思えます。しかしこのペルシア人は違います。ベン・エミーンは別様に考えます。彼は確かに我らのフェラーラ女性達の最大の崇拝者で、その細い、彼の品を吟味する指を、注意深い輝く目の迅速な動きで追いかけますが、しかし彼に素晴らしい微笑で迫る女性に、「太陽の貴女、どうぞ持っていてください」とか、「星の貴女、どうぞ取ってください」とか囁きかけると思いませんか。そうはしません。むしろ途方もない値段を言って、それでどんなに甘美な口も無然と歪んでしまうのです。かくもベン・エミーンは残酷です」。

この巫山戯は宮廷人達を陽気にさせた。しかしベン・エミーンは黒い子羊革の帽子の下、賢い目で見つめていたが、公爵夫人に品位正しく向かって言った。

「イタリアの奇跡たる夫人、女性達の中で最も完全な公爵夫人」と彼は上手なイタリア語で語った、「御身を私は女士裁判官に選びます。私はフェラーラに着いたとき、御身の足許に身を投げ、私の最も上等の絨毯を御身の前に広げ、御身にこれを御身の所有物とし

て足を踏み入れ給えと懇願しました。私がこの恩を忘れて、御身の次、隣の別の女性に、順位のより低い女性に贈ろうとしたら、これは貴女の比類のなさを誤認し、侮辱することになりましょうし、本来反逆罪と言えるものでありましょう。これは一人の領主夫人に対しては正しい忠誠であっても、より身分の低い生まれの女性に対してはその徳操に悪評をもたらしかねないことであるということは、言うまでもありません。しかしこのようなことは、ベン・エミーンの手許ではあってはならないことでしょう」。

宮廷人達はペルシア人のこの演説を言祝いで、心の中で、この抜け目ない商人、ベン・エミーンはドジを踏むまいと認めていた。

盛夏の日の蒸し暑さが募り、密な糸杉の生垣にこもったので、公爵夫人はアリオストとペルシア人と一緒に公園の奥の大きな植込みに入って行った。そこでは高い榆の木々の輪がその樹冠を揺らして、一つの大気のアーチを揃って形成していた。ここの中心の風化した大理石の上にブロンズ製のキューピッドが立っていたが、羽根が千切れ、矢が散らばっていて、束縛された状態であった。この像はこの時代の奇妙に自由な言葉で、結婚したルクレツィアにとって情熱の時代が過ぎ去ったことを語っていた。そしてここの円状の石造りベンチに座って、アルフォンソ公爵夫人は夏、宮廷を開く習慣であった。

その間、人気のない中央並木道では一人の青年が、もう一人の茂みに逃れようとしていた青年を掴まえていた。両人は力と優美さの漲る若々しい姿で、完全に発育し、しなやかな肢体を有し、二人の生命の王侯であった。

「ジュリオ、ようやく君を掴まえた」と一方が叫んで、その捕らえられた男のうなじに腕を置いた。「我々両人が公爵の手許に呼ばれており、今この短い人生の道を一緒に歩いているわけだ」。彼は最後に宮殿の見える緑の通路を示した。

「ヘルクレス、この道は長い」とジュリオ殿は溜め息を吐いた。「君には雄弁の仕事が保証されているが、私は自分の運命に苦しんでいる」。

「我が友よ」とストロツィーは始めた、「私は説教するつもりはない。一つには、一般にこのような説教御託の自惚れは、特に君に対しては甲斐がないと承知納得しているからであり、一つには公爵に呼ばれているからだ。これは、案ずるに、君がプラテッロ[虚構]でなした最近の不祥事について公爵と協議するためであろう。これについては、警察長官ツォッポから公爵に詳細な報告が入っている。暴動、冒瀆、誘拐、暴行、何人かの死人だ」。

「いや、そうなる予定ではなかったのだ。古風なバッカス祭のつもりだった。野性的魅力のコランバをアリアドネ[迷宮脱出の糸玉をテーセウスに与えた]として見さえすれば良かったのだ。アリアドネの戴冠のつもりが、我が百姓どもの誤解によって、サビニ人女性の誘拐[ローマ建国のため未婚女性を略奪した]とかケンタウロス[半人半馬の怪物]の殺害、殺人に墮落してしまって、この責任をひよっとしたら取らされるのかな」。

「ジュリオ、もうそのことは一言も言うな。君の悪辣な軽薄さのために、最も誠実な生来の好意も汲み尽くされかねない。君は私にとって好ましい男だが、厄介な男だ。君が犯した破廉恥な行動がただのその半分に過ぎなくても、私は夙に反吐を催して君から顔を背けていたであろう。しかし全体となると、はるかに限度を越えており、私は君を、すべての人間的尺度を嘲笑う格別の人物と見なすことになる。それ故、私は決めた。君を新た

に捕縛させることはしない。公爵の許で、少なくとも一年間のフェラーラからの追放という事で相談しよう、と。このことを君に伝えておく。君はヴェネツィアでの兵役に戻った方がいい。この兵役から離れるべきではなかったのだ」。

「私にヴェネツィアに戻れと言うのか」とジューリオ殿は答えた、「長生きすれば、分かるだろう」。そして彼の若い額に閃くものがあった、言った。

「しかしお願いだから、人間の私を人間でない怪物にしないでくれ。私は倫理的怪物ではない。一君のルクレツィア夫人ですらない。彼女の色合いのない目に君は呪縛されていて、無闇に取り入ろうとしている。あの目が君の領域、専門を破壊して、君の正義の女神を倒して、その上に立っている。しかし彼女も、君が震えるデーモンではない」。

「私がこの無法の女性を愛さざるを得ないのは、運命だ」と裁判官は苦々しく微笑して言った。「しかし私が彼女を鼻屑して法を忘れるとか、神聖な正義を傷付けるに至るとか、それは考えられない」、そして彼は溜め息を吐いた。そして自分も、享楽癖の友に劣らず、ある有害なマムシの一噛みで、臨終に向かっていと痛々しく感じた。

「君に言うておこう」とジューリオは慰めた。彼は相手の痛みの表情で苛立って動揺していた、「君は女を誇張し、拡大している。君を驚かせ、呪縛している女は、向こうの下の方で散策しているあのルクレツィアではない。君はびっくりして、その目で私に尋ねている。いいかい、私は夫人をより自然であると見なしている。夫人が生まれ育った所、そこでの状況を、我々は承知している。夫人は夫人の過去の不埒な犯行を、裁判も贖罪もなしに、克服していることが、君には、法務官よ、不思議に思えるのであろう。夫人を水の上に浮かべているのは、単に父親譲りの軽薄という救助ベルトに過ぎないと気付いていないのか。夫人が今や致命的深みを越えて、明るく、無頓着に徳操の門を目指して戦っていることに、君はデーモンの偉大さを考えている。いいかい。夫人が指先まで満たしている優美さを除くと、夫人は通常の、頭の回転の速い女だ。全くありふれた女だ。私の言う通り、人間の女だ」。青年は思い上がった哄笑で終えた。

彼らは宮殿の裾部に到着し、屋外部分に足を踏み入れた。鈍く明るい鉛色の空の下、そこにはネプトゥヌスの泉が作られていた。海神は、中央建築物の土台に寄りかかかっていて、宮殿テラスへ上がって行く戸外の二重[左右]階段をなす半円形の中に立っていた。そして蒸し暑さの中、ざわざわと噴水の音が聞こえたが、それは海神の陶器や貝殻からなる召使い達の噴水から巨大な水盤に振り注ぐ音であった。

裁判官は間近の階段を急ぎ上がろうとした。というのは公爵が彼を待っていたからである。すると腕で彼を抱えていたジューリオ殿が、再びまた暗い公園の方へ振り向いて、抗う友を自ら引き連れて行った。

彼はまだ言い終えていなかった。

足許の明るい砂利道の上で、二人の諍う短い人影が奇妙に絡み合っていた。ストロツィーはこのグロテスクな闘いを見て、笑った。「強引だな」。

「では私の兄は私をヴェネツィアへ送るのだな」とデステ[ジューリオ殿]は言った。二人は今一度果てしない木陰道を進んだ、「同じ兄が、この前、政治的理由で私をヴェネツィアから呼び戻したのに」。

「公爵が君の咄嗟の従順の知らせを受けたときの、その口許の微笑に見られる軽視に気付かなかったのか。私は側に立っていた。公爵は君を、ユリウス教皇[二世、在位1503-1513]

のお気に召すよう、君を呼び戻す必要があったのだ。しかしそれは単に見せかけに過ぎないのだ。公爵は、君が公爵の意を汲んで、自分の意見に従わないことを望んでいたのだ」。

ジュリオ殿の穏やかな目から今や怒りの力が燃え出ている。自分が馬鹿にされているのを見て、怒りが湧かないほどに、彼はまだ軟弱化していなかった。しかし彼は自分の不機嫌を微笑の下に隠した。

「私にとっては余りに細かい。それに私は将軍でもないし、兵士ですらない」と彼は言った、「私は流血を好まないし、...」。

「それなのに君は沢山流して、君の両手から滴り落ち、君の足跡に満ちあふれている」。

「私の楽しみ事をうるさい奴が邪魔したときだ」とデステ[ジュリオ]は破廉恥に答えた、「しかし何という話だ、ヘルクレス。貴方はまた私をヴェネツィアに送るのか。半ば私はそれに満足しており、半ば心が痛む、 — 半ば私はこちらに捕らわれており、半ば去りたいと願っている、 — 私自身一つの謎で、解けない」。...

「それは黒っぽい巻き毛のアンジェラが解こう。君は彼女を求め、彼女から逃げている」。

「そうじゃない」とジュリオ殿は言った、「彼女は私にはどうしても良い。しかし二年前[少なくとも三年前で、史実に厳密ではない]の参内以来、 — 君も居合わせて、黄金の天蓋棒の真面目な担ぎ手として煌びやかに振る舞った。...その時君の耳も聞いたろう。彼女が私のことを皆の前で脅して、裁いた声を。あの日以来、私はもはや同じ私ではない。私の五感はよろめき、狂人のように求め、女の口や酒の杯を度々替えて、ただ一つの願いを抱いている。敵対して冷たく私から顔を背けたかの女性が今一度あの明るく燃える顔を私に向けて、今一度私を脅して欲しい、と。 — 最初の時よりももっと強烈に、...しかし私は戯れ言を話している。私をヴェネツィアへ送ってくれ」。

彼は息を継いだ。「私が枢機卿の兄の目からしばらく遠ざかるのも」と彼は続けた、「兄と私にとって良いことかもしれない。兄は以前私を愛していた。しかし今や私を非人間的具合に憎み始めている。自ら判断し給え。最近兄は私を掴まえて、脅しの声で耳に囁いた。『ジュリオ、そなたはアンジェラの顔を見てはならん。彼女の目を見てはならん。彼女の息の側にいてはならん。そなたの命にかけて』」。

「分かるよ」と裁判官は答えた、「その不当な兄は哀れなアンジェラを猛然と愛している。彼は世間同様罪深く、世間のこのフェラーラと呼ばれる罪深い地点で全能であるので、彼女はこの禿鷹に夙に情け容赦なく、略奪されてしまうことだろう、仮に、...」。

「それで君は、最上位裁判官よ、仲裁する気はないのだろうか。正義の愛好家、従者の君は。あの娘を救うのだ。我がヘルクレスよ、私はヴェネツィアに発つ前に、君にそのことを任せたい。私にはできない。私は彼女に不幸をもたらすだろうから」。...彼は黙して、夢想した。 — 「彼女だって私に不幸をもたらすだろう。枢機卿のかの挑戦にかけて、

— いいかい、私は享樂家だ、しかし臆病者ではない。 — 私の血が騒ぐ。あのことが私の美人の一人と関係しているのでなければ、彼の気違いのような禁令を彼の面前に投げ返していたであろう。 — しかしよくよく考えると」、彼は目を思案して手で隠した、「私はあの娘を愛していないし、彼女を守って、私が彼女の側に立たない限り、私の兄のやり方では、私が彼女に重い不幸をもたらしかねないのだ。それに彼女はそれを我慢しないことだろう、 — 彼女はそれを望んでいない。 — 彼女はそれを欲しない。彼女は私を軽蔑し、私を裁いている。 — そして私に不幸を叫び寄せることだろう。『あら、

残念』と」。 — それから彼は思い出し憤激して、続けた、「枢機卿は彼女の上にその網を投げるかもしれない。とても残酷で厭わしいと思うけど、私が酩酊してなくて、女性の口に接吻していないとしても、厭わしく憎むべきもの、この全世界同様、と思うけど」。

「落ち着け」と最上位裁判官は真面目に言った、「彼女には何も起きない。そのことを私は確信している。彼女の衣装には皺一つ作られてはならない。彼女はルクレツィア・ボルジアによって、 — 守られているのだから」。

「それは結構、私はこの聖女に彼女を任せよう」とデステ[ジューリオ]は嘲った。「私はミルテの木陰の中、新鮮な泉の側に腰掛けて、そこで私のワインを冷やすことにしよう。...もう一人の兄、フェランテが茂みから侵入して来て、私の側の芝の中に身を投げ、私の耳に、その陰謀や反逆罪を囁き、耳を汚して、それで私は、彼を阿呆か悪魔か、あるいはその双方か、選択判断する次第となった。最近彼は私を兄らしく招待して、彼の表現では、公爵を中心から外すと言うのだ。しかし間違いないことだが、私はその半分でも聞き入れようものなら、この悪太郎は即刻私を道連れに反逆者となっていたことだろう。しかし私はこの道連れにならなかった。私は彼の口を閉じさせた。というのは私は公爵を敬っており、反逆を憎むからだ。しかし、ストロツィーよ、フェランテ殿が王冠を得るために、邪悪な一芝居をする能力があると思うかい」。

「何の結果も実りもない奸計だな」と裁判官は答えた、「尋常でない状況とか、思いがけない激震で、この竜の国家が厄災に時満ちていない限り」。

「これはここだけの話しにしておいてくれ、猛獣どもよ」と呑気なジューリオは笑った、「私がヴェネツィアから戻って来たら、いかなる死体がフェラーラの宮廷舞台で転がっているか見ることになるだろう。達者でな、正義の崇拜者よ、急ぎ給え。公爵が待っている」。

彼は友を抱擁して、それからなはだ性急に彼を行かせたので、ストロツィーはよろめいた。ストロツィーは素早い足取りで、別荘を探し、ジューリオは悠然とその後をぶらぶら歩いて行った。

彼はネプトゥーヌスの泉に達すると、涼を求めて、顔を洗い、海の女の石像の胸から跳ねる噴水を自分の夜の吹きすさぶ風で疲れた額にかけた。

彼は頭部をハンカチで拭きながら、一人の疲れたならず者に気付いた。丸い壁の細い影の中、石造りベンチに動かずに臥していて、肘枕をし、フェルト帽の下から目を据えて観察していた。そして彼は速やかに両足で飛び上がり、こう挨拶してお辞儀した。「ジューリオ殿、敬意を表します」。

「そのまま」と気さくなデステ[ジューリオ]は合図した、「しかし、席を空けてくれ。二人分あるだろう。私は微睡みたい、私の見張りを頼む」。

この無法者は微笑して白い歯を見せ、ベルトに挟んでいた短剣を鞘から少し持ち上げた。

「そなたは枢機卿の郎党か」とジューリオは言った、「そなたの名は」。 — 枢機卿は立派な一味の所有者、養育者として知られていた。

「私は引っ掻き爪と称しています」と相手は遜って答えた。

「しかしそなたのファースト・ネームは」。

「忘れました。少しばかり臭く匂うようになりました」。

「新しい名前を枢機卿が付けていよう。他の一味はどう称している」。

「彼らは、殿下のお許しを願いますが、茨髭、出っ歯、竜の血、牙猪、赤激怒、空威張りです。私を含め七名となります。フェラーラの人々は我らのことを七つの大罪と呼んでいます」。

「私もその方らの行軍隊形を知っているぞ」とジューリオ殿はダンテの地獄の茶番的悪魔の行軍を当てこすって言った。枢機卿はこの神々しい詩人の崇拜者としてその一味の名前を援用したのであった[地獄編、第二十一歌、112以下参照]。

彼は明るい哄笑に弾けた。ジューリオ殿はまだまことに子供らしく笑うことができた。それから彼は両腕を伸ばした。「私は疲れた」。

彼はベンチに身を投げ、相手に触れることも構わなかった。そして自分の場を確保して微睡んだ。

その無法者は彼を眺めて、愛想良く呟いた。「可愛い青年だ」。

最初この疲れた男は深く夢も見ず、沈んだ。忘却を、長く渴した飲み方で啜っていた。それからゆっくりと彼の内部の目が開いた。しばらくは薄明かりの状態、須臾の追い狎が始まり、バッカス祭的人混みが矢継ぎ早に生じ、体が暴れ、頭は仰向けになり、シンバルやティンパニーが打ち鳴らされ、バッカス的な叫び声が上がった。聞かがいい。はるか遠くに、別の方向から最初ほとんど聞こえなかったが、次第に重みを増して、トランペットが轟いた。

得体のしれない不安に彼は襲われた。すると彼は突然真剣な集会に立っていた。様々な民族や時代の裁判官達の一座であった。その中央に、灰色髪の厳格な、石から彫り出されたかのようなカール大帝が、その大きな斬首刀を膝の上に置いていた[チューリヒの大聖堂にある]。その右手には預言者サムエルが立っていて、胸の上で腕を組んで、幽霊のような外套を押さえていた[生涯裁きを行った、サムエル記上、7.15]。その左手には、ローマ人ブルートゥス[伝説によれば最後の国王を追放した]、厳格な父祖が、その捕吏達と一緒にいた。彼らによって、奇妙なことに、ジューリオの友人、裁判官のヘルクレスもまさに捕縛されていた。彼ら兩人、フェラーラの罪人がこのように高級な裁判に値すると想定されていることにこの夢想者は驚いた。今やカール大帝の力強い声が響いた。彼の唇は動いていなかった。「ジューリオ・デステ、乙女によってそなたに対し告発された裁判が始まる。乙女本人が現れよう」。再びトランペットが轟いて、すべてが瓦解した。

幾つかの薄暗い場面の速やかな経過の後、ジューリオ殿は草の上に休んでいた。優しく彼の上に屈み込んでいるアンジェラを見上げていた。

「あなたは、阿呆よ」と彼女は言った。会話の続きを語っているようであった。「一人の娘が一人の青年に向かって、私はあなたを愛していると言えるかしら。娘は自分の内心に仮面を被せて、変装して願いや告白を怒りや脅迫の形で述べなければならないのよ。それにどうして身持ちの良い娘が幾分安心して、あなたに身を任せることができましょう。でもね、まさにあなたの沢山の罪、私が罰しなければならない罪が、私をあなたに結び付けているの。その罪はあなたの魔法の目にあります。その目であなたは悪事をなしていません。その目を引き抜き、投げ棄てなさい」。

ジューリオ殿は、夢の中で、とても生意気に親しげに、誇り高いアンジェラが自分に向かって話すのを不思議に感じていた。彼は更に何と言われるか聞き耳を立てた。彼女が黙

すると、彼の不安は刻一刻と増して行った。彼は起き上がろうと思ったが、目に見えない縛りで大地に縛されていて、ほんの些細な動きもできなかった。

「あなたは望まないの」と今や夢の中のアンジェラがまた始めた、「でも仕様がなない」。そう言って彼女は指を右手に持っている鉢の中に入れて、身動きできず、頭を背けられないこの哀れな男の片方の目にまず一滴の赤い液体を滴らせ、それからもう片方の目に滴らせた。彼は途方もない痛みを襲われ、真っ黒の、星のない夜よりも暗い、深い闇に彼は包まれていた。

ジュリオ殿は不幸の余り、嗚咽した。そして目覚めて見ると、無法者の腕の中にいた。彼はジュリオを慄然たる思いを隠さずに見つめていた。

「殿下は、怖い夢をご覧になっています」と引っ掻き爪が言った。

「とんでもない夢で、盲目になるのだ」。

「そのようなことが貴殿の顔に生ずる様を私は見ていました」と無法者は言った、「尊敬する殿下、しかし私はここで辞去致します」。

彼は一礼した。しかし立ち止まっていて、ある種の優しさで引き留められているようで、「憂わしげな表情で、声を低めて話し始めた。「若君様が一人の哀れな男の言葉に耳を傾けてくださいますならば、若君様は静かに、ここから、今の時間のうちにも、ある修道院へ入られることです。一 藪の聖アンドレア[ローマに同名]が近くにあります。この聖人は立派で、そこの修道僧達は思慮深い。一 若君様は道で出会うすべての乞食に金貨を恵まれて、聖アンドレアでは大事な誓願をなさって、独房に閉じこもり、その愛しい脅かされた目の上に被り布を置くことです。聖母様がお目をお守りくださいますように」。

「そなたはそんなに夢を信ずるのか」とジュリオ殿は冗談を言った。彼は素早く本来の自分を取り戻していた。

「自分の言っていることを承知しています」とこの無法者は答えた。「私は昔、夢を見ました。今日の貴殿のように心に残るもので、義兄を刺す夢です。目覚めると、私は敬虔なことを可能な限り行いました。しかし起こるべくして起きました」。

彼は深く低頭して、去った。明らかに彼は、彼の確信では暗い運命に落ちてしまっている人間の近くから急いで逃げようとしていた。

第四章

ジュリオ殿はゆっくりと階段を上がって、視線を上方に向けながら甘美な青天を切望した。夢の中で永久に失った青天であった。しかし求めて空しかった。というのは天は七月の暑さの物憂い蒸気ですっかり曇っていたからである。

彼が最上段の階段に足を置くと、宮殿のホールから覚束ない足取りで最上位裁判官がやって来た。死人のように青ざめて、不幸に目も空ろであった。ジュリオ殿は衷心からの同情に駆られて、友人の肩に腕を回しながら、彼をテラスの手摺りまで連れて行き、彼と一緒に噴水の水盤や水のざわめく戯れを眺めた。

「一体何があった」と彼は彼の耳許に囁いた、「君は何に出会った」。

ストロツィーは痛々しく口を歪めて答えた、「何でもない。君は二年間ヴェネツィアへ旅する。君の件は片付いた。裁判にはならない。プラテッロでの君の乱痴気騒ぎはお咎

めなしだ。もう一度、またしても、お咎めなしということだ。公爵も嘆いていて、君達兄弟について溜め息を吐いておられる」。

「枢機卿についてもか」。

「君達皆だ。公爵は枢機卿のことを独断の者、無法者、フェラーラ国家に不可欠の破廉恥漢と呼んでおり、彼の徒党一味に、彼が約束したように、今日のうちにも給料を払い終え、解散させないなら、絞首刑と車裂きの刑で追放するよう私に命じられた。一 情け容赦なしにだ。そして公爵は熱くなって」とストロツィーは更に報告した、「熱心にフェラーラの国について話された。無条件の正義の国家体制で、人物の声望に左右されるのでなく、臍も買収もない体制を考えておられる。

『貴方の共和国にあるような司法制度が欲しい』と彼は、脇を向いて話された。窓の壁龕には、やって来たヴェネツィア人が公爵から暇乞いをする為座っているのが見えた。そして慎ましく一冊の本をめくって、私の謁見を邪魔しないようにしていた。話しかけられたベンボは丁重に微笑していた。

『ベンボ、許されたい』と公爵は続けた、『貴方の旅の馬車が待っていると承知している。ローマ騎行には夜の涼しさを利用して、七月の陽射しを避けたいのであろう。ゆっくりと良心的にこの書記は書き、貴方がわざわざ私のために教皇の御手に届けようと思されている書簡をお待たせしている点、私の書記を寛恕されたい。このユリウス教皇[在位1503-1513]は恐ろしい人間だ。教皇は私を愛していない[ヴェネツィアとの戦いでは利用され、その後は命を狙われた]。彼によしなに伝えられたい。貴方はこの恐ろしい教皇に何と仰有るつもりかな』。一 公爵は微笑した、一 『教皇が貴殿に、何故フェラーラを去る気になったのかお尋ねになった場合です。教皇は、貴方のような男性達を私が手放したくなくろうこととはご承知です。私同様、教皇も貴殿を重要人物、未来を担う者として評価しており、貴殿のことを過小評価するのは、無教養を露呈することでありましょうし、貴殿はイタリアのどこの宮廷でも飾りとして欠かせない人物です。それで、ベンボ、教皇殿には何と答えられますかな』。

『真実です、公爵』とこのヴェネツィア人は追従する声で答えた、『教皇殿、私は公爵を尊敬しており、公爵夫人を愛するに至ることを恐れていますので、フェラーラを去りました、と私は申し上げます。死すべき定め人間は、夫人の神秘的本性とその澄んだ優美さに魅惑されずに、夫人との日々の交際を享受することはできないことでしょう。しかし、称赞と情熱の間の境界はどこにありますでしょうか。その剣は抜き身も見せずに、殺害しましょう。むしろ私は千もの煙雲の中、高貴な夫人を燃え上がる炎で傷付けてしまうよりも、あるいは高貴なもてなしの良い御主人に対して、ほんの熱に浮かされた夢の中で盗人となってしまふよりも、死んでしまいたいものです』、...」。

「大胆に、そして賢明に話しているな」とここでジューリオ殿は語り手を遮って、戯れに噴水のアーチを掴んだ。するとその落下する雨は南風に吹かれて、彼の方にかかった。

しかし裁判官は続けた、「アルフォンソ殿は自分の客人の告白で満足したように見え、この客人の旅立ちを了解した。『貴殿が教皇にそのような大胆の弁を述べても、貴殿のことを悪し様には考えないであろう』と彼は言った、『この旅立ち是不作法なものではなく、我々皆にとって名誉なことだ。ベンボ、我らに時折文を送ってくれ』。それから公爵は私を脅して、指摘した。『この人間は』と公爵は言った、『同じ悪徳を病んでいる。しかし

貴殿のように賢明でなく、薬を求めることをしない。彼に話しかけて、助言を与えてくれ』。

そこで私は怒って、頭を上げて、答えた、『公爵、そのようなことを私は自分の口で申しません。私の思いは裁判官を承認しません。そのようなことがあれば、私はベンボ同様に知恵を働かせましょう。公爵、私を去らせてください。フェラーラの空気は私を窒息させます。私は二十歳で、まだ若すぎて、テミス女神の神聖な秤を支えられません。私はまだ未完成の金属で、流れ出る溶岩です。未だに私の周りでは様々な法や崇拝が闘っています。私にお暇をください。私はパリの大学を訪ねるつもりです。すでに長いことそちらへ憧れていました。私はいつか貴殿とフェラーラの国家にとってもっと成熟し、有益な存在となって戻って来ます。もはや何ごとにも買収されず、眩惑されない正義の男となって』。

公爵は私に真面目に対応した、『就任したばかりの職務を去ると言ってくれるな。私の目の許で、貴方は司法制度の変革を始めた。フェラーラで実施中の公の仕事が軽率に中断され、遅滞することは、耐えられない。このような無責任はいかなる結果になるのか。

ー しかし貴方の恋する奴隷根性に関しては、口では貴方は否認するが、しかし視線や身振りで貴方は苛立たしいほどに露呈させている。だから私は、我らの去って行く友に』、彼はヴェネツィア人の手を取った、『ご自分の危険な内的葛藤について明らかにして欲しいと願っている。貴方のことを彼は信じよう。というのは、野蛮な森のダンテのように『神曲』地獄編第一歌冒頭]、拉致する獣性から不安一杯に逃れて行くからである。ベンボ、彼の案内人となってくれ。私のいる所で、ヴェールも被せず、自発的に語ってくれ。我らの許では秘密はない。我らは我らの素面と仮面を承知している』。ー このようにこの残酷な銜学者は我々を苦しめた。我々はこの拷問に歯ぎしりした』。

ー 「実際、自分のいるところで、自分の妻の崇拝者の一人を、もう一人の崇拝者を通じて叱り飛ばすのは、夫の天才的考えだな」とジュリオ殿は笑った、「これは兄に似付かわしい。君が憤怒を抑えて目をぐりぐり回す様が見える。蛇のように狡智なヴェネツィア人がその千切れた魂をレトリックの痛々しい傑作に仕上げる様が見える。彼は何と言ったのだ」。

ー 「最初、彼は上品なその眉毛を顰めていて、しばらく黙っていた。それから彼は私の許に寄って来て、同情して私の手を握った。『ヘルクレス』と彼は始めた、『時間が迫っています。私の馬は門の前で踏み付けていましょう。私の精神はすでに旅立っています。私の最後のこの時間が、神の加護で、実りあるものであって欲しいものです。私は自分の言葉を吟味する時間がありません。殿下は、ここでは秘密はないと自ら発せられましたので、私は容赦なく諸事象の顔を明るみに出しましょう。御身の受難は奇妙な場合です。哀れな罪人の私の場合のように、圧倒的女性の魅力に御身が参っているではありません。御身ははるかに危険な具合に病気です。というのは、御身の厄災は御身の誇り高い、強情な精神の領域に発生しているからです。御身の厳しい法感覚は、御身の目の保養となっているもの、御身の心の炎を焚きつけるものを、弾劾します。これは御身の矛盾であり、御身の迷いです。裁判官が、裁判官によって裁かれた女性に夢中になっているのです。夫人の運命をご覧ください。子供らしい女性で、不幸な依存状態で育ち、罪なくして罪深く、愛らしい女性のままで、内心の明澄さに照らされて、両足を震わせて、悪人の呪縛から逃れ、類い稀な、いや唯一の男性の求婚の手を受け入れました。御身の主君の手です、ストロツィー、公爵は人間の性情の賢い探求者です。公爵はルクレツィアの高貴な素質を認識さ

れ、自らと一緒に神々しいやり方で夫人を引き上げました。そこで夫人の足取りは日ごとにより安定したものとなり、夫人はますます大きな満足を、徳操に対して、そして自らの甲斐ある戦いに対して感じています。そこへ御身、不幸の男が現れて、その守護天使の腕の中に引き上げられた女性を目にし、夫人を地獄圏の者達の一人と断罪し、夫人に突進して、御身の判決を自ら遂行しようとし、御身に災いあれ。御身は夫人の虜になったのです。御身は夫人の膝を抱く。しかし夫人は御身から身を離すでしょう。そして御身は一人深みに落ちるのです。哀れなイクシオン。御身は女神の代わりに雲を抱き締めます。そして御身の悪事は完全に遂行不能であり、不可能です、そしてまさにこの故にこの悪事は免罪されます。御身の心に問い給え、ストロツィー』、そしてこのヴェネツィア人は涙ながらに私の手を握った、『新しいルクレツィアは何と感動的で趣味が良いことかと感じませんか。夫人はその静かな思慮深いやり方で、さりげなく良いことをなし、煌びやかな贖罪をせずに、教会での一般的な感謝で満足しています。御身がこの人物の単純な優美さを観察なされば、中傷、つまり我々の時代のこの悪徳は、一 というのは我々皆が中傷し、中傷されますので、一 この高貴な女性に対して、他の誰よりも多くなされ、耐える女性という人間的に普通のイメージがデーモン的なものに歪んでしまっているのではないかという疑念が生じませんか』、...」。

彼の友の声高な哄笑が彼の言葉を遮った、「これは強烈だ」とジュリオ殿は叫んだ、「恥知らずに真実と徹底的な嘘の世紀だ」。

すると彼は軽くびくとした。というのは微かに指がその剥き出しのうなじに触れたからである。すぐに彼が振り向くと、枢機卿の衰弱した敵意ある顔が見えた。彼はゆっくりと上がって来たが、跳ねる噴水で聞こえず、見えなかったのである。

「公爵が我々二人を待っていると思うぞ」とイッポリートは言った。まだ彼の耳に残っていた弟の言葉に思わず微笑していた。「さっさと付いて来い」。そして彼は別荘に消えた。

「お別れだ、ヘルクレス」とデステは言った、「ただ一つだけ、まだ知りたいことがある。ここで君に出会ったとき、私はびっくりしたが、どうして死人のように青ざめていたのだ」。

「それではこの場面の終末、公爵の暗殺の言葉を聞いてくれ。最初彼は落ち着いて、陰気に言った、『ベンゴ、公爵夫人についての貴殿のイメージは的確で、追従のものではない』。彼は我々二人をじっと見つめた。私の表情に彼は満足していないように見えた。公爵の中で何か熱いものがこみ上げ、私の方を脅して向いた。『ストロツィーよ』と彼は言った、『貴方の情熱は時に主君と法に対する忠誠を揺るがし、貴方の災難になりかねないと自問している。確かに法律問題での貴方の専門の分野に関しては案じていない。貴方は買収されないと思うし、貴方の判決に私は従う。それで例えば、貴方は、コントラーリオ伯爵との私の国庫の継承問題では、正義を見いだしてくれるだろうと確信している。それにここでは公爵夫人は伯爵を鼻屑にしているけれども、貴方は間違いを犯さないだろう。しかし彼女は明澄な感覚を奪われてしまうという事態や時があるものだ。彼女の墮落した兄がまたイタリアに現れて、我々を混乱させるかもしれない。私は家臣に彼との関係は一切禁ずるつもりである。しかし私の第一の家臣、公爵夫人はこれに従わないだろう。というのは、彼女はそうできないのであり、その力がないからだ。彼女が手先を見つけないよ

う、厳格な処分では用心するつもりだ。しかし夫人は手先を見つけることだろう、...夫人は貴方に手を伸ばそう、ヘルクレス・ストロツィーよ。これは貴方の首に影響する。私は貴方を裁くことになる。公的なものではない。これは家庭の件であり、国家の件である。両方とも秘密が必要だ。貴方は死んで路上に見つかることになる。』、一ここでベンボは青ざめた。そして君は私も青ざめていたと言った。一しかし公爵は迷わず正確に続けた。『ベンボよ、貴方は神と人間に対して、私の証人だ、つまりこの者は裁きを受けてから死んでいる、とな。しかし汝、ヘルクレス・ストロツィーよ、どうして私と公爵夫人から逃げのびるか、考えておけ』。このとき臆病な書記が教皇への巻き物を持って来た。そして我々は解放された。私はヴェネツィア人と同行して、彼の従者達や馬の所まで行った。すでに鎧に足を乗せていて、彼は私に囁いた。『ヘルクレス、自分自身に用心することだ』。

ジューリオ殿は慄然とした。ストロツィーは素早く唇を動かして、言った。「では君も急ぎ無事旅してくれ」。

「今晚にも」。

「駄目だ、君が宮殿から退出したらすぐだ」と裁判官は言って、階段を下りた。一方相手は自分の兄、枢機卿の後を追って行った。

第五章

彼は細く、天井の高い部屋に枢機卿が公爵と一緒にいるのを見つけた。部屋は唯一の大きな窓を明かり取りとしていた。ここは神聖な空間で、宮廷人達は足を踏み入れてはならなかった。壁は地図や計画で覆われており、中央に広い書き物机があって、公爵は着席して、額を手当てていた。机上には地球儀があった。

公爵の前で兄弟が対峙すると、ただ顔を見ただけで苛立って、敵意ある視線で見つめていた。公爵が憂慮の表情で聞いていると、枢機卿はジューリオ殿に怒りの言葉を浴びせた。

「殿下が」と彼は叫んだ、「この無駄飯食いを宮廷から追放されるよう、私は要求します。此奴が永久にフェラーラを避け、甲斐性なしのお咎めなしという癩の種が消えるよう私は望みます。此奴は我ら一門の恥で、面汚しです。兄上、追い出してください」。

このような前代未聞の侮辱を聞いて、ジューリオ殿は縮み上がった。この鞭打ちで彼は棒立ちになった。あたかも彼の面貌が拡大して、より高貴な原像が輝きだし、このように侮辱に憤然と抗して浮かび上がったかのようにであった。

「枢機卿殿」と彼は言った、「私が犯した罪は、私が自ら犯した罪です。自由に享受する者は、政治家に比べたら無邪気なものではないか、私には分かりません。政治家は、毒を調合する者のように、計算しながら、学問的に悪をその目的のために使用し、消化します」。

「こうした無思慮がまさに、そなたに対し非難され得るものだ、悲しい生き物よ」と枢機卿が答えた、「そなたは一切精神的喜びを感じずに、最も卑俗な享受に溺れている。私は悪人よ、そなたが愛と呼ぶものを承知しているから、アンジェラ嬢をそなたに禁じているのだ。ほんの軽い息を彼女にかけてもならん、ほんの須臾の思いもだめだ、だろう、一そなたの思いなんざ」。

涙ながらにジューリオ殿は答えた、「何故、兄上は私を泥の中に突き落とし、私を窒息させようとするのです。以前は私を引き上げようとなさっていたのに。何故かくも野蛮に私を憎むのです、以前は少年の私を父親のように慈しんでくださったのに」。

「それはだな、ジューリオ。十歳年長の私が子供のそなたを自分の側に見ていたとき、そなたの率直な顔と明るい精神が喜ばしく思えたものだ。愛敬があって、可愛く、注意深く、才能があって、そなたは恵まれた星の下に生まれたデステ家の者に見え、我らの家と国家の繁栄のために贈られてきているように思えた。一つの清涼剤、数千人を一人で支える者であった。この崩落の時代、人格が一切に値するから、そなたの人格を発展させることは私の誇り高い務めであった。子供らしいそなたの栄光の後、今そなたは一人の青年になっていて、岐路に立っていた。それなのにそなたは名誉と仕事の目標から目を背け、完全に遊戯と悦楽に沈んだ。そなたに出来たのは、そなたのすべての豊かな財宝を有害無益に使い果たすことだ。国家も、学問も、青春を燃焼させる兵役すらもそなたの心を捉えることは出来なかった。そなたは日々を大小の破廉恥な所業で潰して行った。…低級、低俗な精神だ。そなたはそなたの家に盗みを犯した。それに奇形児のそなたはもはや名誉を打ち立てられず、恥辱まみれになっており、私はまことそなたは生きているよりも死んだ方がましだと思えそうだ。そなたは、自分が途方もない額を投げ入れたそなたのプラテッロを、我らの気高い紋章ではなく、そなた自身の仮面に相応しく、空虚で無意味な仮面で飾ったとき、そなたは自ら我々から訣別したのではなかったか」。

「兄上」とジューリオ殿は自分の良心の咎めを受け、打ちのめされて答えた、「私が人生の自由を行使したからと、私を踏みしだくことは止めてください。国家に奉公しているデステ家の者は十分にいます。徳操の教義は兄上の禿鷹の顔には似合いません。 — しかし、一点だけ、イッポーリト・デステ、すっかり安心されたい」。 — ジューリオ殿は勇気を奮い起こした、彼は自分が無垢であると感じる一つの大地に達していた、 — 「アンジェラ嬢に対する私の関係です。誓って」、彼は有効な誓いを求めた、「ここにいる我らの主君と兄上の命にかけて申します。私に対する兄上の残酷な憎しみの原因でありますアンジェラ・ボルジアは私に関係する者ではありません。彼女は私とは何の関わりもなく、彼女は私に敵対しています。私は上手く彼女を避けます。この女丈夫の体型、身振りは私の趣味ではありません。彼女の方でも私を愛していません。彼女も私について、兄上のように考えているからです。それももっともなことで、彼女が私のことを皆の前で嘆いて以来、私は自分が変わったと少しも自覚していないのですから」。

この告白で枢機卿が落ち着くということは全然なくて、むしろその嫉妬の炎を焚きつけてしまった。彼はジューリオ殿の言葉を信じた。というのは、ジューリオは悪事を起こすが、内面は真正率直な性質のままであると知っていたからで、この不思議の泉は、その輝く目を通じてその深みを覗き込めるもので、真実希求のアンジェラにとって神秘的引力を有するに違いないと自らに語っていたのである。この引力があればこそ、彼女は夢中になって、牢から上がって来た者を公の場で虐待し、嘆くことになったのである。ジューリオは無邪気にこう続けたので、彼の嫉妬は憤然となった。

「いえ、兄上、私は好きだから話しているわけではありません」。彼は誓って手を心臓に置いた。「バッカスにかけて。この娘は私にはディアナ女神同様にどうしても良い存在です。ただ女性という生き物には憐れみを覚えます。 — 兄上の狂暴の愛の許で彼女はどうな

りましょうか。兄上は彼女と結婚できない。 — 兄上は司祭です。ものにすることはもっと難しい。彼女は貞淑で、勇敢です。どうなります。何を用意されます。兄上は彼女を殺すことでしょう」。

彼の声はとても温かい、同情の響きがあって、それで枢機卿は凶暴化した。

「少年、誰がそなたに」と彼は荒れた、「私は彼女を殺すだろうと言っているのだ。このこれを」と彼は両拳で自分の胸の上の深紅の衣を掴んだ、「襤褸に引き裂いて、アンジェラを妻として胸に抱くのに、何の支障があろうか。私はまだ十分に若いし、教会の香具師芝居は唾棄している」。

「弟よ、落ち着け」とようやく公爵が決闘に仲裁して来た。「そなたはそうはしないだろう。そなたが一人の女を狂乱するほどに愛するということは、あり得ることだろう。人間的な悩みだ、 — 一つの病、一つの災難だ。しかし結婚のために遅くなってから還俗することになると、一つの躓きだ、 — 物笑いだ。そなたは物笑いになってはならない。気位の高い弟よ。アンジェラ嬢に関しては、立派な娘で、公爵夫人が身分相応の縁組みを考えていよう。親戚の女として夫人はその責務がある。それで、そなた、枢機卿よ、アンジェラ嬢を静かに夫人の庇護に委ねるだろう、そなたが畏怖して尊敬しているルクレツィア夫人に敬意を表して」。

「私が畏怖して尊敬している女性です」と枢機卿は我知らず繰り返した、「敢えて質問させていただきますと、ルクレツィア夫人は誰と娘を結婚させる気です」。

「これは賢明な夫人に任せよう」と公爵は言った、「私個人としては、彼女をコントラリオ伯爵に嫁がせるのは、知恵のない話しではないと思う」。

さて、このイタリア人にとっては富と名誉を意味するこの名前が告げられたとき、二人の敵対する兄弟が同一の調和の取れた甲高い嘲笑に弾けたのは奇妙なことだった。

しかしそれから枢機卿は新たに憤然として同調して笑った弟に向かった。

「構わん」と彼は叫んだ、「ルクレツィア夫人に任せるべし。夫人は別口を見つけるかもしれない。あるいはアンジェラ嬢は自らより良い道を選ぼう。デステ家のこの屑が」と彼は弟を指した、「この芝居から消えさえすればいい」。彼は弟にとっても冷酷な視線を送って、弟は青ざめた。

この時イッポリトは憎悪の頂点にいて、目眩がした。正気を失って、失神が近いと予感された。公爵の肘掛け椅子に寄りかかって、途切れ途切れに言葉を呟いた。

「命が惜しければ、弟よ、私の視界から消えろ。フェラーラを去るのだ。今この時にも、...今すぐだ、...行け、...」。

ジューリオ殿は枢機卿をびっくりした目で見つめていた。枢機卿が彼に対し、思わず率直に、その憎悪の殺人的発作を警告しているように思えた。彼は、枢機卿に言われた通りにすると決めた。

「枢機卿、それでは行きます」と彼は言って、去ろうとした。しかし公爵は別な風に命じた。

「早まるな」と公爵は彼を押し留めた、「目立つことは何もするな。憶測や人の噂の種となるようなことは、何もするな。これから貴方は公爵夫人の一座へ行きなさい。夫人と話しをして、時に吹き込むといい。戦争への貴方の欲求がまた目覚めました、と。それに今、ヴェネツィアでの貴方の軍務に都合の悪かったフェラーラ国の事情が消え去ったので、

貴方は戻るつもりです。渋々ではあるが、公爵は私に暇を与えました、と」。

ジュリオ殿は従順にお辞儀した。

そのとき外で鋭い声が聞こえた。三人が皆、部屋の入口の方を向いた。フェランテ殿であって、入室を求めている、キンキン声で朗読を始めた。というのは、時に韻文で話すという愚行も、彼の好みの愚行の一つだったからである。[ルネッサンスの詩的陶醉と倫理欠如]

心温まる光景、珍しく、しかし真実のもので、
三人の兄弟が愛しながら、一緒にいる。[詩編,133.1,拙訳438頁]。
兄弟は、それぞれ、美しい母親は違うが、
高貴なその父親は同じである。
三人は愛の抱擁に燃えて、
互いに息も絶え絶えである。
かくも胸に抱き締めようという
欲求と歓喜は強い。

四人目の兄弟がやって来て、三人に告げる、
アモールが束縛されている植込みで
我らの公爵夫人の学者どもが議論して、
一つの哲学上の論争を生じさせた。
針先ほどの微妙な問題で、
まだ解決を得られない。
王子殿におかれても、遠慮なく、
機知の矢を放たれたい。

行こう、弟よ、フェラーラの王妃の命令だ」。
彼はジュリオ殿の腋を掴んで、優美な手の仕草で、公爵と枢機卿を先に行かせた。

第六章

公爵と枢機卿の厳めしい姿と一緒に木陰道の長い中央通路を歩んでいるとき、左右のそこを散策している宮廷人は恭しく挨拶して立ち止まった。中にはどこかの秘密のいかがわしいベンチに通ずる脇の小道から品良く茂みへと消えて行くのもいた。

深紅の衣の、明敏な頭脳と偉大な政治的仕事の成果と思われる入念に手入れされた面貌のこの男が、一人の劫罰を受けた者のように、自分にそっぽを向ける若い娘の虜になっていると、彼らのうちの誰が予測したであろうか。 — 信じられないことである。 — 似たようなことを公爵も言っていた。枢機卿はこの沈黙の判決を察した。

「心配いりません、兄上」と彼は宥めて始めた、「私のことも、あの娘のことも。私は克服します、...私であれ、あの娘であれ、私は両人のうち一方に打ち勝ちます。ただジュリオ殿はこの中から投げ棄てる必要があります。あの非難一杯の目をした男を片付けてください」。

公爵は相変わらず情熱で震えているこの男を不思議そうに見つめた。それから彼は視線を背後の自分達を追って来る二人の弟に送り、憎まれたジューリオをほとんど強引に道から茂みへ連れ込むフェランテ殿を目にした。

「振り向いて見ろ」と彼は枢機卿に言った、「あそこに陰謀家のフェランテが無邪気なジューリオを茂みに拉致して行き、我らに対するその阿呆な陰謀の一つを教えようとしている。しかしあの軽薄な少年は、このような裏切りには乗り気にならんだろう。そう思わないか」。

「状況によります」と枢機卿は囁き声で言った。それから彼は自ら気を取り直し、深紅の衣の襷を揃えた。二人は公爵夫人の一座に近付いていた。

七月の日中の暑さは、夕方頃、密な梢の葉にこもっていた。耐え難いほど蒸し暑く、幹の間で地平線が見えるとき、絶えず音もなく閃光が生じ、炎が煌めいた。

束縛されたキューピッドの黄昏の植込みでは、両人が入ると低い石造りベンチから一同が起き上がった。ただ公爵夫人だけは、その足許にアンジェラは隠れたが、自分のベンチに座ったままで、公爵に隣の空いた席を示した。

しかしペルシア人エミーンはブロンズのキューピッドに寄りかかかっていて、一同にオリエントのメルヘンを話しており、公爵にはそのように見えたのであるが、一方アリオストは彼の肩の背後から、彼を焚きつけたり、また正しいイタリア語の表現を教えたりしていた。

「令夫人、話しのテーマは何だ」と公爵は尋ねた。

「それは、このことです」と彼女は答えた、「ある種の光る人影は、輝いたまま我らの頭上に庇護するようにあるけれども、余所の国や信仰の異なる民衆にもその輝きを投げかけるのは、どうしてなのか、もっとも暗い水鏡の反映のときと似ています。これについてベン・エミーンは丁度素敵なペルシアの例を話してくれました」。

「私が察するに」とこの疑問に惹き付けられたように見えるアルフォンソ殿は言った、「東方の伝説の中では、我らの英雄をこのように自国産化することはよくある。カール大帝とその麾下の勇者達を考えて見さえすればいい。我らの詩人達は、一 キューピッドの背後のその陽気な目を隠している向こうのかの男は、少しも無邪気な訳ではなくて、これらの勇者達を勇ましく変装させて、それでペルシア人が手を加える余地はほとんど残っていない」。

「公爵、間違ったテーマ推論です」とルクレツィア夫人は微笑した。

「偉大なホーエンシュタウフェン王家もそうだ」と公爵は更に推定した、「赤髭公[Friedrich Barbarossa]とその孫、無信仰のフリードリヒ[二世]だ。勿論この両人は東洋人にその生来の顔を見せたことだろう。そして東洋人は実物大に両人を模写できたのだ」。

「ますます遠ざかっています」とルクレツィアは軽く頭を振った。「でも、私自身が貴方を間違った方向に案内したのかもしれませんが。私は、人類に全く比類のない人、到達し難い人を混ぜ入れて、この神聖なものそれ自体を私どもの世俗的な会話に編み込みました。ベン・エミーンはカール大帝とその勇者達のこともホーエンシュタウフェン王家のことも呼んでいません。私どもの主キリスト本人のことなのです。私の不明をお許しください。教会の神聖さを剥ぐつもりはありません。私は生まれと運命とで教会世界に呪縛されていて、自分の救いをこの世界からのみ期待しています。人間の姿となつて、おぞましい悲惨

さを憐れむという天の慈悲心が、ペルシアの物語の内容でもあります。これに私はそそられました。しかしこれでは明確ではありません。自らお聞きになって、判断なさってください。

ベン・エミーンはこう話したのです。

或る日救世主は使徒達と一緒に或る町の市門から出ました。その街道では陽射しの中、一頭の犬が死んでいました。使徒達は嫌悪し、罵って、この犬を避けました。しかし救世主はこの腐肉の許に立ち止まっていて、そこに残された唯一のものを取り出しながら、主は語りました、『ご覧、この歯は眩しいほど白い』と。[出典はゲーテ作『西東詩集』註記・論考、あの歯、真珠のごとく白し、317頁、岩波文庫、小牧健夫訳]。

ボッカチオの趣味の話しを鼻屑にしていたであろう宮廷人達は、このペルシアの伝説を訝しい、いや、不作法なものと思った。しかし公爵は黙っていた。

この話題から離れられなかったルクレツィア夫人は、感動した声で更に話した。

「それに奇妙なことではないでしょうか、我が公爵。高価な壁紙に見られるように、一人の聖なる画家の図案に従って織られ、裏面には、つまり異教徒の伝承の中では、救世主の完全な図ではなくても、しかしその慈悲心の深紅の色合いが見られるのです。異教徒の伝説は、救世主を、教会が尊敬し、表現するものとして、慈悲心の神々しい泉として証しています。最も厭わしい対象にさえも、この優しい主は、なお一つの美を見いだしています」。

重たい涙が夫人の両頬に落ちた。

宮廷人達は、領主夫人がそのような話すのを聞いて、驚いていた。明らかに、夫人は自分自身のことを考えていて、突然自分の中に湧き上がる、抑えがたい真実希求の圧力の下、恥も外聞もなく、透明なヴェールに覆われた、教会由来の自分の出自と自分の恐ろしいローマでの罪を呈示していた。或る者の口が、黄昏の中、歪んで嘲笑する一方、別の者の額は思案し、詮索していた。蒸し暑く、夫人は雷雨を予感している、— そう人々は考えた。

公爵夫人の青白さは、薄明かりの中、大理石のような微光となった。アルフォンソは一言も言わなかった。しかし彼は自分の妻を愛と関心を抱いて、恨むことなく眺めていた。絨毯商人のエミーンは壁紙の比喻を喜んでいた。

沈黙が生じて、不安げな蒸し暑さがより一層感じ取られた。遠方で不気味な鈴蛙の鳴き声と一羽のフクロウの叫び声が聞こえた。枢機卿は、会話に加わってはず、フクロウの声に注意深く、立腹して、聞き入っていた。

するといつの間にかフェランテ殿が木々の間から出て来て、自らの不協和音の声を聞かせた。

「ここでは有り難いお話しがありました」と彼は嘲った、「猥下が話されたのでしょうか。暗闇の中、禁欲的な表情にそれが感じられます。遅刻してしまって、残念です。私はいつも若干道徳を必要としていまして、一緒に連れて行った弟のジュリオは更にもっと必要としています。しかし弟は途中桃の生垣に引き留められてしまった。そこには新しい庭師の娘ピーカが潜んでいて、弟はそのピーカの手伝いをして、公爵の夕食用の桃を摘んでいます。いつもの握り方、噛み方、正直な戯れ、言葉遊びを用いながらで、これはアダムの時代以来、我々高貴な人類の楽しみであります」。

こうした緩いというよりも辛辣な語りは、火薬庫への稲妻のように響いた。

これまで自分の顔を公爵夫人の膝に隠していた、アンジェラ嬢は、矢の当たったライオンのように高く跳ね、茂みをかき分けて、逃げ去ろうとした。今にも不埒者が彼女の眼前に現れかねなかったからである。しかし枢機卿の暗い姿が彼女の逃走を禁じた。彼は彼女の前に立ち、彼の唇はこう呻った。

「ナザレ人[キリスト]は反吐の出る腐肉になお美しいものを見いだした。犬のジューリオの場合、主でもそれは見いだせなかったであろう」。

すると突然、激昂した娘の態度が変わった。無頼の青年という烙印は、一 奇妙なことに、結局この青年を指弾する権利は自分のみにあると彼女は信じていて、怒りや矛盾として彼女の中で沸き立った。彼女は自分の気位の高い頭を振り、唇を震わせた。

「アンジェラ嬢、貴女お一人でも、彼に対して称賛を知っておれば、話しは別でしょう」。

するとこの反抗的な娘は声を上げて言った、「ジューリオ殿は不思議な目をしています。妬む者でもこの目を、貴方も、枢機卿、認めざるを得ないでしょう」。

「認めざるを得ないと、本当に私がか」とイッポリトは震えて叫び、木々の闇の中へ引き下がって行った。彼は植込みを去り、数分後、そして或る恐ろしい行動の後、また戻って来た。

何が起きたのか。

彼が暗闇の中に入って、微かな出頭命令を伝えると、引っ掻き爪が、「鈴蛙」と「フクロウ」という手段で面会を求めていたのであるが、茂みから蛇のように腹這いで出て来て、それに彼の向かい側、道の反対側では、同じ姿勢で空威張りと言の血が現れた。枢機卿の前に出頭したのは、解散させられた彼の一味の最悪の三人であった。

「私に何の用だ、悪党どもよ」と枢機卿は彼らに嘯みついた。

両手で帽子を胸に当てながら、三人が嘯いた。

「猯下、金貨、金貨、金貨です。我々は貴方に他の者達よりも長くお仕えし、貴方にもっと期待しています。貴方の財務長官は、我々を皆同じに扱っています」。

すると邪悪なデーモンに枢機卿は襲われた。彼は重たい財布を取り出した。

「いいか」、彼は誘った、「ジューリオ殿をだな、...」。

空威張りは刺殺の仕草をした、「猯下、了解」。一

「そうではない、...」、その言葉彼の口の中で躊躇われた、「彼の目を潰す」。

最初一味は彼の言うことを分かろうとしなかった。

「奴を知っているのか」と彼は尋ねた。

「彼は我が友だ」と誇り高く引っ掻き爪が答えた。

「数分後に彼はここを通り過ぎるぞ、聞こえるか...すでに彼の足取りが聞こえる」。事実、並木道の砂利が軋んで、遠くの足音が聞こえて来た。

すると引っ掻き爪は枢機卿の足許に身を投げ、深甚に自らを憐れみ、呻いた。

「劫罰者の己だ。生まれなければ良かった。猯下、彼を刺せと命じてくださいませ。首か心臓か。ただあの可愛く美しい目は駄目だ。わしは出来ない」と彼はそれから決然と言った。

すると空威張りは彼を脇に突き飛ばした、「では、去勢雄鶏殿、我ら二人に任せてもらいたい。お主と分け合う必要がない分、それだけまだ」。

これはやはり引っ掻き爪が望まないことであった。枢機卿が財布を地面に落として、植

込みの方へ、自分のやって来た小道を戻り、振り返って見ることもしなかった。

植込みではブロンズのアモールだけが束縛されているのではなかった。会話のすべての精神が囚われているように見えた。人々は蒸し暑さで息が苦しい中、一緒に座していて、夜が沈み、ほとんど隣人の面影がもはや識別できなかった。鉛のような疲れと、同時に雷雨の稲光や雷を予期しているに過ぎなくても、一つの予兆という重苦しい不安の中、人々の肢体が麻痺していた。嵐の翼はまだこの時、束縛されていた。

その時、突然、大気の中、一つの叫び声が震えた。大変な恐怖と苦痛の呻き声で、すべての心が震え、すべての脈拍が止まった。

「ファラリスの雄牛[真鍮製、処刑具]の咆哮のようだ」とアリオストは驚いて叫んだ。「ジューリオ殿はどこだ」。彼は駆けて行った。

すると彼はこの不幸な男と一緒に戻って来た。ジューリオはアリオストにしがみついていて、アリオストが彼を引きずって来た。

「公爵の兄上」と痛みで正気を失った男は叫んで、「どこにいます。私を助けてください。復讐して、処分してください」。

「哀れな弟よ、しっかりしろ。何があった。何をされたのだ」、公爵は彼に話しかけた。一方人々は皆、彼を取り巻いた。

「枢機卿が闇討ちで私を襲撃させたのです。彼は私の目をえぐり取りました」。

人々は叫んだ、「松明を持って来い、医師を呼べ」。ジューリオ殿は、自分を支えているアリオスト諸共先に進み、枢機卿の方へ両腕を差し出した。枢機卿は公爵の側に立っていて、この兄が居合わせていることを、彼は感じていた。その覚束ない手で、深紅の衣の襷の中を探り、彼は跪き、その衣の中に絡まって、血まみれの頭を埋めた。

彼は枢機卿の体をしっかり掴んで、嗚咽した。「何故兄上は私の光を奪ったのですか。兄上は私から、私のすべてにして唯一のものを奪ったのです、...太陽の中で息をしている私の、...兄上はすべてのものであり、すべてを持っています。何も奪わないし、何も妬まない私から、...私は兄上の前に盲目の虫のようにのたうっています。兄上、私を踏み潰してください。私の息の根を止めてください、...」。

枢機卿は驚いた。彼は痙攣して、自分の深紅の衣をかき合わせ、叫び声を上げたが、その声は不自然に響いた、「私のせいではない、 — あの娘が唆したのだ、...あの女はそなたの目を称えた、...」。

この言葉は苦痛の余り気を失って行く盲人の耳にはもはや届かず、しかし驚いたアンジェラの心をずたずたにした。

救助が来て、松明と駕籠を用意した従者達もやって来た。混乱した一同は、別れも告げず、不安げなグループとなって、それぞれの道を通して、消えて行った。

暗い植込みは人気がなくなった。

この時赤く一つの閃光が束縛されたアモールを照らした。森を通じて、突風が呻り、木々の梢を折り曲げた。やがて天は、ただ燃え上がる炎と化し、大気は雷鳴に満ちた。それから陰気な雲が大地に流れ落ち、重たい雨が洗い流し、血と罪で汚れた庭園に溢れた。

第七章

枢機卿の犯罪以来、かなりの時が経過した。最初の悪事は次の悪事を誘発した。苗床に種が蒔かれ、芽生えて来た。

人々がジュリオ殿をかの晩のうちにも、雷雨の最中、馬どもの運ぶ駕籠で連れ戻したプラテッロで、この不幸なジュリオは、その暗闇の中、考え込んだり、あるいは新しく設営された庭園の通路を案内して貰い、最も暑い陽光を感じ取ったりしていた。陽光を彼はもはや目にすることはない定めであった。

彼は宮廷人の訪問を受けることはなかった。彼は不興を買った者と見なされていたからである。公爵は、枢機卿の犯行を裁判所で裁くことを考えていないように見えた。残忍で不明瞭な犯罪を真剣に裁いて、その犯罪から明瞭な距離を置いたり、個人的に縁を切ることすら考えていないように見えた。

勿論三人の徒党は、犯行後しばらくして、そのソルド貨幣と共に逃げたナポリで、多分以前の仲間によって殺され、その首がフェラーラの裁判所に送られて来た。この首には、生け捕りにするか、あるいは殺害された場合に、懸賞金がかけていた。

本来の犯罪者、イッポーリト・デステは、とても軽微の処分済だったので、その咎が認められなかったとか、求めもしなかった場合よりもっとひどいことに見え、彼によって殺害以上の苦しみを受けたジュリオに対する一つの嘲笑に似ていた。公爵は、数週間枢機卿を眼前から遠ざけることで満足していた。フェラーラの地が枢機卿に禁じられることさえなかった。

しかし枢機卿はフェラーラを去ることも出来なかったであります。というのも枢機卿は自分の町の宮殿の極めて静かな安心できる部屋に重篤な病で臥せっていたからであります、一と少なくとも従者達は、フェラーラ人達の用心深い質問に答えていた。これは本当なのか、あるいは自分に対して激昂している世論を宥めるために、賢い枢機卿が単に瀕死の振りをしているだけなのか、この点に関する人々の意見は異なった。

枢機卿は病気という噂を、プラテッロの盲人は何も知らなかった。というのは彼を訪問するただ二人の、はなはだ異なるフェラーラ人、つまりフェランテ殿とルドヴィーコ・アリオストは、それぞれ別の理由と関心から、枢機卿のことを話題にするのを控えたからである。

プラテッロへやって来て、自分なりにこの盲人を慰めて、その魂を喜ばせる詩人[アリオスト]は、枢機卿の廷臣であった、この恐ろしい守護者の好意に一目置いていた。彼は屠殺者と犠牲者の間に偽りなく浮かんでいた。この詩人は、自分のパトロンの悪口を言わずに、自分の友を気の毒がった。彼はプラテッロではパトロン[枢機卿]の名を決して口にせず、かくてジュリオが枢機卿のことを呪うのを聞いたりしないようにし、また盲人の情緒を根本的に掘り返して、長いこと暗いものにしたりしないようにした。

これに対してフェランテ殿は別の意図からやって来た。彼は弟の痛みを楽しんでいた。その痛みの上に諸計画を立てていたからである。彼は弟の傷を治そうと思っていなかった。その傷に毒を塗った。生来復讐心のない弟の憤りが、二人の兄、咎がある兄[枢機卿]と無関心の兄[公爵]に対してもっと深く燃え上がるように、その傷がますます激しく燃えるようにした。それ故彼は、枢機卿も、無事で罰も受けなかったわけではなく、重い病気に罹っていると、哀れな心にこう伝えることに用心していた。そのようなことを言って彼の同情心を喚起してはならない。自分にとって、この盲人は、以前目明であった時よりも、

有益でなくてはならない。

ジュリオ殿は、プラテッロで悲惨さの様々な階梯を経験していた。最初の長い、暗闇の中、呻いて過ごした日夜の後、肉体と魂の熱が減ると、彼はその享乐的性情に従って、穏やかな大気に触れたり、花々の匂いを嗅いだりすることを求めた。彼は極めて涼しい葉の下や、自分の庭園の極めて香りの良い小枝の下に潜んだ。

この時期にアリオストは、この友を訪問し始めた。この友の癒やしがたい悲惨さは、彼にとって最初、どうしようもない身の毛のよだつものに思われた。彼は一緒にプラテッロの木陰道を散策し、一緒に柔らかな芝地に横になった。みずみずしい果実で一杯の籠や高級ワインの杯を農場管理人の娘に運んで来て貰うよう手配し、盲人を楽しませ、啜らせた。

詩人は彼と一緒に厄災は何か非個人的なものとして嘆いた。詩人は、幸福のときでも、また不幸のときでも、情感の節度を称えて、すべては魂の色彩屈折力によると主張した。つまり幸福も痛みを与えることが出来るのであり、不幸も、一 悲劇としてみれば、一 享受出来るものである、と。[そのように自由な精神は/克服された人生の苦悩を見る。/浄福に喜ばしく石に刻まれると、/生きた胸を苦しませない。マイヤーの詩、ミケランジェロとその彫像]。いや、彼はこうまで主張した、どんなに官能的な男でも、神秘のストア派的血筋を有するのであって、運命の上に立つと、神々しい満足が得られる、と。

或る日詩人はまたポケットから書き上げた巻き物を取りだし、良く響く声で、一連ごとに、自分の英雄詩の細身の人物や素晴らしい展開をジュリオ殿の耳に吹き込んで、そして次第に暗闇がより明るく色づいて、この盲人のうっとりとした魂の中に一つの太陽が昇るまでになった。

最初彼は、その基調が英雄的に真剣なもので、受難に従って行くものである歌を選ぶように腐心していた。別離や犠牲、屈辱や同様の受動的英雄譚であった。

するといかに深くジュリオ殿がオルランド[ローラント]の苦痛に満ちた狂気に共感しているか、詩人は知ってしばしば感動した。詩人がその陽気な性格に従って、苦痛をまた取り除くときの、巫山戯た、グロテスクな描写にもかかわらず、共感していた。滑稽なまでに誇張された情熱、オルランドによって途方もない感嘆符のように、空中に投げ飛ばされた岩塊は[23,130]、この盲人の共感を妨げるものではなかった。

しかし最後に、ルドヴィーコ巨匠が、二十二歳のこの友が細身で美しく自分の側の草むらに横になり、速やかに治癒した二つの傷口を顔の下に休らえている両腕で隠している様を見ていると、自分によって新たに直感され、創造されたばかりの男について喜びが湧き、一つの歌を朗読したくなった。この歌は色合いや意欲、軽みでしかなく、この歌の中で醜陋した生は髪を振り乱してシンバルを叩くのである。

これが始めて生じたとき、デステ[ジュリオ]はその上品な手を詩人の手に置いた。「ルドヴィーコ、ちょっと別なものがいい」と彼は言った、「これは盲人向きではない」。

すると詩人は内心でこの喜びの拒絶に泣いたが、もっともこれは容易に説明可能な、然るべきことであると思われた。それに唐突でもなかった。夙にちょっとした諍いを目撃していたからである。盲人の内心を覗ける情景であった。

コランバは、このデステの以前の愛人であったが、このような人間の器用なやり方に従って、くりぬかれた目の包帯の際、大変立派に手伝い、その盲目の主人の看病をし、案内して、主人が自ら回復するまでになった。家来達の抑えた同情の声、「哀れな御領主がそ

の連れと一緒にだ」とか「彼女は母親代わりに面倒を見ている」という言葉をその鋭い耳で聞き取ると、彼は全くうんざりしてしまうのであった。

或る日、このコランバは、盲人を、アリオストの前で、抱擁し、子供のように扱うことをした。しかしデステは彼女をゆっくりと冷静に脇へ押し、言った、「コランバ、去りなさい、永久に去りなさい。そなたは盲人の役に立たない。我が感謝を貰って、去りなさい」。

彼女は彼の言を受け入れ、その日のうちにも、彼の同意を得て、彼の金貨を取めた後、より温かい地を求めて去った。

彼の広大な領地では、彼のために、数百人もの土地の家系の者達が、熱心で、欲のない人々が、生活し、働いていた。彼らの賛嘆すべき従順さは、若い領主の野蛮で贅沢な営みでも破壊されていなかった。今や彼の孤独な不幸の中、これらの誠実で無邪気な隣人達が日々より身近に彼の思いの中に入って来た。彼はその明かりのない通路で彼らに会うと、彼らの声を識別し、彼らの状況について教えて貰い、彼らの心配事に関心を示し始めた。彼らの単純で真正な同情は、彼の病んだ魂にとって心地良かったし、彼はこの人々についてアリオストに兄弟や姉妹の如く語った。

盲人のこのような意見表明、あるいは類似の表明から、詩人はデステ[ジューリオ]が、これまで所属していたのとは違う、別の人生分類、別の人間クラスの下に位置付け始めていると察した。つまり不幸な者達、受難の者達、損害を受けている者達、廃嫡された者達の分類であり、全く正常で、享樂の有資格者達とは明らかに別な条件にあって、別な法に従う生活圏にいるのである。

それにまたルドヴィーコ巨匠は、デステはこの彼の零落、下落を必ずしも人間憎悪のせいとか、盲目の厄災のせいにせず、少なくともある種の機会には、自身の咎によるものとしていることも察した。実際そうであったに違いない。この咎が関与しているに違いない。詩人の普段は明るいイメージの中で、復讐の女神が現れると、一 諺によれば、時に現世世界でも、犯行には処罰が踵を接して来るような具合であるから、一 するとジューリオ殿は物思いに沈んだ。そしてアリオストは多分窒息したような溜め息を聞いたことだろう。

アリオストはこのようにことに気付くと、それ自体良く知らなくて、須臾のものであるかもしれない感情に対して、不眠に押し潰すようなことを用心するようになった。一つには或る魂の経過に対する他人の介入をすべて暴力行為として嫌っているからであり、一つには自分が、軽快な翼を持っていて、絶えず物事の日の当たる表面に戻ろうと努めていて、それで少しもその為に召命されているとは感じなかったからである。

というのは真正な後悔の泉は、神聖な深みから跳ね出ると承知していたからである。ただその神々しい起源の孤独な静かな時にのみ、罪ある両手や魂は清純に洗われるのである。

しかし彼はこのような形姿のない深みに執着することに慄然とした。彼の考え、感ずるものの一切、彼を驚かし捉える一切が、彼の精神の形成能力を通じて、形やドラマへと変化して、それによって彼の魂への影響の厳しさと力強さを失った。

ルドヴィーコ巨匠は、その人目に触れる額の石盤に倫理的戒律を書き留めていた。しかし明るいアーチを横切って、色々な、陽気な、浮薄なならず者が踊って、その奥にある広大な部屋[脳]に住んでいて、詩人自身その賃借人を皆しっかり知っているわけではなかつ

た。

しかしジューリオ殿に対して彼の交際はためになるものであった。彼が彼から別れるとき、デステは彼の同伴をした。彼らは手を取り合って、プラテッロのプラタナスの木陰道を歩いて行ったが、盲人がこの自分を見ている者を羨望することもなく、この見ている者が盲人を同情することもなく、二人は善良な兄弟のようであった。というのは差し当たり愛が彼らの間の違いをすべて止揚していたからである。

アリオストよりも頻繁な訪問をジューリオ殿は自分の兄フェランテ殿から受けた。かくて暗いステュクス[冥府の川]の流れが詩人の明るい影響に加わって来て、ジューリオの魂を深みで荒廃させたが、アリオストはこの深みに達することはできなかった。

フェランテ殿は奇妙な半陰陽であった。精神的貧困と無尽蔵の発明衝動の混淆であった。彼の青春は、絶えざる恐怖の圧力の下、損なわれていた。子供の時、すでに無数のフェラーラにおける陰謀や策謀の証人となっていた。そして彼の時代の他のイタリアの宮廷の皿にもっと残酷な事柄が報告されるたびに、不安げな聞き手として、以前から恐ろしい事に囲まれていると感じ、これに対して、彼の不正直で力のない性情は、仮面を変えるとか、奇妙奇天烈な発明といった抵抗しか対置できないのであった。彼は中傷と戦うために中傷した。家庭的陰謀の犠牲にならないために、些細な陰謀を企んだ。すべては秘密の恐怖からで、何の真面目さも責任も伴わず、それで彼はますます非真実のもの、奇妙なものにならざるを得なかった。

しかしかの晩、彼の兄弟の中のかの弟、彼が最も不信を抱くことが少ない弟が、宮廷国家の最中、慄然たる仕方で襲撃され、その目が奪われたとき、彼の弱い精神に隙間が生じて、この時より、彼の中ではっきりとした、つまり自分自身は、兩人の中で、思うに、もっと危険な者として、更にもっと恐ろしい破滅が待っていよう、と。

自分に何らもはや無邪気な時を恵むことがなくなって、彼は睡眠を奪われ、すべての食事、すべての杯に疑念を抱くようになったこの病的不安のせいで、二人の支配者の兄弟に対する彼の恐怖は、絶望に満ちた憎悪へと転じて、彼は、この二人を王座から追いだし、殺害する決心をした。

しかし彼はこのために目の潰された弟を必要とした。

つまりフェランテ殿は、ジューリオ殿に対する無法でリンチ的目潰しは、公の感情に暴力的に影響を及ぼしたという見解であった。恥辱的で、想像力を刺激する事件そのものは言うまでもなかった。隷属状態の軛、国事や宮廷事での無条件の沈黙という命令が、イタリアの他の所でよりも厳しく課されているフェラーラ、それどころか、勿論この前代未聞のことが生じたフェラーラでは、沸き立った。特別な禁令が公布されて、ジューリオ殿のことを気にしたり、彼のことを調べたり、それどころかプラテッロに近付いて、彼の茂みに忍び込む — ことの一切を禁止する必要があった。

勿論、次のような次第となった。目を潰された男のイメージがフェラーラ人の思いや会話の中で崇高なものになったり、放恣な若者が、その危険な愛人関係や軽率な流血騒ぎに関し、人々は以前呪ったものであったが、哀悼すべき犠牲者、高貴な殉教者となったりした。

このことにフェランテ殿は良く気付いていた。それにまた彼は強力な演劇者的な血筋を有していて、フェラーラの転覆を確実にもたらすような効果的場面を考案していた。

ジュリオ殿は、一頭の白い、二人の従者が喪服で同行している婦人用馬に乗って、凝然とした空の眼窩のまま、受難の表情をしていた。その横に彼本人がいて、この狼藉とお咎めなしとを指摘しながら、公の同情を買っていた。

何人かの理解者を募ることは、フェランテ殿にとって容易なことに見えた。というのは小さなイタリアの暴君治世下で、反乱の伝統的素材はフェラーラでも欠けていなかったからである。それ以上のことはフェランテ殿にも明らかでなかった。しかし迅速な襲撃と、公爵と枢機卿の殺害は彼にとって不可欠に思えた。

このような彼の不安と悪意からの出来損ないと共に、彼は毎日哀れな盲人を迫害した。しかし盲人は公爵の殺害には、人間性を理由に迷っていたし、高貴に立腹した。つまりジュリオは自分が単に享受し、溺れている限り、このように高貴に怒ることは決して出来なかったであろうが、自分に対して割り当てられたお涙頂戴の芝居の役割を非難したのである。彼は、フェラーラの市場で、自らの悲劇的話しの大衆歌手的イメージとして自らを晒すことを恥じた。

しかし彼の心は兄の不安を掻き立てる影響に閉ざされていなかった。彼が目に見える明るい日々、軽蔑の微笑を浮かべて、阿呆な妄想として脇へ退けていたであろうものが、盲目によって暗くされた感情世界の中では、あり得るもの、中身のあるものとなった。この不幸な兄は、ある留保が付くものの、正しいことを言っているのではないか。兄には本当にひどいことがなされたのではないか。兄は迫害された子供時代を体験していないか。今日でも兄の命が狙われているというのは、本当ではないか。自分、ジュリオ殿自身が、いつも宮廷の陰謀事には反吐を覚えていたのに、得体の知れない暗殺の犠牲になっているのだ。

それで彼は、兄に同意するのに、吝かでなかった。兄が公爵の称えられて来た正義のことを、不正の一つの深淵と名付け、枢機卿の悪魔的邪悪さよりもましなものではないとし、フェラーラの宮廷を互いに締め合う、あるいは互いに相通じている蛇どもの絡み合い、一つの反吐の出る糸玉であり、断ち切り、踏み砕くのが甲斐あることと呼んだときのことである。

彼は自分が自覚している以上に、フェランテ殿の妄想と陰謀計画に取り囲まれていて、新たな体験が決定打となった。

秋の日の透明な空の下、プラテッロへ通ずる警察によって禁じられた森の道の一つを一人のアマゾン[女武人]が騎乗して来た。ほっそりした体型で、鞍上に非の打ち所がなく、騎士物語から出て来たかのように、冒険を求めている。しかし彼女が近付くと、彼女の顔はとても深く、癒やしがたい苦しみの表情を浮かべていて、彼女はむしろ永遠の痛みを抱えて、修道院を求めているように見えた。

さて彼女は城[宮殿]の眺望を許す一つの空き地に達して、馬から滑り落ち、彼女の明らかに公爵家の厩舎所属の黒馬の手綱を残っている木々の下、一本の若い榆の木に結んだ。

それから彼女は前方へ進み、また別の女となった。炎のような、なびく巻き毛で影になった目には、真実が宿り、白い口には、子供らしい面影の他に愛の反抗心が、いや危険な決意が窺われた。

彼女の立っている森の縁の高台から、彼女はパルテッロの全く静かな魅力的風景を眺め

た。

ただ欠かすわけに行かない防衛施設のみで囲まれた宮殿が、果てしない、緑の草原の中に横たわっていて、そこには一本の幅広い鏡のように澄んだ川が流れていた。一艘の漁師の舟も帆を風に膨らませていなかった。ゴンドラが快適な棧橋階段の突き出た半円形の堤防に横付けになっていて、その階段は内部の庭の柱石通路と中央建物に通じていた。戦闘時に必要な要塞の濠の代わりに、川が美しい居住地を囲壁と丸い塔とで庇護するように両腕で抱いていた。

すでに太陽は南中していた。すると彼女は棧橋階段の所で、老いた渡し守がゴンドラを離す様を見た。その舵の所に彼は腰を下ろして、待機した。

さて一人の細身の青年が、黒い服を着て、宮殿から出て来た。その顔は幅広のつばの帽子の影になっていて、何人かの彼に従う従者達に恭しく見守られて、ブドウの葉の巻き付いた柱石通路を横切った。棧橋階段で渡し守は彼に手を差し出して、ゴンドラに入らせた。彼はゴンドラに素早く、用心して上がった。それから老人は彼に權を差し出した。青年が權を揺り動かし始めると、老公の方はその小舟を舵で操った。

彼らが向こう岸の草原の縁に達すると、岸辺に飛び移ったのは渡し守で、この渡し守は青年に両腕を差し出して、下りる青年に触れているというよりは、むしろ青年を守っていた。青年は余り考えずに、真っ直ぐな方向、あるいはほぼ真っ直ぐな方向、なだらかに上昇している草原を越えて、櫛の木の下のベンチの方へ向かった。

聞き耳を立てていた女性は、軽く竦み上がって、びっくりした後、座ったままであった。この盲人は、毎日の緊張、訓練として、目の見える者達の模倣をし、出来るだけこの目に見える者達を欺き、出来ることならば自らをも欺くことにしていると彼女は察した。その際彼にとって役だったのは、彼の若々しい柔軟さと、彼の土地勘、彼の鋭い聴覚、すべての障害を入念に道から片付けて行く召使い達の勤勉さであった。

思いやりに満ちた両目が石造ベンチから近付いて来る盲人の歩行を観察しているとき、この哀れな盲人は草むらにある或る物につまずいた。覗いていた女性は何につまずいたのか見分けられなかった。盲人は膝を突いたが、しかし突き出した左手がほとんど大地に触れないうちに、また軽快に柔軟に起き上がり、右手に持っていた乗馬鞭さえも手放さなかった。この鞭を軽く手に握って、盲人は今や、残りの道を調べ、青白い、帽子で影になった顔に些細な苛立ちを浮かべながらそれを抑えていた。

両膝に両手を組み合わせて、頭を聞き耳立てるように傾げて、彼女は彼の動きのすべてを追った。

彼はやって来て、彼女の側の苔の生えたベンチに腰を下ろした。彼女の存在を彼は予感していなかった。

彼は何を呟いたのか。ただ小声で、半ば不明瞭に絶えず彼の唇に乗せていたものは何か。

彼は運命に対して嘆いたのか。神聖なものを侮辱したり、否認したのか。自分の兄弟達に罪を着せたのか。それとも自分の知らないまま、自分の隣りに座っている女性に罪を着せたのか。自分の惑乱を泣いたのか。

こうしたこと的一切、何もなかった。真昼の休み、牧羊神の時が彼の表情には夢想されていた。ジューリオ殿は奇妙な幽霊劇を演じていて、彼女はようやく段々と、彼の途切れ途切れの言葉や囁かれた詩行からそれを推察し、合成した。

すべてのイタリア人の精神に住みついているダンテの地獄の図に従って、漏斗状の深い地獄に人を送り込むのではなかったが、不幸の噴火口を掘り上げる仕事をしていた。その段を、彼は霊界の彼岸の劫罰者や不浄者ではなく、この地上の人生における惨めな者や受難の者、絶望の者で満たし、一常に段ごとに、前の段よりももっと不浄になって行き、その際彼は、無分別に、その最も下の、暗い溝に、盲人達を移していた。

彼は残忍に楽しんで、思わず歌いながら、この地を思い描いていた。盲人達は、盲人の案内人を申し出て、一緒に深淵に墜落して行った。盲目の青年達は薔薇の香りを嗅いで、しかし彼らが摘み取るために両手を差し出すと、骸骨にこけるのであった。

彼は韻のない、あるいは偶然の韻の三行詩節を歌った。さて彼は明らかに自分の兄、フェランテを考えていて、或るより高い所の溝に、不毛の野心家達と一緒に彼を見いだしていた。

兄上よ、兄上は王冠に手を伸ばそうとされる。

しかし手を高く伸ばそうとして空しい。

悪霊どもは兄上に王冠を譲らない。

地面に触れずに漂うという苛酷な苦しみよ。一

しかし私は一人の王侯だ、...しかし追放されて、...

まことに私はこの生命の王侯であった。[二人の生命の王侯、拙訳575頁]

私は神々の目を有していて、支配することに

慣れていた。一神々の目の見たものは、私のものであった。

しかし無念、殺害者は私に容赦しなかった。...

私は目を潰された。類を見ない悲惨。

「ジュリオ殿」と彼のすぐ側で、優しい声がした。「もっと深い悲惨さの溝がありません。一あなたより不幸な者達があります。これは、自分達の人生の歓喜を、無思慮に、不承不承自ら永久に壊してしまう者達です」。

そして彼は強烈なむせび泣きを聞き、温かい息吹と、彼の両手に落ちる涙の驟雨を感じた。

自分は夢を見ているのか、目覚めているのか。彼は震えながら両手を差し出して、別の両手を握った。その手は彼の手の中で震えていた。

「あなたは誰です」と彼は言った。「追放された盲人よりも、誰がもっと不幸と称せましょう」。

すると声がした、「私は、アンジェラ・ボルジアです。あなたの目が何よりも好きで、その目を壊してしまいました。一人の悪人にその目の美しさを称えてしまったのです」。

彼は彼女の両手を離して、青ざめて飛び起きた。逃げたいかのようであったが、しかし石造ベンチの角に当たって、よろめいた。

涙を滂沱と流しながら、彼女は彼の前に倒れ込み、彼の両膝を抱き、支えた。

「あなたに許して貰うことはできません。...あなたに私の目を上げることができたらいいのに。私は自分の顔から目を引き出しましょう。...でも私はあなたから奪ったものを、あなたにお返しできない。...私の贖罪は何かしら。私はどう贖罪したらいいの」。

「哀れなアンジェラ」と彼は穏やかに言って、彼女から身を振り解こうとした。「起きたことは仕方ない。そなたの罪のこと分からない。　—　しかしそなたも不幸の谷に突き落とされたことは分かる。我々兩人を殺害した者には二倍の罰が当たればいい。...そなたと私を、...そなたに贖罪はできない。私の目をそなたは新たに創れない。私を一人にしてくれ。去って、忘れてくれ」。

それから彼は向きを変えて、去った。彼女は彼を支える勇気すらなかった。ほとんど目でも追わなかった。

彼は平静に見えた。しかし彼の歩みはよろめいていた。小舟の老人はこれを見ていて、案じて、急いで迎え、彼を渡して、他の従者達と一緒に病気の子供のように、その宮殿まで彼の同伴をした。

そこで彼は涼しい広間の自分の臥所に身を投げ、荒々しく涙を流出させた。

それでは、兄フェランテ殿が、束縛されたアモールの植込みでのかの晩の出来事を彼に語るたびに、自分がフェランテ殿の慄然たる文飾とか、空想的な嘘と見なしたものは、真実だったのである。...

枢機卿はアンジェラの称賛のことで、彼に対して、復讐したのだ。

しかし娘を押し潰す咎は何であったのか。

枢機卿は悪魔的邪悪さで、娘の口から破滅的言葉を搾り取ったのだ。たとえ娘が臆病に黙っていて、罵りに耐えていても、この悪漢は別の機会を見つけて、自分、つまりこの振られた男枢機卿が鼻屑にされていると思う、ジューリオ、この完全に関係ない者に対して、娘の無愛想な冷たさのことで、復讐を悪魔的になしたことであろう。

このならず者は彼女にも致命的打撃を与えたのである。

この罪人の兄と、少なからず、この蛮行をお咎めなしに済ませている冷淡な公爵に対する狂暴な怒りがジューリオを襲った。そして彼の胸で煮えたぎり、血管を通じて騒いだ。

彼は兩人の没落を欲した。彼は臥所から飛び起きて、自分のメモ帳から一枚紙を切り取って、フェランテ殿へ、怒って、乱れた読み取り難い文字のまま、自分は公爵と枢機卿の殺害のために彼の味方をすると書いた。

馬に乗った使者が、ジューリオ殿の血が静まり、自分が仕出かしたことを考える暇もないうちに、そこから急ぎ派遣された。

翌朝プラテッロでは最上位裁判官が武装した配下と現れ、デステ[ジューリオ]を逮捕した。

「いやはや、結構だね。我が友よ、私の不幸の後、最初の君の訪問だ」と盲人は彼が入って来たとき、嘲笑して呼び掛けた。

「公爵から訪問を禁じられていたのだ」と裁判官は裁判官らしい調子で答えた。

「公爵が禁じたのか。...我が友よ、公爵は彼の妻と君とが、毎日、時間ごとに、精神的に姦通を犯すのを禁じなかったかな。...取り澄まし屋よ、君もいずれ自分の裁判が待っていないよう」。

こう言って、ジューリオ殿は両手を、彼を縛る獄吏に差し出した。

第八章

ジューリオ殿の逮捕の後、数日して、フェランテ殿の逮捕が先行したが、両兄弟は公爵の用意した裁判で裁かれることになった。公爵は十二名の構成員の最高裁判所のうち、六名の若い裁判官を除外して、それで一人の青年の司会する白い髭[老人]達からなる法廷が残ることになった。というのは、ヘルクレス・ストロツィーという法に通暁したローマ人頭脳がこの審理を行うことは自明のことであったからである。

反逆罪の審理では、厳格な守秘義務が法によって定められていて、公爵はその上特に厳格にこのことを要求していた。しかし大抵の秘密同様に、これはただ不完全に守られたに過ぎない。白髪の頭の何人かは、一人の女性の、妻であれ、他の女性であれ、煩わしい好奇心に対して完全に固くは抵抗し得なかったと思われるからである。

かくて裁判について、また牢の中での両兄弟の生活について、かなり明瞭な特徴を持った伝説が形成され、この伝説によると、陰謀は様々な要素から生長して来たという次第であった。何人かの侮辱され、あるいは無視されたと思う高貴な家柄の者達の他に、例えばサン・チェザリオのボスケッティーや、幾つかの破産した、あらゆる情報や収入に飛びつく宮廷貴族が参加していた。更に支払いを貰えなかった芸術家、画家や彫刻家、声が出なくなった宮廷歌手、とりわけ賭けで破滅した宮殿警護の大尉とか、公爵のいわば両義的侍従、半ば不興を買っていて、まだ職に残留している者とかであった。この侍従をフェランテ殿は高額で買収したが、この者が陰謀を裏切った。最も間近に仕えているので、彼に対して、アルフォンソ公爵を仮面舞踏会で刺し殺すという危険な役目が指示された時のことである。この侍従は、公爵の足許に身を投げて後悔し、告白した。公爵はこの陰謀に怒髪して怒り、普段は自制心の強い男であるが、我を忘れて、それでこの男の頭を、自分が手にしていた杖で、 — この場面はある庭園であったが、 — 殴って流血させた。それから彼は思案して、彼を許し、この裏切り者に陰謀家達の下でのスパイの役目を任せた。フェランテの宮殿で、この侍従は、盲人の同意の紙片を押さえることができた。この紙片をフェランテ殿は共謀者達に勝ち誇って知らせていた。かくて決定的証拠、ジューリオ殿の殴り書きの怒りの文面が公爵の手に入り、公爵はこれを裁判に指示した。より身分の低い罪人達に関し、簡単な裁判が行われた。アルベルティーノ・ボスケッティーと宮殿警護の大尉は拷問を受けた後、斬首された。三人の芸術家は車裂きの刑に遭った。

公爵の兄弟達に関しては、もっと手間がかけられた。彼らは詳細に、丁重な作法で尋問された。彼らの罪は最初から、不吉な手紙で証明されていたのであるが。ジューリオ殿は裁判に簡潔に自らの言葉で対処した。自分の感情表現に控え目で、打ちのめされた挙措であった。彼は自分も他人も咎めなかった。ただ自分の過去を厄災と呼んでいたが、しかしこう呼んで自分の罪を減ずる気はなかった。自分は、枢機卿の憎しみを、自らの独立不羈の姿勢、自らの乱暴な行状で買ってしまった。しかし兄の人柄を侮辱したせいではない、と述べた。枢機卿が自分に対し、その名誉心の欠如を非難していたこと、自分に対し繰り返し兄の反感を請け合い、これに用心するよう警告していたことを認めた。

このことを自分は今思い出しています、と。

しかし当時、自分に対し行われた目潰しの犯行は、殺害よりもひどいものに思われまし

た。非人間的な不正、地獄的残忍さに思われました。この犯行を公爵が処罰していない点、これが自分には最も深く応えました。支配している兄上の無関心で、自分の心は破れました。そしてただ復讐だけを考えてのです。しかし今は、この復讐の失敗が、新しい血で、殊に自分の兄弟達の血や、自分の主君の血で両手が汚れる場合よりも、好ましいものです、と。

これに対しフェランテ殿は、とフェラーラの人々は語り合った、確かに同様に否認こそしなかったが、しかしそのシニクの仕事で、裁判ばかりでなく、また公爵殿下のことも枢機卿のことも罵詈雑言を浴びせたものです。公爵殿下のことを彼は狭小な脳みそ、枢機卿のことを犯罪の一人の哲学者と呼んだものです。それから彼は裁判に無理難題を押し付けました。自分の押収された財宝の深紅の衣や黄金から、鈴付き帽子と一着の高価な道化服を自分のために仕上げて欲しい、と。というのは、道化師、これが以前から自分に巣くっていて、これが白昼出現したのであり、この自分に親密な人格が、無への跳躍を然るべき服を着て、鈴の物音と共に完遂することを望んでいるからであります、とそう彼は自分の依頼の理由を述べたものです。

この請願は公爵のことを顧慮して拒絶された。

ジュリオ殿は全く別の依頼をしました。ジュリオ殿は、牢でも、裁判同様に簡素に振る舞いました。最初彼は子供のように泣いて、涙の源泉が完全に干上がるに至りました。それから彼は、何日も自分の兄のことで耐えた後、この兄の不埒な悪徳やうるさい茶番で、彼は苦悩するほどに攻撃され、疲れ果てたのですが、自らの一つの部屋を頼みました。つまり自分の告解の師、プラテッロのマメッテ神父[虚構]と一緒に過ごすことを頼みました。これは彼に許されました。そこで彼はこのフランシスコ会士によって、数年前から自分の良心を揺り動かして、以前は甲斐なかったキリスト教徒としての最後の準備をして貫うことになりました。この最後を彼は恐れるというよりもむしろ望んでいます。彼の言うには、自分の夜の中に差し込まれ得る唯一の明かりは、永遠の明かりであるからというわけです。

果たして彼は死の覚悟を立派に固めたのであろう。

裁判官達は、フェラーラで有効なローマ法に従って、これは反逆罪には死刑を当てるもので、一致して、罪人達の高貴な出自を顧慮して、断頭台での斬首の判決を下した。しかし公爵はその遂行を躊躇った。彼は躊躇っていたが、しかし公爵のことを知っているフェラーラの人々は、処刑の延期は単に数週間の儀礼的期間であると誰も疑わなかった。

ジュリオ殿にとってこの宙づりの待機はひどい日中と眠れぬ夜をもたらした。かくて彼は再び裁判所に訴えて、暗闇の精霊が彼の盲目を悪用して、彼の魂を壊していると告白して、長い時間を紛らわすために、哀れな盲人でもできるような手仕事、織物とか編み細工、類似のもの等を許して欲しいと願い出た。すると裁判所は、牢獄長に委託して、プラテッロから二、三束の麦わらを、一 持って来させた。上等の莫産を編むときに使用するものである。

さて或る日、フェラーラの人々の嬉しく感動した目の前を、プラテッロの十二名ほどの百姓が晴れ着を着て、最上等の輝かしい麦わら束を肩に担いで、真面目にフェラーラの通りを歩いて、宮殿の牢の方へ向かった。宮殿で彼らの束は確かに受領されたが、しかし人々の方は拒絶された、捨て子のストラッポヴェロのみが例外であった。つまり牢獄長はこ

の若者を受け入れて、この若者がジューリオ殿に編み方を教えるようにさせた。かくて盲人は再び仲間を得たが、最初のときよりも、もっと無邪気な仲間で、しばしば彼の子供のような笑い声が聞こえることになった。しかしほんのしばらくであった。

彼がこの簡単な技芸を習得すると、牢獄長はジューリオ殿から十分の報酬を受けた若者を牢獄から締め出した。これに対し、この若者は絶望者のように閉じこもり、鉄格子にしがみつき、情けない叫び声を上げて、それで彼は静かな治安の良いフェラーラで同情のちよとした高まりを引き起こした。

プラテッロの人々が彼らの目潰しに遭った領主をいかに愛し始めていたか信じられぬほどであった。彼の過去の暴走は十分に贖罪されたと人々が思っていたせいかもしれないし、人々にとって彼の不幸の暗い背景の上に彼の温かい正直な情緒の素地が魅力的にまばゆく出現したせいかもしれない。

すべてのこうした刺激的出来事に対して、公爵の宮廷での主要人物、しかし人民の目では最大の咎人たる枢機卿は、完全に遠ざかっていた。というのはこの強力な枢機卿が、病室の薄明かりの中、自分の良心と死神と戦っていたというのは、真実のことであったからである。

ジューリオ殿が血の滴る頭を枢機卿の深紅の衣に埋めたベルリグアルドでのかの不幸な晩、びっくりした客人達が散って、最初の一陣の風が梢を過ぎたとき、イッポリトは自分の従者達や馬どもを呼んで、愛馬に飛び乗って、ベルリグアルドを去りながら、ここは彼がかなりの期間、整備した所であるが、雷雨の錯綜する稲光の下、お供の者や駆けて行く馬の方には目もくれず、フェラーラの方へ逃げたのであった。そこの自分の町館の中、ホールの松明の明かりで、彼の視線は弟の潰された目で汚れた深紅の衣に落ちた。それは雷雨の奔流に出会っても、洗い流されず、彼の体は戦慄に襲われた。

しかし彼は自分の精神をとりまとめて、自分の部屋に閉じこもった。彼は鉛のような眠りに陥り、この眠りは朝方、不気味な高熱感に移行した。それでも彼は臥所を離れて、いつものように朝の仕事を始めた。彼はその仕事を理解しようと努め、他の時と同じように支配しようとした。彼はしばらくそうした。何の逮捕命令も行われず、公爵本人も現れなかった。日々、彼の確信のなさの不穏な気持ちが募った。彼はいつも食事に反吐を感じ、自分の臥所の枕が怖かった。というのは、彼の夜は次第に慄然たるものとなって、彼の夢はますます野蛮な馬に乗って暴れるものになったからである。

もはや彼を完全な意識へと目覚めさせない太陽が昇ることになった。彼はある暗い峡谷に入って行った。そこには燃え上がり、混み合う幻想が充満していた。

すると厳かな行列が歩いて来た。それぞれ二人ずつで、男達と女達である。これは彼の仮借ない、飽くことのないフェラーラでの野心による多数の、多数の犠牲者で、彼の稀な、しかし狂暴に個人的な欲望によるもっと数の少ない犠牲者と一緒であった。

すると殺害された使者達、消えた囚人達、絞殺された目撃者達、そして今や並んでいる二人の美しい悲しげな女性達、滴る髪の毛、腫れた首、背中で縛られた両腕のブロンド髪的女性、それに心臓から出血している黒っぽい髪的女性であった。

しかしすべてのこうした人々が二人ずつ歩いているとき、恐ろしい行列の中央に一人っきりで、一人の巨人が出血した空ろの眼窩のまま歩いて来た。突然まばゆい閃光が流れ出て、刺すような青い天が広がって、その中心に巨大な秤が揺れていた。それは長いこと揺

れていた。すると、ますます克明になりながら、天から両の大きな目が出現し、一方の杯の皿に赤い涙を落とし、その皿は金属的響きを立てて深みに落ち、もう一方の皿は羽子のように空中に高く飛んだ。

ようやく彼の前ですべてが不安と夜の中に消えた。

数ヵ月経って、ある朝、彼は最後の髄まで力が消耗して目覚めた。しかし、死ぬほど弱っていたが、感覚は完全に澄んでいた。

すると自分の側に兄の公爵が座っているのを見た。公爵は案じた視線で彼を見守っていた。

「私はどこにいるのか。私はどうなったのか」とこの病人は息を吐いた。

公爵は用心して答えた。夏の暑さと、ひよっとしたらベルリグアルドの沼の瘴気のせい、パドヴァの医師達の主張では、枢機卿に有害な高熱が生じたのかもしれない、と。同時にこの病人は再びより鋭くなってきている目で、窓の壁龕で、黒っぽい教授のガウン姿の二人の威厳ある男達が互いに協議しているのを目にした。この二人に関して、彼らが彼の夢の中の人影に混じっていたのを彼は思い出した。

「猥下は助かった」とこのとき一方の男が言って、相手は同意して頭を頷かせた。

「学者の貴方らの助けを賜り、感謝申し上げます」とイッポーリトは力ない声で囁いた。「しばらく公爵殿下と二人っきりにさせて欲しい」。

「ほんの一時です」とパドヴァの医師達の一人が注意して、警告して指を上げた。両人が部屋を去った。

「ベルリグアルドで何があったのです。本当に、私は弟の目を潰したのか」。

公爵は悲しげに肯定した。

「弟は生きていますか」。

再び公爵は肯った。

「弟は恐ろしい外見になっているのか」。

「弟とはもはや会っていない。最初はただそなたのことだけを考えていたからだし、その後、弟はフェランテと一緒に我々に対し謀反を起こしたからだ。復讐しようとしたのだ」。

「兄上はそのことを私抜きで見つけたのですか」。

「彼らは裏切られた。両人とも死刑判決を受けて塔にいる」。

このときこっそりと壁紙が持ち上げられ、医師の声が、恭しく、最初の会話の終了を願った。

公爵は弟の垂れ下がっている手に優しく接吻した。というのは、公爵は弟を単に愛しているだけではなくて、イッポーリトの救出は不可欠の助言者がまた戻って来ることでもあったからである。

「寒い十一月の一日だ」と彼は起き上がりながら、言った、「そなたの暖炉に火を熾すよう、命じておこう」。

かくて火が熾された。

枢機卿は燃え上がる熾きを凝視した。

「炎よ、苦悩よ、燃え上がれ」と彼は溜め息を吐いて、微睡みにまた沈んだ。

病人はゆっくりと回復した、あるいは元来、回復しなかった。というのは彼の力は尽き

ていたからである。

毎日彼はアルフォンソ殿の訪問を受けて、医師達から、自分に宛てられた手紙を開封する許可も得ていた。

公爵が入って来たとき、彼は思案してこれらの手紙の一つを手にしていた。書状はミラノのスフォルツァ、ルドヴィーコ・モーロ[1452-1508]からのもので、珍しい中身で、イッポーリトは兄に紹介した。

この領主は、夙に親しい仲の枢機卿に自分のミラノを避難所として申し出ていた。領主は気の毒がって、そう説得していたが、しかしベルリグアルドでの流血事件を非難していなかった。この事件は、この領主の意見では、枢機卿がフェラーラにもっと長く滞在すること、フェラーラで国事の先頭に立つことを難しくするであろうものです。というのは、暴力行為を辞さないであろう時代であっても、奇妙なことに、ジューリオ殿の目潰しに対してはイタリアの諸宮廷で不可解な怒りが生じているからであります。これに対しては打つ手はないでありましょう。自分としては枢機卿をミラノの自分の城砦で待っています。自分としては、イッポーリトはその兄上の公爵領とフェラーラの政治を自らの現存で実害を与える気はないと承知していますし、またミラノにも十分政治的策謀が見られ、その解決には、枢機卿の手のような巧みな手を必要としているのです。

「この古狐の言う通りだ」と病人は平静に言った、「兄上、兄上は私抜きで切り抜けて行く必要があります」。

公爵は驚いた、「そんなことをそなたにやらせたくない」と彼は答えた、「どうして私はそなたを手放せよう。...あるいはそなたの代わりがいようか」。

「公爵夫人がいます」と枢機卿は微笑した。

何度か彼は公爵と、自分がフェラーラの国事に留まることは不可能であるということを出題にした。

「私自身このことについて驚いています」と彼は言った、「しかし私は手紙からこう察しています。つまりジューリオの目が潰された後、私は兄上の許、イタリアで最も公正な君主の許に留まれないであろうし、自発的に追放されて、兄上が正義に基づいて、私を罰したり、あるいは処分を下さなかったりするという面倒を省くことになるであろうと全イタリアが想定しているのだと、私は察しています。

私は自分の感じで臨終であっても、私は世論に耳を傾けています。

私はしばらくしたら、イタリアを妨害するであろうあの悪霊を再び捕らえて、破滅させるまで、私はまだ長く存命でありたいと願っています。私のすべての書状が、チェーザレ殿について一杯です。その牢の鉄格子を揺さぶり、牢を破壊するであろうと知らせています。私は経験から、精霊どもが大気中を運んで、倦まずにばらまいている噂は、最後には実現するものだと承知しています。

この危機が生じたら、私は兄上の許で尽力して、それから去りましょう」。

ようやくこの病人が起き上がり、ある従者の腕にすがって歩いてみたいと表明する日がやって来た。従者は枢機卿を大きな隣接する広間へ案内した。そこの冷たいタイルには枢機卿への配慮から上等の麦わら絨毯が敷かれていた。

彼が従者を支えにして、一步一步、歩むと、彼の視線は長い麦わらマットに据えられた。この上を歩き回りながら、その綺麗な趣味の良い細工に彼は気付いた。

「これはどこで買ったのだ。誰が編んだのか」と彼は尋ねた。従者は当惑して答えた。「牢獄長の許です。ジューリオ王子がこの細工を好まれます」。

すると枢機卿は、あたかも上品な王子の手が編みながらマットの上を滑って行くのを目にする思いがした。彼の右手、左手、眼前、その横、至る所で、数百もの白い勤勉な霊の手が編んで動いていた。

彼は目眩がして、同行している従者の腕の中に落ちた。

第九章

公爵の町の宮殿の最古で、最も下の階に、これは重たい建物で、幾つかの建築様式と諸世紀とを思い出させる建物であったが、内側の中庭を眺められる低い広間があった。余り使われない人気のない部屋で、ローマ時代の部屋と呼ばれていた。というのは七人のローマ人の国王の胸像が壁に沿ったブロンズの柱の上に収まっていたからである。国王達は粗野で山師的に見えた。しかし芸術的価値とは異なる価値を有していた。これらは純銀で鑄造されていて、かなりの家宝となっていた。

その胸像は奇妙に早い薄明かりを眺めていた。というのは今日は一年で一番短い日で、中庭には早期の吹雪のヴェールが見られたからである。ほとんど開けられない広間も、強力な暖炉で燃え上がる薪の束が数時間かけて住み心地良くしていた。明らかに厳かな行事が準備されていた。というのは筆記用具のある一つのテーブルが広い、三つ折りの窓のアーチに面して、部屋の中央に置かれ、二脚の紋章の飾られた肘掛け椅子が用意されていたからである。

丁度テーブルの真上では、絵画で飾られた天井パネルの中央の地に、臆している二連獣の上に犯罪人のローマ女性小トゥッリア[Tullia die Jüngere, 姉の夫と組んで、自分の夫[その弟]と姉を殺害し、姉の夫を王位に就かせた。拙訳503頁]が聳えていて、その二頭立て馬車の車輪の下で、自らの殺害された父親の死骸を砕いていた。しかしその次の絵では兄ロムルスによって刺し殺されたレムスが巨大な足を突き出していた[ローマ建国伝説]。

このトゥッリアの下、彼女について、ルクレツィアとアンジェラは、夏この広間で涼を取るたびに、冗談の口論に陥る習慣であった。

そのときアンジェラは、子供のような具合に、この流血のローマ女性に憤って、その不自然な犯罪を咎めた。

「悪い人。何故この人を記憶に留めておく必要があるの。何故こんなひどい人を覚えているの。これは女じゃない。夫殺し、姉殺し。...父親殺しよ。...義理の兄の誘惑者、...奇形児、魔法使い、女悪魔、...」。

するとルクレツィアは微笑して、かっとなった娘の熱い頬をさすった。

「そうじゃないのよ」と彼女は娘の耳に囁いた、「この有名なローマ女性は、黄昏時に一人の男に身を任せたのよ。その男の罪の精神が乗り移って、彼女はその人の意志のない道具となったの。そうなのよ、私を信じなさい。私には分かる」。

今日ローマ時代の部屋は空ろで静かであった。ただ中庭から正午以来、弱いハンマーの音と、低い声でなされる会話が響いて来た。

今や注意深く、櫛の木のドアの錆びた錠が回された。そのドアはギイギイと開けられ、アンジェラは爪先で、真剣な目をして入って来た。喪服を着て、カールした髪には黒いヴェールが被されていた。

彼女は窓辺に急いで、窓を開け、中庭で、両デステ家の者を待つ断頭台の建設を眺めた。

三つの木製の段があって、赤い足場で、これに今深紅の布が掛けられていて、すでに上に置かれている断頭台には黒いビロードが張られている。そしてすべてを軽く覆って、薄い吹雪が舞っている。両兄弟を永遠の冬に招待する気なのであろうか。

彼女は処刑場をまじまじと見下ろした。するとすぐその窓の下で、微かに迫る呼び声で彼女は目覚めた。

「姫君、哀れなジューリオ殿を心にかけてください。彼のために嘆願してください。恩赦を要求されよ」。 —

更に、幅広の労働者帽子の下から嘆願する視線が、彼女の探す目と出会ったが、それからこの同情する男は速やかに他の大工達の間に分れ込んだ。

今や、従者達が、二番目の、宮殿内部に通ずるドアに面しているドアを開けて、翻るトガ[外衣]姿の裁判官らしい人影が案内されて来た。

最上位裁判官のヘルクレス・ストロツィーで、公爵夫妻の代わりにアンジェラ錠を見て、少し不機嫌に見えた。彼は夫妻にローマ人の部屋で会うことを期待していた。

娘はその右手に印璽を押された巻き紙を認めて、びっくりして叫んだ。

「死刑判決なの、取り消せないの」。

裁判官は厳密に答えた、「まだ署名はされていない。しかしアルフォンソ殿の正義はこれを証するであろうことに疑念を抱いていない」。

「正義なんて、人間並みの正義で、神々しい正義ではない」とアンジェラは語った、「裁判官の貴方は、この最初の咎は誰にあるか、忘れたのですか。この陰謀の原因となったもの、枢機卿の蛮行を忘れたのですか」。

「それは別件だ」とストロツィーは答えた。娘の興奮に気分を害していた。「我らの今日の件とは何の関係もない」。

「まあ、嘘つき、偽善者だわ」と彼女は叫んだ、「もし誰かが裁かれるべきであるとしたら、まこと私の方がジューリオ殿よりも罪深い」。

裁判官は苛立って頭を振った。

「それに公爵夫人はどうなの。恩赦を支持していないの」と彼女は続けた、「いつも夫人を当てにしているのに、夫人は公爵に大きな影響力があるのでしょうか」。

「こうした原理的法律問題では夫人は違う。この点では公爵は揺るがない。公爵は、自分の存在同様に、こう確信している。支配者の不可侵性こそは、今やイタリアの至る所で生じている新しい君主制の基本条件である、と」とストロツィーは言った。

「フェランテ殿とジューリオ殿を恩赦したら、自分で自分の支配の没落を確定することになると公爵は信じています。ルクレツィア夫人は余りに賢明ですから、以前から、公爵の個人的確信を揺さぶることは慎重です」。

「それで貴方は」と彼女は彼を怒らせた、「ストロツィー、貴方は貴方の盲目の友の不利益となるよう、公爵の領主としての確信を共有しているのですか」。

「私は法の厳格さの代弁をしています」と裁判官は誇り高く答えた。

すると、幅広の、宮殿内部に通ずるドアが開かれ、公爵が公爵夫人と共に現れた。

アンジェラは人目に付かぬ窓の壁龕に退き、両殿下は並んで安楽椅子に座り、二人に向かい合って最上位裁判官が立っていて、巻き紙を広げた。

「その判決は承知しているが」とアルフォンソ殿は始めた、「私は一文一文検討した。しかしストロツィーよ、作法通りに、私が署名する前に、今一度ゆっくりと我々に読み上げてくれ」。

ストロツィーは、公爵夫人が居合わせることで心奪われて、苛立って読み間違うことがあって、そのたびに過ちを訂正する公爵をうんざりさせながら、判決を厳かに読み上げた。

その間、遠くの牢の塔から弔鐘が鳴って、アンジェラは窓から処刑の行列を眺め、両デステ家の者がフランシスコ会士の僧侶と死刑執行人と共に処刑台に上がるのを見た。

「最上位裁判官よ、私が署名をするよう、渡してくれ」とアルフォンソ殿は言って、ペンを浸した。

するとアンジェラは隠れ場を去って、公爵のペンを執る手を自分の両手で抑えて、公爵の足許に身を投げた。

「駄目です、アルフォンソ殿。貴方の弟ではなく、私を処刑してください。...私に科があります。今日まで黙っていました。いつも貴方の憐れみとルクレツィアの憐れみを当てにしていたからです。でも今、申し上げます。二度私はジューリオ殿に厄災をもたらしました。最初の災難は、私が彼の目を褒めて、彼の兄、悪魔の枢機卿の怒りを買ったときです。 — 二つ目の災難は、私が貴方の命令に反して、この潰された目の方をプラテッコに訪問して、自分の苦しみに彼の苦しみを重ねて、彼を絶望に追いやったときです、...」。

公爵は自分の膝を抱いたボルジアをびっくりした不同意の眼差しで眺めていたが、しかし返事をする前に、ドアがまた開いて、皆にとって思いがけない、誰からも招待されていない病人の枢機卿が現れた。

魂が去ってしまったほどに衰弱して、軽く猫背で、禿げ上がって高くなった額の下の射抜くような目をして、彼はただ精霊となった風で、残忍で何でもお見通しに見えた。

彼の従者達が彼の椅子を暖炉の側に置いて、彼は炎の側に腰掛けた。一方他の一同は彼に向かい合った。

「私は誰にも呼ばれていないが、刑場のためにやって来た」と彼は小声で言った、...「しかし兄上、兄上に一つお願いがあります、...」。

すでに絶望していたアンジェラは膝の許から起き上がっていて、火の前に立ち、彼の言を遮った、...

「あなたはいつも恩赦を妨害する、つむじ曲がりなんだから。構わないわ、血を沢山飲みなさい。ここには恩赦なんかない。...ここは地獄よ。...あなたのいる所、あなたの側、あなたの中は、最初から地獄だわ。あなたを蛮行に駆り立てたのは、救世主の言葉なのよ。それが私ども二人を劫罰に追い込んだ。

『神々しい憐れみの深紅の色はペルシアの童話にまで浸透しています』とこの夫人は仰有った、 — 彼女はルクレツィアの手を握った、 — 「でも枢機卿、あなたの深紅からは憎しみと血が出現するだけです、御名の中で最も聖なる名前が呼ばれさえした

ら、...」。

「阿呆な娘だ、黙るがいい」と枢機卿の唇が震えた、「そなたを絞め殺してしまいかねない。私は、一 そなたの心を得られなかったが、一 そなたにはうんざりしている。おぞましい奴だ。...そなたが私の弟の目を憎むべきものにしたのだ、以前私を信頼して見つめていた天上的目を」。

「病気でも、相変わらず残酷なのですか、イッポーリト」と公爵夫人は言って、アンジェラを自分の腕に抱き寄せた。「ベン・エミーンの話に幾分すべての咎があったという彼女の言葉は正しいではありませんか」。

枢機卿はゆっくりと兄嫁の方を向いた。彼の目は燃えていた。

「ナザレ人イエスについて何が知られていよう」と彼は言った、「人々が彼の弁舌や行動について語っていることは、信じがたく、大事なものではない。私は彼のことを知らない。神たる者が十字架に掛けられようか。...私が知っているのは、教会によって天国へと高められた国王のことや、神学によって創造された三位一体の第二の神に過ぎない。天国は神のもの、大地は我らのものだ。この我らのものは、権力と領国だ。我らに刃向かう有害無益なものを破壊することが、支配者の義務だ。

しかし我々がここで哲学をしている間、外では二人が死神を待っている、...

兄上、一言で言うと、二人は死んではなりません。二人を私にください。もはや私の首に一滴の血もかけないでください。...私は混乱し、窒息します。一 君主を弑する者を兄上はもはや目にしてはなりません。牢に隠しておくことです。しかし私に免じて生かしておいてください」。

公爵は頭を傾げて、考えていた。それから言った、「私はそうしたくない。それはわたしの君主としての正義を害する。しかし二人の刎ねられた首でそなたが不安に思ったり、二人の死者がそなたを墓に引き連れて行くよりは、むしろ生かしておこう。

私がそうするのは、フェラーラに対するそなたの多くの貢献の故だ。

バルコニーを開けよ。我々は外に出よう。そして最上位裁判官の貴方が、判決を読み上げろ。恒例の恩赦の文言を追加して」。

彼らは立ち上がった。しかし枢機卿は燃え落ちた熾きの許に座っていた。彼は膝の上に毛布を掛けさせて、椅子の背に寄りかかり、目を閉じた。彼は自分に対し許された恩赦の目撃者として見られることを望んでいなかった。

従者が、外套や頭巾、ガウンを持って来て、戸外に出る貴人達が冬の寒さから守られるようにした。

ルクレツィアが、まばゆく白い、最上等のフランドルの羊毛で出来た尼僧のフード付きの外套に身をくるみ、アンジェラ錠がその手伝いをしているとき、無邪気な顔の一人の小姓が近付いて来て、祭壇前の聖歌隊少年のように、素早く公爵夫人の前で跪き、銀の皿に載せて二通の異なる手紙、つまり大部な書状と、容易に隠せる小封筒を渡した。

ルクレツィアはその上書きに素早く視線を向けた。それはベンボの美しく流麗な筆記と、小封筒の上の一 ルクレツィアは死ぬほど驚いたが、一 チェーザレ・ボルジアの上品な女性的筆記であった[1506]。

彼女はその双方を広くて白い袖の中に滑り込ませ、アンジェラが不安げに問い質す視線を向けたので、彼女は沈黙を要求して、口に指を当てた。

女性達はバルコニーに出た。そしてすぐ間近の下の方に、狭い中庭の処刑台の二人の兄弟を目にした。

吹雪は止んでいた。明るいつ夕方の天が、壁と塔の間、上方の高いところから見下ろしていた。

めそめそ泣く弔鐘は黙っていた。両手でバルコニーの鉄の欄干を支えている公爵とルクレツィアの間立っているヘルクレス・ストロツィーが判決を完全に我を忘れて朗読し始めた。というのは、彼の側の不思議の女性が白い羊毛の許、何故か分からないまま震えていて、彼女の青白い、しかし燃えるような目が、フードの下から霊のように大きく見つめていたからである。

彼は最大の情熱のとき随伴して来るかの奇妙な不安を感じていた。

死刑判決を永遠の牢獄生活に変える恩赦の文言を彼が読み上げ、このように始めたとき、つまり、

「殿下は、その権力の充実により、また同時に恩寵の泉より汲み上げて、...」、恩赦を受けた者達はその頭を上げて、公爵に感謝の準備を始めた。

フェランテ殿は、決意を変えて、黒いビロードの服をまとって、威厳を有し、彼の面貌は、痙攣も、面貌を損ないがちな歪みも見られず、真剣で、悠然としたものであった。

「兄上の公爵に感謝します」と彼は始めた、「しかし私は兄上の恩赦を受けません。私はいつも自分の人生が嫌であった。何故か、これは分からない。私は自分の人生を愛さなかったもので、私はこの人生を悪用し、自分と他の者達を軽蔑して来た。至る所、私が人生を振り返って見ると、たわけた仮面、空洞、羨望、空無しか見えなかった。...どこにも綺麗な足跡が見えない。思い出して、足を汚さずに足を踏み入れることができるような所がない。私は兄上が私に贈られる人生を恐れています。私は、自分の自我と自分の不安を始末したいと願っています。 — 兄弟達よ、お達者で」。

彼は小さな、液体の毒を詰め込んだフラスコを胸から取り出して、歯の間で噛み砕いた。万一に備えて金貨で購入していたもので、誰にも妨げられない間のことであった。彼は仰向けに倒れ落ち、苦痛で喉をゴロゴロと鳴らせ始めた。

びっくりしたマメッテ神父がすでに身罷った男の上に屈み込んでいるとき、死刑執行人達がすでに用意されていた棺の一つを持って来て、僧侶は死者を中に入れ、人々は死者を運び去った。

盲人は全く一人っきりで断頭台に立っていて、泣いていた。というのは起きたことを耳にして、察していたからである。

それから彼は、恩赦が布告された女墻の方に頭を向け、アルフォンソ殿は沈黙したままそこにいると推測して、見上げた。

「公爵、私は命拾いしたことを感謝しています。フェランテ殿のように私は、兄上の贈り物に仕返しをしません。私は私の存命の富を阿呆者のように無駄遣いしました。今や私は盲目になっていて、貧民達の中の最も貧しい者の一人で、喜捨の有り難みが分かり、それを大事に思っています。私は金持ちから貧民に移りました。私は転げ落ち、断崖の別の側へよじ登りました。そこは現世の享樂する者達、満ち足りた者達を、飢餓の者達、渴した者達と区別するところです。歓樂とその同志達の許を私は去りました。 — 私は受難の仲間の許へ行きます。いや、私は実直に悩み、耐えたいと思います。それ故私は新たな

人生を恵まれたことに感謝しています」。 —

すると公爵はほとんど善意に言葉を自分の盲目の弟に向けた。「ジューリオ殿、私は貴方の話したことのすべてを理解したわけではない。しかし私は、貴方が生きて、改心するつもりであることを聞き取った。これは理にかなったことであり、またキリスト教徒的なことである。だから私は貴方への恩赦を後悔していない」。そして彼はこのデステを、別な中庭の角櫓にある牢獄に連れ戻すよう合図した。

彼がまだ言い終えないうちに、アンジェラ嬢は急ぎ足でローマ時代の部屋へ去った。彼女は軽くて黒い半分仮面を着用して、恩赦に列席していた。そして通路や階段を急いで、離れた塔部屋へ行こうとした。その出窓の下をこの囚人は通り過ぎるに違はなく、そこで香る薔薇を大切にしていた。その中の最も美しい薔薇を折って、こっそりと窓を開けた。

すると彼が、彼を手で案内しているマメッテ神父と一緒にやって来た。彼女は彼に薔薇を投げ与えた。

「赤い薔薇が貴方に飛んで来た」とフランシスコ会士は言って、薔薇を器用に受け止め、盲人に渡した。「神様の優しい思いが、牢獄まで同行される」。 — そしてこの盲人が間違った方向にお辞儀をすると、「右の方です、殿下。花は姫君アンジェラの窓からです」。

そこジューリオ殿は両手を挙げて合図をし、叫んだ。

「おおきに、愛しい災難よ」。

判決のバルコニーでは、アルフォンソ殿が語っている間、ルクレツィアは上品な指でチェーザレ殿の手紙を開けて、こっそり急いで読んだ。手紙は野心的に、そして不気味に敬虔に書かれていた。「妹よ、聞くがいい、多くの厄介事後、我が神は私を地下牢から出す気になられた。この素晴らしい恩寵の弥栄があって、より偉大な神の名誉となって欲しいものだ。私は全力を傾注しており、何事にも絶望していない。そなたの眼力にかなった一人の男を送ってくれ。イタリアで私の手足となり得る、そなたの見いだせる最良、最優秀の男だ。そなたの才覚でその男を占有してくれ[味方にしてくれ]。そなたは挑戦してくれよう、私を愛してくれているから。その男を私の義兄、ナバラの公爵の許に送って欲しい。そなたを抱擁している」。

両頬を紅潮させて、美しい狂気に駆られ、このデーモンの呼び掛けに抵抗せず、この瞬間、恐怖も名誉も感じないまま、ルクレツィアは裁判官の身も心も、誘惑の視線で惑わした。

彼女は裁判官をバルコニーに押し留めた。一方公爵は部屋の中へ入って、その間に、ローマやナポリからすでに発送されて到着したばかりの公爵と枢機卿宛ての手紙で覆われたテーブルに着席していた。

使者達の侵入で目覚めたイッポリトは起き上がって、自分の兄と一緒に立った。二人は知らせの便の封を切って、やがて極めて重大な会話に沈潜した。というのはこれらの書類はすべてただ一つのことを話題にしていたからである。つまりチェーザレ・ボルジアの解放と、間もなくイタリアに彼が出現するであろうその見込みのことであった。

視野の広い枢機卿は、政治的危機の強度を確信していて、圧倒されていたが、しかしどんな間近なことも見逃さなかった。彼はその関連を予感していた。彼の目は、今や窓の壁龕の公爵夫人与会話している最上位裁判官に気付いて、彼女の華奢な蛇のような首の魅力的な曲折と転換を追っていた。

不遜な勇気を抱いて、ルクレツィア・ボルジアは公爵夫人の居合わせる所で、兄のためにヘルクレス・ストロツィーを占有した[味方にした]。意馬心猿のストロツィーは、自分がかくも危険な派遣のために命を賭ける前に、自分の願望の実現を求めた。そこでルクレツィアは怒りと嫌悪の余り震えた。

「行きなさい」と彼女は彼に囁きかけた。彼女の分別の明かりが、彼女の情熱から漏れ出た。「チェーザレの許へ行きなさい、ぐずぐずしないで。...公爵が私の兄の参上を知って、皆に兄と関係することを死罪で禁止するまで待つつもりなら、馬鹿なこと。...そうなたらあなたの命はない。急ぎなさい。...向こうをご覧なさい、...公爵は今その出来事を聞き出しています。フェラーラの市門からすぐ出なさい」。

ストロツィーは邪心があって、躊躇っていて、すぐに彼女の助言は無効になった。

公爵の前にはその執事が立っていて、公爵は執事に、早速宮廷人のすべてと宮殿の従者達を皆、ローマ時代の部屋に集合させるよう、指示した。

数分後にこの部屋は一杯になった。公爵は集合者の中心に進んで、ルクレツィアの手を固く握って、述べた。

「皆の諸君、たった今、チェーザレ・ボルジア殿、ロマーニャの公爵と呼ばれているこの男がスペインから逃走して、今にも我々の許に出現するかもしれないという知らせを受け取った。

この男はイタリアの破壊者、略奪者である。諸君らの中で、この男と関係する者は、いかなるやり方であろうとも、死罪を申し渡す。身分を問わず、特例もない。

こうした一切に関わらず、ルクレツィア夫人に対する私の敬意、諸君らの敬愛は揺るがない。諸君らの領主令夫人には私は自分同様にに信を置き、諸君らも私同様に従わなければならない」。

彼は彼女の手を握り、彼女は彼に温かい感謝の視線を送った、彼のことを裏切っていたけれども。

皆が出て行くとき、最上位裁判官は枢機卿と同行した。枢機卿は、階段を下りながら、彼を支えにしていた。二人は枢機卿の籠の所まで歩いて、枢機卿は冗談を言った、「冬の会話に相応しいものではない。...しかし、ストロツィーよ、燃える蠟燭の許で羽根を焦がす蚊の気分をどのように思われるかな。蚊は痛みを感じずと思うか。ほとんど感じない、と私は思う。さもないと蚊がいつも新たに輝かしい炎の中に突入することはない。思うに、蚊は恍惚となって、酩酊して死ぬのであろう、...だろう」。

第十章

ルクレツィアは、両デステの処刑台の上にあるかのバルコニーで、チェーザレ殿の凱旋の雄叫びと救助の叫び声に驚愕し、圧倒されて、突然自分の兄に対する愛で従順になって、裁判官のストロツィーを共犯者に仕立てた後、数時間後に、魔法から半ば覚めて、後悔し、臆病な裁判官にすっかり嫌気が差していた。この裁判官は、彼女の弱さに対し、禁欲的に引き下がることをせず、彼女の昔の隷属的厄災を悪用して、この卑劣漢は、彼女が自分自身と自らの完全な正気に従う限り、決して同意するはずのないことを要求したのであ

った。自分の情欲に盲目に従っている裁判官、夫人に対し、自分の領主夫人に対し卑俗な取引を持ち出すこの男に対する致命的な嫌悪感に彼女は襲われた。彼女にその罪はあった、それ故彼女は彼を憎んだ。

かの晩ルクレツィアは誰もいない自分の寝室で二つ目の手紙を開けた。

この手紙では、誠実なベンボが、ローマからチェーザレ殿のイタリアでの再登場を知らせ[もはやチェーザレはイタリアへは行けなかった]、一刻も躊躇うことなく、自分の夫の両腕に懇願して身を投じ、夫に自分の弱さを告白して、自らに対し庇護して欲しいと述べるよう、跪いて嘆願する次第ですと書いていた。

この手紙を読みながら、燃える蠟燭の下、彼女は草臥れ果て、微睡んだ。しかし夢が始まって、また飛び起きた。霊の風が舞っていて、蠟燭の炎が揺れていた。

彼女は暗い角の方を凝視した。すると動かぬ視線の先に、チェーザレの姿が象られた。今や、この時、彼が進み出て、彼女の臥所へ歩み寄って来た。彼がいつも着用しているピロードの仮面を、彼女のよく知っている、青白い面貌から浮かせていた。

するとルクレツィアはよく響く叫び声を発して、それで隣の部屋で眠っているアンジェラが目覚め、彼女の救助に駆けつけ、彼女の側に、鶏鳴の時まで座ることになった。

公爵夫人は最初の曙光と共に、ベンボの手紙を再度、更に三度目も読んだ。それから彼女は素早く起き上がって、ナイトガウンのまま、素足で宮殿の通路の冷たい石のプレートの上を、アルフォンソ殿の部屋まで行った。

彼の臥所は空であった。公爵はもっと早い時刻に旅立っていて、書き置きがあったが、それには、自分はボローニアに急いで行く、この危機の時代、自分の封建領主の側にいて、つまりとんでもない教皇ユリウス二世猊下に忠誠を尽くしていると思われるようにするためだ。自分は妻に支配権を委託し、助言者としてイッポリトを残しておく、と記されていた。

寄る辺なく、庇護もなく、子供のように泣きながら、ルクレツィアは自分の部屋に戻った。

明るい日中となると、幽霊どもは消えた。しかし公爵夫人は、その兄によって次第にまた完全に心が捉えられて、夫人は精神をすべて稼働させて、兄のために尽力し、自分の生活のすべての時間を兄への奉仕のために使い始めた。自分はこのことを忠実な妹としての愛により、この世で最も自然なものであるこの愛により、偉大で不幸な君主、自分の愛する兄のために、許可されていることであれ、不許可のことであれ、果たしていると彼女は考えていた。

この兄は無限の未来を持った一人の青年ではないか。自分の失った領地に戻って来て、イタリアで支配者の役目を演ずるといふ、自分の出自の力と自分の稀なる王侯的才能の力によりそうするという彼の資格に関し、彼女は完全に納得していた。

最上位裁判官に彼女は一行認めていた。この書き置きを彼女の侍女、秘密の使いの女が、再び持ち帰らなければならなかったが、この書き置きで彼女はこう伝えていた。自分は昨日ローマ時代の部屋で、思いがけず解放された兄のことで、喜び狼狽して話しましたが、この言葉を自分はもはや覚えていません。ストロツィーもこの言葉のことを放念して欲しいものです。その理由を述べることもさえ致しませんが、貴人ならば、私が申し入れますので、放念なさるのは、当たり前のことでありましょう、と。

新年の始まりは、イタリア全体にとって不安と危機の時となった。民衆は興奮していた。宮廷の人々は息を呑んで、西アルプスやピレネー山脈について耳を傾けていた。一方チェーザレは最初ほとんど自分の身辺を明らかにしなかった。そして自分の兜の飾りの竜のように、自分の鎖の輪の中からゆっくりと姿を見せた。

何と色々な可能性が考えられることか。

彼は領主のいないロマーニャから、ヴェネツィア人の傭兵隊長として、教皇を追放することが出来よう。彼はフランス国王の縁者として、世の事象の何らかの変転を通じて、この国王から、そのイタリア駐在の軍の一つのトップに任命されるよう計らうことができよう。

チェーザレ・ボルジアがイタリアで愛されているのは、一つの事実であると、皆が知っていた。民衆の本能と兵士達の熱狂とで、人々は彼を故郷の軍通曉者、小さな都市暴君達の残忍な、しかし有益な追放者として祭り上げた。ロマーニャでは、いや、デステ家の所有地、フェラーラ地方でさえも、民衆は彼を神格化し、彼の記念碑を作った。かつて最下層のローマ人がネロの記念碑を作ったようなもので、ネロの没落をこの民も決して信じようとしなかったものである。

不気味な春であった。国の官房では書記達が夜通しペンを執って、夜間に覆面の使者達の馬が嵐を縫って鞭を打ちながら街道を飛んで行った。

公爵夫人は青白く、消耗して見えた。というのは、彼女もペンを手から離さなかったからである。友好的なイタリアの諸宮廷に、チェーザレ・ボルジアの立派な意図について納得して貰う必要があった。彼女は、神聖この上なく誓うと共に、極、上品で優美な言い回しで、彼の思いは高貴で平和なものであり、意図は正義であると請け合った。そしてこのことを彼女は、兄の二番目の使者が到着する以前に、自らの英知で行っていた。

この使者は、フェデリーゴとか言う者で、一通のフェラーラ公爵夫人宛の書状を持って、そしてポローニャの征服者、ユリウス教皇宛に派遣されてやって来た。しかし教皇はこのチェーザレの使節を牢に投げ入れた。ルクレツィアはこの兄の宰相を、こう彼女はこの山師のことを形容したが、厳格な教皇から解放して貰うために、大いに苦労尽力して空しかった。この件については自分の加勢をするよう自らの夫に切に頼んだ。しかしアルフォンソ殿は教皇に逆のことを助言して、この曖昧な使節を静かに絞殺させるように計らった。

一 しかし同様に甲斐がなかった。というのは、この使節は遁走したからである。

このようにして公爵夫人は自分の兄のために、百もの関心事や仕事を有していた。すべてを高度な知恵を発揮して、促進したり、あるいは用心して巧みにまた打ち切ったりした。

彼女とはわずか数部屋分しか離れていない同じ宮殿で、夜遅くまで病める枢機卿は、チェーザレ殿との彼女の結び付きを極めて厳格に監視し、彼女のすべての諸計画を調べ上げるよう努めて、それらを或る点まで育てながら、それから頓挫するように仕向けた。

彼は自分がフェラーラの国事から引退し、自らの選抜され、立派に訓練された政治的手先を解雇する前に、自らの外交的傑作を仕上げることに魅力を感じていた。

それで彼はルクレツィアのすべての織物を見渡して、自分の仕事部屋の静寂の中、公爵夫人が最初から勝負の決まっている件で仕掛けるときの極めて鋭い分別と、無尽蔵の情報の備蓄に賛嘆していた。というのは、彼は彼女の手紙を開封し、それらを読み、また巧みに封をし、その手紙を良心的にその宛先へ送ったが、しかし自分の利害圏からの敵対的内

容の書状を同封しており、それで彼女の手紙の効果は完全に破壊されてしまっていたからである。

ルクレツィアには少しもこのことを気付かれないまま、彼はこのことを実行した。公爵夫人を以前にまして愛している公爵が、このことを画策したのであった。公爵はどのようなことをしても夫人を守り、決してさらし者にする気はなかったのである。というのは、賢明で魅力的なルクレツィアは、チェーザレが接近して来ると、もはや自分を抑えることができず、再び自分の昔の本性に呪縛されて、早期の性情に戻り、罪なくして罪深くなり間違いを犯すと公爵は承知していたからである。

誘惑的女性に向かい合って、枢機卿も同じ好意を抱いた。枢機卿は彼女の発揮する愛する魅力という庇護的魔力に賛嘆して、アルフォンソの利害にかなう限り、この珍しい威力と結託した。この威力はルクレツィアを若い時から、埋没させる波から持ち上げて、天翔けて、砕くような深淵の上を運んで来たものであった。

かくて枢機卿は、この賢い女性を刻々と欺きながら、邪悪さを享受するのではなくて、医師に似た仕事をすることになった。この医師は、狂気に悩む愛しい病人の女性に対し、毒や殺害の武器を遠ざけるのである。

公爵夫人は、枢機卿の反対操作を部分的に察知し始めていたが、賢明さと、似通った素質という無意識の敬意から、同様に好意的であった。

彼女は彼をししばし食事に招き、それからやがてとても活発に会話して寛いだ。この会話のときあれこれの謎を解き、急所を掴もうとするのであるが、極上のチェスの試合に似ていた。ただ公爵夫人は利点をすべて熱心に利用しようとするのであるが、一方卓越せる枢機卿は、微笑を浮かべながら、夫人が犯した失敗に注意を向けさせたり、あるいは自分が奪った駒を太っ腹にそのままにしていたりした。

チェーザレの使者、フェデリーゴは、ポローニャの教皇殿下の許に行き、そこで教皇に捕らえられる前に、内密に公爵夫人に兄からの二番目の手紙を渡していた。数行の至急書いた紙片であって、その行間に、ただルクレツィアの目には歴然と、悪辣な提案と悪魔的囁きが記されていた。

この誘惑者は、自分はフランス国王と連絡を取り合っていて、これまでの所成果がなく、自分はまずイタリアを目指しているので待つほかないと記した後、このチェーザレはこう述べていた。イタリアで足場を固めるためには、一人の協力者を必要としている。重要な性格の尋常ならざる男で、愛想良く、且つ畏怖の念を与える人物である。自分は一人の男を知っている。まことにあつらえたような人間で、裁判官ヘルクレス・ストロツィーのことである。この男なら自分を良く知っていよう。というのは彼女の夫の父親、以前のヘルクレス公爵が、自分にこのストロツィー、古典的面影と厳格な挙措のこの若者を、ローマにその代理人として派遣したからである。当時自分は権力の頂点に立っていたが、この高みに、神と運命の恩寵により、また愛する妹の協力を得て、再び昇りたいと希望している、と。

「最も大切な妹よ」と彼は結んでいた、「能う限り、最大の極端な尽力をして、この無二の男、私が兄弟として評価する男を、私の味方に引き入れて欲しい」。

ルクレツィアはこの手紙に青ざめた。しかし彼女は今や数週間前から、再びチェーザレと一緒に、その多彩な、若々しくて愛敬もあるその面影と共に暮らしていた。かくて彼は、

不在の者であるが、再び彼女のすべての思いと一緒に溶け合って、彼女の魂をその不埒な感覚で穢した。

確かに彼女は以前よりも力強く、この恥辱的隷属に抵抗した。しかし彼女は、彼が彼女を、彼女の二番目の、彼によって殺害された夫の臨終の床から連れ去って、そして彼女が抵抗を忘れたときから、このチェーザレに、自分の運命としての彼に繋がれていたのではなかったか。

彼女は彼に再び従った。

彼女は裁判官を呼んだ、しかしアンジェラを側にいさせて、彼女の手を握っていて、一瞬も彼と二人っきりにならないようにした。

ヘルクレス・ストロツィーは公爵夫人の狭い礼拝堂に案内された。夫人は黙って彼に兄の手紙を差し出した。

彼が読み終わると、一　ただ一度読んだだけで、というのは彼の情欲を刺激し、彼女に対し屈辱的に働きかけているように見える邪悪な言葉がすでに永遠に銘記されて心に燃えたからであるが、一　彼は沈黙して、燃える夢に陥った。彼はチェーザレが凱旋してイタリアの王座に手を伸ばすのを見た。彼自身は、彼の宰相として、その側に立っているのを見た。フェラーラの公爵は消えていた。多分チェーザレ・ボルジアによって消され、中心から排除されたのであろう。ルクレツィアはまたしても花嫁になっていて、以前よりも若々しく明るい。そしてフェラーラに輿入れの際、彼が目撃したときのように、彼の酩酊した眼前に、同じく凱旋する光輝の姿で立っていた。

彼は彼女をその酔った感覚の視線で見ている。というのは、彼の目の前に立っていたのは、別の女性だったからである。確かに彼女は兄の命令で微笑していた。しかしその大きな明るい目はメドゥーサの目のように石像化させるように凝視していた。しかし彼は自分の地獄墮ちを見ていなかった。偽善者的に、彼は生来の共和主義者で、チェーザレ・ボルジアの正義、自分が常に称えて来たこの正義について語った。この気前の良い男は、小人や弱者を慈しみました。ジュピターの稲妻のように、彼はただ誇り高い女墻のみを砕きました、と。彼は強さの徳操を称えた。正義の抑圧を通じて、より高い正義に戻るような暴力行為を称えた。そのようにして、彼は暴君称賛というすべての反吐の出る語彙集を汲み上げた。彼は自分が話すことを信じていたならば、厭わしい人間となっていたことだろう。しかし彼は確信のないことを、空虚に語った、一方彼はただ一つの欲望を抱いていたが、それは自分の目の前に立っているルクレツィアから、一つの報酬を誘い出す、あるいはもぎ取るという何らかの約束の言葉であった。それから突然ルクレツィアの口に死神のように苦い、ある微笑が痙攣するのを目にした。

時に彼はこのような目論見を追いかけて、血迷ったことを口走り、暴力支配の賛美を不気味に混入させていた。しかし彼はそれから突然ルクレツィアの口許に、死神のように苦い、微笑がびくつくのを目にした。彼はアンジェラの真面目で、深い悲しみを湛えた目が、裁くように眉を引き締めて、自分に向けられるのを見た。自分の周りにある十字架や神聖な像の煌びやかさよりも、この無邪気な娘の沈黙の非難の方に彼の心は驚かされた。

彼は、ほんの些細な希望保証の言葉も得ることを断念しなければならなかった。

そこで彼はしばらく両腕を組んで、不幸な表情をして考え込んだ。

「私はチェーザレ殿の許へ参ります」と彼はそれから言った、「令夫人、貴女は彼宛に

私に何を託されますか」。

「貴方自身です」とルクレツィアは答えた、「兄は私が兄に従っていることが分かりましょう」。

「貴女は兄上に進んで従っていると私は申してよろしいでしょうか」。

ルクレツィアはただ弱い微笑を浮かべて答えた。速やかに彼は消えた。

するとアンジェラはルクレツィアの肩を抱いて、目と目を合わせて、尋ねた。

「あの人はろれつの回らぬ言い方で、いつも何を言いたがっているのです。あの人の報酬は何です。あなたは彼に何を約束しているのですか。死神ですか、...」。

公爵夫人は再び微笑して、質問しているアンジェラを一人にして去った。

アンジェラは祈祷台に腰を下ろした。しかし主の祈りを称えながら、次のような思いを拭えなかった。

「思慮の足りない言葉を話して、私は一人の方の目を潰させて、立ち直れません。でもこの女性は微笑したままです。一人の人間を熟慮の末に、確実な死へと追いやっているのに」。

しかし彼女はだからと言って自らをましな女と見なさず、その温かい胸に自分とルクレツィアに共通する惨めさを閉じ込めていた。

三月の月半ばを過ぎた或る日のこと、枢機卿はすでに開けられて、真っ青な春の空の一杯見える窓際で、公爵夫人と食事をしていた。

そのとき会話は偶々最上位裁判官に触れて、枢機卿は彼について、彼はこっそりとフェラーラを去っていると主張した。

これに対し、公爵夫人は、内心青ざめながら、これほど几帳面な役人が、休暇を取らずに、長目の旅行をするのは、不思議なことだ、思うに、この休暇の裁可は領主夫人の仕事でありましょう、と述べた。

枢機卿は答えた。ヘルクレスは自分の十二名の同僚に休みを告げております。公爵不在の折、これで十分であろうと考えたのでありましょう。ちなみに彼はこう口実を述べています。ストロツィー家の家庭の事情で、すぐにフィレンツェへ訪問する必要があるのだ、と。

公爵夫人と枢機卿はそれから、この旅立ちの本当理由についてあれこれ推測を行った。しかし二人は腑に落ちる理由を見いだせず、彼が述べた理由が結局本当かもしれないと一致した。

両人ははっきりと確信して、ヘルクレス・ストロツィーはチェーザレ・ボルジアの許にいと承知していた。

彼らの目が空間を透視することが出来たら、両人は、この恐れられた公爵[チェーザレ]と裁判官とが天辺から足先まで甲冑を帯びて、栄光の南の空の下、花咲き香るハイデ草の中、ある断崖の湾曲を這い上がって行く様、必殺の通路や銃眼を備えるゴシック式の砦の四本の急峻な塔に接近して様、多くの他の武装した兵士達を従えて忍んで行く様を目にしたであろう。

包囲された女牆から石のつぶてが飛んで、何人ものよじ登る者達が深みに投げ飛ばされるのを彼らは目にしたことであろう。今や一つの塊が砦から転がり落ちて、岩から岩に強

力に跳ねて、教皇の恐るべき息子に当たり、この息子を砕いて、深みに突き落とす様を目にしたことであろう。

第十一章

四月になって、フェラーラは花で覆われた。ルクレツィアは公爵の厩舎のラバ達に荷を乗せた。彼女は別荘の一つへ移りたいと思ったのである。

すでに昼寝を必要とするような午後の一時、彼女はアンジェラ嬢と共に、開いた窓辺にチェス盤を前に寛いでいて、彼女の宮廷で働いている従者や牧人の歌声に耳を傾けていた。豊饒な春に誘われ、畏敬の念で声を潜めている愛の歌であった。

このときこの歌声が完全に黙して、中庭の門で馬の蹄の音がした。

「客人だわ」とルクレツィア夫人は言って、女達が起き上がった。

自分のためにドアを開けた従者達を押し退けながら、公爵が入って来た。

「ローマから戻った」とこの旅装の男は始めた、「急いで参った。貴女の顔を見たいと思ってな、愛しい夫人」。 — 彼は彼女の手を握って、接吻をした、 — 「また貴女の許に戻って、心から嬉しい。しかし遺憾ながら、貴女に訃報がある。貴女の令兄、ローマニャ公爵がもはや存命ではない[1507]。

この知らせは確かだ。ナポリを経由して来て、ローマの私の許に届いた」。

彼は胴着から一通の手紙を取りだして、広げた。

「三月十五日に、以前、自分の手本であり、名前の守護霊でもある、ローマのユリウス・カエサル同様、チェーザレ殿はスペインのヴィアナ城前の溪谷で倒れた。彼は自分の義兄、ナバラ国王に仕えて、大きな勇気を発揮して攻撃していたのであった。 — ここに記されている」。

このようなことを公爵は外交官風に正確に伝えた。更に付け加えた、「若い、騎士らしい死だ」。それから敬虔に結んだ。

「彼が安ラカニに眠ランコトヲ。主ヨ、永遠ノ安ラギヲ与絵エ給エ」。

こう話しながら、彼は公爵夫人を注意深く観察していた。

夫人はしばらく石化して立っていた。それから一声叫んで崩れ落ち、沈んで跪いた。矢で射られた誘拐者が突然手放した略奪された女と変わらなかった。

悪霊どもを知らなかった公爵も、彼女を抱き締めていた、目に見えぬ腕から彼女が転げ落ちるのを見た。彼はこの沈んだ女性を胸に抱き上げた。女性は涙を止めどもなく溢れさせていた。

「隠しておけません、...申し上げます、...あなたを裏切っていたのです、...あなたに従わなかったのです、...」と彼女は息を止めて、嗚咽した。

しかし公爵は愛想良く宥めた、「もう良い、ルクレツィア」と彼は言った、「今日ようやくそなたは全霊、私のものとなった。いいか、これまでそなたはそなたの家の精神に捉えられていた。この精神は私の感情を害し、私の裁きに逆らうものだ。私は国事を考えて、そなたと結婚し、私の父親への忠誠心から、そなたのことを知らないまま、極めて不気味な噂しか知らずに結婚した。不承不承であった。しかし私はそなたを見たとき、そなたの魅力に惹き付けられた。現世の者で、そなたに抵抗出来るものがいようか。

それにそなたの善良な意志にも感銘を受けた。私はその意志を良く識別したし、あり得ぬ習俗や、そなたの家庭の不埒な思考から身を引き離しながら、共感して、いや恭しく正しい生き方の大切な土壌に足を踏み入れるというそなたの真面目な努力にも感銘を受けた。ボルジア家の血は、日々そなたの中で活気付こうとし、そなたを取り戻そうと望んでいた。しかし、見よ、今やそなたは自由だ。そなたの出自の者は、皆、黙して、下界に住んでいる。この下界から、惑わして生者達の許に迫って来る声は一つもない」。

ルクレツィアは重い溜め息を吐いた。それは一つの深い苦痛の声であり、同時にほっとした重荷解放の一息であった。それから、傷から血がほとぼしり出るように、後悔の嘆きが、絶望の身投げが、以前から自分がチェーザレのためにと犯して、彼から蒙った数々について赤裸々な告白が生じた。

アルフォンソ殿の知らないことは何もなかった。しかしアンジェラの方は、ルクレツィアが自分の感情に圧倒されて、彼女が居合わせることを失念して、あるいは何も気にせずにいるのに対して、顔色を変えて、相手に代わって、その驚くべき不埒の一切に、恥辱の苦悩の一切に耐えた。

今やルクレツィアは、公爵の前に倒れ込み、彼の膝を抱き、彼の両手を握り、それに接吻を浴びせた。「私はマグダラのマリアです」と彼女は嗚咽した、「我が主が私を許されました。今や主のものでないものは、私の本性の中に寸毫もありません。...私はこの生を失いました。あなたの戒めに違いました。しかしあなたは私にこの生をくださる。それでこの生はもはや私のものではありません。あなたの生となるべきでしょう、...」。

「御領主」と彼女は思わず追従的身振りで言った、「私は貴方に一つお願いがあります」。公爵は彼女はストロツィーについて話したいのであろうと思い、眉を顰めた。

「今から私に」と彼女は頼んだ、「懺悔のベルトを身に着けることをお許してください」。アルフォンソ殿は微笑した、「私は別の願い出を予期していた」と彼は言った。

「何です」と彼女は尋ねた。

「令夫人、貴女の執り成しだ」と公爵は答えた、「自分の首を賭けにかけて、それを失った一人の罪人の男のために」。

「誰のことです」とルクレツィアは正直に不思議がって尋ねた。

ヘルクレス・ストロツィーのことは、彼が兄の死によって、どうしても良い、いなくても構わない者となってから、彼女の気持ちからすっかり消えていた。そして公爵は、この誇り高いローマ人の頭部が、自分の妻の記憶になく、更にもその心に残っていることは少ないと知って、いやストロツィーは以前ルクレツィアにとってわずかな価値すら持ち得なかったと知って、満足感を覚えた。

それで公爵は、普段すべての不服従者に対して厳しく咎める習慣であったが、恵み深く振る舞う気になった。今や自分の確固たる所有物として有する自分の妻を一種感動して眺めた。今まで彼女がこれほど美しく見えたことはなかった。

彼女の情熱的告白の間に解けた金髪が、彼女の完璧な肩に輪のようにかかっていた。そして優しく青い目が炎のように燃えていた。

彼は彼女の巻き毛の束の一つを口許に持ち上げ、熱く接吻した。それから彼は、規律正しい男であるので、言った。

「食事の前、少しばかり休むのがいいだろう。公爵夫人、貴女の侍女達を呼んで、身繕

いをさせなさい。貴女のこのような様では、貴女を取り巻く大気や明かりに私は嫉妬を覚えようから」。

アンジェラは、ルクレツィアが信じがたいほど自己中心的で、自分の共犯の男性のことを忘れていないことに立腹して震えた。そして自分のことも心の中で嘆いて、自分も牢にいる自分の不幸な盲目の男性のことを忘れていないと自らを咎めた。これは自分に対する不当な非難であったかもしれない。というのは彼女は、比喩的に言って、自分の額と、額の中での思いを、絶え間なく、痛みを感じずるほどにその牢獄の窓の鉄格子に押し付けていたからである。

アンジェラは、夕食のとき、公爵夫人の側、蠟燭の明かりの許に座っていたとき、この嘆きの思いに襲われて、ルクレツィアが公爵のために優しく取り分けながら、料理を味わって、公爵にナポリの赤ワインを最初味見して試飲をするのを見ていると、あたかもルクレツィアが人間の血を飲んでいるように思われたのであった。

「従姉妹さん」と彼女は夫人に囁いた、「咎を受けた首のことは忘れたのですか」。

ルクレツィアは驚いて、思い出した。優しく指で、公爵の肩に触れながら、彼女は軽快に尋ねた。「アルフォンソ、ストロツィーの命を免じてくださいますか」。

丁度柔らかなパンを、小さく丸めて大砲にしていた公爵は、それを投げ棄て、椅子の背に寄りかかって、少しばかり考え込んだ。それから彼は言った。「領主夫人、私は裁く上でストロツィーに嫉妬してはならないだろうし、それに貴女に対する彼の崇拜は、世の男ども皆に共通する一つの罪であろうし、それでただ私の定めた禁令に対する彼の違反のみが、処罰の対象として残ることになる。 — そしてこの別の天秤には、令夫人、貴女の執り成しがあり、それにこの男の尋常ならざる専門知識がある。

実際、彼をこの世から除外するのに、私は抵抗を覚えている。この世は、多くの無益で無価値な人間の群れを養っているのだから。

賢明な夫人よ、この件を考えて見よう。前もって裁かずに、人間に恩赦を与えることはできない。しかし裁くとなると、私の第一等の大法官たる者のかくも不遜な不服従を大目に見るのは、責任ある振る舞いとは言えない。しかし一つのことではできよう。 — 彼のことを忘れることだ。公爵夫人、彼を呼びに人を送るがいい、今日のうちにも、早速」。彼は一人の従者を呼び、そして命令を伝えた。「ルクレツィア、彼と話すがいい。彼を調べるのだ。翌朝までに彼がフェラーラから消えているように、説得するのだ。彼はどこへ行こうと構わない。 — 彼が望むなら、フィレンツェでも良い。彼はフィレンツェの出身だからな。彼の知識があれば、彼はどこでも食って行ける。イタリアからの追放さえも彼に対してはしない。決してフェラーラへは戻らないという振りをして貰えばいいのだ。

いいか、私は苛立たしい偶然のせいで、彼と市門の税関で出会った。私は馬で入って、彼の姿が税官吏の間で突出しているのが見えた。税官吏と彼は議論していた。彼は私に挨拶もしなかったし、姿を隠すこともしなかった。彼の不遜な挙措は、若干人を小馬鹿にしたところがある。貴女の苦労は無駄かもしれない、と私は案じている、令夫人。

この敗者は逃げたくないであろう、 — それで死ぬことになるな。 — 残念なことだ。彼は卓越した法学者なのに」。

公爵は食卓から立ち上がった。公爵夫人から別れの挨拶をした。夫人は慣例に従って、亡き兄の冥福を祈って、一週間ほどクララ会尼僧院に引きこもることになっていた。

それから公爵は、彼女と更に小声で協議して、どのような言葉[暗号]で内密に、家の執事を通じて、ストロツィーとの彼女の話し合いの結果を伝えたら良いか打ち合わせた。

この話し合いはアンジェラの居合わせた所で、吊りランプの三本の小さな炎が見える丸い小部屋で行われたが、短く、かつ激しいものであった。

性急にストロツィーは、目を燃やして、決意した表情で現れた。遠征の風と陽射しで褐色になっていた。請われてもいないのに、彼は公爵夫人の脚許の床几に座った。

夫人は全く恐怖心がなかった。豊かに流された涙で洗われた顔は、明るく、落ち着いていた。

ストロツィーは、自分がチェーザレ殿の死によって、彼女にとって一つの影、一つの無になってしまったことを一瞬も忘れていなかった。しかし彼は、この戦死者によって、彼女と永遠に結ばれたと感じ、彼女の許から去ることを考えていなかった。「兄上の最後の時を」と彼は尋ねた、「貴女にお話ししましょうか」。

「いえ、結構、ストロツィー。彼はその家の流儀で、勇敢に亡くなったと知っています。彼はパンペローナで、キリスト教徒のすべての慣例に従って埋葬されたと承知しています。— この上なく哀れな兄上」。このときからルクレツィアは、以前の兄上の正体である悪霊のことを、この上なく哀れな方としか呼ばなくなった。自分の途方もない父親のことを夙に善良な方と呼んでいたようなものである。

それから彼女は溜め息を吐いて、続けた、「哀れな兄は執り成しが必要です。今夜にも私は、この義務を果たすために、クララ会尼僧院に引きこもります。私の愛しい夫、公爵殿下のご判断に合わせまして」。

そのように彼女は言った。ルクレツィア・ボルジアの敬虔さに関して裁判官の目に窺われる嘲笑によって、自らと、アルフォンソ殿への自らの愛を少しも妨げられずに、彼女は本気で述べていた。一つの間が生じた。

「貴方に対する私の夫の依頼があります」と公爵夫人は言った、「ストロツィー、私は貴方を夫に対して、まさに夫の命令に反したことを行って、重大な違反者としました。私に対してもそうです。貴方は愚かな私に従った。私の兄の懇願の要請を私が受けたら、私は義務違反者となることを貴方は察知する必要がありましたでしょうに。義務を無視する女に従っては駄目でしょう」。

墮ちる私を天使達が救ってくれました。それで私は、神の恩寵を得て、貴方を救出したい。

公爵は、公爵と私とに対する貴方の二重の罪を許すご意向です。ただ一つ条件があります、ストロツィー。簡単な条件で、...つまり貴方は、今夜のうちにもフェラーラを去って、決して戻って来ないという条件です。この稀なる恩恵を利用なさってください。貴方のような立派な従者を解雇して、イタリアの別の宮廷国家に行かせるというのは、全く公爵の流儀ではありません。イタリアを避ける必要さえないのです、...」。

「ルクレツィア、無駄な御尽力です」とストロツィーが放埒に遮った、「私はフェラーラから去りません。そなたから去らない。我々は一体だ。チェーザレ殿の意志が我らを結婚させたのです」。

ルクレツィアは弱く微笑した。それから彼女は、これまでまどっていた偽善者の透明なヴェールを剥ぎ取って、依頼するような悲しげな目で懇願した。

「ヘルクレス、私があなたにとって大事であるならば、自らを救ってください。私は自分の心にあなたを抱えていたくない。…私を愛しているなら」と彼女は囁いた、「逃げてください」。

すると静かなアンジェラがこの誘惑に対し、善行、救出のためであろうと、激した。

「裁判官」と彼女はストロツィーに対し熱い頬を向けて言った、「貴方が躊躇っているのは、恥ずかしいことです。フェラーラから去りなさい。どうしたのです。若者が手本として称賛している一人の男、法学の一人の師匠が、悪を断ちきって、哀れな一人の女の魔力から逃げ去る力を有しないのですか。 — 恥ずかしい。…」

「善悪の何の夢を見ているのです」とストロツィーが吠えて、高く飛び上がった、「正邪の何の空想をしているのです、…正義なんてない、…この美しい不埒な奴が」と彼はルクレツィアを見つめた、「正義を殺したのだ。

しかし娘御、そなたは黙るがいい。そなたに愛が分かるか。愛する男を盲にさせ、 — 牢に入らせ、 — その牢獄長を買収もせず、 — 愛する男の腕の中に忍び込まず、 — その妻とも小間使いともならない女、 — このような女に愛が分かるか。

愛というのはな」と彼は秘密めかして囁いた、「その目標を手放さないのだ。決して、絶対。ルクレツィア、私を殺すがいい、ここだ」、そして彼は心臓を指した。

彼女は裁判官を青ざめた目で見つめた。彼女の愛らしさはすべて消えた。

この瞬間、ドアのカーテンが引き開けられて、敷居に極めて威厳のある家の執事が三種の願いを持って、立っていた。

彼は公爵夫人に駕籠の準備ができたと伝えた。それから夫人はもう明日クララ尼僧院で公爵の訪問を受けるか問い合わせた。

夫人はそれを断った。この否認は多分、公爵にとって、裁判官が彼の恩赦を拒否していることを意味していたであろう。

最後に家の執事は、裁判官になお向かって、文書館にいる公爵と面談をしてから、宮殿を去って欲しいと頼んだ。

ストロツィーは今すぐなのか、とぶっきらぼうに尋ねた。そして老人は、肯って頭を下げた後、彼を案内した。

一方公爵夫人は、黙ったまま、アンジェラと一緒に駕籠の所まで行った。「あなたとは別れない」と彼女は言った、「今日のうちにも私を追いかけて来なさい」。夫人は自らが避難していたように、これから生ずるに違いないことを、アンジェラにも省きたかったのであろう。

アンジェラは公爵夫人への奉仕に縛られていないときには、堅牢な隅の塔の人気のない出窓の部屋に住んでいた。その塔は中庭の方であって、その通り抜けられない壁の階下の部分は、公爵の私的文書館となっていた。

この避難場所に至るために、アンジェラは不安げに宮殿の階段を急いで行った。脇の通路と狭い階段を通して、彼女は塔の方へ、公爵の旋盤のある小さな控えの間を抜けて行った。ここで彼女は文書館の重たい櫺のドアが開いているのを見て、不思議に思った。彼女はそれで、更に階段を上がりながら、アルフォンソ殿と最上位裁判官の甲高い声を追って行けたのである。

彼女はそこに到着して、入ることができず、とてもびっくりした。彼女がしばらく利用しなかったテラスは鍵がかかっていた。鍵は文書館にあるかもしれない。そこで、階段をまた下って、嫌な盗み聞き的女となって、好奇心もないのに、ただ不安に急ぎ立てられながら、太い壁の壁龕に屈んで待つことになった。

「この法律訴訟は」と公爵は快適にお喋りした、「退屈な件だ。いよいよ結論を出すべきであろう。私はこの問題の文書を徹底的に調べてみた」、彼は手で一束の羊皮紙を叩いて、アンジェラは埃を吸い込む思いがした、「裁判官殿、私は文書に物怖じしないと、承知しておろう。しかし、今回は、私の苦労も、我がランプの油代も無駄であろう。[Plautus Poenulus V.332 oleum et operam perdidit]。むしろ貴方が手短かに言ってくれ。どちらが正しいのか。フラヴィアーン家の相続人としてのコントラーリオ伯爵の方が、それとも私のフェラーラの国庫の方が。

貴方の裁判官としての良心はどのような意見か」。

アンジェラには、公爵が良心という言葉が皮肉に強調しているように見えた。しかし彼女は間違っているに違いない。ストロツィーは全く動じずに答えたからである。

「殿下」と彼は言った、「肝心なことは、本質的なことと、非本質的なことの区別です。これは重要でない、こちらは重要という具合に。 — それで分かります。簡単なことです。

昔から黄変していて、奸計と策略によって曲げられたこの裁判の肝の核心は、次の点です。

フラヴィアーン家の者達とコントラーリオ家の者達が何世紀も従兄弟として互いに苦しめ合い、和解し合い、敵対し、相続人として定めた後で、最後の子供のいないフラヴィアーン家の者が、ネストールという名前ですが、未知の理由から、その重要な領地を自分の従兄弟、マリオ・コントラーリオ伯爵に、つまり我らの現今の優美な伯爵の父親に遺言状で遺贈することに決心したのです。

しかしここで我らのフェラーラの法律は、前もって公爵の全権委任を得ていなければ、自分の領地を他人に遺贈してはならぬと定めているのです。しかしこの貴方の父上の同意が、記述はされて、父上の承認もあります、その署名で完璧なものになっていないのです。と申しますのは、この最後のフラヴィアーン家の者が、馬に乗って、フェラーラに向かい、自ら出頭して貴方の父上のかの署名を頂こうとしたとき、死神がにやりと笑って、馬上の彼の背後に飛び乗り、利鎌でその間、刈り取ったのです。彼は旅の途中、卒中に襲われました。

この件は今どのようなになっていましょうか。

遺言は形式的に無効です。公爵の署名が欠けています。それに貴方の父上、ヘルクレス殿は、署名を挿入しようという気にならなかったのです。父上はこのフラヴィアーン家の領地を没収しました。

崇高なる御領主、そこで貴方の関与はもはや法律問題ではありません。貴方の寛大さの件となります。私は介入致しません」。

「いいか、裁判官」と公爵は、ストロツィーの敬意を欠いた調子を咎めずに、我慢強く答えた、「私は我が父上のヘラクレスと大して違う考え方をしないし、また違う考え方をしてもならないだろう。国有財産を増やす、合法的に許される手段があるときには、私

は所謂大きな高邁さの点からそれを手放してはならない。そんなことをして、我が商人達や百姓達に苦勞をかけてはならん。

勿論他面では、コントラーリオ家の者達が、私が外面的権利を有するように、文句なく、内面的権利を有することも面白くない」。

「ごもっともです」と裁判官は嘲った。

「そこで思うに」と公爵は悠然と続けた、「一つの妥協が相応しいであろう。裁判官、どう思うかね。我らはフラヴィアーン家の領地でアンジェラ・ボルジアの嫁入り支度をし、彼女をコントラーリオ家の法的権利を有する後継者と結婚をさせる、つまり愛敬あるエツトレ伯爵だ。ここだけの話し、私はあの娘を片付けたい。彼女は私とフェラーラの国から我らの比類ない余人をもって代え難いイッポーリト枢機卿を奪って壊してしまう」。

「私も彼女は好きではありません。月に行けばいい、と願っています。彼女はあの銜学者に嫁がせましょう。…」と裁判官は快活に荒廃した冗談を言った。酩酊しているのと変わらない。

「聞いてくれ、我がヘルクレスよ」と公爵が続けた。裁判官の苛立たしい振る舞いを意に介していないように見えた、「自分の従姉妹に嫁入り支度をさせるのは、本来ルクレツィア夫人なのだ。フラヴィアーン家の領地は、彼女の寡婦領で、しかしこれは所有が確定していない。我らの裁判所がまだ最終的に言明していないからで、…」。

我がヘルクレスよ、そなたはこれについて聞いているか」。

「私が聞いていないことがありますか」と裁判官は嘲った。「イタリア中にその木霊が響いています。アレクサンデル教皇がヘルクレス公爵の策略にかかったことを、誰が忘れましょう。この老悪漢は、自分が騙されたと知ったとき、いかに法外な振る舞いをし、何という見苦しい言葉を発したことでしょう」。

そしてストロツィーの笑い声が低いドームの下でどよめいた。

同時にアンジェラは、自分が座っている壁の天窓を通じて、夜間静かな中庭からまた生じて来た柔らかなテノールの声を聞いた。これは公爵の到着前にルクレツィアと窓辺に座っていた昼寝の時に彼女の心を揺さぶったカンティレーネ[抒情的旋律]であった。それは同じ歌声であった。…「ストロツィーの殺害者達の準備ができたという公爵と打ち合わせた合図かしら」と彼女は動悸する心で自問した。

この時から裁判官の挑発的性格は公爵の鼻に付くようになったと思われた。

「我がストロツィーよ、そなたと一緒にいるのは楽しい」と彼は好意的に言った。「今はそなたと別れなければならない。私は今日馬で強行軍であったと知っていよう。私は疲れた。またこの話しはしよう。良い晩を」。

そして彼はこの犠牲者を去らせた。

ストロツィーが薄明かりの中、座っているアンジェラの側を通り過ぎて、弱い照明の宮殿の通路を下って行ったとき、アンジェラは石化したようになった。ストロツィーの不気味な陽気さが、彼女にはその没落の予兆のように見え、公爵がどこまでも辛抱強いので、彼女は慄然となったのであった。

彼女がしばらくして、鍵を見つけて、そして公爵が文書館から出て来て、施錠し、彼女が公爵の側に立っていたとき、裁判官が、手探りの仕草で、また戻って来た。

「殿下、一体どうしたのか分かりません」とストロツィーはどもって言った。その陽

気さは消えていた。「出口が分かりません。松明をお願いします」。

公爵は、裁判官を松明で案内するよう従者を呼び寄せ、裁判官はよろよろとその後を付いて行った。

そこでアンジェラは自分の部屋へ逃げ去り、不安でうろたえながらも、しっかりとその部屋を閉めて、どきどきしながら裁判官の残りの命数を数え、断末魔の叫び声を待った。

するとその声が響いた。 — 恐ろしく長いもので、 — 彼女の内奥の髓を貫いた。

震える両手で、彼女は外套をまとい、小さな明かりを手にして、人気のない階段を滑るように下って、宮殿から駆け出た。救いを求めるのか、...いや、ルクレツィアの許、尼僧院に助けを求めるのであった、...彼女は自分が何をしたいのか、分からなかった。

砦の隅で、彼女の足先が死者にぶつかった。彼女は彼の顔を照らした。しかしその青白い、歪んだ面影を長く眺めていることはできなかった。

彼女は跪いて、彼の上で十字架を切る仕草をして、彼の外套で、そのぞっとする頭部を慈悲深く覆った。

それから彼女は更にクララ会尼僧院へ逃げた。そこはただ二つの短い路地の間、離れていたが、古くから町の囲壁の土台に建てられていた。

二番目の路地の中程で、彼女は背後に足音を聞き、振り向くと、彼女の逃げるような歩みを追って来る一人の人影を見た。彼女は、死んだ男が身を起こしたと思って、自分の歩みを速めた。しかし彼女の急ぎ足は別の夜の顔で止められた。

つまり尼僧院のすぐ前、堅牢な塔がその巨大な丸みを帯びて、飛び出ており、路地はそこを迂回しており、塔は尼僧院と極めて珍しい具合に癒着しており、豊饒な木蔭に覆われていた。

その永遠に閉ざされた高く狭い小門が、不思議に開けられ、その前に騎乗者が密集していた。その中央では一頭の白馬に目に眼帯をした細身の若者が座っていた。

アンジェラはジューリオ殿を目にしたのであった。ジューリオ殿は公爵が、ポー川河口にある島、フェネストレッラの方へ送っていたと、彼女は知っていた。

このジューリオ殿は生きていいのかしら。夢ではないかしら。

小さな路地に馬で乗り入れる者達が次々に片付くと、アンジェラは尼僧院の門を叩いて、門番の女、素早い尼僧コンソラツィオーネによって、遅滞なく、平和な尼僧院へ入れられた。

「待っていたのよ」と彼女は言った、「でもどうしたの。歩いて来たの、一人で。まあ、とても心臓が動悸しているわね。本当に、脅された小鳥のよう、...」。

「公爵夫人の許に連れて行ってください」とボルジアは遮った。

尼僧のコンソラツィオーネが穏やかにまだ明かりの点いた房を開けると、ルクレツィアは吊りランプの穏やかな明かりの中、すでに寛いで、清潔な臥所に白い夜着を着て横たわり、しっかりと微睡んでいて、潮の干満のように規則的に息をして、半ば開いた口に子供の微笑を浮かべていた。自然はこっそりと若返らせて、その寵児を見守っていた。 —

アンジェラは城から逃れるとき、嗚咽して、この女友達の胸元に身を投げ、ルクレツィアの殺害された男の側に自分の盲目にされた男を置きたいという願いに駆られていた。

しかし彼女はこの美しく微睡んでいる女性を注意深く眺め、彼女を起こす勇気を失って、嘆息した。

「このルクレツィアと私は違う」。

最終章

かくも多くの喪の後、フェラーラでは五年経過した。新たに悲劇のミューズが領主の館を襲うことはなかった。いや、人生は牧歌の形を取ろうとした。いずれにせよ、短い不穏な戦闘は例外で、しかしこれも足早にフェラーラの大地を後にして行った。

最上位裁判官ヘルクレス・ストロツィーの殺害者は、幾重もの警察の捜査や公爵の見栄えのいい尽力にもかかわらず、分からないままであった。

最上位裁判官はこの上なく厳かに埋葬され、公爵は遠慮せず、服喪者の先頭の者として、感動した民主の面前、月桂樹で飾られた棺の後を歩いて行った。

若い未亡人をも、というのはルクレツィアの崇拝者のこの裁判官は、身分にかなった結婚生活を送っていたからで、君主として同情しているアルフォンソ殿が訪ねて、彼女の手痛い悲しみを賢明な語りを聞かせて和らげようとした。しかしこの花と咲くバルバラ・トレリは慰めを得られず、激しい身振りで、見つけ次第殺害者に対して夫の仇を討つつもりだと語ったり、あるいは尼僧院に入り身を埋めたいと願ったりした。いずれにせよ彼女は亡くなった夫に対して永遠の忠誠を誓っていた。

さて公爵が彼女に対して何もできなかったとしても、この苦しみに耐えているバルバラを励ます役目が、ロドヴィーコ・アリオストに残されていた。彼はストロツィーの一人の友であって、すでに、堂々たる女性であるストロツィーの母親を心から尊敬していた。今や彼は、亡くなった友の未亡人のことを気にかけて、彼女を人生と和解させようとした。彼は一年のうちに、この友人としての課題を完璧に解いて、それでバルバラ・トレリは、詩人の後を追って、彼の側、故郷の新築の家、例の簡素な家に住むという彼の願いを受け入れるまでになった[アリオストは実際は、この友人の父Tito Strozziの未亡人と聖職祿故、秘密裏の結婚をした]。アリオストはこの家のつましさを世界的に名高い二行詩節で称えていたのである。[小さくとも心にかなう借金なしの清潔な家/ 自分の金で建てたマイホーム]。

ジュリオ殿の牢獄も、「忘れられた」塔の中に同じように残っていた。この塔は以前のより狭小な石工仲間では、すべての防衛力の不壊の象徴として残っていて、後にクララ尼僧院の拡大される中庭と併合されたのである。

このほとんど通行し難い塔には、ほとんど人が住んでいなかった。路地の方には窓がなく、尼僧院庭園の方では野生化したブラックベリーの灌木や、蔦類の巻き付く植物が半分の高さまで生い茂り、自然の成り行きに織物に戻っていた。

ほんのときたま、この塔は無難な国事犯囚人のために利用された。その囚人の記憶は薄れ、その存在は「忘れられた」塔で忘却される運命であった。

長いことクララ会尼僧院の女院長は、自分の領域にある塔内にジュリオ殿のような敬虔とは言えない伝説の高貴な人物を収容させることに反対していた。彼女は心の空虚な尼僧達の弱点を知っていた。好奇心、同情、内緒事への欲望である。それ故危険な隣人を恐れていた。

彼女も盲人デステをフェネストレッラから離れた真の理由を知らないわけではなかった。

確かに彼女にはこう言われていた。ポー川河口の海に浮かぶ小さな要塞は、この時期、危険になっていて、サン・マルコ[ヴェネツィア]の艦隊、並びに聖ペテロ[教皇]の船によって脅かされている、と。しかし彼女は全く別の話しも聞かされていた。囚人監視人の若い妻が、盲目ではあるが、可愛い王子に浮世の恋をして、自分の夫に働きかけ、ジューリオ殿をボートでヴェネツィアに誘拐しようとしたのだ。そして二人は、代官、つまり故チェーザレ殿の厳格な流派の大尉によって急襲され、この罪人夫妻は海へ沈められたのだという噂であった。

同様に深い沈黙のうちに、今やジューリオ殿の存在も「忘れられた」塔に埋葬されることになった。

公爵は重い刑罰を科して、旅の従者達も、彼の弟の新しい牢獄長も、この囚人が居合やすことを明らかにしたり、名前を漏らすことさえもしたりしないよう禁じた。尼僧院長も、尼僧院の聴罪師も、これはジューリオ殿の聴罪師でもあったが、墓場のように沈黙を守った。それ故公爵は安心であった。

アンジェラも塔の門での盲人との出会いについて、自分一人の心にのみある事として黙っていた。

かくて、利口なルクレツィア夫人もフェラーラへのジューリオ殿の帰還について何も知らず、公爵を通じても知らされないということがあり得たのであろう。公爵にとって、盲人の弟の宿は、いつも頭痛の種であったのである。弟を町の砦の牢獄へ、さながら自分の足許に閉じ込めて、目を潰された男の頭上で、陽気な生活を送ること、これは公爵にはできないことであった。しかし弟を田舎の要塞に閉じ込めると、ジューリオの受難、彼の善良さ、彼を取り巻く伝説が、すぐに彼を人気者にして、まもなく一人の解放者が出現することになる、と公爵は確信していた。

クララ会尼僧院の隣の「忘れられた塔」、これは彼の最後の逃げ道であった。

ルクレツィアがジューリオ殿の滞在について公爵に問い合わせたら、彼女は本当のことを知らされていたことであろう。しかし彼女は多分に用心深くて、彼女の夫の心の傷付きやすい点、イッポーリトの損失や盲人の牢獄について、不必要に触れることを憚った。

かくて彼女は、誰が自分の近くに住んでいるか予感もせずに、毎年少なくとも待降節の時期、数日クララ会尼僧院に戻ることを続けた。彼女はそのたびにアンジェラ嬢を同行させた。というのは、クララ会尼僧院の聴罪師、マメッテ神父の言葉は、アンジェラの温かい心の嵐を永久に静めてくれたからであり、ルクレツィア夫人もこのフランシスコ会の簡素な司牧を大いに評価していたからである。

ジューリオ殿の安寧には多くの心が関心を寄せていると、公爵が信じているとき、それは間違っていなかった。フェラーラの詩人が、当時その『狂えるオランダ』の歌の一つの花輪の端緒で、牢獄でやつれている盲人に感動的執り成しを寄せているばかりでなく[正義は慈悲に座を譲るべし、脇功訳、3.62]、精神世界で重鎮とは言えない者でも、このジューリオ殿に身も心も捧げていたのである。

つまり或る日、この「忘れられた」塔の門に一人の干涸らびた老人が現れた。その両腋に重たいフォリオ判を抱えていた。彼はその重荷を高い石の土台に置いて、自分が拾った太い小石で、黙した門を叩き始めた。

甲斐はない。というのは門は開かず、内側で何か動く生命体はなかったからである。老

人は自分の努力を執拗に続けて、小さな一群れの公爵傭兵が、その人気ない路地に半円をなして集まっているのに気付かないまま、取り巻かれて、捕まえられてしまった。彼は傭兵達が槍で調べようとする自分の本に対し、嘆きながら大事にしてくれと頼み、自分の宝を体で覆った。この瞬間、彼にとって幸いなことに、公爵が馬上高く現れた。公爵は事情通の少人数のお供を連れて、火薬庫の火元安全のために調査していて、今や最短の道で町の城砦へ戻るところであった。

老人は彼の前で身を伏せた。

「私の教育を受けた、崇高な御領主」と彼は叫んだ、「御身の兵士の手から、私とそれに我が友、プルタルコスとセネカを解放してください」。

「マギステル殿、ここに何の用があるのです」と公爵は厳しく尋ねて、眉を顰めた。

「私は盲目になった教え子を訪問し、その夜となった目を古代人の英知で明るくする任務があると感じているのだ」。

「ここに盲人がいるとどこから知ったのです」と公爵は彼を叱りつけた。「学問から背いた息子への愛故なのだ。私はこの息子が不幸と暗闇の中に墜落したと知ってから、その痕跡をフェネストレッラまで追いかけた。彼は自分に罪のない悲劇の後、遠ざけられたと人々から聞いた。そして噂では、彼は御身の間近か、御身の個人的庇護の下に戻ったと聞いている。ここフェラーラで、我がソクラテスのデーモンに導かれて、私はすべての塔のドアを叩き、そしてこの『忘れられた』塔が、私の見つけ出した最後の塔なのだ」。

公爵の目に内密の微笑が浮かんで、自分の不幸な弟に、自分らの共通の、彼自身良く知っている、完全に罪のない老教師との交際を恵むという考えが閃いた。彼は言った。

「ここに本当に仰有る通り盲目の弟子が住んでいるのであれば、ミラビリ殿、私は師が毎週一度訪問されて、彼にその中断されたレッスンを継続なさるのは、一向に構いません」。

彼が合図すると、護衛の者がその槍の柄でこう叫びながら、「公爵の名において、開けろ」と閉ざされたドアを力強く叩いた。すると内側では鍵が瞬時に音を立てて、門が引き抜かれた。

公爵はびっくりしている牢獄長に、自分の馬の許へ近寄らせて、小声で厳しく命じた。

「週に一度だけこの老公にこの小門を開けて、出入りさせろ。日中は駄目だ。未明の朝まだきか、アヴェ・マリアの晩祷後だ」。

ジューリオ殿から感謝と感動を持って受け入れられてミラビリは、以前その美しさを愛でていた顔の破壊された様を長く見つめて調べることを遠慮した。躊躇わず、彼はこの囚人にストア派の素晴らしさを紹介し、彼に克己の勝利を示す仕事に取り掛かった。

それから長い授業の後、自分が夢中になっているこれらの高貴な手本を称賛すると、つまりゼノンとかエピクテトス、とりわけ哲学者の髭を有する皇帝、即ち神々しいマルクス・アウレリウスを称賛すると、多分この盲人は、その間筵に座っていて、悲しげに疲れてこう言ったことだろう。

「いや、ミラビリ、私にはこの高貴な殿方達は分からない。私は彼らと一緒に徳操の王座に座れそうにない」。

更にもっと力強い慰めをこの盲人にもたらしたのは、聖なるフランシスコの息子、マメッテ神父であった。彼も、老ミラビリ同様、まだ若々しい炎のような男であったが、ジューリオ殿の青春の思い出からの人物の一人であった。

彼はプラテッロの百姓の家系の生まれで、孤児となったまだ幼いときに、遺産を彼と分割する気のなかった兄達によって、近くの修道院へ引き渡され、そこでこの罪のない子供は放置されて、しかし僧侶達の世話を受けて育った。売られたヨゼフに似て、この少年はその後すべて順調であった。彼の喜ばしい目の照らし出す顔は、彼を知る人々皆の心を捉えて、皆の慰めとなった。

ジューリオ殿が青年となって、彼の立派なプラテッロを建造したとき、マメッテは吉凶の日々の経過の中、成人となって、フランシスコ会士として出来上がっていた。

ジューリオ殿は彼を或る日石工達の間で見た。彼は一人の不幸な石工を支えて、彼を両腕に抱き、この臨終の者に母親よりも深い愛を寄せて、天国へ導いていた。

かくて彼はデステ[ジューリオ]の目に留まり、彼の魂の最も調べの良い弦に触れた。この軽薄なジューリオは、宮廷の慣習に従えば、聴罪師を得る必要があったが、長いことこの慣習を無視して遺憾に思われていて、そこで彼はすぐに決心して、マメッテ神父を選んだ。

ちなみに彼は教会として慣例の時期以外はマメッテ神父を呼ばなかった。彼が悲惨さの中に墜落した後も呼ばなかった。彼は死刑判決が予期されたとき、初めて、彼を牢に來させて、彼と一緒に断頭台へ向かった。

フェネストレッラから帰還した後、マメッテ神父は今や彼の囚人生活の最良の友となっていて、このすべての方面から望まれ、求められている神父は、「忘れられた」塔の中で、この不幸なジューリオを慰めるために自分が費やした時間を数えることをしなかった。

すると、神父が盲人の両手を握って、彼にこう言うことがよくあった。「貴方はまだ幸福の涙み尽くせぬ泉を知らない。貧窮の秘伝です。この貧窮と親密に結婚した我が聖なるフランシスコは、私にその秘伝を以前、魂の淵からの救出のために打ち明けられました。

貴方は自分のものがもはや何もなくなくなったときに、初めて、貴方は神の愛を受け取れるのです。貴方は受け取ったら、与えることが出来るようになります。これが幸福と自由に至るための私の門です。私と一緒に参りましょう。貧しく、もっと貧しくなるのです。貴方が受け取って、そして与えることが出来るようになるために、泉のように、水盤から水盤に溢れ出て満たせるようになるために[マイヤーの詩、Der römische Brunnen]」。

ジューリオ殿は最初、奪われて、光明から突き飛ばされた者である自分にとって、もっと貧しくなることは、難しいことだと思っていた。自分は、自己中心的な痛みという富をも捨てる必要があると分かっていた。 — いずれにせよ、神聖なフランシスコの秘伝は、彼の愛に渴した魂の深みに迫って来た。この魂には、アリオストもミラビリも、つまり詩人も哲学者も届かなかったものである。

かくて牢獄生活の三年が過ぎた。しかしこの盲人の若々しさと健康も散った。彼は枯れた。夏のかび臭い大気、冬の湿気、彼に提供され、彼が慣れずに、しばしば手をつけないままであった修道院の食事、荒々しい乗馬や舞踏会、フェンシングと言った激しい肉体的鍛錬の欠如、それにとりわけ、解放されることの見込みのなさ、これらのことで彼は弛緩し、萎えた。というのは彼は承知していたからである、 — 公爵の言葉は確定していた、

— 自分は公爵が存命の限り、牢から出られないであろう、と。

彼自身は自分の運命に身を委ねていた。しかしその運命は老ミラビリの魂に応えた。老残の老公は自分の寵児を解放せずには、死ねなかった。

かくて彼は、ジューリオ殿が知らないうちに、得られるはずのない彼の同意も得ずに、何か有効なこと、決定に効果のあることを敢行する気になった。何度も考えて、数日眠れぬ夜を過ごした後、彼は重要な仕事を仕上げた。それは至純なラテン語で記された書状であった。というのはイタリア語での文書は彼には馴染みがなく、それに自分の偉大な目的には十分に崇高でないように思われたからである。ミラビリは古代のすべての著名な囚人達、特に暴君によって無実なのに残忍な牢へ閉じ込められた者達について言及した後、皆の中で最も愛敬があつて、無実の者、ジューリオ殿に移って、下界と後世の裁きにかけて、実の弟を解放するようにと公爵に訴えた。公爵が自らその鎖を解いて、民衆の面前、公の広場で、弟と和解して欲しい、と。

要するにこれは、まことに不器用な、厄災に満ちた手紙であつて、公爵は激昂するに違ひなく、残念ながらこの望まない目標から外れなかった。

それ以上にひどいことになった。公爵は不信感を抱いた。彼は老公の訴えの背後に囚人の弟の訴えを見た。勿論大きな錯覚であつた。

公爵はジューリオ殿に公爵の不興とその牢獄の不撤回を知らしめ、当時別な面で甘い希望の星を抱いていたジューリオ殿をより深い悲惨さと病床へと突き落とす。

ジューリオ殿の牢獄同様に変わりがなかったのは、フラヴィアーン家の領地の状態で、国庫はそこからの収入を有し続けていた。裁判所はその最終的所有について明言していなかった。コントラーリオ伯爵のアンジェラ嬢に対する苦心の求婚も変わりがなかった。

変わりがなく、いや、その罰されない求婚者に対するアンジェラの嫌悪は募っていた。この求婚者に対し、アンジェラは切羽詰まって、絶望して宣言していた。自分は正義の者達や有徳者を少しも愛していません。一 それ以上にもっと格闘する悪人達が好きで、一 最も好きなのは、慈悲深い人達で、この人達が罪人達を力強い腕で抱き上げるときです。このような前代未聞の談話に、コントラーリオ伯爵はもっともなことに驚いていた。

公爵も時に、伯爵の知識の徹底性や批判的傾向にもはや迎合できなかつた。特に伯爵が、新しい発案に従って鑄造された自分の客友の大砲を専門家の顔つきで調べながら点検し、大砲の個々の部分をすべて詳細な壊滅的評言にまとめるたびに、面白くなかつた。

すると公爵は厳しく口を引き締めて、伯爵を一人にさせた。ただアンジェラ嬢、この枢機卿帰還のためには障害となる女性を結婚させて、かくて片付けてしまうという願望があつて、公爵はこの飽くことなき難癖屋に、是非もない間、耐え忍ぶという辛抱ができた。

ルクレツィアの領域でさえ伯爵は無愛想に振る舞うように努めていた。しかしこうした試みはすべて、夫人の巧みな優美なあしらいで、挫折した。喧嘩腰の寄せて碎ける波も穏やかな岸边では散るようなものである。

ルクレツィアが彼に夫人の寡婦領のフラヴィアーン家の領地を、自分の若い従姉妹の花嫁持参の領地として持たせるかもしれないと仄めかすと、彼は反抗心から大いに激昂した。彼の目には自分の極合法的領地であるのに、一人の女性の恩義にされるというわけで、彼はこうした不当な仄めかしに男性的威厳で対抗した。

しかしルクレツィアは、こうした怒りを本気であるとは考えず、微笑して答えた。

「仮に私ども両人が、この点で争っていても、フラヴィアーン家の領地を二等分割して、平和裏に二人で分け合ったら、どうでしょう、裁判官達にとって心外でも...私はこれを、

昔のソロモン王のように[列王記上、3.16-28]、貴方の心を試すために話しているのではありません、エツレ。地球は分割できない血と生命でできた生きた子供ではなくて、千切って諸部分に、分割したり奪ったりするよう定められているのでしょ」。

彼自身アンジェラ嬢に対する自分の感情に関して明確であったならば、伯爵はこの分割案をすぐに受け入れていたであろう。彼はこの高貴な娘を、最初から、我が儘な、躰のない生き物と見なしていた。――しかし、何と不思議なことか、しばらく前からアンジェラの事情が若干変わっていた。彼女の硬さや渋みが、太陽の許で熟して丸みを帯びて行く果実のそのように消えて行った。彼女を成熟させたのは、愛の太陽以外に別の太陽が考えられようか。コントラーリオ伯爵でなければ、どんな浮世の男がこの誇り高い心を所有できようか。

彼の考えは戦い合って、それで彼は自らに一年の熟慮期間を設けた。

アンジェラが次第により穏やかになりながら、公爵は彼女の存在を一つの厄災と感じ、できればこれを片付けてしまいたいと考えているであろうと屈辱的確信を抱いてフェラーラの宮廷で過ごしているとき、ルクレツィア夫人は自分の幸福の高みに達していた。

夫人はアルフォンソ殿に対して、二人の体格の良い、才能ある少年を生んでいて、公爵は夫人に対して、夫人を日々より高く尊重しながら、このことに心から感謝していた。

公爵はほとんど同等に夫人の素晴らしい賢明さを愛していた。夫人は、ヴェネツィア戦争の間、考えられる最も難しい局面で、公爵が戦場において、フェラーラ国家の存続が危ぶまれていたとき、天才的枢機卿の助けもないまま、この賢明さで統治していた。

枢機卿がフェラーラの運命にとって、どうしても良い存在になったわけではない。彼は公爵のために弟らしい思いやりで、ミラノから自分の権限の及ぶ限り助言し、働きかけた。しかしそのことで彼は体力を消耗し、致命的熱病の再発にしばしば悩まされた。

しかしルクレツィア夫人は彼がいなくても、国政を俯瞰して慎重に行ったばかりでなく、決定的瞬間には男性的決意を持って臨んだ。かくてフェラーラとその公爵がルクレツィア・ボルジアをほとんど神格化したのは、不思議ではない。

しかし冷静で、思慮深い領主夫人は、謙虚にその凱旋車に乗って、自分の背後に立っている煩わしい奴隷の言葉によく耳を傾けた。この奴隷は、ローマ人の凱旋の慣例に従って、夫人の過去のすべての恥辱を耳に囁き、夫人を恥じ入らせるよう、何も忘れていなかったのである。[ローマの将軍の凱旋式では、奴隷が王冠を支えながら、思い上がるな、人間であることを忘れるなと発声した]。

さて夫人は自分の評判を、世間の前で、清らかなものにし、立ち直らせていたので、夫人は天と和解することも考えていた。夫人は子供達を難儀して生み、しばしば早逝の予感に付きまとわれていただけに、この衝動に従った。

夫人はこの仕事も全く具体的方法で行った。丁度夫人の父親が、極めて素朴に、教会の有する教義や奇蹟を疑わなかったように、父親は教会の頭目にしてその恥辱であったのだが、ルクレツィアも、精神的異教徒風な世界にあっても、決して教会風な作法や観念を忘れなかった。

夫人は物分かりが良かったので、自分の罪の総体と重大さに関して間違っていない、自分の功績、敬虔な修練や喜捨については謙虚に考えていた。これらの善行を彼女は日々増やそうと思っていたが、しかしそれでも自分の罪の種類や大きさと比べれば、自分の賢くて

鋭い目の前で、日々また消えて行くようなものであった。夫人は絶えず水を穴のあいた容器で汲み上げるダナイデスの一人であった。ただ劫罰だけは免れたい、教会の救助手段の助けを借りて、何とか煉獄の最下段には達したいと彼女は願っていた。そこに達しさえすれば、自分は聖人達の仲介で、より高い段へ行けるだろう、と利口なこの女性は愛敬ある愚かな説得を自らにしていた。

クララ会尼僧院に住むたびに、公爵夫人が専門家として自分の魂の案件の際、相談相手としていたマメッテ神父は、神々しい算数に長けていて、これによれば、偉い人々は卑小で、貧民がすべてを所有しているのであるが、すぐにこう察した。夫人は金持ちの一人であって、天国に入るのは難しい、と。すでに彼女の出自が、教会を母胎としていて、彼女にとっては心痛の種であったろう。しかしこの点とか、彼女の怖気のする青春に、神々しい貧窮という低い門で彼女を締め出すことになる岩塊を彼は見ていなかった。しかし多分、彼女が自活して、どんな隙間からも這い上がってくる時の蛇のような狡智に難点を見ていたことであろう。

しかし彼女の柔軟な処世知と政治学とがフェラーラの公爵家と国家にもたらす恩恵を彼は感謝して認めていた。ちなみに彼は、神の許では何事も不可能ではないということに同感して、安堵していた。

そしてたとえ夫人が、自分は神を愛せないと嘆いても、彼は夫人に言った。求愛の端緒は男性の仕事であり、夫人は神の愛が夫人に求愛するまで、辛抱し、喜捨をしながら待つ必要があります、と。

このフランシスコ会士との親密な交際を通じて、公爵夫人はアンジェラの心についても彼と相談する機会を逃さなかった。夫人はこの若い従姉妹の頑固な、教会に対し反抗的な良心のことで苦情を述べ、この良心のせいで、アンジェラは、自分が一連の不幸の発端であり、因果の鎖であると信じ、この不幸は何ら教会風の贖罪では償われないと思っています。この思い込みの、あるいは勝手に拡大された咎に関し、高慢に悲しんでいて、それでこの点が、自分がこの娘のためにと目にかけている輝かしい配慮に対する障害となっています。この法外な良心を謙虚なものに導き、彼女に人生の分別を教えることがマメッテ神父の義務となりました、と。

神父の黒っぽい目は、こう答えたとき、笑っていた。

「妃殿下、貴女の従姉妹の良心が声高で率直なものであること、ミサを告げる朝の鐘の最初の打撃のようであることは、真実です。しかし一点、貴女は間違っています。アンジェラは教会での贖罪を嫌っていません、...私はアンジェラに正しい贖罪を課しました」。

そして公爵夫人に祝福を与えながら、彼は辞去した。

ルクレツィアは尼僧的謙虚さの中で、フランシスコ会士の手を握って、それに接吻しようとしたが、しかしその後、しばらく神父の手と袖の間で躊躇し、自らの指に華奢な口で触れた。

ジューリオ殿の囚人生活の五回目の春、公爵夫人は慣例でないときに、尼僧院の静寂を求めた。彼女は死産をして、クララ会修道院に引きこもって、亡き子を悼み、自らの救われた命に感謝した。

しかし一連の平穏な日々の後、夫人の滞在はいつの間にか妨害され、短縮された。

諸出来事は、「忘れられた塔」と関係していた。この塔はこれまで葉が生い茂っていて、夫人は何も注目していなかった。

或る日老尼僧院長が正餐のとき、食堂に現れなかった。この正餐には公爵夫人がアンジェラと一緒に特別の好意で参加する習慣であった。尼僧院長は病気で臥せっていた。突然の恐怖のせいで、腫れ上がっている足痛風が、胸まで上がって来ていた。尼僧院長は呼吸が苦しかった。しかし尼僧達は、牧人を失った羊の群れのように狼狽していた。

その上、尼僧達は混乱していて、尼僧院の沈黙の掟を忘れ、この日の早朝、「忘れられた塔」で起きた信じ難い話をひそひそ話し合っていた。尼僧院長を死に瀕するほどに追いやったものである。数年前からその本領を発揮している仮面の王子が、昨夜誘拐されたのだから、他の尼僧達は、――絞殺されたのだから、と言うものもいた。

一つのことだけは確かよ、ただ一人地下牢に忍び込むことができた老ミラビリが、日の出前に、重たい鎖をかけられて、虫の息の顔をして、尼僧院の門の所まで引き出されて来たのよ。コンソラツィオーネ尼僧が自分の目で見たのだから、この老人は嘆きながら、鉄枷を嵌められて、ほとんど先へ進めない状態だったの。この老人は、聞き取れない救いを求める声を出しながら、束縛された両手をこの尼僧の方へ突きだしたの。この尼僧は血の涙を流す寸前だったのだから。

「この『忘れられた塔』の幽霊、この仮装者は誰なの」と公爵夫人はアンジェラに向かって言った。夫人はアンジェラと一緒に食堂の混乱した尼僧達の群れから離れて、自分の房へ戻っていた。「ミラビリなの。この人は私の主人や王子達、主人の兄弟達の昔の師で、その名前ではないかしら。...ジューリオ殿が、...」。

一つの素早い発見で、彼女の精神は照らし出され、辱められた。「また行方不明の男が出現したの、こちらに。それに尼僧達は、彼はずっと前からここにいると語っている。どうして私はこれを見逃して、長年知らないままだったのでしょうか。――

真っ赤になったアンジェラのことを更に気にはせず、彼女は房に閉じこもって、公爵宛に書いた。

夫人は公爵に告げた。尼僧院の平穏はある逮捕で乱されています。謎めいた出来事がありまして、その解明はただ殿下お一人がなし得るものです。私と夫の君との会話が願わしくなっております。私はクララ会尼僧院への滞在を終わりにします。公爵殿には明日夕刻ようやくお目にかかる予定です。

ルクレツィアはかの晩、自分の房をもはや去らなかった。夫人は一人の侍女を通じて、尼僧院長の状態を問い合わせ、アンジェラ嬢が丁度病気の院長を訪問して、院長は快方に向かっていると知った。マメッテ神父も到着して、尼僧院はいつもの平穏に戻ったとのことであった。

ルクレツィアはこの敬虔な家を騒擾に導いた狼のことを明らかにせず、クララ会修道院を後にする気はなかった。

それで翌日の早朝、尼僧院長の代わりにマメッテ神父を自分の房へ呼ぶことにした。神父の到着は彼女には都合良く思われた。

夫人は、自分の推測では、怪しいと思っているこれらの諸事件に対する神父の内密の関与について、神父を問い質し、必要ならば、巧妙な罟となる質問をして神父を吊し上げることにした。

春の夜は蒸し暑くて、無数の花の香りが充満していた。

公爵夫人は休まず、起き上がって、開いた窓辺に腰掛けた。

広大な客室の房を含む建造物が拡張された尼僧院中庭の一方の側を形成していて、その南側には、無花果やレモンの豊饒な園亭の鬱蒼とした隅があって、「忘れられた塔」に隣接していた。葉叢の屋根の上には、巨大な円形建物の重たい、崩落と繁茂とで無秩序な塊となったものが中庭に突き出していた。ルクレツィアは思い出していた、以前夜間に、小さな、二、三の、ほとんど見えない、ばらばらの高さの、壁に開けられた小さな窓のその一つが、弱く照明されて見えたことがあった、と。今日、塔の内部は暗かった。しかし塔の外部は、煌めく高い星座に取り巻かれていて、塔の脚部には、無数の蛍の戯れる火花が圍繞して踊っていた。

何時間も眠りを忘れた女性は、静かな夜と中庭の泉のざわめきに聞き入っていた。

すると小枝が折れて、軽やかな足取りに芝が踏みしだかれたようであった。それからまた静かになった。このとき微かにリュートの前奏があった。そして今やルクレツィアの耳は、塔の深みから、そして一人の男の胸から、穏やかに開始され、憧れて満ちあふれる歌声を聞き取った。

「思うに、香る五月の至純の空に、
星々が輝いていよう。しかし私には見えない。
私の空を飾っているのは、ただ一つの星、...
しかし悲しいかな、愛しい妻よ、そなたを、
私の星を、私の命を、失わなければならない。
我が生は、黙した惨状に戻って行く。

友が招いたこの破滅、
私は散って、消えるしかない、
兄上の憎しみを買って、離されて、
異国の牢獄に追放される」。

ルクレツィアは、ジューリオ殿の気骨のある声を聞いていると確信した。しかしこの美しい諧音で嘆いている言葉の意味を把握しないうちに、無花果の木々の中から、別の小夜啼鳥の答えが上がった。

この柔らかなアルトの声も、彼女には馴染みのものであった。アンジェラが歌った。

「安心なさい。すでに明ける東雲の
今日この日、私はルクレツィアに知らせます、
二人の誓った仲について、逃げも隠れもせずに、
そして二人の結婚式を祝います。
これからは苦楽を共にして、
地の果てまで参ります。
ようこそ、若々しい明言、
ようこそ、真実を告げる日、

獄舎から獄舎へと、黄泉の国まで、
私は最愛の夫の供をします」。

大きな驚きの後、そして自分自身長年気付かされなかったことと、この出来事の双方に向けられた怒りの発作の後、公爵夫人は、処世知を十分に備えていたので、完成された事実に潜むかの落ち着きを感じた。というのは、夫人が従姉妹のことを知っていたように、「忘れられた」塔での二人の歌は、アンジェラの決心した犠牲行為であり、予行された結婚式を意味していると、確信されたからである。そして同様に確かなこととして、いかなる司祭がこの取り消し難い行事を行ったか、予感していた。

「ならず者のフランシスコ会士」と全く本気で夫人は叱って、自分の臥所に戻り、自分の軽やかな頭を枕に置いて、自分の考えを放念しながら、微睡んだ。

夫人は明るい朝方まで眠っていて、目覚めたとき、アンジェラの姿を認めた。アンジェラは乞うような目をして、夫人の臥所に跪いていた。

しかし夫人は、今一度瞼を閉じて、ブロンド髪の頭部をまた枕に置き、拒絶するように言った。

「あなたの依頼は話さないで頂戴。聞かなくても分かるけど。私をまたクララ会尼僧院に引き留めたいのでしょうか。宗教的修練にまだ熟達していないからと言うのでしょうか、信心ぶって。今回はそうは行きません。...私は公爵の指示を待っています。そこにあるのはアルフォンソ殿の書状ではないかしら。私が眠っている間にあなたが届けたのかしら。すぐに渡して」。

夫人は封を破って、知らせを素早く目で追った。夫人の夫はこう書いていた。

「愛する公爵夫人、

尼僧院での出来事には休心されたい。単に老残のミラベリの愚行によるものだ。彼は盲人のジュリオと付き合っていた。この盲人は、ひょっとしたらこのことを貴女は知らなかったかもしれないが、『忘れられた』塔に住んでいて、今日ここを離れることになっている。この老公は、盲人の誘惑の術中にはまって、盲人を解放しようという考えで凝り固まっていた。すでに二年前に老公は私宛に奇妙で不遜な書状を送って来たのだが、最近愚行に愚行を重ねて、哀れな額で塔の番人を買収しようとし、蠟で象って、塔の鍵を我が宮廷錠前師に注文した。数時間前に、この買収額と蠟の型が私のテーブルに届いた。私の以前の師、若々しい力の砌に、私をしっかりと鍛えて、成果を上げたこの師に、厳しい裁きを科すことは、私にはできない。老公は今、モーデナの私のベネディクト会士達の許にいる。会士達はその文書と共にその堅牢な家で老公を預かっている。

貴女が今日こちらへ来るのは、結構なことだ。コントラーリオ伯爵は刻々と耐え難い存在となって行く。彼は私の哀れなファエンツァ焼きの絵柄に間違った絵画技法を指摘することに飽き足らず、昨日は私の旋盤の背後に立っていて、彼の頑固な指で、私の大事な螺子を曲げてしまった。伯爵が私のすべてを駄目にしないうちに、アンジェラ嬢を連れて、帰って来て欲しい。我々は今日のうちにも、二人を娶せて、両人と、フラヴィアーン家の領地を付けて、最終的に別れることにしよう。

変わることなく貴女に衷心から恵み深い

愛する貴女の夫」。

ルクレツィアはこれらの数行を、微笑しながら、思案しつつ読んだ。「偉丈婦」と彼女は言った、一夫人はより背が高くなったアンジェラを冗談でそう呼ぶ習慣であった、「朝餉の服を渡して頂戴。そして私の用意を整えて、より快活な顔と整理された頭で、あなたに一番良いことを考えることにしましょう。だって、この手紙はあなたの将来のことを語っているのですから。公爵は今日のうちにもあなたをコントラーリオ伯爵と結婚させたいと願っているのです」。

アンジェラが縮み上がると、公爵夫人は微笑した。「女の運命です。...あなたは実直な求婚を侮辱と感ずるような聖人じゃないでしょう。あなたの求婚者が、清められた土地を穢すとか、少なくとも余所の禁じられた大地に足を踏み入れるわけじゃないでしょう。

私はあなたをローマからフェラーラへ一緒に連れて来ました。一つの暴力行為の時代に、立派な結婚で、あなたに堅牢で高い地位を与えるためです。私どもがあなたのためにと選んだこの伯爵は、少しばかり不愉快な点もあるけれども、すべてこうした重要な利点を差し出しています。それに彼は完璧な貴族です」。

「貴族かしら」とアンジェラは嘲った、「それで私を愛抜きで妻にするつもりかしら。フラヴィアーン家の領地の付属として」。

「あなたは何が欲しいの」とルクレツィアは怒って答えた、「あなただけは、私ども皆とは違うものが欲しいのね。男の愛で、何かしら。刺激、策謀、欲望、暴力行為、憎しみ、反吐よ。...私は一人の男も愛したことはありません」。そうルクレツィア・ボルジアは告白した。

アンジェラは黙った。彼女は別な風に、もっと良く承知していた。それから彼女は簡潔に言った、「でも、後悔と同情から生ずる愛だったら」。

「それは天上的なものです」とルクレツィアは言った、「教理問答に適っています」。

「天上的なものであろうと、現世的なものであろうと[Tizianの絵の題、天上的愛と現世的愛]とアンジェラは告白した、「私はこの愛から、ジューリオ殿の妻になったのです」。

公爵夫人は、実際よりもびっくりして、怒っている振りをした。

「陰険な人、そんな風に私と公爵に刃向かうのですか。すべての高貴な女性に相応しく、天成な風に、高く、より高く目指して、秘かな知恵で人生を支配する代わりに、あなたは恥辱と暗闇の中に転げ落ちて行きます。低俗な人、あなたは一人の盲人、一人の犯罪者の牢獄を求めています」。

「どうして低俗になったのか、お話ししましょう、ルクレツィア」とアンジェラは誇り高く謙虚に言った。

「ストロツィーが殺害された夕方、私はあなたの許、修道院へ逃げて、そのとき、ジューリオ殿が『忘れられた』塔へ移されるのを目撃したのです。すでに当時私の視線は情け容赦ない壁に釘付けになって、私は緑の中に隠された格子窓の下に足を運びました。その当時すでに私は盲人と話したかったものです。でも声が出なかった。

それから秋になって、待降節となると、声が届くようになりました。北風が枯れた葉をまとめて、旋回させて吹き上げ、ざわざわと盲人に朽ちた葉を振りかけて、盲人がその葉に触れていたなら、その両手の中で碎けて散ったことでしょう。そのとき私には自然が盲人の頭に枯れて死んだ葉を振りまくことがとても残酷に思えました。私は声を上げて、叫び

ました。

『ジューリオ殿、貴方の不幸がやって来ました。愛して不幸が追っかけて来ました』。

しかし盲人は私の声を聞き知っていて、答えました、『ようこそ、...』、当時、それから後に、私が盲人に近寄るたびに、盲人は自分の心を次のように説明しました。

『そなたが以前、プラテッロに私を訪ねて来たとき、私はそなたに言った。済んだことは変えられないし、私の目は元に戻らない。しかし今、私の精神の目が開いている。私は見えるのだ』、 — 盲人は微笑しました、 — 『私は精神の目で見ている。そなたの偶然の言葉で私の目が潰されたとしても、それは私にとって幸いなことであった、と。確かに母親が盗賊の両腕から自らの泣き叫ぶ子供を奪うように、痛くて、強引なやり方であったのだが。というのは、私は鈍重な快樂の中に溺死していたであろうからで、それが今は明確な感覚を持って生きている。高貴な目の明かりが奪われていて、暗い日々の仕事に限定されているから、上乘の者とは言えないけれども。勿論ただ私が憧れるのは、我がプラテッロの森の空気と大地の臭いだ。それにそこを耕作し、私が良き父親、正しい父親でありたいと願う何百人かの者達だ』。

そしてアンジェラは大袈裟な言葉で、ジューリオ殿の新しい本性とそれに自分の幸せを称え始めた。...しかしこの言い表しがたいものは話されず、アンジェラはルクレツィアを抱擁し、息も詰まるほどに接吻して、終えた。

ルクレツィアが抱擁から逃れようとしていたとき、マメッテ神父が罪のない、明るい顔で入って来た。

しかし公爵夫人は憤然として神父に向かった。

「ならず者の僧侶」と夫人は神父に語りかけた、「どうしてあなたは、この女性に対する公爵の後見者としての立場に生意気に介入して、公爵を蔑ろにしようとしたのです」。

「ジューリオ・デステ殿とアンジェラ・ボルジア嬢を私が神父として結婚させたことを仰有っているのですか」と彼は謙虚に言った、「私は公爵の威力よりも高い威力に奉仕して司りました。これはジューリオ殿の人生とこの方の心の安らぎに関することです」。

— 彼はアンジェラ嬢を見つめた。

『『忘れられた』塔の地底には、囚人のためにと定められた狭い礼拝堂があります。高い所にある、狭くて、重たい鉄格子付きの窓からの明かりはほとんど暗いものです。

そちらへ私は毎日曜日、ジューリオ殿を案内して、彼のためにミサを読みます。あるとき、数年前、この神聖な行事のときに、私は窓の方を見ました。窓で、小鳥の羽ばたきめいたものが動いたのです。緑色の葉叢の間に、私は褐色の巻き毛と両の敬虔に輝く目を見ました。聖なるミサに列席している一人の天使かもしれない。...この天使は私の妨害をしていない。

私は牢獄を後にしてから、尼僧院教会でアンジェラ嬢と出会いました。アンジェラ嬢の告解を私は聞く予定でした。

私は彼女を見て、驚きました。彼女の額に深く、血のように赤いみみず腫れの十字架の印があったのです。[マイヤーの詩、Die gezeichnete Stirne, Hussens Kerker]。これは塔の礼拝堂の窓の格子に押し付けていたせい以外に考えられましようか。私は察しました。この若い女性は、無花果の木絡んだ枝を利用しながら、葉叢の陰に隠れて、額を固い鉄格子に押し付けながら礼拝堂の中を覗き込もうとしていた、と。

彼女の告解では、自分の苦しみが込み上がって来ました。額に記されているよりも、深く、出血して、ジューリオ殿の牢獄が彼女の心に刻み込まれていました。デステ[ジューリオ]の目潰しに対する科のすべて、それに劣らず、ジューリオ殿の反逆罪の科が彼女の良心に刺さっていました。自分は彼が牢に入る原因であったというものです。

彼女は、不可能なのに、贖罪を切に求めています。そして自分の科の高みには決して達せられないのに、償いを求めています。彼の目を彼女は決して新たに造れないのですし、少なくとも、彼と同罪となって、彼の牢獄の暗さを分かち合おうとする彼女の欲求も、この世の裁きでは叶えられません。こうした彼女の心の状態から、私はジューリオ殿への彼女の偉大な愛を知りました。と申しますのは、愛は自分の与えるものを低く見積もり、自分の科を高く見積もって、偉大な許しを必要とするからです。

しかし世の正義が与えられないものでも、教会の慈悲心は聞き届けます。かくて不肖私は、司祭として、結婚の秘蹟を通じて、兩人を一つの科と一つの贖罪の中へと結婚させる必要があります、それを許されたわけです。

この結婚に際して、二人は国の法律に何ら違反していません。囚人はこの塔から出ることなく、礼拝堂に立ちました。アンジェラ嬢は、再び額を格子の十字架に当てて、そこを通じて、私によって祝福された指輪を交換しました。...

「そのような結婚は許されるものではなく、無効です」と公爵夫人は怒って主張した。

「そんな風に日々が続いて」とフランシスコ会士は冷静に続けた、「ジューリオ殿がミラビリの不幸な手紙の後、ひどい高熱を発して、病床に伏すことになりました。しかし一体と化した二人を臨終のとき、どうして引き離すことが出来ましょう。...盲人は、アンジェラ嬢の看護の下、治癒しました。結婚生活は隠されたままでした。アンジェラは当時、普段より長く、そして一人っきりでクララ会尼僧院に滞在していましたし、妃殿下は、ヴェネツィア戦争の時代、公爵不在のために朝から晩まで国の安寧のために尽力されていたのです。二人のことが露見する時を、私は我らのすべての運命同様に、神の御手に委ねていました」。

「貴方らの運命はひどいものになるかもしれませんよ、尊敬する神父殿、わざわざ私はアルフォンソ殿に貴方らの肩を持って執り成しをする気になれるかしら」とルクレツィア夫人は上品な口許に軽蔑の表情を浮かべた。

「どうぞご随意に」とフランシスコ会士は答えて、辞去した。

黄昏時、別れる公爵夫人の駕籠が尼僧達の群れの中から持ち上げられて、野外に出たとき、「忘れられた」塔の門前に神父が今一度現れた。青白い顔をして、彼は駕籠の担い手達を引き留めて、公爵夫人に囁いた。

「囚人が消えました。公爵の護衛兵の大尉が、仮装してジューリオの許に現れて、黒い仮面の下、連れ去りました。令夫人、お約束なされたように、彼の肩を持ってください」。

両女性が城砦の照明された祝典の広間に入ったとき、二人はそこにアルフォンソ殿を見つけた。公爵は公爵夫人を待ちながら、あちこち歩き回り、時折チェスの試合に目を向けて、助言を与えていたが、この試合は灰色髪の廷臣が、長い、威厳のある鼻をして、コントラーリオ伯爵相手に指していた。

「詰みだ」と伯爵は勝ち誇って甲高く叫び、相手が悄然として負けた試合を見つめている間に、女性達を騎士然と出迎えた。

しかしすでに公爵がルクレツィア夫人を離れた休憩席に連れて行き、手短かに夫人に挨拶した後、彼女に一枚の書状を知らせ始めた。ミラノからのものであった。イッポーリト枢機卿が震える手で認めており、次のような内容であった。

「最愛の兄上、私は死を覚悟しています。内心の潰瘍が致命的です。耐え難いものです。こう思い悩んでいます。しばしば心の重荷となっているジューリオ殿がその牢から出るならば、もっと楽に往生できるかもしれない、と。

私の最後の願いを聞き届けてください、お達者で」。

「分かるだろう」と公爵は言った、「すぐにこの申し出に応じたい、と。しかし盲人をどこにやったものか。ルクレツィア、盲人をどうしたらいいか、助言を頼む。盲人はまもなくこちらへ来る。私の前に盲人を案内するよう命じたのだ」。

「運命は彼の味方なんですね」と彼女は言った、「驚いたことに、二年前から盲人は結婚しています。私を明きめくらと言わんばかりに、従姉妹が白状しました。我が家系の風上にもおけない女性で、尼僧院の影に隠れて、『忘れられた』塔を訪問して、結婚しています。彼女は罰すべきでしょう。二人をプラテッロの地に閉じ込めて、アンジェラを盲人の看護人にしましょう」。

憤怒と満足感の奇妙な混淆が公爵の表情に現れた。「しかしこの伯爵をどうしよう」と彼は嘲って、広間の中央を示した。そこでは伯爵が、長目の、縷々理由を述べた弁舌で、黙したアンジェラに求婚していた。

このときドアが開いて、盲人が敷居に現れた。

「済みません、伯爵、一 私の夫です」とアンジェラは至福の声を上げて、彼の許に急いだ。

ジューリオ殿が両目に軽く眼帯をして、入って来た。しかし確固とした、男性らしい足取りで、気付かれぬようにアンジェラの手で案内されていた。

彼は公爵の前に来ると、膝を曲げ、公爵の手を取って、言った。

「兄上、私は兄上にひどいことをしました、兄上の」、ひょっとしたらこう言おうとしたのかもしれない、「命を狙おうとしまして」、一 しかし兄は弟に最後まで言わず、弟を自分の口許へ引き上げて、男達は接吻し合って、互いに涙をこぼした。

公爵はやがて気を取り直した。

「私の言葉は変わらない」と彼は言った、「そなたはそなたの広大なプラテッロ内での我が囚人だ。この女性をそなたの看護人に付けることにする」。

「ジューリオは貴方の命令に違反しません」とアンジェラは言った、「向こうでも、他のどこでも、反しません。だって自分の暗い牢獄から出られませんから。いつでもその牢獄と一緒に」。

「約束してください、兄上」とジューリオ殿は頼んだ、「私の老ミラビリを殺さないでください」。

「ジューリオよ、何でそう考えるのだ。我らにストア派の英知を教えてくれた男を殺せるものか。...彼はモーデナの我らの学識あるベネディクト会士達の許で極楽にいる気分であろう」。

コントラーリオ伯爵は、自分の眼前で起きていることを信ずるのに苦労した。彼はただ受難にまみれたカップルに、何か不快なことを言ってやろうという暗い衝動を感じていた。それで彼はただ二個の石を投げたが、しかしそれは薔薇に変わった。

彼はまず盲人に向かった。

「王子、おめでとうございます」と彼は言った、「しかし敢えて私の意見を申します。思うに、真の貴人ならば、完璧な貴族であるならば、一人の盲人が目明の女性の心を惹き付けて、自分の惚れた両腕で墓場までこの女性を引っ張って行くとすれば、果たしてこれは優しい振る舞いであろうか、自問することになりましょう、この点には気付かなかったのですか、考慮されなかったのですか」。

「伯爵」とジューリオ殿は幸せに答えた、「彼女は私から目を取り上げましたが、その代わり、自分の目を私に与えています。彼女は喜んで与え、私は喜んで受け入れます。彼女は与えて、浄福であり、私は受け取って、浄福なのです」。

しかしアンジェラは法外に愛して、歓声を上げた。

「私の愛しい人、あなたの美しく青い目はまた輝きましょう、...以前あなたは私をプラテッロから追い返しました。両目を新たに造ることは出来ないから、と。以前よりも、あなたの目はより明るく、より若々しく輝きましょう。...あなたの子供達の顔から輝きましょう、いつか神様から授かったら」。

彼女は自分の大胆さに驚いて、熱く火照った。

それに対し伯爵は二番目の石を投げた。

「令夫人」と彼は非難した、「教養あるレディーならほとんど考える勇気もない事柄があります。いわんやそのような事柄を話すとは」。

アンジェラは明るい目で答えた、一 盲人がその目を覗き込めなかったのは、実に残念である、「伯爵、何をお望みです。私はボルジア家のものです。ボルジア家のままです。ですから少し大目に見て頂かなくてはなりません」。

一つの間が生じた。しかしコントラーリオ伯爵は高貴な決意をして、公爵夫人に向かった。

「妃殿下」と彼は言った、「私は貴女の提案されたフラヴィアーン家の領地の二分割に同意します」。

訳者はC.F.マイヤー[Conrad Ferdinand Meyer(1825-1898)]についてはほとんど知らなかった。手塚富雄著、『ドイツ文学案内』で、「厳格な形式美をめざす彫塑的・具象的な言語スタイル」という記述を読んで、食指が動いた。2022年熊本の古本屋さんから二巻本の全集、C.F.Meyer: Sämtliche Werke in zwei Bänden:Winkler-Verlag 1968を購入し、そのBd.1.Novellenを読むことにした、つまり翻訳した。九州大学図書館にSämtliche Werke: historisch-kritische Ausgabe; besorgt von Hans Zeller und Alfred Zäch,1958以降の全集があり、これらの注釈を参考にした。勿論既訳のあるものは少なくとも一冊を求めて、参照した。これを求める際には、田村久男:「日本におけるコンラート・フェルディナント・マイヤーの翻訳・研究文献」(1997年まで)を参考にした。約11ヵ月の読書である。

まずマイヤーの名前も色々日本語ではあるが、「マイアー」とするよりも「マイヤー」にした。これは古見先生より、生野先生表記に従ったことになる。「イチロー」を「イッヒロー」にするようなもので、名前の表記は難しい。生野幸吉先生は、訳者の恩師の一人であり、『尼僧院のプラウトゥス』を訳しておられる。マイヤー紹介は先生のこの訳の冒頭を丸写ししたい。

「Konrad Ferdinand Meyer (一八二五—一八九八)はスイス・チューリヒの名門に生まれ、父は早く亡くなったが、著名な歴史家、州参事官だった。母親の憂鬱の影に育ち、無気力ゆえに母の悩みの種となった。始め法律と歴史を学んだ。母が一八五六年に精神病院で自殺してのち、一八五八年のイタリア旅行でミケランジェロの作品を見たことが、かれを開眼させた。四十五歳頃から創作力が盛んになったが、五十歳で結婚し、子をもうけ、名声を得てのちも、始終かれの精神はおびやかされた。ことに一八五二年にも神経治療所に行ったことのあるかれだが、老齢におよんでみずから精神病院に入った。しかし晩年の五年は正気で過ごした。

詩集(一八八二)に収められたかれの詩は、古典的バラードや、彫琢された一種の事物詩にすぐれ、そこには、明るくてしかも威圧的なスイスの風光が投影し、孤独者の包まれた抒情、精神化された印象が、鮮やかな彫塑的作品となって定着されている。十九世紀後半のドイツ最高の抒情詩人であり、リルケやゲオルゲの先駆だともいえる。また小説も数は少ないが、そのどれもが不可欠といえる名品で、粋小説を得意とし、客観的描写、性格把握、劇的構成、時代精神への洞察にひいでている。処女作『アムレット』、叙事詩『フッテン最後の日々』、小説『ユルク・イエナツチュ』『聖者』『説教壇からの発砲』『ある少年の悩み』『僧侶の結婚』『アンジェラ・ボルジア』など。訳出した短篇もすぐれた歴史小説の一つだが、マイヤーの持つカルヴィニズムの厳しさとフランス的明澄、激しい主観とその陶冶は、この作からもうかがえようし、またここにはかれとしては珍しくユーモアがあふれている」。(生野幸吉訳『尼僧院のプラウトゥス』『世界短篇文学全集 4』集英社 1963. 68頁)

生野先生の教えで、肝に銘じていることは、散文を研究する者は、気軽に詩を論ずるなということで、直接そう教わったわけではないが、自分なりにそう教わったものと解釈しており、それで私はほとんど詩集を読まない。それでマイヤーの詩を知らない。和歌の百

人一首を読めば、これを翻訳しても原文には及ばないだろうと日本人なら誰でも思うであろう。それでドイツの詩を読んで訳しても、原文に及ばないわけで、マイヤーの『フッテン最後の日々』は韻文であり、これは気楽に手を出せない。幸いこれは入手した全集二巻本の詩の巻に入っている。

それで目次にある十一の小説を順に訳出して行ったが、最初二、三の短篇を訳して、粹小説とは、落語の語りに似ており、これらの短篇は全体落語の「崇徳院」風である、しかも崇徳院という偉い方の伝記も同時に語るという鷗外、漱石も顔負けの高等落語だという印象を持った。落語の「崇徳院」は百人一首の「瀬をはやみ岩にせかる滝川のわけても末に逢はむとぞ思ふ」の歌で結ばれる若い男女の偶然の出会いの噺である。この歌にあるように男女の出会いは、相思相愛、唯一無二のカップルというわけでめでたいという印象が残る。しかし主人公達の時代背景はそれぞれ苦しいもので、特にカトリック、新教の争いの中、究極的には政教分離を視野に入れたスイスやヨーロッパの生活が描かれている。それぞれの作品は落語ほどに最後落ちが明確にあるわけではないが、自然と落ちめいたものが感じられる仕上がりになっている。マイヤーの語りは「粹」構造と言われるが、訳す際、会話の表記が、「」[4565回]では足りず、『』となり[825回、タイトルも含む]、中には<>となる[46回]なので、そうした語りが粹構造なのであろう。マイヤーの小説では最初訳した『護符』で作中人物にモンテーニュが登場して驚いたが、『僧侶の結婚』では、ダンテが語り手であり、全編有名人が登場するのも面白い。『神曲』のダンテは「内部告発者」のイメージらしく、評価が高いのも、多くの不満分子の支持故かもしれないが、しかしやはり韻文で響きがいいのであろう。有名人でも、ブオナローティと言われても、日本人はすぐにはミケランジェロとは気付かないかもしれない。またフリートランド人とはヴァレンシュタインである。モナ・リザも出て来るが、これは意味不明らしい。

まくらはこれくらいに、各作品の1) 時代背景、2) カップル、3) 落ち、4) その他を順次述べたい。

護符[アミュレット] 1) 時代背景

主人公は、聖バルテルミの日[1572年8月24日]に虐殺される運命のユグノー派のコリニー提督を慕うスイスベルン生まれの青年である。一応貴族であろう。提督に仕えるべくパリに赴く途中、コリニーの姪ガスパルデと出会い、また同郷のカトリックの青年ボカールと出会う。このガスパルデにちょっかいを出す傲慢な貴族と主人公は決闘をすることになる。主人公は剣の腕は劣るものの、友のボカールが胸に隠してくれた聖母のお守りのメダルに剣先が当たって、お蔭で決闘に勝つ。しかし聖バルテルミの日にボカールは弾を受け死亡する。主人公とガスパルデはスイスに避難する。

2) カップル

「崇徳院」風：<自分がガスパルデの愛を得られるかもしれないということは、私には不可能に思えなかった。それを得なければならぬというのは、運命であり、その為に命を賭けるのは、幸せであった>。[21頁、以下引用は拙訳]

<私は彼女の両手を握って、叫んだ、「ガスパルデ、私を、今日と同じく、明日も、これからもずっと、そなたの守護者とならせて欲しい。私と共に、危険と救助、罪と救いを分かち合おう。死ぬまで一体となって、離れることのないようにしよう」。

「一体となって離れません」と彼女は言った>。[28f.頁]

3) 落ち

普通にはユグノー派の主人公がカトリックの聖母のメダルで守られ、それを崇めているボカールが銃に当たって死ぬのが、皮肉な印象として残る。しかし作品は死んだ叔父の手紙、遺言で終わっている。大量虐殺があろうとなかろうと、護符があろうとなかろうと、人間は皆いずれ死ぬ。だから権力者は無理に虐殺しなくても良からう。また個々人は叔父の遺言のように生きるしかなかろう、「私はそなたに私の現世の財産を残す。天上の財産を忘れてはいけない」。

4) その他

本編での決闘の成り行き等はメリメの『シャルル九世年代記』にすでに記されている。シャルル九世は「一人の異端者たりとも生かしておくな」[江口清訳]と命令したと記されている。しかし借用に関しては、少し古いがモリエールについて、「17世紀のフランスにおいては同時代の作品からアイデアの借用を行うのは公然と行われていた」とネットで読めるように、現代では盗作、剽窃とされかねないことも、昔はかなり自由であったようである。フォンターネの『嵐の前』では、牧師ザイデントプフは説教に当たって、シュライエルマッハーの実際の説教を利用している。独創性の概念が少し現在と違うのかもしれない。

説教壇からの射撃 1) 時代背景

次の主人公の友人の科白で概要が分かろう。<「プファネンシュティール君、いいかい、君は向こうの二人の阿呆、ヴェールトミュラー達と関わらない方がいいぞ。將軍は[Hans Rudolf Werdmüller,1614-1677]イラクサで、触れると誰もが刺される。その従兄弟のミーティコーンの牧師は、古参の子供で、我々の職業に、その猟犬、銃の箱、絶え間ない銃撃、射撃で悪評をもたらしている。君自身この春、副牧師として、その下で十分苦勞している。勿論あのラーエルは、小さな可愛い鼻筋で、赤いサクランボの口だ」>。[43頁]主人公は聖職候補生で、チューリヒ湖畔の教区の娘に気がある。そこで悪戯好きの將軍が、従兄弟の牧師の銃好きを利用して、説教壇で思わず発砲してしまうように仕向け、前代未聞の不祥事として引退させ、代わりに聖職候補生の主人公を牧師の娘と結婚させ、後任とさせる。

2) カップル

將軍は自分が名親のラーエルの願いを聞き出している。將軍の言:<「分かった。それでは別な第二を、第三の願いと結び付けよう。山の精、聖職候補生プファネンシュティールをミーティコーンの正規の牧師にして、私を彼の妻にしてください」。

ラーエルは燃えるように赤くなった、「はい、いいです。山の精」と彼女は勇敢に言った。

この決然とした答えは、法外に將軍の気に入った>[56頁]。

3) 落ち

大体昔のドイツ語の「Der Kandidat聖職候補生」には滑稽な響きがある。その教区の地方領主に人事権があり、地方領主は『フィガロの結婚』で知られるように、配下の娘の「初夜権」があったわけで、牧師の嫁は地方領主のお下がりであることがよくあった。人はパンのみにて生きるにあらず、と説く職に就くために、パンのことを専ら考えなければ

ならないのである。それが一般的であるとする、生娘のラーエルと結婚できる主人公は法外に幸せというべきであろう。噺は嘘ではありません、という感じで最後はこの地方領主、将軍の史実を述べている。＜彼の最後は迅速、曖昧、不気味であった。ある晩、火ともし頃、彼はお供と一緒にドイツの小都市に騎行し、唯一の劣等な旅館で下馬し、参審員を呼び寄せ、徴収を指示した。数時間後、彼は突然病気の発作で倒れ、真夜中の鐘の時、その風変わりな魂は息を引き取った。[1677年12月16日]>。[72頁]

4) その他

＜それでプファネンシュティールはどのようにしても抑えられない顕著な忍び笑いに弾けてしまった。彼はよく無邪気な人間に見られるように、喜劇的なものへのセンスを大いに有し、その上今は神経が若干緊張していたのであった>。[48頁][この作者は余りシニカルではなさそう]。

尼僧院のプラウトゥス 1) 時代背景

話し手はポッジョ、Poggio Bracciolini[1380-1459]、古代ローマ作家の写本を発見した人物である。オットー・コロナ、マルティヌス五世の教皇選出の時[1417年11月11日、聖マルティンの日]を中心にした噺で、話し手のポッジョは尼僧院に古代ローマの喜劇作家、洒落本作家の写本を探し求めていた。彼は尼僧院でペテンの行事に出会う。重い十字架を担いで、尼僧生活に入った伝説が続いていて、新しく尼僧になるとき、儀式としてこの重い十字架を担いでみせる。実際はそっくりの軽く細工された十字架を担ぐのである。ポッジョはこれを見抜いて、尼僧になる誓願はしているものの本心からではないゲルトルーデにそのからくりを仄めかして、実際重い、担げない十字架を担ぐようにさせ、失敗させ、尼僧入門から解放し、ついでに尼僧院長から写本も巻き上げる。

2) カップル

百姓娘のゲルトルーデは自分のボーイ・フレンドのことをこう述べている。＜『彼は健気で、儉約家で、大抵のイタリア人がそうであるように、＜謙虚で、分別があります＞、アルプスの南側で言われていますように』>。[79頁]

尼僧の儀式に失敗して、尼僧院から解放されたゲルトルーデが述べる。＜『シュプリューゲンのハンス』とゲルトルーデは大声で、聞き取れる声で始めた、『私をあなたの妻にしますか』。『勿論いいとも。幾千もの喜びだ。ただ下りて来なさい』と楽しげに下の身廊から頼もしい男性の声が答えた>。[89頁]

3) 落ち

＜ゲルトルーデは陰気な僧房の中ではなく、風の吹き抜ける岸壁の谷にいて、胸に一人の子供を抱き、結婚生活の十字架を肩に担いでいるのであった>。[90頁]

グスタフ・アドルフの小姓 1) 時代背景

三十年戦争時の噺で、新教側のスウェーデン国王グスタフ・アドルフ[Gustav II Adolf, 1594-1632]からニュルンベルクの商会主に息子を小姓として採用したいという書状が届く。困ったこの父子は、従姉妹で、お転婆、グスタフ・アドルフ崇拝、追っかけのアウトステ・ロイベルフィングを男装させて、仕えさせる。カトリック側のヴァレンシュタインとの情報交換も交えながら、最後アドルフは決戦のとき、一人の味方のドイツ領主の腹い

せでやられ、小姓も倒れる。

2) カップル

国王夫妻の仲は良好とされる。国王は知らないまま、グスタフ・アドルフを慕う少女の愛は同時の戦死で完成する。<このように獅子は子犬と戯れた。子犬も獅子と戯れた。あたかもからかう運命、傷みやすい運命が、惚れた少女とその崇める英雄とを密接に絡ませたかのようで、絶えず新しい国王の姿や、その深甚の情愛を小姓に見せながら、運命は小姓に、その主君と、この世で最も苛酷な痛み、父親としての痛みを共有させて行った>。
[99頁]

3) 落ち

小姓の最後に立ち会った牧師が、国王の側に女性の小姓がいたのはまずいと判断して、表向き男性として、埋葬されることになる。墓碑にはこう記される。<「逝去日は一六三二年十一月七日、リュッツェン近郊での会戦の際、前日に受けた傷が基で死亡、国王グスタフ・アドルフと共に戦えり」>。[117頁] その場に居合わせた元来仕える筈であった従兄弟が元の名前に戻ろうとすると、牧師が言う。<「駄目ですよ、旦那様。貴殿はラウプフィンガーのままです。貴殿の名前は光栄にも、高貴な志操の少女の墓塚に記されることになりましょう。素晴らしい英雄を死ぬまで愛し続けた少女です。しかし貴殿は貴殿の至高の財産、愛する生命を救出された。それで貴方は満足なさることです」>。[118頁]

4) その他

仮装や取り違えはシェークスピアの喜劇風で、男装は宝塚風。<しかしラウエンブルク公の発した第一音節を聞いて、小姓はこの人間の声が自分の声との間で有する不気味な類似性に驚愕した。同じ響きで、同じ特徴、同じ張りであった>。[107頁]

<今や、このキリスト教徒らしい国王も、ヴァレンシュタインがとらわれている迷信的雰囲気は自分まで呑み込まれ始めていると感じた>。[110頁] [シラーの影響で、ヴァレンシュタインはドイツに馴染みの主役に思われるが、この作では異国人の敵役]

<夢物語を演じたわけだな。ウプサラ大学でモノドラマと呼ばれている芝居だ。一人の人物がたった一人っきりの自分のために歓声を上げ、恐れ、臆し、感受し、悲壮になり、空想するというやつだ> [112頁] [西洋落語かも]

僧侶の結婚 1) 時代背景

フィレンツェ出身のダンテ[1265-1321]がヴェローナのカングランデ[1291-1329]達を前に炉辺物語として語る転職、僧侶からの還俗についての噺。パドヴァの墓碑、「ここに僧侶アストッレは妻アンティーオペと共に眠る。エツェリオンが兩人を埋葬」[Ezzelino III. da Romano, 1194-1259] について語る。フリードリヒ皇帝[Friedrich II. 1194-1250]時代の噺である。僧侶は四男であるが、パドヴァの裕福な長男が、再婚のとき、船上で暴君エツェリオンに挨拶し、船が転覆、長男とその先妻の子供達が死ぬ。花嫁は助かるが、次男、三男を失って臨終の床にある父親が、四男に還俗して、この残された花嫁ディアナと結婚し、家を継ぐように定める。四男アストッレは同意するが、結婚指輪を買いに出掛け、選定中一個の指輪が転がり、偶然通りかかったアンティーオペ、処刑された伯爵の

娘の手に渡されてしまう。アストツレは伯爵処刑のとき、この娘と出会っている。結局この娘に引かれ、遺言のディアーナとの結婚をまた反故にするのであるが、結婚披露宴のとき、怒ったディアーナに娘は殺され、僧侶はディアーナの兄に殺される。

2) カップル

アンティーオペは心優しい内気な娘として描かれている。しかし指輪を嵌めて、ディアーナと僧侶の名家列席の結婚式に出席している。＜あるいは若いアンティーオペ自ら、指の先端を噴出するメルヘンの泉に浸したのであろう。橋の上での出会いは摩訶不思議ではなかったか、彼女が僧侶によって選定されたことは、僧侶を修道院から出した運命よりも摩訶不思議ではなかろうか＞。[152頁]

3) 落ち

成り行きでアンティーオペは、一応家の礼拝堂で僧による結婚のミサを行い、指輪を保持している。しかし結婚披露の前の晩に、アストツレと同衾することを許されている。このため、内気な優しいアンティーオペがディアーナに対して遜らず、驚くべき言葉を発し、結局殺されるきっかけとなっていると思われる。

処女神のディアーナという名の女性にこう言う。＜「一人の妻をからかうの、生娘さん」＞。[174頁]

ダンテの語りは、庶民が結婚初夜の同衾を冷やかしているのに、現実には永眠である皮肉で幕である。＜暗闇から次のような言葉が聞こえた、「今や僧侶アストツレが妻アンティーオペの側にお眠りになります」。そして遠くの哄笑があった＞。[174頁]

4) その他

ダンテについては領主の言葉が印象に残った。

＜「そなたが故郷の町の『神曲』の中で味わわせているかの酢や胆汁で苦く滴る三行詩からのほんの滴の残滓だ。言わせてくれ、自分の揺り籠を貶めること、自分の母親の面目を潰すことは、高貴とは言えないぞ。結構なことじゃない。いいか、それは劣等な印象がする」＞。[149頁]

訳者がこれまで読んで来た小説でも、自分の育った町には誰でも愛憎があり、悪口を言いがちで、それをたしなめる言葉も目立つ。例えばフォンターネ、『嵐の前』、＜「自分の巢を汚すのは劣等な鳥ですから」＞。ジャン・パウル、『美学入門』、＜アラブの諺には、「自分が飲んできた泉に石を投げ入れるな」とあります＞。

＜我々を子供時代の遊び仲間と結び付ける絆は不壊である＞。[135頁]

＜アスカーニオは更に読んだ。フリードリヒ[二世]は申したそうである、三人のペテン師、モーゼとモハメッド、それに ー 彼はつかえた[発せられなかった語は、キリスト] ー が、世を騙したのだ、と＞。[140頁] [ニーチェ級の皇帝]

＜皆さん、我々は皆、男も女も、嫉妬には用心したいものです。これは苦しみの中で最も辛いもので、これに悩まされる者は、私の劫罰を受けた者達よりも不幸なのです＞。

[158頁]

<「彼の母はドイツ人だ。ドイツ人は忠誠の申し子だ」>。[163頁] [ドイツ人についての昔のイメージ]

ある少年の悩み 1) 時代背景

ルイ十四世[1638-1715]時代の噺。国王の侍医ファゴン[Guy-Crescent Fagon 1638-1718]が国王とマントノン侯爵夫人を前に語るある少年の噺。国王の告解の師をテリエ神父[1643-1719]に決める頃、つまり1709頃で、この神父にある少年が昔、虐められたと告げ口する噺で、神父はイエズス会士であり、宗教的にジャンセン主義との争いが背景にあるらしい。この頭がとろくて、神学校で苦勞し、テリエ神父から以前、鞭打たれたとされる少年は、ブーフレール元帥[duc de Boufflers、1644-1711]の息子ジュリアンといい、若い頃パツとしなかった作者の投影でもあるらしい。しかし氣転は利かなくても、絵を上手に描き、フェンシングも上手く、少女の心も得ている。しかしクラスメイトの悪戯に実直に付き合っ、神父の怒りを買ひ、鞭打たれた後、発病し、ルイ王のために戦う幻想を抱きながら夭折する。

2) カップル

少年とミラベル嬢の二人を「アダムとイヴ」[193頁]と形容する場面がある。また老話し手のファゴンは少年が少女の心を掴んでいることを幸せと称えている。

<「『誰もが諦めておろう』と私は冗談を言った、『汝のパトロン、マントノン侯爵夫人でさえも、一つの装身具を、国王でさえ、一つの属州を諦めることだろう。ファゴンよ、私も同様に諦めなかったか。自分自身の流儀とはいえ、ひよっとしたらそなたよりも辛い思いをしてな。孤児となって、貧しく、惨めな体一つで、この体はまさに若い日々、半端な育ち損ないで、厳しいミューズ、つまり学問を専攻しなかつただろうか。私には心がなかった、官能がなかったと思うか、優しい恋心が、ジュリアンよ。一 それなのに、きっぱりと存在の最大の魅力を、つまり恋愛を断念したのだぞ。この恋愛はそなたの細身の体と空っぽのブロンド頭には無造作に投げ込まれているではないか』」。ファゴンはひよっとしたら青春時代とても辛い思いをしたかもしれないことを、とても滑稽に力を込めて述べたので、国王は興じ、侯爵夫人は愉しかった>。[197頁]

3) 落ち

ファゴンは少年を保護するために、実はジュリアンの母はルイ十四世の覚えがめでたくて、その子はひよっとしたら国王の血を引いているかもしれない、とイエズス会士にかまかけたことを国王自身に語っている。それで次のテリエ神父に対する警察長官の言葉は意味深なものになっている。

<『貴殿は確信があたりか』と長官は囁いた、『自分は元帥の子息を鞭打ったが、同時にフランスの最も高貴な血筋を鞭打ったわけではない、と』>。[205頁]

つまり、後年フランス革命で鞭打たれることになったルイ十六世の息子のことも暗示されているわけである。ルイ十四世の魂に面と向かって作者は語ったことになっている。

4) その他

<決して、話しとしてでも卑俗な罵りの言葉、要するに国王らしくない言葉は口にしないのであった>。[176頁] [ルイ十四世の逸話]

くすると色褪せた文書から黒い文字が浮かび上がって、イエズス会士達の奸計を明るみに出しました。[184頁] [科学の発展]

く「ファゴン、そなたは悪評高い命題に従って行動していなかったか、つまり目的は手段を浄化するという命題に[イエズス会の原理と思われていた]。イエズス会に入会したのか」>。[202頁]

女士裁判官 1) 時代背景

嘶は冒頭、カール大帝[742?-814、神聖ローマ皇帝800以降]が亡き父親のために、ローマでミサを行う場面から始まる。大帝の廷臣のヴルフリーンをヒンターライン地方のマルモルト[虚構、モルトは殺害、Viamala溪谷(悪路)を想起]の女士判官[この職に女性がいたかは確認されない]の娘パルマ・ノヴェラに気がある若者グナーデンライヒが尋ねてくる。この女士裁判官は、シュテマ夫人といい、廷臣の父の二番目の妻である。ヴルフリーンは家宝の角笛を持っていて、これはく「砦の門で吹かれたら、ヴルフ家の妻は、とにかく夫の不在の折、犯した罪を何か白状しなければならなくなるのだ」>[212頁]とされる。それで、この女士裁判官の過去が明らかにされ、パルマ・ノヴェラとヴルフリーンは兄、妹ではないと明らかになり気の合うこの二人が結ばれることになるが、女士裁判官は毒を飲み、グナーデンライヒはパルマを諦める。

2) カップル

ヴルフリーンとパルマについてパルマの友人の証言：く『いいですか、あなたは若女士[パルマ]の懸想している方です。若女士はまだ一度もあなたを目にしていけないけど』>。[220頁]

ヴルフリーンとパルマの出自についてシュテマ夫人の言葉：く「私はファウスティーネと同じことをしたのです。私も亡き男の妻だったのです。私も夫を殺害しました。女士領主は家中の女と同じなのです。お聞きください。この二人の間には一滴も同じ血はありません」。夫人はヴルフリーンとパルマの間に腕を区別するように差し出した。「お聞きください。この若者とこの娘には一滴も同じ血は流れていません。疑念を抱かれますか。一人の証人を呼びましょう。パルマ・ノヴェラ、この娘はシュテマと僧侶ペレグリンとの間の子供ですが、私の秘密の犯行を聞いていました。娘はそのことを確信し、死を賭けて誓うことでしょう、私の話しは真実である、と。証言なさい、パルマ」>。[254頁]

3) 落ち

最後孤児になるパルマの処遇で、グナーデンライヒはパルマと結婚させられそうになる。しかしグナーデンライヒ[恩寵潤沢]という名であるが、辞退する。

く「修道院長殿」と興奮したグナーデンライヒは遮った、「それは人間の力を越えています。殺人者の子供は恐ろしい。すべての良き精霊は主なる神を称えます」>。[255頁]

また兄とされるヴルフリーンが妹とグナーデンライヒを婚約させるとき、その婚約式でグナーデンライヒは自らに牛乳を用意し、ヴルフリーンにはビールを出す。以下その場面：く「パルマ・ノヴェラ」と彼[グナーデンライヒ]は告白した、「私は御身を心の底から愛しています、全身全霊で愛しています」。

これは健気であった。娘は感動して、彼に手を差し出した。ヴルフリーンにとってこの

求婚は悪くなかった。「それでは少しばかり陽気になろう」と彼は叫んだ、「二人のために一献」、彼はジョッキを上げて、飲んだ。グラシオズス[グナーデンライヒ]はスプーンで牛乳を掬い、彼の花嫁の口に向けた。このスプーンはプラトゥムに一つしかないわけではなかった。しかしグナーデンライヒは象徴的行動を行いたかった。

彼女はすでに赤い唇を開けていて、言った。「今日、私は牛乳が嫌い。ヴルフリー、私に飲み物を下さいな」。彼は彼女にジョッキを渡した。彼女はそれをとても素早く呑み込んだので、それで彼はまたジョッキを彼女の両手から奪った。[241頁]

4) その他

<「近親相姦は」とシュテマ夫人は脅した、「火刑です」>。[247頁]/ <しかしその姿の周りに記されていた名は「ビュブリス」[カウノスの双子の妹、オウィディウス『変身物語』第九、450-665]であった>。[イシスとオシリスの神話以外にも]

<両方の瓶とも強力な水晶製で、ガラス製の栓の上には黄金の蓋があって、その一方のには「解毒剤」の言葉がギリシア文字で引っ搔くように刻まれている、もう一方のには小さな蛇がとぐろを巻いていた >。[225頁] [薬草研究由来の毒や武器の製造は文化と共にある]。

ユルク・イエナツチュ[1596-1639]

グラウビュンデン[スイス東部の州]の歴史 1) 時代背景

史実のカトリックのスペインと組んだ新教徒に対するヴァルテッリーナ殺害、新教牧師ユルク・イエナツチュの母も殺された事件(1620年、小説ではユルクの妻が死ぬ[287頁])、それに対する新教徒側の復讐、暖炉煙道に隠れ、飼い犬の視線で発見されたポンペーユス・プランタ殺害(1621年2月25日)が描かれる[293頁]。その後イエナツチュは軍人となり、フランスのユグノー派アンリ・ロアン公爵[1579-1638]に仕え、この公爵の力を借りてオーストリア・スペインのカトリックの国に勝利する(1635年)。しかしフランスがグラウビュンデンの独立を認めないとみると、自分もカトリックに改宗し、スペイン側と手を組み、恩人のロアン公爵を裏切り、フランス軍を本国に帰す(1637年5月)。その後大体落ち着いて行く中、敵も多いイエナツチュは1639年1月24日殺害されるが、小説ではロアン公爵の訃報[1638年4月13日]が届いた頃になっていて、しかもプランタの娘ルクレーツィアの振り下ろす斧で殺されている[399頁]。

2) カップル

史実ではプランタ家とユルクの少年の頃の関係は不詳で、従って、印象的な場面、十歳のルクレーツィアがユルクの学校に現れ、次のように言う場面は全くの創作となる：

<「ユルク、あなたが飢えていると聞いたの」と彼女は言った、「それでちょっと持って来ました。...干し肉よ、あなた大好きでしょう」と彼女はこっそり付け加えた>。[260頁]

また1620年のヴァルテッリーナ殺害では、ユルクの母が殺され、妻が殺されていないのであれば、ユルクとルクレーツィアの恋心は史実としては、確認し難いが、しかしそれだけに小説としては、ルクレーツィアをユルクの代理人としてスペインと交渉させたりして、両人の結び付きを必然化する必要がある。最後は父親が殺されたときの斧をルクレ

ーツィアがユルクに振り下ろすわけだが、愛憎がない交ぜになった文学趣味の濃い、クサイ場面となっている。[399頁]これを消化するには、読者も疲れるので、サービスとして作者はヴェールトミュラーに文学趣味への半畳を入れさせている。

＜これは勇敢な兵士だが、しかし残念ながら先の牧師で、自分にはこの男、若干の有能な特性があるものの、余り好きにはなれない。この男には一種大袈裟な趣味が染みついで、多分説教壇からの名残で、忌々しい壮大な喜劇癖がある。若い頃にはこの牧師、猛烈な民主主義者だったそうで、ポンペーユス・プランタを殺害した邪悪な若造どもの一人だったのだ。静かに、自分、如才ないヴェールトミュラーがそうしていたように、背景に留まっておればいいものを、この山師、早速このグラウビュンデンのレディーに対し、彼女の父親の殺害者として、同時にまた以前の心優しい恋人として見得を切ったのだ。それで突然狂ったような爆発が生じた、いや見ものだった、今日でもまだ自分の頭がおかしい。公爵夫人にとっては、ご自分の詩的翼がすべての分別に勝っているから、恍惚となられたことだろう。御夫人は池の家鴨のようにべちゃくちゃと涙の海を漕ぎ回っていた。ー今や御夫人は現在パリで大当たりを取っている喜劇を手本に、立派な最終シーンの演出に余念がない。パリの著者は鳥の名前、ーコクマルガラスとかカラスといったー名であり、全く似た題材を扱っている[コルネイユ『ル・シッド』、恋人が自分の父親殺害]。パリではもめ事は結婚の見込みで幕となる。しかしこちらではそうならないのが望ましいし、それにこちらの人生はまだ理性が勝っている＞。[327頁]

3) 落ち

ユルクが新教牧師の前身から政治的理由でカトリックに改宗したのは、かなりインパクトのある行為であるが、しかし転向しない立場もあり得る。出来れば、余裕を持って非転向を維持したい。その例が因縁の『塵埃の小帽』亭の亭主と同名のファウシュの言である。クールのカトリックの司教の許でコック長として働くために採用試験で述べたとされる新教徒ファウシュの言葉は以下の通りである。＜それでその厨房と私の魂の弥栄のためにプロテスタントという邪教の破棄を迫った。しかしローレンツ・ファウシュは、諸君、頑固そのものであったが、しかし首尾良く行った。交渉は、背教者が、純粋なワインを注ぐ男であってはまずかろうと狎下が納得されて、妥結したのだ＞。[393頁]

結末近くでフランス軍の頭目のイエナッチュに対する挨拶も面白い。

＜今や彼は馬を回して、ゲオルク・イエナッチュに対し数歩寄って、ピストルを引き出し、彼に吠えた。「裏切り者からレックの別れ方をご覧に入れよう」。

彼は引き金を引いた。撃鉄が下ろされ、火薬が火皿で燃えた。しかし銃は発砲しなかった＞。[373頁]この箇所は『説教壇からの射撃』の論考でもよく引き合いに出されるようである。

4) その他

＜私は先ほど彼女がかくも美しく自由に広場を歩む様を見たとき、一種感動を覚えました。この腐って行くラグーンの横を歩いているのではなく、垂直な絶壁と泡立つ小川の側、私の故郷の山道を歩いているように思われました＞。[297頁] [ヴェネツィア女性とスイス女性を比較する男の視線]

＜チューリヒは貴殿の揺り籠の地であり、大切な母親の些細な弱点を隠すことは、息子

の義務なのだ、と>。[310頁][故郷への悪口は慎め]

<この頁に記されている献呈の辞で、これは手書き文字芸術の一つの傑作であったが、マギスターは述べていた。自分は運命により、思いがけず自分に恵まれた機会を利用致しまして、すべての学問の高貴なパトロンであられる総督殿下に克己勉勵の長い人生の全成果をここに謙虚に恐懼しつつ呈上申しあげます、と。これは、その不滅の名誉市民、ティトゥス・リヴィウスのパドヴァ方言について、つまり彼の比類のないラテン語に影響を及ぼしたパドヴァ方言についての論文である>。[320頁] [田舎学者の虚栄心]

<民衆全員の陰謀に関しては、自分は喜んでこう主張したいと、彼は述べた。つまりグラウビュンデン人の許でほど可能性のある所はないであろう。この人々は北方人の鈍重さと南方人の狡さを幸福に混交させて一致させているのです。この民の誰でも、最もすれっからしの外交官の先生になれるのです。こちらでは政治は一般化して、習慣化しており、民衆全員が一人の武士であるかのように、明瞭な利点が問題となっているときには、弁じ、黙します。従って難しいのは単に、理解のとろい者達に計算をはっきり教えることで、そのために大衆弁舌家のイエナッチュは大いに苦心したはずです>。[358頁f.]

聖者 1) 時代背景

話し手は石弩屋で、チューリヒで1191年12月29日、教会長老相手に昔仕えたヘンリー国王[Henry II, 1133-1189, 王位1154より]とベケットについての思い出を語る。ベケットは1118/19年12月21日生まれ、1170年12月29日殺害、1173年アレクサンデル三世教皇により列聖。ベケットは宰相からカンタベリー司教に転ずると、清濁併せ呑む必要のある政治家から、宗教家、聖人に変身し、差別されていたザクセン人[サクソン人]のために尽力したと語られる。伏線として、ヘンリー国王がベケットの娘と関係し、王妃の手から逃れようとしてこの娘が死去したことなどが述べられる。テーマは政教分離と思われる。

2) カップル

昔の王は交際を恩寵と思っている。<『門を閉めて、そなたの女士領主にこの王の訪問と恩寵[グナーデ、グレイス]とを伝えよ』>。[423頁]

<しかし私はすべての血が心臓から失せる思いでした。真実が鋭い光線のように私の中を過りました。お聞きください。国王は宰相の豪華な野心的な美人を奪ったのではありません。喪であり、罪であります。国王はトマス・ベケットの罪のない子供に手を付けたのです。いいですか。国王が呼んでいたグレイス[恩寵、グナーデ]は、宰相と瓜二つの似姿で、二人は若く世間知らずの顔と冷淡な世慣れた顔の違いに過ぎなかったのです。宰相の眉毛の高貴な特徴、宰相の黒っぽい、憂愁の目、宰相の口許の真面目な微笑、宰相の身振りの穏やかさ、 — これらは紛れもありません。グレイスは、余りに若くて、宰相の妹とは言えないでしょうし、まさに宰相の血肉なのです。ヘンリー王は、キリスト教徒の国王ですが、未成年の魂とまだほとんど成熟していない肉体に対し、異教徒よりもひどい罪を犯していたのです>。[427頁]

女性は特に恋情は口にしていない。話し手はこう語るのみである。<ヘンリー王は娘の信仰心を悪用していました。グレイス[グナーデ]は両親の血筋が異教徒であって、アラビ

アの女性達は従属的で、王笏の前では塵となって平伏致します。国王は彼女達にとって、神の代理、法の代理であり、父親や母親以上の存在なのです。かくて、グレイス[グナーデ]は国王の邪悪な秘密を父親に隠してきたと私は察しました>。[428頁]

<ご自分の娘御強奪と肉欲とを格別咎めなかった。と申しますのも、この点に関し、国王は[自分を縛る]何の権利も何の法も知らなかったのです>。[439頁]

イエナッチュの妻同様、このグレイスもあっけなく死ぬ。<このとき私は震えるグレイスを引き寄せて、私の腕に抱き、全力で森に向かって彼女と走りました。突然私どもの周りが明るく、より一層明るくなりました。雲が風によってとても素早く散らされ、月が雲の曳き裾から転がり出たのです。

笛がピッと鳴って、ふんと飛んで来ました。この矢が私に当たれば良かった。私の両腕の中の軽い女性が痙攣して私の首を掴みました。温かい血が私の上に流れ、宰相の子の喉を突き抜けた勢いのある矢の先端が私の頬を擦りました。窒息して喉を鳴らせ、グレイスはこときれました>。[432頁]

3) 落ち

語り手はベケット暗殺の場に居合わせ、その後に聖人として列聖されるベケットの血の付いた布切れを所有している。世間では効能がある聖遺物も語り手自身が昔の恋人の健康回復のために使用しようとする、かえって恋人は死んでしまう。<そこで私は憤然とした驚きと怒りに捉えられました。死者を蘇らせるというトマス殿は、私を容赦なく迫害し、私の恋人を殺してしまうのだ、と。私は逃げ去れました。その血の付いた布切れは多分、彼女と共に埋葬されたことでしょう>。[480頁]

また文意がよく掴めないが、娘グレイスの死と恩寵についてのやり取りが印象的である。

<『国王を許してください』と私はまた叫びました、『グレイス[王の恩寵]が消えたことにつきまして』。

するとトマス殿は頭を垂れて、謎めいた返事をしました、『大事なグレイス[神の恩寵]が消えたのであれば、よくない、 — そんなことはあってならないだろう』>。[464頁]

4) その他

<三年間、私は異教徒の町にいました。毎日は仕事との競争で過ぎて行き、夕方には私は、次第にアラビア語も堪能になっていて、屋外のホールへ出掛け、ワインも飲まず、喧嘩もしないで、そこで彼らの語るお伽噺を楽しみました。そこであるとき、褐色の、燃えるような目の若者の口から、ある話しを聞きました。それは彼の他の噺同様、似たり寄ったりのものです。この若者は最も人気がありましたが、それは彼が男女両性の身振りも、どの年齢の者、身分の者の身振りも、表情や肢体の仕草で表現する術を心得ていたからです>。[409頁] [落語風]

<彼の技は国王や騎士階級に人気があって、彼の富は増大しており、彼は声望ある男と呼んで良かったでしょうが、ただ職人皆がそうであったようにザクセン出身でした。しかしザクセン人は、そのノルマン人の支配者達の征服以来、不正直者と見なされていて、非キリスト教徒的具合に弾圧されていました>。[410頁] [アングロ・サクソンと呼ばれるが、サクソンとはザクセン人のことであれば、イギリス人はドイツ人なわけで人類皆兄弟

である。この小説でノルマン人のザクセン人に対する差別を知ったが、アングロ・サクソンも一枚岩ではなかったわけである]。

＜それに太古以来、愛人関係、恋愛沙汰では、僧侶や学者は、王侯や軍人から泣きを見ることになると思定されています＞。[425頁]

＜『...どの人の行動の許でも、目に見えぬ腕が働きます。すべての事象は成熟に至り、どの人にも最後に決着の時が来ます』[443頁] [結果自然成、道元風]

＜ブルクハルト氏は、高齢者の常で、快適なもの、愉快なものを愛好していた。高齢者は後わずか人生の最後の残りを享受するだけである。彼が石弩屋を自分の部屋に招いたのは、聖人の人生から、二、三の逸話や人間的なことを聞き出して、微笑し、新しい聖人の後光の黄金に対し、一 謙虚さの徳故に、一 少しばかり黒染めにするためであった。しかしハンスは悩み多い闘争と、苦痛に歪んだ二人の人間の顔を示してくれた。彼はこの印象を持って余した。彼はこれを和らげるために、冗談の言葉を探した＞。[478頁][訳者も後期高齢者]

＜「私は余り眠らない。それに今夜は、自分の側で生きた寝息を聞いていたい。聖人トマス殿の血まみれの頭がこの夜の暗闇の中、浮かんで来そうな気がするのだ。

しかし明日は、神に嘉されるダヴィデ王の日[12月30日]だ。安んじてそなたは旅を続けると良い」。[483頁] [文字通り最後の落ち]

ペスカーラの誘惑 1) 時代背景

パヴィアの戦い[1525年2月]で、神聖ローマ帝国のカルロス五世は、将軍ペスカーラ[1489-1525,12月3日説]、フランスを裏切ったシャルル・ブルボン[1490-1527]、レイヴァーらの活躍で、イタリアの覇権を巡って、フランスのヴァロア家フランソワ一世を破り、捕虜とする。これに対しイタリアでは、クレメンス七世の教皇を中心に巻き返しを計り、ミラノのスフォルツァ公爵の宰相モローネは、イタリア生まれのスペイン育ちペスカーラに、将軍の妻もイタリア人の才媛ヴィットーリア・コロナであることから、イタリア側の将軍となるよう寝返り、裏切りの誘惑に動く。しかしペスカーラはすでにパヴィアの戦いで致命傷を受けていて、妻にも明瞭には語らないが、すでに覚悟している。＜「私にそなたを贈ってくれた一つの民族をどうして軽蔑することが許されよう。しかしそなたに隠す気はないが、イタリアが説得しても無駄だ。その甲斐はない。私はその誘惑を長いこと承知していた。私はその誘惑がやって来て、近寄って迫る大波のように高まるのを目にした。しかし私は揺るがず、一瞬も揺るがず、ただ秘かに考えることすらなかった。というのは私には選択の余地はなかったからだ。私は自分のものではない。私は世の事柄の外部にいるのだ」＞。[541頁]

2) カップル

＜実際、両人は十八歳[同年齢ではなさそう]のとき、一緒に婚礼の祭壇に上がって以来、身も心も互いに忠誠を誓い合って来ていて、しばしば長く別れていても、夫人は貞淑な吊

りランプの下[ミケランジェロのdie erythraische Sibylleのイメージ]、イタリアの偉大な詩人達に没頭し、夫は陣地の篝火の明かりの下、地図を眺めて過ごし、それからようやくまた侯爵の所有地のイスキア島で、そこを浄福の島として一緒に和合しているのである。このようなことを不埒なイタリアは知っていて、疑いもせず、微笑して賛嘆していた>。
[489頁]

<彼は彼女のソネットのために、気の利いたテーマを課して、時に二人の共通の考えや迂遠な言い回しの輪郭を鋭敏なものにした。というのは、彼自身、以前、捕虜という拘束された閑暇のときに、一 一人の武人にとっては実際少しもひどくない出来で、一 ヴィットーリア賛美のために一つの「愛の勝利」の詩を作ったことがあったからである>。
[505頁]

3) 落ち

結末の文は先の箇所を暗示している。

<ヴィットーリアは夫の許に近寄った。ペスカーラは武器も持たず、武装もしていず、沈んだ王座天蓋の金欄を床にして横たわっていた。彼の面影の強力な意志は消えて、髪が彼の額にかかっていた。それで彼は若い、痩せた、収穫で疲れて、わら束の上に眠っている刈り手に似ていた>。[561頁]

<公爵が自分の宮殿に戻って来て、よろめく足取りで謁見の広間に入ると、何と自分の目の前で王座の天蓋の、ライオンと鷲を織り込んだ金欄の覆いが瓦解した[メリメ：『シャルル九世年代記』、第二十一章参照]。至る所の混乱に乗じて、公爵家の壁紙貼職人が広間に忍び込んで、この豪華な作品を盗もうとこれを緩めていたところ、物音が近付いて目論見に失敗し逃走したのであった。この劣悪な予兆に驚いて、公爵は暗澹と絶望して肘掛け椅子に身を投げ、両手で顔を覆って、自分の運命と勝者を待った。[史実ではミラノ陥落は、1526年7月で、ペスカーラ逝去後、ミラノ公爵はもっと毅然としていたらしい]>。[556頁] [関係者には悲劇でも、それで一儲けしようとする火事場泥棒もいるのが人間世界]。

<彼女は何度か将軍が自分の束にのんびりと寝そべっているのを見ながら、自分は刈り手の少女達に軽く即興の、新しいカンティレーネ[抒情的旋律]を、その南方で慣習化しているものを手本に教えていた。これは後に若い人々が夜中まで繰り返して飽きない唄であった。今や彼女は将軍にかの晩のことを思い出させた。

彼は喜んで、「そなたはまだかの小唄を覚えているかい」と彼は尋ねた。

「どうして」。

「それはな、一つの韻であった。刈り手[Schnitter]とツィター[Zither]だな。それ以外ではあの小唄には、畑でも天でも歌が歌われ、束が運ばれるという意味しかなかった」>。
[539頁] [夫婦の牧歌、我もまたアルカディアにあり]

4) その他

<「我々は予言的礼拝堂を後にしよう」と彼は追従的に言った、「恐怖させ、震撼させる芸術も後にしよう。そなたがイタリアの救世主と呼んだとき、私のことを考えていたは

ずはないだろう、勿論私はすでに脇腹に傷を受けているとは言え」といつもの彼独特の渋い冗談の一つで締め括った。[539頁] [磔刑のモチーフ]

くしかし彼は、大きな祭壇画の磔刑にされ、すでにこときれたキリストに呪縛されたかのように、動かずに立っていた。その明るい色合いはまだ新鮮そのもので輝いていた。しかし彼が見入っていたのは、神々しい頭部ではなく、その槍を聖なる体に突き刺している雑兵の方を観察していた。これは明らかにスイス人傭兵であった。[546頁f.]

く「悪漢の仕業です」とツグラッゲンは怒った、「いいですか、御領主、対の絵師が以前道具を持ってここらをうろついていて、あるとき農園で一杯の牛乳を恵んで貰っていました。一方の者が私に注目しました。『モデルに打ってつけの男だ』と彼は言って、私の黄色と黒色の服をしげしげと見ました。『貴殿の槍と甲冑を持って来られよ』。私はその通りにしました。今度はこの絵師は股を広げるように命じ、同じように股を広げて、一枚の画布に私を写したのです。それからこの悪漢どもは、私の写しをとても荣誉のあるものにすると約束したのですが、聖痕教会に私は立っていて、救世主に槍を突き出しているのです」。[550][ペスカーラに致命傷を負わせたスイス人傭兵は、修道院教会のキリスト磔刑図の獄吏のモデルとなっていることが判明。この因縁の兵士に金をやると、何故かと反問され、次の展開]

く「雅量による」と將軍は冗談を言った。

ブレイジはその言葉を知らなかった。[551頁]

アンジェラ・ボルジア 1)時代背景

フェラーラ公の世嗣[Alfonso von Este1476-1534]と教皇の娘、ルクレツィア・ボルジア[Lucrezia Borgia1480-1519]の輿入れパレードで囃は始まる。史実では1502年2月2日である。ルクレツィアは兄のチェーザレ・ボルジア1475-1507、他のもう一人の兄弟、それに彼女の父親、教皇アレクサンデル六世、在位1452-1503との近親相姦が噂されていた。しかしこの小説では、兄チェーザレが脱獄したとき、手紙での兄の依頼に応ずるものの、遺漏なく政務も司る賢夫人として描かれている。公爵家の公爵アルフォンソと枢機卿イッポーリトの間には、フェランテとジュリオの兄弟がいるが[アリオスト『狂えるオルランド』3.60 協功訳参照]、作者はジュリオをイッポーリトより十歳若く設定し、ルクレツィアが連れて来た親戚の娘アンジェラを巡り、イッポーリトが嫉妬して、ジュリオの目を潰させるお囃にしている。フェランテがジュリオを口説いて兄に対し公爵領の乗っ取りを計画するが、露見し、裁判で公爵は二人の打ち首を終身刑に恩赦する。しかしフェランテは毒を飲み死亡、ジュリオは牢にいて、最後はアンジェラと結ばれる。

2) カップル

目を潰されたジュリオにフランシスコ会士の神父が有り難い説教をし、ジュリオの宗教的境地を深化させる。谷崎の『春琴抄』とは趣が少し違う。

く「貴方は自分のものがもはや何もなくなったときに、初めて、貴方は神の愛を受け取れるのです。貴方は受け取ったら、与えることが出来るようになります。これが幸福と自

由に至るための私の門です。私と一緒に参りましょう。貧しく、もっと貧しくなるのです。貴方が受け取って、そして与えることが出来るようになるために、泉のように、水盤から水盤に溢れ出て満たせるようになるために[マイヤーの詩、Der römische Brunnen]」>。

[628頁]

アンジェラは最初ジューリオに出会ったとき、皆の前で「残念です」と咎めたのであったが[568頁]、それはやはり気になる存在であったからである。<すると声がした、「私は、アンジェラ・ボルジアです。あなたの目が何よりも好きで、その目を壊してしまいました。一人の悪人にその目の美しさを称えてしまったのです」>。[598頁]

日本の平安時代の貴族のように、詩文のやり取りで、性衝動を純化して結ばれる。ここではアンジェラの方だけ引用しておく。

「安心なさい。すでに明ける東雲の

今日この日、私はルクレツィアに知らせます、
二人の誓った仲について、逃げも隠れもせずに、
そして二人の結婚式を祝います。

これからは苦楽を共にして、
地の果てまで参ります。

ようこそ、若々しい明言、
ようこそ、真実を告げる日、
獄舎から獄舎へと、黄泉の国まで、
私は最愛の夫の供をします」。[633頁]

3) 落ち

健常者の、アンジェラに気のある伯爵がジューリオに、盲人が健常者の女性と結ばれるのは、相手にとって迷惑ではないかと問う。

<「伯爵」とジューリオ殿は幸せに答えた、「彼女は私から目を取り上げましたが、その代わり、自分の目を私に与えています。彼女は喜んで与え、私は喜んで受け入れます。彼女は与えて、浄福であり、私は受け取って、浄福なのです」>。[639頁]

この健常者は、係争中のアンジェラの領地が見込みないと分かると、負け戦での最大保証を求める。<「妃殿下」と彼は言った、「私は貴女の提案されたフラヴィアーン家の領地の二分割に同意します」>。[639頁]

あとがき

若い頃は、定年後は漢詩でも書いて過ごすものだと思っていたが、札束を持った中国人に添削をお願いしたくはなからう。昔の外国文学研究者が晩年ほとんど日本文学に転向したのは、研究には辞書、高価な百科辞典が必要で、元の勤め先の図書館に顔を出すのが面倒だったせいもあるだろう。今は家にいて、Googleで昔のイタリアの名家の家系が日本語でも分かる。ドイツ語では機械翻訳には慎重になるが、ラテン語、フランス語はまず機械に相談である。それで私はまだ当分横文字を読むつもりである。翻訳中は二、三頁訳せば、それで頭は満足で、一日何十頁も読む普通の読書はもう苦手である。それに大体小説中の会話は洒落ていて、会話の少ない日常の埋め合わせになる。訳していて、Einsiedelnの黒い聖母とは何か、分からなかったが、Schwarze Madonnaと検索して納得した。ついでにSigridとMarinaの元は若かった二人の娘の歌に導かれた。漢詩を書くよりは、こちらの御利益の方が楽しいことは言うまでもない。

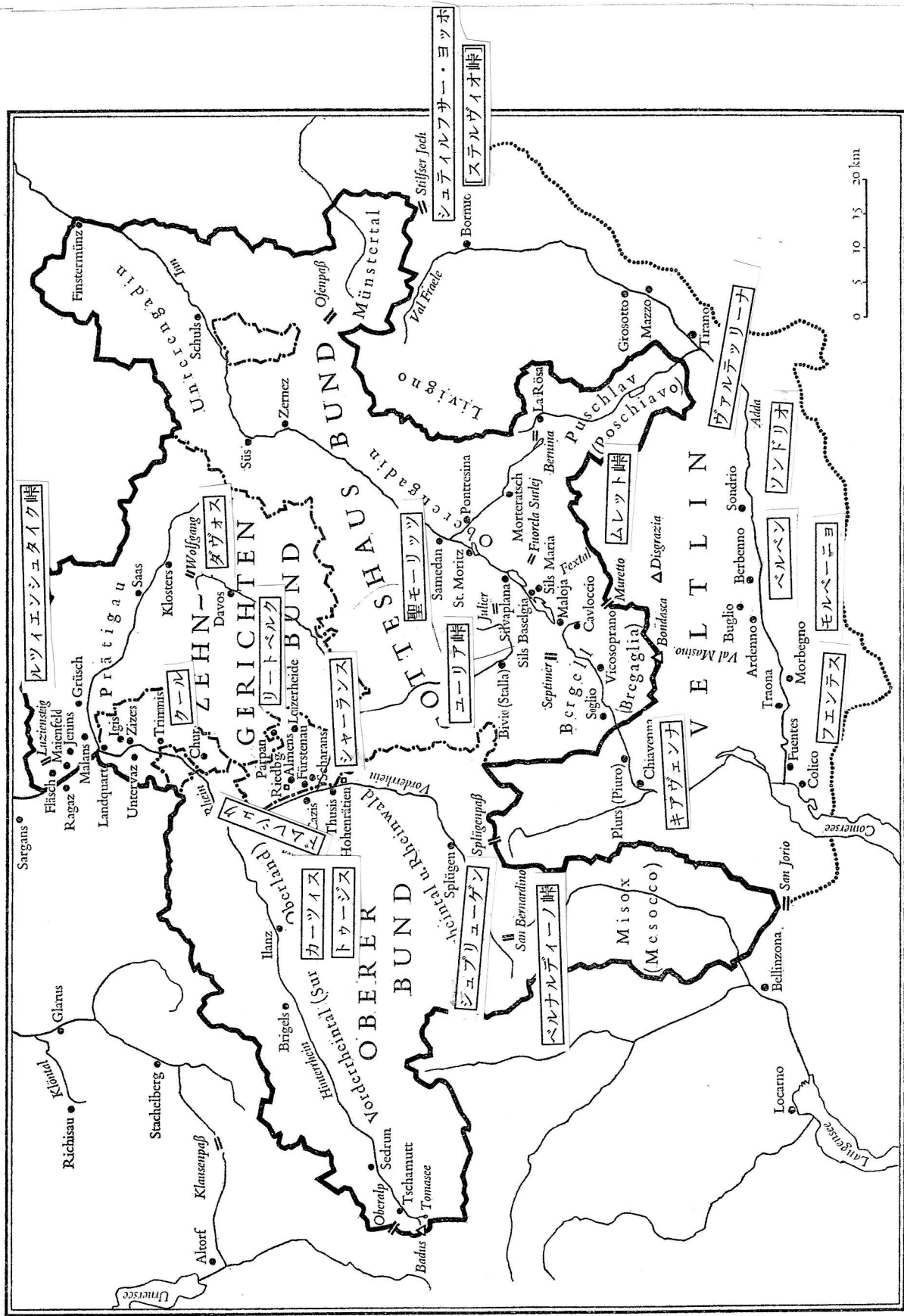
2023年7月31日

恒吉法海

翻訳参考文献

- 古見日嘉：『聖母像のメダル』（『世界文学全集 47』新潮社 1964）[護符]
岡村 弘：『愛国者』上・下 弘文堂書房 世界文庫 1940 [ユルク・イエナツチュ]
小栗 浩：『説教壇から射つ』（『世界文学大系 91 近代小説集』筑摩書房 1964）
今井 寛：『説教壇から撃つ』（『世界の文学 54 ドイツ名作集』中央公論社1967）
伊藤武雄：『聖者』岩波文庫 1942
生野幸吉：『尼僧院のプラウトゥス』（『世界短篇文学全集 4』集英社 1963）
春田伊久蔵：『鞭の下の青春』（春田伊久蔵 訳『鞭の下の青春』創元社 1949）
『マルモルトの女城主』所収 [ある少年の悩みと女士裁判官]
伊藤武雄：『僧の婚礼』岩波文庫 1936
小栗浩：『ベスカラの誘惑』（『世界文学全集 42』集英社 1981）
伊藤武雄：『アンジェラ・ボルジャ』岩波文庫 1949

最後に読者の便宜を考えて、翻訳中、時に参照した「グラウビュンデン[スイス東部の州]とヴァルテッリーナの地図」を追加しておく。出典はC.F.Meyer:Sämtliche Werke Bd.10.: besorgt von Hans Zeller und Alfred Zäch.1958. Benteli-Verlag Bern. 巻末。



ルツィエエンシュタイク峠

Wolfgang
ダヴォス

リートベルク

シャラナス

カーツイス

トウーゼス

シュプリーユゲン

ベルナルデイノ峠

ミアヴェンナ

ムレット峠

ユリア峠

シュティルファサー・ヨッホ

ステルヴィオ峠

ムレット峠

ベルベネン

フエンテス

ヴァルテッリーナ

シンドリオ

モルベグノ

モルベネーヨ

アルデンノ

トラオナ

ベルベネン

フエンテス

モルベネーヨ

ベルベネン

フエンテス

モルベネーヨ

